革命@トリステイン

マリス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
革命@トリステイン

【Ｎコード】
Ｎ６４３６Ｍ

【作者名】
マリス

【あらすじ】
ある冬の寒い夜に、トリステイン王国レーネンベルク公爵家に一人の男の子が生まれた。ラスティン・ド・レーネンベルクと名づけられたこの子の誕生が、トリステイン王国に大きな変革をもたらすことを誰も予想していなかった。

現在、ゲルマニア侵攻編に移りました、宜しければ読んでいってください。

注）この作品は読み手を選ぶ話になっています。合わないと思ったら、直ぐに読むのを止める事をお勧めします。逆に、好みに合えばどっぷり楽しんでいただけるかも知れません。

第一話　ラスティン5歳（自己紹介）（前書き）

この話はゼロの使い魔の二次創作で、作者の妄想の産物です。作者はこの作品が初投稿なので、
色々見苦しい表現などあると思いますが、優しく見守ってやって下さい。
（誤字脱字や原作との矛盾の指摘は受付ますが、なるべく柔らかい表現でお願いします。）
主人公はオリジナルで原作登場人物はあまり出てきません。基本的に原作は完膚なきまでに
破壊して行く方針ですので、気に入らない方は↑で戻ることを推奨いたします。

第一話　ラスティン5歳（自己紹介）

第一話　ラスティン５歳（自己紹介）

やあこんにちは、僕の名前はラスティン・ド・レーネンベルク、５歳です。
外見は金髪碧眼でかなりの美少年だと自分では思っています。身長は約１１０サントと同世代の子供たちよりちょっと小さめなのが気になるお年頃です。

僕は、ハルケギニアという世界のトリステイン王国のレーネンベルク公爵家の長子なんです。一応これでもトリステイン王国王位継承権を持っています、順位は低いんですけどね。

レーネンベルク家は先代国王フィリップ３世の弟である祖父が興した家であり、僕の父上が２代目当主になっています。
領地はレーネンベルク山脈を含み、沢山の鉱石を産出しています。後は畜産業が盛んでレーネンベルクの肉や羊毛などは結構有名で、レーネンベルク織りの織物は名産品にもなっています。

同じ公爵家ということで、ラ・ヴァリエール公爵家とは親しい親戚付き合いをさせていただいています。
昨日の僕の５歳の誕生パーティにもラ・ヴァリエール公爵をはじめ、公爵夫人、

ちっちゃなエレオノールもお祝いにやってきてくれて、嬉しかった
です。

　僕の家族を紹介しておきましょうか、

・父の名はテオドラ・ユーニル・ド・レーネンベルク
＞山津波＜の名で知られる、土のトライアングルメイジで公爵家
現当主、金髪蒼眼の
　４０歳
・母の名はリリア・ド・レーネンベルク
　水のトライアングルメイジで＞快癒＜の二つ名を持っている、モ
ンモランシ伯爵の妹に
あたり銀髪碧眼の美女なんだ、２５歳でちょっと父上と年が離れて
いるのは後妻だから
です、でも夫婦仲はすごくいいみたいです。
・弟が一人いて、名はノリス・ド・レーネンベルク、銀髪碧眼１歳
で母上に似て中々
可愛い子なんだ。

後屋敷には、乳母のメアリ、執事のリッチモンド、その他護衛の兵
士やメイドやコック
などの使用人が４０人ほどがいます。
公爵家の屋敷としては、かなり小規模でアットホームな感じかな？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝

ところであなたは転生というものを信じますか？僕が地球の日本っ
て国から転生して
来たっていったら笑うかな？でも事実そうなんです。

あれは僕がまだ3歳になったばかりの頃でした、ある晩から急に毎夜夢を見るようになったんです。
夢の内容は、地球の日本って国で生まれた如月更夜（キサラギコウヤ）という一人の男の子の物心ついてからの成長の記憶でした。
夢の中では僕は如月更夜自身でした。

僕（＝更夜）普通の家庭に生まれ、父親はサラリーマン、母親はパートで働いていた。
普通に小学校→中学校→高校→大学と進学して行き、大学では某国立大学の材料
工学科に在籍していました。
僕はかなりの読書家で、特にライトノベルが好きで、一番のお気に入りは
”ゼロの使い魔”でした。大学も3回生になったある日、コンビニ帰りに車に
はねられその短い一生を終えることになってしまったんです。

ここでほぼ一年がかりの悪夢が終わり、自分が如月更夜の生まれ変わりなんじゃ
ないかということに気付きました。
今でも偶に前世の夢を見ることがありますが、その夢は今でも意外な程鮮明です。

こうやって書いてしまうとあっけないんだけど、実際は夢と現実の区別が付かなく
なり、寝たきりの状態で、生死の境を彷徨うほどでした。
両親も何人もの医者や水メイジに治療を依頼したけど原因不明でみな匙を投げた

らしいです。
最終手段で母上の実家に頼み込んで、水の精霊まで頼ったみたいだけど、効果はなかったそうです。
今思うと、３歳児の精神が２０年もの人間の記憶が一気に蘇ったことに耐えられなかったんじゃないかと思います。

転生に気付いて最初に感じたのは、自分があの”ゼロの使い魔”の物語の中の世界に転生した驚きと、本当に僕は”ラスティン・ド・レーネンベルク”でいて良いのかという悩みでした。

一月ほど思い悩んだ末、僕は自分が生まれ変わりだということを両親に打ち明けました。
語彙の乏しい僕の言葉ではうまく伝わらず、最初は信じてくれなかった両親も話が進むにつれ４歳の子供が思いつくことではないと納得してくれました。
そして僕が”ラスティン・ド・レーネンベルク”でいていいのかとたずねると、父上と母上はぎゅっと僕を抱きしめてはっきりとこう言ってくれました。

「お前が例え誰かの生まれ変わりでも、私たちの息子だ！」

この言葉が切欠で”ラスティン・ド・レーネンベルク”と”如月更夜”が僕の

中で同一化出来たんだと思います。
僕はこの父上と母上の言葉を一生忘れないでしょう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

こんなことがあって、翌日からこのハルケギニアの世界を少しでも知る為、言葉を覚え、読み書きの練習も始めました。
なにせ3歳児並みの語彙しかないから絵本からはじめ少しずつ言葉を覚え読み書きを覚えていくことになりました。
この辺りの勉強は母上か執事のリッチモンドに教えて貰う事になりましたが、一年で日常会話は大人と会話してもほとんど支障なくなり、読み書きの方も専門書でもない限り読めるようになりました。
やっぱりハルケギニア語が文字の形は全然違ったけどアルファベットに似た表音文字だったのが大きかったと思います。
前世の記憶のおかげかな？リッチモンドは覚えの良さにかなり驚いていたみたいだけど。

後、寝込んでいた為、失った体力を回復させる為に、屋敷の周りをランニングすることにしました。
最初は1リーグでダウンしてしまった位だったけど、今では5リーグも軽く走れるようになりました。

５歳児ならこれ位で十分かな？
でも体力を鍛えることは精神力を鍛えることにも繋がるから、将来のメイジとしては、
日々精進ですよね。

そして、誕生日のパーティもひと段落したので、明日はやっと杖との契約を始められる事になりました。
やっぱり原作の出演者と直接会うってドキドキするよね！考えてみればモンモランシ伯爵の妹を母親に持つなんてかなり原作の近くにいるってことですよね。
でもパーティーで見たあのちっちゃくて可愛いエレオノールが高慢で激しい気性になるなんて信じられない。
公爵夫人については、普段はそうでもないのだけれど、ふとした仕草にも油断が無くはっきり言って近くに居て怖かったです。
公爵の方は、さすがトリステイン王国一の大貴族という貫禄の人だった。

原作開始まで２５年ほど、僕に何が出来るか考えてみるのもいいかも知れません。

第一話　ラスティン5歳（自己紹介）（後書き）

見切り発車的に投稿を開始してしまいました。
一応作者の下には１０話まで完成していますが、これが無事に投稿されていくかどうかは皆さん反応次第です。

文才の無さは自覚していますので、生暖かい目で気長にお付き合い下さい。

２０１０／０７／２１修正
読みにくいと指摘を受けたので、語尾を基本的に丁寧語で統一しました。少しでも読みやすくなればよいのですが。
（作者が無意識に文章を打っていくと何故か”～である。”とか”～だった”の様な断定口調が出てしまいます。一応チェックしてＵＰする予定ですが、へんな語尾の所があったら是非指摘してやって下さい）
他にも少し表現を変えました。
第二話もＵＰしていないのに大幅修正です、読んでくださった方にはご迷惑お掛けして申し訳ありません。

感想？でかなり叩かれていますが、めげずにしばらく話を進めていくことにしましたので、よろしければもう少しお付き合い下さい。

ここで読者さんに挑戦！
第一話で早速主人公くんが2つの方法で強化されています。
良かったら感想に推理を書き込んで見てください。
商品は出せませんが＾＾

２０１０／９／１８

今はも→今でも
言ってくれた→言ってくれました
に修正

２０１０／１２／６
少しでもする為＜少しでも知る為
に修正

２０１０／１２／１０
―を削除

第二話　ラスティン5歳（杖契約）（前書き）

ちょっと所用で遅くなってしまいましたが、第二話ＵＰします。

第二話　ラスティン5歳（杖契約）

今日はやっと杖契約の日です、杖契約には父上が立ち会ってくれるそうでとても
嬉しいし、少し安心です。
庭に出ると、父上が一本の杖を見せてくれた、これが僕の杖らしい。
父上によると、

「２００年物のアリエの木の杖で一級品だ、お前に相応しいものだよ！」

らしいのだけれど僕にとってはプレッシャー以外の何者でも有りませんでした。

早速杖との契約を始めることになったんですけど、原作では杖との契約には詳しく
触れられていなかったから、どんな感じになるんだろう？
そう思って尋ねると父上は、

「ただ杖に心の中でで話しかければいい、杖が答えてくれればそれで契約は完了だ。
だが契約には一週間かかることもあるから気長にやる事だな」

と笑いながら教えてくれた。そして僕を庭の東屋の椅子に座らせると、杖を渡して
くれた。

「これが僕の杖なんだ」

見かけは25サント程の長さで、太さは直径3サント程、木材としては見かけより重い
のはさすがに良い素材なのだろうと納得させられます。

「父上、杖に名前をつけても良いのですか?」

父上は笑いながら、

「杖に名前?あまり聞かない話だが構わないだろう」

と答えてくれたので、まず名前を考えることにする。うーん、何かいい名前はない
かな?と考えているとふと頭に”ニルヴァーナ”という名前が浮かびました。

「良し、これからお前はニルヴァーナだ、よろしく頼むよ!」

と話しかけると、父上は笑いながら、

「杖に名前をつけるのは良いが、話しかけるのはちょっと変だぞ」

と言って来た。ぼくもさすがにこれはちょっとと思ったが、こういうことは思い
込みが大事だと思って黙っていました。

「もう一度言うぞ、心で杖に話しかけるんだ、杖が答えてくれれば契約は成功だ、
何か質問はあるか?」

杖が答えるというのが分からなかったので、父上に尋ねてみると、

「それは人それぞれだからな、私の場合は杖が細かく震えて答えてくれたよ。
聞いた話では、杖が暖かくなったり、光ったりしたらしい。もういいか？では始めてみなさい」

「はい」

と僕は答えると、杖に心の中で話しかけてみた。

『ニルヴァーナ答えてくれ！』

しばらく念じてみたが、杖からは何の反応もありませんでした。落胆していると、
父上が苦笑しながら、

「杖契約には1週間はかかるといっただろ？焦らずに肩の力を抜いて気長にやるんだな、では私は仕事をしてくるからな」

と言って屋敷へ戻っていってしまいました。

僕は心の中で繰り返し、『ニルヴァーナ答えてくれ！』と念じ続けた。そうするとだんだん時間の感覚が無くなっていき、周りの状況もまったく気にならなくなって行きました。
これが無我の境地と言う奴かな？

それからどれ位の時間が経ったでしょう、

「おぼっちゃま、そろそろ夕食の時間ですが？」

と話しかかられ、急に現実に引き戻されたました。前を見るとリッチモンドが申し訳
なさそうに立っていた。

「もうそんな時間なんだ、今日はここまでだね」

そういいながら、リッチモンドと一緒に屋敷に戻っていくのでした。
夕食の席で
父上から、

「契約はどんな感じだった、切欠はつかめそうか？、ずいぶん集中
してたようだな、
リッチモンドが昼食に呼びにいっても反応がなかったらしいではな
いか。」

と聞かれたので、

「わかりません、なんだか杖に集中のし過ぎたせいで自分が自分で
はない感じがして
しまいました。」

と答えるしかありませんでした。父上は、

「杖に集中することは大事だが、自分の意識を手放してはいけない、
自分は自分として
しっかり意識を持っていないと、契約にならないからな、意識を手

放さない様に注意
しなさい」

と助言をしてくれた。疲れたので今日はこのまま休むことにしましょう。

翌朝、昨日と同じく庭の東屋の椅子の椅子に腰掛け、杖に呼びかけを始めます。

『ニルヴァーナ答えてくれ!』

昨日とは違い、自分自身を意識しながら、杖の答えを待ってみました。すると、

『・・・ますか?』

うん?何か聞こえたような気がしたけど?そう思って耳をすますと、

『わたしの声がきこえますか?』

おお!確かに聞こえます。何の声だろう?もしかして杖の声?そう思って心の中で
答えてみました。

『聞こえるよ、君は誰だい?』

『あ!やっと声が届いた、私私はあなたの持つ杖に宿る木の精霊です。名前は持って
いませんでしたがあなたにニルヴァーナと名付けられました。昨日から呼びかけて

いるのに反応が無かったので、もしかして聞こえないのかと心配しましたよ』

と杖から答えが返ってきました。昨日は意識が飛んでしまっていましたからね。

『じゃあニルヴァーナ、君は杖の精霊ということになるんだね？』

『はい、私は樹齢２５０年ほどのアリエの木の精霊でしたが、今はその一部だけが杖に宿って名前が付けられたことで自我が目覚めました、杖の精霊といってもいいかもしれません』

そういうことですか、一応杖の精霊なんですね、じゃあ契約しなきゃ。

『ニルヴァーナ、君と杖契約したいんだけどいいかな？』

『契約ですか？もう半分済んでるんですが、それではあなたのお名前を教えて頂けますか？』

『僕の名前？ラスティン・ド・レーネンベルクだけど、ラスティンと呼んでくれていいよ』

『はい、分かりましたラスティン、これで契約終わりましたよ』

早っ！、ていうかこれで終わり？

『ニルヴァーナ、これで契約したことになるの？』

『はい、精霊にとってお互いの名前を交換することが契約の条件ですから、杖の
精霊でも変わりませんよ』

『分かったよ！ニルヴァーナ、これからもよろしくね』

『こちらこそよろしく、ラスティン』

良し！これで杖契約は終了ですね、言われたより全然早かったな、
早速父上に報告に
行きましょう。父上は執務室かな？

「父上、杖契約できました！」

案の定、父上は執務室で事務仕事をしていました。

「もう出来たのか、私の息子は優秀だな！で杖からはどんな答えがあったんだい？」

と聞かれたのでさっきニルヴァーナと話したことをそのまま話しました。

「杖の精霊か、もしかするとリリアの血かもしれないな、モンモランシ家は水の精霊
との盟約の交渉役を勤める位だからな。そうすると杖契約が簡単に終わったのは、
お前の才能ではなく杖が優れていたのと血のおかげと言うことにな

るな、慢心せず
魔法の修行に励むんだぞ！」

と僕の頭を撫でながらそう結論付けた。ああ、そんなはなしもありましたね、たしか
干拓に失敗してなんとか、そうか別に僕が特別優秀って言う訳ではないんですね、
安心したというかちょっと残念というか微妙な所です。

そう思っていると父上が困った顔でこんなことを言いました。

「しかし困ったな、こんなに早く杖の契約が終わると思っていなかったから魔法の
家庭教師の手配がまだ済んでいないのだが」

「魔法なら家来の誰かに教えて貰えばいいのではないですか、父上？」

「いいや、最初に魔法を使う時には細心の注意を払わなくてはならない、魔法の
制御に失敗すると怪我をしたりすることもあるそうだからな、仕方ない家庭教師の
手配が済むまでは書庫にあるコモンマジックの本を読んでおきなさい。書庫に入る
ことは許すがくれぐれも勝手に魔法は使うなよ」

「はい分かりました、父上！明日からはコモンマジックの勉強頑張ります」

こうして、杖契約は成功したけど、魔法を使うのはお預けになって

しまったのでした。

第二話　ラスティン5歳（杖契約）（後書き）

読者さんに挑戦第2弾、杖（精霊）の名前の名前は何処から取ったものでしょう？

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。

２０１０／９／１８
集中のし過ぎた↓集中をし過ぎた
手放しはいけない↓手放してはいけない
私あなたは↓私はあなたの
無かったのでもしかして↓無かったので、もしかして
精霊と言うことに↓精霊ということに
に修正

第三話　ラスティン5歳（コモンマジック）（前書き）

第三話ＵＰします。
とうとう魔法の修行を始めます。
先ずは小手調べです。

第三話　ラスティン5歳（コモンマジック）

杖契約の翌日、今始めて入ることを許された書庫にいます。書庫の鍵はリッチモンドも
持っていたのでそれを借りてきました。
今まではリッチモンドに頼んで運んできて貰っていた色々な本が読めるかと思うと
わくわくします。前世で本好きだったのが影響しているかも知れませんね。

まず書庫に入って気付いたのは蔵書がそれほど多くないってことかな全部で３００冊位
ですね。
この時代、本は貴重品だったんでしょうから３００冊は多いかも知れません。
とりあえず一通りの本の背表紙に目を通してみたけれど、

・土系統魔法
・水系統魔法
・領地の治め方
・帝王学
・宮廷作法
・鉱石
・畜産
・子供の教育用

に関しての本がほとんどで、かなり内容が偏っていることが分かりました。
コモンマジックについての本は3冊で今日からしばらくはこの3冊を使って勉強を
します。

1冊目は、「暮らしに役立つコモンマジック」という題で、ライト、レビテーション、
ブースト（身体強化）といった生活を便利にしてくれる魔法が書かれているようです。
2冊目は、「コモンマジックの夜明け」という題で、ディテクト・マジック、ロック、
アンロック、フライ、フィックス（固定化）といったいかにも魔法らしい呪文が書かれ
ているようです。
そして3冊目は、「使い魔とコモンマジック」という題でサモン・サーヴァント、
コントラクト・サーヴァントの2種類の呪文だけで後は、使い魔と主人の関係、
刻まれるルーンの種類などが書かれているらしいです。

まずは「暮らしに役立つコモンマジック」から覚えて行きましょう。
この本は題名
通り、どんな場面でどんなコモンマジックが役に立つか実例を示した上で、スペル
が記されています。
暗い洞窟に入る時には杖の先にライトの呪文をかけたり、高い所で作業する場合は
レビテーションの呪文、重い荷物を運んだり非常時の近接戦闘用にブーストの呪文を
といった感じです。
呪文自体も魔法語（ルーン）ではなく、一般的な口語（コモン）の呪文ですし、呪文自体も短いので簡単に暗記が出来そうです。
用意してあった紙にスペルを順番に写して行きます。

次は「コモンマジックの夜明け」ですね、この本は呪文一つ一つに関して、どんな
効果がありどんな活用方法があるか詳しく書かれています。
例えばディテクト・マジックであれば、物にかかっている魔術の種類を判別したり、
他人の唱えている呪文の種類やランクが分かるらしいです、便利ですね。
ロックの呪文は普通に唱えれば単に扉などに鍵がかかり、アンロックの呪文で解錠
が可能とあると書かれています。ロックの呪文をアレンジすることで自分にしか
開けられない様にすることも出来るらしいです。
フライの呪文は文字通り空を飛ぶ呪文です、必要とする魔力が、高度と速度と体重に
比例するというのは興味深いです。
そしてフィックスの呪文は文字通り物質の状態を固定する呪文で耐熱性、対衝撃性、
対腐食性、対酸性などに大きな効果を発揮すると書かれています。
これらの呪文も紙に順番に写して行きます。

まだ時間があるようですね、「使い魔とコモンマジック」もざっと目を通しておき
ましょう。
この本には2種類の呪文しか書かれていませんが、使い魔の使役に関してはかなり
詳しく書かれています。
召喚される生物は多くがこの世界に生息するモンスターなどで、メイジの魔法の属性
を連想させる生物が召喚される事が多いらしいです。
まれに亜人や、精霊などが使い魔になることもあるそうです。

使い魔と主人の間には強固な信頼関係が結ばれることが多く、契約を結ぶと使い魔の体にルーンが刻まれ特殊な能力を得ることも知られているらしいです。
僕にはどんな使い魔が召喚できるんだろう今から楽しみです！

おっと！もう昼食の時間だ、昼からは写した呪文を暗記してみましょう、でもまずは腹ごしらえですね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝

昼食も食べ終わったので、早速コモンスペルの暗記から始めましょう。
暗記の基本は音読ですよね。
前世の受験勉強もこれで乗り切りましたから。
何度も何度も繰り返し書き写したコモンマジックのスペルを声に出して読み上げていきます。
ただ大声で読み上げるだけでは芸がないので、早口言葉っぽく段々早口で読み上げていくことにします。
のどが痛くなるくらい音読をしていると、リッチモンドが冷えた紅茶をもって来てくれました。
「魔法の練習はまだとお聞きしておりますが、ずいぶんと熱心に呪文の練習をなさっていらっしゃいますね？」

紅茶でのどを潤しているとリッチモンドがそんなことを聞いてきました。

「うん、呪文を唱えるだけでは魔法が使えないことは分かっているけど、呪文を唱えるのに苦労するようじゃまともに魔法は使えないと思うからね」

そう言うとリッチモンドは思い出すように、

「旦那様も小さい頃は同じように呪文の練習をなさっていましたね、もっとも旦那様の場合は家庭教師の先生に叱られながらでしたが」

と笑いながら父上の昔話を聞かせてくれました、どんな家庭教師が来てくれるのか楽しみです。

それから3日ほどはコモンマジックの呪文の練習をして過ごしました。

3日目の夕食の時、家庭教師が決まったと教えてくれました、なんでも父上がコモンマジックを教わった先生でかなり優秀な方らしいです。超実践主義と言うのがよくわからなかったけど、やっと明日から本格的な魔法の練習が出来るかと思うと興奮して今夜は眠れないかもしれません。

翌日の朝、家庭教師の先生が屋敷を訪ねてきました。リッチモンドによると名前をマクスウェル・ド・ノワールといい、男爵家の前当主だったそうで

す。現在６０歳過ぎ
とかなり高齢ですが、無理を言って家庭教師を引き受けてもらったそうです。
もともと祖父の家臣だった方で魔術教育の腕だけで爵位を与えられたとのことです、
これは期待してもいいですよね？

「始めましてラスティン殿、私がコモンマジックを教える家庭教師役の
マックスウェル・ド・ノワールともうします。先生もしくは師匠とお呼び下さい。」

「始めましてマクスウェル先生、ラスティン・ド・レーネンベルクです、僕には殿も
敬語も不要です。魔法を教わる立場なんですから」

僕の返事を聞くと先生は少し驚いた様子でしたが、気を取り直してこう言いました。

「分かったラスティン、厳しい修行になるが挫けずに修行に励むんじゃぞ！」

「はい、先生！」（授業ではなくて修行なんですね、そこはかとなく不安が）

「では授業を始めよう、コモンマジックの基礎といえば、ライトの呪文だが、呪文は
知っているかな？」

「はい、〝闇を照らす光よ、ライト〟ですね」

「ふむ、呪文は覚えているんだな、では地下室に移動しよう」

というと先生は、サッサと応接室を出て行ってしまった、僕も訳も分からないまま慌てて後を追いました。

地下室に着くと先生はランプに火を付けました、真っ暗な中でランプの近くだけが照らし出されます。
先生は僕の前に立つと、

「早速ライトを唱えてみなさい」

といった。僕はニルヴァーナを構えて呪文を唱えます。

「”闇を照らす光よ、ライト”」

案の定というか、やっぱり何も起きませんでした。

先生は僕をじっと見ながら、短く「もう一度」と言いました。

「”闇を照らす光よ、ライト”」

もう一度唱えてみますが、やっぱりなにも起こりません。（落ち込みますね）

「魔力の放出が見られないの、ラスティン、君は魔力を感じたことはあるかな?」

「両親が魔法を使うのは見たことはありますが、魔力を感じるというのはよく分かりません」

そう素直に答えると、

「目を閉じてごらん、そして額に神経を集中するんじゃ」

言われた通り、目を閉じて額に神経を集中していると暖かな光?見たいな物が額から頭の中へ入ってくる感じがしました。

「何か光の様なものを感じました、今のが魔力なんですね?」

目を開けると、先生の手が僕の額に伸ばされていました。その手を降ろしながら先生はこういいました。

「今の感じを忘れないうちに、もう一度目を閉じて自分の中にある魔力を感じるんじゃ」

もう一度目を閉じて、頭の中にあの暖かな光がを探してみます。するとそれは意外とすぐに見つかりました、今まで気付かなかったのが不思議な位です。

「先生、分かりました、これが僕の魔力なんですね」

「よろしい、ではその魔力を外に放出してごらん、杖を通して外へ

押し出す感じじゃ」

言われた通り、魔力をニルヴァーナに向けて動かしてみます。細い糸のような魔力がニルヴァーナに向かって伸びていくのが何となく分かります。魔力の糸がニルヴァーナと繋がった瞬間先生が、

「”闇を照らす光よ、ライト”」

と呪文を唱え、それに引きずられるように僕も

「”闇を照らす光よ、ライト”」

と呪文を唱えていました。すると魔力がすぅっとニルヴァーナから放出されるのが感じられました。

「目を開けてごらん」と先生がいったので、目を開けると、

目の前に光の玉が淡い光を発しながら浮かんでいました。これが僕の始めての魔法、だんだん喜びが体に満ちてくる気がします。

＞ｉ１５３０５―２０９０＜

「やった～」と飛び上がって喜んでいると、先生は微笑みながら、

「おめでとうラスティン！今君はメイジとしての第一歩を踏み出したんじゃよ」

と言ってくれました。僕はメイジになったんだ、その実感を噛み締めていると光の玉
はだんだんと暗くなって行き、やがて消えて無くなってしまった。

「ライトの呪文は込められた魔力が多いほど、明るく長時間光らせることができる、
慣れてくれば、明るさを落として長時間光らせたり、逆に短時間で眩しいほど光ら
せることも出来る、訓練を怠るなよ！」

と先生は言いながら、なにやらニッコリ（ニヤリ？）と笑いました。
すると突然地下室
を照らしていたランプの光が消えてしまいました。
次の瞬間肩に軽い衝撃を受け僕は床に転がってしまいました。
何が何だか分からない状態がしばらく続き、心臓がドキドキしています。
混乱しつつも手探りで辺りを探っていると、先生が冷静な声でこう言ってきました。

「ラスティン、君にはこの暗闇から脱出する手段があるはずだ、なぜライトを
唱えないんじゃ？」

言われてみればそうでした、なぜ気付かなかったんだろ？僕は恥ずかしくなりました。

「〝闇を照らす光よ、ライト〟」

慌てて呪文を唱えますが、さっきうまく行った呪文が今度はうまく発動しません。

「”闇を照らす光よ、ライト”」

もう一度唱えても、結果は同じでした。

「落ち着け、そして成功した時の事を思い出すんじゃ！」

そうだ、冷静になって、さっきの魔力の流れを思い出すんだ。よし！

「”闇を照らす光よ、ライト”」

今度こそうまくライトがうまく行きました。周囲が明るくなると先生は僕を見つめながらこう言いました。

「これほど簡単にメイジは魔法が使えなくなる、どれだけ呪文を覚えても、どんなにランクが上がっても心を鍛えていないメイジは使い物にならないと言うことを覚えておきなさい。今日の授業はこれまで、次の授業までライトの反復練習を続けるように！」

心を鍛えるか、僕はこの先生の言葉を、一生忘れないと思います。こうしてコモンマジックの授業の1日目は終了したのでした。

第三話　ラスティン5歳（コモンマジック）（後書き）

コモンマジックの修行はまだ続きます。

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。

感想も大歓迎いたします。

２０１０／０７／２４

読者の方から、呪文がコモンマジックとして分類されているのはおかしいと指摘を受けました。作者の都合だと思って見逃して下さい。

読者さんに挑戦第３弾

ネタを思いついたので、追記します。

本文中でフライの呪文の解説とライトの呪文の応用で使った設定はあるライトノベルから拝借してきたものです。

どのライトノベルでしょう？

２０１０／９／１８

わくわくします、→わくわくします。

この時代本は→この時代、本は

だったんだろうから→だったんでしょうから

大きなな効果→大きな効果

聞かせてくれた→聞かせてくれました

教えてくれたました→教えてくれました

先生は微笑ながら→先生は微笑みながら

に修正

２０１０／１２／６
こっそり、仮追加

２０１０／１２／１４
主人公イラスト掲載

第四話　ラスティン5歳（笑顔の悪魔）（前書き）

第四話ＵＰいたします。

ラスティン君のコモンマジック修行が続きます。

第四話　ラスティン5歳（笑顔の悪魔）

「レビテーション！」

「レビテーション！」

「レビテーション！」

・

・

・

こんにちはラスティンです、なぜしょっぱなから呪文を連続して唱えているかというと、絶賛落下中だからです。前世的には、俗にいう紐なしバンジーですね。

と無駄なことを考えていると、

バシャーン

湖にかなりの速度で飛び込むことになってしまいました。何故こんなことになっているかというと昨日まで時を遡ります。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

先日と同じ応接間にマクスウェル先生が案内され、コモンマジックの練習となりました。

まずは前回の復習と言うことで、ライトを唱えてみます。

復習の甲斐あってすんなり明るい光の玉が杖の先に生まれます。

それを見た先生は満足そうに頷くと、

「ライトはもう問題が無いようだの、今日はレビテーションの呪文練習をして
見よう、呪文は予習してあるかの？」

「はい！”万物を束縛する力から我を解き放て、レビテーション”ですね」

と答えると、

「まずはこの本を浮かせて見よう、本が浮いているのをイメージしながら、少しずつ
魔力を注ぎ込むんじゃ」

「”万物を束縛する力から我を解き放て、レビテーション”」

先生が言うとおり、本が浮かぶのをイメージしながら魔力を注ぎ込んでみると、ふわ
りと一瞬本は浮かび上がったけど、すぐにテーブルの上に落ちてしまいました。
先生は笑いながら、

「まだまだ、魔力の制御が甘いのう、本の下面全体に魔力を這わせる感じでもう一回
やってご覧」

と助言をしてくれた、魔力を本の下面全体に行き渡らせるようにしてもう一度
トライです。

「”万物を束縛する力から我を解き放て、レビテーション”」

今度はうまく浮かんだようです、やや不安定ながらそれでも机の上２０サント辺りをふわふわしています。

うんいい感じだと思っていると、先生が突然本の上にティーカップを置きました。

ちょっとふらつきましたが、なんとかカップを落とさないようにレビテーションを維持することができました。

そのまましばらくレビテーションを維持していると先生が、「もういいぞ」というので本をゆっくりテーブルの上に着地させます。

「大分魔力の放出量が増えてきたみたいじゃな、次はこの椅子にレビテーションをかけてみなさい」

言われた通り、応接間の結構重そうな（そして高級そうな）椅子にレビテーションをかけてみます。

本と違って平面ではないので、何処の魔力を這わせるか迷いましたが、椅子の下側全体をイメージして魔力を這わせるとちょっと負荷を感じましたがうまく浮き上がりました。

「よしもういいぞ」

という先生の合図で、椅子を床に降ろします。

「それは次は自分の体にレビテーションをかけてごらん」

とうとう、空中浮遊なんですね、わくわくします。さっきの椅子と同じで、体の下側
に魔力を這わせる感じで、

「”万物を束縛する力から我を解き放て、レビテーション”」

ずっしりとした手ごたえと共に、僕の体が宙に浮きます、すごい。
しばらくこうしてふわふわ浮いていると、だんだん気分が悪くなってきた。なんか
ちょっと吐きそうな感じです。この感じはまさか乗り物酔い?すると先生が、

「顔色がよく無いですな、気分でも悪いのですかな?」

と聞いてきた。レビテーションを解除して、地面に足を着けると大分楽になりました。

「先生すみません、酔ったみたいです」

「レビテーション酔いですかな?なるべく遠くを見るようにするといいそうだが、
今日の授業はここまでにしておく。無理をしないで今日は休んでおくことじゃな、
次の授業は明日じゃ」

「はい、ありがとうございました。」

今日は早めに休むことにしましょう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そして翌日、僕は先生に連れられて、屋敷の近くにある湖にきています。小高い丘の近くまでやってくると、先生は足を止めました。

「先生、ここになにかあるんですか？」

「ん？ここはな昔ワシがレーネンベルクにお仕えしていた頃、夏の暑い時に屋敷の警備の合間をぬってここで水浴びをしていたんじゃよ」

と先生は、崖から下を懐かしそうに眺めていました。

僕も気になったので先生の横から下を覗いてみます。

高いな～、１０メイル位はあるかな？、と思っているといつの間にか後ろに回った先生がトンと僕の背中を押しました。

「わあぁぁぁ～～！」

バシャーン

あっけなく湖に落ちてしまった僕、またやられた。

崖の上を見上げると、先生がレビテーションでゆっくり降りてくるところでした。

近くの岸辺に降り立つと先生はニヤリと笑いながらこういいました。

「どうしたラスティン、折角覚えたレビテーションの呪文一言も唱えられなかったじゃないか？」

「くっ！こういう人だと分かっていたのに、まんまと策に嵌るなんて」

「おお！悔しそうじゃな、そうだ再戦の機会をやろう」

先生はそう言ってレビテーションの呪文を唱えると、僕を水面から持ち上げ始めた。
どんどん空中に浮き上がっていく、さっきの崖より更に高い所まで浮き上がった
所で浮上は止まった。
下を見るとものすごく高いところに浮いているのが実感できます。
はっきり言ってかなり怖いです。

「ラスティン用意はいいな？」

僕の返事を待たず、先生はレビテーションを解除しました。
ここで冒頭のシーンに戻る訳ですが、無理ですあんな高いところから落とされて暢気に呪文なんて唱えていられません。

「おいおいラスティン、ちゃんと呪文を唱えないと魔法は発動しないぞ！もう一度じゃ」

再びレビテーションで浮上させられます。
悪魔だ、悪魔が笑っている、笑顔を浮かべている先生を見て思わず
そう思って
しまった。

＞ｉ１６８７７―２０９０＜

「ラスティン、下を見るんじゃない、周りの風景に目をやってみろ、
湖と空の青
そして後ろに広がるレーネンベルクの山々の緑、素晴らしい景色だ
と思わないか？」

そういわれて周囲を見渡してみると確かに絶景です。
吸い込まれるように景色に見入っていると今の状況が気にならなく
なります。

そんな時急に、浮遊感が無くなり落下し始めたのが感じられます。
でも、今度はいける、

「”万物を束縛する力から我を解き放て、レビテーション”」

すると落下速度が段々遅くなり、やがて停止しました。

「高所に不安定な状態でいるということは、人の恐怖心を呼び起こ
す。だが少し
目線をかえるだけでまったく別のものが見えることもある、覚えて
おきなさい。」

「はい、先生！」

「今日は少し無理をさせたから、これで授業は終わりじゃ、こちらに降りて来なさい」

先生の近くに降り立つと、先生が火の呪文で服を乾かしてくれた。

「風邪でも引かれたら、給料が下がってしまうかもしれないからな」

先生は照れながらこう言った。それから二人肩を並べて屋敷まで帰るのでした。

第四話　ラスティン5歳（笑顔の悪魔）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／０７／３０
”お仕えしていた頃”
”わぁぁぁ～～”
に修正

２０１０／９／１８
高いと所まで－＜高い所まで
に修正

２０１１／１／１６
イラスト追加

第五話　ラスティン6歳（老師の後姿）（前書き）

今回は異常に短いです、すみません。

第五話　ラスティン6歳（老師の後姿）

マクスウェル先生に師事してから、ほぼ一年が過ぎました。

そうそう、マクスウェル先生のことは師匠と呼ぶことにしました。
どう考えても、座学
の時間より実技修行の時間の方が多かったですから。（さすがは超
実践主義）

スリープの呪文が効くまで猛犬をけしかけられたり。
（実は人を噛まない様にしつけられた師匠の愛犬でした）

ブレードの呪文で斬り合いをして傷だらけにされたり。
（あの時は母上がすぐに怪我を治してくれたけど、そのまま師匠の
所に殴りこんで
大騒動になりました）

フライの呪文で飛び回りながら森の中を追いかけっこしたり。
（ゲーム感覚だったけど、木に激突して脳震とう起こしたのはシャ
レにならなかった
です）

オリジナルのロック呪文で部屋に閉じ込められたり。
（ディテクト・マジックで術式を解析しないと出られませんでした、
事前に大量のお茶
を飲まされていたのでピンチでした、必死で解呪しましたよ）

パラライズを屋敷中にかけた時は一斉に皆を行動不能にしたり。
（皆笑顔で許してくれました、ちょっと顔が引きつっていた気がし

ましたけど）

コンフュージョンの時は、今度も屋敷中にかけて皆が一斉に踊りだしたり。
（今度は本気で怒られた、でも指示した師匠ではなく僕だけが怒られたのは納得
いかないです）

フィックス（固定化）の呪文の時は、ベニヤみたいなちゃちな盾だけ渡されて、本物の剣
で切りつけられたり。
（はっきり言って殺されるかと思いました）

等々、この一年で沢山のコモンマジックを習得しました。（本に載っていなかった物
まで）
そして今日修行の最後に師匠が突然こうおっしゃいました。

「ラスティン、突然だが今日で修行は終わりだ、ワシがもうお前に教えることは無く
なったこの一年良く厳しい修行に耐えたな、明日からは系統魔法の勉強を始めるが
いい公爵には既に話を通してあるからな。」

突然のことに呆然としている僕に、師匠は優しく、

「お前は優秀な弟子だったぞ、たった一年で、ワシが知る限りのすべてのコモン
マジックを習得したんだからな、これからもこの経験を生かして立派なメイジに

なるんじゃぞ！」
と言ってくれました。僕は何だか胸が一杯になって何を言ったら良いのか分かりませんでした。
「コモンマジックの復習も忘れるなよ、それではな！」
と言って部屋を出て行く師匠に、僕は頭を下げて大声で、
「ありがとうございました！」
とだけ言うことが出来ました。
師匠は振り向きもせずに出て行ってしまいました。
僕はその後姿をただ見ているだけでした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

その日の夕食の時、父上から修行の話が出ました。
「マクスウェル先生の修行が終わったそうだな、しかしたった一年でコモンマジックを修めてしまうとはな、マクスウェル先生も驚いていたぞ。」
「師匠の教え方が良かったんですよ、すごく勉強になりました、系統魔法も師匠から習いたい位です。」
「マクスウェル先生は系統魔法は不得意だからな、４系統ともぎり

ぎりドットクラスの
実力だそうだ、系統魔法はやはり専門の先生に教わるべきだ。先生も、
もう年だからな、無理を言ってはいけないよ。」

「はい、わかりました父上、それで系統魔法の家庭教師の先生はどんな方なん
ですか？」

「一応皆トライアングルの方たちに、家庭教師を頼もうと思っている。先ずは得意
系統をはっきりさせなくてはならないから、４系統すべての家庭教師を手配する。
水系統はリリアが直接指導してくれるそうだぞ」

「え？母上が！ノリスの世話は良いんですか？」

「ええ、ノリスも大分手がかからなくなってきたから、週に１日位ならメアリに
任せても大丈夫でしょう、その代わりビシビシしごいちゃうわよ！」

「お手柔らかにお願いしますよ、母上」

「はいはい、明日からはとりあえずルーンの勉強をしましょうね、リッチモンド、
書庫からルーン文字に関する本を出しておいてね」

「はい、奥様」

明日からはルーンの勉強か、僕の得意な系統魔法って何かな？普通

なら、父上の土か、
母上の水がありそうだけど、土系統で錬金がしてみたいな！早くルーンを覚えて系統
魔法の実習に入りたい、うん頑張りましょう！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

翌日からルーン文字の勉強を始めました。
こちらのルーン文字はかなり複雑で全ての文字と発音を覚えるだけでも一週間
かかってしまいました。
後はこのルーンを組み合わせて行くだけで、系統魔法が唱えられるらしいです。
書庫にあった土系、水系の呪文を覚えていると父上が各系統魔法の家庭教師が
決まったと教えてくださいました。

土を、アルノー先生
水は、母上
風を、ファブリス先生
火を、セザール先生

がそれぞれ担当してもらえることのなったとのことでした。
来週から週に一回授業を受けることになりました、授業がたのしみです。

第五話　ラスティン６歳（老師の後姿）（後書き）

現在第十三話を執筆中です、そろそろネタが切れそうですが、頑張って
書き進めます。

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／０７／２８
気→木に修正しました。

２０１０／９／１８
かったんです、よすごく－＜かったんですよ、すごく先生ももう年だからな－＜先生も、もう年だからな、に修正

第六話　ラスティン6歳（系統魔法）（前書き）

第六話ＵＰします。

ラスティン君は本格的に系統魔法の勉強を始めます。
さてうまく行くのでしょうか？

第六話　ラスティン6歳（系統魔法）

系統魔法の勉強を始めてから1月後、僕の系統魔法の特性が分かってきました。
風，火はドットクラスで、がんばればラインクラスには成れそうだそうです。
水は母上からの遺伝の所為か、見込みがあるようで、今はまだドットの上くらいです
が頑張れば、トライアングルまでいけると母上が太鼓判を押してくれました。
ここまでは予想通りだったのですが、問題は土系統です。
はっきり言って、基本の錬金がうまく行きません。両親の良い所取りで土と水の
トライアングルを目標にしていた僕にとっては大誤算でした。
土のアルノー先生も色々教え方を工夫してくれているのですが、どうしても基本の
青銅が錬金出来ないのです。

悩んだ末、土のトライアングルメイジでもある、父上に相談してみました。
父上も、アルノー先生から報告を受けていて色々相談していたようでしたが、これと
いった対策が思いつかなかったそうです。
そんな父上からマクスウェル先生に相談してみたらどうか？とアドバイスを受け
ました。

「しかし父上、師匠は系統魔法はあまり得意では無いとおっしゃっていましたが？」

「うむ、それはそうなのだが現在打てる手もないし、経験豊かなマ
クスウェル先生
ならば何か良いアイデアを持っているかもしれないだろう？」

そう言われると、僕も特に代案がある訳ではないので、師匠の所へ
相談しに行くこと
にしました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝

次の授業の無い日に、師匠のお屋敷を訪ねることのしました。
その時、始めて知ったのですが、師匠は男爵家の屋敷ではなく、屋
敷の近くの町
マリロットに開いた私塾に住んでいたのでした。
私塾では、貧しいメイジの子供たちに無償で、魔法を教えているそ
うです。

私塾を訪ねると、かなりみすぼらしい建物が建っていいました。建
物の庭で、沢山
の子供たちが楽しそうに遊んでいた。
ドアをノックすると、４０歳位の男性が応対してくれました。

「こちらは、ノワール魔法塾ですが、何か御用ですか？貴族様」

「こちらに、師匠、いえマクスウェル先生がいらっしゃるとお聞き
したのですが？」

「ええ、こちらに居りますよ。もしかして、レーネンベルクの若様

でいらっしゃいますか？」

「はい、ラスティン・ド・レーネンベルクです、マクスウェル先生にお会いできますか？」

その男性は表情を少し暗くして、師匠が今寝込んでいることを教えてくれました。

「2ヶ月前まではあんなにお元気だったのに、それで御加減は？」

「今は安定しておりますが、歳が歳だけに」

「そうですか、ではお見舞いだけでも、よろしいでしょうか？」

「はい大丈夫だと思います、こちらの居間でお待ち下さい、汚い所で申し訳ありませんが」

と、居間に通されて、しばらく待っていると、師匠がやってきました。大分やつれているようです。

「師匠、御無沙汰しております、御加減の方はいかがですか？」

「まずまずと言った所ですな、ラスティン殿、この様な所まで御足労おかけしましたな」

「師匠、僕には殿も敬語も不要ですと言ったはずですが」
師匠は少し嬉しそうにすると話を続けた。
「そうじゃったな、してワシに何の用じゃ？」
「少しお知恵を貸していただきたい事があるのですが？」
「さしずめ、系統魔法でうまく行かない系統があるといった所かの？」
「師匠には、なんでもお見通しなのですね、はい土系統に行き詰っています。初歩の
錬金がうまく行かないのです」
師匠は、しばらく何か考えた後、後ろにいた男性に、
「クロード、裏庭から石を何個か拾って来てくれるか？」
男性（クロードさん）はうなずくと居間から出て行き、しばらくすると石を何個か
持って戻って来ました。
師匠は石を受け取り、それをテーブルの上に置くと僕にこう命じました。
「それではこの石を青銅に変えてみなさい」
「はい、やってみます」
一応言われた通り錬金のルーンを唱えてみましたが結果はやはり失

敗でした。
魔力がすり抜けていく感じで、石に何の変化も現れません。
師匠は難しそうな顔をしています。

「ふむ、ルーンの発音や魔力の放出には問題はないようじゃの、これはラスティンの
今の教師も悩むはずじゃな」

「もしかして僕には土系統が向いていないのでしょうか？」

「そうとは限らんのう、錬金だけが不得意な土メイジがいてもおかしくはない
じゃろうからの、一度試してみるか？」

そう言うと師匠は、僕を建物の裏庭に連れて行きました。

「これから、ワシが唱える魔法をよく見ておきなさい」

というと、ルーンを唱え始めました。

「石礫（ストーン・バレット）！」

の声と同時に、地面から小石が何発も弾丸のように打ち出されます。
初歩の土呪文の石礫の呪文のようです。

「では同じ呪文を唱えてみなさい」

「石礫（ストーン・バレット）！」

と僕が唱えると、勢い良く地面から小石が何発も弾丸のように打ち

出されます。
やった！出来るじゃないか！と僕が喜んでいると、

「基本は大事だが、それに縛られていては進歩はないからの、初歩とは言え土系統魔法
が成功するのじゃから、何かの切欠で錬金も出来るようになるじゃろ、焦らないこと
じゃ」

と師匠が、穏やかに呟いた。
そうか、何かの切欠か、と僕が思いに耽っていると、師匠が思い出したように、

「”錬金”か、それならば、ガストンが専門だったな」

「師匠、そのガストンという方は？」

「ワシの弟子の一人での、鉄鋼の町ワーンベルで錬金の研究をしている変わり者
じゃよ、紹介状を書いてやるから、一度訪ねてみるといい」

「はい師匠、今日は大変役に立つ修行ありがとうございました、このお礼は何時か
させていただきます。」

「そうか、期待させてもらおうかの」

それからしばらく私塾の話をして、よい時間になったので、帰ることにしました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝

屋敷に帰ると早速父上に、師匠との話を伝え、”石礫（ストーン・バレット）”が使えたことを報告しました。

父上は大喜びで、さすがはマクスウェル先生と何度も頷いていました。

そして次回のアルノー先生の授業からは錬金を飛ばして、より高度な土系統魔法を習う事になりました。

第六話　ラスティン6歳（系統魔法）（後書き）

今回も短めです、あまり話が進まなくて申し訳ないです。

本作中では、ルーン唱える部分を省略することにしました。

一言で魔法が起動していますが、前に少し詠唱していると思って下さい。

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。

感想も大歓迎いたします。

２０１０／９／１８

何か考えてた後－＜何か考えた後

に修正

第七話　ラスティン6歳（老師の遺志）（前書き）

第七話ＵＰします。

ラスティン君が自分の理想を見つける話です。
彼の理想はどのようなものなのでしょう？

第七話　ラスティン6歳（老師の遺志）

師匠の所を訪ねてから3ヶ月ほど経ったある日、師匠の訃報を父上から聞くことに
なってしまいました。
それは僕にとってかなりショックなことでした。
葬儀に出席しましたが、前男爵の葬儀にしては質素なものだったらしいです。
しかし、かなり地位の高い貴族らしい若者や、平民メイジらしい質素な服を着た少年までの
幅広い参列者は師匠の人柄をうかがわせるものでした。
しばらく落ち込んだ気分で日々を過ごしていると、屋敷に師匠の関係者を名乗る人物
が訪ねて来ました。
会ってみると、ノワール魔法塾のクロードさんでした。
クロードさんは師匠の手紙を持ってきてくれたらしいです。
手紙を読むと、

”ラスティンお前がどんな道を進むとしても、胸をはって生きて行きなさい。
お前はワシの最後で最高の弟子なのだから”

の所では不覚にも泣いてしまった。

”お前には一つ貸しがあったな、それを返してもらおう、ワシのノワール魔法塾への
支援をお前の口からも公爵に頼んでくれ”

の所は師匠らしいなと思った。

手紙を最後まで読んで丁寧に懐にいれると、今日までの沈んだ気持ちが嘘のように
晴れ渡っているのに気付きました。

「クロードさん、とても有難い手紙をありがとうございます」

「いえ、私はただ手紙を運んできただけですから」

「ところでノワール魔法塾の経営は思わしくないのですか？」

「はい、マクスウェルさまが亡くなって以来、ノワール男爵家からの支援が途絶え
職員一同食べるものにも苦労する有様です。先ほど公爵様にも手紙をお渡しした際にも
支援をお願いしたのですが、良い返事は頂けませんでした」

「分かりました、僕の方からも父上に塾への支援お願いしてみます」

「はい、よろしくお願い致します。ああ忘れる所でした、こちらがワーンベルの
ガストンへの紹介状になります」

「ああ、錬金の専門家という方ですね、クロードさんはガストンさんの事を御存知
ですか？」

「ええ、私も教えましたから。変わった生徒でしたよ、暇があれば錬金ばかり
して他の呪文に興味を示さないし、訳の分からない理論を実証しよ

うとしたりして
いましたからね」

「そうですか、会うのが楽しみです」

「若様に失礼なことを言わなければよいのですが、それではこれで失礼します」

そう言ってクロードさんは帰って行きました。

僕はそのまま父上の執務室に向かいました、父上は難しい顔をして何か考えている様子でした。

「父上、今よろしいですか？」

「ああラスティンか、いいぞ、なんだい？」

「先ほどみえた、クロードさんの話ですが」

「ノワール魔法塾の話か、お前は支援すれば良いと言うのかな？」

「はい、メイジが魔法を使うと言うことは当たり前で素晴らしいことだと思いますから」

「理想論だな、お前は我が家の領内で平民メイジによる犯罪が年間何件起きているか知っているか？」

僕は返す言葉がありませんでした。

でも、と僕は考えます、始めて魔法を使えた時の喜び、科学全盛だった前世では不可能
だったことが魔法を使えば簡単に出来るという事実。
これらを考えると、全てのメイジたちにその力を十分に生かせば、
この世界中を幸せ
に出来るのではないかという考えが僕の中に芽生えました。
これこそ僕がこの世界に生まれた理由なのではという確信を得た気がします。

僕は自分の考えを一生懸命説明しました。
父上は呆れた様に苦笑すると最後には、

「いいだろう、この領地の次の統治者はお前なのだから、お前の思う通りにやって
見なさい」

と言って、ノワール魔法塾への全面的な援助と、平民メイジの積極的な家臣への取り
立てを約束してくれました。

新たに家臣となった、平民メイジたちはその能力に合わせた仕事を与えて、
レーネンベルク領発展の為に魔法の力を使って貰うことにしましょう。

ノワール魔法塾はレーネンベルク魔法学園として生まれ変わりました。
学園卒業後レーネンベルク家の家臣となることが条件ですが、平民

メイジの子弟でも
無料で高度な魔法の教育を受けられることもあって、レーネンベルク領内はもちろん、
近隣の他の貴族の領地からも入園希望者が押し寄せるほどです。
思想教育もきちんと行う予定なので、数年後には優れた家臣団が構成できると思います。

新たな家臣の給料や魔法学園の経営で、レーネンベル領はしばらくは赤字経営になる
でしょうが、メイジたちが十分な力を発揮すれば黒字化は可能だと信じています。

とりあえず、
土メイジには、農地の土壌改良、河川の堤防の強化、道路の整備
水メイジには、領内の医療・衛生面の管理
火メイジと、風メイジには、その戦闘力を生かして領内の治安維持と万が一に備えて
の戦闘訓練
を行って貰いましょう。
腕が確かではない、メイジたちには魔法学園で学ばせ、一人前のメイジになって
もらわなくてはなりませんね。
メイジたちを組織化して、優秀なリーダーを見つけ、魔法の有効な使用方法を模索
する。
当面のリーダー役は父上が派遣してくれる、古くからの家臣に任せるしか無いで
しょうね。
やることは山積みです。

平民メイジたちの活躍が広まれば、他の貴族領への有料の派遣なども考えておくといいかもしれません。

まずは、貴族ではないメイジたちがどれほど役立つ存在かであることを、貴族や平民に知らせていくことを目的としていきましょう。

前世の記憶があるにしろ、6歳で沢山のメイジたちを指揮するのはかなりの重圧ですが、芽生え始めた夢に向かって少しでも近づいて行きたいと思います。

それから僕は、

・自分自身の魔法の勉強
・政治経済や宮廷作法の勉強
・レーネンベルク魔法学園の視察（同世代の平民の子供たちと過ごす貴重な機会です）
・新家臣への仕事の配分

などを忙しくこなして行くことになりました。

第七話　ラスティン6歳（老師の遺志）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／９／１８
人柄を伺わせる→人柄をうかがわせる
に修正

外伝一話　メイドさんによるラスティン様の日常紹介（前書き）

ちょっと思い立って、外伝を書いてみることにしました。
メイドさんが主役です。

外伝一話　メイドさんによるラスティン様の日常紹介

私の名前はニーナといいます。今はレーネンベルク公爵家にメイドとしてお仕えしています。

メイドといってもただのメイドではなく、公爵家嫡子のラスティン様専属のメイドで、しかも護衛の役割も兼ねています。（メイドで護衛ちょっとカッコいいと思いませんか？）

私が公爵家に仕え始めたのは１５の頃でした。

公爵家の召使いとして奉公している叔父が、レーネンベルク公爵家でメイドを募集しているという話を持ってきたのが切欠でした。

平民メイジである私は、魔法が使える様になると、周囲から浮いた存在になってしまいました。

友人達も私がメイジだと知ると、怖がって寄り付かなくなりました。

子供心にずいぶん傷付きましたが、メイジであることに誇りを持っていた父に魔法を教わり、優しい母に慰められながら、真っ直ぐに育ってきました。

大人に近づくにつれ、周囲の同年代の子供たちが家業を手伝ったり、奉公にでたりするのをみて、自分の将来に不安を感じていた私は、叔父がもって来た話に飛び付きました。（実際平民メイジは、無用に恐れられ、職に溢れることが多いです）

でも分からなかったのが、メイドを募集しているのに、ドットクラス以上のメイジであることという条件が付いていることでした。
そのことを叔父に尋ねてみると、公爵家では華美であることは好まれず、使用人も最低限しか置かない方針だそうで、いざというときの為に使用人は戦闘力を持つ平民メイジを雇う様にしているとのことでした。
どちらにしろこんな美味しい話はそうはありません、翌日には叔父に連れられてレーネンベルク公爵家の屋敷を訪ねることになりました。

お屋敷に着くと、早速試験を受けることになりました。
まずはメイジとしての腕を披露しました、風のラインクラスの魔法を使って見せた所とりあえず合格を貰えました。
次は面接でした、執事のリッチモンドさんという方から、様々な質問をされました。
緊張してよく覚えていませんが、なるべく装わず正直に回答したつもりです。
結果面接も合格を頂きました。
これで採用決定かと思っていたら、最終試験が残っていました。
私は豪華な子供部屋に通されると、１人の赤ちゃんのお世話をあやしてみる様に言われました。弟がいる私は難なく、その赤ちゃんを笑わせることに成功しました。
（この赤ちゃんがラスティン様でした）

すべての試験に合格した私は、レーネンベルク家の方々と対面することになりました。

３０代後半の旦那様（テオドラ様）に、２０代前半の奥様（リリア様）、１歳ほどの赤ちゃん
（ラスティン様）が一同に会すると、幸福な家族を絵に描いた様でした。

程なく、お屋敷での仕事を始めた私ですが、最初はドジばかりしていました。
皿を割ったり、お茶を零したり、洗濯物を落としたり、いい所が有りませんでした。
しかし、公爵家の方々も使用人の同僚達も非常に寛大で、何とか首にはなりませんでした。
そんな私が唯一得意としているのが、ラスティン様のお相手でした。
ラスティン様は私を気に入ってくれたらしく、私を見かけるとニコニコと笑ってくださいます。
それを見て癒されるのが、私にとっての救いです。（実家にいる生意気な弟と交換したい位です）

ラスティン様はすくすくと成長されて、昨日3歳の誕生日を迎えられました。公爵家としては質素ですが、心の篭ったパーティーが行われました。
しかし不幸は突然訪れるものです、その数日後突然ラスティン様が謎の病気に罹ってしまったのです。
公爵家を挙げての治療が行われたのですが、芳しい結果は得られませんでした。
私も懸命に看病をしたのですが、ラスティン様の症状は一向に改善されませんでした。

やがて公爵家にも諦めムードが漂い始めましたが、私は諦めませんでした。
自分の睡眠時間を減らしても看病を続けました。

数ヶ月すると、奥様が妊娠されたことが分かりました。口さがない使用人たちは、
公爵夫妻はラスティン様を諦め、次の子供を作ったんだと噂をしていました。
ラスティン様は懸命に生きようとしているのにあんまりだと思いましたが、公爵家
には跡取りが必要なことも事実です。
私は、同僚達が心配するほど看病にのめり込みました。

そして、私の看病のおかげかは分かりませんが、発病から1年でラスティン様の病気
は突然完治してしまいました。
ラスティン様の病気が治ったことに安心した私は、今までの無理の代償の様に、
1月ほど寝込むことになってしましました。

休養から戻ってお屋敷の仕事に戻ると、ラスティン様にふと違和感を感じました。
ラスティン様の様子がこれまでと違うのです。
これまではお人形の様にただ可愛いだけでしたが、今は容姿は可愛いままなのですが、
妙に大人びた態度を取ることがあるのです。
行動にも変化が現れています、毎朝らんにんぐ?と言って、お屋敷の塀の周りを走り
回ってみたり、今までは興味が無かった勉強を始めたり、料理人たちに新しい料理や

お菓子等を作らせたりときりがありません。

特にらんにんぐとやらには、護衛として気を使います。
町に出るとかであれば屈強な男性の護衛が付くのですが、屋敷の塀の周りを走ると
なると、護衛は私の役目になります。
私も、毎朝メイド服ではなく動きやすい服装に着替え、見つからないように
ラスティン様の後をつけて行くことにしました。
最初の頃は、病後ということもあってそんなに長く走れないご様子でしたが、２ヶ月
もするとかなりの距離を走れるようになったようです。
お屋敷の外なので、普通の平民達に会うこともあるのですが、ラスティン様は元気に
挨拶しています。
平民の人々も、動きやすい服装に着替えているラスティン様が、貴族だとは思わない
らしく、気軽に接しているようです。（護衛としてはあまり嬉しく無いことですが）
良く会う農民の老夫婦からは時々朝市にもって行く野菜を分けてもらったりして
います。（ラスティン様から野菜を料理に使うように言われた料理人たちは複雑そう
な顔をしていました）

料理人たちへの、新しい料理やお菓子の注文に関しては、ラスティン様がこんな
料理やお菓子を食べたいと希望を言うと、料理人たちが工夫して言われた通りの料理
やお菓子を再現するといった感じです。

料理人たちはラスティン様の注文に創作意欲を掻き立てられるそうで、レーネンベルク
家の食事では、様々な変わった料理が食卓に並びます。
秘密ですが新しいお菓子の試作品を、試食させてもらえるのは私の密やかな楽しみ
のひとつになっています。

ラスティン様が5歳になると、メイジの修行が始まりました。
まずは杖契約ですが、ラスティン様はたった2日で契約を済ませられてしまいました。
契約した杖を私に見せて

「ニーナ、ニーナ、これが僕の杖”ニルヴァーナ”なんだよ！」

と得意そうにしていらっしゃいます。（杖に名前を付けるなんて、やっぱり
ラスティン様は可愛い、実家にお持ち帰りしたい）

杖契約が終わると、コモンマジックの修行が始まりました。
家庭教師の先生はマクスウェル・ド・ノワールと仰る方で、かなり優秀な教師の
ようです。たった1日でライトの呪文を使える様にしてしまう位ですから。
（私が最初に魔法を使える様になったのは、修行を始めて2週間程でした）
しかし、私はマクスウェル先生をあまり好きではありません、修行がかなり
乱暴なのです。ブレイドの修行のでラスティン様の可愛らしい顔にかなり深い傷を
つけた時は、奥様と一緒に抗議に行ったほどです。（決してラステ

ィン様の一番の
お気に入りの座を奪われることを心配したのではないですよ）
ラスティン様さまは、１つ魔法を覚える度に私の目の前で実演をして下さいます。

「ニーナ、今日はこんな呪文を習ったんだよ！」

と嬉しそうに報告されると、自然に頬が緩んでしまいます。（魔法自体はまだまだ
初心者レベルでしたが）

マクスウェル先生による、コモンマジックの修行は１年程で終わりました。
（たった１年でコモンマジックを修めてしまうなんて、ラスティン様はなんて優秀なの
でしょう）
次はラスティン様は系統魔法の修行に入ったのですが、ここで始めての挫折を味わう
ことになりました。（お可哀想なラスティン様）
どうやら、土系統に適正が無かったご様子で、少し落ち込んでいらっしゃいました。
しばらくすると、実は土系統に適正がないのでは無く、錬金が出来ないだけだと
分かりすっかり元気を取り戻されました。

それから数ヶ月して、マクスウェル先生が亡くなられたと知らされました。
ラスティン様はかなり落ち込んでしまい、見ている私の胸も締め付けられるよう
でした。

それでもしばらくするとマクスウェル先生の死を乗り越えられたラスティン様は、
何か思う所があったのか、何かの事業を始められました。（6歳で経営に興味を持つ
なんてさすがはラスティン様です）
なんでも平民メイジを大量に家臣に取り立て、大規模な活動を行うそうです。
これに合わせて、魔法学園というものを立ち上げ、平民メイジの育成にも力を入れる
そうです。
単なるメイジであるメイドの私にはよく分かりませんでしたが。

ラスティン様は屋敷から出かけることが多くなり、魔法の授業が無い日はほとんど
屋敷にはいらっしゃらないことが普通になってしまいました。
私は寂しさを覚えました、もしかするとラスティン様はもう私だけのラスティン様
ではなくなってしまったのかもしれません。

私事になりますが、私には恋人がおります。レーネンベルク家の家臣で数年前に
交際を申し込まれました。
ラスティン様を懸命に看病する姿に心を打たれたそうです。
その恋人が先日正式にプロポーズを申し込んでまいりました。
わたしももう21歳、そろそろ本気で将来のことを考えなくてはなりません。
かなり悩みましたが、プロポーズを受けることにしました。
この事をラスティン様にお話すると、

「おめでとうニーナ、そしてこれまでありがとう！」

と笑って祝福して下さいました。（少し寂しそうだったのは、気のせいでは無いと思います）

仕事の引継ぎ等で、簡単にはお屋敷を離れることはできませんでしたが、終に明日
長年仕えてきたレーネンベルク公爵家のお屋敷を去ることになりました。
明日からは、メイドではなく妻となる訳ですが、１つ決めていることがあります。
私に子供ができたら、魔法学園に入園させて、レーネンベルク公爵家ひいては
ラスティン様のお役に立てるようにしたいということです。
それが私に出来るラスティン様への最後の奉公だと思います。

ラスティン様の健康な成長を、陰ながら何時までもお祈りしております。

外伝一話　メイドさんによるラスティン様の日常紹介（後書き）

初の外伝でしたが、如何だったでしょうか？
ニーナさんはラスティンのお姉さんの様な存在でした。
その彼女がラスティンの元を去った訳ですが、ラスティンの歩みはまだまだ
止まりません。

２０１０／９／１８
叔父もって来た－＜叔父がもって来た
（リリア）－＜（リリア様）
ラスティン様さまが－＜ラスティン様が
に修正

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１２／３１
マックスウェル－＜マクスウェル
に修正

第八話　ラスティン7歳（変わり者の土メイジ）（前書き）

第八話ＵＰします。

ラスティンはやっと苦手な錬金を克服します。
どうやって克服するかは本文を読んでくださいね。

第八話　ラスティン7歳（変わり者の土メイジ）

新家臣のメイジたちの働きも、満足いくレベルに達しました。
領内の治安や衛生面の向上は目を見張るものがありますし、農民からの税収も
かなり増えたと父上が教えてくれました。
治水や道路網の整備がには手間がかかるようで、まだまだ時間がかかりそうですが、
火水風メイジのなかにも、土系統を使える者が多数いたので、これらを増援に出す
ことで、期間を縮めることも可能でしょう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

僕が系統魔法を習い始めてからほぼ一年が経ちました。
ランクは相変わらすドットクラスですが、土水風火の４系統ともそこそこの呪文を
使える様になりました。
特に水と土については、ライン並と言われています。そう簡単にはラインクラス
にはなれないみたいですね。（相変わらず錬金は出来ません）

今日やっと父上の視察のお供ということで、やっとワーンベルを訪ねることができ
ました。
ワーンベルは鉄鋼の町の名前通り製鉄業が盛んで、良質な鉄鉱石を大量に産出する
ワーンベル鉱山の麓にある町です。

クロードさんの話では、この町のはずれにガストンさんは住んでいるらしいです。
町の住人に話を聞きながらガストンさんの家を訪ねると、２０代半ば程のがっちりした
男性が顔を出しました。
この人がガストンさんらしいです、師匠からの紹介状を見せるとガストンさんは
懐かしそうに目を細めながらこう言った。

「あのじーさんが、俺に人を紹介するなんて信じられないな、いや失礼、
レーネンベルクの若様」

「いえ、僕のことはラスティンと呼んでください」

「ではラスティン殿とお呼びしましょう、ラスティン殿はじーさん、いや
マクスウェル先生の手紙によると錬金が不得意だそうですね」

「はい、不得意というより全く出来ないというしかない状態です」

「それでは、試しにこの石を”鉄”に錬金してみてください」

「え！鉄ですか？青銅じゃないんですか？」

「鉄鋼の町に来て青銅もないでしょう、現に私は青銅より鉄の錬金の方が得意
ですよ？」

鉄の錬金はラインクラス以上と聞いていたので、今まで試していませんでした。
しかし物は試しです、早速ガストンさんの持ってきた何かの鉱石に鉄の錬金を試してみましょう。
いつもの失敗錬金の時と同じように、鉄に変われと念じながら錬金の呪文を唱えてみます。
するとどうでしょう、いつもはすり抜けてしまう魔力が確かに鉱石に注ぎ込まれて行きます。
みるみる内に鉱石は鉄色へと変化して行きます。
すごいこれが錬金の元素変換なんだ。

「なんだ錬金出来るじゃないですか？私をからかっているんですか？」

ガストンさんは不満そうな声をあげました。

「いえ、今始めて錬金が成功したんです、いつもは青銅を試していたんですけど、
うまく錬金できなかったんです。マクスウェル先生が冗談の手紙を書いたと思いますか？」

「それもそうですね、ではその鉄をちょっと貸してもらえますか？」

錬金した鉄の塊をガストンさんに渡すと、ガストンさんは僕の知らない呪文を唱えました。

「分析（アナライズ）」

ガストンさんは渡した鉄の塊をじっと見ながら、

「純度は約７０％ですか、不純物が多すぎて売り物にはなりませんね。」

と言った。

僕は驚いてガストンさんに訊ねました。

「今のはオリジナルスペルですよね、どんな効果があるんですか？」

「今のスペルは、”分析（アナライズ）”の呪文なんです、固体の成分を知ることが出来ます。ディテクト・マジックを土系統のルーンに置き換えただけですからラスティン殿でも簡単に覚えられますよ」

僕は呪文を教わって、錬金した鉄の塊にかけてみました。
すると鉄の塊内部が透けて見え、鉄と鉄で無い部分がはっきり色分けされて見えます、
確かに全体の３０％程の色が違い、異物が混じっているのが分かります。
なるほど、こんな呪文の使い方もあるんだ。

「それより今は、錬金が出来たことを喜ぶべきなのではないですか？」

「ああ、そうでした錬金成功したんですね、でも何故かなさっきの

鉱石は何か特別な
ものだったんですか？」

「いいえ、この辺りでは普通に拾える程度の石ですよ、鉄の含有量
が少し高い程度で
特に変わった鉱石とかではありません。鉄は錬金出来て青銅は錬金
出来ない、やはり
これはイメージの問題かな？」

「イメージですか？」

「そうイメージです、ラスティン殿は青銅を錬金しようとした時、
どんなイメージを
持って錬金をしていましたか？」

「そうですね、青銅は銅と錫の合金ですから、銅と錫をそれぞれ１
対１で合成する事を
考えました」

「それでは鉄を錬金したときは、どんなイメージを持ちましたか？」

「鉄の時は、屋敷にある鉄製の小物や庭仕事に使う農具なんかを想
像しながら錬金
しました」

「ラスティン殿は青銅について面白いイメージをお持ちですね、一
般家庭では今でも
結構青銅製の農具や装飾品が残っているので、それをイメージする
のが普通なのです
が、公爵家ともなると青銅などはあまり見かけないのですね。それ

に銅と錫を
それぞれ錬金して合成しようという発想もなかなかしないでしょうね。公爵家では、
合金の成分に関して勉強することがあるのですか？」

「え？はい、ちょっと機会がありました」（前世の記憶なんていえないです）

ちょっと話を逸らさなきゃ、

「所で、先ほどの分析（アナライズ）の呪文ですが、オリジナルスペルなんですよね？
ガストンさんは他にオリジナルスペルを開発されているんですか？」

「ええ、いくつかオリジナルスペルを完成させていますよ。研究中のものもありますが、丁度いい先程の鉄の塊を貸してもらえますか？」

ガストンさんに鉄塊を渡すと、ガストンさんは何やらルーンを唱え始めます。

「抽出（イクストラクト）」

呪文が完成すると、鉄塊から黒い砂のようなものがこぼれ落ち少し小さくなりました。

「ラスティン殿、イクストラクトした鉄塊にアナライズの呪文をかけてみてください。」

言われたとおり、アナライズの呪文をかけると、鉄塊はさっきとは比べ物にならない
程、純度の高い鉄になっていました。

「ガストンさん、すごいじゃないですか！」

「鉄塊から、鉄成分だけを抽出するだけですから、土のドットスペルですよ。大した
物ではありませんよ。私が目指しているのは、鉄鉱石から直接純度の高い鉄を抽出
する呪文なので、その過程に過ぎません。」

「鉄鉱石から直接、純度の高い鉄を抽出ですか、製鉄の常識を覆す呪文ですね。その
呪文は完成しているのですか？」

「いえ、それがうまく行かなくて行き詰っている所なんですよ、鉄鉱石に抽出（イクストラクト）を
かけても赤茶色の錆びみたいなものがとれるだけですし、木炭を使った製鉄の過程に
抽出を使えば鉄は取り出せるのですが、費用の面で優れているとは言えませんからね」

なるほど、鉄と酸化鉄の区別がされていないんですね。それならアドバイスする事が
出来るかもしれないです。ガストンさんにそれが理解出来るかが問題ですけど。

「ガストンさん、もしかしたら僕があなたにその呪文の完成の為にヒントを差し

上げる事ができるかもしれません。でも簡単に教えられることではないので、
よかったら僕の屋敷に来てくれませんか？」

「本当ですか？是非行かせていただきます！」

ガストンさんは驚くほど簡単に、僕の提案を受け入れてくれました、
本当に行き
詰ってたんですね。

こうして僕はガストンさんを連れて屋敷に戻ることになりました。
ガストンさんのおかげで、錬金が出来るようになったことを父上に
話すと、父上は
喜んで客人としてガストンさんを屋敷に招待してくれるそうです。

その後、屋敷に戻ると、僕はガストンさんに物理学と化学の基礎を
教えることに
しました。
前世の中学校の化学と物理の授業でも思い出してみながらやってみ
ましょう。
ただでも忙しいのに、教師役なんて受けるんじゃなかったとも思い
ましたが、この
呪文はこの世界に革命を起すという確信があるので、手を抜く訳に
はいきません。

こうして、教師であり、生徒であり、メイジたちの指導者でもある
僕の生活は
どんどん忙しくなって行くのでした。

第八話　ラスティン7歳（変わり者の土メイジ）（後書き）

新登場のガストンさん、彼は話の中で結構重要な役割を果たしてくれます。
詳細は次話以降をお楽しみに＾＾

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／９／１８
水と土はについては－＜水と土についてはに修正

第九話　ラスティン8歳（母上による水魔法修行とその他）（前書き）

第九話ＵＰいたします。

第九話　ラスティン8歳（母上による水魔法修行とその他）

ガストンさんは、屋敷の客間を与えられその部屋を早々に工房へと変えてしまいました。
工房の中には、色々な鉱石が溢れています。これらはガストンさんが、トリステイン中をまわって採集してきたものらしいです。

ガストンさんへ科学の基礎を教え始めてから2ヶ月ほどしたある日の晩、眠ろうと思ってベッドに入りかけた僕の所に突然ガストンさんへがやってきました。

「ラスティン殿、とうとう完成しましたよ！」

どうやら、”鉄鉱石から直接純度の高い鉄を抽出する”呪文が完成した様です。
眠気も飛んでしまったので、実演して貰います。

「分解（デコンポーズ）」

ガストンさんが呪文を唱えると、赤茶だった鉄鉱石が見る見る鉄色に変化して行きます。
アナライズをかけると、ほぼ１００％の純度の鉄が生成されたことが確認出来ました。

「とうとうやりましたね、ガストンさん！」

ガストンさんはとてもうれしそうにしています。

「ラスティン殿のおかげですよ、酸化鉄を励起状態にして鉄と酸素に分離して、
抽出(イクストラクト)する発想は私では出来ませんでしたからね」

「いいえ、僕はアイデアを出しただけです、呪文を完成させたのはガストンさんの
功績ですよ、僕にも是非呪文を教えてください。後一つお願いがあるのですけど、
分解(デコンポーズ)の逆の呪文も考えて貰えないでしょうか？」

「呪文をお教えするのは勿論かまいませんが、分解(デコンポーズ)の逆の呪文ですか？結合(コンポーズ)の呪文とでも言うのかな？」

「そうです結合(コンポーズ)です、溶液や熱等を使わずに合金が生成できたらすごいと思いませんか？」

「なるほどそれは確かに！分かりました引き続き結合の呪文の研究をさせて貰います」

ガストンさんは興奮した様子で僕の部屋を出ていきました。

元素変換と分解抽出と結合の呪文が完成すれば、前世にあったようないろいろな
金属や合金が簡単に手に入ります。
これらの金属でこの世界に産業革命を起すことも可能では無いかと思うと興奮して、
その夜は中々寝付けなかったです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

この1年の新家臣のメイジたちの活躍も紹介しておきましょう。
彼らは、”レーネンベルク魔法兵団”と呼ばれトリスティン中に有名となりました。

土系統の呪文を使ったメイジたちのおかげで、領内のほとんどの町や村に立派な街道を通す事ができました。（固定化の呪文のおかげで保守にはほとんど費用がかからないのが助かります。）
これで領内の物流も活発になり、商人たちからの税収が増えました。
今後は、近隣の領主の領地の主な町に街道を通して、レーネンベルク領の経済の発展をより確かなものにして行きましょう。

風・火のメイジ達は、領内の治安を安定させるほかに、腕利きの傭兵として亜人退治や盗賊団の討伐などで、近隣の諸侯や王国直轄地の代官からひっぱりだこです。

水メイジたちは、領内の町や村をまわって、怪我や病気の治療、土メイジの力を借りて上下水道の整備を行っています。
下水で集めた糞尿を発酵させ肥料にするのはお約束ですよね。
水メイジの数が揃ってからは、牛や豚などの家畜の健康管理まで行えたので、
レーネンベルク産のブランド肉の生産量もうなぎのぼりです。

そして、彼らの名前を一躍有名にしたのが、レーネンベルク領の隣に位置する、
モーランド侯爵領での水害時の救援活動でした。
大雨が続いた為、水害を警戒していた最中にレーネンベルク領を流れるラセーヌ川の
水位が危険なレベルまで達したことを察知したレーネンベルク魔法兵団では、下流に
位置するモーランド侯爵領で堤防が決壊するのを予想し、子爵領の境界で団員を待機
させていました。（レーネンベルク領内では堤防の強化などで危険は無いと判断）
大雨が3日目に入った未明に終に、モーランド侯爵領の堤防が決壊してしまいました。
予め兵団を子爵領内に入れることの許可を得ていた為、応急対策が団員の手で迅速に
行われ洪水の規模は最小限で済み被害者も出さずに済みました。
モーランド侯爵自身は、自領でレーネンベルク魔法兵団が活躍したのをあまり快く
思っていなかったそうですが、この水害の被害を最小限に食い止めた功績は王国
からも高く評価され、国中から平民メイジたちが魔法兵団への入団希望したのは
うれしい誤算でした。

しかし、レーネンベルク魔法兵団にも問題がありました。彼らはレーネンベルク公爵
家の家臣なので十分な給料を払わなくてはなりません。
兵団員が増えることは公爵家の支出が増えることに直結する為、手放しに兵団員が

増えることを喜べる状況ではなくなりつつありました。
さすがにすぐにレーネンベルク公爵家の財政が破綻するという状況にはならないと思いますが。これは、今後大きな課題として現れてくることでしょう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

僕個人としてはこの一年間で、更に魔法の修行を進めてきました。
特に目覚ましい効果を上げたのが、水の系統魔法と魔法薬の調剤技術の向上でしょう。

母上に受けた水の系統魔法の教育は、治療系の魔法がほとんどでした。最初は座学がほとんどでしたが、水のドットスペルを習得してからは、基本的に屋敷の周りの町や村をまわり、けが人や病人の治療に明け暮れました。
(兵団員が定期的に巡回していますが、それでも突発的な病気や怪我は対応しきれないのが現状です)
ある程度、治癒系の魔法を習得すると今度は魔法薬の調剤を習いました。
原料となる薬草の採集の仕方から、調剤の仕方、そして出来た魔法薬に魔力を込める方法まで、かなりスパルタに母上から教育を受けました。
それで分かったのが、僕が作った水の魔法薬は通常より効果が高いということでした。
小さい頃受けた、水精霊からの治療で水精霊の一部が僕の体の中に

あることが影響
しているかもと母上は話してくれましたが、流行し始めた伝染病が
僕の魔法薬の
おかげで拡大せずに済んだことの方が僕としてはうれしいことでした。（伝染病が発生
した町などでは、人の行き来が制限されるので、水メイジによる治療が行われないと
言うのが今までの場合でした）

僕の作る水の魔法薬は、水の秘薬とまでは行かないまでも、結構な値段で売れる様に
なりました。
僕は自分が作った魔法薬に”アムリタの雫”をいう名前を付けて、貴族や裕福な商人
たちにそこそこの値段で販売することにしました。
これは僕個人の力なので、これで儲けようとかは思いませんが、魔法兵団が出している
赤字の軽減にでもなれば良いかと思い、”アムリタの雫”の調剤に励んでいます。
水の系統魔法の腕が上がればもっと効果のある魔法薬が作れる様になるかもしれま
せん。
杖の精霊のニルヴァーナも一種植物の精霊ですから、良い薬草とか教えてくれるかも
しれません。将来的にはオリジナルの魔法薬なんかが作れたらなと思います。

第九話　ラスティン8歳（母上による水魔法修行とその他）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／９／１８
完成して様です－＜完成した様です
思ってかったそうですが－＜思っていなかったそうですが
に修正
現在第十五話を執筆中、かなり苦戦しています、やっぱり戦闘描写って難しいですね。

第十話　ラスティン１０歳（元素周期表と錬金）（前書き）

第十話ＵＰいたします。

第十話　ラスティン１０歳（元素周期表と錬金）

ガストンさんはあれから３ヶ月ほどで、結合（コンポーズ）の呪文を完成させてくれました。
今はその功績で、レーネンベルク魔法学園で錬金の講師として教鞭をとる傍ら、
錬金の新しい呪文の開発に励んでいます。

魔法学園の運営自体は順調で、毎年百人近い優秀な卒業生がレーネンベルク魔法
兵団に入団しています。
園長を務めるクロードさんも十分な仕事をしてくれていると思っています。
やはり貴族のメイジより平民メイジの方が僕と相性が良いらしいです。

問題は魔法兵団の方で、活躍も華々しければ、赤字の計上も華々しいというのが
現状です。
王国からは勲章や称号など名誉的な報酬は受けられるのですが、現金収入は
得られず。
レーネンベルク領内では活動が飽和しつつあって、早急に何らかの対策を打ち出さ
ないとまずい状況になりつつあります。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝

僕個人としては、この２年で土水系統ともにラインクラスまで昇格して、腕を上げ
ました。
魔法薬の調剤で多少の利益を上げているといった所です。

僕個人が今一番熱心に取り組んでいるのが、前世の記憶にある元素周期表の元素を
錬金の元素変換（コンバージョン）で再現することです。
前世の記憶を頼りに色々な元素を元素変換（コンバージョン）で生成してみました。
ラインメイジになったこともあり、どんな元素が元素変換可能なのか試し始めたのが
切欠です。
ドットメイジの頃にはまともに錬金出来なかった、鉄も容易にかなりの純度で錬金
可能になっていました。

そこで発見した幾つかの法則についてここで述べたいと思います。
・扱える魔力量が多いほど、元素番号が大きい元素を元素変換（コンバージョン）出来る。
（ラインメイジでは、銅２９、亜鉛３０辺りが限界で銀４７まで行くと変換出来るのは
１０％以下）

・元素番号が離れた元素を元素変換（コンバージョン）しようとするほど、魔力の消費量が
激しくなる。
（ケイ素１４からアルミニウム１３の元素変換は大量に行えるが、ケイ素１４から銅２９を
元素変換するのは大量には出来ないし純度も落ちる）

・同じ元素に元素変換しようとした場合、元となる物質の純度が高いほど、純度の高い
元素変換が出来る。
（純度８０％のケイ素の塊の石と、純度１００％に近い抽出済みケイ素（イクストラクト）の
塊を元に鉄を元素変換しようとした場合、前者は８５％ほどの純度にしかならないのに
対して、後者ではほぼ１００％の元素変換（コンバージョン）が行える）

・元素変換（コンバージョン）を行っても、質量は保存される
（ケイ素１４を元素変換（コンバージョン）して鉄２６にしても質量の変化は見られない）

元素周期表は僕の知るかぎりウンウンオクチウム１１８で終わっているけど現在の僕の
魔力では錫５０までしか元素変換（コンバージョン）できません、これも何度も抽出を行ってやっと錬金したものです。
一応、水素１～錫５０までの標本をつくりましたが、この世界でどの程度認められるか
疑問が残ってしまいます。せめて金まで錬金できれば、ある程度の評価は得られると
思うんですが。
それはトライアングルクラスになるまでお預けかな?下手をするとスクエアクラスで
しか金は得られないかもしれません。
ちなみに常温で気体の元素は、固定化、密閉化したガラスビンの中で元素変換（コンバージョン）
しました。
また、すべての固形の元素は速攻で固定化をかけましたよ、有害だったり、危険

だったりしますからね。

とりあえず、土や石から抽出可能なケイ素で元素変換（コンバージョン）を行って、利用価値の
ありそうな
アルミ、チタン、鉄、銅を出来る限り錬金して、鍛冶屋や商人に見せて見ましたが、
アルミは強度、チタンは加工性が悪くあまり使い物にならないそうで、鉄と銅が普通の
価格で売れたのが悲しかったです。
前世ではかなり有用な元素だったはずなんだけど。

改良案としてアルミに銅を結合（コンポーズ）させたとジュラルミンもどきと、
マグネシウムとケイ素を結合させた強度、耐食性に優れたアルミ合金、さらに亜鉛、
マグネシウム、銅を結合させた超々ジュラルミンもどきを作ってみました。
これらをまた出入の商人に見せたところ、かなり興味を持ったようで、サンプルを
渡すと何処かへ持って行っきました。
興味をもってもらえるといいのですけど。

チタンの方は、鍛冶屋から加工性に問題があるという指摘を受けたので、いっそのこと
錬金の成形（フォーム）を使ってそのまま製品の形にしてみることにしました。
試しに剣の形に成形したチタン製の剣を作って、屋敷の警備をしてくれている兵士に
使わせて見た所、軽さ、強度の面で鉄製や鋼製のものに勝るという好評を得て自信が
つきました。

父上を通して王国へ献上するという形で、ジュラルミンもどき製の盾と、チタン製の剣を
５組提供してみました。（面倒なのでジュラルミンと呼んでしまいましょう）
反響があるかどうか分かりませんが、反応は楽しみです。
（後から聞いた話では、献上した剣と盾を使用した兵士が、御前試合でトップ３を独占
して剣と盾の出来を絶賛してくれたそうです）

結論から言うと、反響はありました。王城からジュラルミン盾と、チタン剣を１００組
購入するというものでした、しかも１ヶ月以内にです。
剣、盾それぞれ５００エキューで購入するということですから、１０万エキューですね。
王国としてもかなり本気のようです。
しかし１ヶ月ですか無理ですね、父上にお願いして２ヶ月に納期を延ばして貰い
ましたが、それでも僕だけでは無理なので、ガストンさんに依頼して魔法学園
の方から錬金を得意とする生徒を１０人、魔法兵団の方からも錬金を得意とする
土メイジを１０人派遣して貰って計２０人で大掛かりに錬金をすることにしました。

・まず屋敷の近くの町マリロットに２０人ほどが寝泊りできる屋敷を工房兼宿舎として
　用意しました。
・食事やその他の身の回りのお手伝いさんとして、マリロットの女性たちを１０人ほど

雇いました。
・原料として石が必要だったので、町に大き目の石を1スゥで多数買い取るという
御触れを出しました。

これらの手配を済ませた後、実際の錬金に入る訳ですが工程は大まかに言って、

1．買い取った石から、比較的多く含まれる二酸化ケイ素SiO2を抽出する（イクストラクト）
2．二酸化ケイ素をそのまま元素変換（コンバージョン）して、アルミニウムとチタンと少量の銅を作る
3．作り出したアルミニウムとチタンと銅を更に抽出（イクストラクト）して純度の高いアルミニウムと
　チタンと銅にする
4．アルミニウムと銅を結合（コンポーズ）させてジュラルミンを作る
5．ジュラルミンとチタンを錬金で成形（フォーム）して盾と剣とする

の5工程にしました。

先ず最初に、今回のメンバー一同を集めて、ジュラルミン盾とチタン剣の錬金を実演してみせました。
一連の錬金は、地味な作業ですし、出来たものも単なる剣と盾だったので、メンバーの皆さんは、あまり感銘を受けなかった様子です。
それではと言うことで、メンバーに各工程の錬金を行ってもらいました。

1の抽出の工程では、ガストンさんの指導を受けた魔法学園の生徒

が見事な
二酸化ケイ素の抽出（イクストラクト）を見せてくれました。
２の元素変換（コンバージョン）では、経験の差か魔法兵団の土メイジたちがまずまずの純度のアルミニウムとチタンと銅を元素変換（コンバージョン）してくれました。
（始めてみたアルミやチタンを元素変換出来るだけでもなかなかの腕でしょう）
３の抽出（イクストラクト）と４の結合（コンポーズ）は魔法学園の生徒が何とかこなしてくれました。（純度にばらつきがありちょっと強度の面では不安ですが）
５の成形（フォーム）では魔法兵団の土メイジたちがその腕を奮ってくれました。
（はっきり言って僕が作ったのよりかっこいいです）

最初の一週間はかなり失敗はありましたが、なんとか形になりそうです。
得意分野がかなりはっきりしているようなので、完全に分業制で作業を進めて行った方が良さそうですね。
完全に分業化をして作業を進めると、錬金にも慣れてきたのか効率がかなり上がってきました。
その為、一週間で２０組ほどのジュラルミン盾とチタン剣を錬金することができました。

しかし、ここに来て問題が発生しました。魔力の枯渇です。
メンバーのほとんどがラインメイジだったので、この辺りが限界のようです。
数人いたトライアングルメイジはまだ余裕がありそうでした。
仕方がないので、メンバー全員に3日間の休養をとらせて、魔力の回復に努めて

貰いました。
一方僕はと言うと、普通のメイジより魔力量が多いらしく、一人で黙々と錬金を
続けていました。
メンバーの休養が終わった後は無理をさせず、以前の２／３程度の錬金を１日に行い、
十分な休養をとって魔力の枯渇という事態を回避することにしました。

そして２ヶ月後、何とか注文があった１００組のジュラルミン盾とチタン剣を王城に
納品する事ができました。

しかし、納品を終えて帰ってきた父上から聞いたのは、

「陛下は大変お喜びになっていたぞ、陛下からは引き続き剣と盾を納品するよう
にと下知があったぞ！」

という、無情な言葉でした。

「仕方ない錬金するメンバーを増やそう」そう決心する僕なのでした。

ところで、今回の錬金騒動では意外な副産物がありました。

一つは、石から二酸化ケイ素を抽出（イクストラクト）する際に、結晶構造を思い浮かべながら行ったら、見事な水晶が出来上がったこと。
（はい、普通に抽出するのに飽きて来ていたんです。）
工夫すれば色つき水晶なども作れるかもしれません。

水晶の値段はピンキリなので、価格は何とも言えませんが、元手が掛からず水晶が
量産できれば、そこそこの収入になるでしょう。
もう一つは、これは全くの偶然なのですが、元素変換（コンバージョン）を始めた初期の頃に、
二酸化ケイ素を元素変換する際に魔力が少なすぎた為かケイ素のみがアルミに変化
して酸化アルミニウムを生成していたのです。
これが偶然結晶化してルビーやサファイアの様なコランダム系の宝石を生成して
いたのが発見できたのです。
出来た結晶は小さな物だったのですが、これを大きく純度が高く生成することが
出来れば、魔法宝石（マジックジュエル）として大々的に売り出そうと考えています。

とりあえず、出入の商人に水晶とルビーとサファイアを見せて品質の鑑定をして貰う
としましょう。
しかし、アルミ合金を持たせたまま何の連絡も無いのは気になる所ですね。変な事に
なっていなければ良いのですが。

第十話　ラスティン１０歳（元素周期表と錬金）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／０８／０９
誤字と改行が見難くなっていた部分を修正

外伝二話　我が家の若様（前書き）

外伝第二話ＵＰします。
今回は、あの人が語ってくれます。

外伝二話　我が家の若様

皆様お初にお目にかかります、レーネンベルク公爵家で執事を務めますリッチモンドと申します。

わたくし昔の名前をリッシュと申しまして、トリステイン王国の北東の端にあるデルフセイルという海に面した寒村に生まれました。
デルフセイルでは漁が盛んでしたが、漁獲量が年々減って行き住民は皆貧困に喘いでおり、男達は遠くの町へと出稼ぎにでておりました。
わたくしの父も漁で鍛えた腕っ節を買われて、傭兵として様々な戦場を回っておりました。
父には年に一度会えれば良い方でしたが、がっしりとした背中を今でも覚えております。
母は父にかわり漁に出ておりましたが、やはり収獲は減る一方だったようで、父からの仕送りで何とか生活を維持しておりました。

わたくしめが丁度7歳になった頃でございました、父が戦場で敵のメイジの魔法で殺されたという知らせを受けたのは。
仕送りが無くなり、母とわたくしは極貧の生活を過ごす事になりました。母は無理に漁にでて、終には体を壊し病の床に就いてしまいました。
生きることに絶望しかけた私達に意外な所から救いの手がもたらさ

れました。
父に助けられたという貴族の方の使いがみえて、毎月かなりのお金を援助してくれるようになったのでございます。
使いの方は、母の体を心配してもっと大きな町へ移り住むことを提案して下さいましたが、母は父との思い出の地を去るのを嫌い、デルフセイルでそのまま暮らして行くことになりました。

そのまま数年を過ごしましたが、母の病気は治らず、終には母までも帰らぬ人となってしまったのでございます。
当時わたくしめは１２歳の子供で、親類縁者も居らず途方に暮れておりました。
すると件の貴族の使いの方がみえて、わたくしに主の下で働かないかと提案してくださいました。
わたくしは辛い思い出だけが残るデルフセイルを後にして、その貴族様の下で働く事を決心いたしました。
その貴族様というのが、今は亡き大旦那様、前レーネンベルク公爵ベルナール様だったのでございます。

公爵家で働くと言っても、１２歳の子供に出来る事などたかがしれていると思っておりましたが、わたくしが命じられたのは、貴族の子弟が受けるような教育を受ける事でございました。

そんな状況を不安に思い、使いとして良く訪ねて来ていただいた執事のジル殿に、
何度も普通に働きたいと申し出ました。
その度にジル殿は、

「君の仕事は十分な知識と専門的な経験を積んで、一人前の大人になることだよ、
ベルナール様がそれを望まれているんだから、余計な心配をせず勉強に励んで成果を
見せておくれ、それがベルナール様を一番喜ばせることになるのだから」

といい、決してわたくしめに対する教育を止めることはしませんでした。

それから5年もたった頃です、一通りの教育を終えた私は今度は専門的な技術を習得
する為どんな職業に就きたいかと尋ねられました。
その時私は、これほど良くしてくれたベルナール様の恩に報いる為にジル殿のように
執事として働きたいと申し出ました。
これを聞いたベルナール様はわたくしめの手を取って、

「親子2代に渡って私を助けてくれるのか、本当にありがとう」

と言ってくださいました。わたしくしが、レーネンベルク公爵家で働く事を決めた
のを記念してベルナール様はわたくしに”リッチモンド”という名前を与えて下さい
ました。

それからわたくしは、ジル殿の下で執事見習いとして働くことになったのでございます。

わたくしは、当時の次期公爵のテオドラ様付きとなり、お目付け役としての仕事を任されました。

大変重要な役目を任されたことになりますが、テオドラ様の気性は穏やかで知性も高く、メイジとしての腕も確かだったので、大した苦労はございませんでした。

それから十数年があっという間に過ぎていきました。

ベルナール様は引退して家督をテオドラ様、今の旦那様にゆずり隠棲なさり、それに合わせてジル殿もレーネンベルクを去り、わたくしが屋敷の一切を任されることになったのでございます。

丁度この頃、私も妻子をもうけました。

それから更に十数年が経ち、旦那様に待望の第1子がお生まれになりました。

これが、若様、つまりラスティン様でございます。

前妻のアネット様との間には子宝に恵まれず死別することになり一時期かなり落ち込んで居られた旦那様も、新しい奥様と始めての息子を得て気力を取り戻した様子でございました。

しかし、幸福な家庭にも急に暗雲が立ち込めることとなったのでご

ざいます。
3歳を過ぎた頃から、突然若様が謎の病気に罹り、生死の境を彷徨う事となって
しまったのでございます。
このときは、わたくしめも懸命に看病いたしました。
聞いたこともない言葉を発しながら、うなされる若様を見ていることしか出来ない
自分に怒りさえ覚えた程でございました。
あらゆる治療法が試されましたがどれも効果を発揮せず、諦めるしか無いかと
思われた時、突然その病気は前触れも無く治ってしまったのでございます。

病気が完治してしばらくは、あの明るく可愛らしかった若様が暗く沈んでいる様子を
何度もお見かけしました。
何度か話しかけてみたのですが、何かを悩まれているという事以外は話して
下さりませんでした。

1月もすると悩み事が解決したのか、若様は以前の明るさを取り戻されました。
その後、旦那様から若様の悩み事に関して相談を受けたとき、若様が生まれる前の
記憶を持っているということを意外にすんなり受け入れられたのは、看病の時に
聞いた、知らない言葉を話す若様の声が耳を離れなかったからでございましょう。

以前の明るさを取り戻された若様は、積極的に勉学と体を動かす事

に力を入れ始め
られました。
書庫にある子供向けの本などはあっという間に読めるようになり、
知識も大人顔負け
なほど貪欲に吸収されて行きました。
私も質問されても答えられないことがあるほどです。
”らんにんぐ”？と称して屋敷の周りをぐるぐると走り回られるの
は、あまり貴族
らしくないので控えて頂きたいのです。
苦言を申し上げると”健全な精神は、健全な肉体に宿る”などと、
仰ってこれも
メイジとしての修行だと煙に撒かれてしまいます。
世話役兼護衛として雇ったメイジのメイドたちからも、護衛がしに
くいと苦情が
出てきて頭を悩ませることになっております。

５歳になった若様は、魔法を習い始めることになりました。
コモンマジックを教えるのは、旦那様も教わったマクスウェル元男
爵とのことです。
あの方の魔法を教える腕は確かですが、やり方が常識はずれなので
若様が怪我など
されないか心配な時間が続きました。
若様はコモンマジックをほぼ一年で習得されてしまいました。杖契
約の時もそう
でしたが、若様はメイジとして非凡な才能をお持ちなのかも知れま
せん。

その後、若様は系統魔法の修行に入られましたが、メイジでは無い
わたくしめには
分からない苦労を色々された様でございます。

土系統魔法の修行と称して、お屋敷の庭にある植物に良く魔法をかけておられました。
何でも杖の精霊が？植物に不足している栄養素を教えてくれるということで、植物の
世話に関しては、庭師の土メイジたちも舌を巻くほどでございました。
しかし、杖に向かって話しかけるの姿はあまり人には見せられない物でございます。

＞ｉ１６２７５―２０９０＜

そして、６歳になられた若様は、とんでもない事を始められました。
平民メイジを大規模に家臣に取り立て、メイジたちの力で領内の平民達の生活を
向上させようとしたのです。
平民メイジというのは、貴族のご落胤や、没落して爵位をなくした貴族、家督を
継げず家を放り出された貴族の子弟、そして彼らの子孫などのことをいいます。
今の時代、貴族の家臣として仕えている一部をのぞいて、平民メイジたちは一般の
平民にとって厄介者でしかないのです。
魔法という特別な力を持ちながら、何の権力も持てない彼らは、犯罪に走り易かった
のが原因でしょう。
その厄介者たちを集めて、一般の平民の為に働かせるという発想は異常とも言える
でしょう。
しかもそれを考えたのが、６歳の子供と言ったら誰も信じないと思われます。

若様の中では、貴族と平民という括りがなく、魔法の力で人々に貢献するメイジと
庇護される人々という認識があるのだけかもしれません。
貴族としては平民に比較的友好的なレーネンベルク公爵家の中でも異端と言っても
過言では無いでしょう。
しかし、旦那様もわたくしも前世の記憶を持つ若様をただの子供とは思っており
ませんでした。

案の定、若様の計画は、効果の面では大成功でした。
しかし、費用の面では公爵家に大幅な赤字をもたらすものでした。
公爵領の財政を一手に扱う家臣のセルジュ殿が屋敷を訪れる度に青い顔をしている
ことから、容易に分かることでございました。

この財政問題も、若様の発明した新式の剣と盾の王国への納入で何とか解決の目処が
立った様です。
レーネンベルク公爵家に仕えるものとして一安心といった所ですな。

若様に関して、一つ心配があるとすれば、同世代の友人がいないという点でしょうか？
ラ・ヴァリエール公爵家のエレオノール様とは、家柄も年も釣り合うので、かなり
親しくされている様ですが、同性の友人がいないというのは若様の人生にマイナスと
ならなければよいのですが。
若様がトリステイン魔法学院に入学されれば、親しい友人が出来るかもしれません、

それを期待しておきましょう。

それでは、我が家の”若様”の人生が幸福で有るように祈りながら、
ペンを置かせて
いただきます。

外伝二話　我が家の若様（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

レーネンベルク家の人々が、平民に対して偏見を持たない理由が分かって
頂けたでしょうか？

２０１０／９／１８
父に助けれた→父に助けられた
テオドラ様付きのとなり→テオドラ様付きとなり
悩まれているという事意外は→悩まれているという事以外は
答えれらない→答えられない
に修正

２０１１／１／５
こっそりイラスト追加

第十一話　ラスティン１０歳（大商人ローレンツ）（前書き）

第十一話ＵＰします。

今回、主人公は思わぬ人と出会うことになります。
この出会いは物語を大きく変えていくことになります。

第十一話　ラスティン１０歳（大商人ローレンツ）

王城へのジュラルミン盾とチタン剣の納品は、魔法学園と魔法兵団の方から増員を
行い１ヵ月で５０組をコンスタントに納品できる体勢にしました。
王城で剣と盾の評判を聞きつけた諸侯たちも購入の希望を伝えて来たそうなのですが、
現在では王国への納品で精一杯と言うことで、お断りしている状態です。
大幅な増産計画を立てなくてはなりませんね。

魔法兵団の計上していた華々しい？赤字も、ジュラルミン盾とチタン剣の納品で
十分な黒字化が見込める為、活動はそのまま続けていく方針となりました。
若手の土メイジの団員を、魔法学園へ留学させてガストンさんの元で錬金の腕を
磨かせる事も忘れていません。
土系統が扱える団員たちには、錬金の修行を励行していく予定です。
現在、魔法兵団の団員数は９００人ほど、今後の大幅なジュラルミン盾とチタン剣の
増産の事を考えると、もっと平民メイジの家臣を増やす必要があるんでしょうね。

そうだ、ジュラルミン盾とチタン剣を欲しがっている貴族たちに、剣と盾を無料で
渡す代わりに、彼らの領内にいる平民メイジとその家族を一組、レーネンベルク領へ
移住する許可を出してもらうと言うのはどうでしょう？

貴族以外のメイジを普通の平民と思っている彼らのことですから、
これはうまく行く
かもしれません。
でも、人選はしっかり行う必要はあるでしょうね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

ジュラルミン盾とチタン剣１００組の納品が済んでしばらくして、
アルミ合金を持ち
帰ってその売り先を検討すると言った出入の商人が、屋敷を訪ねて
きました。
てっきり、アルミ合金の商品価値を聞かせてくれるのかと思ってい
ると、
その商人は、

「うちの商会長が是非このアルミ合金ですか?、こちらの作成者に
お会いしたいと
申しておりまして、よろしければ作成者を紹介していただけないで
しょうか?」

と尋ねてきたのでした。

「ああ、それを作ったのは僕ですよ」

「若様がこれをお作りになったので！それでは是非うちの商会長と
会って頂けない
でしょうか?」

「魔法の授業の無い日は基本的に融通が利きますから、来週の今日

であれば問題
有りませんよ」

「ありがとうございます、商会長にはその様に伝えますので、よろしくお願い致します」

僕の返事を聞くと商人は急いで帰ろうとしていましたが、僕は彼を引き止めて錬金で作った宝石の鑑定を頼みました。

「確かにお預かりいたします。宝石の鑑定ならばそんなに日数は掛からないと思います」

そう言って商人は帰っていった。

その後、僕は出入の商人のことが気になったので、父上に彼のことを尋ねてみた。

「出入の商人？エドモンのことかな、彼はローレンツ商会に所属する商人でかなりのやり手だよ、うちの領内で不足している物などあると何処からか仕入れてきてそこそこの値段で売りさばいて、領民からは結構感謝されている人物だよ」

「ローレンツ商会というのは、どんな商会なのですか？」

「ローレンツ商会かい、ここ２０年ほどで急速に勢力を伸ばしてき

た大手の商会だな、
ハルケギニア中に販売網をもっていて、更にはエルフ達とも交易をしているという
噂も聞くな」

「父上はローレンツ商会の会長と会った事はありますか？」

「いいや、面識はないな、どうしてだい？」

「先程、エドモンさんがみえて、商会長さんが僕と会いたいと伝言されたらしいの
ですが、会って問題ないでしょうか？」

「特に問題はないが、くれぐれも変な契約を結んだり、知らない書類にサインしたり
するんじゃないぞ、相手は海千山千の大商人なんだからな」

「はい気をつけます、父上」

＝＝

そして約束の1週間後、予定通りエドモンさんを引き連れてローレンツ商会の会長
らしき人物が屋敷を訪ねて来た。
彼の見かけは５０歳半ば程の押しの強そうな、いかにも商人といった感じの外見
でした。
着ている服も上等なもので、確かに大きな商会の会長と言った風格もあります。

軽く挨拶をした後、早速本題に入った。

＞ｉ１６８７５―２０９０＜

「それでローレンツさん、僕に御用だということでしたが、どんなご用件なのでしょう？」

「レーネンベルクの若様は年に似合わず性急な方ですな」

そう言うと、不敵そうな微笑を浮かべていた顔を急に真剣な顔に変えると、こう
切り出して来たのでした。

「分かりました、率直にお聞きしましょう。あなたは”地球”，”ｅａｒｔｈ”，”日本”，”ＵＳＡ”，”イングランド”、そして”ゼロの使い魔”、これらの
言葉をご存知ですな？まだありますぞ続けましょうか？」

「いえ、もう結構です」

僕はそう言い返すことしかできませんでした。
まさかこの世界で、地球についての話を聞くことになるとは想像もしていませんでしたから。

「大分動揺されているようですな、こんな時は腹芸のひとつでも見せてみせないと
立派な公爵どころか一人前の商人にさえなれませんぞ、ははは」

ローレンツさんは可笑しそうに笑い出しました。

「分かりました認めます、僕は確かに前世の記憶を持っていますし、この世界が物語の中に存在することも認識しています。ローレンツさんも同じなんですね？」

「子供が素直なのは結構なことですな、それが３０年以上の記憶を持っている子供だったとしても。ところでひとつ間違っている事が御座いますぞ、ラスティン殿はこの世界が物語の中の世界だとおっしゃいましたな、それは間違いなのです。」

「え！それはどういうことですか？僕の知る限りこの世界の歴史は”ゼロの使い魔”の物語通りに進んでいると思うのですが？」

それだから僕は物語の片隅で不幸になっていく、見えない人々を救おうと思って行動してきたのに。

「なるほど、歴史は物語通りに進むですか、ラスティン殿にはそう見えているのかも知れませんな。しかし、我々”転生者”という異分子は”ゼロの使い魔”の中に出てきましたかな？この世界”ハルケギニア”がどの様に成り立っているかは分かりませんが、我々はこの世界で生き、これから起きるであろう歴史に干渉する手段を

持っているということは確かなのです！」

僕にとってローレンツさんの言葉は衝撃的でした。既に存在している物語に介入することが出来る？それが本当ならばこれから起こるであろうあの不幸で救い様のない戦争も回避することが可能かもしれないんだ。

「でも本当に物語（歴史）に干渉することは可能なのですか？矯正力の様なものが働いたりしないのですか？」

「ええ！歴史は変えられます、と言うより既に変わっているのですよ。ラスティン殿が気付いていないだけなのです」

「本当ですか、何処が変わっているんですか？」

「ラスティン殿がこの世界に深く関わっていけば、いずれ分かることです。それについては別の機会にお話しましょう」

不満は残りましたが、ローレンツさんの態度から何も聞き出せそうにありませんでした。少し話を変えてみましょう。

「そうですか、楽しみにしていましょう。ところで今日は僕に会うことだけが目的だったのですか？」

「いえ、ラスティン殿が再現されたアルミ合金についても話をさせて頂きたいと思っていますよ。ここからはローレンツ商会の会長としてお話しましょう」

そう言うとローレンツさんの雰囲気ががらっと変わりました。

「うちの商会の調査によると、チタン製の剣とジュラルミン製の盾をトリスティン王国に毎月相当数納めているそうですな、しかし十分とは言えず諸侯の方々までには行き渡っていないという報告を受けています。はっきり言って今の生産量では商売になりませんな。アルミ合金の希少度と有用性は評価に値しますが、ある程度価格を下げて、生産量を今のせめて１０倍にはしないと今後成長してくるであろうゲルマニアの鉄鋼業と勝負することは出来ないでしょうな」

ローレンツさんの言葉が胸に突き刺さります。元素変換を用いた錬金の問題点は生産性なんですよね。

単純にメイジの数を増やせば解決するという問題でない所が、もどかしさを感じさせます。

ラスティン冷静になるんだ、今がだめでも４年後や５年後はどうだ？２０倍とは言えないけど１０倍なら可能じゃないか？

「ローレンツさん、僕に５年の時間を貰えませんか？かならずロー

レンツさんの満足のいくアルミ合金の生産量を達成してしてしてみせますよ！」
「ほう5年ですか、良いでしょう5年以内に今の10倍のアルミ合金の生産量を達成できたのならローレンツ商会が全力でアルミ合金を流通させることを約束しましょう」

5年で10倍かこれが商人の交渉術なんだな、でも言ったからには実現しなければ僕個人の信用が暴落するんだろうな。
やるぞ、やってやるぞ！僕は大規模な平民メイジ招集計画を実行に移す決心をした。

ちなみにエドモンさんに鑑定を依頼した、水晶はかなり上質のものと鑑定されました。
ルビーとサファイアの方は品質が下から数えた方が早い程度との評価です。
まだまだ改良の余地がありそうですね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

物語（歴史）への介入が可能であれば、いまならぎりぎりで”ダングルテールの虐殺”を阻止出来るかもしれないです。
とりあえず、魔法兵団の腕利きをダングルテールに配備しましょう。
虐殺の名目は疫病だったはずです、”アムリタの雫”を大量に備蓄しておけば、疫病

を名目とした焼き討ちの牽制になるかも知れません、至急手配しましょう。
父上にお願いして、魔法研究所実験小隊の解散を進言してもらうのも忘れてはいけませんね。

あと介入出来そうなのは、ラグドリアン湖に関する物ですね。
母上を通じて、水の精霊の秘法”アンドバリの指輪”が盗まれる危険性を指摘しておきましょう。
あと干拓事業も失敗する可能性があるので、止めておくように忠告しておいて貰いましょう、母上の実家が財政危機に陥るといった状況は歓迎したくないですから。

第十一話　ラスティン１０歳（大商人ローレンツ）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／９／１８
分かりました率直にお聞きしましょう、→分かりました、率直にお聞きしましょう。
起きるでろう→起きるであろう
連金の問題点は→錬金の問題点は
に修正

さて、久々に読者さんに挑戦のコーナーです。商人ローレンツがアルミ合金を
流通させようとしているのは、どんな業界でしょうか？

２０１１／１／１６
イラスト追加

第十二話　ラスティン１０歳（婚約）（前書き）

第十二話ＵＰします。

今回は副題通りのお話です、お相手はもちろんあの方です。

第十二話　ラスティン10歳（婚約）

アルミ合金大量生産の前準備として、まず魔法学園ではガストンさんに活躍をお願いして、一人でも多くの抽出と結合（イクストラクョンポーズ）の使い手を養成してもらうことにしました。

魔法兵団の土メイジたちには、毎日元素変換（コンバージョン）を練習させ、元素変換（コンバージョン）の効率（フォーム）を少しでも高めてもらう事にしました。

成形の練習も忘れてはいけませんね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝

平民メイジ招集計画ですが、各地の領主にジュラルミン盾とチタン剣を渡す替わりに領内の平民メイジをレーネンベルク領へ移住する許可を出して貰えないかと交渉を持ちかけた所、ほとんどの領主がこれを喜んで了承してくれました。

平民メイジ達を領地の財産と考えている僕に、とって彼らが容易に提案に乗ってくることが信じられませんでした。

このことを、魔法兵団長のマティアスに尋ねてみると、

「基本的に貴族の方々は平民メイジを厄介者と思っていますからね。それに領民が移住することを禁止する法律などがある訳でもないですし。魔法兵団の国内での評判も上々ですから、勝手に出て行かれる位なら貰えるものなら貰っておけという心理なのではないでしょうか？」

という返答が返ってきた。試しに、

「トリスティン王国の国民が他国へ移住したり、他国の国民がトリ

ステイン王国に移住することは可能なの？」

と尋ねてみると、

「国境警備はザルですからね、街道でもきちんと入国税を払えば入出国は自由ですし、街道を通らなければそれこそ規制をかけることさえ出来ませんからね」

とこれまた軽い返答が返ってきました。

他国の平民メイジを雇うというのもいいかもしれません。現在は国内の平民メイジの力を一つに纏める事の方が優先ですが、将来的にはハルケギニア中の平民メイジの力を纏めて、大きな事業などやる計画を立てる事もあるかもしれません。

おっと思考が横道に逸れてしまいましたね。

今は、国内の平民メイジを集める事を重点に考えて行きましょう。募集するメイジの最低条件は錬金が出来ることですね、あとは人格面が信用出来ることも大事ですね。ごろつきの集団を団員にしたくはないですからね。錬金の腕前以外にも、人格面を試す試験？見たいな物を追加したほうが良いのかもしれません。

何か良いアイデアが浮かぶと良いのですが。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝

魔法宝石（マジックジュエル）に関しては、まず上質と評価を受けた水晶を売り出そうと思います。

無色透明の水晶だけでは、あまり流行りそうもないので、無色透明の水晶に色々な元素（コンポーズ）を結合させてみました。

・鉄で紫水晶（アメシスト）、黄水晶（シトリン）
・マンガンで紅水晶（ローズクォーツ）
・アルミニウムで煙水晶（スモーキークォーツ）、黒水晶（モリオン）
・銅で緑水晶（グリーンクォーツ）
・チタンで青水晶（ブルークォーツ）

と色々なバリエーションを作り出しました。

販売に関してですが、ローレンツ商会の力を借りずに貴族同士の口コミで販売経路を広げることにしました。
手段としてはまず母上に、銀の台座に大き目のアメシストをあしらったブローチを付けて、色々な夜会や舞踏会に参加していただき、ブローチについて聞かれたらさりげなく僕の名前を出してくれるようにお願いしました。
母上の銀髪にアメシストのブローチは実に映えたので、魔法宝石（マジックジュエル）の注文が絶対来ると信じています。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝

そろそろ、エレオノール8歳の誕生日です。
僕も10歳になったことですし、例年のおもちゃやお菓子などではなくちょっと背伸びしたプレゼントをしたいと思います。
トリスティンまで足を伸ばしての宝飾店で目ぼしいアクセサリを探してみたり、商人のエドモンさんに頼んでアクセサリーを作る職人さんを紹介してもらったりしました。しかし何か違うという感じが心から離れず結局プレゼントが決まりませんでした。

結局、手持ちの宝石などで僕なりの気持ちを込めたプレゼントをすることにしました。僕が錬金抽出できる最高の金属の銀と、あまり

評価の良くなかったルビーとサファイアを使って指輪を成形（フォーム）することにしました。（ネックレスなどは、細工が細かすぎて今の僕には無理でした。）

試行錯誤の末、銀の指輪に薔薇を浮き彫りにして、その左右にこの世界の月をイメージしたルビーとサファイアを配した簡素な指輪が完成しました。

（銀は化学変化をおこしやすいので、速攻で固定化（フィックス）します）

今の僕にはこれが精一杯です、エレオノール嬢はがっかりするかもしれませんが、今の僕の最高の誠意を表した物と思ってくれたら良いと思います。

さあ、明日のラ・ヴァリエール家での誕生パーティに備えて今日は早く休み事にしましょう。

翌日、馬車でラ・ヴァリエール家の屋敷を訪れると、沢山の貴族たちがエレオノールの誕生パーティに出席していました。羽振りのいい貴族は大粒のルビーのネックレスなどをプレゼントしていました。

（こんな状況では僕のプレゼントなんて霞んでしまいますね）

もやもやした気持ちを抱えながら、僕がプレゼントを渡す番になってしまいました。僕はおずおずと、エレオノールに銀の指輪を差し出しました。

「これが今の僕に出来る最高のプレゼントだよ、エレオノール」

「スティン兄様、これはもしかしてお兄様ご自身で作ってくれたものですの？」

「うん、そうだよ出来が悪くて申し訳ないんだけれど」

「いいえ、スティン兄様がご自身の手で作って貰った物を頂けるだけでエレオノールは幸せです」

拙い指輪だったけど、エレオノールには意外と好評でした。

「兄様の手で嵌めて頂けますか？」

そう言って、エレオノールは僕に左手を差し出してきました。ぼくはぎこちなくエレオノールの手をとると、彼女の指に指輪を嵌めようとしました。

最初は人差し指に嵌めようとしたんですけど、小さすぎて嵌りませんでした。考えてみれば、指輪のサイズなんて気にしていませんでした。次は小指に試しましたがこれはぶかぶかでした。薬指に試すと丁度良く嵌りました、一安心です。

その様子を見ていた、ラ・ヴァリエール公爵は、

「ラスティン殿は早熟ですな、もう家のエレオノールにプロポーズするとは！」

と言い出し、我が家の両親もそれに悪乗りして、いつの間にか僕とエレオノールの婚約が成立してしまいました。（最初は冗談だと思ったんですけど意外とどちらの両親とも本気の様です。）

「１０歳の男子と８歳の女子の婚約なんて非常識です」

と主張してみましたが、貴族間ではそんなに珍しい事ではないと言われると断りにくいです。

それに加えてエレオノールが、

「スティン兄様は、私と婚約することがお嫌なのですか？」

と涙を浮かべて尋ねて来たので僕は白旗を上げるしかなかったです。
（まだエレオノールは婚約の意味分かっていないんだろうな）

こうして僕は、ラ・ヴァリエール公爵家息女エレオノールの婚約者になってしまったのでした。

第十二話　ラスティン１０歳（婚約）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

今回から、改行を極力入れないで文章を書くようにします。読みにくいようでしたら、ご意見ください。今までの書き方に戻します。

２０１０／０８／１５
誤字、句読点などを修正

第十三話　ラスティン１２歳（怪我の功名）（前書き）

第十三話ＵＰいたします。

読み返してみると、ご都合主義だな～とか思ってしまいますが、気にしない方はぜひ読み進めてみて下さい。

今回は、あとがきも、必ず読んでくださいね！

第十三話　ラスティン12歳（怪我の功名）

あれから2年が経ちました。

僕個人としては目出度くトライアングルメイジに昇格しました。やはり得意なのは土と水で、火と風はまだまだドットクラスです。

て、エレオノールと会ったりもしています。彼女が僕の事を本当に好きなのかは、いまだ不明ですが、会いに行く度に「スティン兄様♪」と慕ってくれているのは確かなようです。

一応婚約したということで、頻繁にラ・ヴァリエール公爵家を尋ね

ところで、エレオノールには物語の通り妹のカトレアがいますが、まだ7歳ですから体が丈夫そうには見えませんが、謎の奇病は発病していないようです。現時点では手の出しようはありませんが、もし物語通り発病したら、何とか助けてあげたいと思っています。

来年位には、ルイズが生まれるのでしょうか？不安なような楽しみなような不思議な気分です。

＝＝

物語（歴史）への介入は、一応成功しました。

”ダングルテールの虐殺”は実際、起こらなかったですが、僕が打った手がうまく行ったという感触ではありませんでした。なぜなら、ダングルテールに新教徒と呼ばれる人々がいる形跡が見られなかったからです。もしかするとこれは既に、ローレンツさんが物語（歴史）への介入した結果なのかもしれません。

銃士隊隊長となるはずのアニエス嬢は、ダングルテールで元気に暮らしているそうです。

魔法研究所実験小隊は解散となり、ジャン・コルベール氏はどういった経緯か、物語（歴史）通りトリスティン魔法学院の教師に収まったそうです。

ラグドリアン湖周辺に関しては様子を見ていくしかないようです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

魔法学園の運営の方は極めて順調です、この2年で抽出と結合（イクストラクョンポーズ）の使い手が魔法兵団の方に150人以上増員されました。ジュラルミン盾とチタン剣の生産量も5倍以上に増え、王城だけではなく有力諸侯にまで出回るようになりました。

平民メイジ招集計画ですが、ジュラルミン盾とチタン剣の増産が可能になったので、こちらも順調です。
レーネンベルク領への移住希望者、レーネンベルク魔法兵団への加入希望者が続出して、受け入れの係りの者たちに悲鳴を上げさせています。
移住希望のメイジたちには、試験を受けてもらっています。内容は、
1．簡単な常識を調べるもの
2．各系統魔法の実力を調べるもの
3．錬金の才能を調べるもの
4．兵団団長、副団長、各隊長クラスによる面接
5．人格を見るための簡単なテスト
です。
1~4は問題ないのですが、5は僕が我侭を言って追加された内容です。
5のテスト自体は本当に簡単な物で例えば、

・試験を受けている受験者が待合室で待っている最中に、召使に扮した団員がお茶を出すふりをして、わざとお茶を溢させます。その時の対応で人柄をはかる。
・試験が終わった帰り道に、病人を装った団員に声を掛けさせ、その時の対応をチェックする

等です。

子供だましですが、緊張していたり、緊張が緩んでいる状態だと意外とその人物の本性が見えたりします。1．4．5は基準を満たしていなければ、どんなに魔法に長けていても、不合格としました。魔法兵団の理念に相容れないと思えるからです。

それでも、結構な数の合格者がでました。魔法に長けている合格者は、そのまま魔法兵団の活動に参加してもらいます。魔法があまり得意ではない、合格者は魔法学園で短期講習を受けてもらい、基準に達した後、魔法兵団に合流してもらいます。

合格した平民メイジたちの子弟も、レーネンベルク領に移住して来る訳で、当然彼らはレーネンベルク魔法学園に入学します。学園の大幅な増築や、教師役のメイジの確保も考えておかなくてはなりませんね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

魔法宝石（マジックジュエル）に関してですが、こちらはまずまず順調と言って良いでしょう。

偶然できた、ルビーとサファイアも今では高品質の物が、自由に錬金することが可能になりました。品質はほぼ天然の物と変わらず、大きさは数倍の物が容易に作れる状態です。

手順は、

1．買い取った石から二酸化ケイ素を抽出（イクストラクト）する
2．生成した二酸化ケイ素のケイ素部分だけを元素変換（コンバージョン）して、アルミナを
　生成する
3．生成したアルミナを更に結晶構造をイメージしながら抽出（イクストラクト）して、
　透明度の高いコランダム（鋼玉）を生成する
4．生成したコランダムに不純物としてクロム，鉄，チタン等を加え、結合（コンポーズ）して
　ルビーとサファイアを生成する

の4工程です。
生成できるサファイアは加える不純物を工夫して、青だけではなく緑や黄色や紫といった、バリエーションも水晶のときと同様に用意しました。

2，3の工程はコツがいるので、今のところ僕だけがこの錬金を行えます。この辺りのコツは今の所、誰にも教えるつもりはありません。価格の下落を抑えるのは勿論、少し考えている案がある為です。

売れ行きは、まだまだそこそこと言った所ですが、社交界では密かな人気になりつつあるようです。母上から紹介されて魔法宝石（マジックジュエル）を買いに来る方も順調に増えています。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝

上でもお話した通り諸侯領からの平民メイジの引き抜きは順調に進んでいると思います。でも何かが足りません、やはり魔力の枯渇を気にしながらの錬金ではそれぞれのメイジが十分な能力を発揮出来ないのが問題なのでしょう。

僕は母上に魔力を回復する魔法薬が無いのかと相談してみました。しかし返事は予想外のものでした。魔力を回復する魔法薬が無いのかと母上に尋ねると、母上は顔色を変えて僕の目を見つめながら、教えてくれました。

「魔力回復薬は存在するわ、でもそれはメイジにとってタブーなの。魔力回復薬の原料となるのは、エミルタの実と呼ばれる木の実なの、でもこの木の実には強い常習性があって、使いすぎると周囲の状況に関係なく狂った様に魔法を連打して、終には廃人と化してしまうメイジにとっては毒薬に等しい魔法薬なの。あなたもエミルタの実にはくれぐれも関わらないように注意なさい！」

こう母上に釘をさされ、ぼくはすごすごと自室へ戻っていきました。そうだ、植物のことなら木の精霊でもある杖精霊ニルヴァーナに聞けば何か分かるかもしれません。そう思って部屋に戻ると早速ニルヴァーナに話しかけます。

「ニルヴァーナ、今の話聞いていたかい？」

「はい、人がエミルタと呼ぶ木のことは知っていますよ、ですがその実が人に及ぼす効果までは知りませんでした」

「ということは、メイジが摂取すると魔力が回復する植物を知らな

い？って聞いてもやっぱり分からないんだよね？」

なんだ、良い考えだと思ったのに、意外と使えな・・・

「ラ～ス～ティ～ン！、今何か失礼なこと考えてなかったですか？」

「いや、そんなことはないよ」

「それなら良いのですが」

危ない危ない、使い魔でもないのに考えていることが伝わってるのかと思いました。でも、そうですよね、植物達にとって、自分の実や葉が人間にどんな影響を与えるかなんて分からないでしょうからね。魔力回復薬についてはしばらく棚上げして置くしかないですね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そう思ってから2ヶ月後、意外な所から突破口が開けました。全然話は変わりますが、僕の趣味は休日に山に登って変わった鉱石を見つけて来ては、その成分の分析を行うというものです。薬草も見つかるので一石二鳥ですね。

”アムリタの雫”の材料も沢山手に入ります。

ある虚無の曜日、僕はいつも通り馬で屋敷から少し離れた村まで移動して、山に分け入って鉱石の採取を行っていました。すると突然天候が急変して、土砂降りの雨となってしまいました。水を弾く呪文を唱えながら、山の中を彷徨っていると突然崖に行き当ってしまいました。気付かずに転落しそうになりましたが、レビテーションの呪文を咄嗟に唱えて事なきを得ました。

しかし、完全に道に迷ってしまって僕は、冷たい雨の中また暫く彷徨うことになってしまいました。そんな中、偶然一軒の民家にたどり着くことができたのは幸運と言って良いでしょう。その民家には一人の老婆が住んでいました、一晩の宿を頼むと快く引き受けてくれました。

「こんなあばら屋に貴族様をお泊めするなんて、一生で一度のことなんでしょうね」

と老婆は逆に有難がっています。

「何もない小屋ですが、穀物の雑炊とお茶を用意しましただ、ぜひお召し上がりください」

「そういって老婆（マルトさんという名前らしい）は穀物粥と見たことの無いお茶を振舞ってくれた。」

穀物粥は僕も非常食として食べた事のある稗や粟を主体としたものでした。お茶の方は今まで飲んだことのないすっきりとした飲み口のお茶で、雨の中を長時間彷徨った疲労がゆっくりと癒されていく感じが印象に残りました。客間らしき部屋で一泊すると体力はもちろん魔力まで回復していることに気付いて驚きました。
原因はあのお茶にあるとみて、マルトさんに尋ねてみましたが、どうやらこの辺りの平民の間では一般的に飲まれているお茶（ある種のハーブティー）らしいです。マルトさんに尋ねてみると、ハーブティーの原料となっているのは、この山（ミネスト山と呼ばれています）に自生する野草らしいです。ハーブティーの原料となったハーブを少量分けてもらって翌日屋敷に帰って魔法薬にしてみると、メイジの自然魔力回復力を助ける働きがあることが分かりました。

その主成分である薬草をマカカ草と名付け、ニルヴァーナに助言を受けながら大量に栽培することにしました。ミネスト山に水メイジと土メイジを派遣して大量生産の体制を整えました。

マカカ草を主成分とした、魔法薬を魔力回復補助薬”シフの涙”と名付けて特に魔力枯渇が激しいメイジに与えることにすると、錬金の効率が飛躍的に向上しました。マカカ草を含むハーブティを飲んで一晩休むだけでも、全魔力の１／３程度の魔力の回復が認められ、限界まで錬金→魔力が枯渇→ハーブティを飲み一晩休む→魔力が回復する→限界まで錬金のループが完成して、魔力強化の仕組みが出来上がりました。

ローレンツさんとの約束の3年後までにどれくらい生産力を上げられるか楽しみです。

第十三話　ラスティン１２歳（怪我の功名）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

＊以下重要です！
この作品の中では、魔法は使えば使うほど上達し、限界まで魔力を消費すると総魔力の容量が少し増加します。
裏技として、メイジは臨死体験をすると大幅に総魔力の容量が増加します、つまり3歳の頃何度も生死の境を彷徨ったラスティンは人並み外れた総魔力の容量を誇ります。
魔力と総魔力の容量の関係は、水槽とポンプを想像して下さい。魔法を使えば使うほど、ポンプが強力になっていくイメージです、これがメイジのランクに比例します。
どんなに強力なポンプでも水槽が空になれば水を吸い上げることはできません、水槽が総魔力の容量に相当します。
総魔力の回復は通常１週間以上（人によっては１ヶ月）掛かりますが、マカカの葉の利用によりこの期間を劇的に短縮できます。
これらによってレーネンベルクのメイジ達は飛躍的にその腕を上げて行きます。
＊＊＊
またまた読者さんに挑戦です、次回はラスティンとエレオノールが○△□×してしまいます。さて○△□×とは何でしょう？（１８禁的展開じゃないですよ、もちろん＾＾；）回答お待ちしています。

２０１０／９／１８
僕個人といては－＜僕個人としては

不安な様な一＜不安なような

第十四話　ラスティン１３歳（婚約解消）（前書き）

第十四話ＵＰします。

今回も副題通りのお話です。

第十四話　ラスティン１３歳（婚約解消）

僕は１３歳になりました。１０歳の頃から始めた、元素周期表の元素を元素変換（コンバージョン）で再現する作業ですが、原子番号８０の水銀まで生成できるようになりました。（何度も元素変換（コンバージョン）を重ねかけしてやっとの思いで作りました。）

これを期に、王立魔法研究所に元素周期表とそのサンプルを提出した所、かなりの評価を受けた様で、＞元素＜の二つ名を付けられました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

マカカの草を利用した魔力回復方法を発見してから、１年弱が経ちました。ジュラルミン盾とチタン剣の生産量はうなぎ登りで、今では中流の貴族達の手にも渡る様になりました。そこでふと疑問に思ったことがあったので、魔法兵団長のマティアスに尋ねてみました。

「なんでメイジが剣や盾を欲しがるんだろうね？」

「何をいまさら尋ねるんですか、戦争になると平民の兵士は貴族達にとっての盾なのです。呪文を唱えている間に敵からの攻撃を防御しなくてはなりませんし、もし戦場で魔力が枯渇したら、平民の兵士に守られながら後方に下がることになります。平民の兵士たちが、強力な剣や盾で武装させることは、貴族にとって自分の命を守る事と同義なのです」

「なるほど、そういう訳があったんだね」

平民メイジ招集計画の方も順調で、現在レーネンベルク魔法兵団には４０００人近い平民メイジが所属しています。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

魔法宝石（マジックジュエル）に関してですが、こちらは極めて順調です。

最初に売り出しを始めた色つき水晶も含めて色々な貴族に高い価格設定にも関わらず飛ぶように売れていきます。やはり最初に母上に、社交場でアピールしてもらったのが効いたのでしょうか。今では夜会や舞踏会などには、魔法宝石（マジックジュエル）の一つでも身に着けていないと流行遅れとまで、言われる様になっているそうです。

販売は基本的に注文生産の方式を取っています。
・どの宝石をどの大きさで使うか？
・どんなカットにするか
・どんな装飾品にするか？
・どんなデザインにするか？
等を聞き取り、宝石の部分は自分で用意します。鎖や台座や指輪の本体は、兵団の土メイジの中でもデザイン力があるものを選んでとりあえずアルミで成形（フォーム）させます。デザインを数種類用意して、注文した方に実際に見て選んで貰い、最後に実際の材料の金銀などで成形（フォーム）し宝石を組み込んでレーネンベルク製魔法宝石（マジックジュエル）を使ったアクセサリーの完成です。
ブランド名を母上の名前からいただいて”リリア”としてみました。実際に数百～数千エキューで販売していますが、何十人も予約待ち方がみえる程の売れ行きです。

材料となる金，銀，プラチナも、魔法兵団のトライアングルメイジ

たちが全力で元素変換（コンバージョン）することで、大量にとはいきませんが、かなりの量が生成可能となっています。魔力が枯渇するまで元素変換（コンバージョン）しても、”シフの涙”を使えば翌日には２／３ほど魔力が回復しているので、どんどん元素変換（コンバージョン）出来るのが強みですね。

次はダイヤモンドでも、錬金してみましょうか？　原料は炭素ですから、意外と簡単そうなんですよね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

それはエレオノール１１歳の誕生パーティーでの出来事でした。
僕は一応エレオノールの婚約者として、エレオノールの隣の席で食事を楽しんでいました。
１人のメイドが甲斐甲斐しく世話をしてくれています。そのメイドが空いた皿を片付けようとテーブルに手を伸ばした時、偶然体勢を崩して僕の近くに置いてあったワイングラスを倒してしまいました。
運悪くグラスは僕の方に倒れてきたので、僕の服には大きく赤ワインの染みが出来てしまいました。
僕は落ち着いて水魔法を使って、服に染み込んだ赤ワインを近くにあったコップに搾り出しました。

「申し訳ありませんでした、ラスティン様」

何度も頭を下げて謝るメイドさんに僕は、
「問題ありませんよ、ほら服も濡れていないですし、染みにもなっていませんから」
と優しく声をかけ、謝罪を受け入れました。普通であれば、これで

決着が付くはずでした、しかし隣に座っていたエレオノールが突然怒り出し、

「スティン兄様になんて失礼を、あなたなんてこの屋敷には必要ないわ、今すぐ荷物をまとめて出て行きなさい」

と声を荒らげながら、メイドさんを頬をぶったのでした。その時僕は何とも言えない感情を感じました、一番近いのは怒りでしょうか？それとも失望でしょうか？

僕はエレオノールを無視して、そのメイドさんの手を引いてパーティー会場を出ると、近くの空いている部屋に連れていきました。

「君、大丈夫でしたか？」

僕が声をかけると、ぶたれたことに驚いて放心していたメイドさんは我に返って、

「ラスティン様、私の事は心配なさらず、エレオノールの所へお戻り下さい」

「いいえ、今はダメです。それより怪我とかはしていませんか？頬が赤いですね、治癒魔法をかけますから動かないでください」

僕がメイドさんに簡単な水魔法をかけると、頬の腫れはすぐに治まったようです。

「もう大丈夫のようですね、もしまだ何かあるようでしたら、レーネンベルクの屋敷まで訪ねてきてください、この指輪を見せれば面会できるように手配しておきますから」

そう言ってレーネンベルク家の紋章入りの指輪を彼女に渡します。

「ありがとうございます」

「そういえば、名前を聞いていませんでしたね」

「ミレーユと申します」

「ではミレーユさん僕はこのまま帰りますので、父上か母上に伝言をお願いします」

「え！パーティーはよろしいのですか？」

「ええ、今のままエレオノールに会ったら何を言ってしまうか分かりませんから」

それだけ言って、僕はラ・ヴァリエール家の屋敷を出ました。それから厩舎へ行き、馬を一頭借りてそのままレーネンベルクの屋敷まで夜道をひた走ったのでした。

夜半に屋敷に帰り着くと、門番に馬を預けそのまま自分の部屋に戻り、ベッドに仰向けになりました。

部屋の外からは、急な帰宅に驚いた、リッチモンドが声をかけてきましたが、何でもないと返事をして、そのままベッドに横たわっています。

あれから何時間も経ったのに心が波立つ感じが治まりません。自分が何に怒って何に失望したか、その正体も掴めないままです。

僕も、もう理想を振りかざすだけの、子供ではありません。他所の貴族の屋敷では、使用人が失敗をしただけで鞭打ちを行うような貴

族がいる
ということも分かっていますし、ひどい失敗をすれば解雇になることがあることも頭では理解出来ています。その理解に感情が付いてきていない自覚があります。

起こった事件をもう一度振り返ってみましょう。
パーティーで給仕をやっていたメイドさん（ミレーユさん）がミスをして、ワイングラスを倒してしまい、その中身が僕の服を汚してしまいました。それに対する僕の対応は、水魔法で染み込んだワインを搾り出して、汚れを落とし、お咎めなしという風に話をもって行こうとしました。
ですが、エレオノールが急に怒り出し、メイドさんを叩いて、首にすると言い放ったのでした。

改めて考えても、これほど僕が動揺する要素があるとは思えません。いや、自分に嘘をつくのは止めましょう、”メイドさんを叩いて、首にすると言い放った”のがエレオノールだったから、ここまで心が乱れているのでしょう。他の誰か、例えばラ・ヴァリエール公爵夫人が同じことをしたとしてもここまで動揺はしなかったでしょう。こう考えてみると、僕はエレオノールのことが本当に好きだったんだということに始めて気付かされました。

「僕の初恋は、気付いた時には終わってしまったんだな」

僕は声に出して、その事実を噛み締めます。今夜は眠れそうにありません、今後のことを考えておきましょう。

＝＝

翌日父上が屋敷に戻って来ると、僕は早速父上に会いに行き、

「エレオノールとの婚約を解消したいのですが、婚約は正式な物だったのですか？」

と切り出した。突然の申し出に父上は驚いた様子で暫く黙っていましたが、

「いや、婚約と言ってもラ・ヴァリエール公爵との口約束の様なものだ、お前もエレオノール嬢も名誉が傷付いたりはしないな。しかしどうしたんだ急に、お前はエレオノール嬢を気に入っていたんだと思っていたが？」

僕は昨日あったことを残らず父上に話しました。

「そうか、しかしそれくらいのことは貴族の家なら何処でも起こる事だぞ、我が家が特殊と言っていいくらいだ」

「それは分かっています、でも僕はこの屋敷の人たちを家族と思っています。もしエレオノールが嫁いできて、彼らを虐げるような事になったらと考えると、とても婚約を維持することは出来ません」

「ふむ、そんな考え方ではお前に嫁いでくる貴族の女性は居ないかもしれないぞ」

「そのときは優しい平民メイジの女性を、何処かの貴族の養女にでもしていただいて、お嫁さんとして迎え入れることにしますよ」

「そこまで考えていたか、決心は固いんだな？」

「はい、父上！」

「いいだろう、ラ・ヴァリエール公爵には、私の方から婚約破棄と謝罪の手紙を書くことにしよう。ラスティンお前は、エレオノール嬢に謝罪の手紙を書くんだぞ、多分一番傷付くのはエレオノール嬢なのだからな」

「はい」

僕はそう言って、父上の書斎を出ます。エレオノールに対する謝罪の手紙か、何て書けばいいんだろう？

僕はエレオノールに対する謝罪の手紙の内容を考えながら部屋に戻りました。その時、父上も僕も大事な事を見落としていることに気付いていませんでした。

第十四話　ラスティン１３歳（婚約解消）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

ついに破局を迎えてしまった、二人の仲はどうなって行くのでしょう？
次回は主人公があの方と決闘します。

ちなみに主人公は反抗期に入っていて、自分の感情をうまくコントロール出来ていません。

２０１０／９／１８
第十四話
何時間の経ったのに↓何時間も経ったのに
それは分かっています、僕は↓それは分かっています。でも、僕は
迎い入れる↓迎え入れる

第十五話　ラスティン１３歳（決闘）（前書き）

第十五話ＵＰします。

今回は初の戦闘シーン有りです。出来は残念なものですので、最悪読んで頂かなくても次話を読んでいただければ話は繋がると思います。

第十五話　ラスティン13歳（決闘）

婚約解消が決まってから、1，2日の間にレーネンベルク家とラ・ヴァリエール家の間を何往復も使者が行きかうことになりました。
やはりラ・ヴァリエール家では婚約解消は晴天の霹靂だったのでしょう。
しかし、3日目になるとラ・ヴァリエール家からの使者がぱったり来なくなりました。やっと納得してくれたのかと思った矢先、その女性は文字通り風と共にレーネンベルク家を襲来しました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

その時僕は、自室の机の前でエレオノールに送る謝罪の為の手紙に悪戦苦闘していました。するとと突然ノックも無しに執事のリッチモンドが部屋に転がり込むように入って来て、ラ・ヴァリエール公爵夫人カリーヌ様がおいでになられて、僕に会いたがっていると慌てながら教えてくれました。
それと、今回は母上も敵だという謎の忠告も付いていました、何でしょうね？
直接乗り込んで来るなんて、間違いなく婚約解消を撤回させる気なんでしょうね。僕は仕方なくカリーヌ様の居る応接間に向かいました。

「ラスティンです」

と言ってドアをノックすると、すぐに父上から入るように言われました。失礼しますといって一歩応接間に入ると、そこは戦場の様な空気に包まれていました。（いえ、実際は戦場に行った事などない

のですが）
情勢をみるとカリーヌ様と母上が、一方的に父上を攻め立てているようです。どうやら僕は父上側の援軍らしいのですが、何故母上まで攻撃に参加しているのでしょうか？とりあえず、探りを入れてみましょう。

「ラ・ヴァリエール公爵夫人、僕に何か御用とお聞きしましたが、どのような御用でしょうか？」

「今日はラ・ヴァリエール公爵夫人としてではなく、1人の娘の母としてこちらに参りました。カリーヌとお呼び下さいラスティン殿」

なるほど、貴族の体面としては、口約束の婚約の解消に謝罪としてかなりのお金を渡したので、文句の付け様が無かった訳ですね。

「そうですかそれではカリーヌ様、今日はどの様なご用件でしょう？」

「白々しいですねラスティン殿、エレオノールとの婚約解消のことです！」

「でしょうね、それではカリーヌ様はどうなさりたいのですか？」

「婚約の解消を撤回してもらいましょうか！」

ついに我慢できなくなったのか、公爵夫人は立ち上がって叫びました。

「何故ですか、僕は自分なりにエレオノールの事を考えて婚約の解消を選択しました。理由も無く選択を覆せるはずが無いでしょう」

「娘が泣いているのを黙って見ていられる母親などいません、それだけで理由は十分です。どうしても撤回できないというなら、力ずくでも撤回させて見せます！」

この言葉を聞いた僕は、今までの冷静な態度を忘れ、思わずカッとなってしまいました。この女性がもっと優しい女性だったなら、エレオノールももっと優しい性格になったんだろうと思うと我慢が出来ませんでした。（ほとんど八つ当たりですね）

「いいでしょう受けて立ちます、でも力ずくでは僕は自分の考えを変えられませんよ」

すると、父上と母上が慌てた様に僕達を止めに入りました。

「ラスティン、相手はあの”烈風カリン”だぞ、お前では経験も力も不足だ、大怪我をするぞ止めておけ！」

「カリーヌ、貴方今がどんな時か分かっているの？もしものことがあったら大変だわ止しなさい！」

母上、息子が大怪我するかも知れないのに相手の心配するんですね（泣）。

「公爵殿、ちゃんと手加減をするから心配はご無用に。リリア、私が貴方の息子に遅れを取ると思いますか？」

公爵夫人はそう言って、両親を黙らせてしまいました。どうやら完全に逃げ道は塞がれた様です、こうなったらやるしかありませんね。

「場所は屋敷の外の裏手にある空き地でどうですか？」

「それでいいのですか？野外では風メイジの私にかなり有利ですよ？」

それは確かです。

”水メイジと水辺で戦うな！”

”火メイジとは水辺で戦え！”

”土メイジとは土の上では戦うな！”

”風メイジとは閉鎖された空間で戦え！”

というのが、僕の家庭教師たちが声を合わせて、教えてくれたことです。

「空き地なんですから土はむき出しです、土メイジの僕にとっても有利な場所ですよ」

「結構です、そう思うなら、その場所に案内しなさい」

僕達は屋敷を出て、裏の空き地に向かいます。

その間に僕は必死で作戦を考えます。魔法兵団の人たちと模擬戦という形で少しは戦闘を経験している僕ですが、本気の決闘などという物はやったことがありません。勝機があるとすれば、公爵夫人が手を抜いてくれるということ、そして格下のトライアングルメイジであり１３歳の少年だと思って油断している所でしょうか？

丁度作戦を考え終わった頃に、決闘場所となる空き地に到着しました。

まずは勝利条件の確認から行きましょうか。

「先ずは勝利条件の確認をさせていただきます、カリーヌ様が戦闘不能になるか、僕が負けを認める事が勝利条件という事でかまいませんか？」

「１３歳の少年相手に、私が戦闘不能になる事などありえないわ、ハンデをあげましょう私に一撃でも入れることが出来ればラスティン殿の勝ちで構わないわ！」

「そうですか、ありがとうございます。あとは致死性のある呪文は使用しないと言うことでかまいませんね？」

「ええ、構わないわ、公爵との約束もありますからね、それより早く決闘を始めましょう」

公爵夫人はやる気まんまんの様です。

僕と公爵夫人は互いに杖を打ち合せ次に距離をとります。（これが決闘の作法だそうです）

父上の「はじめ」の声で決闘が開始されます。僕はまず、定番のゴーレム作成の呪文を詠唱します。公爵夫人は何もしません、どうやら僕の出方を見るようです。すぐに僕の呪文が完成し、２メイル程の土ゴーレムが作成され、公爵夫人に攻撃を仕掛けます。

僕は間を置かず、次のゴーレム作成の呪文を詠唱します。公爵夫人はブレードの呪文を唱えたようです、その刃で土ゴーレムを即座に真っ二つにします。

その間に、僕は２体目の土ゴーレムを完成させます。このゴーレムも１体目同様に、公爵夫人に攻撃を仕掛けます。

公爵夫人は即座に2体目の土ゴーレムに攻撃を仕掛けようとしますが、かなりの速度で回復した1体目の土ゴーレムに攻撃され、咄嗟に防御します。

「くっ！味な真似を」

公爵夫人は不満そうに呟きました。そう、僕が作った土ゴーレムはただの土ゴーレムではなく、回復に特化した物なのです。そして、2メイルと小型にしたのは機動力を高める為です。

ゴーレムに背後を取られないように、移動しながら刃を振るう公爵夫人ですが、ぼくはその間に3体目の土ゴーレムを完成させていました。

単純に考えれば、戦力比は3：1になったはずです、しかし僕は手を緩めません。今度は中距離支援用の石ゴーレムを作成します、これは地面の中から適当な大きさの石を吸い上げ、目標に向かって投げつけるという下半身が地面から直接生えている様な至極、単純なゴーレムです。（ある意味固定砲台ですね）

普通のメイジであれば、ここで降参なのでしょうが、公爵夫人は易々とゴーレム達の攻撃を躱し続けます。

僕はここまで手を打って、やっと守備の魔法を唱えます。

「石城砦（シェルター）」

すると僕の周りを石の壁が覆います。（呼吸と周りの状況を確認する為、細いスリットが入っています）

念のため、石の壁にさらに固定化の呪文をかけます、これで防御は完璧です。

ここまでやってやっと僕は直接、公爵夫人に魔法で攻撃を仕掛けます。

「石礫（ストーン・バレット）」

僕は長距離から、狙撃する様に呪文を放ちます。これで戦力比は５：１です。

しかし、公爵夫人は体術とシールドの呪文を巧みに使い分け、僕の攻撃を躱し続けます。

「石散弾（ストーン・ショット）」

僕は石礫（ストーン・バレット）の上位呪文を使って面で攻撃を仕掛けてみます。しかし公爵夫人はこの攻撃も、土ゴーレムを盾にすることで回避します。くっ！完全に嵌めたはずなのに！こうなったら奥の手しかありませんね、僕はこっそり詠唱を開始します。

「ラスティン殿、ここまでですか？」

攻撃の手が緩まったのに気付いた公爵夫人はそう声をかけてきましたが、僕は返事ができません。

「そうですか、返事もできませんか、ではこちらから行きますよ！」

そう言うと公爵夫人は、呪文の詠唱に入りました。大きいのが来る、急がなきゃ。

「カッタートルネード！」

公爵夫人の呪文が完成したようです。辺りを凄まじい風が吹き荒れます。僕が視界を取り戻すと、３体いた土ゴーレムの姿はもう見え

ません。それどころか固定砲台の石ゴーレムまで無残な姿を晒しています。流石に、石城砦（シェルター）は無傷のようです。

公爵夫人は、ゆっくりと石城砦（シェルター）に向かって歩いていきます。僕はそれに対して慌てたように、石礫と石散弾（ストーン・バレット・ショット）をでたらめに連射しますが、当然の様に公爵夫人かすりもしません。

公爵夫人は、改めてブレードの呪文を唱え刃を構成して、石城砦（シェルター）に切りかかりますが、流石にブレード程度では傷もつきません。

僕は公爵夫人の至近距離から石礫（ストーン・バレット）を放ちますが、公爵夫人は即座に石城砦（シェルター）から距離をとります、そして呪文の詠唱を開始しました。

また大きな魔法が来る、僕は慌てて石礫（ストーン・バレット）を連射しますが、公爵夫人は軽いステップでこれを躱します。そして呪文が完成してしまいます。

「カッタートルネード！」

これには強化した石城砦（シェルター）もひとたまりもありませんでした。地面ごと竜巻に吸い上げられる様に、空中へと放り出されます。

僕は急いで身体強化の呪文を唱え終え、次いで岩破裂（ストーンブラスト）の呪文を詠唱します。そして僕は、公爵夫人の呪文の余波が収まるのを見計らって、岩破裂（ストーンブラスト）の呪文を発動させます。自分が潜んでいる石ゴーレムの残骸を起動点に指定して。

――――――――――――――――――――――――――――――

仕掛けはこうです、まず公爵夫人が土ゴーレムと戦っている際に少しずつ穴掘りの呪文で、少しずつ石城砦（シェルター）の地面から、石ゴーレムの

足元に向けてトンネルを掘りました。
次に公爵夫人の最初のカッタートルネードの際に素早く、トンネルを通って石ゴーレムの足元まで移動しました。石ゴーレムの足元は地面と一体で、石城砦（シェルター）同様に見つかりにくく細いスリットを入れて視界は確保しておきました。
後は、まるで自分が石城砦（シェルター）の中にいるように石礫（ストーン・バレット）を放っておきました、できるだけ公爵夫人を石ゴーレムの残骸に近づける様に。

――――――――――――――――――――――――――――――――

岩破裂（ストーンブラスト）の衝撃に乗って、僕は一直線に公爵夫人に向かって行きます。
飛んでくる土砂は僕に向かっても牙をむきますが、その痛みに耐えて、一撃でも入れて見せます！シールド系の呪文では土砂は防げても、僕の体当たりは防げないでしょう。

そして公爵夫人へ衝突する寸前、

「エアハンマー」

という一言の呪文が僕の意識を刈り取りました。

第十五話　ラスティン１３歳（決闘）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

主人公は反抗期は継続中です。それで無ければ決闘なんてしない性格です。

下手な戦闘描写ですみません、私にはこれが限界のようです。
戦闘描写でもっといい表現方法があったら是非お教え下さい。

２０１０／９／１８
攻め立てて↓責め立てて
参りました、カリーヌお呼び下さいラスティン殿↓参りました。カリーヌとお呼び下さい、ラスティン殿
結構そう思うなら↓結構です、そう思うなら
に修正

第十六話　ラスティン１３歳（決闘のその後に）（前書き）

第十六話ＵＰします。

第十六話　ラスティン１３歳（決闘のその後に）

「ここは、僕の部屋？」

僕は目を覚ましましたが、記憶が混乱しています。確か公爵夫人と決闘をして、追い込まれた僕は最後に相打ち覚悟で特攻をかけた所までは覚えているのですが、そこから一切記憶がありません。きっと公爵夫人の何らかの魔法で昏倒させられたのでしょう、相打ち覚悟で特攻でも敵わないなんて、そこまでスクエアメイジとの実力に差があるのでしょうか？いえ、烈風カリンの実力なのでしょう。一太刀も浴びせられなかったのは悔しいですが、全力を出し切ったので悔いはありません。

決闘には完敗しましたが、僕はエレオノールとの婚約解消を撤回しなかったのですから勝負には勝ったという所でしょう。

そんなことを考えていると、リッチモンドが静かに部屋に入ってきました。

「ラスティン様、御加減はいかがですか？」

「特に問題は無いよ、母上が治癒魔法をかけて下さったのかな？ところで僕はどれ位気を失っていたかな？」

「もう翌朝でございますよ」

「カリーヌ様はもうお帰りになったんだろうね」

「はい、詳しい話は旦那様からお聞き下さい」

そういうと、リッチモンドは部屋を出て行きました。そして暫くす

ると、父上が部屋にやってきました。
「ラスティン、傷はもういいのか？痛む所とかないか？」
「はい、もう何ともありません」
「半日も気を失っていたのだから、念のため今日一日はゆっくり休みなさい」
「はい、そうします。ところで父上？」
「ん、ラ・ヴァリエール公爵夫人の事かな？」
「はい、どういう結論になったのでしょう？両家のしこりとかになっていませんか？」
父上は苦笑しながら、
「それを心配するなら、決闘など止めて欲しかったぞ。公爵夫人の方なら、問題解決だよ、婚約解消に同意してくれたよ、よく頑張ったな！だがお前はラ・ヴァリエール家には一年間出入禁止だそうだ」
「それ位で許してもらえるなら、上々です」
そう言いながら、僕は一抹の未練を感じているのでした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

父上のお見舞いから暫くして、今度は母上が僕の部屋を訪ねてきま

した。

「ラスティン、傷の具合はどう？」

「はい、もう何ともありません、治療魔法をかけてくださったのは母上ですよね？治療ありがとうございました」

「あまり無茶をしてはいけませんよ」

「はい、反省しています、もう決闘はこりごりです」

「カリーヌがあなたのことを褒めていましたよ、”魔法の腕はまだまだだけど、その勝負度胸だけは認めてもいい”ですって。人の子供を気絶させておいてこの台詞、彼女らしいわね、全く」

「ははは」

僕は笑うしかありませんでした。

「でも、珍しいことにカリーヌは貴方のことを気に入ったみたいよ、”エレオノールがだめなら、カトレアを嫁に”なんて言っていたわ。彼女にはラスティンが、”何故”エレオノールと婚約を解消したのか理解できていないみたいね」

そう言って母上は嘆息します。

「その割には、母上はカリーヌ様を応援なさっていましたね？」

こう言って僕がジト目で睨むと、

「当たり前じゃない、女の子を泣かす男なんて存在価値はないわ！カリーヌを応援するのは当たり前じゃない？」

と、笑顔でカウンターが返ってきました。すると突然母上が真顔になってこう聞いてきました。

「ラスティン、貴方、本当はエレオノールのことどう思っているの？」

「えっ！」

僕は痛いところをつかれました。エレオノールとの関係は僕の中でも整理しきれていない問題だったからです。

「彼女のことは、可愛いし、利発だし、僕のことをお兄様なんて呼んで懐いてくれてとても愛おしく思っていました。ですが使用人に暴力を振るったり、暴言を吐いたりするのは甘受できません」

僕がそこまで言うと、母上は僕が喋るのを遮って、

「建前はいいわ！これだけ答えなさい。貴方は、今でもエレオノールことが好きなの？それとも嫌いになってしまったの？」

と僕の目をじっと見詰めながら、直球で問い詰めてきました。

「僕は・・・」

「”僕は”なに？」

母上はどんどん僕を追い詰めて来ます。僕は追い詰められて、仕方

なく白状します。

「僕にとってエレオノールは、初恋の女の子です、そして今でも好きです！」

「そう」

とだけ、母上は微笑みながら言いました。それから、思い出すように次のように語ってくれました。

「わたしがレーネンベルクに嫁いできてからもう１４年にもなるわね。最初にテオドラにプロポーズされた時は驚いたわ、”貴方の心は、レーネンベルクに相応しい”なんて言うんだもの。当時の私には何人もの貴族の若者たちから、求愛されていたけれど、それは”容姿”と”家柄”が目当ての陸でもない方々だったわ、それに対してテオドラはきちんと、”私”自身を見てくれているのが分かったの。それからは怒涛のようだったわ、歳が離れているのも、後妻になるのも一切気にならなかった、すぐに婚約して、１月も経たずに結婚までたどり着いたわ。実家のお兄様や友人達は、もう少し考えてからにした方がいいって言っていたけど、止まらなかったわ。そして今でもその決断を後悔していないわ」

そう言って、母上は僕の頭を撫でます。

「この家に来たときは驚いたわ、予想していた公爵家のイメージとは全然違っていた、屋敷は実家の伯爵家と同じ程度の大きさで、使用人は少なかったですからね。でも、よく観察してみると、屋敷自体は重厚な作りで、品のいい調度品が整っていて、使用人はほとんどがメイジだったのよね。そして、使用人たちとレーネンベルク家の人たちには確かに絆といえるものがあった。一般の貴族なら、呆

れてしまう所だったのでしょうけど、私には居心地のいいお屋敷だったわ。テオドラの言った、”貴方の心は、レーネンベルクに相応しい”という言葉の意味がよく分かったわ」

母上はそこで一度言葉を止めると、改めて僕を見詰めてこう言ってくれた。

「エレオノールの心が、”レーネンベルクに相応しい”かどうかは私にも分からないわ。でもね、あの子はまだ１０歳、貴方さえその気になれば”レーネンベルクに相応しい”心をもった女性に育て上げることが出来るんじゃない？」

僕の記憶からに”光源氏”という言葉が思い出されました。

「しかし、育て上げるといっても、僕は1年間ラ・ヴァリエール家に出入禁止ですし」

「では手紙をお書きなさい。変に堅苦しくなくていいですから、自分の気持ちをそのまま文章にするのです。それなら難しくないでしょう？それにいざとなったら私が直接ラ・ヴァリエール家へ乗り込んで、”レーネンベルクに相応しい”とはどういうことか教えて来てあげるわ！」

母上はそう言って少女のように笑いました。その笑い声は、それまでもやもやしていた僕の心の霧を、一気に晴らしてくれました。

「はい、分かりました、母上！心を込めて手紙を書くことにします。そして、もしエレオノールの心が、レーネンベルクに相応しくなならなかったら、きっぱりと諦めることにします。なさけない息子で申し訳ありませんが、よろしくお願いします」

「任せなさい、将来の義娘の為でもあるんですからね！」

僕は母上にそっと頭を下げるのでした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「ところで母上、決闘の時、カリーヌ様の事を心配なさってましたよね、もしかして体調が悪かったのでしょうか？」

「ああ！あれね、実を言うとカリーヌは妊娠中なの」

爆弾発言きました！僕は妊婦さん相手にこてんぱんにされたみたいです。もともと戦闘には自信がありませんが、落ち込みますね。でも、フライとかでゴーレムから逃げなかった理由が分かりました、こちらは、飛び上がったら軌道を読んで石散弾（ストーン・ショット）で撃墜する予定でしたから、きっと高い所から落ちた時の衝撃を危ぶんでいたんでしょうね。

「そういえば、カリーヌが謝っていたわよ、”身の危険を感じてつい本気で魔法を使ってしまってごめんなさい”だそうよ。貴方は身体強化を使っていたんでしょ、それでなければ、骨の2，3本は持っていかれてたわよ」

僕は苦笑するしかありませんでした。これからはなるべくラ・ヴァリエール公爵夫人は怒らせないようにしましょう。

第十六話　ラスティン１３歳（決闘のその後に）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第十七話　ラスティン１３歳（恋のキューピット）（前書き）

第十七話ＵＰします。

第十七話　ラスティン１３歳（恋のキューピット）

そういう訳で、エレオノールへの手紙の文面を考えているのですが、魔法の勉強や、魔法兵団，学園関係の書類に目を通したり、魔法宝石（マジックジュエル）を錬金したりでなかなか時間が取れません。

やっと時間を作って、手紙を書こうと机の前に座りましたが、何を書いたら良いのかアイデアが浮かびません。そのまま悩んでいると丁度良く、リッチモンドがお茶を淹れてきてくれました。

「何かお悩みの様子ですな、どなたかへのお手紙ですか？」

「うん、ちょっとどんな事を書こうか悩んでてね」

ふと僕は、リッチモンドに目をやります、そうすると今まで形にならなかった物が急にはっきりしてきました。

「ありがとう、リッチモンド」

「はて？何の事か分かりませんが、お役に立てたなら光栄でございます」

僕はリッチモンドが部屋から出て行くのを待たずに、一気に手紙を書き始めました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

僕がエレオノールへの手紙を書き上げ、どうやって送ろうかと悩んでいる最中に彼女は、やってきました。

リッチモンドが突然部屋にやってきて、僕への客が来ているということでした。誰だろう？と思ってお客の事を尋ねると、レーネンベルク家の紋章入りの指輪を持っていたそうです。嫌な予感を感じながら、応接間へ向かいます。
ノックをして応接間に入ってみると、来客は案の定ラ・ヴァリエール家のメイドのミレーユさんでした。

「ミレーユさん、お久しぶりですね」

「え、そうでしょうか？」

考えてみるとミレーユさんに会ってから、1週間も経っていませんでした。（体感的には1月以上経っている気がします、色々悩むことも多かったですし、決闘とかもしちゃいましたからね）

「すみません、それほど経っていませんでしたね。それで今日はわざわざ、レーネンベルクまでいらして、どんな御用でしょうか？」

「あの・・・、それがですね・・・」

ミレーユさんは言いにくそうにしています、もしかしてと最悪の事態が頭を過ります。

「言い難かったら申し訳ありませんが、もしかしてラ・ヴァリエール公爵家のメイドを解雇されてしまったのでしょうか？」

ミレーユさんはきょとんとしています。あれ？違ったのかな、最悪の想像はどうやら外れた様です、一安心ですね。

「もしかしてエレオノールに、何かあったんですか？」

どうやら当たりらしく、ミレーユさんは、ぽつぽつと事情を話してくれました。

「エレオノールお嬢様についてなのですが、ラスティン様からの婚約解消の知らせを受け取って以来、塞ぎがちになり、食事もあまり取られず、時々啜り泣きする声が聞こえる様な状態になってしまったのです。なんとかラスティン様のお力で、お嬢様の元気を取り戻して頂けないでしょうか？このままでは体を壊してしまいます、何卒お願い申し上げます」

ミレーユさんの話は僕にとって想定外の物でした、婚約といっても所詮口約束ですし、エレオノールが僕に寄せてくれている好意も、兄姉のいない彼女の甘えみたいな物だと思っていたのです。僕は自分自身を殴りつけたくなりました。母上が聞いたら朴念仁とか言われそうです。

「1つ聞かせて貰えますか？ミレーユさんは誰かに言われて僕を訪ねてきたんですか？」

「いいえ、私自身の意思です。悲しみにくれているお嬢様を見ていられなかったからです」

「ミレーユさん、貴方は沢山のお客の前で叩かれて、解雇を言い渡されたはずですが、なぜそこまでエレオノールの為に尽くせるのですか？」

僕は悪あがきをしてみます。

「エレオノールお嬢様は、確かに厳しいことを仰ることがあります、でもそれは本心からではないのです。エレオノールお嬢様付きのメイド達には分かっている事なのですが、お嬢様が本当にお怒りになると、舌が回らなくなる癖が出るのです。あの誕生日パーティーの時のように理路整然と非難するときは本気で怒っている訳ではないのです。多分ですが、お嬢様はラスティン様に良い所を見せたかったのではないでしょうか？」

エレオノールは本気で怒っていた訳じゃなかったんだ、頭に血が上ってそこまで気が回らなかった自分の未熟さを反省しなくていけませんね。

「もう1つ聞いてもいいですか？エレオノールはあのパーティーの後、ミレーユさんに謝罪しましたか？」

「それは・・・」

ミレーユさんは口篭ります。

「貴族の方々は、使用人に頭を下げたりしない物なのでは？」

「それもそうですね」

レーネンベルクの常識で、一般の貴族のことを考えてはいけませんね。僕なんか、使用人みんなから怒られてその度に頭を下げているので、謝るのは当然という認識でした。（コモンマジックの時や、庭の花を枯らしてしまった時や、料理人に頼んで作って貰った新しいお菓子を摘み食いした時とか、あれもしかして僕って意外といたずらっ子？）

いや、今考えなくてはいけないのはそんなことじゃない。

「ミレーユさん、ご存知かどうか分かりませんが、僕は1年間ラ・ヴァリエール家に出入を禁止されているのです。そこで両親に勧められてエレオノールに手紙を書くことにしました」

出入禁止の所で表情を暗くしたミレーユさんでしたが、手紙と聞いて俄然表情が明るくなりました。瞳が、”いますぐその手紙を渡して下さい”と言っている感じです。僕はその表情をみて、ちょっとした計画を思いつきました、早速切り出してみましょう。

「手紙自体は書き終わっているのですが、どうやって渡したら良いか悩んでいる所なんですよ。やっぱり手紙だけだとうまく伝わらない事ってあるじゃないですか、そういう時に言葉で間接的にでも伝えられたら良いって思いませんか?」

「手紙では伝え切れないことを、伝言するってことですか?」

「そうなんです、例えば今回僕が書いた手紙はですね・・・」

僕はミレーユさんにレーネンベルク家とリッチモンドの関係を簡単に説明します。そしてさり気なく、エレオノールもラ・ヴァリエール家の執事と交友を深めたらどうか?と提案してみます。ミレーユさんは真剣な顔で話を聞いてくれました。

「・・・という訳なんですよ、こういう話って手紙に書きにくいですからね」

「はい、分かりました。その役目是非私にやらせて下さい!」

「本当は母に頼もうかと思ったのですが、ミレーユさんなら信用出

来ると思いました、大変かもしれませんが、よろしくお願いします、でも僕が言った事は、エレオノール以外に話さないで下さいね、恥ずかしいですから」

そう言って僕はミレーユさんに頭を下げてお願いしてみます。

「はい、お任せください、伝言は確実にお嬢様にお伝えします」

僕に頭を下げられた、ミレーユさんは慌てながら、でもしっかりと請け負ってくれました。（よし、これで手紙で見られてはまずい事も伝言できるし、それを聞いた時のエレオノールの反応も知ることができます）

「では、エレオノールへの手紙はお任せしますが、さすがに僕からいきなりエレオノールへ個人的な手紙が行ったら、ラ・ヴァリエール家でも怪しむでしょう。一応、手紙を出すことを断る手紙を書いてきますので、少し待っていただけますか？」

「それもそうですね、分かりました、ご迷惑でなければこのまま待たせて頂きます。お嬢様に少しでも早く手紙をお届けしたいですから」

その返事を聞くと僕は急いで部屋に戻り、ラ・ヴァリエール公爵と夫人宛に手紙を書くのでした。いかにも悲嘆にくれるエレオノールを慰めたいという気持ちを前面に出して、婚約解消したことを後悔している様な文章に仕上げていきます。

書き上がった2通の手紙を渡すと、ミレーユさんは喜び勇んでラ・ヴァリエール家へと帰っていきました。僕の企みがうまく行くと良いのですけど。

第十七話　ラスティン13歳（恋のキューピット）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第十八話　ラスティン１３歳（光源氏計画）（前書き）

第十八話ＵＰさせていただきます。

エレオノールの性格改変計画発動中です。

第十八話　ラスティン１３歳（光源氏計画）

こうして始まった、エレオノールとの文通（実況付き）ですが、最初は失敗かと思われました。直ぐに来るだろうと予想していた、エレオノールからの返信が一向に届かなかったのです。最初の２，３日は何とも思わなかったのですが、それが４日5日と延びるに従って魔法の勉強も手が付かなくなってくる始末です。（仕事の方はちゃんとしましたよ）

６日目ともなると、母上にラ・ヴァリエール家へ偵察に行って貰おうかと本気で考え始めました。そんな中、７日目になって、やっとミレーユさんが我が家を訪ねて来てくれました。ミレーユさんを応接間に通すと早速質問してみます。

「ミレーユさん、随分と時間が掛かりましたね、もしかして何か問題が発生しましたか？」

「ラスティン様、お待たせして申し訳ありません。問題が起こったと言えば起こったんですが・・・」

「何が起こったんですか、もしかして手紙が取り上げられてしまったのですか？」

「いいえ、そういう事ではないんです、公爵ご夫妻への手紙をお見せしたら、お嬢様にラスティン様の手紙をお見せする許可は簡単に頂けましたし、お嬢様に手紙をお渡しした時にはちゃんとラスティン様に言われた通りのことをお伝えしました。あ！でも手紙の内容は奥様が確認なさいました」

（やっぱり検閲が入りましたか、公爵夫人抜け目ないですね）

「そうなんですか、それなら何が問題だったんですか？」

ミレーユさんは何やら言いにくそうにしていましたが、観念したのか訳を話してくれました。

「手紙を読んで、ラスティン様のお話をお伝えすると、お嬢様はしきりに感心なさっていらっしゃいました。そこで私は、エレオノール様も、ラ・ヴァリエール家の執事達に関心を持って、それをラスティン様にお知らせしたら、ラスティン様もきっとお喜びになりますと提案してみました。お嬢様は暫く考え込まれていましたが、何か決心されたらしく、私に執事の１人を呼びに行かせました」

ミレーユさんはそこまで一気にしゃべると急に思い出したようにニコニコと微笑み出しました。（心なしか体までくねくねしてる感じがします）

「執事を呼びに行かせるまでは良かったのですが、肝心の執事がやってくると、”お茶を一杯いただけるかしら？”とだけ言って、執事を帰してしまったのです。そして暫くするとまた私に別の執事を呼びに行くよう命じられたのです。すると今度は、”明日の予定はどうなっていたかしら？”と私でも答えられる様な事をお尋ねになったのです。その日はこんな事が何回か繰り返されました」

「あれ？」

僕は拍子抜けして思わず声を出してしまいました。ですが、ミレーユさんの話は止まりません。（くねくね度？が増している感じもします）

「翌日になっても、お嬢様の奇妙な行動は止まりませんでした。その行動が午後にも続くとさすがに私も放っては置けませんでした。”お嬢様、執事に話を聞くのではなかったのですか？”とお尋ねすると、エレオノール様は真っ赤におなりになってもじもじされながら”だって恥ずかしいんですもの”と小さな声でお答えになりました。その様子が可愛らしいことといったら、言葉に言い表せない程でございました」

（くねくね度ＭＡＸです、ミレーユさん帰って来て下さい）

僕の声にならない声が聞こえたのか、ミレーユさんは急に冷静になり話を続けました。

「はっ、失礼しました！それでですね、いきなりプライベートな事を聞くのはハードルが高いでしょうということで、まず執事全員の名前と顔を覚えることから始めたのです。一言に執事と言ってもラ・ヴァリエール家には見習いも含め８人もいます、それを一堂に集めて自己紹介をさせるというのも不自然でございましたから、全員の名前と顔を覚えるのは意外と手間でした。しかしこれが最終目的ではありません、次は執事全員の出身地を聞き出す事にいたしました」

「出身地ですか？」（エレオノールには聞きにくそうな質問ですね）

「はい、単なる出身地の確認なのですが、それでもお嬢様が執事達にプライベートな事を聞くのはやはり抵抗があったようです。そこで私は一計を案じました、執事の方々に予めお嬢様が皆さんの出身地を知りたがっていると伝えておいておいて、その話が出たら、積極的に自分の話をしてくれるように依頼しておきました。その甲斐あってか、お嬢様が”あっ、貴方、どちらのお生まれだったかしら？”と緊張しながら始めて質問なさった際にも、執事の方は慌てず出身地とその町の特徴おまけに特産品まで流れるように説明して下

さいました。お嬢様は多少違和感を感じていらっしゃいましたが、それでも熱心に話しを聞いておいででした」

（ミレーユさんって意外と過保護なんだな、いえ意外じゃないかもですね）

「1人目の執事の話を聞いて気を良くしたお嬢様は次々に執事たちから出身地の話を聞いて行きました。1人目の関門を突破すれば後は早いものでした。翌日からは家族構成や趣味と言った所まで聞き出す事が出来るようになりました。お嬢様も執事達と話す事を気に入られたのでしょう、進んで彼らに会いに行くまでになりました」

「そうですか、それは良かったです」

当初の目的が達成出来た様で一安心です。と思っているとミレーユさんは申し訳なさそうにして、

「はい、ですが調子に乗って話を聞いているうちにいつの間にか6日も経ってしまっていたのです」

と言ったのでした。

「問題ありませんよ、ちょっと心配しましたけど、想像以上に効果があったみたいですから。あのエレオノールが、執事の皆さんに関心を持って自分から話を聞きに行くなんて、想像もしていませんでした。ミレーユさん、僕とエレオノールの為に色々お手数かけて申し訳ありませんでした」

「いいえ、エレオノールお嬢様の為であれば、これくらいの事は何

ともありません！」

「それで手紙の返事ですが、直ぐに読んで返事を書きますが、やっぱり出来上がるのは明日になってしまいそうです。宜しければ今夜は当屋敷に泊まっていってください」

「宜しいのですか？何でしたら一度ラ・ヴァリエール家に戻って明日再度お邪魔させていただきますが」

「いえ、そんな面倒をお掛けするわけにはいきませんし、出来れば夕食の時、両親にエレオノールの様子何かを話して貰えると嬉しいです」

「そういう事であれば、お言葉に甘えさせていただきます」

「良かった、直ぐに客間を用意させます、乗ってきた馬車には事情を話して先に帰るように伝えておきましょう。明日は当家の馬車でお帰りください」

僕は、ミレーユさんの件の手配をリッチモンドに頼んで、早速部屋に戻ってエレオノールからの手紙を読んでみます。

几帳面そうな字で便箋にびっしりと書き込まれています。最初は、僕の手紙に対するお礼で、次にこれからも手紙のやり取りをしたいという希望が書かれていました。彼女はどんな顔をしてこの手紙を書いたんでしょうね？想像すると微笑ましくなってきます。

そして手紙の残りは、ほとんどがラ・ヴァリエール家の執事達のプロフィールで埋まっていました。エレオノールは一生懸命調べたんでしょうね、自然と微笑みが浮かんできます。ふと思ったんですが、この手紙を他の人が見たらどう思うでしょうね？

とても恋文には見えないでしょうが、それも僕達らしいかもしれま

せん。
手紙を読み終えると、早速返信を書き始めます。今度は誰の事を書こうかな?そうだ庭師について書こう、エレオノールも土メイジだったはずですし、きれいな花の話とかいいかもしれないですね。こうして僕と家の庭師の関係を手紙に書いていきます。そうだ、手紙だけではなく花も添えましょう、明日の朝イチで庭に出て花を何本か見繕うことにしましょう。黙って花をもって行くとまた庭師に叱られてしまうかも知れませんが、いつもの事ですからね。

手紙を書き終わると丁度夕食の時間になりました。ミレーユさんを客人として迎えた夕食は、いつもより少し華やかになりました。いつもは人見知りする弟のノリスがミレーユさんは気に入った様で盛んに話をせがんでいました。(ミレーユさんは子供に好かれるタイプなんですね、いいお母さんになりそうですね)

翌朝、庭から花を何本か調達して、手紙と一緒にミレーユさんに渡します。そして、前回同様、手紙に書けないようなエピソードをミレーユさんに伝言してもらいます。
そして、手紙と伝言を携えてミレーユさんはラ・ヴァリエール家へ帰って行きました。

第十八話　ラスティン１３歳（光源氏計画）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／８／２６
いろんな所を小修正しました。

２０１０／９／１８
高いでしょうといことで、→高いでしょうということで、に修正

第十九話　ラスティン１４歳（Ｆｉｒｓｔ　Ｋｉｓｓ）（前書き）

第十九話ＵＰします。

今回は激甘な展開です、書いていて悶えそうになりました。

よかったら皆さんも悶えてみませんか＾＾；

第十九話　ラスティン１４歳（Ｆｉｒｓｔ　Ｋｉｓｓ）

こんなやり取りが、何回も行われました。僕はエレオノールに少しでも平民の人達に興味を持ってもらえる様に、色々な屋敷内外での体験を手紙に書いていきました。そしてエレオノールの方も僕に合わせるように少しずつですが、平民やその生活に興味を持ってくれたようです。数ヶ月もすると、エレオノールもお忍びで、近くの町に出て、平民の生活を肌で感じることが出来るまでになりました。

そしてこの文通は僕のエレオノールに対する感情にも、変化をもたらしました。僕がエレオノールに持っていた印象は、”容姿が可愛い”，”年の割には大人びて賢い”，”気丈”でしたが、それに加えてこの数ヶ月の文通で分かったのは、”かなりの恥しがりや”，”歳相応の好奇心を持っている”，”意外と頑張り屋”，”細かな心配りができる”といった、普通にパーティ等では知る事の出来ない、内面的な部分を知る事が出来ました。これらを知って僕はエレオノールの事をもっと好きになってしまいました。

そして、この実況付き文通もほぼ1年続きました。直接会う事は出来ませんでしたが、直接会うよりもっと濃く交流を深める事が出来たとおもいます。ミレーユさんのおかげで、エレオノールを身近に感じる事ができましたし、彼女の考え方何かもなんとなく分かるようになってきました。これはエレオノールの方も同じでしょう。多少変わった形ですが、交際と言っても良いかも知れませんね。この交際は僕にとってもエレオノールにとってもプラスに働いた事は間違いありません。レーネンベルク家とラ・ヴァリエール家を何度も行き来してくれた、ミレーユさんには感謝の気持ちで一杯です。

そして、さらに嬉しいことに、ラ・ヴァリエール公爵夫人カリーヌ

さんが、見事に女の子を出産しました。名前は当然の様にルイズを付けられ、すくすくと育っているそうです。

ここまで良かった事ばかり書きましたが、良くない事も起こりました。ラ・ヴァリエール家のカトレアがついに発病してしまったのです。ミレーユさんにカトレアが倒れたと聞いた時は、ラ・ヴァリエール家に出入禁止になっている自分の不甲斐なさを悔やんだものです。僕が行ってもカトレアの病気が治るとは限らないのですが。＞快癒＜の二つ名を持つ母上も、カトレアの治療の為に呼ばれました。母上は治癒魔法に限って言えば、トリステインでも5本の指に入る程の使い手です、その母上の手をもってしてもカトレアの病気は原因不明で治癒魔法もあまり効果が無かったそうです。母上によると症状は、発熱，貧血，倦怠感，動悸，めまいということでした。前世の記憶でも医者でもない僕にはこれだけでは何の病気か見当もつきません、実際に診てみないとどうしようもありませんね。僕は出来る事だけでもと思い、特製の”アムリタの雫”を作って定期的にラ・ヴァリエール家に届ける事にしました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝

そして僕の手元には、エレオノールの誕生パーティの招待状があります。これはレーネンベルク家宛てでは無く、僕個人宛の招待状でした。今までこんな事は無かったのですが、エレオノールの手紙と一緒に招待状を持って来てくれたミレーユさんによると、エレオノールがどうしても僕を招待したいとラ・ヴァリエール公爵夫妻に頼み込んで用意された物らしいです。これに合わせて、ラ・ヴァリエール家への出入り禁止も解除されたということでした。
これを聞いた僕はあることを決心しました。それを父上と母上に話した所、喜んで賛成してくれました。後は小道具を用意して、誕生

パーティ当日を待つだけです。

そしてエレオノールの誕生パーティ当日になりました。持って来たプレゼントは、料理人の力作のケーキと庭で一番きれいに咲いていた花です。料理人は”このケーキを食べればどんな女の子でもイチコロですよ”なんて言ってました。庭師は、”いつも若様にはいい花ばかり持って行かれてしまいますな”と渋い顔でした。

パーティが始まり、プレゼントを渡す為に僕はエレオノールに近寄って行きました。すると僕に気付いたエレオノールは席を立ち上がり、笑顔で僕を迎えてくれました。

「お久しぶりです、スティン兄様」

「やあ、エレオノール、1年ぶりだね、12歳の誕生日おめでとう！」

それだけ言って、プレゼントを渡してエレオノールの元を離れます。久々に見たエレオノールは、記憶より少し背が伸びて、より可憐になっていました。そして気丈という言葉が似合っていた、態度もかなり柔らかくなって、意志が強いという感じになり、かすかに優しさもにじみ出ているようです。パーティの他の出席者たちも敏感にそれを感じたらしく、より少女らしくなったエレオノールの可憐さを称えています。

食事が始まると、参加者は各自の席に案内されていきます。僕の席は予想外に去年と同じエレオノールの隣の席になりました。（うーん、どういうつもりなんでしょうね？）

エレオノールは隣の席で機嫌よく、積極的に僕に話しかけてきます。僕もエレオノールとの会話を楽しみながら食事が進んで行きます。

ですが、少し気に掛かる事があります。給仕をしてくれている召使いの少年なのですが、どうやらこういったパーティで給仕をするのは始めての様で、手付きが危なっかしいのです。そう思っていると案の定お茶の入ったカップを倒してしまいまい、中身が僕のズボンにもかかってしまいました。（去年と同じ展開ですね）

僕は素早く呪文を唱え、ズボンとテーブルクロスに染み込んでしまったお茶を、カップに戻して行きます。給仕の少年はその場で頭を下げ一生懸命謝罪し始めました。

「レーネンベルク公爵公子ラスティン様、大変申し訳ございませんでした。お叱りは如何様にもお受けいたします」

すると、そう謝罪する少年の前に、エレオノールが進み出て来て少年を制すと、

「ラスティン様、去年に続き我が家の者がとんだ失礼をして申し訳ありません。使用人の不始末は我が家の不始末です、心よりお詫び申し上げます、オラース、貴方も改めて謝罪なさい」

すると少年も頭を下げて、

「ラスティン様、申し訳ございませんでした。」

（ふむ、去年とは展開が違いますね、流れに乗る事にしましょう）

「主役のエレオノール様から謝罪して頂いては、責める訳には行きませんね。実害も無かったですし、謝罪の言葉確かに受け取らせていただきます。オラース君といいましたか？こういった席は始めてのようですが、ゆっくり落ち着いて給仕してくれれば構いませんよ」

「ラスティン様、謝罪を受け入れて頂いて感謝いたします。食事はまだ続きますわ、引き続きお楽しみ下さい」

それで、その騒動は終息したのでした。

食事が終わると、後は各自雑談などをして、遠くから来ている人達から順にラ・ヴァリエール家の屋敷を辞していきます。そんな中、僕はそっとエレオノールを中庭に連れ出します。

「エレオノール、こうして二人っきりで話すのは久しぶりだね、改めて誕生日おめでとう！」

「ありがとうございます、スティン兄様」

「久々に君を見るけど、本当に可愛くなったね」

「あら、綺麗になったとは言って下さらないんですか？」

「うん、確かに綺麗にもなった、だけどそれ以上に可愛くなったよ、以前の君のは可愛いというのは似合わなくなり始めていたからね。すごく優しくなったって、使用人の皆にも言われているんだろ？それが容姿にも表れているんだよ」

「少し納得の行かない部分もありますけど、概ね当たっていますわ。兄様にはお見通しですのね？」

「うん、１年間の君は無理に公爵令嬢になろうとして、気丈に振舞っていたけど、今の君は余裕が出て来て、無理せず貴族としてそして１２歳の女の子らしく振舞えているよ」

そう僕がいうと、エレオノールは本当に嬉しそうに微笑んだ。その微笑に僕はつい見惚れてしまいました。しばらく、エレオノールに見惚れていると、

「兄様、どうかされましたか?」

と、不思議そうに僕の顔を覗き込んできます。まさか君に見惚れてたんだよなんて言えないので、ちょっと話題を変えてみます。

「さっきの食事の時の騒動だけど?エレオノール、君が仕組んだんだろう?」

「まあ、何の事でしょう」

エレオノールはしらを切るつもりらしいです。

「あの少年、オラース君といったかな。多分こちらに奉公し始めたばかりなんじゃないかな?そんな子供にパーティの主役の給仕をさせるなんて不自然だからね、それに彼は何だか緊張しすぎだった」

「スティン兄様は本当に何でもお見通しですのね、オラースは前月から屋敷に勤め始めたばかりの召使いです。そして今日の給仕を任せる時にちょっと、”あなたが給仕するレーネンベルク公爵公子ラスティン様は大変礼儀にうるさい方です”と伝えただけですわ。オラースがミスをするかどうかは賭けでしたの」

「その賭けに君は勝った訳だ、オラース君はカップをひっくり返し、僕のズボンまで汚してくれたからね。でもあの時の君の対応は見事だったよ、実に貴族らしかったし、オラース君への気配りも出来ていた。満点をあげたい位だよ」

エレオノールは僕の言葉を聞くと嬉しそうに、

「満点ですか、それなら兄様に私が貴族として、そして1人の人間としてどれだけ成長したかを見てもらおうと、色々細工した甲斐がありましたわ。」

と言いました。僕は苦笑するしかありませんでした。

「エレオノールもお転婆さんになってしまったんだね、ミレーユさんが見たら何というかな？」

「あら？このアイデアはミレーユが発案ですのよ」

「そうなんだ」（ミレーユさん何やってるんですか！）

僕は気を取り直して話を続けます、というよりこれからが本題です。

「エレオノール、あのね、えーっと」

僕が言いよどんでいると、エレオノールは僕の横に来ると柔らかな草の上に腰を下ろしました。僕もつられる様にその場に腰を下ろします。そして一度、深呼吸するとこう尋ねます。

「エレオノール、僕が以前君にあげた指輪はまだ持っているかい？」

「はい、もちろん、スティン兄様に頂いた物ですから、もう指には通りませんが、肌身離さずこのようにして」

そういって、エレオノールは首からネックレスを外します。良く見

るとそのネックレスには僕が彼女にあげた指輪が通されていました。大事にしてくれているんだ、僕の心が温かくなった気がします。

「その指輪、僕に返してくれないかな？」

「え！」

エレオノールは急に不安そうになりましたが、何かを断ち切るように小さな指輪を僕に返してくれました。僕はその指輪を受け取ると、素早く錬金で銀とサファイアとルビーに分解します。そして懐に入れてあった、サファイアとルビーと合成します。そして一回り大きくなったサファイアとルビーと加える為に持ってきた銀を付け足して、新しい指輪を錬金します。出来上がったのは、以前の指輪より一回り大きな指輪で、左右にこの世界の月をイメージしたルビーとサファイアを配したのは同じですが、その真ん中には盾と山羊を象ったレーネンベルクの紋章が浮き彫りにされています。

「エレオノール、左手を出してくれるかい？」

エレオノールは左手をそっと僕のほうへ差し出してくれます。僕はそのほっそりとした手を優しく掴むと、その薬指にゆっくりと生まれ変わった指輪を差し込んで行きます。エレオノールはそれを呆然と見ています。指輪がエレオノールの指に収まると、僕は意を決してエレオノールに告げました。

「僕と結婚してくれないか？エレオノール」

僕の頭の中は真っ白です、周りも靄がかかっているようです、ですが僕は構わず続けます。

「もちろん直ぐに結婚って言う訳じゃない、君がトリステイン魔法学院を卒業するのを待って正式に式を挙げたいと思っているよ。それまでは以前と同じ婚約って形になると思うけど、出来る限り君を大切にするから！」

ここまで一気に言って、ふと正気に返りました。先走りしすぎたかもしれません、慌ててエレオノールをみると、完全に固まっています。おまけに視点もぼやけています。目の前で手を振っても何の反応もありません。仕方が無いので、エレオノールの肩に手を置いて、軽く揺すってみます。（ユサユサ）

うん、全然反応がありませんね、もう少し強く揺すってみましょう。（ユサッユサッ）

そうすると反応がありました、エレオノールの綺麗な瞳から、一筋の涙が流れ落ちました。いけない強く揺すり過ぎたかもしれません。

「ごめん、エレオノール、痛かったかい？」

エレオノールはふるふると首を振ります。そして搾り出すような声で、

「痛かったんじゃないの、嬉しかったの」

とだけ言ってくれました。僕は思わず、エレオノールの身体をぎゅっと抱きしめてしまいました。

「今度は痛いよ、兄様」

僕は、はっとして手を緩めますが、エレオノールの表情はどこか夢を見ているようでした。そしてその瞳からは、まだ喜びの涙を流していました。僕は指でその涙をそっと拭うと、エレオノールの瞳を

じっと見詰めます。僕とエレオノールは互いの瞳を見詰めながらしばらくそのままでいましたが、その後ゆっくりとお互いの顔を近づけて行き、最後にはどちらからとも無く口付けを交わしたのでした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ちなみのこの一部始終は、両家の両親とラ・ヴァリエール家の主な使用人たちにこっそり覗かれていたのでした。それを後で知った僕とエレオノールは真っ赤になって怒ったのでしたが、周りはそれをものすごく暖かい目でみているだけでした。

第十九話　ラスティン１４歳（Ｆｉｒｓｔ　Ｋｉｓｓ）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

次話とその次は、エレオノール視点のお話です。

２０１０／９／１８
間違えありません↓間違いありません
ラスティン様去年に続き我が家の者がとんだ失礼をして申し訳ありません、使用人の不始末は我が家の不始末です、心よりお詫び申し上げます、↓ラスティン様、去年に続き我が家の者がとんだ失礼をして申し訳ありません。使用人の不始末は我が家の不始末です、心よりお詫び申し上げます。
そんな子供パーティの↓そんな子供にパーティの
に修正

外伝三話　私のスティン兄様（その１）（前書き）

外伝第三話ＵＰします。

今回と次は、エレオノール視点のお話です。

外伝三話　私のスティン兄様（その１）

私の名前は、エレオノール・アルベルティーヌ・ド・ラ・ヴァリエールと申します。トリステイン王国ラ・ヴァリエール公爵家の長女です。ラ・ヴァリエール公爵家と言えば、トリステインでは名門中の名門です。

家柄のせいか、お母様の教育方針の為か、私は小さな頃から貴族として恥しくない様にと厳しく育てられてきました。舞踊や楽器、あらゆる学問、貴族としての振る舞い、宮中作法と言ったものを小さな頃から毎日のように覚えさせられました。私自身それを苦と思った事はありませんでした。私はラ・ヴァリエール家の長子として、公爵家の令嬢に相応しい振る舞いを心がけてきました。妹のカトレアが生まれてからもそれは変わりませんでした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

明日は私の８歳の誕生パーティの日です。誕生日のパーティと言えば小さい頃から楽しみにしている事が１つだけあります。それはスティン兄様、レーネンベルク公爵家の嫡男ラスティン・ド・レーネンベルク様のもって来て下さるプレゼントです。

ラ・ヴァリエール公爵家が開くパーティなので、小さな子供の誕生パーティとはいえ、沢山の方々が招待されます。パーティの招待客の方々は毎年、様々なものをプレゼントとして持って来て下さいました。大きな宝石をあしらった様々なアクセサリー、絵画，彫刻といった美術品、見たこともない見事な織物、それこそ、何処かの宝物庫の様な有様でした。物心ついた頃にはそんな状態にも慣れていましたが、そんな金銀財宝の中に毎年１つだけ他と全く違ったプレゼントが紛れ込んでいるのに気が付きました。それは、見たことも

無いお菓子だったり、子供向けの玩具だったり、女の子が喜びそうな鉢植えの花だったこともありました。

＞ｉ１６２７４―２０９０＜

ですが、小さな子供だった私にとって、お菓子や玩具、小さな花植えと言った物が一番嬉しいプレゼントでした。子供心に気付いていましたが、私への誕生プレゼントは、実際にはお父様のご機嫌をとる為の物でした。でも、お菓子や玩具、小さな花植えといったプレゼントは明らかに、私個人に向けて送られた物であることが明白だったからです。つまり、このプレゼントの送り主は、純粋に私の誕生日を祝ってくれていると言う事になります。それに気付いたのは６歳の誕生日のことでした。

プレゼントの送り主を執事の１人に尋ねてみると、レーネンベルク公爵家のラスティン様からだということが分かりました。レーネンベルク公爵家といえば、ラ・ヴァリエール公爵家とは親戚関係にあり、私も毎年、ラスティン様や、弟君のノリス様の誕生パーティに招待されています。でも、レーネンベルク公爵家というのはあまり印象に残っていませんでした。同じ公爵家と言ってもこれだけ生活が違うのかと言った悪い印象しか残らないほど質実剛健を絵に描いたようなお屋敷と、意外と落ち着いた感じで寛げるパーティが開かれたとしか覚えていませんでした。

次にラスティン様にお会いしたのは、ラスティン様が９歳の誕生パーティの折でした。パーティ自体は落ち着いた雰囲気で招待客も余りいない、私などから見たら寂しげな物でした。妹のカトレアがラスティン様の名前を呼ぼうとしますが、うまく舌が回らないようです。ラスティン様は、

「ラスティンは言いにくいかな?じゃあカトレア、僕の事はスティ

ンと呼んでごらん」

とカトレアに言いました。カトレアは、

「誕生日おめでとうございます、すてぃんおにいさま」

と元気にお祝いの言葉を述べました。私もその話の流れに乗って、

「では私はスティン兄様と呼ばせていただきますね、スティン兄様、誕生日おめでとうございます」

ラスティン様、いいえ、スティン兄様は少し驚いているご様子でしたが、すぐに笑って、

「二人ともお祝いありがとう」

と言ってくださいました。

パーティが始まると私はスティン兄様の横に陣取って、色々なお話を聞きました。話がプレゼントに及ぶとスティン兄様は、

「立派なプレゼントは父上にお任せしているよ、子供は子供同士、相手の欲しがりそうな物をプレゼントするのが普通じゃないかな？」

とおっしゃいました。やっぱり少し普通とずれている気がしましたが、そのずれが意外と心地よいものだと感じていました。そして気が付くと私は、スティン兄様が大好きになっていました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝

そして今日、ついに私の8歳の誕生日となりました。スティン兄様はどんなプレゼントをくれるのかしら?それればかりが気になって、朝から落ち着きません。

誕生パーティが始まるり、例年通り私がお祝いに来てくれた方々にお礼の挨拶をすると、次は来客の皆さんがお祝いの言葉を述べながら、プレゼントを渡してくれます。ですが、私はスティン兄様のプレゼントが気になって、気もそぞろでした。だれがどんなプレゼントを贈ってくれたのかほとんど覚えていません。そしてプレゼントを頂くのも終盤、スティン兄様の番になりました。わたしの前に現れたスティン兄様は、見た限り何ももってはいらっしゃいませんでした。そして何か臆している感じです、なんだかスティン兄様らしくありません。私が不審に思って声を掛けようとすると、スティン兄様は突然、私に向かって1つの指輪を差し出してきました。

「これが今の僕に出来る最高のプレゼントだよ、エレオノール」

スティン兄様は照れたように、こうおっしゃいました。差し出された指輪を見ると、小さくて可愛い感じの指輪でした、素材は銀の様で、真ん中に薔薇が浮き彫りされていて、それを見守るように、赤と青の小さな宝石が配されています。(月をイメージしているのかな?)

一目見て可愛いと感じて気に入った指輪ですが、公爵家の嫡男が、公爵家の令嬢に送るにしては少し地味な感じがしました。そこでふと気付きました、確かスティン兄様は錬金を得意となさっていると聞いた事があります、もしかしたらこの指輪はスティン兄様の手作りなのかもしれません。そう思うと、不思議な胸のときめきを覚えます。勇気をだして、スティン兄様にお尋ねしてみます。

「スティン兄様、これはもしかしてお兄様ご自身で作ってくれたも

のですの？」

「うん、そうだよ出来が悪くて申し訳ないんだけれど」

その言葉を聞いたとき私の胸は今まで感じた事が無かった程高鳴りました。

「いいえ、スティン兄様がご自身の手で作って貰った物を頂けるだけでエレオノールは幸せです」

本当は指輪の事を気に入ったと、言いたかったのですけど、うまく言葉にならなくって、口に出せたのはそれだけでした。これだけでは感謝の言葉として足りないと感じた私は、思い切って、

「兄様の手で嵌めて頂けますか？」

といって左手を差し出してみました。その時のスティン兄様の慌てようといったら、指輪を嵌めようとする手が震えてうまく嵌らない程でした。どうやら指輪のサイズをご存知なかった様で、最初は人差し指、次は小指と試していきましたが、ぴったりとは行きません。最後には薬指を試しましたが、これは運よくぴったりでした。嵌め終わると私も、スティン兄様もほっとしました。でも左手の薬指ですよ、スティン兄様は意味が分かってお嵌めになったんでしょうか？いえ、そんな事はないですよね、でも私はそれがとても大切な事に感じました。

するとその様子を見ていた、お父様が、

「ラスティン殿は早熟ですな、もう家のエレオノールにプロポーズするとは！」

と言い出しました。（もうお父様ったら、こういう問題はもっと神経質に扱って欲しいですわ）
でも、お父様もお母様も、レーネンベルク公爵ご夫妻も意外とこの話に乗り気のご様子です。当事者のスティン兄様だけが慌てて、

「１０歳の男子と8歳の女子の婚約なんて非常識です」

なんておっしゃっています。（貴族の間では、8歳で婚約する事も珍しくないんですのよ）
スティン兄様はそれでも、なんのかんの言って、婚約を回避しようとされています。ですが、私がちょっと泣いた振りをして、

「スティン兄様は、私と婚約することがお嫌なのですか？」

と尋ねて見ると、観念した様に婚約を承知して下さいました。（殿方って女の涙に本当に弱いですわね）
こうして、スティン兄様は晴れて、私の婚約者になったのでした。でも婚約と言っても口約束で、実際に契約とか結んだ訳では無いですが、今はこれで満足しておきましょう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

それからはパーティなどで、スティン兄様と同席すると、婚約者と言う事で必ず隣の席に座ることが出来る様になりました。やっぱり婚約って素敵ですね。席が隣だと自然に話す事が多くなりスティン兄様の事が少しずつ分かって来た気がしていました。そうあの時まで。

それは私の１１歳の誕生パーティの時の出来事でした。私とスティ

ン兄様はいつも通り隣の席に座り、夕食を楽しんでいました。私達の食事の給仕はお気に入りのメイドのミレーユがやってくれています。彼女は良く気が付くし優しいので、私は彼女の事を歳の離れたお姉さんの様に感じていました。そんな彼女があんなミスをするなんて今でも信じられません。

ミレーユが空いた皿を片付けようとした時です。バランスを崩したのか、横にあったワイングラスを倒してしまったのです。零れたワインが運悪くスティン兄様の服にシミを作ってしまいました。その時私が感じたのは恥ずかしさでした。例えるなら、自慢のペットがお客様の前で粗相をしてしまったのに近いかもしれません。余りの恥ずかしさで頭が真っ白になった私は、

「スティン兄様になんて失礼を、あなたなんてこの屋敷には必要ないわ、今すぐ荷物をまとめて出て行きなさい」

などと思ってもいないことを言って、ミレーユの頬を叩いてしまっていました。直ぐに後悔しましたが、貴族たるもの簡単にメイドに謝ったりしてはいけないと思い、黙り込んでいると、スティン兄様がミレーユを連れて素早く晩餐の会場を出て行ってしまいました。その時私は見てしまいました、スティン兄様が今まで見たことの無いような冷めた目で私を見ているのを。それっきりスティン兄様は晩餐に戻って来ませんでした。執事に確認した所、馬を借りてそのまま帰ってレーネンベルクへ帰ってしまったそうです。

晩餐はそのまま何も無かった様に進みましたが、私はその間のことをほとんど覚えていませんでした。ただ心の中で何かやってはならない事をやってしまったという後悔だけが渦巻いていました。その晩は嫌な予感がしてあまり眠れませんでした。翌朝目が覚めると真っ先にミレーユがやってきて、昨日の不始末を詫びてくれましたが、私の心は一向に晴れません。そうして、もんもんとしながらその１

日は過ぎて行きました。その夜は悪夢を見た気がします。

そして翌日の朝、目が覚めた途端、ものすごく悪い予感がしました。その予感は午前中の内に現実の物となってしまいました。レーネンベルク公爵家から使者が来て私とスティン兄様の婚約を解消したいと言う申し入れがあったのです。最初お父様からこれを聞いたときは何かの冗談だと思いました、ですがレーネンベルク公爵家からは婚約解消のお詫びとして、相当な額の金貨が送られて来たと聞いたとき、私の目の前は真っ暗になりました。そしてそのまま部屋に駆け込むとベッドにうつ伏せになって何時間も泣きました。その日はそのまま泣きつかれて眠ってしまった様です。

翌朝目を覚ますと、昨日の事が悪夢であったのを祈りながら、近くにいたメイドにレーネンベルクとの事はどうなっているのかと尋ねると、そのメイドは顔を暗くして「情勢に変化は無いようです」、とだけ答えました。昨日の婚約破棄の話は悪い夢では無かったようです、ですが私にとって、その現実は悪夢そのものでした。私はまたベッドにうつ伏せになって泣いてしまいました。それでも午後になると何とか気力を振り絞って起き出し、お父様に婚約解消の理由を聞きに行きました。お父様によると婚約解消の理由は、私がレーネンベルク公爵家の嫁に相応しくないというものでした。それは私にとって信じられない理由でした、なぜなら私は物心つく以前から、貴族として、そしていずれかは貴族の妻として、それに相応しい教養と立ち居振る舞いを見につけていると密かに自負していたからです。お父様も婚約解消を思い止まるように、レーネンベルク家に交渉してくれているそうですが、それも難航しているご様子でした。私は部屋に戻ると、また泣いてしまいました。今までの私の努力は何だったのだろうという、自分の存在意義を疑うような事態に対する悔しさも、一層私に涙を流させます。気が付くとミレーユが食事の乗ったプレートを持って、

「お嬢様せめて食事をなさってください、昨日から何もお食べになっていませんよ」

と食事を勧めてきました。私は、

「食べたくないの」

とだけ、答えました。ですがミレーユは意外と頑固で、

「それでしたら、ヨーグルトとミルクだけでもお召し上がりください」

と更に勧めてきます。気力の湧かない私は諦めて、ヨーグルトとミルクだけを摂りましたが、それ以上は胸が一杯でどうしても食べられませんでした。ミレーユも一応、口を付けたことに安心したのかそれ以上勧めてきませんでした。そしてその日は、ぼーっとしたまま過ぎていきました。でも夜半になると急に涙が溢れてきて、枕に顔を埋めながら咽び泣いてしまいました。

その翌日も気分が優れないままの起床となりました、気力が湧かず、何もやる気がおきず、そのままでいるとまた泣き出しそうな気分でした。そうしていると突然お母様が、騎士の様な格好をして部屋にやってきました。私がその格好に驚いていると、

「エレオノール、安心なさい、私が直接レーネンベルクに行って、婚約解消を取り消させて見せますから」

とだけ言って、部屋を出て行ってしまいました。ミレーユによるとそのまま厩舎に飼われているマンティコアを駆って、風の様にレー

ネンベルクに向かったそうです。お母様は確か今妊娠中だったはずです、マンティコアなんて危険な乗り物に乗って大丈夫なのでしょうか？いえ、今はお母様の活躍に期待していましょう。

その日の夕刻になると、お母様はマンティコアに乗って帰って来られました。服装は騎士の様な格好のままですが、服は土埃だらけでした。何があったのでしょう？

「お母様、その格好、レーネンベルクで何があったのですか？」

「エレオノール、すまない、ラスティンのいや、ラスティン殿の意思は思った以上に固かった、婚約解消を取り消させるのは私にも無理だったわ、ホントに残念だわ、ラスティン殿が我が家の婿に入ってくれれば、我が家も安泰でしょうに」

お母様の男っぽい話し方に驚きながらも、

「そうですか、お母様が直接お話になってもダメだったのですね」

とだけ、答える事ができました。

「ラスティン殿には1年間ラ・ヴァリエール家への出入をご遠慮いただきました、エレオノール、大丈夫よ男はラスティン殿だけではないわ、貴方の器量ならもっと貴方に相応しい男性ときっと出会えるわ！」

そう励ましの言葉を残して、お母様は部屋を出て行ってしまいました。最後の希望も潰えてしまいました。もうスティン兄様と私の仲は戻る事は無いのでしょうか？そう考えるとまた涙が溢れてきます。そうしていると、ミレーユが夕食を持って部屋に入ってきました。

ミレーユは私がまた泣いているのに気付くと優しく私を抱きしめて、

「お嬢様、明日私がラスティン様にお会いして参ります。元はと言えば私がつまらないミスをしたのが原因だったのですから！命に代えてもなんとか色よい返事を頂いて来てみせます」

と言ってくれました。貴族達に前で、叱り付け、叩くまでした私にここまで言ってくれるなんて、感謝の言葉もありません。ですが、お母様が直接話しに言ってもダメだったのに、メイド1人が行ってもどうにかなるとは思えませんでした。ですが、ミレーユはどうしても行くといって聞きません。仕方なくレーネンベルク行きを許しました。明日はミレーユのレーネンベルク行きの為に馬車を用意させなくてはなりませんね。

外伝三話　私のスティン兄様（その１）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／９／１８
ラステイン→ラスティン
そして翌日朝目が覚めた途端→そして翌日の朝、目が覚めた途端
ですがら→ですから
に修正

２０１１／１／５
こっそりイラスト追加

外伝四話　私のスティン兄様（その２）（前書き）

外伝四話ＵＰします。

エレオノールの心境の変化がうまく伝われば良いのですが。

外伝四話　私のスティン兄様（その2）

翌朝になると、ミレーユは決死の覚悟でレーネンベルクに向かっていきました。これが最後の望みです、祈る様な気持ちで私はミレーユを送り出しました。レーネンベルクのお屋敷までは我が家から半日程、うまく話が進めば、夕方には結果が聞ける事になるでしょう、それが良い結果であるにしろ、悪い結果であるにしろ、ミレーユが無理をしない事だけでも祈っておきましょう。

そしてミレーユは予想通り、夕方遅くになって帰って来ました。すぐに私の部屋に来てくれるかと思ったのですが、何故かお父様とお母様の所へ直接向かった様です。そして、夕食も摂らずに待っていると、夜になってやっとミレーユが1通の手紙を持って、私を訪ねて来てくれました。

私が早速首尾を尋ねると、ミレーユは嬉しそうにその手紙を私に差し出しました。その手紙はスティン兄様から私宛の物でした。私は恐る恐る手紙の封筒を開け、手紙の内容に目を通します。そこには、時候の挨拶に始まり、誕生パーティの途中で帰ってしまったことのお詫び、そして今回の一方的な婚約解消に対して非常に残念に思っている事、そして婚約解消にショックを受けて塞いでいる私への励ましの言葉が書かれていました。そこまではいいのですが、その続きが不思議な内容でした。レーネンベルク家の執事の”リッチモンド”という人物の経歴と人となりが綴られていたのです。私は先程までの不安な気持ちを忘れ、首を捻ってしまいました。これはどういう主旨の手紙なのでしょう?私は傍で控えているミレーユに尋ねてみることにしました。

「ミレーユ、貴方はこの手紙の内容を知っているのかしら?」

「はい、存じておりますお嬢様、そして手紙以外にお嬢様に直接お

話するようにと伝言も申し付かっております。お嬢様は手紙をお読みになって、”リッチモンド”という執事の方にどんな印象を持たれましたか？」

「変な事を聞くのね。そうね、この”リッチモンド”という執事は、レーネンベルク家にとってかなり重要な人物といえるのではないかしら」

ミレーユからの奇妙な質問に疑問を覚えながら、思った通りに答えてみます。

「では、この”リッチモンド”という執事の父親が居なかったら、レーネンベルク家が存在しなかったとしたら、どう思われますか？」

「え！」私は思わず息をのみました。

「これからお話する内容は、ラスティン様がお嬢様だけに直接話をして欲しいと言われた伝言でございます」

そう切り出して、ミレーユが話し始めた内容は、私が始めて聞く話で、思ったより深く考えさせられる内容でした。若い公爵を命がけで助ける傭兵、命を助けられた恩に報いる為に、傭兵の妻子に陰ながら援助を行う公爵、不幸にも母親を失った恩人の息子をわが子の様に育てる公爵、大切に育てられた事に恩義を感じて執事として公爵家に仕えることを決心する少年、そしてその少年が”リッチモンド”であり、今現在でも変わらずレーネンベルク公爵家に仕え続けているということでした。

ミレーユの話し方が別段上手だった訳では無いのですが、今の話は心に響く物がありました。ミレーユは話を終えると、再びこう私に聞いてきました。

「”リッチモンド”という執事の方にどんな印象を持たれましたか？」

私は先程の様に気軽に答えを出せませんでした。それでも言葉を選びながらこれに答えます。

「”リッチモンド”という執事は、レーネンベルク家にとって掛け替えのない大切な家族なんじゃないかしら？」

「ラスティン様は、”リッチモンド”さんのことを怖いお爺さんの様だといっておられましたよ。そしてレーネンベルクのお屋敷には、お爺さん以外にも、叔父さんや叔母さん、歳の離れたお兄さんやお姉さんが沢山いるそうです。レーネンベルクは大家族なんですね」

ミレーユは可笑しそうに、こう言いました。

「家族なのね」

私は呟きました。そして自分がしてしまったことを振り返ってみて愕然としました。私は姉とも思って慕っているミレーユを沢山の客人の前で、叱り付け、あまつさえ叩いたりもしたのです。ミレーユはそんな仕打ちをした私の為に単身公爵家へ乗り込みこうして、手紙まで貰ってきてくれました。知らず知らすの内に私は涙を流していました、でもこれは昨日までの涙と違って感謝の気持ちから流れてくるものです。

「ミレーユ、ありがとう、そしてごめんなさい」

急に泣き出した私に慌てるミレーユに対して、私は始めて心から感

謝して同時に心から謝罪しました。そんな私の気持ちが分かったのか、ミレーユは私の頭を優しく撫でてくれます。この数日の心労が癒されて行くようです。

「私の幸せはお嬢様の笑顔を見ることですから、お気になさらないで下さい」

私は暫く、ミレーユにされるがままでした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「所でお嬢様、ラスティン様の手紙についてですが、当然返事をお書きになるのですよね？」

「もちろんお返事は出すつもりよ、でもどんな事を書いたら良いのかしら？」

「それでしたら、こうしたらいかがですか、手紙自体にはお嬢様の体調を心配して頂いたお礼と、我が家の執事達の経歴や人となりを書くのです、そして本当にお嬢様がラスティン様にお伝えしたい事はこのミレーユが直接ラスティン様にお伝えします、これで如何でしょうか？」

「それはちょっと恥ずかしいわね、どうして手紙に直接私の気持ちを書いてはいけないの？」

「それは、奥様がお嬢様のお手紙を検閲、こほん、確認なさる可能性があるからでございます。例えば奥様がお嬢様の手紙をご覧になられて、お嬢様がラスティン様に勧められて執事達に興味をもって

個人的な事まで色々調べている等ということをお知りになったら、どういう事態になると思われますか？」

「うっ！そうね、ミレーユの言う通りにしましょう。執事達について調べる必要があるわね」

私は少し考えこみました、彼らと主従として接する事には慣れていますけど、個人的なことを聞くほど親しい訳ではないので、やっぱり少し気後れしてしまいます。でもきっとスティン兄様は私が、執事達に興味を持ったと知ったら喜んでくれるでしょう。えーい、案ずるより産むが易しといいます、とりあえず実際に彼らと話してみましょう。

「ミレーユ、手が空いてそうな執事を1人呼んできてくれるかしら？」

「早速彼らから話を聞く気になったのですね、直ぐ呼んで参ります」

ミレーユは早足で部屋を出ていきました。そして直ぐに1人の執事を連れて戻ってきました。ですが、私は段々緊張してきてしまいました。まずは名前を聞いて、次は出身地かしら、そして家族構成なんかも聞かなくてはなりませんね、ああ何だか頭の中が混乱してきたわ。その時呼ばれて来た執事が声をかけてきました。

「エレオノール様、何か御用と伺いましたが？」

そう言われた時には、私の頭の中はパニックで真っ白になっていました。そしてつい言葉に出来たのは、

「お茶を一杯いただけるかしら？」

だけでした。その執事は怪訝そうでしたが、

「承知しました、暫くお待ち下さい」

とだけ言って下がって行ってしまいました。その様子を見ていたミレーユは呆気にとられているようです。だって仕方が無いじゃない、頭が真っ白になってしまったんですもの。暫くして気を取り直して、再び別の執事を呼びに行ってもらいました。ですが、執事を前にするとどうしてもうまく質問が出来ません。何度か挑戦してみましたが、どうしても普通に話を聞く事が出来ませんでした。明日こそは何とか少しでも構わないので話を聞こうと思います。

そして翌日になりました、でもやっぱりダメでした。どうしても、どうしても話の切欠が掴めないんです。今まで貴族として振舞う事で保っていたプライドが、逆に私の邪魔をしています。午後になると、ミレーユもさすがに痺れを切らしたのか、

「お嬢様、執事に話を聞くのではなかったのですか？」

と尋ねてきました。それに対して私は、

「だって恥ずかしいんですもの」

と答えることしか出来ませんでした。（きっと今、私の顔は真っ赤だと思います）

そんな私に呆れ顔？のミレーユでしたが、こんな提案をしてくれました。

「お嬢様、それでしたら、まず執事の方々の名前と顔を覚える所か

ら始めてはいかがですか？」

「それくらいなら、大丈夫でしょう、そこから始めてみるわ」

早速ミレーユに執事を順番に呼びに行かせて、各々に名前を聞いていきました。

「貴方名前は何て言ったかしら？」「そう、これからもラ・ヴァリエール家に仕えてくださいね」

を計８回ほど繰り返す事になりました。でもおかげで、執事達の顔と名前は一致させる事が出来ました。次は執事達に出身地を尋ねることになりました。かなり個人的な質問だったので、聞きだすのに苦労するかと思いましたが、軽く出身地という話題を振るだけで、執事達は聞いてもいないことまで、教えてくれたのでとても助かりました。（私に出身地を知られると良い事でもあるのかしら？）そして執事達の語る彼らの故郷の話は、思っていたよりも面白いものでした。その日は執事達に出身地の話を聞くだけで終わってしまいました。明日は、家族構成でも聞いてみようかしら？

１度関門を潜り抜けてしまえば、後は簡単でした。翌日からは家族構成から趣味に至るまでかなり個人的な事柄まで聞き出す事が出来る様になりました。なかなか捉まらない執事には、こちらから出向いて質問を投げかけることも出来る様になりました。そこで気付いたのが、今まで私は執事達のことを、ラ・ヴァリエール家の構成する部品の１つと考えて来たのですが、彼らもやはりひとりひとりの人間で考え方も好みも異なっているんだなということでした。これはスティン兄様に是非お伝えしなくてはなりませんね。

私は、やっとスティン兄様に手紙を書き始めました。内容は私の体

調を心配して下さった事への御礼と、我が家の執事達の紹介でした。そして、私が執事達から話を聞いて感じた事は、こっそりミレーユに伝言してもらう事にしました。ミレーユは翌朝を待って、レーネンベルクへ意気揚々と手紙を携えて出かけていきました。スティン兄様からの返信が待ち遠しいです。

それからわたしとスティン兄様の秘密の文通が始まりました。最初は執事で始まって、次は庭師、その次はコック、そしてメイドと屋敷内のほとんどの人達の話がスティン兄様から紹介されて、それに対して私が、ラ・ヴァリエール家の同じ職についている人達から話を聞いてそれをスティン兄様に報告するの繰り返しでした、ミレーユを通して、スティン兄様の色々なエピソードが伝えられると、私も感じた事をミレーユを通してスティン兄様にお伝えします。そして屋敷中の人々の話が一段落すると、スティン兄様からはレーネンベルクのお屋敷の近くの町マリロットの人々に及ぶと、私も思い切ってお忍びで屋敷を抜け出して近くの町をこっそり訪ねて町の人々と交流を図ったりしました。これは、意外にも私を人間的に成長させてくれたと思います。屋敷の中だけでは気付かない事が沢山ありましたから。

そして、もう直ぐ私の１２歳の誕生日です。私はお父様とお母様に必死でお願いして、スティン兄様のラ・ヴァリエール家への出入禁止を解除してもらいました。やはり落ち込んでいた私をスティン兄様が手紙で慰めてくれて、私が元気を取り戻したという事実が大きかったのでしょう。そしてスティン兄様個人宛に誕生パーティへの招待状をお送りする事にしました。招待状はミレーユに持っていってもらおうと思います。

私とミレーユは誕生パーティの晩餐である企みをする事にしました。これが成功すれば、スティン兄様に私が、貴族としてそしてそれ以

上に人間として成長した事をお見せする事が出来るはずです。生贄の子羊にはオラースになってもらいましょう。彼は最近ラ・ヴァリエール家に仕え始めたばかりですし、思った通りの働きをしてくれるはずです。

そして、今日は誕生パーティ当日です。朝から久々にお会いできるスティン兄様の事が気になって、パーティの準備に手が付きません。それでも時間は過ぎて行き、誕生パーティが始まりました。久々に見るスティン兄様はかなり背が伸びて、凛々しくおなりでした。晩餐が始まると、事態は思った通りに推移しました。オラースは思った以上の働きをしてくれました。（悪い意味ですが）

「ラスティン様、去年に続き我が家の者がとんだ失礼をして申し訳ありません。使用人の不始末は我が家の不始末です、心よりお詫び申し上げます」

私は自分が正しいと思った通りにスティン兄様に謝罪の言葉を言う事ができました。スティン兄様も、

「主役のエレオノール様から謝罪して頂いては、責める訳には行きませんね。実害も無かったですし、謝罪の言葉確かに受け取らせていただきます」

と私の謝罪をちゃんと受け入れて下さいました。

晩餐も終わり、招待客達は順番に帰って行く中、私はスティン兄様に連れられて、屋敷の中庭に来ていました。どうやら私達の企みはスティン兄様にはお見通しだった様です。それでも、

「あの時の君の対応は見事だったよ、実に貴族らしかったし、オラース君への気配りも出来ていた。満点を上げたい位だよ」

と私の振る舞いを褒めてくださいました。それはとても嬉しいことでしたし、同時に誇らしいことでもありました。
そう思っていると、なにやらスティン兄様の挙動がおかしくなっている事に気が付きました。

「エレオノール、あのね、えーっと」

何か言いにくそうにしているスティン兄様を落ち着かせようと、私はスティン兄様の横まで移動すると草の上に腰を下ろしました。そうするとスティン兄様も合わせて、腰を下ろします、そして思い切った様に、

「エレオノール、僕が以前君にあげた指輪はまだ持っているかい？」

とお聞きになりました。私はすかさず、

「はい、もちろん、スティン兄様に頂いた物ですから、もう指には通りませんが、肌身離さずこのようにして」

と言って、ネックレスを外してスティン兄様にお見せします。するとスティン兄様は、

「その指輪、僕に返してくれないかな？」

とおっしゃいました。「え！」私は少し驚いて声を出してしまいました。この思い出の詰まった指輪を返して欲しいとはどういう意味でしょう？まさかと一瞬いやな想像が頭を過りました。でも、この一年間のスティン兄様との文通は私達の間に確かな絆を作り上げているはずです、もし指輪を渡しても不幸な事にはならないと言う確

信があります。私は思い切って指輪をスティン兄様にお返ししました。

指輪を受け取ってからのスティン兄様の錬金は見事と言うほかありませんでした。まさに”魔法”と言った感じです。その手際に見入っていると、いつの間にか、スティン兄様の手の中には生まれ変わった新しい指輪がありました。

「エレオノール、左手を出してくれるかい？」

スティン兄様のおっしゃるままに私は、左手を差し出します。するとスティン兄様は、新しい指輪をゆっくりと私の薬指に嵌めていきました。そして、それを嵌め終わると同時に、

「僕と結婚してくれないか？エレオノール」

と、私に告げたのでした。それを聞いた瞬間、私が感じたのは、歓びと驚きそして奇妙な納得でした。感情の洪水で頭がうまく働きません。その後も、スティン兄様が何かおっしゃっていますが、耳を素通りしていくだけでした。

それからどれ位時間が経ったでしょう、スティン兄様に肩を強く揺すられて、我に返りました。その瞬間抑えていた感情が一気に溢れてきて、涙となって流れ出しました。スティン兄様は涙に驚いたのか、

「ごめん、エレオノール、痛かったかい？」

と私の体を気遣ってくれます。私は首を振ることでそれを否定して、何とか声を振り絞って、

「痛かったんじゃないの、嬉しかったの」

とだけ言う事が出来ました。するとスティン兄様は突然私の身体を強く抱きしめてくれました。すごく嬉しかったのですが、同時にすごく恥ずかしかったので思わす、

「今度は痛いよ、兄様」

と言ってしまいました。いやだ、さっきから言葉使いが子供みたい。スティン兄様は直ぐに手を緩めてくれましたが、私は何だか夢の中にいる様でした。知らず知らずの内にまた涙が流れ落ちます、スティン兄様はその涙を優しく拭いとってくれました。そしてスティン兄様は私の瞳を熱心に見詰めてくれます、私もスティン兄様の瞳から目が離せません、その瞳に吸い込まれる様に、私の顔がスティン兄様の顔に近づいてきます。多分スティン兄様も同じなのでしょう、そして私達は最初の口付けを交わしたのでした。

私はこの幸せな瞬間を一生忘れないと思います。

外伝四話　私のスティン兄様（その2）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

エレオノール編も今回で終了です。

２０１０／９／１８
意気揚々と－＜決死の覚悟で
渡しに差し出しました→私に差し出しました
変な事を聞くのね、そうねこの→変な事を聞くのね。そうね、この
話始めた→話し始めた
自分がしてことを→自分がしてしまったことを
使え始めた→仕え始めた
ラスティン様去年に続き我が家の者がとんだ失礼をして申し訳ありません、→ラスティン様、去年に続き我が家の者がとんだ失礼をして申し訳ありません。
に修正

第二十話　ラスティン１４歳（カトレアの病）（前書き）

第二十話ＵＰします。

第二十話　ラスティン１４歳（カトレアの病）

エレオノールの誕生パーティの翌日、ラ・ヴァリエール公爵家とレーネンベルク公爵家から正式に僕とエレオノールの婚約が発表されました。今回は口約束などではなく、両家の間で正式な契約がなされました。これで後には引けなくなりました。（もちろん後に引く積もりはありません）

公爵家の長子同士の結婚という事で、トリステイン中の貴族を始め、王宮からも祝いの使者が来るほどでした。

世間ではそんな目出度い雰囲気が漂う中、僕は病中のカトレアを母上と一緒に訪ねていました。カトレアは1年会わない間にかなりやつれた感じです。

「やあ、カトレア、久しぶりだね」

「スティンお兄様、お久しぶりです。リリア様、この間はお手数お掛けしました」

「病気の方あまり良くないと聞いたんだけど、病状はどうだい？」

「ここの所はあまり良くないです、昨日のお姉さまの誕生パーティにも参加できなかったですし」

カトレアは悲しそうにしています。

「もし良かったらなんだけど、病状を教えてくれないかな？僕はこれでも水のトライアングルまで魔法が使えるから、何かの役に立てるかもしれないよ」

カトレアは恥しそうにしていましたが、それでも気丈に病状を教えてくれました。食欲不振，全身倦怠感，黄疸，腹水がたまる，吐血，下血，貧血が最近の症状だそうです。おかしいな?母上から聞いたのと症状が違っている気がします。

「触診したいんだけどいいかな?」

「しょくしんってなんですか?」

「触診っていうのはね、体を触って悪いところが無いか調べる診察の方法なんだよ」

「触るんですか?ちょっと恥しいけど、スティン兄様なら我慢します」

「偉いな、カトレアは、それじゃ触るよ、痛いところがあったら直ぐに言ってね」

僕は聞いた、症状から内臓系の病気と判断して、お腹を中心に指で圧力をかけて行きます。丁度お腹の真ん中辺りを押したときカトレアがくぐもった声をあげました。

「痛かったかい、ごめんね」

痛がった場所は、胃か肝臓辺りかな?レントゲンでも撮れれば、内臓の状態を確かめる事ができるかもしれないのに、そこまで考えてふと物質の内部が透視できる呪文があった事を思い出しました。人体に効くかは分かりませんが、臓器とかは固体のはずです、可能性に賭けてみましょう。

「分析（アナライズ）」

これは当たりでした、内臓がくっきりと透けて見えます。胃の方には特に問題は見えませんでしたが、肝臓の方は一部の色が変色して見えます。これが患部なのでしょうか？

「母上、ここを見て貰えますか？」

「今の呪文で何か見えているの？私には見えないんだけど」

「そうか、分析（アナライズ）は掛けたメイジにしか見えないんだ、えーっとですね、内臓の一部が変質している様なんです。もしかしたら”がん”と呼ばれる病気なのかもしれません」

「内臓が変質ですって、それだと活性化系の治癒呪文を使うと症状が悪化する可能性があるわね、自然治癒力を高めて、変質した内臓の細胞を正常に戻すしかないかもしれないわね。ラスティン貴方の”アムリタの雫”もってきているわね？カトレアに服用させて！」

僕はもって来ていた、”アムリタの雫”をカトレアに飲ませます。

「母上飲ませました」

「そう、じゃあもう一度、アナライズを使って患部を詳しく教えて」

「分析（アナライズ）」

僕は再度呪文を唱え、そして患部と思われる所を指差します。

「この辺りです母上、そして体の奥１５サント位の深さです」

「ありがとう、ラスティン、少し黙っていてね」

母上は真剣な顔で、呪文の詠唱を開始します。僕は患部にどんな変化があっても見逃さないようにじっと肝臓を見詰め続けます。母上の治癒魔法が発動し始めてから、暫くはあまり変化は見られませんでした。しかしもう暫くすると、患部と思われる部分が確実に小さくなって行くのが分かります。そしてどれ位時間が経ったでしょう、とうとう患部と思われる部分は消滅してしまいました。

「母上、変質していた部分は正常になりましたよ」

そう声をかけると、母上は崩れ落ちるように椅子に座り込みました。かなりの魔力を消費した様です。

「カトレア、気分はどうだい？」

あまりに突然の展開に付いて来れなかったのか、カトレアはまだぼ～っとしています。試しに肝臓の辺りを押して見ましたが、先程の様に痛みを感じることは無いようです。

「カトレア、カトレア」

僕は何度かカトレアの名前を呼んで、肩を軽く揺すってみます。

「あ！スティンお兄様、私はどうしたんでしょう？」

「母上が治癒魔法を掛けてくれたんだよ。気分はどう？」

「はい、さっきよりかなりましになりました。まだ体のだるさは残っていますけど、気にならない位です。もしかして私の病気は治ったんですか？」

カトレアが明るい声で問いかけてきました。ですが、もしあれが”がん”だとすれば転移の可能性が捨て切れません。

僕は努めて明るい声で、

「一番悪い所は治ったと思うよ、だけどそこ以外にも悪い所があるかもしれないんだ、もしまた調子が悪くなったりしたら、すぐ御両親に相談するんだよ」

とだけ答えるしかなかったです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

治療が一応終わった後、僕と母上はラ・ヴァリエール公爵夫妻と話し合いを行いました。

母上がまず、こう切り出しました。

「公爵、最近カトレアの治療を行ったのは誰ですか？」

「ガリアから招いた高名な水のスクエアメイジだが、それが何か？」

「今すぐその者を解雇なさって下さい」

「リリア殿、藪から棒になんだね？」

「そのメイジの治療が始まってから、カトレアの病状が悪化したのではありませんか？」

心当たりがあったのか、公爵夫人が話しに割り込んできました。

「もしかして、あのガリアのメイジのせいでカトレアの病状が悪化したというの、リリア？」

「そうよカリーヌ、多分吐血しているのを見て、単純に活性化系の治癒魔法を使ったのね。あのまま活性化系の治癒魔法を使われ続けていたら、確実にカトレアは死んでいたでしょうね。ラスティンが送っていた”アムリタの雫”は飲ませて居たんでしょうね？あれは自己治癒力を高める働きがあるから、ちゃんと服用していれば、あそこまでひどい事にはならなかったはずだわ」

「・・・」

公爵夫妻からは返事がありませんでした。母上はこれを無視して話を続けました。

「今日の治療で、重症化していた内臓の治療は終わったわ、完全に治ったかどうかは経過を見なくてはならないでしょうね。でも問題はそれだけでは無いみたいなの。ラスティン、さっきの”がん”と転移の話を公爵夫妻にしてさしあげて」

「はい、母上。ラ・ヴァリエール公爵夫妻は”がん”という病気を聞いた事がありますか？」

公爵夫妻は揃って首を振ります。

「”がん”という病気は、悪性腫瘍が体の一部に出来ることを言います。この悪性腫瘍が大きくなると人の体の正常な働きを阻害して、終には体が衰弱して死に至ります」

”死”と聞いて公爵夫妻の顔は一気に青ざめました。

「この悪性腫瘍自体は、適切な治療を、たとえば今日母上が行ったような治療ですね、行えば取り除く事も可能なんです。しかし”がん”の恐ろしい所は、悪性腫瘍が血液等に乗って体の別の場所に転移する事があるという所なのです。カトレアの肝臓にはかなり大きな悪性腫瘍ができていたようです。多分間違った魔法治療による悪影響もあるでしょうが、転移が起こっても不思議では無いほどの大きさだと思います。」

「という事は、また別の場所で悪性腫瘍が発生する可能性があるというのかね、カトレアを健康な体に戻す方法は無いのかね！」

「公爵落ち着いてください、悪性腫瘍が転移したとしても、直ぐに対処すれば大事にはなりません。ですが、カトレアはまだ成長期ですから、悪性腫瘍の成長も速いです。可能であれば最低でも月1回の検査をお勧めします。また先程母上が言った様に、”アムリタの雫”は飲ませれば、カトレア自身の治癒力を高めることが出来るので、転移の可能性を下げる事も可能だと思います」

「そうか」

それだけ言って、少しは安心したのか、ラ・ヴァリエール公爵はどっかりとソファーに腰を下ろしました。すると今まで大人しく黙っていた公爵夫人が、急に立ち上がって母上に謝罪し始めました。

「リリア、この間は失礼な事言ってしまって、ごめんなさい」
「役立たずって言われたこと？それならば事実だったから気にしていないわ、それに子供を失いそうになっている親の気持ちは痛いほど分かるから」
そう言って母上は僕の頭を優しく撫でます。
「でも今日の一番の功労者はラスティンよ、私だけだったら前回と同じで原因不明の病気では精々内臓の治癒力を高める以上の治療は出来なかったでしょうから」
「そう、ラスティン殿、私は貴方にかなり意地悪な事をしてきた自覚があります。それなのに、娘のカトレアの為に労を取ってくれた事に感謝します」
公爵夫人が僕に対して、頭を下げてきました。あのカリーヌさんがそんな事をするとは思ってもいなかったので、僕も慌てます。
「えっ、あ、そうだ、お忘れかもしれませんが、カトレアは僕にとっても、義理の妹になるはずの娘ですよ、その娘が苦しんでいるなら、出来るだけの事をやるなんて当然のことですよ」
「ラスティン殿が、エレオノールを貰ってくれて本当に良かった」
カリーヌさんの目に涙が浮かんでいるのを始めてみました。婚約破棄の時といい、カリーヌさんは本当に”母親”なんだなと思いました。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝

それから月に1度、母上と僕とでカトレアの診察を行う事にしました。母上の治癒魔法で病状は劇的に回復したのですが、母上から最初に聞いた症状、発熱，貧血，倦怠感，動悸，めまいは依然治りません。毎回の診察で、腫瘍が見つかると治すということを繰り返して症状が悪化する事はないのですが、根本解決には至りません。何か見落としがあるのかもしれませんが、前世の知識でも思いつく病気がありません。カトレアも”アムリタの雫”を服用して、月1度の診察以外は、多少体の弱い普通の少女として暮らして行くには支障もない様なので、暫くは現状のまま様子を見るしかないのかもしれません。

第二十話　ラスティン１４歳（カトレアの病）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／９／１８
見え無い→見えない
カトレア気分はどうだい？→カトレア、気分はどうだい？
そこ意外にも→そこ以外にも
悪化したした→悪化した
無いみたいなの、ラスティンさっきの→無いみたいなの。ラスティン、さっきの
エレオノールも貰ってくれて→エレオノールを貰ってくれてに修正

登場人物一覧（二十話まで）（前書き）

ちょっとしたニアミスが発生したので、急遽作成しました。

登場人物一覧（二十話まで）

主人公とその家族

＊　ラスティン・ド・レーネンベルク
主人公です。前世では、如月更夜（キサラギコウヤ）という日本人でした。
基本的に真面目かつ勤勉です。彼が幾つもの試練を乗り越えて成長していく様子がうまく書けるといいのですけど。

＊　テオドラ・ユーニル・ド・レーネンベルク
ラスティンの父親です。レーネンベルク公爵家現当主として統治能力に優れ、ラスティンの活動を陰ながら支えてくれています。二つ名の＞山津波＜は彼が得意とするトライアングルスペルです。

＊　リリア・ド・レーネンベルク
ラスティンの母親です。二つ名の＞快癒＜が示す通り、水メイジで治癒魔法に関してはトリステインでもトップクラスです。

＊　ノリス・ド・レーネンベルク
ラスティンの弟です。出番が全然ない不幸な子です。外伝で出番を用意してあげる予定です。

＊　ベルナール・ド・レーネンベルク
ラスティンの祖父です。先代国王フィリップの腹違いの弟で、レーネンベルク家を興した人物です。若い頃に戦争で後述のリッチモンドの父親に命を救われ、それ以来、平民の為の治世を布くようになりました。作中には書いてありませんが、既に故人です。

＊　アネット・ド・レーネンベルク

テオドラの前妻、病気により死亡。名前だけの登場です。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝

レーネンベルク家の関係者

＊　リッチモンド
レーネンベルク家の執事です。レーネンベルク家の人々を陰で支える人物。
彼の父親がいなければ、レーネンベルク家は存在していませんでした。

＊　ニーナ
元ラスティン付きのメイド兼護衛。ラスティンは彼女の事を歳の離れた姉の様に慕っていました。現在は結婚して一児の母。

＊　ジル
レーネンベルク家の元執事です。リッチモンドの先輩に当たります。

＊　セルジュ
レーネンベルク領の財政を一手に扱う人物。ちなみにニーナの夫は彼です。

＊　マティアス
レーネンベルク魔法兵団の団長です。テオドラの家臣であり、有能な土メイジでもあります。ラスティンのお目付け役でもあります。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝

家庭教師と魔法学園の関係者

＊　マクスウェル・ド・ノワール

ラスティンにコモンマジックを教えた人物です。彼がいなければ、ラスティンの人生は変わっていたかもしれません。元男爵で既に故人。

＊　アルノー先生

＊　ファブリス先生

＊　セザール先生

ラスティンの系統魔法の家庭教師たち、名前だけの登場。（今考えると名前を付けなくても良かったかも）

＊　クロード

レーネンベルク魔法学園の学園長を務める人物です。ノワール魔法塾の出身者。

＊　ガストン

ラスティンに錬金のヒントを与えてくれた人物。彼の開発した呪文が、ラスティンの活動の原動力になっています。現在は、レーネンベルク魔法学園の教師をしています。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

ラ・ヴァリエール家とその関係者

＊　エレオノール

本作のヒロインです。原作とは全く別人の様です。ラ・ヴァリエー

ル公爵家の長女。
ラスティンと再婚約中です。ラスティンとの結婚は何時ごろになるんでしょうね？

＊　ラ・ヴァリエール公爵
エレオノールの父親です。重要人物のはずなのに、影が薄いですね。

＊　ラ・ヴァリエール公爵夫人(カリーヌ)
エレオノールの母親です。原作通り、キツイ性格をしています。
ラスティンと決闘をしたりしました。どれでもやっぱり母親です。

＊　カトレア
エレオノールの妹でラ・ヴァリエール公爵家の次女。謎の病に罹っています、彼女の病を治してくれる人物は？

＊　ルイズ
エレオノールの妹でラ・ヴァリエール公爵家の三女。ご存知の通り原作のヒロインです。
本作での彼女の立ち位置は微妙かもしれません。

＊ミレーユ
エレオノール付きのメイド。ラスティンとエレオノールの仲を取り持ちます。

＊　オラース
ラ・ヴァリエール家の新人召使い。生贄の羊役です。ちなみに彼の名前のせいで、この登場人物一覧を作るはめになりました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ローレンツ商会関係

＊　ローレンツ

ローレンツ商会の商会長で、転生者でもあります。既に物語への干渉を行っている人物です。

ちなみに前世の名前は長谷部恭介で、商社営業マンをしていたという設定です。

＊　エドモン

ローレンツ商会に所属する商人、レーネンベルク領を中心に活動しているようです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝

原作登場人物

＊　アニエス

”ダングルテールの虐殺”が起こらなかった為、普通の村娘として生活しています。

＊　ジャン・コルベール

魔法研究所実験小隊は解散に伴い、何故かトリスティン魔法学院の教師に収まりました。

ガストンと組ませると面白い発明をしてくれそうですね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝

その他

＊　ニルヴァーナ
ラスティンが持つ杖の精霊、植物と会話する事が出来る。これを利用して、植物の促成栽培が行える。

＊　マルト
道に迷ったラスティンを助けてくれた老婆、魔力回復補助薬”シフの涙”のヒントをくれた人物。

登場人物一覧（二十話まで）（後書き）

オーラスとオラース危ない所でした。

第二十一話　ラスティン１４歳（そうだ学校を作ろう）（前書き）

第二十一話ＵＰします。

第二十一話　ラスティン１４歳（そうだ学校を作ろう）

最近は個人的な事でバタバタしていたので、久々に、魔法兵団と魔法学園について、お話しておきましょうか。

レーネンベルク魔法兵団に関しては、順調に所属する平民メイジを増やしています。その数は５０００人を突破しようとしています。さすがにここまで団員が増えると、王宮へのジュラルミン盾とチタン剣の納品だけでは食べて行けなくなりつつあります。別途何か収入を得る手を、考える必要があるかもしれませんね。

団員達の錬金の腕の向上は目を見張るものがありました。たとえば、此処に一本の鋼の剣があったとします。これを団員達に見せて、これを錬金で複製させてみると、翌日には２０００本の剣が見事に複製されています。試しに、直径３０サント程の鍋の設計図を書いて、これを材料アルミで作ってみる様に指示してみたら、翌朝には３００個近い設計図通りのアルミ製の鍋が完成していました。（ちなみに鍋も剣も商人のエドモンさんに買い取って貰いましたがあまりに大量だったので、エドモンさんだけでは売り切れず、ローレンツ商会全体で売る事にするそうです。結構、買い叩かれましたが兵団には嬉しい臨時収入でした）

魔法兵団長のマティアスに大量生産の秘訣を尋ねてみると、鉄や鋼や銅，アルミなどは今までの訓練で錬金したものがかなり余っていたそうで、基本的に成形（フォーム）するだけで生産できたそうです。他にも、得意な錬金の異なるメイジたち１０人ほどで班を作り、班ごとで出来や作成数を競わせる等した為、生産速度や品質もかなり向上したとのことです。

レーネンベルク魔法学園の方は、相変わらず順調の様です。ただ問題が無い訳では無く、毎年入園希望者が数百人いるのに対して、学園で受け入れ可能なのは２００人ほどで、入学までに数年待ちが当

たり前になってしまっています。いっそのこと第二学園でも作ってしまいましょうか、幸い教師役は学園の卒業生を魔法兵団から引き抜けば対応出来そうですし、問題は何処に作るかですね。マリロットの町周辺は既に、兵団の工房で一杯なので、広い土地が取れそうもありません。これは父上に相談して知恵を借りた方が良いのかもしれませんね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

僕個人で進めている、魔法宝石（マジックジュエル）”リリア”に関してですが、こちらはとても順調です。
ダイヤモンドに関しては容易に錬金可能になりました。あとはこれに色のバリエーションを付けるだけでした。色々な元素を、結合（コンポーズ）することで、色々な色のダイヤモンドを生成可能になりました。グリーンダイヤ、ブルーダイヤ、ピンクダイヤ色々なダイヤが生成可能になりました。
これによって、低価格な水晶（クォーツ）系、中価格の鋼玉（コランダム）系、高価格の金剛石（ダイヤモンド）系と分類が出来て、はっきりと客層を分ける事で、裕福な平民の商人から、大貴族まで多くの顧客を得る事が出来る様になりました。
社交界では、最低でもルビーやサファイアといったコランダム系の魔法宝石（マジックジュエル）が主流となり、結構な金額が僕個人の懐に入ってくる事になりました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

僕は魔法宝石（マジックジュエル）で手に入れた資金を使って、あることを計画してきました。それは、メイジではない平民でも通える学校を作ろうという

計画でした。以前ジュラルミン盾とチタン剣の材料として、大き目の石を1スゥで多数買い取るという御触れを出した時に知ったのですが、トリステインの識字率は１０％以下とそれは酷いものでした。そこで考えたのが、平民でも無料で学べる公立の学校というものでした。平民を学校で学ばせるという話を父上にしたら、あきれた様な声で”その学校の資金はお前自身のものだろう？お前の思う通りにやったらどうだ”と消極的な賛成を貰ったので気にせず計画を進める事にしました。

学校を建設する上で必要なのが、学校を作る土地、生徒に授業を行う教師、教材、後は給食と言った所でしょうか。

土地に関してはマリロットの町の近くの土地を予め確保しておいたので、問題はないでしょう。

教師に関しては、レーネンベルク魔法学園の卒業生で比較的魔力の低い者を教師役にしようと思っています。

教材に関してが一番の問題です、学校で教えるのは、読み書きと初歩の算数の予定なので本格的な教科書などは必要ありませんが、読み書きや簡単な計算が書ける物が必要となります。この時代、紙と言うものは貴重品のため、黒板を使用する事にしました。教師役が板書するための大きな黒板と、生徒が練習する為の小さな黒板を大量に手配しなくてはなりませんでした。これにはエドモンさんを通してローレンツ商会の力を借りることになりました。（あまり、ローレンツ商会に借りは作りたく無いのですが）

給食に関しては、朝昼晩と三食用意することにしました。貧しい農家などでは、子供も立派な労働力です。その子供達を学校に通わせるのには、一日の食費が丸々浮くという利点を強調するしかなかったと言うのが実際の所です。

そして今年、2年越しの学校設立計画が、実行に移す事ができました。学校の建物はマリロット近郊の高台に建設しました。収容生徒

数は３００人×３学年の計９００人としました。
教師役のメイジたちも自分の魔力が低いという自覚があった為か、いやいやながらも教師役を引き受けてくれました。黒板の準備も万全で、使用するチョークにいたっては、魔法兵団の有志が錬金で大量に用意してくれました。給食に関しては、マリロットの町のご婦人方がボランティアで料理を引き受けてくれたので大幅に経費が削減できました。

レーネンベルク公立学校マリロット校の出だしは順調と言って良いでしょう。この勢いにのって、レーネンベルク領内に最低でも、五つの学校を開校したいと考えています。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

レーネンベルク公立学校の開校準備に忙しい中、珍しい方が僕を訪ねてきました。お客様はローレンツ商会のローレンツさんでした。

「ローレンツさんお久しぶりですね」

「ラスティン殿ご無沙汰しております」

「エドモンさんには色々無理を聞いて貰っています、ローレンツさんには頭が上がらないですね」

「ははは、鋼の剣とアルミの鍋に関してはこちらもかなり儲けさせて頂きました。代わりといっては何ですが、黒板の仕入れにはかなり値引きさせていただきましたよ、なんでしたら黒板の製法に詳しい者を紹介いたしましょうか？」

「本当ですか？黒板の製法は分からなくて困っていたんですよ、ぜひ紹介して下さい。それなりのお金は払わせて頂きますから」

「そうですか、それは紹介する甲斐があるというものです」

「ところでローレンツさん、この時期に僕を訪ねて来ると言う事は、”学校”関係で何か大きな取引でもあるのでしょうか？まだ約束の5年には時間がありますしね」

「私がラスティン殿に会いに来た直接の理由は”リリア”に関する物なのです」

「”リリア”ですか？でもあのブランドは基本的に口コミのみで展開していますが？」

「そうですな、ラスティン殿も良く考えられたようです、トリスティン国内であれば、”リリア”ブランドの魔法宝石（マジックジュエル）のアクセサリーに対して、我が商会が関与できる場面は少ないでしょうな」

「トリスティン国内であればですか。なるほど、トリスティン国外に関しての販路は考えていませんでした、さすがはローレンツさん目の付け所が違いますね」

「商人としては当然考える所です、どうですかな？”リリア”ブランドの魔法宝石（マジックジュエル）のアクセサリーを扱う独占権をローレンツ商会に与えてはもらえませんかな？」

ローレンツさんの目が抜け目無さそうに閃きます。さて僕はなんと回答しようかな？

「条件次第では独占権お渡ししても構いませんよ？ローレンツ商会は僕にどんな利益をもたらしてくれるのでしょうか？」

「ほほう、ラスティン殿も商人らしくなって来ましたな。そうですな、こちらから提供できるのは、トリステインの貴族の方々が商会にした借金の債権をそのままお譲りしましょう。それに加え、アクセサリ専門のデザイナーを紹介しましょう。この2点で如何ですかな？そして売値の一割を我が商会の取り分とさせていただきたいのですが」

「トリステインの貴族の方々が商会にした借金というのは何ですか？」

「トリステインの貴族の方々は、領地を治めるのがあまり得意ではないようですな。豊作の年は問題ないのですが、不作の年などは我が商会に借金を申し込まれる方が多くお見えになります。また最近は、分不相応の魔法宝石（マジックジュエル）に手を出して借金の額を増やされている貴族の方も多い様です。クルデンホルフ大公国に借金を申し込んでいる貴族の方も多い様ですが我が商会に比べれば、大した金額ではないですな」

ローレンツさんはニコニコした顔で、提案してきます。ですが僕はローレンツさんの提案を言葉通り受け入れることに抵抗を感じています。

「ローレンツさん、今おっしゃった2点ですが、僕にとってあまり利点では無いようです。この国の貴族達の借金の債権を譲渡していただいても、それが本当にお金になるかは不確定ですし、その借金が”リリア”を購入するためになされたとなると、その債権を僕が持つのは非常に外聞が悪いでしょう。それに、アクセサリー専門の

デザイナーに関してですが、トリスタニアの芸術家などに連絡を取りアクセサリーのデザイナーを見つけた所です。わざわざ紹介していただくまでもないと言った所なのです。それに各国にパイプを持っているのはローレンツ商会だけではありませんしね」

多少はったりも入っていますが、ここまで言えばローレンツさんも本心を語ってくれるでしょう。さて、ローレンツさんはどう出てくるかな？

「何とか合格ですかな、自分の持ち札をわざわざ相手に知らせるのは感心できませんが、それ以外は”商人”をしても十分な見識と言えるでしょうな」

あれ？もしかして僕、試されていたのかな？

「ローレンツさん、僕を試しましたね？」

「はっはっはっ」

ローレンツさんは可笑しそうに笑っています。ローレンツさんは笑いを収めると、真面目な顔になってこう話を振ってきました。

「ラスティン殿、今のトリスティン王国の政治制度をどう思われますかな？」

急に政治の話になってどうしたんでしょうね？とりあえず当たり障りの無い回答をしましょう。

「前世で言う中世の封建制度ですね」

「その通りですな、封建制度の次にくる政治制度はご存知ですかな？」

「中央集権ですか？」

「さよう、中央集権です。現在のトリステイン王国における封建制度は限界に来ていると私はみています。日々の享楽にうつつを抜かし領民の生活を省みない貴族の多い事、一部の例外の貴族を除きほとんどの貴族が、トリステイン王国の国力を弱めていると言っても良いでしょう。彼らは自分で自分の首を絞めている事に気付いていないのです」

確かに、どこぞの貴族が平民を虐待していると言う話は、魔法兵団の団員達から頻繁に聞かれる話です。でもなぜ今ここでその話をするのでしょうか？

「ローレンツさんのおっしゃる事は分かります。僕もできれば虐げられている領民達を何とかしたいと思っていました。ですが何故ここでその話が？」

「分かりませんかな？例えばここの1人の男爵が居たとしましょう、彼は領地の経営に失敗し、とある商人から借金をしました。一時しのぎではありますが、ここまではよくあることです。しかしその男爵夫人が高級なアクセサリーを欲しがり、商人からさらに借金を重ねて、アクセサリーを購入しました。

これはあまり褒められたことではありませんが、よくある事でもあります。そして借金の返済日になりました。よほど運が良くない限り、男爵は借金を返せません。男爵は借金の返済期限の延長を商人に申し入れますが、商人は聞き入れません。商人は国に訴えを起します、国としては高々平民の商人よりは貴族の男爵に有利な決定を

下すでしょう。」

「それで商人はどうするのですか？」（確かにありそうな話ですね）

「これでは商人は泣き寝入りですな、そこで債権を別の貴族それもかなり身分の高い貴族に売却します。この身分の高い貴族が、国を通して男爵に借金の返済を求めたらどうなるでしょう？運がよければ、国が男爵の借金を肩代わりしてくれるかもしれませんが男爵の国に対する借金は残りますな。運が悪ければ、領地を運営する能力なしとして、領地を召し上げられてしまうかもしれません、当然男爵の土地は身分の高い貴族の物となるでしょう。この身分の高い貴族は、手に入れた元男爵領を国に譲渡します。このようなことが、何十件も起こったらどうなるでしょう？トリステイン王国の中央集権化が一気に進むと思いませんか？」

「ローレンツさんがおっしゃるように、うまく進むとは限りませんが、うまく進んだとしても、”身分の高い貴族”は男爵から恨まれる事になりますね」

「ラスティン殿、人に恨まれる事なく事をなすことなど不可能ですよ。ラスティン殿もいずれ公爵位を継いで、国政に深く関わっていく事になるでしょう。その時国が十分な力を備えていなければ、行いたい政策1つも満足に行えなくなってしまいますぞ！それともラスティン殿はレーネンベルクが栄えればそれだけで良いとお考えですかな？酷い領主の下で苦しんでいる領民達をお見捨てになるのですかな？」

ローレンツさんの言葉は僕の胸に突き刺さります。そうだ、僕が理想としていたのは、レーネンベルクだけの繁栄なんかじゃない、最低でもトリステイン王国、できればハルケギニア全体の繁栄でした。

「ローレンツさん、ありがとうございました！僕は目が覚めた気分です。最近の僕はレーネンベルクの繁栄で頭が一杯になっていました。せめてトリステイン王国の繁栄と言った目で見て行動しなくはいけませんね」

「ラスティン殿の行いで虐げられている平民が少しでも救われる事を祈っておりますぞ、そして陰ながら幾ばくかの手伝いもさせていただきましょう」

「先程の、”リリア”の国外での専売権と、トリステイン貴族達の借金の債権を譲渡するという話、もう少し詰めさせて貰えませんか？」

「構いませんが、どんな所がご不満ですかな？」

「先ずできれば、借金の最終的な取立ての時期を一時期に集中させて欲しいのです。これは借金の期限を延期して、返済時期を合わせ込むことで可能でしょう？」

「それは可能ですが、どうしてその様な方法を取るのですかな？」

「もしかすると別の商人や貴族が借金を肩代わりしたりするかもしれません。でもそれが同時期になってしまえば用意できるお金に限度があります。多くの借金した貴族達は他からまともに借金など出来なくなるでしょう？」

「ふむ、そこまで考えますか」

「もう1点なのですが、先ほど話しに出た、クルデンホルフ大公国

に借金を申し込んでいる貴族の方ですが、こちらの債権も買い取る事は出来ないでしょうか？同じように他の商人に借金をしている貴族がいたらそれも、債権を買い取って欲しいのです」

「国中の貴族の借金を一まとめにするというのですな、それにはかなりの資金が必要となりますが？」

「そうでしょうね、”リリア”の売り上げの内１割をローレンツ商会の取り分として、売り上げの残りは債権の買取に回して貰って構いません」

「ラスティン殿本気のようですな、わかりました。トリステイン王国中の貴族の借金の債権をすべてラスティン殿の元に集めてご覧にいれましょう」

「できれば、返済の期日が来るまでは、対外的には債権を買い取ったのはローレンツ商会という事にしておいてください」

「そうした方が良いでしょうな」

「そしてもう１つですが、ローレンツ商会が持つ情報網を僕にも見える様にしていただけませんか？」

ローレンツさんの目が急に厳しくなりました。

「商人にとって情報が命だと言う事は知っています。しかし僕はトリステイン国内の出来事に余りにも無知ですし、国外に関してはほとんど情報らしい情報を得る事ができません。このような状態では、とてもトリステイン王国を栄えさせる事など不可能だと思うのです。その点、ローレンツ商会であればハルケギニア中に支部を持ち、情

報伝達の質，速度共に優れていると確信しています。トリステイン王国を変えようとしている僕に力を貸して貰えないでしょうか？」

ローレンツさんは相変わらず難しそうな顔をしてしたが、何か決心したようにうなずくと、

「わかりました、ローレンツ商会の情報網をラスティン殿にお貸ししましょう、ただしラスティン殿が情報網から得たことで、ローレンツ商会が不利益を被った場合は、情報網を貸すと言う話は無かったことにさせていただきます」

「はい、それは当然だと思います。それともう１つ、アクセサリ専門のデザイナーを紹介していただくという話ですが、是非紹介して下さい」

「は？」

「先程心当たりがあると言ったのはブラフですよ、全く心当たりは無いんです」

「ははは、これは一本取られましたな、いいでしょう是非紹介させていただきます」

場の雰囲気が一気に和やかなものになった気がします。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

それから少し雑談をした後、ローレンツさんが突然、学校の話を持ち出してきました。

「ラスティン殿はレーネンベルクに公立の学校を作られたのですね？」

「はい、まだ1校ですが5校まで増やしたいと考えています。3年制なので、基本的な常識と、読み書き、簡単な算数などしか教える事は出来ないと思いますが、国語，算数，理科，社会といったところですしょうか？小学校3年生程度の知識を広めたいと思います」

「もっと高度な教育をする予定はないのですかな？」

「広く浅くが当面の目的ですからね、それにこれは完全に僕個人が行う慈善事業の様なものです。一応父上の許可は頂きましたが、資金がそこまで続かないと思っています。先程の話で、国外の”リリア”の売り上げも当てに出来なくなってしまいましたからね」

僕は苦笑します。本当はもっと高度な教育を行いたかったのですが、無い袖は振れないということですね。するとローレンツさんが、急に僕の目を見詰めながら、

「これはローレンツ商会としてではなく、ローレンツ個人としてなのですが、ラスティン殿が行う学校教育に援助させて頂けないでしょうか？」

と尋ねてきました。

「え！それは願っても無い事ですが、何故援助して頂けるのでしょうか？」

「わたしは若い頃から、商売一本で生きてきました。時には危ない

商売にも手を出したりしましたが、それでもなんとかこの年になるまで商売を続ける事ができました。しかしこの年になると、もう先が長くない事は分かってきます、幸い息子が後を継いでくれる様で、商売の方は問題ないのですが、これまで貯めてきたお金をそのまま息子に残したのでは、息子の為にならないと思いましてな。何か生きたお金の使い方が無いかと考えていた所で、ラスティン殿が行う学校教育の話が耳に入ったのです」

ローレンツさんは、ここまで話すと思い出した様に苦笑しながら話を続けました。

「実を言うと、これまで付き合いのある色々な国の貴族達に、学校を作らないかと持ちかけたことが何度もあったのです。しかし、領主をいうのは領民が知恵を付けるのを、恐れるようで一度として学校の話が実現した事はなかったのです。そこに今回の学校建設の話を聞いて渡りに船と思った訳なのですよ」

ローレンツさんの申し出は僕にとっても渡りに船でした。出来れば小中高校の様に上位の学校も用意して、才能のある学生にはより多くのことを学んで欲しかったからです。優れた学生などには奨学金を用意するというのも有りかもしれません。

「ローレンツさん、お申し出あり難く受けさせていただきます」

「そうですか、これで長年の思いが叶うということですな」

ローレンツさんは嬉しそうに笑っています。こんなローレンツさんの顔は見たことがありません。もしかするとこちらが、ローレンツさんの本当の顔なのかもしれません。その後僕とローレンツさんは学校をどのように運営して行くかで話し込んだのでした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そういえば、ローレンツさんに確認しておかなくてはならない事が二つあったはずでした、いい機会なので聞いておきましょう。

「ローレンツさん、2点確認したいのですがよろしいでしょうか？」

「なんですかな？」

「1つ目は、ローレンツさんが仰っていた、物語（歴史）が既に変わっているという話ですが、それはロマリアに関するものじゃないですか？」

「ふむ、なるほど”ダングルテールの虐殺”ですかな？」

「ええ、”ダングルテールの虐殺”は起きませんでした、僕の干渉が有る無しに関わらず」

「よい推理ですな、結構、もしロマリアに行く事があったら、是非私に事前に連絡を下され、ラスティン殿を驚かせて見せましょう」

「そうですか、楽しみにしておきます」

「もう1点はなんですかな？」

「タルブ村のことです」

「ウチの商会では、タルブ産のワインも扱っておりましてな、かな

り儲けさせていただいておりますよ」

「韜晦するのは勘弁してください、タルブ村には日本人の物と思われるお墓はありましたが、肝心の”竜の羽衣”が見当たりませんでした、これもローレンツさんの仕業なのではないですか？」

ローレンツさんは、何かを懐かしむ様に少し目を閉じると、

「ラスティン殿とそう、後６年早く出会えたなら、佐々木殿を紹介できたのですが」

と告げるのでした。

「そうですか、もう少し早く気付いていればよかったですね、残念です」

「零戦に関しては、確かに私が預かっております、佐々木殿から信頼できる人物に託して欲しいと遺言されていましてな」

「そうですか」（零戦はとりあえず諦めるしかないかな？）

「ラスティン殿が、例の約束を守って下さった場合に、お譲りしようと思っています」

「そうなんですか？」

「もう期限はあと１年ですが、大丈夫ですかな？」

「はい、ローレンツさんを驚かせてみせますよ！」

「そうですか、こちらも楽しみにさせていただきましょう」

こうして夜は更けていくのでした。

第二十一話　ラスティン１４歳（そうだ学校を作ろう）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／９／１８
この時代紙と→この時代、紙と
真面目な顔のなって→真面目な顔になって
聞かれる話しです→聞かれる話です
分かります、僕も→分かります。僕も
韜晦するのはは→韜晦するのは
に修正

２０１１／３／２
トリステイン王内－＜トリステイン国内
国外の関しては－＜国外に関しては
に修正

第二十二話　ラスティン１４歳（ワーンベルの危機）（前書き）

第二十二話ＵＰします。

今回から話はがらっと変わって、ワーンベル編になります。

第二十二話　ラスティン１４歳（ワーンベルの危機）

皆さんは、ワーンベルの町の事を覚えているでしょうか？そう、レーネンベルク魔法学園の講師をしてくれているガストンさんが研究を行っていた、製鉄業が盛んな町です。そのワーンベルの町が、今静かに危機に陥ろうとしています。それを知ったのは偶然でした、僕が父上に用が会って執務室を訪ねた時に、丁度父上とワーンベルの代官がその話をしていたのです。

”ワーンベル鉱山の鉄鉱石がほとんど掘り尽くされてしまったらしい”

と言うのです。ワーンベル鉱山は４０年近く鉄鉱石を採掘してきたので、いつ鉱脈が枯れてもおかしくは無かったそうですが、最近になってとうとう良質な鉄鉱石が採取出来なくなったという報告が父上にされていました。

「父上、ワーンベルの状況はそれほど悪いのですか？」

「ああ、ここ2，3年鉄鉱石の産出量が落ちてきていたのは気付いていたが、ついに底をついたらしいな」

「ワーンベルの鉄鋼製品の供給が止まってしまっては、トリステインの経済に大きな影響がでるのではありませんか？」

実際、トリステイン国内ではワーンベルの鉄鋼製品は圧倒的なシェアを占めて居たはずです。

「そうだな、ゲルマニア辺りから輸入することになるな、関税など

を考えるとトリスティンとしても頭が痛い所だ」

父上は頭を振って、ため息をついています。僕は思い切って先ほどから考えていたアイデアを父上に提案してみます。

「父上、ワーンベルの件、僕と魔法兵団に任せて頂けませんか？」

「魔法兵団を使うということは、錬金で何とかしようというのかな？」

さすが父上、魔法兵団の現状を分かっているようです。

「はい、魔法兵団のメイジたちの錬金の腕は、きっと想像されている以上ですよ」

「そうか、それは楽しみだな、トリスティンの民の為にも、成果を期待しているぞ！」

こうして、僕はワーンベルの代官を務める事になりました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

7年ぶりに訪れたワーンベルの町は、以前の繁栄が嘘の様でした。鉄鋼製品を求めて訪れていた商人達の姿はほとんど見当たらず、その商人を相手にしていた売り子や屋台等もほとんど見当たりません。鍛冶屋などは辛うじて開店しているようですが、閑古鳥が鳴いています。この状態を立て直すのには相当な手間がかかりそうですね。

とりあえず、町の大通りを抜け、代官の屋敷に向かいます。代官の

屋敷に着くと、一人の壮年の男性が僕を迎えてくれました。

「ラスティン様、ようこそワーンベルへ、私は代官の補佐を任せられています、マルセルと申します。これからよろしくお願いいたします」

マルセルさんはこう言って、僕に頭を下げてくれました。僕はマルセルさんと面識は無いはずですが、マルセルさんは僕のことを知っている様です。

「マルセルさん、こちらこそ慣れないことなので、ご迷惑おかけすると思いますが、よろしくお願いします」

「部屋は用意してありますが、ひとまず休憩なさいますか？」

「いいえ、執務室があればそちらに先に案内お願いします」

「畏まりました、ではお供の方々は別の者にお部屋に案内させましょう」

そう言って、素早く下級役人らしい人達に指示を出します。なかなか気配りの出来る人物のようですね。こういう人が部下でいてくれると助かりますね。マルセルさんに案内されて、執務室に入りました。結構立派な部屋ですね、調度品とかも、かなり上等なものが使われています。僕はとりあえず、応接用のソファーに座ると対面のソファーにマルセルさんが座ることを勧めます。

「ワーンベルの現状は前任の代官の方に聞いています。町の様子もこの目で確認して来ました。僕はこのワーンベルの現状を打開する為にここにやって来ました、マルセルさん力を貸して貰えますか？」

僕はマルセルさんの目を見つめながら、こう切り出しました。対するマルセルさんは、

「ここ数年我々は、この町の為に出来る限りの事をやって来ました。しかし、現状はご存知の通りです、可能か限り協力させて頂きますので、こちらこそよろしくお願いいたします」

「では、早速ですがこの町の現状をもっと詳細に教えて頂けますか？」

マルセルさんの話によると、

・鉄鉱石の採掘量は最盛時の１／３以下でかつ良質な鉄鉱石はほとんど採れない

・鉄鉱石の採掘量の減少で、製錬業や、鍛冶屋などは仕事を大幅に失っている

・鉄鋼製品の生産量は１／４以下となり、トリステイン国内では価格が高騰している

・鉄鋼製品の生産量の減少に伴い、町を訪れる商人も１／３以下になった

・商人が寝泊りしていた宿屋なども多くが廃業となり、経営者は町を去っていった

・訪れる商人目当ての屋台や露天はほとんどが店をたたみ、他の町へ移住していった

・町の総人口は最盛時の半分の約１００００人まで減少した

・上記の状況から、町からの税収は去年は１／３の５０万エキューまで減少した

とのことです。

思ったより深刻な事態のようですね、ですがこの状況をひっくり返

すことができれば、魔法兵団の名前は不動の物となるでしょう。ここからが平民メイジの実力の見せ所ですよ、何か気合が入ってきました！

問題点の整理も済んだ事ですし、これからの方針を決めましょうか。

「マルセルさん、この町に魔法兵団を呼ぼうと思っています。今のワーンベルにはどれ位の人数を受け入れる事が可能でしょうか？」

「そうですね、町中に空き家などがありますから、受け入れだけならば５０００人は可能ではないでしょうか。ただし食料等の確保の問題もありますので、実際の所無理をして３０００人といった所でしょうね」

３０００人か、魔法兵団の第一陣とその家族位ならば、何とかなりそうですね。

「それでは心もとないですね、僕はこの町に魔法兵団の半数以上、できれば２／３を呼び寄せる予定ですから」

「すると３０００人以上の兵団員の方々とその家族が、この町に来られるということですね、町の大規模な拡大工事が必要になりますね」

ん？今、マルセルさんは少し気になる事をいいましたね。

「ところで、マルセルさん、貴方はこの町に赴任してからどの位経ちましたか？」

「え？はい、ほぼ１０年ほどですね」

「この町の周辺に大きな建物が建てられる空き地はありませんか？町の外で構いませんよ。最低でも４００メイル×４００メイルの広さが欲しいですね」

「町の外の空き地ですか、後で部下に確認しておきます」

ふむ、そうきましたか。

「そうだ、少しお腹が空いてきたので何か食べたいのですが、そうですね先程見かけた大通りの”オースティン亭”の肉の串焼きが食べたいですが、どうにかなりますか？かなりの行列だったので、さぞ美味しいのでしょうね、マルセルさんは食べたことがありますか？」

マルセルさんは、少し戸惑っているようですが、

「あそこの串焼きは絶品ですよ、部下に命じて買いに行かせましょう」

と言って立ち上がりました、これで決まりですね。

「いえ結構です、マルセルさんお座り下さい」

マルセルさんは急に落ち着かなくなったようです、僕は核心をずばり突いてみます。

「マルセルさん、もうばれていますよ、父上の差し金ですね？」

マルセルさんは驚いた様ですが、直ぐに観念したのか、

「どこでばれました？」

と聞いてきました。僕は種明かしをするマジシャンの様な気分で、

「魔法兵団の団員数は、レーネンベルクの重要機密です。大きいとはいえ、町の代官の補佐程度に情報は行かないですから。後は１０年も住んでいれば、この辺りの地理は当然詳しいはずですしね。串焼きの話は、肉ではなく川魚の物でした。どうやら嘘をつくのは苦手のようですね」

「ははは、これは参りましたね」

「僕がこの町の代官をやる事が決まってから、実際にここに来るまで、１週間しか有りませんでしたから、レーネンベルクの近くの町の代官でもやられていたのではないですか？」

大方、父上に急に呼び出されて、急遽ワーンベルに派遣されたのでしょう。

「全くその通り、完全に降参です。それでは私は補佐役を解任ですかね？」

「いいえ、是非僕の補佐をお願いしたいです、１週間足らずであそこまで、町の現状を調べられた手腕は高く評価していますし、父上が僕の補佐を任せる程の方なら信用も出来ますしね」

実は、マルセルさんの正体をはっきりさせたのは、僕がまだ父上の手の上で踊らされている事の確認をしたかったからなのです。魔法兵団の方も、上層部はほぼ、父上の直臣ですしね、僕もまだまだと

いう事です。

「ですが、これから僕がやろうとしていることは、普通の町の統治とはかけ離れているかもしれません、できればこの町の役人の皆さんにも知恵を拝借したいのです。役人の方々を集めて会議室の様な所で意見交換が出来ないでしょうか？」

「分かりました、直ぐに手配します」

暫く待っていると、マルセルさんが僕を呼びに来てくれ、そのまま大き目の部屋に案内されました。その部屋には、かなりの人数の役人達が集まっていました。早速僕は、彼らに挨拶する事にします。

「お仕事の途中で、急に集まって頂いて申し訳ありません。ワーンベルの代官を務める事になりました、ラスティン・ド・レーネンベルクと申します、これから宜しくお願いします。僕は魔法兵団の力で、この町に以前の活気を取り戻すことを目指しています。そのために皆さんに広く意見を聞きたいと思いここに集まって頂きました。」

僕はここで1度言葉を切り、皆さんの反応を見ました。反応は悪くないようです。

「僕が聞きたい事は3点です。1つは、皆さんはレーネンベルク魔法兵団の評判を聞いたことがあると思います。彼らの第一陣が、1週間ほどで家族を連れてこの町にやってきます。大体３０００人弱程になると思います。彼らを受け入れる準備が必要です、それに必要と思われる事をあげて頂きたいのです。もう1点は、僕はこの町の周辺に大きな建物を建てる予定です。それに適した土地が無いか？ということです。そして最後にやってきた魔法兵団達が活動する

工房が無いかということです」

役人の皆さんは僕の言葉に熱心に聞き入ってくれています。

「では最初に、レーネンベルク魔法兵団の受け入れに関してですが、やはり人が生きて行くには、衣食住が必要だと思います。その辺りで何か意見はありませんか？意見のある方は手を上げてください」

そう尋ねてみると、最初は反応が無いかと思いましたが、１人の青年が手を上げてくれました。

「服が必要と言う事ですよね？それだったら、東にある村々ではレーネンベルク織りが盛んですから、そちらから直接買い付けたらどうでしょう？」

すると、次々に意見が出てきました。

「以前は近隣の農村から村人達がやってきて市が良く立っていたんだから、村々に触れを出して、市を盛んにしてみたらどうかな？」

「服なら、衣料品店の仕入れを増やしてもらうだけで何とかなるのでは？」

「住む場所なら、空き家を使えばいいのでは、まだ十分に住める物がかなりあるはずだ」

「南部の新市街の空き家なら直ぐに入居可能でしょう」

「商人達を呼び戻すのが先決なんじゃないですか、物流が戻れば食料の安定供給に繋がるはずです」

「宿屋がかなり閉店したんじゃなかった？かなり収容人数はあるはずよ」

「今営業している宿屋に長期滞在という形はどうでしょう？」

・

・　・

わー、まずい覚えていられないかも、と思ったら横で1人の若い女性が議事録を取ってくれていました。マルセルさんの指示かな、本当に使える人です。次は、土地について聞いてみましょう。

「では、次に土地に関してです、必要な広さは４００メイル×４００メイルです、多少荒れていても何とかなるので良い候補地はありませんか？」

すると何人かの手が上がりました。とりあえず、一番近くにいた女性の役人を指名してみます。

「町に南西の少し行った所に、広めの荒地があります。正確に計測を行った訳では無いのですが５００メイル×４００メイル程の広さはあったと思うんですが」

「今、言われた南西の土地以外に心当たりはありませんか？」

まだ手を上げる人がいるようなので、その人も指名してみます。

「町の北東にも荒地があります、４００メイル×４００メイル位の広さはあると思います。ただ北側は森になっているので、土地を広げるには開拓が必要だと思われます」

「他にはないですか？」

「町の東の高台に空き地があります、ただ広さはそれほどでも無かったはずです。あってもぎりぎり３００メイル×３００メイルです

が、中腹にも小規模な荒れ地があったはずなので、そちらを使えれば、かなりの広さが確保できると思います」

ふむ、土地に関してはこんな感じですかね？

「では、最後に魔法兵団達が活動する工房ですが、心当たりはありますか？」

これにも、色々な意見がでました。

「鍛冶屋の工房に間借りさせてもらうのは、どうでしょうか？」

「廃業した鍛冶屋も少なからずいるはずだから、その工房を買い上げては？」

「町の南側には、以前商人達が借り上げていた、倉庫が並んでいます。これを工房に使えると思うけど」

「簡単な工房なら、いっその事、新築してみたらどうかな？」

・
・
・

大体意見は出尽くした感じですね。

「皆さん、貴重なご意見有難うございました、早急に方針を決めますので、方針が決まったら協力お願いします。ではお仕事に戻って下さい」

役人の皆さんは、各々の職場に戻って行きます。議事録を書いていた役人が、僕に議事録を渡してきました。僕はそれを受け取ると、

「ありがとう、感謝します」

とお礼を言いましたが、相手はさっさと部屋を出て行ってしまいました。あれ、何か嫌われる事をしたかな？いえ、今はそれ所ではありません。魔法兵団の第一陣の受け入れ態勢を大至急整えなくては行けませんからね。僕は、近くにいたマルセルさんと執務室に戻り、今聞いた意見をまとめて、今後の方針を決める事にしました。

執務室に戻ると、マルセルさんがこう言ってきました。

「ラスティン様は、面白い領地管理をされますね」

「そうですか？どんな所が変でしょう？」

「変と言う訳ではありませんが、代官は大抵どのような統治を行うか決めて、それを部下が実行に移していくと言う方法を取ります。この場合代官の能力によっては統治は混乱しますね。ですがラスティン様は役人達から広く意見を求め、その中から方針を決めると言うのですから」

「やっぱり、変ですよね。でもやって来たばかりの代官が1人で考えるよりは、いい考えだと思うんですけど。時間が有れば、住民の方々からも意見を聞きたい位ですよ」

「ははは、それは時間が掛かりそうですね」

「ですが、今は時間が無いです、早急に今後の方針を決めなくはなりません。そろそろ夕食の時間ですが、良かったら食事をしながら話を詰めていきませんか？」

「初日から、根の詰め過ぎではないですか？ワーンベルまでの移動

の疲れもあるでしょう」

「僕はまだ若いですからね、これ位何てことありませんよ」

「では、ここに夕食を運ばせることにしましょう」

こうして、夕食の時間を使って今後の方針を決める事になりました、実際には夕食だけではなく、眠る時間も削る事になってしまいましたが。

第二十二話　ラスティン１４歳（ワーンベルの危機）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／９／１８
任せれて→任せられて
土地意外に→土地以外に
に修正

第二十三話　ラスティン１４歳（ワーンベルの現状）（前書き）

第二十三話ＵＰします。

第二十三話　ラスティン１４歳（ワーンベルの現状）

昨晩、決めた今後の方針を確認しておきましょう。

1．レーネンベルク魔法兵団の第一陣受け入れに関して
・食料に関しては、市の再開で以前の供給量まで戻す事にしました。
近隣の村々に
　今日から早速お触れを出す事にします。最悪の場合は、レーネンベルク家の備蓄を
　放出する事も考えておきます。
・衣料品に関しては、幸い季節が変わったばかりなので早急に対応しなくても
　構わないだろうという結論です。
・住居に関しては、１度現在経営している宿屋で受け入れを行って、それから単身者
　であれば廃業した宿を寮代わりに提供し、妻帯者の場合は希望に応じて空き家を
　紹介するという方法をとります。
・商人の対応に関しては、食料にしろ、衣料品にしろ、その他の生活必需品にしろ、
　今後、魔法兵団が増えて行くに従い供給不足になるのは目に見えています。
　ワーンベルで商売を始める商人に安くで店舗を貸し出したり、低金利の融資を
　行う等の対策を打ち出していく事になりました。（こっそりローレンツ商会の
　エドモンさんにも連絡を入れてみましょう）

2．土地に関して

土地に関しては、現場を見てみないとどうしようも無いという結論しか出ませんでした。立地条件から3箇所すべてに大体の使い道を決めましたが、使用に耐えるかは分かりませんからね。
とりあえず、昨日僕に同行してきた兵団の土メイジ達を現場に派遣して、更地にするのにどれ位手間が掛かりそうか見積もってもらいましょう。
案内はそれぞれの土地を推薦した役人達に任せましょう、議事録に所属と名前まで書かれていたので、直ぐに見つける事が出来るでしょう。（議事録を書いてくれた人物はかなり優秀なようです、マルセルさんにどんな人物なのか確認してみたいですね）
後、簡単な測量も行う必要があるでしょうね、建物を建てる時にはどうしても必要でしょうから。

3．工房
工房に関しては、少し問題があります。これは、工房自体の問題というより、鍛冶ギルドとの対応をどうするかという問題になっていきます。以前、この町の鍛冶ギルドはかなりの権力を持っていました、現在も力が落ちたとはいえ、この町での影響力を軽視する訳には行かないと、マルセルさんからも注意を受けています。（個人的には、代官権限でギルドの活動自体をプチッと潰してしまいたいのですが）
近日中にギルドの代表者と話し合いの場を持つ事にしましょう。
とりあえず、廃業した鍛冶屋の工房を買い上げと、町の南側の倉庫群を借りて工房化することで対応することにしました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

朝から各部署の代表を呼び出して、方針に従って色々指示を出しました。これでひと段落かなと思っていると、マルセルさんが書類を

山のように持ってやってきました。

「こちらが、代官の決裁が必要な書類になります。そしてこちらが、補佐の権限で代理決裁を行った案件の資料です目を通しておいて下さい。そしてこちらが至急対応が必要な案件になります」

そう言って、次々に書類を差し出してきます。この様子では、今日は書類と格闘して終わりそうですね、町の様子をもう少し詳しく眺めておきたかったのですけど。

「ふぅ、こんなにあるんですか？魔法兵団関係の書類整理はやっていますけど、ここまでの量はさすがにやった事が無いですね、マルセルさん手伝ってもらえるんでしょうね？」

「私は商人との交渉の方と視察に行って来ようと思っていますが？」

うぅ、僕だけでこの書類の山と格闘するんですか、泣けて来そうです。

「そうですね、いきなりでは大変でしょうから、助手を付ける事にしましょう。非常に優秀な女性ですよ」

マルセルさんはそれだけ言うと、執務室を出て行ってしまいました、予定が押している様です。それにしても助手ですか、マルセルさんが手放しで褒めるんですから、相当に優秀なのでしょう期待しておきますか。

僕は、補佐の権限で代理決済を行った案件の資料から手を付ける事にしました。２枚の書類の内容を確認し終えると、ドアが控えめにノックされました、助手さんの到着ですかね。

「どうぞ」と僕が返事をすると、１人の女性が部屋に入ってきました。議事録を取ってくれていたあの女性でした。改めて見ると、かなり美人な方ですね。年齢は２０代後半でしょうか、蜂蜜色の髪をポニーテールにしています。
身長は１７０サント位でしょうか、昨日は座っていたので気付きませんでしたが、現在１６５サントの僕よりも長身です。（僕はまだ成長期ですから、負けても悔しくないですよ？）
第一印象は、知的な感じですね。（エレオノールが成長したらこんな感じの女性になるかもしれません）

「こほん」と女性が咳払いをしました。まじまじと見詰めすぎたかもしれません。

「マルセル様から、ラスティン様のお手伝いをする様に言われて参りました。セシルと申します」

「未熟な僕の為にわざわざ来ていただいてすみません、ラスティン・ド・レーネンベルクです、よろしくお願いします。」

僕は出来る限り丁寧な挨拶をしたつもりなのですが、セシルさんの反応は良くありません、と言うかかなり悪い気がします。何故でしょうね？でも仕事はきちんとやってくれることは、昨日で確認済みなので、あまり気にしない事にしましょう。

「手伝ってもらいたいのは、書類を片付ける事です。僕の決裁が必要な書類と、補佐権限で決裁済みの案件の確認と、緊急対応が必要な案件です。決裁済みの案件の確認は幾つか見てみましたが、詳しい数字等はさっぱりです」

セシルさんは冷めた目付きで僕を見詰めながら、

「では緊急対応が必要な案件から片付けて行きましょう」

と言いました。僕が情報不足で後回しにした物から行くんですね、緊急ですから当然ですか。セシルさんの助言を受けながら、緊急対応が必要な案件を順番に処理して行きます。

「これは、採掘者の組合と鍛冶ギルドの調停ですか、この2つが仲違いしているなんて意外ですね」

「この2者の不仲は最近になって問題になって来ていますね、採掘者の組合では必要な量の鉱石を採掘しているという主張ですし、鍛冶ギルドでも製錬を行っている人々からは鉱石の質が落ちたと苦情が出ています」

「なるほど、採掘者の組合については魔法兵団でもお世話になるので優遇したい所ですね、製錬を行っている人々は鉱山の現状をどの程度理解しているのでしょうね？」

「私が話を聞いた限りでは、現状を受け入れ切れていない人ばかりでした、良質な鉄鉱石が産出されていた過去から抜け出せないようですね」

「過去の栄光では、今日の食事は賄えないんですけどね」

セシルさんの目が細められて、

「彼らを切り捨てますか？」

と言う、シビアな質問が口に出されました。僕は、あまり急速な変化は不平等を生み出すと考え、

「鉄鉱石の質に関しては、魔法兵団の方で何とかします、ですがそれも一時しのぎですね。彼らには新しい道を探ってもらいましょう」

と答えました。するとセシルさんの表情が少し明るくなった気がします、もしかして試されたのかな？

こんな感じで、緊急対応が必要な案件に関しては、対応策を決める事が出来ました。セシルさんが居なかったら、１件も処理出来なかった気がします。

次は重要度から言って、僕の決裁が必要な書類の認可ですね。引き続き、セシルさんの意見を聞きながら決裁を進めて行きます。セシルさんは細かな数字まで納得行かなければ、担当の役人を呼び出してまで内容を確認して行きます。僕はこの辺りになると付いて行くのがやっとで、数字の何処の問題があるのか説明されて始めて気付く様な状態です。うーん、役に立っていませんね、せめて話だけでもちゃんと聞いている様にしましょう。

「町から商品を持ち出す際には、仕入れ価格の１０％を税として納める事になっているはずです、この書類では８％しか税をとっていない事になっています、これはどういうことですか？」

「商人達も、仕入れに苦労している様です、１０％も税を取られては利益が出ないと言われては、我々も・・・」

「もういいです、あなた方は商人のしたたかさをまるで理解していません。彼らは仕入れの量が減れば、それを売値にそのまま還元できる立場にいるのですよ、そんな商人たちが、税が下がったからと

言って売値を下げると思っているのですか？あなた方は忠実に定められた税を徴収する義務があります。それを怠るならば、相応の処分を覚悟なさい」

その役人は顔色を青くしてそそくさと執務室を後にして行きました。セシルさん迫力ありますね。こんな調子で代官の決裁が必要な書類も見る見る内に片付いていきます。

後の残るのは、マルセルさんが決裁済みの書類を確認していくだけです。セシルさんは決裁済みの書類に関しても手を抜かず、僕にその決裁を行った根拠等を丁寧に説明してくれました。その説明を聞いて思ったのですが、もしかしたら、この町の実状に関してだけいえば、マルセルさんよりセシルさんの方が詳しいかもしれないという事です。これだけの人材が、町の一役人に過ぎないとは少し信じられません。

「セシルさんは、本当にこの町について詳しいですね、もしかしてこの町の生まれなんですか？」

僕が何気なく投げかけた質問でしたが、セシルさんは一瞬辛そうな顔をしてその後、

「この町来てからは、３年程でしょうか」

とだけ答えてくれました。うーん何でしょう、僕には言えない事でもあるのでしょうか？気にはなりますが、個人的な話かもしれません、あまり問い詰める様な話でもないですから、この場はここまでにしておきましょう。

「セシルさん、今日はとても助かりました、もし良かったら次回か

らも僕の手助けをしてくれませんか？」

セシルさんは、少し迷ったようでしたが、

「ご命令とあれば、喜んで」

とだけ答えてくれました。拒否さえなかっただけでもましですね。
こうして僕のワーンベルの２日目は書類と格闘するだけで終わってしまったのでした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そしてさらに翌日です。昨日の朝に指示を出した物の内、幾つかの結果が上がってきました。ちなみに昨日の書類の山が綺麗に片付いているのに、マルセルさんはかなり驚いた様子でした。（活躍したのはセシルさんなんですけどね）

食料に関しては、近隣の農村から良い返事がもらえたようです、何とか急場はしのげそうですね。
宿の確保に関しても問題は無いようです、ただ受け入れ人数を増やしすぎると、商売に来る商人達の宿が無くなってしまうので、その点は要注意ですね。（兵団長のマティアスに、ワーンベルへの移動は、少しずつ行う様に指示を出しておきましょう）
商人に関しては、商人組合が魔法兵団が来る事を大歓迎してくれるそうで、ワーンベルに入ってくる物資に関しては心配無さそうです。帰りにワーンベル産の工業品を仕入れて帰ってくれれば言う事なしですね。

土地に関しては、”南西”，”北東”，”東の高台”それぞれの土

地を計測した図面が上がってきました。大き目の紙に１／１０００縮尺で使えそうな土地が描かれています。土地の状態に関しても隅の方に書かれていました、やはりかなり手を加えないといけないようですね。この図面を何部か描いてもらって、作る施設を書き込んでいく事にしましょう。（思ったより広い土地が確保出来そうで一安心です。）

工房に関しては、廃業した鍛冶屋の工房を買い上げと、町の南側の倉庫群を借り受ける事は問題無さそうです。後は鍛冶ギルドとの交渉次第でしょうか？マルセルさんにお願いして明日にでも代表者と会って話をしたいと伝えてもらいましょう。

マルセルさんに確認すると、今日は特にやる事が無いとの事だったので、土地の図面とにらめっこして作る施設の検討でもしておきましょう。

第二十三話　ラスティン１４歳（ワーンベルの現状）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

今回始めて名前の出てきたセシルさんですが、実は大変重要で重要でない？様な登場人物です。本編ではあまり活躍しませんが、番外編ではヒロインです！（エレオノール至上主義の方すみません）

第二十四話　ラスティン１４歳（鍛冶ギルドとの対決）（前書き）

第二十四話ＵＰします。

第二十四話　ラスティン１４歳（鍛冶ギルドとの対決）

「ふぁ～」

おはようございます、ラスティンです。昨日は遅くまで図面をにらみながら、どんな施設を何処に建てるか考えていたので、寝不足気味だったりします。今日は鍛冶ギルドの元締めとの会談があるので、あまり眠そうにはしていられませんね。

朝食を食べていると、マルセルさんがやって来て、

「今日の会談ですが、鍛冶ギルドだけではなく、採掘者の組合と商人組合からも参加希望がありまして、急遽会議室を使用して行う事にしました」

と伝えてくれました。ふむ、反応が早いですね、スパイでも潜り込ませているのですかね？新しい代官の顔だけでも見ておこうとかいう平和的な目的なら良いのですが。採掘者の組合と商人組合にも、会談を申し込む予定でしたから問題ないでしょう。

「はい、それで構いませんよ。皆さんは何時ごろ集まりそうですか？」

「こちらから、呼び出しをかけるので、それまで待つように指示してあります」

「それでしたら、すぐ呼びにやってください。それから、鍛冶ギルドには余り大きくない鉄製品を持参するように伝えて下さい。採掘者の組合には最近採れた鉄鉱石を数個、それから商人組合には来る

途中で大き目の石を何個か拾って来るように伝えて下さい」

「鉄鉱石はともかく、ただの石ですか？」

「ええ、会談の場で必要になるはずなので」

「分かりました、伝えておきます」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

朝食の後、昨晩の図面を見直していると、セシルさんが執務室にやって来て、会談の準備が整ったと伝えてくれました。

「セシルさんは今日の会談には出席されるんですよね？」

「いいえ」と不思議そうな返事が返ってきました。あれ？それは少し困りますね。

「では、僕の相談役として、会談に参加してください」

「ですが、私は上級の役人と言う訳ではありませんが」

「セシルさんの知識は絶対必要です、この通りですからお願いします」

僕は、セシルさんに頭を下げます。するとセシルさんは何かショックを受けた様に黙っていましたが、

「分かりました、出席させていただきます」

と小さな声ですが、それでもはっきりと答えてくれました。これで会談をスムーズに進めることが出来るでしょう。そのまま、僕とセシルさんは会議室に向かいました。

会議室に入ると、もうほとんどの人が集まっている様でした。僕達はマルセルさんの後ろの席に腰掛けます。僕が腰掛けると暫くして、マルセルさんが会談の開始の挨拶を始めました。（僕はこういう場は未経験なので、マルセルさんに司会進行をお願いしたのです）

僕の座っている位置から見て、左側が商人組合の方々で、右が採掘者の組合、そして正面が鍛冶ギルドなのでしょうね。左側の方々はいかにも商人らしい格好をしています。採掘者の組合と鍛冶ギルドの方々はどちらもいかにも肉体労働者という感じで見分けるのが難しいですが、肌の色で大体区別ができます。年中鉱山の中で活動している採掘者の方々と、常に火を扱っている鍛冶屋では自然と差が明確になってきます。隣に座っているセシルさんに、尋ねるとどうやら正解の様です。そんな事を考えていると、マルセルさんが代官の挨拶をお願いしますと、僕に話を振ってきました。

「皆さん始めまして、僕がこの度ワーンベルの代官を任される事になった、ラスティン・ド・レーネンベルクです。まだ若輩ものではありますが、僕は魔法兵団の力を使ってこの町を復興させるつもりです。それには皆さんの協力が不可欠なのです、どうか僕に力を貸してください」

そう言うと、商人組合の方々から拍手がもらえました。採掘者の組合と鍛冶ギルドの方々も仕方なく拍手に加わります。そうですよね、貴族のぼっちゃんが来て、いきなり町を復興すると言っても簡単には信じられないでしょうから。商人組合の方々から拍手された方が不思議な位です、と良く見るとローレンツ商会のエドモンさんが、

ちゃっかり商人組合に加わっています。（エドモンが何か工作をしてくれたのかな？これは嬉しい誤算です、連絡を入れようとは考えていましたが、エドモンさんの方から来てくれるなんて）

拍手がおさまると、マルセルさんが早速、それぞれの意見を聞いていきます。

「ご存知の通り、ワーンベル鉱山から産出される鉄鉱石の量は年々減ってきています。新しい鉱脈が発見されるような奇跡でも起きない限り、数年で閉山は確実だと思われます。当然、新しい鉱脈を探してはいるのですが、これは運次第ですから始祖ブリミルに祈る他ありません。採掘を行っている者たちも将来に不安を覚えています」

これは、採掘者の組合の代表の発言ですね。

「ギルドとしては、鉄鉱石が手に入らなければどうしようもない、採掘者の組合の方で何とかしてもらおう」

この高慢な発言は、鍛冶ギルドの元締めです。（危機感が欠如していますね、それに他人任せですし、こんな人物が元締めで良く今までギルドが維持出来たものです）

「商人組合としましては、代官様のお連れになる魔法兵団に期待しています。魔法兵団の大規模な受け入れに関しても全面的に協力させて頂きます。足りない物資などありましたら、是非御一報下さい。後、商人に対する低金利の融資には、大変感謝しております。この場を借りて感謝の言葉を述べさせていただきます」

さすが商人の方々の情報網は確かですね、これなら思ったより魔法兵団受け入れの物資については心配しなくても良いかもしれません。

次にマルセルさんは、採掘者の組合と鍛冶ギルドと商人組合の3者で、討論を行ってもらうことにした様です。見苦しいので詳細は省きますが、鍛冶ギルドの元締めが、採掘者の組合と商人組合を批判する事に終始したとだけ述べておきましょう。気になったので僕は、セシルさんに鍛冶ギルドの元締めがどんな人物か小声で尋ねてみました。

「あのオノレという男は、最低の人物です、腕っ節だけで鍛冶ギルドの元締めに収まった程度の小物ですね。ちゃんとした人物が元締めになっていれば、ワーンベルの鉄鋼品の品質もここまで落ちなかったでしょう」

セシルさんは嫌悪感を露にして、こう意見を聞かせてくれました。

「でも、鍛冶ギルドはワーンベルでもかなりの権力を持っているのでしょう?あの程度の人物に、そこまでの事ができるんですか?」

「先代までの鍛冶ギルドの元締めは、ギルドのメンバーから推薦されて任命されていたようで、優秀な人達だった様です。ギルドの中も良くまとまり、商人や採掘者との交渉も無難にこなしていたそうです。彼らの努力がワーンベルでの鍛冶ギルドの発言力を高めて来たのでしょう」

「オノレさんは自薦だったんですか?」

「一応他薦ですよ、ただし力に物を言わせて強引に推薦させたというのが実際の所ですし、あの男らしい行いですね」

ここまで、セシルさんの話を聞いていると、ふと周りが静かになっている事に気付きました。やばい、大きな声で喋っていたかもしれ

ません。正面の鍛冶ギルドにいるオノレさんを見ると既に真っ赤になっています。

「小娘、俺の行いがどうだって？」

「貴方などは鍛冶ギルドの元締めとして相応しくないと言ったのです、違うと言うのなら貴方が元締めになってから、現状を改善するためにどんな手を打ったか言ってみなさい。他人を批判するだけではなく、自分に何が出来るか考えてみればいいわ。もっともそのスカスカな頭で考えつく事なんて、知れているでしょうけどね」

突然責める様な鋭い口調で、欠点を指摘されたオノレさんは声も出ないようです。そう思っていると、オノレさんは突然立ち上がり、机を吹き飛ばしながらセシルさんの方へ迫って行きます。いけない！そう思い僕は即座にニルヴァーナを構え、呪文の詠唱を始めます、しかしセシルさんとオノレの間は数メイルしか離れていません。オノレの丸太の様な腕がセシルさんに迫ります。僕は咄嗟にセシルさんとオノレの間に割って入ります。次の瞬間麻痺（パラライズ）の呪文が完成しますが、オノレの拳が僕の顔にヒットしました。麻痺（パラライズ）が効いた為か、威力はそれ程でもありませんでした。呪文で体の自由を奪われたオノレは懸命に体を動かそうとしていますが、指一本動かせません。僕は、セシルさんを守れた事に安堵を覚えました。ですが、ここは厳しく出て行くところでしょう。

「鍛冶ギルドの元締めオノレ、お前は自分のした事が分かっているか？か弱い女性に手を上げようとした上に、貴族である僕に危害を加えたんだぞ」

オノレはさっきまで真っ赤だった顔を今度は真っ青にしています。

「処分は後で決める、マルセルさん、オノレを監禁しておく場所はないですか？」

「地下牢があります」

「では、そこに閉じ込めておいてください」

マルセルさんが部下を呼び、オノレを引きずる様にして、会議室から連れ出して行きます。会議室は、さっきまでの騒動が嘘のように静まり返っています。マルセルさんが椅子と机を並べなおすように指示をだし、なんとかその場は治まりました。

僕は今の騒動をチャンスと考え、会談の主導権を握る事にしました。

「さて、鍛冶ギルドの皆さん、今のオノレの行動を見ていましたね。これでも、彼を鍛冶ギルドの元締めにしておきますか？」

もし解任しないとお前達も同罪だぞ！と言い聞かせる様にプレッシャーを与えておきます。するとギルドを代表するように1人の老人が、

「オノレは現時点をもって解任とさせていただきます」

「そうですか、ではとりあえず、貴方が鍛冶ギルドの仮の代表になってください。正式な元締めはちゃんとした方法で決定してくださいね。そうしないと代官として鍛冶ギルドの内情まで干渉しなくてはならなくなりますよ」

「はい、承知しました。肝に銘じておきます」

「では、話を続けましょうか。僕はこのワーンベルを再興するには、鉄鉱石に頼らない鉄鋼業を起すつもりです。しかし、当面は鉄鉱石も利用していく予定です、急な変化は混乱をもたらしますからね」

参加者の皆さんは、僕の言っていることが理解出来なかったようです、ぽかんとした顔をしています。それはそうかもしれませんね、鉄鉱石を使わない鉄鋼業なんて聞いたことが無いでしょうから。

「具体例をお見せしましょう。採掘者の組合の方、お願いした鉄鉱石をもって来て頂けましたか？」

「こちらになります」

「はい、では見ていてください」

僕は素早く鉄鉱石に抽出（イクストラクト）をかけて、高純度の鉄鉱石にします。そしてその鉄鉱石を採掘者の組合の代表に返します。

「いかがですか？」

「すごい、ここまで良質な鉄鉱石は見たことがありません」

「魔法兵団が活動を開始すれば、このような鉄鉱石を大量に生成することが可能ですよ」

採掘者の組合では、大きな騒ぎになっているようです。

「では次に商人組合の方、石は拾ってきていただけましたか？」

「はい、一応ですが、これはその辺に転がっていた石ですよ？」

「それで構いません、こちらにいただけますか？」

僕は、受け取った石に分析（アナライズ）をかけます。二酸化ケイ素とは少し反応が違うので、他のケイ酸塩岩石ですかね。まあ構わないでしょう。次に僕は抽出（イクストラクト）をかけてケイ酸塩岩石の純度を上げます。続いて元素変換（コンバージョン）をかけ、鉄を生成します。

生成された鉄を、皆さんに見せます。

「これは鉄？しかもかなりの純度だ！」

「石から鉄が出来るなんて」

「これが錬金術というものですか」

皆さんかなり驚いています。土系統魔法の初歩なんですけどね。

「魔法兵団が活動を開始すれば、この様に容易に鉄を作り出すこともできます。そして鍛冶ギルドの方、鉄製品を持ってきて頂けましたか？」

「はい、こちらの薬缶ですが、良かったでしょうか？」

「はい、構いませんよ」（結構高級品ですね、細工が複雑ですが、その辺りは省略しましょうか）

僕は受け取った、薬缶を見詰めながら、先程錬金した鉄を成形（フォーム）していきます。すると瓜二つとは行きませんが、ほぼ形の同じ薬缶が出来上がりました。

「この様に、錬金を使えば簡単に、薬缶の様な複雑な構造の物も作

成可能です。時間短縮の為に、細工に関しては手を抜いてありますが」

皆さんは、一連の錬金を見て声もありません。

「これもまた、魔法兵団が活動を開始すれば、このような物が大量に生産する事ができます。ご理解頂けたと思いますが、魔法兵団が本格的に活動を開始すれば、皆さんの仕事の内容は一変するでしょう。採掘者の方々は、鉄鉱石だけではなく、ごく普通の石を採掘するだけでもお金になります。鉄の精錬をされている方は申し訳ありませんが、職を失う事になるでしょう、しかしそれまでに、十分な時間は与えて差し上げられるはずです。そして鍛冶屋の皆さんは、兵団で作る様な大量生産品ではなく、手の掛かった技術の光る鉄鋼製品を作って頂くことになります。そして商人組合の皆さんは、以前とは比べ物にならないほどの多種多量の鉄鋼製品を扱う事になります。いかがですか？皆さんの目にはワーンベルの明るい未来が見えているでしょうか？」

僕は、ここに居るみんなの顔を見渡します、その顔には確かに希望の光が見えている気がしました。

第二十四話　ラスティン１４歳（鍛冶ギルドとの対決）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／０９／１２
しかしそれまで煮→しかしそれまでに
誤字修正

第二十五話　ラスティン１４歳（ワーンベルの建築ラッシュ：前編）（前書き）

第二十五話ＵＰします。

第二十五話　ラスティン１４歳（ワーンベルの建築ラッシュ：前編）

会談から数日が過ぎ、今日ついに魔法兵団の第一陣の先遣隊が到着しました。到着したのは１００人程ですが、小分けに派遣するように指示を出したので、混乱も無くワーンベルに入れたようです。今日やってきた団員たちは、単身者が中心なので基本的に廃業した宿を改装した寮に入居してもらう予定です。

この辺りの采配は、セシルさんがやってくれています。彼女は会談の時の混乱が収まってからは、何か思うところがあったのか積極的に僕に協力してくれえる様になりました。今では僕の秘書役として無くてはならない存在です。（マルセルさんがを右腕とするなら、セシルさんは左腕と言った所でしょうか）

それで僕が今、何処にいるかと言うと、代官の屋敷の裏庭に来ています。窓から外を見た時、裏庭にこの屋敷を建てた時か、改築した時に余ったと思われる石材などの資材を発見していたので、これを使用して少し実験をしようと思っています。ちなみに隣には、新しく建てる施設の建築を監督してもらう大工の親方がいます。

先程まで行っていた、施設の建築方法に関して意見が衝突したので、実際の建築方法を見てもらおうと言う訳です。

1. 石材を使って４体のロックゴーレムを作りだします。
2. 余った石材を錬金で鉄にして、それを４メイル程度の柱１２本に成形（フォーム）します。
3. 鉄の柱をゴーレムを使って立方体になるように組み合わせ、これを成形（フォーム）で一体化します
4. ４体のゴーレムを立方体の四方で解体し、解体してできた石材をさらに

成形（フォーム）して鉄の枠組みに合わせるように石壁を作ります。
5．余っている鉄を４メイル×４メイル程の板状にします。
6．大き目の土ゴーレムを作って板を屋根替わりに、立方体の上に設置し、これも成形（フォーム）で一体化します。
7．石壁の一部をドア状に、もう一面を窓状にくり抜きます。
8．出来上がった小屋全体に固定化をかけます。

以上で、窓とドアはありませんが、小屋の形にはなったと思います。

「親方、こんな感じですが、どうですか？」

親方は、出来上がった小屋の内部や外部を観察しています。

「なるほど、代官さまのやりたい事は分かりやした。ですが、建物の構造としては不安定過ぎますな～。柱の本数も足りないでしょうし、筋交いや梁も必要でさぁ。屋根ももう少し工夫した方がいいんじゃないですかい？」

強度に関しては、固定化を行う事でかなり強化されてはいますが、専門家の意見は重要なので、ここは従っておきましょう。

「そうですか、先程お見せした建物の設計図ですが、親方の目から見直して、書き直していただけませんか？」

「そうですな、鉄を木の代わりの建材に使うのは始めてなんで、多少不安が残りやすがやってみせやしょう！」

「お願いします、親方！」

「おう、どーんと任せな！」

ふぅ、まだまだ改良の余地はありますが、これで建物に関しても目安が付いたかな？そう思っていると、急に後ろから声をかけられました。

「こんな所で何をなさっているのですか、ラスティン様？」

慌てて振り返ると、セシルさんが笑顔で立っていました。でもその笑顔は少し引きつっている気がします。

「少し実験をしたい事があってね、大工の親方に付きあってもらっていたんだよ」

僕はごまかす様に返答します。ですが、セシルさんは追及の手を緩めてはくれませんでした。

「大工の皆さんとの打ち合わせが終わったら、執務室で書類整理をお願いしてあったはずですが？」

「でも、実際の所、僕だけで書類整理はまだ無理じゃないかな？」

マルセルさん程の統治経験がある訳でも、セシルさん程この町に詳しい訳ではありませんから、これは事実だと思うのですけど。

「それでもです、分かる範囲で構いませんから少しずつ慣れて頂かなくては困ります」

セシルさんはぷりぷりと怒っています、その様子がまるで少女のようで僕は少し笑ってしまいました。それにしても良かったです、あ

のオノレの事件で一番ショックを受けたのは他ならぬセシルさんですからね、後を引いていなくて一安心です。
しかし、意外だったのはオノレの処分を決める際に、セシルさんが罰を軽くしてくれるように頼んで来た事でした。トリスティンで領主の家族に危害を加えれば普通は死刑です、レーネンベルクであっても相当な期間牢屋に入れられるのは避けられないでしょう。ですが、セシルさんの嘆願のおかげでオノレはレーネンベルク領内からの永久追放を罰とすることで決着がつきました。
そんな事を考えていたら、セシルさんが不思議そうに僕の顔を見ていました。

「すみません、ちょっと考え事をしていました」

僕は大工の親方と別れて、セシルさんに手を引かれる様にして執務室へ向かうのでした。

＞ｉ１１７６５０｜２０９０＜

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

魔法兵団の先遣隊が到着して２日ほど経ちました。団員たちも落ち着き先が決まったので、今日から本格的とまでは行きませんが、活動を開始する事にしました。
まず先遣隊の団員を２班に分けます。１班には工房で錬金をしてもらい、もう１班には施設建設の下準備をしてもらう事にしました。
錬金班には、質の悪い鉄鉱石を抽出（イクストラクト）で良質の鉄鉱石にするのと、鉄鉱石以外の石を錬金で鉄にしてもらうことにしました。鉄鋼製品を錬金で作り出すのはもう少し団員が増強されてからにすることにしました。
施設班には、まず”北東”の土地の整備を行ってもらいます。堤防

補強や道路整備といった土木工事も魔法兵団の仕事でしたから、この辺りは現場に任せて問題ないようです。

3日もすると、ワーンベルの町にはかなりの鉄鋼製品が出回るようになり、鼻の利く商人達が早速商売を再開しました。”北東”の土地も荒地から、更地へと見違える様な変化を遂げました。

”北東”の土地の整備も済んだので、施設班にも工房で建設資材の鉄材を錬金してもらうことにしました。ところが、ここで思わぬ誤算が生じました。錬金を行っているメイジ達から、鉄よりチタンの方が元素変換（コンバージョン）し易いというのです。ジュラルミン盾とチタン剣ばかり錬金してきたので当然といえば当然の結果でした。（すこし前世の常識に影響されすぎているのかもしれませんね）そこで思い切って建設資材としては、チタン材を使用することにしました。結果としては、強度と質量の面でプラスに働いたので問題無しとしましょう。

更に2日もすると、噂を聞きつけた商人達が鉄鋼製品を求めてワーンベルを訪れる様になりました。どうやらトリステイン王内の鉄鋼製品の不足は思っていたより深刻だったようです。出来上がったばかりの製品が次々に売れて行きます。チタン材もかなりの量が確保出来ましたし、壁材として使用する岩石も採掘者の組合の方々の協力で”北東”の土地まで相当量運び込む事が出来ました。後は大工の親方からの図面を待つだけです。

そして、魔法兵団がワーンベルでの活動を再開して丁度5日目に、大工の親方からの図面が届きました。

色々な図面が届きましたが、今日は腕試しと言うことで、比較的小さく、構造も簡単な倉庫を建築してみることにします。倉庫自体の大きさは横２０メイル×縦４０メイル×高さ１０メイル程の大きさ

で、使用目的は、錬金の材料となる、鉱山から運ばれてきた岩石や、錬金済みの鉄鋼製品をを一時保管するというものです。さて、早速建築に入りましょうか。

1．用意したチタン材を5メイル×5メイル×5メイル程積み上げ、これを成形（フォーム）で一体化します。

2．一体化したチタン材をさらに成形（フォーム）して、一気に横20メイル×縦40メイル×高さ10メイル（断面10サント×10サントの角材）の大枠を錬金します。

3．4メイル毎に縦柱（断面10サント×10サントの角材）を追加して大枠を補強します。

4．断面10サント×10サントの角材部分を成形（フォーム）してH型にして全体の強度を向上させます。同時に接合部も強化しておきます。

5．梁（大梁、小梁）と筋交いを加えます。これで地震などにも強くなります。

6．母屋、小屋束、垂木を設置して屋根を作る準備をします。

7．屋根材には石を薄い板状に成形（フォーム）してスレート葺きにします。

8．石材をチタンの柱や筋交いなどを包み込むように成形（フォーム）して壁にします。

9．出来た壁を出入口と窓の形にくり抜きます。

10．くり抜いた石材を錬金でチタンに元素変換（コンバージョン）して、蝶番（ちょうつがい）を使って固定し、そのまま、出入口と窓に利用します。

11．最後に倉庫全体と下の地盤に固定化をかけます。

以上の1～11の工程で、三角屋根の倉庫1つが完成です。高い場所での作業や、重い物の運搬にはゴーレムを活用します。2．のチタン材を一気に目的の大きさに引き伸ばすのにはコツが必要です、僕も屋敷の裏庭で何度も練習しましたから。ですが、倉庫自体はほぼ1日で完成しました。慣れてくれば半日程度で建設が可能でしょ

う。建設に携わるメイジの数が増えれば建物の建設速度も比例して速くなって行くはずです。

そういえば、魔法兵団の先遣隊が到着して1週間経ったので魔法兵団の後続部隊１００名が新たにワーンベルに到着しました。今回も単身者が中心でした。やはり家族で移動となると家具の移動も伴うので、かなり手間取っているそうです。しかし、これで鉄鋼製品の生産まで人手が回りそうです。採掘者の組合に掛け合って、購入する石材の量を増やさなくてはならないかもしれませんね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そして、更に2週間ほど経つと”北東”の土地は見違える様になっていました。最初に作った様な倉庫が４棟、倉庫の４倍の広さは在ろうかと言う建物が2棟、倉庫の倍ほどの広さの食堂が１棟、シャワーまで完備さえた休憩所までが建設されました。他に運動場や公園も準備しました。

この”北東”の土地を工場街と呼ぶ事にしました。文字通り、ここで鉄鋼製品や、アルミ製品、アルミ合金等を量産する予定です。現在ワーンベルに集まっている、魔法兵団員は４００人程度ですが、予定通り全魔法兵団員の２／３がここに集まればかなりの生産量が見込めるはずです。

次は”南西”の土地を整備してここに、魔法兵団員とその家族が生活する、住宅街を作る予定です。個人住宅や2階建てのアパート、そして今はワーンベルの宿屋に間借りしている寮も新たに建築する予定です。商店街も作った方が良さそうですね。商人組合に交渉してみることにしましょう。細々とした建物が多いので、手間が掛かりそうですが、兵団員も増えたのでそれほど時間は掛からないでし

ょう。
ちなみに、”北東”を工場街にしたのは、ワーンベル鉱山に近かった為です。同様に”南西”を住宅街にしたのは、水の便が良かったからです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

更に1月もすると、”南西”の住宅街も形になってきました。気の早い団員達は早速、新居に引越しを開始していたりします。まだ商店街の方は活動を始めていないですが、それも時間の問題でしょう。もう2週間もすれば、本格的に住宅街が稼動し始めると思います。

さて次は、”東の高台”ですね。ここに作るのは、一応学校です。レーネンベルク魔法学園の分校を作りたいと思っています。ただし、ただの学校ではなく非常時にワーンベル中の人が避難できるような施設にしたいと思っています。災害の時や最悪戦争になった時の対策ですね。幸いレーネンベルク領はレーネンベルク山脈を挟んでゲルマニアと接しているだけなので、あまり心配は要らないかもしれません。
”東の高台”というだけあって、土地の整備も、建築資材の運搬もかなりの労力を必要とします。今までの様にほとんど平らだった土地を更地にして、建物を建てるのとは別物と考えてもいいでしょう。計画は十分に練る必要がありそうですね。

方針としては、
・高台の上部の平面な土地の整地、高台の中腹にあるそこそこの広さの土地の整地、
　それぞれを結ぶ道路の整備を行います。

・上部の平面な土地に学校の主な施設、校舎，実験棟，体育館，運動場，食堂，寮，校庭
　などを作ります。
・中腹の土地には、倉庫などのを作り非常時の備品を保管する事にします。避難所も
　ここに準備しましょう。
・高台を囲う様に城壁と城門を作ります。さらに、主要な施設を囲う様にもう1つ城壁と
　城門を作ります。

位でしょうか、マルセルさんとセシルさんにも意見を聞かなくていけませんね。実作業をする施設班のメイジたちにも意見を聞いてみる必要がありそうですね。

早速、マルセルさんとセシルさんに事情を話して意見を聞くと、

「篭城を考えるならば、まず水の確保ですね。人は思っているより水を消費します」

「長期間砦に篭る事が前提でしたら、食料を自給出来る様になさったらいかがですか？」

などと、なるほどと思える意見を聞かせてくれました。これは採用ですね。食料の自給に関しては、野菜などの種を用意しておいて、校庭を開墾して収穫を得るというので行けそうですね。水メイジと土メイジがいれば、収穫の期間はいくらでも縮められますからね。問題は水ですか、飲料水位であれば水メイジがいれば何とかなりそうですが、生活に使う水は考えると確かに多いです。それをすべて水メイジでまかなうというのも大変かもしれません。そうだ、いっそのこと井戸でも掘ってみましょうか、そして風車を使って汲み上げればいいんじゃないかな？大工の親方に相談してみましょうか。

早速明日”東の高台”に行って、水脈の有無を調べてみましょう。
井戸掘り自体は土魔法で簡単に出来ますからね。ついでに”東の高台”で作業を始めているメイジ達に話を聞いてみましょう。

第二十五話　ラスティン１４歳（ワーンベルの建築ラッシュ：前編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

建物の建築に日本建築の用語が多用されているのは、中世の建築物について良い資料が見つからなかった為です。雰囲気を壊してしまってすみません。

２０１１／０２／０１
イラスト追加

第二十六話　ラスティン１４歳（ワーンベルの建築ラッシュ：後編）（前書き）

第二十六話ＵＰします。

第二十六話　ラスティン１４歳（ワーンベルの建築ラッシュ：後編）

翌日”東の高台”にやってくると、何人もの魔法兵団員たちが整地を開始しています。まだ住宅街の方に注力しているので団員の数はそれ程多くないようです。僕は近くにいる団員に声をかけて、集まってもらいました。

「作業中にすみません、皆さんに意見を伺いたいのですが、少しお時間いただけますか？」

特に問題は無いようですね、

「皆さんもお気付きだと思いますが、この高台の土地を利用するのは、土地の整備も、建築資材の運搬もかなりの労力を必要とすると思われます。そこで少しでも、労力を減らす為に何かいい知恵をお持ちの方はいらっしゃいませんか？」

すると、

「ゴーレムを使って運ぶのなら、そんなに労力はかからないんじゃないですか？」

「運ぶ資材にレビテーションをかけたらどうでしょう？」

「土地に関してですけど、平らな土地は問題ないんですが、斜面が問題ですね。崖崩れの心配もあるので、斜面の表面を錬金で金属にするか、固定化をかける必要があると思います」

・　・　・

ふむふむ、さすがに現場の人達の意見は参考になりますね。意見が出尽くしたと思われた時、

「あの～」

と、1人の女性メイジが手を上げていました。何だかおっとりした女性ですね、何だか妹にしたくなりそうです。（相手の方が年上なんですけどね）

「はい？まだ何かご意見がありますか？」

「皆さん、資材をワーンベルの工房から運んでくる事を前提にされていますよね～？この高台は、当然多くの石や岩や土砂から出来ていますから～。これを錬金の材料にしない手は無いと思うんですけど～？」

僕は、その発想に驚かされました。確かにこの高台は、錬金の材料も石材も沢山あります。これを使えば、運搬の労力は最小限で済んでしまいます。高台が、数メイル低くなっても問題ありませんからね。周りの団員達も驚きの表情です。

「大変素晴らしい意見です。宜しかったらお名前を教えて頂けますか？」

「シルビーと申します～、ラスティン様」

「シルビーさんのおかげで工期が大幅に短縮できそうです、いいアイデアをありがとうございます」

シルビーさんは、顔を真っ赤にして照れています。（やっぱり可愛

いですね）

「皆さんもご意見ありがとうございました、それでは作業に戻って下さい」

「シルビーさん、良かったら僕の作業の方を手伝ってもらえませんか？」

「はい、今日は予備調査で、私の受け持ち分は終わっているので構いませんよ～」

「助かります」

「それでラスティン様、作業というのは何ですか～？」

「はい、水脈が無いか探そうと思っているんですよ」

「地下水ですか～？ですけど、ここで井戸を作っても汲み上げるのは大変ですよ～」

「そこは風車を使おうと思っています」

「なるほど、風車ですか。この高台に来て気付きましたけど、ここは結構風が強い様なので～、良いかもしれませんね～」

「では、早速水脈を探してみましょう」

「どうやって、水脈を探すんですか～？」

「こうやるんですよ、分析（アナライズ）」

僕は、地中深くまでどんどん透視していきます。すると、地下４０メイル程の所に固体ではない層が見つかりました。一発で見つかるなんて運がいいですね。

「運が良いようです、この真下４０メイルの所に水脈らしきものがあります」

「へぇ～、分析（アナライズ）にそんな使い方があるんですね～。私もやってみます、分析（アナライズ）」

シルビーさんは地面を見ながら、「へぇ～」とか、「ほぉ～」とか言っています。そろそろ穴掘り始めたいんですけどね。

「これは面白いですね～。でも私の魔力では２０メイルが限界みたいです～。でもラスティン様程の魔力なら、ワーンベル鉱山に新しい、鉱脈を見つけることも出来るんじゃないですか～？」

「それは、可能でしょうね。ただどんな鉱脈も無限ではありません。それを考えれば、錬金による金属の生成を行った方が良いのではないでしょうか？」

鉱脈探しですか考えていませんでしたが、探すだけ探しても良いかもしれませんね。採掘者の組合の方と相談してみましょうか、実際に採掘するかは別として。

「それもそうですね～」

「では、穴掘りを始めましょうか」

「穴掘り（ディグ）の呪文では、４０メイルも掘れないと思いますけど～？」

「シルビーさんならどうします？」

「え！わたしだったらですか～」

シルビーさんは「う～ん」とか言いながら考えこんでいます。右腕を頭に当てて考えこむ姿も可愛いです。（いい加減年上の方に失礼ですね）

「良い考えが浮かばないですね～」

「シルビーさんは土地の調査に来たからには、土メイジなんですよね？」

「はい、土のラインメイジです～」

「それだったら、ゴーレムは作れますよね？」

「ああ、なるほどです～」

「分かりましたか、４０メイル先程度ならゴーレムは作れます、大きな物や複雑な動作をさせるのは難しいですが」

「面白いですね～、私にもやらせてください！」

「では交代で、やる事にしましょう」

僕とシルビーさんは、早速穴掘り（ディグ）を開始しました。先ずは定石通り穴掘り（ディグ）の呪文で直径２メイル程の穴を掘ります。何度か、穴掘り（ディグ）の

呪文で穴を深くして行くと、１０メイル程の深さで穴掘り(ディグ)の呪文では土砂が掘り出せなくなってしまいました。残り３０メイルはゴーレムを使うしかなさそうですね。

ゴーレム作成に入る前に、固定化で掘った穴の強化をしておきましょう。強化が終わると、早速ゴーレムの出番です。穴の底の土を使ってゴーレムを作成します。作成したゴーレムには穴を登る様に指示を出します。少し時間差とつけて、もう1体ゴーレムを作成して、穴の反対側を上る様に指示を出します。

後はこれを繰り返すだけです。時々固定化もかけなくてはなりませんが。（しかしゴーレムが穴を登ってくる姿はなかなかシュールですね）

１０メイル程堀進んだら、シルビーさんと交代しました。シルビーさんは面白そうにゴーレムを作成を続けています、

「ゴーレムさ～ん、登ってらっしゃい」

とか言いながら。

途中で岩盤に行き当たりましたが、作るゴーレムが石ゴーレムに変わっただけで、掘り進むスピードはそれ程落ちませんでした。シルビーさんと交代しながら掘り進めましたが、４回も交代すると目的の４０メイルを達成しました。どうやら地下水脈に到達したようです。最後のゴーレムが登り終わるのを待って、水魔法で地下水を吸い上げてみます。特に濁りや異臭はしません。

「どうやら、水質には問題ないようですね、鉱山の影響があるかと心配したんですが」

「綺麗な水ですね～、そのまま飲めそうです～」

「それは止した方がいいですね、お腹壊したくはないでしょう?」

シルビーさんは残念そうに、僕の手のひらの中の水を見ています。

「さて、後はここにちょっとした小屋を建てればお終いです」

「そうですね～、このままだと人が落ちたりして危ないですからね～」

「衛生面もありますよ、雨が降って折角綺麗な水が濁っても困りますからね」

「それでは、そちらもお手伝いさせていただきますね～。回りの土砂や石なんかを錬金すればいいですか～？」

「そうですね、シルビーさんは周りの土砂を成形（フォーム）で塊にしてください。僕が元素変換（コンバージョン）でチタンを生成しますから」

「はい、分かりました～」

それから、小さな小屋を建てて、今日の作業は終了となりました。

「シルビーさん、今日は色々手伝っていただいて、ありがとうございました」

「いえいえ～、お役に立てたなら良かったです～」

「お礼と言ってもつまらないものですが、これを受け取ってください」

僕はいつも持ち歩いている、魔法薬の入れ物から〝シフの涙〟が入

った容器を取りだして、シルビーさんに渡します。

「これは”シフの涙”ですか～、こんなに沢山いいんですか～？」

「ええ、シルビーさんなら役に立ててくれると思いますから」

実際、シルビーさんはメイジとしての腕も確かですし、頭の回りも速いです。そして何より柔軟な発想力を持っているようです。まだ、ラインメイジだそうですが、きっと直ぐにトライアングルに昇格するでしょう、渡した”シフの涙”がその役に立てばいいのですが。
(でも、このおっとりとした独特な喋り方で優秀といった印象は打ち消されてしまうんですけどね)

「もう暗くなりそうですね、そろそろワーンベルに戻りましょうか」

「そうですね～」

帰り道で、シルビーさんと色々話をしました、シルビーさんはやはり魔法学園の出身者でした。今では魔法学園の名物教師となっているガストンさんの色々なエピソードをお互いに話ながら、ワーンベルへの帰って行くのでした。

ところで、シルビーさんの意見に従って、ワーンベル鉱山を分析(アナライズ)で探索した結果、新しい鉱脈を数箇所か発見する事が出来ました。場所は採掘者の組合の方に伝えましたが本格的な採掘は行わない様です。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

それから2週間ほどして、住宅街の整備が完了すると、次は”東の高台”の分校の建設に入ります。苦労するかと思われていた、分校の建設も事前検討が十分に行われていた為かほとんどトラブルが発生する事もなく、順調に進んでいきました。
魔法兵団員が更に増員されてきた事もあり、分校の建設もほぼ1月で完成のすることができました。シルビーさんのアイデアのおかげですね。後は細かな備品搬入や、魔法学園本校からの教員の移動や、用務員，コック，寮の管理人などの手配が終われば、分校として本格的に活動を開始できます。
住宅街の方は、商店街も含めて、ほぼ受け入れ準備は万全といえるでしょう。後は、魔法兵団の第二陣、第三陣の到着を待つだけです。工場街の方は、稼働率は１５％ほどでしょうか？施設班も順次、錬金班に合流させて行きます。こちらも魔法兵団の第二陣、第三陣が到着すれば、稼働率は一気に跳ね上がることでしょう。稼働率１００％になった時にどれほどの生産力を発揮するか今から楽しみです。

第二十六話　ラスティン１４歳（ワーンベルの建築ラッシュ：後編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

次は今回出てきた、シルビー視点の外伝を書きたいのですが、アイデアが固まっていないのと、本伝が山場なので、更新時期は未定です。更新遅れてしまったらごめんなさい。

外伝五話　シルビーさんの優雅？な1日（1）（前書き）

予告通りシルビー視点の外伝です。

外伝五話　シルビーさんの優雅？な1日（1）

カーテンを通した、朝日に照らされて目が覚める所から私ことシルビーの1日は始まります。

「くぅ～」

今日もお仕事頑張っていきましょう！

「すうすう」

誰ですか、こんな良い朝にまだ眠っているのは？

「むにゃむにゃ」

さては、シモーヌちゃんですね。困ったものです、そろそろ起してあげなくちゃいけませんね。そこまで考えると、急に身体が揺すられます。

「シルビー起きなさい！」

と耳元で大きな声がしました。

私は慌てて飛び起きました。横をみると同室のシモーヌちゃんが腰に手をあてて怒った様な表情で立っています。

「あれ？シモーヌちゃんおはよ～、もう着替えたの？さっきまで寝てたのに～」

「まだ寝惚けてるの？さっきまで寝ていたのはあなた！私はもう朝食すませてきたわよ？」

「あう、夢の中では目を覚ましていたんですよ～」

「それは普通熟睡中というわね、いいからしゃんとしなさい！また朝食食べられなくなってもしらないわよ？」

「それは困ります～、すぐ起きます～」

こうして改めて私の慌しい朝が始まったのでした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

私がメイジを志したのは、７歳の頃だったと思います。私は、トリステイン王国のほぼ中央に位置するある子爵家の領地にある小さな村に生まれました。両親共に土メイジでしたが、貴族とかではなく一農民でした。魔法の力で植物を育てていたので村の中では結構裕福でした。

ですがそんな生活も、突然の侵入者によって簡単に崩れ去りました。村の近くの森にオーク鬼の群れが住み着いてしまったのです。幸い負傷者等は出ていなかったと思いますが、家畜には酷い被害が出てしまいました。血だらけの馬小屋を見てしまった時は、数日気分がすぐれなかった事を覚えています。

村長が村を治める子爵様宛に、オーク鬼の群れを退治してくれるように依頼を出したのですが、良い返事はもらえなかったようです。そのままの状況が２，３週間続きました。私達はなす術も無く、用事は全て昼の内に済ませ、夜は布団を被って家の中で震えているしか出来ませんでした、遠くから聞こえる家畜たちの悲鳴を聞きながが

ら。

そんな恐怖に満ちた日々も、トリステイン魔法衛士隊のグリフォン隊の介入で速やかに終焉を迎えました。グリフォンを従えた魔法衛士隊の勇姿は、今でも思い出す事が出来ます。

翌日から、私はメイジの修行を始めました。両親は困った様な表情でしたが、それでもメイジとしての教育を私にしてくれました。それから数年、両親によるメイジとしての修行が続きました。幸いメイジとしての才能は両親を遥かに上回っていた様で、この数年で、両親が知っているほとんどの呪文を使う事が出来るようになりました。

両親によるメイジとしての教育が終わったのを機会に、私は両親に、

「魔法衛士隊に入りたいです～」

と告げました（このおっとりとした口調は昔からでしたね）。父は困ったように、

「魔法衛士隊には貴族の子弟しか入れないんだよ、お前はグリフォン隊の活躍に憧れたんだろうが、彼らがオーク鬼の群れを退治したのは、我々の為ではなく彼らの戦闘訓練の一環だったのだよ」

と教えてくれました。私の頭の中は真っ白になってしまいました。憧れだった魔法衛士隊に入ることも出来ず、それどころか、憧れ自体が的外れだったと言われたのですから。私はしばらく落ち込みましたが、そんな状況も長くは続きませんでした。

以前、オーク鬼の群れが住み着いた森に、またオーク鬼の姿を見たという噂が村中に広がったのです。村長はその噂を聞くとすぐに何処かに使者を送り出しました。その時は、多分また役に立たない領主さまの所だと思いました。その時はある計画で頭が一杯だったので他の事にまで頭が回りませんでした。

数日すると家畜に被害が出始めました。私は自分の計画を実行に移す時が来たと確信しました。今思うと、無謀だった事ははっきりしています、1人でオーク鬼に挑むなんて。（その頃の私は、グリフォン隊の真実を知って自棄になっていたのでしょう）

1人きりで勇んで森に向かった私でしたが、森に入った途端、恐怖で身体が強張っていくのを感じました。それでも、私は振り返らずに森の奥へ進んで行きました。しばらく進むと、一匹のオーク鬼を見つけました。私は杖を取り出すと、私が持っている中で最強の呪文を小声で唱え始めます。（両親に危険だから人に向かって使ってはいけないと言われた呪文です）

「地爆散（アースボム）」

私の声が回りに響くのと同時に、オーク鬼の足元の地面が爆発しました。やったと思ったのはほんの一瞬でした。土煙が晴れると、オーク鬼はまだ立っているのが確認出来てしまったからです。

「グワーッ」

そしてオーク鬼は叫び声をあげると一直線に私の方に近づいて来たのです。私はパニックに陥りました。足をもつれさせながらも、懸命にもと来た道を走って引き返して行きました。そのまま村に帰ったらどんな事になるかを想像している暇もありませんでした。

私にとって幸運だったのは、先程の呪文でオーク鬼が足を痛めた様で追ってくるスピードが遅かった事です。ですがその幸運もそれ程長続きはしませんでした、子供の足ではオーク鬼を引き離す事が出来なかったのです。それどころかだんだん差がつまってきている気がしました。それを見て、足を速めようとした瞬間でした、私は木の根に足を取られ転んでしまいました。

もうだめだと思った時、救いの手が差し出されました。その手を頼

りに立ち上がると、その手の持ち主は既に呪文を詠唱し終えていました。

「火炎球（ファイヤーボール）」

次の瞬間、炎の玉がオーク鬼を捉え爆発を起します。

「みんなこっちだ！」

その声を聞きつけ、数人のメイジらしき人々が駆け寄って来ました。
そして息も絶え絶えのオーク鬼に次々と呪文を放って行きました。
オーク鬼が息絶えるまでそれほど時間はかかりませんでした。

「お嬢ちゃん、怪我は無いかい？」

私はまだ声が出せず、頷き返すことしか出来ませんでした。

「怪我が無いなら上等だ、みんな1度村へ帰るぞ！」

「子供一人で、オーク鬼に挑むなんて無茶はもうするなよ！

「両親に心配させるなよ！」

「無事でよかったな！」

私を助けてくれた人達が、次々に声をかけてくれました。私は状況の変化についていけず、ただ頷き返す事しか出来ませんでした。そして村に戻ると、心配した両親と村の人々が、私達を迎えてくれました。それから私は両親にこっぴどく叱られましたが、私はその言葉を半分も聞いていませんでした。説教が終わると早速両親に先程

の人達について尋ねました。

「あの人達は、レーネンベルク魔法兵団だよ」

「レーネンベルク魔法兵団ですか～？傭兵団ですか～」

「いや、彼らはあれでもと言っては失礼かな？この国の北東にあるレーネンベルク公爵家の家臣なんだよ」

「なぜ、レーネンベルク公爵家の家臣の人達がこんな村に来てるんですか～？」

「それは村長が、魔法兵団に依頼を出したからだよ」

「依頼ですか～、それだけで傭兵団でもないのに、こんな村までメイジが派遣されて来るんですか～？」

「それはな、レーネンベルク魔法兵団が我々平民の味方だからだよ」

それから、父はレーネンベルク魔法兵団の功績について熱心に語ってくれました。ここ数年、魔法の修行に明け暮れていた私にとっては、信じられないことでした。貴族が平民の為にメイジを組織して活動させている何て聞いたら、普通の平民は冗談だと思うでしょう。ですがその時の私には一筋の光明に見えました。

私を救出した後、魔法兵団の人達はまた森に戻り、オーク鬼が残って居ないか捜索に出ていました。夕方になる前に、彼らは村に戻って来ました。彼らは、森の中で何匹かのオーク鬼を発見してそれを全て退治して来てくれました。幾つかのオーク鬼の首を運んで来たことからもそれは間違い無いことの様でした。

魔法兵団側にも、軽傷者が何人か出た様なので、その晩は村に泊まって行く事になりました。私はこの機会を逃さず、魔法兵団の人達に接触を試みました。彼らに割り当てられた空き家に、ノックをして入って行くと魔法兵団の人達が思い思いの格好で寛いでいました。私に気付いた、最初に私を助けてくれた男性が、話しかけて来ました。

「おや、お嬢ちゃんじゃないか、どうかしたのかい？」

「今日は助けてもらって、どうもありがとうございました～」

「こっちは仕事だからな、気にするな。俺の名前はマルコだ、それにしてもあんな無茶な事をする割には、おっとりとした話し方だな」

「これは生まれつきです～、それより私、魔法兵団に入りたいのですがどうしたら入れますか～？」

「生まれて直ぐは話せないと思うけどな、ああ、お嬢ちゃんが魔法兵団に入りたいって？」

「お嬢ちゃんじゃないです～、シルビーって立派な名前があるです～」

「そうか、シルビーかいい名前だな、だが子供は魔法兵団には入れないぜ」

「じゃあ大人になったら入れますか～？」

「いや、大人になってもメイジとしての腕がしっかりしてなきゃ無理だな。少なくとも、オーク鬼一匹位は1人で何とか出来ないとな」

「うぐ～」

「どうした、メイジとしての腕に自信がないか？ああ、そうかこんな小さな村じゃ、魔法を習うことも出来ないか」

「そうなんです～」

「それなら、魔法学園に入学したらどうだ？」

「魔法学園ですか～」

「ああ、正式には”レーネンベルク魔法学園”と言ってな、シルビーみたいに魔法を習いたい平民のメイジが通う、魔法を教えてくれる場所だよ」

「是非、是非行きたいです～」

「うーん、熱意があるんだか無いんだか分からない返事だが、そうだな、俺が推薦状を書いてやろう」

そう言うとマルコさんは、近くにあった鞄から、紙とペンを取り出すと、推薦状を書いてくれました。

「これを魔法学園の受付に出してみな、少しは役に立つかも知れないぜ。もっとも俺程度の推薦じゃあ、あまり役に立たないだろうがな。ははは」

「何か急に不安になって来ました～」

「まあそう言うな、何も無いよりマシだろう？」

そう言うとマルコは苦笑しながらも、私に推薦状を渡してくれました。

「ありがとうございます～」

「確か、再来月の中頃から、魔法学園の入学者の募集が始まるはずだぜ」

「分かりました～、早速準備を始めます～」

私は兵団の人達に挨拶すると、推薦状を大事に抱えて、家へと帰って行きました。

外伝五話　シルビーさんの優雅？な1日（1）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

サブタイトルの（1）が示す通り多分3話の構成になりそうです。
現時点では書きあがっていないので、断言できませんが。

２０１０／９／１８
間違えない－＜間違い無い
に修正

２０１０／１０／１０
ルビが振れていない部分を修正

２０１０／１０／２８
譲－＜嬢
に修正

外伝六話　シルビーさんの優雅？な1日（2）（前書き）

外伝六話ＵＰします。

外伝六話　シルビーさんの優雅？な1日（2）

家に戻ると、早速両親の説得を開始しました。最初は難色を示していましたが、今日の様な事がまた起きることを心配したのか、最後には魔法学園入りを許可してくれました。翌々月になるとレーネンベルク領に旅立つ準備は万全でした。レーネンベルクまでは父が送ってくれる事になりました。

父と一緒に出た始めての旅は驚きで一杯でした。村からほとんど出る事に無かった私にとっては見るもの聞くものが全て新鮮でした。子供の私が徒歩で旅するのも大変だろうという事で、父が馬車を雇おうと提案してくれましたが、これからの生活でどれ位費用がかかるか分からなかったので、そのまま歩いてレーネンベルク領に向かう事になりました。1週間程で魔法学園があるマリロットの町に着く事が出来ました。

マリロットに着いて最初にしたことは、何をおいても入学の手続きでした。もしも早い物順だったりしたら1日の遅れで涙を呑む羽目になるかもしれなかったからです。

魔法学園の建物は、さすが貴族様が経営しているだけあって、平民向けとは思えない程立派なものでした。

「ふわ～、これがレーネンベルク魔法学園ですか～」

「立派なものだな、おいシルビー、あっちで受付をやってるみたいだぞ！」

「本当ですか～、早速行ってみます～」

受付らしき場所に行くと、お姉さんが1人座っていました。

「済みません～、ここで入学希望を受け付けてもらえるんですか～？」

「はい、入学希望の方ですね。こちらの書類に記入して下さい」

お姉さんが1枚の紙を渡してくれました。私は紙に書かれている通り、名前や住んでいる場所、年齢等を書き込んで行きました。そして書き進めて行くと、”使用出来る系統魔法”という項目が目に入りました。”土・水・風・火”と書かれていて、丸を打つ様になっていました。それを見て私は急に不安になってしまいました。

「お姉さん、この”使用出来る系統魔法”ですけど～、皆さんは何系統か使えたりするんですか～？」

「ああそれね、それは、得意な系統を知る為の質問なの、大抵の子は1系統しか使えないわね、稀に2系統使える子もいるけど」

「良かったです～」

私は続きを書き上げ、お姉さんに提出しました。あ、そうだ、推薦状も出さなきゃいけませんね。

「お姉さん、これもお願いします～」

「あら、何かしら？ふーん推薦状ね、珍しい物を持って来たわね」

「役に立ちますか～？」

「うーん、どうかしらね、魔法兵団の団員が保証してくれるのはかなりのプラスに働くと思うけど」

これを聞いて私は、改めてマルコさんに感謝しました。

「これで手続きは終わりね、入学試験は3日後の予定よ、それまで町で宿をとって待っていてね。この札を持っていけば無料で泊まれるわよ」

お姉さんはそう言って、1枚の木の札をくれました。

「あの〜、父も一緒なのですけど〜」

「ええ、もちろん保護者の方も一緒に泊まれるわよ」

「わ〜、すごいんですね〜」

「もちろんよ、魔法学園はレーネンベルクが今一番力を入れている事業の1つなんだから！それじゃあ、また3日後の朝に、ここに来てね」

「分かりました〜」

私は父の所へ戻ると、宿を取るためにマリロットの町へ戻って行きました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

3日後、入学試験がありましたが、これは、はっきり言って拍子抜けでした。普通に得意な魔法を何回も標的に向かって放つという単純な物だったからです。今考えると、魔法の威力や精度、魔力の総

量などを調べていたんでしょうが、当時の私は緊張していて、言われるままに魔法を放っているだけでした。それでも何とか入学試験に合格する事が出来ました。

入学が決定すると、直ぐに寮の部屋が割り当てられました。父とはここでお別れでしたが、これから始まる寮生活の方が私にとっては重要でした。父に別れを告げると、そのまま寮に向かいました。割り当てられた部屋に行くと、もう先客がいました。

「貴女が同室の子？私はシモーヌ、貴女は？」

「シルビーといいます～、よろしくです～」

私の返事を聞いた、シモーヌちゃんは複雑そうな顔をして、

「その喋り方は、地なの、態(わざ)となの？」

と聞いてきました。

「これは生まれつきです～」

「ばかね、生まれて直ぐ喋れるはずがないじゃない！」

「でも、覚えている限りずっとこの喋り方ですよ～、もしかしたら生まれてからずっとかもしれないじゃないですか～」

「そんな訳ないじゃない、態(わざ)とじゃないなら、もう良いわ、疲れそうだけど我慢するわ」

「それは良かったです、これからよろしくね～、シモーヌちゃん」

「シモーヌちゃ！はぁ〜、まあいいわ、好きなように呼びなさい」
それだけ言うと、シモーヌちゃんは自分の荷物の整理に戻ってしまいました。これが私とシモーヌちゃんの出会いでした。こう振り返ってみると、あまり良い出会いでは無かったですね。なぜシモーヌちゃんは未だに私の友人であってくれるんでしょうね？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

入寮して3日後から始まった魔法の授業は、両親にしか魔法を教わって来なかった私にとっては、ものすごく新鮮に感じられました。
先ずは普通に呪文を学び、次に練習して、最後に実習するという3ステップは意外に私に合っていたようです。
1年目はコモンマジックと各系統魔法の初歩を、2年目には少し高度な系統魔法を、3年目には得意系統の魔法を重点的に習いました。
私の得意系統はやはり土で、その次は火、水と風はほとんど使い物にならない様です。2年目には少し高度な錬金魔法について習いましたが、意外にも錬金の才能があったらしく、担当のガストン先生が熱心に錬金を専門にやらないか？と誘ってくれましたが。やはり亜人退治をして人の役に立ちたいという気持ちが強かったので断ってしまいました。
各年度の最後には進級又は卒業試験がありましたが、努力の甲斐あってか結構優秀な成績を修めることが出来ました。入学当初はドットだった魔法の腕もラインにまで上げる事が出来ました。

卒業試験の結果を確認していると、一緒にいたシモーヌちゃんが、
「結局1回もシルビーに勝てなかったわね、こんなポケポケ娘になんで勝てなかったんだろ？」

「失礼ですね～、私の口調はこんなですけど、実はしっかり者なんですよ～」

「シルビーがしっかり者？冗談でしょ、しっかり者なら、あんなに沢山失敗はしないわよね。例えば1年の最初の授業の時・・・」

「わ～、シモーヌちゃんそれは言わないって約束したじゃないですか～」

3年も一緒に暮らしていると、知られたくない失敗も沢山知られてしまっています、困った物ですね。

「それで、ポケポケ娘のシルビーさんは本当に警備隊に入るつもりなの？」

「え～、私の夢だって何度もはなしたじゃないですか～」

シモーヌちゃんは真剣な目で私を見つめていました。

「それは耳にタコが出来る位聞いたわよ。でもね、貴女は優しすぎるから心配なの」

「シモーヌちゃんこそ大丈夫なんですか～？錬金隊といっても、何年に1度は警備隊に派遣されるっていう話ですよ～」

「私は大丈夫よ、土と水だから後方支援が精々でしょう。でも貴女は違うわ、直接亜人や盗賊なんかと戦うことになるのよ。貴女に人殺しが出来るの？」

「必要があればやってみせますよ～、オーク鬼に戦いを挑んだ話はしたでしょう～？」

それでも、シモーヌちゃんは心配そうです。

「分かったわ、でも無理だと思ったら、直ぐに転属依頼を出すのよ？貴女の錬金の腕なら引っ張り凧だわ」

「心配してくれてありがとう～」

優しい言葉に、思わずシモーヌちゃんに抱きついてしまいました。

「ちょっと、離してよ」

「ダメです～、ずっとお友達でいてくださいね～」

「うん、そうね」

それでも、二人の進む道は一度分かれることになりました。私は、警備隊に配属されこの町を離れることになりました。シモーヌちゃんは錬金隊に配属され、この町で盾や剣を錬金するそうです。

＝＝＝

それから、私は兵団の警備隊本部からの指示で、とある伯爵家の領土にある町に向かいました。そこを拠点に活動している魔法兵団の警備隊第１１班に配属になった為です。町で話を聞くと、兵団の人達が泊まるという宿を教えてもらえました。教えてもらった宿屋に着くと、元気な女将さんが迎えてくれました。

「いらっしゃいお嬢さん、泊まりですか？」

「あの～、こちらに魔法兵団の方々がいらっしゃると聞いて来たんですが～」

「ああ、魔法兵団に依頼かい？2階の一番手前の部屋が会議室になってるから、そこへ行ってみな」

「依頼ではないのですが～、分かりました～」

私は、早速会議室へ向かいました。そこには思ってもみなかった再会が待っていました。

「失礼します～」

「お！お客さんか？」

「も、もしかしてマルコさんですか～？私です～、昔お世話になった、シルビーです～」

「この特徴的な喋り方は確かに、シルビーだな、大きくなったな！もしかして、この班に配属されてくる新人メイジってシルビーなのか？」

「はい、そうです～」

「そうか、あの小さかった女の子が、もう一人前のメイジになったんだな」

マルコさんは感慨深そうに呟きました。

「マルコさん、セリフがおじさんっぽいですよ～」

「何～、俺はまだ・・・！まあそんな事はどうでもいい、俺達警備隊第１１班は全員で２２人のメイジが所属している、シルビーを入れて２３人になったな。これが大体。２～４班に分かれて、活動している。今は、ほとんどが出払っていて、おれが留守番って所だな。何か質問はあるか？」

「警備隊のお仕事は、亜人退治なんですよね～？」

「なんだ、そんなことも知らないで警備隊に入ったのか？警備隊の仕事は、担当する地域の治安維持全般だ、亜人退治を始め、盗賊団の討伐や、犯罪者の捕縛なんかが主な任務になるな。騒動が起こっていない時は、巡視も忘れちゃいけないな。俺達が見回っているということを知っているだけでも、住民は安心出来るからな」

「はい、先輩、分かりました～」

「いや、ここは”副隊長”という所だな」

「え～、マルコさんが副隊長なんですか～？」

「そうだぞ、昇進したばかりだけどな、敬意を持ってマルコ副隊長殿と呼ぶように！明日からはビシビシ鍛えて行くからな」

「はい～、がんばります～」

翌日から戦闘訓練が始まりました。２週間程の訓練の後、実戦に参

加することになりました。実戦といっても、単なる犯罪者の捕縛等の簡単な任務からだったので、問題なく班に馴染むことが出来ました。2月もすると、今回の新人は使えるという評価をしてもらえるまでになりました。その評価は私が採用した”おとりゴーレム作戦”による物が大きかったです。

”おとりゴーレム作戦”は対亜人用の作戦です、特に知能の低い亜人には有効でした。（逆に盗賊団などには空振りだったんですが）亜人たちは、より近くにいてより大きな目標に攻撃を仕掛ける習性があります。この習性を利用して、亜人の近くに大き目のゴーレムを作成して亜人に攻撃させます。亜人はゴーレムを脅威と感じ、ゴーレムに攻撃を集中します。その間に私達は亜人に攻撃し放題となる訳です。ゴーレム自体は単なるおとりなので、ほとんど制御する必要もなく、1人の土メイジが多数のゴーレムを作り出しても、制御不能になったりしないのも有用性を認められた理由でした。

前衛役の居ない魔法兵団では、亜人に接近されて死傷者を出すことが多かったので、この”おとりゴーレム作戦”は警備隊中に広まることになりました。

外伝六話　シルビーさんの優雅？な1日（2）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

外伝七話　シルビーさんの優雅？な1日（3）（前書き）

外伝七話ＵＰします。

外伝七話　シルビーさんの優雅？な1日（3）

そして、私が警備隊第１１班に配属されてから、１年が経過しました。

「はぁ～」

最近私はため息をつく事が多くなったと、先輩方に指摘されることが多くなりました。自分では充実した日々を送っていると思っていただけに、その指摘は私の心を不安にさせました。人々に害をもたらす亜人達を滅ぼすことは、私が望んだ事のはずだし、人々からも感謝されているのも事実のはずです。

「ふぅ～」

いくら自分に言い聞かせても、ため息の数は減りませんでした。

「シルビー、ちょっといいか？」

「はぁ～」

「おい、シルビー」

「ふぅ～」

「こいつは重症だな、ほりゃ！」

「あう、何するんですか～、マルコさん～」

「少し話しがあるんだ、今良いか？」

マルコさんが真剣な顔で尋ねてきました。

「はい、構いませんよ～」

「端的に聞くぞ、シルビー、お前一度警備隊から外れてみるか？」

「え！」

私はマルコさんの言葉に絶句してしまいました。私は自分が警備隊に十分な貢献をしてきたと思っていたからです。エース級とはいいませんが、班には居なくてはならない存在だと自負していただけにマルコさんの言葉は私の心を激しく傷つけました。

「マルコさん、私はこの班に不必要なメイジなんですか！私の力じゃ、警備隊としての仕事を続けていくのは無理なんですか！」

「おお！そんな口調のシルビー見るのは始めてだな」

「ふざけないで下さい！」

「まあ、落ち着けよ。何もお前が班に必要じゃないとか、お前の能力に不安があるとか言う訳じゃないから」

「じゃあ、何で警備隊を外れるなんて話が出てくるんですか！」

「だから、落ち着けって言うんだ。シルビー、お前、最近良くため息をついているよな？」

良く分からない質問ですが、それで一応気持ちは落ち着きました。

「そうかも知れませんね～、先輩達にも指摘されていますし～」

「そうだな、班員のみんなも心配しているよ。ため息の原因は分かっているのか？」

「いいえ、思い当たる事は無いです～」

「そうか、自覚は無しか。じゃあ質問だ、お前は亜人退治が好きか？」

「それは好き嫌いの問題じゃないですよ～、人に害を及ぼす亜人は退治されるべきです～」

「うーん、それじゃあ、人に害をなしていない亜人を、退治することは正しい事だと思うか？」

「・・・」

私はその質問にすぐに答える事が出来ませんでした。警備隊のメイジとしては、人に害をなす可能性のあるものは排除すべきだと思うのですが、実際に被害が出ていないとなると、退治することは躊躇われます。今までも何件か実際に被害が出ていないにも関わらず、危険だと言う事で亜人たちを退治したことがありますが、あまり気分の良いものではありませんでした。

「警備隊のメイジなら、要請があれば、躊躇わずに退治すると答えるところだぞ」

「そうですね～」

「お前は、危険に立ち向かう勇気を持った娘だ。人の役に立ちたいという気持ちも持っている。しかしな、それと同じ位心の優しい娘だと言う事を、俺も他の班員も分かっている。お前の優しい心が、今の状況を良しとしないから、ため息が止まらないんじゃないか？」

「・・・」

「別に警備隊に戻って来れない訳じゃない、1度、警備隊を離れて、自分の心と向かい会ってみた方がいいんじゃないか？今のお前を見ていると、俺達まで辛くなってくるんだ。考えておいてくれ」

私はただ頷く事しか出来ませんでした。私が優しい心の持ち主と言ってくれたのは2人目ですね、自覚は無いですがそうなのかもしれません。このまま警備隊の仕事を続けていて、自分の優しさが他の班員の迷惑になる可能性に考えが及ぶと何だか怖くなってしまいました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

マルコさんに隊を離れるかと聞かれて悩みましたが、結局警備隊を1度離れてみる事にしました。悩みを抱えたまま出来るほど、警備隊の仕事は甘くないと分かっていたからです。その後は、錬金の腕を買われて、錬金隊に転属になりました。ですがマリロットでは、毎日の様にジュラルミン盾とチタン剣を錬金しているだけで、充実感と言うものが感じられませんでした。ですが、自分を見詰め直すということには向いていたかもしれません。人の役に立ちたいと言う気持ちはありました、ですが罪もない亜人を退治してしまうこと

に罪悪感があるのも確かの様でした。この話をシモーヌちゃんにしたら、

「そうね、シルビーはそういう娘よね」

の一言でした。もしかしたら、私は自分を見る目がないのかも知れません。

そんな、ある日、シモーヌちゃんが面白い話を教えてくれました。

「ウチの班長がこっそり教えてくれたんだけど、今度錬金隊から多くの人員をワーンベルに移動させる計画があるそうよ」

「ワーンベルですか～、確か鉄鋼の町でしたよね～」

「そう、いまそのワーンベルが大変な事になっているそうなの、何でも鉄鉱石が採れなくなって、町全体の景気が悪くなっているんだって」

「ああ、そういえば最近鉄鋼製品が値上がりして困っているっていう話を聞いたことがありますね～」

「噂なんだけど、あのラスティン様が！、兵団の錬金を使って町を建て直す考えらしいわよ」

「へぇ～、ラスティン様がそんなことを～」

「シルビー、その話に乗ってみない？こんな所で、剣や盾だけ錬金しているより、やりがいがありそうだし、人の役にも立てるんじゃない？」

「そうです～！それですよ～！シモーヌちゃん」

「急に大きな声出さないでよ、でも気に入ってくれたみたいね」

「もう移動する人員は決まっているんですかね～？」

「さあ、班長の話では、近々行きたい団員の募集を始めるかもという話だったけど」

「はいはい～、行きたいです～」

「私に言ってどうすのよ、正式に募集がかかるまで我慢しなさい」

「はい～、楽しみですね～、シモーヌちゃん！」

それから3日後に、私の班でもワーンベル行きの募集が開始されました。もちろん速攻で応募しました。募集人員が多かった為、その場でワーンベル行きが決定したんですが、班長に、

「シルビー、君は警備隊から移動してきて時間も経っていないから、荷物も少ないだろう？直ぐにでもワーンベルに向かう準備を始めてくれないか？」

と言われたのには困りました。女の子はそんなに簡単に引越しは出来ないんですよね。それでも、錬金の仕事を休んでもいいという条件で2日で準備を済ませることが出来ました。やっぱり荷物が少ないというのは事実でした。

私は、兵団の第一陣としてワーンベルに入りました。ワーンベルに到着して、宿屋だったと思われる建物に落ち着くと、翌日から早速

兵団の活動が開始されました。私は運悪く施設班になってしまいました。錬金班に入って、さっそくワーンベルの人達の役に立ちたかったですが、自分たちが使う施設を自分たちで作るというのも面白そうだったので、一応は納得していました。

工場街に始まり、住宅街の建築も順調に進んでいきました。ラスティン様が開発したという錬金を使った建築方法は、建物の建築期間を信じられないほど短縮しました。たった1日で、建物が出来ていく様は実際に作業している私達にとっても、まさしく魔法の様でした。

施設班の最後の仕事は、レーネンベルク魔法学園の分校の建設でした。魔法学園の卒業生としてこの仕事に関われる事は、とても嬉しかったです。

分校建設の為に、予定地の高台で予備調査をしていると、ラスティン様に呼び集められて、意見を求められました。始めてラスティン様を間近で拝見しましたが、噂に違わぬ美少年でした。私はどちらかと言うと年上好みなので、単に綺麗な男の子だな~で済みましたが、美少年好きのシモーヌちゃんが聞いたら悔しがる状況でした。

その後、私の意見を気に入ってくれたラスティン様を手伝って、井戸を掘る事になりました。水脈の見つけ方も井戸の掘り方も、私が知っている方法とは全く異なっていました。ただの１４歳の少年と侮っていたつもりは無かったですがその発想力には驚かされました。

全ての作業を終えると夕方になっていましたが、有意義な時間でした。帰り道にガストン先生の話で盛り上がれたので疲れも吹き飛びました。いただいた、”シフの涙”は大事に使おうと思います。

ちなみに、この話をシモーヌちゃんにしたら、何故かすごく恨まれました。３日も口をきいてくれないほど羨ましかったんですね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝

そして話は、現在に戻ります。今私達は、住宅街にある寮に住んでいます。建物自体は、何十棟と建っている寮の建物と代わり映えはしませんが、寮母さんの作る料理の美味しさは、住宅街の寮のなかでも一番だと思います。え?何故自分で料理しないかですって、それは魔法を長時間使う私達は仕事以外では出来る限り神経を使わないように手配されているのです。

すみません嘘を言いました。仲間の中にはちゃんと自分で料理している娘もいます。私もシモーヌちゃんも料理は得意ではないのです。

朝起きて、顔を洗い、その後、寮母さんの美味しい朝御飯をいただいた後、私達は寮母さんに見送られて、工場街へと出勤します。そこで簡単に今日の作業の打ち合わせを行った後、１０人程の班に分かれてそれぞれの錬金の作業に入ります。ちなみに今日は大量に注文が入ったアルミ製の鍋を錬金します。

作業の工程は大体、

1. 倉庫から材料になる石材をゴーレムにして、工場まで運搬
2. ゴーレムを解体して出来た石材を抽出(イクストラクト)して
   ケイ酸塩石の純度を上げる
3. ケイ酸塩石を元素変換(コンバージョン)してアルミを生成
4. アルミを抽出(イクストラクト)で純度を高める
5. アルミを成形(フォーム)で鍋の形にする
6. 出来たアルミ鍋を完成品倉庫に運ぶ

の順番になっています。

慣れてくれれば、４．の工程は無くても良くなるそうです。また６．の完成品を運ぶにはレビテーションを使います。ところで私達の中でこっそり流行っている事があります。それは自分が錬金したもの

にこっそり小さなパーソナルマークを入れる事です。私のパーソナルマークは、デフォルメした子犬です。町の金物やでもしデフォルメした子犬のマークが入った鍋なんかを見つけたら是非買って下さいね、品質は保証しますから。

作業が終わった後は、休憩所でシャワーを浴びて1日の疲れを洗い流します。このシャワーというのはラスティン様の発案らしいのですが、大半の女性メイジには大好評です。専任の火メイジがいる為、多少待つ事はあっても朝から夜まで何時でも使えるのが嬉しい所です。

シャワーを浴びた後は、寮に戻って、寮母さんの美味しい夕食を食べます。そして、少しシモーヌちゃんと今日あった事などを話し合った後、就寝します。これが最近の私の一日の生活です。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝

ワーンベルで仕事を始めてから数ヶ月が経過しました。最初の頃は色々な鉄鋼製品やアルミ製品を作らされる事に戸惑いを覚えましたが、1月もするとそれには慣れてしまいました。

毎日の様に色々な錬金を繰り返した為か先日、目出度くトライアングルメイジに昇格しました。といっても、シモーヌちゃんをはじめ周りには異常と思える位トライアングルメイジが多いのでそれ程自慢になりません。中にはスクエアクラスもいるほどです。

ワーンベルの人達は、ほとんどが我々魔法兵団によくしてくれます。私たちもワーンベル復興の為これからも頑張って行こうと思います。もし私が大好きなこのワーンベルが亜人等に襲われる様なことがあったら、昔の経験を生かして真っ先に退治を買って出ようと思います。

外伝七話　シルビーさんの優雅？な1日（3）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

今回で、シルビーさんのお話も終わりです。今回の外伝を書いたのは、あまりも影が薄かった魔法兵団の活動と、ワーンベルでの団員達の暮らしを紹介したかったからです。どうですか、魔法兵団という組織が少しは実体を持つものだと認識していただけましたか？

第二十七話　ラスティン１５歳（５年目の約束）（前書き）

第二十七話ＵＰします。
今回はローレンツとの約束を果たす話です。

第二十七話　ラスティン１５歳（５年目の約束）

僕も、もう１５歳になりました。ワーンベルに来てからは、魔法の勉強を行っていませんでしたが、色々な場面で魔法を使う機会が増えた為か、スクエアメイジに昇格しました。スクエアスペルの実力を見てみようということで、ワーンベル鉱山の採石場が丁度、石の取り過ぎで危険になって立ち入り禁止になっていたので、そこで父上直伝の山津波（ランドスライド）をアレンジした山津波改（ネオ・ランドスライド）を使用してみることにしました。

先ずは山津波（ランドスライド）を使用してみます。山津波（ランドスライド）は土×水×土のトライアングルスペルですが、実際に使用してみると使用場所を選ぶとはいえ、局地災害といえるほどの威力でした。石が掘り出されて、崖の様な状態だった採石場があっという間に埋まってしまいました。

次に、山津波改（ネオ・ランドスライド）を使用してみました。これは土×水×土×土ですが、はっきり言って山津波（ランドスライド）の比ではないです。文字通り山の形が変わってしまいました。ほとんど大災害クラスですね。これはよほどの事がないと使えない呪文ですね、しばらく封印しておく事にしましょう。

ところで、１５歳というと普通であれば、トリステイン魔法学院に入学する歳です。僕も父上に呼び出されて、トリステイン魔法学院への入学を勧められました。僕としては、もう魔法学院で学ぶ事など無いと思っていたので断ろうと思ったのですが、意外にもリッチモンドが強硬に入学を勧めてきました、父上もそれに同調するので、どうやら断る訳には行かないようです。

仕方が無いので、今がワーンベルにとって大事な時期である事を理由にして１年入学を延期する事でなんとか合意を得る事が出来ました。

ちなみにこの1年で身長が、１７０サントを超えました。まだ小柄かもしれませんが、もっと伸びると信じています。（お願いですから、１８０サントまでは伸びて欲しいです）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝

レーネンベルク公立学校に関しては、最初の学校が今年になって予定通り開校しました。ローレンツさんからの支援もあって、予定していた残りの4校を一気に開校しようとしたのですが、教師役が思った程、集まらず2校のみの開校となってしまいました。とりあえず９００人は、入校してもらうことが出来たので一応成功といえるかもしれません。教師役については、ローレンツさんの人脈を頼る事になりそうです。（魔法学園の平民メイジたちも、メイジである事に誇りを持っているんですね、まだまだ人を見る目が足りないようです）

来年位には予定していた、全5校が開校できる様になると思います。

公立学校の話を、レーネンベルク領の周辺の貴族に紹介してみましたが、どこもほとんど関心を示してくれませんでした。ラ・ヴァリエール公爵だけは少し興味を持ってくれた様ですが、ラ・ヴァリエール公爵領での公立学校の設立までは話が進みませんでした。

こうなったら、実績を示すだけですね。レーネンベルク公立学校の卒業生が、色々な分野で活躍してくれれば、公立学校の有用性を理解してくれる事と信じたいです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝

ところで前にもいいましたが、最近僕は月1度のペースでラ・ヴァリエール公爵家を訪ねる事にしています。要件は表向きにはカトレアの容態の確認という事になっています。カトレアの為に”アムリタの雫”を届け、分析（アナライズ）で”がん”の転移が無いか確認し、転移している事が分かれば、直ぐに自然治癒力を高める呪文で治療するという事を繰り返しています。カトレアの病気が”がん”である事は間違いないと思うのですが、どんなに探しても転移元が見つかりません。何かを見落としているはずなのですが、それが何か前世で医者でも無かった僕には分かりません。現状維持しか手は無いようです。”アムリタの雫”を飲んでさえいれば、”がん”が急速に悪化する事も無いようなので、歯がゆいですが仕方がありません。

僕がラ・ヴァリエール公爵家を毎月訪れているのは、エレオノールと話をする為です。別にいちゃいちゃする訳ではないですよ？僕達は清く正しい交際をしている最中なんですから、本当ですよ！

実は、エレオノールに結婚を申し込んだ後、次に会った時に、僕が前世の記憶を持っていることを正直にエレオノールに打ち明けました。前世の話をするのには結構勇気が必要でしたが、当のエレオノールは僕の話を聞くと、

「前世の記憶をお持ちなんて、なんて素敵なんでしょう。スティン兄様、私に是非その前世の記憶を聞かせていただけませんか？」

などと、目をキラキラさせながら聞いてきたのです。

「エレオノール、君は前世の記憶を持っている人間を恐ろしいとか、気持ち悪いとか思わないのかい？」

「私が好きになったのは、今、目の前にいるスティン兄様です。スティン兄様が前世の記憶を持っているのならば、その前世の記憶を含めてスティン兄様のすべてを私は大好きです」

こういう言葉を聞いたのは、父上と母上に話して以来ですが、やっぱり心に響く物があります。僕は感謝の気持ちを込めて、優しくエレオノールを抱き寄せます。そして顔を近づけて行き、キスをしようとする直前で、違和感を感じました。エレオノールから身体を離し、部屋の周りを見回すと扉が少し開いていて、そこからピンク色の髪が見えていました。エレオノールもそれに気付いた様です。

「カトレア、そこに居るんでしょう、怒らないから出ていらっしゃい！」

「あれ、気付かれてしまいましたわ。お姉さま、キスはもうしないのですか？」

「貴方には、レディーとしての教育が足りないようね、明日からビシビシ教育してあげます」

「えーん、お姉さまが怒った、怒らないっていったのに」

「これは怒っているのではありません、愛のムチなのです」

やれやれ、いい雰囲気も台無しですね。

それから、月に1度カトレアの診察が終わると、エレオノールに前世の記憶を語って聞かせる事が習慣になりました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そして今年は、僕にとって重大なイベントが控えていました。ロー

レンツさんとの約束の5年目になったという事です。ワーンベルの工場街の稼働率は６０％程ですが、それでも大丈夫だと思うので、ローレンツさんをワーンベルに招待することにしました。

ローレンツさんはハルケギニア中を股に掛ける大商人らしく、なかなか連絡を取るのが難しいのですが、今回は運よくトリステインに居たらしく、近日中に訪問させて頂くという返事が帰ってきました。僕は、ローレンツさんへの招待の手紙に”アルミ合金を使って、作らせたい物の設計図または模型を持参されたし”と書いておきました。さて、ローレンツさんはどんなものを用意してくるんでしょうね？

ローレンツさんは返信を受け取ってから、４日後の夕刻にワーンベルにやってきました。賓客ですから今夜は、屋敷の客間に泊まってもらう事にします。夕食をとりながら、しばらくお互いの活動について話が弾みました。

「ワーンベルの噂は最近良く聞くようになりましたな、明日の工場見学は楽しみにさせて頂きますぞ」

「期待は裏切らないと思いますよ、ローレンツさんがどんな物を作らせようとするのかには、興味がありますね」

「ははは、それは明日のお楽しみといった所ですかな、ところで魔法宝石（マジックジュエル）の方は如何かな？」

「トリステイン国内であれば順調ですよ。他国からの注文はまだ入っていないので何ともお答え出来ませんが、そちらは、ローレンツさんの方がお詳しいでしょう？」

「かなりの注文が取れると踏んでおりましてな、ラスティン殿、魔法宝石（マジックジュエル）

法宝石の生産力はどの程度ですかな？」

「そうですね、正直代官の仕事もあるので、夜しか作業出来ませんが、それでも一晩で１０から２０個といった所ですね。特殊なカットとかだと１０個が精々でしょうか？単純なカットの同じ種類の魔法宝石（マジックジュエル）であれば２０個は行けますね」

「なるほど、それだけ作れるのなら思い切った営業が出来ますな」

「お手柔らかにお願いしますよ。それより、レーネンベルク公立学校の件、資金援助までしていただいたのにご期待に沿えず申し訳ありませんでした」

「教師役が集まらなかったのでは仕方ありませんな、その件は、既に手を打ちました。学問の分野では貴族も平民もありませんからな、トリスタニアの私塾などを探せば、金の卵が見つかるものですぞ」

「お手間をお掛けして申し訳ありません」

こんな話をしていたら、夕食も済んでしまいました。ローレンツさんを客間まで案内して、

「それでは明日の朝、迎えを遣す様にします。今晩はゆっくりおやすみください」

「承知しました、それでは明日」

という会話を交わして、ローレンツさんと分かれます。さて、明日が楽しみですね。

＝＝＝

翌日、ローレンツさんを連れて工場街を案内して周ります。ローレンツさんは工場の建物を見てしきりに感心していました。一通り案内が終わると、工場内に入って、魔法兵団員にローレンツさんを紹介します。兵団員達も、ローレンツ商会は知っている様で、思わぬ大物の見学に驚いている様子です。

「それでは、ローレンツさん例のものをお願いします」

「これですが、いかがですかな？」

ローレンツさんは、２枚の紙の図面と、１つの小さな鉄の塊を見せてくれました。１枚目の図面には何の変哲もない、１５サント×１５サント×１メイルの角材が描かれていました。２枚目には厚さ２サント，幅２０サント，長さ１メイル程のやや湾曲した板が描かれていました。小さな鉄の塊は良く見るとボルトとナットでした。（良くこの世界でボルトとナットなんて手に入りましたね）

「ボルトとナットはともかく、角材と板が１メイルなのは何か理由があるのですか？」

「いや、実物を持ってくるのが大変だったので、短くしてありますが、長ければ長い程良いですな」

「分かりました、それではどちらも１０メイル程で作りましょう、それで構いませんか？」

「十分ですな」

返事を聞いた僕は、工場長で兵団の副団長の1人でもあるヴァレリーの所へ行って、作業の指示を与えました。板と角材はともかく、ボルトとナットについては細かく説明しておかなくてはいけませんね。ヴァレリーと相談して、団員を4班に分けて、角材，板，ボルト，ナットをそれぞれ作成してもらう事にします。角材班と板班はそのまま錬金にかかってもらいますが、ボルト班とナット班にはこれがどういう部品でどの様にして使うか詳しく説明しました。ネジ山の合わない、ボルトとナットなんて役に立たないですからね。団員達に説明が終わり、ローレンツさんの所に戻ると、ローレンツさんは団員達が石からアルミ合金を作り出す工程を興味深そうに眺めていました。

「いかがですか？団員達の働きは」

「噂には聞いていましたが、本当に石からアルミ合金を作っているとは、なかなか不思議な光景ですな」

「そうですね、前世の常識だと、ちょっと考えられないですよね」

ローレンツさんは、団員達の錬金の手際に感心しているようです。

「何時までも作業を眺めていても仕方ありませんから、一度外に出ましょう。ワーンベルの町をご案内しますよ」

「見ていて飽きる物では無いですが、ワーンベルの町にも興味がありますな、案内お願いしますぞ」

僕とローレンツさんは工場を出て、ワーンベルの町に向かいました。

ワーンベル鉱山や、工房などを案内すると、次に住宅街へと向かいます。住宅街の整備された町並みをみてローレンツさんは、

「この風景は、私が日本で生きていた頃に住んでいた、住宅街を思い出させてくれますな」

としきりに懐かしがっていました。

次は今年から開校した、レーネンベルク魔法学園ワーンベル分校を案内します。城や砦と言っても通用しそうなワーンベル分校に、ローレンツさんは唖然としている様子です。

「随分物々しい学校ですな、どういう意図でこんな城砦の様にしたのですかな？」

「ここは、緊急時の避難先になっているんですよ。避難先といえば学校でしょう」

「なるほど、なるほど」

ローレンツさんにはそれだけで伝わった様です、ハルケギニアの人にこれを説明するのは大変だったんですよね。ここまで案内をすると丁度夕刻になっていました。

「それでは、工場に戻りましょうか。そろそろ数が揃っていると思いますから」

ローレンツさんにも特に異存は無いようなので、工場街へと戻りました。工場に戻った僕達を、アルミ合金の山が出迎えてくれました。工場長のヴァレリーが、結果を報告してくれます。

「ラスティン様、お帰りなさいませ。ご覧の通りかなりの数が完成しましたがいかがですか？」

「数はどれ位ですか？」

「角材が４０本、板が３５枚、ボルトとナットについては正確には数えていませんが３００組ほどです」

「ボルトとナットが思ったより少ないですね？」

「はい、慣れない形でしたのでうまくボルトとナットがはまる様になるまでに時間がかかりまして、ですが次回からはこの倍は作ってみせます」

「そうですか、ご苦労様でした。団員の皆さんに無理はさせていませんね？」

「はい、魔力が枯渇した者は作業から外し、帰宅させています。例のハーブティーも支給済みです」

僕は、ローレンツさんを振り返り、

「これ位、作成出来ましたが、いかがですか？」

と尋ねてみましたが、ローレンツさんは出来たアルミ合金を真剣な目で見つめていました。

「ラスティン殿、本当に今日一日でこれだけの量のアルミ合金を作ったのですか？」

「もちろんです」

「品質はどうなのですか？」

「問題ないはずですが、念のため確かめてみましょうか、分析（アナライズ）」

うん、合金の比率なんかも問題ないようですね。

「確認してみましたが、問題ありませんね」

「それでは、最後の質問ですが、明日もこれと同じ量のアルミ合金が作成可能ですかな？」

「それに関しては、否（ノー）ですね、残念ながら」

「ほう、先程の魔力の枯渇の影響ですかな？」

「いいえ、そちらについては対応が済んでいます、問題なのは材料の方なのです。団員達は張り切ったのでしょうね、これだけの量のアルミ合金を作ってしまうと、倉庫にあった石材は使いきってしまっているでしょうから、明日同量のアルミ合金を作成するのは無理ですね」

「ふはは、メイジといえども材料が無くては、錬金出来ないのですな。結構、５年前の約束が確かに達成されている事を認めましょう！」

「満足していただけましたか？」

「予想以上だったと言ってもいいですな、良くここまで生産量を増やせた物ですな。約束どおり、このアルミ合金の供給先を紹介させていただきましょう」

「その供給先というのは何処なんですか？」

「フネですよ」

「船ですか？水の上に浮かんでいる」

「いいえ、空に浮かぶ方のフネです、フネには風石が使われますが、浮力を得る為に風石が消費されていきます、現在のフネは本体を木で作り、要所を鉄で補強しています。しかし、この様な重い材料では、風石の消費は馬鹿になりません。そこでアルミ合金を使ってフネを作る事で風石の消費を抑え、大量の貨物を運ぶ事が可能になるはずなのです」

これは盲点でした、前世で超々ジュラルミンが航空機の機体に使われていたという記憶はあったのに、フネに乗ったことが無かったせいで、そこに気がつきませんでした。

「それは画期的なアイデアですね、アルミ合金を使って船体を組むなら、メイジの協力が不可欠ですね。魔法兵団の方からメイジを派遣しますので、是非協力させて下さい」

「それはこちらからもお願いしようと思っていた事ですな」

アルミ合金を使用したフネの登場で、ハルケギニアの航空業界は新たな時代を迎える事になるでしょう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

後日、ローレンツさんから約束通り、零戦が送られてきました。
早速機体に使われている金属を分析した所、本物の超々ジュラルミンの成分が分かり、僕の作ったアルミ合金から強度を１０％も上げる事ができました。
他の収穫は、搭載されていた機銃に弾薬が残っていて、これを分析複製する事で、弾丸と薬莢と無煙火薬の技術を得る事ができました。
後込め式の銃を開発する事も可能でしょう。
本来であれば機銃やエンジンも分解複製したいのですが、工具も技術も持っていない、今の状態では手が出せない状態です。もし物語（歴史）通りに才人が召喚されて、零戦がバラバラで使えませんでしたではシャレになりませんからね。
ただ、石炭液化の方法は何かの本を読んで知っているので、燃料の心配はしなくて済みそうです。
これは本腰を入れてゆっくり分析していくしかないようですね。

第二十七話　ラスティン１５歳（５年目の約束）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第二十八話　ラスティン15歳（ワーンベルの奇跡、あるいはトリスティン版産

第二十八話ＵＰします。
サブタイトルが妙に長いです。どちらも付けたかったのでそのまま採用してしまいました。

第二十八話　ラスティン１５歳（ワーンベルの奇跡、あるいはトリスティン版産業革命）

魔法宝石（マジックジュエル）”リリア”の売れ行きは、まだまだ好調です。低価格な水晶系（クォーツ）では満足出来なくなって中価格の鋼玉（コランダム）系を購入したり、ドレスの色に合わせて違った色の魔法宝石（マジックジュエル）を購入したりする貴族が結構な数いるようで、順調な売れ行きです。レーネンベルク公立学校に回せる資金も潤沢と言っていいでしょう。

裏では、ローレンツ商会による債権の集約が行われていますが、今の所問題にはなっていないようです。エドモンさんの話では、その辺りはローレンツさんがしっかり管理している様で、王国から問題視される様な事もないそうです。

ここからは伝聞になってしまいますが、国外での魔法宝石（マジックジュエル）の売れ行きも出だしは好調とのことでした。エドモンさんによると、ガリア，アルビオン，ゲルマニアで貴族向けに売り込みを図ったそうですが、手応えは十分だったそうです。いずれ大量に魔法宝石（マジックジュエル）の生産依頼が舞い込んで来るのでしょうね。

魔法宝石（マジックジュエル）本体の生産を一手に引き受けている僕としてはワーンベルの復興にばかり手をかけている訳にも行かず、忙しい毎日を送っています。

ただ、ローレンツさんから紹介された、アクセサリのデザイナーの腕は確かで、魔法宝石（マジックジュエル）のアクセサリを作っている土メイジ達もそのデッサンを見て刺激を受けた様です。今までどうしても魔法宝石（マジックジュエル）本体に負けていた、アクセサリの部分も見違える様に洗練され、今では魔法宝石（マジックジュエル）無しでも売れるんじゃないかと思えるほどです。これは思わぬ副産物といえるでしょう。

しかし、僕が作れる魔法宝石（マジックジュエル）も限界があります。もう1人位作れる人間がいると大分楽になるんですが。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝

ローレンツさんとの契約に基づいて、ローレンツ商会から各国情報が僕に提供され始めました。最低限でもガリア，アルビオン，ゲルマニア，ロマリアの現状について知りたかったので、ローレンツ商会からの情報はありがたい物でした。

ガリアは、ロベスピエール4世の治世で、二人の王子、ジョゼフとシャルルの2人が後継者争いをしているようです。ジョゼフは”無能王子”として劣勢の様です。この辺りは物語（歴史）通りですね。シャルルに娘が生まれたのかは現在情報待ちです。

アルビオンは、ジェームズ1世の治世で政治的には安定している様です。ウェールズ王子も誕生している様子です。しかし、モード大公に関してはあまり情報が漏れてこないようです。エルフの愛人がいるという噂位は聞くことが出来ました。ティファニアが生まれているかどうかは現状では不明といった所です。

ゲルマニアでは、政争の真っ最中の様です。物語（歴史）通り、アルブレヒト3世が皇帝の座に着くかどうかは不確定ですが、ゲルマニアのことはしばらく静観していて問題無さそうです。

ロマリアに関しては、聖エイジス31世が現在教皇の座にいるそうです。ヴィットーリオやチェザーレという人物は少なくとも政治の表舞台には顔を出していないようです。ローレンツさんの話によると、ロマリアには既に物語（歴史）介入が行われている様なので、あまり心配する必要は無いかもしれません。

とにかく、ガリア，アルビオン，ゲルマニア，ロマリアに関しては、今後も細かく情報を送ってくれる様に、ローレンツ商会には依頼をしておきましょう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

さて、ワーンベルの町がどうなっているかお話しておきましょう。ワーンベルの町は以前の繁栄を取り戻しています。いえ、これは正確ではありませんね。以前以上に繁栄しています。

まず、魔法兵団が作り出す、鉄鋼製品やアルミ製品を求めて、昔の様に商人がワーンベルを頻繁に訪れる様になりました。商人達が戻ってくれば、それに合わせて、彼らを目当てにした露天等が当然のように復活しました。閉店に追い込まれた宿屋も景気の回復を敏感に感じ取ったのか、次々と再開されていきました。

ここまでなら以前の繁栄ですが、魔法兵団増員に伴い作り出す鉄鋼製品やアルミ製品の供給量はどんどん増えて行きました。これに伴って、一時期は価格が高騰していた、鉄鋼製品の価格もどんどん下がっていきました。

ここに目をつけたのが、トリスティン国外と取引のある、ローレンツ商会の様な大手の商人でした。ワーンベル産の鉄鋼製品やアルミ製品が盛んに、外国へ輸出される様になりました。

このような状態になると、国外の商人たちも黙っていませんでした。ガリア，アルビオンをはじめ遠くロマリアからも商人が、ワーンベル産の鉄鋼製品やアルミ製品を仕入れにやってきました。

一方ゲルマニアでは、トリスティンからの工業品にかなりの関税をかけたようです。どうやら自国の工業を保護する意図がある様です。まだ政治的には安定に程遠い国にしては素早い対応だったと思います。

出入りする商人が飛躍的に増えた為、ワーンベルの町で収容することが困難になってきました。そこで僕は、ワーンベルの町の拡張を行うことにしました。今回は、工場街や住宅街や分校の様に兵団を使って短期間で建設を行うことはせず、大工の皆さんの手で普通に建築を行うことにしました。
兵団員の魔力は可能な限り工業品を作るのに使用したかったのと、偏りがちなワーンベルの経済発展をより多くの人に実感してもらいたかったからです。ただ、新たな町を囲む城壁に関してだけは、魔法兵団を使って数日で建設してしまいました。（大工の皆さんを亜人や獣の被害に晒すわけにはいかないですからね）
数ヶ月もすると、拡張した土地にもそこそこ建物が建つようになりました。以降こちらが新市街と呼ばれることになりました。新市街の発展と共に、ワーンベルの住民数はどんどん増えていきました。遠くの村から引っ越してきた住民もいるほどです。
もともと1万人程だった住民数が、魔法兵団とその家族の移住、商人達が戻ってきたことの影響、新市街の建築などの影響で4万人程までに増加しました。そしてその増加は現在もまだ続いています。この増えた住民をうまく工業品の生産に使えないものですかね？

ところで最近噂を聞いたのですが、古くからのワーンベルの住人たちはこの町の再興を評して、”ワーンベルの奇跡”と呼んでいるそうです。

＝＝＝

ワーンベルの町の様子を紹介したなら、レーネンベルク魔法兵団の活躍も紹介しなくてはなりませんね。
工場街が稼動し始めた当初は、６００人程の魔法兵団員で鉄鋼製品やアルミ製品の生産を始めましたが、第二陣，第三陣と団員が増え

て行くに従い、工業品の生産量は飛躍的に増加していきました。
しかし問題が無かった訳ではありません。まず問題になったのが、工場の広さでした。広めの工場用の建物を2棟も用意したのですが、３０００人近い団員が入るとさすがに狭く感じてしましました。どうやら見積もりを誤ったようです。しかし今更、もう1棟建てるという訳にも行かないです。
そこで僕がとったのは交代制でした、早朝から昼間で働く班と、昼から夜まで働く班に分けたのです。こうすることで、団員たちの作業場所が確保出来ました。重い材料などを運ぶ為のゴーレムも動かし易くなりました。

ところで、兵団員たちが錬金で工業品を作り出すには、

1. 原料となるＦｅ2ＳｉＯ４（ファヤライト）を多く含んだ鉱石を倉庫から工場へ運ぶ。
2. 分解（デコンポーズ）で鉱石から、鉄を取り出す。
3. 鉄を取り出した残りから抽出（イクストラクト）で、高純度の酸化ケイ素を取り出す。
4. 取り出した酸化ケイ素を元素変換（コンバージョン）で、鉄やアルミに変換する。
5. 変換した鉄やアルミに抽出（イクストラクト）を更にかけて、純度を高める。
6. 純度を高めた鉄やアルミや1．で取り出した鉄を成形（フォーム）して製品へと加工する。

の手順を踏んでいます。これを見ているとどうも効率が良くない気がしてなりません。せっかく工場に集まっているのにこれでは、工房で小規模に生産していた時と変わりません。
そこで僕は、ジュラルミン盾とチタン剣を作るときに使った完全に分業制をより進んだ形で、採用することにしました。
まず行ったのは、工員としてワーンベルの町に平民を雇うことでし

た。そして、工程に合わせて団員を配置して、この間を雇った工員で結ぶ、つまり生成されたものを運んでもらうのです。こうする事で、錬金の効率も、生産量もかなり向上しました。
しかしこの方法は意外と団員たちに不評でした、どうも行き来する工員たちのせいで気が散るというのです。気が散るというのはメイジにとって、魔法の効率が落ちるのと同義ですから、これは放置しておけません。
そこで、僕が思いついたのは前世の工場でも使われていた、ベルトコンベアを採用するという案でした。動力にはゴーレムを使おうかとも思いましたが、折角雇った工員の皆さんを首にするのも気が引けたので、工員の皆さんの手でベルトコンベアを動かす事にしました。
この方法は、兵団員にも工員にも好評でした。兵団員にとっては、動かないで材料が静かに運ばれてきますし、工員にとってもただ取っ手を回しているだけで良いので、腰に負担がかからないということらしいです。
ベルトコンベア方式を導入したことで、工場は本当に前世でみた工場そのものという感じになりました。生産量が増えた事も付け加えておかなくてはなりませんね。
こうして、正に工場と言える施設が完成した事を、僕は個人的に”トリスティン版産業革命”と呼んでいます。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

産業革命という言葉を使って別に思いついたのが、軽工業の発達でした。紡績機や自動織機といった物も、ゴーレムの技術を使用すれば、意外と簡単に出来そうな気がします。1人のメイジが複数のゴーレムを動かすことは訳無いですし、動きが単純ですからゴーレム

自体を作る事もそれほど難しくありません。レーネンベルク織りに応用できれば、織物の生産量を高める事ができるかもしれません。早速父上に報告して、レーネンベルク織りの盛んな地域に団員を派遣する事にしましょう。

第二十八話　ラスティン１５歳（ワーンベルの奇跡、あるいはトリスティン版産

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

次回は番外編になります。投稿は短編として、全く別に掲載されますので、ご注意下さい。ちなみにＲ１５で残酷な表現ありになります、もしも１５歳未満の読者の方が見えたらすみません。

第二十九話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：アルビオン）（前書き）

第二十九話ＵＰします。

今回から、諸国漫遊編です。主眼は外交なので、ワーンベル編よりは少し派手に物語りは動く事になります。

番外編の”革命@番外編”を読んでいただくと、エレオノールのとる大胆な行動の訳が分かりやすいかもしれません。

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ９４６４ｎ／

第二十九話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：アルビオン）

僕がワーンベルの代官になってから、もう1年数ヶ月が経とうとしています。最近はワーンベルの統治にも慣れてきた様で、余程の問題が発生しない限りマルセルさんの手を煩わせる事もなくなりました。魔法兵団による工業品の生産も完全に軌道に乗った様で、特に問題になる様なことも見当たりません。

そこでローレンツ商会から各国情報が僕に提供される様になってからずっと考えていたアイデアを実行に移す事にしました。それはハルケギニア各国をこの目で見てみたいという物です。そしてもし可能であれば、物語（歴史）に介入したいと考えています。最悪でも各王家に伝を作る事が出来れば上出来とすることにしましょう、何といっても外交なんてしたことがないですからね。

先ずは父上に願いして、各王家に対しての親書を手に入れることにしました。意外と簡単に親書は手に入りました。用件を”ワーンベル産の工業品に対する関税の撤廃もしくは低減”としたことが大きかったかもしれません、一大臣などではこの問題を扱うのは難しいですからね。

首尾よく親書を手に入れた僕は、早速ワーンベルの細々とした用件を全て、マルセルさんに一任して旅に出る準備を始めました。予定では、アルビオン↓ガリア↓ロマリア↓ゲルマニアの各国を巡る予定です、可能ならばエルフの里も訪ねたいと思っています。そうだ、ロマリアに行くなら、ローレンツさんに連絡を入れておかなくてはいけませんね。

とりあえずは、アルビオンへ渡るフネの手配と、ロンディニウムへの使者の手配ですね、いきなり訪ねても怪しい人物でしかありませんからね。全ての手配を終えると、僕はこっそりとラ・ロシェールの町へと向かうのでした。そして、ラ・ロシェールの町に着くと思

わぬ人物が待ち構えていました。

「ところで、エレオノール、なぜ君がこんな所にいるんだい？」

「スティン兄様が、慣れない外遊をなさるとお聞きしましたから、少しでもお手伝いができればと思ってお待ちしておりました」

あれ、今回の旅行は限られた人にしか話していないはずなんですけどね、おかしいですね？

「ねえ、エレオノール、どこで僕が外遊するなんて話を聞いたんだい？」

「情報源（ソース）は秘密ですわ」

優しく聞き出そうとしてみましたが、教えてくれそうもありません、仕方ないですね。

「君は今回の旅行を外遊って言ったけど、僕にとっては僕が代官をやっているワーンベルの将来を決める大事な外交なんだよ、わかるかい？」

エレオノールはじっと僕のことを見つめています。僕は畳み掛けるように、

「もしかすると危険な目に会うかもしれないんだよ？」

「そんな危険な場所にスティン兄様をお一人だけで行かせる訳にはまいりません！」

「いや、ちゃんと護衛は連れていくよ？」

「それでも謁見の時はお一人でしょう？私がご一緒できれば、二人で対応できます！」

どうしたんでしょうね？まだ子供でも普段は冷静な方のエレオノールがこんなに熱くなるなんて？

「エレオノール、もしかして、僕について何か心配事があるのかい？」

「スティン兄様が先日カトレアの治療の為に我が家に来られて時の事を覚えていらっしゃいますか？」

ああ、オノレの事件の少し後でしたね、すこしやつれていたかもしれませんね。

「あの時は少し体調を崩していたんだよ」

「嘘です、あの時以降スティン兄様はどこか変わられてしまいました。相変わらず私達には優しくしてくださいましたが、どこか辛そうでした。私が知らない所でスティン兄様が苦しんでいらっしゃるなんて、我慢できません！少しでもスティン兄様の苦しみを和らげて差し上げたいのです」

「エレオノール」

僕はそれだけしか言えませんでした。色々な感情が僕の中を駆け巡ります、ただ僕のエレオノールに対する愛情は確かなものですし、エレオノールから向けられる純粋な好意も僕の心を暖かくしてくれ

ました。

「エレオノール、ありがとう。君の好意に甘えさせてもらうよ」

「え！本当にいいんですか？」

自分で言っておいて、信じられない様にエレオノールが聞き返してしました。

「大切な女性の好意には、甘える事に決めたんだよ」

大切な女性という所で、真っ赤になってしまったエレオノールですが、何とか納得してくれた様です。

それから、僕とエレオノールと護衛の皆さんでフネに乗り込みました。アルビオンへは大きな荷物があるのでそれも積み込みます。

今回利用するフネは、最近完成したばかりの超々ジュラルミン製のフネです。今回は船主のローレンツさんの好意でチャーター便です、気分がいいですね。

準備が整うと、早速、風石の魔力が発動され、ゆっくりとフネが桟橋から離れて行きます。フライの呪文で空を飛ぶ事に慣れている僕たちメイジにとっても、これほど大きな物体が宙に浮かぶのを見るのは、なかなか壮観です。

フネが始めての僕とエレオノールはだんだん小さくなっていくラ・ロシェールの町をいつまでも眺めていました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「あれが、アルビオンか～」

「すごいですね、スティン兄様！」

僕とエレオノールは揃って、フネから身を乗り出して眼前に広がる信じられない景色に見入ってしまいました。話には聞いていましたが、これでだけ大きな陸地が空中に浮いているのを見るのは現実離れしていますね。

フネの旅は意外と快適なものでした、天候にも恵まれ、風にも助けられて、予定以上に早くロサイスの町に着くことが出来ました。ここからは、馬車でロンディニウムを目指し、そこで宿をとってハヴィランド宮殿への使者を改めて送ることにします。

送った使者はすぐに帰って来ました。ジェームズ1世陛下が直接面会してくださるそうです。直接お会いできる事はありがたいですが、少し危機感が無さ過ぎる気がします、こんな土地に住んでいるから、外敵の心配をしなくて良いと考えているんでしょうか？（考えてみれば、僕は未だにわが国の国王陛下にお会いした事がないんですよね。先年、生まれたという、アンリエッタ殿下にもお目にかかっていないです。これも社交界を避けているせいですかね？）

僕は早速、ハヴィランド宮殿からの使いの方の指示に従って、宮殿を訪ねる事にしました。しばらく控え室で待たされましたが、謁見の間に通されてジェームズ1世陛下にお会いする事が出来ました。

「お初にお目にかかります、トリステイン王国レーネンベルク公爵家嫡男ラスティン・ド・レーネンベルクと申します」

「同じくトリステイン王国ラ・ヴァリエール公爵家が長女、エレオノール・アルベルティーヌ・ド・ラ・ヴァリエールと申します、どうかお見知りおきを」

「ふむ、若いのにしっかりしているな、苦しゅうない面をあげよ」

「はっ」「はい」

「それほど緊張する必要はないぞ、トリステイン王国といえばわが国と兄弟の様なものだからな」

その言葉を聞いて、僕は緊張していた体中の筋肉を緩めました。隣でエレオノールも緊張を解いた様です。

「して、ラスティン君と言ったかな？わが国がトリステインから輸入している工業品の関税について話があるという事だったが、詳しく聞かせてくれるかな？」

僕はまだ少し緊張しながら、２国間の工業品に対する関税を撤廃する事を提案してみました。ジェームズ１世陛下は淡々とした様子で、僕の提案を聞いています。

「ふむ、我が国では鉱物を掘る事が出来ぬから、工業品に関しては輸入に頼りきっておる。関税は最低限しかかけておらぬが、それを撤廃せよと言うのだな？」

「畏れながら、その通りでございます」

「では、トリステインとしてはその見返りに、何を我が国にもたらしてくれるのかな？」

ほら来た、兄弟とか言っておきながら、これですからね。でも国王の姿勢としては正しいのでしょうね。

「アルビオンといえば、優れた毛織物を生産していると聞き及んで

おります。実は我がレーネンベルクでも織物を生産しておりまして、そこで開発された技術を提供させて頂こうと思っております」

「ほう、新しい技術とな、見せてくれるか？」

僕は控え室の外で組み立てさせておいた、紡績機と力織機を謁見の間へ運びこませます。

「こちらがその技術になります、早速お見せしましょう」

僕は、機械を運び込んで来た魔法兵団員に合図を出します。団員が機械に魔力を注ぎ込むと、機械が独りでに動き出し、羊毛から毛糸を、毛糸を織物に仕上げて行きます。

「ゴーレムを制御する技術を利用して動く、紡績機と力織機でございます。いかがでしょうか？」

「ほほう、なかなか面白いものじゃな」

ジェームズ1世陛下は熱心に、機械の動きを見詰めています。どうやら興味を持っていただけた様子です。その後、幾つかの質問がされましたが、最終的には紡績機と力織機の現物を置いていく事と、機械に詳しい団員を何名か派遣することで、合意を得る事が出来ました。

「有意義な会見であった、客間を用意させるので今宵は泊まっていくがよい。ささやかだが晩餐の用意もさせるゆえ、それまで宮殿内を散策でもしているが良かろう」

「ははっ、お心遣い感謝いたします」

会見も終わり、しばらく宮殿の庭を散策していると、晩餐の用意が整ったという事で食堂に通されました。そこには既に、王妃様と王子様がいらっしゃいました。（この子がプリンス・オブ・ウェールズですか、４～５歳位かな、なかなか可愛い子供です、将来は美男子に育つんでしょうね。物語通りであれば我が国のアンリエッタ王女と恋仲になるんでしたね）

王妃様に、魔法宝石（マジックジュエル）のアクセサリーをお送りすると大変喜ばれました。そしてさりげなく、話をモード大公に移して行きます。

「あやつは、なんでも妾が妊娠したとかで大公領に篭っていてな、困ったものだ」

あれ？妾がエルフなのを責められて、処刑されるはずだったんですが、反感とか感じられませんね。

「失礼ですが、その愛妾の方はエルフだとお聞きしましたが、本当でしょうか？」

「そんな事が噂になっているのか、今では昔ほどエルフに反感を持つものは少ないが、王家の者が妾に現を抜かす様では示しがつかぬからな」

エルフである事に反感が無い！これは重要な情報ですね。

「そこまで言われると興味が湧きますね、モード大公とその愛妾の方にお会いしたいのですが構わないでしょうか？」

「ラスティン君の様な若者でも、美しい女性には興味があるらしいな、よかろう！あれには使者を出しておくから明日にでも訪ねてみ

るがよい」

「感謝いたします！」

何故か、さっきからエレオノールの視線が痛いんですけど、誤解だからね！後でちゃんと誤解を解いておかなくてはなりませんね。

翌日、勧められた通りモード大公を訪ねてみましたが、妊娠中で体調を崩しているということで、エルフの妾の方（シャジャルとい名前らしいです）とは面会出来ませんでした。お腹の子供がティファニアなのでしょうね、ティファニアに似て巨乳なのか興味があったのですが、エルフといえば華奢というイメージがありますからね。まあ、事態が急変でもしないかぎりモード大公とシャジャルさんが処刑されることは無さそうですから、モード大公と面識が出来ただけでも良しとしましょう。

こうして最初の訪問国アルビオンでの目的は無事、果たされたのでした。ローレンツさんが言っていた、物語（歴史）に干渉したという事実は思ったより大規模に行われている事が分かったというのも収穫ですね。

次の目的地はこの旅の本命ともいえるガリア王国です、気を引き締めて行きましょう。

第二十九話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：アルビオン）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

読んでいただいてお分かりの通り、何故かエレオノール嬢が強引に出演しています。無理があるのは承知ですが、旅に同行させる事で思ったより活躍してくれたので、後悔はしません。
若い二人の活躍をご期待ください。

第三十話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：ガリア１）（前書き）

第三十話ＵＰします。

第三十話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：ガリア１）

第三十話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：ガリア１）

その後、僕達一行は、ロサイスの町からフネでアルビオンを離れました。風向きの関係でトリスティンには戻らず、直接ガリア領の港町カレーに向かうことになりました。カレーにはローレンツ商会の支店がある為、色々便宜を図ってもらいました。

カレーの町から王都リュティスまでは馬車で数日かかりました。リュティスに着いた僕達は早速、宿をとり、ヴェルサルテイル宮殿に使者を送りました。しかし送った使者はなかなか戻って来ませんでした。夜になってから戻って来た使者によると、対応に出た大臣がロベスピエール４世陛下との謁見を許可しようとしないとの事でした。

仕方ありませんね、明日直接宮殿に出向いてその大臣とやらと交渉してみましょう、僕が考えているガリア和解プランはロベスピエール４世と直接交渉しなくては話しにならないですから。

翌朝になると僕達は早速、昨日使者に出した護衛に案内されて件の大臣の執務室までやってきましたが。

「閣下、何とか閣下のお力でロベスピエール４世陛下に謁見させていただけないでしょうか？」

大臣Ａ（名前を聞いた気がしますが、忘れてしまいました。こんな人物は大臣Ａで十分でしょう）は不機嫌そうに眉をひそめています。

「そなたもしつこいな、陛下はお忙しいと言っているだろう」

さっきからこのやり取りの繰り返しです。僕の後ろでやり取りを見ているエレオノールもさすがにあきれている様にため息をついています。そろそろ潮時ですかね。

「仕方ありません、不本意ですがこの親書は閣下にお預けします。必ずロベスピエール４世陛下に直接お渡し下さい」

「確かにお預かりしましょう」

言葉とは裏腹に、面倒そうに親書を受け取る大臣Ａなのでした。本当に大丈夫でしょうか？

「ところで閣下、さすがに王子殿下にお会いすることは可能でしょうね？」

「シャルル殿下もお忙しい方だが、何とかしてみよう」

「ジョゼフ殿下にもお会いしたいのですが」

「は？」

大臣Ａが不意をつかれたように間の抜けた声をあげました。

「も、もちろんだ、ジョゼフ殿下もお忙しいと聞いているが、私が何とかして見せよう」

シャルル王子ならともかく、現時点では”無能王子”であるジョゼフ王子が忙しいとは思えませんね、語るに落ちたといった所でしょうか。

「閣下のお力を頼りにしております」

僕は一応そう言って頭を下げておきます。仕方ないですね、今回は両王子の人となりを知るだけに止めておきましょう。大臣Ａから、明日ジョゼフ王子を、明後日シャルル王子にそれぞれ面会出来るように取り計らってもらう約束だけして、宮殿を出ることにしました。

宮殿を出ると、今まで後ろで黙って話を聞いていたエレオノールが、

「〝小物〟でしたね」

と疲れた様な声で囁きかけてきました。お互い主語は無くても話は通じてしまいます。１３歳の少女に〝小物〟と言われてしまう、大臣Ａも哀れですね。

「ところで、何故ジョゼフ王子にまでお会いになるんですか？」

エレオノールの耳にも〝無能王子〟の噂は届いている様です。

「可笑しいかい？」

「いいえ、そんなことはありませんわ。ですがスティン兄様は、ジョゼフ王子にお会いすることを楽しみにされている様に感じたので、少し気になったのです」

エレオノールにそんなことを言われるとは思わなかったので、少し驚きましたが、改めて考えてみると、あの奇才の持ち主に会えると思うと、少しワクワクする感じがします。

「エレオノールは、本当に僕のことを良く見ていてくれるね」

そう言って優しくエレオノールの頭を撫でます。

「もう、子供扱いしないで下さい」

エレオノールは口ではこういいましたが、実際には気持ち良さそうに撫でられるままになっています。こうして見ていると、エレオノールは本当に可愛い子供の様で、彼女が僕の婚約者だなんて信じられない気がしてきます。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

翌日、ヴェルサルテイル宮殿に赴くと、大臣Ａが何とか手配してくれたのか、すんなりジョゼフ殿下と面会する事が出来た。

僕達が、応接室と思われる部屋で待っていると、その人物がやってきました。見た目は２０代前半のかなり美男子で、青い髪が特徴と言えるのですが、雰囲気全体が暗いものを纏っています。

「貴殿らが、私に会いたいと申し出た者たちか？」

「お初にお目にかかります、トリステイン王国レーネンベルク公爵家嫡男ラスティン・ド・レーネンベルクと申します、殿下」

「同じくトリステイン王国ラ・ヴァリエール公爵家が長女、エレオノール・アルベルティーヌ・ド・ラ・ヴァリエールと申します」

「トリステインのレーネンベルク公爵家の嫡子といえば、”ワーンベルの奇跡”殿ではないか、そんな人物が、この”無能王子”に何の用かな？」

ジョゼフ殿下は、ワーンベルの事をかなり詳しく知っている様でした。ガリアの情報収集力は油断出来ませんね。でもおかげで、ジョゼフ殿下の興味を引く事は出来た様です。ですが、ジョゼフ殿下の態度に違和感を覚えます、”狂気の天才”というイメージを想像していたのですが、これではただの暗い厭世的な態度の王子としか言えない気がします。

「”ワーンベルの奇跡”は、私だけの手柄ではありません。部下達の力があってこそ達成された物でございます。それに一国の王子殿下に面識を得たいと思う事は、それ程不自然な事ではないと存じますが」

「ふむ、そちは謙虚だな」

「”ワーンベルの奇跡”をご存知ということは、私の二つ名をご存知でしょうか？」

「確か＞元素＜だったかな？元素周期表なるものと、その元素の実物を錬金で作り出して、その名を得たと聞いたが」

「その通りでございます、ところで殿下、私が系統魔法を習い始めた当初、錬金が全く使えなかったとしたら殿下はどう思われますか？」

「なに、その話詳しく聞かせてくれるか！」

よし乗ってきましたよ。

「殿下もご存知の通り、錬金の初歩は、青銅を錬金で生成する事で

す。ですが私は、この青銅の錬金でつまづいてしまったのです。どんなに努力しても一向に青銅を錬金することは出来ませんでした」

エレオノールもこの話は始めて聞くのか、真剣に聞き入っています。

「6歳で系統魔法を習い始めてから、ほぼ1年間私の錬金の試みは全て徒労に終わりました。ですが、ある人物との出会いが私の錬金の才能を開花させてくれたのです。その人物は私に青銅を飛び越えて鉄の錬金をさせました。青銅が無理なのに、鉄などはもっと不可能と殿下は思われるかもしれませんが、鉄の錬金は成功したのです」

ジョゼフ殿下は、目を見開いて僕の話を聞いています。

「僕はその人物から、2つの事を学びました。1つは固定観念の危険さ、もう1つはイメージする力の大切さです。私は、この2つを魔法を使う時、何時も心の隅に置いています」

「固定観念とイメージする力か、私に足りなかったのはそれなのかも知れないな」

ジョゼフ殿下は、そう呟きました。

「ところで、ラスティン殿とエレオノール嬢は婚約しているのではないかな?」

「ご明察です、殿下。よくお分かりになりましたね」

「私にも幼い頃からの許婚が居たのだ、それで何となく分かったのだよ。ラスティン殿が良い話をしてくれたのだから、私も少し自分の話をしよう。半分、愚痴の様なものだがね」

そう言って、ジョゼフ殿下は話を始めました。

「その者の名は、アナベラ、この国のとある伯爵の娘だった。私達は、物心が付く前から婚約者だった。彼女はいつも私の傍に居てくれた。私が周りから”無能”と言われても、彼女だけは私の才能を信じていた。私は彼女の”魔法がダメなら、その他の学問で周りを見返しましょう！”という言葉だけを頼りに、様々な学問を修めた。役に立つかどうか分からない学問もあったが、彼女の励ましの言葉があれば、どんな学問を学ぶ事も苦痛では無かった。周りの者達は、無能王子が無駄な努力をしていると嘲たが、そんな事は私にはどうでも良かった」

ジョゼフ殿下は当時を懐かしむ様な表情でした。こうしてジョゼフ殿下は僕達にこんな話をしてくれるのでしょう?僕とエレオノールに自分達の姿をだぶらせているのでしょうか、それとも、吐き出す相手のいない気持ちを、他国の子供だということで、ある意味安心して吐き出しているのでしょうか。

「やがて私達は成長し、結婚する事になった。それからの数年は、なかなか子供には恵まれなかったが、私にとって幸せな時間だったよ。やがて2人の間に子供が出来た、私達にとって最も幸せな時間だった。だが出産時のショックでアナベラが亡くなってしまったことで、その幸せな時間もあっけなく終わりを告げた。私はアナベラが残してくれた娘のイザベラを見る事が辛い、どうしてもアナベラの事を思い出してしまう。王位などどうなっても良い、ただアナベラが戻ってきてくれるなら」

ジョゼフ殿下は疲れきってしまった様に、椅子に力なく座り込んでしまいました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

僕は暗い気分になりました。確かに愛する女性に先立たれ絶望している所に、望まぬ王位を無条件で与えられ、競争相手からは笑顔で祝福などされたら、僕も狂気の行動をとってしまうかもしれません。

そんな事を考えていると、エレオノールが急に立ち上がって、殿下に話しかけました。

「殿下、私はアナベラ様のことを存知あげませんが、私がアナベラ様の様な立場なったとしたら、殿下にはこう伝えたいのではないかと思います」

エレオノールは深呼吸するとがらりと口調を変えて、語りだしました。

「あなた、これ以上、私が死んだことを悲しまないで下さい。そしてそれ以上自分を責めないで、これは運命だったのです。私はあの子を”イザベラ”を生むことが出来て幸せです。二人の愛の結晶なのですから、その愛の結晶を否定するなんて、私達の愛を否定するような物ではないですか？」

エレオノールが語る言葉は、ジョゼフ殿下にある種の衝撃を与えているようです。

「私はあなたが国の統治方法を学んだり、様々な技術書を一生懸命読んでいる姿を見ている事が大好きでした。”無能王子”と呼ばれながら、努力を怠らなかったあなたの見守ることが出来たのは、何

事にも平凡だった私にとって誇れる数少ない物です。私がこの誇りを持ち続けることが出来るかはこれからのあなたの行動にかかっています。どうかあなたの才能を私達の祖国ガリアの為に役立て下さい」

これは、本当にエレオノールが話しているんだろうか？という疑問が僕の中に生まれていました。

「そして悲しいけれどもう私はあなたを支えることが出来ません、あなたは意外に寂しがり屋ですから、あなたを支えてくれる新しい女性を見つけて下さい。あなたの幸せをブリミルの御許でいつまでも祈っていますから」

エレオノールはここまで話し終わると口を閉じました。ジョゼフ殿下は驚愕の表情でエレオノールを見ています。エレオノールの話した内容が彼女の創作なのか分かりませんが、少なくともジョゼフ殿下の心には響いたようです。

僕はジョゼフ殿下に更に揺さぶりをかけてみます。

「殿下、いいえジョゼフ王子、今のままのあなたであれば、ガリアの王位は継げないでしょう。そうなればどこかの直轄地に大公として封ぜられる事でしょう。僕もやがてレーネンベルク公爵に付く事になります。そうなったら僕はあなたに挑戦状を叩きつけます。どちらが領地をより繁栄させることが出来るか勝負しましょう！」

先程まで、椅子に座ったままほとんど動かなかった、ジョゼフ殿下が僕の言葉に急に身動ぎしました。

「私に勝負を挑むだと、１５歳の子供が。ふはははは！」

ジョゼフ王子は我慢が出来ないという風に、笑い出しました。

「よかろう、そなたからの挑戦状を楽しみにしておこう、今日は有意義な会見であった。また、ガリアに来ることがあれば、私の所に顔を出すがよい」

ジョゼフ殿下は笑い終わると、それだけ言って部屋を出ていってしまいました。僕の急な発言に息を止めて成り行きを見守っていたエレオノールが声をかけてきました。

「スティン兄様、急にあんなことをおっしゃるから、心臓が止まってしまうかと思いましたわ」

「エレオノールこそ、あんなに演技が上手いとは知らなかったよ」

「いえ、あれは別に演技という訳ではありません。なぜか口から勝手に言葉が自然に出てきたんです。もしかすると本当にアナベラ様が私の体を使ってお話になったのかもしれませんよ？」

「そうだね、この世界には魔法があって、精霊も居るくらいなんだから、幽霊くらいいてもおかしくないかもね」

僕はそう言うと、隣に座っているエレオノールの手を握りしめました。

「君が付いてきてくれて本当に良かった、僕の挑戦だけだったら、きっと殿下は笑ってくれなかっただろうからね。本当にありがとう」

エレオノールは何も言わず、ただ僕の手を握り返してくれました。

第三十話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：ガリア１）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

ジョゼフの前のガリア王の名前って原作で出ていましたか？

２０１０／１０／２
ジョセフ＝ジョゼフに沢山修正

第三十一話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：ガリア２）（前書き）

第三十一話ＵＰします。

第三十一話　ラスティン15歳（諸国漫遊：ガリア2）

ジョゼフ殿下との面会の翌日、今度はシャルル殿下と面会をします。昨日と同じように、応接室で待っていると、シャルル殿下がやってきました。こちらが名乗って挨拶をすると

「やあやあ、これは可愛いお客人だね。トリステインから来たそうだね、旅は大変じゃなかったかい？」

と友好的な態度で接してくれます。噂通りの好人物というのが第一印象でした。話術も巧みで、僕もエレオノールも沢山笑わせられました。友好的な雰囲気で進んだ面会も終盤になると、僕は用意していた魔法宝石（マジックジュエル）のアクセサリーをシャルル殿下に差し出します。

「これを、オデットに？こんな立派な贈り物を貰えるとは思っていなかったよ。そうだ良ければこれは、君達の手で直接妻に渡してもらえるかい？」

「奥様にお会いしてよろしいのですか？」

「ああ、オデットは今、妊娠中でね。あまり外出することが出来ないから、トリステインの話でもしてくれると、気が紛れると思うからね」

「それではお言葉に甘えさせていただきます」

良し！予定通りの展開です。情報通り、まだシャルロットとジョゼットは生まれていないようですし、何とか間に合いそうです。

「それでは、僕はこの後人と会う予定があるので、これで失礼するよ。オデットの部屋までは召使いに案内させよう」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

その後、シャルル殿下と別れ、オデット様の部屋に案内されました。こちらが挨拶をすると、オデット様はソファーに横になったままでしたが歓迎してくれました。

「まあ、トリスティンからわざわざガリアまで、お若いのにご立派ね」

「いえ、旅慣れた護衛の者も居りますから、それ程苦労はしておりません」

「そうそれは良かったわ、それで私に何か御用があったのかしら？単なるご機嫌伺いならば、シャルルが私の所に案内なんかさせないでしょうからね」

「はい、オデット様にこれを直接プレゼントさせていただこうと思いまして」

そう言って、魔法宝石（マジックジュエル）のアクセサリーをオデット様に差し出します。

「まあ素敵、これはもしかして、社交界で噂になっている魔法宝石（マジックジュエル）というものかしら？」

「良くご存知ですね、これは魔法宝石（マジックジュエル）のブローチです。ただしガリアで出回っている物は、似たようなデザインのものばかりです。で

すがこのブローチのデザインはオリジナルなので、多分この世界に1つだけだと思いますよ」

「そうなの？それは貴重な物をありがとう。良かったらトリステインの話を聞かせてくれないかしら、最近、部屋に篭ってばかりでちょっと気が塞いでいるの」

僕とエレオノールは交互にトリステインの話を披露しました。といっても僕の話は堅すぎてあまり受けが良くはありませんでしたが。

「去年私に、二人目の妹が出来たんです。名前はルイズと言うのですが、これがまたやんちゃで」

「そうなの、この子も元気に生まれてきてくれるといいのだけど」

オデット様はそう言って、優しく自分の膨らんだお腹を撫でます。

「触ってもいいですか？」

「いいわよ、でも優しくね」

「わー、すごいですね。お母様の時も大きくて驚きましたけど、オデット様のお腹はそれ以上ですね。もしかしたら双子じゃないですか？」

「！！！」

エレオノールの何気ない一言が、周りの人々を凍りつかせました。彼女自身は、その言葉の重大性に気付いていない様ですが、周囲の雰囲気が変わったのは敏感に感じとった様で、慌てて僕の隣まで戻

ってきました。

「エレオノール、すまないけどオデット様と内密な話があるんだ、少し席を外してくれるかい？」

「はい、スティン兄様」

エレオノールは、近くに居たメイドに連れられて、おずおずと部屋を出ていきました。

「連れの者が失礼しまいした」

「今の態度からすると、ラスティン様はガリア王家の双子の禁忌をご存知なのですね？」

「はい、単なる迷信だと思いますが、ガリアには信じている方も多い様ですね」

「外国の子供だと思って油断しました、こうなったらラスティン様の情けに縋るしかありません。どうかこの事は内密にお願いします」

オデット様と付き人の方々が一斉に頭を下げてきます。

「僕とエレオノールをこの場で殺すという手もありますよ？」

「そんな事をしたら、外交問題どころか戦争にもなりかねません！なにとぞ、この事はラスティン様の心の中に止めておいて下さい」

オデット様は良い方の様ですね、こうなると是非手助けしたくなります。

「分かりました、この事は僕の心の中に止めておきます。ところで確実に双子のお子さんなのですか？医者は何と言っているのですか？」

「医者によると、双子の可能性もあるということでした」

「宜しければ、僕が確認してみましょうか？」

「そうですね、出来れば是非。確実な事が分ければ対処の方法もはっきりしてきますでしょうから。でもそんな事が出来るのですか？」

「はい、可能です。そのまま動かないでください。少しお腹に触れますよ？分析（アナライズ）」

僕は魔法で、オデット様の胎内を透視してみます。やはり女の子の双子の様ですね。

「やはり双子の様です。女の子です」

「そうですか、やはり」

「それで双子だった場合どうされる予定だったのですか？」

「そ、それは」

オデット様は少し狼狽している様です。ぼんやりと予想していたのと、はっきり断言されるのとではやはり違いがあるようです。

「やはり、ロマリアの孤児院に預けるのですか？」

「な、何故、貴方様がそれを！」

僕の何気ない問いかけに反応したのは、オデット様ではなく、1人の執事でした。皆の目が執事に向かいます。オデット様の鋭い言葉が執事に向かって放たれます。

「ペルスラン！どういう事なの？」

「お嬢様、いえ奥様、全ては私の独断で行う予定だった事だったのですが」

こうして、ペルスランという執事は詳細を語ってくれたのは、

・この王位継承権争いが起こりそうな時期に、オデット様が双子を出産した事が
　ばれてしまうと、シャルル殿下の立場が悪くなってしまう
・悪くすれば、生まれた赤子の片方は、密かに殺されてしまうかもしれない
・オデット様が離縁を申し渡されてしまうかもしれない
・その影響はオデット様の実家にも及びかねない
・双子が産まれたなら、1人は死産であった事にして、1人を伝でロマリアの孤児院に
　預ける事を計画していた

という事でした。

「ですが、ばれてしまってはどうする事も出来ません。大人しく処分を待ちます」

そう言って、ペルスランさんは深々と頭を下げました。

「ペルスランさんは何も悪く無いですよ、実際まだ何もやっていないのですから、そうですよね？オデット様」

「ペルスラン、あなたがそこまで考えていてくれたなんて」

オデット様は少し瞳を潤ませながら、そうとだけ言いました。

「まだ時間はあるのですから、ペルスランさんの計画を見直しては如何ですか？」

「そうね、私の知り合いのこの国の貴族の方にでも預かっていただけないかしら？」

「オデット様、それはいけません！ガリアの国内、しかも貴族では、いずれ事がばれてしまいます」

「そう言われても、私には国外に頼れる知り合いなど、居ないし。そうなるとロマリアの孤児院位しか・・・」

「それは、最善の策とは言えないでしょうね」

僕はオデット様の意見を遮る様に意見を述べました。

「オデット様は、預けたお子様にお会いにならないおつもりですか？」

「いいえ、できれば月に1度は会いたいと思います」

「そうですか、でしたら想像してみてください。大国ガリアの王族が月に1度ロマリアの特定の孤児院を訪れる様子を」

「・・・、不自然ですね」

「その孤児院に何かあると内外に宣伝している様な物だということはお分かりですね？例え機会を1年に1度まで落としたとしても、状況は好転しないでしょうね」

「ああ！私は自分の娘に自由に会うこともできないの」

「オデット様、落ち着いて下さい！」

僕は自分の腹案を述べる事にしました。

「オデット様のお嬢様は、僕の実家レーネンベルク家でお預かりしたいと思います。オデット様は今回の会見でエレオノールの友人になったという名目で、トリステインのラ・ヴァリエール家を訪問して下さい」

「え？レーネンベルク家に預けるのに、訪問するのはラ・ヴァリエール家なのですか？」

「偽装工作ですよ、オデット様がラ・ヴァリエール家を訪問される時には、必ずお嬢様をレーネンベルク家からラ・ヴァリエール家に向かわせるように致しますから、ご安心を」

「なるほど、ラ・ヴァリエール家を幾ら探られても、問題無いということですね」

「ご理解頂けましたか？ですが、オデット様にとって、ラ・ヴァリエール家もレーネンベルク家も全く知らない貴族には変わり無いと思います。まだ少し時間は残されているでしょうから、心行くまで両家について調べて下さい。それでもし問題が無いようでしたら、お嬢様をレーネンベルク家にお預け下さい、必ず立派な貴族に育ててお見せしますから」

「少し考えさせてくださいませんか？」

「そうなさって下さい、お嬢様にとっては、一生に関わる事ですから。もし僕の提案を受け入れて下さるならば、レーネンベルク家の当主テオドラ・ユーニル・ド・レーネンベルクまでお知らせ下さい」

それだけ言うと僕はオデット様の部屋を後にします。すかさず1人のメイドが僕を先導してくれます。

エレオノールは客間の1つに案内されていました、やって来た僕の姿を見つけると不安そうだった顔を喜びに染めて、慌てて駆け寄って来ました。

「スティン兄様、私・・・」

「詳しい事は宿に戻ってから話すよ、少し頼みたい事もあるからね」

そして僕達は、足早にヴェルサルテイル宮殿を後にしたのでした。

次はロマリアですね、早速ローレンツさんに近日中にロマリアに着くと連絡を入れておかなくてはなりませんね。

それに、オデット様が僕の提案に乗って下さった場合を考えて、父上と母上に手紙を書いておかなくてはなりません。急に養子縁組を決めて来ました、なんて言ったら、いくら父上と母上でも、驚いてしまうでしょうからね。

第三十一話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：ガリア２）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

ガリアの双子の母親の名前をオデットにしました。オルレアン公夫人になるかどうかは、一応決めていますが、今の時点では不明ということにしておいて下さい。

双子の生まれた時期について多少無理がありますが、話の都合上、今しか来る事が出来ませんでした。大らかな心で流してくださる様お願い致します。

第三十二話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：ガリア３）（前書き）

第三十二話ＵＰします。

前話で終わったかに見えた、ガリアでのお話ですが、実はここからが本当に書きたかったことだったりします。

第三十二話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：ガリア３）

ローレンツさんに連絡を入れる手配を終えて、リュティスの街中に取った宿に戻ると、夕刻を過ぎていました。そのまま宿の中の食堂で、食事をすると今日は解散という運びになりました。エレオノールには少し話があるので部屋まで来てもらいました。

「へぇ～、あの後、そんな事があったんですか。それでは私は、オデット様が私を訪ねてきて下さったら、スティン兄様を我が家に招待すれば良いんですね？」

「はっきり決まった訳ではないんだけど、そうしてくれると助かるよ」

そして、エレオノールと分かれて自室で両親への手紙を書いていると、小さくドアがノックされたのに気がつきました。護衛には人が訪ねてきても出ない様に言われているので、無視することにしました。

コンコン

とノックはまだ続いていますが、すぐに静かになりました。どうやら護衛の方々が対応してくれたようです。するとしばらくして、特徴のあるノックがされました。これは護衛からの合図なので、すぐにドアの鍵を外します。すぐに護衛のリーダーのセブランさんが顔を見せてくれました。

「ラスティン様、夜分にすみません。少し問題が発生したので、こちらへお越しください」

「わかりました」

僕は気を引き締めて、護衛の方々が詰めている隣の部屋に向かいます。部屋に入ると、この旅で顔見知りになった護衛の方々が、１人の文官らしき人物を囲んでいました。

「この男は、ロベスピエール４世陛下からの使者だというのですが」

「何か不審な点でも？」

「身のこなしなどから見て普通の文官だと思います、王宮に勤める者が持つ身分証明も確認しました。ですが、用件を話そうとしないのです」

「僕だけに直接話す様に指示されているのかもしれませんね、身元が確かなら構いません。お話を聞かせていただきましょう」

こう言うと、緊張に顔を真っ青にしていた男性の顔に血の気が戻りました。

「それで、貴方はどなたなのですか？どうしてこんな夜に僕の部屋を訪ねて来たんですか？」

「私は、陛下の秘書官を務める者です。今日は陛下のお召しで、ラスティン・ド・レーネンベルク様をヴェルサルテイル宮殿までお連れする様に申し付かって参りました。」

「こんな時間にですか？常識的に考えて怪しすぎると思いませんか？」

「それはこちらも存じております、ですが王命ですから、なにとぞご同行願いたく」

「セブランさん、どう思われますか？」

「ラスティン様のおっしゃる通り怪しすぎますな、秘書官殿も、もう少し常識的な時間に再度訪ねて頂けませんか？」

「それでは、王命が果たせません！同行していただいて、もし怪しい所がありましたら、その場で切り捨てて頂いても構いません、ですから何卒！」

「そこまでおっしゃるなら、信じてみましょう。ロベスピエール４世陛下のもとまでの案内お願いします」

「はっ、ありがとございます」

「ラスティン様！私達は貴方の身の安全を第一に考えて行動するように、公爵様から言い付かっています。この様な危険な事はお止め下さい」

「セブランさん、申し訳ありません。ロベスピエール４世に会えるのなら多少の危険は覚悟のうえです。ご迷惑お掛けしますが、どうかお願いします」

「仕方がありませんな、秘書官殿我々も同行させていただいて構いませんな？」

「陛下にお会いするのは、ラスティン様だけですが、近くの部屋に

控えていていただくのはもちろんかまいません」

こうして、僕と護衛の皆さんは、夜更け近い人気の無いリュティスの街中を抜けて、ヴェルサルテイル宮殿へと向かったのでした。当然宮殿の表門は固く閉ざされていて、僕達は裏門にある通用口を通って宮殿内に入りました。（国王を訪ねるというより、泥棒に入ったといわれた方がしっくりくるような状況ですね）

何組かの警備兵に呼び止められましたが、秘書官が身分証明を見せると何とか通る事を許されました。そして幾つかの扉を抜けると、周囲の様子が一変しました。宮殿の名に相応しい調度品や絵画，彫刻などが、さり気なく、しかしその作品に相応しく置かれています。この辺りはもう、王の居室が近いのかも知れません。

そして僕達は、１つの部屋まで案内されました。秘書官の男性は、僕達にここで待つように告げると、入ってきたのとは別の扉を開けて、何処かへ行ってしまいました。しばらくその部屋で待っていると、先程の秘書官とは別の文官と思われる人物が部屋に入ってきました。

「ラスティン・ド・レーネンベルク様でございますね、陛下がお会いになります。こちらへお願いします」

僕は護衛の皆さんにここで待つように告げると、文官の後に続いて、部屋を出ました。そして１つの扉の前に辿り着くと、そこに入るように言われました。ここにロベスピエール４世が待っているのでしょうか？僕はノックをすると、その扉を開けて中に入って行きました。

その部屋には１人の男性が、ソファーに座って、お酒を飲んでいる姿が待っていました。その男性は、僕が部屋に入って来た事を知ると、

「良く来たな、まあ、そこに座れ」

と話しかけてきました。この人物がロベスピエール４世なのでしょうか？僕は言われるままに、男性の対面のソファーに座ります。暗い部屋の明かりに目が慣れれてくると、その男性の詳細が分かってきます。その男性は年齢が５０～５５位で、青い髪でジョゼフ王子やシャルル王子の面影を強く残しています。若い頃は、女性にさぞ人気があった事でしょう。どうやら、この男性が、ロベスピエール４世で間違いない様です。ロベスピエール４世はお酒の入ったグラスを傾けながら、じっと僕の事を観察している様です。僕はその視線に耐えながら、ロベスピエール４世が言葉を発するのを待ちました。そして、どれ位時間が経ったでしょう、

「こんな夜更けに呼び出して済まないな、ラスティン・ド・レーネンベルク」

そんな言葉で僕は、現実に引き戻されました。

「いえ、陛下との会談を望んだのはこちらです。こうして、陛下とお話出来るなら時間など気にはしません」

「我が国ほどの大国の王といえば、何でも自分の思うがままになると思う者が多いが、そんな事は無い！日々の政務に追われて、ゆっくり休む時間も無いというのが現状だな。先日、そなたから請われた、ワシとの面会も額面どおり、トリステインと我が国の間の関税の低減などというものならば、そなたと、こうして直接会うことも無かっただろう。ワシがこうして、私的な時間をそなたとの会見に割いているのには、理由がある。その理由をそなたは分かっているな？」

寛いだ様子だったロベスピエール４世から感じられる気配が、だんだんと増していくのが感じられました。今では物理的な圧迫感を持っている様です。これが、大国ガリアの王の真の姿なんですね。アルビオンのジェームズ１世陛下などとは感じる気迫が違います。（それとも、ジェームズ１世陛下も時には、こんな話し方をするのでしょうか？）

「非才なるこの身では、陛下のおっしゃる事を理解しかねます」

僕はやっとの思いで、返答しました。

「ふむ、とぼけるつもりか、それも良かろう」

ロベスピエール４世から感じていた気迫の様なものが、急速に薄まって行くのを感じます。僕は心の中でそっと一息つきます。（それでも、普通の人間なら萎縮してしまう程の気迫ですが）

「そなたは、ジョゼフとシャルル両方に面会を申し込んだそうだな。そなたの目には、我が息子達はどの様に映ったのかな？」

「私などの意見をお求めになりますか。それでしたら、まず、シャルル殿下ですが、真に良い人物とお見受けいたしました。シャルル殿下が次期のガリア王と成られれば、わがトリステイン王国としても安心出来ると言う物です」

「ほう、シャルルが王になれば、トリステインにとっては都合が良いとそなたは判断するのだな」

ロベスピエール４世は僕の言葉の裏まで読んだ様に、僕の言葉に解釈を加えてきます。ここまで来て、僕はこの会見を持った事を後悔

し始めました。（拙いですね、僕の思惑が読み取られている気がします）

「ではジョゼフの方はどうだったかな？」

僕は、正直に答えることにしました。どうせ読み取られるなら、思うままに答えたほうが得策だと判断したからです。

「ジョゼフ殿下ですか、現時点ではガリアの王に向いているとは思えません。ですが、ジョゼフ殿下が王になられた後の事を想像しますと、恐ろしく感じます」

「ほう、恐ろしいとな。色々な者に同じ質問をしてみたが、ジョゼフを恐ろしいと表現したのはそなたが始めてだな。そなたはなかなか人を見る目があるようだな」

自分の息子が恐ろしいと言われたのに、ロベスピエール４世は何故か機嫌が良くなった様です。

「急に脅すような真似をしてすまんな。ここ2日ほど、そなたはこの宮殿で、何やら不審な動きをしていたので、それに対する牽制だと思ってくれ」

この言葉と共に、ロベスピエール４世から感じる気迫は常人のそれと同程度まで、下がっていくのを感じました。僕は緊張していた全身の筋肉を弛緩させることが出来ました。

「私の動きはそれほど不審だったでしょうか？」

「なんだ、気付いておらんかったのか。この国でシャルルに会見を

申し込む者は多いが、ジョゼフに会見を申し込む者はほとんど居らぬ。ジョゼフに会見を申し込んだだけで、不審に思われるところだぞ。」

ロベスピエール４世は可笑しそうに、少し笑って、話を続けました。

「その上、昨日のジョゼフに続いて、今日はオデットまで、外務を司る役人に、トリステイン王国のレーネンベルク公爵家とはどんな家か?、ラスティン・ド・レーネンベルクとはどんな人物か?などと問い合わせがあれば誰の目にも、そなたは立派な不審者に見えるな」

「畏れ入ります。不愉快に思われたのなら、お詫び申し上げます」

「構わぬよ、そなた１人が多少工作した所で、このガリアはびくともしない。少なくともワシが治めている間はな」

ロベスピエール４世の絶対的な自信が窺がえる、発言ですね。

「ところで、そなたがもしシャルルだけに会見を申し込んだら、シャルルには会えなかったという事を分かっているか?」

「え!そうなのですか?」

「シャルルの奴は、最近は宮廷工作等で忙しいからな、最初はそなたからの会見の申し込みを断る予定だったようだぞ。だが、そなたが、ジョゼフと会うと聞いて慌てて会見に応じたようだな」

ロベスピエール４世は仕方の無いやつだとでも言いたげに、顔をしかめました。ロベスピエール４世の中では一般と異なり、シャルル

王子の評価はそれ程高くない様ですね。このまま行くと、原作通りジョゼフ王子がガリアの王になってしまいそうです。ですが、ロベスピエール４世の命令だけで、ジョゼフ王子が王になってしまったら、原作の二の舞になってしまう可能性が高いです。それだけは何とか避けたい所なんです。そう思って、僕が自分の腹案を提案しようと声をあげる寸前に、ロベスピエール４世が、

「最近、ワシはあることで悩んでいる。そなたにはそれが何か分かるか？」

と突然尋ねてきました。うーん、大国ガリアが抱えている問題なんて多くはありません。というか今なら、後継者問題しかないはずです。ですが、こんな簡単な事をわざわざ聞いてくる様な人物ではありませんからね。後継者争いの先を考えているのでしょうか？

「もしかしたら、”将来ガリアをどうやって繁栄させるか？”でしょうか？」

「ほう、そなたトリステインの王になってみるか？」

「ななな、何を仰います。私が王など、とんでもない。それこそ不敬罪で首を刎ねられてしまいます」

「何を驚く、そなたは王に向いていると思うがな。今まで何人かにこの質問をしてきたが、皆が口を揃えて、後継者問題をあげた。おまけに皆が、シャルルを次の王にすべきと言ったな。何も分かっておらぬ、後継者などワシが決めれば、それで終わりだ」

そこで、ロベスピエール４世は１度言葉を止めて、グラスに入ったお酒を飲み干しました。

「だがその次の王が、どの様な政治を行って行くのかが見えておらん。そうだな例えば、シャルルが王になったとしよう。5年程度なら大過なくこの国を治めるだろう。だが10年後この国は貴族の力が増し、王の権力は著しく減退しているだろうな。その様な状態であれば、諸外国が黙ってはいまい。ガリアに内戦を起して、軍事介入などが平然と行われるだろう。それがワシには見えてしまうのだ」

「では、ジョゼフ殿下が王になった場合はどのようになるのですか？」

「今のあやつは、完全に腑抜けておるからな。このまま、王などになったらどんな事になるか想像も出来んな。だが、ジョゼフには王が向いているかもしれん。子供の頃から”無能”と蔑まれても、努力を止めなかった。本来、孤高である王の立場を理解出来るのもジョゼフだろう」

「アナベラ様の死が悔やまれますね」

僕の呟きに、ロベスピエール4世は何の反応も示しませんでした。

「陛下、私から1つ提案があるのですが、聞いていただけるでしょうか？」

「言ってみるが良い」

「ジョゼフ殿下とシャルル殿下に、次の王位をかけて、競わせてみてはいかがでしょうか？その勝負の過程で、ジョゼフ殿下は気力を取り戻すかもしれません。見える形で、勝敗がつけば、王位継承の争いで無駄な禍根を残す事も無くなるでしょう」

「2人を競わせるか、考えなかった訳ではないが。そなたはどんな分野で2人を競わせれば良いと思う？」

「”ワーンベルの奇跡”をご存知でしょうか？ジョゼフ殿下もご存知でしたから、陛下もご存知だと思いますが」

「無論知っておるとも、ジョゼフやシャルルにそういった情報を伝える様に指示を出しているのはワシだからの」

「それでしたら、話は早いです。両殿下に、領地の統治を任せて、その腕を競わせてみてはいかがでしょうか？」

「ふむ、その方法では、何らかの条件をつけなければ、圧倒的にシャルルが有利になってしまうのではないか？」

「私は、部下達の力を借りて、”ワーンベルの奇跡”をほぼ1年で成し遂げました。こう言えば、陛下にはお分かりだと存じますが」

「なるほど、1年か！それは良い案かも知れぬな。少し考えてみよう。今日はご苦労だったな、下がってよいぞ」

「はっ、それでは失礼いたします」

「待て、知恵を借りただけで礼もせぬようでは、余の器量が疑われるな。そなたから請われた、関税の低減の件は認める事にしよう」

「ありがたき、幸せでございます」

ロベスピエール4世は深く考えに沈んでいるようなので、僕はその

まま部屋を出ました。そのまま控えていた、先程の文官に先導されて、護衛の皆さんと合流し、そのまま宮殿を出て、真夜中の町を抜け、宿へと戻ったのでした。

宿の戻って、自分の部屋に入ると、直ぐにベッドに身を投げ出しました。夜になってから、こんなイベントが起こるとは思っても見なかったので、今日はすごく疲れました。

特にロベスピエール４世との会談は、僕の神経を高ぶらせました。こんな時は、エレオノールの笑顔が見たくなります。そう思って、彼女の笑顔を思い出すだけで、心が落ち着いてくるのが分かります。明日は朝一番で、エレオノールに会いに行こう。そう思いながら、僕は眠りに落ちて行くのでした。

第三十二話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：ガリア３）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

さて、この後ガリア王家はどうなって行くのでしょうね？

第三十三話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：ロマリア）（前書き）

第三十三話ＵＰします。

第三十三話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：ロマリア）

数日後、僕達は、馬車でリュティスを去る事になりました。ローレンツ商会の支店からの伝言で、ローレンツさんは既にロマリア入りしていると連絡があった為です。ガリアのその後も気になりますが、このまま何時までも待っている訳にはいかないので、思い切ってそのまま出発しました。

しばらく陸路での移動でした、運よくローレンツ商会でロマリアに向かうという商人の方がいたので、それに同行させてもらっています。基本的に１日毎に、町から村、村から町へと移動して行きましたが、時には野宿をすることもありました。野宿が始めてのエレオノールは大はしゃぎでしたが、護衛の方々はかなり神経を使っている様子でした。

そんな日を何日か繰り返した後、僕達はやっとロマリア北部の町ヴェローナに到着しました。この町の商会の支店で、ローレンツさんと会うことになっているのです。

「ラスティン殿、良くおいでになられましたな」

「ローレンツさん、今回は色々お手数をお掛けした様で、感謝させていただきます」

「なになに、驚かされてばかりでは癪ですからな。今回はラスティン殿に驚いてもらいましょう」

「どうやって驚かせてくれるのか、楽しみにしていましたよ」

「それは、晩餐の時のお楽しみとさせていただきましょう。宿は手配しておいたので、まずはそちらで一休みされたらいかがですかな

？」

「はい、そうさせていただきます」

それまで黙って僕達の話を聞いていたエレオノールが、我慢できなくなったのか、

「スティン兄様、こちらの方は？」

と話に入ってきました。

「ああ、済まないね、エレオノール。こちらはローレンツ商会の会長をされている、ローレンツさんだよ。ローレンツさん、こちらがエレオノール・アルベルティーヌ・ド・ラ・ヴァリエール、ラ・ヴァリエール家の長女です」

「エレオノールと申します。あのローレンツ商会の会長にお会いできるとは光栄ですわ」

「ラ・ヴァリエール家のエレオノール様と言えば、ラスティン殿の婚約者でしたな。こんな可愛らしい婚約者をお持ちとは、真に羨ましいですな。ローレンツと申します、どうかお見知りおきを」

「これは、困りましたな。今晩の晩餐は私とラスティン殿の2人だけの予定だったので」

「それならご心配なく、慣れない旅で疲れておりますので、私は宿で早めに休ませていただきます」

「そうですか、申し訳ありませんな。それではラスティン殿、後で

宿の方に迎えをやりますので」

ローレンツはそう言って、エレオノールに頭を下げました。そして僕にこっそり耳打ちします。

「本当にラスティン殿が羨ましいですな、これ程、可憐で、しかも聡明な女性を妻に迎える事ができるのですから」

僕は何と言ったら良いのか分からなくなったので、そのまま勢いで支店を後にしてしまいました。

「エレオノール、気を使わせてしまったね」

「いいえ、ローレンツ様にも何か事情があるのでしょう」

そう口では言っていますが、何処か不満そうにしています。

「ローレンツさんが、君みたいな可憐で、しかも聡明な女性を妻に迎える事ができる僕は幸せだろうって言っていたよ」

「え！」

エレオノールは絶句してしまいました。顔どころか首筋まで真っ赤になってしまっています。僕達はそのまま言葉を交わす事もなく、教えられた宿に向かうのでした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

宿で身体を休めていると、夕刻過ぎに、ローレンツさんからの使い

がやって来ました。僕は、その使いに案内されて郊外の一軒の家に着きました。どうやらここが晩餐の会場の様です。その家の中に入ると、中は薄暗く、晩餐の会場というよりは、隠れ家といった風情でした。

「ラスティン殿、お早いお着きでしたな」

「ローレンツさん、ここはどういう場所なんですか？レストランとは思えませんけど」

「ははは、ここは私達商人が、共同で出資して経営している秘密の会合場所と言った所ですかな。食事も酒もかなりのものですぞ」

「他人に聞かれたくない、秘密の商談をする場所という事ですか、なるほど」

それからしばらく、ローレンツさんと雑談をしていると、表に馬車が来た様です。ローレンツさんが席を立って迎えに出ます。

「ローレンツ、遅くなったな、済まない」

「もう1人のお客人は、腹を空かせて待っているぞ、ジェリーノ」

ローレンツさんが僕に見せたい、いや、この場合は会わせたいのは、この人物なんでしょうか？見掛けは、６０近くですが、その言葉は力強い物を感じます。

「待たせて済まなかった、ラスティン君だったかな？いや、この場ではこう呼ぶべきかな、キサラギ・コウヤ君」

突然呼ばれた、前世での名前に一瞬驚きましたが、この可能性は考慮済みです。

「今は、ラスティン・ド・レーネンベルクですよ。ジェリーノさん」

「ああ、自己紹介がまだだったな。私のこちらでの名前は、ジェリーノ・タルキーニ。そして前世の名前は、キース・ガードナー、生まれはイングランドだった」

「え！イギリス人？日本人ではないのですか？」

これは予想外の展開です。ローレンツさんも僕も、日本人だったので、この世界の転生者は皆、日本人だと思い込んでいました。

「イングランド生まれといっても、生まれと国籍だけで、育ったのは日本だったがね。高校時代に日本人の友人から勧められて、ライトノベルに嵌ってね。”ゼロの使い魔は”は大好きだったよ」

ジェリーノさんはここで少し首をすくめます。

「まさか自分が、本の中の世界に転生するなんて思っても見なかったがね。ところでラスティン君、君が前世の記憶を思い出した時は、どんな事を思った？」

「僕が前世の記憶を思い出したのは、３～４歳の頃でしたからね、単に戸惑いを覚えてという位でした。生まれたのが公爵家と恵まれていたこともあるのでしょうが。ジェリーノさんは、何を感じたんですか？」

「私か？私が、前世の記憶を思い出したのは、１０歳の頃だったか

な、その時に感じたのは”怒り”だな」

「”怒り”ですか？」

ジェリーノさんには会ったばかりですが、”怒り”という言葉が似合うとも思えません。

「平民と神官の貧富の差、聖戦の名を借りた無謀なエルフたちへの侵攻等だよ、まるで地球で起こった、中世のキリスト教の腐敗や、十字軍の愚行を思い起こさせられて、本当に怒りを覚えたよ」

「なるほど、そんなことが」

「それから、私はブリミル教の異端審問官を目指したよ。運が良かったというべきか、私もロマリアの名家に生まれてね、そこで順調に昇進することが出来たよ」

「異端審問官ですか？名家の生まれなら、もっと普通に高い身分になれたんじゃないですか？」

「異端審問官の影に怯えながらかね？君は自分が、１つ間違えば異端認定される可能性があることに気付いているかい？」

「・・・、その可能性があるんですね、前世の記憶は役に立つこともあれば、身の危険を伴うことも在り得るんですね」

「まあ、今はその心配は無いがね。だが前世の記憶を持っているなんて他人に話したら、頭がおかしいと思われるのは避けられないだろうがね」

僕の場合は、信じられる人だけにしか話していないので、問題ではないと思います。
そこから、晩餐は和やかなムードで進みました。ジェリーノさんは僕が行った、色々な事業について聞きたがっていたので、詳しく説明する羽目になりました。僕も現在のブリミル教の話を聞けて、とてもありがたかったです。

「おう、もうこんな時間か、済まないがこれで失礼させてもらうよ？明日のも予定が詰まっているのでね」

「そうですか、今日は為になる話をありがとうございました」

「機会あれば、ワーンベルの町を案内してくれると嬉しいな、ではこれで！」

ジェリーノさんは、席を立って扉から出て行きました。僕も、ローレンツさんもその後を見送る事にします。建物の外に出ると、一台の馬車が止まっていました。ジェリーノさんが扉から外に出ると、御者台から誰かが降りて来ました。夜なのではっきりとは確認出来ませんが、少年の様です。

「猊下、もう宜しいのですか？」

「ヴィットーリオ、待たせたな。明日も早くから説法だったな、早く帰ることにしたよ」

そして、ジェリーノさんは馬車に乗ると、そのまま町へ向かって行きました。僕はその光景をただ呆然と見ているだけでした。しばらくして我に返ると、ローレンツさんに恐る恐る尋ねてみます。

「あの、ローレンツさん、今、猊下って」

「そうですな、相変わらず肝心な事を話さない奴で、困ったものです。ラスティンはこの町に来て、兵士の多さに気付きませんでしたか？まあ。まずは中に入りましょう」

それから、ローレンツさんに、ジェリーノさんが実は聖エイジス31世であること、そして、御者の少年があのヴィットーリオ・セレヴァレであることを聞かされました。転生者である、ジェリーノさんが教皇の座に登り詰めるまでには色々あったそうですが、詳しい話はしてくれませんでした。機会があったら、もっと詳しい話を聞きだしたいと思います。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

思わぬ教皇との対面で、かなり驚かされましたが、ローレンツさんには少し話しておきたい事があったのを思い出し、気を取り直して相談を始めることにしました。

「ローレンツさん、ご存知の通り、僕はここに来る前にガリアに寄りました。運よく王族の方々とも話す機会があったのですが、ロベスピエール４世陛下に少し提案をして来ました。それに関して、ローレンツ商会の力を借りたいのですが」

「私の商会にですかな？」

ローレンツさんから感じる気配が明らかに変わりました。今ここにいるのは、転生者としての友人ではなく、大商人として名を馳せた人物だということを改めて感じさせられました。僕は慎重に、ガリ

アであった事をローレンツさんに話していきます。ローレンツさんは僕の話に黙って耳を傾けています。

「と言う訳で、僕は両王子の領地経営による競争を提案したのです」

「なかなか興味深い話ですな、ガリアにその様な方法で介入しようとは、想像もしませんでしたぞ。ですが、それに私の商会がどんな役目を果たすのですかな？」

ローレンツさんから感じる気配は変わっていません、これは余計な駆け引きは不要ですね。僕は思い切って、自分の考えを言う事にしました。

「ローレンツ商会には、是非、”ジョゼフ王子”の領地経営を手助けして欲しいのです」

「何ですと！ジョゼフを！」

さすがのローレンツさんも、僕の提案には驚いた様子です。物語（歴史）を知っている転生者にとっては、ジョゼフ王の誕生は忌避すべき事だということは十分承知しています。しかしそれと同時に、様々な悲劇の原因をジョゼフ王子だけに押し付けるのにも、違和感を覚えると言えるのではないでしょうか？転生者の僕達にだけ出来る事があるのではないかという考えは、僕だけの物では無いと思いたいです。

「ジョゼフ王子には誰かの助けが必要なのです」

「ふむ」

「ジョゼフ王の才能が、負ではなく、正の方向に使われた場合を想像して見て下さい」

「うーむ」

ローレンツさんからは、良い反応が得られません。仕方がありません、人道的ではありませんが、利で攻めることにしましょう。

「ジョゼフ王子が領地経営を成功させる為には、誰かの助力が不可欠です。ここを攻めれば、有利な条件で商談をまとめる事が可能なのではないですか？」

「むっ！」

お！反応がありました。商人としての性（さが）というものでしょうか？

「ローレンツさん程の商人ならば、相手の弱点を知った上での商談がどれほど優位に進むかご存知でしょう？」

僕は畳み掛ける様に、言葉を続けます。

「ガリアですか、確かに無意識に避けていたかもしれませんな、考えてみれば、魅力的な市場であるのも確かです」

「それでは！」

「いいでしょう、ガリアの王位継承戦ともなれば、多額の資金が動くのも必定！引退して余生を過ごす事を考えていた私が、もう一働きするいい機会ですな！」

「ありがとうございます、ローレンツさん」

「さて、何に感謝されているのですかな？私はこれから、ガリア、ジョゼフ王子から、どれだけ利益を搾り取れるか考えている所なのですぞ」

「それでも、お礼を言わせてください」

「随分とジョゼフ王子に入れ込んでいるようですな？」

「目の前に不幸になると分かっている人間がいて、それを傍観できる程、人間に絶望してはいませんから」

「まあ良いでしょう、感傷と実利をきちんと分別できるならば、少なくとも損はしないでしょうからな」

僕は、ローレンツさんの言葉を胸に刻み付けながら、次の目的地についてぼんやりと考えるのでした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

次の目的地は、ゲルマニアですが、その次は、エルフの里を訪ねてみたいと、ローレンツさんに話をしたら、喜んでエルフの族長への紹介状を書いてもらえました。おまけに、ゲルマニアに向かう商人も紹介してもらえたので、ゲルマニア行きもさほど苦労はしないでしょう。

第三十三話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：ロマリア）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

可能であれば、十分に書く事が出来なかった、教皇聖エイジス３１世ことジェリーノについて、また外伝という形で書きたいと思います。ただ1点問題なのが、どうやってローレンツとジェリーノが出会って、どういう経緯で互いに転生者であることを知るかというのが解決出来ていません。解決法が思いついたら、是非書きたいエピソードなんですけどね。

第三十四話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：ゲルマニア）（前書き）

第三十四話ＵＰします。

第三十四話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：ゲルマニア）

ロマリアからゲルマニアへの旅も、ロマリアへ向かった時と同じような旅路になりました。国境の検問でも、トリステイン国王の親書が物を言い、すんなり通過することが出来ました。

ゲルマニアに入ってから、しばらくは長閑な田園風景が続きましたが、首府ヴィンドボナに近づくと印象がガラッと変わりました。まさにこれから工業が発達していくという、風景が見受けられます。

エレオノールなどは、石炭を燃した時の煙の臭いが気になるようで、ハンカチで鼻と口を隠しています。

皇帝の居城につくと、早速親書を出して、担当大臣への面会を求めました。ローレンツ商会からの情報によると、ゲルマニアの皇位継承争いは、混沌とした状態だそうで、素直に皇室の人間に会えるとは思わないので、とりあえず、財務担当の大臣にでも会えれば良いかと思っています。（アルブレヒト３世の即位するはずなのですが、即位前の名前までは分からないので仕方がありません）

可能ならば、現在ゲルマニアの政治を取り仕切っている、宰相のマテウス・フォン・クルークという人物に会いたいと思いますが、ガリアの例もあるのでさほど期待はしていませんでした。

ですが、城の中に入って、案内されたのは、宰相の居室でした。トリステインからの工業品にかけられた関税の事から、マテウス・フォン・クルークという人物は、トリステインにあまり良い感情を持っていないと考えていたので、この対応には驚きました。

始めて目にする、宰相マテウス・フォン・クルークという人物に対する印象は、僕には珍しく極めて悪いものでした。４５歳位の人物で、宰相としては若いと思いますが、見るからに優秀そうで、しかも自分の能力に自信を持っているということが、その表情から見て

取れます。この印象だけでは、僕が悪印象を持った事の説明にならないのですが、一目マテウス・フォン・クルークという人物を見た時から、これは敵だという印象が、僕の頭から離れません。

それでも一応形式通り、挨拶を交わしました。（どんなに悪印象を受けたとしても、普通に挨拶をすることは出来たと思います）

「トリステインからの使者ということだが、この様な若い方々だとは思いませんでしたな。それで国王からの親書は見せていただけるかな？」

「はい、閣下。こちらになります」

僕が親書を手渡すと、宰相はゆっくりと親書を読み始めました。

「ふむ、トリステイン国王の仰りたい事は分かった。だが、ラスティン殿だったかな？今、ゲルマニアは政治的に混乱しているのは、ご存知だろう？私も先帝の方針に従って、とりあえず、政務を代行しているに過ぎない。やはり次の陛下が決まらない限り、こういった問題は私の一存では了承出来ないな」

「次の皇帝陛下は、まだ決まりませんか？」

「そうなのだよ、先帝には多くの皇子がいてね。先帝は皇太子を決めずに急死されたので、皇子達がそれぞれ貴族の後ろ盾を得て、我こそは次の皇帝なり、とやりだした物だから、大混乱といった所だな」

「そうですか」

「そういう訳だから、今回のトリステイン国王の提案は見送らせていただく事になる。謝罪の手紙を書くので、少し待っていただけるかな？」

「はい、仕方がありません。お待ちします」

そうして、僕達は、１度客間に下がる事になりました。そしてしばらく待っていると、宰相からの書状を持って１人の文官がやってきました。僕は書状を受け取ると、そのまま城を後にしました。実にあっけない会見でした。

そのままヴィンドボナでとった宿に戻りました。宿に戻ると、挨拶の時以外、口を開く事の無かったエレオノールが口を開きました。

「スティン兄様、あの宰相閣下が、どうかなさったのですか？」

「ああ、君には分かってしまうんだね。僕の彼に対する態度はおかしくなかったかな？」

「ごく普通の、対応だったと思いますけど。私には、兄様が緊張？警戒？しているとしか感じられました。人見知りという言葉に無縁の兄様がこんな反応をするのは始めて見たかもしれません」

「宰相からみて普通の対応が出来たなら問題はないかな？それにしても、君には隠し事が出来そうもないな」

「そうですよ、兄様。ですから何でも私に話してくださいな」

「そうだ、君の目からみて、あの宰相閣下はどんな人物に見えたかな？」

「私から見てですか、うーん、何と言ったら良いか分かりませんけど、まるで一枚仮面を被っている感じがしました。宰相という仮面をですね」

「仮面かい、考えさせられる表現だね」

「私の様な女の子の意見ですから、あまり真剣にとらないでください、兄様」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そんな話をしていると、突然、護衛のセブランさんが、話に割り込んできました。

「ラスティン様、少しよろしいですか？」

必要な事以外ほとんど喋る事がないセブランさんが、話に割り込んでくるという事は、緊急な要件なのでしょう。

「構いませんよ、何が起こりました？」

「この宿は、どうやら監視されている様です」

「監視なら、ガリアでも出国までされていたじゃないですか？もしかしてただの監視じゃないんですか？」

「はい、はっきりとではありませんが、殺気とまではいかないまでも、害意に近い意思を感じます。エレオノール様の護衛も同意見で

す」

「そうですか、見つからない様に宿を抜け出すのは、無理でしょうね。とりあえず馬車を何時でも出せるように手配だけは済ませておいて下さい」

「そちらは手配済みです。ラスティン様にはこれからの方針を決めていただかなくてはなりません」

「このまま宿に留まっても、事態は好転しないでしょう、それに街中で襲ってくる事は無いと思います。ただ、このまま予定通り、エルフの里に向かうのは愚の骨頂ですね。ゲルマニアを一刻も早く抜けて、国外に出るのが先決ですね」

「その方針が無難とは思いますが、このままトリステインに直接戻るのは避けた方が良いと考えます」

「そうですね、その気になれば、国境で網を張ることも可能ですからね。そうすると、ロマリアかガリア経由ですね、少し遠回りですが仕方ありませんね」

「兄様？」

「どうしたんだいエレオノール、心配しなくても君だけはトリステインに無事に帰して見せるよ。事態はそこまで逼迫（ひっぱく）していないしね。念のための話をしているだけだから、心配しないでおくれ」

「いえ、そうではないんです。提案があるんです。トリステインへの最短距離のツェルプストー辺境伯の領土を通らせていただいたら、どうかと思ったのです」

「ツェルプストー辺境伯領ですか？確かにトリステインや他国の国境に向かうより遥かに近いですな、ですが、ラ・ヴァリエール家とツェルプストー家は犬猿の仲と聞いておりますが」

セブランさんが直ぐに、エレオノールの意見の問題点をあげます。

「エレオノールは、ツェルプストー辺境伯と会った事があるのかい？」

「はい、何度か。ツェルプストー辺境伯はいかにも軍人という方です。ラ・ヴァリエール家とツェルプストー家の確執と言っても、それ程、陰湿なものではありません。それに、お父様からは、沢山、ツェルプストー辺境伯の悪口を聞きましたけど、その中に、卑怯とか策謀家とかいったものは一度も聞いたことがありません」

「ありがとう、エレオノール。セブランさん、エレオノールの提案に乗ってみようと思うのですが、どうですか？」

「ツェルプストー辺境伯の人柄が、エレオノール様のおっしゃる通りなら、一番良い方法かも知れません」

「それでは、状況が動く前に、こちらから動きましょう」

「ラスティン様、エレオノール様、馬車馬には無理をさせる事になるかも知れませんから、荷物は最低限にしていただける様お願いします」

「「分かりました」」

僕達は直ぐに準備を済ませ、宿を後にして、ツェルプストー辺境伯領へ向かいました。僕達の動きが早かった為か、監視の目は直ぐに撒く事が出来ました。ですが、油断は禁物ということで、予定通りほとんど休みをとらない強行軍で、ツェルプストー辺境伯への道を急ぎました。馬車馬を何度も変え、時には馬車自体も買い替えて、何とか3日で、ツェルプストー辺境伯へ入る事が出来ました。そのまま領を通り過ぎても良かったのですが、辺境伯への挨拶だけはしておく必要があるということで、辺境伯の屋敷に赴きました。屋敷の門番に、来意を告げると、そのまま屋敷の中に案内されました。応接室でしばらく待っていると、赤い髪と瞳の男性が、やってきました。エレオノールが立ち上がって、お辞儀をしたので、僕も慌ててそれに合わせます。

「本当にエレオノール嬢じゃないか、屋敷の者が騙されているのかと思ったぞ、大きくなったな」

「はい、辺境伯。ご無沙汰しております」

「なんでも、我が領を通り抜けるついでに挨拶に来たという事だが、何があったのかな？」

「ヴィンドボナから、トリステインへ向かうだけですわ」

「そうか？ヴィンドボナから私の所に、”トリステインの要人を拉致した犯罪者たちが、トリステインに向かう可能性がある、見かけたら捕縛し、ヴィンドボナまで連行せよ”という命令が先程届いて、そこに書かれている犯罪者達の一行の特徴に、君達は完全に一致しているんだがね？」

「辺境伯、それは違うのです！」

「そうだろうな、君達が犯罪者の一団に見えたら、余程目が悪いのだろうな。悪いようにはしないから、詳しく事情を説明してくれないかね？」

「それは、私の方から説明させていただきます。ラスティン・ド・レーネンベルクと申します。よろしくおねがいします、ツェルプストー辺境伯」

僕は、ヴィンドボナで監視が付き、それから逃れる為にここまで来た事を、辺境伯に簡単に説明しました。

「なるほど、ヴィンドボナでは宰相のクルーク伯に会わなかったかね？」

「良くお分かりになりますね、もしかして、監視や犯罪者としての手配も宰相閣下の仕業なのでしょうか？」

「裏の事情は分からないが、あの”キツネ”のやりそうなことだよ。他国の若者に話すような事ではないから、これ以上は話せないがね」

「いいえ、辺境伯が宰相のことを嫌っていると分かっただけでも、私たちは安心出来るというものです」

「ははは、これは一本取られたな。”キツネ”については忘れてくれ。これからはどうするかな？強行軍だったのだろう？ならば、この屋敷でゆっくりしていくがいい」

「はい、護衛の者達もかなり疲れている様ですし、お言葉に甘えさせていただきます」

「ふむ、見かけに似合わず、肝が据わっているようだな。私をそこまで信じていいのかな？」

「この場で辺境伯が、私達を捕らえろと命じられたら、今更どうしようもありませんから。それに、辺境伯の人柄は、エレオノールに聞いていた通りの様なので、そんなことは無いと確信しております」

「エレオノール嬢が、私の話をね。それは夕食の時にでも詳しく教えてもらおう、まずはゆっくり休みたまえ」

僕たちは客間に通され、そこで一休みする事が出来ました。その後、辺境伯一家と、僕、エレオノールで夕食をとりました。食事は美味しかったですし、終始和やかなムードでしたが、2，3歳のキュルケちゃんが人見知りする性質だったのには、すこし驚きました。翌朝になると、僕たちはツェルプストー辺境伯自身の護衛で、トリステインへと移動する事になりました。護衛のセブランさん達は、ツェルプストー辺境伯に兵士に変装しています。

ちなみに、昨晩の夕食の席で、このまま僕達をトリステインへ帰してしまったら、問題にならないか？と尋ねたら、辺境伯は、

「”賊は私の兵士によって討ち取りました。拉致された要人は無事奪還したが、かなり混乱している様なので、そのままトリステインまで送り届けました。先方には感謝されたので、外交的には失点にならないでしょう。”と使いを出す予定だ、これなら文句の言い様がないだろう？」

と笑いながら答えてくれました。そんな訳で、護衛の皆さんは、兵士の格好をしている訳です。

そのまま何事も無く、トリスティン国内に入ることが出来ました。
国境の砦では、エレオノールを見ただけで門が開かれました。
ツェルプストー辺境伯は国境で帰っていきましたが、去り際に、エレオノールに、

「父上に、”これでこの間の借りは返したからな”と伝えてくれ」

と言っていました。それはともかく、こうして無事にトリスティンに帰って来れたことを喜びましょう。エルフの里には行けませんでしたが、それ以外はほぼ目的を達成出来たと思いますから。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ちなみに、ラ・ヴァリエール家に、エレオノールを送って行ったら、エレオノールの事を心配していたラ・ヴァリエール公爵に思いっきり説教されてしまいました。婚前旅行には１０年早いとか、いろんなことを言われました。娘の事になると、公爵は人が変わった様な行動を取るんですね。
しかし、説教されたのは僕だけでした。公爵は、３女だけではなく長女にもかなり甘い様です。

第三十四話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：ゲルマニア）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１２／１０
ルビ修正

第三十五話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：事後処理１）（前書き）

第三十五話をＵＰします。

第三十五話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：事後処理１）

ラ・ヴァリエール公爵による説教という地獄を何とか切り抜けた僕でしたが（もう、ラ・ヴァリエール公爵夫妻にはできるだけ逆らわない様にしようと決心しました）、旅の報告に戻った自宅でも、ゆっくりする事は出来ませんでした。

ガリアから書いた手紙では、ある赤ちゃんを養女として受け入れてくれないか？という甚だ抽象的な内容だったので、両親からこの点を詳しく説明させられました。父上はガリア王家の醜聞と聞いてかなり慎重に事を運ぶ気だった様ですが、母上が娘が出来るかもと聞いて舞い上がってしまい大事になりそうな予感がひしひしとしています。

オデット様の出産がどんな状態か、トリステインからは全く分かりませんが、少なくとも母子共に大事が無いということが分かっているだけでも、少しは安心出来ます。そういえば、ロベスピエール４世はオデット様の出産に関して何処まで知っているのでしょうね？あの会談の様子から全てを知っていたとしても驚きませんが。

何とか両親と弟のノリスに事情を納得してもらって、ワーンベルへと戻った僕でしたが、そこには更なる試練が待ち受けていました。その試練が、今、僕の目の前に、まるでレーネンベルクの山々の様に立ち塞がっています。それは書類の山ではなく、まさしく山脈でした。

丸１日、書類と格闘してみましたが、全く減っていないのは、気のせいでしょうか？ワーンベルの事を一任したマルセルさんは優秀な人物なので、代官代行で決裁出来る案件は問題なく処理されていましたが、代官代行の権限で処理しきれない（個人的にはマルセルさ

んの統治能力なら十分処理可能だと思える）案件がそのまま残っていたのには、悪意を感じたりします。

愚痴を言っていても、書類は減っていかないので、せっせと書類にサインをして行きます。その書類の中に1枚気になる物を見つけました。内容としては、アルビオンとトリステインで紡績機と力織機を共同で技術開発しないか？という提案なのですが、差出人と宛先が問題です。差出人はアルビオンのジェームズ1世陛下で、宛先はラスティン・ド・レーネンベルク、つまり僕なのです。

僕がその書状を難しい顔をして見ているのに、興味を持ったのか、マルセルさんが僕が見ている書状を覗き込みました。

「ああ、その書状ですか。ジェームズ1世陛下から、直接に協力要請を受けるなんて名誉な事ですね」

マルセルさんは、ジェームズ1世陛下からの書状を単純に、僕が有名になったと思って喜んでいる様です。代官職を長年やって来たマルセルさんにはこういう経験が無かったのでしょうね。

「マルセルさんは代官をやっていた時に、国王陛下から直接お褒めの言葉を頂いた事はありますか？」

「さすがに直接はありませんでしたね、治めていた町の税収を上げたことで、国王陛下からお褒めの言葉を頂いたと、公爵様に褒められた事なら1度ありますが」

「普通はそうでしょうね、僕も剣や盾等を王城に納めた際には、父上を経由してでしたし。お褒めの言葉も父上経由で受け取りました。それなのに、このジェームズ1世陛下の書状は直接僕の所まで来てしまった。作為を感じませんか？」

「そこまで考え付かなかったです。ラスティン様、今回の外交の旅は、随分役にたった様ですね」

「色々考えさせられましたよ、ですが今は、この書状をどうするかでしょうね」

「公爵様にお知恵を借りるというのは、どうでしょう？」

「この書状は、ジェームズ1世陛下から外交筋を経て、我が国のフィリップ4世陛下に届けられたのでしょう。そして、フィリップ4世陛下は何らかの意図で、書状をそのまま父上に送ったのでしょう。そして父上は、今回の外交が僕の独断でなされた物と知っていますから、判断は僕に任すという意図で、書状を僕にそのまま送って来たのでしょう。手助けはしてくれると思いますが、知恵は貸してくれないと思ったほうが良いですね」（まあ、僕達息子には結構甘い所がある父上ですから、頼み込めば知恵くらいは貸してもらえるとは思いますけど）

「それでは、どうします？」

「そうですね、技術協力自体は、喜んで受けても構わないと思います。これが近隣の村も治めているワーンベル代官としての僕の判断です。先ずはこの判断を父上にお話します。その上で、父上のお力で、何とかフィリップ4世陛下との面会が適うように取り計らってもらいましょう。陛下には、僕の判断をそのままお話します。そこからは陛下の判断に従うと言うのが本筋でしょうね」

「そうですね、私がワーンベルの代官としての立場だったとしても、そうするしか無いですね。書状を見て、ラスティン様が直接ジェー

ムズ1世陛下に返答をすると考えていましたが、いささか軽率でした」

「とりあえず明日は父上に会って、話をしてきます。残りの書類で緊急度が高いものを選び出して下さい。今から大至急片付けてしまいますから。残りの書類は、代官代行の権限が許すと判断できるものはマルセルさんが決裁を行って下さい。責任は僕が取りますから」

「はい、分かりました」

僕とマルセルさんは早速、書類を緊急度と重要度別に分けて、処理にかかりました。そして夜中近くまでかかって、当面の問題を片付けました。明日はレーネンベルクの屋敷に戻って、父上と話をする事にしましょう。僕はそのまま自室に戻って、深い眠りにつきました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

翌日、僕は予定通り、レーネンベルクの屋敷に戻って、父上と話し合いをしました。

「父上、アルビオンのジェームズ1世陛下から提案のあった技術協力の件ですが、ワーンベルの代官として、是非お受けしたいと思います。父上はどう思われますか？」

「ワーンベルの代官としてそう決断したのなら、私はそれを支持しよう。それが代官を任じた領主の役目だからな」

「有難うございます！つきましては、父上に私が我が国王フィリッ

プ４世陛下と直接お会いする機会を設けて頂けないかと、お願いに来たのですが」

「ほう、やっと陛下とお会いする気になってくれたか！陛下には何度か、お前を連れて伺候する様に言われていたのだが、まだ子供だということで、お断り申し上げていたのだ。これで私の肩の荷も降りる」

「え？陛下が僕に会いたいと仰っていたんですか？今回の外交以降ならまだしも、それ以前は陛下の目に留まる行動は、全て父上を通して行って来たはずなのですが？」

「あー、それなんだが、ジュラルミン盾とチタン剣を作ったのが、お前だと言う事をぽろっと陛下に自慢してしまったのだよ」

うわ～、身内に裏切り者が居ましたよ～。しかもその理由が、息子の自慢をしたかったから！今まで、対外的には父上の影になるように行動してきた、つもりだったのが、無意味だったなんて、一気に気が抜けた気がします。これはヤバイですよ、悪くしたら、陛下に目を付けられているかも知れません。これからは今まで以上に行動に気をつけなくてはなりませんね。

「陛下とお会いする機会は、直ぐにでも設ける事が出来ると思う。陛下の都合次第ではあるがな。用意が整ったら、ワーンベルに使いを出すから、代官の仕事を続けていてくれ」

「はい、分かりました」

僕は、家族に挨拶だけして、ワーンベルへ戻り、決裁待ちの書類の整理を続けました。数日して書類整理も一段落した頃、ローレンツ

さんから一通の手紙が送られてきました。内容としては、

・ガリアの王位継承権争いに、領地の経営能力を競う方法が取られたこと
・ローレンツさんが、ジョゼフ王子に、支援を提案したこと
・シャルル王子にも援助を申し出たが、やんわりと断られたこと
・支援の条件に、競争場所となる領地での商取引の独占権を２０年要求した所、５年まで値切られたこと
・ジョゼフ王子が、ローレンツ商会の支援を僕の差し金ではないかと疑っているかもしれないこと

等が書かれていました。

問題なのは、最後の項目です。さて、どうしましょうね？ジョゼフ王子との交渉は、あの張り切り様からすると、ローレンツさん自身が行ったんでしょう。すると、ローレンツさんと僕との繋がりですが、これは傍から見る限りそれほど深いものでは無いはずです。転生者であることが、簡単にばれるはずはないですから、そうなると僕が立ち上げた錬金による工業品や武具の生産に目をつけたローレンツさんが僕に接触したと言うのが、一般的な見方でしょう。そうなると、僕からローレンツさんに何らかの取引を申し込んだというのが自然な流れですね、取引・・・、よしこれで行きましょう。まあ、こんな言い訳を考えても、ジョゼフ王子と直接会う事など、僕の立場からすれば、ほとんど無いんでしょうね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そして、翌日になりました。僕は父上からの、呼び出しを待ちなが

ら、執務室で、今日の書類を片付けていました。すると、マルセルさんがやって来て、僕を訪ねて変なお客人が来ていると教えてくれました。王城からの紹介状を持っていたそうで、とりあえず応接室に通したと言う事です。僕は、訝しく思いながら、応接室に向かいました。

応接室では、1人の人物が僕を待っていました。マルセルさんが変なと言ったのは、その人物が、頭からすっぽりフードの様な物を被っていたからでしょう。はっきり言って変、以前に怪しいと言えるでしょう。紹介状が無ければ、とても会う気にはならないですね。

「急に訪ねて来て済まないな、先ずは人払いを願おうか」

声を聞いただけで、この人物の素性が分かってしまいました。なにせ昨日、この人物の対策を考えていたのですから。僕はマルセルさんに目配せして、応接室から出て行ってもらいました。それを確認すると、ジョゼフ王子はフードを外しました。

「ジョゼフ殿下、何時トリステインにお見えになったのですか？」

「3日程前からだな、父上に同行してトリスタニアに滞在している」

「早速ですが、この様な田舎まで足を運ばれた理由を伺ってもよろしいでしょうか？」

「その事だが、ラスティン・ド・レーネンベルク！お前が父上に我が国の王位継承権争いについて意見を述べたと言うのは本当か？」

「はい、ロベスピエール4世陛下に呼び出され、意見を求められましたので、私の愚案を奏上させて頂きました」

「あの父上が、お前に意見を求めるとはな。まあこの件はいい。お前はローレンツという商人を知っているな？知らぬとは言わせんぞ！」

やっぱり来ました。ここは計画通り行きましょう。こんなに早く実行に移すことになるとは思ってもみませんでしたが。

「はい、もちろん存じております」

「何故、ローレンツに王位継承権の争いの話をした？」

「商人ローレンツと会う機会がございまして、儲け話がないかという話になり、儲けの１割を情報料としてくれるというので、話しましたが何か問題だったでしょうか？ロベスピエール４世陛下からは特に口止めもされませんでしたから、話しても問題ないと判断したのですが」

「そのローレンツが、何故か私に協力を申し出て来た。貴様の差し金か？」

ジョゼフ王子は疑う様な目で僕を見ています。僕は慌てることなく用意してあった台詞を喋ります。

「畏れながら、私はローレンツに何かを命じる事など出来ません。ローレンツが殿下の支援を申し出たのならば、それは殿下に付く事で何らかの利を得る事が出来ると判断したのだと思いますが、ローレンツから支援の見返りに何か要求されませんでしたか？」

「私が治める領地での商取引の独占権を２０年要求されたわ！」

「その要求を呑まれたのですか？」

「まさか！5年まで要求を下げさせたわ！」

「殿下はもしかして、私がローレンツの様な強欲な商人に王位継承権の争いの話を洩らしたのをお怒りなのでしょうか？」

「いや、そう言う訳ではないが」

「それでは、どうしてそれ程、声を荒立てられているのでしょうか？」

「ふん、まあよかろう、この話はここまでだ」

うまく、追及の手をかわせた様です。ジョゼフ王子も冷静さを取り戻した様子です。

「折角ここまでいらしたのですから、この町をご案内いたしましょうか？」

「そうだな、そうしてもらおう」

僕は、ジョゼフ王子を、旧市街－＜新市街－＜住宅街－＜魔法学園分校の順に案内しました。ジョゼフ王子は工場街に興味を持った様でしたが、ここは部外者には秘密にしていると言う事で、外側から眺めるだけで勘弁してもらいました。そして僕達は屋敷に戻りました。

「活気のある町だな」

ジョゼフ王子がぽつりと感想をいいました。

「私達が手塩に掛けて復興した町ですから」

僕は胸を張ってそう答えました。

「お前は、私に同じような事が出来ると思うか？」

ジョゼフ王子の声は、何だか不安を滲ませていました。

「殿下は植物を育てたことはありますか？」

「いや、無いが」

「私はとある事情で子供の頃から、植物の言葉が分かりました。ですから、草花が欲しがっている水や肥料を言われるままに与えて、結果、逆に草花を枯らしてしまい、良く庭師に叱られた物です」

「ふむ」

「町を育てるのも同じだと思います。必要な物を必要なだけ与えることで、町は育って行きます。足りなくても、多すぎてもいけませんし、必要だからと言って、1度に与える量を間違えれば、害にさえなります。それを見極めるのが統治者の仕事だと、私は考えます。それに1度、しっかりと大地に根を張った木は自分の力で力強く育って行きます」

そういえば、ジョゼフ王子はチェスの名手でしたね、こんな話もいいかもしれません。

「そして領民はチェスの駒ではありません、思うままに動かすことも可能でしょうが、自発的に行動させることができれば、統治者の仕事は道筋を示すという事以外、ほとんど残らないでしょう。殿下が1つ駒を動かす度に、対戦相手の駒が一斉に動く様を思い浮かべてみて下さい」

「ふふふ、統治者としての心得をそなたの様な子供に諭されるとはな」

ジョゼフ王子は、軽く笑いましたが、まだ孤独の影を感じてしまいます。

「殿下、こちらで少しお待ち下さい」

そうとだけ言って僕は1度、自室に戻り、取って置きの魔法宝石（マジックジュエル）のルビーのネックレスを手にとって、ジョゼフ王子の所に戻ります。

「お待たせしました、殿下。こちらをお持ち下さい」

「私にこのネックレスを?どうみても女物の様だが?」

「殿下を支えてくれる女性が現れたら、是非、殿下のからその女性に送って差し上げて下さい」

「よく分からんが、そうしよう」

「これから、領主として孤独な戦いに赴かれる殿下に1つ助言を差し上げましょうか?」

「よし、聞こう」

「サモン・サーヴァントを試してみてはいかがでしょうか？今の殿下にならば、本当に必要なパートーナーが呼べるのではないでしょうか？」

ジョゼフ王子からは、何の反応もありませんでしたが、ゆっくりと立ち上がると、フードを被り、出口に向かって行ってしまいました。僕も慌てて後を追います。ジョゼフ王子は屋敷の出口で一度だけ振り向いて、

「今日は世話になったな、次に会う時は本音で話し合いたいものだ。あのような詭弁が何時までも通用すると思わぬが良いぞ」

とだけ言って、待たせていた馬車に乗り込んで行きました。僕は駆け出していく馬車を眺めながら、肩の力を抜きました。

第三十五話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：事後処理１）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

諸国漫遊編も次で終わりになります。少し外伝などを挟んで、次は魔法学院編になる予定です。

２０１０／１２／１０
ルビ修正
旧市街，新市街，住宅街，魔法学園分校
を
旧市街－＜新市街－＜住宅街－＜魔法学園分校
に変更

第三十六話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：事後処理２）（前書き）

第三十六話ＵＰします。

今回で、諸国漫遊編も終了になります。

第三十六話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：事後処理２）

父上の呼び出しを受けて、王宮へ伺候したのは、ジョセフ王子がワーンベルを訪ねて来てから、４日後のことでした。王宮では、ガリアのロベスピエール４世の訪問で、僕に構っていられなかったという事は、簡単に想像出来ます。

王都トリスタニアへは、父上が手配してくれたので竜籠を使います。移動が短時間で済むのには助かります。トリスタニア郊外に降りると、そこからは馬車を使う程の距離でもないので、徒歩で王宮へと向かいます。久々に来た、トリスタニアですが、以前より狭く汚く感じてしまいます。ワーンベルの町並みに慣れた為か、外国の首都を見て来た為かは自分でも分かりません。

父上に先導されて、王宮までやってきました。城門で衛士に呼び止められましたが、父上の顔を確認すると直ぐに門を開けてくれました。衛士が僕の事をちらりと見ましたが、公爵の同伴者ということで、何も聞かれませんでした。

無事に?王宮に入ると、父上は案内など付けずに、そのまま王宮の奥へと進んで行きました。てっきり陛下への目通りを文官などに依頼すると思っていた僕は、慌てて後を追いかけました。父上はそのまま進んで行き、とある部屋まで来ると、ノックもせずにドアを開けて中に入ってしまいました。僕も恐る恐る後に続きます。部屋の中に入ると、１人の文官らしき男性がいました。父上は、その男性に向かって、

「陛下にお目通りしたい、手配を頼む」

と短く命じました。男性は、

「はい」

とだけ答えて、そのまま部屋を出て行ってしまいました。多分、謁見を願い出に行ったのでしょう。

「父上、今の方は？」

「ああ、グレンと会うのは始めてだったか？愛想は無いが、あれでも我が家の家臣の1人だ。主にレーネンベルクと王宮の仲立ちをやってもらっている。ほとんど王宮に詰めているから会った事が無かったのだろう」

「グレンさんですね、覚えました。ところで父上、この部屋は？」

「王宮での私の部屋だが？」

「え？大きな貴族は、トリスタニアに別宅を持っているものではないのですか？」

「もともと、父上、お前にとっては祖父だな、は王子だったからこの王宮に部屋を持っていた。さすがに王宮の奥の部屋は、父上が亡くなって返上したが、なかなか便利だから、無理を言って部屋を貰ったのだ。ちなみに我が家はトリスタニアに別宅を持ってないぞ、維持費もばかにならないからな」

「そうですね」

維持費と聞いただけで、納得してしまう僕もやっぱり、レーネンベルクの人間ですね。しかし、それほど広くないとはいえ、今、居る応接間、そして右手にはグレンさんが居たと思われる執務室、左手には寝室があります。王宮にこれ程の部屋を用意させる事が出来る

とは、レーネンベルクはトリスティンにとって思ったより重要なのかもしれません。
王宮の中と言っても、父上の部屋と言う事なので、少し安心して部屋の中を見てまわっていると、グレンさんが戻って来ました。

「陛下が次にお会い下さいます。控えの間で待てとの事です」

「そうか、意外に早かったな。ラスティン行くぞ」

「あ！はい、父上」

あまりの展開の速さに一瞬付いていけませんでした。もっと待たされるかと思いましたが、父上にはこれが普通なのでしょうか？そんなことを考えながら、控えの間に向かいました。控えの間でしばらく緊張して待っていると、正面の扉が開き、

「レーネンベルク公爵様、ならびに公爵子ラスティン様お入り下さい」

と声をかけられました。父上に続いて、謁見の間に入り、片膝をついて臣下の礼をとります。うぅ、国王の地位にある人物に会うのは、始めてでは無いのに緊張してきました。やはり自国の王となると、勝手が違いますね。

「公爵良く来てくれたな。そちらが自慢の息子殿かな？」

「はい、息子のラスティンです。ラスティン、陛下にご挨拶を」

「お初にお目にかかります、陛下。レーネンベルク公爵家の長子、ラスティン・ド・レーネンベルクと申します。陛下にはご機嫌麗し

く、お喜び申し上げます」

「王に会うのは始めてではないのだろう?他国の王の前でもそんなに緊張していたのか?」

「やはり、我が国の陛下とお会いするのは、別物でございます。先程から胸の鼓動が落ち着きません」

「なに、恩人とも言える公爵の息子をいきなり罰したりしない。もう少し、リラックスして話しても構わんぞ」

「はい?我が父が陛下の恩人ですか?」

「知っていると思うが、私はアルビオンの王弟だったからな。マリアンヌと結婚したからといって、簡単にトリステインに馴染めるというものでもなかった。その時、トリステインの貴族と私の間を取り持ってくれたのが、そなたの父上という訳だ」

「その様な事があったのですか」

「そうだ、だから、そちの我侭も多少は聞いてやらねばならないと思っているよ」

「各国への親書の件ですね、その節は陛下のお手を煩わせてしまい、申し訳ないと思っておりました」

「まあ、それは構わぬさ。それより各国を回って来たのだろう、他の国の様子を聞かせてくれるか?」

僕は、気を落ち着けて、先日までの外交の旅の話を、陛下にお話し

ました。ガリアのオデット様の話と、ロマリアのジェリーノさんの話は意図的に隠しておきます。陛下は真剣な目付きで、僕の話すことに聞き入っていました。

「良く分かった、それでは、そなたは訪れた国々と我がトリステインはどの様に付き合っていけば良いとおもうかな？忌憚無く意見を言ってみてくれ」

「はい、まずアルビオンとでございますが、こちらの関係は良好と思われます。陛下もご存知でしょうが、先日、ジェームズ１世陛下から書状が送られて参りました。アルビオンとの技術交流は、両国の絆を深めるのに役立つと考えます。陛下のお許しが得られれば、是非お受けしたいと思います」

「ふむ、私としても、兄上いやジェームズ１世からの提案は受けるべきだと思う。当事者となるそなたが、その気ならば、話を受けても構わんよ。アルビオンはあの様な土地だからな、特産品が量産できるのは、良い事だ」

「それを聞いて、安心いたしました。それでは、この件は王宮側で取り仕切っていただけますか？専任の役人を任じていただき、その役人がアルビオンとレーネンベルクの間を取り持っていただけると助かるのですが」

僕の台詞を聞いた陛下は、鷹揚にうなずいて、

「良かろう、担当の者を手配することにしよう。ところで、モード大公にも会ったのだな、噂の愛妾には会えたか？」

「いいえ、お美しいとお聞きしたのでお会いしたかったのですが、

妊娠中という事でお会い出来ませんでした」

「そうか、この件はまあ良い。次はガリアの話だな？」

「ガリアは、しばらく様子を見るしかないと思われます。次代の王が決まるまでは、大きな動きも無いと思いますが、もしかして陛下はガリアの後継者争いに干渉される御積もりですか？」

「それはな、先日ガリアのロベスピエール４世と、不可侵条約延長の件で会談を持ったのだが、その場で釘を刺されたよ。そういえば、ロベスピエール４世に同行して来た、ジョゼフ王子が私に挨拶が終わると、すぐにワーンベルに行ったそうだが、どんな話しをしたのだ？」

「そうですね、少し苦情を言われました。それと統治者としての心得を少し話させていただきました」

「ほう、１５歳の少年が、一国の王子に、統治者としての心得を説くか。ロベスピエール４世の言う事もあながち冗談ではないのだな」

「ロベスピエール４世は何と陛下におっしゃったのですか？」

「そなたを次のトリステインの王にしたらどうか？と言われたよ」

「その様な事を！それは明らかに冗談だと思います。私の継承順位では、とても王位が私の所に来る事はないでしょう」

「王位継承順位はそなたが思っているほど、低くは無いのだがな」

「アンリエッタ殿下も居られますし、陛下もまだお若いのですから、

次は王子殿下が生まれるかもしれません」

陛下は嫌そうな顔をして、

「そなたも、王子を儲けろと言うのだな」

と言いました。誰かにしつこく言われているのでしょうか？

「失礼しました。ガリアに関しては以上です」

「そなたは、次のガリア王はどちらの王子だと思う？」

「私には分かりかねます。ただ、シャルル王子が王位を継いでいただいた方が、我が国としてはやり易いと思います」

「そうか、ところで、ガリアに関して、他に報告する事はないか？」

「陛下にお話する様な事は、無いと思いますが。何か心当たりでもございますか？」

「いや、ロベスピエール４世がレーネンベルクの事を気にしていたから、何か王家に関わる情報を持っているのではないかと思ったまでだ」

「今の話を聞き、１つ思いつきましたが、これはガリア王家の醜聞（スキャンダル）に関わる問題です。陛下はこの様な話をお聞きになり、それを政治的にお使いになる御積もりですか？」

僕は、陛下の目をじっと見詰めます。

「よかろう、その話は聞かない事にしよう」

「陛下が英明な王である事を、再確認出来て嬉しく思います」

僕は、陛下に向けた視線を緩めます。

「次はロマリアに関してですが、かの国は変革の真最中と感じました。我が国としては、その変化を的確に読み取り、それに応じた対処を考えて行かなくてはならないのではないでしょうか？」

「そうだな、ここ２０年程の、ロマリアの変化は昔を知る者からすると、信じられないという事だからな。ロマリアの動きは注目しておく事にしよう」

「はい、そうするのが宜しいかと。次はゲルマニアですが」

僕はここで１度言葉を止め、真剣な表情を作って、陛下に話しかけます。

「ゲルマニアは、現在、皇位を争いの為に混乱している様です。しかし、１度皇帝が決まってしまえば大きな動きをしてくると思われます」

「大きな動きとは？」

「現状では分かりません。ですが、最大限の警戒をしておく事が必要かと思われます。拉致されそうになった為に言う訳ではありませんが、”宰相マテウス・フォン・クルーク”は危険な人物だと思います」

「そうか、そこまで言い切るか。肝に銘じておこう」

「私から報告すべき事は、以上でございます」

「そうか、私からそなたに聞きたいことがあるのだが」

「はい、なんでございましょう？」

陛下が先程の仕返しとばかりに、僕をじっと見詰めながら尋ねてきました。

「レーネンベルク魔法兵団を、私直属にしたいと言ったら、反対するか？」

「陛下が、兵団の力を国の為、そして平民の為に使ってくださるなら、喜んで指揮権をお渡しします。ワーンベルの錬金隊の者達以外はですが」

何時かはこんなことを言われるのではないかと思っていたので、迷い無く返事をすることが出来ました。

「ほう、潔いな。レーネンベルクのというより、そなたの才覚で育てた兵団を横取りされる様な命令にも従うというのか？」

「繰り返しになりますが、陛下が兵団の力を、貴族の為ではなく、国と平民達の為に使って下さるならば、構いません」

「貴族の為ではなくか、私には重い言葉だな。この話は忘れてくれ、レーネンベルク魔法兵団は今のまま、平民の為に活動することを許可しよう」

「ありがとうございます。陛下、答えにくいことをお聞きしますが、陛下はこの国の貴族達に不満をお持ちなのでしょうか？」

「不満と言うわけではないが、私は所詮、外様だからな。仕方がないことだろう」

陛下は沈んだ表情になってしまいました。

「陛下、もし宜しければ、陛下のお力を一気に高める方法をお教えしますが？」

「いや、そんな方法があるならば、私の次の王の為に使ってくれ」

「そうですか」

「ところで、そなたの魔法兵団だが、反乱のことを考えた事はあるか？」

「は？私が陛下に弓を向けるということですか？」

「いや、そうではない。そなたも、そなたの父上も、王家に弓引く事など無いだろうな。今日そなたに会って確信した。そうではなく、魔法兵団が、そなたの制御を離れて暴走しないか？ということだ」

僕は陛下の言われることが良く理解出来ませんでした。

「魔法兵団の武力は、かなり強力だということは分かるな？戦闘経験を持つメイジを多数抱えているということは、ある意味脅威だ。彼らの力をもってすれば、レーネンベルク領を支配下におさめるこ

とは造作もないだろう。その気になれば、我が国の全軍を持ってやっと討伐出来るといった所かもしれん」

「失礼ですが、兵団が我が家に牙を向くなどという事は」

「ありえないと言い切れるか？甘いな、そなたは人の善意を信じたいのであろうが、人は善意だけで生きている訳では無いのだぞ」

僕は魔法兵団を信じていますが、陛下の言う事も最もな事なので言い返す言葉を持ちませんでした。父上に、お前の考え方は理想論だといわれた時のことを思い出します。

「どうした？言い返す言葉もないか？」

「陛下、息子を虐めのはお止めください。その辺りを、私が見逃しているとお思いになりますか？」

今まで、全く発言しなかった父上から、助けが入りました。

「ほう、さすが公爵だな。どの様な手を打ったのかな？」

「魔法兵団には、”影”と”闇”と呼ばれる者たちを、普通の団員として紛れ込ませています。”影”が諜報活動を、”闇”が障害の排除を行います。陛下のご心配は、杞憂でございます」

「ラスティン、良い父親を持ったな。そなたは幸せものだぞ」

「はい！」

「今日は、良い話が聞けて満足だった。ラスティンも、また、王宮

を訪ねてくるがいいぞ。アンリエッタと遊んでやってくれ。もう下がるがよい」

「はい」
「はっ」

僕と父上は、謁見の間を後にします。1度、父上の部屋に戻って、一休みしてから、待たせてある竜籠で、レーネンベルク領に戻る事になりました。父上の部屋に戻ると、僕は父上に気になっている事を直ぐに尋ねました。

「父上、先程の、”影”と”闇”の事は本当なのですか？」

「ふむ、魔法兵団長のマティアスに極秘で組織させた。報告書が届いているから、”影”は確実に存在しているよ。幸いにも”闇”が動いたという報告は受けていないがね」

「”闇”は実在するのですか？」

「気になるなら、兵団員の誰かに聞いてみるがいい。”闇”の噂くらいは誰でも知っているのではないかな？」

父上ははっきりと答えてくれませんでした。もしかしたら、”闇”という存在は噂だけのもので、噂の力で兵団員を抑えようとしているのかもしれません。やっぱりまだまだ父上には敵わないようです。

第三十六話　ラスティン１５歳（諸国漫遊：事後処理２）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１２／１０
ルビ修正

第三十七話　ラスティン１５歳（レーネンベルク家全滅す、あるいはちっちゃな

第三十七話ＵＰします。

第三十七話　ラスティン１５歳（レーネンベルク家全滅す、あるいはちっちゃな

僕が王宮を訪問してから2週間が過ぎました。ワーンベルの状態は順調そのものなので、細々とした書類と格闘しながら、出来上がって行く工業品の出荷状況を眺めている、平和な日々を過ごしていました。

そんなある日のことです。突然、父上から至急、実家に戻れという手紙を受け取りました。手紙には詳細が書かれていなかったので、仕方なくマルセルさんに後を任せ、実家に戻る事にしました。でもこの時は、レーネンベルク家があんな事になっているとは想像もしていませんでした。

馬で屋敷まで戻ると、屋敷はなにやら落ち着かない雰囲気に包まれていました。真っ先に出迎えてくれるはずの、リッチモンドも今日は出迎えてくれませんでした。不審に思いながらも、自室に荷物を置き、そのまま父上の執務室に向かいました。ですが、何時もならこの時間執務室に居るはずの父上の姿が見当たりません。またもや不審に思いながら、偶々近くを通りかかったメイドを捕まえて、父上の居場所を尋ねると、言い難そうに、

「旦那様ですか？多分、２階の左側の一番奥の部屋にいらっしゃると思いますよ」

とだけ教えてくれました。そのメイドは直ぐに忙しそうに、何処かへ行ってしまいました。２階の左側の一番奥？おかしいですね。そこは母上の部屋の隣になり、確か空き部屋だったはずです。僕は不審感を募らせながら、問題の部屋に向かいます。ですが、中からは物音１つ聞こえません。仕方なくドアを軽くドアをノックし

ます。するとドアは、直ぐに内側から開かれました。

「父上、この様な部屋で何を」

僕はその言葉を最後まで言うことが出来ませんでした。そこでは・・・

「シーッ！」

部屋には、屋敷の主だった者が集まっていて、何故か皆が一斉に、黙るように身振りで示してきたのです。部屋の中には見慣れない、いえ正確にはしばらく見なかった、子供用のベッドが置かれていて、そこには1人の赤ちゃんがすやすやと眠っていました。僕はそれを見ただけで大体の状況を知る事が出来ました。

僕はその状態に呆れて、一人居間へと移動しました。後を追って父上ともう1人が居間へとやって来ました。

「ラスティン様、この度はお世話をお掛けします」

その人物が、先ず口を開きました。見慣れない人物だと思いましたが、執事の格好をしたその男性を良く見ると会った事のある人物でした。

「ペルスランさんでしたか？オデット様はレーネンベルクを選んで下さったのですね」

「はい、私に最後の確認を任せていただきました。もし、実際にレーネンベルク家が信頼に値しないようであれば、お嬢様、ジョゼット様をロマリアにと命じられましたが」

「実際、レーネンベルク家を見ていかがでしたか？」

「はい、こちらならジョゼット様をお任せ出来ると確信致しました。私の様な一介の使用人に対しても分け隔て無い応対をしていただき

ました」

「それは良かったです。多少貴族らしくなくお育てする事になるかも知れませんが、それはこの家の家風だと思ってもらえば、ありがたいです」

「いいえ、レーネンベルク家であれば、立派な貴族として、ジョゼット様を育てていただけると、胸を張ってオデット様に報告が出来ます」

「それは良かった、オデット様にはよろしくお伝え下さい」

ペルスランさんは1度頭を下げると、そのまま居間を出て行きました。多分ジョゼットの所へ戻るのでしょう。居間には父上と僕だけが残されました。

「ちちうえ～」

僕は意識的に声を低くして、父上に話しかけます。

「なんだ、ラスティン」

「父上は何時もならこの時間は、執務室で政務を行っていましたよね？」

「そうだな、今日は偶然時間が空いたのから、新しい我が娘の様子を見ていたのだ」

そう言いながら、父上の目はあさっての方向を向いています。

「父上、もしかしてジョゼット様にかかりっきりで、政務を疎かにしてはいないでしょうね？」

「そんなことはないわ、大体、テオドラは役にたっていないですからね」

僕の追及は、思わぬ所からの援護？でかわされてしまいました。

「母上、ジョゼット様の御加減はいかがですか？」

「ラスティン、あの子は既に我が家の娘です。貴方の妹になったのですよ」

「そうですね、言い直します。ジョゼットの機嫌はどうですか？」

「さっきまではぐずっていたけれど、今は眠っています」

「母上の目から見て、ジョゼットはどんな子ですか？」

「そうね、貴方よりは手がかからないでしょうね」

両親には子供の頃にすごく心配をかけたので、この言葉には思わず言葉を失いました。

「冗談よ、女の子を育てるのは始めてですからね、貴方ともノリスとも勝手が違って少し戸惑っているという所かしら？」

「大丈夫なのですか？」

「ええ、乳母の経験豊かなメアリもいるし、新しくもう1人乳母と

して、オルガを雇ったから万全でしょう」

「オルガさんですか？」

「ええ、私には乳を与えることが出来ませんからね。後で紹介するわ」

「父上と母上が選んだ乳母なら心配はしませんが、一応は会っておきたいです。そういえばノリスを見かけませんでしたが？」

「あの子は、年甲斐も無くジョゼットに嫉妬しているみたいね。でも心配はしないで、ちゃんと話し合うつもりだから」

「ノリスは、まだ１１歳の子供ですよ。お手柔らかに願いますよ」

「あら、私達から見れば貴方も十分に子供よ？」

そう言って母上は僕の頭を撫でてくれました。その懐かしい感覚に暫く浸っていると、

「オルガ！ちょっといいかしら？」

と母上が声をあげました。オルガさんというと、新しく雇った乳母ですね。

「はい、奥様」

その声と共に、１人の女性が居間に入って来ました。その女性は胸に１人の赤ちゃんを抱えていました。ジョゼットでは無い様ですが？

「ラスティン様ですね、新しくレーネンベルクのお屋敷でお世話になる事になりましたオルガと申します」

「こちらこそ。抱えている赤ちゃんは、オルガさんのお子さんですか？」

「はい、娘のテッサです」

先程ちらりと見たジョゼットよりは、幾分大きな赤ちゃんです。この子はジョゼットの乳兄弟になるですね。

「元気そうな赤ちゃんですね。この子がジョゼットの友人になってくれると嬉しいのですが」

オルガさんは僕の言葉に戸惑っている様です。

「まだ、この家には慣れていないのですね。そのうち僕の言っていることが分かると思います。出来れば、テッサちゃんにはジョゼットの親しい友人になってもらいたいです。それだけは覚えておいてください」

多少ぎこちなく頷いて、オルガさんは居間を出ていきました。オルガさんに関しても、母上に任せておいて問題ないでしょう。さて用件はこれで済んだと考えて良いのでしょうね。

「それでは、父上、母上、用件は済んだと思いますので、僕はワーンベルに戻る事にします。なるべくここには顔を出す様にしますが、ジョゼットのことよろしくお願いします」

「うむ、あの子はもう我が家の一員だからな、お前に言われなくて

も大切にするさ」

「あなたは、ジョゼットを甘やかせ過ぎない様に注意する必要がありそうね」

そんな両親の言葉を聞きながら、僕は我が家を後にするのでした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

その後、僕は1週間から2週間毎に、実家に帰る事にしました。実家に帰る度に、頑なだったノリスの様子が段々と変わって行くのを見るのは中々楽しい物でした。最初は泣き声にうんざりしていた様子だったのですが、2月もすると、ノリスはジョゼットにべったりでした。今では、ジョゼットの騎士気取りなのは見ていて微笑ましい限りです。それにしても父上ときたら、あんな調子ではジョゼットの将来が思いやられます。

「父上、ジョゼットはまだ生まれたばかりなんですよ。それなのに、こんなにドレスなんか用意してどうするつもりなんですか？」

「何を言う、ジョゼットは我がレーネンベルク家の娘なのだぞ。他所に出しても恥ずかしくない装いをさせるのが親としての勤めだろう。大体偉そうに言うお前こそ、ジョゼットに魔法宝石（マジックジュエル）のアクセサリーは早すぎだろう？」

「アクセサリーであれば、嵩張って邪魔になることはないじゃないですか。それにジョゼットがお嫁に行った時にも持参金代わりになります。何の問題もないじゃないですか」

物語（歴史）通りならば、ジョゼットは魔法に関して何らかの問題を抱える事になるはずです。魔法宝石（マジックジュエル）のアクセサリーはそんな妹に送る兄としての心配りなのです。

「まったく、我が家の男達ときたら、ジョゼットにメロメロなんだから」

そう母上がため息をつきます。

「そうは仰いますが、ジョゼットが我が家に来る前から娘が出来るといって色々手配していたのは、母上じゃなかったですか？」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

こういう経緯をエレオノールに話したら、

「そうなんですか？それでは、レーネンベルク家は小さな侵略者の前に全滅なのですね」

と笑われてしまいました。やっぱり、姉妹ばかりなので、兄弟２人のレーネンベルクとは状況が違うのでしょう。

でも、少し赤くなりながら小さな声で、

「もし私達の間に娘が生まれたら、その子の事が今から心配です」

と言っていた気がしますが、これは聞かなかった事にします。

もしも僕とエレオノールの間に娘が生まれたらですか？少し想像し

てしまいます。

「だめだ、そんな男のもとにお前を嫁にやるわけにはいかん！」

思わず口に出してしまった言葉に、

「もう、スティン兄様のバカ」

とエレオノールは呆れ顔でした。今なら地獄の説教をしてくれたラ・ヴァリエール公爵とも話が合いそうな気がします。

第三十七話　ラスティン１５歳（レーネンベルク家全滅す、あるいはちっちゃな

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

外伝八話　ノリス君がんばる：前編（前書き）

外伝八話ＵＰします。

今回は、前後編構成です。

外伝八話　ノリス君がんばる：前編

皆さん、こんにちは。

僕は、ノリス・ド・レーネンベルク、レーネンベルク公爵家の次男坊です。容姿は、母上似の銀髪碧眼で、少し女性的ですが、周りの皆からは、将来が楽しみと言われています。歳は１１歳で身長は１５５サントです。ちなみに兄上が１１歳の頃よりも、１０サント近く僕の方が身長が高いです。あまり兄上に勝てる所の少ない僕ですが、身長だけは負けない気がします。

今日は僕のこれまでの人生（といってもそれ程長いものではないですけど）について、お話したいと思います。

僕が覚えている最初の記憶は、多分屋敷の庭と思われる場所で母上にだっこされながら、兄上が魔法の練習をしているのを眺めている風景です。小さな僕の手には兄上を真似て、その辺りから拾ってきた、木の枝が握られていました。その木の枝を、兄上と一緒になって意味も分からず、振り回していました。

そして、そんな幼い日もあっという間に過ぎて、いつの間にか、僕も自分の杖を与えられる日がきました。それは僕の５歳の誕生日でした。僕に与えられた杖の材料は父上のよると、樹齢２５０年のアリエの木で一級品だそうです。

後で知ったのですが、この頃から、父上は僕と兄上をほとんど同等に扱ってくれていました。この杖の材料の木材も兄上の杖を作る際に取り寄せた木の半分を使った物でした。そんな事を気付きもしなかった僕は、杖を手に庭へと駆け出しました。

杖契約がどんなものか知らなかった僕は、杖を手に、庭でうんうん

と唸っているだけで、その日を終えてしまいました。さすがにこれではまずいと思ったので、父上に杖契約について聞くと、何故かひとしきり笑った後、

「ノリスは、自立心が旺盛だな。だが、分からない事は恥ずかしがらずに聞いた方が、よい事の方が多いぞ」

と言いながら、詳しく教えてくれました。そして付け加える様に、

「お前も、リリアの子だからな、もしかすると精霊の声が聞けるかもしれないな」

といいました。精霊というと御伽噺に出てくる、不思議な存在の事でしょうか？

「精霊ですか？」

「ラスティンは杖の精霊と会話が出来るらしいんだよ。詳しくはラスティンに聞くんだな、私には分からない感覚だからな」

「はい、そうします」

僕は兄上の部屋に向かいました。この頃、兄上は元素周期表というものに基づいた、錬金に夢中で、暇があれば部屋に篭っていました。

「あーにーうーえー」

ノックもそこそこに飛び込んだ兄上の部屋では、やっぱり何かの錬金がされている様でした。兄上はその手を休めると、僕に向かって、

「どうしたんだい、ノリス？」

と尋ねてくれました。この頃から兄上は、子供らしくなかったと感じていたことを思い出します。僕は兄上の作業の邪魔をした自覚もなく、

「兄上、僕も今日から杖との契約を始めたんですけど、うまく行かないんです。父上に聞いたら、精霊の声が聞けるかもだから、兄上に話を聞きたいです」

と尋ねました。自分の事ながら、何を言っているか分からないことを言っていましたが、兄上にはちゃんと伝わった様でした。

「杖の精霊？ニルヴァーナの事だね。そうだね、ノリスにも聞こえるかも知れないね。僕も最初の１日は無駄にしてしまったけど、ノリスなら明日にも精霊の声が聞けるかもしれないよ？」

「本当ですか？」

「うん、そうだな。うまく行くコツは、杖の精霊の声を聞こうとすることかな？あ！後、杖に名前を付けてあげると良いよ」

「名前ですか？どんな名前がいいのかな？」

僕が悩んでいると、兄上が杖に話しかけています。その時は変だなと思いました。

「ノリス、良かったら、僕が名前を考えてあげようか？」

「はい、思いつかないから、教えてください」

「”ニルヴァーナ”の妹になるんだから、”シルヴァーナ”なんてどうだい？」

「”シルヴァーナ”ですか？」

「そうだよ、きっと杖の精霊も気に入ってくれると思うよ」

「はい、”シルヴァーナ”にします」

「話しかけてから、返事を聞く感じだよ、忘れない事。今日はもう遅いから早く寝るんだよ」

「はーい」

言われた様に、部屋に戻った僕でしたが、杖の事が気になって仕方がありませんでした。でも、ベッドに横になると疲れていたのか直ぐに眠ってしまいました。

翌日、朝から杖との契約を再開すると、昨日の空回り具合がおかしく感じる程、簡単に杖との契約は済んでしまいました。兄上からの助言通りにしただけなので、少し拍子抜けでした。僕の”シルヴァーナ”は、僕の付けた名前を気に入ってくれました。”シルヴァーナ”は兄上の杖と違って話しかけてくることはありませんでしたが、”シルヴァーナ”の意思はきちんと僕に伝わるので問題はありません。

色んなことを、”シルヴァーナ”に話しかけていたら、父上がやってきて、

「ノリス、ラスティンにも言ったのだが、人前で杖に話しかける様なことはするんじゃないぞ。傍から見ると変な人に見えるからな」

と言われました。そうですね、昨晩、兄上が杖に話しかけているのを見ておかしいと思ったのは僕自身でした。

「はい、気をつけます、父上」

「そうしなさい。それより杖契約は済んだようだな。コモンマジックの家庭教師は連絡すれば明日から来てくれるがどうする？」

「え？明日からもう魔法を習えるんですか？」

「ラスティンの時は失敗したからな、今日以降なら何時でも来てもらえるように手配してあるぞ」

明日から魔法を習えるんですね、でも呪文１つ知らないんだけど大丈夫かな？

「父上、呪文も一緒に教えてもらえるんですか？」

「教えてくれるが、予め知っておいた方が話が早いだろうな」

「じゃあ、明日は呪文の勉強をしたいので、明後日から先生には来てもらいたいです」

「そうだな、そう伝えておこう」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そして、僕のコモンマジックの勉強が始まりました。教えてくれた

のは、マリナという名前の女性でした。優しく、教え方も巧く、上手に魔法が使えた時は褒める事も忘れず、時には本気で叱ってくれる、本当に良い教師でした。そのマリナ先生が、

「ノリス様は本当に優秀ですね、この調子ならば2年と掛からず、私の知っている全てのコモンマジックを習得出来ますよ」

と言ってくれたのは、本当に嬉しかったです。この話を母上にしたら、

「まあ、私の息子達はみんな優秀なのね」

と喜んでくれました。

「母上はどれ位かかったんですか?」

「私はそうね、3年位だったかしら。テオドラは2年半だったと自慢していたわね」

「じゃあ、兄上はどれ位だったのですか?」

「あの子は1年だったかしら?」

「え!1年ですか?」

僕はそれを聞いて、軽く落ち込みました。表情に出ていたのか、母上が慌てて、

「あの子の場合は、才能もあるでしょうけど、教える先生が良かったのよ」

と付け加えてくれましたが、慰めになっていませんでした。

「どうして、僕は兄上と同じ先生に教わる事が出来ないの？」

悲しくて、こう言ってしまった僕を、母上は優しく抱きしめて、こう言ってくれました。

「ノリス、良く聞きなさい。私達は貴方とラスティン区別するつもりは無いわ。ラスティンがコモンマジックを習った先生はもう故人なの」

「・・・、故人？」

「貴方にはまだ難しかったかしら。もう亡くなって、そう死んでしまっているのよ。分かったかしら？でもね、貴方には、今、最高の教師役を付けたつもりよ。貴方はマリナ先生に不満があるのかしら？」

「ううん」

僕は、涙を堪えながらも首を振りました。

「分かってくれるわね？」

僕は、ゆっくりと頷きました。納得した訳ではないですが、母上の言う事に嘘は無い事が分かったからです。僕は母上に抱かれたまま眠ってしまいました。翌日は何か恥ずかしくて、母上の顔を見ることが出来ませんでした。でも、兄上の家庭教師には興味があったので、また兄上の部屋に行って、話を聞く事にしました。

「兄上～」

「どうしたんだい、ノリス？」

「あの、兄上のコモンマジックの先生はどんな方だったんですか？」

「コモンマジックの先生？師匠のことかい、そうだな」

兄上は嬉しそうに、マックスウェル・ド・ノワールという人の話をしてくれました。その様子を見ると、兄上がどれだけ、その先生を尊敬しているのか良く伝わってきました。

「では兄上、魔法はどんな感じで教わったんですか？」

「そうだね、教え方は普通だったと思うよ。その後が超実践主義だったけど」

「超実践主義？なんですかそれは？」

「言葉では説明しにくな、そうだ言葉通り実践してみよう。ロックとアンロックはもう習ったね？ノリスついておいで」

そう言って兄上は僕を、ある部屋に連れて行ってくれました。何故かそこに付く前にトイレに行かされましたが。

部屋に入ると、兄上は説明を始めました。

「今からこの部屋のドアにロックの呪文をかけるから、お前は自力でその呪文を解呪して、出て来るんだよ？ロックはオリジナルだけ

ど、そんなに複雑にはしないから、心配しなくてもいいよ。それじゃあ始めるよ」

そう言って、兄上は部屋から出て行ってしまいました。外から兄上が呪文を唱えているのが聞こえました。そして魔法が完成すると、兄上は、

「じゃあ、ノリス、頑張るんだよ」

と扉越しに、僕に声をかけて何処かへ行ってしまいました。ようやく状況が掴めた僕は慌てて、アンロックの呪文を唱えます。しかし、手応えがありませんでした。そういえば、兄上がこのロックの魔法はオリジナルだと言っていたのを思い出しました。

ようやく解呪を終えて、部屋から出られた頃には、お腹が空いて倒れそうでした。急いで食堂に向かうと、僕の夕食だけが、ぽつんと残されていました。もう冷えてしまっている食事を、お腹に入れながら、もう2度と兄上に魔法は習わない事にしようと誓いました。

ちなみのこの話を父上にしたら、

「ははは、ノリスも超実践主義がどんなものか分かったかな?」

「はい、嫌と言うほど。父上もロックで閉じ込められたりしたんですか?」

何気なく聞いた一言でしたが、父上は何故か黙り込んでしまいました。どうやら聞いてはいけない事だったようです。僕はこの時、自分の教師がマリナ先生である事に、感謝しました。

外伝八話　ノリス君がんばる：前編（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

外伝九話　ノリス君がんばる：後編（前書き）

外伝九話ＵＰします。

外伝九話　ノリス君がんばる：後編

マリナ先生の言ったとおり、僕は2年足らずで、コモンマジックの勉強を終えることが出来ました。勉強の終了を祝って、家族と屋敷の人達が、簡単なパーティーを開いてくれたのは今でも良い思い出です。

コモンマジックの勉強が終われば次は系統魔法の勉強になります。両親は当然の様に、兄上と同じ家庭教師を付けてくれる予定だった様ですが、僕はここで覚えている限り始めての我侭を言いました。風系統を続けてマリナ先生に教えてもらいたいと、両親にお願いしたのです。マリナ先生の得意系統は風でラインメイジでしたが、知らない教師に教わるよりも、マリナ先生に是非教わりたいと思ったからです。

この話を両親にした所、あっさりと受け入れてもらえました。それどころか、

「我が家の息子達はいい子過ぎて、親に子供が我侭を言うのを叱る喜びを与えてくれないからな」

「そうね、これ位の我侭なら可愛いものね」

と言われる始末です。まあ、希望通りになったので、どうでも良い話なんですけど。

ちなみに、引き続き風系統の家庭教師をお願いしますと、マリナ先生に話したら、驚いた顔をして、

「お話したと思いますが、私の風はライン程度の実力しかありません。ノリス様ならもっと実力のある家庭教師に教わる事が出来るの

では？」

「先生、実力のあるメイジが良い家庭教師になれるとは限りませんよ。それに僕の両親は土と水です。多分、風の才能はあまり無いと思います。僕の方があまり良い生徒では無いと思います。それで良かったら是非、引き続き僕に魔法を教えて下さい」

「はい喜んで、引き受けさせて頂きます」

「こちらこそ、迷惑をかけてしまうかもしれませんが、よろしくお願いします」

こうして、僕の風系統の教師は、マリナ先生に決まりました。ここまでは良かったのですが、僕の我侭には思わぬ落とし穴が待っていました。それは兄上との何気ない会話をしている時に発覚しました。

「父上に聞いたけど、ノリスの風系統の先生はファブリス先生じゃないんだね？」

「はい、兄上。コモンマジックに続いて、マリナ先生に教わる事になりました」

「そうか、マリナ先生も大変だね。多分、ノリスも不得意な風系統で、教師としての実力を問われる事になるんだから」

「！」

「もしかして、気付いていなかったのかい？大丈夫だよ、例えノリスの風系統の魔法が上手くならなくても、父上や母上がマリナ先生を責めたりしないから」

兄上はそう言っていましたが、僕はそれをほとんど聞いていませんでした。一通りの系統魔法の授業を受けて、土と水はトライアングルは行けそう、風と火はラインが精々という、評価を受けてしまうともう猶予はありませんでした。僕に出来るのは、風系統で最初にラインになり、マリナ先生の教師としての実力を証明するしかありませんでした。

そうは言っても、他系統について手を抜く訳には行きませんでした。僕は他系統の3倍は風系統魔法の練習をしましたが、そんな無理は直ぐに、魔力の枯渇という形で終わってしまいました。父上に余り無理をすると廃人になるぞと威され、マリナ先生にまであまり無茶はしないで下さいと悲しそうな顔で諭されるとさすがに無理は出来ませんでした。

少しでも魔力が回復すると魔法の練習を始めてしまう僕を助けてくれたのは、兄上でした。その日も魔力の使いすぎで枯渇寸前まできてしまい、早々にベッドに入った僕を、兄上が部屋を訪れてくれました。

「ノリス、無茶をしているそうだね。やっぱり、マリナ先生の為なのかい？」

「・・・」

心配そうに尋ねてくれた兄上に対して、僕は何も言う言葉が見つかりませんでした。

「ノリス、起きろ！」

らしくもない兄上の怒声に慌てて、ベッドから飛び起きましたが、兄上は笑顔でした。そして僕に、カップに入った飲み物をくれまし

た。僕はそれを恐る恐る飲み干しました。

「兄上、このお茶みたいな飲み物は？」

「魔法のお茶さ。ノリス、約束してくれ。魔力が枯渇するまで魔法を使うのは構わない、けれど、どんなに焦ってもそれ以上魔法を使おうとしない事を。そして魔力が枯渇したら、僕の部屋においで、今の魔法のお茶を飲ませてあげるから。約束できるね？」

「はい、兄上」

「今日はもうおやすみ、明日には魔法が使える様になっているから」

その優しい兄上の声に導かれる様に、僕は夢の世界に入っていきました。

翌日目を覚ますと早速、風魔法の練習を始めましたが、驚いた事に兄上の言うとおり、普通に魔法が使える様になっていました。昨日までの残り僅かな魔力を振り絞って魔法を使うのとは、全く感じが違います。気を良くした僕は、その日、魔力が枯渇するまで、魔法の練習を繰り返しました。もちろん魔力が枯渇したと感じたら兄上との約束通り、そこで呪文を唱えるのは止めました。

そして眠る前に、兄上の部屋に行って、”魔法のお茶”を貰うことにしました。兄上は、昨日の今日で、”魔法のお茶”を貰いに来た僕に苦笑していましたが、なにも言わず、僕に魔法のお茶をくれました。そしてゆっくり眠ると、また魔力が回復していました。”魔法のお茶”とはどんな物なのか気になりますが、当時の僕にとっては、それが魔力を回復してくれるという効果だけが問題だったので、遠慮なく毎晩の様に兄上の部屋に行って、”魔法のお茶”を貰うことになりました。

そんな日々が、1年程続きましたが、目論み通り、最初に風系統でラインスペルを唱えることが出来るようになりました。マリナ先生はその事を自分の事の様に喜んでくれ、知っている限りの風のラインスペルを教えてくれることを約束してくれました。僕も喜んで、風のスペルを覚えて行きました。ですが僕はこの時、努力すればするほど、マリナ先生との別れが早まることを気付いていませんでした。

そして、それから1年後その日がやってきました。

「ノリス様、今日まで私の授業をとても真面目に受けていただいて、感謝いたします。今からお教えする呪文が私の教えられる最後の呪文になります」

「えっ！」

いつも通り、マリナ先生の授業を楽しみのしていた僕は、マリナ先生の言うことが一瞬理解出来ませんでした。ですがしばらくすると、マリナ先生の言っている事が紛れもない事実だということが理解出来てしまいました。その日の授業の内容は、あまり覚えていません。ですが、マリナ先生の、

「来週が私の最後の授業になります。今日お教えした呪文と、今までお教えしてきた呪文の復習をしますので、おさらいをしておいて下さいね」

という言葉だけは、しっかりと耳に残っていました。そうです、今までしっかりとマリナ先生の授業を受けてきたのですから、最後の授業もしっかりこなして、最後の別れも笑顔で見送るのが、マリナ先生対する礼儀ですよね?僕はそれから1週間かけて、今まで習っ

てきた風系統の魔法を全て完璧に唱えられる様に練習をしました。多少、他系統の授業が疎かになってしまいましたが、仕方が無いと思いたいです。そして、問題の翌週、マリナ先生の最後の授業の日になりました。その日の授業は、言われていた通り、これまでの授業の総復習といえる物でした。僕は、マリナ先生指示された呪文をひたすらに唱えていきました。

「はい、結構です。ノリス様、素晴らしい出来です。私がお教え出来るのはここまでですし、畏れながらノリス様が扱える風系統の呪文もこの辺りが限界だと思われます。私がお教えした事で、ノリス様が限界まで、風系統を使える様になった事を、誇りに思います」

「はい、先生の教えは、僕にとって掛け替えのない物でした。今日までご指導していただき、ありがとうございました」

「公爵様にお聞きしましたが、ノリス様は風系統に偏った練習をされてきたそうですね？」

「・・・、はい」

「今日からは、ノリス様が本来得意とされている、土そして水系統の魔法を中心に練習なさるように願いいたします。それが、メイジとしてのノリス様の本来の姿だと思いますから」

「はい。分かりました、先生」

「それでは、私の授業はこれで終わります。さっきはああ言いましたが、偶には風系統の呪文も練習するようにしてください」

「はい。今まで、ありがとうございました。先生、これを受け取っ

て下さい！」

僕は、昨日、兄上に作ってもらった魔法宝石（マジックジュエル）のブレスレットをマリナ先生に渡しました。マリナ先生は思わぬプレゼントに驚いた様子でしたが、黙ってそれを受け取ってくれました。

「それでは、これで失礼します。ノリス様、メイジとしての修行はこれからも続きます。くれぐれもそれをお忘れになりませんように」

そう言って、マリナ先生は、部屋を出て行きました。僕は堪えきれず、マリナ先生を屋敷の玄関まで追いかけましたが、マリナ先生は1度も振り向く事はありませんでした。僕は、マリナ先生の言葉を胸に、自分の部屋に戻ろうとしました。ですが、

「ボソボソ・・・タイプが・・・」

「・・・年上・・・ヒソヒソ」

「ゴニョゴヨニョ・・・初恋・・・」

玄関の柱に隠れるようにして、父上と母上と兄上が、僕の様子を見て、なにやら話しこんでいました。父上が僕に気付いて、

「ノリス、マリナ先生とのお別れは済んだのか？」

と話しかけてきました。

「はい、父上もご一緒すればよかったでしょうに」

「いや、師弟水入らずの所だからな、遠慮しておいたよ、ははは」

「父上、マリナ先生の話を聞いて僕は目が覚めました。これからは、風系統以外の魔法も真剣に勉強しようと思います」

「そ、そうか？そう思ってくれたなら、マリナ先生にお前の教師を任せた甲斐があったというものだな」

「はい、マリナ先生に恥ずかしくない、一流のメイジを目指します」

僕は、これだけ言って、自分の部屋に戻りました。後ろで、また、父母兄で何か話しているのが聞こえましたが、新しい決意を胸に抱いた僕には気になりませんでした。

「ボソボソ・・・気付いて・・・」

「・・・鈍感だ・・・ヒソヒソ」

「ゴニョゴニョ・・・あなたも同・・・」

さて、僕の家族たちは何を言いたかったのでしょうね？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

あ！そうだ、僕が兄上に勝てるものがもう１つありました、それは社交性です。兄上が社交的でないという訳ではありませんが、何故か兄上は貴族との交流に積極的ではありません。例外はラ・ヴァリエール家だけです。

一方、僕は小さい頃から、母上に連れられて色々な貴族と会ってき

たので、社交界ではそこそこ名が売れているんだと思います。もちろん僕も、レーネンベルクの人間なので、平民の方たちとも普通に交流しています。兄上が平民の人々寄りなのに対して、僕は貴族とも平民とも普通に付き合うことが出来ます。この事が僕の将来にどう関わって来るか分かりませんが、少なくとも負の方向には行かないと思っています。

気の早い貴族の方は、既に、僕宛の縁談を申し込んできていたりします。僕もいつか兄上のように、この女性の為なら決闘も辞さないという女性に巡り会えたらいいなと、何となく考えています。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そして、最近の事になりますが、兄上が外遊の旅から帰ってくると、僕に突然こう告げました。

「ノリス、君は、僕達に妹が出来るといったら驚くかい？」

「はい？母上が妊娠されたなどという話は聞いていませんが？」

「いや、そうではないんだ。実は、僕がガリアでお世話になった人がいてね。その人に子供が生まれるんだけど、事情があって育てる事が出来ないという事で、ウチで預かる事になるかもしれないんだ」

「何処の誰かも知れない人の娘を、我が家に迎えるのですか？それに何故生まれる前から女の子ってわかるんですか？」

「その子の家柄は保証するよ、父上も母上も了解していることだし。性別に関しては、分析（アナライズ）でね」

「そうですか、父上と母上が納得されているならば、口出しは無用なのでしょうね。ですが、その子が我が家に相応しいかどうかは、見極めさせてもらいますよ？」

「ノリス、それは違うな。その子は我が家のみんなの手で、この家に相応しい女性に育てるんだよ」

僕には兄上の言いたい事が良く分かりませんでしたが、一応は納得しました。

それから何日かは、何故かもやもやした気持ちで過ごす事になりました。実際に問題の赤ちゃんが、我が家にやって来て、母上がその子を我が子の様に抱いて、幸せそうにしているのを見て、始めて自分の気持ちに気付いてしまいました。でもこんな気持ちを他の誰にも言う事は出来ませんでした。

その子の名前はジョゼットと言いました。ジョゼットとその乳母の娘の元気な鳴き声が、レーネンベルク家に響き渡る様になると、反対に僕は部屋に篭るようになってしまいました。赤ちゃんの泣き声を聞くたびに、自分の中にある醜い感情を思い出してしまうのが、苦痛だったからです。

そんな状態が1週間ほど続いたでしょうか、ある夜、母上が突然、僕の部屋を訪れました。

「ノリス、もう寝る所かしら？」

「いいえ、母上こそ、ジョゼットの世話でお疲れではないんですか？」

「優秀な乳母が2人もいるんだから大丈夫よ。そのジョゼットの事で話しておきたい事があるのだけれど、聞く気はあるかしら?」

あまり聞く気はしませんでしたが、聞かないという選択肢は僕にはありませんでした。

「聞きたいです、是非聞かせてください」

そして、母上から聞かされた話は、僕にとって衝撃的でした。要約すると、ジョゼットはガリアのある伯爵の愛妾の娘で、嫉妬に狂った本妻にその存在を知られれば、命を狙われるかも知れないという話でした。特に、降りしきる雨の中、身重な身体を抱えながら、本妻からの刺客から辛うじて逃げ延び、兄上に偶然助けられたというオデットという女性には、頭が下がる思いです。

「ジョゼットには、これからも不幸が降りかかるかもしれません。だけど、ジョゼットはもうレーネンベルクの娘です。貴方もそう思って、ジョゼットに接してあげて欲しいの、分かったかしら?」

「はい、明日からはジョゼットの兄として、立派に振舞います」

「そう、良かったわ」

そう言って、母上は僕の頬に軽く接吻してくれました。今晩は、思い悩む事も無く、ゆっくり眠れそうです。

翌朝目を覚ますと、僕は朝食もとらずに、ジョゼットの部屋に向かいました。早朝とも言える時間に突然やってきた僕に、乳母のメアリは驚いた様子でしたが、僕がジョゼットの様子を見に来たと告げると、優しく微笑んでジョゼットの所への道を開けてくれました。

ジョゼットは眠っている様でしたが、僕がベッドの横に立つと、気配を感じたのか目をパッチリと開けました。そして、僕の顔を見つけると、何がおかしいのか、不意に笑顔になりました。その笑顔につられる様に、手を伸ばすと、ジョゼットの小さな手が僕の手を握り締めました。

そのジョゼットの様子を見て、僕はジョゼットが自分の妹になったという事を受け入れる事が出来ました。僕は朝食をとることも忘れ、ジョゼットの様子を眺め続けるのでした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

父上と兄上の不毛な争いを見ながら、僕もジョゼットに何かプレゼントをしたいと思うようになりました。さすがにまだ小さいジョゼットに似合うかどうか分からない服をプレゼントする気はないですが、兄上の様に、自分の手で作った物をジョゼットに送るという事は、魅力的です。

僕は、兄上に頼み込んで、魔法宝石（マジックジュエル）のアクセサリーの作り方を教えて貰う事になりました。色々条件を付けられましたが、将来大きくなったジョゼットに、自分で作ったアクセサリを送る事が出来る様になると考えたら、些細な問題に過ぎません。

外伝九話　ノリス君がんばる：後編（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

色々不安な所がある、ノリス君ですが、次男というハンデを跳ね除けて、真っ直ぐ育ってくれるといいですね。

新登場人物一覧（外伝九話まで）（前書き）

話の切れが良いので、登場人物紹介第二弾です。

ここでしか読めない、裏設定もあったりします。

新登場人物一覧（外伝九話まで）

ワーンベル関係

＊　マルセル
ワーンベルの代官補佐。実際には、他の町の代官をしていた人物で、代官としては非常に優秀。
ワーンベルでのラスティンの右腕

＊　セシル
ワーンベルの役人。ワーンベルでのラスティンの左腕。
革命@番外編のヒロイン

＊　オノレ
鍛冶ギルドの元締めだった人。高慢な上に無能、腕力だけが自慢。

魔法兵団関係

＊　シルビー
レーネンベルク魔法学園の卒業生で、魔法兵団の土メイジ。
語尾に～が付く、独特な話し方をする女性。意外にも戦闘経験を積んでいて、メイジとしても優秀。

＊　シモーヌ
シルビーの魔法学園時代からの親友。裏設定では、”影”の一員。

＊　マルコ
魔法兵団の警備隊第１１班の副隊長。シルビーが魔法兵団入りを志

したのは、彼に憧れたため。

＊　ヴァレリー
魔法兵団の副団長の１人。水系統が得意ですが、錬金の腕も確かなので、魔法兵団のワーンベルにいるメイジ達をまとめている。別名：工場長

トリステイン

＊　アンリエッタ
トリステイン王国の王女、名前だけの出演。
彼女とアルビオンのウェールズ王子の恋仲はどうなるんでしょう？

＊　フィリップ４世
トリステイン王国の現国王。アルビオンのジェームズ１世の弟。
生まれが、アルビオンの為、トリステインでは思うとおりに治世を行えていない。

アルビオン

＊　ジェームズ１世
アルビオン国王、フィリップ４世の兄。

＊　ウェールズ
アルビオンの王子、名前だけの出演。

＊　モード大公
ジェームズ１世の弟、元気に生き延びます。

＊　ティファニア
そろそろ、誕生したかもしれない、ハーフエルフで、モード大公と愛妾シャジャルの娘。

＊　シャジャル
エルフの女性、モード大公の愛妾。歴史が変わって良かったですね。

ガリア

＊　ロベスピエール４世
ガリアの現国王。非常に優秀な王で、その迫力はラスティンを圧倒する。

＊　ジョゼフ
ロベスピエール４世の息子で、ガリアの王子。
妻のアナベラに先立たれて、意気消沈していた。

＊　シャルル
ロベスピエール４世の息子で、ガリアの王子。ジョゼフの弟。

＊　アナベラ
故人。ジョゼフの妻。娘イザベラを産んだ際のショックで死亡。

＊　イザベラ
ジョゼフの娘。名前だけの出演。
出来れば、ラスティンの元で、メイジとしての修行をさせてあげたい。

＊　オデット

シャルルの妻。シャルロット&ジョゼットの母親。

＊　シャルロット
シャルルとオデットの娘。名前だけの出演。

＊　ジョゼット
シャルルとオデットの娘。レーネンベルク家の養女になる。

＊　ペルスラン
オデット付きの執事、ジョゼットをレーネンベルク家に託す。

ゲルマニア

＊　アルブレヒト3世
名前だけの出演。実は・・・

＊　マテウス・フォン・クルーク
ゲルマニア伯爵にして、宰相の立場で現在のゲルマニアを実質支配している。

＊　ツェルプストー辺境伯
ゲルマニア辺境伯。ラスティンがゲルマニアを脱出するのを助けてくれた人物。
ラ・ヴァリエール公爵とは犬猿の仲だが、実はある程度の信頼関係がある。

＊　キュルケ
ツェルプストー辺境伯の娘。人見知りします。

ロマリア

＊　聖エイジス３１世
本名をジェリーノ・タルキーニといい、ブリミル教の教皇。転生者の１人。
前世の名前はキース・ガードナーで、宗教学が専門だった。
彼と、ローレンツの出会いを、外伝で書きたいです。

＊　ヴィットーリオ・セレヴァレ
彼が、聖エイジス３２世になるかは??

＊　チェザーレ
名前だけの出演。

レーネンベルク家臣

＊　セブラン
ラスティンの外交の旅の護衛のリーダー。
戦士としては優秀。

＊　グレン
トリステイン王宮に常駐して、王宮とレーネンベルク家の仲立ちをする。
無表情な上に、必要な事しか話さない。

＊　オルガ
ジョゼットの乳母として雇われた女性。
一応メイジです。

＊　テッサ
オルガの娘、ジョゼットの乳兄弟。ジョゼットラブになる予定です。

その他

＊　マリナ先生

ノリスのコモンマジックと風系統魔法の家庭教師。

指導者としては優秀。ちなみに３０代後半の女性。

新登場人物一覧（外伝九話まで）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

次回から、魔法学院編になる訳ですが、久々に、読者さんに挑戦！をやってみたいと思います。

今回は少し趣向を変えて、人名募集です。単に人名を考えていただいても構いませんし。
簡単な経歴を考えて頂いても構いません。問題が無いようならそのまま採用させていただきます。
出来れば子爵，男爵辺りだと話に違和感無く入り込めると思います。

募集人数は４人まで、ありえないと思いますが、応募者多数の場合は、先着順とさせていただきます。
自分の作品の登場人物を使ってくれても構わないという、心の広い著者さんでも構いません。

募集期間は２０１０／１０／２５　２１：００迄とさせていただきます。

マリス宛に、メッセージを送っていただいてもいいですし、感想に書いていただいても結構です。

第三十八話　ラスティン１６歳（魔法学院：入学準備号）（前書き）

第三十八話ＵＰします。

今回から、一応魔法学院編になります。ラスティン君にとっては、雌伏の期間になります。

第三十八話　ラスティン１６歳（魔法学院：入学準備号）

僕も１６歳になり、とうとう魔法学院に入学しなくてはならなくなりました。未だに、魔法学院に入る事に、利点を見出す事が出来ないのですが、どうやら逃げ道は無い様なので、諦めて入学する事にしました。

ただ、入学に当たって、僕がレーネンベルク公爵家の人間であることは、伏せておくことにしました。公爵子という事で、気を使われるのも避けたいですし、ワーンベルの事を知っている人間に痛くも無い腹を探られるのも嫌だった為です。父上は、この考えにあまり賛成ではなかった様ですが、この条件が受け入れられなければ、入学はしないと強硬に主張したおかげで、何とか認めてもらう事が出来ました。

そうなると、偽の経歴が必要になる訳ですが、その辺りは父上が簡単に解決してくれました。（嫌々の様でしたが。やはり父上は息子に甘いですね）

紹介されたのは、マーニュ男爵という家で、祖父の家臣だった方でした。マーニュ男爵家を訪ねてみると、僕の訪問に驚いた様子でしたが、それでも温かく迎えてくれました。事情を話して、マーニュ男爵家の息子としての経歴を借りる事をお願いすると、快く受け入れてくれました。これで、僕はマーニュ男爵家の３男という、偽の経歴を得る事が出来ました。魔法学院では、僕はスティン・ド・マーニュと名乗る事にしました。

マーニュ男爵家には、長男と次男がいる訳なのですが、長男はアルビオンで外交官をやっていて、次男は領内に別に屋敷を構え、そこで妻子と共に住んでいると言う事でした。２人の息子さんには、手紙や使いを出して、口裏を会わせてもらう事になりました。

それからしばらく、マーニュ男爵夫妻と雑談をしたのですが、男爵

はマックスウェル師匠の部下だった事があるそうで、師匠の話で盛り上がる事が出来ました。師匠は昔からああいう人だったそうで、男爵もかなりきつい指導を受けたそうです。亡くなった師匠の事を、楽しく思い出す事が出来たのは、思わぬ幸運でした。

魔法学院入学の手続きは、マーニュ男爵家から、レーネンベルク公爵家に口利きの依頼があり、レーネンベルク公爵家から、入学申し込みを行う形になりました。申し込みが遅れたので、男爵家からの申し込みだと、来年に回されてしまう可能性があったので、こんな形になってしまった様です。

首尾よく偽の経歴で、魔法学院に入学することが出来る事になったので、今度は自分の身の回りの整理を始める事になりました。現在、僕がやっている仕事は、簡単にまとめると、

・ワーンベルの代官
・レーネンベルク魔法兵団の運用
・レーネンベルク魔法学園の経営
・”シフの涙”や”アムリタの雫”の生産
・魔法宝石（マジックジュエル）の生産
・カトレアの治療
・レーネンベルク公立学校の経営
・紡績機と力織機の改良

の８項目になります。一つ一つ対応を考えて行きましょう。

・ワーンベルの代官
これについては、３年間もワーンベルを離れる事になるので、マルセルさんに変わってもらおうと簡単に考えたのですが、当のマルセルさんから、反対を受けてしまいました。通常の町の経営ならば、

問題ありませんが、ワーンベルでは、魔法兵団との折衝が必要になるので、手に余るという事でした。
マルセルさんの主張も、もっともだったので、マルセルさんにはまた代官代行として、ワーンベルの町の発展に力を尽くしてもらう事にしました。代官代行の権限はかなり強化したので、ほとんどの仕事はマルセルさんに任せることが出来ると思います。
どうしても、代官としての裁可が必要な案件については、週に1度程度、報告書と共に学院まで届けてもらう事になりそうです。
ワーンベルの魔法兵団に関しても同様に、工場長で兵団の副団長の1人でもあるヴァレリーさんに、取り仕切ってもらい、報告書を週に1度程度提出してもらう事にしました。

・レーネンベルク魔法兵団の運用
こちらに関しては、魔法兵団長のマティアスさんがうまく取り仕切ってくれているので、心配はありません。名目上の責任者は父上になっているので、僕に話が回ってくる事はほとんどないでしょう。
ただし、魔法兵団員の体制のシフトに関しては要望を出しておきました。錬金隊や施設隊の団員も魔法兵団の名に恥じないように、ある程度の戦闘経験を積ませておきたいと考えたので、各隊での人員の交代を行う様に指示を出しました。
今の時代、何処で戦争や反乱が起こるか分かりません。その時に魔法兵団を名乗っているメイジが、戦い方を知らないでは、話になりませんからね。幾ら原作知識を持っていても、話に残らない反乱や侵攻が無いとはいえないですからね。何より物語（歴史）に介入した事でどんな事が起こるか分かりません。

この点以外は、今まで通りの活動で問題ないと思います。

・レーネンベルク魔法学園の経営
魔法学園に関しては、学園長のクロードさんに任せておいて問題無

いと思います。ただこれまでの様に頻繁に魔法学園に顔を出す事が出来ないので、急な問題が生じた時には、父上に対応してもらえる様に頼んでおきましょう。

・”シフの涙”や”アムリタの雫”の生産

”アムリタの雫”に関しては、材料になる薬草は、それほど特殊では無いので、魔法学院の近場の森などで調達出来ると思います。魔法兵団の水メイジの活躍で、”アムリタの雫”は、供給過剰と言うほどではないにしろ、余り気味なのは確かなので、供給量が減る位が丁度良いのかも知れません。今では平民の方々でも、少し無理をすれば購入できる程度価格に落ち着いているようです。

”シフの涙”の方は、少し問題かもしれません。魔法兵団の団員の魔力はかなり容量が増えた様で、マカカ草入りのハーブティで、大体問題は無いです。ただ、兵団に入ったばかりの団員や、急ぎで大量の錬金を行う時には、”シフの涙”がどうしても必要になってしまいます。

こちらはこまめに、マカカ草をミネスト山から運んで来て、地道に生産するしかない様です。

お金を稼ぐ為に、魔法薬の生産をしている事にでもしておきましょう。

・魔法宝石（マジックジュエル）の生産

これが一番の問題点ですね。僕の様な立場の人間が魔法宝石（マジックジュエル）を大量に持っていたら、犯罪を犯していると思われても仕方がありません。材料になる石に関しては何とでも言い訳出来ますが、魔法宝石（マジックジュエル）を見つけられたら、その場で身分を明かさなくてはならなくなってしまいそうです。これは避けたいことなので、魔法宝石（マジックジュエル）の扱いに関しては、出来る限り慎重を期すことにするしかないです。

弟のノリスが、魔法宝石（マジックジュエル）に興味を持ってくれた様なので、ノリスが魔法宝石（マジックジュエル）を作る腕を上げてくれれば、問題は解決するかもしれません。

・カトレアの治療

月1度のペースで行っているカトレアの治療は、問題になるかと思いました。ですが、僕が魔法学院に通うことを知ったラ・ヴァリエール公爵が、竜籠を手配してくれる事になったので何とかなりそうです。

・レーネンベルク公立学校の経営

これも、大きな問題の1つです。公立学校の試みは、僕個人の思いだけで運営されている様な物で、教育内容も試行錯誤の連続な為、あまり目を離す事が出来ません。仕方が無いので、なるべく頻繁に顔を出すようにしましょう。出資者のローレンツさんにも出張ってもらう様に手紙を書いておきます。

各校長にも問題があれば、直ぐに僕に連絡を入れるように、指示を出しておきましょう。

そろそろ、上級学校の事も準備を始めなくてはならないので、何とかローレンツさんを理事長の様な立場に引っ張り込めないか、真剣に話をして見ないといけません。

・紡績機と力織機の改良

こちらは、ほとんど僕の手を離れた感じがします。とりあえず、織り機に詳しい者と、数人のメイジ、そして陛下の指示でやって来た担当の役人が計画を進めています。アルビオンから人がやってきたりした場合等には、立ち会う必要があると思いますが、それ以外ではあまり役に立たないですからね。（前世でもう少しこういった機械に興味を持っていれば良かったと思います）

考えなくてはいけないのはこれ位でしょうか？明日からは、各方面に出向いて、直接色々指示を出す事にしましょう。出来れば、ローレンツさんと直接会って、公立学校の事を頼みたいのですが、ローレンツさんも忙しい方ですから、入学までの1月では難しいかもしれませんね。一応会いたいと連絡だけはしておく事にしましょう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

翌日から早速、色々な所に顔を出して、僕が居ない間の大まかな方針を説明して、考えられる問題に対する対応策を決めて行きました。そんな事をしていたら、入学までの１ヵ月があっという間に過ぎてしまいました。

身の回りの品をまとめ、後は出発するだけという時に、ひょっこりローレンツさんがワーンベルにやってきました。

「ローレンツさん、わざわざ来てくれたのですか？」

「ラスティン殿もお忙しいと聞いたので、こちらから、お邪魔する事にしました。王都トリスタニアでお会いしても良かったのですが、こちらで捉まえることができてよかったですな。そうそう、トリステイン魔法学院ご入学おめでとうございます」

「あまりめでたくはないんですけどね。ローレンツさんに会いたいといったのは、それに関係しての事なんですよ」

「ほう、私に何かお願いされるのでしょうかな？」

「残念ながら、商売の話ではないのですが。レーネンベルク公立学

校の事なのです。来年には一期生が卒業しますが、彼らのその後の進路や、もっと高等な事を学びたいという学生の為の上級学校の手配などが、ほとんど済んでいないのですよ」

「そうなのですか、それは困りましたな」

「はい、そこでローレンツさんにレーネンベルク公立学校の理事長になっていただきたいのです。あなたなら、顔も広いですし、何より学校の重要性を理解してらっしゃいますからね」

「そうですな、学校は私にとっても夢でしたから、理事長をお受けしても構わないのですが、”公”立学校の理事長が、単なる商人の私で構わないのですかな？」

「公立学校といっても、資金は全て僕とローレンツさんから出ています。父上もこの件に関しては、名前を借りているだけなので、口を出さないでしょう」

「そういうことならば、やらせていただきましょう！ガリアの方も一段落ついた所で、これから暇になるな等と思っていた所なので丁度いい」

あれ？ローレンツさんはしばらく、ガリアで忙しくなるはずだったのですが？そうか、肝心な事を言い忘れていました。

「ローレンツさん、ガリアの事ですが、肝心な事を言い忘れていました」

「な！なんですかな、それは！」

「いえ、ローレンツ商会にはプラスに働くので、心配はしないで下さい」

「それなら、構いませんが、商売では言い忘れた等と言っては、いけない場合もありますから、注意してくだされ。それで何を言い忘れたのですかな？」

「ガリアの王位継承権の決める為の、領地経営競争ですが、来年になれば両王子は別の領地を与えられる事になると、僕は予想しています」

「何ですと！たった1年の時間しか与えられないというのですかな？なぜそんな面倒なことを」

「ロベスピエール4世はこう考えたんだと思います。シャルル王子には、多くの貴族が味方します。一方、ジョゼフ王子には味方がほとんどいません。外国の商人の力を借りなくてはならないほどだと言う事は、ローレンツさんが一番ご存知でしょう？」

「そうですな」

「でもそれでは、両王子の領地経営を行う力を試す事にはなりません。それならば、シャルル王子に付いた貴族達の影響を排除すればいい。そこでロベスピエール4世が援助を禁じても、何らかの方法で貴族からの援助は続くでしょう。ロベスピエール4世にとってもそれをいちいち摘発するわけには行きません」

「ふむ、それではどうするのですかな？」

ローレンツさんは興味深げに、聞いてきました。

「そこでです。ロベスピエール４世は１年毎に、両王子の試験会場とも言うべき領地変えを行うのです。そして、王子が去った後の領地の状況を注意深く観察する事でしょう」

「王子が去った後の領地？」

ローレンツさんは首を捻っています。

「王という立場であれば、１つのことに掛かりっきりになることは出来ないでしょう？問題点を見つけ、それに対しての対策を決め、それを相応しい役人に命じて実行させ、経過を聞き問題があれば修正し、最終的な結果を知る。王の立場であれば、こんな事を数え切れない程こなさなくてはならないでしょう。ほとんどが人任せです。つまりこの競争は、１年の間に、どれだけ領地を繁栄させたかではなく、持続的な成長路線に乗せる事が出来たかを競うものなのです。１年後に王子が治めた領地を直轄地に戻してしまえば、他の貴族の干渉を断ち切る事が出来るでしょうからね。それに、色々な領地を統治させる事で、王としての見識を見ることが出来ます」

「なるほど」

「ちなみに、ジョゼフ王子の治める土地が変われば、新たにその土地の商取引の独占権を得る事が出来るでしょう？」

「ははは、我が商会としては、嬉しい限りですな」

「学校の事も忘れない様に、お願いしますよ」

「そうですな、そろそろ私の息子達にも、本格的な商会の経営を学

ばせなくてはならないですから、少しずつ任せる事にしましょう。いやはや、今日はラスティン殿に会えて良かったですな」

「僕こそ、ローレンツさんの人脈が学校に活かせると聞いて、肩の荷が降りた様な気分です」

こうして、懸案事項の1つが何とか解決したので、明るい気分で魔法学院へ向かう事が出来そうです。

ちなみに、領地経営競争の第一会場は、ジョゼフ王子がガリアの南西、シャルル王子が北東にそれぞれある農村になったそうです。両王子のお手並みを拝見する事にしましょう。ローレンツさんに経過を知らせてもらう様にお願いしたので、今から楽しみです。もし面白い方法を取っているようならば、是非、レーネンベルクでも試してみたいです。

第三十八話　ラスティン１６歳（魔法学院：入学準備号）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第三十九話　ラスティン１６歳（魔法学院：１年目ー偽自己紹介）（前書き）

第三十九話ＵＰします。

第三十九話　ラスティン１６歳（魔法学院：１年目－偽自己紹介）

魔法学院に到着した僕は、色々な手続きを終えて、やっと寮の部屋に落ち着きました。手続きでは、貴族らしく振舞う事やら、学院内では親の爵位には影響されず皆を平等に扱うなどの宣誓をさせられましたが、男爵家の３男の僕に与えられた部屋が、１階の出入口付近だという事で、宣誓が本当に守られるのか不安になりました。

ちなみに、１階に住む学生に、挨拶がてら親の爵位を尋ねてみたら、案の定でした。僕としては、色々荷物を運び込んだりするのに都合がいいので、この部屋は望む所なのですけどね。

入学の式典が行われるまで、数日時間があったので、学院の中を探索したり、学院の周囲を探検したりして過ごしました。森で薬草を見つけることが出来たり、川原で適当な大きさの石を拾える事が分かったのは収穫でした。早速、魔法薬を作ったり、魔法宝石（マジックジュエル）を作ったりしてみましたが、特に問題はない様です。魔法宝石（マジックジュエル）は一見貧相な木製の鞄に見える、実は超々ジュラルミン製の鞄にしまい込み、オリジナルのロック呪文で鍵をかけます。これで誤魔化しきれることを祈りましょう。

退屈な入学の式典を乗り切ると、新入生が集まって、自己紹介が始まりました。さすがに公爵家の子供はいませんでしたが、侯爵家の次男や伯爵家の長女が自己紹介をすると、視線が一斉に集まります。それと、メイジとしての腕も注目を集める要素になるようです。とある子爵家の３男という男子が、自己紹介をすると教室が一斉にざわめきました。１５歳という年齢で、水のスクエアメイジというのは確かに驚きでした。エルネスト・ド・オーネシアですか、覚えておきましょう。（どこかで聞いた事のある気がしましたが、思い出せませんでした）

そして、僕の番になりました。

「スティン・ド・マーニュ、マーニュ男爵家の3男です。年齢は16歳で、得意系統は、水でラインです。皆さんこれから宜しくお願いします。」

僕の顔を見て、女生徒達が少しざわめきましたが、男爵家の3男で、水のラインという事で、大半が興味を失った様です。まあまあの滑り出しといった所でしょうか。そう思って、自己紹介の終わった教室を出ると、女生徒3人のグループに呼び止められました。

「ミスタ・マーニュ、少し時間よろしくって?」

「はい、構いませんよ。何の御用でしょう?」

自己紹介されたはずですが、この3人の名前を全く覚えていません。仕方ないので誤魔化しましょう。

「ミスタ・マーニュは16歳なんのでしょう?普通、学院には15歳で入る物だと思うのだけれど、よろしければ、今年入学なさった理由を教えていただけるかしら?」

「ああ、その事ですか。恥ずかしい話なので、他人に話さないと誓っていただけるならば、お話しますが?」

「ええ、誓いますわ。是非お聞かせ願えませんこと」

うわ、これは当てになりませんね。ですが、変な興味を持たれたままだと動きにくいので、考えておいた言い訳を披露する事にします。

「実は、恥ずかしながら、マーニュの財政は火の車でして、入学資金が都合出来なかったのです。今年は何とか知り合いにお金を借りる事が出来たので、運良く入学出来たという次第なのです。くれぐれも他の方には話さないで下さい」

3人の女生徒は、僕の話を聞くとかなり引いた様です。

「立ち入った事を聞いてしまいましたね。他の生徒には秘密にしておきますから、ご安心くださいませ」

それだけ言って、3人は何処かへ行ってしまいました。よしよし、これで僕が貧乏貴族の3男だという噂が広まる事でしょう。ちなみにマーニュ男爵家は、堅実な領地経営をしているので、それ程裕福という訳ではありませんが、意外とお金を持っているそうです。ただし、生活は質素なので、傍目には貧乏に見えるかも知れません。この辺りは、レーネンベルク家と通じる物があります。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

1日の授業が終わると、僕の嫌いな時間が待っています。それは食事です。学院の料理人の方々の名誉の為に言っておくと、料理はかなり美味しいです。しかし、量が半端ではありません。こんなに作って誰が食べるのだろうと思う程、大量にテーブルの上に用意されます。生徒たちはこれを好きなだけ食べて、満足したら席を立ってしまいます。

特別なパーティの時なら分かりますが、毎日これでは、使われる食材が可哀想です。少しでも無駄になる量を減らそうと頑張って食べますが、直ぐに限界が来てしまいます。僕も諦めて席を立つことになります。

考えてみると、この行動も、貧乏貴族が日頃食べ慣れない豪華な食事を掻き込んでいる様に見えるのかもしれません。

貴族らしくない行動といえば、給仕してくれるメイドや召使い達に、”ありがとう”とお礼を言う事もそうなのかもしれません。他の生徒たちは、彼らの行動を当たり前と感じている様です。

先日、食事中に、空いたカップにお茶を注いでくれたメイドに”ありがとう”とお礼を言ったら、すごく驚かれてしまいました。具体的に言うと、持っていたポットを落としてしまった程の驚き様でした。それだけならば、ちょっとドジッ子のメイドさんで済んだのですが、運悪くポットから零れたお茶がメイドの脚にかかってしまったのです。

「熱っ！」

そのメイドは、堪らず悲鳴に近い声をあげました。僕は慌てて、ニルヴァーナを取り出し、以前もこんな事があったなと思いながら、メイドのスカートから、お茶を吸い出します。ですが、熱いお茶が脚にかかったのですから火傷の心配をしなくてはなりません。女性の脚に触るのはさすがに拙いと思い、誰か女性の水メイジに治療を頼もうとして、顔をあげると周りの生徒達は、今の出来事に何の関心も無い様子でした。もっと性質が悪いのは、食事の時間に騒がしくするなとばかりに、迷惑そうな顔をしている者さえいました。

とても彼女の治療など任せられないと判断した僕は、メイドを抱えるようにして、アルヴィーズの食堂の隅まで連れて行きました。そしてそこに、メイドを座らせると、

「これは単なる治療行為です。不埒な気持ちは持っていないので、安心して下さい」

とだけ、なるべく冷静な声で告げて、メイドのスカートを膝上辺りまでたくし上げました。メイドは、

「きゃ！」

と声を上げましたが、

「若い女性の脚に火傷の痕は似合いませんよ？」

と僕が優しく声をかけると、何とか治療を受けてくれました。水魔法による治療は、簡単に終わりました。

「はい、もういいですよ。ですが、火傷の痕が残るといけません。塗り薬を差し上げますから、後で僕の部屋まで来て下さい。僕はスティン・ド・マーニュ、僕の部屋は、男子寮の入り口を入って直ぐの部屋ですからすぐに分かると思います。それでは待って居ますからね」

それだけ、言うと僕は食堂を出て、寮の自室に戻ってしまいます。これ以上、級友からの奇異な者を見る様な視線は遠慮したいですからね。

部屋に戻ると、火傷に効く魔法薬を調合します。調合が終わっても、例のメイドは部屋を訪ねて来ませんでした。仕方が無いので、メイドの仕事で役立ちそうな、薬を何種類か調合する事にしました。火傷、擦り傷、切り傷、皹（あかぎれ）なんかの薬を用意したのですが、まだメイドさんは訪ねて来ません。今日は忙しくて、手が離せなかったのかな？そう思って、寝る準備を始めた所で、部屋のドアがノックされました。部屋の中に見られてはいけない物が無いのを再度確認して、ドアの鍵を開けました。

ドアの外に居たのは、先程のメイドと、それより少し年上のメイドでした。1人で来る事に不安を覚えた若い方のメイドが、先輩のメイドに付いて来てもらったといった所でしょうか？

「忙しいでしょうに、わざわざ来ていただいてすみません。立ち話もなんですから、部屋にお入り下さい」

「はい、お邪魔します」

部屋の中に入り、ドアを閉めようとしたメイドに、

「ああ、ドアは開けておいて下さい。特に疚しいことをする訳でもないですし、その方がお2人も安心でしょう？」

僕の言葉と態度で、幾分安心したのか。メイド達から緊張感が抜けた気がします。それではお座り下さい、と言いかけて、この部屋には、机の前にある椅子と、寛ぐための1人用のソファーしかない事に気が付きました。僕は慌てて、椅子をソファーの横に並べて、座ることを勧めました。僕は多少だらしないですが、ベッドに腰を下ろします。

「火傷の方はどうですか？まだ痛みますか？」

「いえ、少しひりひりする位で、肌が赤くなった所も大分引いたようです」

「そうですか、それは良かった。ああ、来てもらったのは薬を渡す為でしたね」

僕は出来たばかりの薬を、机の上から持ってきます。

「これが、火傷の塗り薬です。肌の状態が元の状態になるまで毎晩塗って下さい。こっちが、擦り傷や切り傷に効く物で、これは皹(あかぎれ)なんかに効くと思います。メイドのお仕事は大変ですから、使って下さい」

若い方のメイドは、僕の差し出した薬を、何故か恐る恐る受け取りました。何故か少し傷付きますね。

「こんなお高い物を、本当に受け取ってよろしいのでしょうか？」

ああ、値段の事を気にしていたんですね。

「材料は、近くの森などで採れた薬草なんかを使っているので、そんなに高く無いものですよ。今回は、僕が突然声をかけて驚かせてしまった上に、火傷までさせてしまった事に対するお詫びなので、無料で結構です。気に入った様であれば、１つ５０スゥ位で売りますので、注文してください」

「５０スゥですか？」

「あれ？高かったですか？」

「いえ、貴族様が作る魔法薬にしては、安すぎるので」

ふぅ、驚きました。平民の方々と価値観が違うのは分かっているので、かなり安めにしたつもりだったのが、逆に安くなりすぎでしたか。

「ああ、そう言う意味でしたか。これからはメイドの皆さんにもお

世話になるので、その為に安めにしておきました。替わりにと言ってはなんですが、僕が困った時には手助けをしてもらえると助かるのですが？」

「はい、お任せ下さい」

そう言って、若い方のメイドは軽く微笑んでくれました。

「ああ、肝心なことを聞いていませんでしたね。良かったら名前を教えてもらえませんか？」

「はい、私はコラリーと申します、ミスタ・マーニュ。そして、こちらが私達メイドを取りまとめている」

「エンマと申します。そして、最初に謝罪させていただきます」

「はぁ？」

思わぬ台詞を聞いて我ながら、間の抜けた声を出してしまいました。ですがエンマさんは、固い表情を崩さず、話を続けます。

「最初にコラリーが、青い顔をして私の所にやってきた時には、コラリーが何か不始末をして、貴族の方に叱られたのかと思いました。ですが詳しく話を聞くと、不始末をしたのは事実でしたが、その後の展開は少し信じられない物でした。コラリーの服から汚れを落として乾かし、その上に火傷の治療までしてもらったというではないですか。少し出来すぎだと思っていたら、後で薬を取りに部屋まで来るように言われたと聞いてピンときました」

そこで、エンマさんは少し僕の方に目を向けて、話を続けました。

「ご覧の通り、コラリーは同性の私から見ても、若くて健康で可愛らしい娘です。その貴族の方は、コラリーの身体目当てで優しくしたのだろうと、推測するのは簡単な事でした」

こんな事を言われても、僕は特に気にしませんでした。コラリーさんは、確かに可愛い外見をしていますし、治療の為とはいえ、脚をさらけださせてしまった事も事実なのですから。

「私がコラリーに同行してここにやって参りましたのは、生娘のコラリーにそんな事をさせるのは忍びないのでせめて私の身体で我慢していただける様にお願いする為でした。もう歳で、満足いただけないかもしれないですが」

この話を聞いたとき、僕は不意にある女性の事を思い出してしまいました。あの女性は、今何処で何をしているんでしょうね？そんな事を考えている間にも、エンマさんの話は続きます。

「ですが、この部屋に来て見て、自分の考えがいかに浅はかな物だったか、思い知らされました。ミスタ・マーニュは、私達をまるで淑女の様に扱って下さいました。その上、高価な魔法薬を分けて下さいました。私の浅はかな考えをお許し下さい」

エンマさんはそう言って、僕に深々と頭を下げました。

「コラリーさん、エンマさんの様な方の下で働けて幸せですね」

「はい！」

「エンマさん、頭を上げて下さい。そして、ありがとうと言わせて

下さい。エンマさんの言動に感動しました。エンマさんの下であれば、学院のメイドの皆さんも安心して仕事をすることが出来るというものです」

「いいえ、ミスタ・マーニュから〝ありがとう〟などと言っていただく程のことは」

「エンマさんも十分お綺麗ですよ、そうですね、僕が１０歳も年上だったらほうっておかないでしょうね」

「ああ！エンマさんが赤くなった」

コラリーさんがすかさず、茶々を入れます。

「ミスタ・マーニュも口がお上手なのですね。コラリーも年上を茶化すものではありませんよ」

先程まで暗かった、エンマさんも明るい表情になってくれました。多分先程のエンマさんの話は、実体験に基づいた物なのでしょう。辛い事を思い出させたのを少しでも忘れてくれると良いのですが。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ちなみに、翌日の授業後にとある男子生徒が、

「ミスタ・マーニュ、昨日のメイドの火傷の具合はどうだった？」

と聞いてきました。どうやら、コラリーさんの事が心配だった様ですが、あの場では話しかける事が出来なかった様です。

「大事ありませんでしたよ。魔法薬も渡しておきましたから、火傷の痕も残らないでしょう」

「そうか、良かったね」

どうやら、本気で心配してくれていた様子です。彼の言葉を聞いて少し安心しました。クラスの生徒が全員、気に入らないという事態だけは避ける事が出来そうですから、そんな状態で3年間過ごすのは遠慮したいですからね。あ！彼の名前は何なのでしょう？そろそろ本気でクラスの生徒の名前位は覚えた方が良いかもしれません。

第三十九話　ラスティン１６歳（魔法学院：１年目－偽自己紹介）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１０／２３
領－＜寮に修正
ほかって－＜ほうってに修正
２０１０／１１／３
テープル－＜テーブルに修正

２０１０／１２／１０
ルビ修正

第四十話　ラスティン１６歳（魔法学院：１年目一決闘騒ぎ）（前書き）

第四十話ＵＰします。

第四十話　ラスティン16歳（魔法学院：1年目－決闘騒ぎ）

こんにちは、スティン・ド・マーニュです。この名前を名乗るのにも最近やっと慣れて来ました。さて僕が今何処に居るかですが、

「ミスタ・マーニュ、昨日の決闘騒ぎじゃが、詳しい話を聞かせてもらえぬかの？」

「学院長、詳しい事は相手の名誉にも関わりますので、話す事は出来ません。ただ、我がマーニュ家の誇りと、ある女性の名誉を守る為に行われた物だったということはお知らせしておきます」

この会話で分かる通り、禁じられている決闘？を行って、学院長室に呼び出されている訳です。切欠は些細な事でした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

コラリーさんにあげた魔法薬が学院の使用人の中で噂になり、注文がかなり来たのですが、材料になる薬草が直ぐに切れてしまい。仕方が無いので、材料となる薬草を採って来てくれれば、魔法薬の値段を割り引きをするという話を、コラリーさんを通じて広めてもらったら、薬草が大量に集まりました。こっそり、”シフの涙”や”アムリタの雫”の原料になる薬草も集めて来てもらったので、かなり助かりました。

感謝の気持ちを込めて、魔法薬を転売しても良いという条件で売り出したら、使用人だけではなく、一部の生徒まで買いに来たのです。ここまでは別に問題無かったのですが、生徒の間にまで噂になったのは失敗でした。

ある日、授業の間に1人の男子生徒が、僕に近づいてくると、僕に説教を始めたのです。内容は長ったらしい上に、意味不明な自画自賛の言葉ばかりなので省略しますが、短く言うと、僕が使用人たちや貧乏な生徒達相手に、商売をしているのが気に入らないという事でした。

「この学院の規則に、使用人や生徒相手に商売してはいけないという規則は無かったはずですが？」

「何を言う、ミスタ・マーニュ！魔法は本来、僕の様な高貴な物が使う特別な力なのだよ！君の実家の様に貧乏な名前だけの貴族には相応しくない力だ！それに、メイドの身体を使って誘惑でもされたのだろう、高貴な力を安売りするようなまねを僕は許すわけには行かないんだ」

「君の家では貴族の誇りとは、お金に不自由している家を蔑んだり、女性を辱めたりすることを言うのかな？」

「何！貴様、我がゴドー伯爵家を馬鹿にするのか！」

お！名前がでた、この生徒はゴドーというのですね。実は未だにほとんどの生徒の顔と名前が一致していないのです。僕に文句を言う位なら問題ありませんが、コラリーさんを侮辱したり、マーニュ家を貶めたりする人間を放置する訳には行かないですからね。

「済まない、ミスタ・ゴドー。僕は決してゴドー家を侮辱するつもりは無かったんだ。ただ、君の様な品性下劣な人間が、どうしたら生まれるのか知りたかっただけなんだよ」

「き、貴様！よし、決闘だ、お前に決闘を申し込むぞ！」

「”お前”ですか、さすがに品性下劣な”ミスタ・ゴドー”らしい台詞ですね。それに決闘は規則で禁じられているはずです」

「ふざけるな！決闘くらい父上に頼めば、簡単にもみ消してくれる！」

「こんな時に父親頼みですか？見苦しいですね。それに決闘に応じたとしても、僕が勝ったら”ミスタ・ゴドー”は父親に言いつけるつもりなのでしょう？そんな不利な決闘には応じる訳には行きませんね」

「き、き、き、きさま～」

ミスタ・ゴドーはそれだけ言うと、杖を構えて、呪文を唱え始めました。この近距離でのん気に呪文の詠唱をするというのはどういうつもりなんでしょうね？僕はミスタ・ゴドーの手に、少し力を込めて手刀を落とします。すると簡単にミスタ・ゴドーは杖を落としてしまいました。僕はすかさず、杖を踏みつけます。

「不意打ちとは、さすがに品性下劣な”ミスタ・ゴドー”ですね」

ミスタ・ゴドーは唸り声を上げて、僕に体当たりを仕掛けてきました。咄嗟に避けてしまったので、ミスタ・ゴドーは何とか杖を拾い上げます。そして学習したのか、僕から距離をとって、改めて呪文の詠唱を始めます。この呪文は火炎球（ファイヤーボール）の様です。教室の中でこんな呪文なんて、本気なんでしょうか？

「みんな逃げろ！」

それだけ言って、僕もニルヴァーナを構えて、呪文を唱え始めます。僕まで逃げ出したら、誰かを巻き込んでしまいますからね。僕が唱えるのは、パラライズの呪文です。コモンマジックは詠唱に時間がかからないのが利点です。ルーンを唱える系統魔法では、早口でルーンを唱えると魔法がうまく発動しないこともあるので、はっきり言ってこういう場面では不向きなのです。

「パラライズ」

明らかにかなり後から詠唱を始めた僕の呪文の方が、先に発動しました。子供の頃、訓練した早口の練習は伊達ではありませんからね。ミスタ・ゴドーは身体の（もちろん口も）自由を失って、そのまま後ろに倒れこんでしまいました。

僕は、動けないミスタ・ゴドーに近づき、杖を取り上げて、それを両手で折ってしまいました。さて、どうやってミスタ・ゴドーに自分の言動について思い知らせてやりましょうか？と考えた時に運悪く、生徒の誰かが呼んだのでしょう、１人の教師がやって来てしまいました。

あっけない終わり方ですが、これが決闘騒ぎの結末でした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

思い返して見ると、決闘決闘と騒いでいたのは、ミスタ・ゴドーだけで、彼が僕の言葉に勝手に逆上して、一方的に攻撃を仕掛けてきただけでしたね。僕はそれを穏当な方法で止めただけです。言ってみれば被害者と言ってもいいかもしれません。

「学院長、そもそも決闘騒ぎと仰いますが、あれを決闘等と呼ぶの

は憚られますが？あれは、ミスタ・ゴドーが決闘、決闘と主張しただけの物で、実際にはミスタ・ゴドーが貴族として相応しくない言葉遣いをしたのを、僕がとがめて、それに逆上したミスタ・ゴドーが教室内で無差別に魔法を使おうとした、というのが現実です」

「ミスタ・ゴドーは決闘だったと主張しているがのう」

「それは、本気で仰っているのでしょうか？あの時には教室には沢山の生徒がいました。彼らは、ミスタ・ゴドーと同じ証言をしたのでしょうか？」

「いや、君が決闘を断った事は、皆が証言しておる。ミスタ・ゴドーが教室内で、火炎球（ファイヤーボール）を唱えたのも事実の様じゃな」

「ミスタ・ゴドーには、どの様な処分が下されるのですか？まさか無罪放免という訳ではないでしょうね？」

「それなんじゃがのう」

僕は学院長の言葉を遮って、

「もしも、現場にいた生徒の1人が、両親にこんな手紙を書いたとします。〝拝啓、お父様、お母様、先日教室で、火炎球（ファイヤーボール）の呪文が使われそうになるという事件がありました。このような状態では、この学校では落ち着いて魔法を学ぶ事は出来ません。できれば、他の学校に転校したいのですが、お許しいただけないでしょうか？〟等とかですね。こんな事を聞いたら、両親は学院に対して、どんな行動をとるでしょうか？」

と早口に訴えかけます。学院長は苦虫を噛み潰した様な表情になり

ました。

「良かろう、ミスタ・ゴドーの件は厳正に対処しよう。ミスタ・マーニュ、君に対する処分じゃが」

「お待ち下さい、学院長！僕は、錯乱したミスタ・ゴドーを取り押さえただけなのですよ？褒められる事はあっても、罰を受ける様な事はやっていません」

「じゃがな、君が必要以上にミスタ・ゴドーを挑発したという事は、他の生徒も証言しておる」

「それは、先程も言いましたが、ミスタ・ゴドーが貴族として相応しくない言葉遣いをしたのを、とがめたまでです。我が家の誇りと女性の名誉を汚した、ミスタ・ゴドーこそ責められるべきでしょう」

「君も貴族ならば、相手を刺激しない様に言葉を選ぶべきじゃったな。これに対して罰を与える事にする。そうじゃな、自室で謹慎１週間という所でどうかな？」

なるほど、それでゴドー伯爵と手を打つという事なのでしょう。僕の謹慎くらいで、伯爵が納得するとは思えませんが、”オールド・オスマン”の手並みを拝見するとしましょう。それにしても、僕がもし公爵家の嫡子だったとしたら、どんな事になっていたんでしょうね？もしかすると、父上はこういう事態を想定して、僕にレーネンベルク家の人間として入学することを勧めたのかもしれません。

「分かりました、僕の言葉も行き過ぎだった事は認めます。必要最低限の外出は認めていただけるのでしょうか？」

「それは、もちろんじゃ」

「それなら結構です。明日から1週間自室で謹慎いたします」

「ふむ、そうしてもらおうかの。それにしても君達親子には、苦労させられるものじゃな」

学院長の何気ない言葉を、一瞬聞き流しそうになりましたが、

「学院長、マーニュ家は恥ずかしながら歴史が浅く。僕の父は、この学院に入学さえしていませんが?」

と言い返す事が出来たのは、こういう事態を想定して、脳内シミュレーションしておいたおかげです。どうやら”オールド・オスマン”の名前は伊達では無い様です。

「そうじゃったかのう?君の顔立ちと髪の色は、かなり前に卒業した生徒の事を思い出させるのじゃがな」

「そんな生徒が居たのですか?僕の親戚か何かでしょうか?」

僕は、表情も口調も変えずに問い返しました。ガリアのロベスピエール4世との対面以降、その気になれば表情も口調もある程度制御出来る様に訓練した甲斐がありましたね。それにしても、書類などを工作しても、人の記憶までは操作出来ないのは仕方がありません。僕は今のままの立場を貫くだけです。

「いや、彼は公爵家の跡取りじゃったからな。他人の空似じゃろうな」

どうやら学院長も、僕の芝居に付き合ってくれるようです。そういうことであれば、父上の学生時代について、少し聞くことにしましょう。

「その方はどんな生徒だったのですか？」

「そうじゃの、公爵の嫡男らしくもあり、またらしくもなかったかのう。彼が学院に来て最初に起した事件は、学院に働く平民達の処遇改善じゃったな。それを公爵家の名前を出して要求した様な所は子供の様じゃったが、最終的には高い金を払っているのだから使用人にもそれなりの待遇を約束するということで押し切られてしまってのぅ。今でもそのおかげで、学院の使用人の応募倍率はかなりのものじゃ」

学院長は、懐かしそうに当時のことを話し続けています。

「彼が残した伝統といえば、君は学院の食堂の食事をどう思うかね？」

「はい、大変美味しいと思いますが、量が多すぎるかと」

「そうじゃな、じゃがその食べ残しが、どう処理されているか知っておるかの？」

「まさか？」

「そう、君達貴族の子弟は食べ方が上品じゃからの、食べ残しといっても十分に食用に耐える。使用人たちはそれを自由に持って帰ってよいことになっておる」

これを聞いて今日の夕食から暴食は止めようと決心しました。

「そういえば、彼ほど決闘騒ぎを起した生徒は居なかったのう。下級貴族や平民の使用人たちが虐められたと聞くと、相手が上級生だったとしても決闘を挑み、それに全て勝ったというのは、今でも語り草になっておる」

へぇ、父上もやんちゃな時があったんですね。この他にも幾つか父上の偉業?を聞いた後、僕は学院長室を後にしたのでした。

面白い話を聞くことが出来て、気分を良くした僕でしたが、明日からの謹慎のことを考えると、このまま授業に戻る気が起きませんでした。そこで少し中庭に出て気分転換をする事にしました。それはほんの些細な思い付きだったのですが、そこには僕の一生を左右するような事が待っていました。

第四十話　ラスティン１６歳（魔法学院：１年目一決闘騒ぎ）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第四十一話　ラスティン１６歳（魔法学院：１年目ー運命の出会い、ただし相手

第四十一話ＵＰします。

第四十一話　ラスティン16歳（魔法学院：1年目ー運命の出会い、ただし相手

そう、それはほんの些細な気まぐれでした。明日からの謹慎のことを考えれば、真面目に授業を受ける気にならなかったのと、外の空気を思いっきり吸っておきたかったというのが実際のところかもしれません。
授業中ということもあり、誰も居ない中庭を散歩するのは、気分が良い物でした。

「♪～」

そんな僕の耳に何処からか微かに口笛の音が届きました。誰だろうと思って、口笛のするほうへ向かうとその口笛が奏でる曲が、何なのかはっきりしてきました。この曲は！そう思った僕は、慌てて口笛を吹く人物の下へと急ぎました。

「ミスタ・オーネシア！」

そこには、ミスタ・オーネシアが、突然現れた僕に驚いていました。

「君は、ミスタ・マーニュじゃないか。そんなに慌ててどうしたんだい？」

「今、口笛を吹いていたのは君かい？」

「ああ、そうだけど、それが？君こそ、授業中にこんな所でどうしたんだい？」

「それは、君だって同じ事だろう？」

「僕？僕は特別だからね」

そう言うと、ミスタ・オーネシアがまたあの曲を口笛で吹き始めました。その様子は何処か憂鬱さを感じます。ミスタ・オーネシアの言うとおり、彼は学院で特別な存在と言っていいでしょう。あまり人の事は言えませんが、1年でスクエアメイジとなると学院側としても扱いに困る様です。

教師のほとんどがトライアングルなのですから、スクエアメイジに魔法を教える事に躊躇してしまうのも仕方が無いのかもしれません。自然と、ミスタ・オーネシアは授業に参加しない事が多くなります。彼は何の為に学院にきているのでしょうね？

いえ、今はそれより確かめなくてはいけない事がありました。僕は、ミスタ・オーネシアの隣に立って、対抗する様に、口笛を吹き始めます。

ミスタ・オーネシアは僕の口笛を聞くと、驚いて立ち上がりました。これで決まりの様です。

「ミスタ・マーニュ！今のは”ホントノキモチ”なのか？そうすると君も僕と同じ」

「そうだよ、僕達は自分たちのことを転生者と呼んでいる」

「そうか、僕と同じ境遇の人間が他にも居たんだね」

ここまで話した所で、ちょうど授業が終わった様で、中庭にも生徒が出てきたのが分かりました。

「話の続きは、僕の部屋でしよう。寮の入り口を入って直ぐの部屋だから直ぐに分かると思うよ」

「ああ、夕食が終わったら早速行かせてもらうよ」

それだけ、話をしてミスタ・オーネシアと別れる事にしました。僕はそれから、謹慎の期間を有意義に過ごす為に、川原まで行って石を拾って来ました。足りなくなったら、仲良くなった使用人の人に頼んで、拾ってきてもらう事にします。夕食を終えて、部屋に戻って来ると、部屋の前でミスタ・オーネシアが待っていました。

「待たせちゃったかな？」

「いいや、そんなことはないよ」

「そういえば、ミスタ・オーネシアを食堂で見かけた記憶がないんだけど」

「ああ、我侭を言って、料理を自室に運んでもらっているからね」

何やら事情がありそうですが、今はそんな事を話す場ではないので、早速本題に入る事にしました。先ず情報交換という事で、お互いの前世の経歴について話すことになりました。

ミスタ・オーネシアの話では、彼は下村清春という男性で、病院で研修医として働いていて、ある手術を行っている最中に目の前が真っ暗になり、そのまま記憶が途切れてしまったという事でした。彼の見解では、手術に使用した特殊なガスによる中毒ではないかという事でしたが、自分の死因などより、今が大事だという考えは同意できるものでした。

その晩の話はそれで終わってしまいましたが、それから毎晩の様にミスタ・オーネシアは僕の部屋を訪ねてきてくれました。昼は魔法（マジック）宝石（ジュエル）や魔法薬の作成、夜はミスタ・オーネシアとの話し合いで、謹

慎中に不謹慎かもしれませんが、意外と有意義な1週間でした。ミスタ・オーネシア（いえ、今ではエルネストと呼ぶ事が多いのでエルネストと呼びましょう）から聞いた話をまとめると、以下の様になります。

・前世の名前は下村清春で、病院の研修医。専門は外科だが、僻地医療に興味が
あったらしく、様々な医療知識を持っている。
・医学部時代にゼロの使い魔にはまる。アニメも人目を気にしながら鑑賞した。
・5歳の頃、前世の記憶を思い出す過程で、半年ほど生死の境を彷徨った。
・魔法を習い始めると、水系統が得意だという事が分かり、熱心に勉強をした。
・貴族、平民に関わらず、魔法による治療を毎日の様に続けていたら、気付かない
内にスクエアメイジになっていた。
・スクエアメイジになり、名前が売れてくる様になると、両親がエルネストの力を使って、
影響力を高めようと画策し始めた。
・そんな両親の行動を嫌って最近では、魔法による治療を行っていない。
・それでも治療の話を持ってくる両親に飽き飽きして逃げるように、魔法学院にやってきた。

両親の話辺りは、かなり話しにくそうでしたが、僕にかなり気を許してくれたのか、なんとか聞き出す事ができました。
当然、エルネストに僕の事を話した訳ですが、スティン・ド・マーニュとしての経歴に、実際の両親の事を混ぜて話すことにしました。
僕の直感では、エルネストの事は信頼出来ると思うのですが、もう

少し彼の人柄を知ってから、事実を話したいと思います。出来れば、彼にあの娘の病気について意見を聞きたいですからね。

ちなみに、エルネストの二つ名が＜癒し手＞だということを聞いて、彼の名前を何処で聞いたか思い出しました。母上が、最近腕を上げてきた治療魔法が得意な水メイジがいるという噂をしていたのですが、それがエルネストのことでした。

母上で思い出しました、エルネストと雑談をしていたら、何故か尊敬する人物という話題になり、彼は、

「僕が尊敬しているのは、＜快癒＞のリリア・ド・レーネンベルク様かな」

と言い出したのです。突然母上の名前が出たのに驚いてそれを隠そうとした僕の表情を見て、彼は怪訝そうな顔になり、

「まあ、スクエアの僕がトライアングルのリリア様を尊敬すると言うのも変かもしれないね。だけど医術というものは、腕だけではないんだよ。何というかな？医師、いやメイジが持っている雰囲気の様な物で、患者の受ける治療の効果はかなり変わって来るんだ。その点に関しては、僕はあの方の足元にも及ばないかも知れないんだ」

と熱心に語ってくれました。機会があれば、母上と会わせてあげる事にしましょう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そして、謹慎の1週間も最後の晩になりました。今晩もエルネストが部屋にやって来て、今日の授業の事などを話してくれました。僕

は、エルネストにある提案をしてみる事を計画していました。

「エルネスト、君は最近魔法による治療を行っていないんだね。もしかして、病気や怪我で困っている人を助けるのが嫌になってしまったのかい？」

「そんな事はない、だけど、エルネスト・ド・オーネシアという名前を出せば、両親の思う通りになってしまうと言うのが納得できないんだ」

「そうか、ところで君はレーネンベルク魔法兵団を知っているか？」

「この国でその名前を知らない人は少数だと思うけど、それが？」

「魔法兵団の水メイジたちが、町や村を巡回して治療行為を行っている事は？」

「ああ、何度か手を貸してもらった事があるから、知っているよ。さすがは、リリア様の夫レーネンベルク公爵と言ったところだね」

話が脱線しそうな気配なので、強引にこちらの話を進めます。

「その魔法兵団の水メイジとして、町に出て治療行為をしてみないか？オーネシアの名前が出なければいいんだろう？」

エルネストは僕の提案に驚いた様子でしたが、少し考え込んでしまいました。

「平民メイジとして、治療行為をするのが嫌なら仕方がないけど？」

「いや、そんなことは気にしない。だけど勝手に魔法兵団を名乗って治療行為をするのはまずいんじゃないかな？僕達の様な子供が、魔法兵団の人間だと言っても信じられないとも思うし」

「そう言うと思った、実はこんな物があるんだ」

そう言って、僕は机の引き出しから、小さな銀のバッジを取り出し、エルネストに渡します。

「これは？」

「レーネンベルク魔法兵団のバッジだよ。これを僕にくれた人によると、”盾と山羊”はレーネンベルク公爵家の紋章らしいんだけど、それを意匠化して魔法兵団のシンボルにしたそうだよ。これを持っていれば、魔法兵団である事を疑う人はいないんじゃないかな？後、年齢に関しては、僕達の歳なら、魔法兵団で働いている人はいるみたいだよ。現にバッジをくれた人は、ちょうど僕達位の年齢だったからね」

「なるほど、そうなのか」

そう言って、エルネストは繁繁とバッジを観察します。実はこのバッジ、現時点では立派な偽物なのです。理由は単純で、魔法兵団として身分を証明する必要が無かったからです。魔法兵団の活動は基本的に無報酬が原則です。団員の給金はレーネンベルク家が出しているので、金銭でのお礼などは受け取る事を禁止してさえいます。

（食事をご馳走になるとか、出来た野菜をお礼として受け取る程度は黙認していますが）

魔法兵団が無名だった頃はその名前を騙る意味が無く、有名になった現在では報酬を受け取らない事も知れ渡っているので、これまた

騙る事が出来ないという訳です。ですがバッジを作って思ったのは、レーネンベルク魔法兵団の名声を貶める為に、何らかの活動が行われるかも知れないと考え、正式に採用する事にしました。偽造される心配はありますが、一応公爵家の紋章が元になっている物です。関係者以外が持っていれば罪を問うことさえ可能なので、それ程心配はしていません。そんな事を考えているうちに、エルネストは心を決めた様です。

「スティン、君の提案に乗らせてもらうよ。レーネンベルク魔法兵団を騙るのは心苦しいけど」

「魔法兵団の邪魔をしたと言うならともかく、人助けをして、レーネンベルク公爵がお怒りになると思うかい？」

「そうだね、そんな事は無いと思う」

エルネストも何とか納得してくれた様です。まあ、実際の所、赤の他人が魔法兵団の名前を騙って、無償で治療活動を行ったとしても、父上なら怒るどころか気に入ってくれると思うんですけどね。

「あ！そうだ、君がその気になったのなら、僕も協力させてもらうよ。ラインクラスの腕で何処まで役に立てるか分からないけど、魔法薬については自信があるんだ」

「そうか！それは心強いな」

こうして、僕達は次の虚無の曜日から、学院の近隣の町や村を回って、治療行為をする事になりました。

平民に対して、無償で治癒魔法を使う事を厭わない時点で、エルネストの人格面では問題は無いと言えますが、水のスクエアメイジと

して、そして前世が医者としての彼の腕を見せてもらう事にしましょう。

＞ｉ１８９８０－２０９０＜

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

次の虚無の曜日になり、エルネストの水のスクエアメイジとしての手腕を見せてもらう機会がきました。始めて目にする、水のスクエアメイジの手際でしたが、目を見張る物でした。簡単な問診をしただけで的確な処理をしていく様は、母上が治療を行っている様子を思い起こさせます。幸いにも重度の病人や重症の怪我人は居なかったですが、エルネストの水メイジとしての腕を確認するには十分でした。

水系統ではライン（実際にはトライアングルですが）の僕には、ほとんど出番がありませんでした。出番といえば痛がる患者さんを笑顔でなだめたり、不安そうな病人を励ます為に自信がありそうな振りをするのが僕の役目でした。エルネストは治療の最中は、集中しているのかほとんど表情が無くなるので、患者さんが不安になったりするので、自然とこの配役になってしまいました。彼が、母上に憧れを持つという経緯が何となく分かった気がしました。

その村での治療を終え学院の戻る時に、

「今日は久々に治療が出来て、充実した1日だったよ。スティンには感謝しなくちゃいけないな」

とエルネストが少し照れながら話しかけてきたのにはビックリしました。

「いや、余り役には立った気がしないんだけど」

と、半ば本気で返事をしたら、（実際、魔法薬の出番も無かったですし、僕は1度も呪文を唱えなかったのも事実です）

「いいや、君が居てくれなかったら、あそこまで効率的に治療は進まなかったさ」

とエルネストが反論してきました。

「そうだな、君には笑顔の似合う看護婦さんが必要だろうね」

「看護婦さんか～」

「そんな声を出すなよ、いい看護婦さんが見つかるまで僕が助手をしてやるから」

こんな会話を交わしながら、学院への道をゆっくり進む僕達なのでした。

第四十一話　ラスティン１６歳（魔法学院：1年目ー運命の出会い、ただし相手

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

やっと、エルネストを出す事が出来ました。彼はラスティンの親友として、義理の〇〇〇〇として、そして同志として欠かす事の出来ない存在となる予定です。

２０１０／１０／２７
自分たちにことを一＜自分たちのことを
に修正

２０１１／２／２４
あれを追加

第四十二話　ラスティン１６歳（魔法学院：１年目－カトレアの病　再戦）（前編）

第四十二話ＵＰします。

第四十二話　ラスティン１６歳（魔法学院：1年目ー カトレアの病　再戦）

今年度も残すところ数ヶ月になってしまった今日、やっとエルネストにカトレアの病気を診てもらう為に、彼をラ・ヴァリエール家に連れて行く事になりました。

実を言うと、エルネストに今日の事を詳しくは話していません。ただ知り合いの妹が原因不明の病気で苦しんでいるという事を話しただけだったりします。更に言えば、僕の本当の素性についてもまだ話していなかったりもします。本当であれば、夏季休暇にエルネストをレーネンベルク家に招待する予定だったのですが、夏季休暇に合わせる様に、ガリアの王子妃のオデット様が、ラ・ヴァリエール家にを訪れたので、予定が完全に狂ってしまいました。

僕は予てからの予定通り、家族全員を連れてオデット様に挨拶に行きました。元気なジョゼットの様子を見て、オデット様は一応安心された様でした。だけど、ジョゼットが育てられている環境を見たいと言い出して、レーネンベルク家にまで足を運んだのは、少し問題だった気がします。いくら身分を隠しているからといって、王族のオデット様を粗略に扱う訳にもいかず、レーネンベルク家としても対応に困ったというのが現実です。（しかし、弟のノリスのオデット様に対する態度が妙だったのも少し気になるところです）

そんな騒ぎがあったので、エルネストをレーネンベルクに招待して、自分の素性を打ち明けるという案は流れてしまいました。その後も色々な事があって、結局、今日まで自分の素性を明かす事が出来ませんでした。ここまできたら、一度に打ち明けてエルネストを驚かせやろうといういたずら心が働いたのも事実だったりします。

さて、今の状況ですが、エルネストを知り合いの妹に会う為と説得して、朝早くから寮を抜け出し、先ずは馬でトリスタニアに向かい、そこでいつも通り竜籠に乗り換え、ラ・ヴァリエール公爵領まで飛んでいる最中だったりします。竜籠に乗り換える事を告げた時にエルネストはかなり驚いた様子でしたが、何かを悟ったらしく黙って、竜籠に乗ってくれたのには助かりました。

竜籠で思い出しましたが、エルネストにカトレアの症状を診てもらうという話を、ラ・ヴァリエール公爵にしたら、物凄く反応が悪かった事が気にかかります。もしかすると、エルネストの父親のオーネシア子爵と何か揉め事があったのかも知れません。

公爵はカトレアの治療の為ならば、多少の無茶（多少で済めばいい方かもしれません）は喜んで受け入れる程の親バカぶりなので、オーネシア子爵がかなり無茶な要求をしたのかも知れません。最終的には、僕が今回の事に関して、オーネシア子爵の子供ではなく、エルネストという僕の信頼できる友人という立場で治療にあたるという事で、何とか同意を得る事が出来たという次第だったのです。

＝＝

ラ・ヴァリエール家の屋敷に到着しても、エルネストは何も聞いて来ませんでした。彼には門を通っただけでここが誰の屋敷か分かったはずなんですけど。いつもは直接カトレアの部屋に向かうのですが、今日はエルネストを紹介する為に、先ずラ・ヴァリエール公爵に面会を求めました。

「一月ぶりに失礼します、ラ・ヴァリエール公爵」

「ああ、いつも娘の為にすまないな。こちらが話に聞いている、>

癒し手＜殿かな？」

「はい、僕の親しい友人のエルネスト・ド・オーネシアです」

こうエルネストを紹介すると、彼は表情を固くしながら、

「ラ・ヴァリエール公爵、お初にお目にかかります。私は今日”彼”の友人として、知り合いの妹さんの診察に来ました。オーネシアの名前は忘れて頂けると助かります」

”彼”と言う所で僕の方に視線を振って、何とか尋常な挨拶をしてくれました。

「それでは、エルネスト殿と呼ばせてもらおう。私はカトレアの病を治す為ならば、大抵の事はするつもりだ。むろん飲めない要求もあるがね」

ラ・ヴァリエール公爵は、そう言って目を細めました。公爵からは今まで感じたことの無いような、威圧感を感じます。むろんそれはエルネストに向けられている物です。

「オーネシア子爵が公爵様に要求した事に関しては、私は無関係です。私はその話を知って以来、オーネシア子爵とは絶縁状態ですから」

エルネストは威圧感を表面上は感じていないように、返事をしました。彼が、父親を”オーネシア子爵”と呼んだ事でラ・ヴァリエール公爵から感じていた威圧感はあっという間に霧散して行きました。

「そうか！それならば、カトレアの事を宜しく頼んだぞ」

こうして、肝心の診察前の対面は何とか無事に終わりました。いつの間にかやって来ていた、エレオノールに先導されて、僕達はカトレアの部屋に向かいます。

「エレオノール、カトレアの容態に変化はあったかい？」

「いいえ、スティン兄様。格別に良くも悪くもなっていませんわ」

「そうか、一応紹介しておくと、これが魔法学院で友人になったエルネストだよ」

「話には伺っていましたが、スティン兄様に貴族の方の友人が出来るなんて！ラ・ヴァリエール公爵家長女のエレオノールです。兄様共々よろしくお願いいたします」

「いいえ、こちらこそよろしくお願いします、エレオノール様」

エルネストはエレオノールの美少女ぶりにかなりどきまぎしている様子です。それでも僕に、

「スティンと言うのは偽名じゃなかったのか？まあ良い、学院に戻ったらちゃんと説明してもらうからな！」

と言うのは忘れませんでした。

そんなエルネストが、カトレアと対面した時は見物でした。挨拶は普通だったのですが、カトレアのはにかんだ笑顔を見た瞬間、エルネストが見事なまでに止まりました。それはもう、パラライズの魔法で身体を麻痺させた時の様でした。カトレアは確か今１１歳です

が、その容姿はまるで妖精の様という表現がぴったりの少女です。
エルネストが一目惚れという魔法にかかってしまうのも無理はありません。

しかし、事が治療となると、見違える様に真剣な顔で対応しました。
カトレアを問診している表情はさっきの固まった状態からは想像出来ない物でした。触診をする際にも一切の躊躇を見せなかったのも見事と言えるかも知れません。一通りの検査を終えた後、通常はどんな治療を行っているのかという話になり、僕がどんな治療をしているのか実演して見せる事になりました。エルネストに予断を与えたくなかったので、カトレアの病状などは今まで伏せていたのですが、ここまで来れば問題無いと思うので、”がん”だと思うという僕の診察結果を含めて、治療の様子をエルネストに見せる事にしました。

僕が行った治療をやや呆れ顔で見ていたエルネストでしたが、最終的には何らかの結論を得た様でした。ですが、エルネストからは病名が分かった事で治療方法が明確になったという様な、楽観的な様子を見て取る事は出来ませんでした。
1度カトレアの部屋を出て、2人っきりになった時にエルネストが教えてくれた、病名は僕を納得させてくれる物でした。

「僕は、カトレアの病気は”がん”だと思ったんだけど、エルネスト、君はどう思う?」

「”がん”と言うのは、目の付け所がいいね、僕も”がん”だと診断するよ。この世界の設備じゃ、はっきりした事は言えないけど、特殊な”がん”と診て間違いないと思う」

「特殊な”がん”?」

「そう、”白血病”だよ」

「あの血液の”がん”？」

「その表現には多少語弊があるかも知れないけど、まあその通りだね」

「でも、”白血病”って転移したりするのかい？」

「ああ、その点は普通の”がん”と変わらないね」

「対象が血液だと、分析（アナライズ）では全然分からなかったというのも、納得できる話だな」

「アナライズ？さっき治療の様子を見せてくれた時の呪文だね」

「ああ、だけど、今はカトレアの病気についてだろ？難しい顔をしていたけど、病名が分かれば効果的な治療方法も分かるんじゃないか？」

「君は”白血病”の治療がどう行われていたか知っているかい？」

「抗がん剤を使うのかな？詳しくは知らないけど」

「抗がん剤なんかを使った化学療法が一般的だね。時には放射線を使った治療も行ったりしていたね。この世界では抗がん剤なんか手に入らないし、放射線治療なんて危なすぎて使えないね」

「科学的な治療は無理か、となると魔法的な治療だろうね」

「〝がん〟が臓器に転移した状態なら、君がやった様な、周辺の細胞の自然治癒力を高めると言うのは効果的かも知れない。良く思いついたね」

「いや」

治療法を思いついたのは母上なので、言葉を濁しましたが、エルネストは気にしていない様に言葉を続けます。

「しかし、相手が常に循環している血液となると、この方法は取れない。だけど、身体全体の自然治癒力を高めるとしても、短時間ならともかく長時間は不可能だろう」

エルネストがここまで論理展開をした所で、ドアからカトレアがちょこっと顔を出して、

「スティンお兄様、そろそろお帰りになるお時間ですよ？」

と教えてくれました。

「カトレア、ありがとう！また来月来るからそれまで元気にしているんだよ」

「は～い」

カトレアはそう返事をして、ドアから顔を引っ込めました。ちなみにエルネストは不意をつかれた為か、また固まっていました。

僕達は、再度、ラ・ヴァリエール公爵と面会して、カトレアの病気

が”白血病”という特殊な”がん”である事と、現時点では効果的な治療方法が無いことを告げました。効果的な治療方法が無いと聞いたラ・ヴァリエール公爵は肩を落としてしまいましたが、エルネストの、

「今は、効果的な治療方法が思いつきませんが、カトレア様の”白血病”は、私が治してみせます！」

と言う言葉を聞いて、少し希望を持ってくれた様子です。ラ・ヴァリエール公爵は、自分の力不足を認めながらも、努力を重ね、何時かカトレアの”白血病”を治すと宣言したエルネストの事を気に入ってくれた様で、エルネストの手を取って、

「カトレアの事を頼む！」

とまで言ってくれました。それから僕達は急いで、魔法学院に帰ったのですが、着いた頃には日も暮れてほとんど真っ暗な状態でした。コラリーさんが気を利かせて、食事を取っておいてくれなかったら、夕食抜きと言う事態になったかも知れません。

食堂で1人分の食事を、エルネストと2人で分けて食べ終えると、自室でエルネストによる尋問が待っていました。一晩で話しきれる様な物でもなかったので、尋問は何日にも及びました。

「君が、レーネンベルク公爵家の嫡子で、”ワーンベルの奇跡”を起した張本人？それなら、君の身分を明かせば、あの噂も治まるんじゃないのか？」

「ああ、”ミスタ・マーニュを怒らせるな！”かい。僕の身分を明かしたら”ミスタ・レーネンベルクに関わるな！”に変化すると思

うよ」

”ミスタ・ゴドー”が不名誉な退学処分になったことで、広まった噂ですが、ただでも少ない交友関係をこれ以上減らしたくはないので、エルネストに話したことを広めない様にしつこいほど注意しておきました。ちなみに次の年度末の休暇には母上に紹介するように頼まれたのは言うまでも無い事かも知れません。

ちなみに、オーネシア子爵がラ・ヴァリエール公爵に要求したのは、カトレアとオーネシア子爵の次男を結婚させて、ラ・ヴァリエール公爵家を継がせろという物だったそうです。この次男と言うのが、大問題で女性問題を起して、この学院を退学させられた札付きの人物だそうです。基本的に学院は男女交際にはうるさくないのでその人物が何をしでかしたかは想像出来てしまいます。（学院が貴族の子女の出会いの場という側面がある為です。実際卒業して直ぐに結婚するカップルも少なくないそうです）

「結婚の相手が、君だったら、ラ・ヴァリエール公爵も強硬には反対しなかったんじゃないかな？」

こう、エルネストを冷やかしたら、真っ赤になってしまいましたが、否定はしませんでした。さて、エルネスト君の恋は成就するんでしょうか？

第四十二話　ラスティン16歳（魔法学院：1年目ー カトレアの病　再戦）（後

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

カトレアの病気は残念ながら、まだ治りません。完治する為には、後1年ほどかかります。
カトレアファンの方がいらしたら、この先の展開はあまり面白くないかもしれませんが、きっと幸せになってくれると思うので、我慢していただけると助かります。

第四十三話　ラスティン１７歳（魔法学院：２年目－ドキドキが止まらない）

第四十三話ＵＰします。

第四十三話　ラスティン17歳（魔法学院：2年目―ドキドキが止まらない）

僕も無事に2年に進級することが出来ました。昨年度は、入学早々に起した決闘騒ぎのおかげで、同級生からは避けられ、上級生には目を付けられて、あまり楽しい1年ではありませんでした。ですが、今では親友と呼べるエルネスト・ド・オーネシアとの出会いは最大の収穫と言えるかも知れません。

他にも下級貴族の子弟に友人と呼べる生徒達も何人か出来ました。彼らは僕の本当の素性については知りませんが、それでも貧乏貴族の”スティン・ド・マーニュ”としての僕と友人になってくれる貴重な貴族なのです。こうして1年間、普通の貴族の子弟の中に混じって生活していると、自分の（あるいは、レーネンベルク家の）考え方が、いかに異端なのか思い知らせれる事が多いだけに、親友，友人の存在は、本当にありがたい物です。

冒頭で無事に進級出来たと言ったのには、訳があります。魔法学院の1年で習うのは、コモンマジックと本当に初歩の系統魔法です。これらの授業を受けるのは、僕には苦痛だったと言えるかも知れません。特にコモンマジックに関していえば、僕は師匠以上に上手い教え方をするメイジを見た事がありません。次点で弟のノリスにコモンマジックを教えていた、マリナ先生でしょうか？

学院の教師の質が悪いとまでは言いませんが、もっとマシな教え方があるだろうと感じてしまうのは仕方がないかも知れません。現に友人の中には、僕がこっそりとコモンマジックを教えて、格段に魔法が上手くなった生徒もいます。（何故かその友人は、2度と僕に魔法を教わろうとしませんでしたが）

そんな僕が、まともに授業を受けるはずも無く、教師からの受けは最悪でした。実技だけは飛び抜けて優秀だったので何とか進級出来たと言えるかも知れません。（あるいは落第や退学させる理由が見

出せなかったのかも知れません）

2年に進級して最初のイベントといえば、”春の使い魔召喚の儀式”と言えるでしょうが、僕にはその前にとても重大なイベントが起こりました。それは新入生歓迎の会の会場で起こりました。今年入学してきた新入生の中に、見慣れた、それでも思ってもみなかった生徒の姿を見つけてしまったのです。

彼女とは会場でしっかりと目が合ったのですが、まるで知らない人間を見るように、直ぐに視線を逸らされてしまいました。僕が学院では、別人を装っている事は話してあったので、僕の芝居に付き合ってくれるつもりの様です。その日の授業には、ほとんど耳に入らなかったです。エルネストも彼女に気付き、驚いて僕の方を見ましたが、ただ首を振るしかありませんでした。ですが、エルネストに頼んで、後で彼女を中庭に呼び出してもらう事は忘れませんでした。

（エルネストなら彼女に近づいても、おかしくはないですからね）

僕は1人、薄暗い夜の中庭に出て、彼女が来るのを待ちます。しばらく待つと、静かな足音が近づいて来ました。

「エレオノール、こっちだよ」

そう声をかけると、彼女は足を速めて、僕の方に駆け寄ってきました。そして僕の直ぐ横に腰を降ろすと、

「スティン兄様、驚きましたか？」

と嬉しそうな声で尋ねてきました。

「うん、そうだね。すごく驚いた」

「あまり嬉しそうな声じゃないですね。久しぶりに会えたのに、兄様は嬉しくないんですか？」

エレオノールは少し不満そうな声でした。

「久しぶりって、君とは2週間程前に会ったばっかりだったと思うけど？」

「もう、そう言う意味ではありません。こんな夜に2人っきりで会うのが久しぶりという意味です。兄様ったら、こういう雰囲気とかには鈍感なんだから」

何か不本意な事を言われています、まあ、鈍感なのは否定出来ませんが。

「そうだね、こんな状況にいると、僕が君にプロポーズした時のことを思い出すね」

仕返しにこんな事を言ったら、エレオノールからの反応が無くなってしまいました。しばらくすると、

「もう、兄様ったら、そんな話を持ち出すなんてずるいです。私ばっかりドキドキするなんて不公平です！」

と言い出し、僕の腕をつねって来ました。

「あっ！」

エレオノールがこんな声をあげたのは、僕が彼女の手に触れたからです。（決して変なところを触った訳ではありません）

僕はゆっくり、エレオノールの手を自分の左胸に持って行きます。

「あ！兄様の胸もドキドキしてます」

「分かったかい？」

「はい、私達一緒だったんですね」

これを聞いた後、肩に重みを感じました。エレオノールが頭を、僕の肩にちょこんと乗せて甘えて来ている様です。エレオノールの髪からは、少し甘い香りが漂って来ます。僕も若い男です、こんな事をされて、冷静で居られる訳がありません。ですが、その気持ちを押させて無理に冷静になります。僕はエレオノールとの関係を急ぐつもりは全くありません。エレオノールの心と身体の準備が整ってから、事を進めるつもりです。今は触れる様な軽い口付けを交わすだけで我慢しておきます。

「スティン兄様、私が学院に来て迷惑でしたか？」

不意にエレオノールが、そんな事を聞いてきました。

「何故だい？」

「兄様はさっきから、何か考え込んでいますよね？」

「そうだね、僕の予定だと、君は来年入学してくるはずだったから、少し予定を変えないといけないからね」

「済みません、どうしても兄様と少しでも長く一緒に居たかったんです。本当は去年から入学したかったんですけど、お父様に止めら

れてしまって」

「君と一緒に居たいという気持ちはもちろん同じだよ。ラ・ヴァリエール公爵のおっしゃることも、もっともだしね。そうだ、君に頼みたい事があるんだ」

「何ですか？」

「君には今日の歓迎会の時の様に、僕を全く知らない人間の様に振舞って欲しい事。そして、僕について、どんな噂を聞いても、気にしないで欲しい事かな？」

「兄様が、”スティン・ド・マーニュ”という架空の人物を装っているのは聞いていましたから、知らない人として振舞うのは、我慢します。ですけど、どんな噂が流れているんですか？」

「そうだね、例えば、”入学早々決闘騒ぎを起したしかも相手を退学に追い込んだ”とか”魔法薬を平民に売りさばいて、小銭を稼ぐような貧乏貴族”とか”授業をまともに聞かない不良生徒”とかかな？」

「ふふっ」

僕が自分にまつわる噂の例を挙げると、何故かエレオノールは嬉しそうに笑い声をあげました。

「どうして笑うんだい？僕の為に怒ってくれるかと思ったのに」

「いえ、兄様らしいなと思っただけですよ。当ててみましょうか？多分、決闘騒ぎの原因は平民の方が原因でしょう。魔法薬について

は、兄様に儲けなんてほとんど入っていないでしょう。それに多分、兄様は自分が土のスクエアメイジだということを隠していますね」

エレオノールの指摘した事は、ほぼ正解ばかりだったので、僕は言い返す言葉がありませんでした。

「その様子だと、大体当たっているみたいですね。何故そんな面倒な事をしているんですか？」

「そうだね、父上に無理やり学院に入れられた事への意趣返しと、普通の貴族がどんな物か、この目で確かめたかったからかな？」

「そうですか、私も兄様と同じ様にすれば良かったな～」

「ははっ」

「何で笑うんですか？」

「君が経歴を偽っても、直ぐにばれてしまうよ。君の顔は有名過ぎるからね」

「やっぱりそうですか、今日も自己紹介をする前から、ミス・ヴァリエールと呼びかけられたのは、少し嫌でした」

エレオノールはそう言って、肩をすくめた様子です。

「仕方が無いよ、ラ・ヴァリエール家は有名過ぎるからね」

「兄様の魔法兵団や、ワーンベルだって有名じゃないですか！」

「その辺りは、対外的には全部父上の功績になっているからね。社交界にも全く顔を出していないから、僕の顔を知っている貴族はほとんど居ないんだよ」

「何か納得がいきません！でも、兄様が夜にこうして会ってくださるなら我慢します」

「うん、出来るだけ会える様にするよ。エルネストに伝言を頼む事になるけど」

「エルネスト様が、カトレアの治療をされていることは、公然の秘密ですからね」

「そういうことさ。じゃあ今晩はここまでかな。おやすみ、エレオノール」

「あ！兄様」

エレオノールは不意に僕に呼びかけてきて、今度は彼女の方から軽いキスをしてきました。呆然としている僕を置き去りにして、

「おやすみなさい」

という声だけを残して、彼女は女子寮の方へと歩いていってしまいました。

こんな事が後2年も続くのかと思うと、我ながら自分の理性が心配です。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝

そうそう、肝心な話を忘れていました。年度末の休暇で、レーネンベルクに戻っていた時に、ローレンツさんが、僕の事を訪ねて来てくれました。公立学校の状況を色々教えてくれました。概ね順調で、上級学校も何とか準備が出来たそうです。何人か非常に優秀な生徒がいたそうなので、将来がとても楽しみです。

後、忘れてはいけないのが、ガリアの状況です。両王子が、それぞれ農村を任されて事までは聞いていましたが、その先の展開が非常に気になっていた所だったのです。ローレンツさんによると両陣営は、

・ジョゼフ陣営

平民の土，水メイジを役人として、積極的に採用したということです。これで、農作物の収穫量を向上させる計画だった様です。ジョゼフ王子もさすがに領主としての任期が1年だとは予想していなかったらしく、かなり強硬に”領地替え”に反発したそうです。気持ちは分からないでも無いです。1年が過ぎて、ようやく次の収穫で結果が出せるという時に、領地を取り上げられる事になるのですからね。シャルル王子側も同じように”領地替え”が行われる事を確認した上で渋々”領地替え”に同意して、次の任地に移ったという事です。

ローレンツさんの印象では、ジョゼフ王子は、まだ領地経営争いのからくりには気付いていないそうです。仔細は分かりませんが、多分ロベスピエール4世が何らかの工作をしたのでしょう。

余談ですが、ローレンツさんの2人の息子さんがジョゼフ王子と対面したそうなのですが、どちらも簡単に追い返されてしまったそうです。仕方なく、娘婿のセザールという人を送ったら、今度は逆に気に入られて重用される様になったと、ローレンツさんは苦笑しな

がら教えてくれました。

・シャルル陣営

ローレンツさんに言わせると、貴族連合と言った方が適切らしいです。こちらは、対象となった農村の気候が良い事を気に入ったのか、貴族達が挙って別荘を建築したそうです。彼らにとっては、例えシャルル王子が王位につかなくても、大公領として下賜され、協力したことを盾に、いずれは自分達の物になると考えていたのでしょう。取らぬ狸の何とやらですね。

”領地替え”の話を聞いて、貴族達がどれほど慌てたか、想像するだけで面白いですね。1年しか統治していない土地が大公領になるとは思えませんから、貴族達はシャルル王子に何としても勝ってもらわなくてはならなくなった訳ですね。

気になるのが、シャルル王子自身がどんな統治をしたのかが全く分からない所です。

ちなみに今年は、山村が舞台になるそうです。去年は、話を聞いた限り、僕に参考になる様な事業は行われていなかった様なので、今年こそ面白い勝負になることを期待したいです。

後、ローレンツさんには、少し変わったお願いをしたのですが、これについては、結果が出るのを待つしかないと思っています。

第四十三話　ラスティン17歳（魔法学院：2年目ードキドキが止まらない）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第四十四話　ラスティン１７歳（魔法学院：２年目－使い魔召喚）（前書き）

第四十四話ＵＰします。

第四十四話　ラスティン17歳（魔法学院：2年目ー使い魔召喚）

新学期早々、思わぬ（嬉しい）イベントが起こった訳ですが、やはり2年の春といえば、”春の使い魔召喚の儀式”でしょう。ですが、僕はここで、大きな問題に突き当たりました。使い魔は、基本的に自分の得意属性に関連する生き物が召喚される事が多いと聞いています。僕の場合は、間違いなく土属性でしょう。そうなると、僕が土系統が全く使えないという事が、嘘だとばれてしまう事になります。

対策を色々考えたのですが、肝心の使い魔が召喚してみなければ分からないとなると、ほとんど打つ手はありません。最悪の場合、得意属性に合わない使い魔が召喚されてしまったと、言い張る事になるかも知れません。対策を考えているうちに、”使い魔召喚の儀式”の当日になってしまいました。ここまで来ると、もう腹を括るしかありません。

そう思って、”使い魔召喚の儀式”に挑んだのですが、問題はそれ以前に発生しました。儀式を監督するのは、あのコルベール先生でした。（この人には是非、ワーンベルに置きっぱなしになっている、ゼロ戦を見てもらいたいと思います）

ミスタ・コルベールに促されて、サモン・サーヴァントの呪文を唱えますが、銀色のゲートは出現するのですが、肝心の使い魔がゲートから現れないのです。何度もサモン・サーヴァントの呪文を唱えてみましたが結果は同じでした。コルベール先生もこんな事は始めての様で、困惑している様子です。

「ミスタ・マーニュ、呪文も問題ないし、召喚の門もちゃんと開いている。もしかしたら呼び出される、使い魔の方に何か問題がある

のかもしれません。少し時間を置いてから、もう一度試してみましょう」

「はい、ミスタ・コルベール。ご迷惑をおかけします」

僕はそれだけ言って、その場を離れました。エルネストやその他の何人かが心配そうに、僕の方を見ています。逆にいい気味だという表情で、僕を見ている生徒もいます。僕は打ち拉がれた気分で、少し離れた場所で座り込みます。物語（歴史）通りなら、ルイズがこんな気分になるんでしょうか？そんな事を考えていた僕に、杖の精霊”ニルヴァーナ”が語りかけて来ました。

「ラスティン、さっきから思っていたんだけど、偽名を使って大丈夫なの？私達との契約の時は、偽名じゃ契約出来ないわよ？」

僕は、ニルヴァーナの指摘を聞いて、ポカンとしてしまいました。僕はさっきから、”スティン・ド・マーニュ”で呼びかけを行っていました。コルベール先生が近くに居たので、仕方が無かったのですが、これではまだ見ぬ使い魔の心に届かないのは当然かもしれません。

「ニルヴァーナ、ありがとう、もしかしたらそれが原因かも知れない」

「ラスティンも変な所で、抜けているわね。まあ、長年の相棒のピンチですから、これくらいの手助けはするわよ」

僕は、コルベール先生に、再度サモン・サーヴァントを試させてくれるように頼みました。ちょうど前の生徒の召喚が終わったところだったので、直ぐに再挑戦することが出来ました。僕は気が散ると

いう理由で少しミコルベール先生に離れてもらって、サモン・サーヴァントの呪文を唱えます。

「我が名はラスティン・ド・レーネンベルク（こっそり）。我が理想を実現する力を持つものを導く扉をここに開かん」

すると、先程までと同様に、銀色のゲートが開きました。今度こそ、そこから何かが現れました。ためらいがちに、小さな手が現れたと思うと、次には僕の使い魔が全身を現しました。翼も持っていないのに、ふわふわと宙に浮かんでいるのは、見掛け１２，３歳の少女に見えました。ですがそのサイズは４０サント程なのです。これは妖精か精霊の類でしょうか？少し茶色がかった薄絹をまとっています。

彼女は、不思議そうに周りを見回し、僕と目が合うと、うれしそうに僕の方へ飛んで来て、軽く肩に止まりました。

「我が名はラスティン・ド・レーネンベルク（ひっそり）。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

コントラクト・サーヴァントの呪文を唱え、ちょうど良い高さにある彼女の小さな唇に口付けをします。それと同時に彼女の首筋に細かなルーンが刻まれたのが、確認出来ました。どうやら痛み等は特に無かった様です。

「僕の名前は、ラスティン・ド・レーネンベルク（こっそり）。君の名前は？」

「な・ま・え・ま・だ・な・い」

拙い言葉が返って来ましたが、彼女の意図は言葉以外でも伝わって来ました。これが、使い魔と繋がるということなのでしょうか？

「そうかい、じゃあ僕が名前を付けてあげるよ。そうだな君の名前は”キュベレー”でどうかな？」

「”キュベレー”、気に入りましたぁ」

「それは良かった」

精霊としての契約も済んだ為か、幾分幼い感じですが、しっかりとした言葉が返って来ました。僕は儀式が終了した事を報告しようと、コルベール先生へと目を向けると、コルベール先生は悲しそうな表情で僕の事を見ていました。僕は彼の意外な反応が、理解出来ませんでした。

「あの、ミスタ・コルベール？」

「ミスタ・マーニュ、サモン・サーヴァントが上手くいかないからといって、そんな芝居はしなくても良いんだよ。成功するまで付き合うことを約束するからね」

そう言って、コルベール先生は、優しく僕の肩に手を置きます。そこには、キュベレーが居るのですが、コルベール先生の手は見事にキュベレーをすり抜けてしまいました。ここまで来て、やっと事情が掴めました。

「ミスタ・コルベール！貴方には見えないですし、触れる事も出来ないのですが。僕は使い魔の召喚に成功しています。多分精霊か妖精の類だと思うのですが」

コルベール先生は訝しげな表情になりました。この国に住んでいるなら、ラグドリアン湖の精霊の話は聞いたことがあるはずなので、頭からは否定出来ない様子です。

「ミスタ・マーニュがそう主張するならば、認めたいところですが、証拠が無くては何とも。その精霊とやらは、どんな事が出来るのですかな？」

「まだ、分かりません。少し話を聞いてみます」

キュベレーの姿が他人から見えないとは思わなかったので、大真面目に１人芝居をしてしまった様です。少しというか、かなり恥ずかしいですが、ニルヴァーナと話している所を家族や家の者に見られた経験があるので、あまり落ち込まないで済みました。（あまり良い思い出ではありませんが）

仕方なく、近くにある池の畔まで作戦会議を開く事にしました。まず最初に発言したのは意外にもニルヴァーナでした。

「私の名前はニルヴァーナよ。ラスティンとの付き合いはもう１０年以上になるわね。あなたの先輩と言えるかしら？」

「さっき、ラスティンに名前をつけてもらったぁ、キュベレーですぅ。よろしくお願いしますぅ、お姉さまぁ」

「お姉さまって、精霊の格から言えば、あなたの方が上なんだけど、まあいいわ」

「精霊の格なんてあるのかい？」

「キュベレーは大地の精霊の分霊みたいだから、地に根を張る私達より格が上という事ね」

「キュベレーはやっぱり、大地の精霊だったんだ。じゃあ、地面を動かす事は出来るかい？」

「多分、今はまだぁ、複雑なことはできませんよぉ」

「そこにある池のしたの地面を動かして、水面を波立たせることは出来るかな？」

「やってみますねぇ」

それだけ言うと、キュベレーは地面の中にすぅっと入って行き、しばらくすると、池の水面がちゃぷちゃぷと音を立てる程、波立ち始めました。良い感じですが、あまり水を操っている様には見えませんでした。そこで、試しに頭の中で、

『円を描くように動かして』

と念じると、

『はーいぃ』

という返事がこれも頭の中に返ってきました。水面を見ると、さほど大きくは無いですが、ちゃんとした渦巻きが出来ています。これなら何とか言いくるめる事が出来そうです。

『そのまま待機して、合図したら、今の様に頼むよ』

『分かりましたぁ』

簡単な打ち合わせの後、コルベール先生を呼んで、まだ精霊として幼い為、これしか出来ないと言い訳しながら、先程の要領で池の水面に渦巻きを発生させます。コルベール先生は、周りに人が居ないのを確認すると、何とか僕の言うことを信じてくれました。これを合図にする様に、心配そうに僕の儀式を見ていた友人達が一斉に池の畔まで駆け寄って来て、誰も魔法を使っていないのに、水面が渦を巻く様子を不思議そうに眺めていました。これで一安心ですね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

”使い魔召喚の儀式”も順調に進んで行き、最後のエルネストの番になりました。当然ですが、僕の場合と違って、彼は一発で召喚を成功させました。銀色のゲートから出て来たのは、遠目ですがキュベレーと良く似ていると感じました。問題はその現れた使い魔（多分精霊だと思うのですが）が僕の方を見ると嬉しそうに微笑みながら、召喚者のエルネストを無視して僕の方へ向かって来た事と、召喚を成功したはずのエルネストが難しそうな顔をして銀色のゲートを見詰め続けている事でした。

もしかすると、召喚主のエルネスト自身にも精霊？が見えていないのかも知れませんが、とりあえずは、僕の目の前でにこにこしているこの精霊さんが問題です。僕は、こっそり生徒達の輪から離れました。精霊さんも微笑んだまま、僕について来ました。

「失礼ですが、貴方は精霊ですか？」

「はい、こんな所で同胞に会うことが出来るなどとは思ってもみませんでした」

近くで見ると、キュベレーより一回り程大きく、身に付けている衣装も水色で若干複雑な作りになっている気がします。ただ同胞と呼びかけているのは、明らかに、ニルヴァーナでも、キュベレーでも無く、僕に対してでした。

「僕は単なる人間ですよ？」

「いいえ、私には分かります。貴方の中には私達、水の精霊が宿っていることが。魂に深く結びついているので、他の精霊達には分からないかもしれませんが」

精霊さんの言い分については、確かに心当たりがあることなので認めますが、今は暢気に話し込んでいる場合ではありません。

「水の精霊さん、貴方は人間の召喚に応じたのではないのですか？」

「ああ、そうでしたね。懐かしい気配につい、その事を失念してしまいました」

どうやら素で忘れていた様です。精霊にも個性ってあるんですね。この精霊は、ニルヴァーナに比べて随分と浮世離れしている感じがします。とりあえず、水の精霊さんを連れて、エルネストの所へ向かいます。

「ミスタ・コルベール！」

「何ですかな？今は、ミスタ・オーネシアが儀式の真っ最中です。

余計な口出しは無用ですよ」

「僕の用件も、ミスタ・オーネシアの儀式に関してです。実はミスタ・オーネシアは召喚に成功しているのです。ミスタ・オーネシアも水の精霊を召喚しました」

「それでは、また見えないというのですか？」

「はい、現に呼び出された精霊は僕の直ぐ横にいますが、ミスタ・コルベールにも、そしてミスタ・オーネシアにも見えていないでしょう？」

僕とコルベール先生の会話に気付いたエルネストが、サモン・サーヴァントを中断して、僕の左右に目を凝らしていますが、精霊の姿は確認出来ない様です。

「召喚主のミスタ・オーネシアに見えずに、ミスタ・マーニュに見える？おかしな話ですな」

「理由は分かりませんが、ミスタ・オーネシアの精霊は、僕の使い魔よりも高位の精霊の様です。精霊と使い魔契約した、僕にしか見えないのはこの辺りに原因があるのではないでしょうか？良ければ、ミスタ・オーネシアの精霊の話を通訳しましょうか？」

多少無理がある話ですが、何とか言い訳をして、逆に提案をしてみました。幸いコルベール先生は言い訳より、提案の方を真剣に考えてくれた様です。

「良いでしょう、ミスタ・マーニュ。ミスタ・オーネシアも構いませんね？」

「はい」

使い魔召喚の儀式は神聖なとか言い出すんじゃないかと心配しましたが、どうやらすんなり提案が受け入れられた様です。こんな所で、スクエアメイジを留年や退学させる訳にはいかないという学院の事情が見え隠れする結論ですね。僕としてもこんな所で、エルネストが必要の無い苦労をするのを見たくはないので、エルネストに向けて1度頷いて見せて、早速通訳を開始します。

「ミスタ・オーネシア、君が呼び出した精霊は君との契約に同意している様です。後は、コントラクト・サーヴァントを唱えるのと、多分、精霊との契約に必要な名前の交換だけです」

「そうですか、それでは先に名前の交換をします。僕の名前は、エルネスト・ド・オーネシア。君の名前を教えてくれるかい？」

エルネストは僕の視線から、大体の方向を見極めて、精霊さんに話しかけました。方向は合っているのですが、距離感が微妙にずれているのは、指摘しない方が良いのでしょうね。

「エルネスト・ド・オーネシア、確かに名前を受け取りました。私の名前は”テティス”」

「ミスタ・オーネシア、彼女の名前は”テティス”だそうです。どうですか、彼女の姿が見えますか？」

「いいや、見えないな」

「そうですか、それでは、コントラクト・サーヴァントの呪文を、

唱え終わったらそのまま動かないで」

「我が名はエルネスト・ド・オーネシア。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

「”テティス”、契約のキスを！」

「こんな人が多く居る所で、キスなどと言われても」

この精霊さんは、妙なところで常識を振りかざすのですね。空気を読めと視線に力を込めると、”テティス”は仕方ないと言わんばかりの態度で、エルネストと契約のキスを交わしました。するとエルネストが、

「見える、君の姿が見えるよ、テティス」

と興奮気味に声をあげます。

「ミスタ・オーネシア、使い魔契約の済んだ精霊とは心で話し合うことが出来ますよ」

僕は親切にも、エルネストに忠告します。僕もですが、慣れるまではやっぱり声を出して会話をしてしまうと思います。距離が離れていても会話が可能な念話?は便利ではありますが、何か寂しく感じてしまいますからね。

そうでした、キュベレーに刻まれたのは”支配”のルーンでした。この”支配”のルーンは、同属を使役出来るという事でしたが、あまり良い印象のルーンではないので、ルーンの力は使わない方が良いのかもしれません。

第四十四話　ラスティン１７歳（魔法学院：２年目－使い魔召喚）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第四十五話　ラスティン１７歳（魔法学院：２年目－遠足）（前書き）

第四十五話ＵＰします。

この話を始める前に、快く名前を提案していただいた、
ホワイトアスパラガス様
夕月様
に感謝したいと思います。

第四十五話　ラスティン17歳（魔法学院：2年目ー遠足）

”使い魔召喚の儀式”も無事に終わり、僕達にも日常が戻って来ました。1年の頃から変わった事といえば、授業の内容が少し高度なものになった事と、授業を担当する教師の顔ぶれが、変わった事位です。（個人的には可愛い後輩が出来た事も大きな変化なんですが）

”使い魔召喚の儀式”の立会いをしてくれた、コルベール先生も2年から火系統の授業を担当してくれる様になった先生の1人でした。魔法研究所実験小隊は解散となり、ジャン・コルベール氏が魔法学院の教師になったのを知ってから、是非知恵を借りたいと思っていたので、無事に授業を担当してくれると知った時にはほっとしました。

ゼロ戦の動かし方を知っていれば、レーネンベルク家として正式に応援を頼んだかも知れませんが、現実にはエンジン1つ動かせなかったので、今まだ何のアクションも取らなかった訳です。ですが、個人的な繋がりが出来れば、遠慮なく知恵を借りても構わないでしょう。そう思って、ある授業の後、コルベール先生に話しかけました。

「ミスタ・コルベール、僕に少し時間をいただけないでしょうか？」

「ええ、構いませんよ。先程の授業で分からない所でもありましたかな？」

コルベール先生の授業は、現時点では普通で教え方も丁寧だったので、僕としては真面目に授業を受けていました。

「いいえ、ミスタ・コルベールは、”竜の羽衣”というものをご存知ですか？」

「”竜の羽衣”？いいえ、初耳ですな、何かのマジックアイテムですかな？」

「いいえ、マジックアイテムではありません。”火”の力で動く機械といったら良いのかも知れません」

「”火”の力で動く機械ですか？なかなか興味深いですな。それは動くのですかな？」

「いいえ、それが動かし方が分からないのです」

「そうですか、動かし方が分かったら、是非見せて欲しい物ですな。おっと次の授業の準備をしなくては」

そう言って、コルベール先生は足早に、教室を出て行ってしまいました。あれ？予定と違いますね。”火”の力で動く機械と聞けば、授業そっちのけで話に乗ってくると思ったのです。興味はありそうでしたが、意外にも冷静な対応でした。個人的にワーンベルの代官代行（＝マルセルさん）と知り合いなので、興味があれば今度一緒に見に行きませんか？と誘う計画だったのに空振りに終わってしまいました。

時期が早すぎたのか、それとも、”ダングルテールの虐殺”が起こらなかった為に、コルベール先生の意識が少し変化してしまったのかも知れません。

コルベール先生を巻き込んで、ゼロ戦の動かし方を解明するというアイデアは、少し見直す必要がある様です。こうなったら、授業を真面目に受けて、燃料の生成方法のヒントだけでも教わる事にしましょう。幸いコルベール先生は熱心な教師の様なので、生徒の僕が燃料の生成を行いたいので、知恵を借りたいといえば、喜んで知恵

を貸してくれると思います。

==============================
===

2年になり、学院の授業も本格化したのか、魔法薬の作成の授業が行われる事になりました。ここまでは別に何の問題も無かったのですが、例年ならば近くの森で採集出来るはずの薬草が、手に入らないという事になって雲行きが怪しくなって来ました。周りの生徒から視線が集まってくるのが、しっかりと感じ取れます。近くで薬草が採れなくなったというのは、多分僕のせいだと思いますが、僕は学院の使用人の皆さんの為にもここで全く表情を変えませんでした。

ですが、ここから話の流れは思わぬ方向に向かう事になりました。近場で薬草が採れないならば、少し足を伸ばして、学院から少し離れた所で薬草の採取を行う事になったのです。学院から徒歩で半日程、移動してキャンプを張り一泊の予定で薬草の採取を行う事が発表されると、生徒の中には飛び上がって喜ぶ者も出るほど、学院の決定は好評でした。日頃から恵まれた生活に慣れてしまっている貴族の子弟達には、短期間の不便な生活もちょっとしたレクリエーションになるといった所なのでしょう。僕には到底理解出来ない感覚なのですが。

薬草採集キャンプの準備はあっという間に整いました。中には持っていく荷物の事で揉めた生徒もいたようですが、一泊という事であまり多くの荷物が必要無かったというのが大きな要因なのでしょう。

5~6人で1班が構成され、2班を1人の教師が面倒をみる、そして目的地は担当の教師が決定するという事になったので、僕はエルネストを含む比較的仲の良い生徒達と班を組みました。僕達ともう1班は、学院から北の村を目指しました。村の近くにある空き地で

野営する事になるそうですが、その為の設備などは村にある物を使わせてもらえるという説明だったので、僕達は比較的軽装で済んだので、村まではハイキングの様な気分でした。

朝に学院を出て、昼過ぎには、目的の村に到着する事が出来ました。村に到着すると、空き地には既にテントが張られていて、僕達を受け入れる準備は整っている様子でした。僕達は村に入らずそのままテントに向かい、荷物を置いた後、早速薬草採集に入りました。僕とエルネストは村に入らなくて済んだ事に、安堵しました。何故なら、この村は僕達が身分を偽って、治療活動をしたことがある村だったからでした。
僕達の班は、近くにある森を目指す事にしました。以前にも入ったことがある森で薬草が豊富なのは確認済みだったので、深く考えず指示された森を目指しました。そこにあんな事件が待っているとも知らずに。

折角なので、ここで僕の仲間達を紹介しておきたいと思います。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ガスパード・ド・コリニー
　男爵家の３男。優しく、努力家の風ラインメイジ
　メイドのコラリーさんを心配して声をかけてくれたのが彼です
アルマント・フォン・リューネブルク
　子爵家の次男。行動口調も乱暴な、土ラインメイジ
　僕達の学年では唯一の留学生（名前が示す通りゲルマニアからです）

セレナ・ド・ブランブル
　男爵家の３女。武器マニアの火ドットメイジ
　何故か魔法を使うところをほとんど見ない女生徒、いつも武器を磨いています

カロリーヌ・ド・オーリック
　子爵家の次女。魔法薬に興味深々な女の子。水のラインメイジ
　僕が作る魔法薬を喜んで買っていきます。どうやら研究の為らしいです

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

僕達が、森で薬草の採取を始めると、しばらくして雨が降り始めてしまいました。雨が本降りになる前に、偶然雨を凌げそうな洞窟を発見できたのは僥倖といっても良いでしょう。しかし、それが本当に僥倖と呼べるかについては、僕は懐疑的でした。これは勘などではなく経験からの物でした。
人里から離れた森にある洞窟で、入り口はそこそこ広いとなると、嫌でも凶暴な亜人の住処になっているという事が想像出来てしまいます。これは実経験でもあり、何枚もの報告書を読んだ結果からの擬似経験からくる警告だったのかも知れません。

「みんな、ここは危険だ、直ぐに外に出よう！」

「どうしたんだい、ミスタ・マーニュ？そんな藪から棒に」

ミスタ・コリニーが突然の僕の言葉に、こんな反応を示してきました。まあ、当然の反応かも知れません。

「ミスタ・マーニュがそう言うならここは危険なんだ。ここを離れよう！」

僕の事をよく知っているエルネストがすかさず賛成票を投じてくれましたが、これは逆にミスタ・リューネブルクの反発を買う結果になってしまいました。

「何が危険か知らないが、危険があることが分かっているなら、こちらからその危険を排除に向かえばいいじゃないか？俺達はメイジなんだからそれ位の力はあるぜ！」

ミスタ・リューネブルクに乗せられたのかミスタ・コリニーまで洞窟内の探索に賛成してしまいました。残る2人の女生徒は、どちらの意見にも賛成も反対もしませんでした。そんな彼女達の選択に腹を立てて、ミスタ・リューネブルクとミスタ・コリニーは自分たちだけでも洞窟の探索を行うと強硬に主張し始めました。

「もういい！俺達だけで行こうぜ、ミスタ・コリニー」

「そうだね、君達には後で僕達の武勇伝を聞かせてあげるよ」

僕は仕方なく、エルネストにミス・ブランブルとミス・オーリックの事を任せて、ミスタ・リューネブルクたちに同行することにしました。

「エルネスト、何かあったら2人を連れて外に出てくれ」

「ああ、任せろ。君こそ気を付けてな」

エルネストとそれだけ話して、僕は急いで先行している2人を追い

かけます。念のため、使い魔のキュベレーにも念話で連絡をとり、何か起こったらサポートを頼むことも忘れません。暗い洞窟の中を、ライトの明かりだけを頼りに進んでいくと、直ぐにミスタ・リューネブルクとミスタ・コリニーに追いつく事が出来ました。洞窟を更に進んでいくと、一見行き止まりと思える場所に辿り着きました。

「何だもう行き止まりじゃないか。ミスタ・マーニュも取り越し苦労だったな」

そういって、ミスタ・リューネブルクが行き止まりに見える場所を少し覗き込むと、

「オグル鬼だ！」

と、悲鳴に近い声をあげました。急にオグル鬼を見つけ余程驚いたのでしょう。ミスタ・リューネブルクとミスタ・コリニーは杖を取り出し、呪文の詠唱に入ってしまいました。僕は慌てて、ミスタ・コリニーの杖を取り上げて呪文の詠唱を妨害しました。しかし、洞窟が狭くなっていて、ミスタ・リューネブルクには直接手を出す事が出来ません。そんな事をしているうちに、ミスタ・リューネブルクの詠唱が終わりに近づいてしまいました。ミスタ・リューネブルクの唱えている呪文を知って、僕は、

「ミスタ・リューネブルク、止めるんだ！」

と大声をあげましたが、混乱しているミスタ・リューネブルクの耳には入らず、呪文が完成してしまいました。それは何の変哲も無い土のドットクラスの呪文でした。ですが、現状では、その呪文は最悪の選択でした。

「みんな、逃げるんだ！」

僕は声をあげて、呆然としている、ミスタ・コリニーの手を掴むと、後ろを振り返らず。出口に向かって駆け出しました。ミスタ・リューネブルクがついて来ているか確認している暇もありません。上からは、土砂が降り始めてしまっています。

「キュベレー！」

恥も外聞も無くキュベレーに助けを求める声をあげると、降って来る土砂が心持ち減った気がしましたが、どうやら土の精霊にも洞窟全体を支える事は難しい様です。僕は、迫ってくる死のあぎとを真後ろに感じながら、必死の短距離走を続けました。僕達が洞窟から外へ出たとほぼ同時に洞窟は脆くも崩れ落ちてしまいました。異変を知って一足先に洞窟から離れていた、エルネスト達が心配そうに駆け寄ってくるのが確認出来ました。

「ミスタ・リューネブルクは？」

エルネストの問いかけに慌てて周囲を見渡しましたが、ミスタ・リューネブルクの姿は見当たりませんでした。こうなると当然、洞窟が崩れるのに巻き込まれたと考えるしかありません。もっとしっかりと状況を説明して、腕ずくでも無謀な探索を止めさせておけば良かったという後悔が今更のように僕に襲い掛かってきます。自己嫌悪の沼にはまり込みそうな僕の頭の中に、

『彼はここにいますぅ』

というキュベレーの声が届きました。どうやらキュベレーが、何と

かミスタ・リューネブルクを助けてくれた様です。

『ミスタ・リューネブルクは無事なんだね？』

『気を失っているけどぉ、息はしていますぅ。でも酷い怪我がぁ』

怪我という言葉を聞いて、急いでキュベレー達の場所を分析（アナライズ）で確認します。思ったより出口に近く、後3～4メイルという所にいることが確認出来ました。

「みんな手を貸してくれ、ミスタ・リューネブルクは直ぐそこに埋まっているみたいなんだ！」

みんなは僕が急に声をあげたのに驚いた様でしたが、ミスタ・リューネブルクを助け出す事に手を貸してくれました。たった数メイルでも、崩れたばかりの洞窟跡を掘り返すのは、大変な作業でした。穴を掘り、その周囲を固定化で強化する事を何回も繰り返すと、やっとミスタ・リューネブルクが生き埋めになっている空間まで辿り着くことが出来ました。

慎重にミスタ・リューネブルクの身体を穴から外に運び出しましたが、キュベレーの言う酷い怪我がどんなものか直ぐに分かりました。ミスタ・リューネブルクの左腕が、二の腕の真ん中辺りで、無残に切断されているのです。女生徒たちは、それを見て悲鳴をあげて慌てて目を背けました。

僕は万が一の可能性に賭けて、穴をもう少し掘り進めました。ですが、発見できたのは原型を留めていない、ミスタ・リューネブルクの左腕の残骸だけでした。この状態では、さすがのエルネストでも、ミスタ・リューネブルクの腕を再生する事は不可能だと思われます。僕は、左腕の残骸をエルネストに渡すと、そのまま近くの岩に近付き、ワーンベルの時の要領で、簡単な避難小屋を建てる事にしまし

た。まだ夜になったばかりですし、雨も止みそうにないので、このままでは全員の身体がまいってしまうという判断からでした。

第四十五話　ラスティン17歳（魔法学院：2年目－遠足）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第四十六話　ラスティン１７歳（魔法学院：２年目－光明）（前書き）

第四十六話ＵＰします。

第四十六話　ラスティン17歳（魔法学院：2年目－光明）

小屋に入って一息つくと、こんな事になるなら、自分の力を隠さず避難小屋でも何でも作ってしまえば良かったという後悔がまたしても僕を苛みます。そんな僕に、ミスタ・コリニーが話しかけてきました。

「済まない、ミスタ・マーニュ！僕が君の提案をもっと真剣に聞いていれば、こんな事にはならなかったのに」

ミスタ・コリニーも僕と同じ様に後悔の念に苛まれていると知ると、不思議と僕の中の後悔の念も少しは治まった気がします。それが一時の錯覚だったとしても、救いであることも確かでした。

「ミスタ・コリニー、これからは僕達が、ミスタ・リューネブルクの左手の替わりになって、彼を支えて行こう！」

「そうだね、今更僕達に出来るのはそれ位だね」

そう誓い合った僕達の会話に、エルネストが割り込んで来ました。

「感動的な決心を固めている所に悪いけど、僕達にはまだやることが残っている。君達にも手を貸して欲しい」

そう言った、エルネストの口調は、穏やかと言えたかも知れませんが、その表情が口調を裏切っています。その表情には強い意志が感じられました。僕が簡単に諦めてしまった事を、エルネストは諦めていなかった様です。

「エルネスト、僕は何をすれば良い？」

「スティン、君には大仕事が待っているよ、こんな小屋を作る事に比べたら小さい事だけど、大きな仕事がね！」

エルネストの口調は冗談めかしてしますが、その表情は何故か僕に挑戦を挑む様に見えてしまいました。そう、エルネストからは、”君の力の限界を試させてもらうよ！”という強い意志が感じられました。何故、エルネストがこんなにも挑発的なのか、エルネストが僕に要求して来た事で、その理由が分かりました。

「スティン、君にはこのミスタ・リューネブルクの腕を出来る限り元の状態に戻して欲しい。出来るかい？」

エルネストは僕が渡した、ミスタ・リューネブルクの腕を僕に託して来ました。つまらない後悔に始終した僕に、やる気を起させる為に、エルネストは挑発的な態度をとったという事の様です。逆に言えば、エルネストはそれだけ僕に期待してくれているという事です。親友の期待を裏切る訳には行きません、さっきまで感じていた無力感が嘘のように消えているのが感じられますが、それも今の僕にとっては些事に過ぎません。

「だけど、僕は君ほど人体について詳しくない。見本でもあれば・・・」

そこまで言って、僕は見本が目の前にある事に気付きました。単純な事です、左腕は僕にも付いているのですから、長さや太さについては、ミスタ・リューネブルクにまだ残されている右腕を参考にすれば良いだけの事です。人の肉体を成形（フォーム）でいじくるなんて始めての経験でしたが、不思議にその時は不可能と感じませんでした。

ですが、ぼくはここで、1度わざと気分を変えてみることにしました。僕は、魔法宝石（マジックジュエル）本体だけではなく、魔法宝石（マジックジュエル）を使ったアクセサリーを何個も作っているので、その経験からの行動です。気分が乗っている時に作ったアクセサリーは順調に出来上がるのですが、出来上がったアクセサリーは意外と気に入らない物が出来てしまっているのです。その失敗を踏まえ、同じ様なアクセサリーを作ると、今度は肩の力が抜けたのか思い通りのアクセサリーが出来たりする事が多いのです。

「ミスタ・コリニー，ミス・ブランブル、君達に頼みたい事がある。君達には交代で、この小屋の周りの警戒に当たって欲しい。でも無理はするなよ。ここまで来たんだから、僕達6人は全員無事な姿で学院に帰り着きたいからな」

「分かった、任せろ！」

そう意気込んで答えた、ミスタ・コリニーを僕は、問答無用でスリープの呪文で眠らせます。

「交代でっていっただろう?君が先に休む番だ。ミス・ブランブル、警戒を任せるよ。何かあったら大声をあげるんだ。分かったね？」

「ええ、任せて。ミスタ・マーニュ」

ミス・ブランブルは、意気込んで小屋の外に出て行きました。その時ミス・オーリックが、

「私は何をしたら良いのかしら?」

と控えめに聞いて来ました。

「ミス・オーリックは、水系統魔法が得意だったね。君にはエルネストの助手をやってもらうから、今は身体を休めていてくれるかい？」

「ええ、分かったわ」

そう言って、ミス・オーリックは、その場に座り込んで、楽な姿勢を取りました。エルネストの方に目をやると、彼はミスタ・リューネブルクの横に座り込んで、容態の急変に備えながら、身体を休めているのが確認出来ました。僕はそんな親友の様子にこんな時だというのに、笑いがこみ上げてくるのを感じました。その笑いをぐっと堪えて、僕は自分がすべき作業に入りました。

作業、そう、それは正しく作業という言葉がぴったりな工程でした。僕はその時、自分を義手を作る技師と定義して、無心で作業を続けました。そう、血液を見ることが苦手という自覚はあるので、極力人の手ではなく、義手を作る特殊な材料と思い込む事にしました。

（精神衛生上よろしくないです）

砕けた骨を組み直し、千切れた筋肉を接合し、絶たれた血管を繋ぐ、そして破れた皮膚を縫い合わす、時々分析（アナライズ）で腕の構成を確認するのも忘れてはいけません。いつの間にか、時間感覚が無くなっていましたが、大体の”左腕”の修復が何とか終わりました。

次は後回しにしていた毛細血管などの再生に入ろうかと思ったのですが、修復中の”左腕”を再度分析（アナライズ）で見ると、その必要が無い事が分かりました。後回しにしたはずの、毛細血管が何故か再生し始めているのです。一瞬エルネストが何かしたのかと考えましたが、いくら集中していたとしても、他人の魔法が行使されればさすがに気付くはずです。もしかすると、エルネストが、使い魔の”テティス

”に何か命じたのかもしれません。薄っすらとですが、何か懐かしい？気配を感じた気がするので、あれが精霊の力なのかもしれません。

僕は、一通りの修復を終えたので、エルネストに声をかけます。

「エルネスト、出来るだけの事はやったよ。”テティス”も手を貸してくれたみたいだから、納得の行く仕上がりだよ」

「有難う、スティン！ここからは僕の仕事だな」

そう言って、僕から修復の終わった左腕を受け取ります。僕はこの時になってやっと周囲の様子を確認出来ました。警戒に出ていた、ミス・ブランブルが小屋の片隅で丸くなって眠っているのを見ると、今はミスタ・コリニーが警戒を行っているのでしょう。気を失っていた、ミスタ・リューネブルクもいつの間にか目を覚まし、僕の行った作業を見ていた様です。自分の左腕が無くなっているのに気付いたはずなのに、騒ぎを起さなかったのには感心します。痛みや出血の方は、エルネストが何かしているのでしょう。

エルネストがそのミスタ・リューネブルクに話しかけています。

「ミスタ・リューネブルク、今から君の左腕の接合に入る。神経や血管を繋ぐから、かなりの痛みがあると思う。繊細な手術になると思うから身動き出来ないように、君には、パラライズとスリープをかけさせてもらう」

「ああ、分かった好きなようにしてくれ」

「エルネスト、ミスタ・リューネブルクにこれを」

そう言って、僕は”アムリタの雫”をそっとミスタ・リューネブルクに飲ませます。（何かあった時の為に常備している、魔法薬が役に立ちました）

エルネストはミスタ・リューネブルクが、”アムリタの雫”を飲み終わったのを確認して、彼にパラライズとスリープをかけました。

そこからの処置は、僕が一仕事終えた開放感から、目を離していた為、伝聞になってしまいますが、ミス・オーリックによると、夢に出て来そうだったそうです。ミス・オーリックの言葉をそのまま借りると、

”ミスタ・オーネシアが呪文を唱え始めると、ミスタ・リューネブルクの腕の両方から血管とかが、相手を探すようにうねうねと動き出してね。ミスタ・オーネシアが腕を近づけていったら、勝手にくっ付いてしまったの”

という事でした。確かにそんなうねうねは見たくは無いですね。そこからはミス・オーリックも、エルネストに指示されるまま、治癒魔法を使い続けたそうで、しばらくすると、ミス・オーリックは魔力の枯渇で、魔法が使えなくなってしまったそうです。そうなると、エルネストは、疲労からうとうとし始めていた僕を文字通り叩き起して、助手をさせたのでした。

診察（イグザミネーション）を使って、エルネストが細胞が弱ったところや、血管が上手く通っていない所を指示して、僕がそこに部分的に治癒魔法をかけるという事が、何度も何度も繰り返されました。このペースでは、ミス・オーリックの魔力が早々と枯渇してしまうのも頷けます。（ちなみに診察（イグザミネーション）はエルネストのオリジナルスペルで、僕の分析（アナライズ）を見た彼が、たった3日で開発した物です。これだから天才って言うのには

付いて行けないのです。ＣＴやＭＲＩも目じゃないそうですが、門外漢の僕にはその凄さがよくわかりませんでした）

「良し、もう良いだろう！」

という言葉を聞いた頃には、またしても時間感覚が喪失していました。多少覚束なくなった足で、急造の小屋の窓を開けると、外はもう朝になっていました。今回の事で、幾つの呪文を使ったのか覚えていません。魔力の枯渇で魔法が使えなくなった事が無い僕でも、ここまで魔法を使うとさすがに魔力が底を突いている感覚を覚えます。

「スティン、お疲れ様」

「エルネスト、君もな。ここまで魔力を酷使したのは、始めてかもしれないよ」

「僕もだ、でも良い経験になったよ。自信も付いたしね」

「それは良かったけど、今は少し眠りたいな」

「それは言えてるな、寝ているミスタ・コリニーとミス・オーリックを起して先生への伝言を頼んで、ミス・ブランブルには、引き続き警戒をしてもらって、僕達は少し眠る事にしようか？」

「そうだな、その前にこれを飲んでおけよ、”シフの涙”だ」

エルネストは”シフの涙”をしげしげと眺めた後、一気に飲み込みました。僕も、”シフの涙”を飲み、後の事を友人達に託して、固い床の上で横になりました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

その後、ミスタ・コリニーとミス・オーリックが村まで行って、教師を呼んできてくれたそうです。ミスタ・リューネブルクが大怪我をしたと聞いて慌てて駆けつけたそうですが、ミスタ・リューネブルクの無事？な姿をみてほっとしたと言う事です。ミスタ・コリニーとミス・オーリックのいたずらとまで疑われる始末でしたが、崩れ落ちた洞窟を見た教師は話を信じてくれたそうです。多分エルネストが何とかしてくれたのだと判断したのでしょう。

昼近くになって目を覚ました、僕をエルネストは、ミスタ・コリニーとミス・オーリックが運んで来た食事でお腹を膨らませると、他の生徒と一緒にそのまま学院に戻る事にしました。ミスタ・リューネブルクは、しばらく村で休養をとる事になりました。

学院に戻ると、僕達は学院長から直接呼出しを受けて、今回の事故の事を口外しない様にしつこいほど念を押されました。今回の課外授業は生徒達からは概ね好評だったそうなので、来年以降中止というのも残念な気がして、学院長の提案を受け入れる事にしました。もちろん１班に１人の教師を付けて、安全面に関しては徹底してもらえる様に要求する事は忘れませんでしたが。

学院長から今回の事を口外することを禁じられたので、仲間達も僕の素性について詮索しにくい状況になったのには、ほっとしています。彼らのことを信頼していない訳ではありませんが、秘密を知っている人間は少ない方が良いですからね。

そんな事を思った数日後、僕は自分から仲間の１人に素性を明かす事になってしまいました。仕方が無かった事ではありましたが。

「ミスタ・マーニュ，ミスタ・オーネシア、こんな所に呼び出してすまないな」

「左腕の事で世話になった君達だけには、本当の俺の素性について話しておこうと思ってね」

ミスタ・リューネブルクはそこで芝居がかった様子で、

「僕の本当の名前は、コルネリウス・フォン・ブラウンシュワイク！そして、父の名は、ウィリバルト・ゲオルグ・オットー・フォン・ブラウンシュワイク、ゲルマニアのブラウンシュワイク公爵家の当主だ」

と打ち明けて来たのでした。僕とエルネストは互いに顔を見合わせる事になりました。僕達の反応が気に入らなかったのか、ミスタ・リューネブルク（いえ、コルネリウス・フォン・ブラウンシュワイクでしたね）は、話を続けて行きます。

「公爵家の者が、わざわざ子爵家の家名を名乗って、トリステインまで来たのには理由がある。それを聞いてもらおう。今ゲルマニアでは、大規模な政変が起こっている。その元凶は宰相の立場にある、マテウス・フォン・クルークだ」

ミスタ・ブラウンシュワイクは、そこで悔しそうに1度言葉を切りました。

「奴は、宰相の身分を利用して、皇位継承権の低い自分の息子を強引に皇帝の座につけようとしている。謀略や暗殺、手段は問わないのが奴のやり方だ。皇位継承順位1位の、グスタフ殿下まで毒殺さ

れたことで危機感を覚えたおやじ殿が俺を、この学院に偽名を使って送り込んだ理由さ」

ミスタ・ブラウンシュワイクの告白は、最初は喜劇的でしたが、話が進むにつれて、笑い事では無くなって行きました。ツェルプスト－辺境伯が僕達に詳しい事情を話してくれなかったのはこのせいだった様です。確かに他国の人間においそれとは話すことが出来ない事情です。

余談になりますが、僕の素性を聞いてミスタ・ブラウンシュワイクがあごを外しそうになったり、エルネストが”この３人の中なら、僕が一番公爵家の息子らしいよな”と言って笑いあったのも、今では良い思い出話です。

コルネリウスとは、名前で呼び合う仲になったのですが、肝心のマテウス・フォン・クルークの息子の名前が分かりませんでした。コルネリウスによるとその息子は、魔法の天才だそうです。１３，４歳で土のスクエアというのには確かに驚かされました。

そうそう、天才といえば、エルネストも負けていないと思います。エルネストは僕が渡した、”シフの涙”に興味を持ったらしく、製法を僕から聞きだすと、僕に協力させて、”サラスヴァティーの慈雨”という魔法薬を作り出してしまったのです。論理的には、水の秘薬を作り出す工程，材料と、”シフの涙”を作成する工程，材料を混ぜた様な物ですが、複雑な作成方法に応じた効果が出る事が確認出来ました。

なんと、”サラスヴァティーの慈雨”を服用してしばらくは、魔力がほとんど消費しないのです。これが量産出来た日には、メイジの常識が覆ると思ったのですが、エルネストは作っただけで満足したのか量産には完全に見向きもしませんでした。実際に、量産するに

は僕とスクエアクラスのメイジが協力する必要があるので、”シフの涙”以上に量産に向かないというのも確かなので、僕もそれ程力を入れることはしませんでした。

第四十六話　ラスティン17歳（魔法学院：2年目－光明）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第四十七話　ラスティン１７歳（魔法学院：２年目ー カトレアの病　最終戦）

第四十七話ＵＰします。

第四十七話　ラスティン17歳（魔法学院：2年目ー カトレアの病　最終戦）

「カトレア様治療の為に力を貸してくれないか？」

そう前振りも無く、エルネストが僕に頼みごとをしてきたのは、あの課外授業から数ヶ月も経ったある日の事でした。エレオノールが学院に入学してきたこともあり、カトレアのことは、エルネストに任せっきりだったので、エルネストがこの台詞を言う事には異存はないのですが、この台詞を僕が聞く事になるとは思ってもみませんでした。

あの課外授業の時に何か掴んだらしく、エルネストはラ・ヴァリエール公爵を巻き込んで、ここしばらく活発な活動をしていたのは気付いていたのですが、それに僕が関わってくるのは意外でした。僕は水系統でもトライアングルの実力ですし（ある事情から先日学院内でも、水のトライアングルに昇格したと報告しました）、母上直伝の治療魔法の腕もそこそこだとは思っています。ですが、それはそこそこの腕というレベルで、母上を始めとする、治療魔法に特化した水メイジの先輩達には到底及ばないという自覚があったからです。

「エルネスト、君は忘れているかも知れないけど、カトレアの治療を頼んだのは僕の方だよ？　治療に手を貸せと言うなら喜んで貸すけど、何故僕なんだい？」

「僕より優れた水メイジは沢山いるだろう？かい、君の言いたいのは？　僕が、彼らに協力を依頼しなかったと思うか？　ラ・ヴァリエール公爵ではないけど、僕はカトレア様治療の為だったら大抵のことはするぞ」

「まさか、母上まで君の依頼を断ったのか？」

「まさか、リリア様は喜んで協力を約束してくれたよ。だけど、それ以外の一流と言われる水メイジのほとんどが、僕みたいな若輩者の言う事は聞けないといって、依頼を断ってきたよ。ラ・ヴァリエール公爵家の名前を出してもだ！」

エルネストの話を信じるのなら、彼は複数のメイジによる同時治療という危険な賭けに出た事になります。一流と言われるメイジ達がその危険性を知らないはずもないので、彼らが、エルネストの依頼を断った事も理解出来ます。ですが、僕はエルネストの事を彼らよりも良く知っています。エルネストがカトレアの為に危険な賭けに出たとしても、それには十分な勝算があるのでしょう。

「そうか、君がそう決心したなら、僕も喜んで力を貸すよ。だけど、治療方法については十分に説明してもらうぞ」

「ああ、前世の記憶を持っている君の意見も聞きたいんだ。基本的には治療には危険は一切無いはずだけど見落としがあると台無しになってしまうからね」

エルネストから聞いた治療方法は、随分オーソドックスな物でした。人体を、頭部、右腕、左腕、胴体上部、胴体下部、右脚、左脚の七つに分けてそれぞれを徹底的にクリーニングするというのは、陳腐なアイデアと言っても過言では無いでしょう。

「おい、エルネスト！こんな説明を母上にした訳じゃないだろうな？」

「君は外見は公爵似だけど、中身はリリア様に似ているね。リリア様も同じ様に言ったよ、家族間のコミュニケーションもしっかり取れているみたいだね。それに比べ僕の家族ときたら、うらやましい限りだよ」

僕はエルネストの話の後半を聞いて、追及の手を緩める事にしました。

「で、肝心の白血病対策はどうするんだ？」

「それは、テティスに任せようよ思うんだ」

「大丈夫なのかい？　メイジの魔法と精霊の魔法が干渉したりしないんだろうな？」

「あれ？　それについては、問題の無い事を君は体感しているはずなんだけど、スティン？」

「コルネリウスの腕の時だな、あんな非常時になんでそんな事を！」

「非常時だからこそさ、あの時、コルネリウスの腕は彼のものであって彼の物では無かった。それに、魔法の相互干渉で何か起こってもあの状態ならば分からないだろう？」

その時僕の頭をよぎったのは、マッドサイエンティストならぬ、マッドドクターという言葉でした。”カトレア様治療の為だったら大抵のことはする”という言葉は文字通り本気だった訳です。親友の新たな一面を知って、少し引いてしまいました。

「ま、まあいいよ、済んだ事だし、コルネリウスの腕の方も順調み

たいだからね。それで、何時やるんだ？」

「来週の今日かな？」

「随分と急だね、〝父上〟に急病にでもなってもらうしかないな」

「マーニュ男爵にも迷惑をかけるな」

「なに、カトレアみたいな可愛い娘の為なら、あの人は喜んで何度でも急病になってくれるさ」

「そうだね、今はカトレア様の病気を完治させる事を第一に考えよう」

こうして、僕達はカトレア治療の為に、英気を養う事にしたのでした。最近は僕や、エレオノールの前でも笑顔を見せる事の減ってしまったカトレアの為に、一頑張りする事にしましょう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そして、運命の当日になりました。僕は前日から、ラ・ヴァリエール公爵家入りしていました。昨晩は母上から家のことを色々聞いて、十分リラックスする事が出来ました。今朝起きてみると、この屋敷に充満する緊張感で、気持ちが引き締められた気がします。エルネストは数日前から、ラ・ヴァリエール公爵家入りして治療を担当する水メイジ達と入念な打ち合わせを行っていました。そのエルネストも今日会うと、緊張感ではち切れそうでした。今この屋敷で緊張していないのは、僕の隣にいる母上位かも知れません。

「母上は緊張しないのですか？」

「どうして緊張する必要があるのかしら？　エルネスト君が考えた治療法は完璧よ。水の精霊が力を貸してくれると言うのには驚いたけど、あの子なら問題ないし、もう治療は成功を約束された様な物よ。緊張するだけ損ってものでしょう」

母上がはっきりとこう言うと、エルネストや水メイジ達から必要以上の緊張感が抜けた気がします。この辺りの気遣いが、エルネストにリリア様には敵わないと言わせる、要素なのかもしれません。（ちなみに母上の気遣いは方向を間違うと、簡単にレーネンベルク家の男達を混乱の渦に巻き込む事があるので、要注意なんですよね）

僕達は、良い雰囲気のまま、治療が行われる部屋に移動しました。そこには奇妙な格好をしたカトレアが文字通り大の字になって横たわっていました。奇妙な格好と言ったのは、誇張でも何でもありません。カトレアはいつも身につけているドレスやネグリジェではなく、僕が知っている限り見たことも無い、無粋なズボンとシャツを身に着けているのです。しかも、そのシャツやズボンには、知らない人が見れば、落書きにしか見えない記号や矢印等が６色で描かれているのです。

事情を知っている僕にも奇妙に見える服装ですが、これは治療の順番を記した大事な服だったりします。この辺りは、エルネストが前世で医師だったことを如実に示しています。こちらの世界の人間や、僕などの一般人ではちょっと思いつかない物だと感心しました。

感心したといえば、カトレアが横になっている、治療台です。別に過剰な装飾がされている訳ではないのですが、明らかに、カトレアの体型に合わせて、しかも大の字に寝る事を前提にして、治療台も大の字になっています。確かに治療はしやすいでしょうが、今回しか使い道は無さそうです。多分エルネストの入れ知恵で、ラ・ヴァ

リエール公爵が特別生産させた物なのでしょう。この辺りの金銭感覚に関しては、レーネンベルク家とラ・ヴァリエール家は、永遠に分かり合えない気がします。

余談になりますが、レーネンベルク領はラ・ヴァリエール領よりかなり領土としては狭いのです。領土内の経済活動規模としては、ここ数年のワーンベルの発展もあり、レーネンベルク領の方がかなり大きいです。しかし、税収と言う面では、レーネンベルク領もラ・ヴァリエール領もあまり変わらないそうです。もちろん、ワーンベルの工業品にごく普通の税をかけるだけでも、レーネンベルク領はかなりの税収を得る事になりますが、こんな事をしても誰も喜ばないという事で、多分他の貴族が耳を疑うほどの税金しか徴収していません。

ワーンベルの工業品の売り上げは基本的に、魔法兵団内で運用される事になっています。正確には1度、レーネンベルク領の収入になるのですが、家臣の兵団員達にそのまま分配される形になっています。こう書いてしまうと、ワーンベルの錬金隊の平民メイジ達の士気を維持するのは難しそうですが、意外とそうではありません。ワーンベルの人々の笑顔が気力の源という団員もいるのですが、錬金隊のメイジ達の士気を支えているのは、特別注文や臨時注文などの時に得られる臨時収入のせいだと思っています。

臨時注文というのは、言葉通り割り込みで大量の注文を受ける時に、特別料金を徴収する物で当然対応してくれたメイジ達に分配されます。一方、特別注文というのは、工業品を作るラインを指定して、生産を依頼された時に特別料金を徴収するのです。どういう訳か、商人達はどのラインで作られたか突き止めて、そのラインを指定して生産を依頼することがあるのです。以前は、メイジ個人を指定してきたこともあるそうです。こうしてワーンベルでは、今日も高品質な工業品を日々送り出しているのです。（何故か宣伝になってしまいましたね）

実はこんな事を考えながらでも、カトレアの治療は順調に進んでいたりします。今回の治療は、手順も使う魔法も決まっているので、思考の一部を割いて、他事を考える事も可能だったりします。複雑な頭部や腹部を担当しているエルネストや母上は、真剣そのものですが、僕が任されているのは左足だったので、治療自体も難しくないと言うのが実際の所です。おっと、母上に睨まれてしまいました、もう少し気合を入れて治療に臨む事にしましょう。

それからしばらくすると、僕の受け持ちの左足の治療は完了しました。両腕を担当したメイジ達も治療を終えていますし、右足も直ぐに終わりそうです。胸部が次に終わりそうで、母上の受け持ちの腹部がその次、そして意外ですが、頭部を担当しているエルネストの治療が一番時間がかかりそうです。エルネストの場合は他の治療の進み方を確認しながらだったので、仕方が無かったのかも知れません。

後、気になるのは、テティスによる白血病自体の治療の進み具合ですが、今は不用意に話しかける場合ではないので、僕は残りの治療の邪魔にならないように、そっと部屋を出る事にしました。用意されていた、控え室に入ると、そこにはラ・ヴァリエール公爵一家が待っていました。

「ラスティン、治療の進み具合はどうだね？」

それを代表して、ラ・ヴァリエール公爵が僕に、心配そうに尋ねて来ました。治療自体に危険は無いし、万が一成功しなくても何度でも再挑戦出来るし、最悪治療が不出来に終わっても今まで通りの治療を受ければ命の心配は無いと、エルネストが何度も公爵に説明したのですが、公爵の心配を解消する事は出来ませんでした。僕もここでは、

「順調ですよ、何の問題もありません」

としか答える事が出来ませんでした。一方、公爵夫人や、エレオノールは比較的に落ち着いた様子でしたが、僕の報告を聞いてほっとした事は隠そうとしませんでした。ちっちゃなルイズに関しては、事情が分かっていないながらも真剣な表情を崩しませんでした。それからしばらくは、僕とエレオノールが学院での生活を、ラ・ヴァリエール公爵に紹介することで時間が費やされる事になりました。当然、夜の密会の事は秘密なのですが、幾つか学院で出会った面白い事件を公開すると、公爵や夫人も話を聞き、質問をしてくれるまでになりました。丁度良く控え室の緊張がほぐれた所で、治療を続けていた母上たちが戻って来ました。

ラ・ヴァリエール公爵が真っ先に立ち上がり、母上に治療の結果を聞きました。母上は、そんな公爵の様子に苦笑しながらも、エルネストを促しました。エルネストは、努めて冷静を装いながら、

「公爵様、カトレア様の治療は、皆さんの協力で、無事に終えることが出来ました。治療自体は思った通りに終える事が出来ました。ですが、”がん”という病気は転移や再発の危険を常に伴います。後1年程は、慎重に経過を診て行く必要があると思います。ですが、僕の感触では、カトレア様の白血病は完治したと、思います」

エルネストの慎重ではありますが、最後に自信を滲ませた報告を聞いて、ラ・ヴァリエール公爵は感動を抑え切れなかった様です。

「そうか、そうか、良くやってくれた、エルネスト君！　そうだ、君には何かお礼をしなくてはいけないな。良かったら、カトレアを君がもらってやってくれないか？」

いささか急な提案でしたが、公爵としてもカトレアの幸せを考えて、エルネストなら信頼出来ると判断しての事だったのでしょう。僕としても、エルネストの気持ちを知っていたので、うまく行き過ぎだとは思いましたが、全く異論の無い提案でした。

「カトレア様は、物ではありません。公爵と言えども勝手にその将来を決めないで頂きたい！」

ですが、こう声を荒立たせたのは、エルネスト自身でした。僕を始めとした一堂はその声に呆気にとられてしまいました。

「カトレア様は、僕の患者です。再発の事が心配であれば、水メイジとして何度でも治療します。ですから、公爵の口からそんな言葉は仰らないで下さい！　そして、お礼が頂けるのなら、もし私がカトレア様の心を射止める事が出来たなら、その時は快く結婚を許して頂きたいと思います」

「そうか、そこまで言ってくれるか！　良かろう、その時は君たちの結婚を祝福させてもらおう」

一連のやり取りを聞いていて感じたのは、上手くやったなという少し不謹慎な物でした。これで、エルネストはラ・ヴァリエール公爵から全面的な支援を得る事が出来るでしょう。カトレアの病気が治った事を知って、急にアタックを始める様な貴族の子弟など、公爵はカトレアの傍にさえ寄らせないはずです。エルネスト自身は、経過観察と言う事で、カトレアに近付き放題です。後はカトレア次第ですが、エルネストにとって万事有利に事が運ぶ事になります。

エルネストが狙って、ああいう発言をしたとは思えませんが、僕がエレオノールを散々苦労して再婚約まで持っていった苦労に比べる

と、見事と言うしかありません。

そんな時、母上がこっそり僕に話しかけて来ました。

「エルネスト君、男を見せたわね。貴方も見習った方が良いんじゃない？」

ちなみに、これが、母上の気遣いが間違った方向に発揮された良い例です。何を見習えば良いんでしょうか？

この様子を、眠りから目覚めたカトレアがこっそり覗いていたのには、話について行けずに余所見をしていたルイズ以外気が付きませんでした。

第四十七話　ラスティン17歳（魔法学院：2年目－カトレアの病　最終戦）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。
が最近あまり程度の良くない感想?が目に付くようになってしまいました。

２０１０／１１／０９
表現を2箇所修正しました

２０１０／１２／１０
僕方－＜僕の方
に修正

第四十八話　ラスティン１８歳（魔法学院：３年目－ミスタ・グラモンの挑戦）

第四十八話をＵＰします。

この話の後の方は、Ａｇｅｒａｔｕｍ様に捧げたいと思います。

第四十八話　ラスティン１８歳（魔法学院：3年目ー ミスタ・グラモンの挑戦）

僕もとうとう3年に進級することになりました。昨年度とは違い、僕の進級に関しては、何処からも異存が出ませんでした。水のトライアングルになった（正確には明かしたですが）事と、熱心に不得意な風と火系統を学んだ事により、1年で教師の間での僕に対する評価は劣等生から優等生へと変わってしまいました。

熱心な指導が功を奏したと自慢する勘違いした教師もいましたが、本当に熱心に指導してくれる、風のドミニク・バルザック先生と火のジャン・コルベール先生には本当にお世話になっているので、他の教師の戯言も黙認するしかないです。

先日年度末の休暇のことを含めて、昨年度のことをおさらいしておきましょう。エレオノールの入学，課外授業での事件，カトレアの治療の件を除いても、結構な事件が起こった気がしています。

☆夏季休暇の出来事

先ず、去年の夏の休暇の時には、エルネストと一緒に実家に帰る事にしました。オーネシアには戻る気が無いと言うエルネストを僕が強引に連れ出したと言うのが、実際の所です。もしかしたらカトレアと会えるかもしれないよ、と言ったのが最後の一押しになったかも知れません。レーネンベルク家を訪れるのは2回目のエルネストでしたが、僕の家族と家の者が歓迎してくれたので、直ぐに緊張感はほぐれた様です。

数日して、エルネストをワーンベルに招待しようか?それとも兵団の水メイジ達に紹介して指導して貰おうか?と悩んでいると、ラ・ヴァリエール公爵家からの使いがやって来ました。そうです、オデット様がジョゼットに会う為に、去年もラ・ヴァリエール公爵家を訪ねて来たのでした。オデット様は避暑という名目でトリステイン

を毎年訪れる事にしたようです。一昨年の別れ際に、そんな話をしていたので、去年も一家総出（おまけにエルネストもですが）でラ・ヴァリエール公爵家を訪問する事になりました。
去年は一昨年と異なり、特に問題が発生することもなく、オデット様はジョゼットと、エルネストはカトレアと、そして僕はエレオノールと会うことが出来て概ね皆が満足する事が出来ました。
オデット様としては、もっとジョゼットに会いに来たいという事でしたが、ガリアのというかシャルル王子の状況がそれを許さない様です。

それと、小さな変化ですが、レーネンベルク家に新しい執事（見習い）が増えていました。リッチモンドもかなり高齢になっているので、助手的な所から指導を始めるとの事でした。ラザールという１８歳位の若者なのですが、なんとレーネンベルク公立学校の最初の卒業生だそうです。リッチモンドが何度も、学校へ足を運んで見つけて来ただけのことはあり、なかなか好印象の若者でした。（いえ、僕より１つ年上なんですけどね）

☆年度末休暇の出来事
年度末の休暇には、僕はエルネストの他にコルネリウスも我が家に招待することにしました。コルネリウスの立場では、気軽にゲルマニアの実家に帰る訳にも行かず、長期の休暇はいつも１人で寮に篭って居たと、寂しそうに語ってくれたのは印象的でした。
コルネリウスの事情に関しては、両親に話してあるのですが、そんな事を気にした様子も無く、両親はコルネリウスを歓迎してくれました。というより、エルネストの様な訳あり（もちろん転生者という意味です）な友人ではなく、ごく普通の友人を僕が連れてきたと喜んだ位です。コルネリウスは決して普通とは言えないと思うのですが、両親はコルネリウスの事を普通に歓迎してくれました。
コルネリウスの方は、同じ公爵家と聞いて仰々しい歓迎を予想して

いたのでしょう、肩透かしをくらった様な表情でしたが、久々の家庭的な雰囲気に何時しか笑顔を浮かべるまでになってくれました。それと、友人のガスパードつまりガスパード・ド・コリニーが実は母上の親戚だったことも、この時始めて知ったのでした。

☆ローレンツさんの報告

今年もローレンツさんが、公立学校の状況を教えてくれました。状況は、良くもあり悪くもありだそうです。上級学校（今更知りましたが、レーネンベルク公立高等学校という名前だそうです。そのまんまですね）では、生徒の希望で様々な人物に教師役を依頼しているそうですが、生徒が優秀過ぎて、教師役を集めるのが大変だと話してくれました。

ローレンツさんからは、ガリアの情報も得る事が出来ました。去年は山村が舞台だったという事でしたが、どういう展開になったかと言うと、

・ジョゼフ陣営

去年と同じ様に、平民の土，水メイジを役人として、積極的に採用したということです。どうやら、ジョゼフ王子は、平民メイジを役人として雇い入れ、その力を活用する方針の様です。役人とすることで、人件費をそのまま国に請求する積もりなのかも知れません。資金力では圧倒的に不利なジョゼフ王子としては苦肉の策なのでしょう。

しかし問題は、今回が山村が舞台だということです。山で金でもとれれば、何の問題も無いのでしょうが、そんな所をロベスピエール４世が舞台に選ぶとは思えません。多分何の変哲も無い、ただの山村なのでしょう。そんな山村に、ジョゼフ王子はメイジ達の力で何をする積もりなのでしょうか？ローレンツさんが焦らしながら教えてくれたのは、僕の想像通りであり、それ以上でした。

ジョゼフ王子はメイジ達に木の成長を促進させる事を命じたのです。

これは僕も考えた案なのですが、この方法で育てた木材は、年輪が出ず木材としての価値が出ない事が判明して、早々と諦めてしまった苦い思い出があります。ですが、ジョゼフ王子はその出来損ないの木材を材料にして、製紙業を始めたそうなのです。これには僕もあっと言わされました。紙には苦労させられる事が多かっただけに、この試みは僕もとても興味があります。早速ガリアに人をやって調査させる事にしました。

ジョゼフ王子が出来たのはここまでだったそうです。やはり1年経つと、次の領地に移動になったそうです。

・シャルル陣営

シャルル王子はと言うより、取り巻きの貴族達は、前回の事に懲りたのか直接私財を投入する事は避けたそうです。かわりに、大量に樵(きこり)達を雇って、領地となった山々の伐採を始めました。正に、濫伐という言葉そのものだったそうです。確かに一時的な税収は増えた様ですが、木材の価格も下落してガリアの経済が変なことになったとローレンツさんも愚痴っていました。

領民達の願いで、一応植林なども行われた様ですが、どれだけ効果が出るか懐疑的です。1年経ち、次の領地に移動になると、貴族達は自分達の先見の明を誇ったそうです。もう少し先まで見えれば良いのに、と言うのは第三者の立場での僕の意見です。

ローレンツさんによると、ジョゼフ王子は父王の意図をはっきりと理解したそうです。娘婿のセザールという人は、余程ジョゼフ王子と相性が良いようですね。貴族側にもそろそろ、ロベスピエール4世の意図に気付き始める人物が出ても良さそうです。その貴族がどう動くかで、領地経営争いの行方が大きく変わる事だけは予想出来ます。

ちなみに、今年の舞台は港町だそうです。どちらかと言うと、漁村

に近いそうですが、今年はどんな事になるのでしょう？レーネンベルク領は海に面していないので、残念ですが今年の争いはあまり参考になりそうも無いですね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

昨年度の出来事といえば以上ですが、これ以外に今年度まで引きずっている出来事もあります。ゼロ戦の燃料生成方法に関する物と、もう1つ、僕の目の前にある”夕食後、中庭にて待つ”とだけ書かれた手紙に関する物です。
この手紙は、先程メイドのコラリーさんが、いつもの物ですと苦笑混じりに届けてくれた物です。そう言えば最初に”彼”からの手紙を届けてくれたのも、コラリーさんだった事を思い出します。”彼”とは出会い方が違えば、友人になれたかも知れないと思うと少し残念です。今でもケンカ友達というのが友人の範疇に入るのなら、立派な友人と言えるかも知れませんが。
そう”彼”から最初の手紙を受け取ったのは、去年の季節が秋から冬に変わる頃でした。僕は夕食を終え、自室で、魔法宝石（マジックジュエル）の生産を行っていました。友人達が部屋にやって来そうな事態も起こっていなかったので、油断をしていましたが、部屋のドアがノックされて直ぐに机に布をかけて、落ち着いた声で、

「どなたですか？」

と扉越しに、問いかける事が出来たのは、日頃の訓練の賜物です。

「コラリーです。ミスタ・マーニュ、少し宜しいでしょうか？」

声からして、コラリーさんで間違いない様です。僕はそっと扉を開

けて、素早く廊下に出ます。

「済みません、今、調合中なので埃が入らないようにしたいので」

「そうですか、出直した方が宜しいでしょうか？」

「いいえ、しばらく冷ますだけなので構いませんよ」

「そうですか、実はミスタ・マーニュに手紙を預かっているのです。こちらになります」

コラリーさんが、一通の手紙を差し出します。受け取って封を切り素早く内容を確認すると、

「これは、どなたからの手紙か分かりますか？」

「やっぱり、差出人は書かれていなかったのですね。私もある生徒の方から預かっただけですので。多分その生徒の方は、差出人をご存知でしょうが、教えてはくれそうにありませんでした」

「そうですか、わざわざ届けてもらってありがとうございました」

「いいえ、調合の方頑張って下さい。それでは失礼します」

コラリーさんが帰って行ったのを確認して、僕も部屋に戻ります。そこで改めて、手紙を開き内容を確認します。

”とある女性の名誉について話がある。明日の夕食後、中庭の池のほとりで待つ”

と要件だけが書かれています。”とある女性の名誉”と言われると思いつくのは、エレオノールだけです。もしかしたら、僕達に逢瀬が誰かに見掛けられたのかも知れません。厄介な事になりそうな予感がします。対策を十分練らないといけないのに、相手の情報が全く無いと言うのでは話になりません。

時間もないので、翌日にエルネストに力を貸してくれる様に依頼して、手紙の差出人と対面することにしました。事がエレオノールに関してなので、慎重かつ秘密裏に対処しなくてはならない為の人選です。僕はわざとゆっくり食事をして、それが終わると他の友人の部屋に顔を出すなどして少し時間を潰した後に、中庭に向かいました。

問題の池の近くに近付くと、淡いライトの光が零れているのが確認出来ました。どうやら、闇討ちの類ではない様です。こうなると本当に、僕とエレオノールの関係を知っている人物と考えて良いようです。僕がゆっくり明かりに近付いて行くと、僕より少し幼い感じの男子生徒がいることが分かりました。どうやら下級生、つまりはエレオノールと同級生の様です。ここまで近付くとさすがに、相手にも僕の姿が確認出来た様です。

「ミスタ・マーニュですか？」

「ああ、君は？」

「僕は、デニス・ド・グラモン！ミスタ・マーニュ、今日は貴方に要求があってここに来てもらったんです」

「要求ね。で、その要求というのは？」

「分かっているでしょう？ミス・ヴァリエールについてです」

「ミス・ヴァリエール？君の同級生だったかな？」

「白々しい！　僕は貴方が、この中庭でミス・ヴァリエールといかがわしい行為に及んでいるのを見てしまったんだ」

「いかがわしいって、抱きしめてキスしただけじゃないか。あ！」

「語るに落ちたな、ミスタ・マーニュ！」

「あの方にはな、ラスティン・ド・レーネンベルクという立派な婚約者が居るんだ。お前の様な少し顔が良いだけの男にエレオノール様と付き合う権利はないのだ！」

一瞬ペースを思いっきり乱されてしまいましたが、ミスタ・グラモンが僕の名前を出したことで、少し冷静になることが出来ました。何やら話し続けているミスタ・グラモンの話を要約すると、僕という婚約者のある女性（エレオノール）が、僕（スティン・ド・マーニュ）と付き合っているのが気に入らないらしいです。（何かややこしい表現になっていますが）

少し考え事をしているうちに、ミスタ・グラモンの話はいつのまにか、エレオノールに対する賛辞に変わっていました。ミスタ・グラモンにとって、エレオノールはどうやら憧れの女性そのものだそうです。聞いている僕が恥ずかしくなる様な、台詞を喋り続けています。どうやら自分の世界に入り込むと抜け出せない性格の様です。憧れの女性が、僕の様な名も知らない男に、誘惑されているのを見ていられないというのが、彼をこの様な行為に駆り立てたのでしょう。実に愛すべき人間じゃないですか。

そこまで考えを進めて、改めてミスタ・グラモンの話に耳を傾けると、どういう経緯なのか、話が自画自賛になっています。この話は

さすがに聞くに堪えない物でした。僕が不用意に、”こんな奴、穴を掘って埋めて、上からふたをしてやる！”と考えてしまうと、目の前で思った通りの事が起こってしまいました。

『ラスティン、これでいいですかぁ？』

と得意そうな、キュベレーの声が頭に響きます。そうです、キュベレーには僕の考えが直接伝わるので、時々油断をしていると、こんな事が起こってしまうのです。

『キュベレー、何か頼みごとをする時は、名前を呼んでから頼むって言っただろ？』

『そうでしたかぁ？』

『そうだよ、気を付けてくれよ』

僕はキュベレーとの会話を早々に打ち切ると、生き埋めのミスタ・グラモンを発掘にかかります。彼を何とか発掘して、引き上げた所でエルネストが異変に気付いて近付いてきました。

「スティン、やってしまったのかい？」

「いや、単なる事故だ！」

「まあいい。これは、ミスタ・グラモンじゃないか」

「やっぱり、ギーシュの兄なのか？」

「グラモン家の長男だよ。陸軍の将軍・グラモン伯爵の御曹司だよ」

「そうか、まだ将軍なんだな。それより今は、ミスタ・グラモンだ。落ちたとき頭を打ったかもしれない、診てくれるか？」

特に異常の見られなかった、ミスタ・グラモンを部屋まで運び、その日はの話は終わりました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

翌日、エレオノールにこのことを話すと、

「まあ、あの手紙はミスタ・グラモンからだったのですね」

と意外な反応が返ってきました。

「手紙？」

「はい、2日前でしょうか。差出人不明の手紙が私の部屋に届きまして、そこにはスティン兄様と会うのを止めろ！なんて、有得ない事が書かれていたので、無視していたんです」

なるほど、ミスタ・グラモンはエレオノールにも手紙を出していたんですね。それにしても有得ないと言い切るエレオノールには、少し参ってしまいますね。

「もちろん、兄様は、ミスタ・グラモンの言う事など聞かないのでしょう？」

「そうだね。でも少し困った事態なのは確かなんだよ？」

そう言うと、エレオノールがじとーと僕の顔を見詰めて来ました。

「分かった、何とかしてみるよ」

そう答えましたが、解決方法は思いつきませんでした。仕方が無いので、ミスタ・グラモンの出方を見る事にしました。ミスタ・グラモンからは3日後に前回と同じ方法で呼び出しを受けました。今回も指定された中庭の池のほとりに行くと、やっぱりミスタ・グラモンが待ち構えていました。前回と少し違ったのは、

「良く来たな、ミスタ・マーニュ！前回はお前の汚い手口で不覚をとったが、今日はそういう訳にはいかないぞ。僕が勝ったら、ミス・ヴァリエールと会うことは止めてもらう。さあ、杖を構えろ！」

といきなり好戦的な口調で喋り始めた事でした。これは好都合です。ミスタ・グラモンに勝てば、エレオノールに堂々と会うことが出来る訳です。その日、僕は張り切って、ミスタ・グラモンを叩きのめしました。ですが、ミスタ・グラモンからの呼び出しはこれで終わりではなかったのです。

彼はたった2週間後、再度僕を呼び出して、決闘を挑んで来ました。それから何度も何度も、叩きのめす度に少しずつ魔法の腕を上げながら、ミスタ・グラモンからの挑戦は今でも続いています。何時しか僕も彼と手合わせする事を楽しみにする様になっていました。2歳も歳下の彼に負ける積もりはありませんが、卒業まで水系統魔法だけで彼の挑戦を退ける事が出来るか、実は少し不安を感じている僕だったりします。

第四十八話　ラスティン１８歳（魔法学院：３年目－ミスタ・グラモンの挑戦）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１１／１１
見出しを追加

２０１０／１２／１０
戻り気－＜戻る気に修正

第四十九話　ラスティン１８歳（魔法学院：３年目－物質の三態）（前書き）

第四十九話ＵＰします。

第四十九話　ラスティン１８歳（魔法学院：３年目－物質の三態）

最近はミスタ・グラモンの件もあって、夜は大抵忙しいのですが、昼間が暇という訳ではありません。ゼロ戦の燃料生成の為に、授業を熱心に聴くことも大事だからです。まあ、土や水系統の授業は身が入っていないのも事実な訳ですが。

今も、バルザック先生の講義の中で、非常に興味深い考え方を聞くことが出来たので、講義中にも関わらずそのまま校庭に出て、思いついた呪文の実験に入ります。幸運にも次は土系統、その次は水系統の授業の為、堂々と講義をサボる事が出来ます。土系統は使えない事になっているし、水もトライアングルの腕前ならば問題ないと判断されているようです。

実際、今のように、講義の途中で抜け出して、呪文の実験をするのも褒められたことではありませんが、それだけ熱心に魔法を学ぶという姿勢と受け取られ、ほとんどの教師たちに黙認されているのが現状です。事情を知っているエルネストは苦笑まじりに、その他の友人たちは呆れ顔で、僕の奇行を見守ってくれています。

僕はさっき思いついたばかりの呪文を、ゆっくり唱えていきます。

「気化（ガスファイ）！」

僕の呪文と共に、目の前にある大き目の容器の中の小さなカップの中で、水が一気に気化して膨張し、カップを砕きます。問題はここからです。しばらく待っても、大き目の容器の中にでは、気化した水蒸気が水に戻ることはありませんでした。

「よっし、成功だ！」

僕は思わずガッツポーズをとってしまいます。ほぼ1年近い苦労が報われた瞬間です。僕は念のため、色々な液体を気化（ガスファイ）してみましたが、特に問題は無いようでした。そこで、この呪文の開発のお世話になった2人の教師に、呪文の完成を知らせることにしました。彼らは、呪文の完成をまるで自分の事の様に喜んでくれました。特にコルベール先生には、呪文の実演まで頼まれて、片付けた容器を再度持ち出してくる羽目になりました。ですが、その甲斐はあった様です。コルベール先生は、

「水蒸気の力で、容器が割れる。この力を何かに利用出来るのでは？」

と言い出して、何やら考え込んでしまいました。これで、この人の心に火がつけば良いのですが。そういえば、コルベール先生について重要な事を言い忘れていました。”ふさふさ”です、少なくとも今は。

一応の成功を見た気化（ガスファイ）ですが、僕が本当に目的としているのは、固体を液体に、つまり石炭を液化するという様な物なのです。基本的には、気化を液化に置き換えるだけなので、それ程難しい物ではないと思います。原理的には、水×火×風を土×火×水に変えれば良いだけなのですから。ただし、この実験は秘密裏にやらなくてはいけないのが問題点といえば問題点です。

結局、液化（リキッド）の完成は1月ほどかかってしまいました。この間、僕は気化（ガスファイ）の派生呪文を研究する事に時間を費やしました。それは、

風×水×水の逆液化（リバース・リキッド）
水×水×土の固化（ソリッド）

そして、

土×火×水×風の気化爆発（ブリーブ）
風×水×水×土の強化固化（スーパー・ソリッド）

でした。逆液化は何とか唱えられるのですが、効果は限定的でした。やはり掛け合わせる最初は得意系統である方が望ましい様です。問題は、気化爆発（ブリーブ）です。使うメイジを選ぶ上に、スクエアスペルにしては、それほど派手な効果が無い呪文だったりするのですが、ある少女を救う為に役立ってくれると信じたいです。（呪文に爆発の文字を入れたのもその布石だったりします）
この呪文を、エレオノールにも見せたのですが、彼女には（今の彼女にはが正確かも知れません）あまり受けが良く無かったです。ただ、エレオノールがこの呪文を知っているかどうかは、今後の展開に大きく関わってくるのには間違いありません。

僕は、この辺りの呪文をまとめて、”物質の三態と魔法の関係”として発表する予定です。卒業発表の題材としては、なかなか優れた内容だと思うのですが、エルネストという強力過ぎるライバルがいるので、その影に隠れてしまう気がしてしまうのは残念です。ですが、王立魔法研究所には、スティン・ド・マーニュの名前で届け出る予定です。学院を卒業してしまえば、存在しなくなってしまう仮想の人物への手向けです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝

最近僕と友人たちは、とある活動を始めました。僕達は、”守護者”を名乗っていますが、当然と言うと友人達には不本意かもしれませんが、その対象は学院で働く平民の皆さんと、下級貴族の子弟が、

”守護”の対象になります。

始めは、今年の新入生の中に侯爵家の嫡子が居て、その生徒を懲らしめる為に活動を始めたのですが、その侯爵家の嫡子にちょっとお仕置きをして、助け出した某男爵家の次男が僕達に感謝して、何か恩返しをしたいと言い出した事で、”守護者”の活動は本格的な物になりました。

”守護者”の活動は、はっきり言って地味な物です。メンバーの誰かが、平民や下級貴族が虐げられている場面を見かけるか出くわすかした時に始めて活動が開始されます。メンバーを守るために、仕方が無い事ですが、かなり受身の組織になってしまいます。

先ずは、問題のある生徒が1人になる時を見つけて、その人物のこっそりスリープをかけて、なにもせず1枚のカードを残します。想像力のある生徒なら、”お前のことを見ているぞ！”と書かれたカードを見ただけで、態度がかなり改善されます。

ですが、信じられない事に、態度を全く改めない生徒もいるのです。そんな生徒には、堂々？とフルフェイスのマスクを装着して他の生徒の前で決闘を挑みます。もちろんその時には、その生徒の行った行為について語るのも忘れません。大抵の生徒は、決闘と自分の振る舞いを指摘された事で、態度を改めることを約束してくれるのですが、それでも態度を改めない生徒がいます。

そんな生徒には、夜に本気の決闘を挑みます。その時は、容赦無用です。決闘自体は、メンバーの誰かが実行する訳ですが、他のメンバーがアリバイ証明をするので、まず身元がばれる心配はありません。決闘を行うメンバーは、可能な限り対象になる生徒と実力が近いメンバーが行う事になります。それだけだと、決闘に負けてしまう可能性があるので、僕が指導を行う事にします。不本意ですが、ミスタ・グラモンのおかげで決闘に関しては、右に出る者はいない

ですからね。
僕の指導のおかげか、”守護者”は無敗で、”守護者”に決闘を挑まれて、無事で済んだ者は居ないという噂が生徒達の間に広まりました。ここまで来ると、教師達にも話が伝わって、問題になるはずだったのですが、エレオノールの、

「弱者を迫害して喜ぶような者は、貴族に値しませんわ。私は”守護者”を支持します！」

という一言で、問題視されなくなってしまいました。実はエレオノールにも”守護者”の活動は秘密にしていたので、この発言は非常に助かりました。まあ、彼女の事ですから、僕が”守護者”の一員と知っての発言だったのかも知れません。賢明な婚約者を持つと幸せですね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

”守護者”の活動も軌道に乗り、僕の周りでは、理想的なとまでは行きませんが、許容出来る学生生活が実現し始めたある日、レーネンベルクから、一通の手紙が届きました。本来僕の元に、レーネンベルク家からの手紙が届くことはあってはならないのですが、それでもこの手紙が届いたというのは、この手紙がそれだけ重要な物だと言う事です。
講義の間に受け取った手紙の内容を確認すると、僕は次の講義の教師に、

「家族が大変な事になっているので、一時帰省します」

とだけ告げて、直ぐに馬を借りて、トリスタニアに向かいました。

トリスタニアに入ると王城に向かい、門番にスティン・ド・マーニュの名前でレーネンベルク家の家臣グレンさんに面会を求めます。グレンさんは僕の名前を聞いて直ぐに城門まで迎えに来てくれました。グレンさんは僕をあの部屋に案内してくれました。その移動の間におおよその事情は説明したので、グレンさんは時間を無駄にせず、直ぐに竜籠の手配を済ませてくれました。

レーネンベルク家の家臣の要請という事で、竜籠は直ぐに手配され、僕はそのままレーネンベルクの屋敷に向かって飛び立ちました。自分の選択が最も適切だと信じていますが、それでも心がじりじりと苛まれるのは避けることが出来ませんでした。竜籠の御者に無理をいって、屋敷の目の前に降りてもらいましたが、お礼もそこそこで、屋敷に駆け込みます。そんな僕を執事見習いのラザールが出迎えてくれました。彼の緊張した表情で最悪の事態には陥っていないことが分かりました。

「ラスティン様、客間へお急ぎ下さい」

僕は客間と聞いて違和感を覚えましたが、その言葉に従って客間へと向かいました。

「リッチモンド！」

そう声をあげて、居間に駆け込むと、そこには屋敷の者がほとんど集まっていました。そして、そこにはベッドが運び込まれていて、その上ではリッチモンドが力なく、横たわっています。

「母上！何故治療をしていないのですか？」

そうつい大声を出してしまったのですが、その声で意識が戻ったのか、リッチモンドが薄く目を開け苦しそうに、

「若様、これは私がお願いした事なのです。多分これは寿命という奴なのでしょう、ブリミルのお導きに従うまでで御座います」

僕は、改めて母上に視線を送りましたが、俯き加減に首が振られるのを見て、リッチモンドが本当にもう長くないんだと実感する事になりました。人は死ぬという当たり前の事実が、それでも僕に心に重く伸し掛かって来ます。リッチモンドが再び気を失うように眠りにつくと、僕は客間を出て応接間に移動しました。

無理なというか無茶な行程だったのは自覚しているので、少し身体を休める為にソファーに横になります。そんな僕の所へ、とある老婦人がやって来ました。

「貴女は確か、リッチモンドの」

「はい、妻で御座います。この度は夫の為にここまでして頂いて、ありがとうございます」

「本来ならば、ご自宅でゆっくりしてもらうのが普通だと思うのですが、多分父上でしょう。こんな所で落ち着かないと思いますが」

「いいえ、夫にとっては、この屋敷こそが一番落ち着ける場所なのでしょう。なにせ家にいるより、こちらの屋敷にいる時間の方が長い人ですからね」

そこで1度会話が止まってしまったのですが、リッチモンドの奥さんが意を決したように、

「先程も公爵様にお話したのですが、主人はこの所、後悔の言葉を

よく口にする様になりました。恥ずかしながら息子に関することなのですが」

リッチモンドに息子さんが居るのは聞いていましたが、1度も見かけた事がありませんでした。

「主人はあの子に、自分の後を継いでこの屋敷で働いて欲しかった様です。こんな歳になるまで、次代の執事を決めなかったのは、あの子に何とか帰ってきて欲しいと考えていたからでしょう。あの人も、自分が長くないと知っていたのでしょう。最近になって後継者を決めたようですが、もっと早くこうすれば良かったとしきりに嘆いておりました」

「そうなのですか、それで息子さんには？」

「それが、あの子は傭兵の真似事をしておりまして、国中を飛び回っているのです。心当たりには、知らせを入れたのですが、知らせが届いているのかいないのか」

息子さんの話はあまりしたく無さそうだったので、この話はここまでになりました。リッチモンドの奥さんは一礼すると、応接間を出て行きました。多分リッチモンドに付き添うのでしょう。

そして、リッチモンドがそっと息を引き取ったのは、翌日の早朝でした。1度意識を取り戻して、少し会話をすることは出来たのですが、

「若様のお子様をこの手に抱いてみたかった」

と言われてもどうしようもありませんでした。そういえば、リッチ

モンドが僕のことを若様と呼ぶのを聞いたのは久しぶりだった気がします。いつか僕に子供が出来たら、彼の墓前を訪ねたいと思います。

第四十九話　ラスティン１８歳（魔法学院：３年目－物質の三態）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第五十話　ラスティン１８歳（魔法学院：３年目－カトレアの冒険）（前書き）

第五十話ＵＰします。

第五十話　ラスティン１８歳（魔法学院：３年目－カトレアの冒険）

３年度も半ばを過ぎたある日の事、講義の間にエルネストが深刻そうな表情で相談があると話しかけて来ました。その場では話しにくそうだったので、夜に僕の部屋で話を聞く事にしました。

夜になり、魔法宝石（マジックジュエル）の生産を行っていた僕の部屋をエルネストが訪ねて来ました。その表情は昼間と同じに深刻そうでした。僕は、魔法宝石（マジックジュエル）の生産の手を緩めず、エルネストの相談を聞く事にしました。エルネストは僕の態度に不満そうでしたが、僕が真剣に生産を行っている様子をみて諦めたのか、相談事とやらを話し始めました。

「スティン、女性の心を掴むにはどうしたら良いんだろう？」

僕は、生産の手を止めて、エルネストの方に身体を向けます。エルネストは今、言ってはいけない事を言ったのですが、その自覚はない様です。

「エルネスト、君は本気でそんな事を言っているのか？」

「ああ、本気だとも。そうでなければ、わざわざ君の所に相談に来たりしないさ」

「エルネスト、君とは良い友人関係を保てると思っていたけど、それは勘違いらしい。済まないが、これ以降君とは転生者の仲間としてしか付き合わない事にさせてもらおう」

「スティン、何を言い出すんだ。話を聞いてくれよ！」

「いいや、いずれは義妹になるカトレアを悲しませる様な相談を、僕が受けるはず無いじゃないか！」

「僕が相談しているのも、そのカトレア様の事だよ！」

「はぁ？、君は”女性の心を掴むにはどうしたら良い”と僕に聞いたじゃないか。どうしてそれがカトレアと関係して来るんだ？」

「だから、その女性というのがカトレア様なんだよ！」

その時でした、ドアが急にノックされてドアの外から、

「ミスタ・マーニュ、もう少し静かにしてもらえないかな？」

と声がかけられました。どうやら隣人のガスパードからの苦情の様です。

「済まない、気を付けるよ」

そう答えると、ガスパードは満足したのか自室に戻った様です。

「エルネスト、問題を整理しようか？君はカトレアの心を掴みたくて、僕に相談に来たんだな？」

「そうだ」

エルネストは言い難そうに、答えました。どうやら、僕の早とちりだった様です。ですが僕が誤解しても仕方が無いと思います。エレオノールが帰省したときには、カトレアがエルネストの事を嬉しそうに話してくれたと、聞かせてくれましたから、エルネストとカト

レアの仲は順調に進んでいるのだとてっきり思い込んでいたのです。はっきり言えば、いつになれば婚約が発表されるんだろう、その時は入り婿になるのかな？なんて事まで真面目に考えていたのですが、事態はそれ以前で膠着している様です。

「で、君はカトレアと何処まで行ったんだ？」

「何処までって・・・」

「屋敷の近くの湖まで、ボートに乗りに行ったとか言わないでくれよ？」

「お前！何故それを！」

「いいから答えろよ。情報がなければ、相談に乗る事も出来ないぞ。キスぐらいはしたんだろうな？」

「キッ、キスなんて！」

どうやら本気の様です。

「まさか手も握っていないなんて事は無いよな？」

「馬鹿にするなよ、それ位なら」

「僕はさっきの台詞を、思いっきり馬鹿にするつもりで言ったんだけどな。小学生じゃないんだぞ？まさか前世で女性と付き合った事が無かったとか言い出さないだろうな？」

「前世は前世だろ！でも、あの頃には、カトレア様の様な女性に会

った事が無かったのも確かだな」

エルネストの言い分も分からない訳ではありません。元々妖精の様な容姿のカトレアでしたが、病気が全快した事で、表情に昔の明るさが戻って、近寄りがたいとまでは言いませんが、少し臆してしまうような可憐さがにじみ出ている美少女ぶりですからね。ちなみに友人たちに言わせると、エレオノールも近寄りがたいほどの美少女だそうです。

「まあ良い、ところで君はカトレアの事をなんて呼んでいるんだ？まさか2人っきりの時もカトレア様とか呼んでいるんじゃないだろうな？」

「・・・」

これも図星の様です。恋愛経験が皆無というなら、手助けしようと思いますが、エルネストの様子を見る限り、前世では交際の経験はあるようなので、真面目に取り合う気も失せました。

「そうだな、君に忠告する事があるとすれば、様付けを止める事だな。先ずはそこからだ」

「それだけなのか？もっと他に助言とか無いのか？」

「もう1つ助言するなら、カトレアも13歳だったかな？の1人の少女だと言う事かな。臆するのも分かるけど、そんな態度じゃカトレアに失礼だと思わないか？」

「・・・、そうだな、そうかもしれない。君がエレオノール様と付き合い始めた時は、どんな感じだったんだ？」

「付き合い始めたというか、いきなり婚約だったからな。そうだ、オーネシアの紋章は・・・」

そう聞こうと思って、エルネストが実家を嫌っていたのを思い出しました。

「いや、君が好きな物はなんだい?」

「もちろん、カトレア様だよ!」

「それをカトレアに直接言ってみるんだな。じゃなくて、好きな花とか、セレナみたいに剣が好きとかだよ」

「好きな花か?ボイナの花かな?」

ボイナの花というのは、前世ではプリムラに似ている花だったと思います。ハルケギニアでは結構人気のある花です。僕はそれを聞くと、机に向かって作業を始めます。

「おい、もう終わりなのか?」

「黙って、少し待っていろよ」

そういうと、エルネストは黙って、ソファーに腰を降ろしました。そのまましばらく時間が過ぎて、大体イメージ通りの物が出来上がりました。

「こんな感じでどうだ?」

「それは指輪か？」

「ああ、僕がエレオノールと婚約した時にプレゼントしたのが指輪だったんだ」

「そうなのか、助かる。今度カトレア様に会った時に、渡してみるよ」

そう言って指輪に手を伸ばして来ますが、僕は指輪を渡しませんでした。

「何だよ、嫌がらせするなよ！」

「物が指輪なんだぞ、君はカトレアの指のサイズを知っているのかな？君が錬金を得意ならこのまま渡しても良いんだけど」

「・・・」

「今度、エレオノールに聞いておいてやるよ。それで良いだろう？」

「そうしてくれ！　いや、そうして下さい。明日にはエレオノールに会いたいと伝えておくから。今日は邪魔したな」

エルネストはそう言って、僕の部屋を出て行ってしまいました。エルネストの新たな一面を見ることが出来て、面白い夜でした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

翌日の晩、エルネストが張り切ったおかげで、僕はエレオノールと

いつも通り2人っきりで中庭にいました。

「スティン兄様、急な呼び出しでしたが、どうなさったのですか？私の方からもお話したいことがあったので丁度良かったですが」

「エレオノール、済まないね。少し聞きたいことがあってね。カトレアの指輪のサイズを知っていたら教えて欲しいんだ」

「まあ、それではとうとうエルネスト様は、カトレアに結婚を申し込むんですね！」

そうだよね、君もそう思うよね。現実はもっともーっと前の段階なんだけどね。とりあえずエレオノールから、指輪のサイズを（もちろん左手の薬指です。エルネストの奴、これを無事にカトレアの指にはめる事が出来るんでしょうか？）聞き出して、こちらの用件は終わりました。

「それで、君の方の話って言うのは？」

「それが、お父様から、カトレアが誘拐されたと連絡がありまして」

「えっ！」

思わず声が出てしまいましたが、エレオノールの落ち着き払った態度から、事態はそれ程深刻な物で無いことが分かります。考えてみれば、ラ・ヴァリエール公爵の屋敷からカトレアを誘拐するなんて、王城からアンリエッタ王女を、そしてレーネンベルクの屋敷からジョゼットを誘拐する事と同じ位、困難な事だと思われます。

エレオノールの話では、カトレアは3日程前に少し町に出かけて来

ると言ったまま、1人のメイドと御者だけを連れて出かけたまま、行方不明だというのです。公爵はこのメイドと御者が共犯でカトレアを誘拐したと考えて、大規模な捜査を行おうとして、公爵夫人に強引に止められたそうです。強引にという辺りで何が起こったか興味がわきましたが、とりあえずその点は無視しておくことにします。

「それで、メイドと御者というのは？」

「御者には触れられていなかったんですが、メイドの方は・・・」

エレオノールは少し口篭りましたが、思い切ってその名を口にします。

「実は、ミレーユなんです。でもカトレアやミレーユが何故こんな事をしたのか、私には・・・」

それを聞いただけで、大体の事情が掴めた気がしました。エレオノールが本気で心配していないはずです。カトレアがミレーユさんにエルネストの事を相談して、ミレーユさんが暴走してしまったのでしょう。分からないのは、何故この時期に、エルネストとカトレアが行動を起こしたか位でしょうか？

こんな事態になってしまっては、エルネストのプライド云々言っている場合ではないので、エレオノールに2人の関係の実際を話すことにしました。話を進めるに従って、エレオノールの顔はだんだん呆れ顔に変化して行きました。

「エルネスト様ったら、お父様にはあんな事をおっしゃったのに！」

女の子に男の純情を説明するのは、とてもとても難しい事なので、

僕は賢明にも沈黙を守りました。（エルネスト、済まない）

「でも大体、事情が分かりました。あの子はこの学院にきっと来ます。もう1年が経とうとしているのですから、焦っているのですね」

どうやらエレオノールには、この時期に2人が行動を起した理由が分かった様です。1年というのがキーワードなんでしょう、はて1年？

しばらく考えて、僕にも理由が分かりました。そろそろカトレアの治療が終わって1年です。経過観察ももう終わりになり、そうすると2人の接点が無くなってしまう可能性があるという訳の様です。

僕たちは学院内でカトレアを見つけた時の対応だけを決めて、各々部屋に戻る事になりました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そして翌日、朝食を終えて、講義の準備の為に自室に戻る際に、僕は早速ミレーユさんを発見してしまいました。いつもはおろしている髪を、ポニーテイルの様にまとめて伊達眼鏡をかけて、何処からか調達した学院のメイド服を着て、変装していましたが、僕は誤魔化せません。

「そこのメイドさん！そう貴女です。少し手伝ってもらいたい事があるので、部屋まで来てくれますか？」

始めは知らん振りをしようとしたミレーユさんでしたが、周囲に別のメイドが居ないのを確認して諦めたのか、素直に僕の部屋へとついて来てくれました。

「ラスティン様、どうして分かったのですか？エレオノール様にも見つからない自信があったのに」

エレオノールに見つからなかったかどうかは分かりませんが、僕の中では学院のメイドの皆さんの顔と名前は完全に一致しているので、メイドの格好をしている時点で選択に失敗していると言えるかも知れません。逆に生徒の名前の方が怪しかったりします。

「ラスティンと言う名前は隠しているので、スティンと呼んで下さい。それで、カトレアは何処に隠れているんですか？」

「それは言えません。エルネストの部屋が何処なのか教えていただけないでしょうか？」

さすがはミレーユさん、カトレアにかなりのめり込んでいる様です。僕はミレーユさんを何とか言い包めて下準備をした後、カトレアの隠れ場所に案内してもらう事に成功しました。カトレアは学院でも滅多に人が来ることのない、用具小屋に隠れていました。こっそり、小屋の中に入り、カトレアに声をかけます。

「カトレア、居るのかい？」

「え！スティンお兄様、どうして？」

「エルネストにも、エレオノールにも話を聞いたから、どうしてこんな事をしたのかとか聞くつもりはないよ。ただね、君がエルネストの事をどう思っているか、聞きたくてここに来たんだ」

「私が、エルネスト様のことをどう思っているかですか？」

本当のことを言うと、僕やエレオノールにとっては、こんな事を聞く意味は無いのですが、ここははっきりとカトレア自身の口から思いを語ってもらう必要があるのです。

「そうですね、あの方は私に生きていく希望を与えてくれた方です」

「カトレア、さっき僕は言ったよね？エルネストにも、エレオノールにも話を聞いたって、建前を聞きたい訳じゃ無いんだ。エルネストを1人の男性として見た時どう思うか、正直に話してくれないか？話しにくいのは分かっているけど、悪いようにはしないから」

「はい・・・、分かりました！あの方は私にとって特別な人です。私の事を、1人の女性として見てくれる、大事な方です。スティンお兄様と姉様の関係を見ていると、少し物足りないと感じる事もありますが、それは私を大事にしてくれていることの裏返しだと思いますし。そして何より、あんな風にお父様に意見出来る方はあの方だけなのではないでしょうか？」

あれ？あの時はカトレアは眠っていたと思ったのですけど、いや、今はそんな事を考えている時ではありませんでした。

「カトレア、勇気を出して言ってくれてありがとう！」

僕はそう言いながら、後ろ手に小屋のドアを開けます。そこには今の話を外で聞いていたエルネストが立っているはずです。カトレアはエルネストの姿を見て、驚きながら真っ赤にあるという器用な事をしています。僕はミレーユさんを引きずる様に小屋を出ます。変わりにエルネストが小屋に入って行きますが、僕はそのエルネストの肩を思いっきり叩きました。これで気合が入ると言いのですけど。

後は2人に任せて問題ないと思います。ミレーユさんが心配そうにドアに張り付いていますが、僕の仕事はここまでだと思います。エルネストが首尾よくさっき渡した指輪をカトレアの指に嵌めることが出来るかが問題ですが、そこまでは面倒見切れません。近く、ラ・ヴァリエール公爵から、カトレアとエルネストの婚約が発表されると信じたいと思います。

第五十話　ラスティン１８歳（魔法学院：３年目ー カトレアの冒険）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

へたれエルネスト君と大胆なカトレアさんの話でした。

第五十一話　ラスティン１９歳（魔法学院：３年目ー卒業）（前書き）

第五十一話ＵＰします。

サブタイトルにあるとおり、魔法学院編もここで終了になります。

第五十一話　ラスティン１９歳（魔法学院：３年目ー卒業）

魔法学院に入学して３年と言う期間が過ぎようとしていたある日、僕の元に王城に常駐しているグレンさんから一通の手紙が届きました。ゲルマニアに動きがあれば知らせて欲しいと父上にお願いして置いたのですが、父上経由では無くグレンさんから直接僕宛に連絡が来るのは、コルネリウスの実家のブラウンシュワイク公爵家に何かあった時だけだったはずなので、嫌な予感が頭を離れませんでした。

自室に戻って、手紙の内容を確認すると、僕は直ぐにミスタ・リューネブルク（つまりはコルネリウス）の部屋に向かいました。夜遅くなってからの訪問にコルネリウスは驚いた様子でしたが、僕の表情を見て何か悟ったのか、部屋に招きいれてくれました。互いに椅子に腰掛けると、コルネリウスが用件を聞いて来ました。

「スティン、何の用事なんだ？」

「その様子だと、何も聞いていないんだな。コルネリウス、気を落ち着けて聞いてくれ。昨日の事らしいんだけど、この国の王城にゲルマニアからの情報が届いたそうだんだ。未確認らしいんだけど、ブラウンシュワイク公爵夫妻、つまり君の御両親が病死されたとゲルマニアで発表があったらしいんだ」

「なんだと！」

コルネリウスはかなりショックを受けた様で、椅子から立ち上がり唸るような声で、それだけ言いました。

「君の実家からの連絡は？」

「先月あったばかりだが、病気に関しては何も・・・」

コルネリウスは心ここにあらずという感じです。僕は立ち上がったままの彼の左手を掴み、

「もし直ぐにゲルマニアに帰るつもりなら、この左手は置いていけ。命を粗末にする様な奴に左手は必要ないからな！」

と語りかけました。我ながら酷い言い方ですが、これでコルネリウスの頭は冷えた様です。

「すまん、ここで慌てても仕方が無いな」

「そうだね、最悪、罠の可能性も考えておかなくてはならないし」

「罠？」

「そう、ゲルマニアにとって、ブラウンシュワイク公爵夫妻が病死したと発表して、利点になることは少ないだろ？逆に国内の混乱を裏付ける事になりかねない。それでも敢えて発表したのは、何故かと考えるとね」

「まさか俺を誘き出す為？」

「可能性はあるだろうね、気休めかもしれないけど。これならもしかしたら、君の両親は何処かに監禁されているだけかもしれない」

「そうだな」

コルネリウスは律儀に返答を返してきましたが、この可能性がほとんど無いことは互いに分かっているはずです。

「今、君に必要なのは情報を集める事だと思うよ。何か伝は無いのかい？」

「伝と言われてもな、本国ならともかく、この国では君達が一番親しいんだろうな。本国の友人に直接話を聞くと言うのは問題外だろうしな」

人には知られていない秘密の友人でもいれば理想的なのでしょうが、コルネリウスの立場ではそれも難しいでしょう。公爵夫妻の病死がゲルマニアで公式に発表されたという事ですから、この件には確実に宰相マテウス・フォン・クルークが関わっているのは間違いないでしょう。彼に反感を持っている人物でも構わないですが、中央に近い人物では監視の目がある可能性も捨て切れません。そこまで考えると、適当な人物が思いつきました、もっともゲルマニアで知っている人などほとんど居ないのですが。

「コルネリウス、情報源については宿題にしておくよ。明日にでもエルネストを含めてもう一度話し合おう。今日はもう休めよ、何だったらスリープでもかけてやろうか？」

「ああ、頼む。今晩は眠れそうもないしな」

コルネリウスらしくもない台詞に苦笑したくなりましたが、何も言わず彼にスリープをかける事にしました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝

翌日の夜になり、僕達は中庭に集合しました。僕とコルネリウスとエルネストとエレオノールの４人が集まりました。コルネリウスはエレオノールに違和感を覚えた様でしたが、彼女の協力が必要という僕の主張を受け入れた形で、話し合いが始まりました。

「コルネリウス、それで宿題の回答を教えてくれるか？」

「あまり良いアイデアじゃないが、昔、屋敷に勤めていた執事に接触してみようかと思う」

「今は、ブラウンシュワイク家に関係は？」

「無いな、１０年近く前に現役を離れたからな。それでも、俺を可愛がってくれた人だからな」

「そうか、ブラウンシュワイク家に異変と聞いて気になったということで、情報収集をしても問題なさそうだね。問題はその元執事にどうやって連絡を取るかかな？それは、心当たりがあるから、任せてくれ。コルネリウスはツェルプストー辺境伯と面識はあるかい？」

「ツェルプストー辺境伯？　ああ、何度か会った事があるな。それほど親しいという訳ではないが」

「それは都合がいい。エレオノール、何とかツェルプストー辺境伯をトリステインに招待出来ないかな？」

「ツェルプストー辺境伯をですか？」

エレオノールは少し考え込むようにしていましたが、不意に顔を上げて、

「そういえば、お父様が先日年代物のワインを手に入れたとおっしゃっていました。その時に、ツェルプストー辺境伯に自慢したいなどと冗談をおっしゃっていました」

と良い話を思い出してくれました。

「それは良いね、何とかラ・ヴァリエール公爵に、その話を実現する様に仕向けられないかな？」

「それは、お父様に事情を話さないままでなんですよね？」

「そうだね、今の段階でラ・ヴァリエール公爵を巻き込むことはしたくないな。エルネスト君はどう思う？」

「うーん、現時点ではラ・ヴァリエール公爵に話を通すかどうかは、微妙だね。もう少しゲルマニアの状況が分からないとね」

「じゃあ、もう少し状況が分かったら、ラ・ヴァリエール公爵に話すことも考えておこう。エレオノールこの方針で頼むよ」

僕達の話し合いは、こうして一応方針を決定しました。コルネリウスには辛い日々が続きそうです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

学院の卒業が近づき、僕達は”守護者”の活動をどうするか、方針

を決めなくてはいけませんでした。下級生のメンバーもそこそこ居るのですが、何か起こった時に頼りになるかと言われると不安が残ります。そこで僕はある人物と密かに交渉することにしました。

「ミスタ・マーニュ、貴方から呼び出しを受けるなんて始めてじゃないかな？」

「そうだったかな？今晩は君に頼みがあって来てもらったんだ」

「貴方が僕に頼み？どんな事を頼まれるのか、心配になるな」

「君には簡単な事さ。”守護者”のリーダーになって欲しいんだ」

「やっぱり、あれは貴方達の仕業だったんだな。何故、僕にそんな話をするんだ？」

「君に向いていると思ったからかな？　決闘の腕も良いし、家柄も問題ない」

「僕が、下級貴族や平民の為に動くと思うのか？」

「その台詞を、ミス・ヴァリエールが聞いたらどう思うかな？」

「くっ！」

「君には悪い話じゃないと思うんだけどな？　引き受けてくれれば、僕は今後一切ミス・ヴァリエールに近づかないと、”スティン・ド・マーニュ”の名前で誓おう」

スティン・ド・マーニュは、この学院を卒業すれば、存在しなくな

るので一向に構わなかったりします。卑怯な約束ですが、今後の学院の弱者の方々の為です。目を瞑ることにします。

「そうか、そこまで言うのなら、引き受けさせてもらおう」

こうして、”守護者”の次期リーダーが決まったのでした。”守護者”がこれから後も機能して行くかは、分かりませんができれば伝統になって欲しいと思います。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そろそろ、卒業が迫って来た頃、僕は友人達にある提案をしました。それは、学院を卒業したら、レーネンベルク魔法兵団で一緒に働かないか？という物でした。ちなみにエルネストはラ・ヴァリエール公爵の後ろ盾でラ・ヴァリエール公爵領内に診療所を建てる事になっていて、この提案には乗らないです。一方、コルネリウスは、ゲルマニアの様子がはっきりするまで、レーネンベルクに留まる予定なので、身分を偽る為にも兵団への参加を承諾してくれました。

「ちなみに、アルマントは同意してくれたよ」

僕がそう告げると、ガスパードが、

「そういう事なら、僕も入団させてもらおうかな」

と言ってくれました。多分、母上辺りからこっそり話を聞いていたのか、あまり不安そうではありませんでした。

セレナとカロリーヌは互いに顔を見合わせながら、悩んでいる様です。悩んでいると言う事は、彼女達にも自分たちの未来がそれ程明

るくないことは分かっている様です。２人とも、実家の爵位を継げる事もないでしょうし、かといって実家の家臣の一員として、兄弟に仕えるのも向いていると思えません。
こういう言い方は失礼かもしれませんが、２人とも容姿は同級生の中でも5本の指には入ると思うので、玉の輿という事も考えられたはずなのです。ただ、趣味というか嗜好の為に、少し浮いていしまっていたのが事実なので、具体的な交際相手がいなかったのです。
彼女たちは、少し考えさせて欲しいというので、その場での答えは求めませんでした。ただし、兵団員の平均年収を耳打ちすることは忘れませんでした。２人ともその金額を聞いて驚いていた様なので、これは脈ありなのかも知れません。

2人が、入団する事を打診してきたのは、それから2週間ほどしてからでした。期間からみて実家に相談の手紙を書いて返信を受け取っているはずなので、２人には退路が残されていなかったのでしょう。後で知ったのですが、２人共に実家で縁談が用意されていたそうです。相手がどんな人物かは教えてくれませんでしたが、少なくとも2人のお気に召さなかったのは確かの様です。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝

卒業まで後数日という所で、公開卒業発表が学院で大々的に行われました。発表を行うのは大方の予想通りエルネスト・ド・オーネシアでした。発表自体はさほど重大な行事ではないのですが、エルネストの晴れ舞台ということで、カトレアを始めとした、ラ・ヴァリエール公爵家の面々が発表を聞きに来ていました。
実は、エルネストの”治療時における精霊と魔法の相関”と、僕の”物質の三態と魔法の関係”は教師の間でも支持が真っ二つに分かれたそうなのです。バルザック先生やコルベール先生は僕の発表を

強く推してくれたのですが、現時点での実績という面で、エルネストの発表が選ばれる事になりました。

悔しくないと言ったら嘘になりますが、実績がないというのは事実なので、仕方が無いと思うことにします。僕にもキュベレーという精霊の使い魔がいるのですから、エルネストの発表を聞くことが無駄になることは無いはずです。

余談になりますが、公開卒業発表者は王立魔法研究所に研究者として、招聘されることが慣例になっているのですが、エルネストはこれを断ったそうです。彼は研究者である前に、医師でありたいと苦笑しながら話してくれました。この話は僕にも回って来たのですが、さすがに受ける訳にはいかないのですが、受けない為の言い訳を考えるのも大変でした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝

そして数日が経ち、僕達が卒業する日がやって来ました。今思い返してみても、この３年間は色々な事がありました。思い出されるのは何故かあまり良い思い出は少ないのですが、それでもエルネストを始めとする５人の友人達を得る事が出来て、それも帳消しになる程でした。

ですが、学院で感じた最も重要なことは、平民と貴族の身分の違いという現実的な物でした。以前、学院長も言っていた様に、この学院で働く平民の皆さんは、普通からは考えられない程の高給取りなのですが、それでも隷従する人達であることには変わりありません。この点を少しでも改善する為に、〝守護者〟を組織した訳ですが、これでも完全とは言いがたいです。今のところいいアイデアがある訳では無いのですが、いつかはこの身分制度を少しでも良い方向に変えて行きたいと思います。

おっと柄にも無く感傷的になってしまいましたね。明日からとは言いませんが、４日後からは以前のワーンベル代官としての仕事が僕の事をまっているはずです。多くの人たちに生活がかかっている仕事です、気を抜かないように注意しましょう。

そう思いながらも、３年間過ごしてきた魔法学院の建物を、まぶたに焼き付ける様に見上げることを止める事は出来ませんでした。

第五十一話　ラスティン１９歳（魔法学院：３年目－卒業）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

次からは、”千客万来”編が始まる予定です。と言っても、主人公が商売を始める訳ではありませんよ。

２０１０／１１／２０
自室の－＜自室に
に修正

２０１０／１２／１０
コルネリウ－＜コルネリウス
に修正

外伝十話　メイドさんは見ちゃったかもしれない！？（前書き）

外伝十話ＵＰします。

著者が、メイド好きだという事実は確認されていません！

外伝十話　メイドさんは見ちゃったかもしれない！？

私の名前は、コラリーと申します。この魔法学院のメイドとして雇われて、早一月にですね。ですけど、先輩方に聞くと学院に新入生が入ってくる今の時期が、一番要注意なのだそうです。変な学生の方に目を付けられると、とんでもない事になると言われたので、内心はドキドキしています。

そんな中で、私は一人の学生の方に目を付けられてしまいました。切欠は完全に私の過失だったのです。食堂でその方を見かけた時に、つい見惚れてしまって、声をかけられた時に驚いて持っていたポットを落としてしまったのです。その時に零れたお茶が、私の脚にかかってしまい思わず、

「熱っ！」

と声を出してしまいました。その学生さんは、その様子を黙って見ていましたが、直ぐに私を抱える様にして、食堂の隅まで連れて行き、

「これは単なる治療行為です。不埒な気持ちは持っていないので、安心して下さい」

と言いながら、私のスカートを膝上辺りまでたくし上げて来たのです。私はまたしても、思わず、

「きゃ！」

と声を出してしまいました。思わずスカートを押さえようとしまし

たが、その学生さんが、

「若い女性の脚に火傷の痕は似合いませんよ？」

と言ったので、仕方なくそのままでいました。私も嫁入り前なので、こんな状態でいる時間は少しでも短い方が良いと思ったからです。その学生さんは、杖を取り出すと、治療魔法を私にかけてくれました。貴族が平民の為に魔法を使うなんて、聞いたことが無かったので、何だか不安になって来ました。

治療が終わって、その学生さん（ミスタ・マーニュとおっしゃる方でした）が、後で薬を渡すから、部屋まで来るようにと言われた時には、自分の身に”とんでもない事”が起こっているのではないかと思うようになりました。

一通りの仕事を終えて、この事を上司のエンマさんに伝えると、思っていた以上に悪い事態を指摘されました。あの方がそんな事をと思う反面、貴族なんて所詮はそんなものだという感じがして、私は混乱するばかりでした。エンマさんが同行してくれるというので、少し安心してミスタ・マーニュの部屋に向かう事が出来ました。

結論から言えば、私たちは全く勘違いをしていました。あんな事を考えた、自分たちを恥じる結果になったといえるかも知れません。ですが、ミスタ・マーニュの様な方が貴族の中にもいると知ることが出来たので、決して不愉快な事ではありませんでした。

むしろその後のミスタ・マーニュの色々な活動を見たり聞いたりした限りでは、私にとってあの方は貴族らしくもあり、貴族らしくもなく、全く謎の存在になっていました。魔法薬で商売をしてみたり、決闘をしてみたり、食堂では大食漢だったり、他の学生の方々より貴族らしい振る舞いをしてみたりと、何時しか私にとって目の離せない存在になっていました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

その様な状態が一年弱続き、今年も新入生が入学して来ました。今年は、ラ・ヴァリエール公爵家のエレオノール様が入学してくるという事で、仕事仲間たちもかなり緊張していました。かく言う私も、ラ・ヴァリエール公爵家と聞いて、少しだけ緊張をしました。ですが、所詮は1メイドと公爵家の令嬢の間に関係が生まれるとは思っていませんでした。

しばらくすると、メイド達の間にミス・ヴァリエールが夜になると時々、中庭に出て誰かと会っているということが噂になりました。私がその噂を聞いたときに感じたのは、あの完璧な方のお相手はどんな方なんだろうという純粋な興味でした。私がその”お相手”が誰なのか知る事になったのは、多分偶然ではなかったのだと思います。

ある晩、とある学生の方が、ベッドに飲み物を零してしたったと言われ、そのシーツを交換した帰りのことでした。ミスタ・マーニュがこそこそと男子寮を出て行くところを見かけてしまいました。声をかけ損なった私は、慌ててあの方の後を追いかけました。あの方が中庭に入って行くのは確認したのですが、暗すぎて見失ってしまいました。

しばらく、中庭を彷徨っていると、小さく話し声が聞こえてきました。その声に導かれる様に、近付いていくと、そこにはあの方とミス・ヴァリエールが、親密そうに話し込んでいるのが、見つけられました。お二人は私の目から見ても、お似合いのカップルでした。ミス・ヴァリエールの様な方の隣には、ミスタ・マーニュの様な方が似合います。ミス・ヴァリエールには別の公爵家の婚約者がいるという噂を聞いたのですが、単に身分だけの貴族がいても、ミス・ヴァリエールの横に立つ事は出来ないのでしょう。

薄暗い中でも、映えるお二人の姿をしばらく眺めていたのですが、だんだんと胸がもやもやして来て、それ以上見続ける事が出来なくなって、その場を去る事にしました。それからの事はあまり覚えていません。気付くと、自分の部屋に戻っていて、ベッドにうつ伏せになり何故か涙を流している自分に気付きました。同室の娘が急な里帰りをしていたのは、幸運だったかも知れません。

それから、夜明けまでまんじりともしないて、あの方の事を考えました。あの方は、私に、いえ私達使用人に優しすぎました。あの方と私の年齢差があまり無いのも気付いていました。あの方は、男爵家の3男ということで、もしかしたら貴族でなくなる事があるのではないかとさえ思っていました。そう私は、あの方の隣に立つ自分を想像していたのです。

「ああ、私は恋をしていたんだ」

そう声に出すことは、心が少し痛みましたが、それでも素晴らしい思い出になったことは、間違いありません。そう、あのお二人の姿を見てしまった時から、私の想いは思い出になってしまったのでしょう。でも今日だけは、あのお二人に会わないでおきたいと思います。

あの晩から、1週間が経ちました。あれから何度も、ミスタ・マーニュやミス・ヴァリエールに会うことがありましたが、私の様子に不信感をいだかれたことは無かったと思います。ミスタ・マーニュに対する想いが少しでも残っていれば、ミス・ヴァリエールに何か勘付かれたかも知れませんが、今の私ならば、お二人の前に堂々と胸を張って出る事が出来ました。

私の目から見ても、二人の関係はほとんど窺い知ることが出来ませ

んでした。何度かお二人が、同じ所にいるのを見かけることがあったのですが、お二人が互いのことを意識していると感じることは一度もありませんでした。他の誰かならば、あの夜見たのは別人だと思ったのかも知れません。ですが、私にはその振る舞いの不自然な自然さが、違和感として感じられました。

貴族の交際と言うのはここまで気を使わないといけないのかと思ったのと同時に、ミスタ・マーニュとのことを自分の中できちんと決断出来た自分に拍手を送りたい気分になりました。お二人の仲が、今後どの様な展開になるかは、一メイドの私には想像もつきませんが、出来れば幸せになっていただきたいと思います。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

あの晩から、早くも1年が過ぎようとしていました。最近、私達使用人の間では、”守護者”と呼ばれる人物の事が話題に上ることが多くなりました。学院内の平民や下級貴族の方々を助けてくれる人物だというのですが、その実態は謎でした。ですが、その噂を聞いたときに、私はこれがミスタ・マーニュのした事だと確信しました。ですけど、噂の詳細を聞くと、おかしな話になりました。

その”守護者”が活動したと思われる日の何日かは、私が夜にミスタ・マーニュの部屋に荷物を届けた事があったからなのです。かなり前から気付いていましたが、ミスタ・マーニュには頻繁に荷物が届いたり、逆に荷物を受け取りに来たり、ということがあります。ミスタ・マーニュからは、魔法薬の材料と、出来た魔法薬を商人が引き取りに来ていると聞いていたので、主に私が対応する事になっており、この事に気付く事が出来ました。

この謎はしばらくして、女性の”守護者”が現れた事で、事態がはっきりしました。”守護者”は一人ではないと言う事が、驚きと共に私達の間で語られる事になりました。私には、ミスタ・マーニュが”守護者”の中心人物だのだという確信がありましたが、それを誰にも打ち明けることはありませんでした。ミス・ヴァリエールが、

「弱者を迫害して喜ぶような者は、貴族に値しませんわ。私は”守護者”を支持します！」

と発言された事も、私の確信を深めさせる事になりました。

”守護者”が活動を始めて以来、私達の仕事は本当にやり易くなりました。何処がというのを言葉にするのは難しいですが、学生の方々の多くが私達の仕事を認めてくれて、お礼とまではいかないまでも、軽く目礼をしてくれる方が増えました。多分それだけの事が、私達にとってどれだけの励みになるのか、学生の方々も分かっていないのでしょう。（もっとも、私達の事を、学院の備品の様に考えている方もいますが、それが気にならないほどです）

そう、私たちはプロなんですから！

それから何日か経った後、いつも通り学生さんたちの衣類を洗濯していると、ミスタ・マーニュの衣類を洗うことになりました。昔なら、喜んで衣類を洗っていた所ですが、今ならきちんと仕事として、洗濯を出来ると感じました。

ですが、ミスタ・マーニュのズボンのポケットから出てきた物を見た時は、心臓が止まるかと思いました。そのポケットには、明らかにガラス玉等ではない、宝石と思える、それも大粒のものが入っていたのです。どうしたら良いのか、正直迷いましたが、結局干した後のズボンにこっそり、宝石を戻すことにしました。これは、プロとしての私の矜持がさせたものです。

そう、私がもう少しずるい人間ならば、この事を利用しようとしたのかも知れません。ですが、私にはどうしてもその様なことは出来ませんでした。
結局、ミスタ・マーニュは、ポケットに入っていた、宝石に関して何も行動を起しませんでした。自惚れかもしれませんが、私の考えがミスタ・マーニュに伝わったのだと思えます。それは、とても嬉しい事でした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

月日は流れ、今日はミスタ・マーニュが卒業する日です。例年であれば、何のこともない１日のはずだったのですが、今日はミスタ・マーニュから、卒業式の後に使用人一堂が食堂に集まる様に言われているので、あまり食堂にいない時間に、使用人が集まっていて何か落ち着かない気分でした。
ミスタ・マーニュは、使用人一人一人に声をかけながら、何かを渡している様でした。私の番近くになると、ミスタ・マーニュが何を渡しているかはっきりしました。どうやら、男性にはカフス、女性にはブローチを渡している様でした。私の番になると、ミスタ・マーニュは、少し声を低めて、
「コラリーさん、本当にお世話になりました。貴方には特にお世話になりましたね、どうもありがとうございました」
「いいえ、私はやるべきことをやっただけです」
「そうですね、でもだからこそ、コラリーさんには感謝したいです」
そう言いながら、ミスタ・マーニュが渡してくれたのは、名前は分

かりませんが、碧い宝石をあしらった物でした。それを見た時、不覚にも胸が一杯になってしまいました。はっきりと覚えてはいませんが、私がミスタ・マーニュに青色が好きだといった記憶があったからです。

その何気ない優しさが、ミスタ・マーニュの将来に禍根を残す事が無いように、祈る事しか私には出来ませんでした。そして、ミスタ・マーニュとミス・ヴァリエールの仲が将来不幸の種にならないことも祈っておく事にいます。ミスタ・マーニュは、配ったカフスやブローチを何かの足しにしてくれとおっしゃっていましたが、私は多分一生このブローチを手放さないのだと思います。

外伝十話　メイドさんは見ちゃったかもしれない！？（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１２／１０
ミスタ・マーニュことを－＜ミスタ・マーニュとのことを
あの晩からまた、早いくも－＜あの晩から早くも
に修正

第五十二話　ラスティン１９歳（辺境伯来る）（前書き）

第五十二話ＵＰします。

第五十二話　ラスティン１９歳（辺境伯来る）

３年の学生生活を終えて、晴れて自由の身？になって、レーネンベルク領に戻って来た訳ですが、明日にはマリロットの町で、レーネンベルク魔法兵団に入団する事になった友人達と待ち合わせをしているので、ワーンベルへはまだ向かう事が出来ません。一緒にレーネンベルクに来た、コルネリウスは早々に客間に篭ってしまいました。

家族と挨拶を済ませて、マリロットの町をぶらぶらしていると、久々に知り合いの町の住人達が、口々に”立派になられましたな”とか、”背が伸びたんじゃないのかい？”とか言うので、気になって久々に身長を測ってみる事にしました。すると何と、１８１サントになっていました。やった〜♪、１８０サントを超えるのは無理だと思っていたので本当に、本当に、嬉しかったです。

失礼しました、あまりの嬉しさに少し自分を見失った様です。ちなみに僕が身長を測っているのを眺めていた弟のノリスですが、既に身長は１８５サントを超えていたりします。いつもは僕のコンプレックスを刺激してくる弟の身長でしたが、不思議と今は気になりません。

明日は、僕とコルネリウスは、他の友人達に自分達の素性を明かす事になりますが、彼らがどんな顔をするか、楽しみだったり不安だったりします。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝

翌日になり、僕は少し早いですがコルネリウスを連れて、魔法兵団本部の建物前に向かう事にしました。待ち合わせの場所には、セレナとカロリーヌが来ていて所在無げに、僕達に到着を待っていまし

た。

「セレナ、カロリーヌ、待たせちゃったかな？」

「宿でじっとしているのも、勿体無かったから早く来ちゃったんだから気にしないで。所で本当にここがレーネンベルク魔法兵団の本部なの？」

セレナが不安そうに（不審そうにかな？）尋ねてきました。コルネリウスやカロリーヌも同じ様な表情です。ですが、ここは立派にレーネンベルク魔法兵団の本部だったりします。本部の建物は、商店街の一角にあり、内部の広さはそこそこですが、外観はお世辞にも立派とは言えない物です。彼らは魔法兵団の本部と聞いて、郊外にある立派な建物がどんと建っていることを想像した様です。彼らのイメージにはレーネンベルク魔法学園がぴったりなのかも知れません。

裏話ですが、魔法学園に資金をつぎ込みすぎたせいで、兵団の本部に回す資金が足りなくなり、我が家の金庫番セルジュから最低限にするようにきつく言われたのが、この本部の始まりだったりします。当時から兵団の活動がほとんど領外が対象になっていた為、本部の機能がさほど重要でなかった事も要因に挙げられるでしょう。兵団の経営が安定してきた頃には、本部の外観の利点がよくわかってきたので、あえてそのままにしてあります。何度か本部移設の案が上がるのですが、土地の問題や、兵団の相当数がワーンベルに移動することになってしまったこともあり、魔法兵団の本部は冴えない外見のままだったりするのです。

しばらくして、ガスパードがやってきた事もあって、僕たちはそのまま兵団の本部へ向かう事になりました。兵団本部に入ると、さすがに皆が僕の顔を知っているので、会う度に団員の皆が僕に軽く会

釈をして来ます。その様子を友人たちは不審そうにあるいは興味深そうに眺めているのでした。その視線も、僕達が団長室と書かれた部屋の前にアポなしで到着してしまった事で最高潮に達してしまいました。

僕はその友人達の視線に耐えながら、団長室のドアを開きます。そこには当然ですが、魔法兵団長のマティアスが待ち受けていました。

「ラスティン様、お待ちしていましたよ。こちらがお話にあったご学友の皆さんですね、相談室1を開けておきましたのでそちらでお話下さい。話が済みましたら、遠慮なく私に声をかけて下さい」

マティアスはそう言うと、僕達を相談室1に通してくれました。この辺りになると友人達の視線は一応の落ち着きを見せているのですが、相談室1に入って人目が無くなった途端、いろいろ追及されることは避けられませんでした。僕とコルネリウスが自身の素性を明らかにすると、友人たちは交互に僕達の不実を責め立てるかと思いきや、呆れ顔ながら僕達の本当の姿を受け入れてくれました。僕達は友人の有り難味を良く知ることが出来たんだと思います。

余談になりますが、相談室と言うのは魔法兵団に相談に来た人が通される、この本部でもかなり高級な設備を誇っている部屋です。相談に来た依頼者が、本部の外観を見て絶望しかけるも、通された相談室の設備に、自分が意外と厚遇されているのではないかという感想を抱く程度には、充実した設備です。この設備が友人達にも何らかの影響を与えたのでしょう。

ちなみに、マティアスを交えての話し合いでは、友人達が全員、魔法学園で再教育を受ける事になり、大いに不満の声が上がったのを述べて置きます。最初は他人事だと思っていた、コルネリウスも自分が再教育の対象になっている事を知ると、不満の声をあげました。ですが、魔法学院と魔法学園では要求される魔法の知識と技術に差

があるのでこれは仕方が無い事なのです。
マティアスが嬉しそうに、実践でビシバシ扱きますからね、といったのに、ガスパードがおかしな反応をしたのは何故でしょうか？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

友人達のことをマティアスに任せた後、僕はワーンベルに戻ろうと思ったのですが、とある事情でまだ実家に留まっています。毎晩の様に、何故か我が家を訪ねて愚痴をこぼしていく友人達のあしらいに慣れた頃、その人物はレーネンベルクを訪ねて来ました。

「ラスティン殿、お招きに応じてここまでやってきましたぞ。私にはさぞかし面白いものを見せていただけるのでしょうな？」

そんな事を不機嫌そうに告げたのは、ゲルマニアのツェルプストー辺境伯だったりします。（ラ・ヴァリエール公爵は一体どうやってここまでツェルプストー辺境伯を不機嫌にすることが出来たのでしょう？）

「きっと辺境伯のご期待に沿えると思いますよ」

「そうですか、それは期待させていただきましょう」

そう言いながら、余裕の表情だったツェルプストー辺境伯でしたが、屋敷でコルネリウスに会った時の表情は見物でした。

「貴方は！」

そう言って、ツェルプストー辺境伯はその動きを忘れてしまった様

に体の動きを止めてしまいました。

「ツェルプストー辺境伯、いつぞやの父主催の園遊会以来だな。貴公をここまで呼び出したのは、俺の意思だ。貴公の知る限りで構わないから、ブラウンシュワイク公爵家について教えてくれないか？」

辺境伯は沈痛な面持ちで、ブラウンシュワイク公爵家の現在の状態を語ってくれました。それは想像以上に最悪の物でした。

「すると貴公は、既にブラウンシュワイク家はゲルマニアに存在しないと言うのか？」

「そうですな、ブラウンシュワイク公爵ご夫妻は、公式に発表があった通り、お亡くなりになっています。それは私がご遺体をこの目で確認した事で間違いありません。ただし、公式発表にあった病死に関してはゲルマニアの貴族の中でもそのまま信じる者は居ませんでしたな。毒殺と言う噂が信憑性を持って流れたほどでした」

辺境伯の話では、ブラウンシュワイク本家の家臣などは全て解雇され路頭に迷い、分家筋はブラウンシュワイクの名を名乗る事を禁じられ改名させられたそうです。随分と徹底していますね。

「姉上は！そうだ、姉上はどうなったのだ？」

「フリーデル様は、ブロイッヒ家に嫁がれました」

「そうか、それなら安心だな」

「コルネリウス様はどうなさるお積りですか？　あの宰相閣下に、反旗を翻す心算ならば、我が家としても全面的に協力させていただ

きますが？」
「辺境伯！その言葉は有り難いと思う。だが現状では、奴に表立って逆らうのは得策とは言えないだろう。父が毒殺の危険性を考えなかったとは思えない。このままでは奴に逆らうものが全て毒殺される危険性があるだろう。貴公には辛いだろうが、今は奴に従った振りをしていてくれ。いずれ奴の悪行が暴かれる時が来ると信じたい」
「コルネリウス様、では貴方が立つ時には、ツェルプストーを始め多くのゲルマニア貴族が貴方の下へ駆けつける様に説得する事にいたしましょう！」
そう告げて、ツェルプストー辺境伯はレーネンベルクを去っていきました。去り際に、コルネリウスと握手を交わすと、その手を僕にも向けて来ました。
「今は、外国に居た方がコルネリウス様にとって安全だろう。その日が来るまで頼んだぞ」
僕は返事の変わりに、辺境伯の手を力を込めて握り返しました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

おっと、忘れる所でした。今年もローレンツさんが律儀に色々な事を報告しに来てくれました。
公立学校については、ほぼ思い通りの運営が出来る様になったそうです。教育内容は、今のトリステインというより貴族社会を打破とまでは行きませんが、もっと優れた政治制度を模索する事を視野に入れているそうなので、かなり危険な教育をしていると笑っていま

した。僕も笑ってそれを受け入れてしまう訳ですが、自分の今の身分を否定しかねない教育を行うのに、出資するなんて我ながらどうかしていると思います。

既にローレンツさんのお気に入りになっている、特に優秀とされる何人かの上級学校の生徒も今年には卒業という事で、卒業したらラスティン殿の下で使ってやって下さいと言われましたが、ローレンツさんから見ても優秀という生徒が僕に使いこなせるか不安だったりします。

加えて今年は、ローレンツさんから、ゲルマニアの現状を聞くことが出来ました。理由は簡単で、コルネリウスの家に、昔勤めていた執事という人物に、ローレンツさんから連絡を取ってもらったからです。ですがこちらは大した収穫を得る事が出来ませんでした。ツェルプストー辺境伯から聞いたことを確認出来た程度でした。ですが、離散してしまった家臣達の情報は、コルネリウスにとっては大きなものだったのかも知れません。

そして忘れてはいけないのが、ガリアの継承権争いの状況です。今年の舞台が漁村だということは話したと思いますが、去年は両陣営とも何とか成功を収めたらしいです。大きな動きはそれ以外の所で起こったそうです。

・ジョゼフ陣営

ジョゼフ王子は、今回はメイジの力を使わなかったそうです。ローレンツさんの話によるとロマリア等で盛んな漁法を取り入れることで、漁獲量を増やす事を目指したとの事です。さすがに、相手が海となると簡単には行かないというのが、実際の所でしょう。そう思ったのもつかの間で、ローレンツさんの口から”養殖”という言葉が出たのには驚きました。ローレンツさんが助言でもしたのかと思いましたが、どうやら、昔子供達に話した事が、娘さん→娘婿のセ

ザールさん→ジョゼフ王子と伝わったとの事でした。

・シャルル陣営

例によって、貴族連合がその財力に物を言わせて、港町に介入したそうです。彼らは自分が所有している船を気前良く漁民達に下げ渡したそうです。貴族が使うような船を、漁民が受け取ってもどうにもならないかと思いましたが、そこは漁民の皆さんの逞しさで、別の方法でその船を使う事にしたそうです。彼らは、漁業の傍ら、貴族の船を使った観光業に手を出したのです。中古とはいえ、貴族が使っていた船ですから、呼び物としては申し分なかったようで、観光業でかなり村は栄えたそうです。

そして問題の、その他の所で起こった事ですが、ほとんど孤立無援だったジョゼフ王子の下に、バルドー子爵という人物が協力を申し出たのです。この人物は、ロベスピエール４世の意図をジョゼフ王子の前で披露した上に、ジョゼフ王子の勝利を予言して、更に勝ち馬に乗らない手は無いとまで言ってしまったらしいのです。ジョゼフ王子はこれを聞いて、バルドー子爵のことを気に入ったらしく、そのまま陣営に受け入れたそうです。傍から見れば、子爵が１人ジョゼフ王子に付いただけですが、これを見て他の貴族達がどう動くか興味をそそられますね。

ちなみに今年の舞台は、鉱山の町になるそうです。もしかすると、ガリアから、ワーンベル鉱山を見学に来たりするかもしれませんね。

第五十二話　ラスティン１９歳（辺境伯来る）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１１／２１
よく分かった来たので－＜よくわかってきたので
友人有り難味を－＜友人の有り難味を
友人達のも－＜友人達にも
園遊会依頼－＜園遊会以来
反旗を振りかざすお積り－＜反旗を翻す心算
元－＜下
等大量修正

第五十三話　ラスティン１９歳（モーランド侯爵からの使者来る）（前書き）

第五十三話ＵＰします。

第五十三話　ラスティン19歳（モーランド侯爵からの使者来る）

友人達の”再教育”を、魔法兵団長のマティアスに任せて、僕は1人でワーンベルへと帰って来ました。久々に代官の屋敷の執務室に座ると、昔を思い出しました。そこにマルセルさんが嬉しそうに書類を抱えてやって来ました。

「やはりラスティン様がそこに座っていていただけると、安心出来ますね」

「苦労をかけてしまったみたいですね。また以前の様によろしくお願いします」

そんな事を話しながら、僕は書類をこなして行くのでした。これからしばらくはこんな日々が続くと思っていたのですが、それは長く続きませんでした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「モーランド侯爵からの使者ですか？父上の所では無く、ワーンベルへ直接来たんですか？」

「はい、使者の方はそう仰っています。クレマンという方ですが、モーランド侯爵家の家臣だそうです」

「本当に、モーランド侯爵家の家臣なんでしょうか？」

「それは確かだと思います。何かの機会に、あの方がモーランド侯

爵家の家臣として出席していたのを見かけた事があります」

「分かりました、会いましょう」

僕は、応接間に向かう事にしました。そこには少し緊張気味の、１人の男性が待っていました。その人物が、僕が部屋に入ると慌てるように頭を下げて、

「ラスティン・ド・レーネンベルク様、お初にお目にかかります。私はモーランド侯爵家の家臣で、クレマンと申します」

と話しかけてきました。正面から改めて、クレマンさんの様子を確認すると、意外と若い事に気付きました。多分２０代前半で間違い無いでしょう、緊張気味なのは、今回の面談が意外に大きな話になるせいなのかも知れません。

「ラスティンです。よろしくお願いします、クレマン殿。それで今日の訪問はどの様なご用件でしたか？」

「はい、実は本日、私は、ラスティン様にお力をお借りしたいと思いまして、こちらを訪ねさせていただきました」

「僕の力をですか？もう少し詳しく話していただけますか？」

「実はお恥ずかしい話ですが、我が主の領地は現在多額の負債に苦しんでおりまして、この事態を打開すべく、ワーンベルの工業品の生産方法を是非我が領に伝授して頂きたいのです。なにとぞ、なにとぞお願い致します」

クレマンさんは土下座せんばかりに頭を下げてしまいました。僕は

その様子に少し引いてしまいましたが、少なくともクレマンさんの熱意は伝わって来ました。

「それでは、クレマン殿。貴方は今のワーンベルの状況がどうやって実現したかご存知ですか？それと、貴方が仰ったことは、モーランド侯爵もご存知なのでしょうか？」

クレマンさんは、僕の質問に首を傾げながら、

「平民メイジを家臣として取立てて錬金をさせているのではなかったでしょうか？我が主君につきましては、１度この話を提案した際にはあまり気に召されなかった様でしたが、先日改めて提案した所、あっさり同意して下さいました」

と答えてくれました。クレマンさんの回答は、一応及第点でしたが、僕がしてきた苦労を一切無視した物でした。ですが、クレマンさんの年齢ならそれも仕方が無いと思うことにしました。それから一応、クレマンさんにワーンベルを案内する事にしました。工場街の内部を見たクレマンさんは大変感銘を受けた様子でしたが、その他の町の施設に関しては、さほど興味を引く事が出来なかった感触でした。それから１度屋敷に戻って、平民メイジ達に対する待遇の改善がどうしても必要だと、クレマンさんに説いたのですが、クレマンさんにはピンと来なかった様です。どうもクレマンさんは若いのに、頭が固い気がします。ですが、クレマンさんがモーランド侯爵家を持ち直させたいという熱意と、誠実な人柄は、彼を無下に扱うには惜しいと思わせるに足る物でした。

僕は結局、クレマンさんの熱意にほだされる感じで、モーランド侯爵に会い、話し合いをすることを同意してしまいました。モーランド侯爵領までは、馬であれば半日もかからないのですが、クレマンさんの乗ってきた馬車を利用する事になったので、もう少しかかり

そうです。

馬車には、８人ほどの護衛が付いていました。クレマンさんによると、モーランド侯爵領では、盗賊団の被害が報告されているそうで、多目の護衛を用意したそうです。クレマンさんに随分と準備がいいですね？と尋ねると、恥ずかしそうに、

「御館様に、お前ではレーネンベルクの状況はつかめないだろうから、無理だと感じたら諦めて、ラスティン様をモーランド領に招待しろと言われていたのですよ」

と告白してくれました。クレマンさんはやっぱりモーランド侯爵領でもこんな感じなのでしょうか？

僕達の乗った馬車は、ゆっくりとしたペースで街道を進み、夕方近くになってやっとモーランド侯爵領に入る事が出来ました。クレマンさんの話では、近くの町で１度宿を取り、明日の昼前位にはモーランド侯爵の屋敷に到着できるとの事でした。ですが、僕たちはその町に到着することは出来ませんでした。

その後しばらくして、急に馬車の周りが騒がしくなったと思ったら、急に眠気を感じて、意識を手放す事になってしまったからです。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝

僕は目を覚ますと、まず周りの状況を確認しました。薄暗い部屋の中には５人ほどの人間がいました。そこまで確認した途端に、僕のお腹に鋭い痛みが走りました。

「グハッ」

「どうやら、レーネンベルクのおぼっちゃんのお目覚めのようだぜ」

「そうか、魔法兵団には色々世話になったからな、たっぷりお礼をしておかなきゃな！」

「おい！あんまり痛めつけるなよ、このぼっちゃんにはやってもらう事があるんだからな」

「おうそうだったな、だが、ただで済ませるわけにはいかないな」

そこまで彼らの会話を聞いた所で、またもや僕は意識を失うことになりました。

次に意識を取り戻したのは、急に頭から水をかけられたせいだと思います。体中が痛み、意識がきちんと焦点を結ばない感じです。少し動くだけで、口から悲鳴が上がるのを避けることは出来ませんでした。

「よう、レーネンベルクのおぼっちゃん、また目を覚ました様だな。お前には少しやってもらいたい事があってな、それで目を覚ましてもらった訳だが」

目の前には桶の様なものを持った男が座り込むようにして、僕に声をかけて来ました。

「お前ら、少しやりすぎだぞ！これじゃあ、魔法なんて使えないだろう。まあいい、ぼっちゃんには、元素周期表とその試料を作ってもらうからな、精々身体を休めて置くんだな！」

そうして、僕は引きずられる様にして、地下室と思われる場所に連

れて行かれ、入り口には鍵がかけられ、そこには見張りが付いた様です。そんな事をしなくても、体中が痛くて、後ろ手に縛られているので、立ち上がることも難しいです。また、気を失いそうですが、その前にやっておくことがあります。

『キュベレー、待たせたね。でもあんまり無茶はしないでくれよ。ニルヴァーナが取り上げられたままなんだから』

『ラスティン、ほんとに大丈夫なのですかぁ？お姉様が捕らえられていなければぁ、こんな家なんてぇ』

『キュベレー、落ち着いて』

『はーいぃ、では行きますよぉ』

そのキュベレーの相変わらずの舌足らずの掛け声と共に、僕の真下の地面の感触がなくなると、僕は地面に吸い込まれてしまいました。咄嗟に息を止めたてまぶたを閉じたのですが、それが必要だったか分かりません。僕はいつの間にか、真っ暗な森の中に放り出されていました。ですが、近くにキュベレーがいる感覚だけはあります。

「キュベレー、世話をかけたね」

「ラスティンが無事ならぁ、それだけでいいですぅ」

「今の移動方法は何なんだい？」

「精霊の道というらしいですぅ。ラスティンに言われてぇ、兄様や姉様に話を聞いていた時に教わったのですぅ」

精霊の道か、何か思い付きそうですが、痛みが思考を妨げています。

「でもここでじっとしている訳にはいかないな、追っ手がかかるかもしれないし」

「いいえぇ、ここに居てくださいぃ」

「でもさっきの場所から、それ程離れた訳じゃないんだろう？」

「移動距離はぁ、３００メイル位ですぅ。でも援軍を呼んであるのですぅ」

僕はキュベレーの言う事を信じて、援軍とやらを待つことにしました。木にもたれかかりながら、少し眠るとかなり気力が回復した気がしました。

「来ましたぁ、ここですよぉ」

急にキュベレーが声を上げたので周囲を見渡すと、ライトの明かりを頼りに、何人かの人間が近付いて来るのが確認出来ました。

「エルネスト！ここだよ」

僕も安心したせいか大きな声を出してしまいました。

「スティン！無事だったんだな、テティスが騒ぎ出した時には何事かと思ったよ」

僕としてはあまり無事だとは思わないのですが、それでも拉致されて、五体満足な状態ならば贅沢は言えないでしょう。エルネストが

治療呪文をかけてくれたので、痛みが嘘のように引いて行きました。魔法って本当にありがたいと感じました。これは病気や怪我をした人間が、魔法による治療を受けて心の底から思うことなのかも知れません。

エルネストの他にも、友人達が駆けつけてくれた様で、口々に僕の無事を喜んでくれました。エルネストと友人達がこんなにも早く駆けつけてくれたのには、訳があります。エルネストは兵団の水メイジ達に治療魔法の指導を行うために、時々レーネンベルクに来てくれる事になっていて、今日が丁度その日だったのです。

「さて、拉致監禁犯を退治して来るか？」

僕の治療が終わったのを確認して、コルネリウスが何故か嬉しそうな声を上げました。

「済まないけど、あまり乱暴な方法は避けてくれよ。僕の杖が取り上げられたままなんだ。それに聞き出したい事もあるしね」

「分かった穏便にだな？」

コルネリウスの口から出ると、穏便と言う言葉も何故か不穏に聞こえてしまうのは何故なんでしょう？僕は彼らの仲間にメイジが居るかもしれない事を告げて、友人達の活躍を見守る事にしました。杖を持たないメイジって言うのは本当に役に立ちませんね。

キュベレーやテティスの助力もあって、拉致監禁犯たちはあっけないほど簡単に捕らえられる事になりました。僕もニルヴァーナを取り返して、それに参加しようとしたのですが、全く出番はありませんでした。

捕らえられた拉致監禁犯たちは、ほとんどが口をきけない状態でし

たが、その中に1人だけ無事？な者がいました。僕は彼を尋問する事にしました。杖を突きつけると、男は面白いように喋り始めましたが、語った内容はあまり楽観できる物ではありませんでした。男たちは、ゲルマニアのブルーデス伯爵という人物の指示で、僕に元素周期表とその試料を用意させるようにする為、今回の事件を起したそうなのです。ブルーデス伯爵といえば、モーランド侯爵領に接したゲルマニア側の領主だったはずですが、彼がこの事件の真犯人とは思えません。裏ではあの男が糸を引いているのでしょう。

僕たちは、拉致監禁犯たちを捕らえて、意気揚々とレーネンベルクに戻るはずだったのですが、帰り道で、無残な状態のモーランド侯爵家の馬車と、その周りの死体を発見してしまい、その気分がかなり暗くなってしまったのは避けられませんでした。

王城に今回の事件を報告してゲルマニアに抗議を伝えてもらえる様に依頼すると同時に、モーランド侯爵に家臣のクレマンさんの弔問の使者を送らなくてはならない様です。

第五十三話　ラスティン１９歳（モーランド侯爵からの使者来る）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１１／２４
欲しい－＜惜しい
に修正

第五十四話　ラスティン１９歳（カグラ・ミナモト来る：前編）（前書き）

第五十四話ＵＰします。

カグラ・ミナモトは誰なのでしょう？

第五十四話　ラスティン１９歳（カグラ・ミナモト来る：前編）

僕の拉致監禁事件は無事解決したのですが、その後の対応はあまり納得の行く物ではありませんでした。王城まで連行されていった、拉致監禁犯たちは、王城側に引き渡された途端に、金目当てだったと証言を変えてしまい、ゲルマニアに対する責任の追及は行われませんでした。（こんなことになるなら、話すことが出来なくなる位に痛めつけるべきでした）

モーランド侯爵へ送った、弔問の使者は丁重な扱いを受けたそうですが、このような事になってはこれ以上、レーネンベルクに迷惑をかけられないと言って、新しい事業を起こすことを諦めてしまいました。

これではまるで拉致監禁される為に、モーランド侯爵領へ出向いた様なものです。王城側にはもう少し頑張って欲しかったというのが正直な所です。

そういえば、僕が拉致された時にキュベレーが何故、直ぐに駆けつける事が出来なかったのかを話しておく必要がありますね。実は彼女にはハルケギニア中の地下を調査する方法を検討してもらっているのです。もちろん、”大隆起”に対応する方法を模索する為です。僕が知っている４人の転生者は誰も、”大隆起”について詳細を知らなかったので、地道に調査するしかないはずだったのですが、キュベレーの協力を得ることが出来たので、かなり効率的な調査が出来そうです。

それにあの事件の時に、キュベレーが使って見せてくれた、”精霊の道”が上手く使えれば、”大隆起”自体を押さえ込む事が可能になるかも知れません。キュベレーの兄弟達がどれ位、キュベレーの依頼を聞いてくれるか次第ではありますが。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

さて、のんびりキュベレーからの報告をまとめながら、いつもどおり書類の整理などをしていると、トリスタニア王城の使いが、ガリアからの使節を案内して来ました。これ自体は想定された物だったので、特に驚きはありませんでした。廃坑の噂が流れたワーンベル鉱山が現在でも細々とはいえ鉄鉱石を生産しているのは、関係者の中ではかなり不思議がられているのは有名だったりするからです。ですが、僕はガリアからの使節を見て驚きを隠せませんでした。正確には、その一団の中にいる１人の少女が僕の驚かせたのです。その少女は、似合わない大き目のキャスケット風の帽子をかぶっていましたが、その豊かな黒髪を隠し切ることは出来ていませんでした。

僕は使節の皆さんを採掘者の組合の方に任せて、その少女を代官の屋敷に招待することに成功しました。その少女は、僕の振る舞いに驚いた様子でしたが、何も言わず僕の後ろについて来てくれました。彼女を応接間に通して、人払いをすると、僕はおもむろに話しかけます。

「僕が、ラスティン・ド・レーネンベルクです。ようこそレーネンベルクへ、シェフィールドさん！」

僕は深く考えずこう彼女に話しかけたのですが、彼女の反応は？？？でした。

「貴方が、ラスティン様なのですね。ですがどなたかとお間違えになっている様です。私の名前は源・神楽と言います。こちら風に言うと、カグラ・ミナモトでしょうか？」

あれ？何か認識の不一致が起こっている感じがします。彼女が、シェフィールドであることは、首にかけているネックレスを見れば明白なのですが、彼女自身はシェフィールドというのを始めて聞いた様な反応を見せました。

「あの、カグラさんとおっしゃいましたか？　つかぬ事をお聞きしますが、貴女はジョゼフ王子の”使い魔”なのでしょう？」

「つかいまですか？　済みません、こちらの言葉には不慣れなものですから」

「えーっと、つまり王子と契約したのかという事なんですが？」

「契約と言いますと？」

「あー、端的に言えば、キス、いや、接吻を交わしたかという質問なんですが？」

「せっ！」

カグラさんは、真っ赤に（本当に耳どころか、首筋までピンク色です）なった上に、口を開けたまま絶句してしまいました。何でしょうこのカワイイ生き物は？

「はい、確かに契約を交わしました」

カグラさんは、真っ赤になったままでしたが、蚊の鳴くような声でそれでもしっかりと”契約を交わした”と言いました。僕は心の中で、”あのロリコン王子め～”と思いながらも、表面上はにこやか

にカグラさん（カグラちゃんと呼びたい気分なのですが）の話を聞くことにしました。

「それで、カグラさんはどうして、わざわざトリスティインまで？それに何故僕の所へ？」

「それなのですが、ジョゼフ様から頂いたこの首飾りを作ってくださったのは、本当にラスティン様なのですか？」

「ええ、そうです。良く似合っていますよ」

実際思っていた以上に、彼女の髪にルビーのネックレスは良く似合っています。

「それなのです！　それ程知り合いが多い訳ではありませんが、皆さんが、揃って”貴方の為に作られた物なんでしょう？”って言うんです。ですが、私がこれをあの方から頂いたのは、召喚されて直ぐだったのです」

カグラさんは、何故か少し不安そうに話を続けました。

「あの方は、私が召喚されるのを知らなかったとおっしゃいます。何故この首飾りが用意出来たのかお尋ねすると、ラスティン様が私に送るようにと言われたと聞きました。それで、ラスティン様の所へお訪ねしたいと思っていました。それで今回の使節に同行させてもらったのです」

ロリコン王子もネックレスの使い所は間違えなかった様です。しかし、似合い過ぎてしまうと言うのは想定していませんでした。妙な所で怪しまれてしまったのは、失敗だったかも知れません。

「確かに、僕がそのネックレスを、ジョゼフ殿下に差し上げたのですが、それをカグラさんにプレゼントしたのは、ジョゼフ殿下なのですよ？　その原因を僕に求められても、困ってしまうのですが？」

カグラさんは、むーっ！と言う感じで僕を見詰めています。その仕草もなかなか可愛らしいです。

「そんなに睨まないで下さい。では、こうしましょう。カグラさんは何か悩み事があるのではないですか？　よろしければ、僕が相談に乗って差し上げますよ？」

悩み事という所で、反応がありました。わざわざ外国まで来たのですから、何か事情があると思ったのですが、正解だったようです。

「私は、あの方の役に立ちたいんです！」

カグラさんは、急に大きな声で、こう話してくれたのですが、これでは全然話が見えません。

「あのカグラさん？　出来ればもう少し詳しく話してもらえませんか？」

「詳しくですか？」

それからカグラさんが、ぽつぽつと話してくれたことをまとめると、

・カグラさんは”根の国”という所の伝統ある神社の娘だった
・１５歳の誕生日に、信じられないことですが、生贄として龍神様に奉げられる所だった

・龍神が住むという洞窟に落とされた瞬間に、銀色の鏡の様な物が目の前に現れ、
　気付くと目の前に、ジョゼフ王子がいた
・最初は言葉が通じなかった為、混乱したが契約を済ませると、言葉が分かる様になった
・それでも不安そうにしていたら、ジョゼフ王子が優しく首飾りをかけてくれた
・それ以来、ジョゼフ王子の傍に居て、時々話をするだけである
・最初の1年はそれで満足だったが、最近はその状況に不安を覚える様になった
・自分に何か出来る事がないかと思い、何か手掛かりでもと、僕を訪ねて来た

という事でした。

僕が、カグラさんの話を聞いて、ジョゼフ王子を見直しました。（カグラさんに免じてロリコン王子と呼ぶのは止めておきましょう）
物語（歴史）と違って、二人の間には仄かにですが、絆と呼んでいいものが築かれつつあると感じます。ですが、二人の間には試練の時期が来ている様です。カグラさんの話からは、ジョゼフ王子がカグラさんを本当に大切にしている事が、よく分かるのですが逆に大切にし過ぎている事が問題の様です。やっぱりアナベラ様のことを引きずっているのでしょうね。
個人的には、王位継承権争いが決着するまでは、あまりガリアには干渉したくないのですが、かといって僕をわざわざ訪ねて来たくれたカグラさんをこのまま帰すのも論外でしょう。

「カグラさんは、アナベラ様という名前を聞いたことがありますか？」

僕は意識的に声を低くして、こう尋ねてみました。

「アナベラ様ですか？　さあ、聞いたことがありませんが、ガリアの方なのですか？」

「イザベラ様のお母様に当たると言えば、分かりますか？」

カグラさんの表情が暗くなってしまいました。

「そうですよね、イザベラ様という娘さんがいらっしゃるなら、奥様が居て当然ですよね？」

僕は、カグラさんの様子の変化に気付かない振りをしながら、ジョゼフ王子とアナベラ様の関係を、なるべく感情を挟まない様に話し聞かせました。

「そうですか、あの方にそんな事が・・・」

カグラさんが、そうぽつりと呟きました。

「私は、私はどうしたら良いのでしょうか？　アナベラ様のようにあの方との思い出もなく、あの方を支えるだけでは、私は・・・」

くっ！説得失敗の様です。”アナベラ様のように、ジョゼフ王子を支えて行きます”と言わせたかったのに、カグラさんは見掛けより、ずっと熱い心を持っているのですね。性格を読み違えたのかも知れません。こうなると、あのカードを切るしかないのでしょうか？

折角、ジョゼフ王子がカグラさんの事を”シェフィールド”では無く、一人の女性として扱っているのに、こんな事をしたら、逆効果なのではないかという考えも頭を過ります。ですが、二人の関係を

このまま放置しておくのもあまり良くない結果をもたらしそうな予感もします。

「カグラさん、貴方の今の身分はどんな物ですか？」

「えーっと、ジョゼフ様付きの女官でしょうか？」

「お願いしたら、僕が推薦する人間をもう一人、ジョゼフ殿下付きの女官として雇って頂けますか？」

「はい、それ位なら、ジョゼフ様も”友人の一人位は居てもいいのではないか？”とおっしゃっていましたから」

友人ですか、それなら好都合です。良し、決めました！　公立学校か、魔法学院辺りで、カグラさんと相性の良い人材が見つかると良いのですが。

「ガリアからの使節の視察は数日かかると思うので、これから僕の心当たりの場所で、友人候補の女官になる人物を探しに行きましょう。その人物を見つける事が出来れば、僕はカグラさんに良い事を教えて差し上げましょう」

「本当ですか！」

カグラさんは無邪気に喜んでいます。僕がどんな事を決心したか知らないままに。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

翌日、カグラさんの希望で、僕たちはレーネンベルク公立高等学校へと来ています。最初は、公立学校の方へ行くつもりだったのですが、カグラさんが同じ年の方が良いというので、高等学校の方へ来る事になりました。（カグラさんは実は17歳でした。エレオノールと同年代とは信じられないです。前世で東洋人が若く見えるというのはこんな感覚だったのかも知れません）

まず、ローレンツさんのいる理事長室を目指します。カグラさんを廊下に待たせて、先ずは僕だけが部屋に入ります。ノックをすると、ローレンツさんから返事があったので、そのまま入室しました。

「おはようございます、理事長先生」

「ははははっ、理事長先生は止してくだされ。生徒から呼ばれるなら嬉しいのですが、ラスティン殿に呼ばれると、何とも違和感が」

僕もほんの数ヶ月前までは、立派な生徒だったんですけどね。

「失礼しました、ローレンツさん」

「それで、急な来校には、どんな理由があるのですかな？」

「今日は用件から入るんですね」

「今日は理事長としてお話していますからな、何でしたら今から、商人としてお話しましょうかな？」

「いえ、今日はお客様を連れているので」

「おお、そうでしたか。それならば、一緒に入っていただければ、

良かったでしょうに」

「先に、ローレンツさんにお話しておかなくてはならなかったので、実は・・・」

それから、僕は自分の覚悟の話も含めて、カグラさんの事をローレンツさんに話しました。最初は難しそうな顔をしていたローレンツさんでしたが、話が進むと何故か呆れ顔になってしまいました。ですが、何とかカグラさんの友人候補を探す事に同意してくれました。といっても、大勢の生徒の中から、探すのは時間的に無理そうなので、ローレンツさんの人を見る眼を信じて、向いていそうな女生徒を推薦してもらう事にしました。

乱暴な方法だと言うのは分かっているのですが、隣で友人が出来るとワクワクしているカグラさんの様子を見ると、まあいいかという気分になって来ます。しばらく、理事長室で待っていると、ローレンツさんが3人の女生徒を連れて戻って来ました。

その3人は良い意味で、面白い組み合わせでした。3人は身長でいえば、大中小という組み合わせでしたが、髪の色はみんな同じ様なブラウンでした。顔の造作を言えば、皆さんなかなか可愛いですが、そこに浮かんでいる表情は、無表情，おどおど，笑顔とそれぞれでした。そして、スタイルも大中小と、ごほん！

やはり、カグラさんの友達を探しているので、カグラさん自身から質問してもらった方がいいでしょうね。

「カグラさん、皆さんに聞きたいことはありませんか？」

「そうですね～」

カグラさんは、嬉しそうに幾つかの質問をしました。その中には、

僕がちょっとと思うような物も混じっていました。（これは、神社の娘という生まれに起因するのか、カグラさんの個性なのかちょっと不安になりました）

そして、質問の答えを聞き終えると、カグラさんは一人の生徒を選びました。身長が高くて、おどおどした表情で、スタイルはまあまあの生徒でした。僕には何故彼女が選ばれたのか良く分かりませんでしたが、カグラさん自身の選択なので、口を挟まないでおきました。

僕はそれより、何故か一人の女生徒の事が気にかかっていました。その女生徒は、ちっちゃくて、無表情で、スタイルはノーコメントな女生徒だったのですが、カグラさんの質問にも最低限しか答えず、気のせいかずっと僕を睨んでいる様な感じを受けていたのです。機会があれば、ローレンツさんにあの娘の事を聞いてみたいと思います。

僕は、カグラさんが選んだ友達候補の事を、ローレンツさんに一任して、カグラさんと屋敷に戻る事にしました。屋敷に帰ったら、あまり気が進みませんが、カグラさんに彼女のルーンの事と僕の決意を話さなくてはなりません。

第五十四話　ラスティン１９歳（カグラ・ミナモト来る：前編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１１／２７
とう所－＜という所
に修正

第五十五話　ラスティン１９歳（カグラ・ミナモト来る：後編）（前書き）

第五十五話ＵＰします。

第五十五話　ラスティン１９歳（カグラ・ミナモト来る：後編）

僕は、カグラさんを連れて屋敷まで戻ると、そのまま応接室に向かいました。カグラさんは、応接室で一対一になると、

「ラスティン様、約束ですよ。良い事というのを教えてください」

とせがんで来ました。

「そうですね、でもカグラさんには是非聞いて欲しい事があります。実はカグラさんに、良い事を教えるに当たって、決心した事があります」

「決心ですか？」

「そう決心です。カグラさん、貴方とジョゼフ王子を何としてでも殺すと言う決心です」

「ヒィッ！」

カグラさんが、しゃっくりの様な短い悲鳴をあげました。それはそうでしょう、この時僕はほとんど本気で殺気を放っていたと思いますから。

「もちろん、無条件で貴方を殺そうなんて言いません。ある条件が整ってしまった時だけです。その条件と言うのを知りたいですか？」

「・・・、はい」

カグラさんは、声にはっきりと怯えを滲ませながら、それでも答えてくれました。

「その条件は、ジョゼフ王子が貴方を道具として何かを命じて、そして貴方がそれを受け入れた時です。その時、僕は全てを捨てて、貴方達にとっての死神になります。はっきり言って、先程貴方が指名した女生徒は僕が送る監視役です」

「ラスティン様には、沢山の優秀な部下がいると聞いています。彼らも私の命を狙ってくるのでしょうか？」

「いいえ、これは僕個人の問題です。彼らには一切干渉させないこと約束しましょう。ですが、僕、いえ僕と僕の使い魔は手強いですよ」

「ふふっ」

僕はかなり本気で言ったはずなのですが、カグラさんからは何故か笑い声が零れました。あれ？迫力不足だったんでしょうか？

「ラスティン様は、ジョゼフ様がおっしゃった通りの方なのですね」

ジョゼフ王子には、かなり生意気な事を言った記憶があるので、彼が僕の事を何と評しているかは大体想像がつきます。僕は黙ったままでしたが、カグラさんは気にした様子も無く、話を続けました。

「あの方は、ラスティン様の事を、”あの馬鹿者”と言うんですよ」

カグラさんは何故か”あの馬鹿者”の所を、ジョゼフ王子の口真似らしきものまでして、嬉しそうに話してくれました。あのカグラさ

ん？貴方の国では知りませんが、こちらでは、馬鹿者と言う言葉に、言われて喜べるような意味は全く無いんですよ？（あ！でも昨日僕はジョゼフ王子の事をロリコン認定していましたね、まあお互い様と言った所なのでしょう）

「あの方の周囲は、敵だらけなので、言動にはかなり気を使っていらっしゃいます。セザール様や、バルドー子爵様といった気を許せる方々もいらっしいますが、あの方は彼らの前でも、決して言葉遣いを崩したりなさいません。ですが、私と二人っきりの時には、時々愚痴を零されます」

何か惚気話になって来た気がするのは気のせいでしょうか？

「その時、弟のシャルル様や、その取り巻きの貴族の方々を、あの方が”馬鹿”と表現される事がありますが、ラスティン様の事を、”あの馬鹿者”と呼ぶ時とは、全く感じる物が違うのです」

主と使い魔の関係を考えると、カグラさんの言う事は本当なのでしょう。あのジョゼフ王子が僕の事を好意的に考えているとは信じられないですが。

「いいえ、私が言いたいのはそんなことでは無くて、ラスティン様が、優しくて、真っ直ぐで、責任感の強い方なんだと、私が感じたということなのです」

カグラさんの言葉を聞いて、思わず顔をしかめてしまいました。少なくとも貴方を殺すぞと宣言した人間を評する言葉で無いのは確かです。

「そんな嫌そうな顔をなされなくても。それより、そろそろ、良い

こととというのを教えて下さい」

「分かりました、ですが最後にお願いです。これからお教えすることについて、僕に一切尋ね事をしないで下さい」

「はい、お知恵を借りられるだけでも、助かりますから」

ここでは、本当なら、最後の意思確認を行う所なのでしょうが、カグラさんの笑顔を見ていると馬鹿らしくなってしまったので、省略する事にしました。僕は、上着のポケットから、ある物を取り出して、カグラさんに見せました。

「何ですか、この石は？」

「これは、会議の時に使う、マジックアイテムです。カグラさんは見たことが無いですか？」

「そういえば、バルドー子爵様がお持ちになっていたかも知れません。その時は何故、石を大事に持ってるんだろうと思いました、マジックアイテムだったのですね」

あれ？魔法大国のガリアなら、これ位の物ならゴロゴロしていそうなんですけどね？

「でも、ジョゼフ様は、マジックアイテムがあまりお好きでは無い様なのです」

お！これは良い事を聞いたかも知れません。カグラさんが今まで、ミョズニトニルンの力を自覚しなかったのは、ほとんど王宮に居なかった事と、ジョゼフ王子がマジックアイテム嫌いだったせいなの

かも知れません。

「カグラさん、貴方にお教えできるのは、ジョゼフ殿下が嫌いなマジックアイテムに関する事なのですが、それでも構いませんか？」

「はい、あの方がマジックアイテムを嫌うのと、私があの方に何かして差し上げたいと言う気持ちは別ですから」

こう言い切った、カグラさんを見て、この”シェフィールド”なら大丈夫という予感がしました。

「では、カグラさん。このマジックアイテムを手に取って下さい」

カグラさんは、僕の手の中の”石”を恐る恐る手に取ります。すると、カグラさんの長い前髪の隙間から、ルーンが輝いているのが確認出来ます。

「これが、私の力・・・」

カグラさんが、呆然としながら声を出すのが分かりました。

「そうです、それが貴方の使い魔としての能力です。何が分かりましたか？」

「はい、これは”音の記憶者”と呼ばれる、マジックアイテムなのですね。働きは、周囲の音を蓄えて、再生するですか。あれ、でも？」

「え、どうかしましたか？」

「いいえ、何でもありません」

さすが、ミョズニトニルンの力ですね。機能だけなら兎も角、名前まで分かるとは思っていなかったです。

「でもどうして、ラスティン様は、私の力についてご存知だった、あ！これは聞かない約束でしたね」

「はい、そうして下さい。それから先程、私が言った決意は、何時でも有効ですから、心がけて下さい」

「はい！分かってます」

うーん、何故嬉しそうなのでしょうか？カグラさんの思考が読み切れないのが不安要素ですね。でもカグラさんならば、ミョズニトニルンの能力を建設的な方向に使ってくれると思います。

カグラさんは、余程ミョズニトニルンの能力が嬉しかったのか、翌日には使節とは別にガリアに戻って行ってしまいました。護衛は、魔法兵団から出す事になってしまいました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

その翌日に、ローレンツさんが、カグラさんの友人候補の女生徒を連れて、ワーンベルを訪ねてくれましたが、カグラさんがもうガリアに発ったと聞いて呆れていました。その女生徒（クロディーという名前でした）は、１度ワーンベルで預かって、ガリアの使節と同行してもらう事になりました。

「クロディー、貴女には、大変な事をお願いする事になってしまって、申し訳ありません」

「いいえ、ラスティン様、頭をお上げ下さい。私はもともとガリアという土地に興味があったのです。学校を卒業したら、外交官の助手にでもなってガリアを訪問する予定でしたから。少し予定が早まったと思えばどうという事は無いですよ」

クロディーとしては、外交官としてガリアに行きたかったのでしょうが、外交官は基本的に貴族なのが前提なので、助手と言っているのでしょう。

「でも、王子様付きの女官なんて、少し信じられません。これで、宮廷作法を覚えたのも無駄にならなかったですね」

王子様付きにあまり期待しない方が良いと思いますが、宮廷作法まで覚えていたのには驚きました。外交官の夢は本気だったんですね。僕はとある人物（まあ偽りの兄ですね）から聞いた、外交官の話などをクロディーに聞かせました。一頻り外交官の裏話で盛り上がった所で、

「ラスティン様、それにしても私は、カグラちゃんの友人になれば良いだけなのですか？」

かっ、カグラちゃんだと！この僕もこっそり心の中でしか呼んでいないのに、こんなに簡単に！

「え、ええそうです。カグラさんは、ガリアでも重要な人物になるはずです。その人物の動静を知っておくのは、我が国としても必要な事ですから」

「あのカグラちゃんが、重要な人物ですか？　でもそれなら、スパイなどを送り込む方が良いのでは？」

「無論、スパイも公式の使節も送り込んでいますし、これからも送り込む事になるでしょう。ですが、貴女にお願いしたいのは、そういう事では無いのです。貴方に頼みたいのは、カグラさんの友人として、彼女が不幸になる可能性を出来るだけ低くして欲しいのです」

「ラスティン様には、婚約者の方がいると聞いていましたが？」

「もちろん僕が愛しているのは、エレオノールだけですよ。カグラさんに感じているのは、妹やペットに感じる様な保護欲といったら良いかも知れません」

エレオノールの名前が出た所でクロディーの顔が少し悲しそうになりましたが、それ以降の話を聞いて、その表情ががらりと変わりました。

「やっぱりラスティン様も、カグラちゃんの事は可愛いと思いましたか？」

「ええ、もちろん！あのコンパクトさが何とも」

「そうですよね！私なんかこの通り背が高くて損をすることが多いので、本当に羨ましいです」

「それに、あの髪、素敵だと思いませんか？」

「そうそう、黒髪なんて珍しいですけど、つやつやでしたからね」

・・・

こうして、僕とクロディーの間には、本人の全く知らない所で、”カグヤちゃんを守ろう”同盟が結ばれたのでした。

それにしても、カグラさんの事を考えると、使い魔と主人の関係について考えさせられますね。キュベレーにも、今度、調査から帰って来たら、何かプレゼントを贈る事にしましょう。小さめのブレスレットをイメージすると丁度良いのかも知れません。問題は、キュベレーがそれを身に着けられるかですね。

結局用意した、というか錬金したブレスレットは、案の定キュベレーが身に着ける事が出来ずに、キュベレーが首飾りを精霊化?という事をすることで、やっと渡すことが出来ました。

第五十五話　ラスティン１９歳（カグラ・ミナモト来る：後編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

さて、カグラちゃんは如何だったでしょうか？
彼女がこうだと彼の方はどうなるんでしょうね？

２０１０／１１／２７
高いくて－＜高くて
に修正
首飾りを
を追加

第五十六話　ラスティン１９歳（エルフの少女来る）（前書き）

第五十六話ＵＰします。

第五十六話　ラスティン１９歳（エルフの少女来る）

昼食を終えて、午後の政務（格好良くいっていますが、実は書類整理です）に入ると、マルセルが何か微妙な顔をして僕に来客を告げてくれました。その人物はローレンツさんからの紹介状を持っていたというので、見せてもらった所、内容をまとめると、

・この人物の素性は保証致します
・詳しい話は本人からお聞き下さい
・大変重要な人物なので、丁重に対応下さい
・ラスティン殿のお役に立つと思います

と、簡潔に書かれているだけでした。ローレンツさんらしくも無く、頭語や日付なども書かれていないのが気になりましたが、それより最後に”驚きますぞ”と口語で書かれていたのがもっと気になりました。

「それで、その人物と言うのはどんな方だったのですか？　以前来た方のように、フードで顔を隠しているとかですか？」

「いいえ、そう言う事はありませんが、門番達の言葉を借りるなら、”老婆が農耕馬に乗って颯爽と現れた”そうなのです」

「はい？」

老婆が農耕馬に乗ってまでは、あまり聞かない話ですが、有得ない話では無いと思いますが、颯爽と言われると頭を傾げたくなります。マルセルも困った表情をしています。

「まあ、良いでしょう。素性は確かの様ですから、直接会いましょう。その方は応接室ですか？」

「はい、お通ししてあります」

僕は、少し不安を覚えながらも、応接室へ向かいました。ドアを開けて中に入ると、確かに老婆と呼べる女性がソファーに腰掛けて、待っていました。ただ、その格好が、尋常ではありませんでした。これから農作業に行くと言われれば、信じてしまう様な格好だったのです。少なくとも、貴族に会いに来る格好ではありません。もしかして試されているのでしょうか？

「お待たせしました。僕が、この町の代官をやっています。ラスティン・ド・レーネンベルクです」

「えへへっ、待ちきれずに、こちらから来てしまいました」

「はあ？　失礼ですが、どちら様ですか？」

僕がこんな反応をしたのは、話された内容と、老婆？から発せられた声に驚いてしまったからです。聞いた限りでは１０代でも通用する若々しい、ハリのある声だと思います。

「あらら、ローレンツのおじ様は、お手紙に何も書かれていなかったのね。仕方の無い方です」

彼女はそう言って、額から何か外す様な仕草をすると、彼女の姿があっという間に、変化しました。変化が終わるとそこには、一人の少女、そうそれも絶世といっても過言ではないと思われる美少女が現れました。ただしその美貌は美しく、繊細過ぎて、触れるのを躊

躊わせる程でした。僕が驚いて、呆然としているのを誤解したのか、彼女がこう語りかけて来ました。

「驚かせてしまいましたか？　あなた方の中にも変装の魔法があったと思ったのですけど、それともエルフを見るのが始めてなのですか？」

エルフと聞いて、彼女の耳を確認すると、確かに普通の人間より長い物でした。

「失礼しました。確かにエルフの方を見るのは始めてです。出来ればお名前も教えていただけますか？」

「私は、クリシャルナ。私達の中では、レイハムのクリシャルナで通っています」

「そのクリシャルナ様が、僕に何の御用でしょう？」

「あら、それはおかしいわ。ラスティン様が、私に会いに来て下さると仰ったんじゃないですか？　ローレンツのおじ様から手紙を受け取って、ずっと待っていたのに一向にいらっしゃらないから、こちらから出向いて来たと言うのに」

僕は慌てて最近の出来事を、思い出して行きますが、全く心当たりがありません。僕がローレンツさんに頼んで手紙を書いてもらった？そんな事が・・・、ありました。でもあれは、３年以上も前だったはずです。クリシャルナさんの言い方は、ごく最近の約束の様に聞こえたのですが、僕がローレンツさんに頼んだエルフ絡みの話は他に無かったはずです。

「長い間、お待たせして、申し訳ありません」

「もう4年ですね、私エルフの中では気が短い方なので、ちょっと我慢が出来なくって」

エルフの時間感覚が少し怖くなった台詞でした。本人が気にしていないのなら問題無いのでしょうか？でも、あの時は色々あって、その後のケアを全くしていなかったのは、失態でした。ここはきちんとした形で、誠意を見せる必要があるのかも知れません。

「クリシャルナ様、ご迷惑をおかけしたお詫びに、何かさせて頂けませんか？」

「何かですか？　そうですね、では！　クリシャルナ様と言うのを止めてもらえませんか？」

「それでは、クリシャルナさ」

「もちろん、さん付けもダメですよ？　呼び捨てにして、敬語や丁寧語も止めて下さい。あ！　クリシャルナちゃんなら歓迎ですよ」

先手を打たれてしまいました。敬語や丁寧語まで禁止されると、なかなか話難いのですが、ここは妥協しなくてはいけない様です。

「分かったよ、クリシャルナ。でも、公的な場所では、勘弁してくれよ」

「ええ、その辺りは任せるわ、よろしくラスティン！　貴方とは良い友達になれそう」

「ああ、よろしく、クリシャルナ」

僕とクリシャルナは、互いに握手を交わしました。エルフにも握手の習慣があるのですね。

「ラスティン、貴方は人間なのに精霊と契約しているんですってね。良かったら会わせてもらえる？」

「良いよ、ほら」

僕は腰にさしてある、ニルヴァーナをクリシャルナに見せます。最初は訝しげだった彼女でしたが、ニルヴァーナが、

「私の名前は、”ニルヴァーナ”、よろしくクリシャルナ」

「まあ！　こんなに小さいのにちゃんと精霊がいるのね。始めまして、ニルヴァーナ」

と気軽に挨拶を交わしました。精霊を友とすると聞いているだけに、ニルヴァーナのこともきちんと認識出来る様です。

「あら？　この娘、木の精霊よね。ラスティンの契約精霊は、大地の精霊だって聞いたんだけど？」

「それは、キュベレーの事だね。彼女は少し調査に行ってもらっているんだ」

「そうなの？　今度会わせてね」

「ああ、覚えておくよ。それより、これからどうする？　良かった

らこの町を案内するけど」

「ええ、お願い。さっきの格好だと、人に声をかけると変な顔をするのが嫌だったの」

それはそうでしょうね、僕もはっきり言って、物凄く違和感を覚えましたから。

「でもどうして、さっきの格好をしていたんだい？」

「レイハムを出て始めに会った人間の姿を写させてもらったの、何か問題があった？」

「いや、少しね。もしかして馬もそうなのかな？」

「ああ、アイラールの事？　その人が連れていた馬に変装してもらったわ。嫌がっていたけどね」

「やっぱり、普通の馬じゃ無いんだ。もしかして飛んだりするのかい？」

「あら、良く分かったわね。あの子はペガサスなの。この辺りでは、さすがに飛べなかったけどね」

大体話が見えて来ました。老婆が農耕馬に乗ってではなく、クリシャルナがペガサスに乗って、颯爽とこの屋敷を訪問したという訳なんですね。ギャップが何とも言えないです。

「もしかして、また変装した方が良い？」

「うーん、耳だけを隠すとかは出来るのかい？」

「あ、それは無理、これは相手の姿を写し取るだけだから」

町の皆さんを信じる事にしましょう。僕が一緒ならば、大した問題は起こらないはずですから。

「まあ、そのままで良いさ。少しは騒ぎになると思うけど、すぐに治まると思うから我慢してくれるかな？」

「少しね。エルフが町に現れて、少しで済むのかしら？」

「僕と一緒にいれば、問題は起こらないと思うよ」

「へぇ～、随分と自信があるのね。頼りにさせてもらうわよ！」

こうして、ワーンベルの町へと繰り出すことになりました。町の人達は、僕が一緒だったと言う事もあり、概ね好意的に、クリシャルナを受け入れてくれました。最初は緊張気味だった彼女も、だんだん笑顔を見せてくれる様になりました。町の人達も最初はエルフだと言う事で、臆した様子でしたが、クリシャルナの性格もあり直ぐに笑顔で対応してくれる様になりました。

まあエルフに商品を値切られるという経験はそうそう出来るものではありませんから、良い経験をしたとか思っているのかも知れません。クリシャルナの方も、「わぁ～」とか「へぇ～」とか「ふ～ん」とかしきりに感心しながら町の中を散策していました。

中でも、クリシャルナが一番気に入ったのが、旅芸人達の芝居でした。ワーンベル程の町でも、常設の芝居小屋などは無いのですが、その代わり何時も何処かの旅芸人が来ているのが慣例になっていま

す。運悪く途中からしか芝居を見ることが出来なかったのですが、クリシャルナはそれだけで満足出来ずに、丸々もう一度最初から見ると言い出しました。
そこまでは、考慮の内だったのですが、さらにもう一回見るとクリシャルナが言い出したのには、まいってしまいました。結局、終幕まで見ることになってしまいました。

「人間ってすごいわね」

「何処がだい？」

「だって、何でもない小道具だけで、あそこまで色々な人物を演じられるなんて。ちょっと信じられないわ、私の変装がどれだけ可笑しかったか思い知らされる感じかしら？」

今日見た旅芸人達の芝居は、それほど優れた物では無かったと思いますが、クリシャルナにとっては何か感じる物があった様です。老婆の格好で、颯爽とした振る舞いをしてしまうクリシャルナには、良い手本だったのかも知れません。

「でも、人間って不思議ね。ちょっと前にこっそり人間の町に行った時には、すごい騒ぎになったんだけど、今では普通に私が受け入れられるなんて、思っていなかったわ」

「まあ、今でもちょっとした騒ぎにはなると思うよ」

ちょっと前と言うのが、何年前なのか聞きたくなりましたが、聞かぬが花なのでしょうね。

「この町は特別と言う事？　それとも貴方と一緒だったからなのか

しら？」

「さあ、どうかな？　明日また、一人でここに来て見ると分かると思うよ」

「いいの？　本当に？」

「ああ、今日の君の振る舞いを見させてもらったけど、君なら大丈夫だと思う」

「ありがとう！」

＞ｉ１８９８１―２０９０＜

そう言って、クリシャルナは僕に抱きついて来ました。このフレンドリーエルフにも困った物ですね。クリシャルナは翌日から、元気に一人で町に出かける様になりました。僕としてはこっそり護衛を付けた訳ですが、それも報告によると全く必要無かったそうです。クリシャルナは、芝居をいたく気に入った様で、旅芸人の一座に弟子入りして、修行を始めてしまいました。代官の屋敷に部屋を用意したので、帰って来ては修行の成果を報告してくれるのを聞くのは、ちょっと面白い物でした。逆に町の人達も、エルフに対する偏見を、完全に捨て去った様です。

まあ、一座の人達から演技?について酷評されて、半泣きになりながら大通りを駆け抜けていく姿を見れば、大抵の人が微笑ましく思うのでしょうね。

数日後、クリシャルナが妙な事を聞いてきました。

「ラスティン、少し聞きたいんだけど、エレオノールって誰?」

「ん？　僕の婚約者だけど、何処でその名前を？」

「うん、ちょっと町で小耳にはさんだの。その歳で婚約者が居るなんてすごいわね」

「そうかな？」

「私も後２００年位したら、婚約者が出来るかもね」

クリシャルナは町でどんな噂を聞いたんでしょうね？

ちなみに、ローレンツさんの紹介状にあった、”ラスティン殿のお役に立つと思います”は、今のところ、意味不明な言葉だったりします。

第五十六話　ラスティン１９歳（エルフの少女来る）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／２／２４
あれを追加

第五十七話　ラスティン１９歳（発明家少女来る）（前書き）

第五十七話ＵＰします。

第五十七話　ラスティン１９歳（発明家少女来る）

クリシャルナが修行？を終えてトリステインを見て回ると言うことで、旅立ったのと入れ替わる様に１人の人物がまたしても僕を訪ねて来てくれました。今回も、ローレンツさんの紹介状を持ってきたと言うことで、また変わった人物が来たのではないかと心配しましたが、マルセルさんの態度を見た限り、特に問題は無いと思えました。

ローレンツさんの紹介状には、”詳細は書けませんが、ラスティン殿の役に立ってくれるはずです”としか書かれていなかったので、少し心配なのも事実です。

応接室に待っていたのは、ほんの１２，３歳の少女でした。明るい蜂蜜色の髪に、クリッとした目が特徴的です。身に着けているワンピースはかなり高級そうな作りになっています。護衛と思える男性を連れている事を見ても、良家の令嬢といった雰囲気です。ですが、そのクリッとした目と視線が会った瞬間に、ただの少女では無い事がなんとなく分かってしまいました。そこには年齢に似つかわしくない、明確な知性が感じられました。

「お初にお目にかかります。ラスティン・ド・レーネンベルク様、私はミネットといいます。ホラント商会会長サミュエルの娘です」

ホラント商会というのは、トリステインの南西部を拠点とする老舗の商会だと、ローレンツさんから聞いた記憶があります。

「こちらこそ。よろしく、ミネットさん。それで、僕に何の御用でしょうか？」

「私の様な小娘にさんは不要です。用というならば、こちらに伺えば面白い物が見れるとローレンツ様にお聞きしたからですが、どちらかというと私に御用なのは、ラスティン様の方だと思うのですが？」

僕がこの娘に用がある？心当たりはありませんが、クリシャルナの時の事もあったので、冷静にかなり過去まで遡って考えてみます。

「心当たりがありませんか？　すこし意地悪でしたか？　”もしこの文が読めるなら、店主にお知らせ下さい。合言葉は地球です”、こう言えばお分かりでしょう」

日本語の部分は、ぎこちなかったですが、それでも十分聞き取る事が出来ました。これは、僕が以前ローレンツさんに依頼して、商会の看板等に書いてもらった内容そのものでした。
僕は慌てて、マルセルさんに目配せをして、応接室から出てもらいました。ミネット嬢の護衛の方も同時に部屋を出て行きました。

「ミネット、君が僕達と同じだと言うのは分かったんだけど、前世ではどんな人間だったんだい？」

「私は、丹羽保（にわたもつ）といいました。発明家でしたね、自称が付くかも知れませんけど」

「丹羽保？　男みたいな名前だね」

「え？　もちろん男性でしたよ」

「そうなんだ、大変だったね」

「いえ、男性と言うのが良く分かって、良かったです」

ミネット嬢は、わざとらしく”ふぅ～”とかため息をつきました。
若い女の子には、少し刺激が強すぎたのかも知れませんね。

「それは大変だったね。そういえば、面白い物とは何でしょうか？」

僕は、話をそらす事にしました。

「ああ、竜の羽衣ですよ。こちらにあると聞いたのですけど」

あの置物ですね、燃料まで用意したのに、動かし方が全く分からずに、この屋敷で放置されていたりします。機首の７．７ｍｍ機銃から取り出して、生産が可能になった弾丸は、武器マニアの友人セレナの協力と僕の前世の記憶を頼りに、ボルトアクション銃に似た銃を作成できるまでになりましたが、本体の方は完全に置物状態です。個人的にはばらしたいのですが、再度組み立てられる自信がないので、どうしようもないです。

「それで、ミネットはあれをどうするつもりなんだい？」

「もちろん、分解（ばら）しますよ」

「大丈夫なのかい？」

「私の腕をお疑いですか？」

「腕は見せてもらわないと分からないけど、君みたいな小さな女の子が、重い機械を扱うのはちょっとね」

「それもそうですね」

ミネットは自分の小さな手を見ながら頷きました。

「そうだ、助手がいれば！」

「助手？　さっきの護衛の男性ですか？」

「ダメでしょうか？」

「これは希望なんだけど、出来れば機械に詳しい人が良いと思うんだ。出来れば、ゼロ戦の技術をこの世界でも使える様にしたくないかな？」

「それは、そうですね。でも機械に詳しい人と言われても。あ！あの人なら、いいかも知れません」

「知り合いかい？」

「いいえ、でも貴方は知っているんじゃないですか？　ミスタ・コルベールですよ」

ミネットの考えは、僕も考えた事がある話なので、尤もだと思います。問題は、コルベール先生の方にあった訳なんですが、あれから時間が経っている事もありますから、再度アタックしても良いかも知れません。今度は堂々と、レーネンベルクの名前で協力を要請することにしましょう。

「分かった、そっちは当たってみるよ。ミネット、君にはそうだね、少し腕前を見せてもらおうかな？」

「望むところです！」

ミネットには、ゼロ戦の機首機銃をばらしてもらうことにしました。２門ある機銃なので、もしもの事があっても大丈夫ですし、上手くいけば生産可能になった、７．７ｍｍの弾丸も使用できるはずです。

僕は、早速ミネットをゼロ戦が置いてある倉庫に案内しようと思ったのですが、ミネットは着替えると言い出したので、とりあえず客間の１つを使ってもらいました。着替え終わって、姿を現した彼女に二重の意味で唖然とさせられました。

ミネットは何故か、つなぎの上に白衣を羽織っていたのです。その上、言葉遣いが全く変わってしまっているのです。

「ラスティン、それじゃあ、ゼロ戦の所に案内してくれるか？」

「え？　ああ、ついて来てくれるかい」

僕が変な顔をしているのに気付いたのか、ミネットが笑いながら言いました。

「ああ、この言葉遣いか？　この格好をするとスイッチが入るらしいんだ」

どうやら、ミネットには言葉遣いだけが問題らしいです。僕としては、その容姿と服装と言葉遣いのアンバランスさが不安を誘うのですが。

「その服は、どうしたんだい？」

「もちろん自分で縫ったさ、俺が器用だって事は分かるだろ？」

「まあね・・・」

「まだ納得しないのか？　まあ任せてくれよ」

ミネットはそう言って、僕の背中をバンバンと叩きました。（全然痛くは無かったですけど）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

僕達は、ゼロ戦が置かれている、倉庫までやって来ました。

「これがゼロ戦か～」

ミネットが感慨深げに呟きました。でも、その手がワキワキしているのをみると、釘をさす必要を感じました。

「ゼロ戦本体は、また後だよ。今日は、機銃を分解してもらいたいんだ」

「機銃？　まあ小手調べには丁度いいかもな」

そう言いながら、機首を覗き込んだミネットでしたが、直ぐに動きが止まってしまいました。そして、ゆっくり振り返ると、

「ラスティ～ン」

等と言いながら、駆け戻ってきました。（ん？何処かで聞いた事の

あるイントネーションでしたね。僕は猫型ロボットとかでは無いのですが）
大体事情は想像出来ますが、一応聞いてみます？

「どうしたんだい？」

「工具が、レンチやドライバーやペンチが無いんだ！」

やっぱりでした、ミネットはどう見ても手ぶらでしたからね。あの自信は何処から出た物なのでしょうか？僕が倉庫の隅の箱から、工具を取り出すとあっという間に、ミネットに持ち去られました。ですが、再度機首を覗き込んだミネットが、情けない声をあげました。

「ラスティ～ン」

僕は青くもないし、耳もちゃんとありますよ？でも、工具を確認もせずに持ち去られては、対処のしようがありません。この工具は、ほとんど形だけのものだったりします。ドライバーは＋も－もない状態ですし、レンチも調整が必要なのは分かっていました。（へたにちゃんとした工具を用意してしまうと、本気でばらしてしまいそうだったので）
僕は、成形（フォーム）で工具を調整して、ミネットに渡すと、嬉々として機銃の取り外しを始めました。
ですが、ミネットは、

「ふぬ～」
「うりゃ～」
「どせ～」

とか、掛け声だけあげるのですが、全然、機銃が取り外されません。

やっぱり無理だったのかと思った頃、

「ラスティ～ン」

とまた話しかけられました。”それはもういい”と口に出しそうになりましたが。

「どうした、ミネット？」

「螺子が固くて外れないんだよ～」

ちょっと涙ぐんでいたりします。こればかりは、少女の腕力では仕方が無いのかも知れませんね。結局、ミネットの指示通りに僕が外す事になりました。その上、機銃を分解するのも、ミネット指示で僕が分解しました。でも、ミネットの指示は確かに的確だったと思います。分解が終わって組み立て直した時も指示が滞る事が無かったので、ミネットの腕？が確かなのは確認出来たと思います。早急に助手の点は手配する必要があるかも知れません。

何度か分解、組み立てを繰り返す事で、何とか僕にも、機銃の構造が理解出来ました。これで、機銃が生産出来る様になるかも知れません。銃弾がそれほど用意できる訳ではないので、何丁か試作してみる事にしましょう。（本気で兵団を動かせば、大量生産も可能だとは思いますが）

ちなみに、雑談で聞いたのですが、ミネットはプロペラ機の操縦が出来るそうなのです。飛行機のエンジンに興味があって、ついでにライセンスをとったというのです。まあ、死因も自分で改良したジェットエンジンの試運転で、事故ったとの事なので、本望だったのかも知れません。（でも、背が足りなくて、ゼロ戦に乗るのはしば

らく先なんでしょうね）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ミネットがワーンベルを訪ねて来てから、一月が経ちました。先日父上から連絡があり、今日コルベール先生がワーンベルを訪ねてくれるというのです。1度実家に帰っていた、ミネットも数日前から、この屋敷に泊まっています。ミネットとコルベール先生の出会いは楽しみです。

恩師が来てくれるということで、代官の屋敷前で待っていると、ほぼ予定通りにコルベール先生が到着しました。

「おお、ミスタ・マーニュ！　わざわざ出迎えてくれるとは思わなかったよ」

「いいえ、お世話になった先生を迎えるのですから当然ですよ」

「君が、レーネンベルク家の家臣になって、代官をしているなんて思わなかったよ。それも、このワーンベルとは大出世じゃないか！　マーニュ殿とでも呼んだ方がいいかな？」

これは、父上か母上のいたずらなのでしょうね。ミスタ・マーニュと呼びかけられた時点でおかしいと思いましたが、案の定です。

「ここは学院ではないので、そうですね、スティンとだけ呼んで下さい」

そう言った途端に、後ろから声がかけられました。

「あの～」

「あ、すまない、ミネット。こちらが僕の恩師にあたる、ジャン・コルベール氏だよ」

「ミスタ・コルベール、こちらがミネット嬢です。ホラント商会のご令嬢です」

「よろしく、ミネット嬢」

「以前から1度お会いしたいと思っていました。どうぞよろしくお願いします。ミスタ・コルベール」

「ミネット！　ああ、すみません、先生の話を聞かせた事があったので。それより見せたいものがあるんです。ミネットも早く着替えておいでよ」

結局強引に話をまとめて、ゼロ戦へと向かいます。折角なので、コルベール先生が、何時僕の正体に気付くか、観察させてもらいましょう。

着替えてきたミネットと合流して、僕たちは旧市街にある工房へ向かいました。屋敷の倉庫では手狭という事で、大き目の空き工房を用意して、そこにゼロ戦を移動させておいたのです。着替え終わったミネットは例の調子でしたが、最初は戸惑っていたコルベール先生も意外にこちらのミネットの方が話し易いのか、何やら熱心に話し込んでいます。

ゼロ戦の傍まで近付くと、コルベール先生が難しそうな顔で呟きま

した。

「これが、”竜の羽衣”ですか。こんなものが本当に空を飛ぶのかね？」

「はい、今すぐと言う訳には行きませんが。今日はその一端をご覧頂きましょう。ミネット、頼むよ」

僕が合図をすると、ゼロ戦のコックピットに入り込んでいるミネットがエンジンを始動しました。すると、ブルルンという音と共にプロペラが回転し始めました。前回始めてエンジンを動かした時にも思ったのですが、結構うるさいです。僕が再度合図を送ると、ミネットがエンジンを止めました。

「如何でしたか、コルベール先生？」

「確かに魔法の力は感じなかった、あの娘が言った事は本当だったのだね」

「はい、その通りです」

「これは、何時になったら空を飛べるんだね？」

「機体の状態も問題ありませんし、動かし方もミネットが知っているのですが、今の彼女では身長が足りなくて動かせないのです」

コルベール先生は、風防から頭がちょこんと見えているミネットの状態を見て、理解してくれた様です。

「今は無理でも、数年の内には可能になるでしょう。それまでに、

この”竜の羽衣”を複製したいのです。ご協力頂けないでしょうか？」

「非常に興味深いですな。よろしい、是非協力させてもらいましょう！」

こうして、無事にコルベール先生の協力を得る事が出来ました。これで、ゼロ戦の技術が、ハルケギニアを変えて行く日も近いのかも知れません。魔法兵団や学校からも、何人か人を派遣して助手役をやらせる事も考えておきましょう。

ちなみに、ゼロ戦が空を飛ぶ日は意外と早くやって来ました。方法は簡単で、ミネットの手足が届かないのであれば、手足の届く大人が操縦を行って、その膝の上でミネットが指示を出すという物でした。操縦を誰が行うかで揉めたのですが、結局コルベール先生がやる事になりました。

少女を膝の上に乗せてガチガチに固まっているコルベール先生と、空を飛べる事を喜んでいるミネットの対比は面白い物でした。滑走路は兵団の施設隊に整備された道を使いました。ゼロ戦が無事に飛び立つと観客からは、歓声があがりました。短いフライト時間でしたが、得た物は大きかったと思います。

第五十七話　ラスティン１９歳（発明家少女来る）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１２／２
耳の－＜耳も
に修正

第五十八話　ラスティン２０歳（馴染みの人達来る）（前書き）

第五十八話ＵＰします。

相変わらす、サブタイトルにセンスが無いですね、今回は特に無理が。

一人称は、ちょっと事情があってしばらく”僕”で行きます。
もう少ししたら、強制的に変える（変えられる？）事になる予定なので。

第五十八話　ラスティン２０歳（馴染みの人達来る）

魔法学院を卒業して早くも1年が過ぎようとしていました。僕はこの1年を振り返って、何だか来訪者が多い1年だったなと思いました。これから来訪者が減るという訳でもないのでしょうが、招かれざる客は遠慮したいものですね。

☆エレオノールの我侭

何故か突然、エレオノールがワーンベルにやって来ました。時期的に言えば、学院の卒業式が終わって直ぐにここに来たのかも知れません。前回の手紙では、公開卒業発表の発表者に選ばれた事が嬉しそうに書かれていたので、”聞きに行く事は出来ないけど、頑張るんだよ！”と激励の返事を出しておいたのですが、もしかすると、聞きに行かなかった事に不満があったのでしょうか？

エレオノールの発表内容は、”風石を用いた電気の発生方法”だったはずです。何でも僕が以前話した、電池の話にヒントを得たそうです。彼女の使い魔が、土魚（アース・フィッシュ）だった事も、影響していたのでしょう。ステイとい名前を付けられた使い魔でしたが、非常に変わっていて地中を泳ぎまわり、何と風石を溜め込む性質があるそうなのです。（この性質は個体差があるので、風石だけを集めるのに向いていないと聞かされた時は、少しがっかりでした）

私人としての客だったので、応接室ではなく代官の私室にエレオノールを招き入れました。確かにエレオノールがここにくるのは始めてですが、それにしてもエレオノールは何故か緊張気味です。

「こうして直接会うのは、去年の夏以来だったかな？　発表を、見

にいけなくてごめん」

「いいえ、それは事情が分かっていますから、問題無いです。それは、兄様に見て貰いたかったのは、事実ですけど・・・」

エレオノールは途中で口篭ってしまいました。本当にどうしたんでしょう、エレオノールらしくない振る舞いが多い気がします。

「エレオノール、もしかしたら、何か僕に相談したい事があるんじゃないのかい？」

エレオノールが、ビクンと反応しました。何となくそんな事を感じたので聞いてみましたが、当たりだった様です。

「やっぱり、兄様には隠し事は出来ませんね。実は、王立魔法研究所に研究者として来ないかと誘われているのです」

これは、エレオノールから、発表をすると手紙を受け取った時点で想定されていた問題なので、特に問題は感じていなかったのですが、そういう事では無い様です。もしかして、あの事かなと思い当たる事はあるのですが、もう少し話を聞いてみましょう。

「君がどうしたいのか、聞かせてくれるかい？」

「私がどうしたいかですか・・・」

エレオノールは、そう言って真剣に悩み始めてしまいました。いいえ、正確にいうならば、自分が悩んでいることを、”自分がどうしたいか？”という面から見直しているのでしょう。

「兄様だったら、”小さい頃からの夢”と”最近出来た目標”どちらを選びますか？」

僕だったら、どちらかを信頼出来る人物に託す思いますが、今、彼女が求めているのはそういう回答ではないのでしょうね。

「エレオノール、本当にありがとう。あんなに昔の混乱していた僕の話を覚えていてくれて」

「兄様！」

「僕からの提案は、”最近出来た目標”を４年間頑張る。そしてその後、”小さい頃からの夢”を実現させるというのはどうかな？」

僕の提案を聞くと、エレオノールが嬉しそうに飛びついて来ました。感極まったと言う感じです。いやあまり過激なスキンシップは理性が持たないんですけど。

「でも、何故４年間なんですか？」

落ち着きを取り戻した、エレオノールがこんな事を聞いてきました。

「来年には、カトレアも魔法学院に入学して、その卒業後にエルネスト達も結婚だろ、その時に僕たちも一緒にやれば、目立たないかなと思ったんだよ」

「え？　あの子、今年入学しましたよ？　何でも早くエルネスト様の役に立ちたいとかで」

あれ？この間エルネストと会った時には、そんな事は言っていなか

ったと思うけど。

「エルネスト様には、内緒だったそうですよ？」

「君達姉妹は似たようなことをするんだね？」

「あの子が、今年入学できなければ、エルネスト様の診療所で看護婦でしたっけ？をするなんて、言い出すとは思えませんでした」

「すると、3年後には結婚なのかな？」

「多分そうなのでしょうね。でも大丈夫です、3年あれば何とか納得行く結果が出せると思います。ですから私たちも・・・」

「分かったよ。3年後を楽しみにしているよ！　でも、ラ・ヴァリエール公爵家も寂しくなるね」

「両親とルイズだけですからね、使用人の皆さんは居るのですが、やっぱりルイズは寂しがるでしょうね。兄様も時間があれば、顔を出して下さいね」

失敗したかも知れません、

エレオノールがルイズの魔法を見る

←

僕の気化爆発（ブリーブ）を思い出す

←

僕に相談がある

←

ルイズに魔法の指導

というプランが、難しい状態になったかも知れません。介入の機会は、あるようなので、とりあえず成り行きに任せる事にするしかない様です。

しかし、我が家のジョゼットも同じ様な状況のはずなのですが、ジョゼットが寂しがっていると聞いた覚えがありません。僕が機会を見て家に顔を出していますし、あの家では全てが家族の様なものですし、何よりジョゼットには、テッサちゃんという友人が居るのが大きいのかも知れません。（ジョゼットが、ノリスの入学で寂しい思いをしたと言う話は聞きませんが、ノリスがジョゼットと離れるのを寂しがったと言う話は、家の色々な所から聞けた話なのですが）

ああ、忘れてはいけない話がありました。テッサちゃんと、その母親オルガさんの事です。オルガさんは実は未亡人だったのです、若くして夫を亡くし、路頭に迷う所に、運よく我が家の乳母の話が舞い込んだらしいです。そして幸運は、更にオルガさんの下に舞い込みました。

所用で、我が家を訪れたガイヤール子爵という人が、オルガさんを見初めたのです。子爵も若くして奥方を亡くされたのですが、オルガさんに亡き奥方の面影を見たと言って熱心にオルガさんに結婚を申し込んだそうです。オルガさんも子爵の事を憎からず思った様で、先日目出度く式が行われました。

問題はその後に起こりました。テッサちゃんは、別に新しい父親の事を嫌った訳では無いのですが、ジョゼットと引き離される事は断固として拒んだのです。強引に引き離した結果は、テッサちゃんが家出をしてまでレーネンベルクを目指した事もあり、已む無くレーネンベルクで行儀作法を習うと言う名目でテッサちゃんを引き取る事で何とか解決しました。（多分、ガイヤール子爵夫妻にとっても、良いことなのでしょうね）

エレオノールと、少し（かなりかも）話し込んでしまいましたが、遅くなるといけないと言う事で、エレオノールはラ・ヴァリエール公爵家に向かう事になりました。泊まっていけば良いのにとも思いましたが、引き止める事はしませんでした。間違いがあって、エレオノールが研究に集中出来なくなっては、期限を設けた意味が無くなってしまいますからね。

来た時とは全く異なる表情を浮かべて馬車に乗り込むエレオノールを、見送りましたが、僕はこの猶予期間がどの様な物になるのか、少し心配でした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

☆ローレンツさんの定期報告

奇しくも、エレオノールが来た翌日、ワーンベルをローレンツさんが訪問してくれました。でも、一人でした。あれ？この間、学園に顔を出した時には、嬉しそうに”高等学校の有望な卒業生を紹介しますぞ！”とか言っていたはずなのですが。

「どうかなされたかな、ラスティン殿？　ああ、彼らの事ですな、話しておかなくてはいけないこともあったので、町の食堂で待たせてありますぞ。やはり、気になりますかな？」

「ええ、まあ。話というのは、ガリアの件ですか？」

こうして、ローレンツさんが例年通り、ガリアの状況を話してくれました。去年は確か鉱山の町が舞台だったはずです。わざわざ、ワ

ーンベルまで使節が送られて来た位ですからね。

・ジョゼフ陣営

去年は、以前の通りメイジを役人として雇用して、鉱山に送り込んだそうです。分析（アナライズ）を使用した鉱脈の発見方法や、固定化でのトンネル安定化の効果で、”ガリア一の鉱山”という事でかなり有名になったそうです。

ここまで来ると、ガリアでも平民メイジの有用性が、公認されたと思って良いのかも知れません。

ジョゼフ陣営には、若手の（と言っても３０代だそうですが）貴族が少しずつ参加を希望しだしたそうです。ジョゼフ王子が、彼らをどのように活用するのか興味があったのですが、ジョゼフ王子は、彼らの財力や権力を一切求めなかったそうです。ただ、積極的に知恵を出す事を求めたそうです。

ジョゼフ王子は、貴族たちに形の残る借りは残さないで、その上で、役に立つ貴族を選別しているのかも知れません。徐々に、ジョゼフ王子の真価が表れて来たようで、僕としては、頼もしい様な、怖い様な表現出来ない気分になります。

そして、カグラさんはガリアの表舞台には、まだ出ていないのが確認出来ました。同盟者クロディーさんからの報告も問題無い様なので、こちらも成り行きを見守って行くしか無い様です。

・シャルル陣営

こちらは、去年は散々だったそうです。財力と権力で、大量に採掘者を送り込んだまでは良かったのでしょうが、こんな事をやったらどうなるか、想像も出来ないのでしょうか？

案の定、鉱山で大規模な事故が発生して、多くの死者を出すと共に、鉱山まで閉鎖されてしまったそうです。ここまで来ると、ガリアの

大貴族たちは、シャルル王子を勝たせる気がないのでは無いかと疑いたくなります。ロベスピエール４世が何か工作でもしているのでしょうか？冷静に考えれば、この可能性は有り得ないと思えるのですが、それでも気にかかる所です。

ワーンベルの代官をやっている身としては、ガリアで鉱山が１つ潰れて多くの採掘者が死んだというのは、喜ぶべきなのかもしれませんが、全く喜べませんでした。今までのシャルル陣営の動きは笑い話で済んだかもしれませんが、今回は人命がかかっているので、そんな訳にも行きません。

話を聞かせてくれた、ローレンツさんもかなり不快そうでした。

ローレンツさんによると次の舞台は、交易で栄えている町だそうです。ローレンツさんは”今回は引っ掛け問題ですかな？”という言葉を残して、紹介したい人物達を迎えに行ってしまいました。はて、引っ掛けですか、どういう意味なんでしょうね？

新たに来た人物と言えば、魔法兵団の方でも少し変化がありました。魔法学院を卒業した、貴族の子弟が３人ほど、魔法兵団への入団を希望して来たのです。その３人は、いずれも”守護者”のメンバーだった学生でした。彼らにも色々事情があったのでしょうが、友人達と彼らの入団が、兵団の地位を押し上げてくれる気がします。

しばらく色々な事を考え込んでいると、ローレンツさんが私室まで、呼びに来てくれました。おかしな話です、この辺りは、マルセルさんの仕事のはずなのです。少し不審を覚えながら、ローレンツさんと応接室に向かう事にしました。

第五十八話　ラスティン２０歳（馴染みの人達来る）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１２／８
新し来た人物－＜新しく来た人物
に修正

２０１０／１２／１０
新しく来た人物というと－＜新たに来た人物と言えば
に修正

新登場人物一覧（五十八話）（前書き）

章の途中ですが、強引に押し込みます。

新登場人物一覧（五十八話）

五十八話までの新登場人物です。

＊　スティン・ド・マーニュ
ラスティンの偽名、マーニュ男爵家の3男（という設定）

＊　マーニュ男爵
スティン・ド・マーニュ（偽）の父親役で、ラスティンの兄弟子に当たる。
長男はアルビオンで外交官をして堅実な実績をあげ、次男がマーニュ男爵を継ぐことになりました。
この兄弟は、名前を設定していませんが、意外と出番がある予定です。

★魔法学園関係

＊　コラリー
魔法学院に勤めるメイドさん、一時期主人公に好意を寄せるが、思いを断ち切ることが出来た強い女性。
主人公による、セクハラ被害者です。

＊　エンマ
魔法学院のメイド達を取りまとめる女性。辛い過去がこの女性を大きく育てました。
数年後のコラリーは彼女の様になっているんでしょうね。

＊　オスマン

魔法学院の学院長。主人公親子二代にわたって苦労をさせられる人物です。
主人公の素性を見破った唯一の人物。主人公の経営する、魔法学園に経営が圧迫されるかも！？

＊　ブリュノ・ド・ゴドー
決闘騒ぎで、魔法学院から追い出された人物。伯爵家次男。
ただのやられ役に見えますが、ちょこちょこと出演させる予定です。
（やられ役でですが）
とある重要な役目を果たす第1候補だったりします。

＊　ドミニク・バルザック
魔法学院教師で、ジャン・コルベールと並んで、主人公が恩師と考えている人物。

＊　デニス・ド・グラモン
主人公の魔法学院における後輩。主人公に決闘を挑み、好敵手と思われる。
元祖ナルシストだったりします。

＊　ギーシュ・ド・グラモン
原作キャラ、デニスの弟。

＊　グラモン伯爵
トリステイン陸軍の将軍。まだ元帥では無いです。

★友人関係

＊　エルネスト・ド・オーネシア

転生者で主人公の無二の親友。１５歳にして、水のスクエアスペルを使う治療系の天才。
どちらかと言うと臨床治療を好むが、研究も怠らない。研究にはまると、マッドドクターの一面が表に出てくる。
無事にカトレアと結婚して、次期ラ・ヴァリエール公爵となることは出来るのでしょうか？

＊　ガスパード・ド・コリニー
初期名：友人Ａ
主人公の護衛を務める様になる。カロリーヌと恋仲になる予定です。
主人公の遠い親戚になります。

＊　セレナ・ド・ブランブル
初期名：友人Ｃ
メイジなのに、武器に詳しい女の子。とある人物の師匠になる予定です。

＊　カロリーヌ・ド・オーリック
初期名：友人Ｄ
水メイジであり、魔法薬に長ける。

＊　コルネリウス・フォン・ブラウンシュワイク　（アルマント・フォン・リューネブルク）
初期名：友人Ｂ
暗殺の危険から逃れるために、トリステイン魔法学院に留学して来た。結果としてゲルマニアの皇位継承権を持つのは、彼ともう１人だけになってしまう。

＊　ウィリバルト・ゲオルグ・オットー・フォン・ブラウンシュワ

イク
コルネリウスの父親でゲルマニアのブラウンシュワイク公爵家の当主だった。毒殺されて既に故人。
同時にブラウンシュワイク公爵家は表向きは絶えた事になる。

＊　フリーデル・フォン・ブラウンシュワイク
コルネリウスの姉。ブロイッヒ家に嫁ぎ、皇位継承権を放棄する代わりに命を存える。

★使い魔関係

＊　キュベレー
主人公の使い魔。大地の精霊で、杖精霊のニルヴァーナを”お姉さま”と呼ぶ。大地の大精霊から分離して自我に目覚めたばかりで、色々問題を起こす事も。

＊　テティス
エルネストの使い魔。キュベレーと違い、既に自我に目覚めていたので、使い魔としては優秀。

＊　ステイ
エレオノールの使い魔。地中を泳ぎまわり、風石を集める。エレオノールの研究に貢献する。

＊　大地の大精霊
うっかり主人公が殺されそうになった時の、殺人未遂犯。
主人格が女性の為、大地のお母様とも呼ばれる。
分離する前のキュベレーは、彼女の一部です。

＊　引きこもり
紹介になっていませんが、大地の大精霊に干渉出来る存在。
結構、地味に話の根本に関わっていたりします。

★ガリア関係

＊　バルドー子爵
ガリアの下級貴族。王位継承争いのジョゼフ王子の勝利を予言して、ジョゼフ王子に登用される。

＊　カグラ・ミナモト（源　神楽）
ジョゼフ王子の使い魔。豊かな黒髪と、保護欲を刺激する小さく華奢な身体つきです。
東方の”根の国”の神社の巫女さんでした。原作のシェフィールドとは別人のつもりです。
主人公の助言でミョズニトニルンの力に覚醒する。

＊　セザール
商人ローレンツの娘婿。何故かガリアのジョゼフ王子に気に入られる。

★その他

＊　ラザール
レーネンベルク家の執事（見習い）
リッチモンドが直々に、公立学校まで赴いて、見つけて来た少年。
リッチモンドの死後は彼に代わって、レーネンベルク家の屋敷の一切を取り仕切る。

ツェルプストー家のキュルケと結婚させる予定だったりして。

＊　モーランド侯爵
トリステイン貴族で、レーネンベルクの北西に隣接して、ゲルマニア国境を接する土地の領主。
結構重要な役割なのに、紹介を忘れられた、不遇の人。

＊　クレマン
モーランド侯爵家の家臣。主人公をモーランド侯爵領に招待しようとするが、盗賊団の襲撃で殺される。
メイジだがその腕はイマイチ、家臣としての能力もイマイチ。
捨て駒にされた、不幸な人です。

＊　クリシャルナ
謎の老婆、ではなくエルフの少女。かなりの美少女で、主人公にはフレンドリーエルフと思われている。
エルフの里の１つ、レイハム出身。２５０歳だが、レイハムのエルフは特に長寿で人間換算すると、１０～１２歳だったりします。
演劇の勉強をしたので、他人を演じられる様になった。
事情があって。なかなか活躍しないのが、悩みの種。四角形の頂点の１つ？

＊　アイラール
クリシャルナの愛馬のペガサス。ピンチには元の姿に戻って、空を翔る。

＊　ミネット
転生者で、ホラント商会の会長の娘。心労がたたらず禿げないコルベールと結ばれちゃう？
発明家の記憶を使って、ゼロ戦の複製と操縦法の教育に励む。

＊　ガイヤール子爵
レーネンベルク家の〝娘〟ジョゼットの乳母のオルガを、後添いに迎える。

新登場人物一覧（五十八話）（後書き）

要望のあった、人物紹介です。

外伝十一話　???の思い出語り（前編）（前書き）

外伝十一話ＵＰします。

今回は、少し短く、前後編のバランスが悪いです。申し訳ありませんが、我慢して読んでいただけると嬉しいです。

外伝十一話　???の思い出語り（前編）

私があの方に始めて会った頃の事は、今ではほとんど思い出す事が出来ません。だけど、最初に見たあの方の顔だけは多分一生忘れる事が出来ないんだと思います。いいえ、一生忘れないと決心していると言う事さえ出来ると思います。

私があの方に会ったのは、多分私が４，５歳の頃だったと思います。その頃、丁度、私達子供の間で、性質の悪い病気が流行していたそうです。母の話では、私の実家のあるマリロットの傍の村では、沢山の子供がこの病気で苦しんだそうです。
実際の所、レーネンベルクの外では、薬が足りず多くの子供が命を落としたと聞いています。

この様に話している私も、例外ではありませんでした。ただ、ただ、苦しかった事だけは、今でも身に染みて思い出すことが出来ます。この歳になっても、風邪等を引くと、必ず夢に見てしまうほどです。でもその夢は、私にとって決して不快なものだけという訳ではありません。
風邪で苦しんだ後、必ず鮮明に思い出す事が出来るあの方の顔をみれば、弱った身体も自然に元気になると言うものです。友人によると、〝貴方は風邪を引くと必ず酷くなるけど、治ると途端に元気よね？〟だそうです。

あの方が、あの時私にどんな治療を行ってくれたのかは、意識が朦朧としていたので、全く思い出すことが出来ません。でも逆にそれが私の想像力をかきたてます。

???妄想開始???

あの時、あの方は苦しむ私に薬を与えようとしますが、私は苦しみのあまり、直ぐに薬を吐き出してしまいます。それを見たあの方は、自分で薬を口に含み、口移しで私に薬を飲ませてくれたのです。そして、意識を取り戻した私に、微笑みながら、

「もう大丈夫だよ、君の病気は僕が治したからね」

と言ってくれるのでした。でもすこし口篭りながら、

「あれは、単なる治療行為だから忘れてくれると嬉しいな」

「いいえ、一生忘れません！」

「本当かい、良かった。君の名前を教えてくれるかな？」

「はい、私は・・・」

？？？？妄想終了？？？？

はっ！いけません、いつもの癖が。分かってはいるのです、あの方にとって私などは、路傍の石同然なのは。あの方には、小さい頃からの婚約者がいらっしゃいます。その女性は、容姿も優れ、家柄もこの国で知らない者はいない程ですし、風の噂では魔法学院でも優秀な成績を修めたという完璧な方なのです。

頭脳だけなら、私も負けるつもりはないのですが、それ以外は完敗です。（良く見積もっても）容姿は十人並みだし、家柄などはお話になりません。あの方の隣に立つその女性を想像すると悔しいですが、正直お似合いだと思ってしまいます。逆にあの方の隣に自分が立つ姿は全く想像が出来ません。これは、自分があの女性に勝てな

いと認めている様で、悲しい気持ちになります。
ですが、あの方の一番役に立つ存在という地位を得るのは、私だと信じています。その為にはどんな苦労も厭わないつもりですから。

あ！でも、さっきの頭脳では負けるつもりは無いと言うのは、本当の事です。私はメイジではないので、魔法は使えませんが、本当の頭脳戦なら一部の例外を除いて負けるつもりはありません。その一部の例外と言うのが、レーネンベルク公立高等学校での友人達だと事は、あまり嬉しくないかも知れません。

折角なので、”レーネンベルク公立学校”での事を書いておきましょう。私が、この”学校”に入ったのは、１０歳の時でした。その頃の私は、あの方の役に立つ方法がないかと、子供なりの方法を模索していました。具体的には、レーネンベルクのお屋敷の使用人の皆さんと仲良くなったり、あの方のマリロットの町への行き帰りこっそり観察したりして、何とかあの方の役に立つ方法が無いものかと、情報を集めていました。
その結果得られたのは、あの方が必要としているのは、”メイジ”だと言う事です。この時、私は両親に、”何故メイジとして産んでくれなかったのかと”泣いて尋ねたものです。（両親も返事に困っていました）そんな状態の時に、私は”レーネンベルク公立学校”設立の話を聞きました。大人たちは領主様も、変わった事を始めた物だと、呆れ顔でしたが、私にはあの方が困っている私に手を差し伸べてくれたのだと感じました。

私は、入学試験を無事通過して、首尾良く学校に入る事が出来ました。試験を受けた直後は、受かるはずが無いと諦めかけていたのですが、不思議な事に合格出来ました。当時の私は、字は何とか読めたのですが、書くことは出来ず、簡単な計算も間違えてばかりだったからです。

今なら事情が分かっているので、何故自分が”合格”出来たかは分かるのですが、当時はあの方が、私の為になんて事も、本気で想像していました。（そんなはずが無い事は、嫌でも分かっているのですけど）それから3年間私は、寝食を忘れて勉強に打ち込みました。魔法も使えず、身体も丈夫ではない、私には頭が残された1つの道だったのです。その最後の砦を守る為に、誰にも負けないという決心で、勉学に励みました。

学校では基本的に、

国語
算数
理科
社会
道徳
体育

という授業が行われます。尤も、どの生徒に聞いても一番の楽しみは給食なんですけどね。

問題は体育です、なんで学校には”体育”なんて忌まわしい授業があるのでしょうね？あれさえなければ、私の全科目制覇が実現していたのに！

あ！いや、その、そういう訳で、非常に優秀な成績で3年間を終えたのですが、決してこれで満足した訳ではありません。3年間の勉強で大分世間と言うものが分かって来ましたが、今のレベルではあの方の役に立つことが出来ないと確信していました。もっと学んで、少しでも多くあの方の役に立ちたいと思う私の前に、またも道が示されました。

そう、”高等学校”が設立されたのです。”高等学校”では、”学校”に比べて、より高度で専門的な教育が受けられるという話でした。こちらは”学校”とは違い望んだから入れるという甘いものではありませんでした。試験があるという訳でもないのですが、”学校”３年間の成績だけが評価対象になります。
専攻する分野でも、多少の融通がされるという噂が流れていましたが、私は全く心配していませんでしたし、結果もすんなり”高等学校”への入学が認められました。

まあ、専攻の所で、少しもめる事になったのはご愛嬌なのでしょう。結局、”高等学校”に進む事が出来たのは、同級生の中の２割弱でした。ですが、私にはここは通過点でしかありません。もっともっと上を目指したいと思います。

外伝十一話　???の思い出語り（前編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

当然、後編に続きます。

２０１０／１２／６
行き返り－＜生き返り、ではなくて、行き帰りに修正

外伝十二話　???の思い出語り（後編）（前書き）

外伝十二話ＵＰします。

外伝十二話　???の思い出語り（後編）

”高等学校”というその新しい学び舎は、私に色々なものを与えてくれました。

・頼りになる理事長先生
・競い合う友人達
・専門的な知識
・学校についての謎

等がそれに当たります。もう少し詳しくお話すると。

・頼りになる理事長先生
これは、もちろん”学校”全体の理事長を務める、ローレンツさんの事です。あまり理事長という存在を認識した事がなかったのですが、高等学校に上がる際に簡単な面接を受けたのです。その時、高等学校で何を学びたいのかと聞かれたのですが、私は迷わず”あの方の役に立つ存在になる為ならば何でも!”と答えました。
ローレンツさんはそれを聞くと、何かすっぱいものでも食べた様な表情を浮かべると、

「彼には、婚約者がいるのは知っているかな?」

「はい、存じております。ですが、それが何か私のしたい事と関係あるのでしょうか?」

ローレンツさんは、さっきよりもっと顔をしかめましたが、

「君は、若いな。人の心というのは・・・。まあ言っても無駄な様

だね。良いだろう、君が学びたいと言うならできるだけ協力しよう！」

と言ってくださいました。それからも色々と相談に乗ってもらっている、人生の大先輩です。かなり我侭を聞いてもらった気もしていますけど。

・競い合う友人達

高等学校に入ってから、私にも友人と呼べる存在が出来ました。どちらかと言うと、好敵手（ライバル）なのですが、お互いを高め合うという意味で友人と呼んでいます。

彼らは、高等学校に入ってからメキメキと頭角を現してきました。彼らの得意とする分野（例えば政治とか、経済とかですね）に限って言えば、彼らと対等に話が出来る学生は私だけでしょう。特に外交という少し変わった分野に興味を持った友人のクロディーとは特に仲が良いと思います。

この友人達だけは、私が何を目指しているかを、はっきりと宣言しました。女の子の友人二人は、応援してくれると言ってくれましたが、男の子の友人二人は何故かかなり怖がっていました。（失礼ですね、純粋な乙女心なのに！）

・専門的な知識

これは、ローレンツさんの協力が無かったら、全く手が出なかったんだと思います。”君が学びたいと言うならできるだけ協力しよう！”の言葉を盾に、思いつく限りの学問に手を出しました。

友人達が専攻している、

法学
経済学

軍学
政治学
社会学

等はもちろん、

魔法学
哲学
宗教学
文学
芸術学
歴史学
考古学
地理学
心理学
天文学

等にも手を出しました。中には以前は厳しく禁じられていた学問もあるのですが、一切妥協しませんでした。ローレンツさんは教師役を探すのにかなり苦労された様ですが、教師役の皆さんが、是非私に弟子や跡継ぎになって欲しい（息子の嫁に等と失礼な事を言った方もいましたね）と言われたので、苦労した甲斐があったと笑って下さいました。

もっと、もっと、と知識を求める私に、ローレンツさんはこんな忠告をして下さいました。

「知識を得ることは必要だろうな、だが君にそれを使いこなす事が出来るのかな？」

「出来ます！」

思わずそう答えた私に、ローレンツさんは厳しい顔をして、

「君が彼に何か献策をしたとしようか？　もしそれが失敗に終わった場合、責任をとるのは彼になるのだよ？　それでも出来ると言えるかね」

「それは・・・」

そう指摘されると、確かに軽率でした。ローレンツさんは、構わず話を続けます。

「この機会だから言わせてもらおう。君には、友人が沢山いる。親しくしている友人だけでは無く、この学校に居る全ての学生が君の友人だ。彼らの力を上手く使う事が出来れば、もっと彼の役に立てると思わないかな？」

ローレンツさんの言葉が胸を打ちます。他の生徒の力を利用するなんて、想像もしていませんでしたから。

「私の得意分野の商売でもそうだ、一人の商人が扱える商品は限られる、だからこそ私も商会を設立したのだしな。自分の力を試したいというならば、一人も良いだろうが、君の目指す物は違うのだろう？」

結局、ローレンツさんに言い返す事も出来ずその場を去る羽目になりました。何があの方の為になるか、冷静になって考え直してみる必要を感じました。

・学校についての謎

そして一番重要なのが、”学校についての謎”かも知れません。

まず、学校の学生なら誰もが疑問に思うのが、”レーネンベルク公立”を名乗っているのに、ここに1度もレーネンベルク公爵様が来た事が無い事と、理事長をこの国一番とはいえ商人のローレンツさんがやっていることです。

1度、ローレンツさんに直接尋ねたことがあるのですが、笑いながら、

「この”学校”は彼の酔狂から始まったものだからな」

というだけで、詳細は教えてくれませんでした。ですが、ローレンツさんの言う”彼”があの方だという確信が私にはあります。”学校”を頻繁に訪れるレーネンベルク家の方は、あの方だけですからね。

次の謎は、何故この学校が設立されたかでしょうか?慈善事業で、孤児院等を作るという話は美談としてよく語られる話なのですが、この”学校”は規模も仕組みも全く違います。3学年に大体３００人がいて、その学校が領内に5校もあるのですから、かなり異常といってもいいかも知れません。しかも奨学金などという制度は聞いた事がありません。

最近では、領内だけではなく、領外からも入学生がやってくる様な状態なのに、この”学校”閉鎖される気配も無いです。

理事長先生も、そしてあの方も何を考えているのでしょう?私なら、このお金を使ってもっとあの方の為になることが出来るのではないかと本気で思います。

奨学金という制度で、勉強をしている自分を否定する台詞なのかも知れませんが、資金を無駄にしているという感覚がするのを否定で

きない自分がいます。

そして、最大の謎は、”学校”の教育方針です。ここの基本理念は”全ての人に教育を”というある意味立派な物です。事実どんな人でも、ここで教育を受ける事が出来ます。（事実、学校では小さな子供から壮年の男性まで学んでいます）

ごく最近、エルフの女性が、この学校を見学に来た事がありました。その女性は単純に見学に来ただけの様でしたが、その女性が理事長先生に冗談で、

「おじ様、私もこの学校に入る事が出来るのかしら？」

と聞いたのに、理事長先生は全く躊躇わず、

「もちろん可能だよ。現状では、意思疎通が出来て、字が書ける様になる事が最低条件ですからな。君なら問題無いじゃろう」

と真面目に答えているのを聞いてしまったのです。あの理事長先生の様子だと、例え亜人であっても条件さえ満たせば、ここに入れる事になります。”全ての人”というのにはそういう意味が有ったと知った瞬間でした。

それ自体はあまり驚く事ではありませんでした。私が驚いたのは、自分がエルフや亜人の人達と机を並べて勉学に励むという事に、あまり抵抗を覚えなかったという事です。逆に、貴族の御曹司が隣の席に座っても全く平常心で居られる自信があります。（もちろんあの方が隣にいたら・・・ごほん）

学校に入る前の自分なら、亜人が同じ部屋に居るというのを受け付けたとは思えません。逆に貴族の方が同じ部屋にいたとしたら、緊張してしまった事でしょう。この６年間で私に何が起きたのか考え

てみましたが、決定的な事は思い浮かびませんでした。
でも、考えてみるとここでは、事あるごとに、全ての人間が平等だという事を、刷り込まれた気がします。これがもしかしたら、本当の教育方針だったのではないかとさえ思える程です。ここまで考えて、私は何だか怖くなってしまいました。この考え方が、広まったらどんな事になるか、少し頭の働く人間なら想像がつくでしょう。
これを”貴族”であるあの方が、主導してるというのが全くの謎です。果たして、あの方は何を考えているのでしょうか？

＝＝＝

先日こんな事がありました。友人のクロディーが良い事があるから一緒においでと、強引に誘われて行った先は、理事長室でした。クロディーによると、ガリアで女官職に就けるかも知れない良い話だそうです。外交官を目指していたクロディーには良い話なのかも知れませんが、私には全く興味がありませんでした。もしかして私が、宮廷作法などを強引に学ばせた（私の啓蒙活動の一環だったのですが）仕返しなのかと本気で心配しましたが、部屋に入った途端そんな考えは何処かへ飛んで行ってしまいました。
そう、そこにはあの方が居たのです。クロディーには感謝しなくてはならないのですが、そんな事はその時は全く考えられませんでした。知らない人から何か質問されましたが、適当に返事をするだけで、ずっとあの方を見詰めていました。ふと気付くと、クロディーに腕を引かれながら自室に戻っている最中でした。
「どうしたの、あんな態度良くないわよ？」

「え？」

「え？　じゃないわよ。ずっと彼の事、睨んでいたじゃない」

「へ？」

睨んで居たなんて心外ですね。ずっと憧れの眼差しだったはずです。まだ少しぼーっとしながら、何とか返事をします。

「あ！　貴女、最近視力が落ちたとか言ってなかった？」

「ええ、少しね。それがどうしたの？」

「はぁ〜、まあいいわ。いいから眼鏡を買いなさい。それにしてもガリアか、どんな国なんだろ？」

眼鏡なんて、私が掛けたら、チビ，ブス，メガネと三拍子揃ってしまいます。絶対受け入れられない提案です。

クロディーは、翌日少し早い卒業をして行きました。友人の一人が外国に行くのは寂しかったですが、晴れの門出なので、快く送り出す事が、私に出来る事なのでしょう。

＝＝＝

私ももう直ぐ、この学校を去る事になります。最近は実習が主だったので、あまり顔を出せていない”生徒会”（ネーミングはローレンツさんです）に顔を出して、後継者を決めて無くてはなりません。生徒同士の結び付きを高める為に考えた組織でしたが、初代会長が

こんな調子で大丈夫なのか少し不安でした。

「あ、会長、ご苦労様です」

「ジェフ君、ご苦労様」

「会長、今回の実習はどうでしたか？　芸術学でしたっけ？」

「ええ、まあまあと言った所ね。生徒会の方はどうだった？」

「はい、大きな問題はありません」

ジェフ君は、1年下の優秀な後輩です。独創的な友人達と比べると、独創性という面では劣るかも知れませんが、生徒会の様な組織には居なくてはならない存在です。そこまで考えて、ふと後継者問題を見直してみる気になりました。

今の”生徒会”にはどんな人材が必要なのかは、考えるまでも無い事でしょう。私は、自分の様な人間を後継者にと考えていましたが、組織の創立期と安定期（気が早いのでしょうが、改革期も）では必要とされる人材は当然異なって来るはずです。

「ねえ、ジェフ君。良かったら、次の生徒会長やってみない？」

「はい？」

「だから、君が次の生徒会長なの！」

「でも、僕は会長程の手腕はありませんよ？　会長がどうやって生徒会を作ったか見て来た僕には、分かります」

「そうね、でも君が今振るっている手腕を見せられると、会長として自信が無くなるのも事実ね」

「そんな事はありません！　会長が居てくれるから、僕も生徒会の仕事を安心して出来るんです」

「ありがとう。でもね、私はもう直ぐ卒業よ。次の生徒会長はどうしても必要なの。分かってくれるわね？」

「はい・・・、喜んでとは言えませんけど、精一杯やってみます！」

「ありがとう、ジェフ君。いいえ、新生徒会長さん」

「え〜、気が早いですよ」

こうして、後継者問題は、ちょっと強引に解決したのでした。これで、ここに思い残す事は無くなりました。後は、あの方の下で、自分の力を証明するだけです！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そうは言っても、ワーンベルまで来ると、緊張感が高まって来ます。私達をここまで連れてきた理事長先生は、一足先に代官の屋敷に向かってしまって、待っている私の緊張感は天井知らずです。気を紛らわす為に、周囲に目を遣ると私とは違って、いつも通りの友人達が目に入ります。
それを見ると、自分だけが緊張しているのが滑稽に思われました。
そうです、今日は私にとっての門出なのですから、明るい気持ちで

居る事にしましょう。今日からずっとあの方の下で働けると思えば、何を不安になることがあるというのでしょう？

そう、今日こそあの方に笑顔で対面したいです。あ！また緊張してきました。笑顔は無理かも知れません。出来れば、印象を悪くしない程度の表情をしていたいです。理事長先生が戻って来ました。とうとうこの時が来てしまった様です。私の健闘を祈って下さい。

外伝十二話　???の思い出語り（後編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

妙なツッコミが入りそうな気がするので、補足です。彼女が言っている、亜人は当然、鬼と呼ばれる類は含みません。

どうですか、この外伝を読んで怖いと思っていただけたでしょうか？
怖さ：可愛さ＝５：５位を目指したのですが、皆さんにはどう感じられたでしょうか？

さて、”あの方”の幻影ばかり追いかけてきたこの女性が現実の”あの方”に会うことになります。この女性はその時どんな事を感じるのでしょう？

第五十九話　ラスティン２０歳（怪しい少女来る）（前書き）

第五十九話ＵＰします。

第五十九話　ラスティン２０歳（怪しい少女来る）

何故か微妙に時間が経った気がしましたが、僕はローレンツさんと、屋敷の応接室に向かっています。応接室のドアの前に立つと、中から話し声がします。声からすると、マルセルさんと若い男性の様です。卒業生の誰かが、もうマルセルさんと仲が良くなったのでしょうか？

少し気になりましたが、そのままドアを開けて部屋に入ります。中では、マルセルの他に４人の人物が待っていました。皆が僕に気付くと立ち上がって、迎えいれてくれました。手前の人物から特徴を挙げて行くと、

・ブラウン系の髪を肩ぐらいで揃えた髪型の女性、身長は１５５サント行っていないでしょう。スタイルは、かなり残念な感じです。全体的なイメージは童女といえるかも知れませんが、何故か鋭い目付きで僕を睨んでいます。強気な性格が表れている気がします（あれ？この子はあの時の？）

・薄いパープル系の変わった色の髪をロングにしている女性、身長は１７０サント位でしょう。スタイルはなかなか良くて、大人の女性と言った感じです。

・暗めのグレーの髪を短くカットしている男性、身長は僕と同じくらいで１８０サントちょっとでしょうか？雰囲気としては誠実そうなのでしょうが、何故か既視感を覚えます。

・明るめのレッドとブラウンの間の髪を伸ばして、後ろで括っている髪型の男性。身長は１８５サントを軽く超えているでしょう。浮

かべている表情からも、いたずらっ子を想像させる雰囲気の男性です。

となります。まあ、第一印象が全てと言う訳ではないでしょうが、随分とバラエティーに富んだ卒業生です。最初の女の子と最後の男性には、ローレンツさんも苦労をさせられたのではないのかと何となく想像出来てしまいます。

挨拶をしようと、口を開いた瞬間に、先方からの挨拶が始まってしまいました。何故か先制された気分になりましたが、問題は挨拶を始めた人物です。ブラウンの髪の小さな子が代表して挨拶しているのです。

「始めまして、ラスティン様。簡単に私達の自己紹介をさせていただきます」

ちびっ子は、パープルの髪の女性に手を向けて、

「こちらが、ユニス。専攻は経済とデザイン全般です」

と紹介してくれました。

「ユニスです、よろしくお願いいたします」

次に、ちびっ子はグレーの髪の男性を指し、

「こちらが、マリユス。専攻は政治全般と料理です」

と紹介を続けます。（はて、専攻が料理？）

「マリユスです。父共々ラスティン様のお役に立ちたいと思います」

料理という言葉で、惑わされそうになりましたが、父という言葉は、聞き逃しませんでした。思いついて、隣にいるマルセルさんに顔を向けると、恥ずかしそうな表情です。なるほど、そういうことですか。

ちびっ子は紹介を続けます。今度は、残った赤茶色の髪の男性を指差して、

「これが、アンセルムです。まあ、あまり役に立たないでしょうが、専攻は教育です」

等と、あまり紹介になっていない紹介をしてくれました。アンセルムという男性の方は、首を竦めただけで、一応尋常に、

「軍事と教育を専攻しているアンセルムです。お役に立って見せましょう」

と挨拶してくれました。まあ、少し表情が引きつっていたのは仕方がないでしょう。ちびっ子はそんな様子を一顧だにせず、自分の紹介を始めます。

「そして、私はキアラと言います。専攻は特にありません。お久しぶりです、ラスティン様！」

あれ？この子と会ったのは最近だったはずなのですがどういう事でしょう？それに、妙に強張った笑顔？がちょっとだけ怖いです。いかにも無理して作っているのが、見え見えの笑顔を向けられると、睨むような視線の事と相まって、このちびっ子は僕に恨みを抱いて

いるのではないかとさえ思えてきます。（もしかしたら、ゲルマニアからのスパイという考えも頭を過ります）

僕が意識して、強い視線を向けると、キアラは途端に視線を逸らしてしまいました。怪しいです、どう考えても怪しいです。といってもローレンツさんの推薦がある以上、彼女だけを雇わないと言うのは難しいです。少し対応策を考える必要がありそうです。まあ、それは後回しですね。とりあえずは僕からの挨拶でしょうか？

「皆さん、始めまして。ご存知だとは思いますが、僕がこの町の代官を務める、ラスティン・ド・レーネンベルクです。ローレンツさんから皆さんの噂は聞いています。皆さんの様な優秀な人材を僕が使いこなす事が出来るか分かりませんが、出来るだけ期待を裏切らない様にしたいと思います。どうぞよろしく」

こう挨拶をすると、一人一人と握手を交わして行きます。ですが、案の定キアラの所で、止まってしまいました。恐る恐ると言う感じでしたが、何とかキアラとも握手を交わす事が出来ました。（まあ、キアラの態度で、僕の心に多少の傷が残ったのは、無視することにしましょう）

彼らの処遇をどうするか決める必要があるのですが、（キアラの事もありますし）直ぐには決まりそうもないので、今日はとりあえず歓迎の晩餐の後で解散する事にしました。マルセルさんに、マリユスを除く3人の宿の手配を頼んだのですが、ここでちびっ子からの要望が出ました。

「あの、この屋敷には空き部屋はないでしょうか？　どんな部屋でも構わないのですが」

「空き部屋？　客室が空いているが、この屋敷に住むつもりなのかい？」

「はい、マルセルさん。出来ればそうしたいのですが、ダメでしょうか？」

「構いませんよね？　ラスティン様」

「あ、うん。構わないよ」

まさか、直接暗殺する積もりなのでしょうか？良いでしょう、そう来るならこちらもそれなりの対策をするまでです。こういう形で、突きつけられた刃は別に恐れる事はないはずです。とりあえず、私室周りに、罠を仕掛けて置くことにしましょう。

晩餐の準備が整うまで時間があったので、彼らと少し話す事にしました。まず、疑問に思った、専攻について尋ねてみます。

「そういえば、みんな変わった物を専攻しているね？　料理と、教育と、デザインだっけ？」

「ああ、それね。会長、いや、キアラの奴が、”貴方達は、専門馬鹿になりそうだから、何か他の事も勉強しなさい！”って強制的にさせられたんだよな～」

早くも、緊張感を無くしたのか、気を許してくれたのか、アンセルムが砕けた言葉で教えてくれました。まあ、キアラからしっかりと睨まれる事になった訳ですが、それにしても”会長”とは何なのでしょうか？アンセルムがわざわざ真似までして教えてくれた台詞は、キアラが言いそうな、でも少しキャラに合わない台詞ですね。

「マリユスは料理だったよね？」

「はい、どちらかと言うと食べる方が好きなのですが、自分でも作ったりしますよ。機会があれば、僕の料理を食べてみて下さい」

「ここの料理人も面白い料理を作るから、この後の晩餐は楽しみにしてくれていいよ」

「父に聞いています。実は密かな楽しみだったんですよ」

マリユスは父親似の顔に笑顔を浮かべています。話し方や物腰等も特に問題ない様です。次は、誰に話を振りましょうね？

「ユニス、君はデザイン全般だったかな？　具体的にはどんな物なんだい？」

「はい、何でもデザインしますよ。今は服飾関係を主にやっているんですが、出来れば色々な物のデザインを考えてみたいです」

「アクセサリーをデザインしたりするのかい？」

「あ！魔法宝石（マジックジュエル）のアクセサリーですね。以前習った教師の方が、専門でやっていたので、是非やって見たいと思っていました」

魔法宝石（マジックジュエル）のアクセサリーを専門で扱うデザイナーは、僕も一人しか知りませんし、その人がローレンツさんの紹介だった事を考えれば、同一人物なのでしょう。ユニスのデザイナーとしての腕がどの程度か分かりませんが、拾い物なのかも知れません。

「アンセルムは、教育だったよね。本当かい？」

「やっぱり、似合わないと思うよな」

「そんな事はないよ？」

一応そう答えましたが、この場に居る人間はきっと誰もがそう思っているんじゃないでしょうか？

「まあいいさ、自分でも似合わないと思ってるくらいだからな」

ならば、何故専攻してるんだいとは、聞けない雰囲気です。何か事情があるのでしょうが、ここでは触れないでおきましょう。軽薄そうな印象でしたが、意外と深くまで物を考えているのかも知れません。アンセルムの評価は少し見直す必要がありそうですね。

問題はやはり最後のキアラです。彼女は、専攻を挙げなかったはずです。アンセルムの言うとおりならば、キアラの勧めで他の卒業生たちは、二つ目の専攻を学び始めたはずです。彼女自身が、二つの専攻を持っていないのは、おかしいですね。（いい加減に睨むのを止めて欲しいんですが、何がここまで彼女にさせるのでしょう？そんなに酷い事を、僕がキアラにしたのでしょうか？）

「キアラ、君は専攻が特に無いという話だけど、どういう事なんだい？」

「え！　はい、何でもやります」

「何でもね～、まあいいや、それが本当か試させてもらう事にするよ。そろそろ、晩餐の準備が整ったと思うから、食堂に移動しよう」

何でもですか、随分と大言を吐いてくれますね。あまりこう言う台詞は好きではないですが、キアラの目的も含めて試させてもらう事にしましょう。

食堂に移動しての晩餐は、残念ながら和やかという訳には行きませんでした。理由は簡単で、目の前で繰り広げられている、食事の争奪合戦が始まってしまったからです。それは、同席したローレンツさんも、頭を抱える様な状況でした。うん、学校の授業に礼儀作法を入れる事にしましょう。ローレンツさんも反対はしないでしょう。もう一人の同席者のマルセルさんは、何故か驚いた風でもありませんでした。マリユスはもしかして実家でもこんな調子なのでしょうか？マルセルさんの稼ぎなら食べるのに困る等という事は考えられないのですが、もしかしてこれは”学校”の教育の悪影響なのでしょうか？

晩餐？が終わった後は、予定通り解散になりました。彼らにはもう少し話を聞きたかったのですが、ちょっとあの状況では無理でした。これから彼らを招くときは多目の食事を用意する事にしましょう。

後になれば、この日がレーネンベルクの五星と呼ばれる事になる部下達が、僕の下に集まった記念すべき日でした。

余談になりますが、夜になると、仕掛けた罠にネズミがかかりました。尻尾を掴むことは出来ませんでしたが、十分牽制にはなったと思います。スパイや、暗殺者にしては底が浅い気がします。彼女はどういう積もりなのでしょうね？

第五十九話　ラスティン２０歳（怪しい少女来る）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

キアラ登場です、さて彼女を無事に描き切る事が出来るでしょうか？

第六十話　ラスティン２０歳（母なる大地の精霊来る：前編）（前書き）

第六十話ＵＰします。

単なる者とか普通の精霊と違うとか面倒な話は無視です。

第六十話　ラスティン２０歳（母なる大地の精霊来る：前編）

一晩、僕の直接の部下になる”欠食児童”たちの扱いを考えました。昨日話を聞きだす事ができた二つ目の専攻が、本来の彼らの専攻では無いことは確実なので、本当の専攻を考慮してみました。

ユニスは、経済が専攻だったので、我がレーネンベルク家の金庫番セルジュの下に送る事にします。まあ、ユニスなら大した問題も起さず、仕事を覚えてくれるでしょう。将来的には、ワーンベルの経済活動全般を見てもらう事も考えています。

マリユスは政治全般と言っていたので、マルセルさんの下で修行させる事にしましょう。親子と言う事が必ずしもプラスに働くとは言いませんが、彼らの場合は確実にプラスに働く事でしょう。ちなみに、マルセルさんに昨日の晩餐の話を聞くと、マリユスは昔から、食事の時になると人が変わるそうです。それが高じて専攻にまでなったそうです。

アンセルムは軍事でしたね。レーネンベルクに居る限り軍事の専門家の出番があるとは思えませんが、用心に越したことはありません。魔法兵団長のマティアスの所に送り込んで、警備隊の仕事を手伝ってもらう事にしましょう。最近ワーンベルの周辺に出没する盗賊団の退治を命じてみると良いかも知れませんね。

残るは、キアラですが。彼女をどの様に扱うか本気で悩みました。誰かの下に送って様子を見ると言う事も考えましたが、裏で策動される危険もあるので、僕の手元に置いて監視を続ける事にしました。あの人が居なくなってから、空席のままだった秘書役を務めてもらう事にします。

大よその方針が決まったので、”彼ら”を集めて、１つ教育をする事にします。勿論、食事の時の行儀作法ですよ？
彼らは、ワーンベルの顔、将来的にはレーネンベルクの顔、そして多くの平民の皆さんの期待の星にならなくてはいけないのですから、宮廷作法とまでは行かないまでも、何処に出しても恥ずかしくない程度の行儀作法は身に付けてもらうつもりです。

どうでも良いですが、納得行くまで行儀作法の練習をさせたら、１週間もかかりました。彼らは本当に使い物になるのか不安になりました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

以前から、極秘で始めていた、”風石”の調査がある程度形になりました。キュベレーには感謝の言葉が見つかりません。経過は、転生者の仲間には知らせてあるのですが、実際に対応策が打てるのは現状、僕だけだったりします。
変な話ですが、転生者の中でも、”風石”の認識は異なります。何処まで物語（歴史）を知っているかの影響だと思いますが、ローレンツさんはこの問題にほとんど興味はありませんが、ジェリーノさんは非常に興味を持っています。エルネストは、”風石”話自体を信じていませんし、ミネットは風石を使って何か発明が出来ないかとまで考えを進めています。
こう書くと、転生者が死んだ時点と、転生した時点に相関が無い事が分かります。サンプルが少なすぎて、はっきりと言えないのがもどかしい所ですが、予想通りならば原作開始の時点に向かって転生者が増えると思うので、何らかの結論が出せるのかも知れません。

少し話が逸れてしまいましたが、今はどう大隆起を防ぐかです。キュベレーとその兄弟姉妹の協力で、ハルケギニアの地形は、ほとんどまとめる事が出来ました。ここまで精巧な地図は何処にも無いでしょう。そして地図には、風石の埋蔵されている場所が示されています。ある程度の密度がある場所だけですが、多分問題ないでしょう。

多く風石があるのは、レーネンベルク山脈の我が国側から、ガリアを縦断してロマリアの中央部までの帯状の地域です。ガリアの西部や、ゲルマニアには、それほど風石は確認出来ませんでした。調査結果から、トリステインとロマリアは壊滅的な被害に逢う事が分かります。ガリアの被害もかなりの物でしょう。影響が少ないのは、ゲルマニアとエルフ達の領域だけです。

この時点で、僕の選択肢は、

1．各国の首脳部にこれを知らせて、ハルケギニア全土を挙げて、風石対策に乗り出す
2．個人的に動き、キュベレーとその兄弟の力を借りて対策を行う

でしょうか？

本来なら、1を選択するべきなのでしょう。聖エイジス31世でもあるジェリーノさんが旗を振ってくれれば、不可能ではないはずです。ですが、ジェリーノさんはブリミル教を極力政治権力から遠ざけようとしているはずです。僕が依頼をすれば、明らかに、この流れに反する事を依頼する事になります。それに、影響の少ないゲルマニアがどんな行動をとるかも予断を許しません。

一方、2は多分時間必要とするのが予想出来ます。キュベレーの兄弟が力を貸してくれたとしても、人海戦術の様な事は出来ないでしょう。自然と長期戦になります。こちらは時間との勝負になると思

います。最悪、対応が間に合わず、”大隆起”が発生という事態も有り得る話です。

キュベレーによると、大地の精霊にとって”風石”は邪魔な存在という事なので、もしかしたら協力が得られるのかも知れません。あまり理解出来ませんでしたが、風の属性を持つ”風石”は受け入れられないらしいのですが、石という大地の属性も持っていることで、上手く切り離す事が出来ないという話でした。

僕は結局、どちらも選ぶことが出来ずに、両方選択する事にしました。ジェリーノさんに意見を求めると共に、キュベレーに兄弟の説得を頼んだ形です。この選択が正しかったのか、結果は直ぐに出る事になりました。キュベレーを送り出し、ジェリーノさんに手紙を送った翌日の朝、執務室に入り仕事を始めた直後に、キュベレーからかなり切羽詰った感じの念話が届きました。

『ラスティン！　お母様が、お母様が！』

その念話の後を追うように、異様な念話が僕の頭に届きました。例えるなら、何千何万の人が何か（誰か？）を探しているという感じでしょうか？その異様さについ、

「誰だ！」

と声を出してしまいましたが、完全に失敗でした。彼ら？の意志がだんだん僕に集中してきたのが感じられます。しかもそれには明らかな敵意を感じます。敵意が集中して来たのに無意識に反応して、杖を手に取りましたが、僕の魔法が役に立つかは疑問です。更に敵意が集中してくると、押し潰されるような感覚がして来て、慌てて屋敷から飛び出しましたが、それは更なる敵意の集中と言う結果をもたらしただけでした。

何となくですが、その謎の意志はワーンベル鉱山の方から来ていると感じます。そう思った瞬間、ワーンベル鉱山自体が、鳴動しました。ですが、僕にはそれが”声”に聞こえました。

『私が代表して話しましょう。人の子よ、貴方が”我が子”を使役しているのですか？』

”我が子”というのは、キュベレーの事でしょうか？冷静な女性の様に聞こえる”声”ですが、その裏には冷たい物を感じます。問いには否定したいのですが、無意味なのでしょうね。

「はい、キュベレーの主人（マスター）は僕です！」

『貴方のせいなのですね、”我が子”が仲間に労働を強制したのは！』

僕は”強制”と聞いて、否定の言葉を発しようとしましたが、またもや、彼ら？の意志が一斉に押し寄せ、思わず膝をついてしまいました。今回の意志には、明らかに殺意という物が篭っています。彼らの意思が集まるにつれて、僕の意識がかすれて行くのを感じます。このままでは、何もされないままに殺されると、働かない頭で考えた瞬間、

「ラスティン！」

と、キュベレーの声が聞こえ、途端に頭が働きだしました。いつの間にか閉じてしまっていた目を開くと、目の前に小さなキュベレーの姿を見ることが出来ました。彼女の小さな姿が、今までに無く頼もしく感じられます。

ですが、彼らから感じる殺気は未だに治まりません。いえ、殺気自

体は先程より強くなっている気さえします。

『退きなさい、”我が子”よ！』

例の冷たい女性の声が響き渡りましたが、キュベレーは、

「させません、ラスティンが悪いんじゃ・・・」

と苦しそうな声で答えます。

『そうですか、仕方が無い』

冷たい女性の声が、こう答えると、僕に対する殺気が一気に膨れ上がりました。

「ダメ～！」

という、キュベレーの悲鳴が何故か遠くで聞こえました。本気で死んだと思いましたが、その瞬間はやって来ませんでした。気付くと、先程までの殺気が霧散しています。

周りを見渡すと、キュベレーと似た感じの精霊達（多分百体？はいるでしょう）が、僕を守りように取り囲んでいるのが分かりました。

そして、キュベレーの首筋のルーンが眩しいほどの光を放っているのも分かりました。

僕は、キュベレーとその兄弟姉妹に助けられた様です。安堵のあまり、尻餅をついてしまった僕に、キュベレーが抱きついて来ました。

『まあ、良いでしょう。その子に免じて今回は許しましょう。次はありませんよ』

冷たい女性の声には、もう何の感情も篭っていませんでした。ですが、ここで僕の口からは思ってもみない言葉が出てしまいました。
（こんな危険な存在からは一刻も早く遠ざかるべきだと言うのは分かっているのですが）

「貴女が、キュベレーの母親なのですか？」

『我々には、母親と言う概念は無い。この子は我々から別れた存在なだけ』

「貴女達にとって、”風石”は迷惑な存在と聞いていますが、本当でしょうか？」

『・・・』

返事はありませんでしたが、言葉が止まりませんでした。まるで僕自身が二つに分離して、もう一人の僕が勝手に喋っている様です。
（変な例えですが、理性と知性が分離して、理性では逃げようと思っているのに、知性が勝手に身体を操っているといった感じです）

「僕達人間に、”風石”を大地から取り除く手伝いをさせてもらえないでしょうか？」

『手伝い？　我らを利用するの間違いではないか？』

「そういう側面があるのは認めます。ですが、貴女達にとって、”風石”が無くなるのは、喜ばしい事ではありませんか？」

『・・・』

彼女達が何か相談している様な気配がしますが、言葉が止まりません。

「何も地上まで運び出せと言っている訳では無いのです。”風石”を何処かに集めてさえもらえれば、僕達が何とか掘り出してみせます」

『・・・、良いでしょう、その提案を受け入れましょう』

説得が成功したという事実を信じられない思いの僕に、今まで沈黙を守っていた、杖精霊のニルヴァーナが急に話しかけてきました。

『ラスティン！　なるべく早く、そして人には影響が出ないようにという条件を加えなさい』

「”なるべく早く、そして人には影響が出ないように”お願いします」

僕はほとんど自動的に条件を付け加えました。

『・・・、善処しましょう。集める場所が決まったなら、我が子の誰かに伝えなさい』

それだけ言うと、彼女達?は去って行った様です。僕は未だに続いている二重感にぼんやりしながら、キュベレーがその兄弟姉妹にお礼を言って彼らを見送っているのを見ているだけでした。この時は何かが、おかしいとぼんやり感じていました。

第六十話　ラスティン２０歳（母なる大地の精霊来る：前編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１２／１４
貴方がせい－＜貴方のせいに修正

２０１０／１２／１８
感謝の言葉がみあたりません－＜感謝の言葉が見つかりませんに変更

第六十一話　ラスティン２０歳（母なる大地の精霊来る：後編）（前書き）

第六十一話ＵＰします。

第六十一話　ラスティン２０歳（母なる大地の精霊来る：後編）

あれからどれ位経ったか、良く分かりませんが、

「あの、ラスティン様？　被害の第一報が入りましたが」

というキアラの声で、急に現実に引き戻された気がします。キアラは何と表現すれば良いのか迷う様な表情を浮かべています。面白そうとも、不気味そうとも取れる表情です。そして、その目は”何、この変な人は？”と言っている気がします。

「キアラ、今のは」

「まあまあ、ラスティン様が地震が怖いという話は、秘密にしておきますから、心配なさらないで下さい」

地震を僕が怖がる？なんの話でしょうか？まさか！

「キアラ、君には今何が起こった様に見えたんだ？」

「え？　ラスティン様が急に執務室を飛び出して、直ぐに大きな地震が起こりました。ラスティン様は、多分混乱なさったのでしょう？　真っ青な顔で何かを叫んでいらっしゃいましたよ」

キアラの声は、とても優しく聞こえました。（絶対変な奴だとか思っているんですよね？）

最悪です、殺されそうになったり、あんな存在とハルケギニアの存続の為に交渉をしたのに、傍から見ればただの臆病者という訳です。しかもそれをキアラに見られるなんて、物凄く落ち込めそうです。

そうだ、クリシャルナなら！　先日トリステインを一回りして来たと言って、彼女がワーンベルに戻って来たのです。彼女なら何か分かるかも、と思ったのですが、地震と被害という言葉が急に僕の中で繋がりました。

「キアラ！　それで被害の状況は？」

「先ずは、執務室に戻りましょう。町の地図を見ながらの方が良いと思いますから」

「そうだな、急ごう！」

急に正気？に戻った僕にキアラは戸惑い気味でしたが、走り出した僕に続いて、執務室に向かってくれました。町の地図を前に、被害の第一報の報告を受けていると、次々に報告が入って来ました。マルセル，マリユス親子は、一足先に町に出て現場で指示を出している様です。僕の方も、魔法兵団方面を中心に指示を出して行きます。

・兵団内部の被害状況の確認
・被害の無い治癒魔法が使えるメイジを旧市街中心に派遣
・緊急事態に対応できる様に、兵団員１００人程を屋敷に待機
・その他のメイジで、町の設備の修復

とりあえずはこんな感じでしょうか？
あ！後は、周辺の町や村の状況を確認しなくてはいけません。マルセルさん視点では、町の内部は十分ケアがされるでしょうが、兵団関係やワーンベルの外は僕の受け持ちになるでしょうから。外といえば、外部からの救援を求める必要はあるでしょうか？　とりあえ

ず、父上の所と、ラ・ヴァリエール公爵家には救援要請を出す事にしましょう。震源地はここであることは分かっているのですから、マリロット辺りならそれ程被害は出ていないでしょう。

僕が方針を決めるのを、キアラが例の目付きで見ていましたが、今はそれを気にしている時ではありません。僕は方針を決めて、各所に使者を送ると、自分も救援活動に参加することにしました。キアラが何か言いたそうにしていましたが、今は無視です。

「キアラ、僕も救援に参加するから、何かあったら知らせてくれ！」

「は、はい、分かりました」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

僕が救援活動に一区切りを付けて、屋敷に戻るとキアラの手で、被害状況がまとめられていました。

・重傷者：約２００人
・軽傷者：約５０００人
・家屋の全壊：１０００棟
・家屋の半壊：５００棟
・その他：道や水路の損壊は対応済み

という結果でした。死者が出なかったのは幸いでした。死者が出ていれば、僕は自分の選択を後悔する事になったでしょうから。（何故か、周辺の町や村では、全く被害がありませんでした）

被害の状況をこの目で確認した結果では、この地震は震度４〜５程

度だったんだと思います。地震がほとんど起こらないハルケギニアでは、かなりの規模ですが、前世の記憶を持つ僕には、被害が大きすぎると感じました。現に、工場街や住宅街では被害らしい被害はほとんど報告されていません。

家屋がかなり全半壊している割には、死者が出ていないのには、理由があります。ゼロ戦や機銃を複製する事を考えて、セキュリティーの高い施設を作る必要を感じた僕は、旧市街の用地買収を始めていたのです。この話が結構進んでいたので、旧市街の古い建物の住人は新市街にほとんど移動していたのが、今回の被害が少なかった理由の一つかも知れません。この偶然に僕は信じてもいない始祖ブリミルに感謝したくなりました。

完全に余談になりますが、僕が屋敷に戻った頃になって、クリシャルナが姿を現しました。

「ラスティン、何があったの？　随分と町の方が騒がしいみたいだけど」

「えーっと、今日何か変な事がなかった？」

「変なこと？　そう、それよ！　朝何だか変な視線を感じて目を覚ましたんだけど、その後何だか凄い悪意か敵意をぶつけられてね。さっきまで気絶していたみたいなの」

精霊への感能力が強いもの考え物らしいですね。クリシャルナから、あの存在についての話を聞くのは難しいかも知れません。僕はとりあえず、あったままの状況をクリシャルナに聞かせました。すると、彼女からは、

「大地の大精霊に殺されそうになった？　ラスティン、貴方なんで

生きてるの？」

というとてもありがたい言葉でした。確かに、”死ぬかもと思った”というレベルは簡単に飛び越えて、”完全に死んだと思った”とか”生きてるのが不思議”と言ったレベルの経験をしたのは事実なのですが、全く冗談になっていません。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

夜になると、兵団本部からの救援部隊が到着しました。友人のカロリーヌが部隊をまとめているのには驚きました。でも、その少し後に、ラ・ヴァリエール公爵家からの救援部隊が到着したのにはもっと驚きました。勿論その代表は、エルネストでした。僕は、カロリーヌとエルネストに救援部隊への指示を出してもらった後、彼らを屋敷に招く事にしました。

「カロリーヌ、迷惑をかけるね。正直君が来るとは思っていなかったから、助かるよ」

「お礼は、団長に言ってよ。”君の方が、ラスティン様には都合が良いだろう”と言って、私にこの仕事を擦り付けた人にね」

「ははは、でも本当に助かったよ。ありがとう！　君が友人である事に感謝しなくちゃいけないな」

「いいえ、どういたしまして」

カロリーヌが少し照れ気味に答えてくれました。僕はエルネストに視線を向けて、

「ところで、お前は本物か？」

と半分本気で尋ねました。

”ゴン”

という鈍い音が、応接室に響き渡りました。エルネストがテーブルに頭をぶつけた様です。らしくもないオーバーアクションをしますね、まさかホントに偽物なのでしょうか？

「スティン、君のピンチに駆けつけた友人に向かってそれは無いだろ？　でも、言いたいことは分かる。どうしてこんなに早くここに来ることが出来たか？だろ。テティスが、レーネンベルク方面で、何か大事件が起こったと教えてくれたから、出来るだけの人員を集めて、レーネンベルクに来たんだ。ワーンベルが現場と知ったのは、君の父上に話を聞いたからだ」

名前が呼ばれたせいか、テティスがエルネストの肩にちょこんと腰掛けました。テティスの話が出たので、カロリーヌは気を使って席を外してくれました。

「そういえば、ワーンベルには、アルマントじゃなくって、コルネリウスがいるんだったわね。少し手伝いをしてくるわ」

まあ、僕やエルネストが精霊の様な見えない存在と会話するのを、見るのはあまり気分の良いものではありませんからね。折角の機会なので、兵団に入った僕の友人達の現在の状況をお話しておきましょう。

＊＊＊

・ガスパード・ド・コリニー
彼は、見事なまでに土系統が使えなかったので、警備隊に所属になりました。やはり亜人退治や盗賊の討伐は性に合わなかったそうですが、町の警備等を張り切ってやっていると報告が入っています。

・アルマント・フォン・リューネブルク（コルネリウス・フォン・ブラウンシュワイク）
表向きは、アルマント・フォン・リューネブルクを名乗っています。友人達も、アルマントと呼んだり、コルネリウスと呼んだりで、まだ多少困惑気味です。
コルネリウスは、当初警備隊に入って、メイジとしての腕を磨き、”その日”に備える積もりだった様なのです。しかし、同時期に錬金隊から”訓練”の為に出向したメイジに、影響を受けたらしく、

「このままでは、魔力が全く足りないんだ。錬金隊に行けば魔力が上がると聞いたが、本当か、スティン？」

と、相談を受けました。傾向として、魔法を毎日の様に、時には限界まで使う事が多い錬金隊には、魔力が高いメイジが多いのは確かです。

「はっきりとは言えないけど、そういう傾向はあると思う」

「そうか、スティン！　俺を錬金隊に移してくれ」

「良いのか？　寄り道になると思うよ？」

「構わない、今の俺では、メイジとして半人前だと、思い知らされ

たからな」

「分かった、手配しておくよ。でも錬金隊は結構大変だよ？」

「望むところだ！」

こんな経緯もあって、コルネリウスはワーンベルに居て、日々錬金を続けているのでした。多分トライアングルに昇格するのも近いと思います。

・セレナ・ド・ブランブル

彼女には、その知識を使って新型の”銃”の開発に手を借りました。警備隊所属なのですが、ガスパードと違いバリバリの前衛として、活躍しているそうです。（何かメイジとしては間違っている気がします）

・カロリーヌ・ド・オーリック

彼女の方は、医療隊の一員として、国中を飛び回っている様です。趣味が高じて、魔法薬を使った治療では、医療隊でも優秀な人材と目されている様です。（試作の魔法薬を、治療に使ったという噂も聞きましたが、問題が無かった様なので、目を瞑る事にしました）

そして大事な事が1つ、多分ですが、ガスパードとカロリーヌは互いを意識し合っている気がします。カロリーヌが医療隊にいる為に、仲が進まないのをもどかしく感じている様です。ここは、二人の友人である僕が何とかしなくては、いけない場面なのでしょう。

＊＊＊

「スティン、どうしたんだ？」

「いや、ちょっと考え事をね」

「疲れているのか？　出来れば何が起こったのか教えて欲しいんだが」

「構わないさ、何が起こったかなんだけど・・・」

僕はエルネストに、今日の出来事を話しました。その肩では、テティスが何故か熱心に聴き入っています。

「大地の大精霊ね。また厄介な物に手を出したんだな」

「そうだな、すごく反省しているよ。こんな事になるとは思っていなかったからね」

「ラスティン、良く生き残れましてね？　大地のお母様に命を狙われて、その上そんな交渉を申し込むなんて。でも、あの”引きこもり”が力を使った理由が分かりましたよ」

精霊にまで、生き残った事を呆れられてしまいました。しかし、”引きこもり”というのは誰なんでしょうか？

「まあ、そっちはスティンに任せるさ。僕も負傷者の治療に出るよ」

「ああ、僕の方も休憩を終わりにするかな。エルネストには、是非やって欲しい事があるしね」

「何だか、嫌な予感のする言い方だな」

エルネストには、特に重傷者の治療に当たってもらおうと思います。あの”課外授業”のコルネリウス程ではないですが、多分僕とエルネストが協力しないと回復が難しい怪我人も多いですからね。”サラスヴァティーの慈雨”がまだ幾つか残っていたはずです。今からは、限界まで魔法力を精神力を酷使する事になるでしょうから。

第六十一話　ラスティン２０歳（母なる大地の精霊来る：後編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１２／１８
句読点の位置修正

２０１１／１１／１３
生き残れましてねー＜生き残れましたねに修正

第六十二話　ラスティン２０歳（ルイズ来る：爆殺！）（前書き）

第六十二話ＵＰします。

人間は死にませんよ？

第六十二話　ラスティン２０歳（ルイズ来る：爆殺！）

あの、”大地の大精霊”事件から、一月程が経ちました。まだ、地震の爪あとは残っていますが、ワーンベルはほとんど日常を取り戻しました。

被害の調査結果では、大精霊の起した地震は、見事なまでにワーンベルのみに被害を与えた様です。信じられない話ですが、ワーンベルから少ししか離れていない村でも、地鳴りは聞こえたそうですが、揺れは全く感じられなかったという報告でした。

僕の感触では、あの存在は基本的に自らの力を積極的に使っていなかったんだと思えます。あれにとっては、僕などは一睨みで簡単に命を奪えたでしょうし、地震も怒りから力が漏れたと言った印象です。それでも、漏れた力が完全に制御されたいたのには、恐怖さえ覚えます。

あの存在の力を、キュベレーやその仲間が抑えたと言うのは、何故か納得が行かない話です。あの時、キュベレーは”支配のルーン”の力を全開にしたんだと思いますが、これは逆に考えれば、仲間達を全力で支配した事になります。これは、あの存在の怒りを買う行為だと確信出来ます。それなのに、あの存在は僕を見逃した訳です。テティスが言っていた、”引きこもり”と言うのが何か関係しているのでしょうか？

これればかりは、考えても結論が出ない問題の気がします。とりあえず、ロマリアのジェリーノさんに、僕が決めた風石の採掘予定地を知らせました。聖エイジス３１世の名前で予言によって、”風石”の採掘できる場所が分かったという事にして、ロマリア，ガリア，トリステインの３国で採掘を行う事になりそうです。

＝＝

”風石”絡みの話も、一段落した様なので、僕は先日のお礼も兼ねて、ラ・ヴァリエール公爵家を訪問する事にしました。ついでにルイズの様子も確認しておこうという位、ルイズに関しては軽い気持ちでした。

エルネストの診療所に顔を出して、改めて救援活動を礼を言った後、ラ・ヴァリエール公爵の屋敷を訪ねました。

「ラスティン、良く来たな。この間は大変だったそうだね、ワーンベルの方はもう大丈夫なのかね？」

「はい、何とか以前の状態に戻ったと言った所です。今日は公爵に救援のお礼を申し上げたいと思いまして、こちらにお邪魔しました」

「そうか、君も領主らしくなってきたじゃないか。父上もお喜びだろう？」

「お言葉ですが、私は一代官に過ぎません。それに父には、まだまだ敵わないのは自覚しています」

ラ・ヴァリエール公爵は、満足げでしたが、一方で少し不満そうでした。あれ、何か失言をしてしまったでしょうか？　自分としては、無難な対応だったと思うのですが。

「エルネストも、もう少し領地の経営等に興味を持ってくれると、良いのだがね」

おや、エルネストに対する不満だった様です。エルネストは診療所

で治療三昧（変な言葉ですね）ですから、公爵が心配するのももっともです。ですが、僕としてはその点を心配はしていません。先程見て来た、診療所の方も経営は順調の様でしたし、”エルネスト・ド・ラ・ヴァリエール”（まだ婿入りした訳ではないので、正確ではないですが、一般にはこう認識されています）の名声はこの国はかなりのものですから、カリスマという点でも、ほとんど問題は無いと思います。僕より、2歩も3歩も先を行っている感じです。

「公爵、エルネストならば大丈夫です！」

「そうか、君がそう言ってくれるなら、少しは安心出来るかな」

「公爵、今日はルイズにも会っておきたいのですが、宜しいでしょうか？」

「気を使わせてすまんな。あの子の機嫌次第だが、是非会って励ましてやってくれるか？」

僕が、こんな聞き方をしたのには、訳があります。エルネストから聞いた話では、ルイズは少し前から魔法の練習を始めたそうなのですが、結果は予想通りだったそうです。ルイズ本人はかなり落ち込んだそうです。ラ・ヴァリエール公爵も、色々な家庭教師を雇ったそうですが、やはり結果は変わらなかったと言う事です。

エルネストも医学的な面と、魔法的な面から、調べてみたそうですが、好転はしなかったと悔しそうでした。精神的な問題なのか、条件的な物なのかは、現在の所不明という結果です。精神的な問題という事であれば、僕にも何とかしてあげる事が出来るのかも知れません。

そう思って、ルイズの所に向かいました。ルイズは、屋敷の中庭で

魔法の練習をしていました。どうやら、基本中の基本、コモンマジックのライトを練習している様子です。屋外でライトを練習するのはどうかと思いますが、爆発の規模を見ると、屋外で行っている理由が良く分かります。
その様子を確認して、ルイズに声をかけようとした時に、僕の杖の精霊ニルヴァーナの状態が尋常では無いことに気付きました。

「なんで、なんで、あんな事を・・・」

と、呟いている様です。杖がこの状態では、魔法の指導なんて出来るはずもありません。（微妙に震えている杖でまともな魔法が使えるとは思いませんからね）

「ルイズ、魔法の修行頑張るんだよ！」

とだけ、声をかけて、早々にワーンベルに戻る事にしました。多分、変な人だと思われたのでしょうね。

帰りの馬上で、落ち着いたニルヴァーナから、何とか事情を聞きだす事が出来ました。

「目の前で、杖が爆殺されたのよ。動揺しても仕方が無いじゃない！」

という事でした。ライトの呪文というのが悪かったのかも知れません。帰りの道中、ずっとニルヴァーナを慰める事で、何とか機嫌を良くする事に成功しました。でも、彼女の考えも分かります、僕としても目の前で、人間が爆殺されたら、冷静ではいられないでしょうから。
こうして、ルイズ救済作戦は、実行に移される以前で中断させられ

る事になりました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

先日の雪辱の為に、僕が今、何処にいるかと言うと山中に居たりします。キアラが付いて来ると言い張ったのですが、護衛を連れて行くという事で妥協してもらいました。（キアラにどんどん頭が上がらなくなっている様な気がします）

護衛の方々も、山麓で待機してもらっています。事情があって、余人を交える訳には行かなかったのです。僕のお供をしているのは、道案内役のニルヴァーナだけだったりします。僕は、ニルヴァーナと会話をしながら、山の奥へと足を進めます。

「そういえば、君はあの時、”なるべく早く、そして人には影響が出ないように”って言っていたね。どういう意味があったんだい？」

「あれ？　気付いていなかったの？　自信ありそうに、色んな指示を出していたみたいだから、分かっているんだと思っていたのに」

「どういう意味だい？」

「そうね、例えばクリシャルナと会った時の事を考えてみて」

そう言われて、少し想像してみましたが、なるほどと思いました。

「大地のお母様が、普通に物事を運んだら、それは何百年後に実行されるでしょうね。そして、逆に全力で”風石”を動かしたら、軽く人間は絶滅の危機に陥るでしょうね」

ニルヴァーナが語ってくれた内容は、納得できますが、ちょっと寒気を感じるのも確かです。

「ニルヴァーナ、助言してくれてありがとう！」

「あの時、そう、あの時キュベレーは貴方を守るために全力を尽くしたわ。何の力も無い私だけど、少しは役に立ちたかっただけよ」

そっけない声でしたが、少し照れた感じが伝わって来ました。

「そんな事より、お爺様の所に案内するのは、同意しちゃったから仕方が無いけど、本当に切り倒したりしないんでしょうね？」

照れ隠しなのでしょう、強引に話題が変えられます。

「大事な妹達の為だけど、そんな事はしないよ。枝の2，3本ももらえれば十分だよ」

「まあ、ラスティンの言う事だから、信じる事にするわ。そろそろよ、結界があると思うから、指示通りに歩いてね」

「結界？　分かった、早めに指示してくれよ」

そう答えた瞬間、肌が粟立つのを感じました。これが結界なのでしょうか？　そこからの、ニルヴァーナの指示は奇怪な物でした。真後ろを向いて進めとかは良い方で、どう見ても断崖絶壁の上から、真っ直ぐ進めとかは従うのにかなり勇気が必要でした。

「ここよ」

ニルヴァーナにそう言われた頃には、僕の現実感はかなり怪しくなっていました。

「これが、アリエの木？」

別にアリエの木を始めてみたという訳ではありませんが、今、目の前にある大樹がアリエの木らしくなかったので思わず、口から出てしまいました。

『ほう、人間がここまで来るのは久しぶりじゃな』

突然、頭に響いた念話に少しだけ驚きました。

「急な訪問で失礼します。目の前の木が貴方なのですね？」

『そうじゃよ。して、何か用かのう？』

「大変失礼だとは思いますが、枝を何本か頂きたいのですが」

『良いじゃろう、丁度伸び過ぎて、他の迷惑になっている枝があるからのう。これを切ってくれれば、礼として持って帰っても良いじゃろう』

「本当ですか？　喜んでやらせていただきます！」

話が上手すぎの様な気もしますが、目的の枝が手に入るなら、問題はありません。僕は、レビテーションで浮かび上がると、木の精霊の言うとおりに、枝を切っていきます。１５本程切った所で木の精霊から、

『もう、良いぞ。大分日光の入りが良くなったようじゃな。感謝するよ』

「いいえ、この枝が頂けるのなら、大したことではありません」

『所でのう、そなたはその枝をどうする積りなんじゃ？　そなたには、必要ないものじゃろうに』

魔法を使ったので、ニルヴァーナの事はばれると思いましたが、やっぱりでした。

「はい、確かに僕には”ニルヴァーナ”がありますからね。この枝を必要としているのは、僕の妹達なんです」

『そんなに妹が多いのかな？』

僕が抱えている、１５本の枝を見て、そう言ったのでしょう。

「必要なのは、３本だけです。残りは帰り道に”挿し木”でもしようかと思っただけです」

『”挿し木”のう、それはどんなことかな？』

僕は、簡単に挿し木の説明をします。

『わしが、何本も増えるというのじゃな。面白いのう』

どうやら、気に入ってくれた様です。僕としても、自然のアリエの木の数が増えるのは、良い事だと思ったからなのですけどね。

『今日は助かったぞ、また十年後位に来てくれると助かるのじゃがのう』

何故か、体良く庭師の真似事をさせられた気分です。

「分かりました。覚えていたら、また来ます」

こうして、木の精霊の下を去りました。帰り道では、時々アリエの枝を地面に挿して、魔法で成長促進と地中の栄養素を増やしておきます。根付いたのは確認したので、多分無事に育ってくれるでしょう。帰りは結界の効果は無い様です。それとも、あの木の精霊が、何かしてくれたんでしょうか？

丁度、木の精霊の結界を抜けた辺りでしょうか、それまで黙ったままだったニルヴァーナが、

「ラスティン、ごめんね。そして、ありがとう」

と不意に呟くように言いました。

「いいさ、気にしていないよ」

と格好を付けて答えましたが、何故、彼女が謝ったりお礼を言ったりするのかは、理解出来ませんでした。ここは雰囲気的に突っ込んではいけない所だと感じたので、無難な対応をしておく事にしました。

「で、でもラスティン、何故、枝を3本貰って来たの？」

ニルヴァーナが少し照れ隠し気味に聞いてきました。

「ジョゼットだろ、ルイズだろ、そしてテッサだよ？」

「あの子も？　ラスティンも随分とお人よしね」

ルイズの所で何か言うかと思いましたが、テッサちゃんの方に驚いた様です。

「さあ、急ごうか。護衛の方々を待たせるのは悪いし、杖職人の方も到着しているかもしれないしね」

こうして、僕たちはワーンベルへと帰るのでした。

第六十二話　ラスティン２０歳（ルイズ来る：爆殺！）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第六十三話　ラスティン２０歳（ルイズ来る：またも暴走するミレーユさん）

第六十三話ＵＰします。

さて、幼い日のルイズの出番です。

第六十三話　ラスティン２０歳（ルイズ来る：またも暴走するミレーユさん）

「レーネンベルクの若様、これを何処で手に入れたんですかい？」

呼び寄せた杖職人に方が、僕が材料として渡した枝を見て、発した言葉がこれです。

「レーネンベルク山脈の何処かです。アリエの木を探していたら、良い木があったので、とりあえず切って来たんです。ただ、道に迷った挙句に着いた場所なんで、もう一度行けと言われてもちょっと・・・」

「そうですかい、これだけの枝を持つアリエの木なら、立派な物だったでしょうな。切り出す事が出来れば、一財産間違い無しでしょうに。良かったら、大体の場所でも教えて下さいませんか？」

僕は適当な嘘を混ぜて、話をしておきます。普通の人間があそこにたどり着くのは無理でしょうが、万が一と言う事もありますからね。

「それより、杖の作製に入ってもらえますか？」

「ああ、すいやせん。早速やりますんで、明後日には一本目をお屋敷の方にお届け出来ると思いやす」

「意外とかかりますね」

「何をおっしゃいますやら、これでも急いでいる方ですぜ。本当なら、きちんと塗料が乾いてからお渡しするのが筋ってもんだ、至急と言う事なんで、半端な仕事になるだけですぜ！」

「急がせてすみません。ゆっくりと待つことにしますよ」

本当は、杖と言う物の製作過程を見ておきたかったのですが、そこまでの時間は取れそうにありません。キアラから何を言われるか分かりませんからね。

そうして、屋敷に戻った僕を、とある人物達が待っていました。

「ラスティン様、お客様がいらしています。応接室においで下さい。ちなみに若い女性の方ですよ?」

最後の部分が少し嫌味に聞こえました。若い女性ですか、誰でしょうね? 最近は多少変な客でも驚かなくなってきた自分が少し悲しいです。応接室に入ると、そこで待っていたのは、確かに”若い”女性とちょっとだけ若くない女性でした。

「ルイズ、こんな所まで良く来たね! ミレーユさんも同行ご苦労様です」

「スティン兄様、突然お尋ねして、ごめんなさい。でも・・・」

「ルイズお嬢様を、ここまでお連れしたのは、私です」

ミレーユさんが口篭るルイズを助けるように、口を挟みました。ミレーユさんが主体なんですね、何だか嫌な予感がします。

「それでは、ミレーユさんにお話を聞きましょう。どうして、僕の所を訪ねて来たんですか?」

「どうしてではありません！　先日、ラ・ヴァリエール家を訪ねていただいた際に、何であんなに簡単に帰ってしまったんですか！」

何故か、怒られました。これは完全に暴走モードに入っていますね。

「こちらにも、事情があったんです。何をそんなに怒っているんですか？」

「何でもかんでも、ありません！　エレオノール様に手紙をいただいて、ラスティン様ならばと思っていたのに！」

「落ち着いて下さい。ルイズも驚いているじゃないですか」

「あ！　申し訳ありません、ルイズ様」

何だか納得行きませんが、落ち着いたミレーユさんから事情を聞いた所、

1. ミレーユさんが手紙で、ルイズの爆発魔法の事をエレオノールに報告
2. エレオノールが手紙で、僕の気化爆発（ブリーブ）の話と、僕なら何とかしてくれるかもという事を聞く
3. 僕を訪ねようと計画していた所に、僕が訪問
4. 僕が逃亡？
5. ミレーユさんが暴走
6. ルイズまで連れて、ワーンベルまで来てしまった

という事らしいです。何か意図していたのと、ずれていますが、最初の予定通りになった訳です。素早く今日、明日、明後日の予定を考えますが、何とかなりそうです。

それにしてもと、少しルイズを見詰めます。この子はこんなに暗かったかな？　僕が知っている限りでは、普通の子供だったと思っていたんですが。魔法がまともに使えないということが、この子をここまで追い込んでしまったのですね。

これは、ルイズだけの問題では無いと思います。我が家のジョゼットも、もう少ししたら、こうなってしまう可能性があるんですからね。どこぞの王子みたいに歪んだ性格にするわけにはいきません。事情が分かっているルイズも何とか出来ない様では、ジョゼットの時にどんな事になるか心配ですしね。

「ルイズ、今日はちゃんと君の魔法を見せてくれるかな？」

ルイズは、魔法と言う所でピクリと肩を動かしました。そして、悲しそうに俯いてしまいました。その様子を見て、僕はショックを受けました。僕の中では、ルイズは１６歳のツンデレな少女でしたが、今のルイズはこんなに小さく、か弱い存在でした。僕は思わず、ルイズを抱きしめて、

「ごめん、ルイズ。君をこんなに不安に、そして悲しませてしまって。でも、今回はちゃんと君に向き合う事にするよ」

ルイズには少し難しい表現だったかなと思いましたが、きちんと伝わった様です。証拠は、ルイズが何故か泣き出してしまった事で十分でしょう。僕はその涙にうろたえてしまいまい、周囲に助けを求めましたが、ミレーユさんまで貰い泣きしています。いつの間にか応接室に入っていたキアラは、例の視線を僕に向けています。小さい女の子を泣かせるものじゃないです、とでも思っているんでしょうね。

対処に困って、ルイズの頭を撫でていると、

「スティン兄様って、お父様みたい」

とルイズが言いました。ひじょーにショッキングな台詞です。出来れば、”本当のお兄様みたい”といって欲しかったですね。心を許してくれた様なので、この際目を瞑る事にします。とりあえず、”平賀才人”君が召喚されるまで、この子をかげながら支える事にしましょう。

落ち着いたルイズを連れて、屋敷の裏庭にやって来ました。広さはさほどありませんが、ここには壊しても大丈夫な建築資材などしかないので、特に問題は無いでしょう。

「ルイズ、先ずは僕が使う呪文を見ているんだよ。あのレンガが良いかな？」

「はい、兄様！」

僕は、長めの呪文を唱えます。

「気化爆発（ブリーブ）！」

その瞬間に、レンガが見事に爆発します。そこには小さな（直径５０サント）窪みが出来ています。久々に使った呪文でしたが、上手く行った様です。

「兄様！　今の、今のって私と同じ」

「そうだよ、僕のオリジナルスペルで気化爆発（ブリーブ）っていうんだ。でもね、これでもスクエアスペルなんだよ」

「すくえあすぺるですか？」

「ルイズにはちょっと難しかったかな。そうだね、とっても難しい呪文だと思ってくれればいいよ」

「難しい魔法なんだ・・・」

「さあ、ルイズの魔法も見せてくれるかな？　あ！　でもその前に杖を見せてくれるかな？」

「これですか？」

ルイズの持っている杖を見せてもらいました。悪い杖では無いと思いますが、ラ・ヴァリエール公爵家の娘が持つにはあまり相応しくは無いでしょう。

「あの、私が杖をすぐ壊しちゃうから・・・」

表情に出ていたでしょうか？　ルイズがおずおずといった感じで、教えてくれました。ラ・ヴァリエール公爵も父上の様に張り切ったのでしょうね、最初だけは。どうせ直ぐに壊してしまうならばと言う気持ちと、ラ・ヴァリエール公爵家としてのプライドのせめぎ合いでこの辺りに落ち着いたんだと思います。

でも、それは間違っているんだと思います。親からの期待が無くなってしまえば、子供がどんな気持ちになるかは、想像するまでも無いでしょう。（期待をかけすぎるのも問題なのでしょうが）

「ルイズにとって、杖って何かな？」

「うーん」

「難しい質問ばかりだね。そうだ、杖に精霊が住んでいると思った事は無いかな？」

「せいれいさん！　この杖に？」

「いや、今のルイズの杖には居ないかな？　でもね、今度、僕が君にプレゼントする杖には、きっと精霊が住んでいるよ」

「本当？」

「本当さ。でも、今は君の魔法を見せてくれるかな？」

「でも、きっと爆発しちゃうよ？」

「そうだね、僕とどれだけ大きな爆発が起こせるか、競争しよう！」

「うん！」

そう言ったルイズの顔には、久々に見る笑顔が浮かんでいました。競争の結果は、ルイズの勝ちでした。スクエアスペルを繰り出した僕と、レビテーションを真剣な表情で唱えるルイズが、互角な勝負をしているのは正直、悲しいものがありました。（しかも最終的には、負けてしまうと言う結果でした）

その後は、軽く湯浴みをした後、皆で夕食を摂りました。僕と同じで、結構埃を被ったルイズも、ミレーユさんに体を洗ってもらって、ご機嫌の様です。テーブルについているいるのは、僕、ルイズ、ミレーユさん、そしてキアラの４人です。最初は、〝ルイズ様と同じ

テーブルなどに座るわけにはいきません”と遠慮したミレーユさんも、堂々と席に着くキアラの姿を見て、観念したのか、居心地悪そうに席に座っています。

食事が進むと、ミレーユさんの緊張も解れてきた感じです。少し油断した為か、僕はミレーユさんに失礼な事を聞いてしまいました。

「そういえば、ミレーユさんはご結婚はされないんですか？」

その一言に対する反応は、三者三様でした。ルイズは一生懸命料理を食べているだけ、ミレーユさんは何を言っているんでしょうと不思議な顔、キアラはいつも以上に鋭い視線を僕に向けて来ました。キアラの視線の意味は明白でした。ミレーユさんの様な”妙齢”の女性にはこの質問は厳禁だったのでしょう。ですが、ミレーユさんの、

「エレオノール様にお聞きではなかったんですか？　私これでも、人妻で一児の母なんですよ」

という発言で、事なきを得ました。どんな男性が、このミレーユさんを選んだの興味がありましたが、何だか又もや失礼な質問になりそうな気がしたので、

「それでは、ミレーユさんのお宅は結構裕福なのでしょうね？」

と聞いてみました。ラ・ヴァリエール公爵家の使用人の給与がかなり高く、旦那様も働いているのなら、無理して働く必要が無いのではと、軽く考えた為に出た質問でしたが、

「実は夫は生まれつき、右手が不自由でして」

という、少し沈んだ様な声で答えられた事で、場がかなり暗くなってしまいました。（しまった、こちらが？地雷だった様です）

「済みません、変なことを聞いてしまって」

「いいえ、夫は優しい人ですし、義父母も良い方です。公爵様の所での仕事も、やりがいがありますから」

そう、明るく答えてくれたミレーユさんを尊敬したくなりました。でも一つ気になる事があります。こんな話を、エルネストが放置しておくでしょうか？　エルネストの手に負えない、障がいだったりするのでしょうか？　ここまで来てしまったのですから、思い切って聞いてみることにします。

「そのご主人の障がいというのを、エルネストに診せたんですか」

「え？　あの人は別に病気では無いんですよ？　ただ生まれ付き、右手が不自由なだけです」

あれ？　久々に、この世界の人と意識の差があるようです。後で知ったのですが、この世界では、先天的に障がいを持つ人を、始祖ブリミルから特別な試練を受けている人物と見做す風習があるそうです。

「それは立派な病気です。もしかしたら、エルネストが何とかしてくれるかも知れませんよ？」

「それは、本当なんですか？」

ミレーユさんは、真剣な、そして縋るような目で僕を見詰めて来ま

した。

「ええ、本当の事です。是非、エルネストの所を訪ねて下さい。必要ならば、僕も手を貸しますから」

そう力強く頷くと、ミレーユさんが俄然元気になりました。暴走モード突入か？と期待しましたが、ルイズの事が気になるらしく、そわそわしているだけでした。

「ミレーユさん、少しお願いがあるのですが、ルイズは僕が1週間ほどお預かりしたいのです。急で申し訳ありませんが、ラ・ヴァリエール公爵に伝言をお願い出来ないでしょうか？」

「え？　でも、ルイズ様を一人で残して行く訳には・・・」

「大丈夫ですよ。ルイズは、彼女が面倒見てくれますから」

僕はここで、我関せずと食事続けていたキアラにその役割に指名しました。

「な、何を！」

「キアラ、嫌なのかい？」

「ダメなの？」

「えーっとですね」

キアラも純粋な子供の視線には弱いようです。もう一押しでしょうか？

「そうか、ルイズ今晩は僕と寝るかい？」

「そ、そんなのダメに決まっているじゃないですか。不潔です！ルイズちゃん、お姉さんと一緒に寝ましょうね」

ルイズが返事をする前に、慌てた様にキアラが、答えを返してきました。ルイズには猫なで声で、顔を近づけて優しく微笑むのですが、僕の方へは”キッ！”と言う感じで、いつも以上に睨んできます。”不潔です！”は無いと思うのですが、キアラは何を想像したんでしょう。

僕は、馬車の手配をして、ミレーユさんを送り出す事に成功しました。キアラはと言うと、ルイズを僕から守るように傍に付き添っています。あまり人の事は言えませんが、根が真面目なキアラには、ルイズと僕が一緒に寝ると言う事が許されない事と感じるのでしょうか？

結局、その晩は、僕は普通に、キアラとルイズが一緒のベッドで眠る事になりました。まあ、順当な結果だったのでしょう。キアラがルイズにどんな対処をするか、少し意地悪な興味があったのですが、それをほとんど見ることは出来ませんでした。

第六十三話　ラスティン２０歳（ルイズ来る：またも暴走するミレーユさん）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

ルイズの話はさらっと流す予定だったのですが、流石は原作ヒロイン、なかなか粘ってくれました。ルイズ成長編と言うべき内容ですが、タイミング的に千客万来編の一部になってしまいました。

第六十四話　ラスティン２０歳（ルイズ来る：２日目）（前書き）

第六十四話ＵＰします。

第六十四話　ラスティン２０歳（ルイズ来る：２日目）

翌朝、朝食を終えると、僕はルイズを連れて、ワーンベル鉱山の採石場に向かいました。出掛けに、キアラがルイズを見送ってくれました。仕事をサボる事になる僕に何も言わなかったのが不思議でもありました。ルイズもキアラに随分懐いた感じです。試みに、

「ルイズ、昨日の晩に、あのお姉さんと、どんなお話をしたんだい？」

と聞いてみましたが、

「女同士のお話です。スティン兄様には”絶対に”秘密なんです」

と言って教えてくれませんでした。キアラとはいえ、女性の秘密を探るような真似は控えた方が良いのでしょうね。ルイズの手を引いて少し歩くと、採石場に到着です。採掘者の皆さんが朝早くから仕事を始めているのが確認出来ます。近くに居る採掘者の人が、僕に気付いて、

「ラスティン様、朝早くから、こんな所になんの御用ですか？」

「お仕事ご苦労様です。こちらに組合長さんはいらっしゃいますか？」

「組合長ですか？　地下の方で、何かあったそうで、そちらに行っています」

鉱山の方で何か事故でしょうか？　僕の方には、今のところ報告が

上がって来ていませんが、少し心配ですね。ここの皆さんも落ち着いた様子ですし、何か重大な問題ならば、キアラがここに人を送って来るでしょう。組合の方に干渉しすぎるのも問題でしょうし、このまま予定通りに事を進める事にします。

「そうですか、まあ仕方がありませんね。例の岩盤を使って少し実験をやりたいのですが、構いませんか？」

「あの岩盤ですか、構わないと思いますが。班長！」

「おう、何だ？」

「ラスティン様が、例の厄介者で実験をしたいと言われるんですが」

「本当なんですか、ラスティン様？」

「ええ、この娘が面白い物を見せてくれますよ」

僕は自信満々の口調で、ルイズを前に押し出します。（実際にはある種の賭けなのですが、そんな事は全く顔に出しません）

「あの、えっと・・・」

ルイズは、急に人前に押し出されて、あたふたとしたと思うと、僕の後ろに隠れてしまいました。その様子に大人たちが、ほんわかと癒されてしまいました。

「ルイズ、行くよ」

僕は、ルイズの手を引いて、問題の岩盤の所に向かいました。そこ

には不自然な形で、岩の塊が残されています。はっきり言って、採石の邪魔な存在ですが、事情があって現在は放置されています。

「スティン兄様、この大きな石がどうかしたんですか？」

「この岩を、ルイズに砕いてもらおうと思ってね」

「こんなに大きい石、じゃなくて岩？をですか？」

「そう、多分ルイズにしか出来ない事なんだよ」

「私にか出来ない・・・。はい、やります」

ルイズが、張り切って杖を構えます。聞きなれた、”ドカン”という爆音が辺りの空気を震わせ、硬い岩盤か面白いようにサクサク？と砕けています。（おお、予想以上の効果です）

爆音を聞きつけて、周囲の採掘者の人達が、集まってきました。ルイズの放つ呪文で、苦労させられた岩盤が、どんどん砕かれて行くのを見て、彼らも呆然としていたりします。５，６歳の少女が、巨大な岩盤を嬉々として、砕いて行く様は異様な光景です。一頻り削岩作業を終えると、満足げなルイズが僕の所に戻って来ました。そのルイズに、班長さん？が、

「お嬢ちゃん、凄いじゃないか！」

と話しかけました。他の採掘者の人達も、苦労させられた、岩盤がかなり片付けられたので、ルイズの功績を称えます。ルイズはその思わぬ声援に”えへへ～”といった感じで頬を緩めています。採掘者の人達が邪魔な石を片付け始めた事で、やっと落ち着いてルイズと話す事が出来る様になりました。

「ルイズ、どんな気分だい？」

「とっても気持ち良かったです！」

ルイズは本当に爽快だったという表情をしています。随分と溜まっていたんですね。（何だか、えっちな表現が続いていますね、ストレスがですよ！）

「そうか、良かったね。そろそろ、昼食にしようか？　あそこにお店があるよね、これでお弁当を2人分買って来てくれるかな？」

そう言いながら、ルイズに十枚程の1スゥ銀貨を渡します。ルイズは銀貨を不思議そうに、見詰めています。

「それはね、1スゥ銀貨と言うんだよ。君が知っている金貨の百分の一の価値なんだ」

「分かりました、これも、お金なんですね。じゃあ、お弁当を買って来るね～」

ルイズはそう言いながら、弁当の屋台に向かって駆けて行きました。僕は”はじめてのおつかい”を見守るお爺ちゃん気分です。しばらくすると、ルイズが戻って来ました。弁当を抱える様に持って、右手にはお釣りを握り締めている様です。

「兄様、大変です！　お買い物をしたのに、お金の枚数が変わりませんでした」

そう言いながら、お釣りを見せてくれました。ルイズにはもう少し

常識を教えなくてはいけない様です。
昼食を終えると、ルイズにまた岩盤の処理の続きをしてもらいました。昨日の競争に続き、今日もかなりの魔力を使っているはずなんですが、ルイズは魔力が枯渇する様なことも無く、岩を砕き続けて行きました。
結局、夕暮れまでルイズは、作業を続けていました。ですが、急に途中から元気が無くなって来た気がします。

「ルイズ、お疲れ様。もう十分だよ」

「はい・・・。兄様、今日はありがとうございました。こんな私の為に、お芝居までしてくれて」

「どうしたんだい、急に元気が無くなったみたいだけど。それに、お芝居ってどういう意味かな？」

「さっきの人達もみんな、兄様が頼んでお芝居してもらったんでしょう！　だって、こんな岩くらい、”つちけいとう”の魔法なら、簡単に壊せるはずだもの」

この間違った指摘を聞いて、少し驚きました。ルイズの歳で、系統魔法の知識があるとは思っていなかったからです。

「ルイズは賢いんだね。君の歳で系統魔法を知っているとは思わなかったよ」

「だって、杖契約の時間が勿体無かったから」

ルイズは、沈んだ声で、答えてくれましたが、ちょっと話が飛びすぎていて、理解出来ませんでした。詳しく聞いてみると、杖を”爆

殺”する度に、杖契約をする事になり、その時間を使って魔法の勉強をしていたという事でした。なかなか努力家なんですね。

「ルイズはさっき土系統の魔法なら簡単に、この岩を壊せるって言ったよね？　でも、それは正しくないんだよ。見ていてごらん」

僕は、一番分かり易い、ゴーレム作製の呪文を、例の岩盤の周辺にかけました。本来ならば、５０サント程の岩ゴーレムが出来る筈なんですが、その身体は見事に例の岩盤の外側に半分だけしか完成せず、直ぐに倒れてバラバラになってしまいました。

「え！　今のって、なんですか？　ごーれむが半分でした」

「分かったかな？　この町には、優秀なメイジが沢山いるんだ。僕より強い土系統のメイジだっている。だけどね、皆この岩にはお手上げなんだよ」

「じゃあ！」

「そう、さっきの人達は本当に困っていて、ルイズに本気で感謝していたんだよ」

ルイズは、その細い肩を震わせながら、静かに泣き出してしまいました。僕は、ルイズの涙をハンカチで軽く拭いました。ルイズは少し恥ずかしそうでしたが、されるがままになっています。僕は思い切って、ルイズを抱き上げて、肩車をしてあげました。最初はビックリしたルイズでしたが、直ぐに、

「たかい、たかい」

と言って、喜んでくれました。僕たちはそのまま、屋敷まで戻る事にしました。（不本意ですが、ちょっとお父さんぽかったでしょうか？）

先程の岩盤は、はっきりと結果が出た訳では無いですが、風石の一種だと僕は考えています。見つかったのは、例の大精霊事件からしばらくしてからでしたし、僕が指定した風石の集積場所の一箇所が、このワーンベル鉱山だったからです。

風石の一種といったのは、風石の特性を全く持っていない為です。風石ならある呪文に応じて浮力を生じるはずですし、加工もそれ程、難しく無いからです。僕の直感ですが、この岩盤に風の力が蓄えられる事で、風石になるのではないかと考えています。

ちなみに風石の集積場所に選んだのは、”ワーンベル鉱山”，”レーネンベルク山脈”，”ガリア中部の山”，”ロマリア北部の山”です。もうしばらくすれば、聖エイジス３１世からのありがたいお言葉が、各国に伝わる事になるでしょう。

屋敷に帰り着くと、何故かキアラに怒られました。”公爵の令嬢に何と言う格好をさせるのですか！”という意見は、それ程的外れでは無いですが、”父親と娘の交流”を演出したかっただけで、怒られるなんて不条理だと思います。ですが、今日一日の仕事を放り出して、遊んでいた様な物なので、”我慢、我慢”と自分に言い聞かせました。

まあ、怒られても、仕方がありません。しばらくは、ルイズを優先しなくてはいけませんからね。明日には、何とか杖の方も届くはずです。あの杖の本当の価値を知ったら、ルイズはどんな顔をするんでしょうか？　理解出来ないかも知れないですが。

第六十四話　ラスティン２０歳（ルイズ来る：２日目）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１２／２０
譲ー＜嬢
に修正

第六十五話　ラスティン２０歳（ルイズ来る：３日目）（前書き）

第六十五話ＵＰします。

第六十五話　ラスティン２０歳（ルイズ来る：３日目）

そして翌日になりました。まだ杖は届かない様なので、今日は朝から仕事をこなして行きます。ほとんどを、キアラとマルセルさん親子が片付けてくれていたので、程なく承認しなくてはならない書類も無くなりました。

さて、次は何をしようかと考えていると、マリユスが、届いた杖を運んで来てくれました。

「ラスティン様、職人の方から杖が届きました」

「待ってたんだ。ルイズおいで！」

珍しそうに（最初だけはですが）僕の仕事を眺めていたルイズを引っ張る様に、執務室を出ました。客間辺りが良いでしょうか？あそこなら、今は静かなはずです。（先日まで、クリシャルナが客室に泊まっていたのですが、また何処かへ旅立って行きました。”今度はすぐ戻って来るね～”とか言っていましたが、ワーンベルに戻ってくる必要は無いと思うのですけど）

僕は客間にルイズを連れて行き、そこで先程受け取った杖を、ルイズに見せます。

「兄様、この杖は？」

「これは、君の為の特別な杖だよ」

「私の為の杖？」

ルイズは、そう言って杖を繁々と見詰めています。僕も杖を見てみますが、短期間で仕上げてた割には、なかなかの出来です。父上に紹介してもらったのですが、あの職人さんは良い腕をしている様です。

「そう、この杖の材料のアリエの木の枝で、僕が妹達の為に取ってきた物なんだよ。ちなみに、その木は７００～８００年も生きているらしいよ」

「そうなんですか～」

何となく同意しているのが分かってしまう、返事ですね。僕もあまり気にしていなかった事ですが、アリエの木で樹齢が１００年を超える様な物はかなり珍しい様です。アリエの木は、メイジの杖の材料としてかなり人気があるらしく、杖が作れる程の太さになると次々に伐採されてしまうのです。きちんと植樹はされているので、アリエの木が無くなる事は無いでしょうが、アリエの木が樹齢を重ねるのは、この世界では難しい事の様です。

ニルヴァーナも、何処かの山奥に育っていたのを見つけられて、切り倒されたそうです。彼女自身はそれを、仕方が無いものだと思っていると言っていますが、本当はどうなのでしょう？

「この杖には、精霊さんが居るかもしれないんだよ？」

「精霊さんですか！」

途端にルイズの表情が、生き生きとしてきました。やっぱり子供にはこちらの方が効果的の様です。杖をルイズに渡すと、おっかなびっくりと言った感じで、杖を受け取ります。

「兄様、本当に精霊さんは居るんですか？」

「どうかな？　とりあえず、杖に名前を付けてみるといいよ」

「杖に名前ですか？　うーん」

ルイズはそう言って悩み始めてしまいました。これは、良い傾向です、はっきり言ってルイズに精霊が見えたり声が聞こえたりする可能性は低いと思います。ニルヴァーナも”お爺様の枝なら可能性はあると思うけど、人間側の体質や感性に因るわね”という何とも言えない意見でした。

僕としては、ルイズが杖を無二の物と思って大切にしてくれれば、それで良いのです。要は、ルイズが僕から杖を受け取ることで、僕からの信頼を感じて、その上に杖の扱いをちょっとだけ慎重になってくれれば良いのですから。

「うん、フェリクスが良いと思うよ」

あれ？　ちょっと考え事をしている間に、何だか話がまとまった様ですが、様子がおかしいです。

「ルイズ、杖の名前は決まったのかな？」

「はい、この子もそれが良いって言ってます」

ルイズは、”ほらっ！”と言う感じで、杖を見せてくれますが、僕にはこの子と言うのが全く見えません。こっそり、ニルヴァーナに聞いてみましたが、無いも見えないし、聞こえないそうです。実際に”フェリクス”という存在が居るのかは分かりませんが、ここは話を合わせておくべきでしょうね。

「ごめん、ルイズ。契約した精霊というのはね、基本的に契約した人間にしか姿を見せてくれないんだよ。だからねルイズ、その事は僕とそうだね、エルネストにしか話しちゃいけないよ。精霊の事を感じられない人には、理解出来ない事だからね。それと、精霊と話しているところも他の人に見られちゃダメだよ」

「何故ですか？」

「うーん、説明が難しいね。ちょっと見ていてくれるかな？」

「うん」

僕は、ニルヴァーナに、今度は堂々と語りかけます。

「ニルヴァーナ、ルイズの事どう思う？」

「そうね、さっきも言ったけど、体質や感性に依存するって聞いたことがあるわ。この子の感性次第じゃないかしら？」

「感性か、もしかすると大人になると見えなくなるとかあるのかな？」

前世でも、そんな話を聞いたことがあります。その時は、眉唾物だと思っていたんですが、ハルケギニアでは実際に精霊がいると認識されているので、話は微妙になってきますね。

「それは、人間側の話だから、私には分からないわね」

「それもそうか。キュベレーや、エルネストの所のテティスなら、

どうかな？」

「うーん、同族の私が見えないんじゃ、望み薄じゃないかしら」

「分かったよ、ありがとう」

僕は、ニルヴァーナとの話を切り上げて、ルイズの様子を見ます。ルイズは、”見ちゃった～”という顔をして僕から目を逸らします。

「ルイズは、今の僕の様子を見てどう思った？　まあ、表情をみれば分かるけど」

「あ！　もしかして、私も同じだったんですか・・・」

ルイズは、そう言って、顔を真っ赤にしてしまいました。これはっかりは、経験してみないと分からない恥かしさなんです。

「分かったかい？」

「はい・・・」

ルイズは、蚊の泣くような声で答えてくれました。良い感じです、そろそろ次の段階に入っても良いでしょう。

「じゃあ、今度はその杖と契約するんだ。杖契約が出来たら教えてくれるかな？」

「はい！」

僕は、その返事を聞いて、そのまま客間を出ようとしました。さ

て、仕事の続きは何をすれば良いのでしょう?

「兄様!」

その時、ルイズが僕に話しかけて来ました。

「ルイズ、どうしたんだい? フェリクスがどうかしたのかい」

「あの、杖契約終わりました」

この娘には、よく驚かされますね。この短時間で杖契約が終わるとは、思っても見ませんでした。

「それも、杖契約を何回も繰り返したおかげなのかな?」

「はい」

「そうか、ルイズは凄いね」

僕が、呆れるの半分、驚くの半分でルイズの頭を撫でると、ルイズはくすぐったそうに笑い声をあげました。予定外に順調に話が進んでいる様に感じますが、問題は無いでしょう。こうなったら、このまま最終段階に移行する事にします。

「ルイズ、早速だけど、フェリクスの先にライトで明かりを灯してみてくれるかな?」

「!!」

ルイズは、やっぱり驚いています。せっかく出来た珍しい友達を

文字通り”爆殺”してみろと勧めている様なものなのですから、当然かも知れません。

「でも、こんな所で呪文を唱えたら、めちゃくちゃになっちゃうよ？」

「ああ、そうだね」

僕はルイズの目に視線を合わせたまま、答えました。

「でも・・・」

ルイズは何か言いかけましたが、結局何も言い出しませんでした。今、ルイズは岐路に立っているのだと思います。そう、ゼロと呼ばれるメイジと呼ぶ事も出来ない様な存在になるのか、コモンマジックしか使えない半人前のメイジになるかです。あれ、どちらもあまり良くない未来ですね。ですが、０と５と１０を考えて見て下さい。”０”では何倍しても”０”のままですが、”５”ならば、努力や工夫次第で”１０”を上回る事が可能です。

魔法学院での経験でいえば、メイジ対メイジの決闘では、先に呪文を唱え終えた方が圧倒的に有利です。その点、早口で呪文を唱えてもきちんと効果を発揮するコモンマジックは向いているとさえ言えます。まあ、相手の出方が読めてしまえば、あまり効果は無いですが、普通の決闘であればコモンマジックだけで十分に勝負出来ます。

「ルイズ、良く考えてごらん。フェリクスを使って、魔法を使って良い物かどうかをね」

僕はそれだけ言って、客間を後にしました。今回は、ルイズに引

き止められることはありませんでした。それから僕は執務室に戻って、仕事を続ける事にしました。

その日の夕食は、暗い雰囲気でした。ルイズは、少し料理を口にしただけで、席を立ってしまいましたし、そんなルイズの様子を見て、キアラは責める様な目付きで僕を見詰めていました。今回に限っては、僕はキアラの視線を一切気にしませんでした。

第六十五話　ラスティン２０歳（ルイズ来る：３日目）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第六十六話　ラスティン２０歳（ルイズ来る：４日目）（前書き）

第六十六話ＵＰします。

第六十六話　ラスティン２０歳（ルイズ来る：４日目）

翌朝、ルイズは朝食に顔を出しませんでした。キアラの話では、朝早くから起きだして、客間で杖と向き合っているそうです。それから、僕は、執務室で普通に仕事を始めました。キアラが遠慮がちに、

「ラスティン様、ルイズちゃんの件あのままで宜しいのですか？」

と尋ねて来ました。

「キアラはどう思う？」

「ラスティン様がなさっている事は理解している積りですが、ルイズちゃんはまだ子供じゃないですか」

「そうだね、でもあの子も”メイジ”だよ」

”それも、特別なね・・・”と続けるつもりでしたが、キアラは何か考え込んでしまいました。

「どちらにしても、ここは、信じて待つ所じゃないかな」

「そうですね、ラスティン様が”信じる”とおっしゃるなら私もルイズちゃんを信じる事にします。でも話を聞いてあげる位は、かまわないですよね？」

「ああ、そうしてくれるかな」

キアラは本当に、優秀な人材ですね。僕が何を望んでいるか、的確

に把握しています。この機会なので、学校の卒業生たちの様子でも話しておきましょう。

・ユニス

まず、ユニスですが、セルジュの所に送り込んだのは、以前お話したと思います。ユニスは期待通り堅実な仕事ぶりで、セルジュから信頼を得たようです。ですが、彼女の真価はそんな物ではありませんでした。それは、セルジュのお母様に不幸があった事から分かりました。

我が家の財政を一手に引き受けているのはセルジュですので、彼が仕事を出来ないというのは我が家にとってかなりの痛手です。ですが、葬儀の場でセルジュと親族が何か揉め事を起したというのです。

（詳しくは、恥になるという事で教えてくれませんでした）

結局解決までに、2週間近くかかってしまい、どんな事になっているかと心配しながら職場に戻ってみると、いつもと変わらない状況だったそうです。セルジュの前には、処理済，決裁待ち，仮執行中，要調査の書類がきちんとまとめられていたそうです。仮執行というのは、決裁が下りていない緊急性の高い事業に、一時的に資金を拠出する手法だそうです。（僕には、金勘定が向いていないのは良く分かりました）

それで、セルジュからユニスに対する信頼は絶大な物になったそうです。先日も、セルジュ自身がワーンベルまで来て、事の詳細を知らせてくれました。いつも忙しそうにしていて、ワーンベルにきてもその日のうちにとんぼ返りする事が多かったセルジュが、ゆっくり一泊して帰っていった事がそれを証明しています。

やはり、ユニスの方は全く問題無かったどころか、予想以上だと評価して良いと思います。

・マリユス

次にマリユスですが、彼は非常に評価が難しいです。決して無能という訳ではありません。むしろ優秀と言えるでしょうが、問題は、マリユスが父親のマルセルさんと同じくらい優秀で、背格好も同じ位で、声も似ているという点でしょうか？

僕や、周りの人間が、何度も二人を間違えてしまった為に、色々な所で問題が生じてしまいました。結局、二人に違った色の服を着るように指示する事で、混乱は収まりました。

ですが、単に似ているだけでは、ここまで混乱するはずが無いと思って、マルセルさんの話を聞くと、マリユスは僕が魔法学院に在学中に、ワーンベルでよくマルセルさんの手伝いをしていたという事でした。それで、マルセルさんの仕事の仕方をマリユスがよく知っていて、同じ様な反応をするので、二人を間違える事が多くなったという訳の様です。

僕にとっては、マルセルさんが二人になった様な物でしたので、仕事の効率が上がったのが嬉しかったですが、マルセルさんとマリユスに時間的な余裕が出来て、二人が町の声を直接拾って来てくれる様になった事が、何より効果があった事だと思います。

特に、若いマリユスには、町の人々も話しやすい様で、色々な意見を拾って来ます。多くが突拍子もない事で、キアラに睨まれながら、”却下よ！”と言われて終わりです。偶には、先日の様に、”ワーンベルには娯楽が少ない”というまともな意見も出ます。

まあ、マリユスに関しても、問題は無いですし、将来的にはマルセルさんを追い抜いてくれる事でしょう。

・アンセルム

アンセルムの方はと言うと、判断は保留という形です。魔法兵団長のマティアスからの報告では、作戦指揮官としては十分に優秀だと評価されましたが、メイジを使いこなすという点で不安を感じたという報告は無視出来ない物です。マティアスが、アンセルムから聞きだした話では、アンセルムはどうやら傭兵団に入り込んで戦闘という物を勉強したそうです。隣国との小競り合いでは、かなりの兵士を指揮した事もあると言うのですが、ちょっと信じられない話です。

それと、アンセルムにはワーンベルの周辺に出没する盗賊団の退治を命じておいたのですが、それも未だに達成されたと報告はされていません。なにやら、キアラと話し込んでいる姿は何度か見かけましたが、結局なんの報告もされないままでした。

アンセルムに関しては、将来に期待大と言った評価になるのでしょうね

・キアラ

問題なのはキアラです。僕は、彼女に心の中で謝りました。彼女が言った”何でもやります”を大言と簡単に判断してしまい、試させてもらおうなんて考えた自分が情けないです。キアラを秘書役にして1週間で、彼女が秘書として優秀な事は、認め無いわけにはいきませんでした。

僕はその1週間、キアラの事をなるべく冷静に観察していましたが、キアラも同じ様に僕を観察していたんだと思います。何度か、あの視線で僕を見詰めているキアラと視線が合ってしまいましたから、僕の勘違いと言う訳ではないと思います。最後には試しているつもりが、実は試されているのではないかと思うようになってしまいました。

こんな事ではいけないと思い直し、キアラには秘書の他に、魔法兵団との連絡係もしてもらう事にしました。この辺りは、マルセルさんでも難しいと判断した事なので、どうなるかと思いましたが、キアラはこれも文句の付けようが無いほど、きちんとこなしました。”工場長”ヴァレリーさんの受けも良く、魔法が使えないにも関わらず、魔法の知識はかなり持っているらしいという、話も聞きました。

次に僕は、キアラにワーンベルの財政を見させる事にしました。マルセルさんの指揮下で、キアラは見事に、この町の財政の無駄を排除してくれました。この過程で、ワーンベルの役人のほとんどが、キアラに頭が上がらなくなってしまったのは、誤算でした。

僕はさらに、キアラを試す目的で、彼女に部下を付ける事にしました。人選は、最悪のケースを選びました。今年役人になったばかりの青年で、先日キアラ自身から、財政の無駄を厳しく指摘された人物です。彼は自分の能力に、かなり不安を覚えているという報告を受けていました。かなり、意地悪な人選だったと思います。ですが、キアラは彼を見事に立ち直らせる事に、成功しました。キアラは先ず彼に自分を信頼させ、その上で自信を回復させ、更に試練を与え、それを乗り越えさせる事で彼を一回り大きく成長させることさえ成し遂げてしまいました。

その手法を横で見ていた僕は、完全に脱帽するしかありませんでした。キアラには何をさせても、完璧にこなしてしまうのではないかという、根拠の無い確信が芽生えてしまったほどです。結局、僕はキアラを秘書兼相談役として、そのまま働いてもらう事にしました。それにしても、誰がキアラにあれほどの教育を施して、キアラは何の目的であそこまでの能力を身に着けたのでしょう？

最近では、キアラは秘書兼相談役ではなく、相談役兼秘書という感じになっています。これはつまり、主従が逆転している事を意味しています。僕も何年も代官職をやってきたので、統治者としては素人では無いと思います。だからこそ、キアラの上に立つものとしての格を見せ付けられている気がします。多分ですが、現状のワーンベルであれば、キアラが代官をやった方がうまく行くと思うこともあります。

少し前に、キアラに半分冗談で、

「キアラ、君はこの町の代官をやってみる気はないか？」

と言ったら、

「ラスティン様はどうなさるんですか？　公爵様の下で、次期公爵としての勉強でもなさるんですか？」

「いや、特に予定はないんだけど」

「ラスティン様！　今のこの町の代官は貴方なんですよ。代官が町を見捨てる様な真似をするおつもりですか？　この町に不満があるのならば、ラスティン様の手で改善していけば良いではないですか！　私も及ばずながらお手伝いさせていただきますから」

と説教されてしまいました。確かに代官職にあるものとしては、不見識な発言だったかも知れません。

「済まなかった、キアラ。良かったら、これからも僕を支えてくれるかな？」

と言った途端、キアラは慌てた様に、執務室から飛び出して行ってしまいました。こういうくさい台詞が嫌いだったのでしょうか？
それから、キアラは遠慮なく僕を鍛える事にした様です。力の入り方が、今までと段違いですから、まあ、その分僕がビシビシとしごかれる訳ですが。

そこまで考えた時に、キアラが戻って来ました。

「ルイズの様子はどうだった？」

「大分、追い詰められていたみたいです。杖に話しかけていたので、少し心配してしまいました。あ！でも大丈夫ですよ、事情はルイズちゃんから聞きましたから」

「信じたのかい？」

「あんな真剣な顔をするんですから、少なくともルイズちゃんにとっては真実なのでしょう。今はそれだけが重要だと思います」

「君は大物になるよ。ところで、君が栄えている町の領主になったら、どういう方針で町の開発を進める？」

「まさか、また私にこの町の代官をやれとおっしゃるのではないでしょうね？」

「いや、ローレンツさんに前に、宿題をだされたのを不意に思い出したんだ」

「それなら構いませんが、その栄えている町と言うのは、どんな町なんですか？」

「いや、詳しくは聞いていないな」

「それでは解答は出ないのでは？　仮にそこがワーンベルだったとして、考えてみたらいかがですか？」

「うーん、この町の場合かい？　君だったらどうする？」

いつものキアラならば、”自分で考えたらいかがですか？”とか言いそうですが、今日は機嫌が良いのか、素直に意見を聞かせてくれました。

「私なら、この町の税金を上げますね」

「はっ！？」

「ワーンベルの工業品は、安過ぎます。これは他の町や、他国での工業品の生産に少なからぬ影響を及ぼしていると考えられます」

「そうか、そういう考え方もあるか。増えた税収はどう使うんだ？」

「例えばですが、ワーンベルと同じ様な町をもう１つ作れば良いと思います」

「なるほどね。でもそれは、ワーンベルの代官が考える事かな？」

「そう言われてみれば、そうですね。ですが、ラスティン様は考えておくべき事ですよ」

「分かったよ、心得ておく。それじゃあ、君でも今のワーンベルに、

直接手を出す事はしないんだね？」

「うまく動いている物に、干渉するのは難しい事ですから。ひとつ間違えれば、全く逆の結果になってしまいます」

なるほど、ローレンツさんが”引っ掛け”と表現したのはこの辺りが原因なんでしょうね。

「後1つすべき事がありますよ。例の盗賊団対策です」

「あの件か、しかし、有効な対策は」

その時突然、執務室のドアが大きな音を立てて開かれました。そこに立っていたのはルイズでした。その手には杖が握られたままで、その先には、仄かな明かりが灯っています。

「兄様！　お姉さん！　私、私・・・」

「ルイズ、やったじゃないか！」

「お見事です、ルイズちゃん」

僕は、ルイズを両手で抱えあげると、思わずくるくると回ってしまいました。ルイズも嬉しそうに笑っています。ルイズはこの頃から思いっきりが良かったんですね。

「ルイズ、明日には、君の家に送っていくから、御両親に魔法を使うところを見せてあげるんだよ」

「はい、お父様もお母様も喜んでくれると思います！」

「よし、それじゃあこれから、町に出てお祝いしよう。何でも好きなものを食べてもいいよ」

「ホントですか！　クックベリーパイあるかな？」

「キアラ、後は頼んだよ」

「はい、いってらっしゃいませ」

そうして、僕とルイズは町に出かけましたが、久々にルイズの子供らしい笑顔を見ることが出来ました。さて、ルイズはメイジとしての一歩を踏み出した訳ですが、彼女にはまだまだ試練が残っています。系統魔法が使えないのは確定でしょうから、そこでもルイズは苦しむ事になるんでしょうが、暖かく見守って行きたいと思います。

第六十六話　ラスティン２０歳（ルイズ来る：４日目）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第六十七話　ラスティン２０歳（あの人の息子来る）（前書き）

第六十七話ＵＰします。

外伝では少しだけ、話が出た彼が登場です。

第六十七話　ラスティン２０歳（あの人の息子来る）

そして、更に翌日、ルイズをラ・ヴァリエール公爵家まで送って行く事にしました。僕としては、今回は僕自身が出向く必要性をキアラに説明しきれなかったので、嫌味の１つも出るかと思いましたが、キアラが意外とあっさり、今回の外出を了承してくれたのには驚きました。

ルイズがいるので、馬での移動は諦め、馬車で移動する事になりました。朝にワーンベルを出て、夕方近くに、エルネストの診療所に寄り、日が暮れる前にラ・ヴァリエール公爵家に到着する予定です。兵団の施設隊のおかげで、凡そですが移動の時間が見積もれる様になっているのはありがたいことなんだと思います。

夕方と言うには少し早い時間に、エルネストの診療所に着く事が出来ました。ここを訪問した目的は、ルイズの成長の報告と、今後の方針をエルネストと相談する為でした。

「そんな事があったんだな、スティンお手柄じゃないか。きっと公爵も喜ぶよ」

「あんなに苦労したのに、労いの言葉はそれだけなのか？　お前だって、ルイズの義兄になるんだぞ」

「何を怒ってるんだ？　僕だって出来る事はしたよ、君だって納得してくれたんだと思っていたけど、違うのかい？」

「それはそうだけど、もっと感情を込めて欲しいんだけど。まあいいさ、それよりルイズを今後どうするかなんだけど」

「そうだな、ルイズがコモンマジックを使えるようになったことは、大きいと思うけど。あれを知るには、まだ早いんだろうな」

「そうだな、あれには条件が厳しそうだしね。レーネンベルクとラ・ヴァリエール家が要求すれば、陛下も”始祖の秘宝”を貸し出してくださるだろうが、確かにまだ早いよな」

「スティンの事だから、公爵にどう説明するかは、考えて来たんだろ？」

「まあね」

「じゃあ、そちらは任せる事にするよ」

「おい！」

「スティンには、手伝って欲しい事があるんだ」

「今すぐは無理だよ、ルイズを実家に帰さなくちゃいけないし」

「そうか、じゃあ、帰りにでも寄ってくれ。その積りで準備しておくから」

今度はルイズの時と打って変わって、何やら熱心に話を進めて行きます。”この医術マニアめ！”とか思いましたが、ここは逆らわない方が良いのでしょう。

僕は、診療所を後にして、再び馬車に乗り込み、ラ・ヴァリエール公爵家を目指しました。それにしても、先程のエルネストの態度は何なのでしょう。表現出来ない違和感を感じながら、僕たちは何と

か明るいうちにラ・ヴァリエール公爵家の屋敷に到着する事が出来ました。

ルイズを家の者に託すと、僕はいつもの客室に案内されました。客室に落ち着いて、

「今頃、ルイズが両親に魔法を披露しているんだろうな」

等と、独り言を呟きました。しばらく、あのエルネストの反応について考えていると、部屋のドアがノックされました。入ってきたのは、予想通りラ・ヴァリエール公爵夫妻でした。

「ルイズのことだが、本当にありがとう！　ラスティン、君には世話になってばかりだな」

公爵は、威厳を保とうとしている様ですが、その表情は少し崩れそうになっています。婦人の方も、いつもより柔らかい感じを受けます。

「いいえ、カトレアの時も言ったと思いますが、ルイズは僕にとって義妹なんですから」

「1つ聞きたいんだが、ルイズが”岩を割ったのが凄かった”と言ったのだ。あの子の言う事が、良く分からなかったんだが、君から説明してくれるか？」

こちらから話をふる予定だったのですが、公爵の方から切り出して来てくれました。僕は、鞄の中から例の岩の破片を取り出します。見かけはただの石なんですけどね。

「これが、ルイズが砕いてくれた岩盤の破片です。見ていて下さい」

僕は室内と言う事もあり、簡単な風系統魔法を、その石にかけます。結果は、呪文の効果が発動しないという地味な物でした。ですが、この夫婦程になると、これで何が起こったか理解できてしまった様です。

「ラスティン！　これは何の石なんだ？」

「分かりません、最近鉱山の方で掘り出される様になった物なんですが」

という話をしている最中に、公爵夫人が、石を持って部屋から出て行ってしまいました。石の正体についての推測を話していると、急に窓が激しく振動しました。かなり驚きましたが、屋敷内で騒ぎになるような様子はありません。目の前の公爵も落ち着いた様子です。不気味に思いながらも、説明を続けていると、石を持って夫人が戻ってきました。夫人も先ほどの揺れ？には驚いた様子はありませんでした。ここでは珍しいことではないのでしょうか？

「そういう訳で、ルイズの魔法は何か特別な物なんじゃないかと思うんです」

「特別か、随分抽象的な言い方だね」

「あなた、ラスティン殿はルイズの為にここまでやってくれたのです。ここからは私達が、あの子の為に考えて行動すべきじゃないかしら？」

あ、公爵の動きが止まりました。

「ラスティン殿、それでは、ごゆっくりおやすみ下さい。よかったら、この石をいただけないかしら？」

「はい、どうぞ」

公爵夫妻は、そのまま部屋から出て行きました。ふぅ、何とか説明に成功した様です。ルイズの力についても印象付ける事が出来たでしょうし、当面は問題無いでしょう。僕は肩の荷がおりた様な気分で、ゆっくり眠る事が出来ました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

翌朝、ルイズと公爵夫妻に見送られて、屋敷を後にすると、エルネストの診療所に向かいました。そこで、エルネストから受けた依頼は、すこし奇妙な物でした。

いきなり、清潔そうな服に着替えさせられ、何か水系統の魔法をかけられました。極めつけは、目の前に肉の断片らしきものと、肋骨と思われる骨を出されて、これでこの人の右手を作ってくれと言われたのです。この人と言っても、カーテンの下から左手だけが、見えているだけです。患者のプライバシーと言われれば、僕としても強引な真似は出来ません。

言われるままに右手を作製しましたが、コルネリウスの件や大精霊の負傷者の治療の経験がなければ、あまり感情移入が出来なくって、大きな失敗をしたかも知れません。右手が、何とか完成すると、僕はお役御免という感じで、追い出されてしまいました。（材料が少なかったので、少し細めになってしまった気がしたのが残念でした）エルネストはこれから大きな治療に入るはずなので、仕方がないと思うことにしました。そのまま、精神的な疲労を感じて、馬車でそ

のままワーンベルに帰る事にしました。右手の作製自体にはさほど時間はかからなかった筈なので、何とか夜位にはワーンベルに辿り着けるでしょう。

すこし、眠ってしまったようです。御者によると、丁度レーネンベルク領に入った所の様です。もう少し眠れるかなと思いましたが、不意にあの患者の事が頭に浮かびました。

「なるほど、そういう訳だったんですね」

思わず、口に出した言葉に、御者が反応してきましたが、独り言だと言って誤魔化しました。それにしても、エルネストも、そしてミレーユさんも随分と水臭いですね。きちんと頼んでくれれば、こんな気分にはならなかったのに、と思いました。でも、僕は患者の男性に関しては、名前さえ知らない事に気付くと、これで良かったのだと思えました。あの男性が、僕に無用の負い目を感じる事もありませんし、僕がその気にならなければ、あの男性の事を知ることも無いのでしょうから。

それにしても、移植治療（再生治療かな？）を完成させるとは、さすがエルネストといった所でしょうか？

眠る前まで感じていた、疲労と、モヤモヤした感じが、綺麗に無くなっている事が分かりました。

ラ・ヴァリエール公爵家から戻った時に、出迎えてくれたキアラが、昼間に来客があったことを知らせてくれました。正確には、昨日連絡を受けてキアラは、僕が外出していて戻る予定が不明と返答したのが、上手く連絡がつかず先方が来てしまったという事らしいです。その来客の名前を聞いて、不思議に思いました。魔法学園で教師をしているガストンさんだったのです。兵団には結構学園の卒業生が多いので、ガストンさんの話を聞くことがありましたが、ガストン

さんがワーンベルを訪ねて来るのは始めてだったと思います。
ガストンさんは元々この町に住んでいたので、ここを訪れる自体はおかしなことでも無いでしょうが、来訪が突然すぎますし、僕に態々会いに来るというのも、ガストンさんらしくない気がします。結局、僕とすれ違いになってしまう辺りは、実にガストンさんらしいと思うのですが、一緒に来たという少年が何か関係があるのでしょうか？　しばらくワーンベルの宿屋に滞在しているそうなので、使いを出して明日にでも会えるように手配しておきましょう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

翌朝、ガストンさん達が、再び屋敷を訪ねて来ました。
「ガストン先生、ご無沙汰しています」
「先生は止して下さい、ラスティン様」
「そうですね、ガストンさん」
「そうしましょうか、ラスティン殿」
何だか、ガストンさんとは通じ合うものがある気がします。
「ガストンさん、それで僕に御用があると聞きましたが？」
「そうですね、先ずは表向きな物から片付けましょう、ニルス君」
どうやら、連れの少年は表向きの理由の様です。この少年の名前も、容姿も何処かで見たり聞いたりした事があるのですが？

「お久しぶりです、ラスティン様。といっても、僕にはラスティン様にお会いした記憶は無いのですが、両親からお話は聞かされました」

「そうか、御両親が。うーん？」

「お分かりになりませんか？　父からは先日お会いしたと聞いていますけど」

最近、この少年くらいの子供を持っていそうな男性に会った言えば、セルジュですね、ということは彼は！

「君は、ニーナの息子なんだな？　確か一度だけ会った事があったね、君は確か2，3歳だったと思うけど。確かに、ニルス君だった。お母様は元気かな？」

「はい、基本的には元気です」

「基本的には？」

「ええ、少し叔父と揉めてしまったので、少しだけ元気が無かったんですが、最近はちゃんと元気を取り戻しています」

「セルジュもそんな事を言っていたな。良かったら事情を話してくれないか？」

「実は、叔父が大のメイジ嫌いでして、祖母の葬儀の席で僕と妹を名指して馬鹿にするような事を言ったんです。それを聞いて母が・・・、ちょっとだけ暴れてしまいまして、ちょっとだけですよ？」

「そうか、まあ良いさ。ニーナの息子なら、僕にとっても甥の様な物だ、良く来てくれたね」

「母も、畏れながらラスティン様の事を弟のようだと言っていました。これから、ラスティン様の下で働かせていただきますので、よろしくお願いします！」

そう言って、ニルスは僕に頭を下げました。彼が、僕の下で働く？疑問に思って、ガストンさんに視線を向けると、

「魔法学園も、公立学校の卒業生の噂を聞いて焦っているのですよ」

と、教えてくれました。なるほど、キアラ達が僕の直属の部下になり、その能力が証明されたことで、魔法学園としても、父上や魔法兵団ではなく、僕自身にアピールする必要性を感じたと言った所なのでしょう。そうすると、ニルスは魔法学園が誇る優秀なメイジということなんでしょう。これは思わぬ拾い物なのではないでしょうか？

「そうか、よろしく、ニルス。君の処遇はなるべく早く決める事にするよ。今日からしばらくはこの屋敷で寝泊りするといいよ。キアラ、ニルス君を空いている客室に通してくれ、その後は工場街を案内してくれるかな？」

それまで、黙ったまま僕の後ろに控えていたキアラに、ニルスを任せる事にしました。ニルスとキアラは連れ立って応接室を出て行こうとしましたが、僕は二人の身長がほとんど変わらない事に気付いてしまいました。１３，４歳のニルスと丁度お似合いな感じです。そんな事を想像していたら、キアラに”ギン！”と言う感じで睨ま

れました。時々女性って鋭いですよね？

2人が、部屋を出て行ったのを確認して、改めてガストンさんに話を聞きます。

「それで、ガストンさん、裏向きの用件を伺ってもいいでしょうか？」

「あ、ああ、気を使わせてしまったみたいですね。裏と言っても個人的な話なだけだったんだけど」

ガストンさんも人間的に成長しているんですね、あまり周囲の状況が気にならない人だと思っていたんですけど。それにしても・・・

「個人的ですか？」

「言いにくい事なんですが、レーネンベルク魔法学園を辞めたいと思うんです」

「えっ！　良かったら、もう少し詳しく話してもらえますか？」

話は確かに個人的な物ですが、魔法学園への影響はかなり大きいのではないでしょうか？

「はい、生徒達に教える事は、意外と性に合ったのですが。最近、何か研究をしたいと無性に思うようになりまして」

「そうですか。1つお聞きしますが、ガストンさんが抜けた後、魔法学園ではどんな影響が出ますか？」

「影響ですか？」

「そうですね、例えば、ガストンさんが教師職を辞めた後に、きちんと魔法学園で教育がされるかという意味です」

「それなら、心配ないでしょう。私以外にも、指導者は多いですし、教え子の皆も下手をすれば、私より教え方は上手かったりしますからね」

「そうですか・・・」

ガストンさんの言葉をそのまま信じる訳には行きませんが、色々お世話になって来たので希望を適えてあげたいという気持ちもあります。

「何か研究の目標はあるんですか？」

「いいえ、それが今の所何もアイデアが無い状態でしてね。我ながらおかしな衝動だと思っているんです」

研究内容が決まっていないというのは、良い情報です。ガストンさんの発想力が、エレオノールの研究に役立つかも知れません。

「ガストンさんは、アカデミーに興味はありませんか？」

「興味が無いとは言いませんが、あそこは私の様な平民がおいそれと出入り出来る場所じゃ無いですよ」

「そうですね、ガストンさんには失礼ですが、助手になってもらおうと思います」

「私がアカデミーに！　行きます、助手でもお手伝いでも何でもいいです。今からでも大丈夫ですよ！」

さっきは諦めモードでしたが、今度はすごい反応です。でも、今からはさすがに無理ですね。

「落ち着いて下さい。先方との交渉もありますし、少し時間を下さい。でも、ガストンさんを何とか、アカデミーに出入り出来るようにしてみますよ」

ガストンさんは、僕の答えを聞いて少し落胆しましたが、

「ラスティン様！　お願いしましたよ」

と言って、魔法学園へと帰って行きました。仕方が無いですね、早速エレオノールに、手紙を書くことにしましょう。結局1月ほどかかって、エレオノールとガストンさんの橋渡しをする事が出来ました。

第六十七話　ラスティン２０歳（あの人の息子来る）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第六十八話　ラスティン２０歳（平穏な日々来る）（前書き）

第六十八話ＵＰします。

第六十八話　ラスティン２０歳（平穏な日々来る）

それからしばらくは、今までが嘘の様に、新たな来客などがぴたりと来なくなり、平和な日々が続きました。

ワーンベルでは、騒がしくも活発な経済活動が行われています。何故か最近、工業品の注文が多くなって来た気がしています。

重要な話があるとすれば、ワーンベル鉱山で”風石”が採掘出来る様になった事です。ルイズが例の岩盤を砕いている時に、採掘者の組合の代表が居なかったのは、これが原因でした。変わりに鉄鉱石が採れなくなってしまいましたが、大勢に影響は無かったと言えるでしょう。

友人達に関しては、ガスパードをワーンベルに呼び寄せ、カロリーヌもワーンベルに常駐させるように手配を済ませました。後は、２人が本気になるかどうかでしょうか？

ガスパードとニルスを含めた１０人程度のチームで、僕の警備を専門に行う事になりました。何だか自分が重要人物になったような錯覚を覚えてしまいますね。

ゼロ戦絡みは、少し問題かも知れません。ミネットとコルベール先生と共同研究を命じた兵団員たちも頑張っている様なのですが、大型の部品ならば問題無いですが、細かな部品や合成樹脂といった物はやはり再現するのに時間がかかってしまいます。機銃については、ほぼ複製に成功しました。弾丸をワーンベルの工場街で、生産する見当も立っているいますし、その気にさえなれば、１週間もすれば相当な数の弾丸が用意出来ると思います。（現状では、工業品の生産に追われてしまい思うように生産できないというのが、問題かも知れません）

マリユス提案で始まった娯楽施設の建設ですが、紆余曲折を経て大規模なホールを建設するという事になってしまいました。まあ、引っ掻き回したのは、僕とクリシャルナだった訳ですが。ふらりと帰ってきたクリシャルナがワーンベルには大きな演劇場が必要だと主張し、僕がそれなら大人数が入れる講堂の機能も持たせたいと要求しました。結局、キアラの仲裁で、かなり大規模なホールを建築する事になりました。

本格的なホールにする事になったので、結構な費用と人手と時間が必要でした。基本的な躯体部分や壁等は、例の建築方法を活用することで、何とでもなるのですが、ワーンベルの顔となるホールとなると、機能重視という訳には行きませんでした。きちんとした職人を雇って各所に細工を凝らす必要もありますし、備品もそれなりの物が必要です。

最終的には、装飾関係は、数年かけて地道に整えて行くことになりました。逆に建物自体は、早々に完成させることが出来ました。後は気長に行くしかありません。クリシャルナはホールの仮完成を大喜びして、知り合いの芸人達に声をかけている様です。とりあえず、こけらおとしだけはしなくていけない状況の様です。

キアラを始めとした公立学校出身の部下達は、概ね順調に任務を果たしている様です。問題は凄く優秀なのに、時々、僕に対して、不自然な視線を向けてくるキアラです。彼女が優秀なのは議論の余地はないですし、僕に対しての忠誠心も十分だと思います。時々厳しい言葉をかけてくる事もありますが、後で考えればそれが僕の為だったと言うことも納得出来るので、この点も不満と言う訳ではありません。あの視線だけが問題だと思っていたある日、キアラがマリユスと話しているのを偶然聞いてしまいました。

「会長、最近また視力が落ちたんじゃないのかい？」

「良く気付いたわね」

「いや、偶然だよ。クロディーが心配してたから、ちょっと気になっただけさ」

「そう？　心配してくれてありがとう」

と言うような内容でした。これは、良いことを聞きました。視力が悪いという事は、やっぱり眼鏡が必要でしょう。眼鏡自体が一般的ではないこの世界では、キアラが眼鏡をかけていないのは不思議でもないですが、ここは”あの視線”を緩める為にも是非眼鏡をプレゼントさせてもらうことにしましょう。

僕はローレンツさん宛てに、眼鏡職人を紹介してくれる様に手紙を書きました。その手紙を、キアラ自身に渡して、大至急ローレンツさんに渡してくれるように頼みました。さて、眼鏡を渡したら、キアラはどんな表情をするのでしょうね？

眼鏡職人は意外な程、早く来てくれました。職人さんによると、公立学校のあるマリロットに店を開いているそうで、公立学校の生徒がお得意さんという事です。まあ、公立学校に入る学生は基本的に実家が貧しいので、ローレンツさんが陰ながら援助しているんでしょうね。

とりあえず、職人さんが持って来てくれたフレームを見せてもらいましたが、意外と種類が沢山あるようです。知的な出来る女性というイメージにぴったりの少し尖った感じのフレームを見つけました。これならキアラのイメージにぴったりと思いましたが、これをかけてあの目で睨まれることを考えると、却下ですね。

目的は、あの視線を和らげる事なのですから、柔らかなイメージの物が良いですね。そう考えて探すと、紺色のメタルフレームの丸

っぽいフレームが目に付きました。僕の中で、これだ！という確信が芽生えました。ですが、持ってみると少し重い様です。まあ良いでしょう、これを少し細工する事にします。

後は、レンズの方ですね。職人さんが、

「眼鏡をかける方は？」

と尋ねてきましたが、事情を話すと渋い顔になってしまいました。僕がレンズの合わせ方だけ教えてくれれば良いと、頼むと、

「そんな半端仕事は出来ない！」

とまで言い出してしまいました。結局、僕がレンズを職人さんの希望通りに成形（フォーム）で変形させる事で、納得させる事が出来ました。何故か助手にならないかと誘われましたが、きっぱりと断りました。（そんな事をしたら、キアラになんて言われるか想像したくないです）

とりあえず、フレームとレンズを2組買うことで話がまとまりました。立派な眼鏡ケースもおまけでつけてくれたので、感謝ですね。

仮に眼鏡をケースに入れて、簡単に包装します。慣れない事なので、少し怪しくなりましたが、格好はついたはずです。（昔はこういうことは、リッチモンドがやってくれたんですよね）

翌日の朝、執務室でキアラに会うと早速、プレゼントを渡します。

「キアラ、いつも助けてもらってありがとう。これささやかだけど、お礼の気持ちなんだ」

突然の僕の言葉に、キアラはかなり驚いた様子でしたが、なんとか受け取ってくれました。受け取る時にはいつもの様に恐々という

感じで、ちょっとだけ傷付きました。

「あの、開けてもいいですか？」

「ああ」

予想通りの展開です。がさごそと包みを剥がし、ケースを取り出して、中身の眼鏡を確認したキアラの第一声は、

「ラスティン様は、私の事を嫌いなんですね？」

という、沈んだ声でした。あれ～？　色々なパターンを予想していましたが、こんな極端なのは考えていませんでした。

「君を嫌ったりしていないよ。それは、感謝の気持ちの表れだよ」

ちょっと苦手ですし、少し企みもありますが、概ね真実だと思います。

「本当ですか？」

「ああ、それに目が悪いのをほかっておくと、どんどん視力が落ちるって言うしね」

「分かりました、喜んで使わせていただきます」

おっ！　説得成功です。

「あれ？　この眼鏡、レンズが入っていませんよ？　それに、ぶかぶかですし」

「ああ、それはこれからなんだ。そこに座って、眼鏡をかけてくれるかな？」

キアラは、少し不審そうでしたが、何とか椅子に座ってくれました。

「動かないでね」

そう声をかけて、眼鏡に手を近づけると、キアラが身体を固くしたのが分かります。そんなに僕に触られるのが嫌なのでしょうか？

キアラに触れない様に、何とかフレームの調整を終えました。

「どんな感じかな？　きつい所とか無い？」

「ぴったりです。眼鏡って意外に軽いんですね」

「いや、まだレンズが入っていないからね」

キアラから、フレームを受け取って、今度はレンズをはめ込みます。

「度の調整はしてないから、ちょっと目がおかしく感じるかも知れないよ」

そう言って眼鏡を渡すと、キアラが再度眼鏡をかけますが、

「確かに、目がおかしくなりますね」

と感想を言ってくれました。どうやら、ちょっと度がきつかった様

です。僕は、眼鏡の横から、レンズの厚みを微調整します。

「凄くはっきり見える様になりました、ありがとうございます、ラスティンさ！」

調整がうまく行った様で、笑顔で僕の方に顔を向けたキアラでいたが、視線が合った瞬間に直ぐに顔を逸らしてしまいました。こう言っている僕も、キアラの顔をまともに見ることが出来ませんでした。一瞬でしたが、あまりにも似合い過ぎていました。選んだ僕自身も予想外でした。

＞ｉ１７６５１―２０９０＜

童顔、ちびっ子な体型、そして丸眼鏡と来て、どう見ても１５歳以上には見えません。下手をすれば１３歳でも通りそうな勢いです。

「似合いますか？」

「うん、とっても似合うよ」（キアラの体型や容姿にぴったりです）

「これをかけて、仕事をしてもいいですか？」

「もちろんだよ」（なんだか、小さな子供を強制労働させていると思われないか心配です）

「大切にします！」

何だか気に入ってしまった様です。今更、他のにしようとは言い出せない雰囲気です。

「気に入ってくれたなら、良かったよ」

こう答えるしかありませんでした。

そして、その後ですが、何故かキアラは眼鏡をかけた状態では、決して僕と目を合わせませんでした。眼鏡を外している時は、例の視線を向けて来る事が変わらすあることを考えると、今回の作戦はあまり成功とは言えない気がします。例の視線が、単に目が悪かっただけという結末に少し疲労感を覚えた結果でした。

＝＝

そんな事があった、３日後にローレンツさんが、ワーンベルを訪れました。

「ローレンツさん、今日は何の御用でしょう？」

「いや、少し報告しておきたい事がありましてな」

「そんなに重要な事なんですか？」

「さあそれは、商人の私とラスティン殿では見る所が違うでしょうな。ゲルマニア絡みといえば、話はお分かりでしょう？」

最近では、僕の情報網もしっかりしてきたので、一通りの情報は入手済みですが、ローレンツさんの報告も是非聞きたいです。

「先ず、ゲルマニアの新皇帝が即位しましたぞ。その名前は”ナポレオン1世”！」

「プッ！」

いけないです、思わず失笑してしまいました。新皇帝の即位は、聞いていましたが、名前までは聞いていなかったので、油断しました。ですが、ローレンツさんは僕の反応が理解出来ていない様子です。

「ローレンツさん、”ナポレオン”ですよ？」

「そうですな？」

僕はキアラの事を気にしながら、こっそりローレンツさんに耳打ちします。

「前世の話です。フランスの皇帝”ナポレオン”がどんな末路を辿ったか、思い出してみてください」

ローレンツさんは一生懸命思い出そうとする素振りを見せました。しばらくして、

「おお！　なるほど、確かに。いやあ、寄る年波には勝てませんな。ですが、そうするとゲルマニア新皇帝は、我々と同じですかな？」

「でしょうね」

「ラスティン殿はその可能性を、気付いていたんですかな？」

「はい、私もかなり若い頃にスクエアになりましたし、エルネストも同様ですからね」

キアラは、話が分からずに、眉をひそめています。

「何か対策が必要ですかな？」

「そうですね、考えておきましょう」

「ゲルマニアに関して、もう1つ情報ですが、その様子では不要ですかな？」

「いいえ、多方向からの情報であれば、精度が段違いですからね」

「それもそうですな。今年はゲルマニアでは、穀物がかなりの不作と言う事です。価格の高騰が深刻だと、商人の間でも、噂になっています」

「戦争に向けての買占めという可能性は、考えられますか？」

「それは、無い様ですな。商人仲間も、そんな余裕は無いはずという意見が大半です」

「そうですか、新皇帝即位の勢いで何か仕掛けてくるかと思いましたが、杞憂の様ですね」

「ラスティン様、油断は禁物ですよ！」

今まで黙って話を聞いているだけだったキアラが、注意を促してきました。僕が返事をする前に、ローレンツさんが、

「キアラ君は、眼鏡をかける様になったんだね？」

「はい」

キアラ、そこで僕に視線を向けてはいけないと思うよ？　ローレンツさんがキアラの視線に気付かなかったとは思えませんが、結局そのまま、公立学校へと帰って行ってしまいました。

僕は、この平和な日々が少しでも長く続けば良いなと、ぼんやり考えていました。

第六十八話　ラスティン２０歳（平穏な日々来る）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

今回は、嵐の前の静けさと言った所です。

２０１０／１２／３１
表現を修正

”ナポレオン１世”に関して、意見をいただいていますが、１世を含めてこの名前しかありません。
少しネタばらしをすると、”ナポレオン”には彼自身の野望が、”１世”
の方には宰相の意図が見え隠れしています。
そして作者の私は、彼の出現にとある事を暗示を持たせています。

２０１１／０２／０１
イラスト追加

第六十九話　ラスティン２１歳（急使来る）（前書き）

第六十九話ＵＰします。

話が大きく動き始める転機となる話です。

第六十九話　ラスティン２１歳（急使来る）

その日は、何故か朝起きた時から、気分が落ち着きませんでした。どれ位、落ち着かなかったかと言えば、午前中に２回、そして午後にも２回、キアラから仕事に集中出来ていないと叱られる程でした。最終的には、執務室から追い出されて湯浴みと食事を済ませて、寝てしまえとまで言われました。（昨日の晩に見た、月があまりにも赤かったり、暗かったりしたのが、印象に残ったせいかも知れません）

それでも、僕は食い下がって、何かあったら眠っていても直ぐに起す様に約束させて、何とか一休みする事になりました。キアラが口では強気な事を言っていましたが、その瞳は僕を本気で心配しているのを隠しきれていなかったので、こんな仕打ちにも耐える事が出来ます。何より、今は魔力や体力を充実させておくべきだと考えたのが、大きかったと思います。

当然ですが、まともに眠る事など出来ませんでしたが、横になっているだけで、少しは休養が出来たと思います。日も暮れて、夜になり、窓から見えるワーンベルの町の明かりも少しずつ減りだしましたが、僕の中では、まだ嫌な予感が続いていました。

そして、それは夜半近くになって、やってきました。一騎の伝令が、この屋敷まで駆け込んで来たのです。僕は、そのまま伝令の話を聞くために、玄関ホールに向かいました。（こういう事態に備えて、寝衣に着替えず、外出が出来る格好のまま横になっていたんですから）

伝令は息を切らせながらも、その役目を果たしてくれました。

「レーネンベルク公爵夫人からの伝令です。先程、公爵が倒れられました。至急屋敷まで戻るようにとの事でございます」

「そうか！　それで父上のご様子は？」

「はい、公爵夫人が治療に当たられておりますが、予断を許さない状況かと」

ここで伝令は、僕の横で話を聞いている、キアラに視線を移しました。

「構わない」

僕がそう答えると、伝令は声を落としたまま、

「屋敷内では、毒殺ではないかという話が囁かれています」

と報告を続けました。

「伝令ご苦労様、お疲れでしょうから、ゆっくり休んでください。キアラ、伝令の方を頼むよ。それに護衛の手配も」

「はい」

キアラに、対応を任せて僕は、クリシャルナの部屋へ向かいます。

「クリシャルナ、起きているかい？」

部屋のドアをノックすると、中からごそごそと物音が聞こえ、少しだけドアが開かれました。

「なーにー、こんなよなかに？」

ほとんど睡眠状態のクリシャルナが、その隙間から顔を出しました。僕は構わずに、先程の話をクリシャルナに聞かせましたが、反応はイマイチな感じです。

「前に言ってただろう？　ゲルマニアという国で、毒殺が横行していたって。君はその時、エルフの毒薬かも知れないって言ってたよね？」

その言葉で、クリシャルナは完全に目を覚ましたようです。

「直ぐに準備するから、少し待って！」

クリシャルナは、1度ドアを閉めましたが、直ぐにいつも通りの格好で姿を見せました。

「ラスティン、急ぎましょう」

「ああ、すまないね。こんな時間に」

「それは言わなくていいわ。友達のピンチなら喜んで力を貸すし、エルフが関与しているなら私が対応しなくちゃいけないしね」

「助かるよ」

僕たちは、厩舎に向かいました。まだ護衛の手配が済んでいないようですが、クリシャルナは構わず、一頭の馬を引き出しました。

「アイラール、急だけど頼むわよ」

そういうと、アイラールの頭に手を触れました。すると、そこには夜目にも鮮やかな純白の天馬（ペガサス）が現れました。

「さあ、乗って！」

一足先に、アイラールに跨ったクリシャルナが僕を促します。こうなったら、護衛を待っている訳にはいかない様です。僕もアイラールに跨ります。

「行って」

とクリシャルナが声をかけると、アイラールは数歩の助走をとっただけで、見事に空中に舞い上がりました。ですが、空中を旋回するだけで、前に進もうとしません。

「ラスティン、貴方の実家のお屋敷ってどっちの方向かしら？」

「ここから、南西の方向だよ。距離は５０リーグ位かな？」

クリシャルナは返事もしませんでしたが、アイラールは確実に南西針路をとった様です。アイラールの速度はかなりの物でした。しかも、それが全く落ちないのが素晴らしいです。メイジがフライを使っても、相当な速度を出せますが、長距離には向きませんし、人を抱えて飛ぶのもかなり難しいはずです。

あっという間とは行きませんが、それほど時間がかからず、マリロットの町が見えてきました。こんな時間にも明かりが点いているのは、父上の事で騒ぎが起こっているからでしょう。

「クリシャルナ、あそこに降ろしてくれるかい？」

アイラールは、僕が指示した通り、屋敷の前に見事に着地してくれました。まるで僕の言葉が分かっている様です。僕が屋敷に駆け込むと、執事のラザールが出迎えてくれました。

「父上は？」

「寝室でございます。奥様が治療を」

それだけ聞くと、僕は両親の寝室に向かいました。ドアを蹴破る様な勢いで開けましたが、寝室の中は静かでした。ただ、母上が呪文を唱える声だけが響いています。

「クリシャルナ、頼む！」

クリシャルナが、ベッドの上で苦しそうに呻いている父上の容態を、確認し始めました。僕はそれを見守る事しか出来ませんでした。クリシャルナはすぐに、症状の確認を終えた様です。

「ラスティン、これをお父様に飲ませてあげて」

クリシャルナは、腰のポーチから、こげ茶色の丸薬らしき物を取り出して、僕に渡してくれました。僕はその丸薬と、枕元にあった水を手にとって、父上に話しかけます。

「父上、聞こえますか？　この薬を飲んで下さい」

父上から返事はありませんでしたが、僕の手を握り返してきた事で、意識があることは確認出来ました。少し開いたままの口に丸薬

を放り込むと、続けて水を含ませます。父上が何とかそれを飲み込んだのを確認すると、振り返ってクリシャルナに指示を仰ぎます。

「これで良いのか？」

「ええ、効果は直ぐには出ないけど、間に合ったはずよ」

「そうか・・・、治癒魔法は続けた方が良いのかな？」

「ええ、体の自由が利くようになるまでは、その方が良いと思うわ」

「母上、聞こえましたか？」

僕は、一心不乱に治癒魔法を唱え続ける母上に声をかけましたが、答えは返って来ませんでした。父上の身体が動くようになれば、父上が止めてくださるでしょう。僕は僕で出来る事をしましょう。僕はとりあえず、居間に向かいました。クリシャルナとラザールもついて来ました。

「ラザール、状況を説明してくれるか？」

「状況と言われましても、ご夫妻がおやすみになってしばらくして、寝室からリリア様の悲鳴が上がったのです。駆けつけてみると、既に先程の状態でした。とりあえず、兵団の方に水メイジを派遣してもらう手配と、ラスティン様にお知らせする事にしました」

「そうか、どうやら毒を盛られた様なんだが、心当たりは？」

「あ！　そうでした。ベッケル子爵様が」

「ベッケル子爵？」

「はい、お客様の子爵様が旦那様と同じ状態なのです」

僕は慌てて、ベッケル子爵が泊まっているという客間に向かいました。そこには兵団の水メイジが懸命に治癒魔法を唱えている姿がありました。クリシャルナの見立てでは、父上と同じ毒という事で同様の対処をする事で、何とか事無きを得たという感じです。治療を兵団員に任せて、僕は再び居間でラザールから話を聞くことにしました。

「屋敷内で、他に調子がおかしい者は居ないか？」

「はい、全員無事です」

「そうか、ならば、父上とベッケル子爵だけが口に付けた料理は？」

「屋敷の料理人を疑うのですか？　お二人だけしか食べていない料理は無かったと思います。奥様もジョゼット様もテッサ様も、食事は共にされていましたから」

「そうか・・・」

「あ！　そういえば、食後にお二人だけで、ワインを召し上がっていました」

「それだ！　そのワインの素性は？」

「子爵様がお持ちになったもので、わたくしも詳しくは存じません。旦那様なら、お聞きになっていると思いますが」

「そうか、父上の回復待ちか」

そんな中途半端な結論に達した時に、居間に、ジョゼットとテッサちゃんが手を繋ぎながらやってきました。

「スティン兄」

「ラスティン様」

「ジョゼット、テッサ、起しちゃったみたいだね？」

「お父様が倒れたって聞いたんだけど」

「その話なら、母上が魔法で治しているし、何よりこのおねえちゃんがお薬をくれたから、心配いらないよ！」

努めて明るく答えました。急に話を振られたクリシャルナが驚いた様でしたが、そこはフレンドリーエルフの事ですから、心配無用でした。あっという間に二人とも、クリシャルナに懐いてしまい、クリシャルナに寄り添うようにして、うつらうつらしています。その平和な様子を見ていると、屋敷の外で物音がしました。

ラザールが対応に出た様ですが、声からすると護衛役のニルスが到着した様です。

「クリシャルナ、二人を頼めるかな？」

「いいわよ、この娘達の部屋は？」

「2階に上がって、右側手前の3番目の部屋だったかな？　部屋に

は乳母のメアリが居るはずだから」

「了解！」

クリシャルナはそう答えて、二人を連れて、2階に上がって行きました。それを待っていた様に、ニルスが居間に入って来ました。その厳しい表情を見て、今回の騒動がまだ終わっていないことが分かってしまいました。

「ニルス、ご苦労様。何があったか報告してくれ」

「キアラさんが、随分怒ってましたよ」

それは、確かに大事件です。いや、そうじゃないだろう？

「他に何か事件が起こったんじゃないのか？」

「ああ！　そうでした、兵団の警備隊からの連絡で、モーランド侯爵領にゲルマニア軍が侵攻を開始したという事です」

「本当なのか？　モーランド侯爵領にはうちの兵団は出入が出来ないはずだろ？」

「はい、警備隊がワーンベル周辺の盗賊を壊滅させる為に、密偵をモーランド侯爵領に送り込んでいたそうです。情報は確かだと、キアラさんも言っていました」

「そうか・・・」

報告の順序にツッコミ所満載でしたが、そういう場面でもないで

すね。ここは慎重に、しかし早急に僕自身の対応を決める必要がありそうです。

1. 兵団本部から指示をだして、国中の兵団を集めて対応する
2. 直ぐにワーンベルに戻り、モーランド侯爵領からゲルマニア軍が侵攻してくるのに備える
3. 王宮や、ラ・ヴァリエール公爵に連絡を入れて、救援を要請する

といったアイデアが浮かびました。本来であれば、1を選択して父上の代理としてこの屋敷に腰を落ち着けて、領内に指示を出すというのが、望まれるのでしょう。ですが、この選択をした場合は、確実に遅れをとるという奇妙な確信があります。3に関しては、ラ・ヴァリエール公爵ならともかく、王宮に対しては僕では押しが弱いという問題点があります。

結局、僕は2を選択して、ラ・ヴァリエール公爵だけに連絡を入れ、兵団本部で方針の指示だけを出す事に決めました。そして、その後ワーンベルに向かいます。ラザールに、ラ・ヴァリエール公爵への使者の派遣と、父上に変化があった時には必ず知らせを送るように命じると、護衛を連れてマリロットの町へ入りました。

そのまま兵団本部へ向かうと、そこは夜とは思えない状態でした。基本的に事務方しかいない本部が、こんなに慌しい状態になるとは思って事が無かったです。

仔細構わず団長室に直行すると、マティアスがらしくも無く矢継ぎ早に団員に指示を出しています。マティアスは僕に気付くと、

「ラスティン様、公爵のご容態はいかがですか？」

と、大声で話しかけて来ました。意図は分かるのですが、ちょっとうるさいですね。

「大丈夫だ、直ぐに意識を取り戻しはずだし、障がいも残らないそうだよ」

僕の言葉に、周りの兵団員が、安堵したのが分かりました。

「それで、何の御用でしょうか？」

「うん、ここから指示を出すつもりだったけど、必要は無いようだね。マティアスには１つだけ言っておこうかな？」

「はい、何でしょう？」

「レーネンベルク公爵代理として命ずる。レーネンベルク公爵領を守ってくれ！」

「はい、お任せ下さい」

「この領土の兵士と、ワーンベル以外の兵団員の運用を一任する」

「はっ！」

これだけのやり取りだけで、僕は兵団本部を後にしました。さてここからは強行軍です。ワーンベルまで夜道をひた走る事になります。

第六十九話　ラスティン２１歳（急使来る）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１２／３１
誤字修正と表現の変更

第七十話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：強行偵察）（前書き）

第七十話ＵＰします。

第七十話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：強行偵察）

マリロットからワーンベルは街道が整備されているので、夜でも何とか馬を全速力で走らせる事が出来ます。ニルスを始めとした護衛の人たちと共に、ワーンベルを目指します。

何とかワーンベルに着くと、とりあえず代官の屋敷に入りました。そこではキアラとアンセルムとマルセルさん親子が待っていました。キアラが、早速僕に、

「お父上の容態はいかがでしたか？」

と尋ねてきました。

「ああ、そちらは問題ない。それより、ゲルマニア軍の状況を、分かっているだけ報告してくれ」

「それは、俺の方からするよ。奴らは、ワーンベルを目指している！　そして、かなりの数の銃を揃えているのは確かだ」

僕は、アンセルムの”ワーンベルを目指している”という台詞を聞いて、立ち上がるとそのまま外に出ました。キアラが後ろで何か叫んでいるのが聞こえましたが、それどころではありません。馬に乗ろうとしましたが、先程の強行軍が堪えたのか馬は動こうとしませんでした。仕方なく別の馬を探して、モーランド侯爵領との領境を目指すと、護衛部隊がついてくるのが分かります。その中には、ニルスとガスパードの姿も確認出来ました。

馬を飛ばして、領境方面に向かうと意外な程近くで、ゲルマニア軍に遭遇してしまいました。まだ、夜が明けていない事と、相手方

が大集団な為、馬の走る音がかき消されたのは幸運だったのでしょう。ゲルマニア軍にも、当然馬は居る様なので、馬のいななき等も、それ程気にならなかったのでしょう。

僕達は、慌てて道を少し戻って、馬を道端の木にとめて、こっそりゲルマニア軍に接近を試みます。彼らは現在、小休止の状態だと推測出来ます。しかし、夜が明ければ、そのままワーンベルに向かい、戦争が始まるのは確実な状態なのでしょう。何とか時間を稼がなくてはいけないと、周囲を見渡して見るとゲルマニア軍は、とある山の麓をぐるりと囲むように、軍隊を停止しているのが分かります。

通常、こんな所で軍を停止するとは思えませんが、今は天啓を感じいられませんでした。

「皆、今からあのゲルマニア軍に仕掛ける。協力してくれるか？」

「スティン、何を考えている！」

「ラスティン様、無謀です！」

ガスパードやニルスを始め、護衛部隊の皆が反対意見を言いましたが、僕はこの決断を変えるつもりはありません。

「このままじゃ、この軍隊が直ぐにワーンベルに向かうことになるぞ。ワーンベルでは準備をしているだろうけど、時間が足りない。ここで、奴らを少しでも足止めする必要があるんだ！　これは、ワーンベルの代官としての決定だ」

護衛部隊の皆は、集まって相談を始めましたが、直ぐに結論は出

た様です。

「代官の決定とまで言われては、逆らえないね。仕方が無い僕達も協力させてもらう。だが、呪文を一回だけだ、そして唱え終わったら直ぐに、馬の所まで走って逃げて、そのままワーンベルを目指すぞ！」

ガスパードが、妥協案を提案してきました。

「僕がスクエアメイジだって事は、知っているな？　ゲルマニア軍には、相当の損害を与えて見せるよ。時間が無い、各自自分の得意な呪文で、最高の破壊力がある呪文を唱えてくれ、始めるぞ！」

僕が最初に呪文を唱え始めます。護衛部隊も直ぐに、続いて呪文を唱えると思いましたが、彼らは僕よりかなり遅れて、呪文の詠唱に入りました。まあ、急に”最高の破壊力がある呪文”と言われて戸惑ったのでしょう。多分、ラインスペルが最初に効果を発し、次々に地水風火の呪文が、ゲルマニア軍に襲い掛かります。そして少し遅れて、僕の山津波改（ネオ・ランドスライド）が発動します。その瞬間に、僕の頭にキュベレーの念話が届きます。こちらに向かっている感じですが、距離はまだ離れている様です。

『ラスティン、力を送りますよ』

その念話と共に、山津波改（ネオ・ランドスライド）の効果がかなり高まったのが感じられました。こんな事が出来るなんて、キュベレーも確実に成長している様です。僕はそのまま、呪文を発動しました。

『ありがとう、キュベレー！　この辺りに着いたら、ゲルマニア軍の状況を随時知らせてくれ』

『分かりました』

僕は念話を打ち切ると、馬へ向かって駆け出します。後方から、ゲルマニア軍の騒ぎと不気味な地鳴りが聞こえましたが、馬の所まで辿り着くと、直ぐに馬をワーンベルに向かって走らせます。気付くと、周りを護衛部隊が取り囲んでいます。

「敵は銃を持っているらしい、全員後方にシールドを張るんだ！」

こう、護衛部隊に声をかけると、ガスパードとニルスが馬速を緩めて、僕の後方に馬をつけました。”何の積りだ！”と怒鳴りつけたくなりましたが、2人の意図は明確です。僕に出来たのは、馬を飛ばして、一刻も早くゲルマニア軍から遠ざかる事だけでした。僕は心の中で、2人に何度も謝りました。

僕達がワーンベルに駆け戻った頃には、辺りはすっかり明るくなっていました。とりあえず、代官の屋敷に戻ると、多分一睡もしていないキアラから手荒い歓迎を受ける事になりました。キアラは僕の姿を確認すると、駆け寄ってきて、僕の顔を引っ叩きました。

キアラを追うように玄関までやってきた、マルセル，マリユス親子やアンセルムも、僕の無事を確認してほっとしている様です。僕は周りに集まっている皆さんに向かって、

「皆さん、ご迷惑をおかけして、申し訳ありませんでした。2度とこんな無茶はしない事を約束します。失望させてしまったかも知れませんが、引き続いて僕に力を貸してくれませんか？」

と言いながら、思いっきり頭を下げました。そのまま、しばらく頭を下げたままでいて、思い切って頭を上げると、目の前にキアラが

いて、

「ラスティン様は、ずるいです。そんな言い方をされたら、嫌なんて言えません！」

と泣き笑いの表情で、答えてくれました。周りを見渡してみましたが、皆一様に呆れ顔半分、微笑半分という感じでした。どうやら見捨てられることは避けられた様です。僕が胸を撫で下ろしていると、キアラが、

「ラスティン様、早速ですが今後の方針を決めていただきたいと思います」

「ああ、ここに戻ってくる前に、マリロットの兵団本部でマティアスに兵団の運営を一任してきた。僕が動かせるのは、ワーンベルの兵団員だけだ。後、ラ・ヴァリエール公爵に救援依頼の使者を送って来た」

「そうですか、兵団の方は、今こちらに迫っているゲルマニア軍の対応には間に合わないと思われますので、問題は無いと思います。ただ、ラ・ヴァリエール公爵への救援要請は無駄でしょう」

「何故、そう断言できる？」

「私が、ゲルマニア軍の指揮官であれば、レーネンベルク山脈の南北から攻め込みます。南端は、ラ・ヴァリエール公爵領ですから、そちらからも進軍があると考えるべきです」

「そうか・・・、ゲルマニア軍の目的は何だろう？」

「推測になりますが、ワーンベルの工業品の生産力を壊滅もしくは減少させる事だと思われます」

「推測と言う割には、根拠がありそうだな？」

「はい、以前にラスティン様にはお話したと思いますが、ワーンベルの工業品は安すぎます。工業で国を発展させようとしているゲルマニアにとっては、目の上の瘤と言った所でしょう」

キアラの主張は、十分に納得が行く物だと思います。ゲルマニア軍が、ワーンベルを目指して来ることが分かっている状態なら、罠を仕掛けることも可能でしょうが、先程の強行偵察で分かった様なゲルマニア軍の侵攻の速さを見ると、罠を準備している時間は無さそうです。

ワーンベルに篭って応戦するのは、敵の援軍が到着して、味方の援軍が到着しないという、事態が考えられる以上、とても採用出来そうもありません。また、ワーンベル以外の町や村がどんな事になるかを考えれば、何としてもゲルマニア軍を押し返す必要がありそうです。

「打って出ようと思う。ワーンベルには最低限の守備要員だけを残して、こちらに迫っているゲルマニア軍を何とか撃退するしかないな」

「承知しました」

キアラはそう答えましたが、何故か満足げな表情です。

「これも私の推測ですが、良いことをお知らせしましょう。ゲルマニア軍は多くて、２万程度で、３万は絶対にありえないでしょう。

更に言えば、その軍隊の構成は、強制的に徴兵された民兵が中心だと思われます」

言われてみれば、その通りです。ゲルマニアでは、去年の穀物の出来が大凶作の状態だったと言うことが確認出来ていますし、大量の兵士が動けば、当然こちらのスパイの目を誤魔化す事は難しくなります。数が頼みの雑兵がほとんどだという訳です。

ですが、こちらが有利と言うわけではありません。ゲルマニア軍の侵攻速度を考えれば、指揮官の技量は相当な物と考えられます。現にこちらは、完全に追い詰められている状況なのですから。また、今回の侵攻を実現させてしまう”宰相マテウス・フォン・クルーク”の政治的手腕は、かなりのものだと推測されます。何より、自国の不利な状況さえ、戦略に組み込んでしまう、戦略家としての思考は恐ろしくさえ感じてしまいます。そして多分、昨晩の父上の暗殺未遂にも、奴が絡んでいるのも確実なのでしょう。

「そして、あまり良くない事もお知らせしなくてはなりません。かなりの確率で、モーランド侯爵がゲルマニアに内通していると思われます」

キアラが続けた言葉に、僕は耳を疑いました。

「何だって、根拠はあるのか？」

「はっきりした根拠はありません。ですが疑うに足る状況なら、いくつか挙げることが出来ます」

キアラは一度言葉を切って、続きを語り始めます。

「第一に、マルセルさんから聞いたラスティン様の”拉致監禁事件

”です。あの事件はゲルマニアの指示で、モーランド侯爵が手引きをしたと考えれば、非常に納得の行く物と考えられませんか？　犯人も侯爵の陰ながらの支援があった為、簡単に証言を変える事が出来たのではないでしょうか？」

キアラが冷静な声で続けます。

「第二にですが、ワーンベル周辺を荒らしていた盗賊団に関してです。彼らを追い詰めると必ずと言って良いほど、モーランド侯爵領に逃げ込みます。そしてあそこは頑なに、兵団の出入りを禁止しています。ワーンベルに対しての妨害工作と考えることが出来ます」

僕は、キアラの言う状況証拠を聞くしか出来ませんでした。

「そして、第三に、ゲルマニア軍の侵攻速度の速さです。普通敵国に攻め込んだ軍隊は、橋頭堡といえる陣地を何箇所か築きながら、慎重に進軍する物です。あの侵攻速度は、予め陣地を築く場所を定めて、潜入部隊を投入していたのだと思われます」

そこまでキアラが話を進めた時に、何処からか伝令が到着したようです。慌しい足音と共に、伝令が部屋に入ってくると、

「ラスティン様、公爵様からのご伝言です。”モーランド侯爵に注意せよ”との事です」

と報告してくれました。父上は何とか口をきける状態まで回復してくれた様です。キアラはその報告を受けて、

「これが第四です。いかがですか？」

と、問いかけて来ました。僕はその状況証拠に1つも反論する事が出来ませんでした。強いて言えば、拉致事件の時の犠牲者クレマンさんの事が挙げられますが、”敵国の軍を自国に招き入れる様な人物が家臣を大切に思うか？”と問われれば、否定は出来ません。

「分かった、確かにモーランド侯爵は怪しいだろうな。モーランド侯爵領の兵士が敵に回ることはあるかな？」

「それはありませんね。調査によると、モーランド侯爵は領内での評判がかなり悪いようですから、領民に武器を持たせるのは、危険と判断するでしょう」

「そうか、それは良かった。他に報告は？」

「2つ程あります。勝手をして申し訳ありませんが、明日出荷予定だった、”フネ”の建材を使って、盾を用意させました」

ジュラルミンの盾があれば、銃に対する防御としては問題ないでしょう。

「ゲルマニア軍が、銃で武装しているなら、当然対策が必要だから、問題無い。良く指示を出してくれたね。銃といえば、何故アンセルムがここに居るんだ？」

「何だよ、今頃になって。領境の村を拠点に、モーランド侯爵領に探りを入れていたんだよ。おかげで、ゲルマニア軍の先遣隊に襲われて、命からがら逃げ出す事になったんだ。村の住人も無事に避難させてきたから安心してくれ」

「そうか、ご苦労様！」

僕は、アンセルムの肩を、バシンと叩きました。アンセルムは少し痛そうにしましたが、それでも笑顔を返してくれました。偶にはこういうスキンシップも良いのかも知れません。（キアラには未だに触れることを嫌がられていますが、毎回あれでは傷付きますよね？）

「それで、キアラ、もう1つの報告というのは？」

「はい、こちらへ」

キアラが僕を先導する形で、何故か屋敷を出る事になりました。何だろう？と思いながらキアラの後を黙ってついて行くと、まだ完成には時間がかかりそうなワーンベル・ホールに着いてしまいました。こんな朝早くに、こんな所で何があるのでしょう？

ホールへのドアを開けると、そこには信じられない景色が広がっていました。キアラが呆然としている僕に、

「工場長、いえ、ヴァレリーさんに協力いただき、トライアングル以上と警備隊の戦闘経験が1年以上の兵団員を集めてあります。数はおよそ２０００です。トライアングル以上の兵団員は十分に休養を取らせてありますが、その他は今日も普通の仕事をしていましたので、ご承知下さい」

なるほど、キアラがのんびり僕相手に、話をしていたのは、この準備が整うのを待っていたからなのでしょう。ですが、”十分に休養を取らせて”の件（くだり）は、明らかにおかしいです。アンセルムからの報告が何時入ったのかは分かりませんが、僕がマリロット方面に向かった後のはずです。”十分な休養”をとる時間があったはずはあ

りません。

「ラスティン様、事情は説明されているはずですが、貴方からも是非一言お願いします」

こう勧められては、僕も何か言わない訳にはいきません。ここまで大人数の前で話をするのは、経験がないので緊張するかと思いましたが、言葉はすんなりと出て来ました。

「我がレーネンベルク魔法兵団の皆さん、今、私達の生活の場であり、職場でもあり、そして多くの友人達が住んでいる、このワーンベルに危機が迫っています」

僕は敢えて、大きな声を出しませんでした。どちらかと言うと語りかけるような口調を意識しました。このホールには細工があって、風メイジをちゃんと配置すれば優れた拡声器代わりをやってくれるのです。

「皆さんはもうご存知ですね？　そう、ゲルマニア軍がこの町を破壊しようと、兵を進めています。私も各所に救援を要請していますが、今、この町を救えるのはどうやら、皆さんだけの様です。不甲斐ない代官で申し訳ありませんが、どうか皆さんの力を私に貸して下さい」

ここだけは、大声を出す事にします。

「そして、我々の力で、この町を守りきりましょう！」

しばらく兵団員からの反応はありませんでしたが、誰かが拍手を始めると、それがどんどん広がって行き、最後にはホール全体に響

き渡しました。出陣前の兵の反応としてはいささか穏やか過ぎる気もしますが、僕の演説?も、らしくなかったですから仕方が無いことなのでしょう。

僕に代わって、アンセルムが兵団員に指示を出して行きます。さて、僕も出陣の準備をする事にしましょう。

第七十話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：強行偵察）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第七十一話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：出陣）（前書き）

第七十一話ＵＰします。

第七十一話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：出陣）

「キアラ、僕は1度屋敷に戻って出陣の準備をしてくるよ」

「はい、それでは私も」

キアラからは、打てば響くといった感じで返事が返って来ましたが、本気でしょうか？　”何でもやります！”と言い切るだけあって、キアラは何をやらせてもそつなくこなします。彼女に欠点があるとすれば、1点だけ、肉体労働に向いていないという事でしょう。特に体が小さい上に、身体つきも細めです。多分、持久力の面では、かなり劣っているでしょう。彼女なら戦場でも十分知力の面で役に立ってくれると思いますが、戦場では体力勝負という面があるはずです。最悪撤退しなくてはならない時は、馬に乗っていては標的になるだけです。

軍師の役割なら、アンセルムが十分果たしてくれると思います。よし、ここは何とか丸め込む事にしましょう。

「キアラ、君に頼みたい事があるんだ。これは多分、君にしか出来ない事だと思う」

「えっ！」

「君には、僕の代わりにこの町に残って、この町の守備を固めて欲しいんだ」

「はい、やらせていただきます！」

「マルセルさんやマリユスでは、こんな時は対応しきれないし、ア

ンセルムはそれ程この町に詳しくないから・・・、あれ？」

キアラが不思議そうに、話を続ける僕を眺めています。

「やってくれるの？」

「はい、喜んで！」

何だか上手く説得出来たようです。代官職を任せると言うと反対するのに、代官の代理を任せると言うと”喜んで”などと言います。謎ですね？

「良かった、それでは、君に代官としての全権を委任する。任せたよ、キアラ！」

「はい！　全身全霊をあげて、ラスティン様のお役に立って見せます」

うーん、何だか張り切りすぎじゃないでしょうか？　微妙に不安を感じてしまいますが、他に選択肢は無いと思いますので、このままで行きましょう。

「そうだ、さっきトライアングル以上のメイジが何とかと言っていたね、どういう意味かな？」

「はい、兵団の方々のシフトを調整して、トライアングル以上の兵団員に昨日の午後から、休養を取らせてあるんですが？」

「昨日の午後からって、何故そんな事が出来たんだ？　アンセルムからの知らせがあったにしても早すぎじゃないか？」

「何をおっしゃっているんですか？　昨日散々胸騒ぎがするって、駄々をこねたのは、ラスティン様じゃないですか！　万が一を考えて、対応できる様にシフトを調整したんですよ」

何故か機嫌を損ねた様に言ったキアラの台詞に、僕は思わず”じーん”となってしまいました。別に駄々をこねた積りは無いですが、特に根拠の無い僕の胸騒ぎに、キアラはきちんと対応してくれたのですから。女性や子供の避難などで口を挟もうかと思いましたが、その必要は無さそうです。良い部下を持つと本当に幸せなものなんですね。

何やら、キアラがアンセルムを捕まえて、色々指示を出しているのを尻目に、僕は自分の準備の為に屋敷へと急いで戻りました。どんなものを持って行くかは悩みましたが、結局時間も無いので無難に、亜人退治の時の装備を参考にしました。

準備をしている僕の所へ、錬金隊で修行中のコルネリウスがやって来ました。

「ラスティン！　噂で聞いたんだが、本当にゲルマニアが攻めてきたのか？」

「間違いないと思う」

「俺も、戦列に加えてくれ！」

僕の所に来たことから、こんな事を言い出すとは予想していましたが、やっぱりです。キアラとは別の意味で、コルネリウスを今回の戦闘に参加させる訳には行きません。どうやって説得したもので

しょうか？

「コルネリウス、君はトライアングルメイジになったか？」

「・・・、いや、まだだ」

「確か、警備隊に所属していたのは、半年以下だったよな？」

「そうだ、それがどうした！」

「今回出征は、トライアングル以上か、警備隊での経験が一年以上の兵団員だけを対象にしているんだ」

「ふざけるなよ！」

コルネリウスが、僕の肩を掴んで激しく揺す振ります。少しは成長したと思っていましたが、コルネリウスはアルマントのままなんですね。

「落ち着けよ、アルマント」

「なっ！」

「今回は君が出るべきじゃないのは、分かっているんだろ？　君はゲルマニアの敵になってはいけないんだ！」

「だが・・・、分かったよ」

コルネリウスは半分だけ納得したといった感じで、屋敷を出て行きました。何かあるといけないので、コルネリウスの事を、キアラ

に頼んでおかないといけませんね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

準備を終えて集合場所の大通りの門前に向かうと、そこには既に兵団員が集まっていました。朝早い時間から商売を始める人々が、何も知らないのか僕達に奇異な目を向けて通り過ぎていきます。ワーンベル周辺に一応警備隊を出動させて、ゲルマニア軍の襲来を警戒させましたが、現状その姿が見えないのは少し不気味です。

僕の隣に立つアンセルムの号令で、兵団員が一斉に進軍を始めました。とりあえずの目標は、僕が急襲をかけたゲルマニア軍が休憩していた山麓でしたが、そこに付く前に偵察を頼んだキュベレーからの念話が届きました。

『ラスティン、この人達はライデンという町に向かっているみたい』

『ライデン？　どちらの方向に向かっているんだい？』

『うーん、さっきの所から、北北西？かな』

『良く知らせてくれたね、引き続き監視を続けてくれるかな？』

『はーい』

先程の強行偵察の時に、キュベレーが僕の傍に居なかったのは、大地の大精霊を手伝って風石の移動を行うのと、大地の大精霊のフォローを行う為です。大地の大精霊は、僕の”人には影響が出ないよう”を守ってくれている様なのですが、時々思わぬところで人間

に影響が出たりするので、油断が出来ません。
　ある町の水源になっていた湖が、知らない間に数リーグ移動していたとかも実際に起こった影響でした。この辺りは、人間とあの存在の認識のずれといった所なのでしょうが、実際水源が無くなった人々には、何の慰めにもなりません。そこで、キュベレーを派遣して、”修正”を依頼したりする訳です。

「アンセルム、ゲルマニア軍はライデンの町に向かったらしい」

「はぁ？　なんでそんな事が分かるかなぁ？」

「まあ、優秀な”目と耳”が居るからかな？　ライデンの町というのは、分かるか？」

「もちろん！　モーランド侯爵領の南側の結構大きな町だぜ。このまま進軍すれば、夕暮れ前には着くと思うんだが、本当にその情報は当てになるのか？」

「ああ、メイジにとっての使い魔は、相棒みたいな物だからね」

「相棒ね、そこまで言うなら、信じるが。ゲルマニア軍が後退したということになるな？」

「そうだな。何があったんだと思う？」

「ラスティン様の無茶のせいで、ゲルマニア軍が何らかの損害を受けたと考えるのが自然かな？　可能性としては、兵の多くが戦闘不能になったとか、司令部が損害を受けたとか、物資を失ったとかが考えられるが」

「そうか、でも推測でしか無い訳だね」

「とりあえず、ラスティン様の無茶の結果でも、見に行くとしますか」

今のアンセルムの”ラスティン様”には、やや棘がある気がします。もしかして、無茶の原因を作ったことで、キアラから怒られたりしたんでしょうか？

僕たちは、ゲルマニア軍と遭遇することもなく、僕が無茶をした山麓に到着しましたが、そこは既に山麓とは呼べない状態でした。具体的には、山が丘程度の高さに変わっていました。キュベレーの力をプラスした、山津波改（ネオ・ランドスライド）の威力はかなりの物だった様です。アンセルムは勿論、兵団員の多くもこの威力には呆れたというか、驚いたという表情を浮かべていました。

ですが、僕にとってはある意味悪夢の様な情景でした。ここに多くのゲルマニア軍兵士が生き埋めにされたと考えると、例え彼らが侵略者だったとしても僕は冷静でいる事が出来ませんでした。何故か、久々に悪夢にうなされそうな気がしました。

そんな僕の気持ちも長くは続きませんでした。僕達が、アンセルムがモーランド侯爵領を探るための拠点にしていたという領境の村に到着すると、そこは見る影も無い状態でした。家と言う家が、ほとんど打ち倒されていたのです。ここに住んでいた村人がこの状態を見たら何と思うか考えると、先程の感傷が怒りに変わるのを感じます。

「ラスティン様、どうやら会長じゃなくてキアラの奴が、言っていた事は本当らしいぜ」

村の様子を確認していた、アンセルムがこんな事を言い出しました。

「どういう意味だい？」

「この徹底した荒らし方は、多分食料を探して行われたんだと思うんだが、それにしても乱暴すぎる。きちんと訓練を受けた兵ならば、ここまではしないだろうな、時間がかかりすぎるし」

「そうか、食料が十分ではないという事と、ゲルマニア軍に徴兵されたばかりの兵が多いことは、確かという訳だね？」

「ああ、油断は出来ないが、こちらに有利な要素が確認出来たと言っていいだろうな」

「所で、アンセルム、さっきキアラの事を”会長”って呼んだよね？　以前もそんな事を言っていたけど、どういう意味だい？」

「こんな時にそう言う事を聞けるとは、ラスティン様も肝が据わっているな。　キアラの奴は、”学校”で生徒会なんて聞きなれない組織を立ち上げたんだよ。そのトップに座ったキアラが、会長と呼ばれた訳だ」

「生徒会の会長ね。どうでもいいけど、今回の騒ぎの間は、ラスティンで構わないよ。君は丁寧な言葉使いを学ぶべきだね」

なるほど、何も無い状態から生徒会という組織を立ち上げた訳ですか、当然ローレンツさんが何らかの助言をしたのでしょうが、それでもこの経験がキアラの中で生かせれている訳なんですね。

「はいはい、承知しました。まあ、雑談はこの辺りまでだな。ラスティンの情報が正しければ、ライデンの町ではゲルマニア軍が待ち構えているはずだし、そこで戦闘だな」

「アンセルムの実力を見せてもらうとしようか」

「何言ってるんだ、その戦闘はラスティンが指揮を執るんだぞ？」

「はあ？　アンセルムは何の為について来たんだよ！」

「そりゃあ、ラスティンが無茶をしないか、監視する為だね」

「ぐっ！」

「何より、警備隊ならともかく、錬金隊が主体のこの兵団じゃあ、かなり勝手が違うし。会長が言ってたほどの実力が、この兵団にあるか様子見だな。まあ、やばくなったら手を貸すから、安心して一当てやってみるんだな」

アンセルムの主張も分かるですが、人命がかかっているのですから、もう少し真面目にやって欲しい気がします。ただ、ここは僕自身が考えて、兵団を使いこなす必要があるのだと確信しています。それがワーンベルの代官としての役目ですし、これを仕組んだキアラの意図だと思いますから。

第七十一話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：出陣）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第七十二話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：初陣）（前書き）

第七十二話ＵＰします。

第七十二話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：初陣）

僕たちはそのまま進軍を続け、夕方と言うには少し早い時間に、ライデンの町の近くまで達する事が出来ました。順調な進軍ペースでしたが、それはゲルマニア軍との衝突が早まった事も意味しています。ゲルマニア軍は、ライデンの町から出て、平地に陣を張っているようです。陣の前方には、柵が設置されているのがここからでも、確認出来ます。

「敵兵は、１万５千といった所だな。ラスティンの無茶も、かなり効果があったみたいだな」

僕は、敵陣から４００～５００メイル離れた位置で兵団を停止させ、予定通り４人１組の構成で、横一文字の陣形を取らせました。正直言って、これが正しい陣形だとは思えませんが、ゲルマニアが銃主体の攻撃をしてくる前提で、メイジの特性を生かすには他に良いアイデアが浮かばなかったので仕方がありません。アンセルムも反対意見は言わなかったので、とりあえず致命的なミスは無いと信じたいです。

「作戦開始する！　火メイジ、第一波撃て！」

アンセルムの大声と共に、風メイジが敵陣に向かって風を起し、次いで火メイジが炎の矢（フレイムアロー）を放ちます。同時に土メイジが、ジュラルミンの盾を構えて、防御系の魔法を唱えます。こちらの攻撃に合わせる様に、ゲルマニア軍の陣地から、銃による攻撃が始まりました。

ゲルマニアの攻撃は、距離が離れているせいか、効果的な攻撃にはなりませんでした。銃による攻撃は、盾や防御呪文に阻まれて、こちらに被害はほとんど出ませんでした。ただし、銃の攻撃は、ほ

とんど絶え間なく続きました。

「おかしいな？　ゲルマニアの銃がこんなに速射出来るとは思えないんだけど」

「そうだな、何か手を打っているんだろうな。まあ、こちらに被害らしい被害は出ていないから、作戦は続行だな」

　アンセルムは気にしていない様ですが、僕は気になったのでこっそりキュベレーに念話を送って調査を依頼しておきます。敵陣の状況を確認すると、こちらの攻撃の効果は少しずつですが、現れている様です。風で飛距離を伸ばした炎の矢（フレイムアロー）は、かなり広範囲に影響を出している様子で、ゲルマニア陣では、かなり混乱が起こっているのが見て取れます。そして重要なのが、所々で時々起こる爆発です。
　爆発自体は大規模ではありませんが、その爆発が銃やそれを撃ってくる兵士に起こる事で、少しずつですが、銃弾の雨が散漫になって来ていると思います。そして、ゲルマニア陣で突然、今までと比べ物にならない大規模な爆発が起こりました。

「良し、予定通り火薬の集積場所に引火した様だな。ラスティン、次に移るか？」

「いや、もう一箇所位引火しないと、ダメじゃないかな？」

「分かった」

と言ってる間に、もう一回大規模な爆発が起きました。それを確認して、アンセルムが、また大声で、

「水メイジ、第二波、始め！」

と号令をかけます。風メイジと火メイジによる攻撃が中止されて、今度は水メイジの攻撃が開始されます。と言っても派手な攻撃呪文などではなく、召雨（コールレイン）という、雨を降らせるだけの呪文が唱えられるだけです。しかし、火薬に対する効果は絶大でした。炎の矢の攻撃で、火薬を身近に置くのを躊躇った銃兵が、火薬入れを濡らしてしまったり、火薬の集積所から火薬を移動しようとして、雨に濡れる等が起こったのだと思います。

弾丸の雨は徐々に間隔が開いて行き、終には銃撃そのものが、止んでしまいました。ここまでは予定通りですね、さて次はどちらの手を使いましょうか？　案としては、

1. このままの距離で、風メイジによる雷系の攻撃を仕掛けて、敵を遠距離から
　徐々にゲルマニア兵を戦闘不能に追い込む
2. 少し接近して、ラインスペルの致死率の高い呪文を叩き込み、確実に
　ゲルマニア兵を殲滅する

の二択です。現在でも大砲が使われない所をみると、何らかの障害で大砲は使えないと見るべきでしょう。横一文字の陣形に対して、命中させるのはかなり難しいと思いますが。僕は損害を減らす事を考えて、風メイジによる、雷撃（サンダー）による遠距離攻撃を選択しました。

「アンセルム、雷撃（サンダー）で敵の戦力を削るぞ」

「第三波、風メイジ、雷撃準備（サンダー）！」

アンセルムの号令で、風メイジ達が呪文を唱え始めましたが、この時ゲルマニア軍に動きがありました。ズタズタになった銃兵の隊

列の隙間から、騎兵が飛び出して来たのです。その勢いに乗るようにして、歩兵部隊も前進を開始しまいした。銃声が止んだため、騎兵が使える様になってしまった訳です。騎兵がどんどん接近してきます。兵団は接近戦に弱いという致命的な弱点があるので、この状況はかなり不味いかもしれません。

この時、アンセルムが今まで以上の大声で、

「みんな、落ち着け。先ずは騎兵を片付けるぞ、火メイジは、炎の槍詠唱(フレイムランス)開始」

ここで、火のラインスペルは不味いと思いました。ラインスペルは、今までのドットスペルより詠唱時間がかかってしまうからです。ですが、ここはアンセルムに任せるべきでしょう。

「土メイジ、大地の鉾詠唱(アースグレイブ)開始！　風メイジ、敵騎兵先頭に向け、撃て！」

号令と共に放たれた、サンダーが接近している敵騎兵に命中し、馬が倒れ兵士が投げ出されます。後続の騎兵がそれに巻き込まれて、かなりの騎兵が転倒しました。濡れていたのが、サンダーの効果を倍増させてくれた様です。

「水メイジ、氷の槍詠唱(アイシクルランス)開始！　火メイジ、炎の槍(フレイムランス)を敵歩兵の先陣に向かって、撃て！」

アンセルムは騎兵の混乱を確認して、目標を接近中の歩兵に変えた様です。かなり接近していた歩兵達に炎の槍(フレイムランス)が命中し、数百人の歩兵が一斉に燃え上がりました。さすがはラインスペルです、濡れていたはずの敵歩兵が、火柱を上げています。（ここからでは分かりませんが、あの周りでは、熱と臭いが凄い事になっているのでし

ょう）

「次、風メイジ、風の大刀詠唱開始。土メイジ、大地の鉾を混乱中の敵騎兵に撃て！」

ここまで来て、僕にもアンセルムが何をやっているか理解できました。彼は、同系統のメイジを1グループにして、風－＜火－＜土－＜水－＜風の順番で時間差をつけて呪文を詠唱させて、唱え終わった順に目標を指示して発動させているのです。ラインスペルの詠唱時間の長さと、属性の相克を上手くカバーした上手い兵団の運用方法だと思います。ですが、この方法は何処かで、見たことがある気がします。

「火メイジ、もう一度、炎の槍を準備！　水メイジ、右翼から迂回してくる敵騎兵に向けて、撃て！」

レーネンベルク魔法兵団の団長マティアスが、アンセルムの事をメイジの扱いが上手くないと評していましたが、そんな事は全く感じられません。いえ、それは違うのでしょうね、アンセルムには似合わない気がしますが、兵団の警備隊と仕事をしている間に努力して、この呼吸を会得したのでしょう。僕も、そんな姿勢を見習いたいと思います。おっと、こんな事を考えている場合ではありませんでした。

「土メイジ、大地の鉾を準備！　風メイジ、風の大刀を敵歩兵に叩き込め！」

ですが、既に大勢は決まっているようです。突出してきた騎馬兵は、ほぼ壊滅していますし、勢いに乗って前進を始めた歩兵は既に後退を始めています。指揮官と思しき兵士が盛んに大声をあげてい

ますが、歩兵達は後退を止めようとはしない様です。練度から見て、銃兵と騎馬兵が、ゲルマニアの正規兵で、歩兵は強制的に徴兵された平民だったと思われます。

後退を始めてしまった歩兵に押し返される感じで、ゲルマニア軍全体が撤退を開始しました。結局、ラインスペルの斉射が４回程で、敵の進軍を押し返してしまった形です。魔法の威力と、アンセルムの的確な指揮が、噛み合った結果ですが、堂々たる戦果だと思います。

「ラスティン様、負傷者の治療と、敵の偵察の指示をお願いします」

「あ、ああ、よろしく頼む」

アンセルムが、敬語で急に話しかけて来たので、反応が遅れてしまいました。神妙な顔をしている所を見ると、どうやら僕に気を使ってくれている様です。普通の軍隊ならば、指揮官を無視して参謀が直接指示を出すなんて無いことだと思うので、この辺りをフォローする積もりなのかも知れません。

一通りの指示を終えて戻って来たアンセルムに、僕はなるべく軽い感じで、

「アンセルム、助かったよ」

と労いの言葉をかけます。アンセルムは少し照れた様子をした後、少し真面目な顔をして、

「ラスティン、勝手な事をして済まないな」

と謝ってきました。

「いや、問題ないさ。それにしても、兵団員の指揮が上手いな？」

「まあ、これが取り柄だしな。しかし、キアラも言っていたが、錬金隊のメイジは魔力が高いみたいだな？」

「そうなのかな？　魔法を毎日の様に使っているせいかな？」

「それは、分からないが。一般の傭兵をやっているメイジと比べれば、兵団の警備隊のメイジも魔力が高いと感じたが、錬金隊はその上を行く感じだ」

「でも、魔力が高いだけじゃ、役に立たないんじゃないのか？」

「そうだな、兵団員には警備隊での経験を積ませる様にしてるんだろ、さっきの騎兵の突撃の時も落ち着いて対応できたのはその成果だろ」

「アンセルム、ありがとう。それにしても、さっきの指揮方法はどうやって思いついたんだい？」

「ああ、亜人相手だと、ドットスペルだと威力不足だったからな、必要に迫られてといった所かな？　そういえば、敵さんもなかなか面白い戦法をとってきたな。あそこまで銃撃が連続して続くとは思わなかったぜ」

　これを聞いて、ふと思いついた事があります。先程、こっそり敵軍の追跡を頼んでおいたキュベレーに念話を送ります。先程の戦闘中には、何も変わったことが無かったという報告だったのですが、

図らずも精霊と交流が深い僕は、額面通りに受け取る事の危険性を思い出しました。

『キュベレー、聞こえるかい？』

『はい、聞こえますよ』

『少し前に頼んだ、敵軍の様子の事なんだけど、本当に変わったことは無かったかい？』

『うーん、多分』

ほら、段々と不安になって来ました。

『敵軍の兵士が、３人１組で鉄の筒を持って何かやっていなかったかな？』

『あ！　そういえば、３人交代で何か構えてました。もしかして？』

『いいや、きっちり指示をしなかった僕の方が悪かった、今は敵軍の様子を監視を続けてくれ』

『はーい』

僕が小さい頃から一緒のニルヴァーナと違って、キュベレーは少し（かなり？）人間の機微と言うものに疎いです。木の精霊としての自我に目覚めていたニルヴァーナと、大地の精霊としての自我に目覚めて時間の経っていないキュベレーを同じに扱うのは、少しかわいそうかも知れません。この点は追々改善していくことにしましょう。

今、大事なのは、”三段撃ち”が実行されたという点でしょう、どうやらナポレオン君は世界史は苦手だった様ですが、日本史は少しは詳しい様です。史実として疑われている”三段撃ち”を実行させてしまう点はまあまあの評価という所でしょうが、”三段撃ち”を本当に実行出来る程の練度をゲルマニアの正規兵が持っているのは、あまり嬉しくない事態です。

メイジの唱える呪文と違って、銃を撃って目標に当てるにはかなりの技量が必要のはずですから、それを養成する時間と費用が必要で、それをゲルマニアという国が成し遂げたということを意味する事になります。まあ、”三段撃ち”と”時間差詠唱”の勝負は、”時間差詠唱”の圧勝だったと言えるかも知れません。

第七十二話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：初陣）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／１／４
メイズ＝＜メイジ
に修正

第七十三話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：悲劇と喜劇）（前書き）

第七十三話ＵＰします。

第七十三話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：悲劇と喜劇）

「ラスティン様、ライデンの町の代表の方がおいでになりました」

考え込んでしまった僕に対して、アンセルムが余所行きの声と表情で話しかけてきました。

「そうか、ゲルマニア軍はライデンの町に篭らなかったんだな。その代表の方というのは？」

「はい、こちらの方です」

アンセルムが案内して来ていたのは、何処にでも居る職人の親方と言った感じの人物でした。町の代表ということで、僕の様な代官を想像していたので、気付かなかった様です。

「失礼しました、貴方が町の代表者なのですね。僕は現在、レーネンベルク魔法兵団を指揮している、ラスティン・ド・レーネンベルクです」

「あ、いえ、わた、私はただの大工の棟梁でして、代表なんてとんでもない話でさぁ」

「緊張しなくて良いですよ。いつも通り話してもらった方が、分かりやすいと思いますから、敬語も要りません」

「そりゃ助かるね。くじ引きで負けて押し付けられたものじゃ、直ぐボロが出ちまうからな」

「それで、町の様子はどうですか？」

「それでさぁ、怪我人が多いんで、何とか助けてもらえないかと思って来てみたんだよ！」

「アンセルム！　兵団をライデンの町に入れるよ。治癒系が使えるメイジは、全員治療に当たらせてくれ。その他は、町の周囲を警戒させよう」

「了解！　おっさん、他に問題はないか？」

「ああ、食料が全部持っていかれたんだ。水は大丈夫だが、薬の類もほとんど盗られたよ、あいつらめ！」

薬はメイジでとりあえず代用出来ますが、食料はさほど持って来ていません。兵団員が２０日前後、活動出来る量しか無いというのが現実の所です。連れて来た兵団員が２０００人程度ということもあり、補給はさほど重要視していませんでした。また、緊急出動と言う面があったので、用意が間に合わなかったとも言えます。

「ラスティン、とりあえず兵団の糧食を出そうぜ」

アンセルムが気軽に提案してきますが、そんな簡単な事ではないことは分かっています。ゲルマニア軍の動きが確認出来ない以上、兵団の運用が正常に行えることが重要ではないでしょうか？　考えたくはありませんが、ゲルマニア軍が別の町を襲った時に、僕達が動けなければ彼らの思うがままになってしまい、ライデンの町は助かったが、他の町が壊滅したなどという事態も有り得ない訳ではありません。

アンセルムがこんな事に気付かないはずはないのですが、彼は戦

場で勝てばそれで満足といった程度の人物なのでしょうか？　いいえ、ここはアンセルムに何か考えがあると思ったほうが、自然です。

「アンセルム、何か考えがあるのか？」

「いいや、無いが？」

「おい！」

「大丈夫だよ、こういう時の”会長”は、期待を裏切らないからな」

「キアラが？」

「まあ、見てろって。”会長”との付き合いは、俺の方が長いんだからな。そんなに心配なら、水メイジに交じって、治療でもしてこいよ」

何とも心許ない話ですが、アンセルムとキアラを信じる事にしましょう。何らかの通信方法が欲しいと、この時ほど思ったことはありませんでした。僕はアンセルムに勧められた通り、怪我人の治療に参加する事にしました。ライデンの町を、しばらくうろついて事になりましたが、目ぼしい場所には、既に兵団がいて治療を開始していました。怪我人を探しながら、町のはずれまで来てしまいましたが、そこで1人の老人に声をかけられました。

「失礼じゃが、貴方は魔法兵団の方かな？」

「はい、そうです。もしかして、怪我人がいるのですか？」

「治療をお願い出来ますかな？」

「はい、案内してください」

僕は老人に案内されて、町外れの一軒家に入りました。外見はみすぼらしいですが、中はきちんと整理されていて、意外と住みやすそうです。家の中には、二つのベッドが置かれていて、その1つに5歳位の少年が寝かされていました。ベッドに近づいて、少年の様子を確認すると、少年は意識を失っていて、呼吸は乱れていない事が分かります。気を失ってしまった原因は心配ですが、さほど重傷では無いと思えました。念のため、脈を取ってみましたが、上手く取れませんでした。不思議に思って心臓の鼓動を直接聞くと、明らかに鼓動が弱っています。

これは、非常に危険な状態です。改めてみれば、少年の顔色は明らかに悪いですし、呼吸も浅すぎるのが分かりました。慌てて少年の身体を確認すると、左足の内側に大きくは無いですが、銃傷が確認出来ました。この傷から、かなりの出血があったんだと推測されますが、今は治療に専念すべきでしょう。

僕は、常備している”アムリタの雫”を、強引に少年に飲ませて、治癒魔法をかけます。ですが、呪文の効果はなかなか表れませんでした。僕の診たてより、かなりの重傷なのかも知れません。兵団のスクエアの水メイジを呼んだ方が良いのでしょうか？　僕が判断を迷っている間に、何故か急に少年の容態が徐々に回復し始めました。この感じは！

「テティス、君なのか？」

「はい、良く分かりましたね」

「治療に手を貸してくれたんだろ、さすがに気付くよ。危険な状態だったんだ、助かったよ」

「どういたしまして、この少年が貴方の患者なのですか？　あら？」

「どうした、何か問題があるのかい？」

「いいえ、何でもありません」

はっ！　またやってしまいました。緊急時なので仕方がないですが、老人の視線が痛いです。ここは強引に話をずらす事にしましょう。

「この子の、容態は持ち直しました。この子の名前は？」

「ライルといいます」

「そうですか、ライル君はかなり出血した様です。できれば、精のつく食べ物を食べさせてあげて下さい」

ですが、老人は戸惑った様な表情でした。

「失礼ですが、貴方はライル君の祖父では無いのですか？」

「滅相も無い、ワシはそこの家に住んでいる者ですじゃ」

老人は、窓から少し離れた所に見える家を指差しながら、答えました。

「それでは、ライル君のご家族は？」

「母親がおったのですが・・・」

老人の話によると、

・ライル君は、ベルという母親と二人暮らしだった
・ベルさんは、夫と死に別れて、この町に来た
・ベルさんは、この町でライル君を出産した
・ライル君は、メイジである

という事でした。ベルさんという女性は、しっかりとした方だった様ですが、何か思い出したくない過去を抱えていたというのが、老人の意見でした。死に別れたと言う辺りが、詳しく話したくない理由だったのでしょうね。

そして、今日の出来事も同時に教えてもらえました。

・3日程前に、ゲルマニア軍が突然やってきて、町にある倉庫から食料を根こそぎ奪っていった
（これ自体は、盗賊団が跋扈（ばっこ）するモーランド侯爵領では、珍しい事では無かった）
・ゲルマニア軍が今日戻って来て、今度は一般の民家からも食料を強奪し始めた
・非常時の蓄えまで奪われては生死に関わると言う事で、ライデンの町の人々も抵抗した
・町のあちこちで争いが起きて、最後には、ゲルマニア軍が銃兵まで繰り出してきた
・ライル君母子が運悪く銃兵に出会ってしまった
・咄嗟に杖を構えてしまったライル君に、ゲルマニア軍が発砲
・ライル君を庇ったベルさんが銃弾を全身に受けて即死
（老人は、目を逸らしたくても、逸らすことが出来なかったと涙ながらに話してくれまいした）

・ゲルマニア軍が急に町の外へ移動
・老人が血だらけのライル君をこの家に運び、血を拭い服を着替えさせた
（ベルさんの血で、ライル君の出血が隠される結果になったのでしょう）
・ベルさんの遺体は、町外れの墓地に埋葬
（とても人目に晒せる状態では、無かったそうです）

一度、戦争が起これば、何処でも起こりうる事ですが、やはり胸が痛みます。ベルさんが命がけで守ったライル君の生命が、救えただけでもよしとするしかないでしょう。

「それで、ライル君の身内に心当たりはありませんか？」

「さっきも言ったと思うが、ベルという女性はあまり過去を語らなかったからのう」

「あの、図々しいお願いですが、しばらく、ライル君の面倒をみてもらえないでしょうか？」

「家も年寄り夫婦だけだから構わないのじゃが・・・」

「そんなに長いことではありません、ライル君がメイジというなら、兵団の方で引き取りたいと思います」

「そうじゃな、この子にはこの町で暮らすことが幸せとは思えんからな」

僕は老人に幾ばくかのお金を渡して、ライル君の世話をお願いしました。僕がライル君の治療をする事になったのも、何かの縁でし

ょうからライル君に出来るだけのことをしてあげたいと思います。とりあえず、ベルさんのお墓の場所を聞いて、冥福を祈っておくことにしましょうか。

僕は今は人気の無い墓地に向かいました、ここも直ぐに他の犠牲者を葬る為に騒がしくなるんでしょうね。ベルさんのお墓は、埋められたばかりということもあって、直ぐに見つかりました。

「ベルさん、貴方の息子さんは僕が責任をもって育てるので、安心してください」

知らない人の墓に語りかけるのは、少し変な気分でしたが、後をついて来たテティスはただ僕を見守っているだけでした。

「テティス、状況を説明してくれるかな?」

「いいですよ、ですが、先に仕事を済ませておきましょう。マスター(エルネスト)からの伝言です。”ラ・ヴァリエール公爵領方面からのゲルマニア軍の侵攻は完全に押させた”、確かに伝えましたよ」

「そうか、それは朗報だね。君の知っている限りで構わないから、あちらで何が起こったか教えてくれるかい?」

「又聞きになってしまう部分がありますが、構わないですか?」

テティスの語ってくれた内容を、またまた、まとめると、

1.三日前に、ツェルプストー辺境伯から、ラ・ヴァリエール公爵宛てに、

宣戦布告の使者が送られて来た

2．二日前に、ラ・ヴァリエール公爵領で、戦いの準備が何とか整った頃に、
　ツェルプストー辺境伯の軍が国境に現れる
3．ツェルプストー辺境伯とラ・ヴァリエール公爵の舌戦が開始される
4．辺境伯の情報?で、密かにラ・ヴァリエール公爵領を通り抜けて、
　レーネンベルクへと向かっているゲルマニア軍の部隊があることが判明する?
　同時に、モーランド侯爵領への侵攻も明かされる
5．ラ・ヴァリエール公爵の軍の一部が、侵攻していたゲルマニア軍の部隊を
　後方から急襲
6．侵攻していたゲルマニア軍の部隊が全滅?
7．ラ・ヴァリエール公爵軍とツェルプストー辺境伯軍が、にらみ合いの
　状態に入る

という事でした。4と6が良く分からなかったので、詳しく説明を頼むと、テティスが、解説してくれました。

＝＝＝

「良く逃げ出さずにいたな、ラ・ヴァリエール公爵！」

「何を言う、ツェルプストー辺境伯！　突然戦闘を仕掛けるとは、墜ちたものだな。今日こそは、先祖からの因縁を断ち切ってくれるわ！」

「弱い犬ほどよく吠えるとは、よく言った物だな。皇帝陛下の命に

より、我が軍がそちらの領土を通り抜けて、レーネンベルクへ向かっているのも気付かずに良くそんな大言が吐けるものだな？」

「なに！　卑怯な」

「我が軍の動きはこれだけではないぞ、既にモーランド侯爵領にも我が軍が侵攻している。どうだ公爵、そちらに勝ち目はないぞ、今のうちに降伏の算段でもしておくんだな、わっーはっはっ」

＝＝＝

４に関しては、テティスが演劇風に教えてくれました。キュベレーと違って、テティスはやっぱりかなり人間くさいです。

なるほど、ツェルプストー辺境伯としても苦肉の策だったのでしょうね。レーネンベルクには、コルネリウスがいますし、ゲルマニア軍の部隊が既に侵攻を開始していては、変な使者を送る訳にはいかなかったのでしょう。

そして、６について、更にテティスに尋ねると、

「風が”バーン”と起こって、兵士が”ビューン”と飛びましたよ？」

という、解説になっていない、解説をしてくれました。

「テティス、もう少し詳しく話してくれないか？」

「コレガセイイッパイデスヨ、ワタシハナニモミテイマセンヨ」

と明らかに様子がおかしくなりました。何が起こったか想像がつき

ましたから、それ以上追求することは止めにしました。

しかし、これで別方面からレーネンベルクが襲われる可能性は無くなったと見て良いでしょう。僕達にとってこれほどの朗報はありません。テティスが、ここまで情報を知っているということは、エルネストがテティスを使って情報収集をしていたという事なのでしょう。

「テティス、エルネストからこれからの指示を受けているかい？」

「ナニモウケテイナイデスヨ？」

まだ、少し壊れている様です。上手くいくか分かりませんが、キュベレーに念話を送る要領で、テティスに話しかけてみます。

『大丈夫かい？』

「あ！大丈夫です」

『何ですか、ラスティン？』

おや、慣れない事だったので、キュベレーにも伝わってしまった様です。ちょっと念話が混線？している感じです。

『あれ？　テティスが来ているのですか？』

『分かるのかい？』

「はい、キュベレーはあちらの方向にいますね？」

「テティス、キュベレーの所へ行って、一緒にゲルマニア軍を監視してくれるかな？」

『キュベレー、念話が届かない距離になったら、監視はテティスに任せて、君は伝令役をやってくれ』

『「分かりました」』

むぅ、これはかなり混乱します。僕は早々にテティスを送り出すと、キュベレーとの念話を切る事にしました。僕は改めて、ベルさんの墓に一礼すると、兵団の本陣へ向かいました。

第七十三話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：悲劇と喜劇）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

久々に、読者さんに挑戦です。

悲劇の当事者ライル君ですが、実は結構重要な人物だったりします。

1．ずばりライル君って誰？
2．ライル君は将来、誰と結婚するでしょう？

以上２点を推理してみませんか？

１は簡単ですが、２は漠然としすぎていますね。ヒントですが、原作キャラですよ。

メッセージのみで募集いたします。期限は２０１１／０１／１９までとさせていただきます。事情があり、感想の方では受け付けませんので、間違えないようにお願いします。

２０１１／１／１９
上記、”読者さんに挑戦”ですが、締め切りさせていただきました。
１に関しては、正解者がいらっしゃいました。正解者の方には、とある権利を送ります。

第七十四話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：ライデンの現状）（前書き）

第七十四話ＵＰします。

第七十四話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：ライデンの現状）

兵団の本陣に戻ると、そこは正に大混乱という状態でした。ライデンの町の代官を始めとする上層部は、完全にゲルマニア側に寝返った様です。町の役人は指揮系統が空中分解してまともな手が打てず、仮の町の代表に選ばれた大工の棟梁さんは目を白黒しているだけでした。

僕を治療に赴かせたアンセルムが、本来ならばこの場を取り仕切っていなくてはならない筈ですが、見回してもその姿は見当たりません。近くにいた兵団員に話を聞くと、ふらっと何処かへ行ったっきり戻って来ないそうです。

これはまさか、逃げたのでしょうか？　逃げたんですね？　逃げるなよ！　はっきり言ってこういう方面ではアンセルムは全く役に立つ気がしません。仕方が無いので、この場は現役代官の僕が取り仕切る事にします。

「ライデンの町の役人の方は居ますか？」

「はい、私がそうですが？」

「この町を治めていた方は、何処で仕事をされていましたか？」

「はい、代官が町の北側にある館で、政務を執り行っていました。ですが、最初のゲルマニア軍襲来の時に、館に篭ったまま姿を見せなくなり、昨日姿を晦ましているのが確認されています」

「そうですか、その館というのは、荒されたりしていましたか？」

「いいえ、正門が閉まっていて、特に荒された気配は無かったと聞

いています」

「良かった、それでは、役人の皆さんに伝えて下さい。自分の担当分野に関して被害を大至急調査して、代官の館まで報告しに来る様にと！」

「はっ！　あ、あの、貴方は？」

「僕は、ラスティン・ド・レーネンベルク。レーネンベルク魔法兵団の指揮官の様な者です」

日頃から、服装には頓着しない方ですが、今は動きやすさ優先で、他の兵団員と区別が付かなかったのでしょう。

「し、失礼しました！　残っている者たちに、大至急報告にあがらせます！」

「お願いします、急いでいただきたいですが、町の住民の声もなるべく集める様にして下さい。それと、この町に一番詳しい役人の方を、直ぐに館まで寄越して下さい」

「カルヴィンさん辺りが適任だと思います。直ぐに向かわせます」

そう言うと役人の方は、走って行ってしまいました。それと入れ替わる様に、僕の護衛を務めるガスパードやニルス達がやって来ました。彼らは、兵団の一員として、先程の戦闘に参加していました。ちなみに、カロリーヌも町の何処かで、治療を行っているはずです。

（変な魔法薬とか試していないと良いのですが）

「スティン、探したんだぞ！　勝手に何処に行っていたんだ？」

「いや、ちょっと治療の手伝いをね。君達は、警戒に当たらなくてもいいのかな？」

「町の中に、敵が残っている可能性もあるし、今はお前の護衛が優先だよ」

まあ、ゲルマニア兵が残っていれば、町の人達に酷い目に遭わされると思いますが、状況も差し迫ってはいないですし、丁度人手が欲しい所なので、あまり追及しないでおきましょう。

「この町の代官の館に行くから、護衛を頼むよ」

「任せてくれ！」

護衛を連れて、町の大通りから北を目指しますが、僕は隣にいるガスパードに小さな声で話しかけます。

「ガスパード、さっきの戦闘は大丈夫だったか？」

「同じ事を、カロリーヌにも聞かれたよ、僕はそんなに頼りないかな？」

「頼りなかったら、僕の護衛なんて頼んでいないさ」

「そうか？　それより、なんでカロリーヌが従軍しているんだ？彼女はトライアングルでもないし、警備隊の所属でさえないじゃないか？」

「ああ、警備隊のメンバーから推薦があったんだよ。メイジとしての腕はまだまだだけど、カロリーヌの魔法薬は役に立つと言われてね」

実は、カロリーヌを従軍させる積りはなかったのですが、彼女が僕達と一緒に来ているのに気付いたのが、ワーンベルを出発してかなり経った後だったので、一人で帰す訳にはいかず、従軍を黙認しているのです。魔法薬～の辺りは全くの事実なので問題無いと思ったのですが、ガスパードは納得行かない様です。

「誰だよ、カロリーヌを推薦したって奴は！」

「ところで、君とカロリーヌの仲は何処まで進展しているんだい？」

「え、おま、なに、」

強制的に話題を変える為に、意地悪な質問をしてみましたが、ガスパードは面白いほど動揺してくれました。

「まあ、結婚が決まったら、なるべく早く教えてくれよ。友人としてもレーネンベルクの次期当主としても、相応しい贈り物を考えなくちゃいけないからな」

「ラスティン様、レーネンベルクらしいというと、あまり期待は出来ませんな？」

いつの間にか、聞き耳を立てていた護衛の1人が、面白そうに指摘してきました。まあ、レーネンベルクらしいといえば、質素とか、実用的とかになりますね。護衛の皆と一緒になって、ガスパードをからかいながら、道を進んで行きます。

そして町並みを抜けると、それは僕の目に飛び込んで来ました。それは正しく城門と呼べる物でした。2メイルを超える城壁?と3メイルを超える城門?が僕達の行く手を阻みます。しかし、町を囲む防壁は粗末な物なのに、館を囲む城壁だけ立派にしてどうするつもりだったのでしょうか?　土メイジの手にかかれば、この倍の城壁でもほとんど役に立たないと思うんですけどね。

先程の役人さんの行った通り、正門はしっかりとロックで施錠されていました。辛うじて、通用口は開いていたので、そこを通って館に向かいます。館の外観はワーンベルの代官の屋敷と似た作りになっていました。トリステインと言う国は、基本的に山が少ないので、平地に町が出来れば、そこを治める代官の屋敷や館も構造的に似てくるものなのでしょうか?

館に入ると、明らかにこの館が、ワーンベルの代官の屋敷と同様の思想で作られた事が分かりました。しかも、調度品まで似ている感じがしましたが、これは持ち運べそうな価値のあるものがすべて持ち去られているのが原因だと思います。明らかに絵画が飾ってあった壁や、壷が置いてあったと思われる棚などが見受けられます。もしかしたら、ワーンベルの代官の屋敷が殺風景過ぎるのでないかという考えが頭を過りますが、気にする事も無いですね。

護衛の人達に、館の整理と清掃を頼むと、僕は例の正門に向かいます。門には内側から、閂がかけられてその上にロックの呪文がかけられているなんて、随分と厳重な警戒をしていたようです。門や城壁を調べると、それほど古いものでないことが分かりました。とりあえず、ロックだけは解除しておきましょう。使われていたロックの呪文はオリジナルの様です、ディテクト・マジックで解析をしてみましたが、あまり見ない様式でした。

何とか解呪に成功しましたが、その時にかかっていたロックの呪文が、以前一度だけコルネリウスが見せてくれたロックの呪文に似ているのに気付きました。この町の上層部に、ゲルマニアの関係者

が居たことは確実ですね。代官自身がゲルマニア人だという可能性も高いかも知れません。そうすると、この立派な城壁は、町の人達から身を守ったり、町の人達からの目を逃れて何らかの工作をする為の物だということもありうるでしょう。

とりあえず、門にかかっていたロックを解除して、その場を離れることにします。掃除の方は、進んでいるでしょうか？　開門は1人では無理そうなので、後にしましょう。（決して掃除が面倒で逃げて来た訳ではありませんよ？）

再び館に入ると、内部がかなり片付いていました。慌てて、館から逃げ出したのが分かる状態だったのが、何とか見れる状態にはなっています。代官の執務室だったと思われる部屋と、会議室として使えそうな食堂を中心に、掃除をしてもらったのでこの2部屋は直ぐにでも使える状態になっています。

「ラスティン様、カルヴィンという方がいらっしゃいましたが？」

「ああ、執務室の方に通して下さい。僕も直ぐに行きますから」

僕が、執務室に入って椅子に座ると、もう一方のドアがノックされました。僕の返事を待って、1人の壮年の男性が、執務室に入って来ましたが、その人物の表情を見て、なんか苦手そうな人だなと思いました。真面目で頑固で融通が利かないという第一印象です。

「お呼びということなので、参りました。カルヴィンと申します」

「忙しい所を呼び出したりして、済みません。隣のレーネンベルクで代官をやっている、ラスティン・ド・レーネンベルクです。早速なのですが、この町を一刻も早く正常な状態に戻したいと思うので、カルヴィンの力を貸していただけないでしょうか？」

「お断りします！　忙しいのでこれで失礼します」

呆気にとられる僕を取り残して、カルヴィンさんはさっさと部屋から出て行ってしまいました。あれ～？僕は何かカルヴィンさんの気に障る様なことをしたのでしょうか？　忙しいと言うのは、嘘ではないのでしょうが、態々僕の所まで来て、言う必要も無いと思います。何だか、理不尽な当て付けをされた気分です。

「ラスティン様、この町の役人の方々が、何名か、いらしていますが？」

ニルスがドアから少し顔を出して、報告してくれました。ニルスもあまりに短かったカルヴィンさんとの会談を不審に思っている様子です。いえ、今はそんな事に拘っている場合では無いはずです。僕は続々とやってくる役人方々から、ヒアリングを行って行きます。

1. 負傷者の治療，死者の埋葬
2. 食料の配給
3. 建物の補修
4. 行商人の呼び込み

問題点をまとめると、大まかに上記の４項目でした。１と２は早急に対応を考えなくてはいけません。３については、兵団の土メイジを借り出せば対応出来ると思います。４については、何故か多くの役人がこんな時にも関わらず、要望が多いと教えてくれました。モーランド侯爵領では、領内だけの商取引が推奨されていたそうです。領外との取引にはかなりの税金がかけられると言った徹底ぶりだったそうです。さらに力ずくと言う訳では無いですが、領民が他領に移動することも禁止されていた様です。

レーネンベルクの隣に、こんな事をしている領主がいるとは思いませんでした。情報の統制が目的だったのでしょうが、正直今まで良く領土の統治が出来たものだと感心します。モーランド侯爵領が、農産物の生産に適した土地でなかったら、反乱でも起こっていたのではないでしょうか？

おっと、現実逃避をしている場合では無いですね。役人の皆さんも懸命に説明してくれるのですが、僕はこの町に関してあまりにも無知な為、必要以上に時間がかかってしまうのは避けられません。僕自身の事務処理能力は、精々人並みと言った所なので、その日は遅くまでかかって、食料の配給の手配を済ませるだけで終わってしまいました。

この町の役人達が帰って行った後、1人になると、もう少し問題点を考えてみました。思いついたのは、

1. 兵団員の宿舎の手配
2. 補給路の確保
3. ゲルマニア兵の負傷者や死者の処理，捕虜の尋問
4. 代官人事

の4点でした。

1については、なるべく早めに何とかしたい所です。警備隊の経験者が多いので、直ぐには支障が出るとは思いませんが、兵団の能力を十分に発揮する為には、やはり十分な休養も必要だと思います。

2については、アンセルムの言い分を信じない訳ではありませんが、直ぐにでもワーンベルへの使者を出すことにします。十分な補給が整わなければ、戦闘を行うなんて自殺行為に近いと思います。

3に関しては、先程のライデンの役人からの報告を受けている時に気付きました。敵兵とは言え死人を放置しておくのは、気が進み

ませんし、疫病の心配も出てきます。負傷者や捕虜の対応も考えておかなくてはいけません。

４に関しては、ワーンベルからマルセルさん親子のどちらかを呼び寄せたいと思います。理想的には、マリユスを呼び寄せて、カルヴィンさんと組ませて、マリユスの経験値をアップさせることが出来れば最高なのですが、あのカルヴィンさんの様子では少し難しいでしょう。次点で、マルセルさんを呼び寄せる事にしましょう。

２と４を絡めて、キアラ宛に手紙を書き、護衛から2名を選んで使者として送り出しました。ここまで済ませて、一息ついた所で、裏切り者のアンセルムが執務室に姿を現しました。

第七十四話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：ライデンの現状）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第七十五話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：アンセルムの昔語り）（前）

第七十五話ＵＰします。

第七十五話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：アンセルムの昔語り）

「ラスティン、いい部屋を見つけたじゃないか？」

「アンセルム、お前な！」

「おっと、お小言は無しだぜ。俺にそういう仕事をさせたら、色々な所に迷惑がかかるぞ！」

アンセルムは全く自慢にならない事を、胸を張って言い切りました。しかし、足手まといならともかく、色々な所で迷惑になると言うのも怖い話です。

「まあ、そういうことにしておくよ。それより今まで何してたんだ？」

「ああ、ゲルマニアの忘れ物を、処分したりかな？」

「忘れ物？」

「いろいろ有ったぜ。死体とか、火薬とか、銃とか、馬とか、怪我人とか」

「そうか、死体はちゃんと埋葬してくれたか？」

「ああ、３０００体ほどあったが、土メイジが深く埋めてくれたよ。ついでに、火薬もな」

「銃は、どうしたんだ？」

「さあ、火薬が無ければ、ただの鉄くずだしな。念のために、錬金で別のものに変えたほうがいいかもな」

「それが、いいか・・・。後は馬と怪我人か」

「ああ、馬も怪我をしてるぜ。直ぐには使い物にならないな。怪我がひどいのは、食用に回した方がいいかもな。怪我人の方は、とりあえず捕虜だが、さっさと始末しちまうか？」

「尋問は済んだのか？」

「ああ、大体は聞き出せたと思うぜ。兵団にかなりびびったのか面白いほど簡単に喋ってくれたよ」

捕虜ですか、気が重いですね。ライデンの人々に引き渡せば、簡単に話は済むでしょうが、彼らにそんな事をして欲しく無いと言うのが、正直な気持ちです。何か捕虜達を上手く利用する手は無いものでしょうか？

「捕虜に関しては、少し考えさせてくれ、なるべく早く結論を出すよ。それより尋問の結果を教えてくれるか？」

アンセルムが聞かせてくれた話は、

1. 正規兵は帝都で訓練されて、時期も人数もバラバラに
   ブルーデス伯爵領に移動した
2. 歩兵の主体は、ブルーデス伯爵領の平民で、強制的に
   徴兵された
3. モーランド侯爵領に侵攻してからは、ライデンを経由しただけ

で、

直接レーネンベルクに侵攻した

4．ワーンベル直前で休憩しているところを、強襲されて大砲隊と食料

そして指揮官まで失った

5．副官の指揮で、何とかライデンまで移動して、体勢を立て直していた

という物でした。その後は僕も知っている内容でした。兵団に敗れはしましたが、副官が指揮していたとは信じられない用兵だったと正直感心しました。

「その副官というのは？」

「さあ、名前は誰も知らなかったね。ラスティンが生き埋めにした指揮官というのは、ゲルマニアの貴族だったらしいがな」

「その副官は、要注意だと思わないか？」

「そうだな、戦略はイマイチだが、戦術に関しては、少し注意が要るんだろうな」

アンセルムの評価は辛口ですね。まあ、その副官が被害を無視して、ワーンベルを急襲していれば、僕らもただでは済まなかったでしょうから、分からない話ではありません。

「堅い話はここまでにしておこうぜ、飲むか？」

アンセルムはそう言うと、隠し持っていたワインのビンをテーブルの上に置きました。ビンのラベルが少し焦げている所を見ると、

どうやらこれもゲルマニア軍の忘れ物の様です。まあ持ち主を探すのは無理そうなので、貰ってしまう事に異存はないのですが、アンセルムが酒を飲むなんて始めて知った気がします。

「アンセルムは、お酒が好きなのか？」

「いいや、あんまり飲まないな。強くもないしな」

「まあいいや、付き合うことにするよ」

僕もアルコールに強くないので、２人して酔いつぶれる事にならなければ、良いのですが。グラスを調達してきて、何とかコルクを抜くと、サシで飲み交わす事になりました。ちなみに、アンセルムは一杯空けた時点で耳まで赤くなってしまいました。（強くないどころか、弱いぞアンセルム）

僕が公立学校の話を聞きたいと言ったら、アンセルムは魔法学院の話を聞かせてくれたら話してやると言ったので、こちらから話すことにしました。かいつまんで、学院での３年間の話をすると、アンセルムは真剣に聞き入っていました。（教育に関することなので、興味があったんでしょうか？）

僕の話が終わると、アンセルムが話を始めましたが、それはどちらかと言うと身の上話でした。

「俺の両親は、元々同じ傭兵団の一員だったんだ。結構有名なペアだったらしいんだ、俺も小さい頃から傭兵団の一員みたいに育てられたよ。残念だが、戦士としての才能は全く無かったんだが、戦法なんかを考えるのは好きで、将来は有望だと言われた事もあるんだぜ」

アンセルムは何か思い出すような、表情を浮かべています。

「だがな、それも長く続かなかったんだ。丁度、俺に妹が生まれた翌年だったかな？　傭兵団の拠点が討伐したばかりの盗賊団の襲撃にあってな、俺も妹も何とか逃げ延びたんだが、妹が目に酷い怪我を負わされてな、失明してしまったんだ。両親はそれにショックを受けて、傭兵稼業を辞めちまったんだ。自分たちがどんなに酷い怪我をしても、全く頓着しなかった親父たちにしては、見事な引き際だったよ」

「そうか」

「まあ、それ自体は親父達の考えだから、構わなかったんだが、問題は妹の目の治療だった。外傷は知り合いのメイジに頼んで治してもらったんだが、目が見える様にはならなかった。そこで一部で聖女と、と噂されている、レーネンベルク公爵夫人を頼ろうと思って、レーネンベルクに来たんだ」

母上が聖女ですか？　実像を知っているとちょっと納得行きませんが、あの時の父上を治療している姿を思い出すと、何となくそう呼ばれるのも分かる気がします。

「少し待つことなったんだが、妹はちゃんと公爵夫人の治療を受けられたんだぜ。完治という訳には行かなかったが、ぼんやりとは見えるまでに回復することは出来たんだ」

それを聞いて、良かったなと言いたくなりましたが、何故かその言葉を言えませんでした。さっきから、アンセルムが”妹”と言う時の表情がそれを許さなかったと言えるかも知れません。

「その頃は俺も、公立学校に入学していてな、妹にその話をすると、

”私も学校に行く～”なんて良く言っていたよ。だがな、変に視力が戻ったのが徒になっちまったんだよ。両親も公爵夫人に何回か治療してもらった事で、かなり視力が回復したのを知って油断しちまったんだろうな」

アンセルムが辛そうな声を出します。彼のこんな声を聞くのは始めてかも知れません。この話の展開は、最悪の結果を想像させますが、これを聞かないということは、アンセルムの上司としては有り得ないことなのでしょうね。僕は黙ったまま話の続きを聞く事にします。

「俺が丁度”高等学校”への進学を決めた次の日だった。妹が、馬車に轢かれて、本当に簡単に死んじまったのはな。馬車の御者を恨んでいないと言えば嘘になるが、本気で恨むにはその人は誠実過ぎる人でな。馬車の前に飛び出しちまったのも、妹の不注意だと分かっているから、一層やりきれなくてな」

アンセルムは”妹”の名前を呼ばない理由が分かった気がします。

「そんな訳で、高等学校に進んでからしばらくは、無気力に過ごしていたんだよ。そんな時さ、キアラが俺に、”あなたは何を目指して、高等学校に進んだんですか？”なんて言って来たのは。俺はその時、怒りに任せて、全てをぶちまけちまったんだが、キアラの奴は全く怯まなかったよ。それどころか、俺を蔑んだ様な目で見てな、”妹さんは今のあなたを見て満足するような子だったんですか？”なんて言いやがった」

アンセルムは、何故か笑いそうな表情になっています。悔しがったりしている様な否定的な感情は見られない気がします。

「俺はその時、あいつに何も言い返せなかった。俺はキアラを見返す積りで、軍事関係を本気で学び始めたよ、俺にはそれしか取り柄が無かったからな。だけど奴は、そんな俺を見て何と言ったと思う？」

「さあ、キアラの性格だと、”頑張ったね♪”とかは、絶対に言わないだろうね」

「アイツはな、”随分と逃げるのが得意なお兄さんで、妹さんも喜んでいるでしょうね！”なんて言いやがったんだ。でもな、そんな事は俺も分かっていたんだ、それでキアラに”お前が俺の立場だったら、どんな事をしたんだよ！”と問い詰めたらな、少しだけ考えて、”私なら妹さんの様に、学校に通えない様な子の為に教育を学んでみるわ”と答えたよ。正直負けたと思ったね」

「そうなのか、ところで、アンセルムとキアラが軍を率いて戦ったら、どっちが勝つんだ？」

「ラスティンも嫌な事を聞くな。正直に言えば、俺の方が分が悪いだろうよ」

アンセルムの今日の指揮は見事な物でした、軍を率いた事があるという話もまんざら嘘では無いと思わせる戦いの流れの読み方だったんだと思いますが、キアラがあれ程の指揮を取れるのでしょうか？

「まあ、完全に五分の条件で実戦をやれば、負けないと思うがね。強がりじゃないぞ？　ただな、五分の条件に持って行くのは至難のわざなんだよな。お互い手の内を知っているから、普通に戦えばそれが不利になる訳だ」

ふむ、こうしてアンセルム君は教育に興味を持って、キアラに頭が上がらなくなったと言う訳なんですね。アンセルムの過去と、キアラの関係を知ることが出来て、良かったと思いました。今ふと思いましたが、アンセルムはキアラに好意を持っているんじゃないでしょうか？　でも、アンセルム自身は自覚していないでしょうし、何となくですが、最初から諦めている気がします。

こう言う機会ですから、口を滑らすかもかも知れません、是非聴いて見ましょう！　と思って、アンセルムを見ると、テーブルにうつ伏せになって眠り始めていました。失敗です、これでは聞き出す所か、アンセルムを何処かで寝かせる役目が僕に回って来た事になった訳です。

僕はアンセルムをレビテーションで浮かせたまま運び、近くの部屋のベッドに寝かせる事にしました。僕自身も、今日はこの隣の部屋で休む事にします。少し埃っぽいベッドに横になってから気付きましたが、アンセルムが強くも無いお酒を飲んだのは、弔い酒の意味があったのかも知れません。敵とは言え、多くの人間を殺すこと（そしてそれ以上にそれを命じる事）は、やはり精神的に辛いものがあるのは確かです。

明日になれば、軽くて口の悪いいつものアンセルムに戻ってくれていると良いのですけれど。

第七十五話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：アンセルムの昔語り）（後

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第七十六話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：補給部隊の到着）（前書き）

第七十六話ＵＰします。

第七十六話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：補給部隊の到着）

その朝の目覚めは、意外と爽快でした。心配した悪夢も見ませんでしたし、二日酔いなどもありませんでした。さっき、アンセルムが寝ている部屋を覗いてみたら、何だか寝苦しそうにしていました。あれは多分二日酔いですね。ちなみに逆隣の部屋では、護衛隊の皆が雑魚寝状態でした。そういえば、ガスパード達に片付けを終えて良いと言うのをすっかり忘れていました。これは拙いですね、急いで執務室に避難しましょう。仕事をしている振りでもしていれば、追及を逃れる事が出来るかも知れません。

慌てて執務室に向かうと、カルヴィンさんにばったり出会ってしまいました。部外者（僕達の方が部外者と言えるかも知れません）が館の中を自由に動き回れると言うのは、問題だと思います。カルヴィンさんは何とも言いにくい表情をしながら、

「ラスティン様、少しお話がしたいのですが、今、宜しいでしょうか？」

と、丁寧な口調で尋ねて来ました。あれ？　昨日と随分印象が違いますね。

「ええ、構いませんよ。執務室へ向かう途中だったのですが、そちらで伺いましょう」

僕達は執務室に向かいました。執務室に入り、面談用のソファーに腰を下ろすと、カルヴィンさんの話を聞く事になります。

「それで、お話と言うのは、何でしょうか？」

「その前に1つお知らせしておきますが、この部屋ですが、代官の補佐役の人間が使っていた部屋ですが宜しいのですか？」

そう聞いて、部屋の中を見回してみましたが、特に違和感は感じられません。これより上等な部屋だと、多分、落ち着かない気がします。

「はい、問題無いですよ。実務者の使っていた部屋であれば、効率の面では優れていると思いますからね」

「効率・・・ですか？」

カルヴィンさんは、僕の言葉を聞いて、少し呆れ顔だったりします。応接室や客間ならともかく、執務室は効率優先が当然だと思うんですけどね？

「やっぱり、貴方は変わった方の様だ」

僕の仕事のやり方は父上を見習っている部分が多いはずなので、そんなに変わっていないと主張したくなりましたが、普通の貴族からみてレーネンベルク公爵がどう思われているか考えると、やっぱり変わっているのかも知れません。

「カルヴィンさん、もう一度お聞きしますが、お話と言うのは何なのでしょうか？」

「ああ、申し訳ありません。実は、ラスティン様に謝罪しなくてはならないと思いまして」

「謝罪ですか？」

カルヴィンさんが謝ると言えば、昨晩の態度なのでしょうが、あの堂々とした態度が一晩で変わってしまうとは何があったのでしょうか？

「はい、実は昨晩家に帰ると、遅くなったのにも関わらず、私の叔父が私を訪ねて来ていてくれていました。同じ町に住んでいるのですが、少し変わった方なのであまり親交は無かったのです。その叔父が、こんな時間まで私を待っているのはおかしいと思い事情を聞くと、”魔法兵団の方にお礼を言いたい”ということでした」

カルヴィンさんは何だか言い難そうに、話しを続けます。

「気になって詳しく話を聴くと、その兵団の方というのはどうやら、貴方だったようなのです」

「はぁ？」

「覚えていらっしゃいませんか？　昨日の夕方、ラスティン様自身で子供の治療をして、孤児になったその子の為に金貨を置いていったという話でしたが？　叔父は、暇そうにキョロキョロしていた、若い兵団員に声をかけた積りの様でしたが、背格好や容姿を聞いて私にはピンと来ました」

あの老人が、カルヴィンさんの叔父様だったんですね。すごい偶然ですね、ですけどこれが、カルヴィンさんの謝罪とどう繋がるのでしょうか？

「まあ、兵団員は優秀ですから、僕の出番はほとんど無かったと言

うのが実状でした」

「いいえ、そんな事は重要ではありません。上に立つものが、きちんと現場に出て、現状を知ると言うのが重要な事なのです。その点では、逃げ出した代官などは・・・」

大体話が見えて来た気がします。カルヴィンさんは前の代官が、町の人たちの事を考えない統治方針を進めたので、代官と職に不信感を持っていたのでしょう。そこに誰とも知らない人間からの、代官の館へ来いという命令を受けて、あんな態度をとってしまったと言う事なのでしょう。ちょっと短絡的な気もしますが、逆にこの町にそれだけ思い入れがあるという事なのでしょうね。

「分かりました。カルヴィンさんの謝罪は受け入れます、僕の方も、もう少し穏当に話を進めれば良かったと反省しています。僕もカルヴィンさんに謝罪させていただきます。僕の謝罪を受け入れていただけますか？」

「はい、もちろんです」

「ありがとうございます。早速ですが、配給について相談したいのですが？」

こうして、運よくカルヴィンさんの協力を得て、今日の配給の物資や配給を行う場所の選定にに入りました。場所に関しては、話していても埒が明かないと感じたので、カルヴィンさんに直接案内してもらう事にしました。数箇所候補地を案内してもらって、カルヴィンさんの提案通りで問題ないと感じた頃、通りかかった町の入り口付近が騒がしい事に気付きました。

僕達が近付いて行くと、そこには人集りが出来ていて、何か揉め事が起こっている気配がします。キュベレーの報告で、ゲルマニア軍が国境まで撤退したことは分かっているので、物騒な話では無いと思うのですが？　僕は慌てて駆けつけようとしましたが、その前にカルヴィンさんがキレました。

「きさまら～、何をやっとるか！」

その大声に反応して、騒ぎを起していた人達が、一斉にこちらを向きました。（こういう時って、声の大きい人って得ですよね？）

声の主に気付いた町の人達が決まり悪そうに、その場を離れて行きます。カルヴィンさんがその中の一人に話しかけます。

「そうか、お前がこの騒ぎの首謀者か、”旦那”さんにはきちんと報告しておくからな！」

それを聞いた青年が、慌てて駆け去って行きました。今の一幕を見ると、カルヴィンさんがこの町の代表として出て来てくれれば、昨日の様な混乱は無かったのではないかとさえ思えて来ます。カルヴィンさんの立場としてはそれが出来なかったのかも知れませんが、町の代表として立って欲しかったと思います。

町の人々が去ると、そこに残されたのは、意外な人物でした。居てほしいと思う人物ではあるのですが、何故今ここに居るのかが謎です。その人物が、僕に声をかけて来ました。

「ラスティン様、助かりましたよ。いきなりの手荒い歓迎で、どうしようかと困っていたんです」

「マリユス、何でお前がここに居るんだ？」

「え？　助けが要るという使者を送って来たのは、ラスティン様の方でしょう？　僕じゃ拙かったですか？」

「いや、結果的に、マリユスの方が良いんだけど。幾らなんでも、来るのが早すぎるだろう？」

「ああ、僕達はキアラに言われて、領境の村に待機していたんですよ」

「僕達？　キアラが？　あの村に？」

マリユスの後ろには、荷馬車や牛車が列をなしています。そこには、多分食料が満載されているのでしょうね。補給部隊を護衛するための兵団員も多数見受けられます。マリユスによると、彼らは僕達が出陣した後に召集されたそうです。

マリユスに指揮された、補給部隊は周囲を警戒しながら、例のゲルマニア軍に襲われた領境の村を目指したそうです。僕達が去った後なのでしょうが、マリユスはあの村に物資を集積する拠点を設けて、ワーンベルから物資を何回も運んだそうです。（ゲルマニア軍の別働隊を警戒して、馬で小刻みに物資を運ぶのは面倒だったのでしょう）

日暮れまで、その作業を続けて、明日に備えて居た所で、僕からの使者が街道を警戒していた兵団員と出会ってマリユスにも事情が分かったそうです。今日は早朝から、補給部隊を総動員して、このライデンの町に到着した途端にあの騒ぎだったそうです。

領境のあの村から、この町ならば牛車でもそれ程時間がかからないのは納得出来る話ですが、キアラの指示には脱帽させられます。僕達に補給が必要なのは、分かるのですが、時間短縮の為にあの村を利用して、そこにマリユスまで、配置するのは出来すぎだと思えます。アンセルムがあそこまで、キアラを評価している理由が分か

る気がします。（この時はただ感心しただけだったのですが、後で甘かったことに気付かされる結果になるとは思っても見ませんでした）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

早すぎる補給部隊の到着で、状況は一気に改善されました。とりあえず、補給物資は、町にある倉庫に貯蔵する事にしましたが、カルヴィンさんから聞きだす事に成功したこの町の人口15，000人をかなりの日数支える事が出来ると思います。今日明日は予定通り配給を行い、その後1週間程度の食料を支給した後は、通常の状態に戻しても問題ないようです。

今回のゲルマニア軍の進入は何とか追い返せたと思いますし、モーランド侯爵も多分ゲルマニアに向かった事でしょう。（この国に残っていても、碌な事にはならないでしょうからね）

領主が去って、空白地となったこの地が次にどんな領主が支配する事になるかは不明ですが、ゲルマニアの再侵攻が考えられる以上、下手な貴族に治めさせる訳には行きません。トリ（この国の王）スティン王国のフィリップ4世陛下も頭が痛い所なのでしょうね。

ちなみの僕がこんな事をのんびり考えていられるのには、訳があります。元モーランド侯爵領全体を見渡すと、被害があったのはワーンベルに向かう最短ルートに当たる町や村だけだった事が、派遣した調査隊の報告で分かりました。ただし状況は予断を許しません、1度ブルーデス伯爵領に退却したゲルマニアの軍が再編され、近日中に再侵攻の可能性も考えられます。

テティスとキュベレーのコンビでの偵察はかなり有効で、ブルーデス伯爵領の状況はほとんど分かっている状態なので、ある意味のんびりと、ライデンの町の復興に注力出来るというのが正しい表現

なのかも知れません。兵団員達も、町の人達にお世話になりながら、ちょっとした休暇を楽しんでいる感じです。

一番忙しいのは、マリユスとカルヴィンさんの2人かも知れません。持ち込まれる町の建物の修理の依頼から元モーランド侯爵領の他の町や村との連絡、そして領外の商人達への取引を持ちかける使者を送ったりと、休む暇が無いといった感じです。

逆に一番暇なのが、アンセルムなのでしょう。兵団員を呼び出しては、何か戦術を練っていた様ですが、今は何をするでもなく、この館でのんびりしています。ちなみに二番目に暇なのは僕かも知れません。有能な、マリユスとカルヴィンさんコンビのおかげで、ほとんど書類に代官代理のサインをするだけの存在だったりします。

時々、町の様子を見に出かけて、ついでにライル君の様子を見るのが関の山です。ライル君は最初は僕の事を警戒していた様でしたが、僕が命の恩人だという事を知ったのか、お礼を言ってくれました。母であるベルさんの最後も聞いたはずなのですが、表面上は悲しみを見せないのは立派だと思います。5歳だという割には大人びた印象でしたが、魔法を教えると喜んでくれる様は、本当は子供だという事を知らせてくれます。

ライル君は、町に居る平民メイジに魔法を教わっているそうですが、あまり良い教わり方はしていない様子です。僕が教えた2，3のコモンマジックを覚える様子から、メイジとしてのかなりの素質を持っているんじゃないかと、思わせてくれます。一段落ついたら、魔法学園への入学を勧めてみる積りでいます。

ですが、その束の間の平穏も、一人の使者の到着で終わりを告げる事になりました。

第七十六話　ラスティン２１歳（ゲルマニア軍来る：補給部隊の到着）（後書き

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第七十七話　ラスティン２１歳（勅使来る：反攻の狼煙、あれ？）（前書き）

第七十七話ＵＰします。

第七十七話　ラスティン２１歳（勅使来る：反攻の狼煙、あれ？）

それは、ライデンの町が復興を始めて、４日目の昼下がりの事でした。突然一頭の幻獣が、ライデンの町の中央広場に降り立ちました。偶然、護衛隊の１人がその場に居合わせ、乗り手を代官の館まで案内して来てくれました。

「魔法衛士隊、ヒポグリフ隊の、エロワと申します。フィリップ４世陛下より、レーネンベルク公爵公子、ラスティン・ド・レーネンベルク殿への勅命をお持ちしました」

「はい、私がラスティン・ド・レーネンベルクです」

エロワさんは、１つ頷くと、陛下からの勅命を読み上げ始めました。

「勅命である、汝からの要望を受け入れる。全力をもってゲルマニアからの侵攻を防ぎ、わが国に平和を取り戻すことを命ずる！」

「はっ！　勅命謹んでお受けいたします」

「結構です、仔細はこちらの親書に。王軍も出陣準備を始めています。御武運を！」

エロワさんは用件を言い終わると、親書を僕に託してそのまま館を去って行きました。さすがは近衛部隊と言った所でしょうか、颯爽とした身のこなしです。ですが、彼らはあくまでも、近衛隊として動くつもりの様ですね、次のゲルマニアとの戦いに魔法衛士隊の助けがあれば、大分楽になるはずなのですが、残念です。

それより、先程の勅令でエロワさんは妙な事を言っていましたね。受け取った親書を読み直してみると、

1．一時的に、モーランド侯爵の統治権をラスティン・ド・レーネンベルクに与える
2．国軍到着までの、ゲルマニアとの戦いをラスティン・ド・レーネンベルクに一任する
3．必要であれば、ゲルマニアへの侵攻も許可する

というとんでもない内容でした。1は現状では望むところですが、2は国として対応が間に合っていない現状では仕方が無いかも知れません、ただ3に関しては納得行かない物があります。しかも1～3は僕の要請に基づいて許可が出せれていると、親書には書かれています。僕があの大精霊の時の様に体の自由が利かなかったとしても、こんな要請を出した記憶は全くありません。

勅使と聞いて集まった人々に、親書を見せましたが、その反応は二つに分かれました。当然全く事情を知らないカルヴィンさんや親書の内容に驚いているガスパードを始めとする護衛のみんな。そして親書の内容を全く当然の物と捉えている、アンセルムとマリユスの2人。

状況証拠でしかありませんが、キアラがこの親書に関して手を打ったの事を疑うことは、不自然では無いでしょう。キアラは多分ワーンベルの代官代行として、父上を通して王城にこの要請をしたのでしょう。全権を委任した以上、僕としてはキアラの行動を咎める訳にはいきませんが、正直言って不快に感じたのは事実です。

しかし、僕の表情を読んだらしい、アンセルムの

「おいおいラスティン様、まさかゲルマニアの出方を待つとか言うんじゃないだろうな？　そんなことをすれば、この町か他の町や村が略奪の被害に遭う事になるんだぜ。仮にもこの土地の統治を任さ

れた貴族様がそんな調子でいいのかい？」

という言葉で、自分の狭量さが思い知らされる結果となりました。キアラたちはここまで考えて、王城への使者を出したのでしょうか？　正直少し怖くなってしまいました。ですが、こんな所で怖気づいて居る訳には行きません！

「すまなかった、至急ゲルマニアに侵攻する作戦を立ててくれ。ただし、敵も味方も出来るだけ犠牲者を出さない作戦を立案してくれ！」

「分かった」

アンセルムからは、呆れた様な、それでも何処か嬉しそうな答えが返って来ました。

「マリユス、僕も兵団と一緒にゲルマニアに逆侵攻するから、後の事は任せた。カルヴィンさん、マリユスが至らない所があれば、叱ってやって下さい」

「あの～「はい、承知しました！」」

マリユスの愚痴は、カルヴィンさんの大声にかき消されてしまいました。上司を嵌めようとした部下達には相応しい罰だと思います。そこから、兵団もライデンの町も慌しくなる事になりました。当然兵団はゲルマニアへの侵攻の戦力になりますし、ライデンの町の兵団の兵站を支える拠点の役割を持つ事になりました。僕は朝から昼は兵団の熟練度をあげる訓練に参加して、夕方以降は旧モーランド侯爵領の統治の指示を出す事になりました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　アンセルムの指示で、兵団の指揮官クラスのメイジを集めて、戦術の検討会議を行う事になりました。この会議の目的は、どれだけ被害を少なくして、ゲルマニア領に侵攻出来るかというものでした。アンセルムの話では、警備隊で使われる"おとりゴーレム作戦"を応用した作戦だそうです。誰の発案かは知りませんが、このネーミングは何とかならない物でしょうか？

「さて、皆さん、今日集まっていただいたのは、噂には聞いていると思いますが、私達がゲルマニアのブルーデス伯爵領に逆侵攻する際に被害を極力減らす方法を考える為です。皆さんの積極的な発言をお願いします。アンセルム、説明を頼む」

「はっきり言うが、今回の逆侵攻作戦は普通に考えれば無謀だ。全てがメイジとはいえ、たった２０００で他国に攻め入る何て考える奴は居ないだろうな」

　初っ端から否定的な見解を述べるというのは、どういう積りなのでしょう？

「だが、この作戦はゲルマニアの意表を突くこの一点で非常に有効だということは、君達も知っていると思う。誰だ、意表を突いてるだけじゃないかなんて思った奴は！」

　突然の大声に、ここにいる団員の多くがが驚いた様です。もしかしたら、彼らは"意表を突いてるだけ"の意味を分かっているのかも知れません。

「それは正しい物の見方だぞ、だがな、今回は間違っている。ゲルマニア軍が、このライデンの町でどんな事をしたかは、君達が良く分かっているだろう？　奴らは、十分な食料を持っていないんだ。これがどういうことか、俺と同じ平民出身の君達には分かるだろう？」

今度は、ほとんどの兵団員が、アンセルムの言葉に首を縦に振りました。この点に関しては、僕はコメント出来ないですね、前世でも現世でも本当の意味でひもじい思いをしたことなど無いのですから。ですが、食べ物に関しては、十分に注意しようと思わせてくれる一場面でした。

「純軍事的に言っても、食料不足は致命的だし、戦術の幅は限られてくる。分かるか、俺達は勝てるんだよ！」

アンセルムの言い分が正しいか分かりませんが、補給が足りなくて負けた軍隊の話は幾らでも聞いたことがあるのは事実です。

「何だ、まだ不安なのか？　それじゃあ、先の戦いで、ゲルマニア軍の銃兵はほとんど壊滅した。君達が一番恐れるのは、ゲルマニアの貴族が貴族だけで君達と同じ様に少数精鋭で挑んでくることかな？　断言しよう、それなら絶対に有り得ないと！　少しでもゲルマニアに詳しい人間なら知っているんじゃないかな？　あの国の貴族は、団結力という面でかなり劣っていると言う事を」

アンセルムが言ったことを、僕もコルネリウスからも聞いたことがあります。年配の兵団員が、アンセルムの意見に同意するように、首を縦に振りました。強力な指導力を持った皇帝でも出れば話は別でしょうが、長年の政争の後に即位したナポレオン1世にそれが可能とは思えません。奴が宰相として命じたとしても、ツェルプスト

ー辺境伯の様な貴族が賛同するとも思えません。

「どうだ？　納得行ったか？　俺達は確実に勝つんだ。問題はどれだけ被害を減らせるかと、ゲルマニアの奴らに魔法兵団の恐ろしさを思い知らす事が出来るかなんだ！」

アンセルムは、僕が要求した以上のことをする積りの様ですね。頼りになるのかならないのか不安な作戦でしたが、本当に大丈夫なのでしょうか？

「納得行ったな？　実際の作戦案を開帳しようか。誰に手伝って貰いたんだが、そこのお嬢さん、前に出て来てくれるかな？」

「私ですか～？」

アンセルムが指名した女性は、僕も知っている人でした。（アンセルム、その人は妹にしたくなるほど幼く見えるけど、お前より年上だぞ？）　まあ、ぶっちゃけ、ワーンベルの”東の高台”を調査した時に、手伝ってくれたシルビーさんだったりします。

シルビーさんは場所が分からなかった様で、ある女性に案内されて遅れてこの場に到着しました。その後も、背の高い男性兵団員の後ろから、背伸びしたり飛び跳ねたりして何とかこちらを見ようとしていたり、強引に割り込もうとして弾き出されたりと、悪目立ちしていたのがアンセルムに指名された理由でしょう。

僕としては、シルビーさんがここに居る事自体が不思議です。ここに集められた兵団員は、ゲルマニアへの逆侵攻の際、兵団員２０名程度を指揮する隊長候補だからです。基本的に、トライアングル以上のメイジで１年以上の警備隊での実戦経験がある兵団員ばかりのはずなんですが、シルビーさんに警備隊が務まったとは思えないのですが。

「お嬢さんは、ゴーレムを作れるかい？」

「はい～、得意ですよ～」

「それは都合が良かった、それじゃあ、あの辺りの土を使って、土ゴーレムを作ってくれるか？　なるべく大きい方が良いんだが」

「分かりました～」

シルビーさんは気楽そうに返事をして、杖を構え呪文を唱え始めました。アンセルムが小さな声で、

「この娘で、大丈夫なのかね？」

と言ったのが聞こえましたが。僕はシルビーさんの腕をある程度知っていたので、心配はしていませんでした。とりあえず、制御に失敗するような事は無いでしょう、などと軽く考えていたら、シルビーさんの作り出した土ゴーレムに驚かされる事になりました。

シルビーさんは何と、３０メイルはありそうな土ゴーレムを作り出したのでした。僕はシルビーさんをみくびっていた様です。シルビーさんはトライアングルになっているのでしょうが、正直ここまでとは思っていませんでした。アンセルムや他の兵団員も、唖然としています。比較的落ち着いて見ているのは、多分土のスクエアメイジだけでしょう。

「どうですか～？」

と相変わらずの口調で、シルビーさんがアンセルムに尋ねましたが、アンセルムもすぐには返事が出来ない様です。

「おい、ラスティン！　錬金隊のメイジは普通に、こんなゴーレムを作れるのか？」

アンセルムが小声で尋ねてきましたが、僕としては、

「いや、スクエアならともかく、普通のトライアングルには１５～２０メイルが精々だと思う」

と答えるしかありませんでした。

「そうか、まあそれで十分なんだがね」

アンセルムは気を取り直して、作戦の説明を続けます。

「作戦と言っても、実際は簡単な物なんだ。土のトライアングルメイジが１５メイルくらいで構わないから、土ゴーレムを作って、それをゲルマニア軍に向かって突撃させるだけなんだ」

兵団員たちの反応は、思わしくありませんでしたが、アンセルムは畳み掛ける様に説明を続けます。

「想像してみてくれ、１５メイルのゴーレムがそうだな、２００体くらい横一列に並んで迫ってくる様子を。ゴーレム自体を細かく制御する必要はないから、再生力を持たせるともっと良いかもな。大砲や多少の魔法をくらってもびくともしないゴーレムが２００だぜ？」

兵団員達の顔に納得の色が浮かびました。同時に、その作戦の弱点も分かった様です。シルビーさんが、恐る恐るといった感じで、

「あの～、その作戦だと敵兵がその気になれば、ゴーレムとゴーレムの間を突破されちゃいますよ～？」

「まあ、可能性は低いが有り得る事だな。だが、組織だった行動は不可能だろう？　手の空いている水風火メイジがラインスペルで十分以上に対応出来ると思うんだが、どうだ？」

「なるほど～」

シルビーさんの同意の声と同時に、兵団員たちも納得してくれた様です。僕としては、奇襲や騎馬隊の突撃が心配だったりするのですが、大規模の物でなければ対応可能だというのが、アンセルムの見解なので、今は信じるしかないのでしょう。

「さて、実際の兵団員の運用だが、とりあえずこのトリステインゲルマニア国境に集結している軍を第一目標とする。敵軍から2リーグ程まで接近したら、フライの呪文で隠密裏に高速移動して、敵軍から５００メイルの位置に集結する」

アンセルムは話を続けます。

「ここからが、見せ場だぜ！　土のトライアングルメイジはその場で直ぐゴーレムの作成を始めてくれ。完成したら、一気に進軍するぞ。後は敵の出方次第だが、出来ればそのままブルーデス領のギーセンまで侵攻する。ここはブルーデス伯爵のお膝元らしいからこの町を陥落させて、ブルーデス伯爵の身柄を確保出来れば言う事なしなんだがね」

まあ、確かに思い通りになっていれば、こんな戦闘などしなくて

済んだんですがね。僕からも一言あった方がよさそうです。

「長距離と言ってもフライ位では問題ないと思いますが、長丁場になる可能性もあるので、一応例のお茶を飲んでおくのを忘れない様にして下さい」

「「はいっ！」」

兵団員の皆からは、歯切れの良い返事が返ってきました。うん、これなら大丈夫だと素直に思うことが出来ました。アンセルムがそれから幾つかの指示を出すのを確認した後、僕は代官の館へと戻る事にしました。今回の戦いは、望んだものでは無いですが、前回の様に追い詰められている感じが無いだけ、今晩はゆっくり眠れる気がします。

補給物資と一緒に、届けられたあれを使う機会が無い事も祈りたいですね、ゲルマニア軍の為に。

第七十七話　ラスティン２１歳（勅使来る：反攻の狼煙、あれ？）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／１／１５
魔法衛士隊助けがあれば－＜魔法衛士隊の助けがあれば
何とかならないの物－＜何とかならない物
に修正

２０１１／３／１６
たいる－＜ている
に修正

第七十八話　ラスティン２１歳（魔法兵団来る：逆侵攻）（前書き）

第七十八話ＵＰします。

第七十八話　ラスティン２１歳（魔法兵団来る：逆侵攻）

そして翌朝、早朝にも関わらずライデンの町の人々に見送られて僕達はゲルマニアに向けて出陣する事になりました。昨晩は、アンセルムが訪ねて来て、

「ラスティン、本当に今回の侵攻に参加するのか？　何だったら、この町に残ってもいいんだぜ？」

「その話は終わったはずだろ、この町はカルヴィンさんがいれば何とかなるし、この領土の統治もマリユスに経験を積ませるという事を説明したじゃないか。大体、一人でもメイジが必要な時に、僕だけが参加しないなんて有り得ないよ？　兵団員の皆だけを危険な目にあわせるというのも性に合わないしね」

「まあいいか、こちらの予定通りと思えば良いだけだしな」

「おい、その予定通りというのを、詳しく話してもらおうか？」

「いいや、会長に止められているんでね。後のお楽しみという奴だ」

なんて会話をしたのですが、”後のお楽しみ”という言葉にこれほど不安を覚えたのは始めてかも知れません。おっと変なことを考えていたら、出発の号令がかかった様です、前進を始めた兵団の後ろに付いて進軍を開始する事にします。今回は、事情があって護衛隊がそのまま僕の護衛についているので、先の戦いの時よりは安心出来ます。

今朝届いた、キュベレーからの最新情報では、ゲルマニア軍は国

境の平原で軍を再編している最中だという事です。テティスの分析によると、今回も大半の兵士が徴兵されたばかりの様なので、これは良い知らせです。また、ゲルマニア軍が駐留している場所から、少しゲルマニア内部の方向に行くとラセーヌ川に行き当たるそうなので、１度形勢が決まればかなり有利に戦いを進める事が出来そうです。（テティスの分析だと安心出来ますね、キュベレーも早く彼女くらい人間の事を学んでくれると良いのですが）

そして、あまり嬉しくないのが、ゲルマニアの首府ヴィンドボナ方面から、援軍と思われる軍隊が進軍中という事でした。到着にはまだ数日かかるという予想だったので、今回の戦いが短期で終われば、恐れる事は無いはずですが油断は禁物なのでしょう。アンセルムにもこれらの情報は伝えましたが、戦術的には変えるつもりがない様です。（少し表情が厳しくなった様なので、時間的に厳しくなったのが想像出来ます）

結局、午前中で何とか予定の国境地点に到達する事が出来ました。ここで一時休憩をとって、そこからはレーネンベルク魔法兵団の真価が発揮される時です。メイジの特性上、守りにはあまり向かないですが、攻撃側に回った兵団の恐ろしさを、ゲルマニア軍に思い知ってもらう事になるはずです。

「よーし、この辺りで小休止に入る。ここからは気が抜けないからゆっくり休んでおけよ！」

アンセルムの号令で、兵団員が一斉に休憩に入りました。僕は、それに合わせてキュベレーと念話を試みます。

『キュベレー、聞こえるかい？』

『はい、大丈夫です。ゲルマニアの人達には、変わった様子は無い

ですよ？』

『そうか、そのまま監視を続けてくれ。何かあったら直ぐに知らせてくれよ』

『はい』

『テティスは？』

『偵察と嫌がらせに行くと言ってました』

『嫌がらせね、テティスの方はまあ任せておこう。しばらくしたら、僕達はそこに向かうから、その時は君も後方から支援してくれるかい？』

『はい、任せて下さい！』

キュベレーからは、元気な返事と共にやる気が伝わって来ました。テティス方が何をやっているか分かりませんが、きっと効果的な嫌がらせをやっている事でしょう。さて、準備は整ったと思うので、後は実績を見せるだけですね、こんな所でゆっくり休める程度胸は据わっていませんが、一応身体を休めておきましょう。

「よーし、小休止終了だ。これから、北東を目指すぞ。１．５リーグ程飛ぶ事になるが、なるべく低目を飛んでくれよ。敵軍に見つかりたくないからな、それじゃあ、準備が出来た者から続いてくれ！」

アンセルムはそう言って、護衛隊に合図します。すると護衛隊の２人の兵団員がアンセルムを両側から、持ち上げるようにして、フライの呪文を唱えます。護衛隊の２人に引き上げられて、アンセル

ムが宙に浮き上がります。宙を舞うというほど華麗ではありませんでしたが、アンセルム自身は気分が良さそうでした。

兵団員達が、それを追うように次々とフライを唱えて、浮き上がります。僕自身も、それを追いかける事にします。さて、ここからが本番ですよ！

低空を飛んだ事もあって、かなりの速度が出たのでそれほどかからずに、目的の丘の裏側に着きました。誰も喋らないまま、アンセルムが腕を上げると、土メイジ達が小声で詠唱に入ります。程なくして、昨日のシルビーさんのよりは小ぶりですが、それでも十分の大きい多分４００体を超える土ゴーレムが完成しました。（あれ？２００体の予定だった気がするのですが、土系統のトライアングル以上のメイジは予想より多かった様です）

目の前の丘を材料にしたゴーレム部隊が完成するとアンセルムの、

「突撃させろ！」

という号令と共に、ゴーレムたちの前進が開始されます。予想通りでしたが、その動きはかなり緩慢だったりしますが、破壊力と威圧感に関しては申し分はありません。地響きを上げながら、ゲルマニア軍の陣地に向かって肩を並べるようにして、歩いていくゴーレムの姿を見て、僕が思ったのはヨルムンガントではなく、前世のアニメで見たあれの姿でした。（こちらは腐ったり、ビームを発射したりしませんが。槍を持たせたり、頭部の形状を少し変えてみると面白いかも知れません）

ゴーレム部隊から少し距離をとって僕達も前進を開始しましたが、近付くにつれてゲルマニア軍の陣地の様子がはっきりしてきました。その様子は一言で言って大混乱と呼ぶに相応しい状況でした。見張りは直ぐに気付いて、警笛を鳴らした様でしたが、それからの対応はお粗末な物でした。

どう見ても効果の無さそうな弓が撃たれたり、押し出された様に前に出てきた歩兵がゴーレムが近付いて来ると逃げ出したり、訓練されている銃兵までもが無駄な発砲を始めさえしました。少しすると、効果が無いのに気付いたのか、大砲が持ち出されて来ましたが、その頃には兵団のゴーレムは陣地の直ぐ傍まで押し寄せていました。

”ドーン”

至近距離からの大砲の発砲だったので、あまり正確な砲撃というわけには行かなかった様ですが、一体のゴーレムに砲弾が命中しました。そのゴーレムの胸辺りの大穴が開いたのを見て、ゲルマニア軍から歓声があがりましたが、それも直ぐに呻き声に変わる事になりました。そのゴーレムは何事もなかった様に前進を続け、穴も直ぐに修復された為でしょう。

”ズシン、ズシン”

という足音と共に、更にゴーレムの前進が続くと、ゲルマニア軍の一部が逃げ出し始めました。その流れは滞る事が無く、直ぐにゲルマニア軍全体に波及して行きました。

その頃になると、キュベレーも行動を開始していた様です。ゲルマニア軍の後方で、

「わぁ～！」

と何やら叫び声が響いているのがその証拠でしょう。後で確認した所、それは落とし穴でした。殺傷力という面ではあまり効果がないのでしょうが、撤退を始めた軍が混乱を深めるには非常に効果的でした。落とし穴に驚いて足を止めた兵士を、後ろから押し寄せた兵士が押し倒す事になり、かなりの負傷者が出たと思われます。

ゴーレム部隊が、ゲルマニア軍の陣地に到達する頃には、敵の混乱はピークに達していました。後方だけではなく、左右にも分かれてバラバラに逃げる敵兵を、僕達は呆れ顔で眺めているだけでした。ですが、驚くべきなのは、敵を撤退に追い込んで更にかなりの被害を与えているにも関わらず、兵団員のほとんどが敵に対して呪文１つ唱えていないという事実なのでしょう。現に、兵団員に被害は全く出ていなかったりします。

ですが、ゲルマニア軍の兵士が別段劣っているとは思いません。考えてみてください、この世界で例えるのは難しいですが、前世でビル４～５階建ての人型の物体が攻撃を物ともせず真っ直ぐ自分のほうに向かってくる情景を。

ゴーレム部隊はそのまま敵陣を文字通り踏み荒らす感じで、その歩みを進めます。ですが、ゴーレム自体の出す被害は、実際の所大したものではありません。さっきも言いましたが、ゴーレムの動きは緩慢なものです、踏み潰されたいとでも思わない限り、避けるのは怪我人でも難しいものではありません。

まあ、彼らも兵団員の手で武装解除されてしまう運命なのですが、死ぬ事を考えればかなり良い運命なのだと思いたいものです。放心状態のゲルマニア兵士を拘束するのは魔法を使うどころか、子供にでも可能なのではないでしょうか？

そんな状態にも関わらず、ゴーレム部隊、そして魔法兵団の進行速度は緩まりません。まあ、元々人が歩く程度の速度だったりするのですが。時間的な制約の為だと思いますが、アンセルムは、

「進め！」

とだけ指示を出します。ゴーレムは指示を出さなければ、真っ直ぐ進むだけなので、自然と兵団も引っ張られる様に前に進む事になり

ます。まあ後を追われるゲルマニア兵には堪ったものではないのでしょうが、僕達は前進を継続します。途中で、色々な物（人間以外）を踏み潰して、ゴーレムは前進を続けます。僕はキュベレーにゲルマニア軍の行方を追う様に命じましたが、意味があるのか不安になったりしてしまいます。

そして、キュベレーが教えてくれた、敵兵が集結している場所は意外と近くでした。ゴーレムの進行速度が遅い事を見抜いていると思えます。アンセルムにこの事を知らせると、

「面白いじゃないか！　誘いに乗ってやろうぜ」

等と言い出しました。再集結したゲルマニア軍を再度撃破する意義は分かりますが、楽しそうに言うのは正直勘弁して欲しいと思います。再集結は、すぐそこと呼べる場所で行われて居るのが確認できましたが、アンセルムは慌てるでもなく、そのままのペースで、ゴーレム部隊を前進させます。この様子は、すぐ傍で見ている僕には、相手を誘っている様に見えました。

そして誘い出されたとも気付かずに、敵部隊の一部の騎馬隊がこちらに向かってゴーレム部隊の右手を回って突撃をかける気配を見せました。その時、アンセルムが軽い口調で、

「ラスティン、右手を上げてみろよ。面白い事が起こるぜ」

と話しかけてきました。（けしかけるという表現が適切じゃないでしょうか？）

悩んで仕方が無い事だと思ったので、言われるままに右手を上げると、それに呼応して右手の兵団員たちが呪文を唱え始めました。

「右手の騎馬隊に向けて、撃て！」

そして、アンセルムの号令と共に、一斉に騎馬隊に向けて呪文が放たれます。いえ、正確には騎馬隊の足元に向けてだったのでしょう。呪文が着弾すると、ここから見ても分かる程地面が凍結して、敵の騎馬隊はその凍結した地面の周辺で、”コントかよ！”と突っ込みを入れたくなるほど、見事に転倒してくれました。

さすがに、騎馬隊をそのまま放置する訳にもいかず、兵団員がパラライズで制圧にかかりましたが、騎馬隊の実数は思ったより少なく、多く見積もっても５００騎と言った所でした。正直彼らの意図が分からなかったりします、この数では兵団員２０００を相手するには不足なのは明白で、結果もそれを証明してます。

制圧された敵の騎馬隊でしたが、一部で問題が発生している様です。多分この部隊の指揮官だと思われる男性が、兵団員の呪文にも耐え切った様で、暴れているのがここからでも確認出来ます。大した精神力ですね、それとも思い込みが激しいタイプだったりするのでしょうか？

第七十八話　ラスティン２１歳（魔法兵団来る：逆侵攻）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１０／１／１５
ゲルマニアの人達はに－＜ゲルマニアの人達には、に修正

第七十九話　ラスティン２１歳（魔法兵団来る：騎士殿）（前書き）

第七十九話ＵＰします。

第七十九話　ラスティン２１歳（魔法兵団来る：騎士殿）

「へぇ、生きがいいのがいるじゃないか！」

そう言って、アンセルムがその騎士の所へ向かう様なので、僕も後を追うことにしました。その騎士は、元気に？縄でぐるぐる巻きにされていました。

「離せ～、俺は騎士だ！　その名誉にかけて、この様な辱めを受ける謂れはない！」

とても捕虜の発言とは思えませんが、アンセルムはそれが気に入った様で、

「縄を解いてやってくれ」

と面白そうに指示を出しました。その騎士はと言うと、本当に縄が解かれるとは思っていなかったらしく、アンセルムの態度に面食らっています。本当にこの騎士殿は何をやりたいのでしょうか？

「貴様が、ラスティン・フォン・レーネンベルクか？」

騎士殿が、アンセルムに向かって色々間違った質問をしましたが、アンセルムは人の悪そうな笑顔を浮かべると、

「そうだと言ったらどうする、騎士様？」

「貴様がそうなのか！　はーっはは、俺などにかまけていて大丈夫なのかな？　今この時にも、我がゲルマニアの精鋭が反撃の準備を

整えつつあるのに気付かないか？」

騎士殿の台詞を聞いて念のため、ゲルマニア軍の様子を確認してみます。兵団員も堂々とした騎士殿の言い分に不安になったのか、ゲルマニア軍の様子を確認した後、すぐに哀れみを込めた目で騎士殿を見る事になりました。

「まあいいさ、騎士殿のお名前を教えて頂けるかな？」

「我こそは、ハルケギニアに名高い、ヴァルター・フォン・クロンベルクなり！」

うん、残念ですが、聞いたことがありませんね。ですが、アンセルムは表面的には、あくまでも真面目に、

「貴公があの有名な、騎士ヴァルター殿でしたか、これは知らぬ事とはいえ失礼した」

等と対応しています。ですがその表情はいたずらっ子の様で、この場にいるヴァルター・フォン・クロンベルク以外の人間は、アンセルムの発言を真面目に受け取っていないでしょう。

「ですが、貴方の様な高名な方が、何故捨て駒の様な役目を？」

「捨石なのでは無い。今も、ブルーデス伯を中心に反撃の準備が着々と整えられているはずなのだ！　断じて捨て駒なのでは無い！」

「いいえ、良くご覧下さい。ブルーデス伯らが、貴方をどのように扱ったかを！」

アンセルムが腕を、ゲルマニア軍が居た方向に向けると、周囲を包囲していた兵団員が視界を開けます。当然ですが、そこには反撃を目論むゲルマニア軍どころか、ゲルマニア軍を追い立てるゴーレム部隊の影もありませんでした。彼らはかなり先まで行っている事でしょう。

「なんだと～、ブルーデス伯！　あの提案は嘘だったと言うのか～！」

ヴァルターさんの悲痛な悲鳴が辺りに響き渡ります。やれやれ、確かに面白い見世物でしたが、茶番という言葉で片付けられそうな一幕でしたね。アンセルムが、打ちひしがれているヴァルターさんを励ましているのが見受けられますが、僕の興味はヴァルターさんを捨て駒にしてまんまと逃げ延びた、ブルーデス伯爵の方に移っていました。

さて、ブルーデス伯爵は何処に向かったのでしょうね？　普通に考えれば、何処かに篭って援軍を待つという所なのでしょう。現にテティスからの情報で、（本来ならトリステインへ侵攻する為の）援軍が来るのは分かっている事なので、こちらの可能性が高いのでしょう。これは僕達にとっては望むところだったりしますが、ブルーデス伯爵がそれに気付いているでしょうか？

逆にブルーデス伯爵が、他のゲルマニア領に逃げ延びたり、首府ヴィンドボナまで援軍を求めに行った場合は、僕達はこのブルーデス伯爵領を直ぐに支配下におさめる事が出来ます。むろん戦果としては申し分ありませんが、ブルーデス伯爵を捕らえる事に成功した場合とでは、その後の政治的な駆け引きがかなり変わって来るのが予想出来ます。

今はとりあえず、ブルーデス伯爵の行き先を追うのが先決なのでしょう。こう決めると、アンセルムが僕の所へやってきました。

「ラスティン、先行している兵団に合流して、ギーセンの町に向かうぜ！」

「ブルーデス伯爵の後を追う方が先決じゃないのか？」

「ん？　ブルーデス伯爵を追ってギーセンの町へ向かうんだが？」

あれ？　ゲルマニア兵の向かう方向に当然、ブルーデス伯爵が居ると思ったのですが。兵の向かっている北と、ギーセンの町があると聞いている北東では自ずと針路が違ってきます。まさか、一般の兵士も捨て駒にしたと言う訳なのですか。しかし、どうやってその情報を得たのでしょう？　そう考えると、さっきの不自然な態度が気になってきました。

「情報源は、騎士様と言う訳か？」

「ん？　まあな」

「ヴァルター・フォン・クロンベルクという人物は当てになるのかい？　騙されやすそうな人だと思えるけど」

「まあ、名前だけの貴族だし、メイジとしての腕は全然だそうだ。だがな、傭兵達の中では結構有名な人物だったりするんだな、これが」

「そうなのか？」

「ああ、力に重心を置いた戦い方も、かなりの物だというし、意外と部下の育て方も上手いらしく、部下からの信望も厚い。何より両

親が所属していた傭兵団と対決した事があったそうでな、団長が手放しで褒めていたんで興味があったんだ。ゲルマニア軍の銃兵を実際に訓練したのもあの人らしいぜ。それに、ライデンの町の郊外での戦いは、騎士殿の指揮だったらしいんだ」

「本当なのか？」

「ああ、その騎士殿の話では、兵士はここから大体北に1リーグにある村の近くに集結しろと指示が出ているそうだ。鎌を掛けて聞き出した情報だから間違いない」

「やっぱりそれは、ブルーデス伯爵がギーセンの町まで逃げおせる為の計略と言う訳なのかな？」

「ああ、騎士殿から聞きだしたブルーデス伯爵の性格と、ギーセンの町にはブルーデス伯の城があるそうだから、間違いないだろうな。全く姑息なことだな」

アンセルムは最後の台詞を不愉快そうに眉をしかめて呟きました。僕もその意見には全く賛成です。

「そうだね、じゃあその姑息な伯爵を捕らえに行く事にしようか？軍と行動を別にしたのなら丁度良いんじゃないか。それで、作戦はあるのかい？」

「ん、この状況でそんなもの必要か？　まあ、兵団を二つに分けて、一方を敵の残存兵への牽制、もう一方でブルーデス伯爵を捕らえるで良いだろう？」

作戦と呼べない様な意見ですが、確かに今の状況ならこれで十分

だと思えます。

「ラスティンには、残存兵への牽制を頼むぜ。俺の方は、さっさとブルーデス伯を片付けて来るからな」

城攻めには興味があったりしますが、時間をかけるわけには行きませんから、ここは素直に従う事にしましょう。

「分かった、こっちは戦闘を行わないようにすれば良いんだよね？」

「ああ、睨み合ってくれていれば、助かるな。下手に敵兵を散らさない様にしてくれれば、問題ないね」

「それ位なら、何となると思う」

「まあ、そっちは本命じゃないから、やばくなったらフライで逃げ出してくれ」

「そんなことにはなって欲しくないけどね」

僕とアンセルムは簡単な打ち合わせをした後、先行していた兵団と合流して、半分ずつを指揮して自分の役目を果たす事になりました。そうは言っても僕の役目は、単に何もしないだけと言っても過言ではないでしょう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

結論から言うと、やはり僕達は何もする事がありませんでした。苦労したのはゴーレムがラセーヌ川を渡る時位でした。今の時期、

川の水量が少なかったのが幸いしました。

名前も知らない村の南側でゲルマニア軍と睨み合ったまま、時間は過ぎて行きました。兵団員に交代で昼食を摂る様に指示を出し、僕自身も食事を済ませましたが、状況は動きませんでした。敵軍に指揮官と呼べる人物が居ないようで、敵軍はゴーレム部隊に半包囲された状態で行動を起す気配もありません。（暇なので、ゴーレムのカスタマイズに挑戦していたりしますが、思った通りにならないのが残念です。このゴーレムは寸胴なので、イメージと違ってしまいます）

時々、少数の兵士が陣地を抜け出そうとするのが見受けられましたが、あえてそれを牽制して（多分）逃亡するのを妨害する事になりました。そんな事を続けていて、そろそろ甘いものが食べたくなるな等と、戦場？とは思えないことを考えると、5～6頭の騎馬がこちらに向かってくるのに気付きました。

索敵の兵の反応は無かったので、味方の様だと思っていると、それがアンセルムを含む兵団の人達だと言うのが判別出来ました。彼らは、僕の事を視認したのか、こちらに向かって馬を進めてきました。アンセルムの馬には何か大きな荷物が載せられているのが分かりました。

「ラスティン、待たせたか？」

「そうだね、かなり暇だったことは認めるよ」

「ははははっ、それもこれで終わりだ」

アンセルムがそう言って、馬の荷物を軽く叩くと荷物？が身動きしました。荷物？は人間位の大きさですが、もしかすると問題の人

物だったりするのでしょうか？

「もしかして、それはブルーデス伯爵なのか？」

「ああ、面倒をかけさせてくれた、張本人だよ」

「面倒？　城攻めはそんなに大変だったのかい？」

「いいや？　ゴーレムを一体城の中に送り込んだら、決着は着いたぜ。だがな、この伯爵様は抜け道から逃げ出してな、一応警戒はしていたから逃さずに済んだが、追いかけっこをする羽目になった訳なんだ」

どうやら、ブルーデス伯爵はかなり往生際の悪い人物の様ですね。兵団員の手で袋の様なものから引っ張り出された人物は、キツネを思わせる風貌の貴族でした。

「それじゃあ伯爵様、さっきお願いした通りに、兵士に命じてもらえますか？」

アンセルムの言葉遣いは一応丁寧でしたし、表情も笑顔でしたが、近くから見ていた僕にはその目が笑っていないのが良く分かります。その目だけを見れば、”おっさん、面倒をかけるなよ。何なら生まれて来た事を後悔させてやってもいいんだぜ！”等と物騒な事を考えているのが分かります。

無論それは、ブルーデス伯爵にも伝わった様です。機械の様にカクカクと首を縦に振ると、アンセルムに引っ張られる様にして、ゴーレム部隊の足元まで移動されられました。そして力の無い声で、

「我が兵士達よ、諸君らは良く戦ってくれたが、知っての通り形勢

はかなり不利になっている。そこで私は苦渋の決断をして、トリステイン軍と和平を結ぶ事にした。徴兵された領民はその任を解除するので好きにするが良い。ゲルマニアの正規軍はヴィンドボナに戻って陛下の指示に従ってくれ。以上だ、解散！」

伯爵の話は、前の方に居た兵士にしか聞こえなかったと思いますが、それがそこにいるゲルマニア軍全体に伝わるには、それ程時間はかかりませんでした。徴兵されたと思われる兵士達が真っ先に（ゴーレムを避けながら）思い思いの方向へと去って行き、正規兵も小集団に固まって、北東の方向を目指して歩き出しました。

「ふぅ、これで一段落だね」

「何言ってるんだ、ラスティンが働くのはこれからだろ？」

「うっ！」

言われてみれば、これからの方が大変な気がします。敵国の領土を支配する事がどれ位大変な事かは、考えるまでも無いでしょう。アンセルムがこう言った方面に向かないのは間違いないでしょうし、兵団の武力を後ろ盾にしているとはいえ、すんなりと支配はさせてくれるという事は考えづらいです。

一応、ギーセンの町に向かう事にしましたが、最悪ブルーデス伯爵だけを戦果にしてトリステインに帰る事を検討しなくてはならないかも知れません。この逆侵攻自体の目的は達したはずなので、それで問題は無いでしょう。領土的な野心を持って侵攻をかけた訳でも無いので、ブルーデス伯爵領を陥落させた責任を取る気は全く持っていなかったりします。（無責任な侵略者も居たものですね）

然程時間をかけずに兵団の半分を率いて、ギーセンの町に入る事

が出来ました。町の外部では、アンセルムが率いていた方の兵団員達が、町を威嚇するように包囲していますので、当然の事ですが、町には人っ子一人住民は見かけられませんでした。

町に東側には、丘の上に立派な城が建っています。その立派な城壁の一部が、半分ほど崩れているのが見て取れます。多分あそこからゴーレムが城内に侵入したのでしょう。城に酷い被害が無かったということは、激しい抵抗も無かったのでしょう。大半の兵士がトリステイン侵攻に狩り出された結果だとは思いますが、兵が多くても結果は変わらなかったと思います。町に被害が無かった様子なのは正直良かったと思える事です。（敵国の国民とはいえ、無関係な人達が傷付くのは、あまり見たくないですからね）

第七十九話　ラスティン２１歳（魔法兵団来る：騎士殿）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第八十話　ラスティン２１歳（魔法兵団来る：本物と偽物）（前書き）

第八十話ＵＰします。

第八十話　ラスティン２１歳（魔法兵団来る：本物と偽物）

何となく城（ブルーデス城という名前だと後で知りました）に向かいましたが、別に当てがあった訳ではありません。城の警備をしていた兵団員に案内してもらい、大広間と思われる場所に来ましたが、得られる物はありませんでした。ここにはブルーデス伯爵家の家臣が拘束されているのですが、その場に足を踏み入れた時、彼らから返って来たのは冷たい拒絶の視線だけでした。ブルーデス伯爵が賢明な領主だったとは思えませんが、他国からの侵略者よりは良いと考えているのが分かります。

僕は一言も発する事無くその場を去る羽目になりました。次に向かったのは、ブルーデス伯爵の家族の軟禁されている場所でした。城の最上層に近い一室に、その人物は居ると聞かされ、その部屋に向かいました。厳重に警備されているその部屋に入ると、そこには僕と同世代の男性が俯く様に椅子に深く腰掛けていました。

「失礼するよ、僕はトリステイン王国のレーネンベルク公爵家嫡子のラスティン・ド・レーネンベルクと言います。良ければ名前を聞かせてもらえるかな？」

「アルマント・フォン・ブルーデス」

その青年は、むっつりと名前だけ答えました。名乗られたからには名乗り返す程度の事はしてくれる様ですね。それにしても、アルマントとは、皮肉な名前です、この場に彼が・・・！　そうだ、今の状態ならコルネリウスの出番として申し分が無いじゃないですか。早速使いを出す事にしますが、今は目の前の”アルマント”君ですね。

「このブルーデス伯爵領と領主は、レーネンベルクの兵が抑えたんだ。この上、抵抗は無意味だと思うから、せめて領民の人達が安心出来る様に、僕達の統治に協力してくれないか？」

「確かに僕は父上の方針に反対して軟禁される立場だけど、侵略者の手先にはならない！」

「ゲルマニアとトリスティン、今回どちらが先に攻め込んだのか、君は知っているんだろ？」

「くっ！」

この”アルマント”君はそれっきり口を開かなくなってしまいました。失敗しました、父親のブルーデス伯爵と仲違いしていると聞いたのですから、そこを突いて丸め込むべきだったのに、つい本音が出てしまいました。

結局何も得る事が無く、城を後にして兵団が接収した宿屋へ戻る事になりました。人心掌握という面では、僕はまだまだの様です。前世の記憶を持っているとは言え、経験不足な僕には現実はそれ程甘く出来ていないようですね。

嘆いても仕方が無いので、この領地の主な町や村の責任者を招集する事と、ワーンベルを任せているキアラにコルネリウスをギーセンの町へ派遣するように指示を出して、今日は休む事にします。今晩は無理でも、兵団員の泊まる場所を早急に何とかしなくてはならないでしょうね。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

翌朝、一人のんびりしているアンセルムを尻目に、僕は各所から

の報告を忙しく受ける事になりました。分かった事は、凶作の影響はここにも出ている様で、全般的に食料が足りていないということでした。これは正直意外でした、ガリア程では無いとは言えゲルマニア程の国で、国民が飢えに苦しんでいるという状況を宰相マテウス・フォン・クルークが放置しているとは思いませんでした。

国民（領民）を飢えさせる事に利点が無いのは、誰にでも分かる事です。国の一部が飢饉だったとしても、国全体では何とか必要な食料は確保していると考えていたのですが、少し甘かった様です。不思議なのは、ブルーデス伯爵領と接しているトリステイン側の旧モーランド侯爵領では、飢饉の報告が無かったということです。この事を丁寧に説明してくれる人物が居なかったので、この謎はしばらく謎のままだと思っていました。そう、この日の午後までは。

僕が気の進まない昼食を終えた頃、ライデンの町を経由した補給部隊がギーセンの町に到着しました。今回もこちらの使いを出したタイミングと、補給が到着したタイミングが合わないのですが、それより重要な問題がありました。

「コルネリウス、良く来たね」

「ああ、それにしても、ブルーデス城を簡単に陥落させるとは、凄いな！」

コルネリウスは母国と所属している兵団の狭間で、複雑な表情を浮かべながら、感想を言いました。大体事情は分かっていますが、一応僕は確認しておきます。

「コルネリウス、随分到着が早いじゃないか？」

「そうか？　あの小さな代官代行の指示に従っただけなんだが？」

やっぱりキアラの指示の様です。僕はこの時、正直キアラの事を怖いと感じました。彼女の忠誠が僕に向いている間は問題ありませんが、それが逸れた時どんな事が起こるか考えたくないというのが本音だったりします。彼女と一緒に居ると良く感じる事ですが、僕が彼女の主人として相応しいのか試されている事を強く感じます。

「スティン？　俺は何か不味い事をしてしまったのか？」

コルネリウスのらしくない不安そうな声で我に返りました。僕の葛藤が表情に出てしまった様です。

「いいや、君の到着が思ったより早かったのに驚いているだけさ。それより早速会って貰いたい人物がいるんだ」

「そうなのか？　まあいい、ブルーデス領ならアルマントがいるはずだが、あいつどうしてるかな？」

「”アルマント”というのは、アルマント・フォン・ブルーデス、伯爵の息子の事か？」

「ああ、勿論だ。俺の偽名は、彼の名前を借りたんだからな。スティンに話した事があったか？」

そういう大事なことはもっと早く話して欲しい物です。昨日からの心労を返して欲しい気分ですね。

「アルマントに会ったんだろ、もったいぶらずに案内しろよ！」

コルネリウスの嬉しそうな笑顔を見ていると、愚痴を言う気も失せてしまいます。

「今から案内するけど、君の事は極力秘密にしたいから、あまり大っぴらに動かないでくれよ」

「ああ、分かってるって」

久々の母国に、コルネリウスはかなり舞い上がっている様ですね。ここは僕がしっかりと締めなくてはならない様です。コルネリウスを連れて、ブルーデス城へと向かいました。コルネリウスはブルーデス城が城壁以外に被害の無い様子を見て奇妙な表情でしたが、伯爵公子が軟禁されている部屋の前に立つと、嬉しさを隠しきれない様でした。一応ノックはしたのですが、無反応だったのでそのまま部屋に入りました。

部屋に入ってきた僕に一瞬だけ視線を寄越した本当のアルマント君でしたが、直ぐに視線を逸らしてしまいました。ですが、続いて部屋に入ってきたコルネリウスを見た時の驚き様は見物でした。そう文字通り死人に出会った様でした。（コルネリウスはゲルマニアでは公的に死んだ事にされているはずなので、間違った反応では無い気もします）

「コルネリウス様!?　まさか、ラスティン・ド・レーネンベルク、君はこんな偽物を用意してまで、僕を騙すつもりなのか！」

あれ？　感動の再会のはずが、何故か僕が悪役にされていますよ？　この世界ではその気になれば、本物そっくりの偽物が用意出来てしまうというのは問題ですね。ここからはコルネリウス次第だと思って、彼を見るとこの反応を予期していたのか、苦笑を浮かべているだけでした。

「泣き虫アルマントと呼ばれていたお前が、随分威勢良いじゃない

か？　そんな事を言って後で恥をかくのはいつもお前だったよな」

「えっ！」

「まだ納得行かないか？　何ならお前が何歳までおねしょしていたか言ってやろうか？　それとも初恋の相手が誰だったかの方がいいか？」

「ちょっ！」

「スティン、こいつの初恋はな、なんと俺の姉上だったんだ」

「止めてください、コルネリウス様！」

「ほう、ようやく認めてくれた様だな。４年以上経っているとは言え、薄情なことだな、アルマント？」

アルマント君は、コルネリウスに全く頭が上がらない様です。（再会の感動でなのか？）本気で涙目になっている気がします。

「コルネリウス、お楽しみの所悪いが、話を進めさせてくれないかな？」

「ああ、そうだったな。アルマント、お前の事だから伯爵と揉めていたんじゃないのか？」

「はい、今回の出兵に反対意見を言って軟禁されている所を、今度はトリスティン軍に軟禁されてしまったんです。でも分かりましたよ、コルネリウス様が指揮していたから、我が軍がトリスティンなんかに負けることになったんですね？」

「そう思ってくれるのは嬉しいが、今回の戦いは俺は関わっていないぞ？　精々補給隊の隊長と言った所だな。活躍したのは、こいつだ」

コルネリウスは自嘲気味な笑顔を見せながら、僕の肩を叩きました。正直、僕も活躍したとは言い難いのですが、口を挟まない事にします。

「こんな奴がですか？」

「これでも、俺の命の恩人だぞ。少しは敬うんだな」

コルネリウスは自分の言葉が矛盾しているのに気付いているのでしょうかね？

「それは失礼しました。ラスティン殿」

「いいえ、アルマント殿にとってコルネリウスが掛替えの無い友人であるように、僕にとってもコルネリウスは掛替えの無い友人だっただけの事です」

「友人ですか？　交戦国の公爵公子が？」

「それが？　コルネリウスに会った時は、彼は”アルマント”だったし、ゲルマニアとここまで険悪な状況じゃ無かったからね」

「まあ、こいつと会った魔法学院では、こいつも身分を偽っていたな。それにこいつはどちらかと言うと、身分が高いだけの貴族は嫌いらしいぞ。平民と仲が良い様な変な奴だったな」

コルネリウスが強引に話に割り込んで来ました。多分”アルマント”と名乗っていたのが恥ずかしいのでしょうね。コルネリウスだって、平民に混じって修行している”変な奴”になるはずなのですがね。話を聞いていた、真・アルマント君は、意外そうな表情を浮かべて僕を見ています。

「コルネリウス様は、この領土をどうなさる御積りなのですか？」

「ふむ」

コルネリウスは考え込んでいます。正直に、小さな代官代行に言われて来ただけ、とは言い出せない状況ですからね。

「さっきも言ったが、俺は補給部隊の一員でしかないんだ。方針はスティンが、決めてくれるだろうよ」

コルネリウスは表面的には気軽に、僕に話を振って来ました。一見不真面目な態度に見えますが、その表情は真面目な物でした。僕自身も、本気で考える必要がありそうです。ですが、僕もこの領土をどう扱うか決定権がある訳ではありません。端的に言ってしまえば、後から来る王軍の司令官や、フィリップ４世陛下が考える事だと思います。（かなりの発言権を持てると思いますが、これには責任が伴います）

「正直、僕にも最終的な決定権は無いんだよ。そうだ、コルネリウスがここを拠点に、反ナポレオン１世に起つと言うなら陰ながら協力するけど？」

「むっ！」

僕は、コルネリウスを試す積りで、無茶な提案をしてみました。
コルネリウスにとっては、非常に魅力的な意見だと言う事は分かった上での、意地の悪い質問だったりします。

「今はダメだな」

少ししてコルネリウスから、期待した通りの言葉を聞くことが出来ました。その台詞を聞いた、アルマント君の表情はある意味見物でした。

「頭は冷えたかい？」

「ああ、お前、実は性格悪いだろう？」

コルネリウスの抗議が始まろうとする時に、アルマント君が不安そうに声を出しました。

「あの、この領地はどうなるんでしょうか？」

その声と同時に、テティスが語りかけて来ました。

「ラスティン、少し良いですか？」

「あ！　２人とも少し待っていてくれるかな？」

「どうした、スティン？」

「使い魔がちょっとね」

コルネリウスには、これだけで伝わった様なので、そのまま廊下に出て空き部屋の1つに入りました。

「テティス、世話をかけるね」

「いいえ、マスター（エルネスト）の頼みですから」

「もしかして、嫌がらせの結果報告かな？」

「はい、ゲルマニア軍の援軍ですが、結局こちらから撤退してきた兵と合流して、ヴィンドボナ方面に戻って行きました。再度進攻を開始するには、かなりの時間がかかると思います」

「大戦果じゃないか、何をどうやったんだい？」

「大した事はやっていませんよ。ただ、補給部隊も含めて、援軍の人達の水やお酒の入れ物を片っ端から壊しただけです」

「確かに、効果的な嫌がらせだね。ありがとう、助かったよ。そろそろ、エルネストの方が心配なんだろ。こっちは構わないから、エルネストの所に戻りなよ」

「やっぱり分かってしまいますか？　すみませんがそうさせていただきます」

それだけ言って、テティスは近くにある壺の中に入って行きました。確認すると、非常用の水が溜められている水壺の様です。さて、僕の方は今後の方針決定に戻る事にしましょうか。

第八十話　ラスティン２１歳（魔法兵団来る：本物と偽物）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第八十一話　ラスティン２１歳（魔法兵団来る：国軍到着）（前書き）

第八十一話ＵＰします。

第八十一話　ラスティン２１歳（魔法兵団来る：国軍到着）

「２人とも、朗報だよ」

「詳しく教えてくれよ、スティン」

「ああ、ゲルマニア軍の援軍は暫く来ない様なんだ」

コルネリウスは、その知らせを冷静に受け止めた様ですが、真・アルマント君は顔色を曇らせました。まあ、彼自身としては、今回の騒動で父親が失脚して自分が伯爵位を継ぐのが理想なのでしょうし、その為にはこの地をゲルマニア軍が再占拠するのが前提になりますからね。

僕としては、この地の人達が戦乱に巻き込まれる時期が遅くなるので、単純に喜ばしい事だと思います。時間があれば、対応策を考えることも可能でしょう。必要ならば、ここの領民を旧モーランド侯爵領やレーネンベルクに、移住させることも考えられます。まあ、希望者が居ればの話になりますが。

「アルマント君には申し訳ないけど、当面の戦闘が回避出来ただけ幸運だと思うよ」

「まあそうだな、アルマント、お前は殺されないだけ、幸運だと思っていろよ」

コルネリウスの指摘で、アルマント君も自分がいかに幸運か気付いた様です。占領した領土の旧領主の家族なんて普通に殺されてしまう様な世界ですからね、ここは。

「アルマント君の将来は、置いておいて、とりあえずは領民が困っていないか、確認した方が良いだろうね。早く対応すればそれだけ、僕達の株が上がるだろうし。そうだ、アルマント君はこの領土で食料が不足していると言っていなかったかな？」

「まさか、ブルーデス領で？　ここで食糧不足じゃ、ゲルマニア中が酷い事になってるんじゃないのか？」

「まあ、軍が駐留していたんだから、無理も無いんじゃないかな？」

「いや、それにしても。おい、アルマント、どういうことか説明しろよ」

置いておかれたアルマント君が、気を取り直して、話してくれたのは非常に興味深い話でした。

「あまり他国の人間には話したくないのですが、実は今回の飢饉は人為的な物なんです。以前から、宰相の名で少なくない領民が工業発展の名目で首府方面に駆り出されていたのです。段々と世話が出来なくなり、去年は穀物が軒並み不作と言う結果になった訳なんです」

「馬鹿な、農業は国の礎だぞ！　それを放置して、どうするって言うんだ」

コルネリウスが声を荒立てましたが、正直耳が痛いですね、ワーンベルの代官としては周辺の工業以外の産業にも力を入れるべきだったと感じました。前世の記憶の為か、どうも工業に目が行きがちなのを改めて自覚してしまいます。もしかすると、”ナポレオン１世”も同じ過ちをしているのかも知れませんね。僕の場合は、対象

が1つの町だけなので影響が少なくて済んでいるのが幸運と言えるかも知れません。これを利用出来ないでしょうか？

「コルネリウス、君にやって欲しい事があるんだけど」

「俺にか？　スティンには恩返しをしたいから構わないが？」

「いや、僕の為と言うより、コルネリウス自身の為かな？　明日位に、この領地の町や村の代表者を集める手配をしたんだけど、君が代表として彼らから要望を聞きだして欲しいんだ」

「俺で良いのか？」

「ああ、だけど本名は名乗らないでくれよ、それに少し変装してもらおうかな？」

「いや、そう言う意味では無く、スティン自身がやるべきなんじゃないかと思うんだが？」

「正直、僕はこのブルーデス領に留まる積もりはないんだ。トリステインの国軍が到着したら、そのまま帰国しても良いと思っている位だし」

「ふむ、それで俺に顔を売る機会をくれると言うわけだんだな。喜んで引き受けよう、アルマント、お前も来るんだぞ」

真・アルマント君は、不本意そうでしたが合意してくれました。

変装の方ですが、以前母上から貰った物が役立つ時が来たという感じです。魔法薬の一種で、簡単に染める事が出来て落とす事も簡

単でしかも髪を傷めない染髪剤だったりします。銀髪にしか染める事は出来ませんが、それだけでかなり印象が変わると思います。いざと言う時（具体的には敵軍から、１人で逃げている時など）に使おうと思って持ってきたのですが、思わぬ所で役に立ちます。

ちなみにこの染髪剤は、妹のジョゼットの髪の色を誤魔化す為に母上がこっそり開発した物だそうです。〝髪を傷めない〟と言う辺りに、女性らしさが現れていますね。

結局、僕は、直接このブルーデス領には関わらないという方針を貫き、領の暫定統治をコルネリウスと真・アルマント君に任せる事にしました。コルネリウスには良い経験になるでしょう、アルマント・フォン・リューネブルク　とアルマント・フォン・ブルーデスが一緒に行動するのも、印象を深めるという面で面白いかも知れません。

僕自身は必要と思われる、食料の手配を行いました。今回はさすがに、ワーンベルからの補給だけで乗り切る事は難しいと思えたので、僕からキアラ、キアラからローレンツさん、そしてローレンツさんの商会が食料を色々な所から買い集める事になりそうです。この支援活動自体は、国軍が来ても続ける積もりなので無駄にはならないと思います。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そして、逆侵攻から一週間が過ぎた頃に、ようやくトリステインの国軍が到着しました。それ自体は喜ばしい事なのですが、軍を率いている人物が最悪でした。陸軍の元帥だそうですが、非常に尊大な人物でした。まるで自分の手でこの地を手に入れた様な態度で、アルマントコンビの活躍でようやく復興の兆しを見せているギーセンの町でも早速白眼視されています。

堂々と僕達が捕らえたブルーデス伯の身柄を要求されたのは、僕としても正直驚きました。もちろん父上の名前を出して、逃げ切りましたが。（え？名前ですか？　さすがに挨拶はしましたが、記憶に全く残りませんでした。元帥Ａとか久々に呼びたくなりましたが、トリステインには現在元帥の位に居るのは彼だけなので、愛情を込めずに”元帥殿”とだけ呼ぶことにしています）

さて、今から会いたくも無い元帥殿に会いに行かなくてはなりません。レーネンベルク魔法兵団が帰国するので、その挨拶と引き続き領民の支援を行う事を断っておく為です。

「元帥殿、お忙しい所に時間を頂き申し訳ありません」

「いやいや、魔法兵団の活躍には感謝しておるから、これくらいはどうと言うことはないぞ」

兵団を迷惑そうにしていた元帥殿が、そんな殊勝な事を考えるとは思いません。まあ、取らぬ狸の皮算用という言葉を体言したような表情を浮かべていますが、本気で手柄を独り占めする積もりなのでしょうか？　個人的には、ゲルマニアの宰相がこのまま黙っているとは思えないのですが、この辺りは僕などではなく、国がきちんと対処してくれると信じたいです。

「先日お話した通り、レーネンベルク魔法兵団はこれから帰国しますので、これからの事よろしくお願いいたします。それと、この地の領民が飢えているのを知ってしまったので、微力ながら援助を続けたいのですが、お許しをいただけるでしょうか？」

「援助と言うのは食料かな？」

「もちろんです」

「それなら問題あるまい、そ」

「国軍の物資は足りている様ですが、それを領民に分け与える事は可能でしょうか？」

「いや、国軍としても戦いの長期化を考えねばならんからな、他国民への食料など」

「この土地を支配権を確立するお積りなら、その様なことはおっしゃらない方が良いと考えますが？」

「うっ」

何か図々しい事を言おうとした様ですので、先制攻撃してみました。この反応をみれば、攻撃は正解だった様です。この程度の人間が陸軍のトップだと思うと、トリステインの将来が心配な気もしてきます。この時ふと、ローレンツさんの言葉が思い出されます。僕がこれからトリステインの為に何が出来るかを考える時期に来ているということでしょうか？（この辺りの面倒なことは、出来れば公爵位を継いだ後にしたかったのですが）

僕は元帥殿にもう一度釘を打って、この地を去る事にしました。この地の支配権が、どちらに転んだとしても、どちらかのアルマントを出す事で、何らかの影響力をこの土地に及ぼすことが出来るはずといった所で妥協する事にしましょう。僕達は、補給部隊の護衛を行う団員を残して、ブルーデス領を去りました。正味一週間程の滞在でしたが、正直2度と御免だと思いました。（僕はゲルマニアと言う国と相性が悪いのでしょうね）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　１８００人程になった魔法兵団は、一晩野営して翌日の昼には旧モーランド侯爵領のライデンの町に到着しました。ですが、そこは大変な状態でした。どの様に大変かというと、いかにも商人という人達で溢れ返っていたのです。自分で手配したこととは言え、ここまでの状況は想像していませんでした。
　多分、今回の国軍の出動が噂を呼んだ事も後押ししているのでしょうが、兵団をこの町で一泊させるのは諦めた方が良いかも知れません。そして、今、この町の代官の館に近づいてはいけないと言う予感がヒシヒシと感じられます。一度館に入ったら二度と出られないなんて妄想まで浮かんで来そうです。（マリユスの亡霊に取り憑かれると言った所でしょうか？　死んで居ないですが、死にそうになっているのは間違いないでしょうね）

「ラスティン、どうするよ、これ？」

兵団を指揮しているアンセルムも戸惑っています。この町に用があるのは1つだけですから、それを済ませてサッサとこの町を去る事にしましょう。

「アンセルム、この町で一泊の予定は取り止めだ。迷惑になりそうだから、このまま兵団を率いて、先行してワーンベルを目指してくれ」

「先行って、お前、マリユスを手伝わないのか？」

アンセルムはこう言いましたが、少し考えた後、

「まあ良いさ、ワーンベルに帰る事にするかね」

と気軽に答えてくれました。うーん？　アンセルムが、僕をマリユスに売る積りなら、道連れにする覚悟だったんですが、拍子抜けです。もしかしてそこまで読んで、こんな返事をしたのでしょうか？

そんな事を考えている間に、アンセルムが兵団を率いて、ワーンベル方面に向かい始めました。暫くすると、そこには僕の護衛隊しか残っていませんでした。何故でしょう、釈然としません。

悩んでいても仕方が無いので、この町での用事を済ませる事にしました。町の外側をぐるりと回って、町外れのある民家に向かいます。ドアをノックすると、あの老人が顔を出しました。僕の事を見て驚いた様子でしたが、直ぐに笑顔で挨拶してくれました。

「これはラスティン様、噂は伺っておりますよ。こんな所にいらっしゃるとは思いませんでしたが、どう言った御用ですかな？」

「どんな噂か知りませんが、ほとんどデマですよ。レーネンベルクに戻る事になったので、ライル君を連れて行こうと思いまして」

「そうですか、寂しくなりますな。ですがあの子には、良いことでしょうな。先程、墓地に向かいましたから、暫くすれば戻ると思います」

「墓地ですか、お墓参りなんですね。良い機会なので、僕もベルさんに挨拶してきます。申し訳ありませんが、ライル君の荷物をまとめておいていただけないでしょうか？　あ！彼らが運ぶので大きいものでも構いませんよ」

「「え！」」

ガスパードやニルス達が、驚きの声を上げましたが、ライル君の家の中にはそれ程大きな物が無いのは分かっているので、無用な心配です。ベッドやテーブルなんかを持って行く積りも無いですしね。僕は後の事を彼らに任せて、少し離れた所にある墓地に向かいました。墓地の様子は少し変わっていましたが、ライル君の姿は簡単に見つける事が出来ました。

「ライル君」

「あっ！　ラスティン様」

「お墓参りかい、偉いね。僕もお祈りしてもいいかな？」

「はい、母さんも喜ぶと思います」

僕は心の中でベルさんに、ライル君を連れて行くことを報告します。

「ライル君、今日は君を迎えに来たんだ。以前話したよね、君をレーネンベルク魔法学園に入学させたいって」

「うん・・・」

ライル君からは、期待や不安などがごちゃ混ぜになった返事が返って来ました。全く知らない場所に行くのは不安でしょうし、母親の墓から離れ難いのも理解出来ます。

「ライル君、良かったら僕の子供になるかい？」

僕は、思い切って提案してみました。結婚もしていない僕が、親になるのも抵抗があるかと思いましたが、意外とそんな事はありませんでした。ライル君の性質が分かっている事もありますし、魔法の腕も期待できるというのも大きいのでしょう。ただ、婚約者（エレオノール）がどんな顔をするかだけが心配ですが、正直彼女なら大丈夫だと信じています。

「僕がラスティン様の子供に？　僕は母さんと、見たこと無いけど父さんの子供なんだよ？」

「ああ、義理の息子とか養子とか言っても分からないかな？」

「ごめんなさい、でも何故僕を”ようし”にしたいんですか？」

「そうだね、君には何か縁を感じるんだ。これだと分からないよね、そうだな、ベルさんが君と僕を会わせてくれたんだと思うんだ」

「母さんが？」

「そう、ベルがだよ」

あれ、今何かが一瞬意識を過った気がします。何故か懐かしい感じがしました。

「じゃあ、ラスティン様が僕の父さんになるのかな？」

「そうだよ、ライル！」

ライルとだけ呼ばれた事が、意外だったのかライルはくすぐったそうな表情をして、

「えっと、あの、と、父様」

と呼びかけて来てくれました。それ程長い時間を過ごした仲では無いのですが、”父様”と呼ばれて違和感を感じなかったのは、紛れも無い事実です。

「ライルの好きなように呼んでくれて構わないよ。ライルは、レーネンベルクに着いたら何をやりたい？」

「はい、魔法学園でメイジとしての修行をしたいです。それに、公立学校と言うのにも興味があります」

ライルが目を輝かせる様に答えてくれましたが、僕は1つ不安に思うことがあったので、思い切って尋ねてみることにしました。

「ライル、酷い事を聞くけど許しておくれ。ライルはベルの仇をとりたいと思わないかい？　いや、ベルを殺したゲルマニア兵を魔法の力で同じ目に合わせたくならないかい？」

「仇で分かります、この前教えてもらったから。でも、母さんが魔法の力は他人の為だけに使いなさいって言ってたから、絶対にそんな事はしません！」

ライルからは、思った以上の返事が返って来ました。その返事を聞いて、僕は思わずライルの事を思いっきり抱きしめてしまいました。

「痛いです、ラスティン様」

「何かな、ライル君」

僕はわざと腕に力を込めましたが、ライルは何故か嬉しそうに声をあげました。

「痛いよ、父様」

「そうか、済まなかったね」

正しい呼び名を聞いて、直ぐに腕の力を緩めました。ライルの意外な聡明さを知って、ベルさんと言う女性に興味が湧きましたが、今ライルにベルさんの事を聞くのは、酷な事なのでしょうね。いずれ機会があれば聞いてみたいと思います。

第八十一話　ラスティン２１歳（魔法兵団来る：国軍到着）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／３／１６
ルビ修正

第八十二話　ラスティン２１歳（魔法兵団来る：帰還）（前書き）

第八十二話ＵＰします。

第八十二話　ラスティン２１歳（魔法兵団来る：帰還）

「何でしょうね、この状態は？」

僕は、半ば圧倒されるような気分で、こう呟きました。こんな話の始め方をしても分かってもらえないと思うので、少し時間を遡って説明をしましょう。

ライルを連れて、彼の住んでいた家に戻ると、おおよその引越し準備が終わっていました。持ち出せるものはすべて持ち出したという感じですが、まあ問題はないでしょう。後はライルの身の回りの品だけでしたが、それも直ぐにまとまりました。ライル君の家の事を老人（カルヴィンさんの叔父さん）に依頼して、僕達はワーンベルを目指しました。

荷物があるので、先行している兵団に合流するのは難しい様ですが、レーネンベルク領に入ってしまえば治安も安定しているので、問題はないでしょう。護衛隊と僕とライルで野宿する事になりましたが、ライルはこういった経験が始めての様子で、頻りと大人たちに話しかけて色々手伝っています。比較的年齢の近いニルスと直ぐに仲良くなって、２人でペアを組んで働いている姿は、見ていて微笑ましいものがあります。ライルが魔法学園の事をニルスに聞いているのが印象に残りました。

翌朝、昨晩はしゃぎ過ぎて寝坊してしまったライルの目覚めを待って、ワーンベルへの移動を開始したのですが、昼前頃にワーンベルに着く事が出来ました。そこでは、何故かワーンベルの住人が総出で、僕達を迎えてくれていました。ここで、冒頭に戻る訳なんですが、改めて考えても良く状況が掴めません。

住民は口々に僕のことを、

・レーネンベルクの誉れ
・ライデンの英雄
・ブルーデスの勇者

等と称えているのですが、明らかに情報操作が行われていると思われます。実際今回の騒動で、僕が活躍した場面を思い浮かべるのは、自分自身でも困難だったりします。（全く自慢になりませんが）

護衛隊のガスパードやニルスも、この行き過ぎた歓迎に驚いています。ライルに至っては、僕を尊敬の眼差しで見ていたりします。正直、ライルの視線が痛かったので、ニルスにライルの事を頼んで、速攻で代官の屋敷に逃げ込む事にしました。しかし、僕が英雄だとか勇者だとか呼ばれる機会があるとは思いませんでした。まあ、一生に一度の経験なのでしょうね。

屋敷に入ると、玄関の広間でキアラとマルセルさんとアンセルムが出迎えてくれましたが、その表情は様々でした。

まず、マルセルさんですが、普通の笑顔で迎えてくれました。マルセルさんの顔を見ると、ワーンベルに帰って来たんだなと実感できます。

「ただいま、マルセルさん」

「お帰りなさい、ラスティン様」

そして、アンセルムはというと、ニヤニヤという形容がぴったりの笑い顔と笑顔の中間の表情を浮かべています。明らかに僕が受けた過剰な歓迎の事を分かっている様です。昨日の別れ際の発言もこの歓迎を意識していたのでしょう。そう考えると、昨晩先行していた兵団に追いつけなかったのも作為を感じます。

「・・・」

「俺には一言も無しかよ？」

「ご苦労だった、アンセルム」

「おう」

最後にキアラですが、無表情を装っていますが、何かをやり遂げたという充実感が見え隠れしています。確かに君は色々やってくれたよね？　町の人々の歓迎も、キアラが仕組んだ事なのでしょう、僕に対する心遣いだったのでしょうが、少し納得が行きません。ですが、彼女の力がなければ今の状況が無かったということは、誰よりも僕が分かっています。

「キアラ、助かったよ。本当にありがとう」

「!?」

僕が、お礼を言うとキアラは感極まったと言う感じでした。キアラなら、褒められ慣れているでしょうに、大げさすぎる反応ですね。言いたいことは幾つかありましたが、その様子を見て言葉に出すことを諦めたのですが、この事をしばらく後悔する事になるとは思いませんでした。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ニルスに案内されて、屋敷にライルが来たのはしばらくしてから

でした。その場に居た、キアラとアンセルムに紹介したのですが、少し面白いものを見ることが出来ました。
　またもやニヤニヤとして僕に何か言おうとしていたアンセルムに対して、ライルが、

「お話は聞いています、ライデンの町を救ってくれてありがとうございます。アンセルムのおじさん」

と元気に挨拶しました。その時のアンセルムの表情は見物でした。特に年齢を教えなかったのが原因なのでしょうが、子供の目にはアンセルムは十分に”おじさん”に見えた様です。まあ、ライデンの町の郊外での戦闘を子供向けに分かり易く話したので、ライルの中で立派な指揮官というイメージでも出来ていて、それが原因での”おじさん”発言だったと思います。アンセルムに説明してやる積りはありませんが。
　一方キアラは、ライルを紹介してから何だか呆然としていましたが、ライルに、

「よろしくお願いします。お姉さんの名前は？」

と話しかけられた事で、こちらに戻って来た様です。（アンセルムは、更に打ちひしがれていたりします）

「私は、キアラと言います。ライル様」

「あ、いえ、ライル様なんて呼ばないで下さい。僕はただの平民の子供なんですから」

「じゃあ、ライル君って呼ぶわね？」

「はい、キアラお姉さん！」

ライルが笑顔を向けると、キアラの表情が崩れました。僕も見たことに無いような笑顔をライルに向けます。ライルとキアラは、直ぐに仲良くなって、キアラが公立学校の事を色々ライルに話し始めました。アンセルムは、しばらく放って置く事にしましょうか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

当然の事ですが、ワーンベルに戻って来たからと言って、直ぐに平和な日常が戻ってくる訳ではありませんでした。

1. 旧モーランド侯爵領の統治
2. 父上の容態の確認と見舞い
3. クリシャルナへのお礼
4. ワーンベルの状況の確認
5. ブルーデス伯の身柄移送
6. フィリップ４世陛下への報告
7. ライルの進路決定

やるべき事を少し考えただけでも、以上７つも思いついてしまいました。しかも優先順位をつけるのが非常に難しい事ばかりです。落ち着ける日は何時になったら来るのでしょうね？　愚痴っていても、何も進展しませんから、１つずつ片付けて行くことにしましょう。

まず、足元を固める積りで、４からかかりましょう。それからの方針は、マリロットに向かう事で達成出来そうな、２，３，７をこなして、その後、王都に向かう必要がある５，６を何とかしましょ

う。運が良ければ、1も解決出来るかも知れません。
　方針が決まった所で、ワーンベルの町に出て人々の様子を確認しようと思いましたが、いきなり玄関でキアラに捕捉されてしまいました。そのまま抜け出したばかりの執務室の連行されました。うぅ、何でしょうこの扱いは？

「ラスティン様には、書類にサインをするという立派なお仕事があります。町の様子でしたら、私やマルセルさんが報告いたします」

「それじゃあダメなんだ！　やはり色んな人の生の声を聞くべきだと思わないか？」

「・・・、一理ありますね。分かりました」

「それじゃあ！」

「はい、町から人を呼びますので、ラスティン様は執務を続けて下さい」

　そう言って、キアラは部屋を出て行ってしまいました。あれ？希望通りになったはずなのに、釈然としないのは何故でしょう？　それからキアラは文句の付け様が無い人選で町の人達を連れて来てくれました。職人、婦人、子供、戦いに出た兵団員、出なかった兵団員、商人等ですが、概ね問題が発生していないのが確認出来たという結果に終わりました。
　考えてみれば、キアラとマルセルさんが居たのですから、大きな問題が発生するとは考え難いです。さすがに兵団の半分が、長期間居ないとなれば問題になるでしょうが、今回は考えられないほど短期間でしたから、何とかなったのでしょう。そんな事を考えていると、最後の面会者がやって来ました。

「無事で良かったね、ミスタ・マーニュ」

「はい、ありがとうございます、ミスタ・コルベール」

「2人とも大人気ないですよ！　ジャン！」

コルベール先生が、一緒に来たミネットに叱られました。うん、見事に尻に敷かれていますね。まあ、僕もキアラに頭が上がらなくなっているので人事ではありませんが。この2人が来たと言うことは、活躍しなかった例のブツの話でしょうね

「君の活躍は聞きましたよ。ラスティン殿」

「あれはデマですよ、僕が戦いに向かない事はご存知でしょう？」

「ふむ、君は学院に居た頃から、かなり好戦的だったと思うがね？」

あれ？主観の相違という奴でしょうか、何だか嫌な予感がするので、話を変える事にしましょう。

「2人が揃って来たという事は、例の機銃の戦果を知りたかったのでしょう？」

「いいや、あれが”工場”の方に返却されて来て、使われていないのは分かったからね」

「そうです、あれは所詮人殺しの道具、使わないに越したことはありませんよね？」

コルベール先生もミネットも矛盾した事を言いますね。（僕達は戦争をして来たのですが）　補給物資と一緒に機銃を僕に送ってくれたのは、この2人なんですが。数が揃わないので、一応護衛隊に持たせてみたのですが、全く出番はありませんでしたし。

「それなら、何をしに来たんですか？」

「いや、キアラ君に無理を言って、弾丸の作成を頼んだからね、そのお詫びだよ」

弾薬の製造は、工場街を全稼動させてもかなり大変な事です。薬莢や弾丸自体は、難しくないのですが、問題なのは無煙火薬です。専門的になりますが、セルロース自体はこちらでも簡単に手に入ったので、これを硝酸と硫酸との混酸で処理では無く、一結合≪コンポーズ≫で魔法的に基剤になるニトロセルロースにするのは、僕にはさほど難しくありませんでした。本来なら、これに各種の添加剤を加えるのですが、これは固定化を極弱くかける事で、避けることが出来ました。

このニトロセルロース生成や弱固定化の加減などが難しく、扱いも慎重にしなくてはならないというのが、生産性が上がらない要因だったりします。（話が本気で横道に逸れてしまいましたね）

「そういう事ですか、工業品の生産量にほとんど問題は無かったですから、お詫びは不要です。使わなかったとはいえ、心強く感じましたから、お礼を言いたい位です」

「そうか、それなら良かったよ。教え子が戦場に行ったのにこれ位しか出来ないのは、情けないがね」

「ジャン、それよりあの事を」

ミネットがコルベール先生を元気付けるように話しかけました。
あの事と言うともしかして？

「そうだ、例の”竜の羽衣”だが、何とか複製を完成する見込みが立ったよ」

「本当に飛ぶだけですよ？　代用品ばかりですし、無線の方は、まだまだかかりそうなんです」

「本当ですか？　何時飛べます？」

これは、朗報です。ゼロ戦の複製が可能になれば、戦闘だけに限らず色々な可能性を見出す事が出来る筈です。

「まだ、試作段階だからね。実際の飛行実験までは、まだ数ヶ月はかかると思うね」

「数ヶ月ですか、待ち遠しいですね」

「何、意外と早いものだよ。複製が完成したら、やはり量産するのかね？」

「何機かは作りたいと思いますが、それは助手達で出来ませんか？」

「何機か実際に作らせてみれば確実だが、難しくはないだろうね」

「それでしたら、先生達には、もう一歩先を考えて頂きたいですね」

「もう一歩先？」

「はい、例えば、もっと飛行出来る距離を延ばしたり、速度を上げたり、荷物を沢山運べる様にしたりです」

「ほほう」

コルベール先生は感心したように声をあげましたが、ミネットの方は僕の意図に気付いたのか、ニコニコとした微笑を浮かべているだけでした。２人が秘密工場へ戻るのを見送った後、僕は将来の事を考えて急にやる気が出てきた気がしました。

航空機の登場が、この世界にどんな影響を及ぼすのか、空想ではなく現実問題として実に楽しみだと思います。

第八十二話　ラスティン２１歳（魔法兵団来る：帰還）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

無煙火薬に関してですが、結合の魔法で、原子を少しずつ足していくと言うアイデアだったのですが、書いていて面白くなかったので省略しました。

２０１１／０１／２５
大した問題は発生することは－＜大きな問題が発生するとはだげ－＜だが
に修正

第八十三話　ラスティン２１歳（急使再び来る）（前書き）

第八十三話ＵＰします。

第八十三話　ラスティン２１歳（急使再び来る）

1. 旧モーランド侯爵領の統治
2. 父上の容態の確認と見舞い
3. クリシャルナへのお礼
5. ブルーデス伯の身柄移送
6. フィリップ４世陛下への報告
7. ライルの進路決定

そして今日は、気分がすっきりした状態で、2，3，7をこなす為に、自宅に帰って来ました。魔法学園と公立学校に寄っていたので、到着は夜近くになってしまいました。まあ、例の噂がここまで来ているのか、マリロットの住人達の相手が大変だった事もあります。

ちなみにライルは、魔法学園と公立学校に同時に在籍する事になりました。魔法学園の学長クロードさんも、公立学校の理事長のローレンツさんもあまり良い顔をしませんでしたが、ライルが母親のベルから読み書きや簡単な計算を習っていた事もあって、魔法学園に重心を置くことで同意を得る事が出来ました。

ライル自身は、希望が通った事を素直に喜んでいましたが、僕としても忠告しておかなくてはならない事が出来てしまいました。

「ライル、お前は僕の息子と言う事で、魔法学園でも公立学校でも微妙な立場に立たされる事になると思うんだ。魔法学園と公立学校両方に通う様な子供もいなかったから、お前の事を変わった子供だと見る人も居ると思う。それでも、両方に通いたいのかい？」

「あの父様、僕はライデンの町で父親が居ないというので、同じ年頃の子達から変な目で見られて来ました。でも、母さんがいつも、

父さんに誇れる様な人間になれと言ってくれたので、耐える事が出来ました」

「そうか、ベルがそんな事を。うん、ライルならきっと大丈夫だ！ライル自身が決めたことだから、僕は手を貸さないけど、もし万が一何か辛い事があったら、思い詰めないで僕に話してくれるかな？」

「ううん、僕は何があっても我慢して見せるよ。母さんと父様の為に！」

「そうか、ライルは立派だな。でもね、人間には我慢の限界と言うのがあるんだよ、お前もどうしても我慢出来ない時があったんじゃないかな？」

「・・・、はい。でもそういう時は、母さんが、一緒のベッドで寝て一晩中頭を撫でてくれました」

「そうか、じゃあ、どうしても我慢出来ないと思った時は、僕が一緒のベッドで寝てあげるよ。別に、普通に一緒のベッドで寝ても構わないからね」

「はい！」

嬉し恥ずかしのライルを、ここでも僕は屋敷の人達に紹介する事になりました。予め手紙を書いておいた、両親は義理とは言え孫が出来たのに喜んでくれている様子でした。使用人の皆さんは、詳しい事情を知らないはずですが、ライルに暖かい視線を向けてくれるので安心出来ます。

「始めまして、ライル。私はスティン兄の妹のジョゼット、よろしくね」

「うん、こちらこそ」

「そして、この子が私のお友達のテッサ」

「テッサです。よろしくお願いします」

子供達が、こんな感じで行儀良く挨拶をしていました。基本的に、ジョゼットに近付く男性を警戒するテッサもライルには抵抗が無い様です。（一番テッサが嫌っているのは、弟のノリスだというのが皮肉です）

「ライルはスティン兄の養子になったって言う事は、私がライルの伯母さん？」

「そうだね、僕がジョゼットの甥って何か変だよね」

危ないですね、ライルがジョゼット伯母さん何て話しかけなくて良かったです。ジョゼットは気にしていない様ですが、女性はこの辺りに敏感ですから、ちゃんと教育しておかなくてはなりません。子供達は意気投合して、夕食後何処かに遊びに行ってしまいました。大した問題が無くてほっとした所で、夕食に居たもう一人の人物が、話しかけて来ました。

「ねえ、ラスティン？」

「どうした、クリシャルナ？　ああ、君にはきちんとお礼を言っておかなくちゃいけなかったね。父上を助けてくれてありがとう！」

「それはいいわよ。屋敷中の人に何回も言われたから、それより”ようし”ってなに？」

らしくないと思っていたのですが、クリシャルナが食事の間中無口だったのは、これが原因だった様です。エルフ達には養子という習慣がないのでしょうか？　自分の素性はともかくテッサは立派な養女なので、ジョゼットも知っている事を、クリシャルナが知らないのも不思議です。

「君達は、何らかの理由で両親が居なくなってしまった子供をどうやって育てるんだい？」

「え？　それは里全体で育てるわよ？　私達は皆家族の様な物だから。他の里は知らないけど、レイハムではそうよ」

「そうか、それはある意味理想的な社会だね」

「褒めてくれるの、ありがとう。それで？」

「ああ、僕達は孤児、そう両親を失った子供をそう呼ぶんだけど、孤児を引き取って自分の子供と同様に育てる習慣があるんだ。まあ。孤児じゃなくても養子になる場合もあるんだけどね」

「それは、どんな場合なの？」

「テッサがそうなんだけど、母親が再婚して、連れていた前の夫の子供を新しい夫が、自分の子供にするとか言う場合のあるんだ。それに、職人なんかは見込みがある弟子なんかを養子にしたりする場合もあるんだよ」

「へぇ〜、面白い習慣ね」

「そうかな？　でも忠告しておくと、誰かが養子だということを知っても、あまり他の人には話さない方がいいよ」

それから、しばらくは人間社会の機微というのをクリシャルナに教える事になりました。クリシャルナは真剣に聞いていましたが、何処まで伝わるか不安ですね。クリシャルナの質問攻めの後、彼女と一緒に、夕食に来ることが出来なかった客人を見舞う事になりました。

図らずも暗殺者の役目をする事になったベッケル子爵です。僕自身はこの方と面識が無かったのでクリシャルナに仲介を頼んだ訳です。お見舞いの言葉を言うと、子爵は不自由な手足を酷使して、僕にも謝ってくれました。

僕としては、子爵が利用されただけというのは分かっているので、僕の方が謝りたい気分でした。発見が遅くなった為か、真っ先に見舞った父上と違って、子爵の身体には障がいが残ってしまうと母上が教えてくれました。何だか嫌な気分になってしまい、子爵の病室を出て自室に戻ろうかと思った時、屋敷のドアが激しく叩かれました。

執事のラザールが応対した様ですが、慌しく屋敷内を移動していく足音がここからでも聞こえます。隣にいるクリシャルナが、聞き耳を立てています。

「公爵の執務室に向かったみたいよ？」

「僕は行ってみるよ」

「私も行くわ」

僕とクリシャルナは急いで執務室に向かいました。部屋の前に来ると、大き目のノックをして、返事を待たず中に入りました。執務室の中の雰囲気で何か凶事が起こった事を察する事が出来ました。使者らしき人物が、僕達を見て驚いた様子でしたが、父上が頷くのを確認すると話を続けました。

「陛下の異常が判明したのが、今朝になってからでした。侍医の方々が懸命に治療に当たっていますが、予断を許さない状態です。大臣のお一人から、リリア様のお力をお借り出来ないかと、グレン様に依頼があり、私がこんな時間にお騒がせする事になったのでございます」

途中からでしたが、話の内容は大体把握出来ました。クリシャルナを連れて来たのは失敗だったかも知れません。この大事な時期に、フィリップ4世陛下が倒れるなんて最悪の展開です。逆にゲルマニアにとっては、とまで考えてその可能性に気付いてしまいました。思わずクリシャルナの方に顔を向けてしまいましたが、彼女にはそれだけで分かってしまった様です。

「ラスティン、まさかこれも？」

クリシャルナの声に、その場に居た、父上と母上の視線が集まります。

「言われてみれば、あり得ない事ではないな」

「使者殿、グレンは毒殺の可能性を指摘してはいなかったかしら？」

「恐れながら、その通りでございます。リリア様に同行いただけない場合は、告げる様に指示を受けております」

「やはりな、使者の方、少し相談をするので、居間でお持ちいただけますかな？」

「はっ！」

僕は、使者の方に聞いてみました。

「竜籠で来られたのでしょうか？　母上は乗れるとして、後何人乗れますか？」

「はい、無理をさせていますので、後2人が限界かと」

答えた使者の方は、疲れた様子も見せず案内されて居間へと向かいました。僕達は、話を再開しました。

「ゲルマニアの手が、まさか王宮まで伸びているとはな」

「父上、今は人命が優先でしょう？」

「そうだったな、すまないがクリシャルナ殿、三度、我々に力を貸してくれるか？」

「はい、公爵様。これはエルフの問題ですから」

「そうか助かる」

「私とクリシャルナ殿で王宮に向かうとするか」

「あなた、ダメです！　まだ体調が戻ったとは言い切れないのですよ！」

母上の意外と厳しい声が、父上を窘(たしな)めます。そうなると僕が行くしかないですね、母上としても今、父上の所を離れるのは嫌がりそうですし。母上を連れて行かないのは、言い訳しにくい話になりそうな気もするのですが、そうだ！

「クリシャルナ、母上に変装出来るかい？」

「なるほどね、少し待って」

クリシャルナはそう言って、部屋を出て行きました。問いたげな父上と母上の視線を受けて、少し待ちましたが、クリシャルナは直ぐに戻って来ました。手には、以前ちらりと見た、小さな金属の板が握られていました。クリシャルナが母上を見た後、それを額に当てると、そこにはもう一人の母上が存在していました。両親から感嘆の声が上がりましたが、それに答えている時間が惜しいです。

「それでは父上、行って参ります」

「おば様、姿を少しお借りしますね」

「ラスティン、任せたぞ。多少の無茶は私が何とかするからな」

「クリシャルナ、お淑やかにね」

何だか、変な返事が混ざっていましたが、気にせず居間に向かい、休憩中の使者と合流して竜籠で一気に王都トリスタニアまで向かう

事になりました。竜籠に乗るのが始めてのクリシャルナは、緊張気味でした。

「君は、アイラールで来ると言い出すかと思ったよ」

「ラスティン、母親に向かって、その口の利き方はなんですか！」

おっといけませんね、クリシャルナの姿が見えない為かいつも通りに話しかけてしまいました。声の方は騙せませんが、風の音が凄いのでそれほど気にしなくて良い様です。クリシャルナに演技の事を指摘される日が来るなんて、思いませんでしたね。

「すみません、母上」

「何処でも、あの子を飛ばすような事はしませんよ、目立ち過ぎてしまいますからね」

「もしかして、何か嫌な事がありましたか？」

「この国の貴族と来たら」

「母上もその貴族なのですが？」

「そうね、この国の大部分の貴族と来たら」

全然フォローになっていない気がします。うん、クリシャルナはあまり変わっていませんね、ある意味安心しました。愚痴った事で、偽母上の緊張もほぐれた様です。僕はこの時間を使って、少し考え事をする事にしました。

今回の国王暗殺未遂事件も、間違いなくゲルマニア宰相マテウス・フォン・クルークの差し金でしょう。方法は分かりませんが、タイミングがゲルマニアに都合が良過ぎますからね。国王暗殺という事は、綿密な計算の上で実行されたのだと思いますから、随分前から準備を進めていたのでしょう。

どちらかと言うと、謀略を好んで使うタイプの様です。戦略家としても、恐るべき人物だと思われます。ただ、戦術という面では、怖さを感じません。実際の戦争という物を目にした上での感想なので、間違っているとは思いません。

逆に戦術という面では、ナポレオン1世君の方が気になる存在です。あのゴーレムを全面に押し出した戦法（力技とも言いますが）も次回は何らかの対応策を練って来る事が考えられます。正直、この2人が手を組んでいる状態は、怖いと感じます。何とか謀略で、2人の仲を裂けないものかと考えましたが、僕にそれが出来るかという点で疑問があります。

僕自身が謀略に向いているとは思いませんし、部下の中にこの手の話が得意な人材もいません。仮に居たとしても、その人物を使いこなせる自信も全くありません。キアラという部下の手綱も持て余し気味な状態で、そんな部下と付き合っていられないというのが実感です。

第八十三話　ラスティン２１歳（急使再び来る）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／０１／２５
それは，、、－＜それは、
激しき－＜激しく
に修正

２０１１／０１／２７
ライルのには－＜ライルには
に修正

第八十四話　ラスティン２１歳（急使再び来る：王妃の苦悩）（前書き）

第八十四話ＵＰします。

第八十四話　ラスティン２１歳（急使再び来る：王妃の苦悩）

こんな事を考えていると、クリシャルナが、

「ラスティン、貴方なんだか嬉しそうよ？　こんな時に不謹慎じゃないかしら」

と指摘してくれました。僕が嬉しそう？　結構深刻な悩みの事を考えていた積りだったので、驚きです。でも、何だかこんな状況に覚えがありますね。あれは何時の話だったでしょうか？

こんな事をしている間に、竜籠はトリスタニアが見える所まで来ていました。郊外にある通常の竜籠の発着地に着地するかと思いましたが、僕達の乗る竜籠はそのまま王宮の広場に向かいました。その広場は、王宮の兵士等が訓練に使うものらしいのですが、父上の王宮の部屋に意外と近い場所でした。こんな時でなければ、使えない交通手段なのでしょうね。

父上の部屋に入ると、もう明け方に近いのにグレンさんが部屋に詰めていてくれました。僕にとっては心強い味方です。グレンさんには、この母上がクリシャルナの変装であることを告げておくことにしました。グレンさんも、さすがに驚いている様子でしたが、父上も許可している事だと告げると、何処かへ行ってしまいました。僕は、クリシャルナにベッドで少し休む事を勧めました。クリシャルナは素直にベッドへ向かい直ぐに寝入ってしまいました。少し疲れているのかも知れません、これから少し緊張を強いられるので、少しでもゆっくり出来ると良いのですが。

しばらく待っていると、部屋の扉がノックされました。グレンさんが戻って来た感じでは無かったので、扉越しに声をかけると、返って来た声は僕の良く知っている物でした。扉を開けてその人物を、寝室と反対側の執務室に招き入れました。

「エルネスト、やっぱり君も呼ばれて居たんだな。この間は、テティスを遣わしてくれてありがとう」

「それは、いいさ。レーネンベルクから人が来たと聞いたから来てみたんだけど、リリア様は？」

「母上は来ていないんだけど、代理の人物が来ているんだ。今は少し休んでもらっているから、静かにしてくれよ」

「代理だって？　そんな人物を、あの侍医長殿が信頼するとは思えないけどね」

「お前らしくないな？　侍医長が気に入らないにしても、もう少し言い方があるんじゃないのかい？」

「カトレアの治療に手を貸さずに、自分の地位を守る為には臆面も無く協力を要請する様な人間だぞ？」

　エルネストが侍医Ａとか呼びそうな雰囲気に納得がいきましたが、彼がそれで治療に手抜きをするような人間でない事は良く知っています。

「君の言う事は、もっともらしいな。だけど、今は陛下の容態が問題だろ？」

「そうだな、さっきまで僕が治療に当たっていたんだが、あれは拙いぞ。治療の手を抜くと神経が末端から破壊されて行くし、重態化を防ぐのが精一杯だ。テティスの力も効かないし」

「だろうね、あれはエルフ達の毒薬らしいんだ。予め精霊魔法系の干渉は出来ない様に、作られていると思ったほうが自然だろ？」

僕は、事態のあらましをエルネストに聞かせました。

「そうか、君の父上が病気で倒れたと聞いたが、そんな事が。では、その解毒剤は当てになるんだな？」

「それは、僕の両親が保証してくれるよ。だけど、問題が無いわけじゃないんだ」

「問題？　副作用か？」

「いいや、そっちは無さそうなんだけど、治療が遅れると後遺症が残るみたいなんだ」

「君の父上が来れなかったのは、後遺症のせいなのか？」

「いいや、父上は発見が早かったから、手足に痺れが残っている程度だよ。一緒に毒を飲んでしまった方が未だに手足が動かない状態なんだ」

「そうか」

「それと、どうやって解毒剤を陛下に飲ませるかが問題かな？　その侍医長殿は、素直に新種の魔法薬といって解毒剤を、陛下に飲ませる事を同意してくれるかな？」

「無理だね、あれは。だけど、そこは協力させてもらうよ。治療方法の相談をしたいとか言えば乗ってくるだろう」

「頼むよ、エルネスト！」

僕達は、戻って来たグレンさんと、熟睡していたクリシャルナを起して、簡単な作戦会議を行った後、呼び出しに応じる形で、陛下の寝室に入る事になりました。寝室には一人の豪華なドレスをまとった女性と、3人のメイジと、数人の召使いが居ました。

この女性がマリアンヌ王妃なのでしょう、そして3人のメイジの誰かが、問題の侍医長殿なのでしょうね。母上の顔を見て、目を逸らした人物がそうなのだと、確信しました。エルネストが打ち合わせ通り、その人物に近付いて行き、耳打ちをして部屋の外に揃って出て行ったので、僕の直感が正しいのが分かりました。さて、ここからですよ、問題は！

「マリアンヌ王妃殿下、病中の父レーネンベルク公爵に代わり、息子のラスティン・ド・レーネンベルクがリリア・ド・レーネンベルクを連れて参りました」

「ああ、リリア殿良く来てくださいました。お久しぶりですね」

「殿下申し訳ありません、実は母は父の看病疲れで風邪を引いて少し喉を痛めております、代理で私の方がお話いたします。風邪の方はほとんど治っておりますので、お気遣い無く」

「そうですか、早速、陛下の容態を見てくださいな」

「母上、お願いします」

僕に促されて、偽母上が陛下に近付き、容態を確認します。確認を終えると、クリシャルナが僕の方を向いて一回だけ頷きました。

「殿下、どうやら陛下のご病気は、父の物と同様の物の様です。母上の魔法薬が、かなり効果があるのが分かっているのですが、陛下に御飲みいただいて構わないでしょうか？」

マリアンヌ王妃が侍医の一人に視線を送りました。どうやら薬を確認させる様です。

「母上、魔法薬をあの方に」

クリシャルナが例の丸薬を、メイジの手に乗せました。メイジが魔法を使って鑑定した様ですが、問題は見つからなかった様です。そのメイジから、マリアンヌ王妃が丸薬を受け取ると、ゆっくりと陛下の身体を起して口移しで丸薬を飲ませました。その場に居る全員が、陛下の様子をじっと見詰めていました。途中でエルネスト達もそれに加わる形になりました。（まあ、侍医長殿は何か言いたそうでしたが）

そして、今まで通り丸薬の効果は、密やかにそれでも確実に現れました。僕達が部屋に入ってからずっと治癒呪文を唱えていたメイジが、不意に顔を上げて、

「王妃殿下、恐れながら陛下の症状の進行が、止まった様でございます」

「本当に？」

「はい」

そのメイジの言葉に、侍医長殿が自ら、何かの呪文を唱え始めました。彼は何も言わず、マリアンヌ王妃に対して頭を下げただけで

した。マリアンヌ王妃の表情が幾分明るくなった気がします。これで一安心と言った所でしょうか？

「治癒呪文は、出来るだけ続けて下さい。それでは、失礼します」

僕達は、そのまま陛下の寝室を出て、父上の部屋に向かう事にしました。大体打ち合わせ通りに行った様で一安心です。父上の部屋で、僕達が今後の方針を話し合っていると、思わぬ客人を迎える事になりました。客人と言うより、王宮の主と言うべき人物でしたが。

「王妃殿下、王宮内部とは言え、護衛も付けずにこの様な所まで来られては」

グレンさんが、控えめに苦言を述べましたが、マリアンヌ王妃には通用しませんでした。この方も子供の頃はお転婆だったはずなので、何を言っても無駄なんでしょうね。侍女は付いて来ていますが、近衛の姿は見受けられません。多分、撒いて来たんでしょうね。

「国王が王宮内で暗殺されそうになる状態では、護衛も気休めでしょう。先程は、面倒な芝居に付き合せて済みませんでしたね、ラスティン・ド・レーネンベルク、そしてクリシャルナさん」

「いいえ、王家と言えばそれなりに不自由な事もあると存じます」

「まあ、ライデンの英雄殿は随分と理解があるのですね？」

「王妃殿下まで、その様な噂話をお聞きになっているのですか？」

「マリアンヌと呼ぶ事を許しましょう、夫の命の恩人に敬称で呼ばれるのは嫌です。レーネンベルクの誉れそして、ブルーデスの勇者

の噂は、国中に広まっていると思いますよ。貴族達は貴方がわざと噂を流しているのだと断言していましたが、その様子では違うようですね」

マリアンヌ様は僕が顔をしかめたのを見て、笑うように言いましたが、実は不本意な名前で呼ばれた以外に僕が顔をしかめた理由がありました。他の2つはともかく、”ブルーデスの勇者”だけはおかしいのです。ブルーデスはゲルマニア領地でしたし、ここまで速く噂が広まるとは思えないのです。そう、誰かの作為が加わらない限り、そして僕にはその誰かの心当たりがありました。

「キアラの奴、本当にそつが無いな」

思わず口の中で愚痴ると、マリアンヌ様が、

「本当に嫌そうにするのね？　貴方位の年頃ならまだ英雄に憧れていてもおかしくないのに」

と少しだけ笑ってくれました。まあ今更この事でキアラを叱るわけにも行きませんし、マリアンヌ様が笑ってくれただけでも良しとしましょう。それより、今は大事な事があります。

「マリアンヌ様、暗殺未遂の実行犯の方は？」

僕の言葉に、少しだけ和んだその場に再び、緊張が走りました。

「それは、調査を命じたばかりだから・・・。でも、毒見役達が」

「そうですか、さぞ無念だった事でしょう。彼らに、始祖ブリミルの祝福があらんことを」

僕は、ここで冥福を祈る意味と、自分を落ち着けるために1度言葉を切りました。そして、僕が改めて口を開いてその事実を告げると、マリアンヌ様は、

「そんな！　あの人の身体は元に戻らないというの？」

と言ったきり、絶句してしまいました。縋るように、クリシャルナとエルネストに視線を向けますが、2人とも返す言葉が無いようでした。（正確には、エルネストは何か言いたそうでしたが、結局口にしませんでした）

「あの人は、私の夫になって不幸ばっかり背負っているわね・・・」

マリアンヌ様がぽつりと呟きました。

「ごめんなさい、夫の命の恩人に愚痴なんて聞かせてしまって。クリシャルナさん、良かったら本当の姿を見せてもらえないかしら？」

クリシャルナが僕の意見を求めるように、見詰めて来たので、1度だけ頷いて見せます。クリシャルナが変装を解くと、そこには見慣れたエルフの少女が立っていました。

「そう、エルフだったのね。良くこんな所まで来てくれたわね。貴方達の勇気には頭が下がるわ。でも、ラスティン、貴方にはエレオノールという婚約者が居るのに、こんな可愛いエルフの女の子にまで手を出してはダメですよ」

「ぶっ！　マ、マリアンヌ様！」

「ごめんなさいね、嫌な事を言った貴方への仕返しよ」

一瞬とは言え動揺してしまうとは、僕も若いですね。何か軽い冗談でも言い返そうと思いましたが、マリアンヌ様の瞳を見ると、とても言い返せませんでした。変わりに僕は、真面目な話をする事にしました。

「マリアンヌ様、もう嫌な事を言ってしまったので、後、2つ嫌な事を言わせていただきます。今、ゲルマニアとの交渉を行っているのはどなたですか？」

「・・・、陛下がその任をマザリーニ枢機卿に命じました」

「そうですか、では今、マザリーニ枢機卿は大変な状態にあるはずです。何らかの方針を示して差し上げるべきだと思います。私からのお願いですが、枢機卿に”レーネンベルク山脈”とお伝え下さい。あの方ならそれで上手く取り計らってくれるでしょう」

「”レーネンベルク山脈”？」

「もう1つですが、これは私と言うよりこの場に両親が居たら、マリアンヌ様に忠告すると思うことです。過去を振り返って失敗から学ぶことは大事ですが、後悔は意味を持ちません。陛下は命を取り留めたのですから、これからの未来の事を考えて下さい」

「・・・」

「王妃殿下、そろそろ陛下の所にお戻りになった方が、宜しいのでは？」

グレンさんの言葉に、マリアンヌ様は頷くと部屋を出て行きました。一応付いて来ていた侍女達が慌てて後を追いました。

「ラスティン、王妃様って結構偉いんでしょう？　良くあんな事を言えるわね？」

さっきのマリアンヌ様の冗談を気にしていない風に、クリシャルナが呆れた感じで話しかけて来ます。

「まあそうだけど、僕にとって大叔母に当たる方でもあるからね」

「そうなの？　貴方、偉い人だったのね？」

「そう見えないよね？」

「ええ！」

クリシャルナが力強く頷いてくれました。まあ、いいんですけどね。問題は全然発言しなかった、エルネストの方ですが、奴は何かを考えた風で何も告げずに部屋を出て行ってしまいました。クリシャルナとグレンさんが呆れ気味に、エルネストが出て行ったドアを眺めていました。また変なことを思いつかないと良いのですが。

第八十四話　ラスティン２１歳（急使再び来る：王妃の苦悩）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

エルネストが何を考えていたか分かる方もいるでしょうが、そう簡単には行きませんよ。

第八十五話　ラスティン２１歳（急使再び来る：助言）（前書き）

第八十五話ＵＰします。

第八十五話　ラスティン２１歳（急使再び来る：助言）

僕とクリシャルナは、夜を待って王宮を抜け出し、手配された竜籠でトリスタニアを後にする事になりました。本当なら、王立魔法研究所に顔を出してエレオノールやガストンさんの様子を見ておきたかったのですが、クリシャルナを一人にしておけなかった為、次回に回す事になりました。

油断をすると母上の格好で、部屋から抜け出そうとするクリシャルナの気を紛らすのが大変だったというのが実際の所です。まあ、ブルーデス伯爵の身柄を引き渡す仕事と今は無理でしょうが陛下に先の戦いの話を報告する仕事が残っているので、すぐに訪問の機会は有ると思います。

何事も無くレーネンベルクの屋敷に戻り、両親に王宮の出来事を報告しました。両親は、僕の話を真剣に聞いていましたが、マリアンヌ様への忠告のくだりでは何度も頷いてくれました。僕はきちんと両親の意見を代弁出来た様です。目標としてきた両親に少しでも近づけた気がして、ほんの少しですが誇らしく感じました。

我が家に誕生した、子供達の３人組は意外と相性が良かった様で、何時も３人一緒で屋敷中を駆け回っているそうです。僕としては早めにワーンベルに戻る必要性があるので、ライルを両親に任せてる事にしました。魔法学園や公立学校の入学時期がすぐそこに迫っているという事情もありました。

なって早々、父親失格だなと思いながら、この事をライルに告げると少し寂しそうにしながら、それでも、

「父様、お仕事頑張って下さい」

と言って送り出してくれました。本当に良く出来た子供ですね、今

は亡きベルさんに頭が下がる思いです。3人の子供達に屋敷を送り出された僕でしたが、ワーンベルに帰る前にマリロットでやっておくことがありました。

先ずは、レーネンベルクの金庫番セルジュさんの所を訪ねました。まあ予想はしていましたが、空振りでニルスの活躍を話しただけで終わりました。もう悟りましたが、本当にキアラは抜かりが無いですね。

次は、魔法兵団の事務所でしたが、ここは大盛況でした。別に依頼者が列をなしているなどと言う訳ではなく、兵団への入団希望者が列をなしているだけです。ライデンの英雄の名前が広まるに連れて、魔法兵団の名声も今までに無く高まっているのでしょうが、僕としては日和見な平民メイジの皆さんにはそれ程期待はしていません。現に魔法学園からは毎年優秀な平民メイジが、兵団に加入してきますし、公立学校の生徒の方がいかにも昔の平民メイジの感覚を引きずったままの彼らより役に立つのではないかとさえ思います。

列を無視して兵団本部へ入って行くと、後ろから誰かが大声で文句を言ったのが聞こえました。一緒にワーンベルに戻るクリシャルナが不愉快そうに眉をしかめましたが、気にするだけ損なのでしょうね。噂の原因の僕の事を知らない様では、お話になりません。（噂と違っていたとしても僕の実像など、この町なら幾らでも聞く機会があるはずですからね）

兵団本部に入った僕でしたが、思うことがあって1度外に出る事にしました。そして、喧騒に負けない様に大きな声で、

「兵団に依頼のある方は、いらっしゃいますか?」

と本部の外に待っている人達に聞いてみました。案の定、列の後ろの方で、手が上がったのが確認出来ました。

「ガスパード、頼む」

ガスパードやニルスを始め、護衛部隊の皆が依頼者の方々を本部の中に招き入れます。ガスパード達は、兵団員である事を証明するバッジを着けているので、問題が生じる事も無く、依頼者の人達を本部へ入れる事が出来ました。まあ、並んでいた入団希望者の何人かが捨て台詞を残して去る事にもなりましたが、その場の雰囲気はかなりマシな物になりました。（僕は正体が知れ渡る前に本部にこっそり戻る事になりました）

本部の中も人で溢れかえっていましたが、僕は構わず団長室に向かいました。丁度タイミングが良かったのか、すんなり団長室に入ることが出来ました。団長のマティアスが、窓際に難しい表情をして立っています。マティアスに勧められて、ソファーに腰掛けましたがマティアスは立ったままで、表情を変えませんでした。

「さっきの様な振る舞いは上に立つ者としては、失格ですね。もっとこう、いろんな人を受け入れる器量を持っていただきたいですな。無駄に敵を増やすのは、上策と言いかねますしね」

どうやら窓からさっきの一幕を見ていた様です。忠告自体は、確かに耳を貸すに足る物だと思うのですが、表情ともどかしげな口調がすんなりと受け入れ難く感じさせます。また、マティアスが兵団の運用以外でこういう忠告をするのは珍しい事です。

「マティアス、似合わないぞ。それにそういう時は、”清濁併せ呑む”と言うと良いんじゃないかな？」

「やっぱり似合いませんでしたかな？　”清濁併せ呑む”ですか、

何処の言葉ですか？」

「僕も本で読んだだけだからね。それより父上に何か言われたのか？」

「ラスティン様、それは考えすぎと言う奴ですよ。立派に成長された貴方への老人からの苦言だと思って下さい」

「まあ、言葉通り受け取っておくよ。今日は兵団員の配置について相談しに来たんだ」

「やはり、旧モーランド侯爵領に団員を集めるのですか？」

「ああ、あそこはまだ治安が不安定だし、最前線になる可能性は何時でもあるしね。警備隊の兵力は、あそこに集中させたいと思うんだ。ちなみにこれは、僕自身が決めた事だ」

最後はさり気なく言った積りですが、マティアスにはきちんと伝わった様です。

「そうですか、公爵様が・・・。時間の経つのは早いものですね」

「マティアス、簡単に辞められるなんて思うなよ。最低でも後継者の育成と、入団希望者を使える様にするまではお前の仕事だ。ヴァレリーには僕が言うけど、他の副団長にはお前から伝えてくれ」

「昔から思っていましたが、ラスティン様は人使いが荒いですね」

マティアスの表情は、言った言葉と正反対だったりしますが、ここは指摘してはいけないでしょう。マティアスと今後の兵団運営に

ついて話し合った後、僕はやっとワーンベルに向かう事が出来る様になりました。別れ際にマティアスが言った、

「それでは、濁った酒を少しでも澄んだ物にしてきますかな」

という言葉が、少しだけ気になりました。マティアスには学ぶべき事が、まだまだあるのかも知れません。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ワーンベルへは何事も無く移動する事が出来ました。いつもの、執務室の椅子に座ると、最近の出来事が夢の様に感じます。

「平和だね～」

思わずこぼした言葉を、受け流してくれたのはマルセルさんで、受け流してくれなかったのはキアラでした。性格と言うより、人間としての余裕の違いだと感じますね。

「ラスティン様、旧モーランド侯爵領に派遣したマリユスから、助けを求める手紙が来ていますが？」

「それは、財政面をユニスがみると言う事で、解決したはずだろ？もう少しして、兵団の兵力が集まればアンセルムに指揮させる事も話し合ったはずだし、ゲルマニアとの交渉の状況がはっきりしない限りワーンベルを離れる訳には行かないと言ったのはキアラの方だろ？」

「ですが、そんなにだらけられては、皆に示しがつきません！」

失敬な、僕はきちんと仕事をしていますよ。現に今も、書類整理の手を休めてはいません。まあ、気が抜けているのは認めないわけにはいきませんが。僕がこんなに憂鬱な気分なのは、昨日キアラと話し合った今後の展開予想がトリステインにとって余りにも情けない物だったからです。

多分、交渉は、ゲルマニア優位で進んでいるでしょう、国王が倒れた状態でトリステイン側が強気に出られるはずがありません。ギーセンに入った国軍が頑張ってくれれば、取引材料位にはなると思いますが、あの元帥殿の指揮ではそれも見込めません。

マザリーニ枢機卿が、期待通りの働きをしてくれたとしても、得られるのは（表向きは林業位しか産業もない）レーネンベルク山脈のみですからね。ブルーデス伯爵領の人々やゲルマニア正規兵への魔法兵団に対する恐れはかなりの物があると思いますが、それが帳消しになる結果しか思い浮かびませんでした。

結局僕が幾ら頑張ってみても、ゲルマニア宰相の手の内だったと言う訳です。例えは良くないですが、お釈迦様と孫悟空の関係を思い浮かべてしまい、ため息が止まりません。

「はぁ～」

「ラスティン様、そんなにお暇なら他にやる事を考えてみたらいかがですか？」

だから、暇じゃないってば、ですが他にやる事を考えるのは良い事かも知れません。特に、ゲルマニア宰相が嫌がりそうな事が良いですね。しばらく書類整理の手を止めて考え込んでしまいましたが、誰もそれを咎めたりしませんでした。

「キアラ、アンセルムとガスパードを呼び出してくれ」

「はい、ガスパードさんもですか？」

「ああ、なるべく急いでくれよ」

急いでという指示に、キアラだけではなくマルセルさんも慌てて執務室から出て行きました。２人がアンセルムとガスパードを連れて来ると、僕は彼らに指示を与える事にします。

「アンセルム、現在手元にある警備隊の団員だけで構わないから、彼らを連れて、すぐに旧モーランド侯爵領に向かってくれ。後続は数がまとまれば順次追いかけさせるから」

「了解したぜ、警備隊の兵団員の方が慣れてるから、やり易い位だ」

「ガスパード、ゲルマニアのブルーデス伯爵の身柄を王都に移送してくれ。横槍が入るかもしれないから、警備は十分に揃えて行ってくれ。それと、セレナと出来ればカロリーヌの力を借りて、一緒に任務に当たってくれ。君たちも貴族の一員なんだから、親に誇れる仕事をしてくれよ」

「親にね、分かったよ」

「キアラ、言うまでも無いかも知れないが、情報操作を頼むよ」

「お任せ下さい！」

３人からは、明るい返事が返ってきました。（キアラに関しては、嫌味を混ぜた積りなのですが、全く通用しなかった様です）

3人がそれぞれ飛び出して行った後、その場には僕とマルセルさんだけが残されました。僕は、書類整理を再開しましたが、マルセルさんが何か言いたそうにしているのに気が付きました。マルセルさんに視線を向けると、マルセルさんは言い難そうに口を開きました。

「私はただの町の代官に過ぎませんが、ゲルマニア宰相は今回の侵攻で意外と痛手を受けたんだと思いますよ」

「痛手ですか？」

「はい、ゲルマニアとしてはワーンベルへの侵攻はかなり自信があったんだと思います。現に、ラスティン様が無茶な事をしなければワーンベル自体に被害が出たでしょうし、ここの兵団員が曲がりなりにも兵士として訓練されていなければ、これほど上手く反撃やまして逆侵攻など出来たはずがありません。ゲルマニア宰相としてもここまでは予想していなかったでしょう」

「そうですね、でも僕の無茶については、謝罪したはずじゃないですか？」

「ああ、今の無茶は褒め言葉ですよ。ラスティン様が、自分の身を危険に晒してまでワーンベルを守ろうとしたという事実がなければ、錬金を専門にやっているトライアングルメイジの方々が、怖気づかずに戦闘望むことが出来たでしょうか？」

「え？　あの事って、皆が知っているんですか？」

「はい、キアラ君がメイジ達に熱く語っていましたよ？」

「そうですか・・・」

「それともう1つですが、国王暗殺というカードは本当は”切り札”だったんだと思います。そうですね、考えたくはありませんが、王都までゲルマニア軍が侵攻した時とか、この国の半分が占領されたとか言う場合に、最も効果があるカードなのではないかと思います。素人考えではありますが」

「・・・、マルセルさんの考えは一理ありますね。ゲルマニア宰相の手札を減らしたと考えられる訳ですね？」

「はい、手札を全て吐き出させたかは、私などには判断出来ませんが、痛手を受けたと表現をしたのはそこなんです」

僕はマルセルさんの言葉に、ある種の感銘を受けました。そうか、謀略に対抗するには謀略をもってするという考えしか浮かば無かったですが、敵が打って来ると思われる手を先読みして妨害してしまえば、良いのでは無いでしょうか？　まあ、かなり面倒な事だと想像出来ますが、僕の性格に合っている気がしますし、何よりキアラを始めとする部下達の力を引き出し易いと思います。

「マルセルさん、ありがとうございます」

「いえいえ、素人考えで恥ずかしい話ですが、役に立ったなら光栄ですよ」

僕たちは会話を終えると、それぞれの仕事に移りました。先程までの気分と打って変わって、書類にするサインまでもが軽く感じられました。

第八十五話　ラスティン２１歳（急使再び来る：助言）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第八十六話　ラスティン２１歳（勅使再び来る：レーネンベルク家集合）（前書

第八十六話ＵＰします。

別名：修羅場です。ついにあの２人が直接対決します。

第八十六話　ラスティン２１歳（勅使再び来る：レーネンベルク家集合）

それから何日かしての出来事でした、ワーンベルにコルネリウスが単身戻って来たのは。ブルーデス伯爵領で地道な”営業活動”をしていた彼が、戻って来たという事はゲルマニアとの交渉が何らかの決着を見たという事なのでしょう。

「何だ、あの裏切り者は！」

コルネリウスは開口一番言ったのは、こんな事でした。”あの裏切り者”と言うのは、元帥殿のことでしょうね。

「あの元帥殿が何をやったんだ？」

「何をも無いぞ、和平の交渉中に、兵士を撤退させるなんて有り得ないだろ、普通！」

うわ～、予想通りの展開ですね。頼りにならないならまだしも、味方の迷惑になるというのもある意味凄いですね。

「君には、危なくなったら逃げろと、言っておいたはずだけど？」

「その元帥殿は、交渉中のトリスティインの使節も、俺達補給隊にも知らせずに、撤退しやがったんだよ！　気付いた時には、周りは敵じゃない、ゲルマニア軍だらけだったんだよ」

「・・・、それで？」

「ああ、援助した町や村の人達に助けられて、何とかゲルマニアか

ら逃げ出す事が出来たよ。善行は積んでおくものだな」

「コルネリウスだけなら、逃げ出すのは簡単だったんじゃないのかい？」

「舐めるなよ、恩人達を見殺しに出来るか！」

「ありがとう、コルネリウス。それで、トリステインの使節の方はどうなった？」

「分からん、ただ旧モーランド侯爵領には、逃げ込んでいないんじゃないかな？」

「そうか、コルネリウスに忠告しておこうかな。何処でもだろうけど、必ずしも地位に見合った人格の人間しか、その地位に就く事が出来ない訳じゃないよ」

「ああ、身に染みて分かったよ、今回の事でな。今の忠告はもう少し早く教えてもらえると嬉しかったがな」

僕に愚痴る事で気が晴れたのか、コルネリウスは意外とすんなり部屋から出て行こうとしましたが、

「ああ、そうだ、スティン。アルマントから、面白い話を聞き出せたぜ。何でも、クルーク親子は最近、仲が悪いそうだ」

と何気なく重大な情報を教えてくれました。

「それは本当なのかい？」

思わず聞き返してしまいました。ツェルプストー辺境伯側からも、こんな情報は聞いたことがありません。

「ああ、宰相派の中では結構な噂になっているらしいぞ」

「なるほど、外部には極秘なんだな。良いのか、そんな情報を僕に教えて？」

「ああ、今の俺には過ぎた情報だし、お礼も兼ねてだな」

「そうか、ありがたく受け取っておくよ」

コルネリウスは今度こそ、執務室を出て行きました。さて、危惧していた状況になった訳ですが、どう動くべきでしょうか？

「いっそ、もう1度ゲルマニアに攻め込もうか？」

軽く冗談を、キアラに振って見たら、思いっきり睨まれました。そうですね、人命がかかっているので、もう少し真面目に考えましょう。（多分、正解は無い問題だと思えますが）

「アンセルムに命じて、兵団員を国境まで進める事にしよう」

「そうですね、後は使節の方々の才覚次第でしょう」

キアラは答えてくれましたが、自信は無さそうです。こんな特殊な状況は見たことも聞いたこともないので、やはり正解を導き出す事は無理そうです。

「商人の皆さんはどうなんだろう？」

「彼らに関しては、心配はご無用でしょう。危険を承知で商売をしているでしょうし、それ位の才覚が無ければ、大物にはなれないでしょう」

「随分と辛口の意見だね？」

「ああ、これは理事長先生の受け売りです。商人の心得だそうですよ、彼らが心得に忠実であれば良いですが」

「ローレンツさんの？　まあ、ただの商人なら商品は盗られても、命までは盗られないだろうね」

「まあ、商人達は自分の才覚に任せるとして、アンセルムへの指示は至急頼むよ」

キアラは、そのまま執務室を出て行きました、本当に通信方法が欲しい物ですね。結局、トリスティンの使節がどうなったかを知る機会も無く、それから何日か過ごす事になりました。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

今、僕は何故か、あの元帥殿の勇退パーティーとやらに出席しています。何故こんな不本意な状況に置かれているかと言う事を説明するには時間を2日程遡らなくてはなりません。

2日前、前回同様、何の前触れも無く、魔法衛士隊ヒポグリフ隊のエロワさんが、ワーンベルを訪ねて来ました。当然、今回も勅使だったのですが、エロワさん自身も詳細を聞かされていないらしく、

ただ、レーネンベルクの方々を王宮に招きたいと繰り返すだけでした。

「エロワ殿、王宮への招待は承知いたしました。その内容ですと、私の両親や兄弟達も招かれる事になるのでしょうか？」

「はい、レーネンベルク公爵様を始め、家族の方々は既にトリスタニアへ向かわれました」

「そうですか、それでは私も向かう事にしますが、やはりその馬車に乗っていく必要があるのでしょうか？」

「勿論です！　王家の誠意を示す物ですから、辞退することは礼儀に反しますぞ」

エロワさんはまるで威すように、言ってくれました。問題の馬車と言うのは、王家の紋章が入った立派な物だったりします。不敬に当たるかも知れませんが、正直、成人男子が乗るのが恥ずかしい代物です。そして、これに乗るのを断れない状況らしいです。これは今までに無い難問ですよね？

「エロワ殿、私の部下を同行させたいのですが、構わないでしょうか？」

「構いません、レーネンベルクの方を呼び集めるのが、最重要の目的ですから、身元が確かなら例え平民だろうが外国の方だろうが、問題なしとさせていただきます」

ありゃ、先手を打たれましたね、悪足掻きはするなという事でしょう。これ以上抵抗しても、無駄な様な気がするので、素直に諦め

ましょう。前言撤回をするのも、気が引けるので、部下の誰かを連れて行く事にしましょう。

今回の王家からの招待は多分、旧モーランド侯爵領の支配権について話し合うのが目的なのでしょうから、適任は領主代行をやってもらっているマリユス達の誰かが理想なのですが、かなり落ち着いたとは言え、まだ彼らを現場から引き抜く時期ではないでしょうね。この問題は次善の策で、キアラを連れて行く事にしましょう。

それに、クリシャルナも連れて行った方が良さそうですね。陛下の意識が戻ったと言うなら、陛下自身もきちんとお礼を言いたいでしょうし、エロワさんは外国の人間でも良いと断言したから問題無いでしょう。僕は急いで2人に声をかけましたが、クリシャルナはともかくキアラが王都行きを嫌がりました。

何だか言い難そうにもじもじしているキアラは珍しかったですが、その様子を見て僕はキアラが何を気にしているか分かってしまいました。キアラは多分服装の事を気にしているのでしょう、キアラの格好は良く言えば、実用本位でレーネンベルクの家臣らしい物なんですが、王都そして王宮に招待されるには、些か(いささ)不釣合いです。

「キアラ、事情はさっき話した通りだし、服の事を気にしているなら王都に着いてから、プレゼントさせてもらうよ」

「はぁ、分かりました、お供させていただきます。いつまでも、このままと言う訳には行かないでしょうし」

何だか、呆れられた上に意味深な言葉が聞こえた気がしますが、多分駆け引きを試みているんでしょうね。キアラが王族の方を前にして、怖気づくとも思いませんし。そんな事を考えていると、つんつんと背中を突っつかれるのに気が付きました。後ろを振り返ると、何やらニコニコしている、クリシャルナの笑顔が至近距離にありました。フレンドリーエルフの表情が、僕にとある言葉を要求してい

ました。

「勿論クリシャルナにも、服をプレゼントさせてもらうよ。２人には色々感謝しているからね！」

「ホント！　ありがとう、ラスティン！」

本当に嬉しそうなクリシャルナの声を聞いて、さっき感じた違和感が気のせいだと思うことが出来ました。そんなこんなで、何とかワーンベルを出発する事が出来ました。ちなみに、今乗っている馬車は、同行する女性陣にはとても好評でした、まるでお姫様になった気分だそうです。

何日かかけて、王都に辿り着きましたが、その間は精神的に拷問の様でした。今の陛下はあまり地方を巡閲されないそうですが、その原因が分かった様な気がします。ですが、精神的な拷問はそれで終わりではありませんでした。

王都に着くと、気を利かせてくれたエロワさんが、上流貴族向けの服飾店に馬車を止めてくれました。それからの出来事は察してください、王都に近付くにつれて無口になったキアラが喜ぶ姿を見れた事と、クリシャルナの本当に嬉しそうな笑顔が無ければ、悪夢の時間だったと断言したくなります。店の裁縫師が驚異的な手際で、ドレスのサイズを調整してくれました。この辺りは、メイジでは出来ない仕事なので、感心する事しきりでした。

何とか女性陣２人との約束を果たし王宮に入った訳ですが、案内されたのはいつもの父上の部屋ではありませんでした。聞いただけでも結構な人数が集まるはずなので、あの部屋では手狭なのでしょう。エロワさんに案内されるままに進むと、かなり王宮の奥にある部屋に通されました。そこには、正しくレーネンベルク家大集合といった感じでした。

父上と母上は勿論、ジョゼットとテッサも無論居ますし、それと

一緒にライルの姿も見えます。そして、魔法学院で学んでいるはずのノリスも居ますし、何より僕の婚約者のエレオノールの姿まであったいします。問題は家族達が、僕の登場に驚いた様子だった事です。無論、皆は僕を暖かく迎えてくれましたが、何かを隠している感じがします。ですが、僕にはそれを詮索する事が出来ませんでした。

とある2人の間で、何故か物凄い緊張感が走っています。無論、いつものジョゼットを巡ってのテッサとノリスの物ではありません。僕はその緊張感に気付かない振りをして、初対面の人達を紹介してみます。

「エレオノール、事情は良く分からないけど、良く来てくれたね。君には初対面の人が多いから紹介しておくよ。ライルおいで」

「はい、父様」

「聞いたかも知れないけど、この子が僕の養子になったライルだよ。君に相談するのが遅れてごめん」

「いいえ、スティン兄様が決めた事ですから、反対などしませんわ。よろしくねライル、私が貴方の新しい母親になるエレオノールよ、よろしくね」

「あの、貴族の間では、兄弟で結婚出来るんですか？」

「あら、ライルには分からなかったかしら？　何故、私がラスティンの事を、兄様と呼ぶのか後で教えてあげるわ」

「はい、あの・・・、母様」

「まあ！」

ライルお前は、将来大物になるよ。嬉しそうにライルを抱きしめるエレオノールを見ながら僕はそう思いました。次は、誰を紹介しましょうか？

「エレオノール、こちらが両親の命の恩人で、レイハムと言う所に所属している、見ての通りのエルフのクリシャルナ。そして、実はフィリップ４世陛下の命を救ってくれたのもクリシャルナなのさ」

「そうですか、トリステインの国民として、そして義両親の娘としてお礼を申し上げます、クリシャルナ様」

「私の事はクリシャルナと呼んで下さい。替わりにエレオノールって呼ばせてもらうから」

「はい、よろしくお願いしますね、クリシャルナ」

「へぇ～、噂に聞いてたエレオノールが、こんなに綺麗な人だったなんて驚きだね。ラスティンには勿体無いみたい」

「ありがとうございます、クリシャルナも凄く可愛いわよ？　私が心配になる位に」

「私は、こう見えても強いから大丈夫」

クリシャルナは、エレオノールの言う事を誤解した様ですね。今のこの空気も読めていない様ですし、彼女については問題無いようです。問題は、最後の１人の様ですね。

「エレオノール、こちらがキアラだよ。ワーンベルで僕の仕事を手伝ってもらっているんだ」

僕は極力簡潔に、キアラを紹介しました。

「スティン兄様が、いつもお世話になっています、キアラさん」

「いいえ、私こそ、ラスティン様に迷惑をかけっぱなしで」

2人は、こんなやり取りをしただけでした。本当にそれだけだったのに、2人の表情は明暗を分けてしまいました。

第八十六話　ラスティン２１歳（勅使再び来る：レーネンベルク家集合）（後書

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

エレオノールの不戦勝だった訳ですが、キアラが巻き返す日は来るのでしょうか？

本命ｖｓ対抗の陰に隠れた、大穴はどうするのでしょう？

第八十七話　ラスティン２１歳（勅使再び来る：勘違い）（前書き）

第八十七話ＵＰします。

さて、誰が何を勘違いするのでしょう？

第八十七話　ラスティン２１歳（勅使再び来る：勘違い）

そんな空気を見兼ねたのか、父上が、

「ラスティン、お前に頼みがあるんだが」

と言って話しかけて来ました。そのせいで、不本意なパーティーに参加する事になった訳です。（誰ですか、逃げてきただけじゃないか、このヘタレなんて考えた人は！　その通りですよ！）

父上が、あの場から意図的に僕を遠ざける為にこの提案をした事は確かなので、それを無視する訳には行かなかったという実状もあったりします。父上に勧められて、出席したこのパーティーですが、自慢話を続ける元帥殿も、僕に話しかけてくる貴族やその令嬢達にも全然関心が向きません。ダメですね、折角の機会なのですから、きちんと対応しなくては。（これが現実逃避だと言う事は、嫌でも認識されてしまいますが）

元帥殿の話は、終盤に差し掛かっていました。

「そういう訳で、ワシの賢明な判断により、我が軍には１人の被害も無くゲルマニア軍の包囲を抜け出す事が出来た訳なんじゃ！」

まあ、僕と（多分ですが）あの方が、居る前で良く言えるものですね。色々言いたい事もありますが、当事者であるあの方が何も言わないのであれば、僕の出番は無い様です。

「レーネンベルク山脈が、我が国の領土となったのもワシのおかげと言う訳じゃな」

言わせておく事にしましょう、周りの人達もあまり真面目に聞い

ていない様ですし。

「レーネンベルク山脈はやがて、ワシの名をとって、ナラン山脈と名前を変える事じゃろう。がーはっは！」

うん、”これ”は黙らせましょう！　一応、周りの反応を確認しますが、”これ”の発言の問題点に気付いた何人かが、僕の方へ視線を向けています。太鼓持ち風の若い貴族以外は、無関心か不快そうかのどちらかの様です。この状況なら問題無いでしょう。マティアスの忠告が頭に浮かびましたが、”これ”には是非、敵になって欲しいと思うので無視です。

「元帥閣下、少し宜しいでしょうか？」

「おお！　これはライデンの英雄殿じゃないか。君も着ていたのだな、皆さん紹介」

「先程、レーネンベルク山脈をナラン山脈と名前を変えると仰っていましたが、もしかして、陛下にお願いされるのですか？」

「そうじゃよ、退任の祝いに是非、願い出ようと思っておるよ。ゲルマニア風の”レーネンベルク”などと言う名前よりは、ワシの名前の”ナラン”の方が良かろうて」

あれ、今のでは、”これ”には高等過ぎた様です。もう少し、易しく表現しなくてはなりませんね。どうしてあの山々が”レーネンベルク”と名付けられ、祖父が何故”レーネンベルク”の家名を選んだかは知りませんが、僕は”レーネンベルク”の名前に誇りを持っていますから、覚悟！

「”ナラン”ですか、良い名前ですね。それでは、私も父に我が家の家名を”ナラン”に変えるように言っておきましょう」

「なっ！」

「ラスティン・ド・ナラン、中々良い名前ですね。私も近く陛下にお会いする機会がありますので、その折には元帥閣下の提案を陛下にお知らせしておきましょう」

「ひっ！」

”これ”は、慌てた様に席を立って何処かへ行ってしまいました。太鼓持ち風の若い貴族が、僕を睨みつけるようにした後、”あれ”の後を追って行きました。突然の主賓の退場に会場には、ざわめきが起きました。

「兄は体調が優れない様で、中座した様です。皆さんは、しばらくご歓談をお楽しみ下さい」

”あれ”の弟で、このパーティーの主催者メルレ侯爵が、何とかその場を治め様としていますが、まあ無駄でしょうね。メルレ侯爵自身が、すぐに僕の所へやって来て、謝罪をしてくれましたので、僕の方も場を乱してしまったことを謝罪しました。別にメルレ侯爵家に恨みがある訳では無いですし、出来の悪い兄を持った侯爵自身にも同情したくなりました。

弟が家督を継ぐですか、あまり聞かない話ですが、現実に見ると人事とは思えませんね。そんな事を考えていると、ふと閃く物がありました。なるほど、レーネンベルクの人間が集められる訳です。王家の狙いは僕に旧モーランド侯爵領を継がせて、ゲルマニアに対する盾にすると言う訳なのでしょう。婚約者（エレオノール）や弟（ノリス）までもが呼ばれて

いる原因に納得が行きました。
　中々、上手いやり方ですね、この場にいるあの方の知恵なのでしょう。折角の機会ですから挨拶をしておこうと思って、その人物を探すとあちらから声をかけて来てくれました。

「始めまして、ラスティン・ド・レーネンベルク殿」

「マザリーニ枢機卿、こちらこそ始めまして。ご無事を確認出来て、安心致しました」

「いえいえ、ラスティン殿のご助力がなければ、生きてあの地から帰ることは出来なかったかも知れません。本来であれば、すぐにお礼に伺うべきでしたが、遅くなって申し訳ありません。改めてお礼を言わせていただきます」

　枢機卿と呼びかけたのは、正解だった様です。この場で、聖職者の格好をしているのは目立ちましたが、念の為に父上から特徴を聞いていなかったら、確信出来なかったかも知れません。何せ今の枢機卿は、太っているとまでは行きませんが、かなりふくよかな体型だったからです。（コルベール先生が今もふさふさだと言う事を考えると、過大なストレスさえなければ、この人もこの体型のままなのかも知れません）

「お礼を言われる程の事はしていません。ただ、兵団を国境警備に就かせただけです」

「ほう、自慢の魔法兵団を国境警備に就けたのは、ラスティン殿の考えですかな？」

「その通りです、と言えれば良いのですが、部下と相談して決めた

結果です。間違っていなかった様で、正直ほっとしております」

「そうですか。話は変わりますが、先程の騒ぎ、ラスティン殿はどのようにお考えになって、騒ぎを大きくしたのですかな？」

「マザリーニ様も、”無駄に敵を増やす”事をよしとしない方なのでしょうか？」

「はい、有体にいえば、その通りです」

「以前、私もその点について、ある人物から助言を受けました。ですが、今回に限っては故意に敵を作りました」

「故意に？」

「はい、あの元帥殿が味方にするに値しない人物だというのは、枢機卿が一番ご存知でしょう」

枢機卿が、何度も頷いています。やっぱり、不満があるのでしょうね、当然ですが。

「そうなれば、敵かそれ以外にしかなり得ませんが、先程の騒ぎで元帥殿は敵になりました。これは多くの貴族達が知る事になるでしょう、当然私を快く思わない人物があの元帥殿に接触を図るでしょう。それを監視していれば、私の隠れた敵が分かるという事なのです」

「なるほど、そこまで考えて！」

枢機卿は感心していますが、この理由は後付けな気もします。ま

あ、”あれ”が敵に回れば、僕の敵がしなくても良い苦労をするのは目に見えています。監視もキアラ辺りがやってくれるでしょう、彼女が立ち直ってくれればですが。

「折角なので、もう少しマザリーニ様を驚かせてみせましょうか？　貴方が私に接触するのが遅れたのは、私と言う人間を観察する為ではありませんか？」

「！」

「ところで、先程話題に上がった、”レーネンベルク山脈”はどうなりましたか？」

「ラスティン・ド・レーネンベルクの名前は、聖エイジス３１世猊下から聞いていたので、まさかと思いましたが、どうやら王妃殿下の仰った事は事実の様ですな、交渉の落とし所としては、絶好の場所でした」

僕が、レーネンベルク山脈をトリステインの領地として求める事を提案したのは、僕の意識がレーネンベルク山脈に向いていたからだけだったりします。以前、大地の大精霊に風石を集める場所を指定した話と、その場所を聖エイジス３１世である転生者仲間のジェリーノさんに知らせた事は話したと思います。

その聖エイジス３１世から風石に関する”お言葉”が近々出される予定なのです。何故、発表までに、ここまで時間がかかったかといえば、ロマリア側で秘密裏に実際に風石の採掘を行ってみたからだったりします。まあ、僕の手紙だけでは全く証拠にならない訳ですし、外れたでは洒落になりませんから、ジェリーノさんの行動を責める積りはありません。

レーネンベルク山脈で風石が採れるとなれば、ゲルマニアがちょ

っかいを出してくるのは疑い無かったので、何とか先手を打ちたいと思っていたのが、マリアンヌ様に提案した時の事情だったりします。和平交渉を、宰相派か皇帝派かどちらが主導したにしろ、何らかの諍いの種を植えつける事には成功した様です。（謀略と言われそうな気もしますが、可愛い物だと思います）

「もっと、マザリーニ様を驚かせてみせましょう。先程の騒ぎではあの様に言いましたが、トリステインの為であれば、私は喜んでレーネンベルクの名前を捨てる覚悟です！」

「！！」

僕は受身では無く、自分の意思で旧モーランド侯爵領の領主を受ける事を表明しました。枢機卿の表情が僕の読みの正しさを証明しています。

「ラスティン殿、貴方は思ったより恐ろしい方の様ですな。私が陛下にした提案を後悔する日が来なければ良いのですが」

僕がゲルマニアに寝返る事を警戒しているのでしょうか？　有り得ない話ですが、そんなことになったら、トリステインはとんでもない事になるでしょうね。枢機卿の立場であれば、モーランド侯爵の前例もあるので心配しない訳には行かないのでしょう。

「マザリーニ様、その様なことは起こらないと、始祖ブリミルに誓いましょう」

「そうか、そこまで言ってくれるか。ありがとう、ラスティン殿」

枢機卿は、それだけ言うと、足早に去って行きました。その後姿

を見送っていると、後ろから話しかけられました。振り返って見ると、そこには1人の男性が立っていました。別に面識があるわけでも、誰かから人相を聞いた訳でもありませんが、僕ににはその男性が誰なのか分かってしまいました。その男性に付き従うようにしている若者に面識があったからです。（正確には”僕”は面識がありません）

「グラモン伯爵ですね、お初にお目にかかります。ラスティン・ド・レーネンベルクと申します」

「これは丁寧に、ライデンの英雄殿に名前を知ってもらっていると思うと、鼻が高いですな」

「後ろにいらっしゃるのは、元帥のご子息でしょうか？」

「おお、紹介が遅れましたな、息子のデニスです。私の副官の様な事をしてもらっております」

「中々、優秀なご子息だと聞き及んでいます」

「ラスティン殿にそう言っていただけると、些か恥ずかしいですな」

「謙遜をなさらなくても、魔法学院を次席で卒業されたとか。私は、代官の務めが忙しく学院には通えなかったので羨ましいと思いますよ」

「デニス、何をしている、ラスティン殿に挨拶はどうした？」

「デニス・ド・グラモンと申します」

「ラスティン・ド・レーネンベルクです。よろしくお願いします、デニス殿」

冗談もこの辺りにしておきましょう、ミスタ・グラモンの視線が殺気を帯びそうですからね。

「それにしても、先程の騒ぎ、実に爽快でしたな」

「元上司が恥を掻かされたのに、喜んでいて宜しいのですか？」

「あれが上司ですと？　冗談ではない、居なくなって清々すると言う物！」

「父上、その様な事を大声で言うものではありません」

「すまんすまん、それにしてもラスティン殿、私が次の元帥になるとよくご存知ですな？」

「私が、元帥の前にどなたと話していたか、ご覧になったでしょう？」

「なるほど、枢機卿も愚痴をこぼされていたのではないですかな？」

「いいえ、若いとは言えさすが枢機卿まで登り詰めた方です。その様な事はありませんでした」

「そうですか、それにしても今回は残念な結果でしたな？」

「残念な結果とは？」

「私も、陸軍元帥になった者、裏の事情は心得ているますよ」

「そうですか、ですが現状では、最善の結果だと思います」

「なんと！　国軍がもう少し頑張っていれば、ブルーデス領は勿論、もう2，3の領土をゲルマニアからもぎ取れたはずだ！」

おっと、この人は、”命を惜しむな、名を惜しめ”を地で行く人だったんですね。玉砕しては元も子も無いでしょうに。

「元帥の考えは一理あると思います。ですが今回の場合、私も最終的には、元元帥殿と同じ事を選択したと思います」

「そんな事では、国は守れんぞ！」

「元帥閣下、私がゲルマニアに逆侵攻する際に、作戦を立案する部下に要求した事が1つあります、それは何かお分かりになりますか？」

「むぅ」

「デニス殿は、いかがですか？」

「もしかして、味方の犠牲をなるべく出さない様にでしょうか？」

「ほぼ正解です。私は、”敵も味方も出来るだけ犠牲者を出さない作戦”を立案するように要求しました」

「「はぁ？」」

グラモン親子が揃って呆れた様な声を出します。まあ、尤もな反応なのでしょうね。

「こう考えていただけないでしょうか？　玉砕覚悟で最後までゲルマニア軍を苦しめたとします、その時に両国の関係はどんな事になっているでしょう？　それが本当に、トリステインの為になる事でしょうか？」

「ほう！　さすがは、ライデンの英雄殿ですな。考える事が常人のそれと異なる様だ。ですが、このグラモン伯爵、今の言葉に感銘を覚えましたぞ。単なる理想論と片付けるのは簡単だが、ラスティン殿はそれを実行してみせたのだからな！」

「いいえ、その功績は作戦を考えた部下と、実行した兵団員に与えれるべきものです」

「謙遜が過ぎると嫌味ですぞ？」

何だか、この人も僕を美化しすぎている気がします。この思い込みの深さが、グラモン伯爵家の特徴だったりするのでしょうか？結局、誤解を解く事が出来ずに、所用があるというグラモン伯爵と別れる事になってしまいました。

第八十七話　ラスティン２１歳（勅使再び来る：勘違い）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

枢機卿のある台詞が、非常に意味深いのですが、今はどなたにも分からないでしょうね。九十話を読み終わった後にもう一度読んで貰えると何か閃くかも知れませんよ？

第八十八話　ラスティン２１歳（勅使再び来る：衝撃の言葉）（前書き）

第八十八話ＵＰします。

第八十八話　ラスティン２１歳（勅使再び来る：衝撃の言葉）

さて、グラモン伯爵はこの場を去った訳ですが、デニスは言いたい事があるのか、そのまま残っていたりします。

「デニス、君の学院での活躍は弟から聞いているよ。何でも今は、愚弟と君の弟とワルド子爵の息子で、”守護者”を盛り上げているそうじゃないか？」

「やっぱり僕を騙したんだな、ミスタ・マーニュ！」

随分懐かしい呼び名ですね。事情を知った人からこう呼びかけられるとは思いませんでした。

「スティン・ド・マーニュは、魔法学院卒業と同時に居なくなったんだ。彼が、エレオノールと会う事は永遠に無い。誓いは果たされたと言う訳だけど？」

「くっ、詭弁を！」

「確かに詭弁だね、たが君は、エレオノールが僕という婚約者を持ちながら、他の男性と陰で付き合うような女性と決め付けた事になるんだが、その点はどうなんだい？」

「！！」

僕が対ミスタ・グラモン用に用意しておいた、問いかけをします。返す言葉も無いという事は、もしかすると。

「デニス、君もしかして」

「黙れ！　貴方が”スティン・ド・マーニュ”だろうが、”ラスティン・ド・レーネンベルク”だろうが構わない！　今、ここで誓え！　2度とエレオノール様に涙を流させないと！」

この時、僕が考えたのは、デニスがエレオノールを泣かせる様な事を言った（多分告白をして失敗してのでしょう、その時エレオノールが何を感じたのかは分かりませんが）事実よりも、僕の行動でエレオノールが泣いたという事でした。そして、彼女は今も1人で泣いているのかも知れないと気付かされました。

「デニス、ありがとう！」

僕は、それだけ言って駆け出しました。後ろでデニスが、

「逃げるのか、誓えよ！」

などと言っていますが、無視です。僕が誓うべきなのは、エレオノール対してだけです！　今すぐ、エレオノールの所へ飛んで行きたい気分ですが、場所が王宮では文字通り飛んで行く訳には行きませんでした。許可無く王宮の周りを飛ぶ事は禁止されていて、罰則まであると言う事なので、僕は行きと同様王宮の馬車で王宮に帰る事にしました。

気持ちだけが急いて、何をしたか良く覚えていませんが、無事に例の王宮の奥の部屋に着く事が出来ました。一応ドアをノックしたのですが、返事が無いので恐る恐るドアを開けると、そこには1人でグラスを傾ける父上の姿がありました。父上が1人でお酒を飲んでいるのを見るのは始めてかも知れません。（どちらかと言うと、

誰かと2人で何かを語り合いながら、飲むのが好きなタイプなんじゃないかと思います）

「ラスティン、帰ったのか、早かったな」

「はい、少し用事を思い出したので」

「少し話がある、そこに座りなさい」

「僕は用事があると言いましたが！」

「いいから、座りなさい。すぐに終わる話だ！」

父上が、らしくなく声を荒らげたので、黙って対面の椅子に腰掛けます。まあ時間をかける積りはありませんが。

「枢機卿にお会いしましたよ。今日のパーティーは、仕組まれた物だったんでしょう？」

「・・・」

「僕は、あの方にこう言いました。”トリステインの為であれば、私は喜んでレーネンベルクの名前を捨てる覚悟です！”と」

父上が、驚いた様に椅子から一瞬腰を上げましたが、すぐに力が抜けたように座り込んでしまいました。そして、何処か空元気を感じさせる口調で、

「そうか、そこまで決心したか。では、レーネンベルク家の当主として、我が家の総意を伝えるとしよう。ラスティン・ド・レーネン

ベルク！　私達はお前の選択を支持して、これからも支えて行く積りだ」

「はい、ありがとうございます。で、彼女は何処ですか？」

「お前な、父と子の感動の場面だというのに。キアラ君なら、張り切ってワーンベルへ帰って行ったぞ？　クリシャルナ殿なら、子供達と遊んでいるんじゃないかな？」

「ち～ち～う～え～」

「父親を脅すな。エレオノールなら、リリアが相手をしているよ。多分この部屋の2つ左の部屋にいるだろう」

キアラが何故張り切っているのか？とか何故エレオノールが居る部屋が分かるのかとか問い詰めたい所ですが、今はダメですね。僕はそのまま、問題の部屋に向かいました。部屋の前で深呼吸して、ドアをノックすると中から母上の返事がありました。名乗って部屋に入ると、部屋には大きめのベッドが置かれていて、そこに母上とエレオノールが並んで座っているのが見えました。

「母上、エレオノールをお借りしたいのですが、宜しいでしょうか？」

「構わないわよ」

母上はそう言って、僕の方に近付いて来ると、背伸びをして僕の髪を整えてくれました。そして、少し微笑むと、そのまま部屋を出て行ってしまいました。どうやら気を使われた様ですね。僕は母上に替わって、エレオノールがの横に腰掛けます。

「エレオノール、デニスに会ったよ」

「デニス様ですか？」

「ああ、君にはミスタ・グラモンの方が分かりやすいかな？」

「まあ！」

エレオノールは何かを思い出す様に軽く苦笑しました。彼女の中で、デニスの事がどの様に消化されたのか分かりませんが、少なくとも辛いだけの思い出では無くなった様です。僕としても、この歳になってデニスに決闘を申し込む様な事にならなくてほっとしました。

「そのデニスにね、”２度とエレオノール様に涙を流させないと誓え！”と言われたよ」

エレオノールは何かを期待するように、僕の話の続きを待っています。

「勿論、彼にそんな誓いはしなかったよ」

「はい？」

エレオノールが可愛く呆けた様な声を出しましたが、僕は真っ直ぐエレオノールの目を見ながら肝心な言葉を口にします。

「エレオノール、今、君に誓うよ。２度と君に涙を流させないと！」

「！！」

エレオノールの顔が見事に真っ赤になりました。それを見て、僕も自分の気障な台詞が恥ずかしくなって来てしまいました。慌てて、目を逸らしましたが、目に入ったのは大き目のベッドだけです。ここが寝室だと言う事と、今は、エレオノールと2人っきりだと言う事が意識されて、落ち着き無くなりました。

エレオノールに意識を戻すと、僕に軽く身体を預けて来ています。これはもしかしなくても、”覚悟完了”というやつなのでしょうか？　シチュエーションとしては問題無いですし、婚約者同士であれば、今まで以上の関係を結ぶ事に何の問題も無いはずなのですが、何故か僕は手の震えを覚えました。

僕は何かを恐れている？　原因の分からない恐怖に、答えを求めてもう1度辺りを見渡すと、母上が出て行ったドアから少しだけ光が漏れているのが分かりました。僕はそれに縋るように、荒々しく立ち上がりドアを思いっきり開けました。

まあ、予想通りの風景が広がっていた訳ですが、3人の子供には絶対早いと思いますし、何故かクリシャルナまで居るのですが、これはどうしましょう？

「こほん！」

僕が軽く咳払いをすると、その場の皆が蜘蛛の子を散らすように、近くに部屋に逃げ込んで行きました。改めてドアを閉めて、エレオノールの元へ戻ります。エレオノールは少しだけ残念そうな表情だった様な気がします。（エレオノール、ごめん。僕がヘタレなせいで！）

「エレオノール、父上に聞いたと思うけど、君には迷惑をかける事になると思う」

「はい、覚悟しています。でも、スティン兄様の妻になる以上の地位は望みません」

「そうか、本当にありがとう」

エレオノールの手を握ったまま、しばらくそのままで過ごしました。また、妖しい雰囲気になる気がしたので、少し話題を変えてみます。

「今後の僕達の為に1つ聞きたいんだけど、今日僕が連れてきた2人の女性についてなんだけど。何故、君は、キアラだけにあんな君らしくない反応をしたのか教えてくれないかな？」

これを以前エレオノールに言ったら、機嫌が悪くなったのであまり言いませんが、彼女は基本的に臆病だと思います。エレオノールは始めて会う人に怯える（あるいは警戒する）傾向があるのは、昔から気付いていたことです。エレオノールは初対面の人に対して、かなり上品に振舞います。これ自体はおかしくないですが、彼女はそれに対する相手の反応を観察しているんだと思います。

魔法学院時代の彼女の同級生達が、エレオノールの事を近付き難いと言っていたのは、この辺りが原因だと思います。エレオノールにもちゃんと友人がいますし、何人か会ったことがある友人達もエレオノールの事をよく理解していました。エレオノールはきちんと自分で友人を選び、その選択は間違っておらず、友人関係を築くことに成功したわけです。このような、理性的でありかつ勇気も伴う友人関係の構築方法を、不器用だなと思いながらそれでも愛おしいし、尊敬もしています。（エレオノールも僕に対して同じ様に感じているのでしょう）

そんなエレオノールが、キアラに対して最初から好戦的な態度を

とったのが、正直信じられない思いです。何が、エレオノールにここまでさせたのでしょう。いや、原因が僕に関係することは理解していますが、全く納得行かないと言うのが正確かも知れません。

「だって、あの方も私と同じなんですもの！」

何だか、エレオノールが急に幼くなった感じの発言をしてくれます。はて？キアラがエレオノールと同じですか？

「ごめん、全く分からないんだけど」

「もう、あの方も兄様の事が好きだって事です！　こんな事言わせないで下さい」

エレオノールの言う事は本当らしく聞こえますし、キアラに対する態度からも納得が行きますが、ほんの少しだけ考えただけで、僕は否定的な結論に達しました。総合的に見て、僕はキアラから恋愛感情を向けられた事が無いと断言出来ます。ですが、これはエレオノールの推測を覆す材料にはならないでしょうね。少し切り口を変えてみましょう。

「少し変なことを聞くけど、クリシャルナとキアラのどちらが美人だと思う？」

「それは、勿論、クリシャルナさんですね」

「そうだね、君は短い間だったけど2人と会った訳だけど、どちらが僕と仲が良いと思った？」

「そうですね、クリシャルナさんでしょうか？」

「そうか、じゃあ、クリシャルナとキアラのどちらがより僕を好きだと思うかな？」

「絶対、キアラさん、あの人です！」

うーん、力強く断言されました、誘導失敗です。〝女の勘〟と言う物はどうやったら、覆す事が出来るんでしょうね？

「あの、そう言う事じゃないんです。クリシャルナさんも兄様に対して好意を持っていると思いますよ。ですけど・・・」

エレオノールは、少し言い淀んだ後、とんでも無い事を言ってくれました。

「兄様は小さな〝子〟が、お好きなんですもの！」

僕の頭の中に、今のフレーズがエンドレスで響き渡っています。

〝兄様は小さな〝娘〟が、お好きなんですもの！〟
〝兄様は小さな〝娘〟が、お好きなんですもの！〟
〝兄様は小さな〝娘〟が、お好きなんですもの！〟
・　・　・

僕が受けた衝撃を表現するのは凄く難しいです。例えるなら、子供の頃から仲の良い幼馴染に〝貴方ってロリコンよね〟なんて言われた事があるノーマルな男性なら、少しは理解出来るかも知れません。（女性の場合は〝君ってショタコンだよね〟と言われたと思っ

て下さい）

エレオノールの場合、幼馴染の上に、婚約者で、好きな女の子で、理想の女性像だったりするので、僕が受けた衝撃の大きさを表現する言葉は地上に無いと断言出来ます。動けなくなった僕に気付かずに、エレオノールは言葉を続けています。

「だってそうじゃないですか、カトレアの病気は熱心に治療して下さったし、ルイズには自分の手で杖の材料の枝まで取りに行ったでしょう。ジョゼットちゃんや、テッサちゃんだったそうです。それにライル君を勝手に養子にして来ちゃうし」

ライルの所で、やっと呪縛から解放されました。あー、吃驚しました、エレオノールには僕自身も気付かない性癖が見えていたりするのかと本気で思ってしまいました。

第八十八話　ラスティン２１歳（勅使再び来る：衝撃の言葉）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／４／２３
エレオノール言ったら－＜エレオノールに言ったらに修正

第八十九話　ラスティン２１歳（勅使再び来る：前夜）（前書き）

第八十九話ＵＰします。

え？　言葉責めの話ですよ？

第八十九話　ラスティン２１歳（勅使再び来る：前夜）

エレオノールによる衝撃の発言がまだ尾を引いていますが、何とか言葉を吐き出します。

「エレオノール、確かに僕は人より庇護欲が、旺盛な所があると思うよ。そうじゃなきゃ、公立学校なんて作らないからね」

「それだけではありません。兄様は多分小柄な女性も好きなはずです！」

凄く断定的な発言でしたが、僕の頭をジョゼフ王子の”使い魔”カグラちゃ、ごほん、カグラさんの事が過りました。（不本意ですが、眼鏡を送った時のキアラの事もです）

これは認めない訳にはいきませんね、言われて考えてみれば、小さな子供や、小柄な女性に対する庇護欲は自分自身の身長に対するコンプレックスだったのかもしれませんね。（こんな所まで、エレオノールにはお見通しなんですね）

ですが、その事は簡単に振り切る事が出来ます。例えは悪いですが、エレオノールとカグラさんのどちらかを選ばなくてはいけない時が来たとしたら、迷わずエレオノールを選ぶ自信があります。（こんな事にならない様に生きて行きたいと思いますが）

これで、さっきからエレオノールが何だか幼い感じの行動をしている理由が分かった気がします。これはこれで、ずっと見ていたい気がしますが、そういう訳にはいきませんね。

「エレオノール、それで君はさっきから、幼げに振舞っているのかい？　もしそうなら、それは逆効果だと思うよ。僕にとっての理想の女性である君が、そんな風では、僕は本当に幼い女性を好きにな

ってしまうかもしれないよ？」

「そんなのダメです！　あっ！」

「ん？」

「あの、スティン兄様、先程のお言葉もう一回言っていただけませんか？」

「さっきの言葉かい？　僕にとっての理想の女性像が君だって事かな？　それとも、僕が女性を見る時に、エレオノールを基準に考えている事かな？　これ位だったら、何時でも何処でも何回でも言ってあげるよ！」

「あうあう！」

エレオノールは何だか妙な声を出しながら、部屋の出口へ向かって、覚束ない足取りで歩き出しました。

「エレオノール、君がこの部屋に泊まって行くんじゃないのかい？」

「い、今はダメですぅ。こんな所に居たら変になっちゃうぅ」

「そんなふらふらして！」

「来ないで下さいぃ。私の家の部屋が近くにあるから大丈夫ですぅ」

エレオノールはそのまま行ってしまいました。ちょっとやり過ぎてしまった様ですが、何とかなったと確信は出来ました。ただ、エレオノールに触れた時の手の振るえだけが不安要素です。あれは、

理想の女性を汚してしまう事への畏れ等と言った物とは違う気がします。今後控えているエレオノールとの生活に不安を覚えてしまいます。

そんな気分だったので、勢いでベッドに横になりましたが、眠れるとは思いませんでした。ですが、ベッドに残るエレオノールの残り香が、僕を優しく包んで眠りの世界へ導いてくれました。意識が落ちる直前に、キアラにきちんと指示を出しておかないといけない事を思い出しました。キアラは何をしでかすか分からないですからね・・・Ｚｚｚ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

そして翌朝になりましたが、昨日の事が嘘の様に穏やかに始まりました。爽快な気分でベッドから起き上がると、僕以外で家族会議が行われた部屋に向かいました。そこには朝食が用意されていて、家族皆が僕の起床を待ってくれていました。起してくれれば良いのにと思いましたが、そのまま空いている席に着くと、朝食が始まりました。

朝食が終わる頃に、エレオノールがやって来ましたが、やっぱり僕と視線を合わせようとしませんでした。それでも、エレオノールが子供達と遊んだり、クリシャルナと楽しそうに話し合っているのを見るのは、目の保養ですね。まあ、エレオノールとクリシャルナが話し合っているのは、風石の利用方法に関する結構専門的な内容だったりしますが、これはこれで平和だったりします。

そんな平和な時間も無粋な客の来訪で、途切れる事になりました。その無粋な客は、僕に作法を教え込む為に、マリアンヌ様が派遣してくれた侍従の1人でした。最低限の宮廷作法なら兎も角、領主就任などという一生一度のイベントに関しては、さすがに自信が無か

ったので素直に作法を習う事にしました。抵抗は無意味でしょうしね。

教えられた作法は、意外と実践的な物でしたが、具体的過ぎて他の機会には使えない気がする物でした。この場に片膝をついて、頭を垂れて聞かれた事に全て”はい”と答えろとか、どんな場面で使うんだよと突っ込みたくなりました。

さすがに基礎が出来ていたので、作法の指導は意外と早く終わりましたが、明日が本番なので今日覚えた事を復習しておくように言われたのには、参りました。明日だけで済むなら、それに越したことはありませんが、随分と急ぐものですね。対ゲルマニアの戦略見直しはそこまで急務なのでしょうか？

僕の新領主就任は対外的に、宣伝してこそ意味がある気がします。僕が断らない事を前提に話を進めていたとしても、遠方からの招待客はどう考えても間に合わないでしょう。ここまで急いでいると言うことは、ゲルマニアのブルーデス伯爵領の新しい領主が決まったのかも知れません。

旧モーランド侯爵領を暫定統治している部下のマリユスなら、何か噂を聞いているかも知れませんが、今の所、僕の所に報告は入っていません。そうだ、父上なら何か知っているかも知れません。のんびり、部下のグレンさんと酒を酌み交わしている父上に、早速聞いてみる事にしました。

「父上、少し宜しいでしょうか？」

「構わないぞ、見ての通り暇な状態だからな」

「あのご存知でしたら、ゲルマニアのブルーデス伯爵領の新しい領主が誰なのか、教えていただけますか？」

「その話なら、グレン」

「はい、王宮での噂ですが、どうやら、あの”モーランド侯爵”らしいのです。王宮の方々もかなり驚いていらっしゃると聞いています」

「なっ！」

選りに選って”モーランド侯爵”ですか、ゲルマニア宰相の怖さをまた知ることになった気分です。自分が治める土地の事を良く知っている領主が、敵国の隣り合う領地の領主となるなんて、領主としてはほとんど悪夢じゃないでしょうか？

「お前も苦労するな」

父上は、面白そうにそんな事を言ってくれます、まるで他人事です。

「レーネンベルク家からの手助け、期待させていただきますよ」

「すまんすまん、お前を全面的に支援すると言っただろう？」

「はい、期待させていただきます」

「そうだ、グレンさん。侯爵が伯爵領で満足したんですか？　それと、ブルーデス伯爵公子はどうなったか知っていますか？」

「領地に関しては、どうやら隣の領地と合わせる事で、相当な広さの領地になったらしいです。貴族の方は、”うまくやった”などと言う方も居るそうですが。公子に関しては、何処かに子爵として封

士されたとか、聞いた気がします」

「そうですか」

「まあ、あまり悩んでも仕方ないだろう。お前は明日の儀式の事だけ考えればいい。どうだ一杯やるか？」

「はい、一杯だけですよ。儀式の主役が二日酔いでは、格好がつきませんからね」

酔い潰す気が見え見えの父上に、一杯だけ付き合って早々に寝室に篭る事にしました。色々考える事があったからですが、”モーランド侯爵”の事でも頭を悩ます事になるとは思いませんでした。どちらにしろ、最優先で考えるのは、新しい家名なのでしょうね。本当ならエレオノールの意見も聞きたい所なのですが、クリシャルナを連れて王立魔法研究所へ向かったままこの時間でも帰って来ていません。

結局頭を悩ませても、あまり良いアイデアは思いつきませんでした。変に捻らず、マース川という川が流れていたと記憶しているので、”マース”と名乗るのが良いかも知れません。

「ラスティン・ド・マース、エレオノール・ド・マース、それに、ライル・ド・マースか・・・」

口に出してみましたが、何となく、しっくり来ない気がしますね。まあ、使っているうちに馴染んでいくものかも知れません。マーニュを名乗っていた時もそうでしたから。結局夕食が済んで、そろそろ寝ようと思った頃になって、クリシャルナだけが帰って来ました。

「あら、ラスティンこんな時間まで待っていたの。エレオノールな

ら自分の部屋に戻ったわよ？」

「そうなのか、まあ仕方が無いね。ところで随分遅かったけど、何かあったのかい？」

「ええ、やっぱり人間って面白いわ！」

「以前、同じような台詞を聞いた気がするけど？」

クリシャルナは、僕の言うことなど気にしない様子で、今日の実験とやらの事を話してくれました。最初は、クリシャルナの態度に呆れ気味でしたが、話が進むに連れて段々と引き込まれて行きました。風石にこういう使い方があるなんて、思いませんでした。以前であれば机上の空論だったのでしょうが、風石の安定供給が可能になる事が確実な現状ならば、これもアリだと思います。ミネットとコルベール先生に知らせたらどんな顔をするでしょう？

話し終わって満足したのか、クリシャルナが自分の寝室に向かいましたが、１つ気になることがあったので聞いてみることにしました。

「クリシャルナ、君に何か心境の変化があったのかい？」

「心境の変化？」

「そう、あの毒殺騒ぎの間なら、エルフがやった事だと言うんだから、君が治める為に行動するという話は分かるんだけど、今の話はそういうレベルじゃないよね？」

「ふーん、それで？」

クリシャルナは、何だか嬉しそうにしています。（何が嬉しいのか、良く分かりませんが）

「これは推測なんだけど、君は誰かから僕達人間に深く関わることを、禁じられているんじゃないかな？」

「うんうん、それで？」

クリシャルナは、もっと嬉しそうになりました。えーっと、話している内容と、彼女の笑顔の意味が整合しなくて、少し不安になって来ました。ですが、これは意外と重要な事の様な気がするので、構わず話を続けます。

「君と最初に会った時の事を覚えているかな？　あの時、君はローレンツさんからの紹介状を持って来たよね。そこには、君が重要な人物である上に、役に立つ人物だと書かれていたんだよ。そして、あの紹介状は、どうもローレンツさんらしくない書き方がされていたんだ」

クリシャルナは、今度は嫌そうな表情をし始めました。

「僕の推理を言おうか？　君が僕達の世界に興味を持っているのが間違いないのはちゃんと知っているよ。だけど、それだけじゃないよね？　君は僕達を探っていたんじゃないかな、調査が終わって今回の事がきっかけになったと思うんだけど、どうかな？」

クリシャルナは、最終的に真面目な表情になりました。百面相でしょうか？

「大体、正解かな。でも正直ラスティンに指摘されるとは思わなかったわ。貴方は友達だと思っていたんだけどね」

「僕が、君の多分人間の中で一番親しい友人じゃなかったら、こんな事に気付かなかったと思わないかな？」

「それも、そうね。まだ詳しくは話せないけど、少しずつこの国に協力して行く事になったと思ってくれて良いわよ」

そんな事を言いながら、クリシャルナは何処か嬉しそうにしていると感じました。

第八十九話　ラスティン２１歳（勅使再び来る：前夜）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

さて、次回主人公に思わぬ落とし穴が待ち受けています。
運命の第九十話を期待して下さい。

第九十話　ラスティン２１歳（勅使再び来る：当日）（前書き）

第九十話ＵＰします。

さて、運命の日です。

第九十話　ラスティン２１歳（勅使再び来る：当日）

さて、領主就任の儀式当日になりました。

昨晩は、少々緊張しましたが、意外とすんなり眠りに入ることが出来ました。朝一から起こされて、家族とは別にされ、そのまま何だか異様に豪華な服を着せられて、儀式の会場入りする事になりました。髪の毛もいじられ、化粧とまでは行きませんが顔にも何か塗られたりもしました。

まあ、逆らっても無意味なのでされるままでしたが、それだけでうんざりする思いでした。どうでも良いですが、朝食も摂っていないので、お腹が減ったのは困りました。儀式の最中にお腹がなったりしないか、妙なことが心配だったりします。

侍従らしき、立派な髭の老人に先導されて、儀式の会場入りしましたが、そこは昨日と打って変わって多くの人が待ち受けていました。目算ですが１，０００人足らずと言った所でしょうか。当然ですが、すべてが貴族で、ほとんどが夫妻やある程度の年齢以上の子供連れで出席している様です。貴族たちの真ん中を１人で王座へ向かいますが、僕にとってもかなりのプレッシャーです。（あ～、気のせいか胃が痛くなってきました）

玉座には、マリアンヌ様が座っていて、その横には儀式を執り行うマザリーニ枢機卿が立っています。貴族たちの一番前には、僕の家族やラ・ヴァリエール公爵家の人達も確認出来ます。言い方は変ですが、よく知っている人達が貴族たちの視線から僕を守ってくれている様に感じられます。

昨日教えられた通り、僕が玉座に向け片膝を付いて頭を垂れると、枢機卿が進み出て厳かな声で、色々な事を尋ねて来ました。内容に

関しては、領主となるべきものならば心得ておくべき事ばかりだったので、あまり気にせずに言われた通り、「はい」とだけ答え続けました。色々な事を誓わされた訳ですが、その優先順位に関しては、ここにいるほとんどの貴族と違うんだろうな等と皮肉な事を考えるのも難しい事ではありませんでした。

変なことを考えている間に、枢機卿の話も終わりに近付いた様です。枢機卿が満足そうに頷いたのが気配で分かりました。そして、最後の言葉を口にしました。

「良いでしょう、”ブリミル・ル・ルミル・ユル・ヴィリ・ヴェー・ヴァルトリ”の代理人として、そなたのトリステイン王国”副王”に就く事を認めよう！」

「はい～？」

思わず変な声を出してしまいましたが、それ所ではありません。何かの詐欺にかかった気がしますよ！

「そなたでも緊張したりするのだな。心配するな、儀式も、もう少しで終わりだ」

枢機卿が多分苦笑しながら、そんな事を言っていますが、僕の頭の中では”何故？”という言葉が飛び交っています。枢機卿が横にずれて、マリアンヌ様が僕の方へ進み出てくるのが分かりました。動けない僕の頭に、マリアンヌ様が何かを載せたのが分かりますが、それは異常に重く感じられました。

「迷惑をかけて、すみませんね」

マリアンヌ様の声で僕は我に返る事が出来ましたが、その言葉の

意味と込められた思いに、僕は改めて動けなくなってしまいました。正直、嵌められたと感じたのですが、誰もがこの問題を扱いかねていたと言うことは察することが出来ます。”副王”などという存在が必要とされる場面は限られるでしょうし、今がその時だとしたらあまり良くない事態が起こっているのは明白です。（そう口にするのも憚られる事態ですか？）

玉座にマリアンヌ様がいることが、そもそもおかしいのに気付くべきでした。陛下の容態はそこまで悪いという事なんでしょうね。そして、僕が”副王”などに選ばれた理由も分かって来ます。僕は差し詰め操り人形と言った所なのでしょうね。そこそこの名声を持っていて、若く見栄えが良く、王位継承権も持ち、対外的にも名が知れているという様な絶好の条件を兼ね揃えている僕に白羽の矢が立ったのはむしろ自然な事かも知れません。扱いやすいかどうかは、見る人によって異なりますが、多くの貴族が僕を歓迎するとは思えないので、お互い様なのでしょう。

その悪夢の様な儀式が終了して、いつの間にか朝起きたばかりの部屋に戻っていました。頭上の冠をゆっくり外しましたが、その重みが改めて感じられて、取り落としそうになりました。意に沿わない豪華な衣装を脱ぎ去って、いつもの服装に戻るとやっと自分を取り戻せた気がします。

「はぁ、領主じゃなくて副王なんてありえないよな？」

自分自身に愚痴ってみても、事態は全く進展しません。今からでも、そこにある冠（副王冠とでも呼ぶのでしょうか？）をマリアンヌ様に返したいと思いますが、マリアンヌ様の辛そうな一言が耳から離れません。立派な儀式をやってもらっておいてやっぱり止めますは通用しませんよね？　そうか、副王の戴冠式とか王冠とか、あまりにも前例がなくて誰もが困っていたのが、今更分かって来ます。

ふと気付くと、部屋のドアがノックされていました。返事をすると入ってきたのは父上でした。父上は僕に呼びかけようとしたのでしょうが、不意に眉を顰めてしまいました。仕草で、椅子を勧めると、そこに腰掛けたのですがそのまま黙り込んだままでした。

「緊張されましたかな？　ラスティン・レーネンベルク・ド・トリスティン殿」

その言葉に一瞬息が止まってしまいました。色々な想いが胸を過りますが、敢えて僕は今まで通りのままで返事をしました。

「殿は止して下さい、父上」

「そうだな、だが、公の場所では、レーネンベルク公爵と呼ぶんだぞ！」

「はい、ありがとうございます。丁度、誰かと話したいと思っていたんです」

「だろうな、ふぅ、お前ほどじゃないが、私も公爵家を継いだ時には、誰かと話をしたかったからな」

「さすがは経験者ですね」

「それで、本当に”副王”をやって行けそうなのか？　時間が無くて実感が湧かなかっただろうが、今なら実感出来るだろう？」

正直、さっき知ったばかりですと言いたくなりましたが、それは言うべきではないのでしょうね。

「分かりません、まだ夢を見ている様ですから」

「そういう物かも知れんな」

「ところで父上、僕の王位継承順位ってどうなっているんでしょうか？」

誰ですか、往生際の悪いなんて思った人は？

「お前位だろうな、王位継承権を持っていて、順位を知らない人間は」

「それは、父親の教育が良かったからでは無いですか？」

「ノリスはちゃんと知っているぞ？」

「まあ、良いじゃないですか」

「全く！　マリアンヌ王妃，アンリエッタ姫，私，ラスティン，ノリスの順だったな」

「あれ？　僕って二桁だった記憶があるんですが？」

「何時の話をしているんだ？　クルデンホルフ大公国の者達が、独立と引き換えに継承権を放棄しただろう？」

うん、確かにクルデンホルフの事がすっかり頭から抜けていました。僕が王位継承権４位と言う訳ですか、有り得ませんね。もしかして、父上は僕にこの事を隠してくれていたのでしょうか？

「だったと言うと、入れ替わりがあるのでしょうか？」

「そうだろうな、アンリエッタ姫が成人されるまでは、お前の方が高くなる可能性もあるな」

「そうですか・・・」

「その様子では、気付いていないんだろうが、お前はアンリエッタ姫と婚約させられる寸前だったんだぞ？」

「はあ？　でも、僕にはエレオノールが・・・、って、エレオノールはその事を知っていたんですか？」

「勿論だ。だが、私とラ・ヴァリエール公爵で反対したからな」

エレオノールが、必要以上に心配する訳ですね。両公爵には感謝しなくてはいけません。

「今の話からすると、父上は陛下にお目にかかったのですか？」

「お前が気にしているのは、陛下のご容態だろう？　お前が”副王”になった事で、想像はつくだろうが・・・」

父上が一度言葉を切りましたが、表情からは何も読み取れませんでした。命には別状が無いはずですが、深刻な障がいが残ったという事なのでしょう。多分、公務を行えないほどの。

「陛下の両手両足は絶望的だそうだ」

「そうですか、回復の見込みも無しですか？」

「侍医の話ではそうだな」

僕は、文字通り陛下の両手両足となって働く訳ですね。エルネスト辺りが、何か思いついてくれれば、一気に解決する予感もします。

（頼んだぞ、エルネスト！）

「しかし、この部屋も久しぶりだが、変わらないな」

「父上は、この部屋をご存知なのですか？」

「何を言っている、お前のお爺様が使っていた部屋だぞ、以前話さなかったか？」

「お爺様の部屋ですか、記憶にはありませんが、やっぱりレーネンベルクらしいですね」

「まあ、そうかもな。そういえば、今晩は眠れそうか？」

「まだ、眠るには早い時間ですよ？　まあ、眠れそうも無いのは事実ですけど」

「誰か寄越すか？」

父上は何気なく、こんな事を言いましたが、”誰か”が誰なのかは明白でした。ですが、今の状態で彼女に甘える事は出来ないと思います。正直、声だけでも聞きたいとは思いますが。

「いいえ、それには及びません。お酒を飲みたい気分ですね、そう

言えば今朝から食事もしていません」

「そうか？　この部屋付きの召使いも、用意しなければならないな」

「さすがに僕が、厨房へ行く訳には行きませんからね」

「まあ、今日の所は私が誰か捕まえるとしようか」

それから、部屋を移動して、軽くお酒を飲みながら、食事を待ち、それが届いてから本格的に飲み始めました。その晩は、父上と今まで無かった程に熱心に話し合いました。レーネンベルクに残したままの僕の成果をどうするかもこの時に決めました。

各施設は、現状どおり運用を続ける事になります。兵団についても、表向きは今まで通りレーネンベルクに本部を置き、僕の要請で動かす事を許可してもらいました。

第九十話　ラスティン２１歳（勅使再び来る：当日）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

運命の日如何でしたか？　皆さんの予想の斜め上を目指しましたが、想定通りになったでしょうか？

賛否両論あると思いますが、このまま突き進みますので、よろしくお願いします。

２０１１／０２／０９
皮肉な事を考えのも－＜皮肉な事を考えるのもに修正

第九十一話　ラスティン２１歳（穏やかな不安）（前書き）

第九十一話ＵＰします。

第九十一話　ラスティン２１歳（穏やかな不安）

僕は我侭一杯に育てられた、貴族のぼっちゃんそのものです。望んだ事は大抵叶えられてきましたし、その為に両親を始め多くの人が迷惑を被った事は、疑いようがありません。母親には、”手がかかった息子だ”と評されたことさえもあります。僕を良く知る人も、少ししか知らない人も、ほとんど知らない人も、思いはそれぞれでしょうが、色々な表情で肯定する事でしょう。（僕の熱狂的な信奉者などと言うのが存在すれば、別かもしれませんが）

唐突な発言ですが、別に自虐趣味に目覚めたという訳ではありませんから、安心して下さい。副王として如何するべきかを見出す為に自分の過去を振り返っただけなのですが、軽く欝状態になれたのは確かです。まあ、無意味では無かったので、良しとしましょう。全く自慢になりませんが、僕は人から命令される事に慣れていませんし、決して我慢強いとは言えません。（矛盾しますが、蒔いた種の芽が出るのを待つと言う意味であれば、結構気長に待てるんですが）

陛下もそう言う意味では、最悪の人選をしたのだと同情したくなります。それは置いておくにしても、僕の精神衛生上の問題として、言われたことだけを単純にこなして行くのは有り得ないでしょうね。ご褒美があれば、少し頑張れそうな気がしますから、こちらで交渉してみる事にしますか。過去を振り返るのはこれ位にしておきましょう、本気で変な趣味に目覚めそうですからね。

「貴族のぼっちゃんからは、卒業しなきゃならないね。陛下におねだりする立場なんだけどな」

考え方を変えて、副王としての自分の将来について考えて見ます

が、全く光明が見えません。運が良ければ、職務を全うして何処かに領地を与えられて領主となることが出来るでしょうが、悪ければあっさり謀殺されることが有り得るでしょう。特に王家に関わりが深くなれば、最終的に”死”が待っている可能性が高まります。

僕が生き残る可能性を高める為には、王宮内に少しでも味方が必要です。今、王宮に居て未来も僕の味方になってくれそうなのは、父上の部下であるグレンさんしか居ない状態では、謀殺して下さいと言っている様な物ですからね。王宮内になるべく早く、僕の味方を作らなければなりませんが、その方法が問題です。

普通の貴族ならば、親の伝や、魔法学院時代の同級生，先輩，後輩とその親と言った感じで、人脈を広げて行くのでしょうが、父上の伝はともかく、学院時代の伝は全く当てにならないでしょうね。僕も若かったですからね、ですが後悔はしません。僕の友人足りえなかった同級生や、その親が、今の僕に利用価値を見出たとして、手を差し出してきても僕は握り返さないでしょう。（まあ、ダメ息子や娘だったという可能性も考慮しますが）

「味方、味方と・・・」

そんな訳で、僕は自分の手で、味方を作り出す必要性を強く感じます。別に深く考えることも無く、僕の４人の部下と護衛隊の人達を呼び寄せる事が頭に浮かびましたが、彼らをどう扱うかが問題になってきます。僕の直属の部下として動かしても良いですが、キアラ、ユニス、マリユス、アンセルムをその程度の使い方が出来ないのでは、成り立て副王としても情けなさ過ぎます。

それなら、いっその事、彼ら向きの部署に放り込んだ方が良い気がします。あの４人ならば、十分な成果を上げてくれるという確信もあります。

「そうなると、人事への干渉する権力が要る訳だ」

ふぅ、独り言が多くなりますね。副王とはいえ、王は孤独な物なんでしょうか？　誰も見ていないのに、格好をつけてみましたが、空しいですね。そんな事を考えていると、部屋のドアがノックされました。

「あの、ラスティン様、陛下がお会いに下さると知らせが入りましたが？」

「あ、そうですか。直ぐに行きます」

知らせを持ってきてくれた、召使いの１人が妙な顔をしていますが、気にしてはいけない所なのでしょう。僕は、迎えに来た侍従の１人に先導されて、陛下の病室に向かいました。さあ、お見舞いと言う名の交渉の始まりですよ！

＝＝

陛下の病室（といっても、前回来た陛下の寝室の呼び名が変わっただけなのですが）に入ると、穏やかな昼下がりと言った言葉が似合いそうな雰囲気で満ちていました。

ですが、ここは間違いなく陛下の病室です。中央に置かれたベッドの横ではマリアンヌ様が陛下のお世話をするために、椅子に座っているので間違いはないはずです。マリアンヌ様が部屋に入ってきた僕に気付いたのか、僕に向かって手招きをしました。

異様な（正確には、相応しくない）状況ですが、そのままベッドの横に向かいました。腰掛けたままのマリアンヌの傍まで行くと、何故誰も声を出さないか分かりました。マリアンヌ様の膝に頭を乗

せる感じで、アンリエッタ王女がお昼寝の最中でした。そのお昼寝王女の頭を優しく撫でるマリアンヌ様と、ベッドの上で首だけを横に向けて2人の家族を眺める陛下の姿は、何故か悲しみを感じさせました。

多分、今回の様な事態にならなければ、決して実現することが無かったという事が、僕にこんな事を感じさせるのでしょうね。陛下が、マリアンヌ様に何か囁きかけました。マリアンヌ様は、陛下の上半身を起こしてクッションを当てると、アンリエッタ王女を起こさない様に注意しながら、病室を去って行きました。

「ラスティン・ド・レーネンベルク、いや、今は、ラスティン・レーネンベルク・ド・トリステインだったな。先ずは、今回の話を受けてくれて感謝するぞ。マザリーニから、副王の提案を受けて真っ先にそなたの事が頭に浮かんでしまってな。ガリア王のあの言葉が何処かに残っておったのだろうな」

僕の副王即位?には、ロベスピエール4世の言葉も影響を及ぼしていると言うことですか。まあ、あちらに対して干渉をしているので、仕方が無いとは・・・思えません! おのれ、ロベスピエール4世!

「本当に私で良かったのでしょうか?」

「さあ、分からんな。だが、私には他に適当な人物が思いつかなかった訳だし、マリアンヌも積極的に賛成してくれたからな。なんのかんの言っていた、マザリーニも最終的には反対しなかったのだから、自信を持つのだな」

「はあ?」

今の話を聞いて、何処に自信が持てるのか分かりませんが、陛下は少なくとも現状に不安を覚えてはいない様です。

「そなたなら、私の・・・」

「申し訳ありません。聞き逃してしまいました」

元々、毒のせいでしょうが、かなり掠れてしまっている声だったので、陛下が呟いた言葉を聞き取る事が出来ませんでした。それと、一瞬表情が翳ったのが気になりました。

「いや、戯言だ。それより、明日からそなたにやって貰う仕事だがな、先ずは欠かさず私の代理として朝議に出てもらおう。それと、重要性の低い案件を幾つか任せたい、そなたの力を試させてもらうという訳だな」

「さては、枢機卿の提案ですね？」

「やはり分かるか？」

「はい、一度お会いしただけですが、その用心深さは承知しております」

「成る程な、我が国に2人しかおらぬ公爵がどちらも手放さない訳だ」

〝陛下、それは親馬鹿の結果ですよ？〟と思わず口に出しそうになりました。過大評価も極まったという感じですが、僕だけでは無理でも、多くの人の力を借りれば何とかなると思うしかないでしょうね。

「陛下、先ほどの2点ですが、もちろん引き受けさせていただきます。替わりというのは失礼でしょうが、私の方からもお願いがございます」

「早速来たか、言ってみよ！」

陛下が何故か嬉しそうにそんな事を言いました。調子が狂いますね、こちらは何とか妥協点を見出そうとしているんですが？

「2つ御座います。1つ目ですが、年に1つか2つで結構ですので、私が提案する法案を公布していただきたいのです。無論、陛下が適当でないと思いになれば、却下して頂いて構いません」

「それは、貴族達に諮らずに、そなたが提案した事を、私が承認すれば良いという事なのだな？」

「はい、勿論、私が提案した事だと言う事を、公にして頂いて構いません」

「ふむ、良かろう。もう1つはどんな物かな？」

「2つ目ですが、私に王国の組織への人事権を一部お与え下さい」

「ほう、して誰の首を切るのだ？」

何故か陛下が、凶悪な暴君の様に思えて来ました。陛下が首を切れと言えば、本気で首が飛ぶのですが、大丈夫なのでしょうか？

「いえ、そんなことは申しません。ただ、私の信頼できる部下を色

々な所に派遣したいのです」

「ふむ、そちらも問題無かろう。マザリーニや、マリアンヌと相談する必要も無かろう、どちらもこの場で許可しよう」

随分あっさりと要求が通ってしまいましたよ？　交渉にさえなりませんでした、良い意味でですが。

「そちからの要望は終わりかな？」

「はい、今の所は、ですが」

「そうだろうな、私は少し疲れたので休ませてもらおうか。帰るときに、マリアンヌを呼んでくれるか？」

「はい、陛下」

僕がその場を去ろうとした時、

「マリアンヌに何か言ってくれたのは、君なのか、ラスティン・ド・レーネンベルク？」

とほとんど聞き取れない声で、聞かれました。聞いたのは陛下で間違い無いですが、何処か不安そうな声でした。

「はい、陛下がお倒れになった時に、王妃殿下に諫言させて頂きました。ご不快に感じられたのでしたら、ご容赦下さい」

「いいや、感謝しているよ。あれが、私に謝るとは思っていなかったからな。私も随分弱気になっていたから、それも良かったのだろ

う子を生した夫婦なのに、始めて本気で話し合ったよ。あれが、私の看護のために全てを投げ打つなどと言う日が来るとは思っていなかったよ」

僕は、思わず振り返って”おめでとうございます！”と言いたくなりましたが、振り返った時に見た陛下の表情を見てその言葉を飲み込んでしまいました。

「お役に立てたなら、光栄です！」

あまり芸の無い台詞だけを残して、僕は病室を去ることになりました。何故でしょう、良い事の筈なのに、逆の結果を導いてしまった様な、不安感を感じていました。

第九十一話　ラスティン２１歳（穏やかな不安）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

フィリップ４世は主人公に何を期待しているのでしょう？　そして、フィリップ４世の視点で主人公の働きがどう見えるかと言った読み方をすると、”副王編”は深く読むことが出来ますよ。フィリップ４世の外伝を書くかも知れませんので、リアルタイムで推理を楽しんでみてください。

２０１１／０２／１２
今回の様な事態にならなかれば－＜今回の様な事態にならなければに修正

第九十二話　ラスティン２１歳（恩返し）（前書き）

第九十二話ＵＰします。

第九十二話　ラスティン２１歳（恩返し）

翌日から、僕は朝議に参加して、枢機卿から指示された幾つかの案件を受け持つ事になりました。それ自体は別に問題無かったのです、実際、朝議と言っても、昼前に始まって直ぐに終わってしまう事が多いので、昼議と呼んだほうが良い物と、キアラ達を得る前の僕でも処理出来るような案件しかなかったですからね。

問題は、呼び寄せたかった人材が、一向に到着してくれない事でした。副王になった時点で、父上から、ちらっと聞いた”キアラ君なら、張り切ってワーンベルへ帰って行ったぞ？”と言う言葉の意味が分かったので、絶対に僕が予想するより早く４人の部下が到着するのを期待していたのですが、その気配はありません。

実際、護衛隊のニルス達は、昨日到着していて、僕の護衛の任務に就いています。僕は、内心で悶々としながら、仕事をこなして行きました。１週間経っても、やって来ない４人の部下を呼び寄せる為に使者を出そうかとも考えましたが、止めておきました。

変わりに敵情視察に赴きましたが、これは予想通り体よく追い返されました。多分、不在と言われた担当者の替わりに、下級の役人が来るだろうと思っていたら、案の定、若い入りたての役人が説明とやらにやって来ました。ここまでパターン通りだと、もしやと思いながら、若い役人が話し始める前に、

「”帳簿”が紛失しましたか？」

と尋ねたら、「”帳簿”が紛失しました」の部分が見事にハモってしまいました。うーん、王道ですね、悪い意味でですが。その若い役人は、何か言いたげでしたが、結局何も言わず一度だけ深くお辞儀をすると、僕の執務室から出て行ってしまいました。中々、優秀

な人物と見ました、名前を聞いておけば良かったと思いましたが、今はまだその時では無いのでしょう。

何故、僕がここまで彼らのやり方に詳しいかと言うと、別に大した理由ではなく、マルセルさんやあの人が、雑談で面白おかしく話してくれたからです。何処でも役人と言うのは一緒なのですね、正にお役所仕事と言った感じです。

僕にとっても、ここまでなのは予想外でした。あの４人が来てくれたとしても、一筋縄では行かない事態だと思います。マルセルさんやあの人も、こんな場合どう対応するかは教えてくれませんでしたからね。一番効果的なのは、内部に人を送り込む事なのですが、これには人数も時間も必要です。

淡々と案件を処理して行きますが、表向きには解決でも、実際には全く解決していない問題の多さに呆れ果ててしまいそうです。日に日に焦燥感が募って行きますが、良い手は思いつきません。ですが、それから何日かすると、待望の人物の到着を護衛のニルスが知らせてくれました。

「殿下、ユニスさん達が到着しました！」

「そうか、やっと来てくれたか。直ぐに執務室（ここ）に通してくれ」

ニルスが、”ユニスさん達”と表現したと言うのが気になりましたが、近くの会議室に既に案内したと聞いて、とりあえずそこに向かいました。ニルスは護衛隊の中でも、一番早く王宮に馴染んだ隊員でしたので、色々役に立ってくれます。時々雑談を持ちかけると、嬉しそうに王宮について教えてくれます。自慢になりませんが、後から来たニルスの方が、絶対王宮に詳しいと思います。これは洒落になりませんが、僕一人でこの王宮の何処かに置き去りにされたら、確実に迷子になる自信さえあります。

問題の会議室は、僕の執務室の意外と近くにありました。ここなら自力で来る事が出来そうだ何て事を考えていると、部屋の前で多分、僕を待っていたユニスに見つかってしまいました。

「ラスティン様、こちらです！」

「ユニス、良く来てくれたね」

「どうぞ、中にお入り下さい。あら？」

「僕の副王としての敬称は、”殿下”に決まったよ」

「そうですか、では殿下、こちらへどうぞ！」

ユニスがらしくも無く、僕の腕を引っ張って、会議室の中に引き入れてくれます。ここにユニスが、待っていたという事が少しだけ僕の気持ちを、暗いものにしてしまいます。

やっぱりキアラは、エレオノールとの事を気にしているのでしょうか？　そんな有り得ない事も頭を過ります。ですが、どうしてもエレオノールの言葉に傷付いてしまったキアラを想像出来ません。僕はキアラと知り合って、まだ1年足らずですがキアラはそう言うタイプの人間では無いと思っています。

偶発的に出会ってしまったのなら兎も角、キアラはエレオノールがあの場に居るのを予想していたと思える発言をしています。キアラがエレオノールと対決する積りならば、何らかの手を打たないとは思えません。でも、キアラは何の用意もしないまま、エレオノールと対面しました。キアラらしくないですが、遠慮をしたとしか思えません。（まあ、キアラがエレオノールの勘通り、僕の事を好きだとしての話ですが）

僕にキアラの心情を読み切る事は無理そうです。エレオノールの気持ちさえ、傷付けてしまった事を直ぐに気付く事が出来なかった位です、出会って一年のキアラの気持ちなど、謎だらけでしょう。

そんな後ろ向きな事を考えていると、会議室の中に入っていました。そこには、若いと言う以外共通点の無い様な人達が椅子に座っていて、僕をそう明らかの僕の事だけを見詰めていました。

いいえ、間違えたようです、共通点は彼らが、全て平民で、その瞳が何かを期待している様に輝いているのと、そして、”高等学校”の生徒だったという事でしょう。結構な人数の顔を僕は覚えています、名前は聞いた事が無いので、さすがに覚えていませんが。

彼らは、各々、ローレンツさんの伝で、適当（良い意味でですよ？）な所で働き始めたはずなのですが、何故ここに？　それより、３０人弱と少し少ないですが彼らの手を借りる事が出来れば、役人達の壁を取り除く事が可能になる・・・。

「なるほどね、それは直ぐには来れない訳だ」

僕は、こっそり独り言ちました。キアラには僕が何処で躓くかちゃんと分かったいた様です。こういう時の”会長”は、期待を裏切らないというアンセルムの言葉が、またもや思い出されます。それに、何だかキアラらしいやり方だと思えます。（エレオノールが言う様に、キアラが僕に対して、好意以上の物を持っていると仮定しての話ですが）

それより、今は彼らと話し合いを深める事が必要でしょう。ここ数日その事ばかり考えていたので、彼らに何をやってもらうかのアイデアは、僕の中で出来上がっています。ただ、彼らにこれを頼むのは不本意です。ですが、どうしても必要な事だと思うので上手く操るのでは無く、全てを説明して協力を要請することにします。（

何処かの王みたいに、人を駒の様に操るとかは趣味じゃない以前に、僕の能力では不可能ですからね）

僕は、未だに僕の事に注目している、彼らへ語りかけ始めました。

「レーネンベルク公立高等学校の皆さん！　始めましての方もいらっしゃいますが、態々こんな所まで来ていただいて、感謝します。そして、感謝すると共に、共感を覚えます」

共感と聞いて、”彼ら”の表情が変化しますが、判断しかねているのでしょうね。

「皆さんも、僕と同じで”会長”に頭が上がらない様ですからね」

”彼ら”から一斉に失笑がこぼれました。掴みは上々の様ですね。

「皆さんには、僕からお願いがあります。ただ、それは、皆さんにとってもかなり不本意な物になると思います。ですから、そんな事はお断りだと思われる方は、今すぐここから退席して下さい。頼りなく見えても、一応”副王”なんて事をやっているので、それでも十分な報酬をお支払い出来ると思います。いかがですか？」

一度言葉を切って、”彼ら”を見渡しましたが、皆一様に苦笑しています。

「あの会長が、俺達に頭を下げたんですよ、中途半端な気持ちでここに来ている人はいません！」

1人の男性が、そんな事を言ってくれました。覚悟済みという事なのでしょうね、確かに助かりますが、大丈夫でしょうか？

「そうですか、それを聞いて正直ほっとしました。皆さんの決心を見縊ってしまって、すみませんでした」

僕が頭を下げても、〝彼ら〟の誰一人反応しませんでした。意外と肝も据わっている様ですね、使える！と思えます。（空気が読めないのか、読まないのか微妙な所です）

「では、早速、僕が皆さんに何をして欲しいかお話しします。ここからは、ここに居る人間以外には誰にも話してもらいたくない事をお話します」

今からでも、と話を続けようと思いましたが、やっぱり止める事にします。

「皆さんには、この王宮の色々な部署に入り込んでいただきます。ただし、そこでは可能な限り目立たず、早くその部署に馴染む事を第一目標としてください」

〝彼ら〟も、僕の頼みは予想外だった様です。少しですが、不愉快な空気を感じます。

1. 配属された部署に少しでも早く溶け込む
2. 可能な限り役立つ所を見せて、部署での自分の立場を強化する
3. 部署の秘密を知ることが出来る立場になった時に少しでも多くの秘密を探り出す
4. 1～3と同時に信頼できる協力者を見出す
5. 後ろ盾になっている貴族を割り出す
6. 可能な限り連絡を絶やさない

”埋伏の毒”を気取った作戦ですが、”役人達”に対抗する方法を、これしか思いつくことが出来ませんでした。ですが、”彼ら”はこの提案を喜んで受け入れてくれました。実際の所、何年かかるか分からない計略ですし、実行してみれば問題点も出てくると思います。

正直いえば、部署ごと一度潰してしまって、使える人材だけ登用するという方法も考えましたし、”副王”の権限でそれを実行できる小さな部署なら幾らでもあります。例え大きな省庁だったとしても陛下の決裁が貰えれば、同じ事が可能です。

陛下に依頼すれば、意外と簡単に実現しそうなこの案を採らなかったのは、あの人が教えてくれたこういった役人の後ろには貴族が居ると言う事と、陛下に不要な負担をかけたく無かったからです。

それから、”彼ら”の一人一人と話し合い、少しでも”彼ら”に向いている部署を考える事に時間を費やしました。一応、ニルスに頼んで”彼ら”の宿泊場所も確保してあるので、多少時間がかかっても問題ないはずです。夜遅くまでかかって、”彼ら”の人となりや得意分野を知る事が出来ました。キアラがこの場にいれば必要無い事かも知れませんが、僕が自分で”彼ら”と話し合ったのは、良かった事だと思います。”彼ら”の1人がこんな話をしてくれました。

「殿下、先程、僕らがキアラに言われてここに来たと、仰っていましたね？　半分は正解ですが、それだけじゃありません。僕らは、ラスティン様に恩返しをする為にここに来たんです。そう、殿下ではなくラスティン様に！」

「恩返しですか？」

「そうです、僕は高等学校に上がる時、奨学金を受けました。実家

が貧乏な僕にとっては、奨学金はそのまま給金でした。人に使われる様になって始めて気付きましたよ。寮に入っている僕らにお金など必要ないですし、事実、奨学金はほとんど実家に送っていました」

「いや、お金で君達を縛る積りは無いんだけど？」

「そうですね、実際その通りでした。奨学金は借りる形でしたから、契約書にサインをしました。その頃は子供でしたから、金利なんてものは良く分かりませんでした」

「そんな無茶な金利だったかな？　理事長の話では物凄く低くした記憶があるんだけど？」

「そうですね、僕も実際は覚えていません。思い出そうにも、その契約書が既に存在しないんじゃ、意味が無いですからね。先程もお話しましたが、僕は商人の方と良く会う仕事をしていました。契約書の大事さ、お金を借りる時の大変さを良く知っています。高い金利でお金を借りて破滅した人も短い間でしたが何人か目にしました」

「そうか」

「僕は心配になって、学校に戻り自分の借りたお金がどの位になっているか、確認しようと思いました。お会いした理事長先生は、契約書は紛失したからお金を返す必要は無いなんて言っていましたが、噂で聞いた商人としてのローレンツがそんなヘマをするとは思えません」

「気付いてしまったんだ、中々見所があるね」

「恩返しと言うのは、分かっていただけましたか？　１つだけ教え

て下さい。ラスティン様は何をなさるお積りで、公立学校を作られ経営されているんですか？　正直、今回の様な事に備えてだとかも考えましたが、ラスティン様は僕達が来た事に驚いていました、演技には見えなかったですし、僕達に頭を下げるのもおかしいと思いました」

「僕は、レーネンベルクの未来に投資した積りなんだ。こんなに早く助けてもらう事になるとは思っていなかったけど、領主の息子が自分の領地になる筈の場所に投資して問題があるかな？　それに、僕は君達自身で考えて行動して欲しいと思っているんだ」

「そうですか、キアラに意見を聞いてみたいです」

カロンという青年はそれだけ言って去って行きました。本当に、キアラは僕とローレンツさんの意図に何処まで気付いているのでしょうか？　キアラが気付いていても別に問題ないですし、カロンの様に疑問を持ってもどうしようもありません。僕にとっての敵勢力が、それを利用する事が気がかりではあります。

第九十二話　ラスティン２１歳（恩返し）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第九十三話　ラスティン２１歳（王宮で最も暇な男）（前書き）

第九十三話ＵＰします。

さて、サブタイトルの示す男性は誰でしょう？

第九十三話　ラスティン２１歳（王宮で最も暇な男）

”彼ら”を”潜入部隊”と呼ぶ事にしましたが、”官僚団”と呼べる様になる日が少しでも近くなる事を願っています。”潜入部隊”の人達との面接を終えても、僕の仕事は終わりではありません。放り出してきた副王としての仕事もありますが、それより重要な事です。

「ユニス、君だけがここに来た理由を教えてくれるかな？」

「はい、ですが、その前にキアラからの伝言がありますが、お聞きになりませんか？」

「聞かせてくれ」

「”私の大切なラスティン様、旧モーランド侯爵領から手を引くのは早いです。考えがありますのでお任せ下さい。お会いできないのは悲しいですが、貴方の為に頑張っています”だそうです」

「ユニスらしくないな、冗談なんて。でもまあ、旧モーランド侯爵領から、マリユスとアンセルムを引く抜くのは、拙い選択だな。分かった、キアラには好きなようにする様に使者を出すよ」

「はい、そうしてあげて下さい。キアラは、今、多分、必要以上に頑張りすぎですから、無理をするなと付け加えると、ラスティン様の株が上がりますよ？」

「そうか、そうするよ。ユニス、君も寂しいだろうね？」

「はい？」

「だって、マリユスと離れ離れになってしまうわけじゃないか、いや、アンセルムとかな？」

「あ、あの、何を仰っているのでしょうか？」

ユニスの声は動揺を隠しきれていませんでした。ユニスの様な女性が、アンセルムみたいな男性に惹かれるとは意外ですが、有り得ない話でも無いですね。もしやと思って鎌をかけただけなのですが、思わぬ仕返しになった様です。

「君には、財務省と呼んでいる部署に入ってもらう。これは副王としての僕の勅令に等しい命令だから確実だ。でもその反面抵抗も大きいと思う。やってくれるかな？」

「望む所です！　無理・無駄・無茶を、確実に減らしてお見せします」

その頼もしい言葉を最後に、ユニスとも分かれて僕は執務室に向かいました。淡々と決裁をしながら、僕はキアラに１つの誓いを立てる事を決めました。決してエレオノールを泣かせないと決めた僕がキアラに誓えるのは、ただ彼女が求める理想の上司になると言う事です。

ただ、これは僕にとっても望む所だったりします。キアラの望む通りの副王になれれば、多分副王としての職務を十分に果たしているのではないかと思えるからです。理想の副王像なんて物は、何処にも無いでしょうし、無いものを追い求めるより、目の前で要求される理想を満たしていく方が、精神的には楽ですからね。キアラの

求める理想の上司になる事は、十分に難しい事だとは自覚していますが、これを放棄する積りはありません。

＝＝＝

”潜入部隊”を文字通り潜り込ませることは、何とか無事出来ました。問題は、どの部署にどうやって送り込むかでしたが、王宮の事に詳しいグレンさんに協力して貰って簡単に解決しました。単にこの部署に送り込むかを相談に行っただけだったのですが、グレンさんは王宮内の事情に非常に詳しかったのです。

Ａと言う部署に人を送り込みたいなら、Ｂという出入の商人から推薦状を取ると良い、Ｂに推薦状を書かせたいなら知り合いにＢと仲の良い人物がいるので、紹介状を書いてもらってきましょう。こういう事を、言葉少なに語って、直ぐに紹介状を入手して来てくれました。一応、紹介状を渡す以上、送り込みたい”潜入部隊”をグレンさんに会わせたのですが、ほんの少し会話しただけでした。

相変わらず饒舌とは言えないグレンさんでしたが、紹介状は見事に役目を果たしてくれて、話はとんとん拍子に進み、見事２日で目的の部署に送り込む事が出来ました。ここまで簡単では無かったにしろ”潜入部隊”を全員配置に就けるのに要したのは正味２週間でした。

正直、グレンさんがその気になれば、王宮に暗殺者や密偵を送り込む事が出来るのではないでしょうか？　そんな冗談を思い浮かべてしまいましたが、グレンさんはもしかしてあの事を知っていたんじゃないかとも思い当たってしまいました。そう思うと居ても立ってもいられなくなり、直ぐに使いを出しました。

いつも通り、グレンさんはあの部屋には居なかったそうですが、メッセージを残してきたと言う事なので、そんなに待つことが無く、グレンさんが執務室にやって来てくれました。人払いをした後、グレンさんに単刀直入に問いかけてみました。

「グレンさん、最近お悩みの事はありませんか？」

何故か笑われてしまいました。色々な反応を考えましたが、これは有り得ないですね。グレンさんが笑うのを見たのは始めてなので、貴重な体験ですが。

「殿下、失礼しました。　貴方は公爵様と同じ事を仰るのですね」

「そうですか、父上に先を越されましたか。まだまだ敵わない様ですね」

「いいえ、先程は笑ってしまいましたが、正直驚いてもいます。殿下のお立場で、それに気付かれるとは」

そういいながら、何かを思い出したのか、少し辛そうです。僕が副王になる前の晩に、お酒を飲み交わしていたのがそうだったのかも知れません。

「でも、暗殺の実行犯が特定出来たのは、グレンさんのおかげなのでしょう？　モーランド侯爵が、他の貴族を使って送り込んで来たなんて誰も気付かなかったんじゃ？」

「いいえ、私は仕事に失敗した者です」

「え？　でも、グレンさんの立場では、実際の所何も出来なかった

のでは？」

「私は・・・、言い訳になりますが、警備の担当者に何度か、その事を知らせた事があります。ですが、所詮は噂でしかありませんでした。私には、陛下の暗殺を阻止出来る可能性が有ったのだと後で気付いて、失敗を悟りました」

「もしかして、父上に言われて、陛下の護衛をしていたのではないですよね？」

「勿論違います。ただ、陛下の為に働いて欲しいと、テオドラ様から直々に頼まれました」

グレンさんは、どう見ても文官タイプで護衛には向かないですからね。では、グレンさんはどうやって陛下の手助けをしていたんでしょう？

「殿下は、私が王宮の方々になんと噂されているか、ご存知ですか？」

「知恵者とかでしょうか？」

「いいえ、”王宮で最も暇な男”です。ですが、私はこの呼び名に誇りを持っていました。私はあまり喋りませんが、聞き手としては優秀な様で、昔から色々な相談を受けてきました。その事をテオドラ様に買われて、王宮で情報収集を行って来ました。ですが、結局それも役には立ちませんでした」

成る程、グレンさんが妙に王家に顔が利いたり、噂に詳しかったり、良く父上の部屋に居ないのは、こう言った背景があった訳です

ね。仕事らしい仕事は、偶に来る父上からの指示と、父上への連絡だけで、噂話の収集だけやっていれば、”暇”と言われても仕方が無いのかも知れませんね。

「グレンさんは、今日は良く喋る様ですね。でも、”王宮で最も暇な男”の名前を返上する積りはないのでしょう？」

「はい、テオドラ様から殿下のお役に立つように言われていますから」

「では、早速役にやっていただいたわけですね？」

「例の若者達の件ですか？　あれ位であれば、幾らでも」

「グレンさんにとっては、あれ位かも知れませんが、僕達にとってはとても有り難い事でした。改めてお礼を言わせて下さい」

「いえ、ラスティン様。顔を上げてください！」

「グレンさんが、誇りを持って”王宮で最も暇な男”を続けてくれるなら」

「分かりました。ですが、これだけはお約束下さい。噂はあくまでも噂、間違った情報もあります。それと、基本的に私がお教えする噂は、具体的な人名を伴いません。また、噂の出所も申し上げる事が出来ません」

「具体的な名前を？」

「はい、私が噂を聞く時には、対価として別の噂を教えます。この

時に具体的な人名は言わないのが私のやり方なのです。噂の出所を話さないのも必要な事です。この方法は、噂を聞き出す時に結構有効なのです」

「なるほど、情報源は秘密厳守で、話は想像力を刺激すると言う訳ですか。分かりました、是非僕にも噂を聞かせて下さい。必要があれば、対象の特定とかはこちらでやります。ただし、人命に関わる事と判断した場合は」

「その点については、勿論です」

グレンさんが慌てて、同意してくれました。”王宮で最も暇な男”が完全復活する事が決まった瞬間です。

この機会なので、グレンさんに聞いてみたい事があるのですが、先程の条件を満たしていないので、聞き出せないかも知れません。

「グレンさん、出来れば陛下と王妃殿下の噂話を聞かせてもらえませんか？」

「何の噂でしょうか？」

「そうですね、暗殺未遂があった前後で内容が変わった物でしょうか？」

「それだとこんな感じでしょうか？　”新婚当時は政略結婚だと思われたのにも関わらず、お二人の仲は上手く行っていた。ある時期、関係が冷えた事がありましたが、それでもお子様の誕生でそんな噂も消えました。現在は、新婚の時以上に仲睦まじい”と言った所でしょうか」

「ある時期、関係が冷えた事があったと言う所をもう少し詳しく」

「”その女性には、若い頃憧れていた男性がいました。その女性を妻に迎えた男性に、妻が若い頃憧れた男性についての噂を誰かが聞かせてしまったらしい”ですかね」

あれ、一瞬聞いた事がある話を思い出しましたよ？

「そのその女性が昔憧れていた男性というのは、マンティコア隊の方ですか？」

「何故それを！　秘中の秘とされているはずなのに」

しまった、思わず言ってしまいましたが、これは秘密だった様です。何処まで噂になっているか分からないので、変な事は言えません。

「良く覚えていないのですが、子供の頃、そんな御伽噺を聞いた記憶があるんです。たぶん父上だったと思うんですが、はっきりと名前が出た訳では無いので、言われるまで気付きませんでした」

「公爵様も、子供に何て話を！」

父上、すみません。グレンさんに怒られたら、適当に誤魔化しておいてください。それにしても、陛下がマリアンヌ様の昔の想い人に嫉妬したんでしょうか？　それが原因で、夫婦仲が不仲になったとしたら、中々笑えない事態です。今が良ければ、問題無いかも知れませんが。

第九十三話　ラスティン２１歳（王宮で最も暇な男）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／０２／１７
関わるを－＜関わる事と
賞味－＜正味
に修正

第九十四話　ラスティン２１歳（思わぬ影響）（前書き）

第九十四話ＵＰします。

第九十四話　ラスティン２１歳（思わぬ影響）

”潜入部隊”を送り込むことに成功して、１月ほどが経ちました。例の会議室（作戦室と呼んでいますが）で、こっそり報告を聞いていますが、事態は概ね順調に推移しています。正直、ここまで上手く事が運ぶとは思っていなかった程の情報が僕の元に集まりつつあります。ただ、証拠を掴む所までは行っていないのが残念ですが、それも時間の問題でしょう。

”潜入部隊”の進入を、カムフラージュする意味でも、僕の推薦で財務省（正式に名前が決まっている訳でも無いので、こう呼んでいます）に入ったユニスですが、期待通りの働きを見せてくれました。財務省といえば、国の機関でも重要な部署になります。

当然ですが、そのトップは財務大臣（これも大臣の１人が国の税務面を専門でみているだけで、正式にこう名乗っている訳ではありません）になり、勿論、貴族です。財務大臣と言えば、金勘定に煩そうな老人を思い浮かべますが、実際は有力な某侯爵の義弟で、頼りないオジサンだったりします。まあ、妻の実家の権力で地位に就いただけのお飾りというやつですね。

ユニスは、某情報源（グレンさん）からこれを聞き出すと、早速ここから攻め始めました。財務大臣に取り入って後ろ盾にすると、その権力をバックに、省の役人達に戦いを挑んだ様です。敵もかなり優秀だったそうなのですが、攻める側で、相手の弱点が分かっていて、自分の人事権を好きに出来る相手の場合は、さすがに分が悪かった様です。

１人が実際にクビになると、慌てて守りに回ったそうですが、ユニス（ユニス）には通用しませんでした。まあ、役人が考えることは、役人も思いつく事なので、足掻けば足掻くほど深みに嵌って行ったそうです。更に１人が去り、１人がユニスの軍門に下ると形勢は一気に決

まったそうです。役人達のトップ（大臣ではなく、役人達を取りまとめて大臣を蔑ろにしていた人物）までもが、汚職でクビになると勝負が決まったそうです。

役人トップ派は、針のムシロ状態で、やがて省を去る事になると言うのが、ユニスの見解でした。こちらも結局1月足らずの、省内紛争のあっけない幕切れでした。ユニスは、大臣から気に入られて重用され、優秀な部下も手に入れ、省内の掃除も完了という結果で言うこと無しです。

「ユニス、ご苦労様。それにしても、上手く行き過ぎじゃないかな？　最初の大臣に取り入る所なんてどうやったんだい？」

「さあ、どうやったのでしょうね？」

ユニスが妖しく笑っている様に見えてしまいました。

「まさかとは思うけど、人には言えない様なことはしていないよね？」

「勿論です！　私がそんな女にみえますか？」

男を惑わす魔性の女の微笑みでしたよ、さっきのは！

「それなら良いんだ。何かあったら、アンセルムに顔向けできないからね」

「何故、ここで、彼が出てくるんですか！」

おや、今度は恋する乙女の表情だったりします。考えてみると、

ユニス⇒アンセルム⇒キアラ⇒？僕、なんて一歩間違えば、泥沼な人間関係が出来上がりそうです。あれ？

「ユニス、１つ聞いていいかな？　この間、君は僕にキアラの事を気にしてあげて欲しいと言ったよね？」

「殿下、あまり賢い男性は女性から好まれませんよ？」

「そうかい？　ちなみにどんな男性が好まれるんだい？」

「そうですね、普段はだらしないですけど、締める所はきちんと締める。でも、女性には一途な男性でしょうか？　って何を言わせるんですか！」

随分、具体的かつ奇妙でしかもピンポイントな好みですね。ユニスみたいに出来た女性は、逆の男性に惹かれたりするんでしょうか？　最後の部分は、その対象が自分に向かなければ、辛いだけだと思うのですが。

ユニスの想いは、彼女自身の問題なので干渉しないにしても、これで王宮の財布は押さえた事になります。王宮での足場を確立するのは思ったより早く行きそうですね。

＝＝

王宮での地盤固めの見通しが立って、少し気が緩んだ所に思わぬ所から、問題が持ち込まれました。それは、とある昼下がりの出来事でした。執務室を、王宮の警備を行う王宮の警備隊の隊長という人物が、僕を訪ねて来たのです。

「あの、すみませんが、もう一度言ってもらえますか？」

「はい、”ノリス・ド・レーネンベルク”を名乗る若者が、殿下を訪ねていらしたのですが、門を強引に抜けようとされたので、別室でお待ちいただいているのですが、どの様に取り計らいましょうか？」

うん、聞き間違いでは無いようです。ノリスが王宮へ来ることは特に問題無いですし、僕に会いたいと普通に門番に告げれば、多少時間はかかるにせよ、簡単に会う事は出来ます。ノリスがこんな事をするとは思えませんが、一応、傍にいたニルスを確認に行かせる事にしました。親しくないにしろ、２人は何度か会ったことがあるはずなので、直ぐに問題は解決すると思ったのですが、戻って来たニルスも何故か戸惑い気味でした。

「ニルス、どうだった？」

「はい、あの確かにノリス様に見えるのですが、かなり印象が違っていて」

「声を聞けば分かるんじゃないのかい？」

「あの、多分魔法で眠らされていますので」

「そうか、それで、そのノリス君は何処に居るんだい？」

「お会いになりますか？　それならご案内します」

会うこと自体を止められなかったという事は、落ち着いて話せる

状態なのでしょう。何が起こったのか不審に思いながら、ニルスに案内されて、とある部屋に入りました。

「兄上！」

「本当にノリスなんだな、お前何やってるんだ？」

「細かいことは良いんです！　ライルのせいでジョゼットが！　兄上に相談しようと思って！」

「少し落ち着け、もう一回眠らされたいか？」

ノリスは昔から、時々まとまりのない事を言うことがあった気がしますが、今回は酷過ぎます。言う通りに解釈したら、ライルがジョゼットに何か酷い事をして、ノリスが父親の僕にクレームを言いに来たようです。ジョゼット絡みだと、見境を無くすまでなってしまった様です。

「最初に聞くけど、お前は魔法学院にいるはずじゃないのか？　制服も着ていないし、普段着でこんな所まで来るなんてどういうことなんだ？」

「服装の事など、どうでも」

実力で黙らせました。ただ杖を突きつけただけなんですがね。まあ、ノリス自身は僕と違って学院では一年から優秀な成績ですし、野暮なことは言わないでおきましょう。問題があれば、両親が黙っていないでしょうし。

「で？　ライルのせいでジョゼットがどうなったって？」

「はい、ライルは予定通り、公立学校と魔法学園に通っているんですが、魔法学園で習った魔法をジョゼットに見せたんです。そうしたら、ジョゼットも魔法を使いたいと言い出して、家庭教師をマリナ先生にお願いしたのですが、上手く行かなくて」

「そうか、ジョゼットも、もうそんな歳なんだな。で、何故、僕の所に怒鳴り込んで来たんだ？」

「怒鳴り込んで来てなどいません！　ただ、父上が兄上なら何か知っているかも知れないとおっしゃって。ラ・ヴァリエール家のルイズも兄上の助力で魔法が使える様になったと聞きましたよ！」

事情は分かりましたが、上手く説明出来ているとは思えません。ノリスはこれでも、優等生なのでしょうか？　将来のレーネンベルク家は大丈夫なのでしょうか？　確かにジョゼットの魔法障害の話は、父上にしましたし、ルイズを助けたのは事実なので否定も出来ません。ジョゼットがどんな魔法障害を持つかは、一応予想していましたが、実際は起こってみないと分からないと判断していました。

「それで、上手く行かないという所を詳しく頼む」

「それが、上手く説明出来ないんです。何も問題ないはずなのに、魔法が発動しないんです」

「そうか」

悪い予想が当たってしまった様です。ジョゼフ王子と同じ状況だと考えるのが自然なのでしょうが、何が起こっているか分からないと、ルイズの時の方法は使えません。しかし、ジョゼット絡みの話

を僕に伝えて来なかった父上には感謝ですが、無駄な気遣いになってしまいましたね。

可能性としてですが、ルイズの様に何かの虚無系魔法が歪んだ形で現れていると考える所までは、考えが進むのですが、その先が全く分かりません。物語（歴史）の方では、ジョゼフ王子の虚無魔法は、爆発と加速だったはずですが、それが全てだと言い切れませんし、仮にそうだったとしても、ジョゼットが同じだとは言い切れないのが問題です。

ですが、一番の問題は僕が今、王宮を離れる訳には行かないという点でしょうか？　ジョゼットを王宮に長期間滞在させるのは避けたいですし、僕もジョゼットだけに関わっていられる立場では無くなってしまいました。ここは、ノリスに兄として頑張ってもらうしかないと思います。

「ノリス、これはお前の兄としての依頼だ、よく聴いてくれ。先ずは、ジョゼットにブースト（身体強化）を使わせてみるんだ」

「兄上、ブースト（身体強化）は、一応使わせてみたんですがダメでした」

ということは、加速じゃない訳ですね。これが無いとなると、雲を掴むような話になってしまいます。

「既に試していたんだな。では、お前がジョゼットを助けるしかないな」

「望むところですよ、兄上」

「そうか、それじゃあ、ジョゼットが魔法を使う時を、ずっと魔法探知（ディテクト・マジック）で、観察し続けてくれ。そして何か変なことがあったら、その

原因を探るんだ、出来るか？」

「はい！　ジョゼットの為なら！」

「うん、任せた！　何か分かったら、その時は出来るだけ役に立つから。ところで、肝心のジョゼットはどうしたんだ？　かなり落ち込んでいるんじゃないのかな？」

「ええ、そんなに落ち込んでいる様には見えないと、皆は言うんですが、僕とテッサには分かります。今もテッサが、慰めていてくれるんだと思います」

テッサとノリス（おまけでライル）がいれば、ジョゼットの事も心配しなくて良いのかも知れません。どうでも良いですが、いつもジョゼットを巡って対立している、テッサとノリスがこういう時だけ連携が取れているのが面白いですね。僕は、順当にノリスを送り返すことに成功しました、今度王宮に来る時は、穏当な方法で面会を申し込んで欲しいものです。

第九十四話　ラスティン２１歳（思わぬ影響）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

ジョゼットの魔法障害の正体は、百一話辺りで明らかにしたいと思います。

第九十五話　ラスティン２１歳（お金がない！　いや本気で）（前書き）

第九十五話ＵＰします。

第九十五話　ラスティン２１歳（お金がない！　いや本気で）

ノリスの不意打ちから、またしばらく時間が経ちました。僕自身は未だに試用期間といった感じです。

朝起きて、朝食後に幾つかの案件を片付けて、その後朝議で、朝議の後に昨日から処理が終わった案件の内容と朝議の内容を陛下に報告、そして昼食後に新しく入ってきた案件を片付け、夕食後に潜入部隊の報告を受けて、湯浴み後、就寝という不健康的な生活を送っています。

ほとんど外出が出来ないというのは、僕にとっては意外とストレスでした。特に、案件の処理は基本的に僕個人でやっているので、ストレスは溜まる一方です。まあ、潜入部隊の報告で少しは解消されるんですが、あまり爽快感が無いので、仕方がありません。話し相手でもいれば、気が紛れるのですがその場所はキアラの為に空けてあるので、孤独に仕事を進めて行くしかありません。（キアラは一体何をやっているんでしょうね？）

そんな日々に涼風をもたらしてくれたのは、ローレンツさんでした。そういえば、そろそろ定期報告の時期でしたね。今年は、カグヤちゃん同盟のクロディーからの情報もあるので、ジョゼフ王子側の情報は大まかに分かっています。

「ローレンツさん、良く来てくれました」

「おやおや、殿下、そんなに歓迎してくださるとは思いませんでしたぞ」

「ローレンツさんまで、殿下は止して下さい。あまり刺激の無い生

活をしているので、客人は大歓迎ですよ」

「副王というのは、忙しいのだと思っていましたが、違いましたかな？」

「僕はまだ試用期間ですからね、ボチボチといった所ですよ」

「では、私の愚痴に付き合って頂く時間は有りそうですな？」

「愚痴でも何でも構いませんよ、正直。外部の情報から隔離されている状態ですからね」

「それは、大変な状況ですな。差し詰め無人島に流された気分ですかな？」

情報の重要さを良く知っている人には、やっぱり僕の今の気持ちが分かる様です。

「それでは、愚痴を聞いていただきましょう。キアラ君の事なんですがな」

「ああ、高等学校の卒業生の話ですか？　それについては、僕の方から謝らせてもらわなくてはいけませんね。申し訳ありません」

「いえ、まあ、仕方が無いですな。折角の優秀な人材を手に入れた得意先に、謝るのは大変でしたぞ」

「僕達にとって悪いことばかりでは無いと思いますが？」

「そうですが、今年の卒業生も、ごっそり持っていかれてはですな」

今年の卒業生？それは知らない情報ですが、キアラが何か暗躍しているんでしょうね。

「まあ、その件は彼らの自由意志ですからな、私もこれ以上は言いますまい」

「本当にすみません」

「もう1つ愚痴ですがな、最近工業品の価格が高騰気味で困っておりましてな」

「そうなのですか？　ワーンベルからの出荷量は増えている筈ですが？」

兵団員の増員で、ワーンベルの錬金隊への人員も増強されている筈なんですが、下落ならともかく、高騰気味とはどういうことでしょう？

「国内に関しては、行き渡っていると思います。他の国では不足という噂は聞いておるのですが・・・」

「商会の方でも分かりませんか」

これは、下手をすると国レベルの問題になりそうです、心に留めておきましょう。

「後、これは商人の中での噂なのですが、どうやら各国の貨幣の質が落ちているそうですな」

「質ですか？　価値ではなく？」

「ははは、前世の知識に引きずられている様ですな。こちらの貨幣には、金銀銅それぞれが使われていましてな、貨幣自体が価値を持っておるのですよ。まあ、発行した国の信用も勿論関わって来ますがな。金貨に混ざり物が多ければ、金貨としての価値は下がるものなのです」

「ああ、質と価値は等価に近いという訳なんですね？　でも各国ということは、この国でも？」

「その様ですな。ユニス君辺りなら、詳しいのではないですかな？」

どういう影響があるか分かりませんが、経済的に混乱が見込まれるという所でしょうか？　ユニスに話を聞いてみましょう！

「これも一種の愚痴ですかな？　例の人探しですがな、現在１０名足らずと言った所なのです。そろそろ集めただけでは済みそうに無いですぞ？」

「それに関しては、考えがあります。でもほとんどがトリステインに居るのですか？」

「不思議ではありますまい？　誰も、ガリアやアルビオンに生まれたいとは思わないでしょうからな」

「それも、そうですね。ジェリーノさんや、ナポレオン君は例外なんでしょうね」

「そう考えられますな。私もこの国に生まれてほっとした物です」

「そういえば、ローレンツさんはこの世界で、前世の事を思い出して、どう思いましたか？」

「ああ、何時だかジェリーノが言っていた話ですな？　私の場合はチャンスだと思いましたな、かなり昔なのでおぼろげな記憶ですが」

「そうですか、あの、転生者を集めて集会を開きたいのですが、協力していただけますか？」

「何をなさるのですかな？」

「折角ですので、転生者間の交流を深めたいと思って、後、知恵を出し合ってこの世界をもっと良い物にしたくないですか？」

「ふむ、成る程。協力させていただきましょう」

少しだけ違和感を感じました。ローレンツさんの立場なら、僕の思いついたことをもっと早く実現出来たんじゃないか？と思えました。まあ、何か考えがあるのかも知れませんが。

「そういえば、定例のガリアの状況はまだお聞き出来ないのでしょうか？」

「ああ、すみませんな。ですが、事情は彼女から聞いているのではないですかな？」

「はい、ですが、シャルル王子サイドはさすがに」

「まあ、クロディー君でも難しいでしょうな」

ローレンツさんの話をいつも通りまとめると、以下のようになります。ちなみに、課題になったのは、”交易で栄えている町”でしたね。

・ジョゼフ陣営

こちらは予想通り、ジョゼフ王子は町に対しては何もしなかったそうです。正確には、微妙に税率などを変えたそうですが、大勢に影響するほどでは無かった様です。ジョゼフ王子はどちらかと言うと、町に続く街道の整備に力を入れたそうです。同時に街道の警備を行う部隊を組織して、商人の保護を行ったそうです。まあ、順当過ぎて面白くないですが、ローレンツさんも普通の反応でした。（普通過ぎて、違和感を感じた程でした）

・シャルル陣営

こちらは、思い切った冒険に出た様です。エルワン商会という、ガリアでも指折りの商会に商取引の独占権を与えたそうです。何だか真似をしただけと言う気もしますね。結果として、エルワン商会の勢力はかなり増えたそうですが、当然その他の商人達は締め出された形になります。これはどんな結果をもたらすのでしょうか？

そして、一番重要なのは、両王子が次の任地を指定される訳ではなく、ガリアの王都リュティスに呼び戻される事になったと言うことでしょう。これで、王位継承権争いは決着が付くという事になる訳です。僕もローレンツさんも、ジョゼフ陣営の圧勝を予想しました。まあ、隠された意図を知らなければ、シャルル王子の圧勝なのでしょうが、どういう騒ぎになるか楽しみですね。

まあ、他国の事だと高を括っていた僕には、残念な結果が待っている事を、その時の僕は気付いていませんでした。ローレンツさん

には、ゲルマニア関係の情報や、風石採掘場所発表が行われた等、幾つか重要な情報を聞かせてもらえました。

＝＝

ローレンツさんから貴重な情報を得た翌日、僕は朝からユニスに連絡をとって、執務室まで来てもらいました。

「ユニス、昨日なんだけど、ローレンツさんから貨幣の質が落ちているって話を聞いたんだけど、本当なのかい？」

「理事長先生からですか？　そうですか、・・・」

ユニスは少し考え込んでしまいましたが、決心したらしく話を続けました。

「もう少し、調査が進んでから報告したかったのですが、貨幣の話は事実です。分かっているのは、我が国の金銀銅を産出する鉱山での採掘が思い通りに行かなくなったという事と、他国が我が国の貨幣をかき集めているらしいという事です」

「何が起こっていると思う？」

「現状では、情報不足で何とも申し上げられませんが、何処かの国が、トリステイン経済的に混乱させようとしているのではないかと予想できます。そこで、１つ提案したいことがあります。これは殿下に対してではなく、ラスティン様にです」

「良く分からないな？」

「魔法兵団に対しての要請と言い換えましょうか？」

意味が分からないですね、今の話と兵団への要請がどう繋がるのでしょうか？　あ！成る程、そう言うことですか！

「錬金隊の出番と言う訳だね？　魔法宝石（マジックジュエル）のアクセサリをデザインした事がある君ならではの提案だね。あの貴金属の供給元は秘密のはずなんだけど」

「ふふふ、そうですね」

「まあいいさ、でも良いのかな？　この国どころか、色々な所に影響が出そうだけど」

「このままでは、敵の思うままですよ？　こちらが主導権を握らなければ、挽回は難しいのではないでしょうか？」

敵と言う言葉が、僕を刺激します。まさかゲルマニアが、マテウス・フォン・クルークなら思いつきそうな話です。

「分かった、兵団には僕の方から依頼を出しておくよ。何処に向かわせる？」

「お知りになりたいですか？」

「これは、機密事項なんだな？」

「ええ、詳細をすべて知っているのは、国王陛下と王妃殿下、そして財務省のトップだけです」

「そう言う話なら、僕は知らないでおこうかな。兵団員が到着したら、ユニスに一任するよ」

「随分と潔いのですね？」

調子に乗ってガンガン金とかを作ったら、この世界の経済がどうなるか考えたくないですからね。

「昔から、金勘定は苦手だし、世界の経済を支配しようなんて思わないしね。それより、錬金隊から団員を引き抜く数の方が問題かな？」

「ああ、工業品の高騰の話ですか、そちらも頭痛の種ですね」

「まあ、とりあえず、スクエア，トライアングル，ライン，ドットのメイジを各１０人程選抜するよ」

「４０人ですか？」

「そんなに少ない数じゃないけど？　まあ、足りなかったら補充も考えるよ。貨幣自体の鋳造まで必要だったら、もう少し増やした方が良いかもな」

実行する気はありませんが、ワーンベルの工場街で、全力で金銀銅を作ったら冗談ではなく1日で金銀の山が出来ますからね。アクセサリの材料の安価な入手方法として考えたケイ素－＜銅－＜銀－＜金（プラチナ）の様な順番に元素番号が大きい物を作っていく方法は、こんな所でも役に立ってくれます。今なら結構な純度の金でも錬金出来る筈ですし、純度自体は大した問題ではありませんからね。

「そこは、今の人員が使えますから」

「そうだね。そうだ、ユニス！」

「何でしょうか？」

「新しい貨幣を作ってみないか？　もちろん、君がデザインを決めて良いから」

ユニスの目がキラリンと言う感じで輝きました。

「お任せ下さい！」

ユニスらしくもなく、声が上擦っています。彼女もストレスを溜め込んでいるのでしょうか？　意外と良い思いつきだったのかも知れません。プラチナ，金，銀，銅の貨幣を作る方針を決めて、細かな話はユニスに一任する事にしました。

第九十五話　ラスティン２１歳（お金がない！　いや本気で）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

ちなみに、今回の工業品高騰と、貴金属の不足は、根が同じだったりします。
皆さんには、真犯人と実行犯が誰なのか、分かりますよね？

第九十六話　ラスティン２１歳（結果発表）（前書き）

等幅フォントで見ないと、変に見えます。
縦書きや携帯の方も是非ＰＣで見てください。

第九十六話　ラスティン２１歳（結果発表）

僕は今ガリアに向かって、馬車に揺られています。旅行自体は、王宮に閉じ込められていた日々を考えれば大歓迎なのですが、ロベスピエール４世から、”ラスティン・レーネンベルク・ド・トリスティン”を名指しで招待状が送られてきたのは、何かの嫌がらせでしょうか？　国内ではともかく外国にはお披露目前の僕に、陛下を差し置いて、”ラスティン・レーネンベルク・ド・トリスティン”に招待状を送るなんて、トリスティンでの僕の立場を悪くしたいのか、トリスティンに対する警告なのか判断に迷います。陛下はともかく、貴族達やマザリーニ枢機卿まで嫌な顔をされては、僕も立場がありません。

結局、”副王”の関係国へのお披露目とと言う名目で、僕のガリア行きが許可された訳です。まあ、地道に様々な案件を片付けた事も評価されたと思いたい所です。まあ、今回の招待状に”重大な発表を行う”と書かれている時点で、王太子が正式に発表されると言う予想はつきますし、この問題では僕はある意味関係者なので、招待されるのも分かりますが、トリスティン国王宛なり王家宛なりにしても結果は変わらなかったのにと思うと、改めて怒りが湧いて来ます。

こんな気分の時は、文字通り空を飛んで行きたいですが、飛行（フライ）で行くのも現実的では無いですし、竜籠で訪問するのは相手国を刺激する様な物と言われれば、馬車以外の移動は考えられないです。いつか飛行機が飛び回る世界になったら、正式訪問には飛行機でという習慣にしてみたいものです。

直接にガリアに向かうのは始めてだったので、旅行自体は楽しめました。良い気分転換になったとさえ言えるでしょうね。リュティ

スで待ち受けているだろう、退屈な儀式や、気の重い会見などにも少しは耐えられる気分になる事が出来ました。気分転換の意味でも威厳を持たせる意味でも、旅はゆっくりと進んだので、リュティスに着いたのは〝重大発表〟前日でした。
　遅刻しないかハラハラしましたが、実際こういう場合、わざと遅刻する事もあるそうなので、間に合っただけで良しとしましょう。公爵家に生まれても鷹揚な態度になれなかったですし、副王になってもそれは変わりませんでした。小市民的な副王なんて、国民の皆さんがどう感じるか、考えると情けなくなってきます。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　ヴェルサルテイル宮殿入りは、問題なく済み、控え室として割り当てられた部屋でかなり待った後、宮殿の大広間らしき場所に案内されました。豪華な服を着て、ガリア貴族たちの間を通って歩いていくと、あの時の事を思い出してしまい、頭が重く感じてしまいます。現に僕の頭の上には略式の冠がある訳ですからね。
　ガリア貴族達の視線が痛いです。僕の様な若造が、王家の人々より後に登場した訳ですからね。あんまり大きな声で呼び出さないで欲しかったです。僕の前後に呼び出されたのは、外国の関係者ばかりだった様です。アルビオンのモード大公の姿も見受けられますし、そのほかも王家の方々が多いようです。モード大公に一礼してみましたが、こちらの顔は覚えていてくれた様でした。
　玉座を挟んで対面には、ガリア王家の関係者が居るようです。オデット様や、ジョゼットそっくりなシャルロット姫の姿も見えました。オデット様が何か言いたそうでしたが、この場では無視するしかありません。当然ですが、イザベラ姫も居る訳ですが、さすがにカグラさんの姿はありません。ただし、イザベラ姫の後ろには意外な人物が居たりします。（クロディー、君そこで何やってるの？）

「ガリア王、ロベスピエール４世陛下、御入場～」

それと共に、僕から見て後方の扉が開き、覚えのある強い気配を感じました。ロベスピエール４世健在と言う所でしょうか？　あまり喜ばしい事では無いですが。こういう場での、ロベスピエール４世を始めて見ますが、やはり風格が違いますね。普通に歩くだけで威厳を感じると言うのは、絶対に真似できないです。

「ジョゼフ王子殿下並びに、シャルル王子殿下、御入場～」

今度は、会場の後ろの方で声が上がり、２人の王子が並んで登場しました。何故か、ジョゼフ王子は不機嫌さを隠そうともせずに、シャルル王子は自信満々に見えてしまいます。知らない人が見れば、王位継承権争いはシャルル王子の圧勝だった様に見えるのでしょうね。シャルル王子は無理して余裕を見せている可能性がありますが、ジョゼフ王子は何故不機嫌なのでしょうか？

両王子が、ロベスピエール４世の前で片膝をついて頭を下げます。

「両名とも、長く王都を離れての任務ご苦労であった。そちらの働きに感謝しよう、多くの者が知っておると思うが、今回の任務はそなた達の王としての器量と能力を見せて貰う事が目的であった。試すような真似をした事をここで詫びておこう」

「そのお言葉だけで、この数年の苦労が報われる思いでございます！」

ロベスピエール４世の言葉に、シャルル王子が素早く返事を返しました。貴族受けしそうな返事ですが、言う方は兎も角聞く方は、どう感じるでしょうね？　ジョゼフ王子の沈黙も気になる所です。

「そうか、感謝するぞ。　では、皆も待っておるだろうから、早速、我が王子達の功績を披露する事としよう」

　ロベスピエール４世の合図で、広間の側面に架かっていた布が外されました。かなり上等な布地だったので、部屋の装飾の一部だと思っていたので、少し驚きました。妙な所にお金をかけるものですね。布の下からは、これまた立派なボードが現れました。

□□□□□□
□□□□□□
□□□□□□
□□□□□□
□□□□□□
□□□□□□

　こんな感じで小さな布が張られている感じです。両側の壁にあるので、

□□□□□□
□□□□□□
□□□□□□
□□□□□□
□□□□□□
□□□□□□

□□□□□□
□□□□□□
□□□□□□
□□□□□□
□□□□□□
□□□□□□

　こんな感じになります。６行×６列が２面と表現すれば分かりやすいでしょうか？左のボードが左側に立っているジョゼフ王子で、右のボードがシャルル王子なのでしょう。そして、この５年間の成績

（含む合計）が書かれていると言う訳ですね。こう言う物をこちらで見るのは始めてですね。統治を任された土地の収穫高や税収を直接比較するのは難しい筈ですが、どう表示するのでしょうか？

そう思っていると、直ぐに縦一列の布が浮き上がって、取り去られました。

Ｊｏｓｅｐｈ	Ｃｈａｒｌｅｓ
１０２	１８１
１２１	３１５
１０５	１３５
１０１	０５０
１３０	０９８
５５９	７７９

その結果を見て、多分、シャルル王子陣営と思われる前方の貴族から、抑えた様な歓声が上がりました。数字を見る限り単純に、税収額の増減を前年比か例年比で比較したのでしょう。増減比を足した結果が一番下ですかね？　増減率を足すのはあまり正しくない評価方法だと思いますが、同意を得るのは難しいでしょうね。

表自体は、あまり分かりやすいとは言えませんので、単純に数字が大きいので貴族達は反応したのでしょう。５５９：７７９ですか、この時点では、予想通りシャルル王子陣営圧勝ですね。表の右側が楽しみです。

シャルル王子側の５０％減っていうのが目立ちます、ここまで酷いということは、やっぱり鉱山の町の結果なんでしょうね。関係ない鉱夫に犠牲が出ていてこの数字では、亡くなった方も浮かばれませんよね？

そんな感傷に浸っている間に、布が次々と剥ぎ取られて行きます。最終的には、

	Ｊｏｓｅｐｈ	Ｃｈａｒｌｅｓ
１０２	１１２	１３１
１２２	０８１	０５１
１２１	１４０	１５９
０５５	０４２	０２９
１０５	１１２	１３３
１３０	１２８	０００
１０１	１０５	０００
０００	０００	０００
１３０	０００	０００
０００	０００	０００
５５９	４６９	４２３
３０７	２５１	０８０

	Ｃｈａｒｌｅｓ	Ｊｏｓｅｐｈ
１０３	１５０	０５９８
０６６	０５０１	農村
１６３	０００	０５８３
０００	０４４１	山村
０００	０３５０	１３５
０００	０３９３	港町（漁村）
０００	０２０６	０５０
０００	００５０	鉱山の町
０００	０１３０	０９８
０００	００９８	交易の町
１５０	１８６７	７７９
０６６	１４８３	合計

という結果でした。経過年数から対象になった場所も分かります。分かりにくいので、少し表を変えてみましょうか？

	Ｊｏｓｅｐｈ	Ｃｈａｒｌｅｓ
１ｓｔ	２ｎｄ	３ｒｄ
２ｎｄ	３ｒｄ	４ｔｈ
ｓｔ	４ｔｈ	５ｔｈ
農村	１０２	１１２
	１１２	１３１
	１３１	１０３
	１５０	０５９８
	０５９８	１

81　122　081　051　066　0501
山村　100　121　140　159　163　0683　1
00　315　055　042　029　0541
港町　100　100　105　112　133　0550　1
00　100　135　130　128　0593
鉱山　100　100　100　101　1055　0506　1
00　100　100　050　000　0350
交易　100　100　100　100　130　0530　1
00　100　100　100　098　0498
合計　502　533　576　575　681　2867　5
81　737　471　373　321　2483

頭の中でグラフ化してみましたが、傾向として右肩上がりと右肩下がりなのが対照的です。

＞i19142—2090＜

＞i19143—2090＜

もう少し分析してみましょうか？　最後の行を、5で割って平均化して、両王子の成績を直接比べると。

	1st	2nd	3rd	4th	5th
ジョゼフ王子	100.4	106.6	115.2	115.0	136.2
シャルル王子	116.2	147.4	094.2	074.6	064.2

＞i19144—2090＜

何と言うか、シャルル王子の方は、集計結果の間違いを疑いたくなりますし、一発屋の芸人の売り上げ？の様に見えますね。ああ、つい先日見た前世の記憶の夢で、こんな形のグラフを見ましたね。大学の最初の実験で、教授の助手に再測定を命じられたのが思い出されます。

最後の、１８６７：１４８３が判明すると、広間は静寂で包まれてしまいました。正確には、僕の席からは、貴族の列の後方で喜びの声を抑えている下級貴族が見えていたりします。どうやら、ジョゼフ王子陣営の貴族らしいです。（その数は意外と多かったりします）

表からは、ジョゼフ王子の圧勝が見て取れます、予想では結構な大差でジョゼフ王子が勝利すると思っていたので、シャルル王子は善戦したのかも知れません。

気になるのは、

1. 農村の４年目でガクリと税収が減っている
2. シャルル王子側の同じく農村の税収の低下が大きすぎる
3. ジョゼフ王子の５年目の１３０％という信じられない数字
4. 何故、もう1年か2年経過を見なかったのか

でしょうか？

それにしても、場所別でシャルル王子がジョゼフ王子に勝っているのは、港町（漁村）だけだと言うのが皮肉な結果です。確か、ここは対応に困った貴族達が、中古船を払い下げした場所だったはずです。１の農村の４年目は、どちらも明らかに税収減なので、全国的に不作だったのでしょうね。

2～4は、機会があれば誰かに聞いてみたい物です。4に関しては、正解はロベスピエール4世だけが知っていそうですが、聞き出すのは無理でしょうね。

僕は視線を、運命の2枚のボードから、主役の2人の王子に移しました。シャルル王子は、結果を見て呆然という感じですが、勝者であるはずのジョゼフ王子は俯いたままでした。

「結果は見ての通りだ。私の後継者は、ジョゼフとする。異議あるものは居らぬな？」

ロベスピエール4世が宣言するように声を上げました。いや、沢山居ると思いますよ。特に列の前の方にね。ガリアもこれから大変そうですね。

「ジョゼフを王太子に、シャルルにオルレアン領を与え大公とする。勝負は終わった、両名ともこの争いは忘れ、ガリアに尽くしてくれ！」

その言葉に、我に返ったシャルル王子が、少しだけ歪んで見える笑顔を見せて、ジョゼフ王子に握手を求めるように手を差し出しました。

「兄上、参りました。私は喜んで、貴方の臣下として」

物語（歴史）とは違う展開でしたが、結果は変わらなかった訳ですね。（オルレアン領と言ったロベスピエール4世が、僕に意識を向けた事が少し問題ですが）

僕が一瞬、皮肉な事を考えた時、物語（歴史）とは全く違う事態が起こりました。それまで俯いたままだったジョゼフ王子が、不意

に顔を上げ、仔細構わずシャルル王子を殴り倒してしまったのです。こんな展開は誰も予想していなかったらしく、広間は静寂に包まれました。

「シャルル！　お前は、この下らない争いで、何故死者など出した！」

堪えていたものを吐き出す様な、ジョゼフ王子の声だけが広間に響きました。僕はこの言葉を聞いて、凄く嬉しく感じました。そして、わずかですが、ロベスピエール４世も微笑んだ気がしました。

「・・・たぞ」

ジョゼフ王子が、多分、シャルル王子だけに聞こえる声で何か言いましたが、僕には聞き取ることが出来ませんでした。

そこからは、広間は大混乱でした。僕も危険を避けるために引きずられる様に広間を後にして、先程の控え室に押し込まれる形になりました。僕の目には、怒りに震えるジョゼフ王子と、殴られた頬を押さえたシャルル王子の姿だけが印象に残りました。

第九十六話　ラスティン２１歳（結果発表）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／２／２８
グラフと表を修正

外伝十三話　王子様のゆ・う・う・つ（前編）（前書き）

外伝十三話ＵＰします。

３話ほど、某王子様の話になります。気に入らなければ読み飛ばしていただいて構いませんが、外伝十五話の最後だけは読んでおく事をお勧めします。

この外伝は、とある事の練習なのですが、やっぱり難しいですね。

外伝十三話　王子様のゆ・う・う・つ（前編）

私が兄の事を意識し始めたのは、我ながら女々しい事だが、とある女性が切欠になっていた。私と兄は年も近い事があり、まるで双子のように育てられたのは、我が王家にとって皮肉な物だと、今なら思うことが出来る。双子を忌む王家で、王子2人を双子のように育てればどんな事になるか想像出来ない父だとは思わないが、未だにその意図を掴むのは難しい事だ。

私達兄弟は、子供の頃から、思い出すことが出来る限り、ほとんど平等に扱われて来た。それが父の意図だったのか、今は無き母の希望だったのかは、多分もう知る機会が無いだろう。魔法の練習を始めたのも同時期だったし、婚約者を宛がわれたのも同時期だったはずだ。

兄には、アナベラという名家の次女、そして私には、オデットという可愛い娘が、文字通り婚約者として宛がわれた。宛がわれたと言うのは、2人の女性を貶める意味では無く、王家では珍しくも無い話だったからだ。何かの偶然で、私の下にアナベラが、兄の下にオデットが宛がわれても、全く不思議では無かったはずだ。これを運命などと言うのだろうか？

婚約者を得た時の私はまだ幼く、オデットの愛らしさを褒められる度に、我が事の様に嬉しさを覚えた事を、何となく覚えている。アナベラという娘は、どちらかと言うとおっとりした娘で、容姿もそれ程優れているとは思えなかった。

しばらく月日が流れ、私は魔法の才能を認められ、兄は逆に魔法の才能が全く無いと断言された。これ自体は、当時の私には誇らしい事だったのだが、今考えれば、良くなかった事になるかも知れない。

私が、その場面を目撃してしまったのは、ほんの偶然だったはずだ。魔法の練習を終えて、気分を変える為に、庭へ出た私に、その会話が聞こえてしまった。

「ジョゼフ様、そんな顔をしないで下さい。アナベラも悲しくなってしまいます」

「うるさい！　お前なんかに僕の気持ちが分かるものか！」

「・・・」

兄とアナベラが何か言い争っているのだと分かった。差し詰め、兄が魔法を使えないことで、癇癪を起こしたのだろうと察しがついたが、少しだけ兄と婚約者の関係に興味があり、こっそり物陰から様子を窺う事にした。

”ぺきっ”

その音は、ほんの小さな物だったのだが、私にはとてつもなく大きな音に聞こえた、今でも木の枝が折れる時のこの音を聞くと、この時の事が思い出される程だ。

もう、小さいとは言えないアナベラが懸命に力を込めて、自分の杖を折ってしまった事に、私は信じられない物を見た気分だった。だが、その後アナベラが言った言葉の方が、私の心を鋭く抉ったのだと思う。

「ジョゼフ様、ジョゼフ様が魔法を使えないのなら、私も魔法を使うのを止めます」

「なっ！　君は！」

「私達は、将来結婚するのでしょう？　夫婦になるなら、奥さんだけが魔法を使えるなんて不公平ですもの」

「何故、君は、僕なんかの為に・・・」

「”僕なんか”なんて言わないで下さい。ジョゼフ様は私の大切な旦那様なんですから。それに私は、ジョゼフ様が、皆に隠れてお一人で魔法の修行をされている事を知っています。もう何年も続けられていらっしゃる事もです」

「なんで、そんな事まで？」

「旦那様になる方の事ですもの、何でも知りたいと思ってはいけませんか？」

「僕には魔法の才能が無いんだ、だから、僕は君に相応しくないよ」

「それを聞いて、安心しました」

「え？」

「”君は僕に相応しくないよ”ではなく、”僕は君に相応しくないよ”だった事に安心したのです。アナベラは、今日から魔法が使えませんから、ジョゼフ様と同じです。ジョゼフ様の事を見続ける事を許していただけますか？」

「う、うん」

「でしたら、今日から魔法以外の事を始めましょう。大丈夫です、ジョゼフ様には何か特別なものがあることは、アナベラが良く知っていますから！」

兄が、アナベラに抱きついて、泣き出す所まで見て、堪らなくなり私はその場を逃げ出す様に去った事を覚えている。冷静に考えれば、夢見がちな少女と、落ちこぼれの王子の恋愛ごっこだと思えるのだが、物陰から見たアナベラの色々な表情がそんな考えを、納得させてくれなかった。

そう、その時私は、アナベラに、兄の婚約者である女性に始めて恋心を覚えたのだと思う。あのアナベラの笑顔が自分に向けられる事を想像するだけで、当時の私は幸せな気分になったものだった。

現在では、私の愛する妻となったオデットの名誉の為に言っておくが、決してオデットが、女性として妻としてアナベラに劣っているとは思わない。オデットは私の事を好いてくれるし、娘を産んでもくれ、王子妃として申し分ない人格を持っている。今では、オデット以外の女性が妻になる事は考えられない程だ。ただ、想いの深さと言う面では、ごく普通だったというだけで、アナベラの想いの深さと比べても意味が無いのは分かっている。（想いは深ければ深いほど、良くも悪くも大きな影響を及ぼす事が今の私には分かっているのだから）

私は、それからも魔法の修行を進める事になった、１２歳でスクウェアメイジになった事を人々は驚きと共に賞賛してくれたが、当時の私が欲したのは、手の届かない女性の一言だったのだろう。それに、認めたくない事だが、その頃から私は、兄の事が怖くなったのだ、いやこれは正確ではないな。

当時の私は、アナベラが自分に微笑みかけてくれれば、何でも出来ると思っていた。そのアナベラの微笑みは、今、兄に向けられている、それならば、兄が本当にどんな事でもやってしまうのではな

いかと、屈折した畏れを感じていたのは、否定出来ない。そして、それはただの畏れでは終わらなかった。

兄は、私も知らなかった魔法の修行を止め、書物の世界にのめり込んだ様だった。そして、その隣には何時もアナベラが居た。メイジとしての道を諦めた兄を周りは、無能王子などと蔑んだが、私にとっては性質の悪い悪夢を見ている様な物だった。

私は、それから逃れる為に、兄が読んだと分かる本を次々と読み漁ったし、兄がチェスを始めたと聞けば、追いかける様にチェスを始めた。不思議な事なのだが、兄が読んだ本の知識を少し話しただけで、周りは私の事を褒め称えた。チェスの様に実際に対戦して確かめた訳ではないが、兄の方が多く本を読み、私よりそれを良く理解していたのだと感じたし、現在ではそれが事実であると知っている。

兄は自分の知識をひけらかす様な事はしなかった、その心理は私にだけは良く分かった。兄がその知識を披露する必要を感じなかったのだろう、自分の横に、自分が何の知識を得たか分かっている女性がいれば、私も同じようにしただろうから。私は、オデットに色々な事を話して聞かせたが、決して満足する事が出来なかった。

一方、私は、書物から得た知識を人に話す事を止められなかった、結果全く皮肉な事に、同じ書物を読んだ私と兄が比較され、私のほうが高く評価される結果となった。周囲の目など、この程度の物かと思い出したのはこの頃からだったと思う。この思い込みが、自分の足を引っ張る事になるとは思っても見なかったのは、やはり私が本質的に先を読み事が得意ではないからなのだろう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝

やがて、私達も成長し成人する事となった。私のアナベラへの想いは、そのままだったがそれを表に出した事は無かったはずだ。何を考えているか分からない父は、王太子を決める事もなく、その権勢を誇っていた。自然な成り行きで、兄も私も婚約者と結ばれる事になったが、私はそれに対して何も出来なかった。

兄はこの頃、魔道具（マジック・アイテム）を集める事に熱心だったのを覚えている。多分、以前からこっそり集めていたんだと思うのだが、ほとんどの者は知らなかった様だ。私にも理解出来ないのだが、兄は魔法を使えない自分を慰める意味で、魔道具（マジック・アイテム）を集めていたのだろうと推測するが、もしかしたら兄なりに自分とそして妻アナベラの身を守る方法を模索していたのかも知れない。

私達夫婦も、兄夫婦も、永らく子供に恵まれる事が無かったが、兄夫婦に子供が出来たと聞いて、私は何故か安堵を覚えた事を思い出す。本当に幸せそうに微笑むアナベラの表情を見て、自分の想いが薄れていく事を感じた。それは兄へとだけ向かっていた想いが、生まれてくる子供に向く事が分かって、奇妙な安心感を覚えたのだと自分の心を分析した物だった。

だが、アナベラは兄に1人の娘だけを残して、始祖ブリミルの下へと旅立ってしまった。その喪失感を説明するのは難しいが、私以上に兄が感じた喪失感は凄まじい物があった様だ。アナベラの安産を祈って用意した多くの魔道具（マジック・アイテム）を無表情に叩き壊す兄の姿を見たと言う噂を色々な所から聞いた程だった。

それからの兄は、無能王子そのものと言った行動を取る様になった。だが、私はそんな兄を本気で軽蔑する事になった。彼女が望んだであろう王になる事を放棄した兄を、許す事が出来なかったのだ。私は兄を蹴落とす為に積極的に貴族達と接触し始めた。

＝＝＝

そんな時だった、ある少年が兄を訪ねて来たのは。その少年はトリステインから態々やって来て、何故か兄との面会を望んだ。彼女が居なくなってしまってから、久しく人と会う事を避けていた兄がどう言う積りか、その少年と会ったと聞いて、私もその少年と会う事にしたが、なんら収穫は無かった。

いやこれは正確では無いな、今でもその少年についてはさほど興味が無い、何度かレーネンベルクと言う名前を聞かなければ、家名さえ忘れていただろう。私が気になったのは、少年と一緒にいた少女の方だった。ハッとするほどの可愛さだったが、上品で大人しいという印象だった。だが、彼女達と話していると、何故か私の中で不安感が増してくるのが感じられた。

結局、兄と何を話したかと言う肝心なことを聞く前に、居た堪れなくなりその場を去る事になった。彼女たちがオデットと会いたいと言うので、彼女達を召使に任せることにした。後で、少年がオデットにプレゼントしてくれたブローチが、かなりの物だと知ってきちんと礼を言えなかった事が残念に思えたのは事実だ。

「貴方、今日いらしたトリステインからの可愛い客人方は、お知り合いですか？」

「いいや、今日始めて会ったが、何かあったのかな？」

「いえ、私あのエレオノールという子と、話が合いそうだったものですから」

正直、エレオノールという娘の名前を出されたのは、意外だったし、彼女の持つ雰囲気がとても気になったので、わざと素っ気無く答える事になってしまった。

「そうか？　君と話が合いそうだったかな？　歳の離れた友人と言うのも良いんじゃないか？」

「気が向いたら、エレオノールの家を訪ねてみたいのですけれど？」

「ああ、好きにするがいい」

そうして、やや強引に話題を変える事にした。あの少女の事はあまり考えたくなかったからだ。もし妻がトリステインに行くとしても、私は行くことが無いだろうと何となく感じていた。

兄の様子は、彼女達の訪問以降もあまり変化は見られなかった。父があんな事を言い出さなければ、主な貴族の推薦で私の王太子へ就ける事が、父に提案されていただろう。勿論、それにあの父が応じるとは思わなかったが、有力な貴族が私の後ろに付いた事を広く知らしめるには、良い機会になった筈だった。

”２人の王子に、領地を与えその手腕を、競わせる事とする”などと言う冗談としか思えない、触れが国中に告知されたのは、私が有力な貴族の多くの協力を取り付ける直前だった。私にとっては、出鼻を挫かれた形だったが、今の兄の状態では結果など分かり切っていると思っていた。

父は、例の告知が終わると、騒ぎを避ける様にトリステインに条約継続の手続きの為に旅立って行った。それ自体は、以前から話があったのでおかしな事ではなかったが、それに兄が同行したのには、少なからず驚きを覚えた。

旅に同行した者から聞き出した限りでは、兄はトリステイン王に会うと直ぐに何処かへ向かったと言うことしか分からなかった。多

少不安は覚えたが、あの兄が簡単に立ち直る事は有り得ないと思えたし、協力を約束してくれた貴族達の言葉もあり、そのまま不本意な競争に立ち向かう事となった。

外伝十三話　王子様のゆ・う・う・つ（前編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

外伝十四話　王子様のゆ・う・う・つ（中編）（前書き）

外伝十四話ＵＰします。

外伝十四話　王子様のゆ・う・う・つ（中編）

■一年目

私に与えられた領地は、何の特徴も無い農村だった。大きな領地を与えられて、多くの部下を従えて、領地を興す事を想像していた私には、全くの拍子抜けだった。兄にも同じ様な農村が与えられたという事を知らなければ、父に抗議していた所だ。

仕方なく農村の統治を始めようと思ったが、私には何をしたら良いのか分からなかった。当然だが、私は王となるべく教育を受けてきた。その中に農村を統治する方法など、教わって来なかった。そこで、私は支配者らしく、協力を約束してくれた貴族達に統治を一任する事にした。

貴族達は、その土地の気候に目を付け何故か、自分達の別荘を建て始めた。彼らの言い分では、別荘が建つことで、村の経済が活性化され、村の発展に繋がるという事だった。自分の領地に、勝手に別荘を建てられた事は不快だったが、結果さえ伴えば、こんな村など気にする価値も無いと自分に言い聞かせる事になった。

貴族達の言う通り、村は大きく栄え始めたのは、事実なのだがこの方法が正しいのか、私は判断する事が出来なかった。

そして、一年が経った頃、私は次の領地に移される事になった。こんな小さな領地よりは、何処か他の場所が良いと考え、父の指示に従う事にした。貴族達に拠ると、この地での税収は3倍にも増えたと言う事で、私も自分の選択を正しいと信じることが出来たのだった。

兄の所に放った間諜（スパイ）の報告では、兄が平民メイジなどと言う、貴族のおちこぼれを雇い入れ何かを試したという報告を受けた。結局、

1年ではほとんど成果を出すことが出来ずに、私と同じ様に次の領地に向かったそうだ。1つ気になったのは、何故か兄がトリステイン出身の商人と何らかの取引をしたと言う情報だったが、1商人に何が出来るだろうか？

■二年目

次に私に与えられたのは、広さだけで言えば、前の領土よりは広いものだった。しかし、林業以外何の産業も無い土地では出来る事も限られてくる。兄も同様の領地だったから、遅れを取らない様にしなくてはならないと肝に命じた。

貴族達も折角建てた別荘が、直轄地に戻ってしまったことを警戒して、直接私財を投資する事に消極的だった。今回も私は、貴族に命じて、この地の統治をさせる事にした訳だが、彼らは伝を使い多くの樵（きこり）を集め、大規模な伐採を開始した。

手早く税収を増やすには、効果的な方法に思えたが、誤算だったのは木材の価格が大幅に下落してしまい、思った通りの利益が得られず、当然税収もそれほど上げる事が出来なかった事だった。これに関しては条件は兄も同じで、あちらが大規模に木材を売り出したという話は報告されなかったから、こちらが一歩先んじた訳だ。同じ手を兄が使おうとしても、まともな税収は見込めないだろう。

間諜（スパイ）からの報告では、兄は今回も平民メイジを雇い上げ、何かを試したらしい。その内容を報告する様に命じたのだが、要領を得ない報告だけで兄が何をしているのか分からなかった。

だが、またしても1年経つと、次の領地へ移ることが命じられた。今回も私の勝ちは確かの様だし、こんな山奥に居るのも飽きていたので、喜んで次の領地へ向かった。去る直前に、1人の役人が私に向かって、苗木を植えるよう求めて来たのだが、面倒だったので、貴族の1人に命じて、植樹とやらを実行させる事にした。

■三年目

次の私の領地は、漁村とか港町とか表現される、大きくも無く小さくも無い港を持つ町だった。当然だが兄も似たような規模の町を任されたそうだ。ここに来て私は、父の意図を掴んだ気がした。父は私達兄弟の、各産業への造詣の深さを試しているのだと思えた訳だ。

こう言った事に関しては、人材が豊富な私の方が兄より何十倍も有利だと確信出来た。知識だけなら兄にも分があるだろうが、兄には私同様、経験が伴わないから、今までの様に苦戦を免れないだろう。

しかし、今回は私が有利とは言えなかった。私の陣営の貴族は、主に内陸（ガリアの北東寄り）の者ばかりで、あまり海での漁に詳しい者が居なかったのだ。困った彼らは、自分たちが所持している見栄の為に購入した船を漁民達に提供する事にしたらしい。立派な船が多かったし、年に一度乗るか乗らないかの船なので十分に使用に耐えると思ったのだが、漁民達はその船を漁にではなく、観光に使用してしまった。

これは、誤算だったが、結果的に町が栄えたので良しとする事にした。貴族達は、意図した訳では無いはずだが、まるで狙っていたかの様に自慢するのは滑稽でさえあった。

兄はと言うと、他国の漁法などを取り入れたらしいが、それでどれほど税収が増えるか、疑問だった。今回は不幸中の幸いだったが、何とか勝ちを拾えた様だ。私には、運が向いていると思えた1年だった訳だ。

だが、私の耳には、2つの噂が届いていた。1つは、我が国の貴族に関するもの、もう1つは兄に関係したものだった。

バルドー子爵という貴族が、兄の支持を表明したと言う物だった。私も貴族達も一笑に付した訳だが、彼が語ったと言われる、

「この争いは、5年で終わる。既に2勝を決めているジョゼフ王子に付かないのは、愚かな事だ！」

と言う言葉は、妙に具体的であった為、下級貴族を中心に信じる者が現れる始末だった。

私もこの争いが、”5年で終わる”という考えには同意出来るので、仕方の無い事なのだろう。所詮下級貴族が集まった所で、何が出来るだろうか？

もう1つの噂の方が、私には気になったと言えるだろう。兄が女官を身近に置いたというだけの噂だったのだが、話自体は下世話な物だったが、あの兄が女性を相手にすると言う事が私には信じられなかったと共に、妙な不安感を覚えた。そう、兄の傍に女性が居れば嫌でもあの女性の事を思い出してしまうのだ。

噂の女官については、ほとんど外出しない様で、碌な情報を得る事が出来なかった。名前も容姿さえも分からない女官など、気にすまいと思っても、不安感を打ち消す事は出来なかった。更に驚いた事に、この不安感は、あのエレオノールという少女から感じた物と同じだと気付いてしまった。

年端もいかない少女に何故、女官と同じ物を感じるのか、我ながら謎な心の動きだと思う。ふと、あの少女と一緒にいた少年の関係が、あの女性と兄の関係と同じなのかも知れないと言う考えが浮かんだ。そうすると、トリステインには私と同じような事を考えている人間がいる事もありえるかも知れない、もし実在するなら是非、一度話し合って見たいものだ。

そんな埒の無い事を考えながら、私の気持ちは既に次の領地に飛んでいた。

■四年目

次の領地は、この国でも重要な鉱山を含む土地だった。支配する領地が少しずつだが、重要度を増すのは嬉しい物だ。私は今回も、貴族達に統治を任せる事にしたのだが、これは完全に裏目に出る事になってしまった。まあ、皆が張り切ってしまった結果だった。貴族達が昨年の汚名返上とばかりに多くの鉱夫を雇い入れ、その鉱夫が割り増しの賃金に釣られて思い切った採掘を行った結果、鉱山のあちこちで落盤事故が頻発して、終には鉱山全体が閉鎖されるという最悪の結果となってしまった。

その報告を聞いた私は、最初は冗談だと思った程、あっけない幕引きだった。鉱夫に死者が多く出たとも聞いたが、それよりも今回の負けが確定したのが痛かった。去年は辛勝だったと思われるので、何か間違いがあると困るから、今年で結果を確定したかったのだが、目算違いも甚だしい。

兄が採掘技術を学ぶ為と称して、トリステインに使節を送ったのを知ったのは、丁度その頃だった。不思議とここ数年、トリステインという国名を聞く事が多いような気がするのは気のせいだろうか？　まさか、トリステインがこっそり兄を支援しているのでは、いや、それは無いな、あの父がそんな事を見逃す筈が無いし、仮に他国の支援を受けて、国王に選ばれたとしても、支援を受けた事がばれてしまえば、国王の座も危うい。

兄がそこまで追い詰められていると思っている可能性も有り得るから、念の為、直接探りを入れる事にした。幸いと言う訳では無いが、今は暇な身分だからな。

兄の所に使者を送り、その帰りを待たず、兄が治めると言う町を訪れる事にした。兄が領地で何をしているかを確かめる為の小細工だったが、その効果か町の様子を具(つぶさ)に観察する事が出来た。少し平民メイジの姿が多かった様に感じたが、その他は特別な物を感じなかったのには安心する事が出来た。

さすがに鉱山の中までは、入る事が出来なかったので、諦めて兄が居るという役所に向かう事にした。役所の一室に居を構えていると聞いたが、本当に役所の一室に住み込んでいるのだろうか？　さすがに王子として相応しくなければ、一言忠告する必要があるかも知れないな
。

珍しい青い髪のお陰だろうが、すんなりと兄の部屋に案内された、部屋自体は最低限の威厳を保っていたが、王子の生活する空間としては、褒められた物では無いだろう。狭い部屋では、兄が机に向かって何かの書き物をしていた。兄は私に気付いた筈なのだが、私に目もくれず書き物を続けた。

何となく声をかけ難く感じて、部屋の中を見渡すと、先程は居なかった筈のメイドが1人居た。服装はメイドなのだが、気配を感じさせないで部屋に入ってきたのは、何らかの訓練を受けた者だと察する事が出来た。メイドは私に一度頭を下げると、そのまま兄の机に向かい、持っていた書類の様な物を差し出した。

兄は顔を上げる事も無く、書類を受け取り書き物（多分決済のサインなのだろう）を続けた。随分と慣れている様子だと感じたが、メイドはそのまま兄の後ろに控えるように佇んだ。正直、この女が何者なのか分からなくなった。大柄な体格に、気配を感じさせない立ち居振る舞い、書類を運んでくる、メイドの格好では、何が何なのか分からなくて当然だろう。

もしやこの女が、兄が近くに置いた女官なのかと思い至ったが、兄の趣味も随分と変わった物だと、半信半疑な気持ちでその女を眺めていた。すると今度は、きちんとノックがされ、またしてもメイ

ドの格好をした女性が部屋に入って来た。こちらは随分と小柄である、身長だけで言えば、少女の様だが落ち着いた雰囲気がその印象を裏切っていた。

まさかこちらの女性が！　いや！そ、それは無いな、そう言った趣味の貴族が居ると聞いたことがあるが、王家の者がそんな。

「ジョゼフ様、お客様がいらしているのですから、仕事の手を休めて下さい！　クロディーも、何でお客様を放っておくんですか？」

「失礼しました、シャルル殿下でいらっしゃいますね。こちらにお座り下さい、さあ、お茶をどうぞ」

いつの間にか、私の横に移動したいたクロディーと呼ばれた女が私を強引にソファーに座らせて、少女の淹れたお茶を勧めるのは、まだ良いとして、兄までもが書き物の手を止めソファーに腰を下ろしたのには、驚きを隠せなかった。

「シャルル、お前も忙しいだろうに、良くこんな山奥まで来たものだな？」

「はい、こちらに少し用事があったものですから」

何とか、返事をする事が出来たが、兄は私の領地の事情を知らないと言うのは、思わぬ収穫だった。だが、兄のその少女に向けた表情が、私を急に不安にさせた。覚えがあるあの不安感だ！　私は、出されたお茶に目もくれず、周囲を見渡し、そこにあるものを見つけた。

「兄上、折角ですから、1勝負しませんか？」

経験的に、チェスを見て喜ぶ女性は少ないから、咄嗟にそんな事を言ってみた。兄は、私が見ているチェス盤に少しだけ見入って、勝負を受けてくれた。

「勝負の邪魔をしてはいけませんね。クロディー、イザベラ様の様子を見に行きましょう」

「カグラ、私はあまり、イザベラ様の扱いが上手くないんだけど？」

「避けていては、何時までも上手くならないわよ」

カグラと呼ばれた少女に引っ張られる様にして、クロディーという女も、部屋から出て行った。一応、思った通りに事が運んだ訳だが、未だに鼓動が安定しない状態では、勝負にならないと思った。完全に負けを覚悟した勝負だったが、意外な事に早々と私がチェックメイトと宣言する事になった。今の兄は、何か集中力を欠いている様だ。

兄は純粋に、戦術を考える為にチェスをするが、私は勝つ為にチェスをする。私は、チェスの名人から、様々な定石を教わって、それを駆使する事で何とか兄と五分の勝負をしてきた。兄が突拍子も無い事を思いついた時は、大抵私の負けだったのを覚えている。

だが、今の兄は明らかに精彩を欠いていると感じられる。勝負の合間に、あのカグラという少女について聞いてみたが、”女官として雇った”ということしか分からなかった。

「兄上、腕が鈍ったのではありませんか？」

「シャルル、お前はチェスをしていて、楽しいか？」

「はい」

特に今回の様に兄に勝つことは、私に喜びをもたらしてくれる。
兄は何故かつまらなさそうに、チェス盤を棚に戻してしまった。

「兄上、それでは、私は自分の領地に戻る事にします」

「そうか？　道中気を付けてな」

兄のらしくも無い、言葉を背に部屋を出たが、その時1人の男とぶつかりそうになった。風体からは商人に見えたが、今の男が兄の支援者なのだろうか？　あのカグラという少女が何時戻って来るか不安で、十分に兄と会話出来なかったのは失敗だったが、それでも十分な情報が得られたと思う。

■五年目

そして、私に任される最後の領地になるかも知れない土地は、最後の決戦の舞台に相応しい場所だった。この国の者なら一度は聞いたことがある、交易で栄える町だった。直轄地の中でもこの場所を選択した父が何を考えているかは分からないが、放っておいても税収が期待できると言うのは、ある意味気楽に感じたのは、錯覚だったのかも知れない。

ある貴族の紹介で、エルワン商会の商会長が私を訪ねて来たのはそんな時だった。

「何！　それは本当なのか？」

「はい、殿下。確かに、ローレンツ商会が商取引の独占権を失った事が確認出来ました」

「そうか」

兄も苦労している様だな。だが、私にも運が回って来た様だ、取引高を高めて税収を倍にして見せますという、エルワンの言葉を信じて、町でのエルワン商会の優先権を約束してしまったのは、今思えば失敗だったかも知れない。

可も無く不可も無く、その領地の統治を終えた私を待っていたのは、王都リュティスに戻るようにと言う父の命令だった。やはり、今なお権勢を誇る父にも時間は冷酷に迫っているようだ。

外伝十四話　王子様のゆ・う・う・つ（中編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

外伝十五話　王子様のゆ・う・う・つ（後編）（前書き）

外伝十五話ＵＰします。

シャルル視点もこれで終わりです。

外伝を読まない方でも、最後の部分は読んでおいて損は無いですよ。

外伝十五話　王子様のゆ・う・う・つ（後編）

宮殿に戻った私を待っていたのは、待つだけの退屈な日々だった。貴族たちが毎日の様にやって来て、私が王位に就いた後の、役職などについて尋ねてくるのは、うんざりした気分だった。

かなり、待たされる事になったが、私と兄の争いの結果が発表される日が、明らかになるとさすがの私も緊張感を覚えずにはいられなかった。たった数週間だったが、私には数ヶ月も待たされた気がした。周辺国から要人を集めるのも大変な事らしい。ただ、バルドー子爵が語った言葉と言うのが何故か私の耳から離れないのは自分でも意外な事だった。

そして、運命の日を迎えたのだが、朝から妙に気分が落ち着かない自分が、小物染みていてあまり愉快な感じがしなかった。順々と、大広間に人が入っていくのを眺めながら、私が思ったのはこの5年間の行いが正しかったのかという、今更どうしようもない事だった。

昨日集まった貴族達は、口々に気の早くも、私の勝利を祝ってくれたが、逆にそれが私を不安にしていたなどと考えないのだろうな。ほとんどの参加者が、会場入りしたようだったので、最後に入場する私と、兄が大きな扉の前で待つ事になった。

私の左に立った兄からは、何故か不機嫌さを隠そうとしていなかった。あまり感情を表に出すことが少ない兄が、こんな風になるのはやはりこの争いの敗北を悟ったからなのだろうか？

相次いで名前を呼ばれ、会場に一歩踏み込んだ。私にとっても、この様な機会は今までに、無かったので、私も緊張感を覚えた。だが、意外な事に私が感じたのは緊張感だけでは無かった、敵意とまではいかないが、少なくとも私に対する、批判的な視線が感じられたのだ、それも色々な所から。

多分、兄に付いた下級貴族達なのだろうが、意外な多さに私は、改めて嫌な予感を覚えた。だが、今はそんな事を顔に出す訳にはいかない、無理をして表情に微笑を浮かべたが、上手く演技が出来ているだろうか？　今まで、見破られた事が無かった筈なのに、そんな考えが頭に浮かんだのを何とか振り払い、玉座へと足を進めた。

この広間の左右には、何かの幕が掛けられたいたのが少しだけ気になる。あんなものは、無かったはずなのだが？

父の前に片膝をつくと、父が我々兄弟に語りかけて来た。

「両名とも、長く王都を離れての任務ご苦労であった。そちらの働きに感謝しよう、多くの者が知っておると思うが、今回の任務はそなた達の王としての器量と能力を見せて貰う事が目的であった。試すような真似をした事をここで詫びておこう」

「そのお言葉だけで、この数年の苦労が報われる思いでございます！」

私は、問題なく無難な返事が出来たが、横目で見た兄は、なんの反応も見せなかった。

「そうか、感謝するぞ。　では、皆も待っておるだろうから、早速、我が王子達の功績を披露する事としよう」

父の身振りで、皆の視線が左右両脇の幕へと集まる。私も幕に視線をやるが、何の意図なのか分からないと思った瞬間、魔法で幕が取り去られて、見慣れない大きな額縁の様な者が現れた。何かの絵画かと思ったが、画布は張られておらず、小さな布が規則正しく何かを隠すように、並んでいるだけだった。

訝しく思う間もなく、布の一部が取り去られた。そこには幾つか

の数字が並んでいたのだが、私にはその数字の意味が分かった、私に協力してくれた貴族達にも分かっただろう。桁は違ったが、昨日私が彼らに読み上げた数字が並んでいるのだから。

貴族の間から、いや、私を支持する貴族の間から歓声が上がったのは当然だろう。私側の数字、

１８１
３１５
１３５
５０
９８
７７９

と比べて、兄側の、

１０２
１２１
１０５
１０１
１３０
５５９

は、明らかに劣って見えたのだから、私の領地だった場所の税収が、それぞれ、１．８１、３．１５、１．３５、０．５０、０．９８倍にそれぞれなったと言うのは、全くの事実で、父にはこの数字を手に入れることは容易だったのだろう。

３年目、そう、あの港町での税収の増加が思ったより多かったので、勝利は確実だと思った訳だが、兄の側を見れば無駄な心配をした様だ。だが、布はまだ残っている、右側には何が書かれているの

だ？

広間のざわめきが静まるのを待って、残りの布が次々に取り去られた。それを見て私は・・・、そう、今までに無い絶望を感じた。5年間の合計だと！　そんな話を聞いた事は無かったぞ。私が離れた後の領地がどうなろうと・・・、ダメだ王を目指す人間が、”そんな事は知らなかった”と言える筈が無い！

バルドー子爵が語ったという言葉の真意はこれなのか、身体から力が抜けるのを止める事は出来なかったが、私は仮にも王位を争った男だ、こんな所で無様な振る舞いを見せる訳には行かない。妻（オデット）と娘（シャルロット）の目の前で、そんな醜態は見せられぬ！

懸命に気力を振り絞って、何とか身体に力を込める。そんな私を嘲笑う様に、

「結果は見ての通りだ。私の後継者は、ジョゼフとする。異議あるものは居らぬな？」

という、父が宣言する声が聞こえたが、それが現実だとは思えなかった。

「ジョゼフを王太子に、シャルルにオルレアン領を与え大公とする。勝負は終わった、両名ともこの争いは忘れ、ガリアに尽くしてくれ！」

続いた父の言葉が、これが現実だと言う事を思い知らせてくれた。そうか、私は負けたのか、こうなったら、ガリア王家の王子、いやオルレアン大公だったな、として振舞う事にしよう。（しかし、何故オルレアン領なのだ？　トリステインに接する田舎の土地だったはずだが、またしてもトリステインか、忌々しい）

いや、今はオルレアン大公としての面目を気にしなければ！　私は、何とか言う事をきかない顔の筋肉を酷使して、笑顔を浮かべると、兄に向けて握手を求めた。

「兄上、参りました。私は喜んで、貴方の臣下として」

だが、私は最後まで喋る事が出来なかった。頬に衝撃を感じ、そのまま床に倒れこんでしまったのだ。いや、兄が私を殴り倒したのだが、信じられない事だった。

「シャルル！　お前は、この下らない争いで、何故死者など出した！」

何とか身体を起こした私に、兄の声が届いたのだが、”下らない争い”と言い切る兄の考えが分からなかった。だが、兄は本気でそう思っているのだろう、そうでなければ、この場で私を殴り倒すことなど出来はしないだろうから。

「お前自身と、本気で争ってみたかったぞ」

続いての兄の言葉は、決して大きな物では無かったが、私のこの5年間の思いを打ち砕くには十分だった。兄は私を競争相手として、見込んでくれたのだ、それなのに私はこの5年間何をやっていた？

広間に広がる喧騒の中で、私は後悔だけを感じていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

気付くと私は、自分の私室に居て、頬の痛みも感じなかった。治療が行われたのだろうが、全く記憶に無かった。妻と娘が、心配そ

うに私を見ていたが、私にはどうしたら良いか分からなかった。

「オデット、負けてしまったよ。君を王妃にする事が出来なくて残念だ」

「いいえ、私はそんな事は気にしません。まあ、父は何か言ってくるでしょうが」

「そうだな、娘が王妃になるはずだったのが、大公妃だからな」

「私は気にしませんわ」

「オデット、ありがとう。おいで、シャル」

何が起こったのか分かっていないだろう娘を、抱きしめながら、私は少し落ち着いて将来の事を考えたてみた。あの広間での騒ぎもあって、私を支援していた貴族達は、私の王位継承を主張する事だろう。それをあの父が受け入れるなどとは思わない。

そう考えると、父上が私にオルレアンの領土を与えた事も、素直には受け取れないな。オルレアン領は、トリステインとラグドリアン湖を通して接していて、ゲルマニアにも近い。そして何より私を支援する貴族達の領土にも近い、これは父が何かを考えて私をオルレアン大公に就けたと考えた方が良いのだろうな。

「そうだ、オデット。オルレアンといえば、トリステインに近いな、君の避暑地の近くなって良かったな」

何となく言ってみただけの言葉だったが、オデットは私の目を真っ直ぐ見詰めて、こんな事を言い出した。

「あなた、私はあなたに、1つだけ隠し事をしています。ですが、それは決して、疚しい事ではありませんし、自分の保身の為だけではありません。それが打ち明けられる様になるまで、私を信じて待っていていただけますか？」

オデットがこんな事を言い始めるとは思わなかったから、少しだけ驚いたが、私にはそれ以外の事が重要だった。オデットは、”私を信じて待っていていただけますか？”と尋ねているが、その目は私の目を捉えて離さない。私は、妻の瞳（オデット）の中に理想の女性（アナベラ）を見て息が止まる思いだった。

妻は、私を信じて今の話を打ち明けてくれたのだろうし、もし私がそれを聞いて怒りだしたとしても、許されるまで待つ覚悟が見える。いや、私がそんな事を言い出さない事を妻は理解しているのだ。多分、打ち明け話の方も、私に負い目を感じさせない為に、してくれたのだろう。そして、口に出して言うのは恥ずかしいが、私のも妻の事が今まで以上に、信じられて、何を考えているのか分かると実感出来た。

「分かったよ。お前がそう言うのなら、私は何時までも待つことにしよう」

私がそう告げると、妻は私の胸に飛び込んできた。娘が、少しだけ苦しそうにしているが、我慢してもらおう。大切な女性を胸に抱しめながら、私は何故、今までこの事に気付かなかったのか、考えてみた。以前の妻は、こんな女性ではなかったはずだった。多分婚約者から妻になり、そして母になった事が、妻を大きく変えたのだろう。そして、私も、兄に完敗した事でようやくその事に気付いた訳だ。

もし、私が間違って”王”になどなっていれば、ずっと渇望していた女性の事に気付けなかったのだろう。全く皮肉な結果だ。そし

て、更に皮肉な事に、この事でどうしても近付けなかった兄にやっと一歩だけ近付けたと実感出来た。

随分遠回りしてしまったのだろうが、意外と世の中はこれが普通なのだと思えるから、不思議なものだ。兄だって、アナベラを失っているのだから、お互い様だろうし、絆の深さという面では、私の家族の方が、一日の長があるはずだ。

私は、この時1つの野望を抱いた、野望と呼べるほど立派な物では無いかも知れないが、私にとっては重要な事だ。

”あの兄に、私の事を認めさせる！”

人によっては下らないと言うかも知れないが、兄との戦いを放棄した私には、絶対に達成したい目標なのだ。時間はかかったが、兄とアナベラと同じ関係を手に入れる事が出来たのだから、決して無理だとは思わない。

だが道のりは険しい、今の私の立場は、非常に危うい物なのだから。公式に王太子となった兄にとっては、私は目の上の瘤なのだし、そして、あの父が私を放っておくはずがない。なにより、オルレアンを私に渡した事も、私を試しているとしか思えないのだ。

父は、こう言っているのだろう、”逃げるならトリステインにでもゲルマニアにでも、好きな方に行くがいい。お前を支持する貴族達と軍を起して反旗を挙げるのも好きにするが良い”と。そう、昨日までの私なら、どちらかの道を選んで、多分、簡単に破滅していたのだろう。

”慎重に選択を決めるのだ、シャルル！”、自分にそう言い聞かせながら、命綱無しの綱渡りをする気持ちで、自分の、いや、私達家族の将来を決断した。

先ず、私は、私を支援してくれた貴族達と一切の接触を絶った。

それには、妻の実家も含まれる。非情に思われるかも知れないが、これが彼ら自身にとっても最善の結果をもたらすと信じている。そして、オルレアン大公として恥ずかしくない領地の支配をしてみせる事にした。これは、兄に私の事を認めさせる第一歩になるはずだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

その時は、意外に早く訪れた。国は混乱を極め、正式に王位に就いた兄も自分の欠点を補う為に、私を選んだ訳だが、私としてはオルレアン大公として、領土の統治に努めた結果だと思いたい。

「シャルル、私に力を貸してもらえるか？」

わざわざ、私を訪ねて来た兄から、こんな言葉を言われるとは、想像しかしていなかったが、不思議と心地よい物だったのは、意外な発見だった。

「兄上、いえ陛下、貴方があのカグラと言う少女に向ける笑顔を、少しでも周りの物に見せれば、私の力など必要無いでしょうに」

兄は、本気で嫌そうな顔をした。有無を言わせぬ実績を立てた後なら兎も角、即位したばかりの兄では、周囲に気を使わなくてはならず、周囲との緩衝材の役割を私に求めて来たと言う事だろう。私は兄の要請を受け入れる事にした。止む終えず受け入れた妻の親族だったが、今のままの状態は好ましくないからな。

「陛下、私から1つだけお願いがございます。領地を失った妻の親族達に、小さくても構いませんので、領地を与えていただけないでしょうか？」

「ふむ、まあ良かろう」

兄は探るような目付きだったが、あの親族が、娘の周りにいるのは良くないと確信しているので、本気で探りを入れられても全く心配はしていない。早く出て行ってもらった方が、お互いの為だし、生き残れただけでも幸せだと思って欲しい物だ。

私を支援していた貴族達は、もうほとんどこの世にいないだろう。薄情に聞こえるかも知れないが、彼らが居なくなって清々したと言って良いだろう。状況も読めず、あの広間での出来事を根拠として勝手に私を、反乱の旗頭にしようと企んだ者達に同情する気は全く無い。

詰まらない過去の事より、これからの事を考えよう。兄に、私の事を認めさせる機会が来たのだから、これを活かさない手は無いからな。それが、私の家族にとっての幸せに繋がる事と信じたい。

外伝十五話　王子様のゆ・う・う・つ（後編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

最後の部分は、本編より少しだけ未来のことが書かれています。ガリアでは何が起こったのでしょうか？　九十七話から徐々に事態が明らかになって行きます。

第九十七話　ラスティン２１歳（大王との対話）（前書き）

第九十七話ＵＰします。

ガリアのロベスピエール４世との会話が、再びです。

外伝を読んでいる方は、少し注意して読んでください。

第九十七話　ラスティン２１歳（大王との対話）

はい、こちら絶賛放置状態のラスティンです。皆様いかがお過ごしでしょうか？　軟禁状態と言い換えても良いかも知れませんが、状況が改善される訳では無いので、放置されていると思っています。同行してきた警備隊とも引き離されていますし、先程妙な所にいたクロディーとも会えそうにありません。

一応、部屋の扉の前で警備をしているガリアの兵士に話しかけてみたのですが、芳しい反応はありませんでした。と言うより、話しかけられても無視するように言われている感じです。ニルヴァーナやキュベレーと話していても状況は改善しないですしね。（抜け出すだけなら幾らでも可能ですが、立場上そういう訳には行きません）

食事は出されていませんから、まだ夜と呼ぶには早いと思いますが、何時までこの状態が続くのでしょうか？　そんな漠然とした事を考えていると、部屋のドアがノックされているのに気が付きました。僕の返事を待って部屋に入って来たのは、かなり立派な服を来た老人でした。あれ？見覚えが有る様な気がしないでも無いですね。

「ラスティン・レーネンベルク・ド・トリスティン様、陛下がお呼びです。どうぞ、こちらへ」

僕の素性を知っているからには、服装の事も考えてかなり身分の人物なのでしょうね。うん？何かピピッと来ましたよ。

「大臣殿でしたね、ご壮健でいらっしゃいましたか？」

「はい、陛下のお陰をもちまして」

危ないですね、危うく大臣Ａと呼びかける所でした。この人は、

どちらの王子に付くのかな？なんて考えましたが、考え違いを気付きました。この人は今も昔も、ロベスピエール４世派なのでしょうね、そうでなければ大臣に任じられる事などあるはずがありません。僕に対して腰が低くなったのは、僕が曲がりなりにも王族になったからなのでしょう、実感はありませんが。

大臣Ａ（いや、名前も役職も覚えていないので）に案内されて、見覚えのある部屋に入る事になりました。やはり、ロベスピエール４世と会うのは緊張します。質問されて、勝手に考えている事を読まれるのは面白い経験では無いですからね。

「良く来たな、ラスティン・レーネンベルク・ド・トリステイン」

「陛下も御壮健でなによりです」

「お前も副王になったんだろうに、堅苦しい挨拶は抜きだ。まあ座れ、食事はまだだろう？」

うん、怪しいですよね？　あの、ロベスピエール４世がこんなに気さくに食事を勧めてくるなんて、明日は雪が降るかも知れません。

「陛下のお陰を持ちまして副王などと言う重責を任されまして、戸惑うばかりで御座います」

「そうか、そなたも大変なのだな。一杯どうだ？」

皮肉も無視ですか、貴方がウチの陛下に変な事を吹き込まなければこんな事には成らなかったかも知れないんですがね。酒など飲まされたら、何を読み取られるか分かりませんからね。

「いいえ、副王として修行の身ですので、ご遠慮申し上げます」

「ふん、可愛げが無くなった物だな。そう警戒するな、今日は私は機嫌が良いからな」

ロベスピエール４世の表情は、覚えている物に戻りましたが、口調はあまり変わりませんでした。あれ？本気で浮かれていたりするのでしょうか？　少し突っついてみましょう。

「言い忘れておりました。王位継承者が決定された事、お祝い申し上げます」

「そうか、そうか、中々、本心からそう言ってくれる者も少なくてな」

それはそうでしょうね、今は微妙な時期ですから、僕の様な部外者ではなければ、気軽に話題にも出来ない筈です。これは拙いかなとも思いながら、何が無さを装って重要な点を話題に上げます。（引っかかってくれるでしょうか？）

「ジョゼフ王子もこれから大変ですね？」

「そうだな、ジョゼフの働きに期待するとしようか？」

ダメでした、簡単には本音は引き出せないですね。守りに周るのは避けたいですし、今回も本音で攻める事にしましょう。時間の無駄ですし、折角の食事が美味しくないですからね。この人を相手する場合は、それが意外と良い選択なのかも知れません。（幾らなんでも、気軽に隣国の王族を暗殺しないでしょうし、大丈夫ですよね？　ね？）

「もう止めましょう陛下、腹の内を探り合っても面白く無いでしょう？」

「何だ、もう降参か！　詰まらんな」

本気で詰まらなさそうに、ロベスピエール４世が言いました。むぅ、遊ばれていたのでしょうが、何が楽しいのでしょうか？

「シャルル王子を推していた貴族達は、どうするのですか？　我が国としても対応策を考えておきたいのですが」

「ワシの方からは動かぬさ。奴らがどう動くかは、奴らの才覚次第だな」

「シャルル王子が、もしこちらに逃げ込んできた時は、保護させていただきますが？」

「そんな事になると思うか？」

「いいえ、今の発言は、”ラスティン・ド・レーネンベルク”としての発言と思って下さい」

「立場を使い分けるか、間違えねば良いがな。まあ、シャルルも親孝行な娘を持った物だな」

やはりバレバレですか、予想していた通りですが、シャルル王子が大公になれば、ジョゼットの立場が弱まり、結果ジョゼットの自由が保障される訳です。レーネンベルクとしては、言う事無しですね。トリステインとしては、外交的な切り札を失う結果ですが、使

う気の無い札がどうなっても気になりません。こちらの陛下もここは問題としない筈です。

「シャルルも、もう少しやってくれると思ったのだがな？　今日の事で少しは目を覚ましてくれると良いのだがな」

「陛下は、シャルル王子に期待されていたのですか？」

「期待していたとも、お前は随分と手厳しいな」

どうせ当て馬としてとかでしょうね、などと皮肉な事を考えていたら、思わぬ事を言われました。

「今は、お前に期待しているよ。ゲルマニアのあれは期待外れだったからな」

”お前に期待しているよ”と言う嫌な予感のする部分は無視する事にしても、”ゲルマニアのあれ”は聞き捨てなりません。

「陛下は、ナポレオン1世にお会いになったんですか？」

「なんだ、お前はあれを気にしているのか？」

「宜しければ、どんな人物なのか教えていただけませんか？」

「ふむ、好戦的な野心家といった所だな。先帝とは似ても似つかぬよ」

好戦的な野心家と言う評価も気になったのですが、僕には先帝の下りの方が気になりました。

「陛下は、ゲルマニアの先帝と仲が宜しかったのですか？」

「仲が良い？　そうか、そういう解釈も出来るな。お前も、ジョゼフと仲良くやっていって欲しい物だな」

「お忘れかも知れませんが、私は、単なる”副王”に過ぎません。その副王の座も何時まで続くか分からない状態です」

自嘲気味に言ってみましたが、ロベスピエール４世の表情を見て、拙いと思い言葉を強引に続けました。

「ですが、ロベスピエール４世陛下。我が国のフィリップ４世陛下に妙な事を吹き込むのは止めていただきたい」

「ははは、先手を打たれたか？　ちなみにワシは、フィリップ４世を良き隣人だと思っておるよ」

くっ！　僕が以前に使った論法を使って来ましたよ。本当に楽しそうですし、性格の悪い王様ですね、やっぱりフィリップ４世陛下の方が、安心出来ます。今のロベスピエール４世の言葉は、我が陛下には、客観的に報告する事にしましょう。（主観を混ぜると、要らない波風を立てる事になりますからね）

「陛下は、ゲルマニア宰相には？」

「ああ、先帝がまだ在位していた頃に何度かな。何があれを、あそこまで狂わせてしまったのか？」

それは、心当たりがありますが、変に考えると読まれる可能性が

あるので、故意に意識から外します。

「やはり、ゲルマニアには注意が必要ですね？」

「ふん、あの程度の国がガリアに対抗出来ると思うか？　何かあっても手出し無用に願おう」

「そういう事であれば、我がトリステインがゲルマニアと対した時も手出し無用に願います」

「本当に可愛げが無くなった物だ」

何故本気で嘆かわしそうな表情をするのでしょうね？　まあ、この王様が表情や言葉通りの事を、考えているとは限らないですが。

「そうだ、お前に褒美を遣わそう？　そうだな、今回は関税の低減などとは言わぬ。撤廃してやろう！」

今度も怪しいですね、どう考えても、今回、こんな褒美が貰える様な事は一切やっていませんからね？

「はて、褒美と仰いますが、私は何をやったでしょうか？」

「何を言う、お前の提案あってこそ今日の式典が、行えたのだろうに」

「その件は、既に褒美を頂戴しております」

「なに、ワシの気持ちだ、受け取るが良い」

ダメだ、何かあるのは分かっていますが、ロベスピエール４世の意図が掴めません。ですが、ふと今日見たボードの事が思い出されました。シャルル王子のお陰で、ガリアの多分、有力な鉱山が１つ潰れたはずです。そうなると・・・！

「さすがガリアの大王と呼ばれるだけの事はあります。その慈悲を、是非ロマリアの民にもお与え下さい」

「そうか、良かろう」

ロベスピエール４世は鷹揚に頷きましたが、僕の反撃は上手く行った様です。これで、少なくともガリアだけが、利を得る事は無いはずです。これでガリアからロマリアへの工業品の転売での利益確保は表向き難しくなった筈です。

「褒美がいただけると言うのであれば、もう１つお願いがあります」

「言ってみるが良い」

「ガリア王家の双子の関する慣習を改めていただきたいのです」

「今になってそれを言うか？」

「今だからこそです！　陛下は双子が不幸を招くなどをは、信じていらっしゃらないのでしょう？」

「何故そう思う？」

「陛下の御二人の王子が、王位を争っていた事が、それを証明しています」

双子が国に災いを招くなら、迷信を除けば、同位の存在が2人居るからでしょう。目の前の王がそれを知らないとは思えないですし、知った上で2人の王子を争わせたのは明白ですしね。

「・・・、それで、ワシに何をしろというのかな？」

「ただ、双子が生まれた時の慣習を廃するとだけ、王として発言していただければ構いません」

「ほう、それだけなのか？」

「陛下ならば、今のご自分の言葉がどれ程の影響力を持っているかご存知でしょう？　それに、今しか無いのです！」

今後はガリアの権力は少しずつ、ジョゼフ王子に引き継がれていくでしょう。ジョゼフ王子が王になってから十分な権力を持つまでには時間がかかりますし、ジョゼットをまだ表に出すのは早いでしょう。そんな事を真面目に考えましたが、ロベスピエール4世は真剣な表情でこちらを見ています。あれ？読まれて拙い事は考えていないんですが？

「ふん、まあ良かろう」

少し妙な感じでした、もしかして孫と会いたいとか妙な事を考えているのではないでしょうね？　でも、まあ、ジョゼットもお爺ちゃんには会いたいかも知れませんね。（僕も祖父とは、きちんと挨拶がしたかったと思うことがありますから、想像が出来ます）

「ところで、話は変わるがな」

「はい」

「お前が、ジョゼフに付けた小兎だがな、少々いたずらが過ぎる様だ」

僕は、一瞬言葉を失いました。小兎ね、クロディーは女性としてはかなり大柄なので、小兎と言う表現を受け付けなかったのです。ガリア王家の男性は、立派な体格しているので、クロディーでも小兎と例えられるのかも知れません。それにしても、小兎ね～？

「そうですか、では、私はその”小兎”を褒めなければいけませんね。短期間で陛下のお目に留まる様な働きをしたのですから」

「貴様、本当に可愛げが無くなったな。まあ良かろう、部屋に戻るが良い。宮殿内も落ち着いたであろうから、護衛共とも合流するが良い。懲りずに、また、ガリアを訪ねてくれよ？」

「はい、お呼びがかかれば、私は我が陛下の手足ですから」

こうして、気の抜けない対談が終わりました。はぁ、ロベスピエール４世と話すと疲れますね。そう思って、控え室に戻りましたが、まだ今日は終わっていませんでした。

第九十七話　ラスティン２１歳（大王との対話）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

ガリアで何が起こるか、想像出来たでしょうか？
メッセージで予想を伝えて下されば、こっそりネタバレしますよ？

第九十八話　ラスティン２１歳（００７な女性）（前書き）

第九十八話ＵＰします。

第九十八話　ラスティン２１歳（００７な女性）

「お帰りなさいませ、ラスティン様」

部屋で僕を待っていたのは、クロディーでした。どうやってこの部屋に入ったのか疑問ですが、別に困る物でもないので気にしない事にします。考えてみれば、クロディーもキアラ達の同窓生ですから、妙な事をもう１つの専攻にしている可能性があります。

「クロディー、さっきは何故、式典に居たんだい？」

「あれは、私も本意では無いのです。イザベラ様が駄々をこねるので、苦肉の策でした。目立たなかったと思いますが、やはり、ラスティン様には分かってしまいましたか？」

「え？　まあ、知った顔がガリア王家の方々に交じっていれば、嫌でも気付くよ」

ここは突っ込むべきなのでしょうか？　クロディーは自分が長身なのを気にしていた筈ですから、止めておきましょう。正直に、ガリア王家の女性陣の誰よりも目立っていたなんて言ったら、ショックを受けてしまうかも知れませんしね。

「それにしても、王女に気に入られるなんて出世じゃないか？」

「いいえ、やっぱり、カグヤの方に良く懐いていますよ。私は、どうも小さな子供とは相性が悪いらしくて」

それで、小柄な女性とかが好きになってしまう訳ですか。間違っ

ているとは思いませんが、男性にも興味を持って欲しい物ですね。イザベラ姫が、カグラさんに懐くですか、そうすると性格が歪んだりしないんでしょうね。イザベラ姫とシャルロット姫が仲良くなったりするのでしょうか？　あまり想像出来ませんね。

「そうだ、君に１つ提案を持って来たんだけど。君は僕に、何か用だったのかな？」

「はい、これを見ていただこうと思いまして」

クロディーは女官服の中から、もぞもぞと何かを取り出しました。何かの書類の様ですが、女性の肌に触れていた物を手に取るのは、少し抵抗がありますね。しかし、クロディーに強引に手渡されました。（エレオノール、これは疚しい事じゃ無いからね？）

まだ、少し温もりが残った書類には、僕が知りたいと思っていたことが書かれていました。以前疑問に思った、

・シャルル王子側の農村の税収の低下が大きすぎる
・ジョゼフ王子の５年目の１３０％という信じられない数字

の理由と、

・シャルル王子派の貴族の名前
・ジョゼフ王子派の貴族の名前

が書かれていました。

”シャルル王子側の農村の税収の低下が大きすぎる”については、農村に貴族達の別荘が立ち並びそれを当てにした商売を始めた人達が、別荘に実際に貴族達が住むことが無くなった為に、借金を抱え

て逃亡してしまった為の様です。時代を読むのは難しい事なのですね。

一方、ジョゼフ王子の5年目の結果は、予想外な物でした。クロディーも知らなかった様ですし、ローレンツさんは知っていたのか知らなかったのか微妙です。いや、多分ジョゼフ王子と協定を結んでいたと考えるのが自然ですが、娘婿のセザールさんの独断とも考えられます。狐と狸ですね?

ああ、これじゃあ、分かりませんよね? ローレンツさんから僕が得ていた情報は一部間違った情報が混じっていました。具体的には、場所に関して故意に違う場所が教えられたと思えます。そして、ローレンツさんの娘婿のセザールさんが独断で行ったのは、ローレンツ商会が得た商取引の独占権を返上してしまったのです。

これでも、説明が不足でしょうね。ジョゼフ王子が統治した4個の領地は、概ねガリアの南西に集まっていて、その中心に例の交易の町があり、4個の領地で栄えた産業が、交易の町を中心に上手く回るようになったと言う訳です。言うなれば、ジョゼフ王子はガリアの何分の一かを栄えさせたと言う事だったのです。

「君はこれを、ジョゼフ王子にも見せたのかい?」

「はい、一応便宜をはかっていただきましたから」

これには、シャルル王子が例の鉱山の町で出した死者の数まで明記されています。ジョゼフ王子はこれを見てしまった訳ですか。あの騒ぎの原因の一部は僕にあった様です。中々笑えない話ですね。

そして、重要なのが両王子の派閥に属する貴族達の名前と領土です。ジョゼフ王子派は、各地に散らばっていますが、シャルル王子

派貴族の多くは、ガリアの北東側に領地を持っています。まあ、それ以外は、現在もロベスピエール４世派なんですが、シャルル派は少し無理をすれば貴族が集まって１つの独立国を作れそうな勢力です。これをロベスピエール４世が見逃すとは思えませんので、ご愁傷様と言っておきましょう。

「凄いじゃないか、クロディー。どうやってこの情報を手に入れたんだい？」

「勿論、私の特技を使いました」

「特技？　外交以外に専攻した学問かな？」

「確かにあれは学問でした。闇から闇に移動し秘密の書類を手に入れる、学問と言うより美学と言った方が良いのではないでしょうか？」

それに同意を求められても困るんだけど、もしかしてスパイとかでしょうか？　外交などという物は諜報戦という側面もあるので、意外と間違っていない選択かも知れません。ですが、物陰（例えば大きな壺とかですね）に潜むクロディーを想像して、大きな、そう大きな問題を思いつきました。

クロディーは、女性らしい体型をしていますが、その身長だけは男性並みです。うん、はみ出ますね、主に縦方向に。目立たないように振舞うのも訓練したのでしょうが、明らかに方向を間違えたとしか思えません。しっかりと、ロベスピエール４世にもばれていましたし、注意しておきましょうか？

いいえ、僕も副王となったからには、上手く人を使いこなしたいです。何とか、話を上手く持っていけない物でしょうか？

「ラスティン様、いかがでしょうか、私の働きは？」

何だか褒めてくださいオーラ？みたいな物まで感じますよ？

「うん、僕が正に欲しいと思っていた情報ばかりだよ、集めるのに大変じゃなかったかい？」

「いいえ、こう言った事は、師匠から良く教わりました。依頼人、この場合はラスティンさまですが、必要とする情報を読み解く所から、入手方法までばっちりです。何と言っても、免許皆伝の腕前ですから！」

腕前だけは免許皆伝かもしれないけど、生かせなくては意味が、そうだ！

「君は、その腕前を人に教える事は出来るかな？」

「教えるですか？　多分出来ますけど、それが？」

良し、この手で行きましょう。丁度、僕からの提案が生かせますし、多分これが、クロディー自身の為でもあるはずです。

「クロディー、君の今の任務を解除する」

「え！　・・・、はい、分かりました」

クロディーには、意外であり、予想できた命令だったのでしょう。クロディーがカグラさんを支える時期が終わったと言う事は、クロディー自身の報告書から読み取れた事なのですから。

「君には次の仕事に就いてもらうよ。とりあえず、君には、ガリアにいるトリステインの間諜を探し当てて欲しい」

「何故そんな面倒な事を？　副王になられたラスティン様なら、命じれば済むだけなのでは？」

「トリステインの間諜の質を知っているかい？」

「え？　もしかして、そんなに酷いんですか？」

酷いんですよ、ガリアの王位継承権争いの事をほとんど掴んでいないのですから、ガリアの将来を決める大事なイベントで、次期国王の能力を知る重要な機会だったはずなのに。

「そうなのですか？　でもそんな人達を探り当ててどうするんですか？」

「勿論、君との能力の違いを見せ付けるんだよ、使えると思った人物が居れば、君の手で鍛えて欲しいんだ」

「はあ、それは構いませんが、私で良いのですか？　外交官の方々や、大使の方がどう言われるか？」

「君には、人手が集まれば、アルビオンに行ってもらう」

クロディーの指摘を無視する形で話を進めます。

「アルビオンですか？」

「そう、そこで、マーニュという人の下で外交について学んで欲しい。そして、同時に間諜達の再教育もして終わらせてくれ。それが済んだら、間諜達を使って、モード大公について調べて欲しいんだ。出来るかい？」

「モード大公というと、アルビオンの王弟殿下でしたね」

「その任務が完了したら、君には、ガリアでトリステイン大使の副使になってもらう」

「はい、是非やらせていただきます！」

クロディーの瞳には、理解の光が浮かびました。何故こんな面倒な事をするかといえば、クロディーに外交の実際を知ってもらうのが目的でした。公立学校の理事長ローレンツさんでも、外交官の仕事を実際に経験させる事は無理だった様なので、知識だけではなく経験を積ませるという意味が大きいです。

ちなみに、トリステインの諜報機関の強化や、”ティファニア”の調査に関しては、今思いついた物ですが、アルビオンで行うのであれば、何とか誤魔化せると思います。（ガリアでやったら、間諜が全滅する可能性もありますからね）

＝＝＝

目を輝かせて、何かのプランを考え始めたクロディーに１つ質問を投げかけてみます。

「クロディー、キアラが僕に恋愛感情を抱いていると言うのは、本当なのかな？」

クロディーが驚いた様に顔を上げて僕の顔を見ましたが、何かを感じたらしく苦笑を浮かべました。

「やっぱりあの子は、まだ告白していないんですね？　あれを恋愛感情と呼んでいいのか分かりません。どちらかと言えば、崇拝に近い感情かも知れませんね」

「僕がキアラから、崇拝されている？」

全然納得行かない話です。ですが、少しだけ分かるような気もします。キアラは僕に自分の望む通りの偉大な存在になって欲しかったのかも知れません。

「やっぱり、お分かりになりませんか？　ラスティン様には婚約者のエレオノール様がいらっしゃったのですから、多少想いが歪んでしまっても、仕方が無いと思いますけど？」

「歪んだ想いか、何だか怖いね」

「大丈夫ですよ、キアラにも自分がどうなりたいのか、明確な想像はついていないでしょうから」

「そうか、ありがとう」

「ラスティン様が幸せになる事が、キアラの望みになると良いですね」

僕が幸せね、副王なんかをやっている限り、どんどん不幸になっていく気がするんですが。

「そうだ、殿下にカグラから伝言を預かっています」

「聞こうか、何でも言ってくれ！」

「殿下も随分歪んでますよ？」

同じ様に歪んでいる人間が言っても説得力無いですよね？

「いいから！」

「はい、”頂いた首飾りの宝石と同じ物を、幾つか頂けないでしょうか？”だそうです」

「魔法宝石（マジックジュエル）の事だよね？」

「そうです」

「アクセサリーにした方が良いのかな？」

「いいえ、魔法宝石（マジックジュエル）の方に用があるらしいですよ？」

「クロディー、君は何か知っているな？」

「え～っと、私とカグラだけの秘密ですよ～」

「くっ！」

何て羨ましい！　じゃなくて、何に使う積りなのでしょうか？

魔法宝石（マジックジュエル）自体は石があれば幾つでも作れるのですが、直ぐに用意しては怪しまれますからね。（ジョゼフ王子に目をを付けられても面

倒ですし）

魔法宝石（マジックジュエル）に関しては、価値が下がり気味ですが、（不思議なのですが）売り上げとしては横ばいなので、問題が無いと思います。まあ、弟のノリスがそれなりに魔法宝石（マジックジュエル）を作ってくれていると思います。ライル辺りに製法を伝授したいですね。

トリステインに帰ったら、早速心を込めて錬金する事にしましょう。あ！　どうやって石を手に入れましょうか？　気軽に石も拾いに行けないんですよね、帰りの旅の間に何とか手に入れる事にしましょうか。

第九十八話　ラスティン２１歳（００７な女性）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／３／６
ジョゼフ王子は国の何分か一を栄えさせて見せた訳です。
←
ジョゼフ王子はガリアの何分の一かを栄えさせたと言う事だったのです。

エレオノール様がいらしたですから
←
エレオノール様がいらっしゃったのですから

に修正

第九十九話　ラスティン２１歳（肖像）（前書き）

第九十九話ＵＰします。

今回から基本的に一人称及び口調が急変します。
別人が主人公になった訳では無いですよ？

第九十九話　ラスティン２１歳（肖像）

さて、私の名前は、”ラスティン・レーネンベルク・ド・トリスティン”と言う。名前が示す通り、このトリステイン王国の王族なのだが、王の亜種とも言える”副王”の位に就いている。

何？　”お前は、誰だ？”だって？　今の自分の口調には自分でも違和感があるからそう言われるのも、理解出来るのだが。何故こんな事になったかと言えば、我が秘書官殿によって、強制的に矯正されたと言う事情なのだ。（自分で言っていても情けなくなってくるが）

僕が、ガリアから戻ると、キアラが当然の様に僕を迎えてくれたんですが、簡単に副王の執務室に入ることなんて出来ませんよね。まあ、ユニス辺りが手配したんでしょうが、執務室に入った僕は、心臓が止まるかと思いました。

キアラの態度は、エレオノールと対面した前後であまり変化しませんでした。ただ、以前は僕の前ではかけなかった眼鏡を、きちんとかけるようになった事と、僕が副王として相応しくない態度をとった時には、容赦なく注意されます。

あ！　今もキアラがこちらに注意を向けています。何故か、キアラには僕が”僕”で考えている時と”私”で考えている時が区別出来るらしいです。ラスティン検定なんてものがあれば、２級は固いですね。（ちなみに１級はエレオノールしか持っていませんよ？）

「ラスティン様？」

「なんだい、キアラ？」

「いいえ、何でもありません」

こんな感じになる訳なんだが、かなり肩がこってしまう。エレオノールやクリシャルナと話した後などは、特に気が緩んでしまうので注意が必要なのだ。私もキアラの期待に応えると誓った身だから、慣れるしかないのだろう。

「キアラ、今年の高等学校の卒業生たちだが、その後はどうなっているかな？」

「はい、順調に仕事を覚えてくれている様です。用意が整い次第、順次王宮に来てもらう様に手配してあります。マース領の領主代行を引継ぎが終われば、マリユスも王宮に来ると思います」

「次のマース領の領主代行は、ジェフ君と言うんだったね？」

「はい、私の後輩の中でも、優秀な子ですよ。生徒会の会長をやってもらった位、人をまとめるのが巧みです」

「そうか、それは期待出来るな。ところで、そのジェフ君の専攻は？」

「確か、政治と心理学だったと思います。人心掌握は、私より得意でしたね。ただ、女性心理を専門にしているとか、変な事を聞いた事があります」

「女性心理？　また本当に変な事に興味を持ったんだな」

「そうなんです。しかも、その事は他の人には、秘密だそうです」

「うん？　ま、まあ良いか」

それは遠回しな告白じゃないのかと、突っ込みたくなるな。キアラを巡る高等学校の人間関係が、段々怖くなって来たぞ。そのうち誰かが、刺されたりするんじゃないだろうな？（その可能性が一番高いのは、私自身だというのが笑えない事実だな）

「後は、アンセルムかな？」

「はい、アンセルムは王軍の方を鍛えなおすと言っていましたから、もう少し時間がかかるかと」

「クロディーの方は？」

「はい、アルビオンで活動を開始したそうです。ただ、命令が抽象的ですから、完了まで時間がかかるかも知れませんね」

「ユニス、キアラ、マリユス、アンセルム、そしてクロディーか、優秀な部下に恵まれたものだね」

「その5人をまとめるのが、ラスティン様のお仕事なのですよ？そう言えば、ユニスから報告があるそうです」

「ああ、多分、新硬貨に関してだよ。張り切っていたから、もう形になったんだろう」

旧モーランド侯爵領は、国王の直轄地となりマース領と名前を変えた。ここは私に統治が任されたままなので、名前も領主代行や役人の選考等も自由になる為、レーネンベルク公立高等学校の卒業生達の実践の場としてしても活用する事になった訳だ。

キアラの進言で、ゲルマニアの元貴族ブルーデス伯爵を、補佐官

として送り込んだ事で、ゲルマニアとは一種の膠着状態になっている。

ブルーデス伯爵は本来なら、ゲルマニアからの身代金で開放されるはずだったのだが、身代金も払われず使い道に困っていた所で、キアラがゲルマニアに寝返ったモーランド侯爵（今では、ゲルマニアのモーランド辺境伯と名乗っている）に対抗する手段として、名目だけの補佐官としてモーランド辺境伯に対しての牽制役となっている。

モーランド辺境伯もやりにくい事だろう、逆に領主代行は裏切り者など気にせずに統治を布いている訳だ。マース領には警備の為に国軍を送り込んだが、実際使い物にならなかったらしく、アンセルムが苦労している訳だ。

クロディーの方は、多分期待に応えるくれるだろう。一人の間諜としては使い辛いが、着眼点は間違えない様だし、部下の育成さえこなしてくれれば、トリステインも外交面で他国に出し抜かれる事も減るはずである。

5人が上手く連携して動くようになれば、多分、私への負担は全くなくなる筈なのだが、そうなってしまうと私の存在意義が無くなるのでそこまでやる気は無いが、私とキアラの下には全ての情報が集まる様にするべきだと思う。

キアラには、グレンさんに王宮の事を教えてもらったり、マザリーニ枢機卿の下で事実上の宰相のの補佐をやってもらう。当然私の秘書もやっている訳だから、キアラはこの王宮で一番忙しい女性かも知れない。

クロディー以外の4人が全員王宮入りすれば、私の足場固めはほぼ確実になり、今年の高等学校の卒業生が仕上がってくれれば、手が回っていなかった部署にも送り込める筈なので、万全になると言えるだろう。些か予想より早かったが、自分の命が懸かっていると思

えば、早いに越した事は無いだろう。

「ラスティン様、ユニスが来たようです」

「ああ、通してくれ」

埒も無い事を考えていたら、ユニスがやって来たらしい、丁度ガリアを訪問している間に、新硬貨の試作品が出来たのだろうが、ユニスのデザイナーとしての腕を見るのは始めてだから、楽しみではある。

「ユニス、ご苦労様」

「殿下、依頼の硬貨が完成しました。ご覧下さい！」

「随分と急に話を進めるんだね。これか、中々立派な物じゃないか。ん？」

白金貨、金貨、銀貨、銅貨と順番に仕上がりを確認して行くと、銅貨に有り得ない物を見てしまった。何で？銅貨に明らかに僕の顔と分かる肖像が描かれているんですけど、何故こんな事に？

「ユニス、今回の硬貨はどういう方針で、デザインしたんだい？」

「はい、王家の方々のお顔を描いてみました。フィリップ４世陛下、マリアンヌ王妃殿下、アンリエッタ王女殿下、そして、ラスティン副王殿下をそれぞれ、白金貨、金貨、銀貨、銅貨に採用させて頂きました。ラスティン様を銀貨にという案もあったのですが、殿下は望まれないと思いまして、銅貨にさせていただきました」

う！　何故か文句が、言い辛いですね。王家の人をデザインに採用するのは一般的な気もしますし、僕を銅貨に使うと言う事で気を使われてさえいます。ここで我侭を言ったら、何だか子供の様ですよね？　あれ？　キアラからの突込みが来ないですね？

「キアラ、ポケットに入れた銅貨を出すんだ」

「何の事でしょうか？」

「一枚と言わず、何枚でもありますよ？」

ユニスが懐から、何枚かの銅貨を取り出しました。これでは、キアラから取り返しても意味が無いな。試作品の割には沢山鋳造した物だな。そうだ、別のデザインを考えさせれば良いじゃないか、まだ試作段階なのだろうし。

「ユニス、これは試作した硬貨なんだろう？」

「いいえ？　陛下から既に許可は頂いたので、既に量産に入っていますが？」

「ず、随分と、話が早く進んだんだね」

「はい、錬金隊のメイジが、私のデッサンを直ぐに硬貨にしてくれましたから、型を作るのも簡単でした」

しまった！　自分で自分の首を絞めてしまったらしいぞ、陛下の許可が出ている以上、私からは手の出し様が無い。う～～～む、ダメだ手が無いぞ！　こうしている間にも、どんどんこの恥ずかしい銅貨が量産されている訳だ。仕方が無い、銅貨は使わない様にしよ

う。当然お釣りも、受け取り拒否だな。（そういう機会があるか分からないが）
　私は、もう一度、銅貨をしみじみと眺めてみた。私の肖像もかなり美化されている気がするな？　まあいい、今度、エレオノールに会う時のお土産にしよう。何かの話題くらいにはなるだろう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「スティン兄様、突然、どうされたんですか？　次は、来週と仰っていませんでしたか？」
「君には、毎日でも会いたいと思っているからね。今日は少し理由が出来たから特別なんだ」
　僕は、エレオノールに向けて硬貨を弾きました。くるくると回って上手い具合に、エレオノールの手に銅貨が収まりました。不思議そうに銅貨を眺めていたエレオノールでしたが、そこに描かれている人物に気付いたのか、ピタリと動きを止めてしまいました。そして、物欲しそうな表情を浮かべました。（中々、可愛い感じですよ？）
「エレオノール、そんな目で見なくても、それは君にあげる為に持って来たんだよ」
「はい、ありがとうございます。大切にします！」
「いや、それは記念硬貨とかじゃなくて・・・、まあ、そうしてくれると、嬉しいかな？」

”いくら一般に出回る物でも、兄様から頂いた物は特別なんです！”という、エレオノールが言い出しそうな言葉が頭に浮かんで、言葉を途中から変更しました。大事そうに銅貨を懐にしまう姿は、キアラの行動とダブって見えてしまいます。

第九十九話　ラスティン２１歳（肖像）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百話　ラスティン２１歳（趣味の料理）（前書き）

第百話ＵＰします。

記念すべき百話目なのですが、何故か地味な話です。

第百話　ラスティン２１歳（趣味の料理）

さて、すこし前回から少し時間が経って、マリユスに続きアンセルムも王宮入りをした。

マリユスは、マース領の領主代行を経験した事で、少しだけ逞しさを感じさせる様になった。相変わらず人当たりは良いのだが、その中に頼り甲斐みたいな物も見え隠れしている。偶には無茶な事をさせてみるのも、人を成長させる為には必要な事かも知れないな。

私は、マリユスを王宮の政務省（またもや、正式な名称が無いのだが）に正面から送り込む事にした。マリユス自身は生え抜きの役人と言っても良いし、領主代行の経験は単なる事務手続きに終始している様な役人では得られない物だから、きっと期待に応えてくれると思っていた。

政務省自体は、王宮の中の様々な組織の中でも比較的まともな組織だったそうだ。王が決定した事を実際に実行したり色々な行政を行うのが仕事だから、ここが腐っている様だと、国民生活に多大な影響が出るので、しっかりとした人物が大臣に就いている様だ。

しかし、お役所仕事と呼ばれる状況からは逃れる事が出来なかった様だ。前例に拘り、効率的という言葉から程遠い仕事内容だと報告を受けた。領主が不在という状態と、一部とは言え戦争が行われたマース領で、こんな状態であれば下手をすれば暴動ものだと言うマリユスを宥めるのは苦労した。（それを押し付けたのは私なのだから、涙を呑んで愚痴を聞いた訳だ）

マリユスは、当然、政務省の改革を始めた訳だが、その方法は随分と彼らしく、しかしかなり遠回りなやり方だと感じた。マリユスは、王都の町にある古い一軒の料理店を買い取ったのだ。話が繋が

っていないって？　まあ、もう少し聞いてくれ。
マリユスの一家は、代々（といっても3代だが）レーネンベルクに仕えてくれている。当然だが普通の平民よりはかなり裕福である。そう、古いとは言え王都の街中にある一軒の店をポンと購入出来る程度にはな。

「父に大きな借金が出来てしまいましたよ」

というのが、マリユスの言葉だった。

マリユスは、そこで当然、料理店を再開した訳だ。マリユス1人では店は回らないので、高等学校でマリユスと同じ様に料理を専攻した人間と、その他何人かを雇ったそうだ。ここで、前の話と繋がって来るのだが、マリユスは上司、同僚、部下を順次、自分の店に招待して自分の手でもてなしたそうだ。
マリユス自身が、もてなした事も一因だが、同僚を招いた際には貸切にしたのが喜ばれた大きな原因だそうだ。まるで貴族になった気分だと色々な人から好評だったらしい。噂を聞きつけた、何とかという子爵が、突然店にやって来て今からこの店を貸切にすると言い出した時には、

「この店は、副王殿下のご趣味で運営されております。貸切でしたら殿下の許可を得てからであれば、何時でもお受けいたします」

と言って撃退したそうだ。私は、その店とやらに行った事もなければ、出資もしていないのだがな。

マリユスと政治の話をしていると、

・役人をどう料理するか？

・国の運営はどの様に行うべきか？

という話題が、いつの間にか、

・あの食材はどう料理するか？
・店の運営はどの様に行うべきか？

に変わっている事があるので注意が必要なのだ。

店が繁盛すればする程、政務省内でのマリユスの地位が高まると言う納得行くような行かない様な話しを信じたのだが、何人かの貴族はわざわざその為に、私との面会を求めて来るのだから、多少の意味はあるのだろう。少なくとも私に面会を求める様な貴族であれば、一般常識（貴族社会の常識ではなく）はあると思えるので、友好的に接していく予定だ。

先日、アンリエッタ（王女とか姫とか付けると返事をしてくれないのだ）が突然やって来て、こんな事を言い出した。

「”精霊の寝床”に行きたいのだけど、ラスティンに紹介してもらえばいいの？」

”精霊の寝床”はマリユスの料理店の名前ですが、王女の耳にまで届くのは少しおかしいのだが？

「アンリエッタ、君はまたそんな話を何処で聞いてきたんだい？」

「え？　そうよ、メイドの誰かが、そんな話をしてくれたのよ」

「そうかい、じゃあ、そのメイドは王女様につまらない話をした罪

で罰する事にしようか」

「えっ？　え～？　嘘よ嘘、貴族の誰かが、話してくれたの！」

「では、その貴族を罰しようか？　アンリエッタ、今度は何処で盗み聞きしていたんだ？」

「・・・」

「この前は、盗み聞きを叱ったけど、嘘をつくのはもっと良くない事だよ？」

子供への教育の為だから、私が今までついてきた嘘は無視してくれ。

「でも・・・」

「そんなに、行きたいのかい？」

「うん！」

何だか、良い感じの返事が来たのだが、どうするべきだろうか？　下手にこっそり王宮を抜け出されるよりは、信頼できる護衛を付けたい所だが。近衛を付けるかは微妙だな、思い切って目立つか、いっその事、平民の格好をさせるかどちらが良いだろうか？

「アンリエッタは、大勢の護衛を引き連れていくのと、変装して数人でこっそり行くのとならどっちがいい？」

「行っていいの？　じゃあ、こっそりの方がいいな～」

だろうな、そうなると人選が悩ましい所だ。
女性が望ましいのは言うまでもないが、ああ！こう言うことが得意な婚約者が居るじゃないか。今なら変装に関しても、得意な？友人も漏れなく付いてくる気がするので丁度良い。（最近は研究で、煮詰まっていると聞いているので、これまた丁度良い）

「君は、エレオノールを知っているかい？」

「ルイズの姉さまよね？　ラスティンのお嫁さんだね」

お嫁さんか、将来的にはそうなるんだが、妙な覚え方をしているな。

「エレオノールに会った事はあるよね？　こう言うことにかけては、君の先輩に当たるからきちんと言われた通りにするんだよ」

「はい！」

「それと、１つだけ約束して欲しいんだけど、僕にどれだけ迷惑をかけても構わないけど、陛下や王妃殿下には心配かけない事！」

私は、アンリエッタの小さな肩を少しだけ力を込めて掴んで、彼女の瞳を見詰めながら告げた。

「・・・」

「返事は？」

「じゃあ、ラスティンには沢山迷惑かけるね！」

しっかりと私の真意を理解しているか不安になる返事だが、結果的にアンリエッタが両親に心配をかけなければ良いだろう。（じゃあ、王宮外に出すなと言う意見は聞かないがな。アンリエッタがどんな人生を辿るか不明だが、今回のことはきっと役に立つ時が来るだろう）

＝＝＝

もしかしたら、マリユスの料理店に関しては、キアラが裏で動いているかもとも思えたが、上手く活用出来るのであれば問題無いと思えるので、そのまま受け入れる事にした。マリユスは、政務省内の改革をそれほど急がない積りの様なので、こちらもどっしり構えていなくてはならないようだ。こう言うやり方もマリユスらしくて良いと思う、結果的に政務省内のお役所仕事が撲滅されれば、問題無いのだから。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝

一方、マリユスから少し送れて王宮にやって来た、アンセルムだったのだが、彼が何をやっているのか私自身は理解していない。というか、キアラ以外は理解していないだろう。

最初は陸軍の様子を見たいと言い出したので、取り敢えず副王のサインを入れて、”この者に特別な配慮を要請する”と書いた身元を証明する書類を渡したら、しばらく帰って来なかったのだ。キアラには連絡が入っている様なのだが、陸海空軍を転々としているとしか、私には分からなかったのだ。

時々妙な所から、アンセルムの居場所を尋ねる問い合わせがあっ

たりするので、きちんと活動はしているらしい。グラモン伯爵がやって来て、是非貴下に加えたいと言われて何とか断った直後に、息子のデニスがやって来て、”もう一度勝負させろ！”などと言われたのだが、アンセルムは一体何をやらかしたのだろう？

グラモン伯爵の話では、アンセルムが若手の士官相手に模擬戦で圧勝したと言っていたので、その絡みだとは推測出来るのだが、仮にも”副王”を相手にあれだけ熱くなれるのだから、それなりの・・・、いや、昔からデニスにはああ言う所があったな。意外と簡単にあしらわれただけかも知れないな。

まあ、アンセルムが軍にあまり深入りしていないのは安心だ、他は兎も角、私の部下が軍にまで影響力を持つようになると、洒落では済ませられない状態になるので、注意しておいたのだ。一応注意が守られている様なので、一安心なのだが調子に乗って魔法衛士隊などに手を出さないで欲しい物だ。

空気の読めなさ（あるいは読まなさ）は、”レーネンベルク公立高等学校”の卒業生が持つ共通仕様なので、諦めているが貴族を貴族と思わない振る舞いは控えて欲しい物だ。この辺りは多分、私が立ち向かうべき問題なのだから。

とりあえず、キアラと相談して今年の法案を考えたのが、陛下は兎も角、枢機卿の目を誤魔化すのには苦労しそうだ。キアラというフィルターを通した枢機卿を相手する訳だから手強いのだろうが、ここで疑問を挟まれる様では、本番で詰まる事が有り得るから、十分に検討しておく必要があるのだ。

＝＝＝

「ふむ、全ての国民が住む所を自由に選べるようにするか。マザリーニ、どう思う？」

「はい、陛下。副王殿下、少々お聞きしても宜しいかな？」

「どうぞ、枢機卿」

「先程の”居住移転の自由”と言う物ですが、この国では移住を禁止する様は法は施行されていないはずですな。それなのに態々自由を保障するというのは、おかしいのではないですかな？」

ほら来たぞ。まあ、想定通りの質問だから問題ないのだが。

「マース領、以前のモーランド侯爵領で、何が起こっていたかご存知でしょうか？」

「聞かせていただきましょう」

さすがに、モーランド侯爵と聞けば無関心では居られないか。当然かも知れないし、それを狙っての発言なのだが。

「あの地では、隣の父の領地でも知られていなかったのですが、長く住民が領地から出る事を禁止されていました。今ならばその目的は明白です」

「内通情報の漏洩を防ぐということですかな？」

「その通りです。モーランド元侯爵（うらぎりもの）は、領外との交流を極端に避けていました。考えたくはないですが、モーランド元侯爵（うらぎりもの）と同じ事を考える領主が居たとしたらどうなるでしょうか？」

「ふむ、それを防止する為だと言うのですかな。やや遠回りなやり方ではないですかな？」

「はい、是非、違反者に罰則を科したいのですが、やはり、貴族達に強制するのは拙いでしょうか？」

「良いではないか、反対する者は裏切り者と呼ばれるだけではないか？　違反する者は税を課すなり、領地を召し上げるなり、どうとでも出来るであろう？」

「陛下、それはあまりにも！　副王殿下、この話は陛下と私で詰めておく」

「はあ、それではよろしくお願いします」

こう言ってその場を後にした訳だが、陛下の発言は少し気になった。この国の国民の１人として、これまでの陛下の治世が間違った物だとは思わない。そうでなければ、私が父の庇護下にあったとしても、あそこまで上手くワーンベルを統治出来たのも、国の安定が有ってこそだと言うことが、今ならば分かる。

その陛下が、あの様な発言いや放言をすると言うのが、おかしく感じてしまうのだ。ただの考え過ぎならば良いのだが。

第百話　ラスティン２１歳（趣味の料理）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／３／１０　以下を修正

貴族はわざわざそうの為に
←
貴族はわざわざその為に

メイド誰かがそんな－＜メイドの誰かがそんな
今なら変装に関しも－＜今なら変装に関しても
役人仕事－＜お役所仕事

第百一話　ラスティン２１歳（魔法を使わないメイジ）（前書き）

第百一話ＵＰします。

魔法を使わないメイジとは、彼女の事です。

第百一話　ラスティン２１歳（魔法を使わないメイジ）

最近ではかなり慣れてきた副王としての生活だが、政務や潜入部隊の報告等の間を縫うようにしてしかエレオノールに会えないのが残念に思える。折角同じ王都に居るのに、その気になれば毎日でも会うことが出来るだけに、もどかしさを感じてしまう。王女様の我侭のおかげで、会う機会が増えると言うのも皮肉な結果である。

そんな日々の中に、私の実家レーネンベルク家の現在の一番の問題が、私の所に持ち込まれる事になった。

「殿下、弟君が来ていますよ」

ニルスがそう言い終る前に、ニルスを押しのけてノリスが執務室に入って来た。どうやら、今回はまともな方法で王宮に入ってきたらしいと思ったが、その更に後ろから、何故かエレオノールが入ってきたので訳が分からなくなった。

「ノリス、お前は少し黙っていてくれ。エレオノール、事情を話してくれるかな？」

不肖（ノリス）の弟が何か言う前に、先制しておいた。ノリスはエレオノールの事をどちらかと言うと苦手にしていた様な気がしたので、エレオノールの方に事情を聴いてみる事にする。

「はい、今日は研究所の用事で王宮に参りましたが、門の所で衛兵の方と揉めているノリス君を見かけて声をかけたのです」

「揉めていたね？」

「はい、声をかけると、”この女性が身分を証明してくれる”と言われたので、引き受けましたが、何か問題でしたか、兄様？」

「いや、衛兵にノリスが訪ねて来ても、正規の方法以外では通すなと言っておいたから、迷惑をかけたね。ノリス、話を聞こうか？文句は聞かないぞ」

「うっ！　あの、そうだジョゼットの事なんです」

ノリスが、ニルスとエレオノールの事を気にしている様に、視線をさまよわせた。気を使ったニルスが部屋から出て行こうとしたが、私は彼に1つの任務を与える事にした。

「ニルス、すまないけど、人払いをしたいから、この部屋に誰も入れないでくれ。例え、キアラでもだよ？」

「はい！」

キアラの名前を出して、エレオノールの反応を見てみたが、表面上は変化が見られなかった。私がこの場にキアラを介入させなかったのは正解だった様だ。いくら一般人より魔法に詳しくても、キアラではジョゼットの役に立ってくれそうも無いからな。

「ノリス、続けてくれ」

「はい、ジョゼットが何故、魔法が使えないか分かりました。正確には、ジョゼットが魔法を使うと妙な現象が起きるんです」

ノリスは感情を抑えて話している積りの様だが、実際は隠しきれ

ていない。気持ちは分からないでもないから、そのまま話を続けさせた。

「妙な現象と言うのは、誰かが魔法を使った時に、ジョゼットがそこに魔法をかけると、誰かが使った魔法が打ち消されてしまうのです」

「お前、魔法の重ねがけが危険な事は知っているだろ？　コモンマジック程度なら、大事にはならないだろうが」

「はい、実は事故だったんです。ジョゼットとテッサとライルに、浮遊（レビテーション）の復習をさせていたんです。その時、ライルとジョゼットが間違って同じ椅子に魔法をかけてしまったのです」

ライルも多分テッサも浮遊（レビテーション）は十分にマスターしているだろうに、ジョゼットに付き合ってくれたんだな。友人、いや、この場合は家族の有り難味が分かるな。

「僕は、魔法探知（ディテクト・マジック）を使っていたから分かったんですが、ライルが魔法を失敗したと言う訳ではなかったんです。文字通り、ライルの魔法が打ち消されたのが見えました」

しかし、魔法が打ち消されると言う事は、解呪（ディスペル）が歪んだ形で現れていると思えば良いのだろうな。そうか、そう言う事だったのだな。

「試しに、テッサが浮かべている椅子に対して、ジョゼットが更に浮遊（レビテーション）をかけたら、見事に落下したので間違いありません。他にも幾つか試しましたが、ジョゼットが魔法をかけると確実に効果が無くなります」

「そうか・・・」

なるほど、この様な事故が発生しなければ、ジョゼットは魔法が使えないままだったのかも知れないな。多分ジョゼットとテッサだけでも間違いは起こらなかっただろうから、ライルが居てくれて良かったと言えるだろう。（ジョゼフ王子も同じなのだろうか？　いや、今の王子には必要無い話なのだろうな）

しかし、魔法を打ち消すか、どうしたものだろう？　私は、”魔法が使えない”メイジから、”魔法を使わない”メイジを連想していたのだが、彼女にアドバイスを求めてみるか？　もう一歩考えを進めてみるか？

「ジョゼットちゃんは、相手の魔法を打ち消してしまうんですか？　1人のメイジとしては、決して戦いたくないですね」

エレオノールが何気なく言った言葉が、私に道を示してくれた。そう、敵対するメイジの魔法が発動しない、もしくは効果を発揮しないとしたら、一対一の決闘とかであれば、剣などで武装しておけば対メイジ戦では、ほぼ無敵と言って良いだろう。

ただ、問題なのはジョゼットがそれを望むかどうかだな。私が知る限り、ジョゼットは争い事を好むような性格ではないし、華奢な体格は武器を振るうのに適しているとは言えないだろう。

「ノリス、最近のジョゼットの様子はどうだった？　落ち込んでいたりするのか？」

「いいえ、相変わらずです。でも、僕とテッサは気を使いすぎているのかも知れない？　ライルの明るさに助けられていますよ」

「僕やお前と違って、ライルは子供でも苦労してきたからな」

思い詰めるまでは行っていないが、かなり気にしているんだろう、ジョゼットも。かなり賭け要素が強くなるがやってみるか。

「ジョゼットが今必要なのは、自信なんだと思う。1つ案があるんだけど、ジョゼットの性格には向いていない方法だと思うんだ。それでもやる価値はあると思うが、どうする？」

「やります！　その案と言うのを教えて下さい」

即答だったな、少しは悩めと言いたいが、愚直とも言えそうな、その真っ直ぐさは私に無い物だから少しだけ羨ましくなるな。

「ジョゼットにはメイジ殺しを目指してもらう！」

「えっ！」

「はぁ？」

反応が分かれたな、エレオノールは少し眉をしかめただけだが、ノリスは私の言う事が理解できなかった様だ。ジョゼットとメイジ殺しのイメージが合わなかった為なのだろう。

傭兵に詳しいアンセルムが言うには、傭兵の中に箔を付ける為に”メイジ殺し”を名乗る者も本気で居るらしい。戦場などで、メイジを殺した事があれば、決して嘘は言っていないが、間合いがある状態で一対一で対戦したら、普通の傭兵には手も足も出ないというのが、貴族の間の常識らしい。

だが、平民メイジも貴族も、隙を突かれればあっさり死ぬ事を、私は知っている。ただ、ジョゼットに目指して欲しいと思うのは、

正面からメイジを圧倒する力を持つ事なのだ。そう、殺すことなく相手のメイジを無力化出来る程の力を！　（ジョゼットの解呪（ディスペル）の力がどの程度か分からないが、理想は高く持った方が良いのだろう）

私はノリスに自分の考えを伝えたのだが、中々納得させる事が出来ず、優秀な教師役をジョゼットの所に送ると言う事で何とか納得させる事が出来た。過保護すぎるのも問題だと思うのだが、ノリスやテッサに言っても無意味なのだろうな。

「スティン兄様、先程おっしゃっていた優秀な教師役と言うのは、どなたの事なのですか？」

「ああ、君は”セレナ・ド・ブランブル”と面識があったかな？」

「ミス・ブランブルですか？　親しいとは言えませんが、何度かお話した事はあります。なるほど、”魔法を使わないメイジ”を、ジョゼットちゃんの指導に当たらせる訳なんですね」

「エレオノール、随分と詳しいんだね？」

「はい！」

何故だろうか、少し寒気を感じたぞ？　まあ、気にしないでおくか。セレナは、今でも魔法兵団の警備隊で働いているはずなんだが、副王になってから詳しい情報が手に入らないから、今、何処で任務に就いているかまでは、掴んでいないのだ。

「エレオノールも時間があったら、ジョゼットの様子を見に行ってやってくれないかな？」

「はい、ワーンベルの工場の方にも顔を出したいと思っていたので、良い機会です」

「”風石機関”の方は、物になりそうかい？」

「まだ、技術的に解決しなくてはいけない点がありますね。その為にワーンベルにあるという、”竜の羽衣”をみておきたいんです」

「マルセルさんには、僕の方から連絡を入れておくよ」

「お願いします。あ！　そうでした、クリシャルナから伝言で、”厄介な覗き魔が、まだ時々来ているわよ”だそうです。お分かりになりますか？」

「ああ、こちらもキュベレーを呼び戻す事にすると伝えてくれるかな？」

「はい、お任せ下さい！　それでは失礼しますね」

やはり、ゲルマニアにはエルフが助力していて、かなり力を入れているのが分かるな。ニルヴァーナが王城の精霊の不自然な動きに気付いてくれなかったり、クリシャルナが居なければ、こちらの情報が漏れている所だ。まあ、精霊を使って情報収集するのも、中々難しいらしいのが救いだな。逆にこちらから、クリシャルナの契約精霊や、キュベレーを送り込むのも止めた方が良さそうだ。

この話は、双方手詰まりになりそうだから、置いておく事にするとして、早急にセレナと連絡を取らないといけないな。そうだ、身近に知っていそうな人物が居るじゃないか。兵団の本部に問い合わせるよりは早いかも知れないぞ？

「ニルス、すまないけど、ガスパードを呼んでくれるかな？」

「はい、すぐに！」

＝＝＝

ガスパードは急用だと思ったらしく、直ぐに駆けつけてくれた。

「殿下、何の御用でしょうか？」

「ガスパード、すまない急に呼び出したりして。ああ、用というのは、僕個人の話なんだ」

「スティン、そう言うことなら、ニルスにそう言ってくれよ」

付き合いが長いと、さすがに話が早いな。

「君は、今、セレナが何処で任務についているか知っているかい？」

「僕達の今の身分は、副王の近衛だよ。兵団とは距離を置いているんだ」

護衛隊の皆も、私同様に微妙な立場になっている様だな。まあ、思った通りには行かない時もあるか。

「カロリーヌなら知っていると思うけど、ワーンベルに居るからね」

しまった、カロリーヌの事をすっかり忘れていたぞ。いや、正確には、侍医団に送り込みたいと思っていたんだが、下手にあそこに手を出すと、妙な勘繰りをされかねなかった保留しておいたと言う

のが正しいのだろう。今なら少しは信頼を得る事が出来ただろうか？　カロリーヌを送り込んだら侍医団はどんな反応を示すだろうか？　友人をもしかしたら窮地に追い込むかも知れないのだが。

「カロリーヌを王城に呼んだらどうなると思う？　侍医達の中に送り込もうと思うんだけど」

「そうか、考えてくれていたんだな、僕としては微妙かな？　近くに居てくれるのは嬉しいけど、苦労するのは目に見えているからね。でも、彼女は喜んで来るんじゃないかな？」

「喜んで？」

「だってそうだろ？　侍医の1人になれば、彼女の経歴に箔が付く事になる。彼女の魔法薬の実験台も不自由しなくなると言う事だろ？」

「ああ、効果は確かだけど、副作用が怖いんだがね。うーん、決めたよ。カロリーヌは王城に来てもらおう、それとセレナには個人的にやって欲しい事があるから一緒にここまで連れて来てくれ。兵団の本部に顔を出してこの事を、マティアスに伝えてくれ」

「了解したよ、副王殿下の命令と言う事で、直ぐに発つとするかな」

「早く、カロリーヌに会えるようにな」

「そう言うことさ」

おや、自然に切返して来たぞ、これはゴールが近いのかも知れないな。お祝いの準備を本気でしないとならない様だ。副王になって

から時間が無かったから、魔法宝石（マジックジュエル）を錬金するのも、カグラさんの依頼以来だな。ユニスに頼んで、１つアクセサリをデザインしてもらうか。自分がメイジなのを忘れる日が来るのも近いのかも知れないな。

第百一話　ラスティン２１歳（魔法を使わないメイジ）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百二話　ラスティン２２歳（最初の家出）（前書き）

第百二話ＵＰします。

第百二話　ラスティン２２歳（最初の家出）

ガスパードが私の命令で、レーネンベルクに発ったのに前後して、エレオノールもワーンベルに向かったらしい。私は、この事を思わぬ所から聞く事となった。こう言う事が起こるとは思っていたが、いきなり相談も無しで始められると、誤魔化すのも一苦労だ。

「殿下、アンリエッタ姫付きのメイドの方がいらしていますが？」

「ん？　あの子が、また何かやらかしたのかな？　色々な所から愚痴を聞く身にもなって欲しい物だが」

「では、お通ししますね」

「ああ、ニルス、すまないが、この書類をキアラに渡しておいてくれ」

丁度、仕事に一段落ついた所で良かった、キアラから大至急と言う伝言付だったから後回しに出来なかったし、内容も確かに重要だった。

「ラスティン様？」

「ああ、すみません。王女付きのメイドの方でしたね？」

「あ、いえ、はい」

王族から丁寧語で話されるのは、慣れていないらしいな。まあ、それが普通なのだろうが。

「それで、我らの王女様は、今回、何の騒ぎを起こしたんですか？」

「はい、あの王女殿下から、副王殿下にこの手紙を渡すように命じられました」

手紙ね、嫌な予感がするあのお転婆姫が、悠長に手紙を書く姿が想像出来ないからだ。何か用（要望と言うのが正しいのだろうが）があるとこちらの都合を無視して、執務室に押しかけてくるのが最近の状態なのだから、手紙を受け取る事に躊躇するのも理解してもらえるだろう？

だが、手紙の宛名の文字を見ただけで、これを誰が書いたか分かってしまった。分からないのは、何故エレオノールの手紙を、アンリエッタがメイドに託したかという事だ。戸惑いを隠しながらも、手紙を読み進めたが、驚きを表情に出さないのにも苦労した。アンリエッタがエレオノールと同行して、ワーンベルに向かったと言うのだ。

正直言って、エレオノールらしくない行動に思えたが、子供の頃に色々な国を回った経験を持つ彼女であれば、今のアンリエッタの状況に満足出来なかったのかも知れない。もしくは、単にアンリエッタにせがまれて仕方なく連れて行ったのかも知れない。あるいは、将来の副王妃としての活動を本気で始めたのかも知れない。

もしかすれば、今挙げた全てが当てはまるのかも知れないが、私の立場ではまともな護衛も付けずに旅に出ると言う事に反対するしか無いから、相談しないのも当然かも知れないな。エレオノールの考えが分かってしまうから、今は、どうやって王女の不在を、誤魔化すかだな。

「それで、王女殿下は何時から、姿を消したんですか？」

「はい、昨日の昼過ぎで御座います」

「この話は、誰に話しましたか？」

「姫様が、ラスティン様だけに知らせるようにと、言われておりまして。もう誤魔化すのは難しいので・・・」

さすが、お付きのメイドだな、教育が行き届いているのかいないのか、微妙な所だが今は有り難いな。

「失礼ですが、名前を聞かせてもらえますか？」

「はい、アニエス・ド・ダクールと申します。ダクール男爵家の三女になります」

「え？　ああ、ダクール男爵の娘さんでしたか、これからも今まで通り、王女に仕えてもえらますか？」

少しだけ驚かされたな、王女の周りでアニエスという名前を聞くとは思っていなかったからな。こちらのアニエスは、私より少し若い程度なので、あのアニエスとは別人なのは確かだしな。（勿論、ダクール男爵は知らないぞ？　会った事はあるのかも知れないが、覚えていられないのが現状なのだ）

「はい、勿論でございます」

「では、この件は私に任せて下さい。貴女には迷惑がかからない様にしますから、安心して下さい」

「申し訳ございません」

メイドのアニエスは、私に一度頭を下げて執務室から去って行った。仕方が無いな、ガスパードが兵団の警備隊を連れて護衛に当たった事にするか。考えてみれば、アンリエッタが１人の普通の少女として王都以外を見ておくのも良い事だろう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

些か、問題が発生したが、キアラからの知らせの方に話を戻すとしようか。正確には、クロディーからの報告を受け取ったキアラから、報告書が回ってきたのだが、その内容は中々興味深い物だった。クロディーに命じてあったのは、

1. アルビオンで外交官（大使）としての実務を学ぶ
2. 間諜部隊（スパイ）の再教育
3. モード大公家に探りを入れる

の3点だったが、彼女は半年弱で私の要望をほぼ満たしてくれた。

1と2は、クロディーも選抜された人員もほとんど基礎が出来ていた様だから、それ程問題では無かっただろう。3は、探る内容をぼかした為、色々な情報が手に入ってしまった。大公の愛妾だったエルフのシャジャルさんが公式にではないが大公妃になった事、元大公妃だった女性は正式に離婚を言い渡されて実家に戻ったそうだ。(元々、夫婦仲は冷え切っていた所に、愛妾が出来て、そして愛妾の子供が生まれたのが原因らしい)

そう、物語通りティファニアは生まれていたのだ、そして重要な

のは大公妃及び大公女の姿が謎に包まれているという点だ。非公式とは言え、大公妃になったのであれば、人目に触れないと言う事は有り得ないだろう。実際、クロディー自身も、公式にモード大公家を訪問したたし、その家族と挨拶をしたらしいが、何故か肝心の人相や体格といった物を覚えていないというのだ。

”性質の悪い魔法にかかったようです”と書かれていたのには、少し違和感を感じるな。目の前で呪文を唱えられれば、その記憶を”忘却”させるのは難しいと思うのだが、年端も行かない少女が、それを上手くこなしているとは考えにくい。

まあ、アルビオンの方は、政変などの気配も無い様だし、レコン・キスタの気配も無いので問題は起こりえないだろう。クロディーには、直ぐにガリアに戻りシャルル王子派の貴族の動向を探るように命じておいた。正式な”副大使”の辞令も陛下から許可を得て作成したので、クロディーもガリアの大使に挨拶に行った時は驚くだろう。

後は、クロディーが鍛えなおした間諜達が、期待通りの働きをする事を願うだけだ。本気で今のガリアからは情報が入って来ず、困っていた所なので期待させてもらおう。

＝＝

王女様の家出騒ぎから一月程が経ったのだが、３日ほど前にひょっこりとアンリエッタが帰って来た。国王夫妻には、２週間ほどで戻ると言ってしまった為、誤魔化すのは限界かと思っていた所だったので助かった。色々言いたい事はあったが、アンリエッタの笑顔と申し訳無さそうなエレオノールの表情に何も言えなくなった。

”帰宅が”遅れたのは、どちらかと言えばエレオノールが、ゼロ

戦に興味を持ち過ぎた為だったと言うのは、あまり笑えない事だ。
アンリエッタはその間、ワーンベルで平民暮らしをエンジョイしたらしいのだが、そこから何かを学び取ってくれれば良いのだが。（彼女がトリステインの王女になるか、アルビオンの王妃になるか分からないが、少しは役に立って欲しいものだ）

＝＝＝

家出姫の帰宅の翌日、ガスパード達が私を訪ねて来てくれた。エレオノール達の護衛をして王都に到着していたはずの昨日顔を出さなかったのは、気を使った為なのかも知れない。副王が小さな子供を叱ってる場面とかは、あまり公に出来ないからな。（別にアンリエッタを叱ったりしていないがな）

「セレナ、カロリーヌ、良く来てくれたね。特に、セレナは久しぶりだったけど、変わりなかったかい？　ああ、ここでは友人として振舞ってくれて構わないよ」

「そうなの、こっちは亜人を追って西東と言う感じだったわ」

「私の方は、相変わらずかしら？　王宮に招いてもらえるなんて思わなかったけど」

友人達は、相変わらずの様で何よりだ。

「先に、カロリーヌの用件から済ませておこうか。話はガスパードから聞いたよね？」

「ええ、私が国王陛下の侍医になるなんて思わなかったわよ」

「これも、ガスパードから聞いたけど、君にはかなり苦労してもらう事になりそうだけど、本当に良いのかな？」

「それなんだけど、少しお願いがあるの。私は、侍医の方たちの補佐と言う形にして欲しいんだけど？」

「補佐ね、そちらの方が風当たりは少ないかもね。でもどうしてだい？」

「認めるのは癪なのだけれど、私にはスティンお母様ほど名声は無いし、エルネスト程の腕も無いですからね」

「そう思うんだったら、魔法薬の実験を控えるんだね。少しは君の名声が高まるんじゃないかな？」

「それはそれ、と言う奴よ！」

「ははは、まあ良いさ。補佐でも侍医の1人には違いないしね。当面は、他の侍医達が陛下にどんな治療をしているかを知らせてくれれば良いから」

「それ位なら、任せてもらって良いわよ。でも私より、エルネストを呼んだほうが良かったんじゃないかしら？」

「本当にそう思うかな？」

「うーん、何か怖い想像をしちゃうわね」

「エルネストには、彼なりの考えが有るんだと思っているよ。侍医の補佐としては明日から働いてもらうから、今日はガスパードに王

宮内を案内してもらってくれるかな？」

「分かったわ、よろしくね」

ガスパードに連れられて、カロリーヌが部屋から出て行った。２人っきりにしてやるのも友人としての心遣いと言う奴なのだろう。それを待っていた様に、セレナが話しかけて来た。

「スティンも副王らしくなって来たわね？」

「そうかな？　あまり自覚は無いんだけど」

「そう言う所は学院の頃から変わらないわね、まったく」

褒められていない様だが、責められる筋合いも無い気がするのだが、これから頼む話を考えれば、黙っているしかないだろうな。

「それで、私に何をさせる気なのかしら？　ガスパードは詳しく知らないみたいだったし、彼女に聞くのは気が進まなかったしね」

「セレナは、僕の妹に会った事があったよね？」

「えーっと、テッサちゃんだったかしら？」

「いいや、ジョゼットの方だよ」

セレナの中では、ジョゼットもテッサもレーネンベルクの娘らしい、それだけ同等の扱いを父は心がけている訳だ。

「君にはジョゼットの師匠になって欲しいんだ」

「師匠？　スティンは知っているよね、私が決してメイジとしては優れていないと」

「そうだね、君は魔法が得意では無いとは思わないけど、魔法を使うのを避けているだけだよね？」

「私が何故、魔法を使うのを避けているか知りたくない？」

「いいや、出来ればその話は、ジョゼットにしてあげてくれないかな？」

「はぁ～、全く。それで私は、ジョゼットちゃんに何を教えれば良いのかしら？」

セレナは私に対して、何か思うところがあるのだろうか？

「そうだな、魔法を使わないメイジの戦い方を教えてやって欲しいんだ」

「はぁ？　言っている意味が分からないんだけど」

私は、判明したジョゼットの魔法障害の事と、私がジョゼットに目指して欲しい”メイジ殺し”の姿を語って聞かせた。セレナは、私の話を真剣に聞いてくれた様だ。普通のメイジであれば、笑ってしまう様な話もセレナには実感があったのかも知れない。

「面白いわね、そういう事ならやらせてもらうわ！」

「君ならそう言ってくれると思ったよ」

「癪だけど、今回は乗せられてあげるわ。貴方って昔から人をその気にさせるのが上手いわよね？」

「それは副王としては褒め言葉なんだけど、そうとっていいのかな？」

「勝手にしなさい！　このままじゃ、不本意だから少しだけ、面白い情報をあげるわ。警備隊の先輩がこんな事を言っていたわ。”亜人達が現れるのは、一定の周期が決まっているかも知れない”ですって」

「何！　もう少し詳しく教えてくれ！」

「嫌よ！　貴方の実家への紹介状でも書いてくれないかしら？」

むぅ、恒常的に悩まされる亜人対策の重要なヒントになりそうな話だが、どうやら教えてくれる積りは無いようだ。彼女の機嫌を損ねる訳にも行かないし、兵団本部辺りで情報を収集しなくてはならないかも知れないな。

第百二話　ラスティン２２歳（最初の家出）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

サブタイトルですが、変えることにしました。

２０１１／３／１４
仕えてもらますか－＜仕えてもらえますか
に修正

第百三話　ラスティン２２歳（二次会）（前書き）

第百三話ＵＰします。

第百三話　ラスティン２２歳（二次会）

兵団本部に使いを出してほっとしたのも束の間で、クロディーから最初にもたらされた、その驚くべき知らせは王宮内だけではなくトリステイン中を揺るがす事になった。

”ゲルマニアがガリアに攻め込んだ”

最初はこれだけだったのだから、ナポレオン君も思い切った事をしたものだと思って苦笑していたのだが、事態は私の想像を超えて推移して行った。毎日とは言わないが週に一度か二度もたらされるガリアの情報に、リステイン中が耳を澄ませていると言うのが現状である。

私の所には、毎日の様にクロディーから情報が入ってくるのだが、実際の所もう少し彼女をガリアに向かわせるのが遅かったら、この情報が手に入らなかったと思うと、クロディーの優秀さに助けられた形になるな。

私は、クロディーからの報告書を読みながら、何故か日々不安な気分が高まってくるのを感じていた。ゲルマニア軍が破竹の勢いでガリア国内を蹂躙するというのは、私の想像の埒外なのだ。最初の進入だけなら兎も角、国力から言ってもここまで一方的にガリアの敗戦が続くのは絶対におかしいのだ。

キアラに意見を聞いてみたが、彼女にもロベスピエール４世の意図が分からなかったのだから、私に分かる筈も無い。ただ、不安感だけが増していく日々が続くだけだった。

「殿下、そろそろ準備は宜しいのですか？」

ニルスの遠慮がちな声で、現実に引き戻された。いけないな、今日はガスパードとカロリーヌの目出度い日だというのに。そう、とうとう2人は結婚する事になったのだ。折角招待された友人の1人が難しい顔をしていたのでは、2人の将来に禍根を残しかねないからな。式の後は久々に友人だけで、”精霊の寝床”を貸しきって簡単なパーティーをする予定なのだ。こちらには二次会といった習慣は無いのだが、無礼講も偶には?良いものだろう。

＝＝＝

2人の結婚式は、王都に幾つかあるブリミル教の教会の中でもかなり規模の小さい場所で行われた。式を執り行ったのは、私の要望を快く受け入れてくれたマザリーニ枢機卿だった。些か会場が見劣りしてしまったが、参加者は皆、枢機卿の言葉に真剣に耳を傾けていた。

教会は、急であった為に確保出来なかっただけだったが、枢機卿の参加で私の近衛隊の隊長格の結婚式としては、形式が整ったと言えるだろう。見かけは質素なのだが、参加者はかなり豪勢な式自体も無事に終わり、二次会の会場に移る事になった。

さっきまでは一緒だったエレオノールとも分かれて、学生時代に戻った気分で食事を楽しんだ。結婚式場では固い表情だったエルネストも、幾分表情を柔らかくした様だった。お前の気持ちは良く分かるぞ、ラ・ヴァリエール公爵が娘の結婚式の時にどんな事をしでかすか心配になった気持ちは、ほんとうーに良く分かる。副王として色々な儀式に参加する前の私は、はっきり言ってレーネンベルクらしい結婚式を挙げる予定だったから気に無かったが、今はなるようになると悟ってしまったのだ。

そんな詰まらない事を考えている間にも、マリユスが腕によりをかけた料理が次々に運ばれてくる。私は始めて食べるのだが、意外

と懐かしい味だったりする。理由は、ワーンベルの代官の屋敷の料理人が私の希望通りの料理を作るのに苦労して、その技術をマリユスが吸収した為なのだが、私から見てもマリユスの料理の腕は中々の物だと思える。きっとマリユスなりに工夫を重ねた結果なのだろう。

「スティン、ちょっと良いかしら？」

「セレナ、どうかしたのかい？」

「ええ、貴方の妹さんの現状知りたくない？　後ね、少し驚かせようと思ってね」

「何だか、嫌な予感がするんだけど？　ジョゼットの事だけは聞かせてもらいたいな」

「良いのかしらそんな事を言って？　ジョゼットの事なら、心配は要らないと思うわ、あの子意外と頑張り屋みたいだから」

「無茶はさせていないよね？」

「勿論させているわよ？　貴方の妹や弟さんが文句を言うくらいね」

あの2人なら、ジョゼット絡みなら簡単な事でもクレームをつけそうだから、あまり参考にならないな。

「父上や母上やライルとかは、どうなんだい？」

「一応理解してくれているわ。公爵家の娘を叱って、お礼を言われるとは思っていなかった位ね」

何故か、ライルの名前が出た所で、にやりとしたセレナに違和感を覚えたのだが、もう少しジョゼットについて詳しく聞くことにした。

「それで、ジョゼットは”メイジ殺し”として使い物になりそうなのかい？」

「まだまだ、と言った所だと思うわ。でも、少しだけあの娘の将来を考えると怖いわね」

「怖い？」

「そう、色々な事の飲み込みは早いと思うの。まだ基礎と言った所だけど、短剣や練習用の弓なんかは結構上手くなったわ。でも、このまま成長する事があの娘の為かしら？」

「そうだね、そのまま育てば、ジョゼットはメイジから嫌われる存在になるかも知れないね」

「ふーん、何か考えがあるのね？　その辺りは、貴方に任せるわ。私は出来るだけの事をしてあげる」

「ジョゼットの事を気に入ってくれたのかな？」

「そう思ってくれて良いわよ。だからこそ、厳しくする事を理解してくれるならね。貴方の弟や妹には分からないみたいだけどね」

「嫌な役を押し付けてしまったね？」

「それは気にしなくていいわよ？　まあ、私なりのけじめだと思っているから」

セレナはそれだけ言って、パーティーの主役の2人の所に戻って行った。それと入れ替わるようにして、エルネストが少し酔った様子で私の所にやって来た。

＝＝＝

「結婚式に二次会なんて何年振りかな？」

「それは、僕も同じだよ」

「スティン、少し真面目な話をして良いか？」

「君が酔っ払っていないならね」

「少しは酔っているかも知れないけど、これは別問題だ！」

意外としっかりとした口調に、こちらも対応を改める事にした。

「レーネンベルクで療養をしているベッケル子爵なんだが、その身柄を僕が預かりたいと言ったらどうする？」

「そうだな、とりあえず子爵の身の安全を心配するかな？　また、無茶な事をするんじゃないだろうな？」

「無茶か？　普通の人間はそう思うかもしれないな。この世界でも、あの世界でも」

「まあ、君の事だから考えがあっての事だと思うけど、ベッケル子爵の考えを無視するような事だけはしないでくれよ？」

「勿論さ、僕がそんな事をした事があったか？」

意識の無いコルネリウス（当時はミスタ・リューネブルクだったな）に許可無く腕をくっ付けようとしたり、実験台にした事はエルネストの中では問題ないらしい。結果良ければか、まあ、この点に関しては人の事は言えない気がするが。エルネストが本気で動き出したのなら、ベッケル子爵もレーネンベルクでの介護を受けることも無くなるのだろう。そして私の副王としての役目も意外と早く終わる事になるのかもしれないな。

＝＝＝

そう言えば、コルネリウスはあまり元気が無かった様な気がするな。少し様子を探っておくか？

「コルネリウス、調子はどうだい？」

「ああ、まずまずかな？　目出度くトライアングルになれたしな」

「それにしては元気がないな？」

「・・・」

「どうしたんだ？　兵団で何か問題があったのか？」

「スティン、いや、ラスティン・レーネンベルク・ド・トリスティン。俺は、ワーンベルで色々な人に会ったよ。それ自体は確実に俺

にとって良かった事だと言える。だが逆に分からなくなったんだ、俺がゲルマニア皇位を目指すのは正しい事なんだろうか？」

「復讐を止める積りなのかい？」

「いや、・・・。どうなんだろう、最近自分の気持ちが分からないんだ」

「そうか・・・。あまり勧めないが、ガスパードやカロリーヌと一緒に王宮に来てみるかい？」

「そうだな、少しは何か掴めるかも知れないな」

コルネリウスは本気で悩んでいる様だ。彼なりに考え、悩み、決断して欲しいと思うのだが、王宮などに来たら支配者と言うものに幻滅するかも知れないな。少し皮肉な事を考えていると、不意に店の明かりが暗くなった。

「それでは、２人に花束の贈呈です。２人とも入って来て」

セレナの言葉と共に、厨房と思える場所から入ってきた小さな影は、何と私の義理の息子ライルと、義理の妹になる筈のルイズだった。２人ともプレゼンターとしては中々堂に入った振る舞いだった。如才ないライルは兎も角、ルイズまで花嫁の頬にキスするとは思わなかった。

何故、ルイズがここに？　そう言えば、式の時のエレオノールの様子は少しおかしかった気がする、同席したクリシャルナも花嫁の姿に声をあげたのに、エレオノールは何も言わなかった筈だ。単に私達ももう直ぐ同じ事をするから気にならなかったのだと思ったが

この場にルイズが居るという事が、エレオノールの態度に不信感を抱かせた。

１つだけ仮定が思い浮かんだが、それをエレオノールに問うのはルール違反なのかもしれないな。私がデニスを排除したように、エレオノールもセレナを排除したのかも知れない。まあ、こう言っては何だが、エレオノールはそう言う意味でも本当に、私と似合いの女性なのだな。

花束贈呈が終わると、ライルとルイズは私の所にやって来た。ライルは兎も角ルイズまで私の所に来たと言うのは、どういう事だろう？

「ルイズ、ライル、ご苦労様」

「はい」

「うん」

「２人ともいきなりだったから驚いたよ。ライルはセレナに言われて来たんだよね？　ルイズはどうしてここに？」

「エルネスト兄様が、是非って言うから来たんです。姉様も居るからって、あのセレナさんが、そう言っていたって」

「僕も、セレナ師匠に言われて来ました。父様に会わせてくれるって」

セレナ師匠ね、彼女はレーネンベルクで何をやっているんだろうか？

「そうか、ルイズは後でエレオノールの所に連れて行くから安心しなよ」

「あの、スティン兄様、いえ、殿下」

「知らない人が沢山居る所じゃなければ、今まで通り呼んでくれるかな？」

「はい、兄様。あの、お話したい事があるんですけど？」

「ここで良いかな？」

「はい、あの時々で良いんですけど、また、あの鉱山に行ってあの岩を壊しても良いですか？」

「それは、構わないけど、どうしてか教えてくれるかな？」

「はい、あの岩を砕くとすっきりするんです」

ルイズの言い方だと、またストレスを受けている事になるな？系統魔法は無理でも、コモンマジックは使えるようになったんだから、問題は解決したんだと早合点してしまったのだろうか？

「ルイズ、もしかしてまた困った事になっているのかな？」

「いいえ、そういう訳ではないの。ただ、気晴らしがしたいだけだんです、ほんとですよ？」

「そうか、君の言う事を信じるよ。でもね、もし辛い事があったら、相談して欲しいかな？」

「はい！」

ルイズの表情は魔法がまともに使えなかった時よりは明るいものなので、大きな問題では無いと思う。ただのストレス発散と言う事なら、あんな岩盤など幾ら砕いてくれても構わないしな。

「王都まで来るのが大変だったら、このライルに話をするのでも良いよ？　出来るな、ライル？」

「はい！　ルイズさん、僕で良かったら相談の乗るよ、子供同士の方が話し易い事もあると思うから」

「うん、よろしく、ライル！　私の事はルイズって呼んでね」

うんうん、子供同士が仲良くなるのは微笑ましいな。私とエレオノールが結婚したら、２人がどういう関係になるかは、話さないでおこう。義理でも”叔母さん”と呼ばれて喜ぶ女の子は少ないはずだからな。

「父様、僕も後でお話があるのですが、構いませんか？」

「良いよ、久しぶりに一緒に寝るかい？」

「うん！」

私は、二次会の終わりを待って、２人を連れて王立魔法研究所に向かい、エレオノールにルイズを預けて、私はライルを連れて王宮に帰る事にした。衛兵にもライルを紹介しておいたから、これからは楽に王宮に入る事が出来るだろう。（弟のノリスに対する対応と

違うって？　当たり前だ、公爵家の跡継ぎが礼儀を守れないでどうする）

第百三話　ラスティン２２歳（二次会）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

単なる結婚式の二次会の話だけでは無いですよ、結構重要な話がちりばめられています。

２０１１／３／１４
セレナしたのかも－＜セレナを排除したのかもに修正

第百四話　ラスティン２２歳（偶然か、必然か？）（前書き）

第百四話ＵＰします。

第百四話　ラスティン２２歳（偶然か、必然か？）

「父様、あの、相談なんですが」

ライルはかなり我慢していたらしく、居間に入って寛ぐと直ぐに、相談を持ちかけて来た。ライルの様な出来た子供でもやっぱり悩みを抱えることがあるのだな。

「話してごらん」

「はい、あのジョゼットの事なんです。僕は、ジョゼットに言われたままに魔法を使って見せました。でも、それがあの子を苦しめる事になるなんて思ってもいませんでした。僕のやった事は、何だったのかな？」

「そうか、その事か。ノリスやテッサに何か言われたのかな？」

「テッサもノリス叔父さんも、何も言いません。でも、２人ともジョゼットを助けようと頑張ってました。僕は結局、何も出来なかったんだ」

ふむ、苦労人だけの事はあって、ライルは考えすぎる時があるのだな。ジョゼットの事は、いずれレーネンベルク家として直面しなくてならない問題だったのだから、ライルは切欠になっただけなのにな。

「何を言っているんだ？　ライルはちゃんと役に立っているじゃないか」

「え？」

「そうだろう？　お前が居なかったら、ジョゼットがどうして魔法が使えないか分からなかったんだよ？」

「でも、それは偶然で」

「そう、偶然だね。でも必然だったとも言えるんじゃないかな？」

「えーっと」

「少し難しかったかな？　こう考えてみたらどうだろう。ライルが居ない状態で、テッサとジョゼットが魔法の練習をしていたとして、魔法をかける対象を間違える様な事故が起こったと思うかな？」

「どうなんだろう？」

「そうだな、分からないかもな。ノリスが僕の言った通り片時も目を離さず魔法探知（ディテクト・マジック）を使っていなければ？　テッサが早々に諦めて、ジョゼットと魔法の練習をしていなかったら？」

ライルはまだ納得がいっていないようだな。

「そしてライルが学校が終わった後、ジョゼットと魔法の練習をしていなかったら？　どれか1つでも欠けていたらあの偶然は起きなかったんだよ？　逆に言えば、3人がジョゼットの為に頑張ったからこそ起きたんだ」

「それが”ひつぜん”なのかな？」

「そうだね、お前がジョゼットに魔法を見せたのは偶然だけど、お前がジョゼットを手助けした事で何故、ジョゼットが魔法を使えないかの理由が分かったのは必然だよ」

かなり強引な論理展開だが、こう言う事は論理性では無く気持ちの問題なんだと思う。

「誰にだって失敗はあるさ、だけどね、それをどうやって取り返すかが重要なんじゃないかい？」

「父様も失敗した事あるの？」

「それは色々あるさ、そうだな僕の人生最大の失敗と言ったら、エレオノールと婚約解消した事かな？」

まあ、それ以外にも色々やってしまった気がするが、これが一番分かりやすいのではないだろうか？

「え！　でも、父様と母様は婚約してるんだよね？　もう直ぐ結婚だって言ってたよ？」

「まあ、この辺りはエレオノールに聞いてみるんだな」

私とライルが仲良く話し合っていると、居間の扉がノックされてキアラが入ってきた。まだ遅い時間ではないが、仕事熱心な事だ。

「まあ、ライル君。来ていたのね、いらっしゃい」

「あ、キアラお姉さん、今晩は！」

「例の報告書か、わざわざすまないな。明日までには目を通しておくよ」

「はい、ライル君が居るとは知らなかったので、申し訳ありません」

「いいや、明日も公務を休むんだから仕方ないさ」

「それでは、失礼します。ライル君、お邪魔してごめんなさいね」

「おやすみなさい、キアラお姉さん」

キアラとライルは結構相性が良いらしいな、いやライルが人を嫌うのは見た事が無いがな。私が書類に目を通し始めると、いつの間にかライルが同じソファーに座っていた。その上、私に寄りかかるようにして、ほとんど眠ってしまっている。こうしていると、ライルも普通の子供だな。

また、ガリアからの報告だったが、相変わらずの状態だったし、我が国（トリステイン）としても手の出し様が無い状態が続いている。そろそろ何らかの方針を決める必要があるのだろうな。手が空き次第、陛下と枢機卿に話を持ちかけて見ることにしよう。

どれだけ考え込んでいたか、ライルも完全に寝入ってしまっていたから、抱きかかえてベッドに移動する事にした。折角久しぶりに会えたと言うのに、あまりゆっくり話す事が出来なかったな。

「すまないな、情けない父親役で」

「そんな事ないです」

すっかり寝入っていると思っていた、ライルに謝ると、意外にも返事が返ってきた。しまったな、まあ良い、こんな時でなければ聞けない事を聞いておこう。

「起こしてしまったかな？」

「・・・」

「ライルに聞いておきたい事があるんだ」

「うん」

ライルは目を擦りながら、ベッドの端に腰を下ろした。私も同じように腰を下ろすと、こう話を持ちかけた。

「ライル、君は僕の義理の息子である事が、不自由じゃないかい？」

「そんな事無いよ」

「公立学校とか魔法学園で、何か言われたりしていないかい？」

「少しは言われるけど、公立学校は色々な子供が居るから、そんな事が話題になったりしないよ。魔法学園の方は、完全に実力主義っていうのかな？　そんな感じだから、生まれや身分を気にする人は少ないんだ」

ふむ、ライルの表情からも態度からも、暗い陰の様な物は見つからないな。

「そうか、ライルにはどちらもぴったりだったんだな」

「うん」

「じゃあ、もう1つ聞かせてくれるかな？　ライルは、父上、君から見ればお爺ちゃんだな。父上の養子になる積りは無いかな？」

「え？　どうしてですか？」

ライルには、私の提案の主旨が分からなかった様だ。まあ、この年齢なら当然だろうな。

「ライルは、僕が今、”副王”をやっているのは、知っているね？」

「はい、大変な仕事なんですよね？」

「そうだな、大変で大事な仕事だ。今日まで、いや、セレナが気を使ってくれなければ、まだ当分こうやって君と話す事も出来なかっただろうな」

「うん・・・」

「それにね、もしかしたら僕自身の身さえ危険かも知れない位だからね」

「え！？」

「驚いたかな？　でも副王という偉い立場にいるとね、敵も多いんだよ」

「僕が、父様を守るよ！」

ライルが、この子らしい真っ直ぐな意見を言ってくれた。まあ、私としては嬉しい事だが、そうばかりは言っていられない事だ。ベルさんの形見となった杖を構える姿は、中々頼もしいのだがな。

「今のライルのメイジの腕では無理だな。それに、ライルには僕の犠牲になって傷ついて欲しくないんだ」

「でも・・・」

「ライルが僕の為に、メイジとしての力を使ってくれるなら勿論嬉しいよ。だけどね、僕の為にライルが犠牲になったりすることは絶対に歓迎出来ない！　ライルなら庇われた人間の気持ちは、分かるだろう？」

「あ！　うん、そうだね・・・」

「すまないな、お母さんの事を思い出させてしまったかな」

「うん、でも、分かりました。それなら、何時になったら、父様の役に立てのかな？」

子供らしいせっかちさだな、変なことを言うわけにはいかないが。

「そうだな、一対一の決闘でノリスに勝てたら、一人前と言えるんじゃないかな？」

「ノリス叔父さんにですか？　はい、僕頑張るよ！」

「ノリスはあれでも、かなり優秀なメイジだからな、簡単には勝て

ないよ」

「え？　そうなんですか？」

ノリス、子供に舐められているぞ、もう少ししっかりしてくれよ。

「そうだな、ノリスは努力家だからね。土系統なら互角、水系統なら僕の勝ち、火と風系統ならノリスの勝ちだろうね」

「ほ、本当ですか？」

「僕を守ってくれるなら、僕より強くなくちゃならないだろ、諦めるかな？」

「いいえ、何時か、きっとノリス叔父さんを越えて見せます」

「頑張れよ、ライル！」

「うん！」

「ライルには、ノリスに勝つまで、ライル・ド・レーネンベルクと名乗ってもらうからね」

「はい。分かりました」

ライルがレーネンベルク姓を名乗っている間は、父の庇護下においてもらうとしよう。今は、この子を私の下においておくのは、危険すぎるからな。ライルと一緒に今度こそベッドに入ると、久々に熟睡出来る気がした。ガリア絡みで悩むことが多かったから、寝不足では無いが、質の良い睡眠をとれているとは言い切れないからな。

第百四話　ラスティン２２歳（偶然か、必然か？）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

ライル君だって悩みますよ？

第百五話　ラスティン２２歳（蛙の子は蛙？）（前書き）

第百五話ＵＰします。

第百五話　ラスティン２２歳（蛙の子は蛙？）

少しだけ明日の事も考えておかなくてはならないか。明日はある会合が開かれるのだ、もしかすれば、この国そしてこの世界の運命を変えるかもしれない物だ。少し大げさに聞こえるかも知れないが、私は事実そうだと思っている。まあ、私と同様な転生者達が集まって顔見せをするだけなのだが、意外と多くの転生者がトリステインにやって来ていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ローレンツさんの手紙を携えたその男性が私の所やってきたのは、数週間前の事だった。

「良く来てくれましたね。ローレンツさんの代理の方とお聞きしましたが、もしかして息子さんなのでしょうか？」

その男性には、何処か出会った頃のローレンツさんの面影を思い起こさせる所があったから、尋ねてみたが当たりの様だな。

「殿下にはお初にお目にかかります。ローレンツの息子でロワイエと申します。どうぞお見知りおきを」

「丁寧な挨拶ありがとうございます。ローレンツさんに聞いているでしょう、私にそこまで畏まる事はありませんよ」

何処か厳しい表情のロワイエさんの緊張を解す為に、気さくに声をかけてみたが、あまり効果は無かった。

「これは有難いお言葉を、ありがとうございます」

「ロワイエさん、貴方は今、商売をする為に僕の前に居るのですか？」

「不快に感じられましたか、申し訳ございません！」

ふむ、固いな、それに何処か余裕が無く感じる。私の様な身分だけの若造に、ここまで畏まるというのも妙だしな。ローレンツさんに私の話を聞いていれば、私の人柄ぐらいは知っていそうな物なのだが？　ローレンツさんは息子に商売を任せていると言っていたはずだ、この調子でまともな商売が出来るのだろうか？　ふむ、少し突っついてみるか。

「ローレンツさんからの手紙を受け取る前に、１つロワイエさんにお願いがあるのですが？」

「はい、何でもおっしゃって下さい」

「ロワイエさんはこの部屋を殺風景だと思いませんか？」

「はい、些か」

「そこで、お願いなのですが。この部屋に何か調度品を用立てて欲しいのです」

「お任せ下さい」

お、目の色が変わったぞ、さすがはローレンツさんの息子と言っ

たところか。だが、そう簡単には話は進まないぞ。その態度が崩れるまではな！

「少し条件を付けさせていただきます。ロワイエさんには、私の名前も、そしてローレンツ商会の名前も出さずに、１人の商人として行動してください」

「はぁ？」

「そうですね、代金はこの金貨一枚でお願いします。期限は今日中と言う事で」

「あの！」

立ち上がって、偶然持っていた金貨をロワイエさんの手に乗せると、護衛の１人を呼んで執務室から追い出してしまった。護衛にはロワイエさんの後をつける様に指示をした。さて、彼は何を持ってくるだろうか？

＝＝＝

ロワイエさんが、再び私の前に姿を見せたのは、夕食も終わって定例になっている潜入部隊の報告を聞いた後だった。護衛に後をつけさせたのは正解だったな、こんな時間では普通に王宮へ入ることは無理だっただろうから。（そこまで計算してこんな遅くまで粘っていたのなら、ロワイエさんも中々の曲者かも知れないが。）

「殿下、ご要望の品お持ちしました！」

「こんな時間まで、ご苦労様でした。ロワイエさん」

「いいえ、こちらこそ、お礼を言う立場と思いましたよ」

大分くだけた口調になってくれて嬉しいが、この短い時間にロワイエさんに何があったのだろう？　それに礼を言われる事などした覚えはないのだがな。

「私は、ロワイエさんに無理難題をふっかけた積りだったんですが？」

「失礼ながら、殿下の思惑は問題では無かったのです。私は忘れかけていた物を取り戻す事が出来ました。今はそれが嬉しいのです！」

「はぁ？」

「そうそう、こちらをご覧下さい」

ロワイエさんが、手に持っていた包みを解いて、中から小さめの1枚の絵画を取り出した。そこには、ありふれた森林の風景が描かれていたのだが、絵画に造詣が深くない（飾っても仕方が無いな、はっきり言って素人だな）私が見ても、少し荒さが目立つ物だった。

「これは有名な画家の作品では無いですよね？」

「やはり分かってしまいますか？　ですが、ご覧下さい」

ロワイエさんは一礼して私から絵を取り戻すと、その絵を持って執務室の壁際に向かって行き、そこで絵を掲げた。意外なことに、その絵はこの執務室にぴったりと納まった気がした。妙な話だが、この部屋に合わせて描かれてと言われても誰も驚かないだろう。

「これは、良い絵ですね」

「気に入っていただけましたか？」

「はい、僕が別の部屋に移る事になったとしても、この絵はこの部屋に飾ったままにしておきますよ！」

「それは、褒め言葉なのでしょうか？」

「ええ、勿論です。最高の賛辞と言っても良いのではないでしょうか」

「それは、ありがとうございました。これを描いたヨルゴも喜んでくれるでしょう」

「そのヨルゴさんと言う方とは、お知り合いなのですか？」

「いいえ、実を言えばこの部屋に足りない物と言って思いついたのが絵画だったのですが、王都の画商に知り合いは居ませんでしたし、居たとしてもそれを訪ねる訳には行きませんでした」

「そうですね」

まあ、そう仕向けたのは私だからな。

「私は、目に付いた画廊に飛び込んで、ある限りの絵を見せて貰いました。そこで、ヨルゴの湖を描いた絵に出会いました」

「え？　湖ですか？」

「はい。勿論、王都の画廊に飾られている様な絵ですから、金貨一枚程度では購入出来ませんでした。私は主を何とか口説き落として、ヨルゴの住んでいる場所を聞き出しました」

「そんな物、簡単に聞きだせる物なんですか？」

「普通は無理ですね、画商にとって画家は金の卵を産むアヒルですから。似合わないこの格好と無茶な取引のおかげで、どうやら私は何処かの貴族のぼんくらだと思われた様ですよ」

「それは、狙ってやったんじゃないんですか？」

「まあ、予想はしていましたね」

ほら、中々の策士じゃないか。

「私はヨルゴの住む村を目指しました。王都から離れていなかったのは幸いでした。村に着くと私は早速ヨルゴを訪ねました。少し苦労しましたがね」

「それで、この絵を売ってもらえる様に交渉したんですね？」

「いいえ、先ずは私が商人だと言う事は伏せて、彼女、あ、いや、ヨルゴに金貨一枚で絵を売ってくれないかと持ちかけました」

ん？　ヨルゴは男性名のはずだが？　彼女と言う事は偽名なんだろうな。まあ、女性画家が珍しいのは想像がつくし、だからこそ画廊の主のガードも甘くなったのだろうな。

「金貨一枚はさすがに無茶ではありませんでしたか？」

「勿論です、それで引き下がっては商人とは言えないですからね。何とか説得して、習作の何点かと、昔、描いた絵を金貨一枚で売ってもらえる様に交渉しました」

「なるほど、昔、描いた絵の中に、この絵があったんですね」

「いいえ、ヨルゴの昔の絵も習作も私が欲しい物ではありませんでした。私はヨルゴにこの部屋の印象と殿下が望んで居るだろう絵のイメージを伝えました」

「じゃあ、この絵は何処にあったんですか？」

「この絵はですね、彼女が大切に持っていた絵だったんです。何せ、彼女が画家を志して最初に仕上げた絵だったのですから」

「そうですか、大切な物だったんですね。良く譲ってもらえましたね」

「彼女も、あ、すみません。ヨルゴの正体は秘密にする約束だったので、忘れてください」

「女性画家は珍しいでしょうから、分かりますよ」

「ありがとうございます。彼女は自分の画家としての才能に疑問を感じていた様です。色々悩んだ様ですが、この絵を手放す決心をしてくれました」

「そうですか、おめでとうございます！」

「いえ、彼女とはそういう間柄では無いんですよ？」

「いえ、有望な画家と取引出来る事になった事を、お祝いしたんですが、別の意味の方が良かったですか？」

「あ、あれ？」

ロワイエさんは顔中が赤くなってしまった、私より年上だろうに随分と純情なのだな。だが、ロワイエさんに対する好感度は、増した気がするな。人柄も誠実だし、機転も利く、商人としての冒険心は少ないかもしれないが、ローレンツさんも良い後継者に巡り会えたのではないだろうか？

「そんな事はどうでも良いのです。何を言いたかったかと言うと、私が忘れていた商人としての心を思い出させてくれたラスティン様にお礼を言いたいのです」

「やっと、名前を呼んでくれましたね。ロワイエさんは生まれながらの商人と言う感じですが、違ったのですか？」

「あ・・・、そうですね、ここ数年の私は、商人というより金庫番でした。父の立ち上げた商会を存続させる事だけを考えていた気がします。セザールという強力なライバルも居ますからね」

この人も色々苦労しているのだな。世の中苦労をしていない人間の方が少ないのだろうが。どうやら、ロワイエさんは商人としての自分と、男としての自分を取り戻したらしい、意図した物では無いが結果が良ければ問題無いだろう。私は用意しておいた、金貨をロ

ワイエさんに差し出した。

「ロワイエさん、これが報酬です」

「これは受け取れませんね。私はラスティン様からお金を頂いて、仕事をしただけなのですから」

ロワイエさんは私が差し出した、金貨入りの皮袋に見向きもしなかった。うん、実に良い人間じゃないか！

「そうですか、これは引っ込める事にします。また何か様があったら、ロワイエさんにお願いする事になると思います」

「はい、お待ちしていますよ。用と言えば、肝心な事を忘れる所でした。これが、父からの手紙です」

私は、ローレンツさんの手紙を半分だけ読んだが、少しだけ不信感を覚えた。後の半分は彼らの情報だから、後でゆっくり読ませてもらうとしよう。

「ロワイエさんは、手紙の内容をご存知ですか？」

「はい、凡そは。彼らの事を調査したのは私ですから」

「もしかして、ローレンツさんは体調が良くないのですか？」

「ああ、いいえ、本人は元気な積りの様ですが、もう歳ですからね」

「それは良かった、人生の先輩が居なくなるのは寂しいですからね。そうだ、彼らとの会合を考えているのですが、ロワイエさんに調整

役を頼んで良いでしょうか？」
「はい、多分私が適任でしょうからね。それに色々な場所を訪ねれば、商売のネタを拾えるかも知れない」
「私の用件も忘れないで下さいね」
「ははは、はい、お任せ下さい。多分、大丈夫ですから」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

　こうしてロワイエさんの采配で、彼らを王都に集める事になり、明日、彼らとの顔合わせが行われる訳だ。私やエルネストの都合で調整が難航した様だったが、何とか調整がついたらしい。
　ローレンツさんは、やはり学校から動かない様だ、人生経験豊かなローレンツさんの協力を得られないのは不安だが、何とかなると信じたいものだ。また、ジェリーノさんを招くのも無理そうだ、高齢だし身分が高すぎると言うので仕方が無い所だ。
　だが、ジェリーノさんも、ローレンツさんも、エルネストも、そしてミネットも二癖は無いが一癖は確実にあるからな。油断は出来ないかも知れない。ただ、ロワイエさんの資料を読む限り、初見の彼らは皆、ほとんどが少年少女だから、必要以上の苦労はしなくて済むだろうな。
　期待と不安を感じながら、ライルの頭を一度だけ撫でて、私も眠りの世界に旅立った。

第百五話　ラスティン２２歳（蛙の子は蛙？）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

新登場人物一覧（百五話まで）（前書き）

要望をいただいた人物紹介です。

あまり新登場させた気は無かったのですが、意外に多くの人が登場しています。

多少前後している人達も居ますが、演出の都合と言う奴ですので、気にしないでやってください。

新登場人物一覧（百五話まで）

★レーネンベルク公立高等学校の卒業生

＊　クロディー

　レーネンベルク公立高等学校の卒業生でキアラとカグラの親友。外交そして諜報を専攻している。スパイとしての能力は優れているが、致命的な欠点の為、トリステインの間諜達の指揮官になる。キアラを苦手としない貴重な人物。レーネンベルクの五星の１人。

＊　ジェフ

　レーネンベルク公立学校の二代目生徒会長で、キアラ・ラブな男の子（男性）です。政治的な手腕は、後述のマリユスに劣りませんが、あまり目立ちません。結構小柄な男性ですので、上記の女性の餌食になるかも知れません。

＊　ユニス

　レーネンベルク公立高等学校の卒業生で専攻は経済とデザイン全般で、色々妙な所で活躍してくれます。基本的に非の打ち所が無い女性ですが、後述のアンセルムに惚れてしまっています（これが唯一の欠点でしょうか？）。彼女の母親は、高級娼婦だったという設定ですが、母の影響が良くも悪くもユニスにはあります。レーネンベルクの五星の１人。

＊　マリユス

　レーネンベルク公立高等学校の卒業生で専攻は政治全般と料理。ワーンベルで主人公の補佐をしていたマルセルの息子。細身だが大食漢で、食べるのも料理するのも好き。終には自分の料理店まで持つ様になった。レーネンベルクの五星の１人。

＊　アンセルム

　レーネンベルク公立高等学校の卒業生で専攻は軍事と教育。幼い頃から傭兵団に居た為、戦場と言う物を本当の意味で理解している主人公の軍師役。色々あってキアラに惚れているが、想いが届かない事も理解している。レーネンベルクの五星の１人。彼が居た傭兵団の団長は実はかなり昔から複数回登場しています。

＊　キアラ

　レーネンベルク公立高等学校の卒業生で天才であり秀才。レーネンベルクの五星の要。主人公ラブだが、その想いは届くのでしょうか？　まあ、不幸にはならないですが、挫けない女性です。意外にも、彼女がエレオノールの為にする提案が彼女自身の運命を動かす事になる予定です。

＊　カロン

　レーネンベルク公立高等学校の卒業生の１人で、潜入部隊の代表格。とある部署に潜り込むが、苦労する事になります。建築関係を専攻していたりします。

★ライデンの町の関係者

＊　ライル

　ゲルマニア軍に襲われたライデンの町の戦災孤児。後に主人公の養子となる。土メイジとしては結構な才能を持っている。彼の正体は、番外編で語りたいと思います。とある王女様と恋仲になる予定です。

＊　ベル
　ライルの母親、ライルを庇って死亡。あの女性ですよ？

＊　カルヴィン
　ライデンの町の役人。かなりの煩型で、ライデンの町の代官とは犬猿の仲だった。彼の苦言に耐えることで、マリユスは一人前になれた感じでしょうか？

★ゲルマニア関係

＊　ナポレオン1世
　ゲルマニアの新皇帝。現在判明している6人目の転生者で、主人公やエルネストと同様飛び抜けた魔力量を誇りそれを利用して若くして土のスクエアメイジにまでなった。危険な野心家だったりしますが、父親である宰相と仲が悪くなりつつあります。（宰相が皇帝を制御しにくくなっていると言う感じでしょうか？）

＊　ヴァルター・フォン・クロンベルク
　騎士ヴァルターとして、一部では有名なゲルマニアの貴族。戦術や練兵と言った面では優秀だが、お人好しな面がある。それも含めて、下級の兵士などには人気がある。兵団の捕虜となり、後にトリステインの指揮官として登用される。

＊　ブルーデス伯爵
　ゲルマニア貴族。　色々不幸ですが、生き残る事が出来ただけ幸せなんでしょうね。

＊　アルマント・フォン・ブルーデス

ブルーデス伯爵家嫡子。コルネリウスの幼馴染でもある。爵位を降格されて、領地も移される事になりますが、ブルーデス家を何とか存続させて行きます。

★トリステイン王族とその関係者

＊　エロワ・ド・バイリー
魔法衛士隊、ヒポグリフ隊の隊員。後に隊長に昇進、とある事件の時に主人公に協力的な態度をとる予定。

＊　元帥殿
え？　これが本来の名前ですよ？　ナラン・ド・メルレ？それは仮の名前ですよ！

＊　侍医長
エルネストが嫌いな兄だったりします。名前はまだありません。ずっと無いかも知れませんよ？

＊　マリアンヌ王妃
トリステイン王妃様です。この方も波乱万丈の人生を歩む事になります。彼女がそれに気付いたのは遅すぎたのか、間に合ったのかどちらでしょう？

＊　マザリーニ枢機卿
多く語る必要は無いですよね？　フィリップ４世の懐刀的な存在です。外国の人間同士で、フィリップ４世も心を許しています。心を許しているが故に、フィリップ４世の人生に少なからぬ影響を及ぼします。

＊　アニエス・ド・ダクール
　あのアニエスとは別人ですよ？　でもアニエスである事が重要なのです。

★ローレンツ商会関係

＊　ロワイエ
　ローレンツ商会の金庫番をやっていた、ローレンツの長男。ちなみに独身ですよ？　この人が登場したと言う事は・・・。

＊　ヨルゴ
　実は女性画家の仮名です。後にロワイエと結ばれる事になります。とある人物から芸術的な刺激を受け大成する予定ですが、話に出てこないかも知れません。

＊　エルワン
　ガリアでローレンツ商会の様に急激に勢力を伸ばしてきた商会の会長。頑張ったんですけどね。

★その他

＊　アリエの大樹の精霊
　レーネンベルク山脈のある場所で長く生きている。意外な所で再登場する予定。ジョゼット、ルイズ、テッサの杖は、彼の枝から作られた。”挿し木”、植樹と言った方が正しいですが、意味がある

行為なんですよ？

＊　ベッケル子爵

　レーネンベルク公爵の友人。意図せず暗殺者の役割をさせられた人物。毒の影響で手足の自由が利かなくなり、メイジの多いレーネンベルクの屋敷で療養している。エルネストの実験台にされて、酷い目にあってしまう人です。主人公に協力的な珍しい貴族の１人になる予定。

新登場人物一覧（百五話まで）（後書き）

人物紹介は、これで最後かも知れません。

百六話で多くの人が一気に出るので要望があれば、最終話までに一度入るかも知れませんが？

第百六話　ラスティン２２歳（最初の会合）（前書き）

第百六話ＵＰします。

転生者達の集会の話です。話の終盤に来てここまで登場人物が増えるのにも理由がありますよ？

第百六話　ラスティン２２歳（最初の会合）

今、私はカルネヴァレで使う様なマスケラを被ってその上、ぞろぞろしたマントまで身に着けて、円卓に座っている訳なのだ。知らない人が見ればさぞ異様な風景に見えると思うと、どうも落ち着かない。そもそも、王城を出るのに変装している私が、更に仮装すると言うのはどうなんだろうか？

何故こんな（間抜けな）仮装をしているかと言えば、この会合に参加する際に、ロワイエさんから身につける様にと渡された為なのだが、勿論納得はしていない。こんな格好をして、大真面目に誰がこの会合の議長を務めるかを議論しているのは、いかにも子供染みていると思えてしまう。

まあ、この会合の参加者の多くが子供だという事を考えれば、別に不思議な事では無いが、この年齢になって学級委員を決める様な騒ぎに参加する事になるとは思わなかったな。最初の自己紹介辺りは、一応問題が無かったのだがな。

横に目を向けてみると、エルネストも同じ事を考えていたらしく、目が合ってしまったが、お互い肩をすくめただけだった。その向こう側では、ミネットが我関せずと言った感じで熱心に紙に何かを書き込んでいる。そろそろ潮時なのかも知れないな。

私は鬱陶しいマスケラとマントを脱ぎ去って、こう話しかけた。

「アルノーと名乗っている、そこの君、この状況は君が作り出したものだけど、これで満足かい？」

「！？」

私に倣って、エルネストとミネット（一応は話を聞いていたらしいな）が、マスケラとマントを脱ぎ去った。会合の参加者に動揺が走ったのが分かるが、知ったことか。

「ロドルフ君、君はローレンツ商会に最初に名乗り出た時に、アルノーと名乗っていたね？　偽名を使う事自体は、身を守る上からも否定はしないけど、”アルノー”と言うのは本当に君自身が決めた名前なのかな？」

「え、あの・・・」

「”古田淳司”と名乗った君の日本での名前は本当の物なのかな？」

「・・・」

「僕達はこの地に何かの理由でやって来た異邦人なんだと思うんだ。その仲間さえ信用出来ないかな？」

少年少女達の何人かが、アルノー君に冷たい視線を送りながら、マスケラとマントを同じ様に脱ぎ去った。

「アルノー君、君が偽名を使う理由は想像がつくよ。多分前世の記憶に影響されているんだろうね。ネットの世界では、当たり前の様にハンドルネームとかニックネームとか言って、本名を名乗らなかったからね」

「私は・・・」

「この、マスケラとマントを手配するようにロワイエに依頼したのも、君なんだろう？」

会合の参加者のほとんどが、マスケラとマントを脱ぎ去ってしまったが、アルノー君だけがそれを脱ぎ去ることが出来ないでいた。

「このトリステイン王国に生まれて、今まで君は何を感じてきたかな？　その経験が、サンディ君とバベット君の諍いに油を注いで、横で眺めるて喜ぶ様な事を君にさせたのかな？」

「・・・」

「応えろ、ロドルフ・ド・アンジェ！　落ちぶれたとは言え、貴族だった君のお祖父さんは、君にそんな教育をしたのか！」

「うっ！」

さっきまでは、私の事を睨みつける様に見ていたアルノー君（いや、本名のロドルフ君と呼ぶべきだな）の目が潤んだような気がした。

「うわーん」

あれ、泣きだしちゃったんだが、これをどうしたら良いのだろうか？　失敗した、普通の大人を問い詰める積りだったのだが、記憶は兎も角、精神的には8歳の子供だと言う事を忘れていたぞ。心なしか、エルネストの視線までもが冷たく感じるぞ？　ミネットに至っては、泣き続けているロドルフ君の頭を抱しめる様にして慰めていたりする。この裏切り者達め！

この様な流れで、何故か私が、この会合のまとめ役を務める事になった。何も知らない人がこれを見たら、私が子供を”いぢめて”

この地位を得た様に見えてしまうのだろうな。議長などと言う立場は、かなり不本意だが、私が副王である限り、彼らに出来るだけの便宜を図りたいと思う。異境で出会った仲間がどれだけ貴重か、私には分かっているのだから。

＝＝＝

若い転生者達との会合は私にとっては色々な意味で意外な収穫だった。それが本当に良かったのかは疑問が残る物もあったが、それを知っている事に意味があるのだと思う。

転生者の皆が、”ゼロの使い魔”を愛読していた事、そして原因は様々だが、若くして死んでしまった事等は予想通りだった。問題は、何となく感じていたそれ以外のことなのだ。

例えば私は、転生者達にこれまで私が行って来た物語（歴史）に対する干渉を色々と話して聞かせたのだが、反応は思っていたものと違っていた。あまりにも反応が薄かったのだ、別に批難されたかった訳では無いのだが、彼らの知っている物語（歴史）とかけ離れてしまった事に文句の１つ位出るかと思ったのだが、誰一人気にした者は居なかった。

逆に転生者達に、前世での特技技能を尋ねると、話が止まれなくなって会合の予定時間を大幅に過ぎてしまった程だ。彼らは自分の特技を使って、この国そして、この世界を変える事を熱く語ってくれた。（エルネストやミネットまでもが子供達と一緒になって語り合っているのには、妙な疎外感を感じた）

この場に居ない者も含めて、簡単に転生者達の事を纏めてみよう。（一部想像が含まれるが）

・名前　性別：年齢　（前世の名前）
生まれ　前世の職業
特技、こだわり？

・ジェリーノ・タルキーニ　男：６５　（キース・ガードナー）
教皇の家系　宗教学専攻の大学生
以前のブリミル教に反感を覚え、教皇となり教会内の改革を行った

・ローレンツ　男：６３　（長谷部　恭介）
魚商人　商社営業（漁村の出）
商人としての成功、学校経営を夢見る

・ラスティン・レーネンベルク・ド・トリステイン　男：２２　（如月　更夜）
鉱山を所有する貴族　材料学専攻の大学生
普通？

・エルネスト・ド・オーネシア　男：２１　（下村　清春）
水メイジの家系　医師
マッドドクター（ハルケギニアに現代医学を広める）

・ミネット　女：１５　（丹羽　保）
商家（多分色々な品々を手に出来るからだろう）　自称発明家
発明命！　何時かは、ジェットで空に！

・アミラ　女：１０　（家崎　真理奈）
農民　農業研究員
土壌研究で農産物の収穫量を増やしてみたい

・フリード　男：９　（近藤　英司）

農民　農業大学の生徒
農作物の品種改良を行って、ハルケギニアを豊かにする

・リッテン　男：９　（吉岡　稔）
鍛冶屋　無職（良家の御曹司）
鉄道マニアでハルケギニアに列車を走らせたい
（父親は以前ワーンベルに居たそうだ）

・ヴァレリアン　男：８　（佐々　望）
旅芸人　演出家兼劇作家（演劇に限らず、色々な芸術に詳しいそうだ）
現代風の演劇を流行させたい

・サンディ　男：８　（武田　喜一）
町民（私塾経営）　教師
熱血教師（いや、本当にこの一言で全てなのだ）

・ロドルフ・ド・アンジェ　男８　（古田　淳司）
元貴族の家　コンピューター？
？？？

・バベット　女：８　（油井　昭二）
修理屋　自動車工
ハルケギニアに自動車を走らせたい

・ベレニス　女：８　（新川　海）
漁師　海洋学
ハルケギニアの海の生物研究をしたい

・クロエ　女：８　（瀬名　有紀）

薬師（平民メイジ）　薬剤師
魔法薬とはどんなものなのか知りたい、作りたい

・ルネ　男：7　（須田　元康）
大工　建築家の卵
日本風の建築技術をハルケギニアに広める

・ナポレオン1世　男：？　（？）
ゲルマニア皇帝の家系　？？？
？？？

こんな感じになるのだが、例外は有る物のほとんどの転生者が、自分の特技を活かせる家に生まれているのも興味深い。男女が前世とバラバラだと言うのも何か意味があるのだろうか？

私としては法律の専門家でも居てくれれば嬉しかったが、そう上手く行く物でも無い様だ。ただ、彼らが覚えている技術が、これからのこの国に必要である事は否定できないだろう。私は、副王として彼らの活動をバックアップする事を約束した。そして、年に2度この様な会合を定期的に開く事を決定して第一回の”トリステイン民主化委員会”の会合が解散となった訳だ。（これは私が勝手に呼んでいるだけで、単なる”委員会”と言うのが正式名称なのだが、”委員会”というのが何となくカッコいいという事で決まったのはどうかと思うぞ？）

＝＝＝

「エルネスト、明日にはラ・ヴァリエール領に戻るんだろう？」

「ああ、ルイズや君の息子達も一緒の予定だけど？」

「少し話を聞きたくてな。君が嫌がる話だと思うが良いかな？」

「オーネシアの事か？　煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

随分と物騒な話になった物だな。そういう話ではないのだが。

「オーネシア家とラ・ヴァリエール家がカトレアの治療で揉めた事が有っただろう？」

「随分前の話だよ？　その事自体は、もうどうでも良い話だよ」

「いや、僕が聞きたいのは、”カトレアの治療”の話を言い出したのは、君自身なのか？　それともオーネシア子爵だったのか？　という話なんだ」

「？　それが重要なのか？　その頃の僕は”カトレアの治療”にはあまり興味が無かったな」

「と言う事は、オーネシア子爵が勝手に公爵と話を進めたと言う訳なんだな？」

「そうなるな」

「君らしくない気がするんだが？　”カトレアの謎の病”の事は知っていたんだろ？」

「そんな事が気になるのかい？　今は”僕のカトレア”も健康体になったんだから、問題は無いはずだろ」

「まあ、そうなんだが」

やはり気のせいでは無いらしいなエルネストもこの調子だし、ミネットがコルベール先生を助手にと望んだのも、話の流れからだったと、今更思い出される。もう一度機会を作って物語（歴史）介入についてジェリーノさんから話を聞きたい物だな。それに、ローレンツさんが物語（歴史）介入をしたかどうかも聞いてみたいな。

＝＝＝

私がエルネストと実りの少ない話を終えるのを待っていた様に、会合を取り仕切ってくれたロワイエさんが私の所にやって来た。

「ロワイエさん、色々手配していただき、ありがとうございました」

「いえいえ、ここには大きな商売の気配がありますからね。自分自身の為でもありますよ。それより少し相談したい事があるのですが？」

「構いませんよ」

「あの”アルノー”君についてなのですが？」

「ロドルフ君と呼ぶ事になりましたよ。ロワイエさん情報が役に立ちました」

「そうですか、彼の為にはその方が良いでしょうな。まあ、それはそれとして、そのロドルフ君が私に借金を申し込んで来たのですが、事情を聞いても話してくれないのです」

エルネストとあまり実りの無い話をしている間にも、ロドルフ君は動いていたらしいな。

「幾ら位の借金を？」

「新金貨１００枚だそうです」

「彼位の少年が持つには、かなりの大金ですね」

先程の会合で確認した、自分達の前世の事を軽々しく話しことを禁じると言う決定に従っているらしいな。（まあ、禁じるまでも無くこの世界が物語の中の世界かも知れない等という話は、転生者の中では誰もしていないだろうな。前世の記憶以上に受け入れられない事だろうからな）

それにしても、その金額には何故か覚えがある気がするのだが？

「私としても、事情が分かれば貸しても損はしないと感じているのですが」

「それは、先程の会合で決めた事なんですよ。分かりました、彼と話せますか？」

「はい、別室で待たせてあります」

「あ、ロワイエさん、少しお願いがあるのですが？　とある物を手に入れてきて欲しいのです」

「また無茶な注文じゃないでしょうな？」

「そんな事はありませんよ。この王都で手に入る物ですから、勿論報酬はお払いします。白金貨一枚でどうですか？」

「その一枚というのは、嫌な響きですね。幾ら位の物なんですかね？」

「さあ、分かりませんが、今発行されている新金貨で１００枚はしないと思いますよ」

「まあ、新硬貨の方が価値が高いですからな。安く手に入れればそれだけ儲けになると言う訳ですな。相手には損をして貰う事になりますね」

ロワイエさんも随分と商人としての自信を取り戻したらしいな。まあ、ロドルフ君と話しながら待つ事にするか。

第百六話　ラスティン２２歳（最初の会合）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

この機会なので、ちょっと問題です。皆さんは”最初の転生者”は誰だと思いますか？　もう少し後に名前が登場予定です。

・レイモン　男：？？　（田辺　雄一郎）
？？？　？？？
前世で病弱だった為、家業？と、とある事を生業とした

といった感じでしょうか？

第百七話　ラスティン２２歳（被害者）（前書き）

第百七話ＵＰします。

第百七話　ラスティン２２歳（被害者）

私が部屋に入ると、ロドルフ君は露骨に怯えた表情を浮かべた。

「まあ、僕達は同志なんだし、そんな顔をしないでくれ。先程の事はこの通り謝るから」

僕が、頭を下げると、ロドルフ君もさすがに落ち着きを取り戻してくれた様だ。仮にも”副王”が軽々しくとか言われそうだが、私的な場面なら気にする事は無いと言うのが私の考えだし、例え公の場だったとしても必要があれば幾らでも頭を下げる事を厭う積りはない。

「こちらこそ、変な騒ぎを起こして済みませんでした。私、いえ、僕は最近前世の記憶を取り戻したばかりだったので、あちらに引かれる感じがあるんです」

「そうか、君もやっぱり寝込んだんだな」

「はい、７ヶ月ほど家族には迷惑をかけてしまいました。他の子達も同じみたいですよ、そんな話をしていましたから」

「１つ聞いていいかな？　先程の得意技能の紹介の時なんだけど、君が言ったのは嘘では無いけど、全てでは無いんじゃないかな？」

「あはは、やっぱり貴方には分かってしまうんですね。そう言う貴方も、何だか変じゃありませんでしたか？」

中々細やかな所に気が付く子だな、私にとっては材料学は手段で

しかないから、熱く語るということが出来なかっただけなんだが。

「まあ、色々悩むことがあってね。君も噂ぐらい聞いたことがあるだろう。ガリアとゲルマニアの戦争の事を」

「副王って、他国の戦争まで関わるんですか？」

「何時、こちらに飛び火するか分からないからね、念の為と言った所なんだ」

「そうですか、わ、僕の為に変な事をさせてしまってすみません」

「いいや、さっきも話したと思うけど、君達の知識がこの国の役に立つと思えば、幾らでも協力させてもらうさ」

「信じても良いんですか？」

ロドルフ君が縋るような目で私を見ている。どうもこの子は、”おとこの娘”ぽいな。

「どうだろね、僕は信じて欲しいと思うけど、ここで僕が君に新金貨１００枚をあげたとしても、それが信頼の証になるかな？」

「そうですね、でも今の言葉で分かりました。ラスティンさんは信頼出来る人だって」

「そんなに簡単に信じて良いのかな？」

「はい、私を騙そうとしている人がさっきみたいな事は言わないですよね？」

「君がそう思うなら、僕は出来るだけ期待に応える事にするよ」

「あの、私の話を聞いてくれますか？」

「うん、聞かせてくれるかな」

「私の前世の名前は、”元井　曜子”といいます。情報工学を専攻していて、専門は”人工知能”の研究でした。”古田淳司”と”アルノー”は、私が使っていたハンドルネーム何です。ネット上で色々な人を観察している内に、あんな事をする様になってしまったんです」

うん、やっぱり女の子だったのだな、少々危なっかしい感じがしたのはそのせいだろう。しかし、”煽り”とか何だろうな、あまり良い趣味とは言えないな。

「”人工知能”か、なるほどね。それで、アンジェ家と言う訳か」

「え？　どういうことですか？」

「いいや、何でも無いよ。君の周りには”インテリジェンスソード”が沢山あったんだろうね」

「やっぱりお爺様の事をご存知なんですね？」

「いいや、僕は貴族に興味が無いからね」

「でも、エレオノールっとさんと婚約したんでしょう？」

「その辺りは、プライベートだからね。恥ずかしいし」

「ふふふ、そうなんですね」

「君については、ロワイエさんが調べてくれたんだよ。他の子達についてもね」

「そうなんですね、最初からばれていたんだ・・・」

「君のお爺様が、”インテリジェンスソード”を買い漁って、家の財政を破綻させて実家を放り出されたことも知っている、だけど、嘘は良くないよ。今度の委員会の会合できちんと皆に本当の事を告げるんだ。出来るね？」

”インテリジェンスソード”に興味があって、”インテリジェンスソード”が沢山ある家に転生したと言う訳か、先程の推論を裏付ける結果だな。

「はい！」

「うん、男の子らしい良い返事だ。ところで、君が申し込んだ新金貨１００枚の借金の話だけど？」

「それなんですけど、実は家に有った”インテリジェンスソード”達は、全て僕の治療の為に売り払われてしまったんです。誰が買ったのかも両親は教えてくれなかったから、彼を手に入れたいと思ったんです。折角王都に来たんですから」

うむ、何やら皮肉な結果だ。考えてみれば、私の両親も私の治療の為にかなり無茶をした訳だからな。普通に裕福な家と言った程度

では、家計が傾くと言うのもありえない話では無いか？

「そうかそれで、”デルフリンガー”なんだね？　でも、君が”彼”を手に入れてしまったら、”平賀才人”君はどうするんだろうね？」

「あ！　そうですね。でもラスティンさんは、”平賀才人”は召喚されないかもって言っていましたよね？」

「ああ、そういう言い方なら、ルイズが召喚するガンダールヴの為の剣という言い方になるかな」

「なるほど、そういう事ですね。それならどうしたら良いのでしょうか？」

「僕が”彼”を買い上げて、君に貸すことにすれば良いさ。やって来るはずのガンダールヴには、僕から渡す事にするよ」

「本当ですか！　お願いします！　何でもしますから！」

すごい食い付きだな。まあ、転生者の習性について、少し理解が深まった気がするから、良しとしよう。それに、私の様に恵まれた環境に無い転生者には、経済的な援助が必要なのも分かったのは収穫だな。（それに、ロワイエさんにお願いした事も無駄にはならなかった訳だ）

「何でもか、ロドルフ君、君は魔法学園に入る積りは無いかな？」

「でも、魔法学院は１５歳から、あ、レーネンベルク魔法学園ですね、この歳で入学出来るんでしょうか？」

「ああ、あそこは年齢制限をしていないからね。多分、君も優れたメイジの素質を持っている筈だし」

「僕が！　あ、でも、両親が何と言うかな？」

「そうだね、副王様に直々にスカウトされたとでも言ってご覧。それに、君の御両親には、分かっているんじゃないかな？　もう、自分たちが貴族では無いという事が」

「そうですね・・・。そうしてみます！」

それから、ロドルフ君としばらく話し込んでいると、部屋のドアがノックされた。どうやら、ロワイエさんが取引を終えて戻って来たらいし。布に包まれたかなり長い物が、ロワイエさんの腕の中にあるのを見て、ロドルフ君も何かを察したようだな。

「ラスティンさん、それってもしかして？」

「そう、今日から君に貸してあげる物だよ」

ロドルフ君が、ロワイエさんからそれを受け取ろうとするが、自分の背より長いものだから、よろけてしまった。慌てて支えるが、ロドルフ君はそんな事に頓着しない様で、それを包んでいる布を剥がしにかかった。

中から現れたのは、古びた長剣（ツーハンデッドソードだな、これは）だった。ロドルフ君が懸命に鞘から抜こうとするが、当然苦労することになる。床に置けば良いのだろうが、彼はそうする積りは無いようだ。（彼なりの”インテリジェンスソード”に対するポリシーの様な物を感じるな）

結局、私がそれ（いや、”彼”と言うべきなのだろうな）を鞘から抜いてあげることになった。私にとってもかなりの重さだったが、何とか鞘から抜き去り、”彼”をテーブルの上に横たえたのだが、”彼”からの大きな反応は無かった。

例の金具が少し震えているのが分かったから、耳を近づけてみると。

「とうとう、武器屋からもお払い箱で、こんな盆暗な貴族や子供の玩具にまで落ちぶれちまうとは。何時になったら、”使い手”に出会えるのやら、とほほ・・・」

等と小さな声？で愚痴っているのが聞こえた。まあ、”彼”にとっては、剣を振るったことも無い私などは、盆暗なのだろうな。私と同様に、ロドルフ君とロワイエさんも耳を近づけていたが、ロワイエさんが、こんな事を”彼”にささやいた。

「この方は、この国の副王様なんだがな？」

「はぁ？　こりゃあ、おでれーた！　あんたみたいなのが、王族とはな」

「気にしなくていいよ、君には色々役に立ってもらう予定だからな。そうだろ、ロドルフ君？」

「はい！　私は貴方の”身体”と”精神”に興味があるの。隅々まで調べさせてもらうわ！」

前世を思い出させるのか、完全に女性の言葉遣いで、手をわきわきさせながら、”彼”に近付くロドルフ君だったりする。ちょっと

（いや、かなり）不気味だな。

「おい、何だよこの子供は、えれー不気味なんだがな。おりゃーしがない”インテリジェンスソード”だぞ、そんな目で見ないで～。そんな手付きで触らないで～」

ロドルフ君もどうやら、エルネストと同類らしい。”デルフリンガー”君も妙な苦労をする事になるんだろうな？　まあ、死なないし、壊れても問題ない彼の事だから、本気で問題ないだろうが、ご愁傷様と言った所だな。（あ！　精神的に壊れたりしたらどうなるんだろうな？）

＝＝＝

ロドルフ君とデルフリンガーのやり取りを見ていても仕方がないから、別室に移ってロワイエさんと話をする事にした。決して、ロドルフ君とデルフリンガーのやり取りが怖かったからではないぞ？

「ロワイエさん、今日の会合に参加した子供達の家の状況はどうですか？」

「状況と言いますと？」

「ああ、主に経済的にですよ」

「・・・」

「ロワイエさん、彼らと彼らの家族は、私が面倒を見ますからね？」

「仕方がありませんな、この国の為に、涙をのんで諦めましょう」

「ロワイエさん！」

「冗談ですよ、父から色々注意を受けましたからね。彼らの不利益になるような事はしませんよ」

その言葉に思わず納得しかけたが、ガリアでローレンツさんと義理の息子セザールさんに、騙された事を思い出したぞ。

「その言葉は信じますが、彼らの事はやはり私に任せてもらえませんか？　彼らと私にしか分からない問題もありますから」

「ふぅ、随分と用心深いですね」

「ローレンツさんもセザールさんも、そしてロワイエさんも正しく商人ですからね」

「ははは、それは私にとって褒め言葉ですね」

「ええ、褒め言葉ですよ。商人の方々は利には聡いですからね」

「それは、私が信用できないとおっしゃっているのでしょうか？」

ロワイエさんの目が心無いしか細められている。前回の様な茶番では無く、今回が本番なのだろうな。

「有体に言えばその通りです。私はまだロワイエさんの信頼を受けるに足る事をしていませんからね」

「貴方は・・・、父も変わり者ですが、貴方はその上を行きますね」

「それは、褒め言葉でしょうか？」

「いいえ、呆れているだけですよ。ずっとね、商人ばかり相手をしていると、ふと、虚しくなる時があるのです」

ロワイエさんがなんだか関係の無い話を始めたぞ？　罠か？　いや、表情も目も嘘は言っていないと思える。

「自分たち商人は、仕入れた商品に適当な価格をつけて売ります。時々その価格が本当に正しいのか、疑問に思えたりするのです」

「そんな事があるんですか？」

「ええ、商人の中にはそれで商売を辞めてしまう者もいますよ。意外ですか？」

「さあ、商売や金勘定は私の管轄外ですからね」

「そんな商売を辞めた父の友人の一人が教えてくれました。父と話していると、”自分がやっていることは正しいのか？”と考えさせられる事があったそうです」

ロワイエさんは、私の返事が耳に入らなかった様に話を続けた。

「私は父と話していてもそんな事を感じたことはありませんでいしたが、今日の事を見ていて少しだけその気持ちが分かった気がしました」

「え？　今日の会合に何か感じたのですか？」

傍から見れば、いい大人が子供を泣かしただけだった気がするんだが？

「何と言ったら良いでしょうね？　”同じ立場に居ながら、少しだけ物事が良く見えている”と父の事を表現していた人がいましたね。その少しが大きな差を生み出すとも言っていました」

少しね、ローレンツさんはこの世界で余程上手く立ち回ったらしいな。私も見習わなければならないのかもしれない。少しだけ多くの事を知っている事が、大きな違いを生み出すか、確かに私の人生がそれを証明しているな。

「もしかして、ロワイエさんがヨルゴに惹かれたり、ローレンツさんが学校を経営したいと思ったのもその辺りが原因なんじゃないですか？」

「え？　ああ、そうかも知れませんね」

＝＝＝

王城に戻ると、キアラとライルが迎えてくれた。予定よりかなり遅くなったので、心配をかけたようだ。

「キアラ、ライルの世話を任せてしまってすまないな」

「いいえ、ライル君は良い子ですから、全く問題ありませんでしたよ」

キアラの隣でライルが、少しだけ照れた様子だった。ライルと夕

食をする予定だったが、キアラも同席する事になった。キアラとライルが仲良く話しながら食事をする姿は、微笑ましいものだった（姉弟の様でだぞ、キアラには悪いが相変わらず親子には見えないな）。明日は早くから、皆と一緒にレーネンベルクへ帰る事になるライルと一緒に早めに休む事にした。

「ライル、食事の時にキアラと話していたのを聞いて気になったんだけど、君はアンリエッタ、いや王女様が嫌いだったりするのかな？」

「あ、えーっと」

「別に怒ったりはしないよ。ライルにしては珍しいと思っただけだからな」

「はい、僕はどうもあの方が好きになれそうもありません」

「良かったらどんな所が、嫌いなのか教えてくれないか？」

ライルは少し言い辛そうにしていたが、思い切った様に話してくれた。

「今日、キアラお姉さんに王城を案内してもらっていた時に、王女様とルイズが遊んでいる所を見たんです」

「そうか、人形を取り合って、取っ組み合いのケンカでもしていたかな？」

「ううん、取り合いにはなったけどケンカにはならなかったんだ。人形遊びは王女様がやることになったんだけどなんて言ったらいい

のかな。ルイズの方が王女様に遠慮じゃなくて、うーん、譲ったっていうのかな、そんな感じだったんだ」

「譲ったか、それで？」

「うん、その時、思ったんだ王女様の方が年上なのに、王女様の方が子供みたいだって。なんだか、凄く恵まれた環境にあるんだなって思ったんだ」

「王女様だって、父親が病気で苦しんでいるんだよ」

「そうだよね？　でも何だか、王女様からそんな感じを受けないんだ。一緒に居たルイズの方が、色々苦労しているんじゃないのかな～。あ！　ごめんなさい、王女様の悪口を言う積りは無かったんです」

「いいや、ライルがどう感じたかの方が大事だからね。それにしても、ライルは良く人を見ているね」

「そうかな？　子供の頃からこうだったよ、母さんが良く教えてくれたんだ」

「お前は、まだまだ子供だよ。もう少しだけ、自分の好きに生きて良いと思うよ」

「母さんは居なくなちゃったけど、僕は今、幸せだよ？」

「そうか、ありがとう」

「なんで、父様がお礼を言うの？」

「そんな気分だったんだよ、大人になれば分かるさ」

「ふーん」

アンリエッタについて色々考えさせられたな、子供の感性というのもバカには出来ないようだ。だが、この件に関しては、私は主体的に動けないのだろうな？　悪い事をしたら叱る、何か学ぶことがあると思えることは積極的にさせてみるという、今までと変わらない方針しか思いつかなかった。

アンリエッタも多分、追い込まれれば出来る子の筈だから、何とかなると信じたい物だ。私の子供ならば有無を言わさず、レーネンベルクの父の所で数年勉強をさせるのだがな。そう考えると、ライルは正しく私の息子なのだと思える。

第百七話　ラスティン２２歳（被害者）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

”彼”には色々な試練（拷問）を乗り越えてもらうことになります。
そのお陰で”使い手”には強力な”彼”が手渡される予定です。
まあ、結構時間が無いのでこんな形になりそうです。

２０１１／３／２５
君はが言ったのは－＜君が言ったのは
に修正

第百八話　ラスティン２３歳（視点の違い）（前書き）

第百八話ＵＰします。

第百八話　ラスティン２３歳（視点の違い）

何とかロワイエさんを丸め込んで（商会への利益は約束させられたが）、転生者達とその家族の権利を確保する事に成功した訳だが、当然それには責任が伴う。若き転生者とその家族の将来は私の手にかかっている訳だ。

幸いと言い難いのだが、今の私なら多方面に顔が利くから、彼らの望みを、いや望みに近い生活環境を提供する事は不可能では無かった。部下達の手を借りる事が出来れば、簡単だったと言えたのだろうが、私は出来るだけ彼らの将来を縛りたくは無かったから、王城にいる４人の部下の力は借りなかった。

・農業系の知識を持つアミラとフリードとその家族は、レーネンベルクの父の所へ送り込んだ。兵団の施設隊と行動を共にして、レーネンベルクの農業を発展させてくれるだろう。成果が出れば、今度はそれを国全体に広める予定だ。

・リッテンとバベットは、エレオノールの下で助手をやってもらうことになった。自動車や列車の知識が活かされる時は絶対に来ると思っているから、ミネットやコルベール先生と技術の研鑽に励んで欲しい。

・ヴァレリアンはワーンベルの向かってもらい、あのホールを有効に活用してもらう事にした。その内、クリシャルナが首を突っ込みそうな気がするが、まあ、深刻な事態にはならないだろう。

・サンディは、普通に公立学校へ行ってもらった。ローレンツさんも、本職の教師を得ることが出来れば、安心だろう。

・ロドルフはマリロットへ向かい、魔法学園に入学する事になった。両親も兵団に入り、単なる平民メイジとして働き始めた。

・ベレニスは、扱いに困ったが、思い切ってガリアへ言ってもらう事にした。漁業はトリステインという国では、あまり盛んとは言えず、ローレンツさんの娘婿のセザールを頼る形となった。まあ、ロワイエさんは良い顔をしなかった訳だがな。

・クロエは、エルネストの助手的な立場をやってもらう事になった。魔法薬と聞いて思い出した友人は今、色々忙しいし、クロエが彼女の影響をそのまま受けるのは少し心配だったからだ。少し落ち着いたら、”新婦”の元に就いて貰う事にしよう。

・ルネは、ある目的があって、とある人物の元に行って貰った。まあ、隠すほどの事では無いが、トリスタニアを再建する事を目的とした王城の部署があったので、そこに送り込んだ訳だ。王都の実状を見れば、重要な部署だと思っていたのだが、そこはある意味島流し的な部署だった。

ここに運悪く潜入させてしまったのが例のカロン君だったのだが、彼はその部署から去ろうとはしなかった。建築を専攻していた彼にも今の王都がこの国に相応しく無いと感じていたのかもしれない。彼から聞き出した一番の問題は予算だったのだが、ユニスの協力で何とか解決出来た。次は実際に王都をどうするかだったのだが、そこにルネが丁度良く現れた訳だ。２人の活躍を期待したいと思う。

そう、私は基本的に若き転生者達とペアを組むように、色々な人達を割り当てた訳だ。幼いと言っても良い彼らの才能を引き出すには、これが必要だと思う。

＝＝＝

こんな事を2月ほどかけて、暇を見つけては手配していた訳なのだが、自分でもかなり疲労が溜まっているのが分かる。やはり、私は凡人の様だな、まあ、キアラなどと張り合う積りは無いが、少し無理をしすぎた様だ。政務も一段落した所で、今日から護衛の仕事に戻ったガスパードと年長の護衛の会話を何となく聞き流していた。

私の机の右前方にも1つ机が置かれていて、そこでは新しく入ってきた秘書官殿が不機嫌そうな顔で、共通の友人ののろけ話を聞いていた。まあ、こう言えば分かると思うが、王城ではアルマント・フォン・リューネブルクを名乗って、その上、変装までしているコルネリウス・フォン・ブラウンシュワイクだった。（さすがに王城内では、彼や彼の両親を知っている物が居るかも知れないから、用心の為だ）

ガスパードが今日まで護衛の任を外れていたのは、カロリーヌとの結婚に対するお祝いの意味と、新婚旅行やその他の準備の時間を与える目的だった（こちらの世界でも、あまりメジャーでは無いが、新婚旅行という習慣はあった）。2人は旅行などには行かず、両家の実家や親戚を挨拶して回ったそうだ。

2人が結婚を急いだのも、副王の護衛隊長格と侍医の補佐まで出世した事で互いの実家が妙な動きをする前に先手を打ったのだが、態々挨拶回りまでするとは律儀な事だ。

一方の友人コルネリウスだが、どうも私の秘書として働き始めた当初から、色々納得が行っていない様だ。もう少し真面目に仕事をしろと、何度か苦言を言われた事がある。先程の様に、休憩中の護衛達が、執務室に入ってきて雑談をする事などは、かなり気に入らないらしい。

私としては良い気分転換と、世間の噂を聞ける機会なのだから気

にはしていないのだが、コルネリウスはゲルマニア人らしくなく神経質な反応を見せてくれる。ゲルマニア人らしくないと言えば、コルネリウスには恋人の1人も居ない様だ。まあ、彼の立場では気軽に恋人も作れないだろうから、色々溜まっているのかもしれないな。そう考えると、友人の1人が目出度くゴールインとなれば、多少不機嫌にもなるのもしかたがないだろうな。

「物事の見方が変わるか～、スティン、そう言う物なのか？」

コルネリウスが本音をこぼしたぞ。これは、さっき、ガスパード達が話していた内容だ。

「アルマント、気を付けてくれよ」

「ああ、すみません、殿下。そんな事より、婚約者や妻を持つっていうのは、そんな物なのか？」

「婚約者と夫婦は違うと思うぞ。それに、君だって公爵家の嫡子だったんだから、婚約者の1人位居ただろう？」

「嫌な事を思い出させるなよ、昔の俺はあんなだったからな、長続きしなかったんだよ」

「なるほどね」

「おい、そこは納得する所じゃないぞ！」

コルネリウスが何か文句を言っているが、気にしないでおこう。それにしても、私も結婚したら、人生観が変わったり、物の見方が変わったり・・・！　それだ！　急に立ち上がった私に、コルネリ

ウスが驚いた様だが、それ所では無い。

「ニルス！」

大き目の声で、部屋の外に居る筈のニルスを呼んだ。

「はい、ラスティン様。何か御用ですか？」

「すまないが、キアラに、ここに顔を出すように伝言してくれるか？」

「はい、急いでですね？」

「いや、ただここに来る様に伝えるだけでいいよ。キアラも忙しいだろうしね」

それを聞くと、ニルスが執務室を出て行った。まあ、キアラの事だから、余程の事が無い限り直ぐに来てくれるだろう。

「おい、スティン、どうしたんだよ？」

等と、コルネリウスが言っているが、私の思考はもう1つの問題を、別の角度から考え始めていた。私とジェリーノを除く転生者達が、何故、積極的に物語（歴史）に干渉しないかと言う問題だ。しないのでは無く出来ないと考えたらどうだろう？　原因は分からないが、物語（歴史）に干渉するという思考を禁じられているとか、干渉したいと言う欲求を奪われているとかなら、彼らの態度に納得が行く気がする。

かなり正解に近い気がするのだが、原因に関しても、何故2人の例外が居るのかも全く説明出来ていないな。まあ、神などと言う架

空の存在でも居れば、話は簡単なのだが、私も多分他の転生者達もそんな話は一切していなかったからな。

「ラスティン様、お呼びと聞きましたが？」

おっと、キアラが来たようだ。この考えは保留だな、答えが出ないような問題の様な気もするし、今はもっと実務的な話を優先すべきだろうな。

「枢機卿の手伝いは、大丈夫なのかな、キアラ？」

「はい、急ぎの案件はありませんでしたから」

「そうか、キアラに少し考えて欲しい事があって来てもらった。例のガリアの件なんだが」

ガリアの件と言っただけで目の色が変わったな、キアラもかなり気にしていたから当然かな。

「ゲルマニアがガリアに攻め込んだのでは無く、ガリアがゲルマニアに自国を攻め込ませたと考えることは出来ないかな？」

とても分かり難い言い方だったと思うが、キアラにはそれだけで通じた様だ。執務室の棚に向かったかと思うと、確か以前、クロディィーから直接渡された、シャルル王子派の貴族の名前が記された報告書を引っ張り出して来た。それに、目を通したと思ったら、そのまま執務室から出て行ってしまった。

「あの小さな副宰相殿はどうしたんだ？　それにさっきお前が言ったのはどういう意味なんだ？」

「彼女が何処へ言ったかは、僕も知りたいよ。さっきの僕の台詞はそのままの意味さ」

「”ガリアがゲルマニアに自国を攻め込ませた”だったよな？　本気で言っているのか！」

「僕に怒ってどうするんだよ？」

「いいや、お前がそう言う事を考え付くのが気に入らないな。お前だって、公爵家の嫡子だったんだろ！　自分の領地を敵に態々攻めさせるなんて、領民に顔向け出来んぞ！」

う！　コルネリウスが、さっきの仕返しも兼ねて正論を言ってきたぞ、冷静に考えてみればおかしな考えだな。まあ、かなり疲れていたし、ガリアの事で悩んでいたからこんな考えに至ってしまったのだろう。以前の私が父に同じ様な考えを述べたとしたら、確実に叱られていただろうな。だが、あのガリアの大王を相手にして領主の常識に囚われるのは危険な事だと思うのだが？　あまり自信が無くなって来るぞ？

コルネリウスに一方的に攻められていると、キアラがユニス、マリユス、そしてアンセルムまで連れて執務室に戻って来た。彼らの意見も聞きたいと言う事なのだろうか？　キアラ達は、ガリアの地図（これもクロディーが極秘で入手してくれた物だ）に向かって早口に議論を交わし始めた。私とコルネリウスはその論理展開に付いて行けなかった。

時々キアラから、私から見たロベスピエール４世の人となりや、私ならどう考えるかを尋ねられたが、まともに答える事が出来たか

怪しいものだ。結局かなりの時間が４人の議論に費やされたが、何とか結果がまとまった。当然の様に４人を代表してキアラが議論の結果をまとめて報告してくれる事になった訳だ。

第百八話　ラスティン２３歳（視点の違い）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

次回、ガリアの大王の策略が暴かれます。
（追い込まれた人間が、どんな事を考え出したのでしょうか？）

第百九話　ラスティン２３歳（４人寄れば文殊の知恵：前編）（前書き）

第百九話ＵＰします。

正確には”５人寄れば”なのですが、この場には”彼女”はいませんので、４人なんです。

第百九話　ラスティン２３歳（４人寄れば文殊の知恵：前編）

「先ず、報告の前にお聞きしますが、ラスティン様は、何故、”ガリアがゲルマニアに自国を攻め込ませた”という考えをしたんですか？」

「まあ、色々あって疲れていたんだよ。副王として褒められた考えで無い事も分かっている」

「そうなのですか？　まあ、今回は何も言わないでおきましょうか、では、説明に入りましょう。アンセルム、頼むわね」

「おう、私、まあ良いや、俺の方からは、ガリアがとった戦術・戦略についての考えを言わせてもらうぜ」

アンセルム、お前はもう少し話す時に感情を表さない事と、せめて丁寧な言葉遣いを覚えた方が良いぞ？　キアラに頼りにされて嬉しいのも分かるし、これから話す事が飾って話すような事で無いのは分かるんだが、何故か、キアラとユニスが揃って私の方を睨むんだぞ？

「ガリア側の基本戦略は、ゲルマニア軍に反乱予備軍を討たせるという物だな。言うまでも無いと思うが、こんな事が出来れば、戦略的には満点だろうよ」

「それは分かるけど、本当に可能なのかな？」

シャルル王子を推していた貴族達は、ジョゼフ王子が王太子になった事に不満の声を上げて、ガリア国内には内乱の気配があったの

は確かな事らしい。

「まあ、これを見てくれよ」

そう言って、アンセルムは2枚の紙を取り出して、ガリア北東部の地図を書き写し始めた。意外だが、結構上手い上に早く描き終わった。そこまでは良いのだが、アンセルムはそこに謎の記号を書き加え始めたのだ。（何処か、精霊文字に似ていなくも無い？）

「その記号は、どういう意味があるんだ？」

「！？」

何故かアンセルムの動きがぴたりと止まり、その両脇からキアラとユニスが地図を奪い取って、改めて地名や領主の名前等を書き加え始めた。（キアラは呆れ顔で、ユニスは嬉しそうにだったがな）

「あー、ゲルマニアが攻め込んで占領した土地はほとんどが、”オルレアン派”の貴族達の領地なんだ。多少誤差はあるようだが、それ以外の土地ではゲルマニア軍は戦わずに占領したか、撃退されているんだ」

「そんなに上手く行くものなのかな？　どうやってゲルマニアを攻め込ませる？　それに、”オルレアン派”だって、それほどやられっぱなしと言うのも変じゃないか？」

「攻め込ませるのは簡単だろ？　一時的に内通した振りをして引き入れたり、”オルレアン派”がゲルマニアの力を借りるつもりで接触していたんなら、のこのこやって来たゲルマニア軍に”オルレアン派”を装って攻撃を仕掛ければ、良いだけだろ？」

「それもそうか、ゲルマニア側から積極的に攻めた可能性もあるかも知れないな。モーランドの例もあるからね」

「”オルレアン派”の連中は精一杯やってるんだと思うぜ。ただ、”頭”が居ない状態じゃ、ゲルマニアの大軍に各個に撃破されるしかなかったんだろうな」

そう、”オルレアン派”には、指導者がいないのだ。本来なら、シャルル王子（今はオルレアン大公だな）がその地位に就くはずだったのだろうが、（多分、賢明にも）オルレアン大公はその領地から一歩も動こうとはしなかった。”オルレアン派”と名乗ってしまった貴族達は、途方に暮れたことだろうな。（これは、今年は娘に会いに行けないというオデット様からの手紙でも分かった事だ）

「内乱が起こることを警戒していたんなら、それなりの準備をしていただろうし、ゲルマニア軍も”オルレアン派”以外の土地はほとんど占領出来ていないからな」

そこまで話が進んだ所で、キアラとユニスが地図を完成させて、机の中央に並べて置いてくれた。丁寧な事に、染料を使って、オルレアン派貴族の領地と、ゲルマニア軍が戦って占領した土地が青と赤で塗られていた。こうして2枚の地図を見比べると、アンセルムの言っている事が正しい事を否定出来ないな。

「どうだ、納得行ったか？」

「アンセルムは、もう少し文字をちゃんと書く練習をした方が良いですよ」

「ぐっ！」

胸を張って自慢しようとしたアンセルムにキアラの鋭い一言が放たれた。そして、アンセルムは無駄な抵抗をした。

「良いじゃないか、自分じゃ読めるんだから」

「仮にも教育者を目指す人が、他人に読めない字を書いて良いとは思わないでしょう？」

「うぐっ！」

「貴方はそれで、色々な所に迷惑をかけているのに気付いていない訳じゃないでしょうね？」

「分かったよ。練習しておくって」

ふむ、やっぱりキアラの勝ちだな。ああ、アンセルムが事務仕事をすると他人に迷惑がかかるというのはこう言う事だったんだな。絵は上手そうなのに、何故文字が下手を通り越しているんだろうか？

「まあ、今までの戦況の説明はつきそうだな。今後どんな展開をすると思う？」

「そうだな、これは俺と”会長”は同意見だったんだが、ガリアはゲルマニア軍をもう少しガリア領内に引き込んで壊滅させる積りだと思うぜ」

「”壊滅”か・・・、それは何処で起こるんだ？」

「多分、ここだろうな、セーヌ平野と呼ばれているらしいが、ここならゲルマニアの大軍がガリアの王都リュティスを陥落指せる為に兵を集結させるのにぴったりだ。ガリアとしては、まあ、色々罠を仕掛けるか、もう仕掛けてあるんだろうな」

「時期的にはどうだ？」

「まだ数ヶ月はかかるんじゃないかな、山を越えなくちゃならないし、６万だか８万だかの軍を動かすのは大変な事だからな」

「トリステインとしてはどうすべきだと思う？」

「それは俺の範疇じゃないな。ガリアに援軍が必要とは思わないがね」

まあ、ガリアへの援軍は、公的にも私的にも断られている訳だからな。下手に手を出して、邪魔をされたくないと言うのが本音だったと言う訳か？

これで、アンセルムの戦術戦略分析は終わりのようだ。次は、どうなるのかと思っていると、ユニスが立ち上がって、ゆっくりと話し始めた。

＝＝＝

「最初に申し上げておきますが、ラスティン様が、今回のナポレオン１世の様な事をされたら、この国の財政を預かる者として徹底的に反対させていただきますので、ご承知下さい」

「また随分な言われようだな、僕がこんな事をする人間に見えるか？」

「見えませんが、念の為です。目的も無く戦争を始めて、意味も無く戦線を広げられては、幾らお金があっても足りませんからね」

「それは分かっているよ」

「ここまで戦線が広がってしまうと、ガリアの経済的な復興までは１０年ではきかないのではないでしょうか？」

「１０年か、人的損害を取り戻すのはもっとかかるだろうな」

「そうかも知れませんね、その辺りに関しては、経済ではありませんから。それよりも！　戦争が隣国同士で起こったとなれば話は別です」

うん？　ユニスの目が妙な輝きを放ち始めたぞ？

「これは、トリステインにとってチャンスです。様々な物資が不足してきているのはご存知だと思います。特に戦争と続ける為に、そして、戦後の復興の為にも我が国の工業品は不可欠です」

「うーん、やり方が汚くないかな？」

「何を仰っているんですか！　ガリアに恩を売るチャンスなんですよ、これを上手く活用しなくてどうするんですか？」

「まあ、その辺りは、ユニスに任せるよ」

「実務レベルなら兎も角、国同士で方針を決める所までは、やって頂かないと困ります！」

「それって、僕が？」

「多分、そうでしょうね。頑張ってください、副王殿下」

ユニスは気軽に言ってくれたのだが、あの”大王”を相手に交渉して有利に話を進める事が出来るなんて、全く思わないんだがな～。

「トリステインはガリアから多くの食料品を輸入している筈だよね。そうなると、五分五分が精一杯だと・・・」

「ラ・ス・ティ・ン・さ・ま～」

「分かった、努力はしてみるよ」

今のユニスには逆らわない方が良い様な気がするぞ。ちなみにユニス君、今の君の姿を見てアンセルムの顔が引きつっているのを気付いていないんだろうね？

「私の方からは以上です」

「ありがとう、ユニス。でも君は商売をした方が良かったんじゃないのかな？」

「子供の頃から、お金には縁がありましたから、その分野は得意ではあります。でも、お金を得る為に苦労したくはありませんし、お金が無駄遣いされるのを見るのはもっと嫌いなんです」

「そう言う物なのか？　まあ良いさ人それぞれだしね、次はマリユスかな？」

「はい」

＝＝＝

「ラスティン様は、”内乱が起こる”のと”外敵が侵攻してくる”のでは、どちらが良いですか？」

「そんなのは簡単だ、どちらも起こらないように努力するのが正解だろう？」

「真面目に答えて下さいよ」

「いや、本気で言っているぞ？」

「今回のガリア＝ゲルマニア紛争に関連してです」

そういう前提は先に言って欲しいんだが、正直どちらも有り難くないよな？　副王としては極力起こらない様にすべきだろう。まあ、規模を考えれば内乱の方がマシに思えるが、同じ犠牲が出るとなれば、どっちも願い下げだな。

「強いて言うなら、内乱の方だけど、ロベスピエール４世は違う様だね」

「はい、ガリア王の選択は政治的に、そして多分、外交的にも、最適な選択だったと思います」

この場には、クロディーが居ないから、マリユスが代理をしてくれるらしい。しかし、最適かな？

「内乱の場合と外敵の場合で同じ被害が出るとすれば、外敵を選ぶべきではないですか？」

「そうかな？」

「はい、敵勢力を排除した後の統治を考えれば、外敵の侵攻の方がやり易いと言ったら分かりますか？」

「ああ、そういう意味か。そうかも知れないな」

「例えば内乱が起こって多くの犠牲者が出たとします。その時、民の不満は王や貴族に向かうでしょうね。逆に外敵からの侵略の場合は、民を王や領主を頼る形になります。民の心理的な面で言えば、内乱で国内に信頼できない人間が居るのを心配するより、外敵の再侵攻に備えて一致団結した状態の方が良い方向に向かうでしょう？」

「そうだな、確かにその通りだ」

内乱の方が良いと考えたのは少し早計だったみたいだな。

「外敵に備える為と言えば、かなり思い切った政策をとっても反論し難いでしょうし、何より、”オルレアン派”の貴族達の領地をそのまま国の物にしてしまえば、王権の強化に繋がりますしね」

「それは、国王とすれば、是非採用したくなる案だな」

ガリアが先んじて、中央集権化を進めるか、有り難くない話だな。確かに上手い手だ、さすがはガリアの大王様か？

「外敵の侵攻の方が被害が多かったとしても、国の将来を考えれば、僕とすればこの案を採りたいと思います」

「マリユスがそういう意見を言うとは思わなかったな。国民を数で扱う様な事はしそうに見えないんだが？」

「政治と言うものは多かれ少なかれそう言った側面がありますよ。少しでも多くの人達が幸せになれるようにする為には時には冷酷になる必要だってあります」

「そうだな、肝に銘じておくよ」

「僕がする料理だってそうです。野菜や果物だって生きている訳ですし、肉となる家畜は絞める時悲鳴をあげたりします。可哀想だなんて言っていられませんが、彼らの命を少しでも無駄を少なく、美味しく料理するのが料理人の務めなんですよ」

「マリユス、料理の話は今度の機会にしてくれるか？　外交面の話も聞きたいしな」

危ないな、妙な所から料理好きに繋がるんだものだな？　こっちの方面に入ってしまうと話が長くなるんだよな。

「ああ、そうでしたね。外交面の話をすれば、ゲルマニアは前回我（トリ）が国（ステイン）に、そして、今回ガリアに侵攻した事で、諸国から凶悪な好戦的な国だと思われるでしょう？」

「まあ、そうだろうな」

「妙にゲルマニアが勢力を増す前に、ガリアとしては対ゲルマニア

の旗手となりたいでしょうからね。上手く話が進めば、紛争後の復興に各国からの援助を引き出す事も出来るでしょう？」

「そうだな・・・、他の小国は勿論、トリステインだって単独でゲルマニアに当たるのは苦しいだろうからね」

苦しい所か、本気で戦えば一方的に被害を被る可能性も在る訳だしな。そうすると、さっきのユニスの話と矛盾するんだなこれが、まあ、なるようにしかならないかな・・・・。

「ユニスは１０年と言っていましたけど、僕はガリアの経済的な復興はもっと早いと読んでいます」

「ああ、他国の援助を得られれば、早くなるだろうな」

何で私が、マリユスの発言をユニスが気にするかも知れないと思ってこんな発言をしなくてはならないんだろうか？　マリユスも怖いもの知らずな所があるな。ユニスはマリユスの発言自体は気にしていない様なのが救いだな。

「結局、マリユスは、今後の戦略的にも、経済的にも、政治的な駆け引きで十分取り戻す事が出来ると思うから、”最適”だという意見と言った所なのかな？」

「はい、その通りです。ガリアにとって最悪なのは、他国を併呑して力を付けたゲルマニアが、内乱で疲弊したガリアに攻め込んでくるという筋書きでしょうからね」

「確かにその通りだな、上手く考えたものだな、全く！」

そう結論付けようと思ったんだが、ロベスピエール4世の策はこれだけでは無かった。今まで3人の意見を聞く側に回っていた、キアラが立ち上がったのだ。

第百九話　ラスティン２３歳（４人寄れば文殊の知恵：前編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

通常の箇条書きでは無く、きちんと台詞にしてみました。
分かりにくいかも知れませんが、演出の都合上です。
何せ”彼ら”見せ場なんですからね。

まだ、大王の策略はすべて判明した訳ではありませんよ？

２０１１／４／８
年の為－＜念の為
に修正

第百十話　ラスティン２３歳（４人寄れば文殊の知恵：後編）（前書き）

第百十話ＵＰします。

第百十話　ラスティン２３歳（４人寄れば文殊の知恵：後編）

「３人からの報告は以上ですけど、私の方からも補足しておくことがあります」

「まだ、何かあるのか？」

やっぱり最後をまとめるのは、キアラだな。

「はい、ゲルマニア皇帝が戦死すれば、宰相も困った立場になるはずですが、彼が動かないのが気になりませんか？」

「それは、うん、確かにそうだな。マテウス・フォン・クルークが、ロベスピエール４世の思惑を見破れるとは思えないが、慎重な人間なら、ゲルマニア軍の快進撃が出来すぎだと感じてもおかしくないだろうね」

多分、異常な発想？と、様々な知識と情報、そして、ロベスピエール４世の人となりを知っていなければ、今、皆が話してくれたような結論には辿り着かないだろう。多分、私達と同じ結論に辿り着けるのは、ガリアの王太子だけなのだろうな。

「ゲルマニアの中心まで人を送り込めていないので、はっきりした事が分かりませんが、我が国としてはゲルマニア皇帝には生きてゲルマニアに戻って欲しいですね」

「そうなのか？」

「はい、皇帝派と宰相派の溝が深まる事になるでしょうから。若き

皇帝が敗れたとは言え、ガリアと言う大国を苦しめたとなれば、不利と思われる皇帝派が力を盛り返すでしょう」

「ナポレオン1世は、死んでも、生き残っても酷い目に会うのか。ガリアにとっては・・・、まさか！」

「そうです、もしかするとゲルマニアの内部分裂にも、ロベスピエール4世が関わっているかも知れません」

「正に”神算鬼謀”だな」

「え？」

「いや、何でもない」

「それでは、次に移ります」

「まだあるの？」

「ラスティン様、言葉遣いが！」

「いいから、続けてくれ」

「仕方がありませんね。これも推測になりますが、ロベスピエール4世は故意に自分の権威や名声と言ったものを貶めようとしたのではないでしょうか？」

「？？？　良く分からないんだが？」

「そうですね、こう考えてみてください。今の権勢のまま、ロベス

ピエール４世からジョゼフ王子に王位が引き継がれたとしたら、どうなるでしょう？」

私は試しに自分がジョゼフ王子だったと仮定して、思考を進めようとしたのだが、ダメだあれに感情移入なんて出来ないぞ！

「分からないな」

「諦めるのが早過ぎです！」

むう、それなら、仮に私がフィリップ４世陛下から王位を継いだと仮定してみよう、これは決して有り得ない事ではないから、意外とすんなり考えを進める事が出来た。うん、何だか上手くやれるような気がするぞ、脳内シミュレーションに過ぎないのだが、アルビオンから来たフィリップ４世陛下よりは抵抗が少ないだろうしな。ああ、そう言う事か。

「優秀すぎる王は次代の王にとっては、重荷だと言う事かな？」

「はい、先王が偉大であればそれだけ、後継の王は先王と比較される事になります。ジョゼフ王子がラスティン様の言う様に優秀な方だったりしたとしても、かなりやりにくいでしょうね」

「それは、分かったが、キアラだって若いのに良くそんなことに気付くな？」

「ああ、生徒会の方で、ジェフ君が苦労したと言っていましたから」

生徒会と国の運営を同じに考えるものどうかと思うが、組織の本質と世代交代と言う意味では同じなのだろうか？

「これで終わりかな、さすがに」

「はい」

一石二鳥とはこちらでは言わないが、ロベスピエール４世は一個の石で一体何羽の鳥を落としただろうか？　数えるのもうんざりだな。しかし、大国ガリアの王がここまでの策謀を操ることが出来て、よくここまで我が国が生き残れたものだ。我等が陛下の人徳と言った物なのだろうな。私などが”王”として振舞えば、確実のあの大王の目に付いて、プチっと潰される気がする。

そうだ、さっき、何となく答えた私の回答はキアラ達にはどう評価されたのだろう？

「少し疑問なのだけど、私はキアラに”ラスティン様なら、今のガリアをどうするか？”と聞かれた時に、オルレアン派の貴族達を、１つ１つ潰して行くと答えたが、これは拙いのかな？」

これは私が、この国の貴族に対応していく為の基本方針だから（いや、全ての貴族を潰すとは考えていないぞ？）、ここに問題があるのは非常に困る・・・？　この事はキアラも知っているのだから、拙いはずは無いのだが。キアラは私の質問に少しだけ、悲しそうな表情を浮かべると、こう答えてくれた。

「オルレアン派の貴族達が内乱や独立の準備を、終える前に手を打ちたかったのでしょう。それに・・・、多分、ロベスピエール４世には時間が残されていないのでしょう」

「そうか・・・、あの大王がな・・・」

トリステインの副王としては喜ぶべきなのだろうが、少しだけ寂しく感じたのは否定出来ないな。この執務室にいる皆も心なしかしんみりとしている。そんな中、場の雰囲気を和ませる為にキアラが明るい声で、こんな事を言い出した。

「それにしても、ロベスピエール４世が、ゲルマニアの方を選んでくれて良かったですね」

「あ～、キアラさんや、もう一度言ってくれるかな？」

「ラスティン様、今日は少しおかしいですよ、少しお休みになった方が良いのでは？」

何か心配されてしまったのだが、キアラの言った事はちゃんと聞こえたぞ？　ただ、何と言うか、脳が受けつかなかっただけだ！

「すまない、もう一度言ってくれるかな？」

「はい、ロベスピエール４世がこの策略の標的を、トリステインからゲルマニアに変えてくれて良かったですね、と言いたかったんです」

さすがに間違えようが無いが、キアラが明るく言ってくれた台詞は、キアラ以外をかなり驚かせたのにキアラ自身は気付いていない様だ。（天才って奴は、こう言う所があるな、エルネストとかが代表だろうが）

確かに言われて見れば分かるのだが、ロベスピエール４世がこの計略を思いついたのは、王位継承権争いが始まるのと前後してなのだろう。準備もその頃から始めて居たんだと思う。

シャルル王子が勝ったとすれば、不発に終わりそうだが経過を見ながら進めていれば、それ程無駄にならないだろう。まあ、シャルル王子が勝ったとしても何か仕掛ける予定だったのかも知れないがな。

うん？現実から目を逸らすなだって、そうは言われても考えたくない事はやっぱりあるのだ。ロベスピエール４世がこの計略を思いついた当時はゲルマニアは政変の真っ最中だった訳だから、計略を仕掛ける相手は、そう、我が国だった筈なのだ。

オルレアン派の貴族達の領土までは少し遠いが、決して軍を進められない距離では無いし、国境に面する領土を持つ貴族達は、結構武闘派が多い。レーネンベルク特産？のジュラルミン盾とチタン剣を国以外で最初に買い上げたのも彼らだった筈だからな。（武闘派という印象が無い、ラ・ヴァリエール公爵でさえ、ツェルプストー辺境伯と何度も杖も交えている程だからな）

「何が、”ワシは、フィリップ４世を良き隣人だと思っておるよ”だ、陛下を嵌める気満々だった訳じゃないか！」

私の愚痴は、事情を知っているキアラ以外には分からなかった様だ。全く、しんみりした空気が台無しじゃないか！

＝＝＝

キアラ達が去って、執務室の雰囲気が一段落ついた事を感じたから、議論の最初の方から一言も発言しなかったコルネリウスに話しかけてみる事にした。コルネリウスとしても、ゲルマニア軍の兵士数万が全滅すると聞けば心穏やかでは居られないだろうな。

「”アルマント”、やっぱり、ゲルマニアの兵士達が気になるか？」

「・・・」

「おい、コルネリウス！」

「あ、ああ、すまん。何だったかな？」

私が、更に話しかけて、軽く腕を叩くとやっと反応が返って来た。コルネリウスも疲れているのだろうか？

「ゲルマニアの兵士達の事なら、お前の責任じゃないんだから気にしない事だぞ。それにナポレオン１世が、首尾よく戦死してくれれば、お前の立場が重要になって来るんだからな」

「ああ、そうだな・・・」

「もしかして、お前も疲れているのか？　まあいいさ、今日の仕事はここまでにしておこう」

「良いのか？」

「良いのさ、キアラにも言われたけど僕に疲れが溜まっているのも事実だからな」

「その言い方だと、副宰相殿に言われたから休むように聞こえるぞ？」

「まあ、その通りだな。僕は、キアラに頭が上がらないからな」

全く自慢にならないがな、まあ、キアラに面と向かって逆らえる

人間は少ないんじゃないかな？

「笑えない冗談だな？」

「”アルマント”、お前はキアラに逆らう気があったりするのか？」

「・・・、無いな」

「だろ？」

何となく、２人で笑い出しながら、今日の執務を終える事にした。
ガリアの件以上に、急ぎの案件も無いから問題無いだろう。久々に
落ち着いて、ゆっくり眠れる様な気がするな。

第百十話　ラスティン２３歳（４人寄れば文殊の知恵：後編）（後書き）

ロベスピエール４世の策略の全貌でした、如何だったでしょうか？
まだ読み切れていない点が１つありますが、”彼ら”もまだ若いと言った所でしょう。外伝を読まれた方にはお分かりになるんじゃないでしょうか？

ちなみに”追い込まれた人間”と言うのは、ロベスピエール４世でもあり、作者の事でもあります。かなりネタが思いつかなかった時に、この策略を思いついたんですよね。本当は主人公が考えた通りに話を進める予定でした。

第百十一話　ラスティン２３歳（植木屋さん）（前書き）

第百十一話ＵＰします。

第百十一話　ラスティン２３歳（植木屋さん）

まあ、当然だが私達が導き出した今回のガリアとゲルマニアの紛争の真相は、キアラからマザリーニ枢機卿、そしてフィリップ４世陛下にも伝わった様だ。今日の朝議は、多くの貴族達を集めて大規模に行われる事になった。もはや朝議と呼べない規模だったりする会議が、マザリーニ枢機卿によって召集された訳だ。

枢機卿は何故か、紛争の真相を伏せたまま、会議を進めて、各領主に意見を求め始めた。黙っていた私も同罪なのだが、方向性の定まらない会議は混乱を極めた。（いや、枢機卿の出方を窺がっている間にこんな状況になってしまった訳なんだが）

状況を静観すべきだという穏当（日和見とも言えるな）な意見から、ガリアに味方してゲルマニアに攻め込むべきだという意見（発想は良いのだろうが、現実が見えていないな）まで、それぞれの立場で色々な意見が発せられた。父やラ・ヴァリエール公爵等は王家の出方を見守っている様だった。（やはりこの辺りが一番賢明なのだろうな？）

その中で、どう考えてもおかしな意見が出ていた。”ガリアに攻め込むべし”と言う訳の分からない物だったのだが、彼らの主張は概ね、”ガリア恐るるに足らず！”と言う物だった。まあ、呆れて物が言えなかったが、これには二つの意味があるのだが、分かるだろうか？

一方は、まあ、ガリアとの国境に面していると思われる領主達だと思う。彼らがガリアに攻め込みたいと思うのは、理解は出来ないがある程度納得出来る話だ。問題はもう一方だ、彼らがガリアに攻め込みたいと思う理由が直ぐには思いつかなかったが、枢機卿の後ろに控えているキアラと視線が合った時に、頷かれた事で理由が分

かった。
　成る程、随分と性質が悪い連中の様だ、ゲルマニアの為にトリステインがガリアに攻め込む等とは、話にはならないだろうな。分かり辛いか？　要は、奴らはこの国を売ろうとしている訳だ。ゲルマニア宰相マテウス・フォン・クルークの手がここまで及んでいると言う訳だな。キアラが彼らの事を判別出来たのは、例の”あれ”のお陰だろう、やはり敵に回して正解だった様だな。（あまり洒落にならない事態なのだがね）

　さっきから、貴族の具体的な名前が出ていなくて分かり辛いだと？　うむ、正直、私も彼らの名前を覚えられないのだから仕方が無い。キアラからの無言の知らせを受け損ねたせいで、呆れられてしまったのが感じられた。まあ、私の方にも事情があるのだが、これを他人に説明するもは難しいのだ。何故、私が貴族の名前を覚えられないかといえば、出だしで躓いたと、おっと、会議はこれで終わりらしいな、今回は必要ないかも知れないが、何時もの事だから陛下への報告を済ませておくとしようか？

＝＝＝

「そうか、彼らがそんな事をな・・・」

　陛下は少し悩んでいる様だったが、意外とあっさり結論を出してしまった。

「ガリアに攻め込むのは論外と言う話は分かった。ゲルマニアに攻め込みたいと言う貴族達に許可を出す事にしよう」

「陛下、それは、あまり上策とは言えませんぞ？」

「マザリーニ、まあ、実際に停戦協定を結んだそなたとすれば、そう言わざるを得ないだろうな。だが、ガリアに恩を売っておくのは悪い事ではあるまい？」

「陛下、そうはおっしゃいますが、故なく他国に攻め込んだとあっては、トリステインの信頼が」

「構わぬさ、貴族達が、そうだなボネール伯辺りを中心とした貴族達が王命に逆らって、戦いを挑んだとすれば対外的にも問題あるまいよ？」

「それはそうですが・・・」

うむ、単に報告に来ただけだった筈が、揉め事の気配が漂っているな？　枢機卿が押され気味と言うもの珍しい物だが、この国の今後を考えれば、あまり好ましい話の流れでは無いな。先程手に入れたばかりのカードを切るべきなのだろうか？

「ラスティン、お前の意見を聞かせてくれ」

「陛下・・・」

くっ！　まだ方針を決めかねているのに。苦し紛れに、枢機卿の後ろに控えているキアラに視線を送ったら、一度だけ頷いてくれた、ええい、ままよ！

「陛下にお知らせしたい事がございます。今日の朝議に参加していた貴族達の一部が、ゲルマニアと内通している可能性がございます」

「何！　それは真か？」

「はい、ガリアに攻め込むべしと言うのは、ゲルマニアを利する物でしかないのはお分かり頂けると思います。しかし、元々ガリアに恨みがある領主達以外に、それを後押しする者達が居ました」

枢機卿もこの事に気付いていた様だな、もどかしそうな表情を浮かべているだけで、否定の言葉は発しなかった。

「・・・、そうか、それがゲルマニアに攻め込むのに何の役に立つのだ？」

「はい、彼らをゲルマニア内通の疑いで告発するのです」

「副王殿下、それは！」

「それで裏切り者というのは誰なのだ、ラスティン？」

あ？　肝心の名前を知らないぞ、速攻で行き詰まったな。証拠はと問われて、”告発”する事に意味があると答える予定だったのだが。

「どうした、言えぬのか？」

「陛下、あまり興奮なさると、身体に障りますぞ」

「マザリーニ様、私の方から説明しても宜しいでしょうか？」

「キアラ君か・・・、仕方があるまい。陛下、これは私の補佐をしてくれている、キアラと申します。中々優秀な人材だと感心しており、彼女を補佐に付けてくれた副王殿下には感謝しております」

どうやら小さな救いの女神の助けが入った様だ。キアラに感謝の視線を向けると、呆れ混じりの視線で迎撃された。中々高度な技を使ってくるな。まあ、キアラにも私が、何故貴族の名前を覚えるのが苦手なのか説明しておかないと、要らない誤解を招く気がするな。

「ガリアへの侵攻を主張したのは、”ドローヌ伯爵”と”フェリー子爵”と”グレトリー子爵”でした。他に何人かいらっしゃいましたが、主体となっているのはこの方々ですが・・・」

「キアラとか言ったか？　意外と小物ばかりに感じるが、まだ何か言いたそうだな？」

「さすがは、陛下。残念ながら尻尾を掴めてはおりませんが、裏には大物が控えていると思われます」

「ふむ、ドローヌ、フェリー、グレトリーとくれば想像は付くがな。なるほど、ラスティンが口に出来ない訳だな。しかし、証拠はあるのかな？」

「はい、私は副王殿下に指示を受け、以前よりとある人物の周辺を探っておりました。その経過で幾つかの証拠を押さえております。今、直ぐには不可能ですが、少し時間をいただければ、お持ちしますが？」

「ふむ、そうしてくれるか？」

何とか、思い通りに話を進める事が出来た様だな。改めてキアラに感謝の視線を送ったのだが、何か言いたげな視線に再度迎撃されてしまった。全然、意図が分からないのだが？

「陛下、副王殿下が、提案したいことが在るようでございます」

「何かな、ラスティン？」

何故だか、別の意味で窮地に立たされた気分だ。私が陛下に提案するとなれば、ああ、今度の”おねだり”の事だな。全く、もう少し手加減して欲しい物だ。何故、今、この時にと思ったが、逆に今が絶好の機会だと言う事に気付いた。

「はい、私は今年、陛下に”貴族間での金品の貸し借りを禁じる”という法を施行して頂きたいとお願い致します」

「副王殿下、それは幾らなんでも！」

「”ゲルマニアに攻め込む彼らには、お金が必要だ”ですか、枢機卿？」

枢機卿が明らかに怯んだな、キアラの予想通りだ。枢機卿もキアラが苦手になりそうだな。

「十分な資金も持たずに、敵国に攻め込むなどと、そちらの方が問題だと思われませんか？　貴族間の借金は禁止しましたが、国からの借金を禁止はしません。運良く、現在は国庫の方も幾分余裕がありますから、国としても多少は無理が出来ます」

以前は火の車だった国としての収支も、ワーンベルの影響でレーネンベルクからの税収が増加して、ユニスによって無駄な出費が切り詰められた事で、国庫も一息つける状態だからな、嘘は言っていない。まあ、商人などから借金をする事は禁止していないのだから、

直ぐには大きな影響は出ない筈だ。
仮に他国から、商人を通じて借金などすれば、ローレンツ商会の方から情報が流れてくる様に手配済みだし、普通に商人から借金をするだけならば、以前からの債権の買取を実施するだけだ。

「ははは、マザリーニ、今回は貴公の負けだな」

枢機卿は、嫌そうな顔をしたが、結局今回の提案に合意してくれた。ふぅ、何とかなった様だが、心臓に悪い展開だったな。

＝＝＝

何時に無く、色々疲れた報告が終わって、執務室に戻ると暫くして、キアラがやって来た。

「キアラ、さっきは助かった。だけど、1つ君には知っておいて欲しい事が」

「ラスティン様、それより先に、アンセルムに指示を出した方が宜しいのでは？」

「ああ、ゲルマニアを攻めるなら後詰めが要るな。王都から王軍を指揮して出征してもらうか？」

アンセルムならグラモン伯爵もお気に入りの様だし、陸軍を指揮させるのは問題ないはずだが。

「いいえ、あの後、王軍はゲルマニアに内通している貴族の討伐に向かう事になりましたから、兵団の警備隊と国境警備の国軍を指揮してもらう事になります。兵力としては不足気味ですが、何とかし

てくれるでしょう」

「しかし、討伐とは物騒な話だな、陛下か？」

「はい・・・」

普段は、極々普通の判断をするフィリップ４世陛下なのだが、時々妙な事を始めて、周囲を驚かす事があるのが気になる。それが、”貴族”絡みの時だと分かってはいるのだが、意外な事に私にとっては好都合なことが多いので、そのまま受け入れる事にしている。まあ、私などが反対意見を言った所でどうなるとも思えないからな。

「アンセルムには、いざと言う時以外は、戦いに手出しをしない様に注意しておかないといけないかな？」

「はい、その点は十分に説明しましょう。貴族の方々には消耗して貰わなければなりませんからね」

「嫌な話だな」

「ラスティン様！」

「ああ、今回は我慢する事にしよう。今回が最後になって欲しいものだけどね」

「副王殿下、それは傲慢な考えです！　貴方の立場は、フィリップ４世陛下の手足、表の顔、暗殺者の標的を分散させる的、そしていざという時の控えに過ぎません。御自分の立場を良くお考え下さい！」

キアラの表情は、どちらかと言うと悲しそうに見えたのが、印象的だったが、本当に私の事を心配してくれているのも理解できたから、何も言えなかった。

「貴族達がゲルマニアに攻め込むのも、陛下がそれを許可した事も、殿下の責任ではありえません！」

「ああ・・・、そうだったね、ありがとう」

「いいえ、失礼な事を言って申し訳ありません、ラスティン様」

ラスティン様か、どうやら許してもらえたらしいな？　同意を求める為に、コルネリウスに視線を向けると、何やら呆然としているのが目に入った。部下に叱られる（諫言されるとは、とても表現できないよな？）副王様と言うのが珍しいのかも知れない。もはや慣れっこだし、キアラが私の負担を減らす為に言ってくれた事だから全く気にはならないのだが。

「あー、そうだ、例の証拠と言うのは、何だったのかな？」

それにしても、自国の国民が無益な戦で犠牲になるなんて、本当に嫌な話だ。副王などと言う中途半端な立場の者でも、この様に感じるのだから、ガリアの嘘つき大王はどんな気持ちで決断をしたのだろうな？　少し話題を変える積りでこんな事を聞いてみた。

「はい、これを使いました」

キアラの手には、”音の記憶者”が握られていた。まあ、見た目がただの石なので、想像ではあるがな。

「それで録音したと言う訳か、でもどうやって？」

「はい、理事長先生が教室に”観葉植物”と言う物を導入されたのですが、ラスティン様はご覧になった事がありますか？」

「観葉植物？　そう言われてみれば、在った気がするけど」

公立学校の建物自体は結構急造だったから、インテリア等に拘っていなかったからな、殺風景だからローレンツさんが考えたのだろう。だが、”観葉植物”と”音の記憶者”の関係が見えないな？

「分かりませんか？」

「植木鉢の中に紛れ込ませるのか？」

全く自信は無かったが、当てずっぽうで言ってみた。キアラの表情を読むと正解だった様だが、どうやって？

「”観葉植物”というのは、貴族の方々に受けが良かった様です。それに、アリエの若木を選ぶとかなりの確率で重要な部屋に置かれます。あの木は、屋内ではこまめに世話をしないと枯れてしまう物のですから、水遣りや日光に当てるなどで人手が必要になります」

「ああ、世話人も含めて売り込んだという訳か？」

「はい、メイジは風系統魔法で声を外部に洩らさない様にしますから、それで安心してしまうのでしょうね」

うっ！　急に心配になってきたぞ、慌てて執務室の中を見渡したが、”観葉植物”も怪しい物も見つからなかった。ガリアの件が見

通しが立ったので書類で溢れかえっていた部屋も整頓されているから一安心だな？

「その辺りは、護衛隊に徹底させていますから、ご安心下さい」

「先に言ってくれよ！」

「”観葉植物”って何だ？」

『”観葉植物”って嫌な感じなんだけど？』

話に付いて来れなかった、２人？から同じ様な事を聞かれた。説明すると、コルネリウスは何となく納得しれくれたが、木の精霊だったニルヴァーナは全く理解してくれなかった。私に愚痴を言われても困るのだがな？

”音の記憶者”には、例の３貴族が、誰かと会話している音声が録音されていたそうだが、その誰かと言うのが若い男性と言う以外分からなかったそうだ。裏で糸を引いている人物か、ゲルマニアの関係者なのだろうが、どうも気に入らないな。

＝＝＝

キアラが枢機卿の手伝いに戻って行くと、コルネリウスと２人で書類の片付けに入った。コルネリウスは意外と仕事の覚えも良いし、良く気が付くから、秘書官としては申し分無いのだが、問題が無い訳ではない。（口が悪いという事では無いぞ）

学院の頃と違って、口数がかなり減ったコルネリウスは、最近考え込む事が多くなった気がする。コルネリウスを王城へ入れたのは

間違いだったのだろうか？

「アルマント、君はトリステインがゲルマニアを攻める事についてどう思う？」

「勿論、歓迎など出来ないさ。ゲルマニアの民が苦しむのは見たくない！　・・・、酷い戦争になると思うか？」

「君だって話は聞いただろ？　ゲルマニアへはマース領から攻める、相手はモーランド辺境伯になるから、まあ多分大丈夫だろうな。ツェルプストー辺境伯の所へは被害は行かないよ」

「俺が一度ゲルマニアに戻りたいと言ったら反対するか、スティン？」

「今なら、大丈夫だと思うから反対はしないよ。その前に、一度ガリアを見に行ってみないか？」

「ゲルマニアがガリアで、何をやったかを見る為か？」

「そう、その気ならジョゼフ王子、いやその時には、ジョゼフ王かな？　彼にお前を紹介しても良いし」

「何か企んでいないか？」

「いいや、君が僕だけではなく、ジョゼフ王からも支援を受けられたら良いかと思っただけだよ」

　コルネリウスとジョゼフ王子が会う事がどんな結果を生むかは私にも分からない、コルネリウスにとっては他国の王に会う事がプラ

スになるのだと思う。

第百十一話　ラスティン２３歳（植木屋さん）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百十二話　ラスティン２３歳（風石機関）（前書き）

第百十二話ＵＰします。

第百十二話　ラスティン２３歳（風石機関）

３人のゲルマニアに通じた貴族達を嵌める為の計略は、密かに開始された。ドローヌ伯爵とフェリー子爵とグレトリー子爵の３人は例の会議の後、自領に戻って、何やらやっていたそうだが、王軍の封鎖に合って活動を妨害された。まだ、この時点では３貴族はその事に気付いていなかったらしいが、ドローヌ伯領に敵国との内通の嫌疑で王軍が攻め込むと、情勢は一気に動いたそうだ。

慌てて逃亡を図った残りのフェリー子爵とグレトリー子爵だったが、狙い通り一目散に逃げ出してくれた。まあ、行き先はゲルマニアだったのが、キアラによると残念だったそうだ。裏で糸を引く貴族とやらの所に逃げ込んで欲しかったのだろうが、捕えられたドローヌ伯爵自身もその黒幕の事を一切話さなかった。

陛下が言っていたとある貴族の所にも軍が向かったのだが、早々に領内に裏切り者が居たとして、１人の人間の首を王軍に差し出して来たそうだ。どうやら身内の首だったそうだが、随分と手回しが良く、しかも冷酷な事だ。その貴族の名前を聞いても、キアラは私に教えてくれなかった。事情は、その貴族が継承権は持っていないが王家の血を引く者だったという理由らしい。

気を使ってくれたキアラには悪いが、遠い親戚などと言うものには何の感情も抱いていない。そもそも、伯父であるモンモランシ伯爵にさえ親戚という感じを覚えないのだから仕方が無い。

まあ、全てが思い通りに行く訳ではないが、ゲルマニアに攻め込む理由は出来た訳である。３貴族の関係者の反攻を警戒するとして、王軍は王都近郊に留まる事になり、替わりにボネール伯爵を中心とした諸侯軍がゲルマニアへ軍を進める事になった。まあ、彼らも自分達だけでゲルマニアに挑む事になるとは思っていなかった筈だが、

あの会議での主張を指摘されれば自領だけで軍を出さない訳には行かなかった。

「こんな筈では無かった。これでは大損だ！」

これは、出征する事になった貴族の1人がもらした言葉だが、そう仕組んだ訳だから当然である。

1月ほど時間をかけて、諸侯軍が組織された訳だがその成立は結構難産だった。現在のこの国の貴族達は一部の例外を除けば、領地の運営が上手く行っていないのだから、当然の事だろう。一部の例外からは、資金調達が出来ない状態になっているのだから、まあ、頑張った方だろう。（くどいようだが、それを仕組んだのは私達なんだがね）

兵士や糧食、そして武器の供与と言った事は、金の貸し借りには当たらないから、少しは融通が利いた様だ。資金の贈与は、貸与と区別が付きにくいと言う事で全面禁止なので、私達にとっては影響が少ない結果となった。知恵の働くものは、大きな商会や、他国（具体的にはクルデンホルフだな）に借金を申し込んだのだが、これらには既にローレンツ商会が手を回している事に気付く者は居なかった。

準備が整ってから半月程で、実際の戦闘行為が開始されたのだが、何と言うか予想通りグダグダな展開だったそうだ。この辺りは後方支援を行っているアンセルムから、キアラへの報告で確認出来た。（これについても、突っ込むのもいい加減疲れたのでスルーだ）

トリステインの戦術は歩兵を中心とした正面からの攻撃で、ゲルマニアの戦術は大砲を主軸とした物だったそうだが。ボネール伯爵とモーランド辺境伯の戦術的手腕は悪い意味で拮抗したらしい。時には突撃が成功して、ゲルマニアに被害が出たと思えば、時には突

撃以前に大砲の砲撃にあい我が国の諸侯軍が損害を受けると言うのが繰り返されたそうだ。

「戦況は予想通りと言った所だと思います」

「このままで済みそうかな？」

「ゲルマニアが大規模な援軍を送って来なければ、問題ないレベルだと思います」

「ですが、アンセルムがかなり苛立っています」

「だろうな、我慢してくれそうか？」

「はい、次の機会に備えて、ゲルマニアの戦術を研究しておく様に、指示を出してありますから、当分は大丈夫じゃないでしょうか？」

「妙な事を思いついて、実行しなければ良いんだけどね」

間接的に報告を受ける私が不満に思う位だから、戦地のアンセルムのストレスは相当な物だろう。私としては、そんな状態のアンセルムを見事に御しているキアラの方を褒めてやりたいと思う。このままの状況であれば、予想されるガリアの総反撃の時期まで何とか大過なく運びそうだ。例の３貴族の領地も王家の直轄地となったし、これで少しは王家の権力が増せば良いのだが。

私の隠し玉が効力を発揮するにはもう少し準備が必要と思われるから、気長に待つことにしようか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

＝＝＝

今日は珍しく王城から出て、とある実験の視察に来ている。といっても良く来る場所なので、新鮮味には欠ける事は否定できない。ただ、その重要性に関しては、無視を出来ないだろう。（副王としても、私個人としてもだな）

具体的に場所を言えば、王立魔法研究所にある実験用の広場なのだが、私の目の前ではある意味画期的な実験が行われている。そう、”風石機関”の実働実験である。正確には実働と言うより耐久力を試す物だと言う事を最初に説明された。

ここには、私が信頼している人達ばかりなので、実験と言うより近況報告がメインになっている気がする。エレオノール、ガストンさん、クリシャルナ、ミネット、そしてコルベール先生とくれば、あまり気を使う必要も無いだろう。（リッテンとバベットも助手として、あちこちを行ったり来たりしている）

朝議が終わって陛下への報告も済ませて、昼前にはこの場所に来たのだが、その時には既に実験が始まっていて。簡単な昼食も出たのでそれを食べて、暫く寛いでいた。”風石機関”自体は出力を保ったまま強力な風をノズルから空に向かって噴射し続けている。時々噴射を弱めたり強めたりしているのだが、本当に耐久性を試す意味があるのか疑問に思えてくる程だ。

まあ、”風石機関”の原理を考えれば、耐久性に問題が出る可能性も高いので、必要な実験ではあるのだろう。その原理を簡単に説明すると、とある”文字”で書かれた”魔方陣”の様な物の上に置かれた”風石”は、その秘められた”風”の力を一気に解き放つと言う物だ。

「詳しくは無いけど、随分変わった魔方陣だね？」

「これは、私達にとって特別な意味があるの」

「特別？」

「そう、精霊達を開放すると言う感じの意味なんだけど、ちょっと表現するのは難しいわね」

「開放か・・・」

とある”文字”と”魔方陣”言うのは、”精霊文字”と言われるエルフに伝わる技術だと教えてくれたのは、クリシャルナだった。文字も陣も言葉で言い表すのは難しいのだが、結構滑稽な形をしている。（象形文字の様にも楔形文字の様にもそれ以外にも見える）”風石”の力を一気に解き放つと言う発想はエレオノールの物だった。そこにガストンさんが加わった訳だが、中々研究は実を結ばなかった。研究に行き詰っていたエレオノールとガストンさんにクリシャルナが協力することで、研究自体は一気に実用化が進んだ訳だが、実用にはミネットとコルベール先生の協力が不可欠だった。

筒の中に魔方陣を描き、そこに棒状に加工した風石を突っ込む事で、何とか推力として使用が可能になった訳だが、機構自体は簡単なのにそこから得られる推力は中々馬鹿に出来ない。この実験装置も最初は水平方向に噴射を行っていたそうだが、台がもたない為に地面に突き刺した形で設置されている。

そう、”風石機関”の問題点は、この強力すぎる推力なのだそうだ。以前からの風石の使用方法としては、”浮力”を得る物だった訳だが、直接”風”に変換する事で些か制御が難しいと言う笑えない状態だったりする。今後は制御方法に関して研究を進めると言う

事だ。

風石を棒の形状を変えるとか、魔方陣の構成を変えるとかして、全体的に小型化する方針が決まっているという説明を、提唱者であるエレオノール自身から受けたばかりである。言ってしまえば、”風石機関”自体は未だ研究改良中な訳だ。

それなのに、私が”副王”としても、ラスティン個人としてもこの会場に来ているのは、私の婚約者であるエレオノールが今日で、この研究チームから離れる事が原因である。そう、約束の3年が過ぎようとしている為、エレオノール自身が決心した事だ。

エルネストがあの二次会の時に言っていた事も含めて、話したのだが彼女の決心は覆らなかった。あまり気は進まない（多分悪夢の様な）結婚式を挙げて、寝所を王立魔法研究所から王城内に移すだけで問題ない筈だったのだが、これもエレオノール自身のけじめなのだろう。（エレオノールには、王立魔法研究所から”風石使い”の二つ名が与えられる事になっているし、関係者は”風石機関の母”等と呼んでいるらしい）

リッテンとバベットも研究チームのメンバーとして、残る事になっている。同じ転生者のミネットと元教師のコルベール先生とガストンさんの下なら、人間的にもちゃんと育ってくれるだろう。だが、研究者としての2人は少し普通ではないのが気になる所だ。エレオノールが抜ければ、研究員の代表はコルベール先生な訳だが、何だか別の意味で心配になって来たぞ？

もし、運良く私が、マース領やその他の領地に封ぜられる事になれば、研究チームごと招聘して研究を続けてもらえば良いのだからそれ程悩む事でもないか？　それ以外の場合は、どんな事になるか考えない様にしている。暗殺されなければ最悪、国外へ向かえば良い程度しか考えていない。

夕方近くになって、やっと実験が終わった。

「如何でしたか、副王殿下？」

「君にそう呼ばれるのは嬉しくないんだけど？」

「それでは、どうでした、兄様？」

「うん、安全性と耐久性については、問題無いと思うよ。推進力は文句の付けようがないしね」

「安全性は、もう少し何とかしたかったんですけど」

エレオノールは少しだけ実験装置を寂しげに見詰めながら言った。

「研究を続ける？」

「いいえ、明日からは、兄様の妻になる為に修行を始めます。カトレアの分の式の準備もありますから、大忙しなんですよ？」

「そうだね、式は出来れば手加減をして欲しいな」

「ダメです。昔からの夢だったんですから！」

「でも、まだカトレアの卒業まで2月はあるよね？」

「はい！　もう時間がありませんよね？」

「色々あって、式は3ヶ月後になるんじゃないかな？」

「そうですよ、だから時間が無いんです！」

うむ、この件に関しては、２人の認識にかなりの隔たりがあるな。３ヶ月で準備が足りないってどう言う事だろうか？　精々ドレスの用意位しか思いつかないのだが。この辺りを詳しく突っ込んではいけない気がするぞ、まあ、どうしても当日には知る事になるのだがな。

「副王殿下、そう言うお話は、２人っきりの時にしてもらえますかな？」

「あ！　コルベール先生、申し訳ありません」

ここにいるのは、全員が未婚者だから少々嫌味だったかも知れないな。まあ、エレオノールのよれば、代表して苦言を呈したコルベール先生も数年後にはミネットと結婚する約束をしているそうなのだが、やはりばらしたら拙いのだろうな？（お似合いのカップルだとは思うのだが、ミネットは自分の前世とどう折り合いを付けているのだろうか？）

第百十二話　ラスティン２３歳（風石機関）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

精霊文字の記述が前後しているのは、事故の為です。
文字自体は事前に紹介されていたと思って下さい。

さて、そろそろ結婚式が近付いてきました。
番外編は用意完了ですが、外伝の方が難産気味です、間に合うでしょうか？

２０１１／４／８
思でしょう－＜思います
彼女お決心－＜彼女の決心
に修正

第百十三話　ラスティン２３歳（原点）（前書き）

第百十三話ＵＰします。

第百十三話　ラスティン２３歳（原点）

珍しい事に、マリアンヌ様から直接呼出しがかかったのは次の日の事だった。時間は任せると言う事だったので、何とか時間を作り、使いを出すと直ぐに面会する事が出来た。それ自体は良いのだが、マリアンヌ様が指定した王族専用の居間に入り、その顔を見た瞬間に何故か嫌な予感がした。

そのまま部屋を出たくなったがそう言う訳には行かないだろう。観念して話を聞くために、勧められた椅子に腰掛けたのだが、話は案の定だった。

「ラスティン、そろそろ観念したかしら？」

「何の事をおっしゃっているか、分かりかねますが、王妃殿下？」

「そう、それならマザリーニに命じて、国を挙げて貴方の結婚式を盛り上げるようにさせましょう」

「マリアンヌ様、それは幾らなんでも横暴です！　それに今は戦時ですよ？」

「王軍は暇そうにしているそうですね？　国を挙げてと言う状況とは言えないでしょう」

ぐっ！　正直ここまでマリアンヌ様が知っているとは思わなかった。以前、私を迎えに来たあの（悪夢の）馬車がマリアンヌ様の手配して物だと言う事を考えれば、この方だけには手を出して欲しくなかったのだが。（何故か女性陣には好評だったから、エレオノールも嫌がったりしてくれないだろうな～）

「この状態で、王家の者が婚儀を挙げるのに、国として力を入れなければ、他国に笑われますよ！」

「そうかも知れませんが、ラ・ヴァリエール公爵がその辺りは、きちんとやってくれると思います」

想像したくない程、派手な物になる気がするのだが、マリアンヌ様のセンスで仕切られたら”派手”から”恥かしい”へ脅威の進化を遂げてしまいそうだ。

「エレオノールの方はそれで良いでしょう。ですが、貴方の方をどうするかと言う話をしていますよ？　まさか、レーネンベルク風で済ませる予定では無いでしょうね？」

せめて自分の服装だけでも、よく見れば高級な物と言うレベルで済ませる予定だったのだが、拙いぞ！

「マリアンヌ様、まだ3ヵ月も先の話ですよ？」

「まあ、もうそれだけしか無いの？　早速明日にでも、仕立て師を呼ばなくてわね」

身分の高い女性と言うのは、皆こんな感じなのだろうか？　そんな事を考えてしまったのは失敗だった。

「あの、マリアンヌ様！」

焦って引き止めようと声をかけたのだが、意外と素早くマリアンヌ様は部屋から出て行ってしまった。私が呆気にとられてしまうほ

どの身の軽さだったな。他人（いや、一応親戚なのだが）の結婚式などそれほど面白い物だろうか？

しかし、これで、私の恥かしい結婚式が国中に広まる事が決定してしまった事になる訳だな。この世界に写真やデジカメ等が無くて本当に良かった・・・？　画家は居るな、こうなったら国中の画家を一時的にでも・・・、どう考えても現実的ではないな、せめて私の姿が、自分の記憶に残らない様に努力しよう。

＝＝＝

どちらかと言えば、不本意な事だが私とエレオノールの結婚式の準備は進んでいる様だ。諸侯軍の方も相変わらずの状況と言う事で、私の周囲は嵐の前の静けさと言った状況である。こんな状態だと、マリアンヌ様の事を少しだけ考えてしまうな。あの張り切り様を陛下に話してみたのだが、少し悲しそうに好きにさせてやってくれと言われたのが気になって仕方が無い。

「と、言う訳なんだが、何か思い付かないか、キアラ？　グレンさんも、何か知っていたら教えていただけませんか？」

「・・・」

「そうですね・・・」

キアラに聞くのは、気が進まなかったのだが、他に適当な人材が居なかったのだ（エレオノールは実家に戻ったままだし、母にこの話をすると絶対にやぶ蛇になる！）。グレンさんは、マリアンヌ様に関する噂などを聞く為に来てもらったのだが、どちらも黙り込んでしまった。キアラが少しだけ、躊躇しながらこんな考えを話してくれた。

「王妃殿下は、もしかしたら看病疲れされているのかもしれませんね」

「そうか？　基本的に侍医達が常時付いているんだし、きちんと休養されているはずじゃないのか？」

「殿下は、どなたかの看病を長期間された事はありますか？」

殿下と言われて、自分の間違いに気付かされてしまった。レーネンベルク家では、余程の事が無い限り母が治療してしまっていたからな。そう、幼い頃の私が倒れた時の様な場合を除けばだな。

「そうだな、すまない。そうなると、私はマリアンヌ様の気晴らしになっている訳か？」

「殿下！」

「いいや、マリアンヌ様には気晴らしの必要があると言う事なんだよ？」

「結婚される前の王妃殿下は、城下の祭り等は好んでお忍びで出かけられたという噂を聞いた事があります」

やはり、グレンさんを呼んで正解だった様だ。しかし、マリアンヌ様に気軽に出かけて貰う訳には行かないのだから、解決には程遠いな。あの様子では、陛下はこの事に気付いているんだろうな。

「ラスティン様の立場ならば、何らかの公務、出来ればなるべく賑やかな物を、理由を付けて王妃殿下に代わっていただくという形に

するのが良いのでは無いでしょうか？」

　王家の公務で賑やかな物と言えば、幾つか思いつくが、理由と言うのが難しい。一度位なら問題ないが、何回もと言うと無理が出て来るからな。そう言えば、去年は、ガリア行きで私が参加しなかった（正確には、参加できない理由があって渡りに船だったのだが）儀式があったな。あの時は、当然の様に父上が代行してくれたのだが、あれを理由にするのは苦しいのだが・・・。

　まあ、やってみるか、この提案を自分がする事になるとは思わなかったが。ここまで来たら、どう転んでも、ただでは済みそうも無いし、アンリエッタとウェールズ王子が出会うのを妨害したくはない。

「グレンさんは、王家の者が年に一度、ラグドリアン湖で”水の精霊”に祈りを捧げるという話を知っていますか？」

「はい、それでしたら、ですが、あれはどちらかと言えば厳（おごそ）かな儀式だと聞いていますが？」

「そうです、僕は理由が有ってラグドリアン湖には行けないので、儀式と同時に、あそこで各国の要人を集めて園遊会を催せないかと思うんです」

「それは良いかも知れません、ラグドリアン湖は有名な名勝ですから」

「そのラグドリアン湖に行けない理由と言うのは何なのですか？」

　キアラが少し不審そうに聞いてきた。当然の疑問だろう、良い機会だから、話しておくとしようか。

「子供の頃から、多分5歳以降かな？　僕はモンモランシ伯爵領に入るとおかしくなるらしいんだよ。自分では全く覚えていないんだが、ラグドリアン湖にある程度近付くと、僕は意識を失うらしい。そして、良く分からないんだが、何故かラグドリアン湖に近付いた事自体を忘れてしまうんだ」

「それは、どういう事ですか？」

キアラが私の事を心配したのか、今度は不安げに尋ねて来た。

「いや、覚えていないのだから、詳しくは説明できないよ。ある事情があって母に連れられて、母の実家のモンモランシ伯の所へ向かったそうなんだが、領内に入った頃から私は急に無口になったらしい。そして更に進むと、急に馬車の中で倒れてしまったそうなんだ」

「それでどうなったんですか？」

「母も慌てて、休めそうな近くの村に引き返したんだが、そうすると、直ぐに起き上がったらしい。だけど、また先に進むと同じ様に倒れてしまったんだ。また、道を戻ると起き上がるから、母も魔法を使って調べたらしいが、結局原因不明だった。当時の私は身体が弱かったから、母も無理せずそのままレーネンベルクに戻ったんだが、私は自分の身に起きた事を覚えていなかったと言う結果だった。両親ともかなり心配した様で、それ以来、私はモンモランシ伯爵領に行く事を禁じられたんだよ」

自分の身に起きた事を、体調等に問題は無いのに、母から教わったのは妙な事だったし、これが私の貴族嫌い（この時点では貴族に馴染む事に失敗した程度だったのだが）の始まりだったのかも知れ

ない。全く実感が無い事だから、ほとんど思い起こす事はないのだがね。おかげで、私は伯父のモンモランシ伯爵にさえ、数えるほどしか会っていないし、従妹のモンモランシーには一度も会った事が無いのだ。

これが、貴族に馴染めなかった理由とするなら、貴族が嫌いになったのは、まあ説明するまでも無いな。貴族の名前を覚えられないのは、やはり、これから陥れようとする人達の事は出来れば知りたくないと言う、私自身の心の弱さなのだろうな。勿論、ラ・ヴァリエール公爵家は別だぞ、あそこは無茶な支配をしていないし、何よりエレオノールの家なんだからな。

「そんな事が本当にあったんですか？」

「いや、キアラさん。その話なら、私も公爵様から聞いた事があった気がします」

グレンさん、ナイスフォロー！　しかし、父も王城まで来てこんな話をする程、心配してくれていたのだな。

「今はどうなるか分からないが、態々、気絶しに行きたくはないからね」

「リリア様の実家もこの事はご存知でしょうから、口裏を合わせる等の工作も必要無いですね」

「そうですか・・・、そう言う事ならば、私の方からマザリーニ様に提案してみましょうか？」

その方が、私が自分で言い出すより説得力があるかな？

「グレンさん、機会があれば、今の事の噂を流してもらえますか？」

「副王殿下の噂なら、良い取引材料になりますよ。逆に、広まり過ぎるかも知れませんが？」

「うっ！　まあ、適当に誤魔化して下さい。この話は、エレオノールにも話した事がなかった位ですから」

「承知しました」

「キアラの方も頼んだよ？」

「・・・、はい！」

むっ！　キアラが何処と無く嬉しそうにしている。何かキアラに知られてはいけない事を知られた気がするぞ？

第百十三話　ラスティン２３歳（原点）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

主人公がラグドリアン湖へ行けないという話は、もっと前に書いても（第十一話あたりですかね？）良かったのですが、とある話の後にしたかったのでここまで引っ張りました。これは、非常に重要な伏線だったりしますが、あまり早すぎると伏線と気付いてもらえない気がしたのも一因だったりします。

この話を最後まで書き上げる事が出来た時に、ここと”とある話”の部分を読み直すと意味が分かるかも知れません。勘の鋭い方は、もう気付いているのかもです。（メッセージで推理を聞かせてもらえると嬉しいです）

２０１１／４／８
気絶し行きたくは－＜気絶しに行きたくは
に修正

第百十四話　ラスティン２３歳（カグラちゃんの恩返し）（前書き）

第百十四話ＵＰします。

第百十四話　ラスティン２３歳（カグラちゃんの恩返し）

幾ら情報を集めようとしても、さすがに他国（ガリア）の戦況を知るのはどうしても遅れてしまう。実際に、私がガリアの総反撃が始まったのを知った時には、既にゲルマニア軍は文字通り壊滅していた。ナポレオン１世が行方不明だという報告も、ゲルマニアのツェルプスト－辺境伯からの情報をコルネリウスから聞いた程だ。

ガリア陣営で敵将ナポレオン１世の戦死の報が流れなかった事から予想された事だが、一重二重の包囲網を多分単身で切り抜けたのだろう。僅かな後衛部隊と補給部隊しか、ゲルマニアに戻れなかった事を考えれば信じられない事だろう。私と、そう私の古くからの友人なら何が起こったか想像ができるだろう。（彼にも使い魔、多分、大地の精霊が従って居るのだろう、精霊の道を使ったと推測するのは難しくなかった）

良い機会だから、王家と使い魔の話をしておこうか？　不思議な事だが、何故か王家の子供は使い魔召喚をしない物らしい。王家の子供と言う範囲は国によって違うそうだが、この辺りは詳細不明だ。どうやら、かなり以前に宗教庁から、”王たる者が、使い魔に頼るのは好ましくない”という見解が出た事があったそうで、それ以来の不文律だそうだ。

何故か、陰謀の陰を感じる話だが、”王”としての意気としては間違って居ない様にも思える。昔の教皇が、”虚無”を恐れてこんな事を言い出したのかも知れないな。私やナポレオン１世やあの王子様などは例外なのだろう。

逆に平民メイジ達もほとんどが使い魔を持たない、理由は色々あるのだが、

・経済的な問題
・宗教庁の影響
・安全性

が挙げられる。

変に大物の使い魔など召喚したら、餌を与えるだけで家計がとんでもない事になるだろうし、きちんとした指導者の下で召喚を行わないと飢えたり怪我をした幻獣などを呼び出すと危険だったからだ。以前の宗教庁は平民メイジの存在自体を忌避していただろうから、大っぴらに使い魔など連れて歩けなかったのだろう。

兵団のメイジ達に限って言えば、上記の3点は問題ではないから、その気になれば使い魔を持つ事が出来るのだが、警備隊以外で使い魔を持ったという話は聞かない。確かに錬金隊のメイジに使い魔は必要ないからな。

少し話が逸れてしまったが、何が言いたいかと言えば、ガリアの王太子殿の使い魔、まあ、カグラさんの事が心配になってしまっただけなのだ。額にルーンが刻まれている事を気にしているのでは無いかと思い至ったのだ。例の発表の時も、それを気にしたのではないかと思えるしな。

今日はガリアから、大使の副使でもあるクロディーが態々報告があると言って、この国へ帰って来るから、少し話を聞いておこうと思っている。

＝＝＝

「副王殿下、私と部下たちの働き満足いただけましたか？」

「ああ、助かったよ。クロディーも大分外交官らしくなったね」

「はい、お陰様を持ちまして」

「早速だけど、報告とやらをしてくれるかな？　君からの報告書は完璧とキアラも言っていた位だから、問題無かったと思ったんだけど？」

「はい、実はそれは口実でして」

何だか妙な事を言い出したぞ？　クロディーは今の仕事に満足している様に見える。感じる活力と目の輝きが以前と全く違うからな。何か問題でも発生したのだろうか？

「これをラスティン様に、カグラからですよ」

「何！　早く出してくれ」

クロディーがテーブルに上に置いたのは、縦横高さが３０×５０×１５サント程の鞄だった。てっきり書類などが入っているのだと思っていただのが、違ったらしい。何だか中から、麻薬でも出てきそうな感じな鞄だったが、その中には２０個の小さめの木箱が丁寧に並べられていた。

クロディーに促されて、更に木箱を開けると、中には赤い宝石が２つ入っていた。うん？これは、魔法宝石（マジックジュエル）の様だが、私が以前カグラさんに送った物より２周りほど小さくなっている気がする？　木箱の１つには”組み合わされた２本の杖”の紋章が描かれて居るのに気づいてそれを開けてみると、中には小さくなった魔法宝石（マジックジュエル）が今度は一個だけ入っていた。

全く意図が分からないな、魔法宝石（マジックジュエル）の返品と言う訳では無さそうだ。カグラさんには、ルビーの魔法宝石（マジックジュエル）を２０個と、カットする事を考えて一応それが得意なメイジを１人つけて送ったのだが、帰って来たメイジからは特に変な報告は受けなかったしな？

単純に考えれば、私が送った魔法宝石（マジックジュエル）２０個ををそれぞれ（大きさ的に見て）半分にして、その内１９．５個が送り返されて来た事になるのだが、何だこれは？　クロディーの表情を探ってみると、実に楽しそうにしているのが分かる。これは、正直に教えてくれそうも無いな。

「ふぅ、まあ良い。１つだけ、２つで１組になっていない魔法宝石（マジックジュエル）があるけど、何か意味が有るんだろうね？」

「さすがは、副王殿下、御明察です。その１つだけの魔法宝石（マジックジュエル）に寝る前に、魔力を込めておくと良い夢が見られます」

予想通りの実に抽象的な返事が返って来たぞ？　夢自体にはあまり良い思い出が無かったりするのだが、良い夢か・・・。ダメだ、うなされるとか、悪夢とかしか思いつかないぞ、精々前世の夢を見る位が一番まとも？だったりするのは、どうしたものだろうか？（そう言えば他の転生者達は前世の夢を見たりするのだろうか？　私の様に未だに週に一回見るというのは、正常なのだろうか？）

＝＝＝

結局クロディーからは、返品された魔法宝石（マジックジュエル）に関しての情報を引き出すことは出来なかった。何とか次の指示を出す事は忘れなかったが、そちらはキアラがきちんとしてくれるだろうから、あまり意味が無かったかも知れないな。（ああそうか、クロディーは傷心の友人を慰めに来たのかも知れないな？）

クロディーが私に危害を加える事は無いだろうが、あの表情は非常に気になって仕方が無い。就寝する直前に一応、問題のブツに魔力を込めてみたが、直ぐにはその現象は起こらなかった。段階的に込める魔力の量を増やしてみたが、何の変化も現れなかった。からかわれたのかと思いながら、少し多めに魔力を込めると、何故か魔法宝石（マジックジュエル）が淡い光を放ち出したのに気付いた。

「ジョゼフ様、繋がった様ですよ！」

え！　この声は、多分、カグラさんだよな？　私が驚いたり、周囲を見渡したりしなかったのは、前世の記憶のお陰と言って良いのかも知れない。カグラさんの声は、魔法宝石（マジックジュエル）から聞こえた気がするのは、多分間違いでは無いだろう。

「ラスティン様、聞こえますか？」

「本当にカグラさんなんですか？」

「はい！　ご無沙汰しております。私の願いを聞き届けていただいて、感謝いたします」

クロディー、確かに良い夢が見れそうだよ！　それは、脇において置くとしても、この通信はガリアからリアルタイムで送られて来ているんだろうな？　長距離の無線通信技術か、是非手に入れたいと思ってしまうのは、”副王”としての性（さが）だったりするんだろうか？

「今、ジョゼフ様と替わりますね」

「えっ！？」

「ラスティン・ド・レーネンベルクか？　いや、今は、ラスティン・レーネンベルク・ド・トリステインだったかな？」

クロディー、今晩は嫌な夢を見そうだよ！

「はい、そのラスティン・レーネンベルク・ド・トリステインです、ジョゼフ王太子殿下」

「トリステインの副王殿下と呼ぶべきだったかな？」

「殿下のお好きなように、お呼び下さい」

「そうか？　では、副王と呼ばせてもらおうか？」

「それでは、こちらは王太子と呼ばせていただきましょう」

「何ですか、2人とも、仲の良い友人がそんな他人行儀な呼び方はしない物ですよ！」

横から？カグラさんの怒ったような声が聞こえたのだが、カグラさんも強くなった物だな。どうでも良いが、”仲の良い友人”とは誰の事だろうか？

「それでは、”ラスティン”と呼ぶことにするぞ、貴様も私の事は”ジョゼフ”と呼ぶが良い！」

「はあ？」

どうやら、”仲の良い友人”と言うのは私の事らしいが、それよ

りも、カグラさんの言葉だけで態度を一変させたジョゼフ王子の行動が何と言うか、無性に可笑しかった。

「ここからは、王太子と副王の会話だが？」

「はい、それでは、この”声を伝える者”の説明だけしておきますね。ラスティン様は、”音の記憶者”の事を覚えていらっしゃいますよね？」

「勿論です」

つい最近、貴重な証拠になってもらったからな。

「”声を伝える者”は、”音の記憶者”の本来の使い方なんです。普通の石に、”声を伝える者”の加工をすると”音の記憶者”になってしまうと言って良いかも知れませんね」

「それは、魔法宝石（マジックジュエル）に”音の記憶者”を作る際の加工をすれば、”声を伝える者”になると言う事ですか？」

「そうです、良くお分かりになりますね。正確には、この赤い魔法宝石（マジックジュエル）に対してと言うべきなのかも知れませんね。色々試しましたが、十分な力を発揮してくれたのは、この石だけでした。声を伝える事が出来る距離や、込める魔力量の関係でこの石が最も適しているんです」

「最初から半分にしておく物なんですか？」

「えっと、その辺りは秘密なんです」

「そうですか、でも、役に立つものをありがとうございます」

さすがは、ミョズニトニルンと言った所だろうか、多分失敗作だった”音の記憶者”を実用化してしまうとはな。これで、ガリアは画期的な通信方法を手に入れた訳か、トリステインとしてはあまり喜べない話だ。

「それでは、私はこれで、クロディーにも宜しく伝えて下さいね」

「はい、確かに」

「おやすみなさいませ」

その言葉を残して、カグラさんはその場を離れたようだ。

「全く、段々扱いづらくなってしまう。これも、貴様、いや、ラスティンがあれに妙な入れ知恵をしたせいだ！」

「余計な事でしたか、ジョゼフ殿下？」

「ジョゼフで良いと言った筈だが？」

「これは、失礼した、ジョゼフ殿」

この辺りで妥協してもらおうか、直ぐにガリアの王になる人間を呼び捨てには出来ないからな。

「ふん、まあ良い。それより、”ラスティン・レーネンベルク・ド・トリステイン”に伝えておくことがある・・・」

ジョゼフ王子は、そう言いながら、少しだけ口篭った。ああ、あの話か。

「父王、ロベスピエール４世が、危篤状態だ。貴様の国にも、弔問の準備を依頼したい」

「そうですか・・・」

「ふん、その様子では、知っていた様だな？」

「いいえ、ジョゼフ殿、可能性として考えていただけです」

「まあ良い、弔問の使者を用意しておいてくれ。ラスティン殿が来てくれれば、我が国としても有り難いがな」

「その点は、我が国と陛下と相談して決めさせていただきます」

「頼んだぞ。そうだ、ラスティン殿は近々結婚するそうだな。ガリアからは、特別に人を送る訳にはいかないのはすまないな」

「いいえ、その気持ちだけで」

これで、ジョゼフ王子との会話は終わる事になった。分かっていた事とは言え、ロベスピエール４世の死は中々受け入れるのが難しいな。トリステインとしては喜ぶべき事なのだろうが、私個人としては不本意ながら一抹の寂しさの様な物を感じない訳にはいかなかった。

もしかすると、これで結婚式（悪夢）を回避出来るかと思ったが、陛下も王妃殿下も式が終わってからガリアに発つ様にと厳命する始末である（既に洒落にならない金額がつぎ込まれていると言う事なのだろ

うか？）。

この件に関して、私の味方になる人間は居ない様だ。こうなったら開き直って、弔問の使者としての旅と、新婚旅行を兼ねる事にしようか？　エレオノールもガリア行きは、反対をしないだろうしな。

第百十四話　ラスティン２３歳（カグラちゃんの恩返し）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

一応この話で、ガリア動乱編を終わりにしますが、次は何て名前の章にしましょうか？

まあ、結婚式に絡む話なんですが、外伝の方が多かったりします。
番外編も用意してありますよ。

第百十五話　ラスティン２３歳（結婚式）（前書き）

第百十五話ＵＰします。

第百十五話　ラスティン２３歳（結婚式）

結婚式を数日後に控えたある日、私の所に魔法兵団の副団長の１人、工場長ことヴァレリーが王城まで私を訪ねて来た。使者によると、退任の挨拶と言う事らしい。年長の団長のマティアスが引退出来ないのに、ヴァレリーが先に後継者を決めたのは少し驚きだった。

「殿下、ご無沙汰しております」

「ええ、錬金隊にはかなり無理をしてもらっている現状で、ヴァレリーに抜けられるのは痛いんですけどね？」

「それは、このシモーヌがきちんとこなしてくれますよ」

「シモーヌさんですか、こうしてお会いするのは始めてですよね？　ラスティン・レーネンベルク・ド・トリスティインです、今後ともレーネンベルク魔法兵団の錬金隊を支えていって下さい」

「はい、お任せ下さい」

シモーヌと言う女性は、私より少し年上だったかな？　確かトライアングルメイジだったはずだし、錬金メイジとしての腕もそこそこだったと記憶しているが、何故彼女が選ばれたのだろうか？　しかし、初対面に近い筈なのに（一応見覚えはあるのだが）、私の顔を見た途端ため息をついたのはどう言う事だろうか？

「私が、こうして、シモーヌを連れて来たのには訳があります」

「そうでしょうね、普通なら父上やマティアスに報告すれば済むだ

けでしょうから」

「はい、実は最近、兵団員が行方不明になる事件が何件か報告されていまして」

「警備隊なら珍しくないですが、錬金隊でですか？」

「そうなのです、そこで、私は調査を各所に命じました。驚いたことに、このシモーヌが”おとり捜査”を申し出てくれたのです」

シモーヌは、そこで軽く頭を下げたのだが、若い女性にしては気が強いと言うか、怖いもの知らずだな。

「シモーヌさん、有り難い事ですが、あまり危険なことはしないでくださいよ？」

「いいえ、危険など特にありませんでした。何が起こっているかは、大体分かっていましたし、誘拐が行われていた店も特定出来ていましたから」

「成る程、シモーヌさんは、兵団の”影”だったんですね？」

「やっぱりお聞きになっていましたか？　兵団内で怪しい動きをしている者を監視するのが、公爵様から与えられた私達の本当の任務でした。兵団内に裏切り者がいる可能性は、常にありましたから、対策は色々考えていたのです」

さすがは父上と言った所だろうな。それに、シモーヌと言う女性もかなりの切れ者らしい、ヴァレリーが安心して後を託せる訳だな。

「兵団内の裏切り者と、それと結託したワーンベルの商人を捕らえることは、簡単でした。そこから横の関係を探るのは多少手間取りましたが、少なくとも錬金隊の周辺は安全な状態になったと思っています」

「そうですか、本当にありがとうございます。兵団の皆さんに代わってお礼を言わせてもらいます」

「いいえ、これが仕事でしたし、それにあの娘が次の標的だったんですから・・・」

「え？」

最後の方が上手く聞き取れなかったのだが？

「個人的な事ですわ、それより、裏で糸を引いていた者の事を知りたくありませんか？」

「糸を引く・・・、ゲルマニアですか！」

「はい、誘拐した兵団員は、ゲルマニアに連れて行かれたと思われるのです」

あの宰相も、色々な手を打ってくる物だ。今回は何とか大事にはならなかった様だが、誘拐された兵団員の事が心配だな。何とか救出したいが、かなり難しいだろうな、何とか無事で居て欲しい物だ。

（誘拐する位だから、いきなり殺される事は無いだろうが）

「残念ながら、捕らえた者たちは、単なる実行犯の様で、黒幕が誰なのかまでは突き止める事が出来ませんでした」

「いいえ、そこまで上手く運ぶ事は無いでしょう。今は、兵団に対する損害が最小限で済んだ事を、喜びましょう。シモース、これからは副団長として、兵団をよろしくお願いします」

「はい！」

「そして、ヴァレリーさん、今日までお疲れ様でした」

「ええ、兵団が出来てからは実に面白い人生でしたよ。残りは孫達に魔法を教えて行こうと思っています」

「そうですか、身体を大事に長生きしてください」

今回は父のお陰で大事にはならなかったが、やはり油断は出来ない様だな。しかし、ゲルマニアが錬金隊のメイジを誘拐して何をやる積りなのだろうか？　気にはなるが、とりあえず目先の試練の方が問題なんだよな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

結婚式（悪夢）は、無事終わった、式自体は非常に厳かだったが、その後にあったパレードの事は聞かないでくれ。私は、ひたすらにエレオノールの花嫁姿だけを見る事に努めていたから、パレード自体は記憶に残さない事に成功した。（後で話を聞かれても、妻の姿だけしか印象に残っていないと言えば、上手く誤魔化せるだろう）

何故か、私達と同時にエルネストとカトレア結婚式も王都で行われる事になった。エルネストが無駄な抵抗を試みたのだろうが、全く成功していなかったのは、その目付きを見れば分かった。まあ、

私自身も同じ様な目付きをしていたんだろう。義父は、どうやら2人の娘の結婚パレードを1度にする事で、2倍豪華にする事にした様だ。（決まっていた事とはいえ、あの2人を義父母と呼ぶのは中々疲れるのは気のせいだろうか？）

これだけで終わってしまうと、さすがにどうかと思うから、少し式について述べておく事にしよう。結婚式が行われたのは、王都でも3番目の歴史を誇る教会で、規模としては４００人程度が入れる大きさだった。少し中途半端に感じるだろうか？　まあ、娘達の晴れ姿を多くの人に見せたいと言う義父（ラ・ヴァリエール公爵）と、王家の者の式であれば、歴史の古い伝統ある教会で行うべきだというマリアンヌ様の主張が真っ向から対立して、実父（レーネンベルク公爵）が仲裁した結果だと言う事は後で聞いた話だった。

式自体は、友人達の時と同様、マザリーニ枢機卿が執り行ってくれたので感謝しなくてはならないだろう。枢機卿が居なければ、式自体までどんな事になっていたか考えたくは無いからな。式の内容自体も友人達の時と同じだったのは意外だが、誓いの言葉、指輪の交換、そして口付けと言う流れは一般的だったりするのだろうか？

（副王の結婚式などは行われた事があるかも疑問だから、一般的な物にしたのだろう）

そんな事より、重要なのは花嫁達の衣装だろうな、式の時の2人の花嫁の衣装は教会に合わせたのか、かなりシンプルな作りになっていた。どちらも白で、統一されていたが、エレオノールはレースを多めに使っている様だったが、カトレアは体の線がはっきりと見える様なドレスを纏っていた。布の良し悪しは、レーネンベルク織り以外は分からないが、触った感触ではかなり良いものだと感じた。こんな所でも、お金をかけるものらしい。

どちらの花嫁も、新婦らしい初々しさに満ちた笑顔を見せていた、花嫁が登場した際には、式の参加者から感嘆のため息が漏れたくら

いだから、花嫁達も満足したようだ。（私の服装？　鏡を見るのを拒否したから、知らないが、白いのは確かだぞ？）

何事も無く式は終わり、悪夢のパレードに移る訳だが、その前に花嫁達はお色直しに入った。私とエルネストが２人っきりで待たされる形になった訳だが、私達はほとんど言葉を交わさなかった。

「大変だな・・・」

「君もな・・・」

会話らしい会話はこれだけだった。お互いの事がよく分かるだけに、双方声をかけ辛い状況だった。そして悪夢の時間が始まった。

これだけは言っておくが、私はこの結婚自体は絶対にやりたいと思っていたし、式を挙げるのも当然だと思っている。もしこれを妨害する人間がいれば、本気で始末する気さえある！　逆にパレードを妨害してくれる人物が居れば陰ながら協力を惜しまなかっただろう。（そんな勇気のある人間は居なかった様だが）

「あの、このドレスいかがですか？　あ、スティン兄様」

「・・・」

「どうかされましたか？」

「・・・・・」

「兄様！」

「あ、いや、凄く似合うよ！　ちょっと言葉を失うくらいだよ」

「うふふ、ありがとうございます。頑張って用意した甲斐がありました」

お色直しの終わった新婦たちの衣装は、式の時と違って、かなり華やかな印象だった。エレオノールは、白とピンクのレースをふんだんに使ったドレスだった。エレオノールの、ほっそりとした白い腕と金髪が非常にマッチしている。確かにこの縫製には3ヶ月じゃ足りなかったのかも知れない。ちりばめられた宝石や刺繍を見れば、納得が行く話だった。

カトレアは、水色を基調としたドレスだったのだが、エルネストの反応も私と同じ様だった。カトレアと腕を組んでいる様は、カチンコチンに緊張しているのが見るだけで分かる。私の腕にもエレオノールの腕が添えられているのだが、それ程気になる事でも無いことも無い・・・、やっぱり緊張するものはするのだ！

この状態であの馬車に乗って、王都を一周すると思うと、考えるだけで気疲れしてしまうが、実際に私が感じたのは、素直に祝福してくれる人々への感謝だった。まあ、2度とはやりたくない話だが、こう言った機会は増えるのだろうな。（せめて馬車だけでも何とかしたいものである）

＝＝＝

今回は二次会などを企画する時間も無く、王家の人々、他国からの客人、主要な貴族などにお礼を言う事で、あっという間に時間が過ぎ去ってしまった。王族の結婚式や葬儀など所詮は政治的な交流の場でしか無いと言うのは仕方が無いのだろうか？

王族などと言うのは因果な生き方なのかも知れないな。まあ、親しい友人や家族達が、心の篭ったお祝いを言ってくれたのだけが救

いだった。友人達の中では、まだ独身のコルネリウスとセレナだけは、少しだけ複雑そうだったな。家族の子供達は、美しい花嫁達を見て少し興奮気味だったのは、まあ良いだろう。

両親も素直に私の結婚を祝ってくれたが、義父となったラ・ヴァリエール公爵には、私とエルネストに対して”娘達を宜しく頼む”から始まって、円満な家庭の築き方まで講釈を受ける事になった。

（まあ、内容は本人の為に黙っておく事にする）

第百十五話　ラスティン２３歳（結婚式）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

番外編のほうが先になってしまいました。本編が進まないんですよ！

外伝十六話　ぼっくはデニス！（前書き）

外伝十六話ＵＰします。

外伝十六話　ぼっくはデニス！

ぼっくの名は（ここのアクセントが重要なのさ）、デニス、デニス・ド・グラモン！　そう、トリステインでも知らぬ者がいない、土のグラモン家の嫡子にして、父である陸軍の元帥グラモン伯爵の後を継ぐべく、現在は父の副官として軍に務めているのだよ。

「うん、少し固いかな？」

「デニス、貴方さっきから何やっているの？」

「勿論、〝あの方〟との思い出を綴ろうと思って、少し文章を考えているのさ！」

「デニスが？　ぷっ！」

「クリオ！　君も大概、失礼な女性だね？」

さっきから会話をしているのは、何と言うか、僕の婚約者であるクリオ・ド・コーヌなんだけど、どうも僕は彼女から舐められている気がする事が良くある。僕が少し、他の綺麗な〝薔薇〟と会話しただけで、いきなり怒り出したり、時には耳を捻られたりするのは理不尽じゃないだろうか？

僕の様な美しい男性は、様々な女性を賛美する事で、その美しさに磨きがかかると何度説明しても納得してくれないんだ。どうして僕は、クリオと婚約なんてしているんだろう？

「デニス、言っておくけど、婚約者の前で他の女性の事を褒めるなんて、失礼以前に、普通なら婚約破棄になって当然よ！」

「君は何を言っているんだい？　美しい物を美しいと思わない人間は居ないし、出来る事ならそれを言葉にして多くの人と共感したいというのが普通だろう？」

「はぁ、まあいいわよ。どうせ、あの娘（エレオノール）の事でしょう？」

「そっのっ通りさ！」

「最近その話し方に凝っているみたいだけど、止めた方が良いわよ？　馬鹿っぽく聞こえるから」

「ばっ！」

クリオは時々こんな事を言うけど、実際この話し方をすると、初対面の人は必ず僕の事を覚えてくれるっていう立派な利点があるんだけど、女性には分からないものなのかな？

「いいから！　どんな事を書こうとしていたの？」

クリオの言い分に同意する訳じゃないのだけど、まあ、今晩位はあの方（エレオノール）の事を考えても怒らないで欲しいな。

「そうだな、先ずは2人の劇的な出会いの辺りから始める予定なんだ」

「劇的ね・・・」

「そう、あれは僕が13歳の頃だったかな？　そろそろ社交界に”でっびゅー”する準備として、とある貴族の誕生パーティーに参加

した時の事だったよ」

「”でっびゅー”も止めなさい、本当に馬鹿みたいよ？」

「そのパーティーは、ほとんど内輪の物だったから、僕みたいな子供が行っても問題なかったんだよ。その場にあの方も参加していたのはやはり運命だったんだろうね～」

「聞いてないし・・・」

＝＝＝

「これはグラモン伯爵、お久しぶりですな」

「ラ・ヴァリエール公爵、貴方の様な方がこんな内輪のパーティーに？」

「ははははっ、目的は伯爵と同じらしいがね。これが、長女のエレオノールだ。伯爵は知っていたかな？」

「勿論ですよ、結構な噂になりましたからな」

「エレオノール・アルベルティーヌ・ド・ラ・ヴァリエールと申します。どうぞお見知りおきを、グラモン伯爵様」

「おお、これは、可愛らしい上に、よく出来たご令嬢ですな。デニス、お前も公爵に挨拶を」

「デニス、デニス・ド・グラモンです」

当時の僕はそれだけ言うのが精一杯だったのさ、別に知らない大人に囲まれて緊張したとかではないよ。そう、エレオノール様の姿を一目見た瞬間から、その容姿や、声、振る舞いといった物に釘付けだっただけなのさ。

「なんだ、それだけか？」

「伯爵、ご子息も緊張しているのでしょう」

「そういう子では無いのですが・・・」

「まあ、こちらは気にしませんからな。エレオノール、少し何か食べておくかい？」

「いいえ、皆様への挨拶を済ませてからで構いませんわ」

「そうか、ではグラモン伯爵、また何処かで」

「はい、公爵」

大人達はそんな会話をしていたけど、僕はほとんど聞いていなかった。だた、あの方の姿を目に焼き付けるのに必死だったんだ。僕の周りには、あまり女の子は多くなかったけど、多少は女の子の事を知っていた筈だった。だけど、あの方は別格だったんだ。

「父上、今の女の子は？」

「お前は何を聞いていたんだ？　あの、ラ・ヴァリエール公爵家の長女だぞ。覚えを良くして置かなければならないのに、お前は！」

「綺麗な子でしたね・・・」

「何で、お前は人の話を聞かないんだ？　全く誰に似たのやら・・・。どうでも良いが、あの子はダメだぞ。絶対にだ！」

「はぁ？　公爵家と伯爵家なら、それ程おかしな話ではないんじゃないかな？」

「勝手にそこまで想像を進めるな！　エレオノール嬢には、ちゃんとした婚約者がいるんだからな」

「僕より彼女に相応しい男なんていない筈だよ！」

「何処からその自信が来るんだろうな？　レーネンベルク家の名前はお前も知っているだろう？」

「噂じゃ、田舎の公爵様だそうじゃないですか？」

　土系統に関しては、我が家が最も伝統があるの筈だとあの頃は胸を張って言ったものだったんだな～。王家の血を引くと言っても、平民達を雇って何かやらせている程度では高が知れているなんて考えていたんだけど、今思えばちょっとだけ甘かったかな？

「はぁ、お前はもう少し現実と向き合うことを覚えるべきだな。なにせ、エレオノール嬢はそのレーネンベルク家の長男ほれ込んでいるそうだからな」

「何を言っているんですか、あの方は、きっと僕の魅力に気付いた筈ですよ！」

＝＝＝

「こんな感じで、運命的な出会いをした訳なんだよ！」

「ふーん」

「ど・う・し・て！　そんなに反応が薄いんだ君は、婚約者の初恋の話だぞ。少しは気にならないかな、クリオ？」

「だって、つまらないんだもの。どうせ、エレオノールはデニスの事なんて覚えていなかったんでしょう？」

「ぐっ！　まさかあの方から直接聞いたのか？」

クリオは、僕の同級生で、あの方の友人でもあるから油断は出来ないんだ。

「それ位、想像がつくわよ。それで、あの娘に次に会ったのは？」

「それだ、聞いてくれ。始祖ブリミルは僕に祝福を与えてくれたんだ」

「・・・」

「僕とは年が1つ離れているから、トリステイン魔法学院では後輩になると思っていたあの方が、何と僕と同級生だったんだ」

「・・・」

「これこそ、運命だと僕はその時、確信したんだよ？」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

あれ？　反応が無い様な気がするんだけど？

「あの、クリオ、聞いている？」

「聞いてるわよ、まったく。人の話は聞かないくせに、自分の話を人が聞かないのは許せないなんて言うんじゃないでしょうね？」

「いや、今、凄く良い所だったんだよ」

「あの娘が、１４歳で魔法学院に入学したのは、”彼”を追いかけてだって、本人から聞いたわよ？」

「・・・」

「あ、固まっちゃった、本当に面倒な男ね（なんでこんな男を好きになっちゃったんだろう？）」

「・・・」

「嘘よ、嘘！　きっとあの娘とデニスは、ブリミル様の意思で再開できたんだと思うわよ（でも、つい構っちゃいたくなるのよね）」

「そうだよね、君もそう思うんだね！」

外伝十六話　ぼっくはデニス！（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

設定だけ出ていたクリオ嬢ですが、なかなか良い性格していますよ？

外伝十七話　学生時代（前編）（前書き）

外伝十七話ＵＰします。

外伝十七話　学生時代（前編）

そう、私と、あの娘と、不本意ながら婚約者のデニス・ド・グラモンは、トリステイン魔法学院の同級生だったんだ。最初に、エレオノールを見た時は、とても近付き難い娘だと思ったんだけど、意を決して話しかけてみると、何だか見かけに騙されたと思う位に気さくに話に応じてくれた。

私が、エレオノールに話しかけようと決心した背景には、入学の式典の時に気になっていた男子が、異常に熱心にエレオノールを見詰めていた事が原因だったりするんだよね。（まあ、その男子というのがデニスな訳なんだけど）

「失礼、ミス・ヴァリエール、隣の席空いてるかしら？」

「あ、はい。確か、ミス・コーヌでしたね？　同級生とは言っても、1つ年長の方ですから、そんなに丁寧に話さなくても構いませんよ？」

「そう、ありがとう。貴女も、私が年上だからって、普通に喋ってくれていいよ」

「うん、ありがとう、ミス・コーヌ」

「それ止めない？　ミスとかミスタとか堅苦しくて」

「ふふ。そうね、クリオ？」

「それで良いわ、エレオノール」

教師達の前では、きちんとしていないといけないけど、普通はこうじゃなくっちゃね。でも、この娘って意外と話が分かるわね。さっきの授業も全然苦労していなかったみたいだし、見かけも綺麗だし（悔しいけど私の倍は綺麗だわ）、性格も良いって、何処のお嬢様ですか？（ラ・ヴァリエール公爵家のお嬢様なんだけどね）

「でも、良かった。同級生の皆さんは、私にあまり話しかけてくれないから、ちょっと心細かったの」

「まあ、そうでしょうね。誰も、貴女のお父様に目を付けられたくは無いでしょうから」

ラ・ヴァリエール公爵の娘に対する溺愛ぶりは一部では結構有名だったんだよね。

「じゃあ、クリオは、何故私に話しかけてくれたの？」

「えっ！？」

「何か話し難い事情でもあるの？　私なんかじゃ頼りにならないかも知れないけど、良かったら話して欲しいな」

「えーっと、ごめん、貴女だけには絶対話せない事情なの」

私がちょっと気になる男の子が、貴女の事を熱心に見ていた何て言ったら、どんな事になっちゃうか、不安だしね。私の言い方が悪かったのか、エレオノールはあごに人差し指を当てて、考え込んじゃったんだけど、その仕草がまた、女性の私から見ても何だか可愛らしかった。

それから、私とエレオノールは友人になり、それを見た私の知り合い達もエレオノールと親しく話す様になった。公爵家の娘という事を抜きにしても、エレオノールと話すことは面白かったし、見ていて飽きないのも事実だったんだ。そんな、あの娘も人には言えない秘密を持っていたのに気付いたのは、多分、同級生の中では私が最初だったと思う。

”ミス・ヴァリエールが夜の中庭で、上級生と密会している”という噂が、噂好きな女の子の間で広がるのは、意外と早かったと思うんだけど、エレオノールの周りの友人達は最初それを信じなかった。

エレオノールに婚約者が居るのは本人から聞いた事だったし、あの娘が婚約者以外の男性と密会すると言う事は中々信じられなかったと誰もが言っていた。あの時は、日頃の行いの大事さを思い知らされた気がしたわ。そういう友人たちも気になる男の子達とこっそり会っていたりするから、真正面から尋ねる様な無粋な事をする事も無かったと思っていた。

そして何時からか、”ミスタ・グラモンがミスタ・マーニュに決闘を申し込んで返り討ちに遭い続けている”という、謎な噂が男子の方から流れて来る様になった。”返り討ちに遭い続けている”と言う所がおかしいのだけど、私が気になったのはその噂を聞いてしまった時のエレオノールの態度だった。

ほんの少しだったけど、エレオノールが誰かを心配している様に見えちゃったんだ。それはどう考えてもデニスではなかったから、当然相手の”ミスタ・マーニュ”と言う事になる訳で、私としても気になって”ミスタ・マーニュ”に探りを入れてみた。

マーニュ男爵家と言う所は、レーネンベルク公爵家の家臣が貴族に取り上げられた家系だと言う事は、簡単に分かった。そして件の

”スティン・ド・マーニュ”という人物の事も意外と簡単に分かってしまった。何と言うか、身分の違いを除けば、エレオノールのぴったりの男性だと思えたけど、これらは、エレオノールが”浮気”をしている事を裏付ける（決定的ではないけど）証拠になる事実だったんだ。

だけど、私としてもどう動くか決めかねている間に、”スティン・ド・マーニュ”はあっさりと卒業して行ってしまった。エレオノールがため息をつく事が多くなったのを私は気にしないようにしていたのよね。友人でも、相談を受けなければ、踏み込んではいけない領域があるんだと、何となく分かっていたからなのかも知れないね。

そして、事態が急変したのは、そんなある晩の事だったんだ。もう、休もうと思って寝間着に着替えて、ベッドに入ろうとすると、部屋のドアが微かにノックされた事に気付いた。ドアを少しだけ開けるとそこには、泣きじゃくったエレオノールが不安げに立っていた。

「どうしたの、エレオノール！」

「あの、クリオ。ぐすっ、少し、あの少しだけで良いの、話を聞いてくれないかな・・・？」

「良いから、入りなさい。もう冷めちゃったけど、お茶を淹れるわね」

「ありがとう・・・」

私は、エレオノールの格好を確認したけど、特に異変は見当たらなかった。良かった、馬鹿な男子に乱暴されたとかじゃないみたいだ。

「ゆっくりで良いから、何が起こったか話してくれるかしら？」

「うん、今晩、ミスタ・グラモンの呼び出されて少しだけ話をしてきたの。その時にね、ちょっと、うぅ・・・」

「エレオノール、大丈夫よ、落ち着いて、ね？」

エレオノールの様子は、ちょっとでは済まない様だったけど、話を聞いて何となく納得してしまったんだ。デニスが、あの”ミスタ・グラモン”らしい、間抜けな行いをしてしまったと言う訳だった。彼の名誉（そんなの在るのかしら？）の為に言っておくと、彼がエレオノールに乱暴したと言う訳ではないのだけど、決して褒められる事をした訳では無かったの。

デニスはどちらかと言えば、まあ、紳士な方なのだけど、かなりデリカシーに欠けた所がある。入学当初から、容姿や家柄なんかで、色々な女の子達から言い寄られていたのは知っていたんだ。デニスはデートとかには意外にあっさり応じるそうなんだけど、決して”彼女”を作ろうとしなかったんだ。

正式に交際を申し込んだ女の子も何人か知っているけど、彼女達も振られた事自体は気に病んでいないらしかった。振った前も振った後も、デニスの態度は全く変わらなかったと言うのが理由らしいんだけど、あれは心が広いとかでは無くデリカシーの欠如だと思う。まあ、デニスはエレオノールだけを見ていたんだから仕方が無いのだけどね。

まあ、そんなデニスなんだけど、今回は言ってはいけない事を言ってしまったみたいなんだよね。デニスが誤解しても仕方ない気もするんだけど、エレオノールも真面目だからな～。

「もう一度聞くけど、”スティン・ド・マーニュ”が本当に、”ラスティン・ド・レーネンベルク”なの？」

「はい、私の婚約者”スティン兄様”です」

「何でそんな面倒な事を？」

「話してはくださいませんでしたから、正確には分かりません。でも、何かお考えがあるんだと思います」

「まあ、それは良いわ。貴方が浮気をしているとは、どうしても信じられなかったからね」

「ありがとう、クリオ」

「でも、”ミスタ・マーニュ”はもう卒業したんでしょう？　彼の身元をばらしてしまえば良かったんじゃない？」

「兄様が、その積りだったのなら、卒業の時に御自分から告白されたと思います。兄様が言わなかった事を勝手に洩らす訳には行きません！」

「貴女も、随分と変わった考え方をするのね。まあ、”ラスティン・ド・レーネンベルク”にはお似合いなのかもしれないわ」

「そう言ってもらえると、嬉しいわ」

そう言って、エレオノールは少しだけ微笑んでくれた。そうすると、デニスが何を考えて（いや、きっと何も考えていなかったんだ

ろうけど）そんな事を言ったか分からないけど、最悪な事を言ってしまったんだ。デニスは単純に、”ミスタ・マーニュ”の後釜に座ろうとしたのだろうけど、最初から”ラスティン・ド・レーネンベルク”しか見ていなかったこの娘には、”尻軽女なんだから僕でも良いだろう”と言った感じで聞こえたんだと思う。

エレオノールと一緒にベッドで横になって居たんだけど、どうしても気になっている事があって眠れなかった。そう、デニスが今どうしているかだったんだ。普通に考えれば、部屋に戻ってエレオノールを泣かせてしまった事を悔やんでいると考えちゃうんだろうけど、何故か私にはそう思えなかった。

エレオノールが寝静まるのを待って、こっそりベッドから抜け出す事にした。私は、これでも品行方正で通っているから、夜に寝間着一枚で外を出歩くなんてすっごくドキドキしたけど、マントだけでも羽織ってくるべきだったかも知れないね。

淡いライトの光を頼りに、中庭のある場所を目指したんだけど、やっぱり夜だと勝手が違うのか、目的の池のほとりに着くのに少し手間取ってしまった。辺りを慎重に探してみたけれど、目的の人物は居なかったみたいだ。

「やっぱり、もう部屋に戻っちゃたんだな。普通そうだよね？」

念の為、もう一度だけ、周囲を探してみたけど、やっぱり人影は見当たらなかった。少し落胆しちゃったけど、これが普通なんだと自分に言い聞かせて、部屋に戻ろうと一歩踏み出すと、

「ひょわっ！」

何か柔らかいものを踏んでしまって、思わず乙女にあるまじき悲鳴を上げてしまった。少しだけ、心細かったから仕方が無いんだよ？

その柔らかい物は人の体で、顔を照らしてみると、やっぱりデニスだった。でも同時に、デニスは何故か額から出血しているのが見えてちゃったの！

「デニス！　どうしたの」

慌てて、肩を揺すってみたけどデニスは何の反応も示してくれなかった。

「まさか、誰かに襲われたの？　あの様子じゃ、あの娘がやったとも思えないけど」

独り言を言っても、事態は進展しないよね？　慌てて、思いつかなかったけど、水系統魔法で治療すれば良いとやっと気付いたのは少し落ち着いてきてからだった。魔法を使いながら、周囲を見渡すと、状況的に不自然な感じがしたんだ。デニスは木に向かって仰向けに倒れていたし、デニスの人間としては兎も角、メイジの（正確には決闘の）腕も学年で飛び抜けている。そんなデニスを簡単に倒せるものなんだろうか？

傷口が治ったのを確認して、ハンカチは無かったから、デニスの額を寝間着の袖で拭うと、何か小さな破片が付いているのが分かった。

「これは、木の皮かしら？」

自分の言葉に何故か閃く物があった、でも本当にそんな事が？　いいえ、デニスならいかにもやりそうな気がするよね？　でも、確かに馬鹿な事だけど、デニスなりに反省して”自分で木に頭をぶつけた”んだと思うと、少しだけ優しい気持ちになれたのが自分でも不思議だった、でもこれが悪かったんだなと後悔する事にもなった

んだよね。

「ミスタ・グラモン、起きなさい、風邪を引いてしまうわよ？」

こう言いながら、結構乱暴にデニスの頬を叩くと、やっと、デニスが目を覚ました。

「あ、あれ？　ミス・コーヌ？　君の様な女性が、夜に僕の部屋に来るなんて、気持ちはありがたいんだけど」

「貴方の部屋は、何時から木の下になったの？」

「へぇ？」

デニスは寝惚けた様だったけど、何かを思い出したのか、黙り込んでしまった。だけど、私は、真剣に青春している2人が少しだけ羨ましくなってしまった。きっとその歯車は、噛み合わないんだけどね。

「話は、ミス・ヴァリエールから聞いたわよ？」

「ミス・コーヌ！　教えてくれ、何故、あの方、いや、ミス・ヴァリエールは、その、急に泣いたりしたんだ」

「さ～ね～？」

「ふざけないでくれ、僕は真剣なんだ！」

別に意地悪をしている積りは無いんだけど、乙女が膝枕で傷の治療をしたのに、そんな事も気付かずに他の娘の話を始める男には相

応しい対応だと思うよね？（あ、膝枕は特に深い意味が無いのよ？　暗いし、魔法がかけ辛かっただけなんだから）

「僕は一体どうしたらいいんだろう・・・」

「取り敢えず、あの娘に謝罪の手紙でも書いてみたら？　読んでくれるかは分からないけれどね、少なくとも貴方の頭を何度、木に叩きつけても、あの娘には伝わらないと思うから」

「そうか、その手が！」

「あ！　でも貴方に乙女心が分かるかしら？」

「勿論さ！」

この嘘つきめ、でもこのままでは、デニスにとってもエレオノールにとっても良くない状態なのは確かよね？

「ミスタ・グラモン！　その調子で、ミス・ヴァリエールを泣かせてしまったのを忘れたの？」

「はぅ！」

妙な声をあげて、デニスが胸を抱える様にしゃがみ込んでしまったんだけど、まあ、自業自得よね？

「仕方が無いわね、私が内容を確認して渡してあげるわよ」

「本当かい！？　是非頼むよ！」

速攻で乗ってきちゃったんだけど、自分の手紙が私(他人)に読まれると言う事は理解しているんだろうか？

「自分で言っておいてなんだけど、貴方の手紙を私が見ても良いの？」

「構わないさ、ミス・ヴァリエールに対する賛辞しか書く積りは無いし、それを君に読まれたって、特に気にしないよ」

「はぁ～」

デニスは確かにある意味大物かも知れないわね。でもこれで、私とデニスの接点が出来た訳なんだけど、本当に大丈夫、私？

外伝十七話　学生時代（前編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

外伝十八話　学生時代（後編）（前書き）

外伝十八話ＵＰします。

外伝十八話　学生時代（後編）

そして、翌日からデニスの、手紙攻勢（恋文とは絶対に呼べない内容だったからね）が始まったんだけど。最初のうちは、わざと因縁をつけてデニスの手紙を直ぐに突っ返してしまった。（まあ、内容が内容だけに因縁をつけるのは簡単だったんだけどね）エレオノールは、まだあの事を気にしていたので、少し気を使っていたんだけど、防波堤になる私も大変だった。

最低でも一日一通、虚無の曜日などは、一日三通渡された事もあった程だったんだ。この情熱を他の女の子に向ければ良いのにと何度も助言したんだけど、あのバカは絶対に首を縦に振らなかった。私としても、少しだけデニスの事を見直す機会になった気がしていたんだ。

２週間程経って、あの娘も落ち着いたから、思い切ってデニスの手紙を渡してみたんだけど、あまり良い顔はしなかった。（まあ、当然だけどね。一応、内容的には問題無く添削したので、読んでくれれば良いのだけれど）

残念ながら、エレオノールからデニスを許すと言う言葉は中々発せられなかったんだけど、１月ほど経って、あの娘が私に唐突にこんな事を聞いてきたんだけど、最初はどういう意味か分からなかったんだよね？

「ねえ、クリオ？」

「ん？　どうしたのエレオノール？」

「そろそろ、ミスタ・グラモンに謝罪を受け入れるって返事をしても良いかしら？」

「はぁ、その気があるんなら、呼び出すなり、手紙を書くなりすれば良いじゃない。デニスなら大喜びするわよ？」

エレオノールは、何かの理由で、デニスに故意に返事をしないんだと思っていたんだけど、何故それを私に聞いてくるんだろう？

「本当に良いのかな～？」

「良いんじゃない？　何なら私が手紙を渡しても良いよ？」

「そう、それならこの手紙をクリオに預ける事にするわね。クリオが、良いと思ったら、ミスタ・グラモンに渡して頂戴ね？」

エレオノールは、懐から一通の手紙を取り出して、簡単に私に預けて来たんだけど、私にとっては簡単に扱えるものじゃなかったのよね。これを、デニスに渡したら、私とデニスの接点が無くなってしまうということが、きっとそう思わせたんだろうけどね。

「ねえ、クリオ。ミスタ・グラモンの手紙には、何故か、”ミス・コーヌ”の名前が沢山出てくるんだけど、理由を聞いて良いかしら？」

「なっ、ななな、何を言っているのかしら、ミス・ヴァリエール」

ダメだ全然隠せていないよ、自分がこんなに純情だとは思わなかった。今、私の顔は真っ赤になっているんだと思う。エレオノールはいたずらを成功させた子供の様な表情で私の事を見ているんだけど、頭が混乱して言葉が出ないの～！

「貴女とミスタ・グラモンなら、結構お似合いだと思うわ」

エレオノールが真面目な顔をして、こんな事を言ったものだから、私は教室から逃げるように飛び出してしまった。

＝＝＝

気が付くと、何故か、何時もデニスから手紙を受け取る中庭の大きな木の下に居たんだけど、正直まだ、胸の鼓動が治まらない。暫く、ぼーっとしていたんだけど、こんな事をしていても何の解決にはならないんだと思って、教室に戻ろうと振り返った時に、急に話しかけられたんだ。

「ミス・コーヌ」

「ひぃっ！」

「どうかしたのかい？　急に出て行ったから気になったんだよ」

「デ、ミスタ・グラモン、心配してくれたの？」

「ま、まあね。世話になっているミス・コーヌの事だからね」

「そう・・・」

ああ、なんか気まずいわよね、いっその事、さっきの手紙を渡したくなって来たわ！

「ミス・コーヌ、これを！」

「これを私に？」

デニスが、私に向かって花束を差し出してきたのには、驚いたけど、それ以上にどうしても胸の高鳴りを覚えずにはいられなかった。

「いいや、勿論、ミス・ヴァリエールに渡して欲しいんだけど？」

ダメだ、この男はダメだと思った瞬間でした。ちょっとだけ（本当の事を言えば物凄く）期待した自分が馬鹿だったわね。何と言うか、体から力が抜け切ってしまう感じかな？

「はぁ、良いわよ」

「そ、それと、だね・・・」

「何？　まだあの娘にプレゼントでもあるの？」

デニスが、らしくも無く口篭ったので、つい、口調が厳しくなってしまった。

「これを、〝君〟に！」

「えっ！」

再度私に向かって差し出されたのは、エレオノールへの花束より、少し小ぶりな花束だったの！　今、確かに、〝これを君に！〟って言ったよね？

「こ、これを、わ、私が頂いて良いのかしら？」

ああ、一生に一度の場面かも知れないのに、私って本番に弱いタイプなのかしら？

「あ、うん、ミス・コーヌには、本当に迷惑をかけてばかりだからね。おわ、お詫びのき、気持ちだと思ってくれればいいんじゃないかな？」

こんな台詞は普通に口に出すデニスが、緊張気味に、少しつっかえながら、言ってくれたのには本当に驚いた。２人して緊張しながら、花束贈呈の儀式でもやるみたいにぎこちなく、花束を受けとっちゃった。この時、私は”彼”を自分の物にしたいと本気で思った。そう、デニスの気持ちを、”あの娘”から奪い取ろうと思った瞬間だったんだね。

＝＝＝

結局、エレオノールからデニスへの手紙を渡すことは出来なかった。エレオノールには悪いけど、ちょっと意地悪な女の子になってもらって、何気なくデニスと毎日の様に会うことを続けさせてもらった。まあ、あの娘はその事自体を責めたりしないと分かっていたから、遠慮はしなかったし、あの娘もそれに気付いていたかも知れないのよね。

半年以上、恋人未満友人以上の関係が続いたんだけど、それらしい進展もないまま、学院を卒業する日が来てしまった。今日みたいな特別な日は何かあるんじゃないかと、期待していたんだけど、友人達と別れを惜しんでいるだけであっけなく一日が終わってしまった。

実家に戻って、母の手伝いなどをしながら、何となく過ごしてい

ると、一通の手紙が”彼”から送られて来たのだけど、そこには、

”直ぐに、グラモン家まで来てくれ！”

と言う一文だけが書かれていた。それでも私はそこに何か運命みたいなものがあるんじゃないかと想像（妄想かもしれないね？）して、何とか両親に言い訳して、グラモン伯爵の領地を目指した。

「ここが、グラモン伯爵のお屋敷か～、さすがに家（ウチ）とは比べ物にならないわね」

「お嬢様、家の方がいらしたようですよ」

「うん、分かっているわ」

供の者に窘められて、少し落ち着いた気がする。グラモン伯爵の家臣の人が、私を客間に案内してくれたんだけど、私の実家と違って、歴史を感じさせる部屋でどうも落ち着かなかったんだよね。

「君がコーヌ子爵家の令嬢、クリオ・ド・コーヌで間違いないかな？」

客間にやって来た男性がこう切り出してきたんだけど、この男性がグラモン伯爵なんだよね？　伯爵の後ろにデニスが居るし間違いないと思う。

「はい、私がクリオ・ド・コーヌです。お初にお目にかかります、伯爵様。今日は、突然お訪ねして申し訳ありませんでした」

「ふむ」

伯爵は何故か私を値踏みするように眺めているんだけど、これはどういう状況なんだろう？

「ご子息には、学院で色々お世話になりましたので、改めてお礼を言わせていただきます」

「ふむふむ」

どうしたら良いのか分からなくて、デニスに視線を向けるとついっと視線をそれしてしまった。はぁ、まあ、なるようにしかならないわよね。

「ご子息に、急に呼び出されたものですから、事情が分かりません。出来れば説明して頂けないでしょうか？」

「ふむ、中々肝の据わったお嬢さんだね、これでも私は軍人なのだがね？」

「いいえ、私はただの御子息の同窓生に過ぎませんから」

言われてみれば、グラモン伯爵は陸軍の偉い人だった気がするよね。でもデニスの父親だと思っていたから、そんなに気にしていなかったんだ。それにデニス自身が何だかそわそわしていて、そちらが気になったというのも理由かも知れないんだけどね。

「だたの同級生かね？　”直ぐに、グラモン家まで来てくれ！”とだけ書かれた手紙でわざわざやってくるからには、それなりの仲だと思うがね。まあ良いだろう、合格だ！」

「はい？」

「君をデニスの恋人と認めようと言っているのだよ？」

言われた事が全く理解出来ない瞬間ってあるんだね。デニスはデニスで、伯爵の後ろで身振り手振りで何かを伝えようとしているらしいけど、何だか妙な踊りに見えてしまって不意を突かれたのかも知れない・・・・、え～～～っ！

「君の事と、君のご家族の事を少し調べさせてもらうが、代わりに君は暫くこの屋敷で我が家について学んでくれれば良い」

「・・・」（はい、私は、完全に固まっています）

「デニス、クリオ嬢を頼むぞ！」

「はい、勿論です、父上」

それで会話は終わりとばかりに、グラモン伯爵は客間を出て行ってしまったんだけど、それはつまり、部屋にデニスと私だけになると言う訳で。

「デニス！」「クリオ！」

「「あっ！」」

非常に気まずい空気が2人の間を流れた気がしたんだけど、何時しかそれは、穏やかな物に変わっていた。私が心の中で”デニス”と呼んでいた様に、デニスも私の事を心の中で”クリオ”と呼んでいたんじゃないかって思えたからなんだろうね。

＝＝＝

「こほん、デニス、事情説明してくれない？」

「そうだね、クリオ。何から話せばいいかな？」

暗黙の内に、私たちの間ではお互いの名前を呼ぶことが了解されたみたいだ。これ自体は非常に嬉しい事だったのだけど、デニスの話はそれを帳消しにする内容だったんだよね。

「僕が、実家に帰って来たら、いきなり1人の女性を紹介されたんだ」

「もしかして、結婚を前提として付き合いを始めたとか？」

「ま、まさか。その女性は、母方の叔母の知り合いらしく、その叔母が結婚話を強引に進めてくるんだ」

「ふーん、貴方が女性を拒むのは良く見た事があるけど、同じ様にすれば良いじゃない。まさか、相手がブスだから嫌とかじゃないんでしょう？」

「勿論さ、全ての女性は何処か輝く所を持っているものなんだからね！」

これだから、デニスには特定の相手が出来なかったんだろうね。あの娘の件もあるんだろうけど。

「結婚しちゃえば良いのに！」

「な、何を言い出すんだ。その相手の女性、ドロテー嬢という女性なんだけど、どうも苦手なんだよ」

「デニスが苦手な女性がいるの？」

「そうだね、美人だし、家柄も申し分ないんだけどね」

「本当に、結婚しちゃえば良いのに！」

「ドロテー嬢は、何と言うかな。自分の美貌や家柄を鼻にかけるところがあってね」

えーっと、何処かで聞いた事のある話よね？

「それに、2人っきりで話していると、どうも話が噛み合わない感じなんだよね。僕の言っている事を聞いていないんじゃないかと思うことがあって、疲れてしまうんだよ」

”デニス、それは同属嫌悪と言う感情なのよ！”と言ってあげたくなったわ。ああ、そうするとドロテー嬢という女性も同じ様に感じているのかも知れないわね。多分断る理由が見つからなくて、意地になっているんじゃないのかな？

「話は分かったけど、それなら、エレオノールの名前を出せば良かったじゃない？」

「それじゃあ、言い訳にならないよ。あの方には婚約者が居るんだし、父のそんな事を言ったら、有無を言わせずドロテー嬢と結婚させられていたよ」

「何、その言い方だと、私は言い訳なの？」

「いや、そう言う訳じゃ・・・、何と言うか誤魔化す為に女性の名前を出そうと思った時に、君の名前しか思いつかなかったんだよ、ごめん」

デニスも中々嬉しい事を言ってくれるわね、”誤魔化す為に”と言うのはいただけないけどね～。でも、この状況は私にとっては、絶好の機会なんだよね。これを逃したら、きっと後悔するかな・・・？

「まあ良いわ、話に乗ってあげる。でも、きちんとご家族に紹介してよ？　一応、恋人という設定なんでしょうから」

「勿論だとも！」

よしよし、上手く行きそうだわ。でも、私はどうやって、”ご家族”に挨拶したら良いんだろう？　ちょっとだけ悩んだけど、学院当時のスタンスを貫く事に決めたんだ。妙に猫を被るのも疲れそうだし、多分、家の人達もそんな女性を望んではいないんじゃないかと思ったんだ。

この試みは、デニスの家族に概ね好評だったのよね。やっぱり長男がこれだと、お嫁さんにはしっかりして欲しいと考えるのが手に取るように分かったわね。ただ、４男のギーシュ君だけはちょっと気になったんだ、この子はどうも将来デニスの様になる気がしてならないの。ここは義姉として、きっちりと教育しようと思ったら、微妙に怖がられてしまったのよね。

＝＝＝

そう言えば、そろそろあの事件から一年よね？　何故か最近落ち込み気味のデニスに発破をかける積りで、こんな事を話題にしてみたんだけど、その反応は実に面白かった。

「ねえ、デニス」

「ああ、僕の一生はもう終わったんだ・・・、これからはたった一人の女性に縛られて生きていかなくちゃいけないなんて、まるで悪夢のようだ・・・」

「全く、過ぎた事を何時までも、ねえ、あ・な・た」

「わぁ、なんだ？」

耳に軽く息を吹きかけるように、囁きかけると椅子から飛び上がって、壁際まで逃げて行ってしまった。まあ、将来の妻が甘えているのに失礼よね？

「デニス、確か去年の今頃よね？　貴方があの娘を泣かせちゃったの」

「・・・、そうだね。僕は未だにあの方から許してもらえていないんだ、僕は何て不幸なんだ！！」

あの手紙は未だにデニスに渡していないんだよね、まあ、今では私のお守りみたいな物だから、一生デニスには渡さない積りなんだけど。

「あの時、エレオノールが何故泣いたのか、そろそろ分かった？」

「・・・」

この朴念仁め、自分にも不本意だろうが婚約者が出来たって言うのに！

「あの娘はね、昔から、本当に小さい頃からある男性に夢中なの、分かる？」

「それは、〝ラスティン・ド・レーネンベルク〟の事なのかな？」

「ええ、そうよ」

「だったら、何故！」

「何故、スティン・ド・マーニュと密会していたか？」

「そうだ！」

「デニスって、考え方が普通じゃないのに、意外に頭が固いのね？」

「？？？」

ダメね、これは頭が固いと言うか、あの娘を神聖化しすぎている事の弊害なのかな？

「さっき私は言ったよね？　エレオノールにとっては貴方を含めて他の男の子なんて眼中に無いのよ」

「まさか・・・、ミスタ・マーニュが、ラスティン・ド・レーネン

ベルクなのか？」

「そう、エレオノールから直接聞いたんだから間違いないわよ」

「どう考えても貴族のやる事じゃないぞ！　名前ももっと捻った物を使うのが普通じゃないか！」

さっきまで気付かなかった割には、随分な言い様よね。私も同意見だけどね。

「彼なりの都合があったんじゃない？　ああ、名前に関しては、あの娘も”スティン兄様”なんて呼んでいるみたいだから、わざとその名前を使ったんじゃないかしら」

「・・・」

おお、デニスなりに何か考えているみたいね。こう言う表情をずーっとしていてくれたらって思うのは、不謹慎かしら？

外伝十八話　学生時代（後編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

外伝十九話　先手（前書き）

外伝十九話ＵＰします。

外伝十九話　先手

あの男が！　ミスタ・マーニュがラスティン・ド・レーネンベルクだって？　そうすると、僕があの方に言ったことは、”僕と浮気をしませんか？”と言ったのと同じになってしまうじゃないか！

僕の胸の中には、あの男への怒りが膨らみ始めたぞ！　あいつが身分を偽ったせいで、あの方が泣く羽目になったんじゃないか！確かに僕にも・・・、ああ、これは嫉妬なんだろうな、あの方の美しさが僕を惑わせるのだ。あの方の姿を思い浮かべると、今でも・・・、うん・・・？　何故だ、何故あの方の横に奴の姿が思い浮かんでしまうんだ！

「デニス、なんか悩んでるみたいだけど、貴方じゃ、魔法の腕も、家柄も、顔はまあ好みだから別としても、一緒に居た期間とかも全く勝ち目は無かったんじゃないの？」

「確かに、奴がレーネンベルク公爵家の嫡男なら、そう、顔以外は・・・」

「どうしたの、顔だけは褒めてあげたのに？」

クリオが全然慰めになっていない事を言ってきたけど、そうじゃないんだ！　奴が”ラスティン・ド・レーネンベルク”なら、得意な系統は僕と同じ”土”なはずだ。だけど、僕は奴が土系統の魔法を使う所を見たどころか、”土系統は使えない”とさえ聞いた記憶があるぞ？

「僕は、”土系統”を使わないあの男に一度も勝てなかったってい

うことか！」

「え！？　そうだったの？　でも、土系統が得意なら、弱点も分かっていたんじゃないかしら？　ねえ、聞いてる？」

「ふっふっふっ・・・」

「あ、妙な所で火が点いちゃったみたい、まあ、これはこれで良いかな・・・」

クリオが妙な事を言っているが、僕の胸の中では、あの男に何時か後悔させてやると言う気持ちで一杯だった。あまり復讐なんていうのは僕には向かない気がするが、何だか出来る気がするぞ！

＝＝＝

父の副官をしながら、来るべき日を虎視眈々と待っていたのだけど、肝心のあの男に会う機会が無かった。あの男に直接危害を加えたり、立場を悪くするのはあの方も望まないだろうから、言葉で痛めつける事に決めたんだけど、立場上父の傍を簡単に離れる訳にはいかなかったんだ。

その間に、信じられない事だが、あの男は戦功を、それも攻め込んできたゲルマニア軍を追い返し、更には逆にゲルマニアまで攻め込み領地１つを占領すると言う出来すぎな戦功を上げてしまった。（おのれ、ラスティン・ド・レーネンベルク！　僕がまだ１副官に過ぎないと言うのに！　おかしい、現実が明らかにおかしいんだ）

何だか、怪しげな名声を得たあの男に会う事が出来たのはそれからしばらく経った、とあるパーティーでの事だったんだけど。予想

外の出会いだった。それは、父もそして僕も大嫌いな、トリスティン陸軍元帥ナラン・ド・メルレ”殿”の勇退パーティー会場だったんだ。直接話す機会が無いまま、どう言う経緯かナラン・ド・メルレとラスティン・ド・レーネンベルクが会話を始めて、何故か主役のはずのナラン・ド・メルレ元・元帥の方が、会場から逃げ出したのには驚いた。（共倒れになれとか姑息な事は考えていなかったよ、勿論さ！）

それと僕が驚いたのは、あの男と因縁が深いあの若い男はゴドー伯爵の次男だと思ったんだが、彼からの憎しみの視線をまるで気にしていないあの男の態度だったんだ。まあ、変わった奴だとは思っていたが、ここまで無神経な人間だとは思わなかった。殆どの同性を意識する事に無い僕でも、自分の手で学院を追い出した人間からあんな目で見られたら、全く無視と言うわけには行かないしね。

おっと、いつも冷静な僕らしくもなかったかな？　ん？いつの間にか、あの男が父と会話を始めているぞ？

「後ろにいらっしゃるのは、元帥のご子息でしょうか？」

「おお、紹介が遅れましたな、息子のデニスです。私の副官の様な事をしてもらっております」

「中々、優秀なご子息だと聞き及んでいます」

「ラスティン殿にそう言っていただけると、些か恥ずかしいですな」

「謙遜をなさらなくても、魔法学院を次席で卒業されたとか。私は、代官の務めが忙しく学院には通えなかったので羨ましいと思いますよ」

「デニス、何をしている、ラスティン殿に挨拶はどうした？」

はっ！　憎しみのあまり、礼を逸してしまった。またしても、僕らしくない、これも全てこの男のせいなんだ！　怒鳴り付けたい気持ちを抑えて、何とか自分でも白々しいと思う自己紹介が出来た。

「デニス・ド・グラモンと申します」

「ラスティン・ド・レーネンベルクです。よろしくお願いします、デニス殿」

くっ、本当にこの男の無神経さは腹が立つな。

「元帥閣下、私がゲルマニアに逆侵攻する際に、作戦を立案する部下に要求した事が１つあります、それは何かお分かりになりますか？」

「むぅ」

「デニス殿は、いかがですか？」

「もしかして、味方の犠牲をなるべく出さない様にでしょうか？」

父に対してこの態度で、僕にまで！　ミスタ・マーニュは甘い男だった筈だから、こんな事を言うんじゃないかと思って答えてみたのだが。

「ほぼ正解です。私は、”敵も味方も出来るだけ犠牲者を出さない作戦”を立案するように要求しました」

「「はぁ？」」

父に対して、自分の意見を言うこの男の神経を本気で疑いたくなったけど、父に言えなかった事を堂々と言うこの男が、羨ましくはないぞ？　父は、知り合いに挨拶に向かったけど、僕はこの男に、報いを与える為にその場に残ったのだ。

「デニス、君の学院での活躍は弟から聞いているよ。何でも今は、愚弟と君の弟とワルド子爵の息子で、”守護者”を盛り上げているそうじゃないか？」

「やっぱり僕を騙したんだな、ミスタ・マーニュ！」

あ、つい口癖で、偽名の方を言ってしまったな。まあ、いいさ、この男が驚く顔がもう直ぐ見られるんだからな。

「スティン・ド・マーニュは、魔法学院卒業と同時に居なくなったんだ。彼が、エレオノールと会う事は永遠に無い。誓いは果たされたと言う訳だけど？」

「くっ、詭弁を！」

こうなったら、言ってやるさ、”貴方が、偽名などを使ったせいで、あの方が涙を流す羽目になったんだ”と！

「確かに詭弁だね、たが君は、エレオノールが僕という婚約者を持ちながら、他の男性と陰で付き合うような女性と決め付けた事になるんだが、その点はどうなんだい？」

「！！」

あれ？　おかしいな、こう言われると、僕のキメ台詞が・・・、あれ？　しまった、もったいぶらずにさっさと言ってしまえば良かった～。

「デニス、君もしかして」

「黙れ！　貴方が”スティン・ド・マーニュ”だろうが、”ラスティン・ド・レーネンベルク”だろうが構わない！　今、ここで誓え！　2度とエレオノール様に涙を流させないと！」

この男は、僕に追い討ちまでかけてきたのだ、僕は子供のように、こんな事しか言えなかったのだが、この男の返事はやっぱりおかしかった。

「デニス、ありがとう！」

「逃げるのか、誓えよ！」

何故か礼を言われたのに、奴は僕の前から走り去ってしまったのだ、全く訳の分からない男だね。あの方も、あんな男の何処が良いのだろうか？

だけど、本当の事件は翌々日に起こったんだ、元々気に入らないパーティーに父と僕が顔を出す事になった理由は、国王陛下から急な呼び出しで、王都の別宅に滞在していたからだったんだ。（何時もなら、あの元・元帥の出るパーティーなどには、領地で急用が出来たといって断っていたんだからね）

詳細は不明なんだけど、陛下が倒れられたという噂は聞いていた

から、その絡みで何か重大な発表が行われるのだろうと父が言っていたから、そうなんだろうと思っていたけど、こんな事が起こるとは思っていなかった。あの男が、”副王”などになるなんて、絶対に現実の方がおかしいのだ！

僕は父の後ろで、あの男の晴れ舞台を見ているしか出来なかった。あの方が、更に遠くへ行ってしまった無力感がまたもや僕の繊細なハートを冷たくしてしまったのだ。

＝＝＝

「へぇ～、あの、”ミスタ・マーニュ”が副王様にね～」

「そうなんだよ、傷心の僕を慰めてくれるかい？」

「そう、あの娘も大変ね～」

「何言ってるんだ、あの方はこれで目出度く副王妃様なんだよ？僕の手の届かない所に行ってしまったんだ」

何故か分からないが、クリオが額に指を当てている、頭痛だろうか？　健康が自慢だった筈なんだけど。

「デニス、貴方は絶対に”王様”になったりしないでね？」

「僕の当面の目的は、父に認められる立派な軍人になる事さ、だけど、英雄になって、陛下の養子にでもなれば”王”になったりするかも知れないよ！」

「ああ、そんな心配必要なかったわね」

「き・み・は、婚約者の出世を望まないのか！」

全く、こんな女性が婚約者なんて、何がいけなかったんだろう？
まあ、意識して、婚約の事は考え無い様にしているんだけどね。

「そりゃあ、出世して欲しいけど、命を狙われる事も多くなるんじゃない？」

「戦場なら、どんな事が起こるか分からないからね」

「ダメ、絶対にダメ！　デニスは私の所に帰ってこなくちゃダメ！」

クリオも可愛いところがあるじゃないか？　何故か必要性を感じてしまって、クリオを抱きしめて、優しく頭を撫でてあげることになった。意外と悪くない経験だったのだけは、クリオの名誉の為に言っておこう。

外伝十九話　先手（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

今回は短いですが、替わりに次回は長いです。上手く話が切れなくってこうなりました。

デニスの魂の叫びは結構重要なんですよね。

２０１１／９／１１
長男－＜次男
に修正

外伝二十話　模擬戦（前書き）

外伝二十話ＵＰします。

外伝二十話　模擬戦

そんな事があってから、しばらく時間が流れたんだけど、順調な僕の出世街道に邪魔が入った。またしてもあの男の差し金らしいのだが、本当に嫌味な男だ。もしかして、僕の才能に嫉妬していたりするんだろうか？

「元帥閣下、副王殿下の紹介状を持った男性が、面会を求めていますが？」

「こんな所にかね？」

「はい、軍の演習場の周りを警備している兵が見つけて、事情が事情だけに私の所まで情報が上がって来ました」

「そうか・・・、今なら構わないだろう、追い返すわけにはいかないから連れて来てくれ」

「はい」

僕の先輩に当たる副官と秘書役を務める女性マリテ女史（有能なのだが、怒らせると怖い女性なのだ）の報告から話は始まった。父の気まぐれに驚きながら、あの男の関係者と言うのに興味が湧いたんだけど、後で考えれば父に諫言すべきだったんだろうね？　やってきた男は、ただの平民に見えた、どちらかと言うと不真面目そうな雰囲気をもっている気がしたけど、ここに相応しい人間には見えないね？

「グラモン元帥閣下、急な願いを聞き入れていただいて感謝いたし

ます」

「副王殿下の紹介状を持っていたそうだが？」

「はっ、私は副王殿下の下で軍事に携わっております」

一応、丁寧な口調なんだけど、何故か真面目さに欠けると感じるのはどう言う事だろうか？

「ほう、ではもしかして、殿下がゲルマニアに侵攻した際に、ゲルマニアに対して損害を減らす様に命令されたのは、君なのかな？」

「はい、殿下、当時はラスティン様とお呼びしていましたが、あの方も無茶な命令をと困らされた物です」

何だか、怪しい雲行きだよな、”あの男”の配下にしては、”あの男”に対する敬意の様な物を感じさせないというのは、どうなっているんだ？

「だが、君はそれを実行して見せた訳だな？」

「その通りではありますが、”レーネンベルク魔法兵団”の力があってこそ出来た事だと言う事は、閣下にもお分かりでしょう？」

言っている事は、穏当なのだが、その口調と態度が、この男の自信を覗わせている。”あの男”の関係者だと言う事を除いても、気に入らない男だな、僕は常々この世から僕以外の男性は居なくなるべきだと思っているけど、こいつも真っ先に居なくなって欲しいタイプの様だね。

「失礼だが、君の名前を教えてくれるかな？」

「これは、こちらこそ失礼しました。家名を持たない平民ですので、レーネンベルクのアンセルムと名乗っております」

「そうか、では、アンセルム君。ここが何処か知っているかね？」

「はい、王軍の演習場で、今は年に一度の大規模な演習が行われているのも存じております。是非一度、陸軍の”実力”を見てみたいと思いまして、ご迷惑になる事を承知でやって来てしまいました」

「ほう、”実力”かね・・・」

ああ、こいつは父を怒らせてしまったぞ。どうなっても知らないからな。

「アンセルム君、良かったら、演習に参加してみないかね？　今から若手の士官達の指揮能力を見るための、模擬戦なんだが」

「そう言われましても、私は兵士には向いていませんので」

「無論、仕官として振舞ってもらって構わないよ？」

「父上！　あ、いや、閣下、平民を仕官などと」

「構わんさ、殿下の軍師殿の実力は是非拝見したいからな」

「それならば、僕が初戦の相手を！」

そう言う話なら、一口乗らせてもらおうか、その鼻っ柱を叩き折

ってやるぞ！

「アンセルム君、構わんかね？」

「勿論です、閣下」

「デニス、負けは許さんぞ！」

父が、そう言ってきたが、まあ、慣れない初戦では僕の勝ちは動かないだろうね。

僕が、演習場内を案内しながら、模擬戦の会場まで案内する事になった。まあ、アンセルムと言う奴の性格を知るのに役に立つからと思い、引き受けたんだが、良く分からない奴だった。

仕官の模擬戦と言うのは、簡単に言えば一種のゲームの様な物なんだけど、チェスなどとは違い実際に人を動かすんだよ、戦場となる場所も平坦では無いから、結構面白い物なんだ。自慢では無いが、同期の中では私が一番成績優秀なのだよ、ふふん！（まあ、未だに、マリテ女史には一勝も出来ていないんだが、まあ、直ぐに勝ち越してみせるさ！）

・兵士１人を１０人と扱う
（小隊規模と言う訳だね、まあ、時間短縮の目的もある訳なんだけどね）
・兵士１００人が１０人で１班を構成して全部で１０班を作る
（行動は中隊単位で行う事になるんだ。擬似的に１大隊を指揮する事になる訳だよ）
・１０班にそれぞれ、１人の伝令が付き、１人の指揮官１０人の伝令を通じて指揮をとる

（伝令にどんな指示を与えるかで、戦況は全く変わってくるのは、分かるよね？）

・鐘の合図に両軍が同時に動き出し、接触した時に戦闘開始となり、接触の仕方で双方の被害が決定される

（この辺りが模擬戦の醍醐味だね、背後から襲う事が出来れば、相手の半分に被害を与えられるんだけど、そう上手く行くものではないんだ）

・次に鐘が鳴った時に兵士は行動を止め、再度伝令からの指示が出せる

（この時は指揮官はかなり忙しいんだよね、時には指示が行き届かない事もあるんだ）

・これを３０回繰り返して、被害の少ない方がその１戦の勝者となる

（相手を全滅させる事は殆ど無いらしいよ）

・上記の模擬戦を兵士はそのままで、戦場を変えて３回繰り返し、２勝した指揮官が勝ちとなる

（この戦場の設定で大きく勝率が変わってくるのは、事実なんだよね）

模擬戦の概要はこんな感じなんだけど、指揮してみるとかなり難しいんだよね。全滅する事があるのは初心者だけなんだけど、よほど無茶をしなければ、全滅はしない物なのだよ。指揮官に求められるのは、地形を見て、相手の指揮官の動きを予想しながら、自軍の兵を上手く相手の兵にぶつけるかという手腕なんだな。

実際指揮してみると分かるんだけど、伝令や兵士にも錬度があって中々思った通りに動いてくれない事もあるんだよね。それでも僕がこの模擬戦に強いは、発想力の勝利だと思うんだけど、対戦相手は大抵”君の指揮は良く分からない！”なんて言う物だから、笑ってしまうね。（負け惜しみに、常識的な用兵をしろ何て言い出す者までいる始末さ）

アンセルムと言う奴は、一応真剣に僕の話を聞いていたんだけど、

「良く分かりましたよ、副官殿」

とだけ言って、決められた場所に歩いて行ってしまった。今は、敵になるのだが、本当に言っただけで理解出来たのかな？

＝＝＝

最初の戦場に設定された場所を見て僕は自分の勝利を確信したね。僕の勝利の為に用意されたような地形だと思う。戦場自体の広さは３００メイル×５００メイルの広さで縄で範囲が示されているんだけど、小さな山や川や沼が作られていて意外に戦術を駆使する余地があったりするんだ。（作られた地形に適当に縄を張って戦場と決めると言った方が分かり易いかな？）

今回の戦場は、敵陣地側に山と川があり敵軍の進軍の妨げになり、迎え撃つのにも十分な広さが無いから、こちらは敵軍の進軍を待ち受けて、袋叩きにするというのが一般的な戦術だね。だけど、僕の場合は、敢えて自軍を敵陣に突っ込ませるんだよ。敵が山を回りこむ形で遊兵を作れば、数で押し勝つ事が出来るし、迎え撃つには広さが足りない、僕と同様な戦術をとれば、普通に引き分け辺りが関の山なんだ。何より、簡潔な指示の方が兵も動きやすいんだよね。

（単純と簡潔の違いだよ！）

最初の指示を出し終わり、最初の鐘が鳴った僕の兵士達が一斉に敵陣へ向かって駆け出したが、敵陣では目立った動きは無かった様だね。停止の鐘がなり全軍の動きが止まったけど、こちらはかなりの距離を稼いだ、これで負けはまずなくなったね。アンセルムという奴が、戦いに慣れた指揮官なら、最初に押し込まれる危険を回避する為に、自軍を広い場所まで進めるはずなんだけど、その動きも

無かったから、拍子抜けだったね。
鐘が鳴る度に戦況は変化して行ったけど、先手を取った僕の勝ちは動かなかったんだよ！　はっはっはっ！　ちなみに、残った兵士数は、６０対３０さ、ふっ！

２戦目は、全く逆の立場になり、僕の善戦も空しく敗北を喫してしまったんだが、これは仕方が無いんだよ。まあ、次で勝てば問題無いしね。
そして3戦目は、何も障害物がない広場が戦場になったんだけど、僕が何とか勝利を拾う事が出来た感じだった。４６対４３は結構僅差だから、下手をしていれば負けていたかも知れない。どう言う訳か、奴の兵士達は、１戦目より明らかに動きが良かったから、勝てたのは僕の才能のお陰なんだろうね。

「結構やるじゃないか、アンセルム君」

「副官殿も中々でしたよ、良い指揮官になって下さい」

ふん、僕の才能を思い知ったらしいな！　しかし、負けたくせに嫌味なくらい飄々としているな？　さすがは”あの男”の関係者だね。

「まだ、続ける気かな？」

「はい、ご迷惑でなければ、他の仕官の方とも戦ってみたいですね」

「分かった、手配しよう」

僕はそれっきり、アンセルムという男に興味を失って、自分の次

の模擬戦に集中する事にしたのさ。まあ、僕ほどの軍人なら、集中なんか必要ないんだけどね。

＝＝＝

予定した４人との模擬戦を終えて、父の所に戻ると、戦績を報告する事にした。当然だけど、４戦全勝だったのだよ！

「そうか、良くやったな、明日は若手だけではなく、全ての仕官との対戦だからそこで実力を示せよ」

「はい、お任せ下さい。それで、あのアンセルムという男はどうでした？」

「２－１、１－２、２－１、１－２で、２勝２敗だな」

「口ほどにも無いですね？」

「・・・、明日は荒れるかもしれないな」

「はい？」

「いいや、何でもない」

＝＝＝

そして翌日になったけど、僕の快進撃は止まらなかったね！　何と！何とだよ！　あの、マリテ女史にも最終戦で対戦して、２－１で勝つ事が出来たんだよ！　まあ、女史も今日は精彩を欠いていたから次回は苦戦しそうなんだけどね。結局全勝した僕は、意気込ん

で父の所へ報告に行ったんだけど。父は僕の事に気付かないまま、マリテ女史から模擬戦の状況を聞いていたんだ。

途中からしか聞けなかったから、良く分からなかったんだけど、マリテ女史が完全に押され気味だったようだ。そのまま戦況は進み最後には、本当に信じられない事だけど、マリテ女史の軍が全滅してしまったんだ。聞いた限りでは、女史の戦術にこれといった失策は無かったから、多分最初に何か間違えたんだろうね。

「今日は調子が悪そうだったから、仕方が無いですよ」

「いいえ、そう言う訳では無かったんですよ」

「え？　僕に負けてしまう位なんだから、体調でも悪かったんじゃないんですか？」

「それはそうでしょう、模擬戦と言っても自軍が全滅させられれば動揺もします」

ああ、”あの日”とかじゃ無かったんだな。クリオと一緒に住むようになって、そう言う日が女性にある事を始めて知ったから、良く分からないが違うようだね。

「面白いじゃないか、あの男！」

「あ！　父上、何処に？」

父は僕なんかに見向きもせずに何処かに行ってしまった。何なんだ、この状況は？

「先輩、それで相手は誰だったんですか？」

「嫌な事を聞くのね、婚約者の方の苦労が忍ばれるわ」

「クリオの事は、どうでも良いんです！」

「副王殿下の軍師様よ」

「はあ？」

「結果は２－１で勝ち越したんだけど、その１敗が全滅じゃね・・・」

１敗が全滅では確かに、喜べないだろうね。あの男がこの時だけそんなに強かったのは何か仕掛けがあるんじゃないんだろうか？

「それであの男の今日の戦績はどうなんです？」

「２－１、１－２、２－１、１－２、だったそうよ」

２勝１敗、１勝２敗の繰り返しか、星としては五分だよな？

「別にそんなに強くは・・・？」

「貴方にも分かった？」

「昨日も同じ戦績でしたよね？」

「そう、私達も随分なめられた物ね！」

「まさか、勝敗を調整していたのか！」

「あの軍師殿が、模擬戦が終わって何と言ったと思う？」

女史の表情を見れば、随分失礼な事を言ったんだろうな、怖い物知らずだね。ここは僕としても賢く沈黙で応じようかな。

「”あんたの指揮が良かったから、つい本気でやっちまった、済まないね、おばさん”よ！」

「ぶっ！」

「デニス君、何か？」

「い、いえ、何でもありません、先生、それにしても失礼な男ですね！」

「・・・、まあ良いわ。私を女だと思って手を抜く様な男よりはマシでしょうからね」

ふう、何とか切り抜けたみたいだね。はて、何だか納得行かない気がするんだけどなんだ？

「貴方だって、手を抜かれた可能性があるのに気付いている？」

「まさか！？」

「そんな風には見えなかった？　私の場合、彼は初戦は捨てていたわね、自分が指揮する兵の錬度を見ていたのかも知れないわ」

「え？」

「2戦目は、どう考えても私が有利な地形だったから、自然な形で私が勝ったわね、そのままなら疑いもしなかったでしょうね」

「3戦目はどうでした？」

「そして3戦目も、私に有利な地形だったのよね。これはくじで決めているんだから偶然だったんでしょうね。そして彼は私に牙をむいたという訳ね」

何故か口を挟む事が出来ず、マリテ女史の話を聞くだけになってしまった。確かに思い当たる節があるんだ。

「私の勝ちは決まっていたから、基本的に守備に重きを置いたんだけど、それは完全に読まれていたのよね。と言うより、私の指揮自体が読まれていた気がする、だって彼は2回に1度か、3回に1度しか伝令を出さなかったんだからね」

「普通、毎回伝令は出しますよ！」

「そうね、だけど、”鐘”の間隔は必ずしも一定では無いでしょう？　ゆっくりな時は大丈夫だけど、早い時は最初の方針にしたがって兵士が動くのは分かっているわよね？　特に君はね？」

「まあ、そう言う所は僕にもあります。敵陣に近付けば、それだけ伝令が間に合わない可能性がありますからね。実戦ならもっと状況は悪いでしょう？」

「そうね、前の2戦で私の癖とかを掴まれてしまったのかしら、面白い様に彼の部隊の攻撃は私の部隊を削っていったわね、その辺り

からは知っているんじゃない？」

「はい・・・」

「でも、意外と彼も貴方には苦労したのかも知れないわね？」

女史が妙な事を言い出したぞ？

「はぁ？」

「だって、貴方の用兵は無茶苦茶だし」

ふっ！　女史のような優秀な仕官でも私の華麗な戦術は、理解できないらしいな。だけど、逆にこんな言い方をさせると、奴が本気だったのか知りたくなるものなんだな～？

「もう一度模擬戦を申し込みたいですね」

「それは無意味じゃないかしら？　本気でやる積りなら、最初から本気でやっているでしょうからね」

「どういう意味ですか？」

「彼は、本当に我が軍の”実力”を見に来たんでしょうね。紹介状の件から考えれば、副王殿下に命じられたと考えるのが自然でしょう。まあ、本気を出すなとか、面倒を起すなって命令されているんでしょうね」

「くっ！」

「ちょっと、デニス君！　何処に行くの？」

そんなの決まっているさ、あの男の所だ！

＝＝＝

「ふーん、それで、アンセルムという人と戦う事は出来たの？」

「それが、”あの男”も奴の行き先を知らないなんて言うんだよ」

「そう、副王様も大変なのね」

クリオの反応はイマイチだったけど、それが逆に僕を熱くさせたんだな。

「まあ、2人とも僕の敵には違いないから、何時かぎゃふんと言わせてみせるさ！」

「デニス、副王殿下を敵なんって言っちゃだめよ？」

「何故だい、僕が奴に何度」

「デニス！　ふぅ、あのねデニス、彼を敵に回すって事は、”あの娘”も敵にするって言う事よ？」

「むっ！　それは、確かに不本意じゃないね。今回は、諦める事にするよ。でも何時かは、絶対に」

くっ！　あの方の後ろに隠れるとはなんて卑怯な！　でも、最近何だか、クリオの元気が無い気がするのが気になるね。今晩の食事

もあまり食べなかったみたいだしね。

「クリオ、1つ聞いてもいいかな？」

「デニスらしくもないわね、勿論よ」

「君もしかして、体調が悪いんじゃないかな？」

「・・・」

クリオが、不自然に俯いてしまった。何か身体や精神に負担がかかっていたんだろうか？

「ま、まさか、何かの病気なのか！！」

「・・・」

「医者には診せたのかい？」

「・・・」

「クリオ、何とか言ってくれ！」

「・・・、お義父様の伝で、有名な水メイジに診てもらったわ」

「それで？」

思わず息を飲んでしまったけど、仕方が無い事じゃないか？　婚約者が不治の病に罹っているなんてなったら、僕はどうしたら良いんだ！

「治療の方法は無いって・・・」

「そっ・・・、そんな馬鹿な！　何故、君がそんな目に遭わないといけないんだ！」

「デニス、私からお願いがあるんだけど？」

「なんだい？　僕に出来る事なら、何でもしてあげるよ！」

何てことだ、僕が早く彼女の異常に気付いていれば！

「短い間だったけど、デニスの婚約者になれて良かった。でも、一度で良いから、結婚式をやってみたかったの」

「なんだ、そんな事か、明日にでも手配をするよ」

「そんな、悪いわ」

「何を言ってるんだ、僕達は婚約者同士なんだよ、結婚して何が悪いんだ！」

「本当？　本当に私と結婚してくれるの？」

「勿論さ！　なるべく早い方が良いね、直ぐに式の準備を始めるよ」

「うっ！」

クリオが吐き気をおぼえたのか、近くの容器にあげてしまった。

苦しそうにするクリオの背中をさすってあげる事しか僕には出来な

かったんだ。何故こんな事になってしまったんだろう、僕の大切なクリオが、この世を去ってしまう事になるなんて！

＝＝＝

僕は父を脅して、母に頼み込んで、何とか式の準備を進めて行った。クリオと一緒にいる僕はあれから何回か、クリオの調子が悪くなる場面に遭遇してしまった。治療系の魔法は得意では無い僕だけど、懸命に呪文を唱えると、縋るように僕の手を掴むクリオの行動が、哀れさを感じさせた。クリオには、僕しかいないんだという事が、本当に僕の心を冷たくしてしまう。

グラモン家の力を最大限に利用して、結婚式を挙げるのに要したのは3週間ほどだったんだけど、式の前日一緒のベッドに横たわりながら、僕はクリオにこう語りかけたんだ。

「クリオ、今の幸せが何時まで続くか分からないけど、その日まで、決して君に僕を選んだことを後悔させないよ」

「ホント？　ホントに？」

「勿論さ！」

「私、貴方を選んで良かった・・・」

「泣かないでおくれ、君は僕の太陽なんだから」

「デニス、そこまで言ってくれて本当に嬉しい！　でも、1つだけ心残りがあるの？」

クリオが言う事は予想できたけど、自分の本心を話す積りだった。

「デニスは、もし、私とエレオノールにのどちらかしか選べないとしたら、どっちを選ぶ」

「そうだね、多分1ヵ月前までなら、あの方を選んだかも知れない。だけど、今は君だけだよ！」

クリオが僕の答えを聞いて、嬉しさのあまり、僕の肩辺りに顔を埋める様にして、ひっそり泣き出してしまったんだ。僕は、ただ優しく彼女の肩を抱く事しか出来なかった。僕は何て無力なんだ！

そして、翌日伯爵領を挙げての結婚式が行われたんだ。クリオの花嫁姿は、想像以上に可憐で、僕は彼女を妻に出来る事の喜びと、そして直ぐに失ってしまう事に悲しみに耐える事しか出来なかった。

＝＝＝

そして、式から1月ほどが経ったんだけど、何故かクリオは日に日に元気になって行った。これはもしかして、2人の愛の力が奇跡を起したのではと思ったんだけど・・・？

「クリオ、女性にこれを聞くのは失礼にあたるかも知れないんだけど？」

「貴方が、そんな事を気にするなんて随分と進歩したものね。私の教育が良かったのかしら？」

こんな調子なんだ、何かおかしいのは分かるんだけど、それが何か分からないんだよね？

「君って、なんだか元気になっていないかい？　それに、その、なんだか太った？」

「デニス、女性に太ったなんて聞いちゃダメ！　そうね、”ふくよか”になったって聞くのが正しいかしらね」

はっきり言って、太ったのとふくよかになったの区別は僕には一生無理の様な気がするよ。

外伝二十話　模擬戦（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

外伝二十一話　誰が誰に捕まったのか？（前書き）

外伝二十一話ＵＰします。

外伝二十一話　誰が誰に捕まったのか？

デニスも随分進歩したものね、まだ私の変化に気付かないと思っていたんだけど。でも、気付いてくれて本当に嬉しいという面もあるのよね。

＝＝＝

数ヶ月前から、自分が何だか変な気分になる事が多いって言う事は気付いていたんだ。それに、少し前までは、本当に体調も良くなかったのよね。つい、エレオノールの手紙にそんな話を書いてしまったら、この娘は1週間ほどしか経っていないのに、私の所を訪ねて来てくれたのよね。

「エレオノール、良く来てくれたわね」

「ええ、親友が病気かもと聞いたら、居ても立ってもいられないもの」

「ああ、その件なんだけど、その何ていうか・・・」

女同士でもやっぱり言い難いので、少し口篭っていると、逆にこの娘に心配させてしまったらしい。

「まさか、酷い病気なの？　良かったら、良い水メイジを紹介するわよ？」

「ありがとう、でもね、その・・・」

えーい、女は度胸よ、別に恥ずかしい事でもないし！

「赤ちゃんが出来ちゃったみたいなの・・・」

「えっ？」

「出来ちゃったのよ」

うん、お義母様に言われるまで気付かなかったのが不思議な位だったのよね。

「本当なのね、おめでとう、クリオ」

「エレオノール、何でお腹を撫でるの？　見ての通り、まだ目立たないわよ」

「ごめんなさい、つい癖で・・・」

妙な癖があるのね、でもそう言ったっきり考え込んでしまった、エレオノールの様子が気になったのよね。でも、それより気になったのは、この娘の手が何故か、お腹辺りから段々と上に上がって来る事なんだよね。なすがままにされていると、エレオノールが私の胸をムニムニと揉みだしたの！

「あの、エレオノール、何してるの？」

「ねえ、クリオ？　私って女性として魅力無いかな？」

「はぁ？　貴女に魅力が無いんだったら、私なんかどうするのよ！」

確かにエレオノールの胸は控えめだけど、それ以外で私がエレオノールに女性として勝てる所ってないよね？

「正直、貴女の方が魅力的だと思うわ。そうじゃな無ければ、デニスに私を襲わせるのにあんな苦労はしなかったわよ」

「ぜ、是非！　その襲わせるって言う所を詳しく教えて！」

この娘らしくない、熱心さで妙な事を聞いてきたわね。”貴女には必要ないんじゃない？”って聞こうと思ったけど、その前にその可能性に気付いてしまった。まさか、でも、うーん、これはやっぱり本人に聞いてみるしかないよね？

「立ち入った事を聞くけど、貴女達ってまだなの？」

優しく聞いた積りだったけど、エレオノールの表情は明らかに暗くなっちゃったんだ。詳しく話を聞くと、どうやら本当らしいのよね、しかし、どういうことだろう？　もし、デニスが”スティン兄様”の立場だったら、速攻で襲ってもう子供の１０人くらいって、これは言い過ぎね。

良い所まで行くと言う話を信じるならば、”スティン兄様”が、この娘の身体に興味が無いとは考えられないのよね？

「もしかして、彼は不能なのかな？」

「ふのー？」

ああ、この娘には理解出来なかったみたいね、学院でも女の子達の間では、結構際どい話が出ていたけど”不能”なんて話題はさすがに出なかったからね。（私が知っているのは、勿論、躊躇うデニ

スを挑発する為に覚えたんだけど、使わないで済んだよ？）

もう１つ考えられるのは、”スティン兄様”が、本当にこの娘を大事にしていて、正式に結婚が成立するまで我慢しているとかかしらね。

「不能の件は忘れなさい。もしかしたら、貴女が大切だから、その日まで我慢しているのかも知れないわよ？」

「その日？」

「そう、その日。もう直ぐなんでしょう、貴女達の結婚式は？」

「う、うん」

「あっ！」

「な、何？」

「ちょっと思ったんだけど、その日まで”彼”が、我慢しているとしたら、その日の夜は大変かもね」

「？？？」

「カマトトぶっちゃって、この娘は。その日の夜はきっと激しい事になるって言ってるのよ」

「！！！！！！！！！！！！」

あ！真っ赤になったまでは良いんだけど、何だか目が潤んでいるわよこの娘、もしかしてそう言うのが好きだったりするんだろうか

？（デニスはその時も紳士的だったわよ？）

＝＝＝

まあ、友人の意外な一面を知ってしまったんだけど、少し話題を変えることにしてみた。

「貴女の結婚式は、豪華な物になるんでしょうね？」

「私は、どちらでもいいわよ。綺麗なドレスを着て兄様と一緒に居られれば。あ、この間、兄様の友人の結婚式があって、出席したんだけど、とっても良かったわ」

話を聞くと、結構地味な式だったみたいだけど、少しだけ羨ましいと感じてしまったのよね。

「クリオ、貴女達は何時式を挙げるの？」

「えっ？」

「やっぱり赤ちゃんが生まれてからなのかしら？」

うん、とりあえず外堀を埋める事に夢中でそれを考えていなかったわね。出来れば、式の話はデニスの方から話を出して欲しいんだけど、絶対にありえないわね！

結局、王立魔法研究所の方で用事があるというエレオノールは一泊だけして、王都へ帰っていってしまったけど、その頃には私の中で戦略が決まっていたわ。”つわり”が酷い（話を聞くと母もそうだったらしい）のを利用して、”不治の病に罹ってしまった婚約者”作戦で行くとしましょうか？

この作戦は”つわり”が治まってしまえば、使えなくて時間制限付きだけど、義理の両親にも話を通して、ギーシュ君も上手く使わせてもらおうかな？

＝＝＝

「君って、なんだか元気になっていないかい？　それに、その、なんだか太った？」

何とか予定通り、結婚式を挙げる事に成功したんだけど、つわりは治まってしまったので、わざと食事量を減らすのは大変だったんだよね。お腹の子供にも良くないし、式が終わったら、いつも以上に食べる事にしたんだけど、そこでこの台詞だったりするのよね。

「デニス、女性に太ったなんて聞いちゃダメ！　そうね、”ふくよか”になったって聞くのが正しいかしらね」

全く、正式に結婚してもデニスはデニスよね？

「ブリミル様が、私達に奇跡を起こしてくれたのよ」

「クリオ、僕達は正式に夫婦になったんだよ？」

だから、隠し事は止めてくれって言いたいのは分かるんだけど。デニスの場合は隠し事をするのは不可能なんだから、これは私に一方的に不利な話よね？　でも、そろそろ潮時でしょうね。

「貴方、手を出して」

「誤魔化されないぞ！」

「良いから手を出して！」

私が強く言うと、デニスが折れてくれた、この辺りはデニスらしいし、これから話す事を聞いても、デニスは怒らないのもわかっているんだ。ただ、心から喜んでくれるかは、少し自信がないんだけどね。

デニスがちょっとむくれて手を差し出してきたけど、その手をがっしっと掴んで、自分のお腹に持って行った。結局、それはデニスの鈍さを証明しただけだった。（はぁ、ここまでしたら普通気付くよね？）

「本当に分からないの、ア・ナ・タ」

「何がやりたいのかはっきり言ってくれよ！」

「もう、全く困ったものね、貴方のパパは」

そう言って、デニスの反応を覗ってみると、完全に呆然自失と言う感じだ。握ったままの手を更に引き寄せて、デニスの頭を掴まえて強引の彼の耳を私のお腹に押し当ててみた。私より力が強いデニスがなされるがままだったのは、ちょっとショックだったんだけどね。

そうしていると、デニスの身体が小刻みに震えだしたの。まさか怒ったんじゃないよね？

「出来した！　これで我が家も安泰だ！」

急に顔を上げたと思ったら、私を抱きかかえる様にして持ち上げると大声でこう言ってくれた、私の旦那様だった。うん、やっぱり

デニスはこうじゃなきゃね！

「あのね、男の子か女の子か分からないのよ？」

エレオノールによると、予め分かる方法があるらしいんだけど、生まれる時まで分からない方が良い事もあると思う。

「どっちだって良いさ。僕に似た男だって、君に似た女の子だって、きっと立派にこの家を盛り立ててくれるよ！」

「あ、うん、そうね？」

私としては、少し心配になったんだけど、デニスは全く気にしていなかった。盛んにまだ生まれていない、私達の赤ちゃんに話しかけている。意外に子煩悩なパパになりそうかな？

それにしても、デニスに似た男の子か・・・、ダメね。色んな所に迷惑がかかりそうなのが、今からでも予想できてしまう。私が、きちんと教育してあげなくちゃ！　でも、当然だけど、私は子育てをした事が無いのよね。ああ、良い手があるわ、末弟のギーシュ君を利用させてもらおう、あの子はいかにも大きくなったら、デニスみたいになりそうだから、今からでも練習いえ、再教育してあげよう。

＝＝＝

それから、数ヶ月が経過して、私のお腹も大きくなり、予定よりかなり早く出産する事になってしまった。陣痛が始まってからは、意外と早かったんだけど、しばらくは出産したくないと思ったのは事実なのよね。

生まれたのは、小さめだけど元気な女の子で”エリーヌ”と名付

けられた。旦那様の希望ですから、そのまま採用する事にしたんだけど、あの娘の様に育ってくれれば良いなって思うんだ。

「デニス、本当にあの娘の結婚式に行かなくて良いの？」

「行かない！」

１週間程先に、”あの娘”と”副王殿下”の結婚式が盛大に行われる事は、以前から分かっていたんだけど、私は体調が回復しなくて、出席出来そうもないのよね。義父様も、王軍の指揮を放り出す訳にいかず、デニスに代理で参加しろと命じて来た見たいなんだけど、当のデニスは私の傍を決して離れようとはしなかったの。

「エレオノールの花嫁姿は綺麗でしょうね～」

「ぐっ！」

あ、動揺した。全く、やせ我慢しなくても良いのにね？　別に今更デニスが”あの娘”の事を幾ら賞賛しても気にはしないけど、親友の結婚式に参加出来ないのは、心苦しいのよね。

「エレオノールが、貴方の事を許しているって話はしたでしょう？」

「それは、まあ、嬉しい事だけど、そういう事じゃあないんだ」

「じゃあ、どう言う事なの？」

「あの方が、あの男の横で微笑む場面なんか見たくないんだよ！」

「はあ、男のプライドっていうやつ？」

「やっぱり、女性には理解が出来ないかな」

そんな事を言いながら、実は私の体調が心配なんじゃないかと思うのは自惚れだろうか。まあ、自惚れでも何でも、ここに私の愛する旦那様が居てくれるのを素直に喜ぶ事にしよう。

＝＝＝

結婚式を挙げたあの娘に、式に参加できない旨の手紙を出すと、意外なことに直ぐに返信が来たのよね。（何かと忙しいでしょうに）

「新婚旅行に行くって言ってたのに、律儀ね」

「どうしたんだい、クリオ？」

「ああ、エレオノールから手紙がね」

「何て書かれているんだい？」

内容を確認して問題が無ければ、デニスにも見せてあげる積りで、手紙の内容を確認したんだけど、そこには”とっても激しかった”と一行だけ書かれていたのよね？　あの娘も何を書いているんだか、全く。

「で、何が書かれていたんだい？」

「えっ！　えーっと、女同士の秘密よ！」

ダメ、いろんな意味でこれはデニスには見せられないわ。でも、激しいってどんな感じなんだろう？　やっぱりダメ、私の旦那様には紳士でいて欲しいんだから！

外伝二十一話　誰が誰に捕まったのか？（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百十六話　ラスティン２３歳（新婚旅行と言う名の外交）（前書き）

第百十六話ＵＰします。

第百十六話　ラスティン２３歳（新婚旅行と言う名の外交）

結婚式とか、その後の事とか色々あった訳だが、今日から暫く私達はトリステインを離れてガリアに向かう事になっている。表向きには新婚旅行なのだが、実際の所はトリステインを代表しての”弔問”の使者だったりする。これが”副王”などという立場の私が、長期間国を離れる事が出来る理由だ。

旅に同行しているのは、言うまでも無いが妻のエレオノール、そして秘書役として友人のコルネリウス、何時もの私の護衛隊と、兵団の女性警備隊員から引き抜いたメイジで新設したエレオノールの護衛隊だ。ちなみに隊長のガスパードは今回留守番である、あちらも新婚だからな、少しは気を遣う必要があると言う訳なのだ。

旅自体は急ぐものではないので、本当に新婚旅行らしく、のんびりとした旅程とした。はっきり言えば、私達の結婚式とガリアのロベスピエール４世の葬儀がほぼ同時期だった為、急いで行ってもあまり意味が無いのだ。分かっていたとは言え、葬儀に行けなかったのは悔やまれるが、ガリア駐在の大使が一応役目を果たしてくれたはずだ。（彼は、完全にお飾り状態なのだがな）

「ノーラ、疲れていないかい？」

「はい、貴方、旅は慣れていますし、護衛の方達の良い方ばかりですから」

ん？　ノーラって誰だだって、勿論、私の愛する妻の事だが？　少し呼び方を変えてみたのだよ。旅慣れた副王妃というのはどうなのだろうか？　まあ、旅慣れた副王の妃ならおかしくはないか。

「明日にはガリアに入るけど、戦争があった地方は避けるにしても、治安が心配だから油断だけはしないでくれ」

「はい、本当に戦争があったんですね？」

「ノーラもきちんと見ておいた方が良いかもね、副王妃様として」

「そうですね、でも、少し怖いです」

少しだけ、エレオノールの肩を抱しめると、少しだけ緊張が解れた気がした。エレオノールの方は問題無い様だが、問題のを抱えている人物がこの中に1人いる。

それは、コルネリウスなのだが、彼も警備隊に属していた位だから、勿論、旅自体が問題なのでは無い。王城にいた頃から、やっぱり元気が無かった気がしたいたが、ガリアに近付くにつれて、はっきりと口数が減ってきているのが分かる。ただ、彼が何に悩んでいるかは、分からないでもなかったが、これは彼自身が決める事なのだろうな。

「アルマント、疲れていないか？」

「ああ、まあ、旅自体は問題ないな」

「そう言われると、旅以外の部分が気になるな？」

「そんな遠回しに話を進める仲じゃないだろう？　お前が、俺をこの旅に同行させた目的も分かっているし、それから逃げる積りも無いから安心しろよ」

「皇帝を目指す気持ちは無くなったか？」

「別に皇帝などになりたくは無いさ、ただ、一族の、父や母の敵討ちをしたいとは思っている」

「おい、そんな無責任な」

「そうかな、俺が皇帝になった姿を想像出来るか？」

「う～ん」

彼の秘書官としての仕事だけを考えれば意外と上手く行く気がするが、態度と口の利き方が受け入れられるかだな。（ゲルマニアという国には相応しいだろうか？）

「そうだろ、俺自身も想像出来ないからな」

「皇帝と宰相を討ったら、ゲルマニアがどうなるかも考えて欲しいんだけどね」

「そうだな・・・。まあ、直ぐに結論を出す積りは無いよ」

コルネリウス自身は皇帝になる積りは無い、或いは無くなってしまったのだろうか？（以前は結構乗り気だったと記憶しているんだが）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

結局私達は、３週間ほどかけてガリアの王都リュティスに到着したんだが、移動が本当に時間の無駄だな。新婚旅行という名目が無

ければ観光等は控えたんだが、そう言う訳には行かないし、執務室に篭る事が多い私には、良い気分転換になったのは否定出来ないのだが。

今回はリュティスから派遣された迎えの兵士と合流して、すんなりとヴェルサルテイル宮殿の中に入り、国王となったジョゼフ王と会談できる手筈になっていたのだが、宮殿で最初に私を迎えてくれたのは思わぬ人物だった。

「これは、ようこそいらして下さいましたな。トリステイン副王殿下、ならびに、副王妃殿下」

「シャルル王子殿下、いや、オルレアン大公殿下とお呼びしたほうが良いでしょうか。貴方に出迎えていただけるとは思っていませんでした」

「シャルル様、ご無沙汰しております。オデット様には毎年色々なお土産をいただいて感謝しております。来年は是非、王城の方をお訪ね下さいとお伝え下さい」

「これは、新妻らしい美しさですな。ラスティン殿が羨ましい限りだ」

「まあ、お上手です事、オデット様が何ておっしゃいますかしら？」

「勿論、新妻の美しさを賞賛するでしょうし、私が言った事を気にはしないでしょうね」

何故か、オルレアン大公からは、落ち着きと自信みたいな物を感じるな、以前と比べればと言った感じかもしれないがな。

「そうそう、私の今の立場は、”宰相”の様な物だから、宰相閣下と呼ばれる事が多いよ。まあ、宰相とは言っても、実務は兄がやっていてね。ガリア王家の”顔”といった所なんだがね」

こんな話はジョゼフ王からもクロディーからも聞いていなかったのだが、まあ、彼らが何故言わなかったかも分からないではないな。ジョゼフ王にとっては、競争相手だった弟の力を借りているなんて言いたくなかっただろう。クロディーは、私に伝えるまでも無いと判断したのだろう。（キアラ辺りは知っていたのかもしれないがな）

これで、ガリア王家は安泰と言った所だろうか・・・？　ふと、ガリアの前王の顔が過ったぞ。これも、”大王の策略”だったのだろうか。全く、支配者としても親としても、抜かりが無い人物だったな。今更、落とす鳥が増えた所で驚く気も起こらないが。

宰相閣下直々の案内で、王の執務室に案内される事になった。ロベスピエール４世が使っていた、あの部屋かとも思ったが、別の部屋に案内された。宮殿の奥では無く、意外に玄関ホールから近い場所だったのには驚きだったが、ジョゼフ王にとっては敵対者が少なくともガリア国内から一掃された状況であれば、効率を考えて納得の行く場所である。（こう言う考え方をする王族と言うのも珍しいのだろうが）

「良く来たな、ラスティン殿」

「遅くなって申し訳ありません、ジョゼフ殿。カグラさん、こうしてお会いするのはお久しぶりですね？」

「はい、あの、私はただの女官ですので・・・」

宰相閣下が、私達の挨拶に面食らっている。そう言う事らしいが、カグラさんは何時まで女官を続けるのだろうか？　やっぱりあの事が問題になるのだろうな。

「カグラさん、すみませんが、妻の相手をお願い出来ますか？」

「ノーラ、この方に宮殿内を案内してもらうと良いよ」

「はい、貴方」

「シャルル、2人を任せる。案内が終わったら、客間に通してくれ」

「はい、陛下」

エレオノールとカグラさんをエスコートする形で、シャルル殿下も執務室を出て行った。どうやら、宰相閣下には聞かせられない話が始まるらしい。

「こうして、直接会うのは、ワーンベル以来だったな。あの時は、色々あって言えなかったが、礼を言っておこう」

「陛下が私に礼ですか、何の事でしょうか？」

「まあ、貴様、いや、ラスティン殿には色々世話になったからな、そちらが知らないにしろ礼は言っておく」

「はあ、私の何かが役にたったのであれば、光栄です」

私が礼を受け入れた事で満足したのか、ジョゼフ王が少し口調を変えて変な事を聞いてきた。

「ところで、我が宰相閣下はどうだった？」

「まあ、少しは驚きましたよ。さすがは、ロベスピエール４世と言ったところです」

「気付いていたか？　自分で、シャルルに助力を請うておきながら、後になってそれに気付いたよ。我が父ながら、恐ろしい人物だった」

「まあ、大公殿下が自滅しなければ役に立たなかった策でしょうが、シャルル殿下も少し変わりましたね？」

ジョゼフ王が少し嫌な表情を浮かべたのが分かったが、何故だろうか？

「そうだな、私に面と向かって意見なども言う様になったよ」

「それは良かったですね。ジョゼフ王陛下には、意見を言ってくれる人間が１人でも多く必要だと思いますから」

「ふん、私にとっては貴様もその１人なんだがな」

本当に不愉快そうだが、以前と比べると表情が豊かになった気がするな。実に良い傾向じゃないか？

「ラスティン殿は、どうやって”あの父”に気に入られたのだ？」

「はぁ？」

今度は私の方が嫌な表情をする羽目になった。あまりにも意外か

つ唐突過ぎて、表情をコントロールする事が出来なかった。何かの嫌がらせだろうか？

「ラスティン殿がガリア王家に生まれていれば、私が王位に就く事は無かったかも知れんと思った程だぞ？」

「私が、ガリアにですか？　有り得ないですね、それに、王家に生まれた私は、多分、私では無いでしょうから」

「そう言う物なのか？」

「はい。王家には王家の人間が育ちますが、それ以外は育たない物でしょう？」

「そうかも知れんな」

「私が副王になったのが、何かの間違えなんですよ」

「父がな、死ぬ直前にな。”ラスティン・レーネンベルク・ド・トリスティン”が居るトリスティインとは友好な関係を保つように遺言していった。ラスティン殿とは、良き友人で居ろと言われたぞ」

今回は、表情を隠す必要性を感じなかったから、気持ちのままに嫌な表情を出したが、ジョゼフ王にも私の表情の意味が分からなかった様だ。

「1国の王にそこまで評価されていて、何故、それ程嫌そうなのだ？　父が、あの世でどんな顔をするやら」

「そうですね、してやったりという嫌味な笑顔を浮かべるのではな

いしょうか？」

「ああ、そうだ、私も何度その表情を思い浮かべたか、うほん！　貴様と話していると、どうも調子が狂うな」

かなり、父王の他人には話す事が出来ない偉業に、悩まされているらしいな。

「それはそうと、何故カグラに奥方の相手をさせたのだ？」

「妙な誤解をされる前に先手を打っただけです」

「誤解？」

「まあ、それはこちらの事情でして。それより、カグラさんを何時まで、ただの女官のままにしておくのですか？」

「ただの女官だと、貴様がそれを言うか？　あの力は貴様がカグラに教えたと聞いたぞ」

カグラさんの力については、別に問題は感じていないんだが、魔道具（マジック・アイテム）（多分メイジも）嫌いなジョゼフ王らしい意見だろう。だが、その手には乗らないよ？　この王が一番慌てそうな提案をしてみようか。

「良かったら、カグラさんをトリステインで預かりましょうか？」

「何！　貴様なんぞに、カグラは渡さんぞ！」

「その言葉をカグラさんの前で言ったら面白いでしょうね？」

「くっ、貴様といい、シャルルといい」

宰相閣下も何か言ったらしいな、カグラさんは今のジョゼフ王の弱点だからな。突っつきたくなる気持ちは良く分かるのだが、別にそう言う意味で言った訳ではないぞ。

「ジョゼフ王陛下、先程の提案は、カグラさんの為の提案なのですが？」

「ほう、そう言うことなら詳しく聞こうか？」

変わり身の早い事だが、それだけカグラさんが大事なのだろう。

「カグラさんを一時的に我が国で預かって、適当な貴族の養女と言う事にすれば、ガリアの宮廷内の抵抗も弱まると思いますが？」

「・・・」

悪い提案では無い筈なんだが、ジョゼフ王が見せたはあまり良い反応ではなかった。

「カグラさんには、有力な後ろ盾が必要では無いですか？」

「そうだな・・・」

何を悩んでいるのだろうか？　まさかカグラさんが使い魔だからとかじゃないよな？

第百十六話　ラスティン２３歳（新婚旅行と言う名の外交）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百十七話　ラスティン２３歳（諍い）（前書き）

第百十七話ＵＰします。

第百十七話　ラスティン２３歳（諍い）

「ラスティン殿の提案は本当に有り難い、だが、私はカグラを自分の手で守りたいのだ」

うん？何だか信じられない台詞を聞いた気がするぞ？　守るか、王の立場では中々上手く行かない時もあるんだろうか？　そう決めたのなら、余計な世話は意味が無いのだろうな、仕方ないか。

「そうですか、それならば、これをジョゼフ殿に預けましょう。コルネリウス、あれを」

この場に残ったコルネリウスが、鞄からとあるものと取り出してジョゼフ王に渡しのは少し大きめな宝石箱の様な物だ。

「これは？」

「どうぞ開けてください」

「ティアラか？」

「どちらかと言えば、額飾り（サークレット）でしょうか？」

それが何を意味しているか、ジョゼフ王には分かったらしい。覚えているのと、クロディーからの情報を基にカグラさんの額のルーンをカバーする様にユニスがデザインし兵団の腕利き錬金メイジが作った、まさにカグラさんの為の額飾りなのだ。

「そうですね、我が国からの”婚約”祝いだと思って下さい。精霊

の加護があるので常に身に着けていると良いと言う事で」

「精霊の加護と言うのは嘘なのか？」

「カグラさんには分かってしまいますが、ただのアクセサリーです」

「そうか、ただの”特別な”額飾りか・・・」

「化粧などで誤魔化す事は出来ますが、念には念を入れたほうが良いでしょう。何時か、必要が無くなる時まで」

「そうだな。ありがたく貰っておこう。だが、”使い魔を大切に”と触れをだすのでは、拙いだろうな」

「我が国では、何れ全ての”人間”を平等にという法が出るでしょう」

多分私自身が提案するか、学校の出身者の誰かが思いつく事だろうな。他の国でも同じ様な事を考える人間が居るのだろうが、”人間”の定義が多分違ってくるのだろうな？（意思疎通が出来れば、どんな生き物でも構わないと考えるのは、やはり少数なのだろう）

「ふむ・・・」

「まあ、かなり先のことになると思いますよ」

「”触れ”と言えば、生前に父が妙な物を出したな。双子に関するものだったが」

ジョゼフ王の目が父親そっくりになっているのだが、本人は気付

いていないのだろうか？

「ああ、ガリアには双子に対する妙な習慣がありましたね？」

「ふん、まあ良い」

ジョゼットの事を聞いていないとは思えないが、とりあえず干渉する積りは無いようだな。やはり、こう言う腹の探り合いは疲れるな。

「ところで、１つ聞いても良いかな？」

「何でしょうか？」

「その者の事だ。ラスティン殿が単なる荷物持ちとして同席させたとは思えないが、何者だ？」

攻め方を変えて来たようだな、まあ、この件に関しては話の切欠を探していた所だから丁度いいがな。コルネリウスを見ると私の方を見ているようだ。任せると言う事なのだろうな？

「彼をどう見ます？」

「ふむ、トリステインの人間には見えんな。名前からすれば、ゲルマニアの出といった所か？」

「彼の本当の名前は”コルネリウス・フォン・ブラウンシュワイク”と言います」

そう言いながら、ジョゼフ王の様子を覗っていたが、表面上は何

の変化も見られなかった。

「ほう、奇遇だな。あの間の抜けたブラウンシュワイク公爵と同じ家名とはな！」

「なに！　父を愚弄するか！」

「コルネリウス！」

ダメだ、私の制止の声が聞こえていない。

「やはりそう言う事か。だがな、宰相程度に公爵家が潰されたのだぞ、これを間抜けと言わずにいられるかな？」

「くっ！」

「ジョゼフ王！」

今度は、ジョゼフ王の方を制止しようとしたが、こちらは聞こえない振りを続けた。

「大方、ガリアにはゲルマニア皇位を継ぐ後ろ盾になって欲しくて来たのだろうな？」

「そんなことは無い！」

「ふん！　では、敵討ちの手助けを願い出に来たのかな？」

「そ、敵討ちが悪いか！？」

コルネリウスが一方的に熱くなっているが、ジョゼフ王はわざと挑発しているのが傍からは分かる。ここは成り行きに任せるしかないか？

「ほう、貴様は、敵討ちはするが、皇位を継ぐ意思は無いというのだな？」

「・・・」

「止めておけ、貴様程度では、返り討ちに遭うのが目に見えている。将来を見据えた行動が出来ないのであれば、当然の結果だろうがな？」

「何を！」

「ゲルマニア皇帝と宰相を討ってしまえば、ゲルマニアが混乱に陥るのは目に見えている。ゲルマニアの民が苦しむのが分かっていて、先程の様な事を言っている時点で、貴様の将来は無い！」

「くっ！」

「どうした、言い返せないか？」

くっ！　どうしてこんな展開に？　力ずくでコルネリウスを止めておけば良かった！　そうしている間に、耐えられなくなったコルネリウスが部屋から飛び出して行ってしまった。

「コルネリウス！」

「放っておけ、衛兵が適当な部屋に連れて行くだろう」

「陛下、何故、あんな事を？」

「何故だろうな、何故かアイツの態度が気に入らなかったからだろうな？」

「一言も話していないのに何が分かるんですか？」

「ああ、アイツは以前の私と同じ目をしていたんだな」

落ち着けラスティン！　お前まで熱くなってどうする？

「はぁ～、ふぅ。同じ目と言いますと？」

「そうだな、絶望した負け犬の様な目だな。鏡を見る度に憂鬱になったな、自分の顔が嫌いになると言うのは面白い経験では無かったからな」

「それで、わざと挑発するような事を？」

「何を言っている、お前が私にした事だろう？」

「えっ？」

「覚えていないか？」

言われてみれば、確かにやった気がするな。私に返すなら兎も角、コルネリウスに返すことは無いのに。全く性格が悪いのがガリアの王になった物だ。昔の自分に止めておけと忠告したくなるぞ？

「まあ、今ので懲りてしまえば、その程度の男だったと言う事だろう。もし、もう一度私の前に立つならその時は考えよう。ブラウンシュワイク公爵とは面識が無かった訳でもないからな」

「承知いたしました」

あの様子では、かなり難しいのだろうな？　面識があったならそれなりの対応があると思うんだが。

「話は変わるがな？」

「はい」

ふむ、こう言う話の持って行き方をするのだな。そんな事を冷静に考えていられたのはそこまでだった。

「トリステインからの工業品の輸入を増やしたいと言ったらどうする？」

「その件ですか？」

「まあ、あれが居る以上は、隠しても無駄だろうから言ってしまうが」

あれと言うのは、クロディーの事なんだろうな。いい活躍をしてくれているらしい、カグラさんの友人となれば、気軽に消せないだろうし、狙い通りだな。

「我が国の鉱山が軒並み閉鎖に追いやられているのだ、風石が採掘出来る様になっても元がとれん」

「鉱山が閉鎖ですか？」

「そうだな、特に北部が酷いな、３年ほど前から前兆はあったらしいぞ。王位に就いて最初に悩まされたのがこの件だな」

うん？　３年前と言うのには心当たりがあるぞ、それに風石も絡んでくるとなると・・・、まさか？

「ワーンベル風の錬金を使った工業品の生産を行いたい所なのだが、食料品などの方を優先しているからな」

「た、確かにトリステインとしても、ガリアからの輸入に頼っている部分がありますから、そうしていただいた方がありがたいです」

「だろうな、工業品の件、頼まれてくれるかな？」

「はい、善処させていただきます」

私には、そう答えるしか無かったのだが、後でユニスに怒られそうだ、本当に情けない副王様だな。しかし、大地の大精霊に依頼した風石対策がこんな事態を引き起こすとは思ってもみなかったな。大地の大精霊に”修正”を頼むのは、キュベレーからの感触でも難しいだろうな。錬金隊には無理を承知で働いてもらうしかないか？

そうすると、硬貨がガリアに流れていると言う話も、ゲルマニアの策略とかではなく、本当に貴金属が採掘出来なくなったという訳か。ハルケギニアを救った積りが、実は経済的に破滅させてかけていたとは、全く冗談ではないな。

考えてみれば、各地に散らばる風石をある場所に集めると言う事

は、例の”精霊の道”を使ったとすれば、色々影響が出て当然なのだ。キュベレーによれば、あれは地中（接していれば地上も可）の等価な体積をもつ物を交換する事が前提らいいからな。

A地点からC地点まで風石を移動させる場合を考えれば、

A⇔C

ではなく、

A⇔B⇔C

と移動させた可能性があるのだ。B地点に鉱山があれば、そこにあるはずの鉱脈がA地点に移動してしまったと考えれば納得が行くだろうか？

風石がかなりの広範囲に分布していた事、そして風石とはいえないルイズが砕いた例の”岩盤”の事も考えれば、ハルケギニアの地中は全体的に大規模にシャッフルされてしまったと考えて間違いないだろう。これを元に戻すのは、普通に考えて不可能だろうな。（大地の大精霊と交渉する気は全く無いしな）

＝＝＝

その後、ロベスピエール４世の墓を参ったり、ローレンツさんの娘婿のセザールさんと会って転生者ベレニスの近況を聞いたりして、無事にトリステインへの帰途に着いた。一番印象に残ったのは戦場の痕だったが、それは私よりコルネリウスを暗くさせる結果になってしまった。

うーむ、コルネリウスの件と言い、鉱山の件と言い、身の安全は兎も角、私個人としてはかなりマイナスの大きかった旅行になってしまった。ノーラがカグラさんと仲良くなってくれたのは喜ばしい事だが、義母（ライル）になったノーラに義母（イザベラ姫）になるだろうカグラさんが色々聞いていたそうだ。

はぁ、トリスタニアに戻るのが憂鬱になってきてしまったな。ため息をつく度合いが、コルネリウスと同じと言うのが事態の深刻さは思い知らされる。

しかし、後悔しても仕方が無い、ライルにも言った事だが、失敗をどう挽回するかが大事なのだろうな。この件に関してはゲルマニアからの要請があれば、協力を惜しまない積りだ。ナポレオン1世辺りが素直に協力を要求してくれれば、応じるしかないのだがな、私の立場としては。

＝＝＝

ちなみに、王城へ戻って事情を説明すると、ユニスとキアラに交互に怒られた。私は何をやっているんだろうな？陛下への報告が済んでいなかったら、ガリアへ行って交渉し直して来いとか言われそうだったぞ？

「分かったよ、キアラ、すまないと思っている」

「はぁ、こんな事なら無理してでも付いていくべきでした」

一応私達に気を使ってくれたらしいのだが、恩を仇で返してしまったな。コルネリウスがツェルプストー辺境伯を頼ってゲルマニアに帰ってしまったから、秘書役をキアラにまたしてもらうことにな

った途端これなんだよな。だが、コルネリウスはもうトリステインに戻って来ないかも知れないな。

「それはそうと、ラスティン様、義弟(おとうと)君が面会を求めているそうですが？」

「ノリスが？」

「いいえ、次期ラ・ヴァリエール公爵様ですよ」

「ああ、エルネストか、彼も忙しいだろうに」

エルネストがやって来たか・・・、陛下の治療の見込みがたったんだろうか？　そうすると私の副王としての役目も終わりかな、色々中途半端な気がするが今の私に立場なら幾らでもやり方はあるだろうな。

第百十七話　ラスティン２３歳（諍い）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百十八話　ラスティン２４歳（マッド・ドクター？：前編）（前書き）

第百十八話ＵＰします。

第百十八話　ラスティン２４歳（マッド・ドクター？：前編）

「良く来たな、エルネスト。カトレアも本当に綺麗になったね」

「そうだろう？」

「ありがとうございます、お義兄様」

何故かエルネストが真っ先に自慢げに返事をして来た、まあ、良いんだがね。

「君達は、旅行は国内だったんだろう。どうだった？」

「ああ、辺境の村々を巡って、患者を診てきたよ」

「それって、新婚旅行なのか？」

「はい、この人（エルネスト）の真剣な治療の姿を見て惚れ直してしまいました」

今度はカトレアが変な返事をして来たのだが、自分達自身がしていても気にならない事が、他人がすると非常に気になる事ってあるんだよな。うん、気をつけよう。

「辺境でも、兵団の医療隊は巡回しているはずだよな？」

「それはそうだが・・・、亜人までは気が回らないのかな？」

「そう言う事か、彼らは隠れ住んでいるからな。という事は、君は彼らの所まで押しかけていったのか？」

「ああ、鬼の類でなければ危険は無いしな」

「護衛は居たんだよな？」

「そんなのが居たら、警戒されるだろう」

実にエルネストらしい考え方だな、だが、見習う必要があるかも知れないな。無害な亜人達への治療行為か、兵団へ徹底させる事にしよう。

「まあ良いけど、危ない真似はするなよ？　それはそうと、突然訪ねて来たそうだけど、あの件か？」

「そうだ、ちょっと気になる事があってね。カトレア？」

「はい、貴方」

そう言うとカトレアが、応接間から出て行ってしまった。何があるんだろうか？　出て行ったカトレアは直ぐに1人の人物を連れて来た、カトレアに肩を借りながらもそれでもしっかりと自分の足で歩いて来るのは。

「ベッケル子爵！」

そう、父の暗殺未遂の毒の影響で手足に障がいが残ってしまって、寝たきりになっていた筈の人物だったのだ。

「副王殿下、レーネンベルクでは色々お世話になりましたな。こうして再び歩ける様になったのは、殿下と、この”神医”殿のお陰で

ございます」

「まだ辛い様ですね、どうぞ座って下さい」

”神医”か、また仰々しい名前だな。エルネストには相応しいかもしれないがな。

「レーネンベルクでのお世話は両親が行ったものですし、治療もエルネストがやった事ですから、私などは何の役にも立っていませんよ」

「ははは、そうですな。ですが、殿下がレーネンベルクの子で無ければ、私は2度と立てなかったでしょうな」

「まあ、それは人の縁という物でしょう。それより、エルネスト、やったじゃないか！」

「大したことじゃないよ。あの毒の特性さえ分かってしまえばね」

「ん？　解毒剤は効いたよな？」

「ああ、あの毒は人間の神経を末端から破壊して行くという効果と、治癒を妨害するという効果を併せ持っていた様なんだ」

「だが、クリシャルナはそんな事言っていなかったぞ？」

「そうだな、毒を飲んだ量や、解毒剤を飲むまでの時間、エルフとの体質の差なんかが考えられるな」

その辺りは考慮済みか、”治癒を妨害するという効果”というの

が問題なのだろうな。

「それで、どうやって治療したんだ？」

「”治癒を妨害する”というのはどうやら、人の生命力か魔力の様な物で効力を維持しているのが分かったからな」

「ほう、それで？」

「とりあえず、一番症状が軽かった左手を切り離した」

「はぁ？」

「試しに、一度左腕を切り離して”接合”みたんだけど、上手く行かなかったんだ」

「おい！」

何だか、プラモデルでも作っていて、失敗して組みなおしただけって感じだな？　単純な切断ならば、意外と簡単に接合出来るのは事実なんだが。

「それでもう一度、左腕を切り離して、今度は”分解”して、”再構成”し直してもう一度”接合”してみたんだが、今度は上手く行ったんだよ」

「分解？」

不用意に聞いてしまったら、エルネストは懇切丁寧に説明してくれたんだが、結構グロい話なので内容は割愛するが、私の横で聞い

ていたキアラの顔色が明らかに青くなった程だ。もう1人の女性であるカトレアは、何故かエルネストをウットリとした感じで見詰めている。（カトレア、それはマッドだぞ、義兄として君の将来が心配だ）

「もういい、女性も居るんだから、表現に気をつけてくれよ」

「ああ、そうだな、医師仲間や看護婦達は気にしないから、失念していたよ」

カトレアは看護婦さんな訳か、まあ、お似合いかも知れないな。エルネストの欠点を補っている事だろうな。だけど、あまり良い流れじゃないな。

「子爵は良く手術に同意しましたね？」

「ええまあ、このままでは四肢が動かない事は、公爵夫人から言われていましたからな。どうせ動かないならば、無くなっても支障は無いでしょう？」

「そうですか、子爵は意外と思いっきりが良い方なんですね？」

「勿論、”神医”殿は、”再構成”の場面を見せてくれましたからな。特に問題は無かったですぞ？」

ああ、手足に障がいがある人の治療を実際に見てもらった訳か、私がミレーユさんの旦那さんの右手を作った時に熱心に見ていたメイジがいた気がしたが、技術を盗む事に成功した訳か。

「そうですか、子爵も”リハビリ”頑張って下さい」

「ありがとうございます、殿下」

”リハビリ”がそのまま通じたな、まあ、こちらに存在しない概念なら、そのままあちらの言葉を使っても問題ないか。まだ、歩くのは辛そうな子爵は、それを機会に看護婦（カトレア）さんに連れ添われて部屋を出て行った。これで私も副王解任かな、長い様で短かったな。まあ、陛下のリハビリもあるだろうから直ぐに解任という事にはならないだろうが。

「キアラ、ガスパードを探して、カロリーヌを此処に連れてくる様に伝えてくれるかな？」

「はい」

キアラも少し外の空気を吸ったほうが良い気がするから、あえて小間使いの様な用事を頼んでみた。まあ、今ならエルネストに愚痴を聞いてもらえるだろう。私が、ガリアで判明した、自分がやってしまった大失敗の話を聞いてもらった。（転生者の中でも、エルネスト位しか話せないだろうな）

＝＝＝

「という訳なんだよ。自分でやった事ながら、どうすべきか頭が痛い所だよ」

「ふーん、起こるか分からない”大隆起”を避ける積りが、ハルケギニアの経済どころか文明を危機に陥れてしまったんだね。まあ、スティンらしいかな？」

「返す言葉もないよ。この国にもっと多くのメイジが居れば良いんだがね」

「多くのメイジか・・・」

エルネストは何か考え込んでしまった。私も、まだ見つかっていない平民メイジを探したり、他国からメイジの移民を受け入れるとか、兵団を効率的に運用するとか考えているんだが、根本解決には程遠いんだよな～。

こんな感じでだれていると、キアラがガスパードとカロリーヌを連れて来てくれた。（キアラの顔色も良くなったみたいだな）

「あれ？　エルネスト来ていたの？」

「ああ、ちょっとね」

「カロリーヌ、エルネストがやってくれたよ！」

そう言うと、何をやったのか理解してカロリーヌが、エルネストに話しかけた。

「エルネスト、やったじゃない。これであの侍医長の鼻を明かせるわね？」

「そんな事はどうでもいいよ。それより、最近の陛下の体調に問題は無いかな？」

「うーん、特には無いはずよ？　少し脈拍が速いのは気になる所だけど」

「そうか・・・、まあ、いいさ」

そう言って、エルネストはどうやって陛下の治療を行うかを説明し始め、カロリーヌは真剣に聞き入っていた。だが、カロリーヌからは意外な言葉が飛び出した。

「うーん、その方法は拙いわね」

「ほう」

「何故だい、カロリーヌ？」

「ええ、私も侍医になって始めて知ったんだけど、侍医の規範に”国王陛下の身体には、傷1つつけるべからず”と言うのがあるのよ」

何処かで聞いた事がある話だな、”玉体”という奴か？

「馬鹿らしい、それで病気が治らなくちゃ、意味が無いだろうに」

エルネストが吐き捨てる様に言った。ふむ、別に大した問題とは思えないのだがな？

「侍医長に話して、規範を修正してもらえば良いじゃないか？」

「スティンって、もしかしてと言うか、やっぱり知らないの？」

「何をだい？」

カロリーヌが夫のガスパードに視線を向けたが、ガスパードは苦笑しただけだった。私の隣では、キアラが額に指を当てているし、

エルネストは何故か表情を消している。そのエルネストが、この状況を説明してくれた。

「カロリーヌ、自分で説明するよ。侍医長をやっているモーリス・ド・オーネシアは、僕の兄なんだ」

「は？　似てないな」

「君の感想はそれだけかい？」

「いや、驚いているし、色々納得がいったよ」

成る程、エルネストが最初から侍医長殿を嫌う筈だな。弟が頭を下げて、カトレアの治療に協力を要請した時も断った事等も、エルネストのオーネシア嫌いに拍車をかけた訳か。緊急性の低い現状では、侍医長殿としてもエルネストが手柄を立てるのを傍観するとは思えないな。何とか排除出来ない物だろうか？

「キアラ、今の話を枢機卿側から陛下に知らせてくれないか？」

「はい、お任せ下さい」

「僕は、マリアンヌ様に話してくる。まあ、陛下に直接話す事になると思う。ガスパード？」

「うん」

「ああ、王妃殿下と面会を申し込んでくる。カロリーヌも来てくれ」

「エルネスト、手術は直ぐに出来るのか？」

「大丈夫だ、助手の皆も城下で待機中だからね」

「そうか、この部屋を自由に使えるように手配しておくから、呼び寄せてくれ」

「分かった」

こうして私達は一斉に動き出したのだが、途中まで順調に話が進んでいたこのプランも思わぬ所で挫折する事になった。

＝＝＝

「参ったな、陛下があんな事を言い出すとは思わなかった」

エルネストが納得行かないと言った感じで呟いた。そう、勢い込んで陛下の下へ行ったマリアンヌ様と私だったが、陛下は私達の提案を拒否したのだ。今も遅れてやってきたマザリーニ枢機卿とマリアンヌ様が懸命に陛下を説得しているはずだが、あれは見込み薄だろうな。

「”私は実力で国王の地位に就いた訳ではない、マリアンヌの夫になったからだ。つまり王家の規範が私を王にしている訳だ。その私が規範を無視せよなどとは命令出来ない！”か、正論ではあるんだけど、陛下はもう一度自分の足で立ったり、物を掴んだりしたくないのかな？」

「まあ、お命がかかってるんじゃないからね」

コリニー夫妻がこう補足してくれたのだが、私にも陛下が何を考

えているか全く分からない。

「命がかかっているかも知れないよ？」

「どう言う意味だい、エルネスト？」

「きちんとした証拠は無いが、ベッケル子爵の病状の経過を考えるとな」

「経過？」

「ああ、子爵が僕の診療所に来てからのカルテ、おっと、病状を書いたメモでは、若干だが血圧の上昇と不整脈が見受けられた。それに内臓にも負担がかかっているかも知れない。子爵の食事の量は、普通の病人から考えても少なすぎたからな」

「それが命に関わるの？」

「直ぐには影響は出ないだろうね、ただ、この状況が長期間続くのは望ましくないのは分かるだろう？」

「そうね・・・」

「本当なら子爵がちゃんと歩ける様になってから来る積りだったんだけど、子爵の術後の経過を見るとさっきの推測が間違っていないと思えたから、無理して来たんだけどね」

嫌な話の流れだったが、その間に、枢機卿の供をしていたキアラが戻ってきたが、表情を見れば結果は良くなかった様だ。何故か、今日の出来事はトリステインの未来に暗い影を落としそうな気がし

た。結局気長に、陛下の気持ちを変えていくしかないんだろうな。

第百十八話　ラスティン２４歳（マッド・ドクター？：前編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百十九話　ラスティン２４歳（召喚される者たち）（前書き）

第百十九話ＵＰします。

第百十九話　ラスティン２４歳（召喚される者たち）

後味の悪い出来事が、中途半端な終わり方をして、２０日程が過ぎたがあの問題は有耶無耶のままとなってしまった。マリアンヌ様も枢機卿もこの問題を扱いかねているという状態だ。

一方、私は思いつく限りの、ワーンベルでの工業品生産力向上の対策を講じている所だ。

1．まだ見つかっていない平民メイジを探索
2．他国からメイジの移民を受け入れ
3．兵団を効率的に運用

等を思いついたが、決定力に欠けるのは分かっている。

1．に関しては、正直雲を掴む様な話だな。レーネンベルク魔法兵団の名声が知れ渡った事で、国内の平民メイジの多くが兵団に所属していると考えて良いだろう。

多少増減しているが、約１０，０００人近くなった兵団だがその６割が錬金隊所属で、その他が警備隊、施設隊、治療隊などで活動している。以前より錬金隊の比率が下がっているのは、ゲルマニア対策で警備隊を増強する必要があった為だ。話が逸れてしまったが、国内で平民メイジを探すのは、かなり難しいという結論になってしまうのだ。

2．に関して言えば、他国からの平民メイジを招く事は意外に難しい事が経験的に分かっている。少なくとも自由意志でトリスティンにやってくる平民メイジは現在では殆ど居ないだろうな。

ガリアでも、アルビオンでも、平民メイジは引く手数多だからな。

戦後復旧期のガリアではメイジの手が必要なのは当然だろうし、アルビオンでも繊維織物などの軽工業へのゴーレム技術を使った自動機械が多数採用され、そこに多くのメイジが必要となっているのだ。その他の小国や、ロマリアからもそれぞれの事情で問題がある。

アルビオンのジェームズ1世陛下からは、少数だがメイジを送ると返事を受け取っているが、まあ、本当に数十人というレベルなのだろうな。

3．については、少しだけ進展があった。ゲルマニアへの対応の為にマース領に張り付かせていた警備隊のメイジの代わりに、王軍を一部駐在させることで、警備隊の団員を錬金隊に回すことが出来たのだ。

もう1つ面白い話があった、これは以前セレナが教えてくれた？亜人の出現周期の件だ。単なる経験則だったのだが、兵団本部に蓄えられた討伐依頼を集計させた所、確かに周期らしき物が確認されたのだ。例えば、殆ど一年毎にオーク鬼が現れる森が実際にあったし、似たような傾向は色々な場所で見られた。

中々引退できない兵団長のマティアスの手で、調査はもう一歩突っ込んだ形で行われていた。さっきの毎年オーク鬼が現れる森に大規模に警備隊の団員を送り込んで。どうして毎年オーク鬼が現れるのかを大規模に調査したのだ。そして、私は偶然”その場面”に出くわした団員の話を直接聞く事が出来た。

＝＝＝

「警備隊第11班の班長を任されているマルコと申します！」

「ご苦労様、マルコさん。忙しいでしょうに、態々王都（トリスタニア）まで来ていただいて感謝します」

「いいえ、事が事ですから、レーネンベルク公爵様にも直接報告させていただきましたし、王国に報告するのも当然と思っております」

「父にも言われたでしょうが、僕にも敬語は不要ですよ」

「はぁ？　殿下は王族でしょうに」

兵団員にまで心配されてしまうのだな、公私の切り分けはしっかり・・・、してないが必要な時はちゃんとしてるはずだぞ？

「この場は、公的なものではありませんからね」

「分かりました、そうさせていただきますよ。ラスティン様」

「では、オーク鬼が出現した場面の事を詳しくお願いします」

「それは、調査に森に入って４日目の夕刻でした。明日には補給の為に一度本隊と合流する予定だったんですが、その日は思い切って担当範囲より広めに班員を配置していたのが幸運だったんでしょうね。急に班員の１人が、私の所にやってきたんです」

その時の事を思い出したのか、少し興奮気味なマルコさんだった。

「その班員に引っ張られる様に問題の場所に向かったんだが、そこには銀色の鏡の様な物が浮かんでいたんだ。最初は何だか分からなかったんだが、明らかに魔力の流れを感じた。ただ、呪文を唱えているメイジは何処にも居ないっていう奇妙な現象だったんだがね」

「銀色の鏡？」

「そう、少し違うが、サモン・サーヴァントの時のと同じだと感じたね。班員を集めて観察を続けていると、オーク鬼が本当にそこから出てきたんだよ」

「そうですか・・・」

「まあ、オーク鬼ごときは直ぐに退治したんだが、その後もう一匹オーク鬼が出てきたんだなこれが。油断とは言わないが不意をつかれて久々にウチの班から負傷者を出しちまった」

「それはおかしい話ですね。誰かが召喚したのなら、一匹出た時点で閉じるはずだし、そもそも召喚者のメイジは居なかったんでしょう」

「銀色の鏡が無くなった後、周囲を隈無く調べたが、怪しいものは無かったぜ。それこそ地面も掘り返したがね。直感だが、あれは人為的な物ではなく、なんかの自然現象或いは、自動的なものって感じがしたな」

「・・・、非常に興味深いですね?」

「だろ? もし来年同じ日の同じ場所で、銀色の鏡が現れてオーク鬼が召喚、いや、勝手にやってくるかな?としたら、警備隊としては大助かりなんだよな」

それはそうだろうな、やってくるという表現が正しいかは分からないが、その時期と場所が特定出来れば、待ち伏せなり罠をかけるなりやり放題だしな。やってくるというならば、時には来ない場合があってもおかしくないし、場所によっては周期的に見えない場所も実は人知れず周期的に”ゲート”が開いているのかも知れない。

（ただ、何もやって来ないだけだったりするのだろうな？）

「おっと、これは失礼しました、殿下」

「構わないと言った筈ですが？　それより貴重な調査結果を教えていただきありがとうございます」

「いいえ、これも兵団員として、そして、トリステインの国民として当然の結果です」

＝＝＝

マルコさんからの報告は以上だったんだが、マティアスは既に周期と場所の特定を警備隊に命じているそうだ。マルコさんを見送った後、一緒に話を聞いていたキアラに意見を聞いてみた。

「根本対策は難しそうですね。対策も問題無さそうですし、この件はマティアス様に任せれば良いのでは？　ただ、警備隊から人員を引き抜いて錬金隊に移す事は可能ではないでしょうか？」

「そうかな、様子を見ながらになるだろうがな」

「罠等なら兵団員である必要させないでしょう？」

「それもそうかあ、マティアスに指示を出しておくかな。だが、まだ足りないだろうな」

「そうですね、ハルケギニア全土に工業品を供給し続けるのは、容易な事ではないでしょう」

あの話は、キアラにもまだ話していないのだが？（まさか、ノーラが話すとも思えないし）

「何故、ハルケギニア全土なんだ？」

「ラスティン様の最近の行動を見ていれば分かります。奥様もラスティン様が潜入部隊との打ち合わせの後何をしているか気にしている様ですよ？」

「何のことかな？」

ノーラは仕方ないにしても、キアラまでこっそり魔力補給用の”シフの涙”を作製しているのに気付いているらしい。さすがに誤魔化せないかな？

「ラスティン様の性格では仕方ないかもしれませんが、いきなり離婚っていうのは外聞が悪いですよ？」

「な、やることはやっているはずだけど・・・」

「そうみたいですね」

「お前な！」

「無理だけはなされないでくださいね？」

本当に心配そうに、キアラが言った言葉が胸に響いた。

「そうだな、ありがとう」

「はい！」

さて、妙な雰囲気になる前に仕事に戻るとしようか？　まだ、見落としている事があるかも知れないしな。

第百十九話　ラスティン２４歳（召喚される者たち）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

ＭＤ？後編は次回になります。
久々に出演のマルコさんですが、後１、２回出演する予定だったりします。

第百二十話　ラスティン２４歳（マッド・ドクター？：後編）（前書き）

第百二十話ＵＰします。

第百二十話　ラスティン２４歳（マッド・ドクター？：後編）

そして更に１０日程過ぎた所で、またもやエルネストが私の所を訪ねて来た。陛下の治療に関しては進展は無いはずなんだが何故だろうか？

「エルネスト、何か問題でも起こったのかい？」

「いいや、友人のピンチに駆けつけただけだよ」

以前に聞いた台詞だな？　私がピンチか、そう言われてもピンと来ないな？

「まあ、話だけは聞いてくれ。その前に紹介しておこうか、この人は僕の患者のユーグさんだ」

「あ、あの、ユーグと申します。ふ、副王様には」

「ああ、緊張しないで結構ですよ。エルネストからも聞いているでしょう？」

「あ、ですが・・・」

「では、副王として命じましょう。ユーグ、お前は私にいつも通りの口調で話すことを命じる！」

「はい！」

うーん、自分でも言葉に重みと言うか、厳かさとかが足りていな

いのは分かるんだが、ユーグさんは気付かなかった様だ。あまり冗談の通用する人ではないみたいだな。

「エルネスト、話が繋がっていないんじゃないかな？」

「だろうね、そうそう、王城に入る際に門番と揉めたから、後で苦情が来るかもな？」

「？　お前まで何をやってるんだ？」

「ユーグさんの杖を取り上げられそうになったから、義父と副王の名前を出したからな」

「杖？　ああ、そういうことか。平民メイジのユーグさんを取り立てて欲しいという話なら、僕の所に来ても意味は無いよ？」

「それは分かっているよ、ユーグさん自身は、兵団入りを希望しているのは事実だけど、その前にスティンに見てもらいたい事があって無理を言って同行してもらったんだ」

「ふむ？　それで見せたいと言うのは？」

「スティン、君は診察（イグザミネーション）は使えたよな？」

診察（イグザミネーション）はエルネストのオリジナルだが、一応使い方は教わっているのだ。血液の流れなども観察出来る為、治療行為には向いているんだよな。

「一応ね、どちらかと言えば分析（アナライズ）の方が得意なのは変わらないよ」

「では、ユーグさんが魔法を使う所を見ていて欲しいんだけど、診察（イグザミネーション）でココの中を観察していて欲しいんだ」

ココと言いながらエルネストが指差したのは、自分の頭だった。

要するに、ユーグさんが魔法を使う際の脳の働きを診ていろと言う訳か？　それ位なら問題は無いはずだが、脳か・・・。

ユーグさんの唱える呪文は決して滑らかな物では無かったが、私は脳内の血流に注目していたからそれ程気にはならなかった。ユーグさんの杖の先に微かな明かりが灯る頃には、私にもエルネストの言いたい事が分かった。メイジは脳のこの部分を使って魔法を使う訳か？

「その顔は、分かったみたいだな。そこは脳の大体、視床と呼ばれる部分で、人間にとって重要な部分なんだけど、それ以上にメイジには大事な部分みたいだな」

「う～ん、言いたい事は分かるし、大変な発見だと言う事も分かるんだけど？」

「君の助けにならないかい？　生憎と、メイジでは無い人を態々連れてくる事はしなかったんだけど、メイジでは無い使用人とか居ないか？」

「？　まあ、呼べば来るけど？」

一応部屋付きの使用人を呼んだんだが、エルネストはこの人物に自分で、診察（イグザミネーション）をかけて何か確認した様だ。使用人は居心地悪そうにしているのだが、何も言い出せない雰囲気だよな？

「大丈夫みたいだな。スティンこの人の脳のさっきの部分を見てみ

ろよ。分析（アナライズ）で良いから」

「分かった」

一応使用人の人の脳内を分析（アナライズ）で覗いてみたが、さっきの視床の部分の形がかなり違うのが分かった。あれ？　見間違いだろうか？

「もう一度、ユーグさんの脳も覗いてみたらどうだい？」

言われた通りにユーグさんの脳内を覗いてみたが、やっぱり大きさも形も違うな。視床の一部が変形、増量した感じだろう。もしかして、メイジ特有の視床の形なのだろうか？（魔法脳とでも呼ぶことにしよう）　これを使えば、普通の平民を装ったメイジのスパイなんかは完全にシャットアウト出来るのは分かるが？

「やっぱりまだ分からないか、ユーグさん、例の話をお願いします」

「ラスティン様、私がつい最近まで自分に魔法が使える事を、自分がメイジである事を知らなかったと言ったら信じてもらえますか？」

「えっ？」

そう言えば、さっきの呪文もたどたどしさを感じたのは事実なのだが？　そうか、脳の視床の形を見る事で、メイジかそうでないかが、明確に区別出来るんだな。だが、自覚の無いメイジはそれ程居るのだろうか？

それが言わせたかったのか、エルネストはユーグさんを別室で待たせる事を提案して来た。ここからは普通の人には聞かせられない話かな？　部屋付きの使用人に案内されて、ユーグさんは出て行った。

「エルネスト、言いたい事は分かったよ。確かの僕のピンチを救ってくれるかも知れないな」

「分かったかい？　ちなみにこの国の国民の数は？」

「うん？　正確には分からないが、２５０万～３００万程度かな？　４００万人以上は無いと思うけど」

「そうか、戸籍もなけりゃ仕方が無いな」

「それに、各領主がまともに領民数を申告しているとは限らないしね」

まあ、戸籍に関してはキアラとも相談して、調査を開始させているんだが、現在の王城の権限では領主に協力を依頼するしか出来ないのがもどかしい所なんだな。今年のおねだりにしてみようかな？

「そうか、それでも君は少なくても４０～５０万人の平民メイジを手に入れる可能性があるんだな？」

「ごっ！」

「僕が調べた限りだが、検査に同意してくれた”メイジでは無い”患者の約２０％が、潜在的なメイジだと思われるんだ。１００人程度の調査結果だから誤差は出るかも知れないけどね」

１００人がサンプル数として適当かどうかは、分からないが多少誤差が出たとしてもとんでもない数字なのは確かだろう。（前世のアンケートとかでは２０００人程度をランダムに選んで調査してい

たから、確かに少ないのかも知れない）

「しかし、５０万ね～。ちょっと信じられないな」

「そうだな、僕の感覚だと、ちゃんと領地を持っている貴族とその家族で２，０００～４，０００人程度、名前だけの貴族が３，０００～５，０００人、そして貴族の家臣と平民メイジが２０，０００～３０，０００人といった感じだからね」

「僕が持っているデータもそんな感じだな。合わせても４万人が一気に１０倍以上か・・・。ユーグさんの家族はメイジなのか？」

「ああ、それは調べたよ。ユーグさんの母親と妹が潜在的なメイジだった、父親はこういう言い方はしたくないが”非メイジ”だった。そして息子さんも多分メイジだな」

「そうか・・・」

「スティン、君はメイジの子供がメイジじゃないという例を知っているか？　勿論、実子でだよ」

私の事情を知っているから、態々実子を強調したエルネストだったが、確かに聞いた事が無いな。

「うーん、気にした事が無かったけど、聞かない話だな。貴族ならと兎も角、平民メイジには隠す理由が無いからな。特に”現在（いま）”ならね」

「僕も調べた限りは、メイジの子は皆メイジだ。それでだけど、例えば１人のメイジがメイジである事を捨てて、あるいは知らないま

ま家族を持って、その子孫達が自分達がメイジだと言う事を知らないままだったとしたら？」

「ありそうな話だな、貴族に手篭めにされた女性の話は幾らでも転がっているし、以前のブリミル教は平民メイジを認めていなかったという話もある位だしね」

「君が兵団を立ち上げる以前の平民メイジは、まあ、あまり長生き出来なかっただろうし、平民メイジとして家庭を持つのも難しかっただろうから、潜在的なメイジの方が多くて当然じゃないか？」

「そうだな、昔は平民メイジには生き辛い時代だったからな」

そこで、エルネストが急に声をひそめてこんな話をして来た。

「こう考えた事があるんだ、ブリミルが６０００年前にハルケギニアやって来て、そこからメイジが増えていったとしようか？」

「ああ、それで？」

「まあ、降臨から１０００年後位にさっき言った様な事が起こったとしよう。５０００年前から、潜在的なメイジが増えていったとしたらどうなっていると思う？」

「直感的に言って、かなりの潜在的なメイジが居ても良さそうだね」

「単純に考えて、２５年で子供を2人産むと計算しようか？　まあ、きりが良いから２００世代位だな」

「単純に、２人の子供が、夫々2人の孫で４人、曾孫で８人か？

そうすると、２の２００乗で平民メイジがいる計算になるな？」

「まあ、色んな要素があるし、統計学なんかは専門じゃないから、なんとも言えないが。２の２００乗って計算できるか？」

「電卓が欲しいな。天文学的な数字だろうね？　あ、２の１０乗で１０２４だったから、２の２０乗で約１００，０００か、３０乗でハルケギニアの総人口を軽く超えるな」

まあ、数字通りにはならないのは当然だが・・・？

「おかしいだろう？」

「お前、６０００年というのが間違っていると？」

「そう考えるのが自然だろうな、仮定が間違っていれば別だけどね」

「そんな事を公言したら、ブリミル教から暗殺者が送られてくるぞ！」

「僕達と同じ転生者がそんな事をするのかい？」

「うーん、ジェリーノさんは信頼できるけど、ブリミル教の信頼を貶める事はさすがに受け入れないだろうね」

私の”聖エイジス３１世”像は、ローレンツさんに聞いた限りだが、ブリミル教の権威（社会的な物では無く、宗教的な物だが）を貶める事を良しとしないと感じている。”ブリミル教は人々の心の支えであるべきだ！”と語ったそうだから、”支え”であり続ける為に、努力は惜しまないだろうな？

「分かった、今の話はオフレコにしておいてくれ。証拠も無い話だしね」

「分かったよ。全く君は昔から”マッド”だよな」

「ふん、常識に縛られて医学の進歩があるか！」

そう言うのが、”マッド”たる所以だと思うんだが、反省はしないらしい。

「君だって守りたい家族が出来たんだろう。もう少し慎重にな」

「そうだな・・・。ああ、領主の仕事を覚えろって、義父に言われているんだよな」

「まあ、カトレアを奥さんにして、婿入りしたんだから当然だろうね」

「これも家族を持った事の弊害かな？」

「公爵の所なら、しっかりとした家臣が居るだろうに」

「まあ、当面はそれで問題無いんだけどね。君の所の優秀な人材を、僕の下に回してくれないかな？」

「そんな事で、僕達の義父殿が納得するかな？」

「さあ、でも僕も公爵領を医術の先端と呼ばれる場所とするという目標が出来たからね、衝突はすると思うけど、納得してくれると思

うよ。何時か、この世界中の病人、怪我人がラ・ヴァリエールを目指してやってくる。そして、公爵領の出身者が、世界中で最先端の治療を行うとか夢見ているんだよ」

「なんだ、ちゃんと将来の事を考えているんじゃないか？」

１０年、２０年後のラ・ヴァリエール公爵領が楽しみになる話だな。私もうかうかしていられないぞ。

「まあね、だからこそ、今の公爵家の家臣じゃ都合が悪いんだよ」

「そうなのかい？」

「ああ、言われた事はきちんとこなすが、言われない事に気が回れないのさ。義父がきちんとしてるからそれでも問題ないんだけどね」

「分かったよ、独立心に富んだ人材を君の支援に回す事にするよ。そうだ、クロエはどうだい？」

「ああ、色々助けてもらっているよ。やっぱり魔法薬だけでは行き届かない所もあるからね」

「そうだ、そのクロエだけど、一度・・・、いや、こちらから行く事にする、少し借りるけど構わないかな？」

一度、クロエにもマカカ草を直に見て貰った方がいいかも知れない。思いつきだが、マカカ草の栽培が、発見される平民メイジ達を有効に活用し、かつ、彼らが自信を持ってメイジとして働くためには必要だと思えるからだ。（まあ、副王自身が夜遅くまで魔法薬の精製を頑張らなくても良くなる訳だがね）

「ああ、それは良いけど、副王様が簡単に王城を抜け出せるのかな？」

「ああ、今回は目を瞑ってもらうよ。君が示してくれたこの国の将来に関わる問題だからね」

「そうか、スティン、君だって立派に”副王”様をやっているじゃないか？」

「まあ、落第しない程度にはね」

キアラ先生は中々厳しいんだが。

「まあ、お互い頑張ろう。そうそう、ユーグさんの奥さんは誰だと思う？」

「うん？　僕が知っている女性なんだよな・・・、想像がつかないな」

「ユーグさんが君の為にここまで来てくれた理由が分かるんだけどな」

「そう言われてもな」

「まあ、ちょっと考えたいことがあるから暫く秘密にしておくよ」

そんな事を言って、エルネストはユーグさんの待つ部屋に行ってしまった。潜在的なメイジの見つけ方についてもう少し話をしたかったんだが、エルネスト自身は政治（少なくとも国政）には関わる

積りは無いのだろう。

第百二十話　ラスティン２４歳（マッド・ドクター？：後編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

百十八話に伏線があるのでユーグさんの奥さんは誰か想像がつきますよね？　何故明言しないかは、これも伏線ですよ。マッドらしい考察を期待してください。

第百二十一話　ラスティン２４歳（布石）（前書き）

第百二十一話ＵＰします。

第百二十一話　ラスティン２４歳（布石）

立ち去ったエルネストの事を気にしながら執務室に戻るとキアラが待ち構えていた。まあ、何時もの書類整理なんだが、今日は隠し玉があるからキアラのペースにはならないぞ？

「さっきのエルネストの会談で、興味深い提案を受けたよ」

「そうなんですか？」

ノリが悪いな？

「ああ、沢山の、そう、本当に沢山のメイジが手に入るかも知れないんだ」

「それは・・・、詳しく教えて頂けますか？」

「勿論だよ、キアラの意見も聞きたいからな」

私がエルネストとの会話の差し障りの無い部分を語って聞かせると、キアラはまるで自分の事の様に喜んでくれた。些か不気味なほど上機嫌になったのが逆に不安なのだが？

「キアラもメイジになりたいのか？　可能性としては2割程なんだけど？」

「その質問には答え難いですね。昔なら”はい”と答えたでしょうね」

「今は、〝いいえ〟なのか？」

「それは少し違いますね、メイジの私をラスティン様が必要とするかでしょうか？」

「ふむ、確かにキアラがメイジでも、そうでなくても、僕にとっては必要な人材には変わりないな」

「あ、ありがとうございます！」

「礼を言われる事か？」

「はい！」

良く分からないな、まあ、悪い感情を持たないなら問題ないかな？

キアラと相談して決めたのは、以下の通りだ。

1. 兵団から特に信用の置ける士メイジをエルネストの所に派遣して、魔法脳の見分け方を学ばせる
2. 公立学校の卒業生で、特に信頼の置ける人間をメイジかどうか診断する
3. 公立学校の在学生には健康診断という名目で、同様にメイジ診断を受けてもらう
4. メイジと判明した人達に事情を話して魔法学園に編入を勧め、メイジとしての教育を行う
5. 魔法学園の教師増員の為兵団を引退した人々を呼び戻す
6. 魔法学園の施設を増築する
7. 新メイジ達の為にマカカ草の増産を行う

基本的に、信頼できる所からメイジを発掘していく方針だ。まあ、今後は国中から集める予定だが、昔の様な不良メイジを増産するのは避けたいからな。

「分かりました、確かに兵団や、学校、学園に直接指示を出す必要があるのは認めますが、本当にラスティン様自身が、レーネンベルクへ向かうのですか？」

「ああ、多分、国を挙げての事業になるだろうからね。それに、マカカ草絡みは直接私が行かなくてはならないだろうな」

「その、杖の精霊の助言は当てになるのですか？」

「ああ、植物の意見を聞けるのは大きいだろうな、昔はちょっと聞きすぎて失敗した事もあったけど、今なら問題ないはずだ」

ニルヴァーナが怒りそうな意見だが、身に覚えがあるせいか沈黙を守ったままだった。

「しかし、レーネンベルク山脈は、ゲルマニアに近すぎます」

「だけど、説明した筈だろ？　この国で”ミネスト山”程の高い山は無いんだ。マカカ草の生育には多分高地である必要があるから、選択の余地は無いよ」

「はぁ～、分かりました。しかし、護衛はどうされますか？」

「それは、勿論、ガスパード達に任せるよ？」

「ダメです、足りません！」

「キアラ、それではあそこで重要な事が行われていると宣伝する様なものだぞ？」

「確かに・・・、仕方がありませんね」

キアラの表情が、何故か嬉しそうな気がした。これは釘を刺しておいた方がいいな。

「君が同行しても意味が無いぞ」

「・・・、ラスティン様は意地悪になられましたね？」

「事実だろう？　それに、キアラまで王城を離れられたら、方々で問題が起こるし」

「本当に仕方が無いですね、今回だけですよ！」

おお、キアラに勝ったぞ！　珍しい事もあるものだな。

「それにしても、国民の2割がメイジですか。頭が痛い事にならなければ良いのですが」

「そうだな、だけど、確実に”貴族”の力は減衰するだろう？」

「そうですね、ラスティン様の理想に一歩近付く訳ですね」

「何か言いたい事がありそうだな」

「はい、”貴族”や”王族”の方々が居なくなったら、この国はど

うなるのでしょうか？」

「簡単さ、皆、平民になるんだ。それとキアラは１つ勘違いをしているよ。私は何も貴族を全て無くそうと考えている訳じゃない」

「ですが・・・」

「結果的に貴族が居なくなるかも知れないけど、貴族として相応しくない人間が貴族をやるよりはマシなんじゃないかな？」

「そうでしょうか？」

まあ、キアラの心配も尤もなんだ、私自身の前世の話をキアラは全く知らない訳だからな。何時か、彼女にも話せる時が来ると良いんだがな。まあ、日本の政治制度をそのまま持ってくるのでは芸が無いし、この世界に相応しい政治制度を模索するくらいが良いかも知れない。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

珍しくキアラを説き伏せる事が出来た私は、早速行動に移った。陛下や枢機卿には、兵団の錬金隊の視察と慰問と説明したおいたが、問題が問題だけに、逆に発破を掛けられてしまった。

最初はエルネストの所へ向かった訳だが、義父となったラ・ヴァリエール公爵に挨拶をしない訳にはいかず、屋敷を訪ねたのだが、その辺りは割愛しよう。（公爵は、自分の理想の夫像を強制する傾向にあるよな？　もしかして、夫人に思う所があったりするのだろうか？）

ルイズの様子を確認しておきたかったのだが、公爵夫人と何処か

へ出かけているらしく会うことは出来なかった。しかし、”訓練に行っています”と教えてくれたミレーユさんの表情は少し気になった。

エルネストはエルネストで、”メイジの見分け方なら君でも大丈夫だろう?”とか言い出すし、納得させるのに苦労した。クロエを借りる方は何とかなったから問題ないだろうな。

「クロエは旅をした事は多いかい?」

「いいえ、でも、結構好きです!」

「そうか、それは良かった」

「でも、あのマカカ草ですけど、私の知識が役に立つでしょうか?」

「ハーブの類の知識も持っているんだろう、それなら、十分に役に立つよ」

「はい!」

クロエを伴って、ミネスト山を登るのは結構大変だったが、久々に山歩きが出来た私としてはこれだけで満足だった。

「これが、マカカ草ですか・・・」

「何か分かるかい?」

「えーっとですね、高原で採れるハーブって言う事で”ムルサルスキー”というハーブを想像していたんですけど」

「うん」

「かなり似ていますね。バルカン半島の高山植物だった筈ですけど、”幻のハーブ”とか呼ばれることもありましたね」

「そうか、やっぱり高原の植物だったんだな」

「そうですね、栽培は難しそうです。私もそちらには詳しくないですし」

「いいや、確認出来ただけでも上出来だ、ありがとう」

「いいえ、ラスティンさんにはお世話になっていますから恩返しが出来ればいいです」

＝＝＝

クロエに護衛をつけて、エルネストの所へ送り返した後、私は久々に実家を訪れる事にした。まあ、護衛の多くはマリロットで泊まる事になった訳だが、ニルスは久々に実家に顔を出すそうだ。

私は、ガスパードを連れて自宅に戻った訳だが、両親に色々報告する事で、半日程費やしてしまったのは予定外だった。（母には本当に色々な事を聞かれたのだが、これも割愛だな）

久々の夕餉は何と言うか、子供が多い為かかなり賑やかだったが、私とガスパード以外は気にしていなかったから、これが普通なのだろう。育ち盛りの、ライル、ジョゼット、テッサは楽しげに話しながら、どんどん食事を食べていった。（ああ、こういうのもいいな。後で、ライルだけでも王城に顔を出すように頼んでおこう）

夕餉で気になったのは、弟のノリスとジョゼットの師匠役のセレ

ナの関係なのだが、この辺りは、大人の事情っぽいので黙殺する事にする。セレナが師匠役をきちんとこなしてくれているなら、私としては口を挟む気は無い。

明日は、マリロットへ向かい兵団本部、魔法学園、そして公立学校と回るから、ハードスケジュールなのだ。明後日は、ジョゼットの修行の成果を見せてもらうことにしたのだが、こちらはあまり期待していない。何と言っても、ジョゼットはまだ小さな少女で、攻撃手段は少ないからな。

「平民の２０％がメイジの可能性があるですと！」

「まあ、可能性の話ですけど」

「ふむ～」

「あの、ローレンツさん？」

「ああ、失礼しましたな。私はもう商人を辞めた筈なのですが、こんな美味しい話はありませんから、つい。今は理事長として考えなくてはな」

「そうですね、そちらでお願いします」

ああ、この話を息子のロワイエさんの方が知ったら、どうなるだろうか？　隠れたメイジ達の待遇の面も考えないと引き抜かれるかも知れないぞ？

「しかし、性格重視と言うならば、高等学校の卒業生も考慮に入れたほうが良いかも知れませんな？」

「ああ、高等学校の生徒は、魔法研究でも専攻しない限りは候補に入れませんよ？」

「何故ですかな？」

「彼らには、魔法以外でその才能を発揮して欲しいですからね」

「なるほど、魔法に縛られるのは、才能の無駄使いと言う訳ですな」

「はい、国としてはメイジに頼る形になりますが、それを支える人材も重要ですからね」

「・・・、承知しました。ラスティン殿の方針に乗ってみることにしましょう。ただですな・・・」

「何でしょうか？」

「余り、メイジをワーンベルに集中させるのは避けた方が良いかも知れませんな」

「しかし、材料となる岩石等は、平地が多いこの国では恒久的に採掘するのは難しいでしょう？」

「露天掘りはどうですかな？」

「ただでも少ない国土を削る事になりますよ？」

活火山でもあれば一番話が早いのだがな。国中に人工的な池や湖が沢山出来るのも、あまり歓迎出来ないからな。

「しかし、ワーンベルだけでは無理があるのは確かでしょう？」

「・・・、そうですね。レーネンベルクだけに富が集中するのは良くないですし、危機管理の面でも確かに・・・」

この点についてはキアラも危惧していたな、しかし・・・・

「レーネンベルク山脈なら削っても問題ありますまい？」

「まあ、あれだけ大きな山脈ですからね」

「それならばレーネンベルクを起点とした、物流網を作るのはどうですかな？」

「物流網ですか、高速道路なんかは意味が・・・、ああ、鉄道ですね」

「そう、丁度、我々の同胞に、詳しい人間が居ましたな？」

「はい、リッテンの事ですね。そうか、そこまで考えていなかったですが、良いですね。王城に協力的な貴族の所だけに、駅や工場を作れば・・・」

「ははは、その辺りは副王様にお任せしますよ」

「いいアイデアをありがとうございました！」

トリスタニアに帰ったら忙しくなりそうだな！　風石機関の研究を一時的に止めてでも、鉄道の計画を進める必要があるかも知れないな。

第百二十一話　ラスティン２４歳（布石）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／５／２４
相応しい－＜相応しくないに修正

第百二十二話　ラスティン２４歳（はじめての拳銃作り）（前書き）

第百二十二話ＵＰします。

第百二十二話　ラスティン２４歳（はじめての拳銃作り）

魔法学園の方は、問題なく話が進んだ。メイジとしての腕を上げる事が目的の学園だから、隠れたメイジ達が魔法を使えるようになるのも早いだろう。教師役も補強する事で、かなりの人数を受け入れてくれると学園長のクロードさんが自信を持って約束してくれた。

兵団本部も、兵団長のマティアスが、”私の静かな老後が～”とか言っていた以外は問題無かった。（マティアスに静かな老後は似合わないと思うのは、付き合いが長いからだろうな）

＝＝＝

「えいっ！」

「たあ～」

「くっ」

そして翌日予定通りに、ジョゼット達の修行を見学させてもらっている。先程、学校から帰ってきたライルも含めて、３人の子供達が入り乱れて、木製の短剣を振るっている。といっても素振りとかではなく、本気で当てに行っているんだよな。（ノリスが当初心配したのも良く分かる）

「よーし、休憩にしましょう」

「３人とも怪我の治療をするから、こっちへ」

セレナ師匠の合図で訓練が終わり、ノリスが早速治療に入った。

「どうかしら、スティン？」

「ああ、結構本格的だな」

「ああ、型とかはもう卒業したからね。貴方の弟が居てくれて助かるわ」

セレナがノリスにちらりと目をやった。

「それで、修行の成果はどうなんだい？」

「無茶していると怒られると思ったんだけど？」

「いや、無茶は承知だからね。ノリスもテッサも納得しているんだろう？」

「ええ、何とかね。さすがにこの歳じゃ、限界があるけど、普通の大人に襲われても対処出来る程度の腕は、３人とも持っていると思うわ」

「そうか、ジョゼットの魔法の方は？」

「そっちは凄いわよ？　ドットスペルなら、完全に打ち消せるわね」

「そうか・・・」

「ラインスペルでも、かなり効果を抑えられるわね」

「どうも、勿体無い感じがするな？」

「えっ！？」

「そうだな、魔法の効果を打ち消すのも重要だけど、呪文の発動を妨害したり、魔力を暴発させたり出来ないかな？」

「また、随分と難しい注文ね？」

「ディテクト・マジックで魔力の構成が見えれば・・・」

「そう、あの娘はまだなのよ。でも確かに、面白い提案よね。もう一度コモンマジックの修行を再開してみるわね」

「ああ、頼むよ」

＝＝＝

その晩、居間で寛いでいる家族達の中から、ジョゼットだけを客間に呼び出した。他の家族たちは気を使ってくれたようだ。

「ジョゼット、今日の修行は見せてもらったよ」

「うん」

「ジョゼットは僕を恨んでいるかな？」

「えっ？」

「今の厳しい修行をセレナに頼んだのは僕だって聞いているよね？」

「うん、でも、でもスティン兄だって、私の事を思って師匠を呼んでくれたんだよね？」

「そうだね」

「だったら、頑張る！　私頑張ってみせるよ！」

「そうか、多分明日からセレナが魔法の修行自体を再開すると思うけど、どうかな？」

「魔法・・・」

ジョゼットはやはり自信が無さそうにしている。魔法が打ち消せても、攻撃力が伴わなければ、防戦一方だからな。この娘の今の体格では、剣なんかで致命傷は余程の運が無ければ無理だろうし。やはり、小型の拳銃とかが、良いのだろうな。良い機会だ、セレナに話を聞いてみるか？

＝＝＝

「まあ、夜中に貴方が訪ねて来るなんて、色っぽい話じゃないと思っていたけど・・・」

「で、どうなんだ、ジョゼットに使えそうな小型の拳銃とかあるのか？」

普通に出回っているフリントロックの拳銃では具合が良くないからな。

「普通にある拳銃じゃ、扱うのは難しいでしょうね」

そう言って、セレナは自分の荷物をひっくり返し始めた。そして、目的の物を見つけたのか、私に1枚の設計図を見せくれた。以前セレナが開発した後詰め式の銃を小型化した物の様だ！

「こんな物があるなら、言ってくれれば良かったのに」

「良く見てみなさい・・・」

設計図を見てみたが、イマイチ問題点と言うのが分からない。

「はぁ、銃弾の問題よ。今のじゃ大きすぎるの、速射性と言う程でも無いけど、練習すれば結構早く撃てる筈なんだけどね。命中率もかなり上がるはずなんだけどね～」

成る程、銃弾の問題だったか。小さな銃弾を作れば良いのだが、そう簡単に行かないのが錬金の困った所なのだ。やってみると分かるのだが、意外と設計図通りに物を作るのは難しいのだ。逆に頭の中で考えた通りの物を作ったり、現物が目の前にある場合は、かなりの精度が出せると言うのが面白い所だな。

加えるなら、現物が目の前にあっても、これを倍や半分の大きさで作れと言うのも難しい。やはりこの辺りはイメージ力の問題なのだろうな。（この辺りは私は意外と得意なのだがな）

「分かった、銃弾を作ってみるよ」

「出来るの？」

「さあ、でも何とかするのが兄としての役目だろう？」

「兵団の錬金隊のメイジに頼んでみたけど、難しいって言われたわよ？　それに危険だって」

試射の事を言っているんだろうな、だが、気持ちは固まっていた。まあ、メイジにとって外傷は痛いだけの物だし、工夫すれば良いんだからな。

「その顔は、あの時のノリスのそっくり！　全く貴方達兄弟と来たら！」

何だかやばい雰囲気だぞ、聞いてはいけない事を聞かされそうだし、八つ当たりまでされそうよな。ここは撤退あるのみだ！

「じゃあ、セレナ。この設計図は借りておくよ！」

「あっ！　待て～」

辛くもセレナの魔の手を逃れて、自室に戻った訳だが、セレナが何を言いたかったかを考えずには居られなかった。セレナとノリスがそういう関係になるのは自然な事かも知れないが、何故か辛そうなセレナは見たくなかった。

＝＝＝

短い実家への帰省を済ませて、私はワーンベルを訪ねる事になった。公の理由である、錬金隊への慰問は、着いた当日に済ませてしまった。錬金隊の隊長、そして新工場長となったシモーヌが見事な統率力を見せてくれたのが印象に残った。（まあ、副隊長として紹介された数人の中にあのシルビーさんが居たのも驚いたが）

マルセルさんにも久々に会う事が出来たが、色々苦労話を聞かされてしまった。正式に代官となっただけに気苦労が多いのだろうな。そのマルセルさんに更に苦労をかける事になるが、まあ、キアラ程ではないが優秀な部下を送る事にしよう。

ワーンベルは、私にとって”要”になる場所なのは変わらないからな。それに、トリステインの将来にとっても”要”になるのだからな。

今後のワーンベルの在り方をマルセルさんに説明したら、本気で悩んでしまった。まあ、父にも了解を得ているし、マルセルさん自身の能力も問題無い筈だが、ストレスとか大変そうだな。クロエ辺りに依頼して、ストレスに効く薬でも作ってもらおうか？（カロリーヌの魔法薬、あれはダメだ、マルセルさんに今何かあったらどうする！）

＝＝＝

私に与えられた時間は1週間だった。新工場長から借りられた人手は5人だけだったし、期限付きだった訳だ。今の時期に個人的な事情で錬金隊から人を引き抜くのは確かに非常識だから、5人を1週間でもマシな方だろうな。その代わり優秀なメイジをと依頼した所、顔見知りの女性が兵団員を率いてやってきた。

「ラスティン様、ご無沙汰しています～」

「シルビーさん、貴女が来てくれるとは思いませんでしたよ」

「シモーヌちゃんったら、急にこんな所に行けって言うから、何事かと思いましたよ～」

シモーヌちゃんね、まあ、シルビーさんは相変わらずらしいな。確かに旧市街のこちらの”工場”に呼ばれれば何事かと思うだろうな。まあ、色々実験をする都合上”ここ”を使うことにしたのだがな。

「皆さん、これを見てもらえますか？」

「これは、”機銃”の銃弾ですか～？　でも、何だかちっちゃくて可愛いですね～」

昨晩とりあえず錬金してみた、試作品の銃弾を見せたのだが、可愛いか？　しかし、これを一目で”銃弾”と見分けるとはシルビーさんも、機銃の銃弾の生産に関わっていたのか？　見かけによらず本当に優秀な錬金メイジなんだな。

「シルビーさんの指摘通り、これは銃弾です。弾丸、薬莢、雷管はありますが、火薬が直ぐに手に入らなかったので、これ自体は銃弾としては使えませんが、皆さんにはこれに用意した火薬を詰めた使用可能な銃弾を作って頂きます。試作品なので改良の余地が多いでしょうが、そこは随時改良していきたいと思います。意見があれば遠慮なく言ってください」

「あの～」

「何ですか？」

「この銃弾を撃つ銃はどうなっているんですか～」

「良い指摘ですね、銃弾製造の目安がついたら、この設計図を基本として作りたいと思います。こちらも改良をしたいと思います」

「お話を聞くと、結構大変そうなんですが～？」

「そうですね、但し、錬金メイジにとっては、難しい事では無いと思いますが？」

シルビーさんを始め、５人のメンバーは些か不安そうだった。確かに時間が無さ過ぎるからな。私は考えていたスケジュールを話す事にした。

1. 試作銃弾の量産及び発射試験
2. 試作銃弾に合わせた、小型拳銃の試作
3. 試作銃弾の改良と小型拳銃の微調整
4. 小型拳銃での試射
5. 小型拳銃の改良
6. 総合的な耐久性試験

まあ、一日一工程とタイトなスケジュールだが、目標を明示した事で、その場の雰囲気が変わったのが分かった。今日は早速1を始める事になったのだが、意外な事にシルビーさんがリーダーシップをとってくれた。時間が無い焦燥感をシルビーさんのこの口調が和らげてくれる事を期待しよう。

第百二十二話　ラスティン２４歳（はじめての拳銃作り）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百二十三話　ラスティン２４歳（蓮根）（前書き）

第百二十三話ＵＰします。

食べられないレンコンの話です。

第百二十三話　ラスティン２４歳（蓮根）

そして1日目だが、試作銃弾の量産については、弾丸と薬莢＋雷管の生産と、それを備蓄してあった火薬を込めた上で銃弾として組み上げるの計3人のメイジが当たる事になった。てっきり全員でそれぞれの工程を順番に行うんだと思っていたが、1つの部品は出来る限り1人の手で作った方が狂いが少ないという事から、こう言うシフトになった。

出来た試作銃弾を残りの2人が片っ端から試射していった。試射が危険だという事は分かっていたから銃弾を固定する台座を作り、そこに銃弾を固定して、人間大のゴーレムに金槌を持たせて撃針代わりに雷管を叩かせた。最初の頃は銃弾が文字通り爆発したり、逆に不発を連発した訳だが夕方頃には何とか9割強の銃弾が無事に発射出来る程になった。（火薬の量や、薬莢部の厚みの調整がなされた様だ）

私が何をやっていたかと言えば、ぼーっと見ていた訳では無く、小型拳銃の試作の方に入っていた。まあ、設計図を一番長く見ているのだからこの役目が私自身に来るのは分かっていたから、頭の中で何度も想像していたので形を作るのは簡単だった。セレナが考案したのは”元折単身”式の拳銃だったのだが、素材は勿論チタン製で、強度を必要としない部分はアルミを使用した。

そこまでは良かったのだが、試しに銃身を折って銃弾を込めようとしたのだが、口が小さすぎて銃弾が入らなかった。この程度は予想済みだったから、成形（フォーム）で銃口を大きめにしたのだが、大きくなりすぎたりして、何度か変形させているうちに、銃身が微妙に曲がってしまった。

「これはダメだな」

「どうしました～、ラスティン様？」

「見てくださいよ、この有様です」

「うーん、結構曲がってますね～」

シルビーさんの主観では結構らしい、微妙にショックだな。

「くすっ」

「シルビーさん？」

「ごめんなさ～い、ラスティン様でも、こんな初歩的な失敗をするんだな～って思うと可笑しくって～」

「初歩的ですか？」

「はい、こう言う筒状の物を作る時は～、芯を用意すると良いんですよ～。銃弾の太さに合わせた真っ直ぐな棒を作ってですね～」

「棒・・・？」

「そうです、その棒を包み込む感じで成形（フォーム）するんですよ～」

「でもそれだと、棒が残りますよね？」

「そうですね～。今度は棒の方を成形（フォーム）で細くして抜き取るんですよ～」

「ああ、成程！」

こう言うのが、現場の知恵なんだろうな。指示だけ出している人間には、中々分からない物だ。シルビーさんの色々な助言で何とかその日のうちに試射出来そうな小型拳銃が出来てしまったのは驚きだった。理論だけのメイジと日々技術を磨いているメイジの差を見せ付けられたな。まあ、シルビーさんも短期間で何とか形にしてしまった私の驚いた様だからお互い様なんだがな。（前世でＣＡＤなんかを使って３Ｄのモデリングをして遊んだのと、機銃の構造を理解しているのが、こんな所で役に立った訳だ。ＣＧとかがワイヤーフレームを基礎にしている理由がよく分かった気がするぞ）

＝＝＝

そして2日目の朝から、早速試射を開始した。例によって、台座に固定した拳銃の引き金をゴーレムに引かせたのだが、これが中々上手く行かなかった。どうやら撃鉄の力が弱すぎる様だが、引き金を重くするのは避けたかった。結局雷管を小さくする事で対応したが、昨日の晩に作った銃弾が無駄になってしまった。（まあ、銃弾の作り直しをしている間に、引き金を重くした拳銃も作る事にしよう。発案者のセレナにプレゼントすれば機嫌が良くなるかも知れないしな）

結局、銃弾の再作成で前倒し出来ていた工程が、予定通りになってしまった訳だが、４日目には何とか満足の行く試射結果が得られた。非力な女性のシルビーさんでも近い目標なら当てられる事が確認出来た。

だが、問題が残らなかった訳では無い。機銃を知っている人間としては速射性は不満が残る、銃身を折って薬莢を落とし、新しい銃弾を詰めるとなると手間取るのだ。

銃弾の精度の問題か不発となる銃弾がかなり出てしまうのも問題だな。命中度の低さもまあ、問題かも知れないが、そこは慣れで何とでもなる気がする。こうなると、回転式拳銃（リボルバー）が理想だな、弾倉が面倒だがやってみるか。指摘されて気付いたのだが、メイジが使う銃器ならば予め固定化（フィックス）をかけておけば、耐久性は大幅に増すのだから、その辺りは省略出来るからな。（ジョゼットが魔法を使えないままだったとしてもその隣には絶対テッサが居るはずだから問題ないだろう）

チタン製のレンコンもどきを作るまでは簡単だったのだが、これってどうやって回すんだ？　６人のメイジが顔を突き合わせて、どうやって弾倉を回すか議論する事になった。（こんな事なら、ミネット辺りに話を聞いておくんだったな）

「ああ、こう言う時にあれが役に立つな」

「どうしたんですか？」

「いや、こっちの話だよ。弾倉の動作はちょっと考えがあるから明日まで待ってくれ」

「そうですか、それなら動かさないままでの試射を進めておきます」

メイジの１人とこんな会話をした後、夜になると、王城に残っているノーラに”声を伝える者”で連絡を取り、翌朝ミネットと連絡を取る事に成功した。早々にダブルアクションを再現するのは諦めたが、音声だけで構造を伝えるのは難しいのが良く分かった。（おまけで、ミネットが少年時代？モデルガンを分解しまくっていたのも分かってしまったが、まあ、これはいいだろう）

多少怪しいがシングルアクションの回転式拳銃（リボルバー）が次の日の昼過ぎ

には完成した。構造的にどうしても十分な小型化が出来なかった為、リボルバーの方はジョゼットがもう少し成長してから使わせる積りだ。

結局６日で、何とか使える小型拳銃を作り出すことが出来た。予備を含めて、”元折単身”式の拳銃が３丁と回転式拳銃（リボルバー）が２丁だが当面この技術を広める予定は無いので、十分だろう。銃弾も１５０弾程用意する事が出来た。後は定期的に銃弾を製造してレーネンベルクの屋敷に届ける手配をして終わりだった。（考えてみると、実に充実した６日間だったな。必要なのは分かっているが、書類整理ばかりだと、やっぱり飽きる物だ）

＝＝＝

予定外の拳銃作りで余計な時間を取ってしまったが、本来の予定を進める事が出来る様になった。レーネンベルク山脈の視察なんだが、レーネンベルク領の北西側が岩場が多くココから石材を採掘出来る事が分かった。地理的にはゲルマニアに近いのが気になるが、ここを起点に鉄道を引く事にしよう。この位置からならば、ワーンベルヘもマース領ライデンヘも行けるな、この３点を結ぶ形で実験線を作るのが良いかも知れないな。いや、いっそのことマリロットまで延長したいな。

おや？　本来の目的はこれだったか？　違う！　レーネンベルク山脈でマカカ草が育てられるかだったな。（うむ、色々あって、忘れる所だったぞ）

一度、ワーンベルに戻って、翌日レーネンベルク山脈に登る事にした。折角なので、”アリエの大樹”の所にも顔を出そうと考えていたのだが、そこで予定外の事が起こった。別に危険だったとか言う訳ではないので安心して欲しい。

キアラに何か言われたらしく、護衛を無くす事が難しかったから、ガスパードとニルスだけを伴って登山を開始した。登山と言っても、大体の位置は分かっているので飛行(フライ)で直接”アリエの大樹”の所へ飛んで、挨拶をして情報を得た後、更に高地を目指す予定だった。

『ラスティン、おかしいわ！』

『ニルヴァーナ、どうしたんだ？』

『一度山麓に戻った方が良いわね』

『？　分かった、そうするよ』

私は後を付いて来ている2人に身振りで合図をして、来た経路を引き返す事にした。ニルヴァーナの口調は無視するには真剣すぎたからな。

「ラスティン様、どうかしましたか？」

「ニルス、心配は要らないよ。ただ、歩いて登る事に予定変更だ。ガスパードも良いか？」

「ああ」「はい」

2人の同意をとって本当に登山を開始したんだが、あまり登らないのにニルヴァーナが再度警告を発してきた。

『おかしいわね、こんな所に結界なんて』

『アリエの大樹の結界かな？』

『そうなんだけど、そうじゃない感じかしら。後ろの2人は本気で帰した方が良いかもよ?』

『帰るかな?』

『それは、ラスティンが何とかする問題よ』

ニルヴァーナの言い分は確かに尤もだな。結界となれば、他からの介入は考え辛いから、何とか説得してみよう。2人が結界内で遭難とかは避けたいしな。

何とか結界の説明をしたが、納得はしてくれなかったのだが、無茶を承知で結界内に踏み込んだ2人が何故か直ぐに戻って来た事で、妥協してくれた。(真っ直ぐ山道を進んでいた筈なのに何故か元の位置まで戻ってしまったらしい。手を繋いでとか言い出したが、それでは咄嗟の事態に対応できないと反論する事になった訳だ)

第百二十三話　ラスティン２４歳（蓮根）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百二十四話　ラスティン２４歳（セキュリティ）（前書き）

第百二十四話ＵＰします。

第百二十四話　ラスティン２４歳（セキュリティ）

結界内に入ると、以前の様な違和感を感じた。また常識を疑うような進み方をして”アリエの大樹”の元へ行く事を覚悟したのだが、結界内をしばらく進むと、聞き覚え?のある念話が私の耳に届いた。

『どうしたのかな、また枝を切ってくれるのかのう?』

『アリエの大樹の精霊ですね?』

『そうじゃよ』

『以前より”結界”が広がっていませんか?』

『そのようじゃな、まあ、ワシの下まで来るが良いじゃろう。お前さんが”挿し木”したワシの分身が近くに居るから、その葉を一枚持って来るが良いよ』

『分かりました』

分身か、それに”挿し木”した木の葉を持ってどうなるんだろうか?　近くに確かに見覚えのあるアリエの若木があったから、それから一枚葉を拝借して懐に入れると、結界内で感じていた違和感が薄れた気がした。

「あれ?」

『どうしたの?』

「なんだか、結界の影響が減った気がするんだよ」

『そうなの、試しにこのまま道を進んでみたら？　危なくなったら声をかけるから』

ニルヴァーナの提案通り、山道を進んだが、今度は殆ど結界の影響を受けなかった。殆ど苦労することなく”アリエの大樹”の下へたどり着く事が出来てしまった。葉っぱ一枚でここまで違うのだな。

「ご助力感謝します」

『何々、容易い事じゃよ』

「それより、”結界”の件ですが？」

『ふむ、ワシ自身も分からない所があるがの。お前さんが”挿し木”をしたワシの枝は、ワシ自身なんじゃよ。枝が根付いた頃からかのう、自分が何本も居る感覚がしてな。そう思って”周り”を見渡すと、見た事も無い景色が見えてな』

「成程、それで”分身”という言い方をしたんですね。結界も勝手に広がってしまったと言う所ですか」

『おおう、話が早いのう、その通りじゃよ』

「余計な事をしてしまったでしょうか？」

『いいや、これはこれで面白い物じゃよ。動けない身体で、色々な場所を見えるというのは、良い経験じゃな』

「それは良かったです」

『ところで、お前さんは何をしに来たのかな？』

「実は、”これ”に関する話です」

そう言いながら、懐から小さな袋を取り出して、掌に中身の種子を少し出した。

『それは、どこの子かのう？』

「ミネスト山と言っても、人間が付けた名前ですから分かりませんね？　ここから南に歩いて3日程のかなり高い山があるのですが、そこに生えている草でマカカ草と呼んでいます」

『ほうほう、それで？』

「このマカカ草をこの山脈で育てたいのです。ただ、この草は高原が適しているらしくて」

『高原とな、それではワシが知らんでも不思議はないのう。鳥達もあまり高い山からはやってこんしな』

「この草を、この山脈で育てたら、どうなると思いますか？」

『さあ、ワシにも分からんよ』

あっさりと、回答が返って来てしまった。この精霊でも分からないか。まあ、種は多いから試しに植えてみるしかないないか？

『役に立たなくてすまんのう』

「いいえ」

『あのお爺様、ラスティンに力を貸してくださる気はございますか？』

『杖の精霊がそこまで気に入っているか、面白い”人間”の様だし、手を貸せる事なら構わんよ？』

最近出番が少ないニルヴァーナがここぞとばかりに話を進めていくのだが、どういう積りだろう？

『お爺様の枝を、今度は多めに頂きたいのですが？』

『ふむ、杖にするとも思えんが。また”挿し木”かな？』

『はい、出来れば広い範囲を結界で封鎖したいんです』

２人？の精霊の会話が進むにつれて、ニルヴァーナの意図が掴めて来た。彼女はマカカ草の栽培場をアリエの大樹の結界で封鎖してしまおうと言っているのだ。結界内に入れるのは大樹の葉を持った人間だけと言う訳だな。精霊的なセキュリティーシステムと言えるかも知れない。

「ニルヴァーナ、何故あんな事を思いついたんだい？」

『うん、ラスティンが王城へ移ってから、キュベレーが”警備”を始めたじゃない？』

「そうだね、君だって精霊の侵入を教えてくれたんだから役に立ってくれているよ？」

『ラスティンはそう言うけどね、”先輩”としてのプライドが許さないのよ』

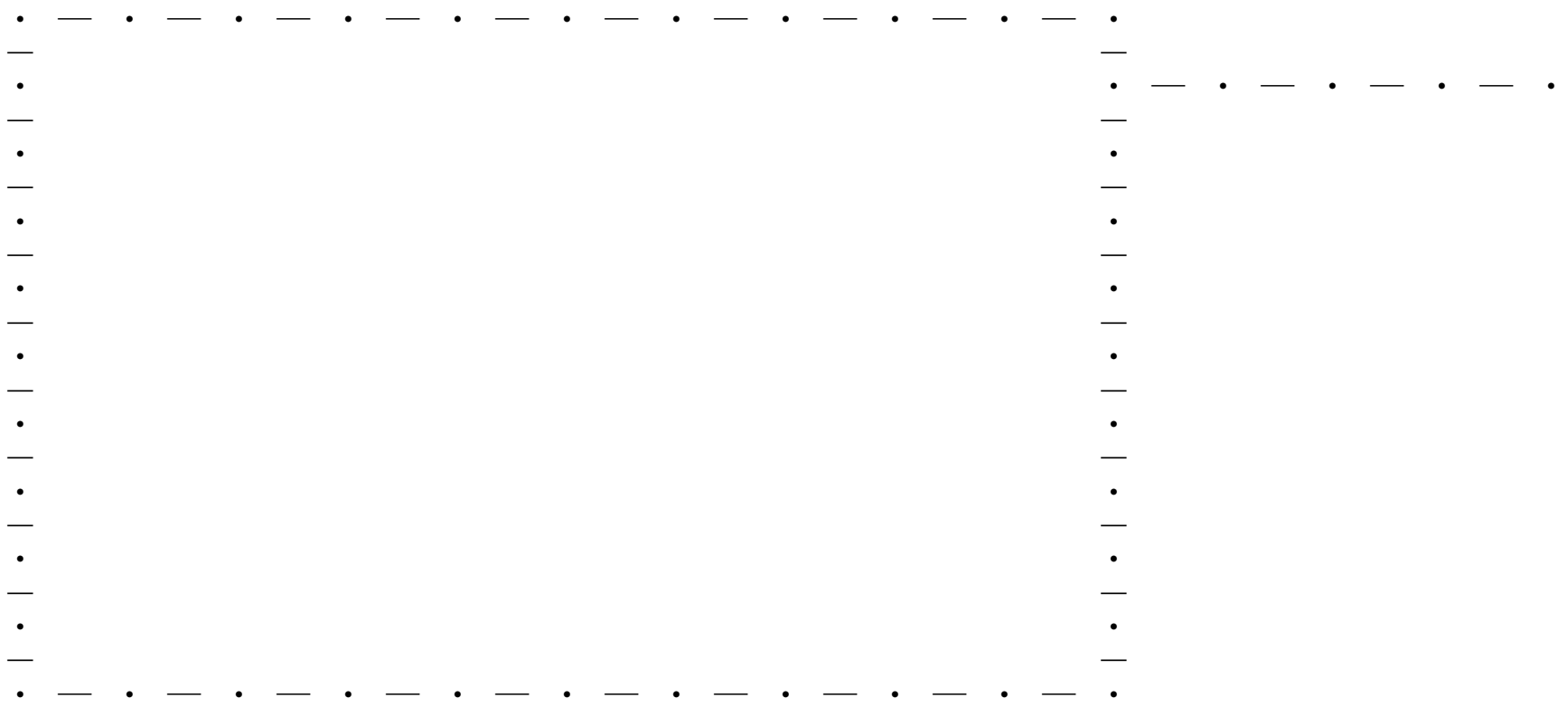
分からない論理だな、特に問題ないから、気にしないでおこうか？　だが、この方法なら、他の精霊達の目さえ誤魔化せるというのは実に面白いんだがな。

『それより、マカカ草の種を何処に蒔くか考えた方が良いんじゃない？』

「そうだな、もう少し上に登るか」

大樹から貰い受けた枝は、凡そ５０本だったから、こんな感じで”挿し木”をしてみる予定だ。

―・―・―・―・―・―☆



まあ、地形が平坦ではないから、予定でしかないがな。”―”の１辺は凡そ１００～１５０メイル程度にしなくてはならないそうだ。前回の”挿し木”の経験から２００メイル程が適切らしいのだが、今回の枝がかなり小さめなのを考慮している訳だ。電波の中継基地を設置する感じで”大樹”から山頂方向に向かって”挿し木”を繰り返して行き、ある程度の高度の所で１リーグ×１リーグ程の場所を確保するのだ。

しかし、その土地選びがまた大変だった。土地選び自体が今回の計画の成功を左右する為、飛行（フライ）で上空から観察してみたのだが、マカカ草の群生した様な場所を見つけるのは難しかった。次善の策でかなりの広さの湿原があったから、そこを目標にする事にした。

”大樹”の力を引き込む為の”導線”は距離を稼ぐために可能な限り直線的に植えて行った。今回はどうしても根付かせる必要があったから、土壌改良だけではなく”成長促進”系の水、土魔法も使うことにした。問題の湿原を囲むように”挿し木”をしている間に、念話で呼び寄せておいたキュベレーも到着した様だ。

『お姉さま、凄い発明です！』

『ふふん、まあね～』

等と会話？をしている精霊達を横目に、私は湿原を囲む様に”挿し木”を続けた。キュベレーの助けもあって、湿原を結界で覆う事は出来た。試しにＩＤ（大樹の葉）を持たずに湿原に入ろうとしたが、上手く行かなかった。効果は上々の様だが、心配になって上空から攻めてみた。

結論を言えば、全く冗談にならないが墜落しそうになった。丁度５０メイル位の高度まで浮遊（レビテーション）で浮き上がり、結界内部に向けてふよふよと斜めに降下しただけなのだが。多分３０メイル程の高度まで来た所で、急に上下感覚がおかしくなってしまったのだ。

魔法を維持する事は難しいと咄嗟に判断して、一度浮遊（レビテーション）を解除し

て再度呪文を唱えなおして、事無きを得たのだが、飛行(フライ)で飛び込んでいたり、墜落する経験が豊富？な私でなければどんな事になっていたか想像したくないな。（先程は警告してくれたニルヴァーナに感謝だな）

＝＝＝

『ラスティン、さっきは空中で何遊んでたんですか？』

『ぷっ！』

「キュベレー、あれは、別に遊んでいた訳ではないよ。結界の影響で、酷い目にあったんだよ」

『そうなんですか？』

事情を知らないキュベレーに妙な事を言われ、ニルヴァーナには笑われてしまったが、まあ、効果を実感できたのは良かった事だろう。３０メイルというのは、”大樹”の高さ位か、何か関係があるのかも知れないが、あの高度であれば、フネや飛行機の運行には影響は出ないだろうから、問題は無いだろう。（最近は少し人間の機微と言う物が分かって来たかと思ったが、キュベレーにはまだまだ経験が必要なようだ）

キュベレーとニルヴァーナの協力で、マカカ草の栽培場の手配だけは済んだのだが、実際マカカ草の種が芽を出すか？　そして、きちんと効用が残るかは、まあ、”始祖ブリミル”のみぞしると言った所なんだろうな。ミネスト山に常駐している兵団員を半分程呼び寄せる事にしよう。後はワーンベルの兵団員の中で、施設隊特に、植物の世話をやった事がある団員を引っ張ってくるだけなんだがシ

モーヌを説得するのは大変そうだな・・・？

うん、どうも私は新工場長（シモーヌ）が苦手らしいが、その原因が彼女の性格がキアラに似ている所じゃないかとふと思えた。私に容赦が無いとか、論理的に物事を進めて行き、結果を出してしまう辺りがそっくりだよな？（例の兵団員誘拐事件の経緯を聞いてそんな事を思ったが、キアラとダブって見えるとは思っていなかったな）

鉄道の準備として線路の設置や、マカカ草の栽培等を指揮するのは兵団長のマティアスでも荷が重いと思うが、現場に一番近くある程度の地位、そして指揮力があるのはシモーヌ工場長なんだろうな。マティアスが指揮すれば引退が１０年単位で遠のくし、代官のマルセルさんでは、現場の指揮は難しいだろうからな。（やはり父を後見にして、シモーヌに動いてもらうのがベストだと思う）

第百二十四話　ラスティン２４歳（セキュリティ）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百二十五話　ラスティン２４歳（百発百中！）（前書き）

第百二十五話ＵＰします。

第百二十五話　ラスティン２４歳（百発百中！）

「ラスティン様の仰りたい事は分かりました。公爵様には？」

「勿論話は通してあるよ。レーネンベルクの家臣がトリステインの為に働くと言うのが納得できないかな？」

「兵団の人間がその程度の事を気にすると？」

「じゃあ、何を渋っているんだ？」

「私にも分かりません、あまりにも話が大きすぎて・・・」

「勿論、マティアスや、父、そして国からも支援を約束する」

「そうですか、それならお話はお受けします」

そう言ったシモーヌだったが、まだ何か気になることがあるようだ。

「まだ、何か心配事があるみたいだな？」

「これは、お願いなのですが、旧市街の工場を開放していただけませんか？」

「あそこは・・・」

「機密事項に干渉しようとは思いませんが、工場街の方でも場所が足りていません。現状では、新たな工場を作るのも難しいでしょう」

「今は、”四直三交替”で回しているんだったね？　これ以上は無理か・・・、分かった、あそこを開放しよう。まあ、各地での工業品が作れるようになれば、今の状況は改善出来ると思う」

「そうですね・・・」

「まだ、心配事が？」

「・・・、これは、個人的な感想ですが、レーネンベルク外部で、兵団、いえ、平民メイジは上手くやって行けるでしょうか？」

「そうだな、だが、今はこの道を進むしかない。問題が起これば対処するしかないだろうな」

漠然とした不安にはさすがに対応策は考え付かないな。将来的には、メイジと非メイジが対立する時が来るのかも知れない。

＝＝＝

再びレーネンベルクの屋敷を訪れた私を執事のラザールが出迎えてくれた。こんなに早く再帰宅するとは予定外だったから、少し驚いた様子だった。

「ラザール、ジョゼット達は？」

「はい、この時間ならば、中庭で魔法の練習だと思います」

「ありがとう、暫く中庭には誰も近付かない様に手配してくれ」

「承知しました」

＝＝＝

「あ、スティン兄、お帰りなさい」

私が来たのに最初に気付いたのは、ジョゼットだった。テッサが私に向かって一礼して、セレナとは視線を交わしただけだった。

「兄上、どうかされたんですか？」

「ノリス、この木の板をそこの木に吊るしてくれ」

「何ですか、これは？」

「的だよ」

「的？」

ノリスには話が伝わっていない様だな。不思議そうに木板を木に吊るしたノリスが戻って来た。私は、鞄の中から、試作銃を取り出したのだが、先ずは”元折単身”式の方だ。銃を取り出した時の、セレナの驚きの表情は見物だったが、子供達にはこれが何か分からなかった様だ。

「兄上、これは銃ですか？　ああ、それで的か」

「少し離れているんだ」

こう言って、私は銃に固定化をかけ、銃弾を込めて的に向けて引

き金を引いたのだが・・・。辺りは静寂に包まれてしまった。

「兄上、的を狙ったんですよね？」

『ラスティン、木を傷つけるなんてどういう積りなの？』

と、ダブルで突込みが入った。少し離れすぎだったか、私が放った銃弾は的を吊るした木の幹に命中してしまったのだ。うん、もっと近付けば大丈夫な筈だ。殆ど射撃練習をしていなかったしな。

「貸してみて！」

そう言って、私の手から、銃を奪い取ったのはセレナだった。銃弾を渡すと、慣れない手付きながらきちんと射撃の準備を整えた。少し息を整えるとそのまま気負わず撃った銃弾は見事に的を捉えた。

（私はメイジだからな、銃が不得意でも問題無い筈だ、悔しくなんかないぞ？）

「わぁ～、師匠凄い！」

「セレナさん、お見事です」

「いい腕だな」

「・・・」

何故私はここで恥を晒しているんだろうか？　急に何処かへ向かって駆け出したくなるな。

「スティン、良い出来じゃない！」

「・・・」

「どうしたの？」

「いや、何でもないぞ？　それより使えそうかな？」

「これなら、ジョゼットでも、もう少し身体が出来てくれれば使えると思うわ」

「威力はどうかな？」

「うーん、必殺とは言えないけど、これで撃たれて呪文を唱え続けられるメイジはあまり居ないでしょうね。当たり所が悪ければ位かな？」

「これ以上大きくすると、さすがにね」

私の作った銃弾は”３２口径”辺りだと思うが、フィーリングで作った物だから本当はどうか分からなかったりする。

「スティン兄、師匠、これはもしかして、私の為に？」

「そうよ、ジョゼット。貴女の為に”私が”考案したの！」

「ありがとうございます、師匠！」

感動的な場面なんだが、私の出番が無くなって・・・。

「こうやって構えて、引き金を引くのよ。まだ反動がきついと思う

から、誰かに支えてもらうの」

「はい、師匠！」

そう言って、セレナに支えられながら初撃を放ったジョゼットの弾丸は見事に的を捉えた。ふぅ・・・、ノーラの所へ帰ろうか？

「ラスティン様、鞄の中にまだ銃がありますね」

テッサの声で我に返った、そうだ、まだ私には切り札が！って、何をやっているんだろう？　その声を聞きつけて、セレナが戻って来た。（おまけで、私のやる気もだな）

「妙な形の銃ね？」

「ああ、連射が可能なんだ。といっても機銃と違って6発なんだけどね」

「連射！」

セレナが食いついて来たぞ、別にセレナの為に作った訳ではないのだが？

「ここを押して弾倉を出して、こうやって弾を詰めるんだ」

「ふんふん」

「後は、同じだよ。暴発に備えて、固定化をかけるのを忘れない様に」

「了解！」

セレナが今度は慎重に、回転式拳銃（リボルバー）を試射したのだが、またもや命中である・・・（しかも5発全部だ！）。一発は危惧していた不発弾だった。（銃弾が小さくて、作りなれないせいもあると思うんだが）

「成る程ね～。それで連射な訳ね？」

「そうなんだ、慣れてくればもう少し確率は下がると思うけど、やっぱり”ゼロ”にはならないだろうな。暴発するよりは不発の方がマシだろ？」

「そう「この銃は暴発するんですか！」」

セレナの返事より大声で、ノリスが割り込んできた。今にも怒り出しそう、いいや、ほとんど怒っていると言う感じだな？（相変わらずというか、私が見た事がある時よりも過保護になっている気がするのは気のせいではないだろうな）

「あまり過保護にしすぎると、ジョゼットに嫌われるぞ？」

「そうよ、ノ・リ・ス・さ・ま」

「っ！」

セレナとの息の合ったコンビネーションで直ぐにノリスを黙らせる事に成功したのだが、少しやり過ぎた気もするな。

「ノリス、ちょっと来てくれ」

「・・・、はい」

多少むくれながら、それでも素直に後を付いて来る弟に少し面白く思いながら、人気の無い東屋の所まで移動した。

「ノリス、お前もしかして、ジョゼットの生まれについて聞いていないとか言わないよな？」

「も、勿論聞いていますよ。学院を卒業して、実家に帰ってきたら、妹がガリア王家の娘なんてね。まあ、兄上もトリステイン王家の人間でしたから、それ程驚きませんでしたが」

「あれ？　お前卒業出来たんだな？」

「当たり前です、父上の顔に泥を塗る訳には行きませんから！　まあ、出席日数的にはぎりぎりでしたが・・・」

その辺りは上手くやったらしいが、公爵家の息子で成績も優秀な人間だから、オスマン学院長も扱いに困ったことだろうな？

「まあ、それは良いとして、ジョゼットが将来自分の素性を知って、ガリアに帰ったとするよな？」

「・・・」

「その時、自分の身一つ守れなかったらどうなると思う？」

ノリスの表情は、”そんなことは僕がさせません！”と言ってるが、何も言わない所をみるとそういう問題では無いことは理解して

いる様だ。

「”妹”が大切なのは僕も同じだが、だからこそ、”妹”が独り立ち出来る様に見守るのも”兄”の役目だと理解しろよ？」

「・・・、はい」

「幸いにもジョゼットには、親身になってくれる人間が沢山いるよな。テッサ、ライル、セレナ、両親や屋敷の者だってそうだ」

「そうですね・・・」

「兄として、家族として振舞うのがお前の役目じゃないか？」

「はい・・・」

まだ納得行っていない感じだな？

「ノリス、お前はジョゼットと一緒に歩きたいのか、それとも見守って行きたいのか、どっちだ？」

「・・・、どっちなんでしょうか？」

「僕に聞くことじゃないな、父上と話し合ってみるんだな」

そう結論付けて、私はノリスを残してその場を去る事にした。多分ここからは、ノリス自身とレーネンベルク公爵家の問題になる、今の私にはこれ以上干渉しない方が良いのではないだろうか？　勿論、協力は惜しまない積りだが、決めるのはノリス自身だからな。

＝＝＝

「どうかな、銃の調子は？」

「まあ、上々じゃないかしら。リボルバーだっけ、これはまだジョゼットには大きくて重すぎるけど、確かに使えるわね」

「そう言ってもらえると、作った甲斐があったよ」

「これ、スティンが思いついたの？」

「いいや、知り合いに”発明家”が居てね」

「ふーん」

「ちなみに、あのコルベール先生の婚約者だぞ」

「へっ？」

「だから、僕達の恩師、ミスタ・コルベールの婚約者の女性だよ、その発明家というのはね」

「あの堅物に婚約者ね～。機会があったら会って見たいものだわ」

まあ、堅物と言う表現は否定できないが、”普通”のミネットに会っても納得行かないだろうな。（逆に発明家モードのミネットに会ったらどう思うんだろうか？）

「まあ、機会があれば引き合わせるよ。それより、銃についてちゃんとジョゼットに教えてやってくれよ？」

「そうね、こんな良いものを貰ったんだから、ちゃんとしなきゃね」

そのリボルバーはと言いそうになったが、まあ、師匠役の報酬だと思えば安い物だろう。予備を作っておいて良かったな。

「やっぱり銃器だからね、暴発の可能性はあるんだ。軽量化の為に、固定化をかける事が前提になっているから注意してくれよ」

「うん、それ良いわね」

「何かな？」

「いいえ、こちらの話、まあ、ジョゼットについては任せてもらって良いわ。あの子自身は結構気に入っているからね」

「お手柔らかにとは言わないけど、大きな怪我とかは困るよ？」

「勿論よ！　私だって女の子なんだからその辺りはね！」

女の子と言うのはちょっとと思ったが、まあ、気が若いのは良い事だろうな。

＝＝＝

その後、父と兵団のあり方について話し合った後、一泊だけして、慌しく王都へと帰る事になった。ノーラとの通信では特に大きな出来事は無かった様だが、私が王都を長く離れるのは良くないのは確かだからな。

第百二十五話　ラスティン２４歳（百発百中！）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

いや、女性向けに小さな拳銃だから、扱い辛いだけですよ、多分・・・？

２０１１／５／２４
「－＜」」
に修正

第百二十六話　ラスティン２４歳（期待）（前書き）

第百二十六話ＵＰします。

第百二十六話　ラスティン２４歳（期待）

王城に戻った私は、精力的に活動する事になった。王立魔法研究所のコルベール先生の所を訪ねたり、２度目の”委員会”を開催したり、ユニスと交渉して予算を分捕ったり、その他諸々とやる事が盛り沢山だったのだ。ミネットの勧めで、コルベール先生に”委員会”に参加してもらったのだが、色々あったが”ミスタ・コルベール”は、私達の中では有名人だったからさほど問題は無かった。

”委員会”絡みで問題があったとすれば、鉄道マニア（リッテン）の拘りと動力に関してだろうか？

「だから、標準軌が一番良いんですよ！」

「リッテン君、そうは言うがね、１．４３５メイルなんて中途半端な値を使う必要はないんじゃないのかね。それに君は、軌間は広い方が良いと自分で言った筈だよ？」

「確かに、”広軌”の方が安定性、安全性は高まります。ですが、コルベールさん用地の買収がですね」

「リッテン、そこは心配しなくてもいいよ。実験線はどうにでもなるし、一度決めてしまえばそのまま行ってしまうのは、分かっているだろう？」

土地自体は基本的に領主の物と言うのがここでの常識なのも大きいのだが。

「でも・・・」

「そうだな、1．8メイルとか2メイル辺りに決めて、”リッテン・ゲージ”とか呼ぶようにしたらどうかな？」

「！？　そうですね、こんな事で拘っても仕方ないですね。”リッテン・ゲージ”か～♪」

うむ、上手く丸め込めたぞ。1メイル＝1メートルとは限らないし、覚えやすい数字が良いだろうな。

＝＝＝

「蒸気・ディーゼル・電気、3つの内どれを動力として採用するかですが、意見は？」

「エレオノールさんの”風石式電池”がありますから、電車で行きましょう」

「リッテン君またも苦言で申し訳ないが、”風石式電池”には高純度の風石が必要だ。それを大量に用意するのは難しいのではないかな？」

「いいえ、そうですね。風石が普通に採れるとは言っても、そこを失念していました。それに大型のモーターを作るのは大変でしょうね」

「私としては、ディーゼルを勧めるね」

「私もそれが良いと思います！」

バベットもコルベール先生に同意らしい。他の参加者は、”電車”しか考えていなかった様だから、意見は無い様だ。だが、私はこの意見に反対なんだよな。燃料を作る液化（リキッド）を唱えられるメイジとしての意見なのだが。（ミネットが風石機関を利用するとか言い出さなくて良かった、あれは街中で使えるとは思えないからな）

「僕としては、”蒸気機関”が良いと思います」

「何故かね？」

「燃料となる”液化石炭”の問題ですよ。竜の羽衣と違って、大量に燃料が必要になりますからね。」

「それは盲点だった・・・、竜の羽衣の技術が流用出来るかと思ったんだが」

「それは流用出来ると思いますよ。どうかな、リッテン？」

「うーん、設計図を見た事がある程度だけど、うん、構造は単純だから何とかなると思います」

「設計図だけでは、誤差が出るのは分かっているだろう？」

「そうですね、ですが、メイジなら簡単に修正出来るのもご存知でしょう？」

「そうだったな、どうも興奮気味のようだ」

コルベール先生がミネットに窘（たしな）められて、こんな言葉を言った。

まあ、今まで、先生の周りの転生者は自分の事を隠して居た訳だか

ら、多少動揺するのも仕方がないのだろうな。

「では、コルベール先生を中心に蒸気機関車の試作に入って下さい。将来的には、ディーゼル機関車や電気機関車も作りたいので、ここも考慮下さい。他の皆も何か意見や、他に報告したい事があれば、どうぞ？」

「ああ、１つ提案なんですけど」

「鉄道絡みかな、リッテン？」

「ええ、機関車が完成する前に、線路は出来るんでしょうか？」

「機関車を作る期間が不明だから何とも言えないけど、鉱山でトロッコの様な物は使っているから、問題は無いだろうね。線路自体は”隠されたメイジ”達の錬金の練習にしようと思っているから、結構早く出来る筈だよ？」

「ワーンベルで作って運ぶんですか？」

「いいや、多少手間だけど、その場で土を固めて錬金して線路を作る予定かな？」

「もし線路だけ出来るのなら、当面、”馬車鉄道”で運用するのはどうでしょうか？」

「”馬車鉄道”？」

リッテンが説明してくれたのだが、レールの上を馬車が行き来すると言う物だそうだ。普通の馬車より、乗り心地が良くかつ大量輸

送も可能だと言う事だった。馬車の改造も簡単な様なので、線路が先に出来た場合は採用させてもらうとしよう。

＝＝＝

「あの～？」

「ルネか、何かな？」

次はルネか、建築関係の話だろうか？　王都移転の計画は、まだまだという話だったんだが。

「鉄道はやっぱり王都へも引くんですよね？」

「少し先になると思うけど、そうだね」

「やっぱり、新王都は”駅”を基点にした方が良いでしょうか？」

転生者達の間では、どんな王都を作るかで、盛んに議論されている中、コルベール先生が私の横にやって来た。

「ラスティン殿、年甲斐も無く、見苦しい所を見せてしまったね」

「いいえ、話に付いて来られるだけでも、お世辞ではなく凄いと思いますよ」

「そう言ってもらえて光栄だが、機関車作りの責任者は私で良いのかね？」

「どういうことでしょうか？」

「ミネットや、リッテン君、バベット君の方が良いのではないかね？」

「先生にはそんな事を言って欲しく無かったですよ」

「・・・」

「僕が、先生に責任者をお願いした事に対して、この場の誰も反対しなかったのは、ご覧になったでしょう？」

さすがに、転生者達が、”ミスタ・コルベール”なら成し遂げると知っていると言う訳には行かないしな。（前世の記憶だけなら兎も角、この世界が物語りの中の存在という事は、転生者は誰も話していないだろう。そこまで行くと正気を疑われる事は間違いないからな）

「若過ぎますから、リッテンとバベットでは、無理でしょうね。ミネットならとおっしゃるかもしれませんが、メイジではないミネットでは、メイジを指揮して作業を進めると言うのは難しいでしょうね」

「そうだね・・・」

中々納得してくれない様だ、結構悩みやすい性格なのは分かっていたんだが・・・。

「こう考えてもらえませんか？　僕達、ミネットから”転生者”という話は聞いていますね？」

「ああ」

「僕達にとって、前世での知識はあくまで”知識”でしかありません。先程の機関車の部品1つ、ここには在りません。あちらの世界では工業が発達していて、機械が自動的に部品を作り出してくれました。部品を作り出す事も可能ですが、ここでは道具がありません」

「そういう物なのかね？」

「ええ、竜の羽衣を分解した時の工具も僕が何とか再現したものなんですよ。知識を形にするにはどうしても魔法の力が必要なんです。転生者達の知識をこの世界に再現するのは、多分簡単には行きません。竜の羽衣を複製してみせた先生を責任者にするのが最適だと思ったんです」

「そうか、そこまで私の事を買ってくれているんだね」

「はい、”ミスタ・コルベール”ならやってくれると信じています」

何とか納得してくれたコルベール先生が、ミネットの横に戻って行った。ふぅ、一段落だな、リッテンとミネットにはワーンベルで線路の設置に助言してもらう事にした。（リッテンは暫く大忙しだな、施設隊のメイジも専任で付けた方が良いかも知れないな）

＝＝＝

「陛下は相変わらずだったけど、枢機卿には小言を言われたよ。勝手なことはするなって言うんだろうな？」

「私もご一緒した方が良かったでしょうか？」

「いいや、キアラは私と枢機卿の橋渡しをして欲しいからな。そう決めただろ？」

「そうですが・・・」

「まあ、小言を言われるくらいなら実害は無い訳だし、私が気にしなければ良いだけだろうな」

まあ、愚痴ぐらいは聞いてもらうとしよう。

「それより、”今年のおねだり”だが、本当に土地に関するものでなくて良かったのかな？　やっぱり国が強制的に収用出来る様にする必要は、あるんじゃないかな？」

「ラスティン様、今必要なのは、”人”ですよ！　”戸籍”に関する法令の方が急務です。それに、事態がこのまま推移すれば、この国の土地はすべて”国”のものになります」

「そんなに上手く行くものかな？」

「はい、この国の貴族の方々で、レーネンベルクを真似て平民メイジを運用した方がいらっしゃいましたか？　みすみす自領の宝を放置している方々が、この流れに乗るのは難しいでしょうね」

「放置どころか面倒のタネとばかりに積極的に追い出されたと言う話も以前聞いたことがあるな」

「でしょう？　”隠れたメイジ”を含む、平民メイジが一層、レーネンベルクや、マース領に集中すれば貴族の方々も慌てるでしょう

ね」

「そうなると、自領のメイジ達を保護、まあ引き止めようとするだろうな。成る程、”戸籍”がしっかり出来ていれば妙な問題は減ると言う訳か」

「そうです、国内での移住は既に自由化されていますから、家族を”人質”などにされない様に先手を打ちます」

家系がしっかり把握出来れば、そこから”隠れたメイジ”も探すのも難しくないだろうな。確かにこちらの方が重要だ。鉄道と聞いてつい先走ってしまったが、まず足元固めが先なのは確かだろう。

「そうだ、レーネンベルク関係の人々は除いてだが、”隠れたメイジ”達の待遇を、国の役人、まあ、公務員にしたらどうだろ。どうだろう、ガリアの真似をするみたいだが」

「はあ？」

「そんな変な考えだったか？　キアラならこれ位は考えていたんだろう」

「いいえ、”こうむいん”とやらの話ではなく、ガリアの真似と言う所ですよ、変なのは」

「変かな？」

「はい、当時のガリアのジョゼフ王子はラスティン様がレーネンベルクでされたことを真似したんですよ？　気付いていなかったんですか？」

「うん？　・・・、ああ、そう言う事か。言われてみればそうかもしれないな、だが、あちらも色々工夫しているからな。まあ、そういう事なら、遠慮なく公務員として取り立てる方針で行こうか」

この国は大きく変わるという予感だけはしっかりあったが、それが本当に良い事なのかは未だはっきりしない。貴族の多くが没落していくだろうし、メイジの社気的地位は一層上がる事だろう。これが新たな火種にならなければ良いのだが。（レーネンベルクやラ・ヴァリエールは安泰だと信じたいな）

「そうだ、エルネストの所に送った2人は、フィルマンとジェルマンの双子だったか。あの2人は本当に大丈夫なのか？」

「はい、多少癖はありますが、優秀ですよ。何故か2人で競い合う事が多いですが、大抵良い方向に向かうらしいです。それに医術にも造詣がありますから」

「そうか、2人が暴走しないように監視は？」

「ふふっ、心配ですか？　将来的にラ・ヴァリエール公爵領の統治を任せる予定なら、もう少し人を送る事にしています」

「そうか、この方法を使えないかな？」

「と言いますと？」

「国から領主の補佐役を送り込むんだよ」

「それをプライドの高い貴族の方々が受け入れると本気でお考えで

すか？」

「うっ！」

レーネンベルクでは、父が方針を決めて家臣達がそれを実行するのが普通だし家臣達からの意見や苦情も父が上手く裁いていたから気にはならなかった。（結構厳しい意見も出ていたのは私も知っている）

一般的にはほとんど貴族が自領では独裁者だからな、意見を言う家臣より、”イエス”としか言わない家臣が重用されるのが実際の所なのだ。そこに国の権威を帯びた役人が来たらどうなるか考えるまでもないだろうな。

「ダメかな？」

「そうですね、補佐役を受け入れた領地の税率を下げるとかすれば・・・」

「いっそ、”あれ”を使うか？」

先日、ローレンツさんの所で聞いた情報では中々面白い事になっていたからな。

「ダメですね、まだ早すぎます」

「そうだな・・・。まあ、駄目元で陛下に提案してみるか？」

「それならば、私から枢機卿に話を持っていきましょう。その方が話しは早いでしょう」

「ああ、そうしてくれ」

第百二十六話　ラスティン２４歳（期待）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

さて、”あれ”と言うのは何でしょう？

第百二十七話　ラスティン２５歳（線路は続くよ）（前書き）

第百二十七話ＵＰします。

第百二十七話　ラスティン２５歳（線路は続くよ）

☆委員会

去年の”委員会”の会合からあっという間に一年が過ぎ今年も会合が開かれる事になった。今年の主な議題はやはり鉄道だったが、そちらは後で説明する事にするが、意外にも”新王都”計画も熱心に議論される事になった。去年は時間も予備知識も無く議論が発散してしまったが、今年は各自が自分なりの都市計画を持ち寄った結果だ。

「カロン、皆の意見は参考になったかい？」

「ラスティン様、彼らは何者なんですか？　ルネの様な子供がこんなに居るなんて、それにさっきの”あれ”はなんですか？」

「まあ、余興だと思ってくれ。それで？」

うーん、不評だな。昨年のコルベール先生の受けも良くなかったから、もう少し捻らないと受けないかな。（いや、そう言う話では無いな）

「はい、参考になるどころではありません！　馬車専用の道を作るとか、道を立体的に交差させるとか、都市自体のデザインも色々あって、迷ってしまいます」

「まあ、参考になったのなら来てもらった甲斐があったな」

「ワーンベルの新市街を見た時も驚きましたが、今回はそれ以上で

す！」

　コンビニが欲しいとか、タクシーがあると便利だとか、路線バスを運行したらどうかとか色々な意見というか、この世界の不満が主に議論されたのだが、それでも得るものがあったらしい。電話は難しくても、電報の様な通信方法は意外と簡単に実現しそうなのだが、今は郵政を考える時期だと考えさせられた。実は、私にも得るものがあった訳だな。（あまり外出する事が出来ないノーラに話を振ってみるかな？）

＝＝

☆鉄道関係

　鉄道に関してだが、何とか実験用の機関車を作製する所まで漕ぎ着けたそうだ。リッテンの妙なこだわりが無ければもう少し早く実現しただろうとコルベール先生が苦笑いながら報告してくれた。
　機関車自体は総チタン製で行くかと思ったのだが、意外と鉄を使ったと言う事だ。機関車自体があまり軽くなる事は好ましくないと説明されたが謎だな。（摩擦とか慣性の関係だろうか、いや、リッテンのこだわりの可能性もあるぞ）　逆に客車や貨車はかなり軽量に作る計画だそうだ。

　そしてもう一方の線路の方だが、こちらは順調に話が進んでいる。当初は、施設隊から１０人程が線路の設置に借り出されて細々とマリロットからワーンベルに向けて線路を延ばしていたのだが、最低限の魔法教育を終えた”隠れたメイジ”達が合流する事で、劇的に加速された様だ。
　マカカ草の供給体制も整いつつあるので新人兵団員にはガンガン

魔法を使って魔力の容量を増やしてもらう方針らしい。（何時か人手に余裕が出来た時、本格的な魔法を習う頃には驚くほどになっているんだろうな）

簡単に線路の作り方を説明しておくと、以下の様になる。

1. 先ず人手を募って平地AをBの様に盛り上げる。
2. 盛り上げた土を錬金でレールと石製の枕木にする。
3. 出来た線路を固定化することで、熱膨張や磨耗を最低限に抑える。
4. 完成

A.

□□□□□□□□□□□□□□□□□□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□

←

B.

□　　　□□□□□□□□□□　　　□
□　　　□□□□□□□□□□　　　□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□

←

C.

□　　　枕工枕工枕枕工枕工枕　　　□

□　　　□□□□□□□□□□　　　□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□
←
D.
　　　固固固固固固固固固固固固
□　　固枕工枕工枕枕工枕工枕固　　□
□水水水□□□□□□□□□□水水水□
□□□□□□□□□□□□□□□□□□

と言った感じだな。（蒸気機関車の方は詳しく説明出来ないぞ、部品の設計図しか見ていないからな）

結局、”隠れたメイジ”達が合流してから半年程で、マリロットからワーンベルへの線路が完成してしまった。現在はワーンベルからマース領ライデンの町へと延長を行っている。ペースからすれば、これまた半年程で開通してしまうだろう。

問題になるかと思えた用地の買収だったが、畑のど真ん中を突っ切る形だったのが幸いしたのか、簡単の買い取れた。名目上は地主が居ても、この時代本当の意味での土地の所有者は領主だから、反抗は無意味なんだがな。まあ、その辺りは現場を統括している父とマルセルさんに抜かりがあるとは思えない。（問題は線路網を敷く時の他の領主の反応だな）

リッテンの発案で始めた馬車鉄道だが、これが中々好評だそうだ。御者も楽だし妙なトラブルも減る、走行中の振動も殆ど無いと、良い所尽くめである。落し物の処理（きちんと処理して近隣の農家に配ると、飼葉になって戻ってくる）や、燃料（飼葉や水）等の手配

も別途必要だが、将来駅になる場所で用意したという事なので問題は無い様だ。（線路の方が問題らしいが、全速でで移動しなければ、と予想されているが、将来的には手立てを考える必要があるかもだな）

施設隊が整備している街道よりも馬車鉄道を使ってワーンベルからマリロットへを荷物を運ぶ商人も出てきたそうだ。この分だと、機関車の試運転はワーンベル＝ライデン間で行う事になるかな？鉄道関係は順調と言って良いだろうな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

☆マカカ草栽培

レーネンベルク山脈で始めたマカカ草栽培の方だが、二長一短といった所だった。具体的にはミネスト山の物より効用で劣るが収穫までの期間、生産量に勝ると言った感じだろうか？

レーネンベルク山脈のあの土地は意外とマカカ草の生育には適していたらしい。効用が低下してしまった分は多めにハーブティーを飲む事で対応するだけだ。経験則だが、夕食後から就寝前にマカカ草のハーブティーをティーカップ2杯程度飲めば効用は十分らしいから、それを3杯にすれば良いだけだな。不思議な事だが、それ以上飲んでも魔力の回復量は増えないらしい。（頻尿で困っている人間には、あまり良い話では無いかもしれない）

ミネスト山でマカカ草を栽培していた兵団員が実に良い働きをしてくれたらしく、マカカ草栽培に関しては十分な量産体制がとれたと思う。農業系に強い転生者のアミラやフリードに意見を採用する事でより一層の増産が可能かも知れない。

アリエの大樹の結界を利用したセキュリティシステムは、実に便利なものだった。虫や鳥といった小型の生物は普通に通り抜けられるのに、ハーブ園を荒しそうな大型の動物は出入出来ないのだ。精霊を含めて明確な意思を持った者は知らず知らずに方向転換させられるのは実証済みだしな。（アリエの木が自分を守るために張っている物だから当然なのかも知れないが）

＝＝＝

これに絡んで良い事ばかりでは無く、悪い事もある。レーネンベルク山脈は採石を行う予定の南西部以外はほとんど山林なのだ。本来なら森林資源の宝庫なのだが、国境が何度も移動した過去もあって、山脈の南北のトリステインとゲルマニアどちらにとっても積極的に手を入れることが無かった。

ぶっちゃけていえば、木々が自然のままに育っている状況が長く続いていた訳だな。これが森林資源の価値を著しく低下させたのだ。間伐や枝打ちが長期間行われてこなかっただから当然の結果である。父もゲルマニア側を刺激しない為に、不用意にレーネンベルク山脈に入るのを禁じていたくらいだからな。

先の”モーランドの乱”以降、レーネンベルク山脈の森林資源に注目した周辺の人々がこっそりと山林に手を入れ始めたのだ。（まあ、褒められた事ではないが、レーネンベルク山脈がトリステインの物になったのだから悪いとは言わない）

そこで、何人かが”結界”に出くわした訳だ。結構迷信深い人達だった様で、祟りだとか呪いだとか妙な噂が地元で広がってしまった。普通に山に入ろうとした兵団員が本気で止められたという報告も入っていた。無事に帰ってきたのを見て尊敬を集めたというのも、笑える話である。

そんな訳で、レーネンベルクで林業が栄えるのは当面難しそうである。私にとっては好都合な状態だから、迷信は迷信のままでそっとしておく事にしたのだ。山脈に出入する兵団員に暇な時に枝打ちだけはするように指示を出したが、これはどちらかと言えば、そこに育つ木々の為だったりする。

＝＝＝

☆隠れたメイジ

さて、話を”隠れたメイジ”達に移そう、多分これが一番重要だからな。私が１０代半ばの頃から始めた公立学校だったが本来の目的以外で私を本当に助けてくれている。今回も彼らに助けられる形となった訳だ。

公立学校の卒業生は、今年で１５，０００人を超えるし、現在公立学校で学んでいる学生も７，０００人程になる。試しに卒業生の中から選抜して、１，０００人程に”メイジ検査”を受けてもらった所、２３０人弱が”隠れたメイジ”だった事が分かった。（凡そ２０％というエルネストの推測が裏付けられた訳だな）

この２３０人にレーネンベルク魔法兵団の兵団長自らが直接意見の聞き取りを行って、凡そ２００人がメイジとしての新たな日々を始めた。そして今年も２，０００人ほどが公立学校で学び始めている訳だから、”隠れたメイジ”はどんどん見つかって行く訳だな。（入学生を集めるのに苦労し始めていた魔法学園とは対照的だが、魔法学園の方もあれで良かったのだろう）

「ラスティン様も意外に思われるかもしれませんがね。最初から魔法を教える事は、魔法学園の教師より引退した兵団員の方が向いて

いるんですよ。そう、ヴァレリーの様なのが」

報告に来ていた兵団長のマティアスがそんな事を嬉しそうに語ってくれた。いや、先に引退した筈のヴァレリーを引き戻せたのがそんなに嬉しいのだろうか？

「そうだろうな、杖契約の方法からコモンマジックの使い方辺りまでならそうかもしれない」

「おや、予想していた様ですな？」

「それはそうさ、私だってコモンマジックまでは専門の”家庭教師”に教わったクチだからね」

「そうでしたな・・・」

私が師匠に出会っていなかったらどうなっていたんだろうな？

「それで、新しい兵団員は使い物になりそうか？」

「兵団員としては使い辛いと言うのが本音ですな。かなり”錬金”に偏った教育を短期間で行っているので仕方が無いですがね」

「今は、その”錬金メイジ”が一人でも多く必要なんだぞ？」

「それは分かっていますが、私は古いタイプの兵団員ですからね」

マティアスが兵団員として最古参なのは事実なのだが、土系統のメイジなのに錬金隊をヴァレリーに任せてしまった経緯を考えれば、これはマティアスの感傷なのだろうな。

「人手に余裕が出来れば、普通の兵団員としての教育をし直す事も考えているよ」

「それなんですがね、ワーンベルに配属された連中は”先輩”メイジから色々教わっているらしいですよ」

「ほう、熱心だな」

「いえね、シモーヌの奴が、新しい錬金隊の団員を古株の錬金隊員と寮で相部屋にして、空いている時間に教育をさせているらしいんですよ、これが」

「”工場長”は先が読めるらしいな、頼りになるよ」

「そうですな～」

その言葉と態度から、どうやらマティアスもシモーヌの様なタイプが苦手らしいと推測出来る、私と同じと言う訳だ。しかし、シモーヌのやっているのは、ＯＪＴ（Ｏｎ－ｔｈｅ－Ｊｏｂ　Ｔｒａｉｎｉｎｇ）みたいな物じゃないか、私でも言葉の意味しか知らない事をどうして思い付くのだろうな？

「それはそれとして、錬金隊に４００人近い増員があったのは有り難いですよ。去年の２００に加えれて例年の3倍近い増員ですからね」

「その言い方だと、施設隊に回した１５０人に文句がありそうだな？」

「滅相も無い！　ですが、〝副王〟様の考えに付いて行けないのも事実ですな」

「そうなのか？」

「ええ、鉄道なんていうものを走らせるより、ゴーレムでも作って運ばせた方が楽でしょうに」

いかにもレーネンベルク家の家臣そしてメイジらしい発言だな、確かに古いタイプなのかも知れない。この世界はメイジだけで動いている訳ではないのだし、レーネンベルク領の事だけ考えればよいと言う訳でも無いのだが。

「鉄道はな、やがてこの国中を走る事になるんだよ。それも全力疾走する馬車よりも速くね」

そう言ってみたが、マティアスにはピンと来なかったらしい。それはそれで仕方が無いだろうが、実物が走り出せば話が変わってくる事だろう。マティアスの様なタイプは真っ先に列車に乗りたがると思うんだがどうなんだろう？

第百二十七話　ラスティン２５歳（線路は続くよ）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百二十八話　ラスティン２５歳（ガリアとゲルマニアと）（前書き）

第百二十八話ＵＰします。

第百二十八話　ラスティン２５歳（ガリアとゲルマニアと）

☆ガリアの現状

現在、私は遠距離通信用のマジックアイテム”声を伝える者”を使って、ガリアのジョゼフ王と週に一度のペースで”情報交換”を行っている。主な話題は、ガリアの戦後復興だが、時には対ゲルマニア戦略だったり、カグラさんの日常だったり、ノーラとの新婚生活の話題にもなったりする。

先日はちょっとした事件に２人で頭を悩ます事になった。

「えーっと、話をまとめると、勉強をさぼって遊んでいる最中にいたずらで他の女官に怪我をさせた”イザベラ姫”を”カグラさん”が引っ叩いて２人の仲が険悪になったから何とかしたいと言う事ですか？」

「・・・、まあ、その通りだな」

「そうですか、それはおめでとうございます」

「なに！？」

「いや、”イザベラ姫”を引っ叩いたという所に、カグラさんの本気が見て取れますからね」

「そうだな、そうかも知れんな」

うん、”声を伝える者”が映像を送れないのが残念だな、ガリア王の珍しい表情が色々見えて面白いだろうにな。これは、ジョゼフ

王とカグラさんの間に何らかの進展があったと言う事なんだろうな。

「それでだ、私はどうするべきだと思う、ラスティン殿？」

いい歳をした大人の台詞とも思えないが、ガリア王は人間関係に関しては不器用そうだからな。

「それは、ジョゼフ殿が2人の仲を取り持つしかないですね」

「そんな事は分かっている！　その具体的な方法なのだよ、問題は」

何だか、”パパ友”の会話っぽいよな？

「少し待ってください、ノーラに、いえ、エレオノールの意見も聞いて見ますから」

「うむ、そうしてくれ」

随分偉そうな言い方だな、意地悪したくなるが、まあ、パパ友同士の武士の情けだ。

＝＝＝

「ジョゼフ様、わたくしから提案出来るのは、ジョゼフ様とカグラ様そしてイザベラ姫の御三方で何処かに旅行にでも行かれると良いと言う事だけでございます。いつもと違う状況に置かれれば、カグラ様とイザベラ姫も違った話が出来ると思います」

旅行か、ノーラらしい良い提案だな。

「旅行か、しかし、エレオノール殿も今の我が国の状況を知っておるだろう？」

「それならば、戦災地の慰問と言う形をとれば良いと思いますよ、ジョゼフ殿。私もその手で、王城を抜け出したクチですからね」

「そうなのか？　しかし我が国とは」

「そろそろ、宰相殿を信用されてはいかがですか？」

「シャルルを信用か？　そうだな、良い話を聞かせてもらった、感謝するぞ」

「いいえ、お役に立てたならば喜ばしい事です」

「それではラスティン殿、また来週同じ時間にな」

「あの、１つだけ良いでしょうか？」

「何かな、エレオノール殿？」

「子供と言うのは思ったより多感です、３人の時は、絶対にイザベラ姫を優先なさって下さい。そしてカグラ様と２人っきりの時は思いっきり甘えさせてあげて下さい」

「う、うむ。そうしよう」

こうして、国王と副王らしくない遠距離会談は終わった。

「貴方、国王と副王の会談では無かったのですか？」

「いや、その積りだったよ。今の話の前には、工業品の輸出量と農作物の輸入量のバランスの話をしていたし、その前は通貨の供給量の話をしていたからね。まあ、雑談の様なものだよ」

「それならば良いのですが」

そう言いながら何処か納得しかねるという表情のノーラだった。

まあ、立場が似ているし、相談相手も少ないだろうから仕方が無いだろうな。ウチの息子のライルは本当に良い子で助かるよ。

「兄様、今、我が家のライルは手間がかからなくて良かったとか考えていませんでしたか？」

「え！？」

時々だが、ノーラは私の考えが読めるんじゃないかと思う時があるが、今がまさにそれだ。

「ライルが何故あそこまで出来た子供で居ようとするか、考えた事がありますか？」

「それは、本当の母親の教育が良かったと・・・、言う訳だけでは無さそうだね」

「分かりませんか？」

「いや、考えた事が無かったな、正直」

「あの子は怖いんですよ、新しい家族を失うのが」

「・・・、そうか、そうだな」

ライルが、アンリエッタの事を嫌うのもこの辺りが原因なんだろうな。

「すみません、偉そうな事を言ってしまって。今の話、実は義母様からの受け売りなんですよ？」

「もしかして、オデット様が来られた時の？」

ガリアのオルレアン大公妃になったオデット様は今年もラ・ヴァリエール公爵領を訪れる事になった。オデット様はまだ娘（ジョゼット）を呼び戻す積りは無い様だ。オルレアン大公自身も宰相として忙しく、シャルロット姫も同行しないので、大げさな事になるのを避ける為にも、例年通りとなった訳だ。

「レーネンベルクでは、あの子が無茶な事をすると褒めるらしいですよ？」

「また、変わった教育方針だな。あの屋敷には子供を叱ってくれる大人は多いからな、丁度良いのかも知れない」

「義父様と義母様の”年の功”と言うんでしょうね、私達に出来るかしら？」

「まあ、子供が出来てからの話だけど、出来れば長期間レーネンベルクで育てたいな」

「そうですね」

どちらにしても子供が出来てからだがな。ライルが時々王城までやって来て子供を感じさせてくれるので、その必要性を感じる事が少ないんだよな。やる事はやっているんだから、そのうちだな？

「ノーラ、話は変わるけど、”電報”の話は考えてくれたかな？」

「はい、でも、私はそれ程不自由を感じていませんよ？　実家に帰る事もありますし、”園遊会”も貴方の名代として参加しています。色んな方々の夜会なんかも参加していますから、忙しいんですよ、これでも」

話している内容と、表情が一致していないからバレバレなんだがな？

「うんうん、それで本当の所はどうなのかな、僕の奥さん？」

「う～、やってみたいです。どうして分かっちゃうのでしょう？」

「それはね、僕達が夫婦だからさ」

「・・・、兄様の意地悪！」

満更でも無い表情で、少しだけ口を尖らせて、裏腹な事を言う私の”大切な女性”を強引に抱きかかえて、ベッドへ向かう事にした。時にはこう言う事も良いだろう？

＝＝＝

☆ゲルマニア動静

ほぼ順調に運んでいる他の状況と比べて、こちらはかなり事態が悪い方向に動いている。コルネリウスがゲルマニアに戻ってしまった事で、ツェルプストー辺境伯側からのゲルマニア情報が入って来なくなったのは、当然かも知れないが、ゲルマニアに送り込んでいた間諜（スパイ）達のほとんどが使えなくなってしまったのだ。

間諜の多くは、何とか難を逃れてガリアやロマリア或いは海路を経由してトリステインに戻って来たが、やはり犠牲は避けられなかった。あの指令を出した時から、こうなる事は予想していたが、やはり酷い結果だった。

「どうだった、キアラ？」

「やはりダメですね、肝心の情報が掴めていませんでした」

「君の予想通りだったか・・・」

「私をお叱りにならないのですか？」

うーむ、キアラが私を叱るなら兎も角、私がキアラを叱る様な場面だろうか？

「何故、私がキアラを叱るんだ？」

「私は、ラスティン様の指示をそのまま間諜たちに伝えました。失敗する事が分かっていながらです。案の定、これから暫くゲルマニア方面での情報収集は覚束なくなってしまいました」

「ああ、私が”キアラなら私の間違った指示を修正もしくは撤回してくれた筈だ”と思ったと考えた訳か」

「そうですね、凡そ」

「何だか妙な話だな、私が指示した通りにしたのにキアラを私が叱るのか？」

「ふふっ、そうですね、普通ならおかしいかも知れませんね」

「私の知っている中で、一番知略に優れているのは君だが、さすがに全て思い通りに事が運ぶとは思っていないぞ？」

「はい、それは私自身がよく分かっている事ですから」

一応それでこの件に関しての話は終わりになった。計画が失敗したのにそれに後悔を見せないキアラの態度が少し不思議だったが、それよりゲルマニアの諜報網再建の方が重要だったから、話はそちらに移ってしまった。

ああ、私が間諜達に命じたのは、”ゲルマニアに誘拐された兵団員の行方を探れ”だった。

＝＝＝

間諜達を、クロディーの下で再教育する事を決めた訳だが、それ以外にも間諜達から得られた情報が幾つか報告された。”ゲルマニア軍が軍需物資をとある場所に集めている”と言う情報もその１つだった。

「重要なんだろうが、些か抽象的過ぎるな？」

「そうでしょうか？」

「追加情報は無いのか？」

「はい、この情報を入手した人物は・・・」

「そうか・・・」

「ですが、色々読み取れる報告ですよ」

「そうか？」

キアラの目には何か見えているらしいが、私には何の事だかさっぱりだな。

「ああ、この人物がガリア＝ゲルマニア国境付近を担当していたと言ったら分かりますよね？」

「ヒントはそれだけなのか？　先のガリア＝ゲルマニア戦役でゲルマニアが奪った物資としか想像出来ないぞ？」

「条件的には合っていますね」

「ふぅ、もう少しヒントをくれ」

「そうですね、ゲルマニアはこれを手に入れる為に、トリステイン、ガリア、ロマリアのどれかを攻める積りだったんでしょうね」

大国とは言えないが、有力国ばかりだな。何故か引っかかる感じがするな？

「それで、一番攻め易そうと”思わされた”ガリアに攻め込んだと言う事か？」

「そうだと思います」

「我が国が、ゲルマニアを警戒するのは当然だが、何故ロマリアを避けたんだ？」

「マザリーニ様がおっしゃるには、ロマリアは、いえ、教皇様はかなり以前からゲルマニアを警戒されていたそうですよ」

「そうなのか？　始めて聞いたな」

ジェリーノさんがゲルマニアを警戒していたか、物語（歴史）には無い話だが、何がそうさせたのだろうか？　ああ、教皇の所で分かったぞ、”風石”だな。

「ゲルマニアが風石を欲しているとは知らなかったな」

「そうですね、でも、平和利用では無い筈です」

「それは否定する材料が無いな」

皮肉な事だな、私のした事がここでも悪影響を及ぼしている訳だ。

「そういう事なら、クロディーの報告にあった、例の鉱山からなんだろうな？」

「はい、間違いないでしょう！　ガリア王も曲者ですからね」

「そうだな」

キアラが言っているのは、ガリアで鉱物が一切採掘出来なくなった様な言い方をしたジョゼフ王だったのだが、調査を進めるとガリア南東部では量は減ったものの普通に鉱石が採掘出来ていると分かったからだ。この辺りは腹の探りあいだから仕方が無いだろうな、ガリアから農作物を輸入している我が国でも、農作物の増産を試みているのだからお互い様と言えなくもないだろうな。

「ゲルマニアでも、鉱山が生き残っていると考える方が自然なんだろうな？」

「そうですね、商人の情報網は生きていますのでそちらからの情報では、工業品は高騰している様ですが、市場に出回ってはいる様です」

「間諜と外交の２段構えの積りだったが、甘かったな」

「はい、こちらから工業品の供給に関して交渉を持ちかけるのも不自然ですから・・・」

「仕方が無いな、情報が無ければ手の打ち様が無い。誘拐された兵団員の無事を祈ろう」

「はい、間諜の育成を急がせますか？」

「いいや、次は本気で行くからな、”副使”殿の気が済むまでみっちり鍛えなおさせてくれ。１０人足らずの兵団員を助ける為に３０人以上の間諜が犠牲になったのでは意味が無いからな」

「はい」

キアラが間諜達にきちんと指示を出していなければ、今回それが起こったかも知れないのだから、慎重に行くしかないだろうな。そう言えば、コルネリウスは今何をやっているんだろうか？　無茶な事をしていなければ良いのだが、若い頃の彼のままならば意味の無い心配なんだろうな？（少しは大人になったと信じよう）

第百二十八話　ラスティン２５歳（ガリアとゲルマニアと）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百二十九話　ラスティン２５歳（成長）（前書き）

第百二十九話ＵＰします。

第百二十九話　ラスティン２５歳（成長）

☆園遊会とか

「ノーラ、僕の名代ご苦労様」

「ちょっとだけ疲れました。”電報”の方の研究が遅れてしまいます」

「ノーラ、いくら小型とは言っても態々園遊会の会場まで持っていかなくても良いんだよ？」

電報のシステム開発をノーラに任せた訳で、競争相手も期限も存在しないのだが、ノーラは結構な時間を研究に費やしている。副王妃としても妻としても問題が無い状態を維持しつつである。私も副王としての公務と夫としての私生活を維持しつつ、”シフの涙”の生産に励んでいるのだからお互い様である。

最近では、夫婦で居間を研究室兼工房として使っている状態だ。時々だが、夕食後から就寝まで同じ居間に居ながら一言も言葉を交わさずお互いの作業を続けるなんて事もある。別に言葉を必要としていないだけで、お互いの事が見て取れる距離に居るだけで、作業が捗るというのは意外な発見だった。ノーラに隠れて調合していた事を考えると馬鹿らしくなってくる。

外部の人間が見ると異常な風景らしいのだが、私達には相応しいと思う。息子のライルがやって来た時も妙な表情だったが、直ぐに馴染んでしまった。助手の様に色々働いてくれるのには助かるが、その様子を見た（急用で私を呼びに来たのだ）ガスパード等は、”スティンの家族は変わり者ばかりだな”なんて言った物だった。

「そうですね、今は符号の決定ですから、持って行っても意味がありませんでした。貴方？」

「ああ、ごめん、ちょっと考え事をね」

「でも、本当に電報で良かったんでしょうか？　電話の方が実用的だと思うんですけど？」

「そうかもね」

技術は簡単に進歩しないというのが実感なのだから、一歩一歩進めて行く積りだし、盗聴の危険性も通常の電話回線の方が高いからな。符号を工夫する事で盗聴を困難にする事も難しくない。

「お疲れでしたか？」

「そんな事は無いよ、園遊会の様子も聞かせてくれるかな？」

「はい、今年は去年よりも外国の方が目立ちました。ガリアの宰相シャルル様、”ロマリア王家”の方、アルビオンからは今年はモード大公様がいらしていました。その他の国々も王族のかたばかりでしたから、私もすこし場違いでした」

「ノーラが場違いなら僕なんてもっと場違いだろうね」

「そんな事はありませんわ」

「ところで、アルビオンからはモード大公が来ただけだったかい？」

「あの、貴方あの噂を？」

「ああ、少しね」

実の所、噂とやらは私の耳には入っていないのだが、何が起こったかは想像が付く。

「やはり、”プリンス・オブ・ウェールズ”もいらしていました」

「マリアンヌ様はその事をご存知かな？」

「去年も今年もかなり舞い上がっていらっしゃいましたから、多分・・・」

「そうか・・・、アンリエッタにはまだ恋は早いと思うんだけどな」

「兄様、どうするお積りですか？」

「とりあえず、マザリーニ枢機卿に姫様の教育を厳しくする様にお願いするかな？」

「？」

「あの娘が、女王になるにしろ王妃になるにしろ、教養はあったほうが良いしな」

「はい、そう言うことならば私も協力させていただきます」

アンリエッタが王城を抜け出す事は非常に難しくなった訳だな。

トリステインの王位がどうなるかは敢えて論じなかったが、私達の間ではある意味覚悟が決まったのかも知れない。

＝＝＝

「ノーラ、実家（ラ・ヴァリエール）にも顔を出して来たんだろう、そっちの話も聞かせてくれるかな？」

私は、少し強引に話題を変える事にした、王位の問題はなるようになれと割り切った気分だ。

「それがですね、とっても大変だったんですよ」

ノーラがらしくも無く楽しそう？に、話を続けてくれた。

「帰った途端私を迎えてくれたのは、ルイズが大怪我をして担ぎ込まれたという知らせだったんです」

「大怪我とは、物騒だね？」

「ええ、ですが、怪我自体は、エルネストさんの弟子と言う方が傷跡も残さず治して下さいました。怪我の原因と言うのが、ルイズ１人でコボルドの群れに戦いを挑んだというのが呆れてしまいます」

「あの、エレオノールさん、話が一層物騒になったんですが？」

「強力な系統魔法が使えないあの子には少し相手が悪かったんでしょうね、でも、お母様が一掃したそうですから危険は少なかったそうですよ？」

これが特訓という奴なんだろうか？　まあ、確かにストレスが溜まりそうな話だな。

「あの子、段々、お母様に似てきていますね」

「うーん、それは良い事なのかな？」

「そうですね、でも、昔に比べれば良い方向に動いているんだと思います」

「そうだね・・・」

何か間違った方向に事態が動いてしまった気がするが、あの義母上に意見するのは難しいよな？　怪我をすることも織り込み済みっぽいから、口を挟めないぞ。うん？

「何故、エルネスト自身が治療しなかったんだ？　急患だったのかな？」

「やっぱり気付いてしまいましたか、あの、エルネストさんは今”エルネスト・ド・ラ・フォンティーヌ”と名乗っているんです」

「はぁ？」

「”あの話”を父にしたらしいんですけど、父が怒ってしまって、領内からエルネストさんを追い出そうとしたらしいんです」

エルネストの夢の話と領主代行の任命の話なんだろうな、まあ、堅物な義父らしい反応と言えるが、ノーラの反応はのんびりどころか、嬉しそうでさえある。

「それを知ったカトレアが、エルネストさんを追って家を出ると言

い出して、ラ・フォンティーヌを与える事で様子見になったんです」

「そんな事になっていたのか、エルネストも苦労するな」

「いいえ、そんな事はありません。お母様がエルネストさんを見直したと言っていましたからね。後は父が折れるのを待つだけです」

「あの人が味方になったのなら心配は要らないかな？」

あの女性を義母と呼ぶのはどうも苦手なんだ、決闘までやらかした仲だからな。

「はい、それに父が折れるのも意外と早いかも知れませんよ？」

「どうしてだい？」

「ふふふっ、秘密です！」

「うーん、気にはなるけど、ノーラがそう言うなら成り行きを見守ろうかな」

ノーラの様子を見る限り、私が副王としても義兄としても介入する必要は無さそうだ。しかし、ノーラは何がそんなに嬉しそうなんだろうか？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

☆ジョゼットの成長

話はがらっと変わるが、カグラさんがくれた”声を伝える者”の使い道に困っている。信頼できる人物にしか渡せないし、相手が十分な魔力を持っていなければ、使いこなせないからだ。多分がリアのジョゼフ王から各国の首脳に対しては送られているだろうから、トリステインから送るのも都合が悪い。

結局、実家のレーネンベルクに1つ置いて来ただけだ。遠征軍でも出していれば意味はあるんだが、使えるのだがそう言う予定はないしな。量産出来れば、思い切った使い方も出来るが、意外と使い方が難しいマジックアイテムなのだ。まあ、父からレーネンベルクで行っている事業の状況を聞けるだけマシなんだろうな。

「父上、そちらからの報告は以上でしょうか？」

「ああ、こちらは順調だよ。お前も無理はするなよ？」

「はい、時間があったらライルをこちらに寄越して下さい」

「おお、そうだった。少し待ってくれ」

「どうかしましたか？」

私の問いに対しての答えは暫く返って来なかった、どうやら父は席を外して何処かへ行ってしまったらしい。次に返ってきた声は若い女の子の声だった。

「スティン兄、聞こえる？」

「ジョゼットなのかい？」

「うん、スティン兄にもお礼が言いたくって」

「お礼？」

「うん、ホントは直接会って言いたかったんだけど、ライルは良いのに私は王都へ行っちゃダメって父様が言うんだもん」

おっと、ここは父に話を合わせるべきだな。今ならあまり実害は無いだろうが、無用な誤解は避けたいしな。

「そうか、でも父上が無意味な事を言わないのは僕は知っているし、ジョゼットも知っているだろう？」

「うん・・・」

「それよりお礼っていうのは？」

「あ！　そうだった、あのね、私魔法が使えるようになったんだよ！」

「そうか、良く頑張ったね。皆にもちゃんとお礼を言ったかな？」

「勿論、屋敷の皆にも、テッサにも、ライルにも、師匠にも、父様母様にも言ったよ？」

うーん、何故か弟のノリスの名前が挙がらないな？

「ノリスには言っていないのかな？」

「ううん、お礼を言おうとするとね、なんか抱きついて来て、泣いちゃうから・・・」

「それだけ、ジョゼットの事が大切なんだよ」

「うん、それは分かっているんだけど、師匠が男らしくないって」

セレナの陰謀だった、全く何をやっているんだか？

「男だって、本当に嬉しい時は泣く物だよ」

「スティン兄でも？」

「そうだよ？」

「ふーん、義姉様と結婚した時とか？」

「う、うん、そうだよ」

「分かった、ノリス兄にも、ちゃんとお礼を言うよ」

ふう、何とか誤魔化せた様だ。映像が無くて良かった。

「ジョゼット、君は自分が”系統魔法”を使えないかも知れないって聞いているかい？」

「・・・、うん、ルイズと同じかもって。でも大丈夫だよ、私には消去（イレース）と拳銃があるんだから！」

自分に言い聞かせる様なジョゼットの言葉に私は少しだけ危機感を感じた。まだ子供だし、実戦どころか本気の決闘さえもやった事が無い筈だからな。

「ジョゼット、決して無茶はしないでおくれ、色んな人が悲しむ事になるからね」

「うん」

「何時も、テッサか、ライルか、ノリスと一緒に居るようにするんだよ？」

「スティン兄も過保護だね？」

「ノリスには負けるけどな」

一抹の不安を感じながら、交信を終えることになった。

第百二十九話　ラスティン２５歳（成長）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／５／２４
今一＜居間
に修正

第百三十話　ラスティン２６歳（伯父さん）（前書き）

第百三十話ＵＰします。

第百三十話　ラスティン２６歳（伯父さん）

☆ライルの成長

そして更に一年が経過した。この歳と言うほど老いてはいない積りだが、時の流れが速くなったのを実感する事が多くなる。時々王城を訪ねてくれるライルの成長がそれを否応なしに理解させる。年齢の割りに小柄だったライルも二次性徴期に入った様で、会う度に身長が伸びているのが分かる。

逆に同世代のアンリエッタの成長の方に気付かない物だったりする。アンリエッタは何故か私の所に良く愚痴を言いに来るのだが、その不満の原因は私が枢機卿に進言した事だと言う事に気付いていないらしい。この娘がやれば出来る子の筈だから、愚痴を聞くに留めているが、両親があの状況で、あの王女の立場では相談できる相手が少ないと言うのも仕方が無いのかも知れない。時々やってくるルイズにも愚痴っている様だが、ルイズにも問題があるからな。

話が逸れてしまったが、ライルに話を戻そうか。ライルは昔から、可愛い男の子だったが、最近では少しだけ凛々しくなった気がする。（親の欲目では無いぞ？）

原因として思い付くのは、”後輩”が出来たから位だろうか？後輩と言っても、ライルには特別な意味があるのだろう、魔法学園にも公立学校にも通う本当の意味でのライルの”後輩”達の存在が、ライルを良い意味で成長させてくれたらしい。

色々な所からの助言で、公立学校に入学したばかりの生徒にも例の”メイジ検査”を行って、彼らの両親とも相談の上、ライルと同様に学園と学校に同時に通う事を勧める方針に決めた為だ。魔法を使うという事自体が感覚的な所があるから、なるべく子供の頃から覚えた方が良いという考え方は確かに同意せざるを得ない。逆に一

度感覚を覚えてしまえば、大人の方が早く新しい呪文を使えるようになるが、総合的に見た場合は時間が経ってみないと何とも言えないだろう。

大袈裟に言えばライル自身が、二重学籍の先駆者な訳だから、率先して”後輩”達に助言をして時には教師達と交渉の真似事までしているらしい。これで、まだ12歳なのだから、我が息子ながら末恐ろしい事だ、出会った頃は歳が7歳と聞いて驚いたのだが（栄養状況が悪かったんだろうな）、今では歳相応に見える様になったのが親として喜ばしい。（血も繋がっていないのに変な所で似る物だと、心配していたのだが杞憂だった様だ）

性格の面でも、メイジの才能の面でも、普通の人間としての教養の面でも、まさに”非の打ち所が無い”完璧超人なライルだが、性格が良すぎるというのが欠点と言えなくも無い。嫌と言えないのは良くない癖だと教えているのだが、改善の兆しは見えない。ある意味自分から苦労を背負いに行っている様な物なのだが、それを苦労と思わないらしい。この辺りは生来の性格なのだろうが、親として将来が心配になる。

面白い事だが、ライルにも苦手な人間がいる。1人はアンリエッタだな、ライル自身が自分に自信を持つ事でこれはかなり改善でした様だ。本来ならば私とノーラが、ライルの”居場所”を確保する事で安心感を感じさせてやれれば良かったのだが、現実がそれを許してくれなかった。精々頻繁に王城に呼び寄せて親子の交流に努めるしか出来なかったのだが、どれ位効果があったのかは分からない。

そして、ライルが最も苦手とする人物は、”工場長”のシモーヌなのだ。

「ライル、父上に言われて、ワーンベルに行って来たんだろう。錬

金隊の人達は良くしてくれたかい？」

「あ、うん・・・」

「どうした？」

「ううん、シルビーさんってお姉さんが工場街を案内してくれたんだ。前に行った所、旧市街だったよね、あそことは感じが違って面白かったよ」

シルビーさんの名前が出てきたぞ、シモーヌじゃないんだな？（どうでもいいが、きちんとお姉さんと呼ぶ辺りに、母の教育の後が見受けられるな）

「シモーヌは忙しかったのか？」

「う、うん、最初はシモーヌさんに会いに行ったんだけど、途中でシルビーさんが連れ出してくれたんだ」

「？　連れ出してくれた？　さっきから話が妙だな」

「うん・・・」

「もしかしてライルはシモーヌが嫌いなのか？」

「あ、うん、嫌いって言う訳じゃないんだけど、なんかダメなんだ」

「ライルがな、珍しいな。実を言えば、僕もシモーヌは苦手なんだ」

「父様も？　良かった～」

ちなみに、ライルはキアラと凄く仲が良いが、私はキアラも苦手だな。

「でも、シルビーさんが”シモーヌちゃんと2人っきりになったら駄目だよ～”って言ったのはどういう意味なんだろう？」

「何！　ライル、僕からも言っておくが、シモーヌと一対一で会うのは禁止だぞ」

まさか、彼女にそういう趣味があるのだろうか？　いや、趣味は人それぞれだが・・・、うん、シルビーさんの活躍を期待しよう！

「でも、シルビーさんはいい人だよね。僕みたいな息子が欲しいんだって！」

「まあ、ライルみたいな息子は誰でも欲しがると思うぞ。あれ？シルビーさんって結婚してるのか？」

「うん、実はもうすぐ子供が生まれるんだって」

「そうか、あの女性が母親か・・・」

「なんか心配だね」

「ライルも言うようになったな」

「えへへ」

うーん、あまり深く考えない様にしよう。人様の家庭より自分の

家庭が大事だが、シルビーさんの旦那さんってどんな人だろうか？
それから、シモーヌには早く結婚して貰わなくてはいけないな、
この手の話が得意そうなのは・・・、母しか思いつかない、手段は
選べないから、今度の実家との交信で頼んでおこう、うむ！

＝＝＝

☆甥（ノルベール）の誕生

いきなり私的な報告だったが、もう１つ私的な報告をさせてもら
おうか。

私に甥が出来たのだ、と言っても弟のノリスと友人セレナの間に
子供が出来てしまったとか言う訳ではない。義妹と友人エルネスト
の間に子供が生まれただけだ。（ん？当然だって、まあ、その通り
なんだがな・・・）

「ノーラ、知っていたな？」

「はい？　何の事ですか、兄様」

「ガスパードから聞いたんだ。ノルベールの事だよ？」

「ノルベールって誰ですか？」

「エレオノール、白状しなさい」

「はーい、にいさま。やっぱり父の怒りは長続きしなかったでしょ
う？」

「そうだな、毎日の様に診療所に顔を出すから、エルネストが迷惑がっている位だそうだ」

「でも、ノルベールって名前は初耳なのは事実ですよ？」

「まあ、良いよ。でも、これで義父と義弟の諍いが収まりそうだな」

「そうですね、父は初孫を可愛がりたいでしょうが、上手く行かないでしょうね」

意外と策士だな、カトレアの考えなのか、ノーラの考えなのか分からないが、ラ・ヴァリエール公爵家をいずれノルベールと言う赤子が継ぐにしろ、義父の発言力は低下しているだろう。義父は義父なりに孫を可愛がるだろうが、実を結ばないのは娘達を見れば分かる。（義父がラ・ヴァリエール公爵家の最高権力者というのは表向きだからな）

「私達もそろそろですね？」

「そうだね、ちょっと頑張ってみようか」

「まあ、兄様ったらまだ昼過ぎですよ？」

「まあ、今晩の話だよ」

「はい・・・」

失礼、ライルは居るのだが、常時一緒ではないので、どうも新婚気分が抜けない二人なんだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

☆鉄道の普及

それでは、本筋の話を始めるとしよう。やはり鉄道の話からだろうな。

リッテン企画、コルベール先生監修の機関車だが、去年の秋口に公開走行が行われた。試験走行自体は去年の春には終わっていたのだが、ここまで時間がかかったのはクリーン化と効率化を進めた為らしい。

蒸気機関の問題点を挙げると、

・始動時間
・運転環境
・メンテナンス性
・スモッグ
・熱効率，高速運転

になるらしい。熱効率，高速運転に関しては、宿命的な物なので、目をつむる事にして、他に点の改良に励んだと言う訳だな。

・始動時間

これは力技で対応したそうだ、普通に火系統の魔法を”火室”内で発現させるだけだから、コルベール先生の様なトライアングルメイジは勿論、ラインメイジでも十分に役目を果たしてくれると言う話だった。（さすがにスクエアクラスのメイジでも長時間火力を維持するのは難しいぞ？）

・運転環境

運転と言っても、操縦の方ではなく、石炭を焼べるとかいった肉体労働の問題だ。最初は普通に人を雇った訳だが、さすがに夏場は体調を崩す人間が続出した為、自動化したそうだ。自動化と格好良く言っているが、機械的な工夫ではなく作業をゴーレムに肩代わりさせただけだったが、いかにもこの世界に相応しいかも知れないな。一応、現在は機関士と機関助士を乗せているが、両者を1人の土メイジがこなすことは難しくないだろう。

・メンテナンス性

これは2つの意味があるのだが、まず、蒸気機関を使える状態で維持すると言う面では、主要な部品に固定化（フィックス）をかけることで、メンテナンスフリーとまでは行かないが、かなり手がかからなくなった。ちなみに火室内で無茶な魔法が使えるのも、強化されている為だし、固定化を使えるメイジには不自由しないから、一回の走行毎にかけ直すことも難しく無い。

もう1つは、走行終了後の石炭ガラの廃棄なのだが、石炭自体の品質が良くない。言い方を変えれば、新米メイジが錬金した石炭である為に発生した問題なのだが、石炭を焼べる役のゴーレムに処理させれば、全く問題が無かった。（石炭の純度が上がれば、この作業自体殆ど必要なくなるだろうな）

・スモッグ

これは、何気なくリッテンがロンドンスモッグ事件の話を出しただけらしいのだが、コルベール先生が異常な執着を見せて改良を施したらしい。報告してくれた本人は誤魔化していたが、”火”が原因で人に害をなすと言う事が我慢できなかったのだろうな。実に”ミスタ・コルベール”らしいかもしれない。

これも、石炭の炭素純度が上がれば問題解決するのだが、リッテンから詳しく話を聞きだしたコルベール先生が、”脱硝・脱硫装置

”や”集塵機”が必要だと考えてしまい、必要以上に時間がかかってしまったらしい。

大袈裟な装置は効率を落とすし、体積の問題もあり、結局ミネットの説得で、排煙を普通にフィルターを通すことになった。こちらには難燃性のフィルターなど無いから、羊毛や綿を使った本当に原始的なフィルターなのだが、これは燃えるんだな。排煙の温度を下げる目的で蒸気機関車に特徴的な煙突を機関車の後方にまで伸ばし水タンクに隣接させた。

ここまで来たらとリッテンのアイデアで蒸気自体も回収して”復水式”にまでなってしまった。蒸気と排煙を集める為に風メイジと高温になる水を冷やす為の水メイジが乗り込む形になってしまったが、トータルの重量は増やした位だから軽量化は難しくなかった。

第百三十話　ラスティン２６歳（伯父さん）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百三十一話　ラスティン２６歳（友人達の帰還）（前書き）

第百三十一話ＵＰします。

第百三十一話　ラスティン２６歳（友人達の帰還）

機関車自体に関しては、これ位なのだが”ミスタ・コルベール”は、ミネットの説得により諦めた”脱硝・脱硫装置”を魔法的な方法で再現しようと計画していた様だ。無茶をして、古巣の魔法学院にまで顔を出し、元同僚の（私にとっては恩師の１人だな）バルザック先生の協力を得て、大気中から特定の元素（分子）だけを集める気体濃縮（エア・ギャザー）を開発して見せてくれた。（海沿いでの塩田等で、海水の塩分を高めてから汲み取る際に使われる通常の濃縮（ギャザー）の風版で、これ自体は別に難しい物では無い）

但し、気体濃縮（エア・ギャザー）だけでは、あまり意味を持たないのは明白だったが、その解決策は何の事は無い私自身が”ついでで”学生の頃に考案していたのだ。言われるまで気付かなかったのは、考案者としてはどうかと思うが、逆液化や強化固化（リバース・リキッド・パー・ソリッド）は私向けでは無かったし、実際考案者は”私”では無いからな。

二酸化炭素（温暖化対策）で考えられたのは、以下の手順を説明された。

1．風メイジが気体濃縮（エア・ギャザー）で大気中の二酸化炭素を集めて、濃度をあげる
2．濃度が上がった部分を逆液化（リバース・リキッド）で液体化する
3．液体二酸化炭素を固化（ソリッド）で固体化する
４－１．元素変換（コンバージョン）で石炭等に変換する
４－２．固体二酸化炭素を分解（デコンポーズ）で酸素と炭素に分解する

これで燃料のリサイクルサイクルが（理論的には）完成するそうだ。正直言ってしまえば、効率の面では（特に現状では）全く現実では無いが、予想通りにメイジの数と質が上がれば、決して”夢の

技術”では無いと思える。トライアングルスペルが2回も必要なのは何とかしたいな、固体化せずに液体のまま元素変換が出来れば、効率はぐんと上がるのだがな。

（注：空中の元素を固体化する魔法技術です。固定化するものではありませんし、勿論服装が変わったりしませんよ！）

＝＝＝

この鉄道絡みの話では、何故か聞いた話が多かったのは気付いていただろうか？　理由は簡単で、私は現場に一度も行けなかったのだ、理由は後で書く機会があると思うが、”公開走行”には無理を言って、王妃マリアンヌ様に臨席してもらう事になったのだ。鉄道に”箔を付ける”為に王家の者が出席する必要があったのだ。

ノーラでは、主賓には少し不足だったし、アンリエッタは枢機卿が勉強が捗らないからとダメ出しされたからだが、マリアンヌ様は鉄道が気に入ってくれた様で、私が行くよりは良い結果だったかも知れない。

「マリアンヌ様、長旅でお疲れではないですか？」

「気遣いは無用に、それより、ラスティン！　あんな素晴らしい物を隠していたなんて、トリステインの損失よ」

「鉄道は気に入っていただけましたか？」

何だか、凄く気合が入っているマリアンヌ様だな。機関車というのはあまり女性向では無いんだが？

「ええ、急な話で、最初は気に入らなかったんだけど、一目見て気

にいってしまったわ」

「そうですか、それは良かった」

「それに、あの”汽笛”の音も良かったわね、詩的だわ・・・」

余程気に入ってくれたらしいが、汽笛が詩的？

「何時になったら、トリスタニアまで来るの？　あんな田舎では、ごめんなさい」

「いいえ、レーネンベルク領が全体として田舎なのは事実ですから。線路、いえ、レールを延長するのは簡単なのですが、王都まで繋ごうと思うと他の領主の土地を通りますからね」

「そうね、でも結構な人気だったみたいだし、わたくしも絶賛しておいたから、今なら意外とすんなり行きそうな気もするわよ？」

マリアンヌ様が少し顔をしかめたが、楽観的な見解を述べてくれた。

「分かりました、調整してみます」

「ところでラスティン？」

「はい」

「機関車に王家の紋章が使われていたんだけど？」

「私が”副王”として許可しましたが、拙かったでしょうか？」

「・・・、まあ、良いでしょう。似合っていたからね」

ふぅ、お叱りは無しの様だ、今後国営鉄道になる事を考えて、提案したのだが少し先走りすぎたかも知れないと心配していたのだ。しかし、黒い機関車に黄色（金色は遠慮しておいたのだ）の百合か、結構渋いな。

「白地に黄色の百合の紋章、所々に青と赤が使われていて、私は好きだわ」

「はぁ？」

「どうかしたかしら？」

「え、いいえ、何でもありません」

「そう、なるべく早く、鉄道をトリスタニアまで延長してちょうだいな。あれがあれば、陛下の移動も楽になるわ」

「そうですね、やってみます」

「頼んだわよ」

言いたい事だけ言って、マリアンヌ様は陛下の病室へ戻って行った。私の執務室まで来てくれたのは、最後の部分を陛下に聞かせたくなかったからなのだろうな。あの方らしい振る舞いだが、白地に青に赤に黄だって、蒸気機関車だよな？　勝手に黒だと思っていたが、煤とかの影響があるから結構掃除が大変そうだ。配色的には、トリコロールだな、某機動戦士みたいだ・・・？

しまった、マリアンヌ様のセンスを普通に考えてしまったぞ、これは汽笛の方も実は不評だったのかも知れないな。考えてみれば、車両の色も形も全然聞いていないし、うーむ、今更だろうな。どうでもいいが、色を決めたのもリッテンだろうし、汽笛も彼の好みで決めた筈だ、そうすると、リッテンとマリアンヌ様の趣味が似ている事になるな？

結局、中々具体的に機関車の外見を知る機会が来なかったが、某（ヨル）画家（ごさんだ）の絵で見る機会があったのだが、確かに車体色は”あの色”で、形は0系新幹線にパイプを付けた様な見慣れない物だった。確かに先頭部に黄色い百合が描かれているし、あまり私には馴染みが無い物だった。実物を見れば印象が変わるのだろうか？

ちなみに、この絵を見せてくれたロワイエさんによれば、やはり普通の人には”汽笛”は耳障りな物だったらしいが、それ自体は汽笛の目的に合っているので問題は無いだろう。カラーリングに関しては、リッテンが0系新幹線の白と青を目指したらしいのだが、幾らなんでも汚れが目立つと言う事で、汚れが目立ちやすい所に赤を使う事で妥協したらしい。（一部の人間には好評だし問題は無いと考えよう）

それにしても、陛下の移動の足としての鉄道か、貴族達への牽制としては使えるかも知れない。御用列車と言う訳だな、リッテンが別の意味で泣いて喜ぶかも知れないが。しかし、この絵の通りなら、陛下が喜んで乗るだろうか？

＝＝＝

☆コルネリウスの帰還

いや、帰還という表現は正しいとも正しくないとも言えるだろう。

その話を始める前に、別の友人の話をしておかなくてはならないな。

最近、彼女の名前が出ていないのに気付いているだろうか？　彼女、そう、エルフの少女クリシャルナの話だ。以前は、風石機関の研究の傍ら王都の精霊的な警備をしてくれていたのだが、精霊を使ったスパイが下火になり、風石機関の研究が鉄道関係で中断された為、また”旅”に出かけていたのだ。旅立ちを見送った時には行き先は教えてはくれなかったが、今はそれがゲルマニアだったのは今は分かっている。

話が繋がって来たのが分かるだろうか？　図らずも、ゲルマニア首府ヴィンドボナで出会った2人は仲良くゲルマニアを後にしてトリステインに”帰って”来たのだ。正確には、クリシャルナがコルネリウスを護衛して来たのだろうが、見た目は父親と娘の様だった。（クリシャルナが例の”変装”していたからだが、相変わらず少女のままだから、そのままでも無理をすれば父娘にも見えなくは無い、耳さえ隠せばな）

「クリシャルナ、お帰り。無事で何よりだけど、無理はしなかったかい？」

「ただいま、ラスティン。やっぱり、私にはこの国の方が合うみたい」

無理はしなかったとは言えない様だが、無事なら本当に何よりだ。

「コルネリウスも良く来たな」

「俺にはお帰りと言ってくれないのか？」

「じゃあ、お帰り、〝アルマント・フォン・リューネブルク〟！」

「そうだな、俺はこれからそう名乗って行くよ」

意外にも、あっさりそんな事を言い切った友人を少し驚いて見てみたが、不思議と落ち着きの様な物が出てきたと感じた。

「ゲルマニアは良いのか？」

「ああ、俺は今のゲルマニアに必要ないらしいからな」

「どう言う事だ？」

「言葉通りさ」

「君になら、手を差し出してくる貴族は多いだろうに」

「いいや、残念だが。ツェルプストー辺境伯位だな、頼りになりそうなのは」

「反宰相派は多かった筈だろ」

「そうだな、彼らは見事に皇帝派になったよ。今では手を差し伸べてくるのは、小物か、俺を利用する事ばかり考えている奴らばかりさ」

「そうか、〝ナポレオン1世の奇跡〟の影響か・・・」

考えられない事態では無かったが、ここまで事態は動いたのか。

辺境伯は反宰相かつ反皇帝という変わった貴族な訳だ。ゲルマニア

国内での地位を保つのが難しそうだな。ただ、辺境伯でなければラ・ヴァリエール公爵を抑えられないのは歴史的な事実だが、これが今後も続くとは限らない。

「ツェルプストー辺境伯も大変そうだな？」

「辺境伯は以前、自分の所の技師達を大量に”宰相”に奪われてな、それが実は皇帝の入れ知恵だったのが分かったらしくてな」

「そうか、そんな事がな・・・」

ナポレオン君も”知識”を有効に使っているらしいな、いや、当時は宰相が息子の知識を使って、あれを作ってしまう技術者達を青田買いしたのだろうな。辺境伯があの親子を恨む理由が良く分かった。

「そういえば、本物の”アルマント”はどうなんだ？」

「あれは、今大変な時期だからな・・・。若い新領主の土地だけは広いが弱小貴族に分類されるだろうな」

「アルマント、ゲルマニアで他に何か無かったか？」

「いいや、どういう意味だ？」

「何だか、随分冷静に判断出来ているなと思っただけだよ。印象が変わったと言っても良いかな？」

言葉遣いだけは相変わらずだけどな。

「何も無かったさ、辺境伯の所で世話になっている時に色々考えたんだ。そしてゲルマニア各地を回ってみて、俺はこの国に必要とされていないと感じてしまった訳だよ」

「お前の祖国だろうに」

「そうだな、だが、誰もが生まれた国で一生を終えないといけない訳じゃないだろ」

「分かった、改めて歓迎するよ。アルマント！」

「ああ、よろしく頼む」

「君も随分大人になったな。ガリア王の言葉が効いたか？」

「ああ、確かに堪えたよ。あれがなかったら、多分俺は、ここに居ないだろうな、大人になったもんだろう？」

「あのね、コルじゃなかったアルマント、貴方、自分が立派な大人だと思っているの？」

今まで黙ったままだったクリシャルナが、妙な所で口を挟んで来た。

「何かあったのかい、クリシャルナ？」

「ええ、立派な大人のアルマントは、ヴィンドボナで警備兵といざこざを起こして、逮捕されそうになっていたのよ？」

「黙っていてくれって言っただろ！」

その場面に偶然出くわして、クリシャルナの演技に助けられた訳か、危ない事をするよな？

「何だか、姉弟（きょうだい）の会話みたいだな？」

「こんな手のかかる弟は御免よ。でも、あの辺境伯の所の娘さんとは仲が良かったじゃない？」

「キュルケか？　まあ、可愛い妹みたいなものだったな、色々世話をしてくれたし」

「満更でも無かったみたいね」

「もう余計な事は言うなよ！　皆に挨拶してくる！」

あまり見た事が無い照れた様な表情でこんな事を言い捨てて、アルマントは部屋を出て行ってしまった。

「さて、クリシャルナ。君がゲルマニア首府なんかで何をやっていたか教えてくれるかな？」

「言わないとダメ？」

「ダメだ、普通の人間じゃエルフの君には敵わないだろうけど、あそこには宰相に味方するエルフが・・・」

「分かっちゃったみたいね？」

「クリシャルナ、君がエルフとして行動する事を止める権利は僕に

は無いけど、友人として君の事を心配するのは仕方が無い事だよね？」

「うん、ありがとう」

「だけどね、もし、君が少しだけでも僕の為にと考えて、ヴィンドボナに赴いたとしたら、そして君に何かあったとしたら、僕はきっと君と友人になった事を後悔すると思うよ？」

「・・・、ごめんなさい。今回の事は、私の独断だったの、レイハムの方からは何も言われていないわ。貴方とは良い友人で居たいから、これは話しておくわ」

「ありがとう、クリシャルナ。レイハムの里は動いていないのかな？　評議会で議題にするとか」

「あら、評議会の話をしたかしら？　おじ様から聞いたのね？」

おじ様は、ローレンツさんの事だったかな、ローレンツさんからの情報ではないが、指摘する必要も無いな。

「仕方ないわね、ちょっと込み入った話になるわよ？　レイハムは少し特殊らしいんだけど、評議員の方と、議長の相談役をやっている方が居るの」

「評議員は分かるけど、相談役って？」

「そうね、前々評議会の議長をやっていたのが、レイハムの長でその方が相談役をやっていると言ったら分かるかしら？」

「直接の発言力は他と変わらないけど、評議会の決定にある程度、影響力があるって感じかな？」

「そんな感じかしら」

「そして、君は評議員か、長の血縁者なんだろ？」

態々、人間の国に送り込んでくる位だから、かなりの信頼を得ていると考えるとそういう結論になる。

「うーん、分かっちゃう？」

「単なる推測だけどね」

「でも、ウチの里は皆が家族みたいな物だから、誰でも良かったのよ？　それはそれとして、評議会の現状は人間に対しては様子見なの、レイハムは人間との交流を望んでいるけど、反対派も多いみたいね。その反対派の１つが、ゲルマニアに手を貸しているのよ」

「何だかおかしい話だね、人間との交流を反対しているのに、人間に手を貸すのか？」

「まあ、色々あるのよ、私達にもね。ただ、誰が手を貸しているかが分かれば、決定的な証拠になると思ったんだけどね」

そのゲルマニアに手を貸しているエルフは、所属する里だか村だか町だかでも特殊な立場と言う訳かな。色々ややこしい話だ、エルフ達も人間と変わらないらしい。人間など滅ぼしてしまえと言う過激派が居ないのが救いだな。

どうでも良い話だが、”評議員の方”というのはクリシャルナの祖父にあたり、”相談役”の方はクリシャルナも何代前か分からないそうだ。年齢を聞くと、”２，０００歳以上なのは確からしいわよ、本人も覚えていないかもね？”という返事が返ってきた。うん、この点は追求しないでおこう。

＝＝＝

こう言う訳で、対ゲルマニア政策を見直す必要が出て来たのが、私が王都を離れられなくなった理由だ。間諜達が使えなくなったのが正直痛かった。完全な敵地に送り込み直すとなるとそれなりの訓練と経歴が必要らしく、中々新たな情報を得ることが出来ないのが、的確な対策案を考えられない理由なのだ。

ただし、状況的に言えば、暫くはゲルマニア内で皇帝派と宰相派の政争が続く筈だから、油断さえしなければトリステインでも対応が可能だろう。ゲルマニア包囲陣を敷きたいと思うのだがロマリアの協力が得られない為、完全な物にならないと言うのが、もどかしい所なのだ。

ロマリアでは、宗教庁から政治的権力を引き継いだ”ロマリア王家”が新設された、いや、正確には復活しただそうだ。そんな経緯からか、”ロマリア王家”は基本的に外交的には中立を標榜しているので、私達が苦労する訳だ。ジェリーノさんの宗教改革が実質的な最終段階に入った訳だから、素直に喜びを分かち合いたい所なのだが、痛し痒しだな。

裏の事情を知っているだけに、ガリアのジョゼフ王が言う”ロマリア王は腰抜けだ！”という”正当な”批判も、ただ聞いているだけしか出来ない。最近、ジョゼフ王の愚痴を聞く為に交信をしている様な気分になってくる。紙幣の導入や軍事同盟の締結を提案してもはぐらかすのに、愚痴だけはこぼしていくのだから性質が悪いの

だ。

第百三十一話　ラスティン２６歳（友人達の帰還）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百三十二話　ラスティン２７歳（悲恋）（前書き）

第百三十二話ＵＰします。

誰の悲しい恋なのでしょうか？

第百三十二話　ラスティン27歳（悲恋）

国外の状況は停滞気味で、国内では密かに大きな変革が起こりながら時間が過ぎていった。

☆身近な状況変化

身近な話をすると、秘書官に戻ったアルマントは積極的にトリスティインの国政に参加している。陛下にも、自分から素性を明かした彼は堂々と、枢機卿とさあえ渡り合うようになったが、まあ、まだ経験不足だから負けが込んでいるのは事実だ。最初はゲルマニア人と嫌っていた枢機卿も、アルマントの熱心さに渋々といった感じだがその存在を肯定的に受け取ってくれるようになった。私が見る限り、アルマントに厳し目のキアラがアルマントに味方していれば勝率は上がる筈なのだが、キアラは手加減をしていないのだ。

私とノーラの間にはまだ子供が出来ていない。それ自体は仕方が無いと諦めているし、まあ、何時までも新婚気分が続くのは悪い事では無いと密かに思っている。ノーラ自身は、電報の開発をほぼ終えている、正確には通信自体は現状でも可能だが通信方式に色々なバリエーションを考えている所だったりするが、原始的な暗号化通信の様な話になってくると、詳しい人間が居ないので的確な助言が出来ないのが情けない。

だが、ノーラ自身は楽しそうに眉をしかめて？色々な通信方式を考案していたりするので、これはこれで良いかと思ってしまう。ノーラの幸せが、私にとっての幸せなんだと実感できるからだろうか？

他では、意外なカップルが幾つか誕生したというのが、大きな変化だろうか？

先ずは、”クロディー＝ジェフ”の2人だろうな。クロディーの熱烈なアタックにジェフが折れたと言った印象だが、本気で遠距離恋愛になるがどうやって付き合っていくのだろうか？　クロディーがトリステインに戻って来るのは考え辛いから、ジェフがまた折れるうだろうな。彼に抜けられるのは痛いが、後進も多いから何とかなるだろう。

そろそろ、ガリアのの大使も挿げ替えて良い時期だから、結婚となればどちらかを何処かの貴族の名目だけの養子にして、正式な大使とする事にしようか？

＝＝＝

もう1組は、”ユニス＝アンセルム”の2人だが、これは聞く限りアンセルムがユニスに求婚した事になっている。しかし、2人を、特にユニスを良く知っている人間は、”ユニス”が、”アンセルム”に求婚させたと確信している。誰もどうやって”求婚させた”かは知らないのだが、アンセルムに聞いても”個人的な話だからな、話せないぜ！”と突っぱねられるのだ。

話は少しずれるが、暇そうにしているアンセルムに公立学校の運営を覚えさせる事にした。運営と聞いて嫌な顔をしたアンセルムだったが、後の方では何か企んだのがありありと分かる表情になって、学校の理事長であるローレンツさんの所へ出掛けて行った。そして5日で戻って来たのだが、何故か”宿題”を抱えてだった。まあ、宿題の内容は想像に任せるが、公立学校の新入生がやる物だったのは、あまり大きな声では言えない。

某友人の推測では、”大方、教師として潜り込もうとして、理事長先生に返り討ちに遭ったんでしょう”ということだ。きっとあれは一生直らないんだろうな。ローレンツさんの後継者としては、些か心許ないが、転生者のサンディも居る事だから、何とかなるだろ

う。

＝＝＝

さて、上に挙げた2人の男性にはある共通点があるのは分かるだろうか？　高等学校の卒業生という事もあるが、とある女性に恋愛感情を持っていたというのも立派な共通点だ。一般的には恋敵なのだが、どちらも完全な片思いだったからな。

そのとある女性というと、殆ど独身主義者のキャリアウーマンにしか見えない生活をしている様だ。朝から晩まで王城に詰めていて、様々な会議に参加というか、主導して、その報告を簡潔かつ明瞭にまとめ、2人の上司（私と枢機卿）に報告するという平凡でも変化に乏しくも無いが、若い女性には相応しくない日々を送っている。

そろそろ行き遅れと呼ばれてもおかしくない年齢になりつつあるのだが、本人にはその気が全く無いらしい。さすがに私から男性を紹介すると言う事は出来ないが、時々ある視察に同行させる人物を彼女に相応しい男性にしているのだが、浮ついた噂は全く流れない。同行させた男性の方が何故か自信を無くすと言う事も有るとか無いとか、妙な事が噂になる事はあるのだがな。（私の意図を読み取って、態とそういう対応をしているのかと疑いたくなってくる。”処女副宰相”という呼び名も耳に入ってくる程の身持ちの堅さだ）

「忙しい所にお邪魔して申し訳ありません、マザリーニ様」

「忙しいのはお互い様でしょう、副王殿下？」

「済みません、政治に関する話では無いのです」

「ほほう、では姫様の話ですかな？」

「それも、私にとっては政治的な話ですよ」

「それでは、何の用件かな、ラスティン殿？」

やっと警戒を解いてくれたらしい。別に敵対している訳では無いんだがな。

「はい、実はキアラの事なんです」

「キアラ君の？　彼女が何か問題を起こすとも思えないが？」

「はい、枢機卿に相談するような話では無いのですが、是非協力をお願いしたい事がありまして」

「まあ、話してみたまえ。協力するかはそれから決める事にしよう」

「キアラは未だに独身ですよね？」

「なるほど、確かに聖職者にする話ではありませんね。ですが、キアラ君は今年で２６歳だったね、彼女の上司の１人としては気にしておくべきでした。彼女の人間としての幸せを奪う権利は誰にもありませんからね」

「マザリーニ様のお知り合いに、キアラに相応しい男性はいらっしゃいませんか？」

「ふうむ～、正直私向けの話ではありませんな」

「はい、私の方でも動いてみたのですが、どうも彼女の好みに合わなかったらしくて」

「そうですか、心当たり探してみましょう。彼女には私も世話になっていますからね」

「お願いします」

「ところで、キアラ君の男性の好みと言うのは？」

「えっ？」

「ぴったりの男性が居るとは限りませんが、参考までに知っておきたいのです」

「残念ながら・・・」

「そうですか？」

雲行きが怪しくなってきたので退散する事にした。未だに確信出来ないが、キアラの好きなタイプが私みたいな人間だったとして、そんな事赤の他人の前で言える筈も無い。私が枢機卿にこの話をしたのは、枢機卿からマリアンヌ様の耳に入る事を予想しての事だ。こう言う話は女性に任せるに限る、例の”疑惑の女性”の縁談も、母に相談したらあっという間に決まってしまったからな。（ライルの危機と、友人のシルビーさんの話もしておいたから、本当に早かったぞ）

母に相談する事も考えたが、妙に嫌な予感がしたので、あっさり諦める事にした。”副王様なんだから愛妾にすれば良いじゃない”とか簡単に言いそうだ。その先はあまり考えたくない展開が待っているだろうし、ノーラを悲しませる積りは無いのでな。

＝＝＝

☆悲恋

去年の冬の事だったが、突然1人の女性が私を訪ねて王城へやって来た所から話は始まる。ごく普通の訪問だったし、友人だった事もあり何の心の準備もしていなかったから、その事件は私の心に印象深く残った。

「セレナ、良く来たね」

「ええ・・・」

「もしかして、ジョゼットに何かあったとか？」

少なくとも父との交信ではそういう情報は聞いていないんだが？

「あった言えばあったかしら」

「何だか元気が無いね」

「そうね・・・」

セレナらしくなく、何故か泣き出しそうだと感じてしまった。執務机から応接ソファーに移動して、話を本気で聴く体勢に入り、少しだけ優しい声を意識して何が起こったのか聴いてみた。

「良かったら相談に乗るよ？　君は僕の大切な友人なんだからね」

「・・・」

優しく話しかけた積りだったのに何故か、セレナはもっと辛そうな表情になってしまった。何だ、セレナに何が起こった？

「1つ聞かせてくれる？」

「いいよ、何でも聞いてくれ、正直に答える！」

最大限誠意を込めてこう言ったが、失敗だったのには直ぐ気付かされる事になった。

「もし、もしよ？　もし、私達がまだ魔法学院の学生だった時に、私がスティンに交際を申し込んだとしたら、貴方はどうした？」

「そうだね、多分、うん、正直に答えるよ。はっきりと断っていたね」

「理由を聞かせてもらえる？」

「僕には婚約者が居たわけだからね、別人を名乗っていたとしても裏切れないよ」

「どうして、ただの遊びでもダメなの？」

「ダメだな」

「どうして私じゃダメなの？」

「そう言われてもな、強いて挙げれば、君がエレオノールじゃないからかな？」

そう言った瞬間に、セレナの瞳から一筋の涙が流れ落ちた。ノーラには言えないが、とても悲しいがとても綺麗な涙だった、そう、もし私がノーラに出会っていなかったら恋していたかも知れない程の・・・。

「あなた、貴方達兄弟ときたら同じ様な事を言うのね・・・」

「そうか、ノリスに結婚を申し込んだんだな？」

「そう、私って、１１歳の女の子よりも魅力無いかしら？」

「・・・」

「ごめん、答えられないわよね。あの娘の師匠役は辞めてきたわ」

「そうか・・・」

「教えられる事は全部教えて来た積り、多分私じゃあれ以上は無理・・・」

そうか、それで思い切ってプロポーズしてみたんだね？　結果は最悪だったけど頑張ったね、そんな事を言いたかったが私の立場では言えないな。

「ありがとう、僕が変な頼みをしたせいで辛い目に遭わせてしまって、すまない！　ノリスの分も謝らせてくれ」

「いいの、所詮は単なる憧れだったんだわ」

「これからどうする積りだい？」

「さあ、今更実家には帰れないし、警備隊に戻る積り・・・、それしか能が無いしね」

警備隊か、辛いだろうにな・・・、しかし何故か嫌な感じだ。もしかして、自棄になっているんじゃないだろうか、この状態ではどんな無茶をしてしまうか分からないぞ？　良く考えろ、大切な友人の命がかかっているんだ！

「警備隊に戻るなら、紹介状を書くけど？」

「任せるわ・・・」

「第１１班は知っているかい？」

「４班所属だったから、知り合い位は居るかもね？」

「今、１１班は重要な任務に当たっているんだけど、行ってくれるか」

「重要な任務？」

「そう、君がヒントをくれた話だよ？」

「何の事？」

「亜人が周期的に現れるという話をしてくれたのは君だろ、セレナ？」

「そう、あの話ね・・・、役に立ったんだ」

「君は勘違いをしているよ、君は魔法を使わない役立たずのメイジなんかじゃない！」

「ありがとう、１１班ね、行ってみるわ」

ダメだ、私の言葉じゃ届かないみたいだ。警備隊第１１班の実績と、隊長のマルコさんの言葉を信じよう。少しでも早く、セレナの心の傷が癒える事を期待するしか私には出来そうも無い。誰かが、セレナを支えてくれる事を祈ろう。

カロリーヌを強引に呼び出して、セレナを任せた後、念の為ガスパードと護衛隊を何人か割いてセレナを送り出した。兵団本部にから情報を得るのは避ける様に命じたが、ガスパードならなんとかセレナを警備隊第１１班に送り届けてくれるだろう。

セレナの事を考えながら、私はどうしてもキアラの事を考えずにはいられなかった。キアラの涙は見たくないが、どうしようも無い事もあるのだろうな。もし、ノーラとキアラのどちらかを選べと言われれば、迷わずノーラを選ぶ事は自分が一番良く分かっているんだ。

第百三十二話　ラスティン27歳（悲恋）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

誰がセレナを支えるのかは、書くまでも無いですね。そして、彼女達には、もう少し活躍してもらう予定です。

第百三十三話　ラスティン２７歳（縁）（前書き）

第百三十三話ＵＰします。

懐かしいあの方の息子さんが登場です。意外に重要な人物なんですがね。

第百三十三話　ラスティン27歳（縁）

☆傭兵隊長

セレナの話があってから、私は新しいジョゼットの師匠役を探す必要に迫られた。（セレナの事も心配だが、私が打てる手は無いからな）

純粋な戦闘技術は詳しくは無いが、セレナがジョゼットに戦士としての訓練をしてくれたのは分かっているし、メイジと戦う際の心得なども教わっているらしい。ジョゼットには、本格的な戦士としての修行と、消去（イレース）の魔法を自分で研究する必要が出てきた訳だ。

消去（イレース）の研究は、ジョゼットにしか出来ない事だから、手を貸す事が出来ないが、戦士としての修行には手が貸せないだろうか？と考えてみたが、私自身も正しくメイジだから、”戦士”に心当たりは無かったりする。ジョゼットが成長しても、筋肉隆々のマッチョにはなりそうも無いとなると、スピード重視の軽戦士が理想なんだがな。

スタイルとしては、魔法衛士隊などが近い気がするが、決定的に切り札とする魔法が無いという点で相容れないし、あそこには手を出したくは無い。ヒポグリフ隊のエロワなら多少は面識があるのだが、私が魔法衛士隊に関与するのは、現状では拙い。

あまり自慢にならないが、普通の国軍の兵士も集団戦を前提にしている以上、あまり当てにならないのは分かっている。そうなると、普通の傭兵辺りに話を持っていくのが普通だろうが、伝が無いと思ったが、・・・あったな。

「副王殿下、何か御用でしょうか？」

「書き取りは捗っているか？　文字を書かなくてもいいのは、美術の教師位だぞ？」

「うるせ、おっと、その話は出してくれるな」

子供の頃、傭兵団で暮らしていたというアンセルムに話を聞いてみる事にしたのだ。多分、性質が悪い傭兵団では無かっただろうし、そこから辿れるかも知れないからな。

「ふーん、貴族の娘さんが、傭兵に弟子入りね」

「心当たりは無いか？」

「心当たりも何も、どんぴしゃの人が居るよ」

「人柄は信用できるのか？」

「当たり前だろ、俺がいた傭兵団の団長なんだからな」

「ほう、傭兵団長が軽戦士なのか？」

勝手なイメージだが、体中傷だらけのがっちりとした男性を想像していたんだが。

「そうだが？　あー、ウチの団長は、まあ良いさ、会ってのお楽しみだ」

「任せるけど、出来れば直接会ってみたい」

「分かった、呼び出してみるが、時間がかかるかも知れないぜ。仕事優先だからな、傭兵という商売はな」

「分かった、頼む」

＝＝＝

件の傭兵団長がやってきたのは、そんな会話から2週間ほど経った頃だった。早かったのか分からないが、問題ないレベルだろう。それより、その人物と一目会ってから妙な感覚が抜けないのだ。

私より少し小柄で、４０~５０歳と言った所だろう。容姿が特に変わっているという訳では無い、ダークブラウンの髪に、瞳の色は良く見えないが、微笑を湛えたような細められた目と口元が”傭兵団長”という肩書きを裏切っている。確かに体格は恵まれていない様だが、しなやかな筋肉が服の上からでも見て取れる。（確かに軽戦士といった感じだな。だが、胸に下げている、ペンダントは明らかに女性物で型もかなり古いな、かなり傷だらけだが？）

レイモンドと名乗ったこの人物は、何故か挨拶を終えた後、私の事を見詰めたまま黙ってしまったままだった。いや、私を通して何かを見ているという感じだろうか？

「本当に立派になられましたな、ラスティン様」

「失礼ですが」

私を知っているのかこのレイモンドという傭兵団長は？　妙な話だが、会った記憶の無いこの人に既視感を覚えているのも確かなの

だが。

「いえ、こちらこそ失礼いたしました。お会いしたと言っても、かなり前になりますから、ラスティン様はまだ赤子でしたから、覚えていらっしゃらないでしょうね」

「レーネンベルクとはどう言った縁で？」

「はい、父がお屋敷に勤めさせていただいておりました。私も子供の頃、何度か連れて行ってもらった物です」

「そうなんですね、えっ！」

「お分かりになりましたか、父には似ていると良く母に言われましたからね」

「本当にリッチモンドの息子さんですか？　確かにそんな話を聞いた事があったな！」

「ええ、多分親不孝者とか、言われたんでしょうね」

「ははっ、お母上が少しだけ愚痴をこぼしていましたよ」

「父親の言う事も聞かず、葬儀にも間に合わずでは、そう言われても仕方がないのです」

少し表情を暗くして、レイモンドさんがそんな事を言った。しかし、縁とは意外な物なのだな。

「まあ、上に立つものとしては、仕方の無いことがあると分かって

来ましたから、僕は親不孝なんて思わないですよ」

「そう言って頂けると、気が楽になります。結局、母の死に目にも会えなかったのですから、親不孝なのは事実かもしれませんが・・・」

「しかし、アンセルムが居た傭兵団をレイモンドさんが率いていたなんて、奇妙な縁ですね？」

気を使って、話題を変えてみる事にした。レイモンドさんの方も意図に気付いてさり気なく乗ってきてくれた。

「確かにラスティン様と私は意外な程、縁があるのですよ。宜しければ、護衛の方に預けた”剣”を見ていただけますか？」

「”剣”ですか、ニルス」

「はい、お待ち下さい」

少しレイモンドさんの事を気にしながら、ニルスが”剣”を受け取りに行った。

「今のニルスをご存知ですか？」

「いえ、お屋敷の関係者の息子さんでしょうか？」

「はい、昔メイドをしていたニーナは？」

「はい、何度か会った事があります。そうですか、そうするとあの金庫番の方の息子さんですね」

「はい、セルジュとニーナの息子に当たります。これも縁なんでしょうね」

暫く、雑談をしていると、ニルスが戻って来た。手には一本の剣が握られていたが、それは私にとって実に印象深い物だった。少し思う所があって、去年、久々にチタン製の剣を作ったのだがそれに比べて、いかにも無骨で、センスが無いと感じるが、実戦で使われたと分かるだけに、迫力の面では負けていない。

「これは！　何故貴方がこの剣を？」

「よく覚えていらっしゃいますね、これはラスティン様が陛下に献上された物だと聞いておりますよ。当時剣闘士だった私が、恩賞として頂いた物です」

「そうですか、この剣を・・・」

「はい、まだ若く経験が不足していた上に、用意された剣が大きく重いものばかりだった為に、中々”上”に上がれなかった私には、軽くて丈夫なこれが、ぴったりだったのですよ」

レイモンドさんが当時を懐かしむ様に、話してくれた。確か私が父を通じて始めて献上した剣を使った兵士が御前試合でトップ3を独占した事があった筈だが、その1人がレイモンドさんだったんだな。リッチモンドはそんな話をしていなかったが、多分出来なかったんだろうな。

「レイモンドさんの役に立ったなら、本当に嬉しいですよ！」

「私が、今の傭兵団に所属するきっかけも、あの御前試合でしたからね。ですが、傭兵団を率いるようになって、何時かラスティン様やレーネンベルクに恩返しをしたかったのですが、あの時は、期を逸してしまいました」

レイモンドさんが、何やら悔しそうにしているが、あの時と言うとどの時だ？　ああ、レーネンベルクに恩返しならば、ゲルマニア軍が侵攻してきた時だろうな。

「あの時というのは、〝モーランドの乱〟の時ですね？」

「はい、あの時は丁度、カリエール領主に雇われていましてね」

カリエール領と言うのは、まあ、言うなればハルケギニアの火薬庫と呼べる場所かも知れない。ガリア＝ゲルマニア＝トリステインの3国が国境を接する場所で、常時他国の侵攻に備えている。カリエールに雇われると言う事は、レイモンドさんの傭兵団の実力がかなりの物だと推測出来る。

それにあの〝モーランドの乱〟の時ならば、カリエールへのゲルマニア軍の侵攻も有り得ただろうから、武闘派で知られるカリエール伯爵が傭兵団を手放す筈が無いな。（最近は貴族の名前や顔を覚えるのでは無く、領地の名前と特徴で覚えているのだ。まあ、貴族の数は減るはずなので、かなり楽になると予想している・・・、何だか顔と名前が一致しないから貴族の数を減らす事を考えている様に聞こえるが、そういう意図は無いぞ？）

「それは、伯爵が手放さなかったでしょうね？」

「その通りです、私だけでもと思ったのですが、それさえ断られましてね。ようやく開放されたと思った時には、〝レーネンベルクの

誉れ”の噂で持ちきりだったのですよ」

「そうですか、ですがその気持ちだけでも有り難いですよ。それに今回はこうして来ていただいた訳ですからね」

「そうでしたね、私がどうしてここに呼ばれたのか、”坊や”の手紙では分からなかったんですよ」

ここまで来た、或いは来れた?という事は、字が読めなかったと言う訳じゃ無いよな?

「はい、それですが、僕の妹の教師役をお願いしたいのです」

「お話が分かりませんな」

私が、ジョゼットに関して少しづつ語り始めると、レイモンドさんは真剣に話を聞いてくれた。

「成る程ね、しかし、レーネンベルクのお嬢様に戦い方を教える事になるとは思いませんでしたね。まあ、こういう役に立ち方もありですかね」

「はい、今一番レーネンベルクを悩ませているのは、ジョゼットの事ですから」

「分かりました、何とか時間を作ってみましょう。いや、それと娘にもその教師役をやらせて構いませんか?」

「娘さんが居るんですね? 構いませんが、腕の方は?」

「親馬鹿と言われるかも知れませんが、あれも生まれながらの傭兵ですからね」

「分かりました、ではレイモンドさんと娘さん」

「エヴリーヌと言います、今年で２０でしたかね」

「では、レイモンドさんとエヴリーヌさんにお任せする事にします。しかし、リッチモンドの息子さんと孫娘さんが屋敷に行ったら皆どんな顔をするだろうな」

「まあ、皆さんが驚くのは確かでしょうね。”聖女傭兵団”のレイモンドの名にかけて、お嬢様を立派な戦士に鍛え上げて見せましょう！」

「はい、お願いします。あの、その”聖女”と言うのは、もしかして母の事ですか？」

アンセルムもそんな事を言っていたな、母が”聖女”とは思えないが、どう言う訳なんだろうか？（性格的には小悪魔系だよな？誰だ、小悪魔なんて歳じゃ無いなんて考えたのは？　年齢の事は禁句だぞ！　その辺りはライルだって心得ている）

「はい、リリア様は私にとっては正しく聖女様です。始祖ブリミルにも等しい存在でいらっしゃいます」

”始祖ブリミルにも等しい～”と言う部分はさすがに小声だったが、どうやらかなりの敬意を持っているらしいぞ？　（正直、私と会話している時よりも熱意を感じるな）

「そ、そうですか？」

「恥かしい話ですが、丁度ラスティン様が生まれた頃でした。修行の積りで、マリロットの町の近くに現れた亜人退治に行ったのですが、その時に大怪我をしてしまいましてね」

「それを母が治療したんですね？」

「そうです、あれ以来私にとってあの方は、聖女になったのです！」

「そうですか・・・」

「何か？」

「いいえ、何でもありません」

当時のレイモンドさんの母に対する気持ちが単なる敬意だったならば、きっとレイモンドさんは執事をやっていたのかも知れないな。ふう、私の実家の家庭が知らない間に危機を迎えていたとは全く気付かなかった。レイモンドさんは、無意識ににレーネンベルクを離れていたんだろうな。

確かに、リッチモンドが強引に、息子を呼び戻さなかった訳だ。今は奥さんも娘さんも居るようだから、問題は有るまい。話しを聞く限り、憧れが昇華して敬意を飛び越して信仰にまで達してしまった感じだろうか？

第百三十三話　ラスティン２７歳（縁）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百三十四話　ラスティン２７歳（賢人会議）（前書き）

第百三十四話ＵＰします。

第百三十四話　ラスティン２７歳（賢人会議）

そして、更に1年が過ぎたが、この一年も概ね順調であり、極一部ではトラブルがあったりもした。

☆インテリジェンスソードの活用

さて、暫く沈黙を続けていた転生者仲間のロドルフ（元井曜子）が、その研究成果が披露される時期が近付いていた。個人的には、彼の祖父が収集していたインテリジェンスソード（長いからＩＳと呼ぼうか？）の再収集に手を貸したり、いざと言う時の為に予備を用意したりとそれとなく援助をしていて、大まかな成果は知っていたので、少しだけ感慨深い物がある。（少しだけ彼に関わる別の理由があるが、それはまたの機会で）

「ねえ、ラスティン？　これは何かのお芝居なの？」

この発言の主は、今年の”委員会”への招待を受けたエルフのクリシャルナだった。やっぱり受けない様だ、意図も伝わらない様だし、どうもまた空振りっぽいな。何故、毎年の招待された人が、妙な反応をするかという話の種明かしをしておこうか。

1．委員会の招待された人が居る場合、転生者たちは招待主を除いて、最初の委員会の時に使用したマスクとマントを着用して参加する
2．招待主が、招待された人を紹介して、その人物が信頼できるに足る人物だと思った委員会のメンバーはマスクとマントを取り去って改めて自己紹介を行う
3．委員会のメンバーが全員同意するまでは、会話は”日本語”で行う

という様な、変わった決まりが設けられたのだ。1については、やはり知らない人間に素性を明かすのに抵抗があるという事だな。2は文字通り、信頼を表現する意味があるのだが、今まで招待された人達でその意味に気付いた人は居ない。3は、盗聴防止という表向きの理由だが、実際には”日本語”も偶には使わないと、忘れそうだという意見があった為だ。（私としては忘れないと思うが、いざ喋るとなると舌が上手く回らないから、悪い話では無いと思う）

招待されたのは、”ミスタ・コルベール”，”国の役人カロン”，”エルフのクリシャルナ”だが、3人ともこの演出に戸惑ってしまった訳だ。コルベール先生に関しては、メンバーは誰でも知って居るから問題なく受け入れられた。カロンも国の役人という肩書きが信頼を得るのに少なからずプラスに働いただろう。

だが、クリシャルナは、この国の人間でさえないし、招待主はロドルフだから波乱が予想されたが、メンバー達は意外とすんなりクリシャルナを受け入れてくれた。（私個人は進行役として、直接招待主になるのは避けているのだ、まあ、調整役でもあるからな）

「もしかして、これが最近噂に聞く”賢人会議”っていうやつなの？」

「さあ、その”賢人会議”と言うのは知らないけど、僕たちは単に”委員会”と呼んでいるよ」

「へぇ～、この子達がね～。良くも謀ってくれたわね？」

「何故、それを僕に向かって言うのかな？　いや、ごめん」

思いっきり睨まれたぞ、最近紹介したばかりのロドルフなら兎も

角、エルネストとミネットとリッテンとバベットも同罪の筈なんだがな？　しかし、”賢人会議”とは大げさな表現だな、噂を広めたのは誰か想像は出来るがきちんと節度を守っていれば責める積りは無い。

「本当に悪かったよ、だけど君だって、エルフの事情を全て話してくれている訳じゃないだろう？」

「むっ！」

「分かった、後で詳しく話すから、今は協力してくれよ」

「それで良いわ、貴方の友人として受け入れる事にするけど、必ずよ？」

＝＝＝

「それで、クリシャルナさん。”デルフ”の様なＩＳを作る技術を人間に教える積りは無いと言う事でしたが？」

「ええ、そうよ。改めて言いましょうか？　”デルフリンガー”の様なＩＳを量産しようと思うなら、沢山の人間の命を差し出せと言う話になるわよ？」

「はい、それはお聞きしました。”私”がデルフを分析した結果も、人格と言う物が存在すると確認出来ていますから、承知している話です。普通のＩＳとは明らかに異なっています。多分、人間がエルフの皆さんの技術を単純に真似た物と明らかに差が出ているんだと思います」

「論点を摩り替えないで！　人間の命を差し出す事に貴方達が”はい”と答えるなら、エルフの一員として貴方達との交渉自体を拒否するわよ？」

しまったな、クリシャルナを怒らせてしまっただろうか。フレンドリーエルフらしくない強硬な態度だ。

「そうですね”私”が、クリシャルナさんの立場でもそう言うと思います。だけど、”私達”が必要とするのは、”命”言い換えれば”生け贄”を必要としない方法です」

「へぇ～、そんな方法があるのかしら？」

「”私”なりに”デルフ”と付き合ってみて、彼の特異性が色々分かってきました。例えば、人間が作ったＩＳがただ”擬似的な”会話をするだけの機能しか持って居ないのに、”デルフ”は会話をすればする程、”僕”について理解を深めてくれます」

「えーっと？」

おっと、クリシャルナが明らかに怯んだぞ、もしかしたら？

「”デルフ”は明らかに学習機能を持っている存在なのに、人間の魔法技術ではそれを再現出来ていないんです！　学習機能を持たせるには”魂”を封じ込めないと、駄目なんでしょうか？」

「ロドルフ、もしかして学習させて、能力を上げようと考えているのか？」

「はい、ラスティンさん」

「成る程な」

「あの～？」

「ああ、済まない。少し質疑応答の時間にしようか。クリシャルナには、僕の方から話を聞いておくから、ロドルフ、君が意見をまとめてくれるかな？」

「はい、ラスティンさん」

＝＝＝

例によって、転生者達によるフリートークが始まった。どちらかと言えば、ブレインストーミングと言った印象を受けるな。当時は意味が良く分かっていなかったが、前世の大学時代を思い出すな。

「ラスティン、助かったわ」

「やっぱり、話が分からなかったかい？」

「うん、実を言えば今あの子達が話している、〝こぴー〟とか〝いんすとーる〟とか〝あっぷでーと〟とかも全然分からないの」

「そうだろうね。君はＩＳを作った事はあるのかな？」

「実は、現場を見た事も無いの。それなのにあんな事を言っちゃって、余計な恥をかく所だったわ」

「さっきのは君らしくなかったからね」

「うーん、そうかも。ちょっとだけ、嫌な気分だったからかな？」

そう言いながらクリシャルナが、じと～っとした目で、私の方を見た。

「分かったよ、今から少しだけ事情を話すよ。この会合の最後に言うけど、この事は他言無用で頼むよ？」

「任せて！」

うん、クリシャルナらしい、良い笑顔だ。それから、私の、いやこの場では私達のだな、前世の話を掻い摘んで聞かせる事にした。クリシャルナは”ふーん”とか”え～”とか言いながら、時々質問を交えて私の話を聞いてくれた。どうも理解したとは言い難いが、何とか感じだけは掴んでくれた様だ。

どうでも良いが、キアラが前世の話を知らないと言うと嬉しがって、ノーラが知っていると聞くと悔しがる辺りは、クリシャルナも女性なんだなと感じさせた。（どうも、女性と言うより女の子と言った方がしっくり来るが、これを言うとクリシャルナは怒りそうな気がする）

結局、ロドルフがまとめてくれた提案を私が受け取り、私がクリシャルナに噛み砕いて説明して、クリシャルナがそれを精霊を使ってレイハムに問い合わせる形になった。コンピュータという物を知っている我々にとっては、色々聞きたい事があるが、知らない者には中々回答が難しい話ばかりだった。

1. ＩＳに簡易的な人格付与が可能か？
2. １のＩＳに学習機能は備わるか？

3．剣以外に人格付与は可能か？
4．ＩＳの人格を複製する事が可能か？
5．複製した人格同士の情報交換は？

とりあえず、以上の5点を問い合わせる事にしたのだが、どうもクリシャルナからレイハムに上手く伝わるとは思えないのだが。精霊を使った通信は、伝書鳩の様な物で言った言葉を伝えるだけで、即応性も無い。この点では、人間の技術の方が勝っていると言うのも面白い話だな。

”いざとなれば誰かがトリステインまで来てくれるわよ”というクリシャルナの台詞を信じて暫く待つ事になった。ＩＳ詳しいエルフに来てもらえる様に頼んでみたが、その辺りは”まだまだ子供”のクリシャルナにはどうにも出来ないらしい。

＝＝＝

☆ゲルマニア難民

ゲルマニアの内情が掴めない状態が続く中で、気になる情報が多方向から私の耳にまで届く事になっていた。

トリステインでは、主にラ・ヴァリエール公爵領に多いと言う話だが、レーネンベルク山脈を越えてレーネンベルクに直接保護を求めてくるゲルマニア人（難民と呼ぶべきなんだろうな）も居るという報告だった。

ガリアでも同様の事態が生じているらしいのでゲルマニア全土で同じ事が起こっていると推測されるのだが、最初の頃は原因が不明だった。前王時代からあったガリアの間諜網が我が国と同時期に壊滅させられたと聞いた時は、あの宰相の姿が目に浮かんだ。（ジョゼフ王が、多分、奪われた風石奪還を命じたのだろうが、逆手に取

られたのだろうな。悔しそうな事が声からでも分かった程だ）

「それで、調査結果は？」

「はい、どうやらゲルマニアでは”平民メイジ狩り”が行われている様です」

「”平民メイジ狩り”とはまた物騒な話だな」

キアラの報告を聞きながら、トリステインとの違いを考えさせられた。

「あれは、もしかすると！」

「どうした、アルマント？」

「いや、少し気になっていたんだがな、俺がヴィンドボナに潜入した時の騒ぎなんだが。俺自身はちゃんと変装していたし、普通の平民として振舞っていた積りだったんだ。あの娘に助けられたのも、俺を助けたのではなく、助けたのが俺だったという状況だったんだ」

「アルマントさん、ヴィンドボナで平民メイジを見かけましたか？」

「・・・、そう言えば杖を持っている平民は見なかったな。元々ヴィンドボナではあまり見かけなかったから、気付かなかったが」

「そうですか・・・、ラスティン様、これはもしかして」

「キアラもそう思うか、ゲルマニアでも不足した工業品を”錬金”で補っている様だな」

「それが、難民と繋がるのか？」

「そうだな、どれだけ鉱石が採れなくなったかにも因るだろうが、最悪の場合、平民メイジを”使い潰して”いるかも知れないな」

「まさか！　自国民をか！」

それを聞いたコルネリウスが突然椅子から立ち上がって、声を荒らげた。想像だが、ワーンベルの兵団員が誘拐されたり、私自身が誘拐されそうになった事も、この辺りに意図があったのかも知れないぞ。

「ゲルマニアでの、平民メイジの地位は？」

「俺の知る限りでは、普通の平民と区別はなかったが、元々、権力や財力が物を言う国だからな・・・」

コルネリウス自身もその可能性を否定しきれない様だ。難民が、レーネンベルク山脈や少なくとも現在は安全なツェルプストー辺境伯領を抜けて態々トリステインにまで来てしまう所を見れば、集められた平民メイジ達は帰って来なかったのだろう。マカカ草のサポートが無ければ、どういう事になるかは、大体想像が付く。

「限界まで魔力を使って廃人になるか、エミルタの実を摂取して中毒になり殺されるかか・・・」

”ガン！”

私の言葉に反応して、コルネリウスが机を拳で叩いた音が執務室

に響き渡ったが、私にも慰める言葉が無い。国民の為と思い反旗を翻すのを諦めたコルネリウスにとっては、受け入れられない状態だろう。彼には、今の自分では”何も出来ない”と言う事実が分かっているだけに、怒りのやり場が無いのだろう。

だが、コルネリウスはそれっきり再び椅子に座り直して、仕事の続きを始めてしまった。書きあがった書類の文字を見れば、コルネリウスがどんな気持ちか分かるだけに、声をかけるのが憚られた。

「アルマントさん、貴方は何をやっているんですか？」

「・・・」

「安全なトリスタニアで同胞が死んでいくのをただ見ているだけなのですか？」

「くっ！！」

コルネリウスは俯いたまま、苦しそうな声をあげただけだったが、これは拙いな。

「キアラ、言いすぎだぞ！」

「いいえ、言わせて頂きます。アルマントさん、貴方は今、王城（ここ）に居ますね、それはトリステインの中枢に居る事を意味します」

「だからって！」

「出来る事なら幾らでもあるでしょう？　貴方の友人のラスティン様は手を貸してくれるでしょう。ゲルマニアからの難民の為に生活環境を整えたり、ガリアへ難民の手厚い保護を願ったり、もっと積

極的にゲルマニアから”平民メイジ”を呼び寄せる事だって出来るんじゃないですか？」

キアラの厳しい、だが、優しい提案を聞いて、コルネリウスが今度はゆっくりと立ち上がった。そしていきなり私に頭を下げてきた。

「スティン、頼む。俺では無く、罪の無いゲルマニアの民の為に力を貸してくれ！」

「当たり前だろう？」

「キアラ、お前が俺の事を嫌っている事は知っているが、その知恵を俺に少しだけ貸してくれないか？」

「お断りします！」

「おま！」

「ですが、ラスティン様が貴方に協力すると言うなら、助言くらいはしましょう」

「そうか・・・、助かる」

キアラも素直じゃないが、コルネリウスも素直じゃないな。

「取り敢えずは、フィリップ４世陛下とお話をするべきではありませんか？」

「そうだな！」

そう言って、コルネリウスはいきなり執務室を飛び出して行ってしまった。王城に居るのも長い筈なのに、何をやっているのだろうか？

「キアラ、手配を頼む、枢機卿には”ゲルマニアの難民で、レーネンベルクとラ・ヴァリエールがかなり混乱している”という話で良いかな？」

「はい、ラスティン様もガリアとの交渉をどう行うか考えておいて下さい」

「頭が痛いな」

キアラは、少しだけ微笑みながら、無情な事を言ってくれた。

「ちなみに、ガリアだけではなくロマリアにも話を通す必要がありますよ」

「ロマリア？」

「ゲルマニアから逃げ出すとしたら、何処を目指しますか？」

「・・・、そうか！　ロマリアに逃げ出した難民は、最悪、送還される事になるな？　中立が裏目に出るか・・・」

戦争をしたばかりの、我が国やガリアよりは、ロマリアを目指す方が理にかなっているな。出来れば教皇としてのジェリーノさんの”お言葉”が出ると良いのだがな？

「ロマリアからゲルマニアではなく、ガリアに移送させるしかない

でしょうね」

「ガリアが受け入れるかな？」

「・・・」

ヒントは無いらしい、ガリアに協力させる方法か？　ああ、別に難しくは無いのだな。

「ゲルマニアからの難民には、平民メイジが多く含まれていると言えば良いだけか？」

「はい、何でしたらガリアから更に、トリステインに移送してくれれば有り難いとでも言ってみれば良いのではないですか。今度こそちゃんとやって下さい」

「また、古い話を、分かったよ」

今回の事態も私が原因と言えなくもないが、経過を考えればゲルマニアが、いや、あの宰相が招いた事態だと思うことが出来るから、大丈夫な筈だ。（少なくともこちらは差し出された手を跳ね除ける積りは無かったからな）

もし、ガリアが平民メイジだけを受け入れると言うなら、トリステインで受け入れるのが良いだろうな、平民メイジの血縁ならば、”隠れたメイジ”の可能性も高いしな。

「キアラ、この話、ゲルマニア宰相の策略と思うか？」

「情報が少ないのではっきりとして事は言えません。ただ、経過を考えればそう考えるのが普通でしょうね」

経過か、キアラも私の誘拐事件まで考慮に入れているらしいな。
だが、自分の意見にはっきりとした確信は無さそうだ。

「全く根拠はありませんが、以前から”マテウス・フォン・クルーク”には普通では無い所を感じていましたが、ここに来てそれが表面化してきたのでは無いでしょうか？」

「普通ではないか・・・。”何があれを、あそこまで狂わせてしまったのか？”か」

「何です、それは？」

「いや、今は亡きガリアの前王が言った言葉なんだ」

「狂っていると？」

「分からないな、私もかなり昔に一度会っただけだからな」

私自身は、ロベスピエール４世との最後の会談の時には、単に”ナポレオン１世”という皇位継承権を持った”転生者”を得た事で、野心を持ったのだと思ったのだが、あの言葉には意外と深い意味が隠されているのかも知れないぞ？　いや、今はそれを考えても仕方が無いな、我が国としてもゲルマニアと事を構える時期では無いからな。

第百三十四話　ラスティン２７歳（賢人会議）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百三十五話　ラスティン２７歳（後退と前進）（前書き）

第百三十五話ＵＰします。

今回はあのキャラが・・・

第百三十五話　ラスティン27歳（後退と前進）

☆献身

良い感じで”コルネリウス”が復活したと思ったのだが、甘かった。まさかこういう事態が起こるとは思っても見なかったのだ。

「スティン、エルネストが来ているぞ？」

「ん？　何の用かな？」

「さあ、何故か俺にも同席して欲しいそうだぞ」

「ラ・ヴァリエール公爵の所へツェルプストー辺境伯から何か連絡が入ったのかな？」

「義父と呼ばないのか？」

「良いだろそれは、エルネストを義弟と呼ぶのも妙だしな」

「ツェルプストーからは俺の所には何も連絡が来ていないのだが？」

「そうか、まあ、会ってみよう」

＝＝＝

「エルネスト、珍しいなこんな所に来るなんて」

「いや、ちょっとスティンと君の意見が聞きたくてね」

「僕のと言うなら兎も角、アルマントもなのか？　ツェルプストー辺境伯だろうね」

「ああ、簡単に言おうか？　”キュルケ”がラ・ヴァリエール公爵領に来ているんだ」

「それがどうしたんだ？　キュルケを寄越すなら、連絡をくれれば良いのにな。そうだ、世話になった御礼にトリステインを案内してやろう！」

コルネリウスはかなり忙しい状態の筈なのだが、態々自分で案内するとは余程キュルケ嬢の事が気に入ったらしいな。だが、エルネストの表情を見る限り、彼女の来訪はかなり深刻な事態だと予想できるのだが・・・。

「ツェルプストー辺境伯領で何が起こったんだ、エルネスト？」

「何かが起こったのは、”キュルケ”本人だよ」

エルネストの意外に沈痛な答えに、コルネリウスが浮かしかけた腰を再度椅子に降ろした。

「キュルケに何があった？　答えてくれ！」

「あの娘は、今、重態だよ」

「何故だ、怪我でもしたのか？」

「いいや、かなり衰弱しているから健康とは言えないが、怪我など

はしていない。ただ、精神的にだな・・・」

「はっきり言えよ、エルネスト！」

「辺境伯の所から直接診療所に運ばれてきたんだが、その時の様子が尋常じゃ無かったんだ。手足を縛られた上に猿ぐつわまでされていた」

「なっ！　辺境伯が娘にそんな事をするはずが」

エルネストはコルネリウスを無視する形で話を続けた。

「それに、念を入れたことに、杖まで取り上げられていたんだ。スティンには分かったみたいだね？」

「説明してくれ・・・」

そう言ったコルネリウスだったが、言っている最中に想像ついてしまった様だ。何故か私に向かって睨み付ける様にしている。本当は私ではなく、別の人間を呪いたいのだろうな。しかし、なんてタイミングだ、精力的にコルネリウスが動き出した所だというのに。

「エルネスト、それで今あの娘は？」

「言っただろ、肉体的には問題は無いが、精神的には”廃人”の一歩手前だよ」

「本当に”エミルタの実”の中毒なのか？」

「始めてみる症例だけど、間違いないと思う」

「治るんだろうな！」

「分からない、ただ、治療が成功したという話も、治療の方法も知られていないんだよ」

「キュルケ嬢は今どういう状態なんだ？　監禁でもしているのか？」

「いいや、沈静（クールダウン）も効かないんだが、テティスが精神的に押さえ込んでいるよ」

「そんな事が出来るのか？」

「ああ、本人は嫌がったんだが、人命がかかっているからね」

一先ずは、安心と言う所か、精神干渉系の魔法は難しい上に危険を伴うからな。

「しかし、副作用なのか妙にメイジを恐れる様になってしまってね」

「分からなくは無いな、そう言う話なら、カトレアがなにかと面倒を見てくれるんじゃないか？」

「今はダメなんだよ、お腹に子供が居てね」

そうだった、目出度く2人目が生まれる予定だった。

「そうか・・・」

「僕としては、リリア様に面倒を見てもらおうと思ったんだけど？」

「人格的にも、いざと言う時のメイジの腕も問題ないけど、レーネンベルクには普通にメイジが居るぞ？」

「その点では僕の診療所と変わらないか・・・」

「俺がやる」

暫く前から会話に参加せずに、黙り込んでしまったコルネリウスがぽつりとそんな事を言い出した。そんな気がしていたんだが、最悪の展開だな。

「アルマント、出来るのかい？」

「分からないが、やってみる、いや、やってみせる！」

病人の世話などはやった事が無いはずだから、説得して諦めさせようとしたのだが、コルネリウスの意志は思ったよりも堅かった。

結局、コルネリウスの意志の覆す事が出来ず、エルネストに案内されてコルネリウスはラ・ヴァリエール公爵領に向かってしまった。エルネストは、政治的な判断を求めて私の所を訪ねて来た筈だが、現状ではコルネリウス抜きで話を進めるしかない様だ。

ああ、少し面白い人物が何故か私を訪ねて来たのだが、堂々と亡命を宣言したその人物に関しても、その内語る事があるかも知れない。扱いに困って、アンセルムの下に付いてもらったのだが、それを本人に言うのは厳禁だ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

☆長老

まるで、ゲルマニアに運命が味方している様に、ゲルマニアに対する包囲網がまたもや不発に終わってしまった。今回は、コルネリウスからの嘆願で聖エイジス（ジェリーノさん）３１世がゲルマニア皇帝及び宰相に対して、”破門宣告”まで出したと言うのに、中々上手く行かない物だ。一方、上手く話が進み始めた事も存在する。

始まりは、随分と妙な形だった。朝、政務の為に執務室に向かうと、来客用のソファーに何故か少年が眠っていたのだ。年齢はライルと同じ位に見えたのだが、こんな所で眠っている少年が普通の少年の筈が無い。現に護衛隊からは何の異常の報告も入っていないのだからな。（当たり前だが、刺客だとかは思わなかったぞ、こんな間抜けな刺客が居るものか）

「ふぁ～、良く寝たのう」

どうやってこの少年？を起こそうかと考えている間に、私の気配で少年の方が勝手に目を覚ましてしまった。

「いかんのう、目的地に着いたと思うたら、つい眠ってしまった。で、おぬしは何者じゃな？」

いや、それを聞くのはこちらの方だと思うが、声と態度が見掛けに一致していない所で妙に悟ってしまった。彼女とは逆のパターンだな、浮世離れしている感じも似ていなくも無いしな。

「私がお探しの”ラスティン・レーネンベルク・ド・トリステイン”ですよ、エルフの方。もしかしてクリシャルナのお知り合いですか？」

「なんじゃ、お見通しか？　如何にもワシの名はマナフティー。まあ、レイハムのマナフティーじゃな」

「マナフティー様とお呼びしますが、宜しいでしょうか？」

「ふむ、好きにするがいいさな。ふむ、気付いたようじゃな」

妙な事を言うと思った時、ニルヴァーナが急に声をあげた。

『ラスティン、精霊が居るわ。あの人に何か伝えているみたい』

ニルヴァーナの言葉が聞こえたのか、マナフティー様がこちらを向いてにっこりと笑った。これが本物のエルフの精霊使いか、今までニルヴァーナにさえ気付かせないなんてな。そんな事を考えていると執務室の外が騒がしくなり、少しして小さなノックの音が聞こえた。

「どうぞ」

「ラスティン、ここに長老が来てるって、あー、またそんな若作りして！」

「静かにしないか！」「痛っ！」

そのマナフティー様の声と同時に、クリシャルナの悲鳴が上がったが、私の目には何が起こったかは見えなかった。クリシャルナが頭を抱えてうずくまっているところを見ると、どうやってかクリシャルナの頭を叩いたらしい。しかし”長老”か・・・。

「図体ばかり大きくなって、お前は何時までも子供じゃな？」

「そんな事」

「お前の報告が訳の分からない物だったから、ワシが来る事になったんじゃろうに！」

「でも、長老！　痛い・・・」

「でも、じゃないわい、ワシがここに入ってきたのにも気付かずに熟睡しておってからに」

クリシャルナがポンポンと怒られるのは珍しいからついつい面白くて見ていたが、マナフティー様だって暢気に熟睡していた様な気がする。それに、上手く伝える事が出来なかったのは、私のせいでもあるからな。（しかし、マナフティー様は随分とスパルタな様だ）

「マナフティー様、その辺りで勘弁してやってください。クリシャルナが上手く説明出来なかったのは私が上手くクリシャルナに話を伝えられなかったからでもあるのです」

「そう言う事なら、お前様から話をきかせてもらおうかの？」

＝＝＝

私の説明を、マナフティー様は真剣に聞いてくれたが、その表情は話が進むに連れて険しくなって来た。非人道的な事や、戦闘行為への使用を制限する等出来る限りの安全策を説明もしたのだが、良い感触が得られなかった。だが、マナフティー様を不機嫌にしたのは、ＩＳの話では無かった。

「人間と言うのは妙に長い名前を付ける動物じゃな、ラスティン殿と言ったかな？　１つ答えて貰おうかな、お前様、何処の世界から来た？」

「おっしゃる意味が分かりませんね、私は生まれも育ちも、このトリスティインですよ」

正直、この質問が出るとは思わなかったが、少なくとも表情は完全に制御出来たはずだ。

「ふん、まあ良かろう。インテリジェンスソードの製造方法、いや、本当の製造方法を教えてやっても良いじゃろ」

マナフティー様はそう言ってくれたが、その視線は私ではなくクリシャルナの方を向いていた。そのクリシャルナと言うと、私が誤魔化した事がそのまま無駄になる様な表情だった。これは盲点だったな、すると今の返事は私に対する信頼と言うより、クリシャルナの私に対する信頼をかってくれたと言う事なのだろうな。

「ありがとうございます、マナフティー様、そして、クリシャルナ」

「へっ？」

「まだまだじゃな」

クリシャルナの間抜けな返事を聞いて、私とマナフティー様が苦笑する事になった。まだまだ、この方面では修行中のクリシャルナだった。（普段はもう少ししっかりしているんだが、マナフティー様と会って気が抜けているのだろうか？）

実はマナフティー様も私の提案の半分位しか理解できていなかったのだが、何とかＩＳの専門家を招聘する事には成功した訳である。それは良いとして、先程のマナフティー様の指摘は少しだけ気になる。もしかしてマナフティー様は、以前異世界からやってきた人物と会った事があるのだろうか？

「マナフティー様は先程、妙な事をおっしゃっていましたね。もしかして、異世界から来た人間をご存知なんですか？」

「長く生きておれば、色々不思議な事に出会うものじゃよ」

「興味があるのですが、宜しければ話を聞かせていただけませんか？」

「ほぅ、そう来るかの。それに関してはワシの口からは語れんのじゃよ、機会があれば”ブリミルの後継者”を名乗っている者に聞いてみるがよい」

「そうですか、貴重な情報ありがとうございます」

「？？？」

今回は本当に意味の分かっていないクリシャルナはさておき、これは、本当に貴重だぞ、教皇は”ブリミルの後継者”とは名乗っていなかったはずだが間違いないだろう。（歴代の教皇の中にそう名乗った人物が居たのかも知れない）

異世界の人間と接触があったのは事実なのだろうが、これをマナフティー様からジェリーノさんが聞いたとしても隠すとは思えない。そうすると、口止めされているのはブリミル教の関係者についてだろうな。（まさかとは思うが、今度、ジェリーノさんに会ったらそ

れとなく聞いてみよう）

＝＝＝

意外な事に、ＩＳの専門というエルフの技師?達は3日程でやって来た。どうやら、最初からその気だったらしいが、遊ばれたと言う気もしないでもない。何とかロドルフと面会させて、ＩＳのついての今後の方針を決めようと思ったのだが、”エルフの技師”達にとっても、今回の話は始めての事が多くワーンベルの秘密工場に研究所を作って、そこで研究が進められる事にした。

マリロットの魔法学園に通っていたロドルフも合わせてワーンベルに移動したが、殆ど卒業直前だったらしく研究所に篭る結果になった。余談だが、魔法学園ではロドルフとライルが同級生でライバルの様な存在だったらしく、ライルはロドルフの転校を残念がって居た。

第百三十五話　ラスティン２７歳（後退と前進）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

詳しくは書きませんでしたが、ちょっとショッキングな内容ですよね？彼女がどうなるか、お楽しみに。

２０１１／９／１１
なのとか－＜なにかとに修正

第百三十六話　ラスティン２７歳（ご利用は計画的に！）（前書き）

第百三十六話ＵＰします。

第百三十六話　ラスティン２７歳（ご利用は計画的に！）

☆切り札

満を持して、我々は切り札を切る事にした。それは殆どが羊皮紙で、そこにはトリスティンの多くの貴族の名前でサインがされていて、日付ととある数字が目を引く。（年号が無いこの世界だから、概ねフィリップ４世陛下の即位から何年という記載だな、まあ、”平成”や”昭和”と同じ感覚だろうか？）

もったいぶった言い方をしてみたが、それは単なる”借用書”なのだが、これが切り札足りえるには、少しだけ現在の社会状況を説明する必要があるだろうな。

”金貸し”という職業は、通貨社会には必要だが、決して好まれる存在では無いのは何時の時代でも同じだろう。金を借りる時は有り難い存在だが、返す時には居なくなって欲しい物だろうな。ブリミル教でも、”金貸し”は認めている物の、以前はかなり迫害があったようだ。

しかし、状況は聖エイジス３１世の即位からかなり変わって来たらしい。私が生まれる以前は聖職者達が、”金利”にまで口を出していたらしいのだ。そこで”金貸し”と”聖職者”の間でどんな話がされたかは想像するまでも無いだろうな。この状況をジェリーノさんが改革したのだが、”聖職者”側は改革されても、”金貸し”側は逆に悪徳化してしまったのだ。

各国も”金貸し”に対する法律を作ったらしいが、王権で法を作っても”金貸し”を領主が保護してしまえば、国としても手を出せなかったらしい。（この辺りの事情は、ユニスの受け売りだがな）

こう言う社会状況で、私は”リリア”を始めとする魔法宝石（マジックジュエル）のアクセサリを売ったり、ローレンツさんの協力を得て貴族達が抱えている借金を集める等した訳だ。この時代”貸金法”の様な法律は無いから、債権の移動も債権者の胸三寸だった。要は、債務者である貴族が知らない間に借金を請求する権利が”金貸し”からローレンツ商会に移動したのだ。（ローレンツさんがどうやって債権を集めたかの詳細は知らないが、返って来る筈の無い借金を後生大事に持っている人間も少ないだろうな）

話は変わるが、”トイチ”と言う言葉を知っているだろうか？”１０日で１割の金利”というあれなんだが、高利貸しの代名詞と言えるこの言葉がこの世界では普通に通用するのが恐ろしい所だ。町の金貸しで普通に借りると、本当に”トイチ”が有り得るそうだ。１日１％の利子と言えば、年利は３５０％を越える訳だな、超低金利時代の前世の日本を考えると信じられない数字が普通に使われている。（現に、私の手元に送られてきた証書の中には”トイチ”の物も見受けられるが、これはほんの序の口なのだ）

＝＝＝

「しかし、月利が複利で１割なんて良く”彼ら”が受け入れましたね？」

「そうですか？」

しれっとした返答を返してきたのは、父親の代わりに”借用書”を運んできてくれたロワイエさんだった。私の目の前に置かれたのは、普通にローレンツ商会が某貴族に金を貸した時の借用書だったので、ロワイエさんに聞いてみたのだが。

「僕なんかは複利と聞いただけで、拒否反応が出るんですが？」

「ラスティン様は貴族なのに金勘定に詳しいみたいですね？」

「いや、そっちは不得意ですよ。まあ、ユニスに色々聞いたんですよ」

同席しているユニスに視線を向けてこう言っておいた。

「そうですか、では、これを見てください」

そう言って、ロワイエさんが見せてくれた紙には、

１１．２１．１１
２１．４１．１２
３１．６１．１３
４１．８１．１５
５２．０１．１６
６２．２１．１８
７２．４１．１９
８２．６２．１
９２．８２．４
１０３．０２．６

＞ｉ２４９８４―２０９０＜

こんな数字が並んでいた。どうやら、質問があるのを予期して用意したあったらしい。

「一番右側が、経過するまでの月で、その隣が月利２割の単利、左

が月利１割の複利ですね。理事長先生も典型的な手を使いますね」

「やはり、ユニスには分かりますか、貴女が商会に来てくれれば良かったのに」

うん、置いてけぼりだぞ、さすがに金利絡みの話は分かるが、典型的？　それに、ロワイエさんがユニスを商会に雇いたかったと言う話も初耳だ。まあ、商会の金庫番をやらされていたロワイエさんにとっては、ユニスは喉から手が出る程欲しい人材だったんだろうな。

「典型的というのは？」

「ああ、失礼。私も何度かその場に立ち会いましたから、説明しましょうか？」

「頼むよ」

「まあ、幾らお金を貸すかという話がまとまった後に、金利の話を切り出すのですが、そこでこれを出すわけですよ」

「複利と単利の話ですよね、１０ヶ月目までしかないですよ？」

「はい、これをご覧になった貴族の方々は、大抵複利を選ばれますね」

「１０ヶ月目だと、単利：３．０倍で複利：２．６ですか、確かに単利を選びたくなりますね。でも少し考えれば」

「そうですね、公立学校の卒業生程度の学力があれば、まず引っか

からないでしょうね。まあ、そもそも本気で返す気が有るかとも思えませんでしたからね」

「そうですね」

私は苦笑しながらそう答えた、”貴族”が平民との約束を正直に守ると考えるのは、私らしくも無いな。それに、以前にローレンツさんと、こんな話をしたな。

そんな事を懐かしく思い出している間に、近くの机で何やら書き物をしていたユニスが、1枚の紙を差し出して来た。先程の紙と同じ形式で書かれているので、何が書かれているかは直ぐに分かったが、正直言って書かれている数字に関しては信じられない物だった。

10　3.0　2.6
20　5.0　6.7
30　7.0　17.4
40　9.0　45.3
50　11.0　117.4
60　13.0　304.5
70　15.0　789.7
80　17.0　2,048.4
90　19.0　5,313.0
100　21.0　13,780.6

＞i24985—2090＜

「100ヶ月で14，000倍か、確かにローレンツさんが面白い話があると言った筈だね。ここまでとは思っていなかったな」

「しかし、この短時間で良く計算出来たね、さすがだ」

「いいえ、少しコツがあるんですよ」

ユニスは多分謙遜して言ったのだろうが、私に算盤があってもユニスの暗算速度に付いて行ける自信が無いぞ？（電卓があれば階乗計算も楽なんだがな）

私とローレンツさんがこの企みを始めたのは私が十代半ばの事だったから、ローレンツさんの魔の手にかかった貴族は借金が１０，０００倍以上に膨らんでいる訳だな。１，０００エキューの魔法宝石（マジックジュエル）のアクセサリを買った時に全額借金したとしたら、１０，０００，０００エキューになる訳だ。今では魔法宝石（マジックジュエル）自体の価値がかなり下がったが、当時は普通の値段だったし、全額借金というのも良くあった話だ。

ノリスが頑張ってしまったのと、ノリスの指導でライルも魔法宝石（マジックジュエル）作りを覚えてしまったから、最近では普通に平民でも大粒の魔法宝石（マジックジュエル）を購入できる程なのだ。

話が逸れたな、千万エキュー単位と言えばトリステインの国家予算規模でしか見たことが無い金額になる。全く実感が湧かない数字だが、大貴族と言えども簡単に動かせる数字ではないのは確かだろう。しかも、借金は１件だけでは無いのだが、目の前に無造作にまとめられた証書を合計するとどれだけになるのだろうか？　何だか色々画策してきたのが馬鹿らしくなってくるな。

ちなみに、月利が単利の２割と言うのはクルデンホルフ大公国がお金を貸す際の金利だが、年利にすれば３４０％程度だな、頭が上がらなくなる訳だ。まあ、実際には（返済要求が無いだけで）それ以上の金利で借りているのだから、どうなるか楽しみだな。（笑い

話としてロワイエさんが教えてくれたのは、貴族のプライドが幸いしたのか敢えて単利2割の方を選んだ貴族の方が、結果的に借金が少なかったという事もあったらしい）

＝＝＝

さて、本題に戻るがこの”切り札”だが、本来であれば”レーネンベルク公爵”として私が貴族達に返済を請求して、国に仲介を頼む形にして、その礼として多くの借金証書を陛下に献上するという計画だったのだ。これにより陛下の権力が飛躍的に強化されて、トリステインの中央集権化が一気に進む筈だったのだ。

まあ、私が”副王”などになってしまった為に、”レーネンベルク公爵”として泥を被る計画が崩れてしまったのだ。普通に副王が借金の形に領地を差し出せと言ったら、貴族たちの憎しみは、陛下を含む”王家”へ向かう事になってしまい、国に混乱を招く事は容易に想像できる。

父が、”レーネンベルク公爵”として泥を被ってくれると言ってくれたのだが、私自身がこれを受け入れなかった。現状ではあまり意味がある話ではないからだし、父に迷惑をかけるのが忍びなかったからでもある。

そこで、私と”五星”達が知恵を絞る必要に迫られた訳だな。

1. 領民の移動の自由化
2. 貴族間の金の貸し借りの禁止
3. 学校制度の普及
4. 戸籍制度の導入
5. 領主代行の推奨
6. 鉄道用地買収

私達が主に行ってきたのはこの6点だが、殆どが陛下に対する”おねだり”で法律化されている。（6については、マリアンヌ様のおねだりだがな）　さて、この状態で私が”副王”として、借金の返済を求めたらどうなるだろうな？

1～6には色々、布石として意味があるのだが、分かるだろうか？

2は分かり易いだろうな、まあ、借金の金額が金額だからあまり意味が無かった気もするが、返済を求めた時に貴族間で資金の融通を行えない様にした訳だ。正直、現在ではトリステインで最も豊かなレーネンベルクの税収でも3千万エキュー程度だったはずだから、貴族間の金の貸し借り等では工面は難しいだろうな。本気で国家規模の資金が動く事になるから、他国の援助でもなければ実際の所、返済不能なのだ。

3は、まあ、直ぐには意味が無いだろうが、長い目で見れば効果が出てくれだろう。きちんと教育を受けた国民が”領主”の理不尽な要求に唯々諾々と従うとは思えないからな。

こう言えば、1と4の意図も想像がつくだろうな、そう、大規模な増税などが行われれば、領民は反乱を起こすか、領外に逃げ出す訳だ。反乱は有り難くないから、領外に逃げる事を妨害できないようにした訳だ。戸籍が整いつつある現状では、領民自体が”居なかった”事にするのも不可能だろう。今まで通りの考え方で増税などをすれば、自分の首を絞める事になる訳だが、それに気付く貴族が何人居るだろうか？

5は、国の役人を送り込んで領主の代行をさせるを条件に利息の増加を免除するという条件にすれば、実際の”領地”状況が国にも分かるようになり、将来の中央集権化をスムーズに進めることが出来る筈だ。今更、利子が増えなくてもどうしようも無い筈だが、当

面息をつけると言うことは、貴族達が一斉に王家に反旗を振りかざす事を避ける目的でもある。

６は一見意味が無さそうだが、国が貴族から領土を買い取る際の基準価格を明確化すると言う面で意味があった。まあ、借金額が少ない大きな領地を持つ貴族が領地の多くを差し出せば、何とか借金が返済出来るかも知れないと言った程度だな。

＝＝＝

そして今年、私達は動くことにした訳だ、今までの経緯を知っていれば、特に急ぐ必要は無さそうに見えるかも知れないが、どうしても急がなければならない事情が出来てしまったのだ。（時間が経てば経つほど借金額は膨れ上がるのだからな）

それは、フィリップ４世陛下の体調問題が原因だった。エルフの毒の後遺症で、ベッドから起き上がることが出来なくなってしまった陛下に、更なる不幸が襲い掛かった。エルネストが予想したことが現実になってしまったのだ。侍医団の１人カロリーヌからの知らせが無ければ、”侍医長殿”によって隠蔽されたかも知れないが、最近陛下の体調が明らかに悪化しているのだ。

初期は、無視出来るような軽微な症状が、何年もかけて悪化して来てしまった。最近ではかなりの痛みを感じたり、安静にしているにも関わらず、意識不明になるまでになってしまった。無論、色々な人がエルネストの”治療”を受ける様に勧めたのだが、この状況になっても陛下は頑なにそれを受け入れてくれないのだ。（エルネスト自身が診断した訳ではないが、本気で”病死”を考慮しなければならない状態だそうだ）

そこで、私も切り札を切る事にしたのだ。せめて、陛下に支配者

としての希望を持って貰いたいと思っただけなのだが、それが陛下に生きる希望を与えることが出来るかは、私にも分からない。

「如何ですか、枢機卿？」

「キアラ君に話は聞いたが、実際見てみると、これは・・・。陛下もご覧下さい！」

枢機卿が少しだけ興奮気味に、１枚の借用書を手に取り陛下に手渡した。陛下は少し辛そうに頭を動かして、それを見たのだが、借用書を見た陛下の表情からその考えを読み取る事は出来なかった。ただ、少ししわがれた声でこんな事を言っただけだった。

「そうか、これが”私の力を一気に高める方法”か・・・」

「覚えていらしたのですが？」

「まあな」

「これを、是非陛下の為に使いたいと思います。あの時から金額は信じられないほど増えています」

「陛下、その借用書の上の紙をご覧下さい。１，５００万エキューですぞ。こちらは３，０００万エキュー、こほん、聖職者としては失言でしたな」

「陛下、御一考いただけませんか？」

「ラスティン殿、話が話だ、陛下も色々お考えになりたいだろう」

「はい、それでは準備だけは進めさせておきます」

「ラスティン・・・」

「何でしょうか、陛下？」

「いいや、何でもない」

何か言いたげな陛下に見送られる形で、陛下の病室を去る事になった。陛下にとってこの提案に効果が有るのかどうか、確認出来なかったのが心残りだった。

第百三十六話　ラスティン２７歳（ご利用は計画的に！）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

物凄く怖い話でした。

第百三十七話　ラスティン２７歳（負の遺産）（前書き）

第百三十七話ＵＰします。

第百三十七話　ラスティン27歳（負の遺産）

陛下に”切り札”の提案をして2週間経ったある日、私はマザリーニ枢機卿に呼ばれて彼の私室に行くことになった。あの話に関するものなら、執務室の方に呼び出される筈なのだが、何だろうか？

部屋のドアをノックすると、返事があり中に入ったのだが、そこには先客が居た。

「それでは、マザリーニ様、私はこれで失礼します」

「よろしく頼むよ、キアラ君」

「はい、出来るだけの事はさせていただきます」

キアラは私に一礼して、枢機卿の私室を出て行ってしまった。何だろうか、少し態度がおかしかった気がするな。

「”副王殿下”、呼び出すような真似をしてすみませんな」

「いいえ、お気になさらずに」

「時間が無くてね、ご覧の通りの有様だからな」

そう言われて部屋を見渡すと、荒らされたという表現が適切な状態だった。いや、これは部屋を引き払う準備かな？

「部屋を移動されるのですか？」

「いいや、猊下からの急な呼び出しが来てね。ロマリアに戻る準備をしているんだがね」

「そうですか、何時お戻りですか？」

「・・・、多分、この国に戻ることは無いだろうな」

「え！？」

少しだけ未練が残るといった感じで、地位に相応しくない小さな部屋を見渡した枢機卿だったが、それどころではないぞ！

「君も猊下と面識があるなら分かるだろう、猊下ももうかなりのご高齢だ、多分後継者として私を呼び戻したのだろうな。偉そうに聞こえてしまうかな？」

「ははは、そうですね。ですが、近く教皇になられるのであれば、偉そうではなく偉くなるのではないですか？」

「そうだな・・・」

特に根拠無く、枢機卿はずっとトリステインに留まると思っていたが、物語（歴史）とは状況が異なるからな。より微妙な状態と言えなくもないが。一番大きなのは、”副宰相”の存在なんだろうな。

「陛下は何と仰っていましたか？」

「私は、ロマリアに戻るべきだとおっしゃったよ・・・」

「そうですか・・・」

「陛下の事、アンリエッタ姫の事、キアラ君の事、色々心残りだがね・・・」

キアラの事か、素直に考えれば、”結婚相手探し”の件だが、直感的に違うと感じた。先程の余所余所しさを装ったキアラの態度から、キアラとは政治的な話をしたのだろうからな。まあ、いいさ、それより何とかジェリーノさんと会って話しておきたいな。

「それは、元々トリステインの問題ですよ。枢機卿、宜しけれ私も猊下にお会いしたいのですが？」

「何故ですかな？」

「ゲルマニア皇帝と宰相に対しての、例の”破門宣告”の件で是非お礼を言っておきたいのです」

「あの件ですか、猊下も思い切ったことをしたと思いますが、良いでしょう。ですがあまり時間は・・・」

「そうですね、枢機卿いえ、マザリーニ様と同行出来ればと思います」

「それならば時間がありません、急いで準備しなさい！」

そう言われて、一応速攻で準備を整えたのだが、幾らなんでも転生者同士の話をしに行くとはいえ、教皇様に会う訳だから何時もの旅の衣装と言うわけには行かないよな？

＝＝＝

結局準備は、夜までかかってしまい、明朝出発となった訳だが、これが逆に移動時間短縮に繋がった。偶然だが、その晩が定例のガリアとの交信の日だったから、ジョゼフ王に無理を言ってトリステイン～ガリアでの竜籠の使用を特例として認めてもらったのだ。

少ないとは言え枢機卿の荷物は運ぶのが難しかったから、別で運ぶ事になった。トリステイン～ガリアだけでも竜籠が使えた事で大幅に時間が短縮出来たのだが、本気で意外な事にリュティス郊外に着いた私達をガリア宰相殿が出迎えてくれ、替えの竜籠と”これでヴェローナへ向かうと良い”と言う本当に有り難い伝言をもらえた。

これはジョゼフ王と聖エイジス３１世の間に”ホットライン”が出来ている事を意味している、予想していた事だがジョゼフ王にはまだまだ隠し玉がありそうだ。いやそれより気になるのは、ヴェローナが行き先として指示された事だ。

ヴェローナと言えば、まだ少年の頃ノーラと一緒に訪れた町だが、枢機卿もすんなりこの話を信じた訳だから、何か意味があるのかも知れない。思い出話を交えて、鎌をかけてみたが枢機卿は明らかに話を避けていた。

「この話は、教皇庁でも極秘の話です。必要であれば”教皇”から直接話が聞けるでしょう」

という言葉を引き出すことには成功したから、保留しておく事にした。猊下と呼ばなかった事から、最悪自分自身で語る覚悟を見せられれば、問い詰める気も無くなる。それに、それ程時間もかからなかったからな。

訪れた事のあるヴェローナの町並みを下に見ながら、枢機卿の指示に従ってヴェローナの郊外、しかもかなり離れた場所に竜籠が降

ろされた。そこから更に暫く歩く事になったが、それでも暗くなる頃には目的の場所と思われる建物にたどり着く事が出来た。（2日でトリステインからロマリアを移動した事になるな）

「マザリーニ様、ここはどんな場所なんですか？　態々竜籠をかなり離れた場所に降ろしたのだから、やはり秘密の場所なのは分かりますが」

「そうだね、昔はこの辺りを治めていた領主が使っていた城だったそうです。今は、封じられた場所と行った所でしょうか？」

「すみません、成り行きとは言え、こんな所まで押しかけてしまって」

「いいえ、猊下もラスティン殿を信用されている様ですから、実を言えば以前手紙で、ラスティン殿をここに連れてきたいとさえ書かれていましたから、問題は無いでしょう」

「僕をですか？」

「はい、何か力を借りたいと言う事でしたが、私にも詳細は・・・」

「そうですか・・・」

「ただ、猊下はしきりとラスティン殿の錬金の腕を気にされていましたね」

「錬金ですか、それは困ったでしょう？」

「そうですね、ラスティン殿は私の前で一度も錬金を見せてはくれ

ませんでしたからね」

「まあ、他に忙しい事もあった物ですから」

「その様でしたね」

あっさりそう言われた所を見ると、私が何をやっていたか凡そ分かっているらしい。王城内で間諜でも飼っていたのだろうか？

古城と言う割には、警備も設備関係も必要以上に厳重だという印象だが、時間の関係か人間をあまり見掛けなかった。連絡が行き届いていたのか、枢機卿の急な来訪にも慌てた様子が無かったが、外部を警備している聖堂騎士隊と思われる警備兵以外にはあまり人に会うことが無かった。

内部に慣れている様子の枢機卿に付いて城の深部に入っていったが、要所要所にしか警備が居ない様だ。外部はあれだけ厳重に見えたのに内部は意外とルーズな警備状態だな。

「マザリーニです、お呼びにより参上致しました」

ノックをした後、それだけ言ってとある部屋に入っていった枢機卿に続いてその部屋に入るとそこには、ベッドが置かれていて一人の老人が横たわっていた。かなり痩せているが確かに、聖エイジス３１世（いや、私にとってはジェリーノさんだな）がだと確認出来た。

「猊下、お休みですか？」

「・・・、マザリーニか、本当に戻って来てくれたのだな」

記憶に残るジェリーノさんの声よりもかなり低く感じるが、本人

なのだろう。

「猊下の命令とあれば、万難を排して！」

「すまんな・・・」

「それよりも、ラスティン殿がご挨拶にみえています。猊下！」

私の名に反応して起き上がろうとしたジェリーノさんが体勢を崩し、枢機卿に支えられた。どうやらかなり身体が弱っているらしいな。高齢だから仕方が無いことだろう、この世界では７０を超えればかなりの高齢と考えるからな。

「マザリーニ、少し席を外してくれ」

「はい、外に控えておりますので、御用があれば、お呼び下さい」

枢機卿が部屋から出ても暫くジェリーノさんは口を開かなかった。

「ジェリーノさん、お加減は如何ですか？　辛いようでしたら時間を置きますが？」

「いや、歳だからね。具合が悪いと言うのも単なる風邪だよ。起きて待っている積りだったんだが、ついうとうととね」

喋り方が変わったせいか、記憶にあるジェリーノさんの口調と声質に一致した。

「それならば、先ずは”破門宣告”のお礼を言わせて下さい」

「ああ、あれなら”教皇”として当然の事だろう？　沢山の信者が、心に留めているだけだがな」

「いいえ、それだけでも僕には助かります」

「まあ、君の為と言う訳では無かったが、役に立ったなら構わないさ。ゲルマニアは以前から怪しかったからね、私としては当然の事をしただけだよ」

「そんな噂を聞きましたが、ゲルマニアとロマリア、いえ、宗教庁の間に何があったんですか？」

「君は、宗教庁が”場違いな工芸品”を収集していた話は覚えているかな？」

「はい、でもそれは今は存在しないのでしょう？」

「ああ、勿論だ、と言いたいのだがね」

おや、意外な反応が返ってきたな。ジェリーノさんにとっては”場違いな工芸品”は忌むべき物だろうに。

「何か問題でも？」

「いや、先ずは、ゲルマニアの話にしよう。前回、君とここで会った時と同時期だったと思うが、ゲルマニア宰相というのが、私に密使を送って来たんだ」

「話の流れからすれば、”場違いな工芸品”を借り受けたいとかでしょうね」

「ああ、その通りだった。驚きはしなかったが、ゲルマニアにもお仲間が居るというのは意外だったかな」

今更だが、そんなに前から分かっていたのなら、教えて欲しかった物だな。

「その時には既に殆どの”場違いな工芸品”を処分してしまっていたから、応じようがなかったんだがね」

「そうですか、随分と間の抜けた話ですね。そう言えば、ゼロ戦の方は？」

「いや、そちらは私は関わっていないな。確かローレンツが預かっていたんだったな？」

「はい、そのままタルブ村にあったら確実に奪われていましたね、良かった」

ローレンツさんに感謝だな、もしかしたらゼロ戦が手に入らなかったからこそ、”ミスタ・コルベール”もそのまま学院に居られたのかも知れないな？

「それ以降、一応ゲルマニアには目を光らせていたからね。平民メイジと君達は呼んでいる人々がどんな目に遭わされているかを知って、何もしない訳にはいかなかったのだよ」

「そうですか・・・」

「君に1つ頼みたいことがあるのだが、話だけでも聞いてもらえな

いか？」

「いいえ、出来る限り協力させてもらいますよ」

「まあ、その答えは早計だと思うが、明日にでも案内させよう」

「何かを見せてくれるのですか？　それなら今からでも構いませんが？」

「ふっ、若いとは素晴らしい物だな。マザリーニ！」

思いのほか元気な声で、ジェリーノさんが枢機卿を呼ぶと、直ぐに枢機卿が部屋に戻って来た。どうやら部屋の直ぐ外で待っていたらしい。

「マザリーニ、お前も疲れているとは思うが、ラスティン殿に”地下の例の部屋”を案内して差し上げてくれ」

「宜しいのですか？」

「構わない、その為に来てもらった様な物だからな」

＝＝＝

短いジェリーノさんとの会談を終えて、枢機卿に案内されて、今度はこの名も無き古城の地下を目指す事になった。意外な程深くまで潜った感じだが、中々目的の”地下の例の部屋”に到着しない。何枚も（鉄だろうか、建てつけが悪いわけではないのにやけ重い）扉を2人がかりで開けてやっと目的の部屋にたどり着いた。

「随分と手が込んでいる割には、警備が居ませんね？」

「猊下の指示なのです、この部屋にはなるべく人を置かない様にと、この城自体にも最低限の兵しか置いていません。この城自体も近くにあるのはヴェローナの町くらいですからね」

「本当に念入りですね、まさか魔物でも封印しているんですか？」

「いいえ、そんな物ではありませんよ。ただ、私もそれが何かを上手く説明出来ないのです」

そんな会話を交わしながら、多分最後のと思える扉を開けたのだが、その空間には何も置かれていなかった。しかしライトの明かりだけでは気付かなかったが、良く見れば小さな窓の様な物が壁にあるのが分かった。予想を裏切らず枢機卿がその小窓に向かい私もそれに続いた。

「あまり長時間見ない方が良いそうです」

そう言いながら枢機卿が小窓を開けたので、恐る恐る小窓から覗いて見たが、そこには卵形のかなり大きいと思われる金属光沢を持つ物体が見えるだけだった。杖を近付けて見たが見えたのはそれだけだった。そこで枢機卿によって小窓が閉じられてしまった。

「これが、ラスティン殿に見せたい物です。詳しくは猊下から聞いて下さい」

それだけ聞いて、私達はその場を去る事になった。まあ、行きと同じ数の扉を開けるのは大変だったが、ブーストで身体を強化していなければ途中で行き詰ってしまったかも知れない。行きとは違っ

て、地上と思われる辺りでメイジが待ち構えていて、何故か治癒魔法をかけられた。別に自分でかけても良かったのだが、慣れない肉体労働で疲れたので、されるがままだった。

「今晩はこちらで休んで下さい。食事は後ほど運ばせますから」

「はい」

「疲れたと思いますから、ゆっくり疲れをとって下さい」

奇妙な体験はそれで終わりだった。食事を終え、着替える気も起こらないままベッドに倒れこんだのだが、中々眠気はやって来なかった。例の部屋の事がどうも気になって仕方が無かったのだ。謎めいた地下室だったが、どうも魔法的な仕掛けは見当たらなかったな。魔法探知（ディテクト・マジック）を使っていた訳ではないが、メイジそのものが見当たらなかったのだから間違いは無いだろう、例外はあるのだろうがそこまで考えていてはきりが無い。

第百三十七話　ラスティン２７歳（負の遺産）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

地下に何があるのかは、想像がつきますよね？
どうですか、違和感がありますか？

２０１１／９／１１
そうでね－＜そうだね
に修正

第百三十八話　ラスティン２７歳（Ｇ）（前書き）

第百三十八話ＵＰします。

ジョニーさんとかじゃないですよ？

第百三十八話　ラスティン27歳（G）

「何故だろう、昔やったゲームの何処かの研究所の最深部といった感じがするな？」

無意識に声に出してしまったが、意外と近いのかも知れない。そうすると、あそこにあった卵形のの金属塊は研究成果か、研究対象で、しかも研究者にも制御が出来ない凶悪な物といった感じだろうか、まさかな・・・？

考え方を変えてみようか、この古城はある意味陸の孤島的な場所だったな、あえて人目の少ない場所を選んだと考えるのが普通なのだろうな。いや、枢機卿は”なるべく人を置かない”という表現を使った筈だ、人目につかないとは微妙に違うな。更に見方を変えれば、これは何かあった時になるべく被害が少なくなるようにと考えれら無いだろうか？

「何かあった時か、あの卵から怪獣でも生まれるとか・・・」

否定されたのにそんな考えが頭を過ったのだが、再び声に出す事で妙な想像をしてしまった。”怪獣”と言えば”あれ”だろうな。結構大きな卵だったが、さすがに”あれ”の子供とか無いよな？なっ！

連想ゲームでは無いが、妙な発想をしてしまったな。だが、何故か妙に納得の行く事が多かった気もする。くっ、明日になれば、ジェリーノさんが”回答”をくれるのは分かっていたが、日本人としてあんな物の上でゆっくり眠れるものか！（いや、あれがきちんとメンテナンスしなければ”機能”しないのは分かっているんだが、気分の問題だ）

それから、私は一睡もしないまま”あれ”に対する対策案を考え始めた。

「成る程、枢機卿がいや、ジェリーノさんかな、私の”錬金の腕”を気にする訳だな」

声に出してみたが、錬金では対応できないのは分かっていた筈だな。1人のメイジの力では上手く行かないだろうが、特性上、他のメイジと協力するのは難しい。いや、私は1人ではなかったな、あの手なら使えるか？　とりあえずキュベレーを呼び出しておこう、別に何か指示を出した訳では無いが、私の事を追いかけて来ているのが感覚として分かっていたからな。

もう1つ、キュベレーの手を借りれば対策があるな。力技だが確実な方法だ、前世でも普通に使われていた筈だしな。ただ、何万年後とかどうなるかは分からないのが問題だろうか？（その頃には問題が無くなっている可能性もあるか？）

そんな事を考えて居ると、どうやら眠気が襲ってきてしまった。一応の対策案が思いついたから気が緩んだのだろうか、眠れないと思っていただけに意外に思ったが、そのまま眠りに就く事にした。

（妙な夢を見る気がした、案の定だったが、だがそれに何の意味があったのかは分からなかった）

＝＝＝

翌朝、朝食を終えた頃に枢機卿が私を呼びに来て、再びジェリーノさんの部屋に向かう事になった。

「マザリーニ様、猊下のお体の調子は如何ですか？」

「はい、昨晩はあれから、またお熱を出された様です。御高齢ですからね・・・」

「そうですか、もしかしたら猊下の心労を減らせるかも知れませんよ？」

「なっ！　本当なのですか！」

「はい、２つ案がありますが」

「いいえ、その話は是非猊下に直接お願いします！」

枢機卿らしくない随分と興奮しているな、それだけ宗教庁にとっては問題が大きいと言う事かな。そしてあれの正体を知っているジェリーノさんの心労もかなりの物だったのだろう。ジェリーノさんの部屋に入ると早速枢機卿がジェリーノさんに耳打ちした。簡単な会話の後、枢機卿は直ぐに部屋を出て行ってしまった。

「ラスティン君、君はあれが何か分かったのかね？」

「はい、多分ですが。そうだ、あれはちゃんとメンテナンスしないと”爆発”しませんよ？」

「何だって？」

「形からして、”ファットマン”と同系統なのでしょう？」

「本当に分かっているらしいな。マザリーニはあれが”原子爆弾”だと話さなかったと聞いたのだが？」

「そうですね、でも状況証拠は沢山ありましたから。扉も鉛を使っているのでしょう？　タングステン辺りでも良かったんですよ？」

「やっぱり生粋の日本人だな。私の知識ではこれが限界だったのだよ」

何と言うか、怪獣（G）－＜放射能という発想の方が日本人らしいと感じるな？

「日本人だったですよ。それに僕の専門の話を聞いていませんか？　まあ、原爆については、偶然覚えていたんです。ですが、放射線対策としては正しい方法ですよ。壁や天井とかも鉛を使っているんでしょう？」

「材料工学が専門だったね、そうか妙な意地を張らずに君に相談するべきだったのだね？　この話は、ローレンツも知らないのだよ」

「そうでしょうね」

そうでなければ、ヴェローナの町に商談の為の店など構えないだろう。定期的に町を訪れるジェリーノさんに会うのに便利という程度だったのだろう。

「それで、２つ案があるという話だが？」

「はい、１つは”錬金”を使った方法ですが、確実性に欠けます。もう１つは地中深く埋めると言う物です」

「埋めるか・・・、それが確実な方法なのかな？」

「はい、どちらの方法もですが、〝精霊〟の力を借りますから」

「精霊？」

これは、聞いていなかったらしいな。ローレンツもキュベレーの話は知っている筈だが、まあ、見たことは無いからな。

「ああ、僕の使い魔ですよ。転生者のメイジが召喚を行うと、どうやら精霊が呼ばれるらしいのです。僕の使い魔〝キュベレー〟は大地の精霊ですから」

「良く分からないが、可能なのかな？」

「はい、埋める方は直ぐにでも可能ですけど、場所を選ばないといけませんからね」

「文系だった私には付いて行けない話だね」

「理系だった僕も、この世界では戸惑う事が多いですよ？」

そうは言っても、先程の鉛とタングステンだが、錬金で作るなら兎も角、普通に手に入れるなら鉛が楽だぞ？（タングステンは普通には手に入らないからな）

「そうだな、そうだろうね」

＝＝＝

結局、先に〝錬金〟の方の案を試す事になった。うっかり地下深くに埋めると、圧力で起爆してしまうかも知れないと言ってしまっ

たのが原因かもしれないが、そこまで深く埋めてしまえば、地表に影響は無いだろうし、地殻を通り越してマントルや核（コア）にまで移動させてしまえば、原理上影響は全く無いと説明しても納得してくれなかった。（まあ、この地面の下がどうなっているかは分からないのだがな、地球型の惑星だと仮定すればの前提だからな）

そして今、私は今朝目覚めたばかりのベッドに横になっている。特に体調は問題が無いのだが、キュベレーとの交信に備えてである。少し説明が要るな、使い魔の基礎的な話だが、使い魔と主人はある意味”同調”する事が出来るはずなのだ、主人の目や耳となったりするのがその例だし、主人の危機を知るのもそうだろう。（これには私も救われた事があるからな）

精霊との念話もこの一種なのかも知れないが、私の場合はテティスとも念話が出来るからな。だが問題はそこでは無い、何が問題かと言えば、”精霊”と”同調”するのは意外と大変な事という事実なのだ。精霊と触れ合えないのは当然なのかも知れないが、人型をしている彼らが本当に目で見ているのか、耳で聞いているのかも分からなかったのだから言いたい事が分かるだろう。

まだ学生だった頃、実際に試してみたのだが、散々な結果だった。目に見えていると思われる物、そして耳に聞こえている音が異質すぎて、その場で倒れてしまった程だった。精霊としては規格外に人間的なテティスで同様の事を試したエルネストも同様の結果だったそうだが、卒業後いつの間にか同調が可能になったと聞かされた。（例の”神医”と呼ばれているのもこの辺りが原因らしい。呪文も唱えずに患部を当ててしまうからかもしれないぞ？）

そんな話だから、横になっているのは当然の対策なのである。その上、キュベレーを通じて魔法を使い、”プルトニウム（ヨン）”を元素変（コンバージ）

換しようと言うのだから、慎重にもなるだろう。
放射性元素を元素変換すれば放射能が無くなるというのは特に根拠は無いが、元素変換（コンバージョン）で生成された元素がメイジの身体に悪影響を及ぼしたという話全く無いから、まず間違いは無いと思う。まあ、不安定な放射性元素を作り出す方が難しい気がするだけだがな。

キュベレーとの同調と、元素変換（コンバージョン）の特性が、私の提案の不確定要素なのだが、キュベレーも大分人間の事を覚えてくれているので何とかなると思っている。

「キュベレー、準備は良いかい？」

『はい、何時でも良いです。私も終にラスティンと1つになるんですね？』

ほら、随分と人間的だろう？　何処からこう言う知識を得てくるのだろう、精霊教育的に宜しくないよな？

「キュベレー、誰からって、テティスだろうな、妙な事を教えたのは」

『妙ですか？』

「まあ良いけど、テティスの言う事を頭から信じないでくれ」

『はーい』

人払いは済ませてあるから、普通に声に出しているが、知らない人が聞いたらどう思うだろうという会話をしているな。

「教えた場所に居るんだな？」

『はい、目の前におっきな卵がありますよ。何が生まれるんでしょうね？』

「いいから、始めるよ」

『はーい！』

妙に疲れることが多くなったキュベレーとの会話を打ち切り、”同調”に入った。方法自体は学生時代に失敗したままの方法だが、視力だけに絞って試してみる事にした。これが、予想通り上手く行った。

「少しだけ、周り広くを見る感じで」

『はーい』

「うっ、前の卵に集中するんだ！」

くっ、ダメだ、何故か上下左右に後ろまで見えてしまう。慌てて指示を出し直して何とか持ち直すことが出来た。落ち着いて見てみると、例の卵の中身が半ば透けて見えるし、その先の壁の更に先まで見えている気がする。ダメだ、集中しろ！

「これがキュベレーが”見ている”世界か」

『？』

「いや、なんでもないよ。もう少し”卵”に集中してくれ」

『はいはーい』

すると瞬時に視点が動き、今度は、何故か妙な幾何学模様の様な物が見えた。これはもしかして、鉛の分子構造か？　集中しすぎだろ！

『こんな感じですか？』

おっと、同調が深まったのか、意識しなくても伝わったぞ。

『何だか光って見えるな、これは普通なのか？』

『いいえ、こんなのは始めてです』

『鉛を透過して見ている感じだな。これは放射線なのか？』

放射線と思うと、少し慌てて、目の前に防御魔法を展開してしまったが、〝キュベレー〟には何の影響も無い筈だったとの思い出した。無駄かと思えたが、意外な事に防御魔法できちんと放射線が遮断出来るのが分かった。（まあ、役に立つ機会は無いだろうが）

『ほーしゃせんですか？』

『放射線を〟目視〟出来るなんて思わなかったな、もっと内部を見るぞ』

ここからは結構すんなりと話が進んでいった。さすがにキュベレーを通して元素変換（コンバージョン）するときは手間取ったが、魔力自体の消費は殆ど無かった感じだ。質量的に言えばｔ（トン）単位を元素変換（コンバージョン）した筈なのだ

が疲労も覚えなかった。”プルトニウム”は勿論、放射能を帯びた遮蔽用の鉛自体も元素変換（コンバージョン）した訳だから。人間のメイジ１人では不可能な話だな。（メイジ２人で同時に元素変換（コンバージョン）したら、放射性元素ができたりするんだろうかという物騒な考えも浮かんだが、実現したら洒落にならないな）

『同調を切るよ？』

『はい、お疲れ様でした』

今回に限らず、何度か思った事だが、”精霊”と人間の違いを考えると、キュベレーが私の使い魔で本当に良かったと思える。同調を切る前に感謝の気持ちを込めて改めて礼を言わなくてはな。

『キュベレー、私の使い魔で居てくれてありがとう』

『私も、同じですよ？』

『そうか、君には短い時間だと思うけど、もう少し私に付き合ってくれ』

『喜んで、ご一緒しますよ』

その嬉しそうな返事を聞いた所で同調を切ったのだが、驚いた事に時間が殆ど経過していなかった。部屋の外で待っていた枢機卿が、

「上手く行かなかったのですか？」

と聞いてきたので、驚いてしまった事から分かったのだが、何かあった時の為に兵士やメイジが控えていて、中の様子を覗っていたら

しいのだ。私が独り言を言っていたのが急に聞こえなくなって、中に踏み込もうと相談していた所だったらしい。（独り言って、事情は話してあるのだがここでも妙な話になってしまった。慣れているとはいえ、外国まで来てこの様とはね）

第百三十八話　ラスティン27歳（G）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百三十九話　ラスティン２７歳（福音と闇）（前書き）

第百三十九話ＵＰします。

本当は（福音と呪い）なんですけどね？

第百三十九話　ラスティン２７歳（福音と闇）

「本当に終わったのだね？」

当然だが、ジェリーノさんにも簡単には信じてもらえなかった。

「はい、多分放射能は無くなったと思います」

「君の話が嘘とは思わないが、早すぎないかね？」

「さあ、僕の体感ではかなり時間が経っているんですが。まあ、精霊やエルフといった”人達”と付き合うと、こう言う事は時々あるんですよ」

「エルフか・・・」

「どうかしましたか？」

「いや、何でも無い。しかし、長年そうだねもう３０年以上になるかな、あれの存在を知ってから、何時も心を悩ませていた物がこうも簡単に無くなるとはね・・・」

この辺りの心労に関しては、私には想像も付かないな。

「ラスティン君、これから妙な話をするが、聞いてくれるかね？」

「はい、構いませんよ。この世界に原爆があるより妙な話を思いつかないですが？」

「そうだね、でも、まあ、聞いてくれ」

＝＝＝

「最近、私はこんな事を考える様になったんだ。この世界は私の夢の中の世界なんじゃないかってね」

「”胡蝶の夢”ですね？」

「うーん、どうかな少し違うだろうね。多分同じ転生者なら分かる感覚だろうか？　君を含めた”私”以外の人間が私の思うとおりに動いていると感じてしまってね。こんな事を言えばおかしな人間だと思われるから、他の人間には言う積りがなかったのだがね。君には今回の礼の意味で話しておこうと思うんだ」

「ジェリーノさんの言いたい事は何となく理解できますよ。それに、この世界に転生してきた人間が、他人に”お前達は物語の中の登場人物だ”なんて言わないですから、そちらも分かります」

「いいや、君もまだ若いから実感出来ていないだけだろうね」

「いえ、決して若くは・・・」

「そうかね？　まあ、年月の過ぎるのはあっという間だからね。君は生まれてから思い通りにならなかった事があったかな？」

「えっ？」

「私の人生は多分もう終わりが近いだろうね、いや、これも人としての運命だよ。だが、私はほとんど後悔しない人生を歩んで来たし、

最後に残った最大の問題も君が解決してくれた。そう、私が困ると何処からか助けが来てくれたと今実感している所だよ」

「それは、私が貴方を助ける為に存在すると言う意味ですか？」

私は何故か、ジェリーノさんの言葉に反感を覚えてしまった。

「怒らないでくれ、私がそう感じているだけなのだからね。それに今のに怒りを感じるというのは、君の人生が有意義だと言う事の証明なんだよ？　おっと、同胞には”説教”する積りは無かったんだが」

「すみません、確かに若いですね。それに傲慢でした、本当に・・・」

「冷静に聞いてくれ。私が自分が転生者だと気付いてから、宗教庁の改革を志した話はしただろう？」

「はい」

「当然だが、私にも敵対者が居たが彼らは何時しか宗教庁を去り、大きな声では言えないが金銭に困った時には、ローレンツという強力な協力者が現れた。そして、人生の最後の難題も”君”という存在のお陰で解決した」

「はい・・・、確かに出来すぎですね」

「そうだろ、私がこの世界が私の夢の中の世界なんて事を言った理由が分かるかな？」

「はい、とは言い切れませんが、ジェリーノさんの言いたい事は理解しました」

私の身に置き換えてみると、納得行くところもあれば、全く納得出来ない所もある。特に私の知る人々がしてきた努力が私の為だったと言うのは、受け入れられない所だ。

「君が私の様に、満足した形で人生を終えることが出来れば、多分同意してくれるんだろうね。ローレンツはどう思っているんだろうな？」

「最近は調子を崩していると聞きましたから、会えませんか？」

「そうだな・・・、いや、無理に会おうとも思わないがね。もしかすると、私の様な友人を持って後悔しているかもしれないね？」

「ははははっ」

ローレンツさんやジェリーノさんの人生が後悔ばかりだったとしたら、世の中、満足して死ねた人間なんて居ないだろう？　ただ、少しだけ意地悪で、ジェリーノさんに1つだけ気になっていた事を聞いてみる事にした。

「ところで、先日エルフの長老の方と会う機会がありましてね」

「そうかね？」

「はい、レイハムのマナフティーとおっしゃる方でしたが、面白い話を聞かせてくれました。何でも、”始祖ブリミル”に会った事があるそうなんです」

まあ、嘘も方便と言う奴だが、返って来たのは、惚けた台詞だった。

「何だか胡散臭い話だね？」

「ジェリーノさん？」

「まあ良いさ、君はそれを知ってどうする積りかな？　宗教庁としては痛い所だが、君には何の利益も無いと思うんだが？」

揺るがないな全く。　しかし、そこまで読まれていたか、人々の心の拠り所であり、それ以上でもそれ以下でもなくなったブリミル教自体には脅しても意味が無いぞと言いたいんだろうな。私が生まれる以前のブリミル教には致命傷だったかも知れないが、本当に上手く出来ている物だ。

「ああ、勘違いしないで下さい。私が知りたいのは、後何千年経てば殆どの国民が”メイジ”になるか？ですから」

「ほう、それは面白そうな話だね？」

結局、”隠れたメイジ”の話をする事になったが、逆に私にも国民が”メイジ”になるまでの時間がかなりかかると言う結論だけが得られた。（これは”平民メイジ”を囲む状況が変われば、かなり縮まる可能性もあるのだが、結果としてしか分からない答えなのだろうな）

「1つ、ジェリーノさんにお願いがあるのですが？」

「何かな？」

「暦を定めてもらえませんか？」

「その話か、私が何故この不便な状況を放置していたかも分かっているんだろうね？」

「はい、別に”始祖降臨”を元年にする必要も無いでしょう？」

「それもそうだったね、考えておこう。次期教皇の最初の仕事となるかも知れないね」

「枢機卿も大変そうですね？」

「彼ならやってくれるさ」

ジェリーノさんの口調は、自信に満ちた物だったのが、非常に印象に残った。

＝＝＝

翌日、マザリーニ様に見送られる形で名も無い古城を去る事になった。帰りは普通に馬を使うことにしたが、護衛として聖堂騎士が何人か付いて来た。

ガリアに着けば私の護衛隊も合流する手筈になっているので少しの我慢だ。いや、別に彼らが悪い人間とか言う訳では無いのだが、箝口令が敷かれているらしく、全く会話にならなかったのだ。

そんな訳で私は、ジェリーノさんや古城を去る際にしたマザリーニ様との会話の事を思い出しながら落ち着かない旅を続ける事にな

った。その前の晩のノーラとの交信では、護衛隊も昨日トリスタニアを発ったばかりらしいので、合流はかなり先になる予定だ。（色々あって、一昨晩に交信が出来なかったのでノーラが随分心配したらしく、いきなり怒られたが、心配してくれたと思えば幸せな気分になったが、その私の反応が余計にノーラを怒らせてしまった）

「”心の底に闇を抱えていらっしゃる”か・・・。枢機卿も妙な事を頼んできたものだな・・・」

＝＝＝

「それでは、マザリーニ様。これで失礼します。大変だとは思いますが、お互い頑張りましょう」

「ラスティン殿、少しだけ時間を頂けますかな？」

「構いませんが？」

こんな時に何だろうか？　まあ、急ぐ訳でもないから、構わないだろう。護衛を待たせる形で人気の無い木陰に向かった。

「これを、ラスティン殿に言うべきか本当に迷いましたが、言わずに後悔するより言って後悔する事を選ぶ事にしました」

「もしかして、陛下かキアラに関する事ですか？」

「やはり分かってしまいますね、確かに陛下に関する事ですが、キアラ君も無関係と言う訳では無いですな。キアラ君には私の代わりに、陛下に尽くしてくれと頼んだのですよ」

「それは、大体想像がついていましたよ、彼女次第ですがきっとやってくれますよ」

昨日のジェリーノさんの台詞そのままだな、だが、私もキアラならと自信を持って言えるのだ。

「陛下とラスティン殿が対立したとしてもかね？」

「・・・」

はっきり言えば、キアラは絶対私の不利になる事をしないと確信しているが、キアラならどちらも立てようとするだろうな。苦労をかける事になりそうだが、私がロマリアに行くと告げた時も様子が妙だったからな・・・。

「何故、私と陛下が対立するなどと、思われるのですか？」

「私は、長い事あの方に色々な助言をして来ましたが、時々ですがあの方は心の底に闇を抱えていらっしゃると思うことがありました」

「それは、トリスティインの貴族に対してですね？」

「そうです・・・」

「それならば、自慢ではありませんが、私だって貴族達に思う所がありますよ？」

「それも分かっているのですがね、いや、だからこそなのかも知れませんな」

どういう意味だ？　しかし、問い返す前にマザリーニ様は話題を変えてしまった。

「話は変わりますが、フィリップ４世陛下が何故、私などを重用されたかお分かりになりますかな？」

「はい？　面と向かって言うのも妙な話ですけど、マザリーニ様が優秀だったからなのでは？」

さすがに本人に貴方は優秀だと言うのは妙に感じるぞ。次期教皇として呼び戻される程なんだから、言うまでも無いと思うんだが？

「違いますね、陛下は私が陛下と同じ余所者だったから、私を傍に置きたがったのですよ」

「しかし、私が無能だったとしても、多分陛下は同じ事をされたでしょうね」

「それも、”陛下の闇”なんですか？」

「分かりません、陛下は私にも全てを話してはくださいませんでしたからな。ですが、頑なにラスティン殿の勧める治療を拒むのも、そこに根ざしていると思います。私にもう少し時間があれば・・・」

「マザリーニ様は、陛下の闇を私に払えとおっしゃるのでしょうか？」

「いいえ、私が心配しているのはトリステインが荒れる事です」

トリステインが荒れるか、嫌な未来予想だな。マザリーニ様でさ

え出来なかった事を私にやれと言う訳では無さそうだが、私としても放置する気は無いのだがな。

「何とか、それは避けてみたいと思いますよ」

「そうですな、お互い頑張りましょう」

「それでは、これで失礼します。次にお会いする時は、”猊下”とお呼びする事になっているかも知れませんね？」

「それが1日でも遅くなることを祈っていますよ」

それで用件が終わったと判断して出発したのだが、まだ何か言いたそうなマザリーニ様の表情が少しだけ気になった。

第百三十九話　ラスティン27歳（福音と闇）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

さて、誰が誰を呪っているのでしょうね？　色々伏線がありましたからバレバレでしょうね？

第百四十話　ラスティン27歳（先触れ）（前書き）

第百四十話ＵＰします。

その時の先触れです。

第百四十話　ラスティン27歳（先触れ）

☆愚痴王

旅自体は、時間がかかったものの順調に進み、ガリアの王都リュティスで護衛隊にも合流出来てやっと一安心出来た。ジョゼフ王に無茶な飛行の詫びと礼を言う必要もあり、リュティスで合流と言う形になった訳だ。

「ジョゼフ殿、今回は無茶を聞いていただいて、感謝の言葉もありません」

「うむ」

会った時から感じていたが、ジョゼフ王の様子がどうもおかしい気がする。

「何処かお加減でも悪いのですか？」

「何故だ？」

「何故って・・・」

いや、見るからに落ち着き無く見えるのだが？　そんな事を考えていると、部屋のドアがノックされ、入って来たのはカグラさんとイザベラ姫だった。

「ジョゼフ様、ラスティン様がいらしているそうですが？」

「カグラさん、お邪魔していますよ」

「ラスティン殿下、始めまして、イザベラと申します」

「始めまして、イザベラ姫」

普通に挨拶した積りだが、何故かカグラさんとイザベラ姫がこそこそと内緒話を始めてしまったぞ？　まあ、2人が仲良くなったのは喜ばしい事だが、何だこれは？

「お話の邪魔をしてはいけませんので、これで失礼します」

意味不明だが、カグラさんとイザベラ姫は2人一緒に一礼してそのまま部屋を出て行ってしまった。顔見せにしても、なんだかおかしいよな？　カグラさんが出て行く時に、ジョゼフ王に頷いたのが見えたが何だろうか？

「まあ、そう言う訳だからよろしく頼む」

「ちょっと待って下さい。意味が分かりませんよ？」

「ふん！」

そんな感じで鼻を鳴らしたジョゼフ王だったが、何となく事情が分かった気がした。（あれだけで理解しろって言うのは無茶だが、照れ隠しなんだろうな）

「そうですか、それはおめでとうございます。それで、式は何時なんですか？」

「当面は愛妾としてだな・・・」

「はぁ？」

「いや、ロマリアから枢機卿の１人でも呼びつけて式はきちんとやる積りだぞ？」

「・・・、カグラさんがそれで良いと言うなら、構いませんが、まだ大変な様ですね？」

「そうなのだ、頭が固い奴らが多くてな」

あ、愚痴モードに入ってしまったぞ。まあ良いか、用件は済んだのだし急ぐ理由も無いからな。一泊くらいしても問題無いだろう。適当に相槌を打ちながらそんな事を考えていた。

＝＝＝

☆２つの別れ

結局２泊する事になったが、何とかトリステインへの帰路に戻る事が出来た。あの親子３人が仲良く（１人は仏頂面のままだったが）しているのを見るのは、実に奇妙な感じを受けたが、結婚式自体は内輪でこっそりとやるそうなので、私の出番は無い様だ。カグラさんが赤ちゃんでも授かれば、話は変わってくるのだろうな。

順調にトリスタニアへの道を進んでいる私に、２つの凶報がもたらされた。１つは予想内でもう１つは完全に予想外だった。予想内だったのは、ローレンツの訃報だった。最後にローレンツさんの人生がどんな物だったか振り返った意見を聞きたかったが、それも叶

わなかった。私がその話を聞いた時点で既に葬儀も済んでしまっていたのが残念で仕方が無い。
そして、もう1つの凶報というのが、アンリエッタの家出だ。家出自体は始めてでも無いが、行き先と理由が問題だった。私達は慌てて王城に戻ったが後の祭りだった。

「すみません、私がしっかりしていなかったから・・・」

「ノーラのせいじゃないよ。何時かはアンリエッタも結婚する筈だったし、それが少し早くなったと思えば良いんだ」

「でも」

「今は僕達がこれからどうするかを、決めなきゃいけない時だよ？」

「そうですね」

「王城の様子は？」

「はい、グレンさんの情報網にも”家出”の事はかかっていないそうですけど」

「噂になるのは時間の問題か・・・。陛下とマリアンヌ様は？」

「はい、マリアンヌ様は知らせを聞いてお倒れになってしまって。でも、陛下は”好きにさせておけ”と言うだけで・・・」

くっ、何てタイミングで！　アンリエッタの教育係も務めていた枢機卿が去っても状況が変わらなかったのに業を煮やしたのだろうか？　”やる時にはやる”と知っていたが、こんな時にそのやる気

を起こさなくてもいいのにな。

「王女付きのメイドの方が、これを貴方にと・・・」

「手紙ね、またアニエスさんかな？　しかし、書かれている事は予想出来るけど、全く！」

手紙には予想通り、私には女王なんて無理だから、あの方の所へ行きます。探さないで下さいなどと書かれていて、最後には”貴方が国王になれば良いんだわ、ラスティンなんて大嫌い！”とも書かれていた。どうやら、アンリエッタへの教育を厳しくしたのが私の依頼だと気付いたらしいな。

「仕方が無いな、ノーラはマリアンヌ様の方を頼むよ。僕は陛下にお会いして来る」

「はい、任せてください」

そう言ってノーラを見送った後、陛下との面談を申し出たのだが、体調が優れないらしく暫く待たされる事になったが、これ自体は最近では珍しい事ではなかったのだが・・・。

＝＝＝

「ラスティン、待たせてしまったかな？」

「いいえ、私こそ陛下のお加減の悪い時に、面会などと」

「構わない、どうせ長くない事だ。それより、報告があるそうだが？」

「あ、はい。先ずはマザリーニ様の事ですが、多分、本当に次の教皇になられると思います」

「そうか、我が国としても喜ばしい事だな」

何故か陛下の言い方に、他人事の様な感じを受けてしまった。

「ロマリアは、それだけなのかな？」

「あ、はい。聖エイジス３１世の体調は進退を繰り返しているそうですから、近々」

「そうか・・・」

「もう１点ですが、姫様の件、申し訳ありませんでした！」

「何故、君が謝るのかな？　責められるべきなのは私とマリアンヌだろうに」

「いいえ、私が姫様に余計な事をしていなければ」

「アルビオンの兄王に向けて、使者を送った。アンリエッタを頼むとな。それに、”あれ”には帰ってくる場所があると思うなともな」

「陛下？」

「これで、お前が名実共に、トリステインの次期国王だな、それも近々な」

何故”近々”なんて言うのだろうか？　あの提案は、陛下に良い影響を及ぼさなかったのか？

「・・・、陛下は私の”例”の提案を考えていただきましたか？」

「ああ、色々考えさせられたよ。借金の形に領主代行を送り込んでと言うのは、少々まどろっこしいからな。少し話を早める事にしたよ」

「はい？」

話を早めた？　どういう事だ？

「お前が国に譲ってくれた借金をな、”今すぐ返すか、領地と爵位を返上するか選べ”と言ってやったよ」

「なっ！」

「私は、奴等をこう言う目に遭わせたかったのだな、もう悔いは無い」

「陛下！」

「ところで次期国王よ、あのキアラという女は、実に役に立つな？」

「くっ！」

何故、今までキアラが私の所に顔を出さなかったか分かったぞ。くそっ！　そう思った瞬間、陛下が苦しそうに呻き声をあげた。駆け寄ろうとする私を視線で制して陛下は話を続ける様だ。

「どうやら、私も長くは無い様だ。後は好きにするがいいさ」

「陛下、今からでも治療」

「不要！　トリステイン国王として命じる、私の身体に触れる物は何者であろうと、国への反逆者とみなすぞ？」

「陛下は死にたいのですか？」

「・・・、いいや、多分私は、この現実、そうままならない現実から逃げ出したいだけなんだろうな・・・」

「陛下？」

「・・・」

どうやら気を失ってしまったらしいが、どういう状態なんだこれは？

＝＝＝

「お帰りなさい、ラスティン様」

「キアラか・・・、陛下の命令は？　聞くまでも無いか・・・」

「全て順調です、後は各地に使者を送るだけです」

「そうか・・・」

「どうなさいます？」

「私は副王なんだぞ、陛下の決断に逆らえないさ」

「それでは、その様に。ラスティン様、私が”陛下”から先程の命令を下された時に、面白い話を聞かせていただきました」

どうも、キアラの”陛下”には棘があるな？

「面白い話？」

「はい、何でも”陛下”は、ラスティン様を”貴族達と共倒れ”させる為に”副王”に任じたそうなのです」

「共倒れか・・・」

私は、陛下自身にも狙われたいた訳か？　何だか実感が無いな。

「他にも、”陛下”のお話にはラスティン様への”恐れ”、”嫉妬”等が見受けられました」

「はぁ？」

「お分かりになりませんか？　一度、”陛下”の身になって考えてみてはいかがですか？」

陛下の立場だと、私が怖くてしかも嫉妬もする？

「！！」

何て、全く何てことだ！　私は何と愚かなのだろうか。私が副王になってからやってきた事を思い出せば、陛下を蔑ろにしたと言われても仕方が無いだろう。陛下から見れば私は目障りだが、気付いた時には排除が出来ない存在になっていたのだろう。

それに、陛下が２０年以上かけてもなしえなかった、”貴族達”への反撃を成し遂げようとする私に陛下がどんな感情を抱いたか、想像するまでも無いだろう。確かに、”恐れ”と”嫉妬”だな、そこに、”右腕”とも言うべき枢機卿の帰郷と娘であるアンリエッタの家出が重なってしまった。そんな状況で、陛下はこの世を去ろうとしているのだ。

「もう一度だけ、お聞きします。”どうなさいます？”」

キアラの声が、私に重くのしかかって来る。キアラなら、私に害意を持っている人間を排除するのに躊躇いを覚えないだろう。枢機卿が別れ際に私に言えなかった言葉をキアラが代弁してくれているのだろう・・・？

「”排除”だと？」

「どうしました？」

「いや、ちょっとだけで良いから、時間をくれ」

「はい、でも長くは無理です。次に陛下が目覚められた時に、報告を求められるでしょうから」

「分かった」

その返事を聞いて部屋を出て行くキアラに目もくれずに、私は懸命に頭を動かし始めていた。陛下も、”あの男”や”あの生徒”、そして”あの貴族”の様に、私の前から排除されようとしている？（”あの貴族”以外の顔も名前さえも忘れてしまったのは、私の罪悪感のせいなのだろうか？）

本当に、そんな事が起こるのか？

本来なら、敵が勝手に消えていくのなら、教皇による”福音”なんだが、今の私には”呪言”にしか聞こえないぞ？

「認めない。認められるものか！」

独り言ちて、この状況を回避する為の策を考える事に集中した。

第百四十話　ラスティン27歳（先触れ）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

さて、二重に罠をかけましたが、回避出来るでしょうか？

第百四十一話　ラスティン２７歳（その時）（前書き）

第百四十一話ＵＰします。

さて、その時がやってきました。

第百四十一話　ラスティン27歳（その時）

「キアラ、こんな時間に呼び出してすまないな」

「いいえ、構いません」

「君に与えられた、陛下からの命令だが、私が引き継ぐ事にする。キアラにはもっと重要な事をやってもらう」

「ゲルマニア対策ですか？」

よし、話に乗ってきたな。当然一番に考えるべき事態だから、おかしな話ではないはずだが。

「それもあるが、キアラにはガリアとロマリアに行って欲しい」

「何故ですか？」

「ガリアとロマリア王家に、ゲルマニアが攻め込んできた場合の協力を要請すると言うのが表向きだな」

「裏は、諜報網の件ですか？」

「それもあるな、キアラの目でみてクロディーの所の間諜たちが使えると思えば、順次ゲルマニアに送り込んで欲しいんだ。陛下がお亡くなりになるとなれば、悠長な事は言っていられないだろう？」

「はい、それ以外と言うのは？」

「マザリーニ様に会って、もう一度だけ陛下に会って欲しいと頼んで欲しいんだ」

「それを、私が？」

「キアラ以外に適切な人間が居るなら任せても良いが？」

答えが分かっている問いを敢えてしてみるが、答えは順当な物だろうな。

「いいえ、確かに私が相応しい様です」

「行ってくれるか？」

「はい、承知しました」

キアラの表情をずっと観察していたが、巧妙に隠された感じだ。騙せたか？　一応は私の命令に逆らう気が無いの様だが、最大の障害をトリステインから引き離す事に成功した。キアラなら、私の意志に反して私の為に動きそうな予感があるから、真っ先に遠くへ行ったもらった訳だ。

続いて、マリユスをレーネンベルクに送り出した。レーネンベルクに居るアンセルムと合流してマース領の守備を固めてもらうと言う名目だな。（アンセルムがレーネンベルクに居るのは、理事長としての仕事を引き継いだ為だ。どうでも良いが、サインだけなら読めなくても問題ないからだぞ？）

勿論、ユニスも例外ではない、私の名代と言う形でアルビオンへと飛んでもらった。ガリアに居るクロディーも含めて”五星”を全て私の下から離した事になる。

キアラ達には十分な護衛を付けて、その護衛の1人に目的地に着いたらと言う条件で伝言を伝える様に命じておいた。”五星”を放つと同時にとある人物を呼び寄せたのだが、まあ、そちらはキュベレーに伝言を頼むだけだったから、手間では無かった。

副王の権限で、ゲルマニア襲来に備えてと言う名目で王軍の殆どをマース領に送るのも忘れなかったが、問題は魔法衛士隊だった。敢えて干渉を避けて来たのが仇になった訳だが、数少ないパイプから私はとある人物を選んで、直接交渉に入った。

「何だと、陛下がそんな事を！」

「エロワさん、魔法衛士隊ではそう言う噂は？」

「いや、ヒポグリフ隊の隊長に任じられて短いとは言え、聞いた事も無かった・・・」

「そこで私は、ちょっと”反乱”を起こそうと思いましてね」

「はぁ？」

「その反応は普通でしょうね。ですが、話を聞いてもらえますか？」

当たり前だが、黙っていれば王位が転がり込んでくるのに、反乱を起こす人間など居ないだろう？　だが、私の目的の為には魔法衛士隊は動いてもらっては困るのだ。運が良い事に、グリフォン隊の隊長が現在病気で倒れていて、グリフォン隊はまともに動けないから、ヒポグリフ隊とマンティコア隊が牽制しあってくれれば、時間稼ぎにはなる筈なのだ。

・・・・
（密談中）
・・・・

「うーむ、すまないが、ラスティン殿の言う事をそのまま信じる訳には行かないな」

「そうでしょうね、エロワさんの立場であれば。何でしたら、私自身が人質になりましょうか？」

「まったく、呆れた物だな。〝反乱〟の首謀者が人質になって〝反乱〟が成功するものかね？」

「それに関しては、友人と私の護衛隊が実動部隊ですから、私が居なくても別に問題ありません」

「そう言われると、貴方を人質にしても価値が無いと聞こえるな？　こうしよう、君の奥方を差し出したまえ」

くっ！　涼しげな顔で痛い所を突いて来るな。ノーラは出来れば実家に帰しておきたかったんだが、無いとは思うがラ・ヴァリエール公爵が暴発するのを防止する為という理由も考えてたのに。（ノーラの事だから絶対ばれると思うから、無意味なのだろうな～）

「エレオノールの身の安全は？」

「勿論、保証しますよ、行動を制限したりもしないと誓いましょう。いかがですか、副王殿下？」

「分かりましたよ、エロワ隊長。ただ相談したいので少しだけ時間を貰えますか？　もしかすると”勝手な事をして！”と怒られるかも知れませんがね」

「副王殿下は、恐妻家なんですな」

「いえ、愛妻家ですよ？」

時々、怖いと思う事も無いでも無いが、まあ、それも仲が良いから冗談で済むのだがね。

＝＝＝

「ノーラ、何も聞かずに、暫く魔法衛士隊のエロワさんの所へ行ってくれないか？」

「はい、分かりました」

「君には、あれ？」

まただ、完全に動きは隠している積りなんだがな？

「分かりましたと言いましたよ、兄様」

「意味が分かっているのかい？」

「はい、人質なんでしょう？　政治的な事は”あの人”程詳しくは無いですが、兄様が何をしようとしているかも大体想像できます」

「そうか・・・、やっぱりノーラが奥さんで良かったよ」

「兄様、本気なんですね？」

「ああ、君には「迷惑という言葉なら、貴方が副王になった時から承知していますよ？」

思わずノーラの肩を抱き寄せてしまったが、結局額にキスするだけで、ノーラを送り出す事になった。基本的に危険は無いはずだが、誤算があるかも知れない、その時にはノーラだけでも無事に送り出したいと思う。

そして、私は”ある人物”の到着を待って、馬鹿げた”反乱”を実行に移す事にした。

＝＝＝

”バン！”

フィリップ４世”元”国王の病室の扉が力ずくで開け放たれた。驚いてこちらを見たのは、例の侍医長殿ともう1人の侍医、そして”元”王妃殿下だった。

「何事です！」

「失礼します、マリアンヌ様」

「ラスティン、どうしたのですが、こんな時間に？」

色々な悩み事が重なったせいか、かなりやつれて見える”元”王妃に、私はこう告げるのだった。

「そちらの男性に少し用がありましてね」

「今お休みになった所なのですよ・・・、え？　男性？」

「そうです、先程、私は”国王”に即位しましてね」

マリアンヌ様が信じられない物を見たように、目を見開いたが、現実は現実なのだ。

「”元国王”には相応しい、罰を受けていただこうと思いましてね」

「冗談は止しなさい！」

「冗談ではありませんよ？　このまま放置しておけば、この国は大混乱に陥るでしょう、”元国王”が命令した件はご存知でしょう？」

「馬鹿な事は止めなさい！　陛下は貴方の為に」

「連れて行け！」

「離して、離しなさい。貴方！　貴方！」

抵抗するマリアンヌ様を強引に部屋から連れ出すのを眺めた後、残った侍医長に視線を送ったが、何が起こったか理解していない風である。どさくさ紛れにここで始末した方が良い様な気もするが、

噂を広めてもらわなくてはならないんだよな。侍医長も連れ出されると、早速本題に入る事になった。

「さて、元国王には、相応しい罰を受けてもらう事にしようか、頼む！」

私は、私の言葉を合図に、フィリップ４世の身体に”慈悲の刃”が振り下ろされるのを黙って見詰めているだけだった・・・。

＝＝＝

翌朝の朝議は、私の”国王”としての最初の朝議となった訳だが、近隣の貴族に参集する様に昨日から使者をだしていたのにも関わらず、５０人程が集まっただけだった。急な呼び出しだったから仕方が無いか、まあ、噂をばら撒くだけなら十分な人数だろう。

「急な呼び出しに応じてもらい感謝する！」

私がこう話を始めると、貴族達に小さなざわめきが走った。別に奇妙な事を言った訳では無いが、基本的に聞きに回っている私が朝議で発言すること自体が珍しいし、話し方が私らしくなかったからだろうな。（自分で話していても違和感がある程だが、今は仕方が無い）

「昨晩の事になるが、私は、正式にトリステイン国王となったから、皆には承知して欲しい」

私の次の言葉に、貴族だけでは無く、私の子飼い以外の役人達にも動揺が走ったのが分かったが、その場の誰も、私に対して”前王”がどうなったかと尋ねなかった。落ち着かない雰囲気のまま、”

始めての”朝議は終わったが、先を争うように議場を出て行く貴族達がどういう行動に出るかは、読みきれている自信は無い。（問題が微妙すぎるから、表立って動く者は居ない筈だが、空気が読めない人間は何処にでも居るからな）

朝議には、新王都担当のカロンも出席していた様だから、ルネにも伝わるんだろうな。転生者達の事を忘れていたが、基本的に保護者（相棒かな？）が付いているので心配は無用だろう。彼らと表立って、接触していないのが幸運だったな。

この一種の膠着状態が何時まで続くかは、分からないが、色々な人間の心臓に良くない状態なので、出来るだけ早く”次”に移りたいと思う。

＝＝＝

「スティン！」

「経過はどうだった？」

「まだ分からないけど、出来るだけはやったよ」

「そうか・・・」

「君はこれからどうする積りなんだ？」

「さあ、ガリアに行くのも迷惑だろうし、ロマリアは叩き出されそうだな。エルフの所にでも転がり込んでみるかな？」

「・・・」

「そんな顔をするなよ、例の脅迫状があれば、君には迷惑がかからないはずだろ。それより見てみろよ、反乱が進行中なんて信じられるか？」

私は、殆ど登った事が無かった城の上層部から、トリスタニアの町並みを眺めながらそんな事を言ってみたが、”彼”からは返事が無かった。何時もと変わらない城下を眺めながら、憂鬱な気分が晴れる事が無い事を感じていた。

第百四十一話　ラスティン27歳（その時）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

クーデターの結果は、まあ、皆さんの予想通りなんでしょうね。ただし、どうしてそういう結果になったのかは、考えてみても良いかもしれませんよ？

第百四十二話　ラスティン２７歳（茶番）（前書き）

第百四十二話ＵＰします。

第百四十二話　ラスティン２７歳（茶番）

しかし、思惑に反して中々”次”に移れない状態が長く続いてしまった。最初は一週間程だと思っていただのが、さすがにそう簡単では無かったらしい。

あっという間に、”あの夜”から1月も経ってしまったが、その間、悲しい事に私の周りでは何も起きなかった。”志のある貴族”が決起することも無かったし、”元王妃”が、王城を抜け出して、何処かの貴族に”王位奪還”を働きかける事も無かった。

それどころか、一部の貴族が他国へ亡命したという報告も受けた程だった。刺客くらいは送られてきたのかも知れないが、私自身は全く気付かなかった。（護衛隊は大変だったらしいがな）

一番期待していた王軍も、動きを見せていない様だ。”ミスタ・グラモン”なら、この機会を逃さず私の首をとりに来ると思ったのだが、これも予想外だった。はっきり言って、私の手勢は殆ど居ないのだ。数十人の兵士でも混戦になってしまえば対応不可能な状態とも言える。

先程から、悲しいとか攻められる事を考えてばかりとか、後ろ向きな発言が目立つな。だけど、仕方が無いだろう、自分の書いたシナリオが最悪のケースを突き進んでいるのだから。

まあ、言うまでも無いだろうが、この反乱は単なる”茶番”なのだ。”国王”命じた事を覆すのは”国王”にしか出来ない事だろうし、フィリップ４世陛下の治療が終わった時点で、誰かが攻め込んで来るなり、陛下の為に私を目の前で非難する貴族が居れば、さっさと降伏なり反省なりして、王位を返還する積りだったのだ。

”五星”を遠ざけたのも、彼らの力が私が去った後のこの国に必要だと思ったからなのだがな。（これでは、私が各国の動きを牽制する為に、”五星”を派遣した様に見えてしまうぞ？）

しかし、現実はどうだ？　マリアンヌ様に関しては、まあ、ノーラが何かしたのだろうが、それ以外がどうも思う通りに動かないのだ。さすがに時間が経ち過ぎた為に、エロワさんからも秘密裏に”譲位”を促す使いが来たりもする。このまま逃げ出してやろうかとさえ思うが、それでは無責任過ぎるだろうな。（逃げ出す自体は、私にとっては難しくない。キュベレーの”精霊の道”があれば何人でも逃げ出せるからな）

「こうなったら、茶番ついでに”譲位”式でもやるしか無いかも知れないな」

「貴方？」

「ノーラか？」

ノーラと、その後ろにエロワさんの姿も視界の隅に捉えられた。

「ご迷惑でしたか？」

「・・・」

「貴方が単なる反逆者と呼ばれるなんて、我慢が出来なくって」

「ごめん・・・」

「謝るのは私の方です」

「そうだね、しかし、王軍まで動かないとは思わなかったな」

「えっ？」

うーん、王軍の方もノーラの仕業らしい。アンセルム辺りが指示を無視して王軍を混乱させたとか、ゲルマニアが実際に軍を動かしたとか考えたのだが・・・、どうやってだ？　恥かしい事に私は自分の妻の実力さえ見誤っていたらしい。

「最初から最後まで茶番か、まあ、それも良いかも知れないね」

「”陛下”はどうされるんでしょうか？」

「さあ、それは僕の問題じゃないからね。ただ、覚悟は決めなきゃね、君も僕も・・・」

「はい・・・」

結局、そのまま1週間程で陛下の回復の様子を見ながら”譲位式”を行う事にしたのだが、気が進まなかったのは確かだった。

＝＝＝

「陛下、私の愚かな行いをお許し下さい」

多くの貴族を前にして、土下座するのは気が進まなかったから、陛下の病室に入れるだけの主だった貴族だけ集めたのだが、やはり負けた気がした。（いや、土下座と言う文化はこちらには無いのだが、気分の問題だ）

私が、自分の頭から外して差し出した王冠を陛下が、どんな表情で見ていたのか頭を下げたままの私には知る事が出来なかったが、その意志は行動で示される事になった。

「これを私に再び被れと言うのか？　・・・、断る！」

その意外に力強い言葉と共に、私が差し出した王冠が私の手から跳ね除けられたのが感じられた。病室に集まった貴族達から悲鳴にも似た呻き声が上がって、王冠の転がる音を打ち消してしまった。

私自身は、ベッドに横たわったままの陛下の顔を見ることも出来ずに、ただ、転がっている主のいない王冠を眺めているしか出来なかった。

・　・　・

暫く部屋を静寂が包み込んでいたが、私は諦めの心境で絨毯の上に転がったままの王冠を拾い上げる事にした。予期していたとは言え、どうしてこうなってしまったのか分からないというのが、本当の気持ちだった。

「そうだ、それはお前が戴くべきなのだよ」

陛下が何故か満足そうにそんな事を言ったのが聞こえたが、私自身はそんな事は思わないのだがな。

私が、再び王冠を頭に載せると、緊張した面持ちだった貴族達から安堵のため息がこぼれ、私が頷いてみせると1人また1人と病室

を後にして行った。最後まで残っていた、2人の”父”もその場を去ると、そこには本当の意味で”元陛下”と”元王妃”とそして私が取り残される事になった。

立ち尽くしたままの私を気遣う様に、マリアンヌ様が椅子を勧めてくれたが、それに座る気力も起こらなかった。

「何をしている、座れ」

陛下の、いや、私はこの人を何と呼べば良いのだろうか？

「陛下・・・」

「今の”陛下”は、お前だろう？　私の事は”フレデリック”と呼ぶが良いさ、こちらが本名なのだがな」

フレデリック様は、本当にすっきりしたと言った様子で、名前を教えてくれた。どうやら先程の不機嫌そうな振る舞いは、演技だった様だ。そうすると、フレデリック様は、私の為に茶番に付き合ってくれた事になるのだろうな。

「はぁ～」

「国王がそんな調子でどうする、まあ、座りなさい」

何だか余計に脱力してしまったが、今回は勧められた椅子に座ることが出来た。

「私はこれからどうしたら良いのでしょうか？」

「それは、お前自身が考える事だろう？　王位を簒奪しておいて、そんな言葉を言う物ではないぞ」

言いたい事は幾らでもあるが、後の祭りと言う奴だろうな。

「そうですね。フレデリック様はどうなさるお積りなのです？」

「厚かましい事だが、身体が言う事をきく様になるまでは、ここで世話になる事にしたいのだが？」

「それは、構いません。出来れば、王の心得なんかも教えていただきたいですね」

「王位を捨てようとして失敗した男が、そんな難しい事を教えられる訳が無いだろう？」

フレデリック様が冗談めかして、苦笑しながら言ったが、そうだなこれは自分で見出す物なのだろうな。

「まあ、王家のしきたり辺りは、マリアンヌから聞くのだな。お前がそれを守るとも思えんがな？」

「いいえ、守るべきは守るでしょうね」

「それもそうだな、ただ、”守るべき”に私とお前ではかなり差があるだろうがな」

「この王家には、色んなしきたりがあるのですよ？　私でさえ、理由の知らない様なね。そうそう、あの時は酷い事を言ってしまってごめんなさいね」

話が振られたマリアンヌ様が、すまなさそうに謝ってくれたが、お互い様だったからな。

「いいえ、マリアンヌ様。あの時はこちらこそ乱暴な真似をしてすみませんでした」

「そうね、お互い水に流しましょう」

「そうですね」

「大丈夫か？」

あまり大丈夫とは言い難いが、身体も頭も問題無い筈だ。問題は”ココロ”の方かも知れないな。フレデリック様の死という最悪の展開は回避出来たものの結局は、フィリップ４世は事実上死亡してしまった。そして私は望みもしない王位を手に入れてしまった訳だ。

ジェリーノさんの”人生の感想”が思い出されるな、この望まない王位が私の人生を”満足”いく物にしてくれるのだろうか？　それに私はこのまま進んでも良いのだろうか？

＝＝＝

周辺各国等に退避させたいた”五星”が順次戻って来た（クロディィーまでが、ジョゼフ王からのお祝いの品とやらを持って一時帰国して来た）のだが、最初に戻って来たのは、一番遠くに行かせた筈のキアラだった。まあ、事情はジョゼフ王から聞いているから分かっているのだが、どういう表情で迎えるべきか悩まされた。

キアラは、私の命令通りガリアまでは行ったのだが、ロマリアには行かなかったのだ。

「私は、1人の役人に過ぎませんから、次期教皇にお会いできる身分ではありません。ガリアに居る大使様に今回の件はお任せしました」

と言うのがジョゼフ王から聞いたキアラの言い分だった。大使様が、キアラの後輩だと言うのが笑えないな。

正直言えば、キアラがマザリーニに面会を求めても直ぐには会えないと計算していた私の心算の逆手に取られた訳だ。おかしな話だが、キアラの身分はマザリーニ様の”秘書だった”、新しい正式な身分が定まっていなかったから正真正銘のただの役人だったのだ。

（事実上の副宰相なんて言われても、直ぐには信じられないだろう）

まあ、キアラを知っている人間なら彼女の指示に逆らおうとは思わないだろうがな。（今回の私の様な目に遭う訳だな）

そしてキアラはガリアで宮廷に入り込んで、対ゲルマニア戦略を推し進めていたそうだ。幸運にもゲルマニアの侵攻自体は無かったが、それ自体は、トリステインにとってもゲルマニアにとっても幸運だった事は、残念そうに経過を知らせてくれたジョゼフ王の発言の端々から感じ取れた。

「キアラ、早かったね？」

「はい、国王への即位おめでとうございます」

皮肉も効かないし・・・、多分やった事に誇りを持っているんだろうな。

「1つ聞きたいんだが、何故かこの1月程で15人の貴族がこの国から、持てるだけの財産を抱えて逃げ出したんだが、何故だか分かるかい？」

「この国に居ては自分達に将来が無いと考えたからではないでしょうか？」

「将来が無いか・・・」

そう思わせたのがキアラの仕業だったとしても、そう判断したのは彼ら自身なのだからな。1月もあれば私の所にも噂ぐらいは流れてくるのだが、キアラは例の命令を受けた直後に何人かの貴族に、”国王陛下が、例の借金を強制的に取り立てるかも知れない”という情報を流したらしいのだ。

その後、（私が言うのも変だが）政変も重なって、彼らが”自分達に将来が無い”と思っても仕方が無いのかも知れない。キアラが私の行動を読み切っていたとは思わないが、今後の我が国の為には、確実にプラスになる行動をしたのは間違いないだろう。（私がキアラにあの命令をした時には既に、キアラは動いていたのだ）

「そう言う事にしておこうか、そうだ、キアラからマリロットに居るアンセルムに何か指示を出したか？」

「？　何の事でしょうか？　ただ、予想されるゲルマニアの侵攻に備えて、マース領に派遣されたら極力動くなとは指示しておきましたが？」

何故か、一瞬動揺が見られた気がしたのだが、”予想される～”の件は事実だと感じた。ノーラの打ち明けてくれた人脈の話と、ア

ンセルムの”進言”の相乗効果で、あのグラモン伯爵が動かなかったと言う訳か？　何故、ノーラもキアラもお互いを避けるのに、妙な所で同じ様な事をするのだろうか？

「まあ良いよ、ご苦労様」

「ラスティン様、お加減でも悪いのですか？」

「いいや？」

ノーラにもばれたが、キアラにもばれたか、最近妙に無気力感を感じる事が多いのが自分でも分かるが、どうすればこの状態を抜け出せるのか見当も付かない。自分がどちらに進むべきかなんて、生まれてから始めて考えた様な気がする。目標が定まっていないのが不安なのもあるが、”王位”という重圧が今までの様に思いつきで行動する事を忌避させる気もする。

ジェリーノさんの遺してくれた言葉が、逆に私を躊躇わせる結果となった気がする。ジェリーノさん自身は、私に自分の経験を話してくれただけなのかも知れないが、それが皮肉にも私を縛る形になってしまった。いっその事、ジェリーノさん言葉を聞かなかったら今まで通りの自分で居られた筈なんだがな。

考えてみれば、ジェリーノさん自身の行動は、”ブリミル及び宗教庁を改革する”という点では、如何にも転生者らしい行動をしたのではないかと思える。奴がが若くして枢機卿に選出された事に関しても、出来れば意図を聞いておきたかったな・・・。（ジェリーノさんの体調ではあまり長時間の会話は難しかったから仕方が無いが、悔やまれる）

第百四十二話　ラスティン２７歳（茶番）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／９／１１
信じられないどろう－＜信じられないだろう
に修正

第百四十三話　ラスティン２８歳（みんなで一緒に）（前書き）

第百四十三話ＵＰします。

第百四十三話　ラスティン２８歳（みんなで一緒に）

私が国王に即位してしまってから、もう一年も過ぎてしまったが、例の無気力感は相変わらずだった。だが、王としての私は不思議な程、評判が良いと言うから皮肉な物だ。この１年私は極力自分から動かない（行動を起こさないと言うべきかな？）方針を取って来たにも関わらずだ。

正直言ってしまえば、国王としての私の評判が良いのは、周囲の支えがあってこそだったんだと思う。私的にはノーラが私の心を支え続けてくれ、公的にはキアラが私の不調を気付かない風で毎日毎日毎日・・・、途切れる事の無い仕事を供給してくれていた。（すまん、愚痴が入ったな、本当にキアラは容赦が無いのだ。それが私に妙な思考をする時間を最小限にしているのは事実なのだが・・・）

矛盾して聞こえるかも知れないが、副王時代と違って私は積極的に現場に顔を出す事になっている。物騒な話だが、朝議の席で問題があると報告された場所には出来るだけ顔を出す様にしている。護衛隊にはかなりの負担なのだろうが、刺客の目標を定めにくくするのには役に立つかも知れない。（偉そうに言っているが、これもある種の現実逃避なんだろうな）

現場へ顔を出すのは本当に士気高揚の意味しかなかったが、長らく国民の前に姿を現すことが無かった”王”が国民の前に、それも目の前に出るのはそこそこ意味があったらしい。（全く皮肉な結果だな）

友人達や、部下達の働きも忘れる訳にはいかないが、私自身が”副王”時代にやってきた事が、少しずつ実を結んで来たのも大きい

だろうが、それも私の手柄と言うわけでは無いのだから、私は何の為に存在しているのか分からなくなって来る。愚痴ばかり言っていても仕方無いので、この一年を振り返ってみよう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

☆ライルとお姫様とおまけ

私が即位してから暫く経った頃だったと思うが、私は妙な客人を迎える事になった。

「トリスティンで修行すれば、魔法の腕が上がると聞いたんだけどさ～、私にも教えてくれないかい？」

何て話を始めたのは、誰だと思う？

「その話は、誰から聞いたのかな？」

「あ、それは、クロディー様から・・・、じゃなくって、クロディーのオバサンからだよ」

うん、咄嗟の反応では悪ぶれない様だな。しかも、育ちの良さ（義母の教育の成果と言うべきか？）からか、お茶を出しに来た給仕にきちんと”ありがとう”と言ってしまっているのに、気付かなかった辺りも微笑ましいのだが。はぁ、色々悩んでいる時に、こんな問題まで持ち込まれるとはな。

ガリアの愚痴王からの”よろしく頼む”だけだったら、追い返した所だぞ？　しかし、カグラさんに頼まれては嫌と言えないしな。少しだけ不安そうに私に”あの子の事よろしくおねがいします”と

言われてしまえば、”任して下さい”としか返答できなかった。（妙な事を言えば、カグラさんの胎教に宜しくないからな）

大体事情は分かっただろうか？　まあ、ジョゼフ王とカグラさんの間に子供が出来た訳だが、それに不安を感じたのかイザベラ姫が”家出”を敢行したらしいのだ。義母に”家出します”と告げて護衛を１００人引き連れて外国に来るのが家出といえるか分からないがな。妙に悪ぶっているのは、父親に対する当て付けなんだろうな。（魔法を学ぶというのが表向きの理由らしいが、前回会った時に妙な態度だったのはこの辺りに起因するのか？）

しかし、最近はハルケギニアの各王家で家出が流行しているのだろうか？　いかん、どうも思考が空回りしている気がする。

「イザベラ姫、それはトリステインでも極秘の情報だと、ご存知ですか？」

「えっ！」

少しだけ、威圧感を与える（と思われる）表情で、脅してみたら面白いほど動揺してくれた。あ～、どうもやる気が出ないな？

「ニルス！」

「はい、陛下」

「すまないけど、ライルを呼んできてくれるか？」

「少々お待ち下さい」

傍に控えていたニルスに、ライルを呼びに行かせた。

「あの、ライル様というのは？」

すこし脅しただけなのに、言葉使いが丁寧になってしまった。底が浅いというか、素直というか。

「ああ、義母様から聞いていませんか？　私の息子ですよ」

「どうして息子さんを？」

「いえ、年齢が近い方が話が通じやすいと思っただけですよ。それに、魔法の腕を上げたいと言うなら、ライルに習うのも良いでしょう。まだ１５ですが、既にトライアングルの腕前ですよ、スクエアになるのも近いんじゃないかな？」

「まあ！」

直ぐに生贄のライル君が到着したのだが、ライルを一目見たイザベラ姫の様子が露骨だった。ライルは、本当に美少年から美青年への移行期と言う感じで王城の若い女性陣からも密かに大人気なのだ。身長も１７０サントを超えてまだまだ育ち盛りだし、立ち居振る舞いも隙が無い。その上、性格も良いという完璧超人に育ったから、イザベラ姫が見蕩れてしまうのも無理は無い。

「父様、お呼びでしょうか？」

「ああ、こちらがガリアのイザベラ姫だ」

「始めまして、イザベラ姫。ライル・ド・レーネンベルクと申しま

す」

「あ、え、うん、宜しく頼むよ！」

イザベラ姫は混乱した挙句、悪ぶった態度（ツンモードか？）に入ってしまった様だが、ライルは気にした様子も無い。

「ライル、すまないがイザベラ姫の相手を頼めるか？　出来れば、悩み事を聞いて差し上げてくれ」

後半はライルにだけ聞こえる様に話した。ライルは少しだけ驚いた風だったが、直ぐに笑顔を浮かべて、

「イザベラ姫、それでは城内を案内しましょう」

とイザベラ姫に声をかけた。一方のイザベラ姫は、

「ふん、案内されてやるよ！」

などと言いながら、満更でもない様子でライルに付いて行ってしまった。ライルもそろそろ、こう言う事が出来ると思うぞ？　うん、単に押し付けただけなんだよな、自分でも分かっているんだが。

＝＝＝

何故ライルが王城に居たのか説明が居るだろうな、まあ、”トリステイン魔法学院”に入学する為だ・・・、ちなみにロドルフも友人として、王城に泊まっている。

これで終わると色々文句が出そうだな。先程の名乗りでも分かる

とおり、ライルは未だにレーネンベルクを名乗っているので、魔法学院に入るのは問題無いのだ。実は魔法学院入学はとある事を成し遂げたライルへのお祝いの意味もあるのだが、微妙な立場のライルの立場を強化する為に送り込んだと言う意味もある。（良い伴侶でも見つかれば良いと思っていた程度だがね）

お祝いと言うのは、ライルが決闘でノリスを見事打ち負かしたからなのだが、これはライルを褒めるべきなのか、ノリスを責めるべきなのか微妙だったな。ライルが言うにはジョゼットに少しだけ協力してもらったそうだ。（レーネンベルクの将来が不安になる逸話だったぞ？）

実は、今年”トリステイン魔法学院”に入学する生徒の知り合いがもう1人いる。同じ転生者のロドルフだった、祖父が貴族だったとは言え、今では普通の平民メイジであるロドルフが何故”トリステイン魔法学院”に入学出来るかと言えば、それだけ生徒が集まらなかったからなのだろうな。

さすがに見栄の塊の様な貴族でも、返す目処も立たない借金を抱えたままで目の飛び出るほど高い費用がかかる魔法学院に子弟を入学させる事が出来なかったのだ。（跡取り息子などは無理をして入学させたみたいだがな。キアラが送り込んだ領主代行もその辺りは見逃すことにしていたんだがな）

そんな話が、コルベール先生から流れて来たので、援助の積りで魔法学園の卒業生を何人か送り込むと言う提案をしてみたのだが、数日もしないうちに”学院長”自らが王城までやって来た。正直そこまで金銭的に困っていたとは思って居なかったが、母校が危機となれば援助しない訳にも行かなかった。（例の王家のしきたりでは、基本的に魔法学園へは不干渉と言われたが、構わないだろう。抜かりなく、ユニスが部下を監査役として送り込んだが、これは放漫経

営を戒める為だぞ？）

ロドルフが魔法学院行きとなったのは、彼が優秀なメイジである事と、ロドルフの両親が彼の生活態度に不安を覚えたからだった。ロドルフの両親が私の両親に相談してきた事から分かったのだが、最近のロドルフはＩＳの研究に熱中するばかりにワーンベルの研究室に引き篭もってしまっていたらしい。この世界で引き篭もるとはな・・・、まあ、転生者の行動としては珍しくなかったりするが、親としては心配なのだろう。（おかげで、虚無の曜日の度にロドルフはワーンベルと交信する為に王城を訪れる事になる訳だな）

「父様、良いでしょうか？」

「ああ、ライル、ロドルフ君もか。どうした？」

考え事をしている間に、ライル達が執務室に通されていた様だ。

「あの、ちょっと言い難いんだけど」

ライルらしくも無く、何か言い淀んでいる様だ。しきりにロドルフに視線を送っているのが分かる。まあ、いいか。

「ロドルフ君、どういう用件なのかな？」

ロドルフは少し苦笑気味に、ライルのおねだりの内容を教えてくれた。

「ライルはイザベラ殿下と一緒に魔法学園に通いたいそうですよ、陛下」

「おまっ、それは言うなって！」

ああ、ロドルフの苦笑は、ライルの態度とイザベラ姫の態度に対する物だった訳か。”陰険かつ酷薄な性格”とは正反対の性格の女の子が、”陰険かつ酷薄な性格”っぽく振舞って失敗しているのは確かに苦笑したくなるだろう。今の私や、父なら魔法学園への干渉は容易だが、問題が無い訳では無い。

「ライル、イザベラ姫は従妹の”シャルロット”姫の事を何か言っていたか？」

「あっ！」

ジョゼットの事をすっかり忘れていたらしい。まあ、物語（歴史）とは違って、シャルロット姫と仲違いしている訳では無いのは知っているが、色々面倒な事態になる気がするんだが。

「ライルが、責任を持つと言うなら、私から学院長に頼んでみよう。ただし偽名を使う事を忘れるなよ？」

「はい！」

嬉しそうな返事が返ってきた、年下の叔母さんよりも”少しだけ”年上の異性の方が勝ったらしい。この短期間でライルとイザベラ姫がここまで仲良くなるとは思わなかったな。ライルは”姫”と呼ばれる存在が嫌いなんじゃないかと思ったんだが、考えてみればライルとイザベラ姫の共通点も多かったんだよな。

少しだけ嫌な予感がするがどうでも良いか、カグラさんと親戚付き合いが出来るかもとだけ考えておこう。そんな将来の事は分から

ないからな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

☆コルネリウスとキュルケ

話は変わるがエルネストの診療所に文字通り担ぎ込まれて来たツェルプストー家令嬢だが、最近になってようやく復調してきたそうだ。コルネリウスの献身的な看護のお陰なのだろうが、様子を見に行ったガスパードやカロリーヌに話を聞くと、引っかき傷は当たり前で、噛み跡や青痣だらけだったコルネリウスの様子も大分落ち着いたらしい。（友人の名誉の為に言っておくが、コルネリウスは悪さをしようとした訳ではないぞ？　看病の事もあるから、指一本とは言えないだろうが、コルネリウスはあれで紳士だからな）

「それで、キュルケ嬢から話は聞き出せたのか？」

「ああ、アルマントが言うには、ヴィンドボナの魔法学院に通う為に町に滞在していた時に変装してお忍びで出かけて、”平民メイジ狩り”にあってしまったらしいんだ」

「そうか・・・」

話を聞かせてくれたガスパードが、何故か私をじと目で睨んでいる。面倒だし、無視だな！

「まあ良いけど、護衛する身にもなってくれよ。ところで、アルマントの所には、ツェルプストーからよく使いが来るそうだよ？」

「はぁ、暴発だけはさせないようにしてくれ」

「いつまで持つかな？　アルマントにしろツェルプストー辺境伯にしろね」

「嫌な事を言うな、君も」

「スティンも国王陛下なんだから、もう少し落ち着いて欲しいんだけどな」

「それは主観の差という奴だよ」

今の私は、決して活動的では無いと言う自覚があるからな。

「まあ、スティンに口で勝とうとは思わないけど、トリステインとしての方針は早く決めた方が良いんじゃないかな？」

「そうだな、キアラに考えてもらおう」

「君が考えろよ！」

いや、少なくとも私が考えるよりまともなアイデアが出ると思うけどな、特に今なら。しかし、コルネリウスにしろ辺境伯にしろ長期間抑えるのは難しいだろうな。

「そうだ、来年辺りにキュルケを魔法学院に入れたいって、アルマントが言ってたよ」

「来年か、それ位なら簡単だけど？」

「ああ、メイジに慣れさせたそうだよ。同世代であれば、まだ、マ

シらしいからね」

来年か、ルイズも入学するし、父の話ではジョゼットも来年入学するらしい。コモンマジックしか使えないメイジが1人だけよりは、2人で一緒に入学した方が目立たないと言う事と、ジョゼット自身の希望らしい。ルイズとキュルケとジョゼットが同学年か、出来過ぎではないだろうか？

第百四十三話　ラスティン２８歳（みんなで一緒に）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百四十四話　ラスティン２８歳（国内状況確認中）（前書き）

第百四十四話ＵＰします。

第百四十四話　ラスティン２８歳（国内状況確認中）

平民メイジの静かな増殖に伴い、鉄道網と言える物が育ちつつあるらしい。とは言っても総延長が４００～５００リーグ程なので、網と呼べるかは疑問だがな。但し、鉄道の敷設が始まってから間もない事を考えると、とんでもない数字だと思うが、その延長能力が日に日に増しているのが、面白い所だろうな。

私自身も、視察の足として使う事もあるが、何だか前世に戻った気分になった。ＳＬには乗った事が無いのだがね。ちなみに色はあの絵の通りだったが、あれが標準になっているらしい。（石炭の質が良くなった為か、煤の心配は無くなったらしいぞ？）

鉄道網の整備に伴い、トリステイン各地で錬金による工業品の生産が始まった。レーネンベルク山脈から掘り出された石材が貨物列車に乗せられて各地に送られているそうだ。まあ、駅の建設の協力的だった貴族の所限定だがワーンベル以外でも工業品が生産出来る事で、経済活動がトリステイン全体で活発になったのは喜ばしい事だろうな。

当初から協力的だったベッケル子爵の所などは、石材の山が出来ているらしい。平地ばかりの子爵領に山が出来ると言うのは中々奇妙な状態だった。見る人が見れば文字通り”宝の山”なんだが、誰かが狙ったのか奇妙な形に積み上げられた石材が噂になって人が見物に来ていると子爵自身が教えてくれた。

ユニスやキアラの予想では、この状態が続けば各領地での収入の差がはっきり出てくると言う事だったが、それはまだ先の事になるだろうな。石材も、人材もレーネンベルクが抑えている現状も暫く

続きそうだ。キアラは魔法学園の分校を幾つか建設する様に提案して来ているが、王都トリスタニアに小規模の物が建設されたきりである。

これには少し事情があって、新王都建設の為に人手が大幅に割かれている為だ。駅を中心とした新王都の建設が始まれば、そこに国立の魔法学園を建設する予定になっているから、キアラもそれほど急いでいないだけなのだろう。

鉄道網の整備自体の計画推進は、コルベール先生からリッテンに引き継がれる事になったそうだ。コルベール先生自身がその様に仕組んだらしいが、鉄道関係ではやる事はやったと言うのが実際の所だったそうだ。まだ、若いリッテンだが、その能力を疑う者は少なくとも関係者の中には居ないだろう。

先日、鉄道をガリアに向けて延長すると言う事も決まったのだが、やってきた宰相殿もリッテンには甚く感心していたからな。あの蒸気機関車が、トリステインだけではなくハルケギニア中を走る日も近いらしい。

コルベール先生によりディーゼル機関車の試作列車も開発済みだから、長距離列車等は順次ディーゼル機関車に置き換わっていくのかも知れない。（この辺りは、多分、リッテンの気分次第だろうな）

一方電気機関車の開発は行われていないのが現状だった。小型の発電機自体は何とか生産出来るのだが、問題は電気を送る送電線なのだ。現在の社会状況では、少し導入が躊躇われると言うのが問題の根源なのだろう。試験的に伸ばした送電線による事故が起こった事で分かったのだ。

小型の鳥などなら問題なかったのだが、この世界では普通に空を

飛ぶ大型の生物が存在するから、彼らが電柱にとまってしまって感電する事故が発生したのだ。幸い電圧が低かったから問題は落ちた為に怪我をした方が大きかったのだが、翼人等がとまってしまえば洒落にならない、数か少ないとは言え無用な諍いを起こしたくは無いからな。（面倒だしな）

それ以上に、不用意に大型の生物が触って感電して暴れだしたりすればどうなるか考えるまでも無いだろう。竜族や大型の亜人など危険は多いのだ。

もう1つ無視出来ないのは、送電線は破壊工作に極めて弱いという事だな。送電網と呼べる物でも出来ない限り、簡単に列車の運行を全面的に妨害出来るとなれば、ゲルマニアがそこを突いて来ないとは思えないからな。（ナポレオン1世の知識次第だが）

ちなみに、ノーラの考案した電報の方は、レールに直接設置する事で実用までになっているが、妙に凝ったせいで暗号文が複雑になって、普及し難くなってしまったらしい。普通に列車の運行情報などを伝えるには威力を発揮しつつあるらしいぞ？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

☆領主代行

借金の形と言う訳ではないが、各領主の所に送り込んでいる領主代行達だが、こちらは着々と足場を固めつつあるらしい。この辺りはキアラが中心に話を進めているから抜かりは無いが、人材の集まりが悪く進みは良くないそうだ。

話を聞く限り、3人1組で送り込んでいれば当然の結果だと思うのだが、キアラ自身はこの3人1組を変える積りは無いそうだ。代

行と副代行、そして監査役まで送り込むのは無駄に思えるが、領主と癒着しては意味が無いという意見を否定する材料は持っていないからな。

全く外部の人間が領主代行などと言うのは、前代未聞なのだが然程トラブルも無く受け入れられたのは、フィルマンとジェルマンの双子のお陰と言っても過言じゃないだろうな。ラ・ヴァリエール公爵領へエルネストを助ける為に送り込んだ2人だったが色々苦労したらいいがその報告が役に立った訳だな。

「そうか、意外な所からノウハウが得られる物なんだな」

「のうはうですか？」

「専門的な技術やその蓄積と言った所かな」

「なるほど、面白いですね、どこの言葉ですか？」

「ん？　造語かな。それより、2人からの報告を要約してくれるか？」

気が緩んでいるな、まあ仕方がない気もするがな。

「はい、2人ともかなり苦労した様です」

「だろうね、あそこは現領主も家臣も優秀だろうから」

「一応、領内の改革を進めるのではなく、次期領主がやりたい事が出来る様に環境を調整する事に専念させましたから、何とかなりました」

「そうか、そう言えばフィルマンとジェルマンの双子は仲がわるかったんじゃなかったか？」

「はい、ですが増援として仲介役の女性を送り込んだので、悪い方には向かわなかった様です」

この辺りの経験が領主代行の３人１組制を考案したのかも知れない。キアラ自身も現状に満足せず、成長を続けている様だ。（一方私ときたら・・・、ふぅ。なんだか、何処かの愚痴王っぽくなってきたか？）

領主代行という制度自体は、概ね良好に受け入れられた様だ。殆ど領民の前に顔を出さない領主や、領主の権力を笠に着た勘違いした家臣などよりはマシだし、何の権力も持たない下級の役人よりは頼りになると言う訳である。勿論、下級の役人は取り込ませる様にしたそうだ。

一方領主にとっては、当面の借金問題が先送りに出来るだけでは無く、領主としての責任を逃れる事が出来て爵位はそのままなのだからこれを拒否する領主は意外と少ないのだ。そもそも自分の手で領地を栄えさせようと目指している領主であれば、鉄道関係の話に乗ってこないのがおかしいのだろうな？

現に、父の所には相談に来ている貴族も多いそうだが、意外と中小領主が多いというのは面白いかもな、ガリアでも同じ様だったと聞いた覚えがある。生き残る事への嗅覚が鍛えられているのだろうか？（ああ、トリステインから逃げ出した貴族もどちらかと言えば中小に分類されるな、どちらの選択が正しいのだろうか？）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

☆ゴドー伯爵

「ゴドー伯爵が借金を全額返して来た？」

「はい、受領は数日後の予定ですが、領主代行が確認したそうです」

そう言ったキアラだったが、少しだけ悔しそうにしているのが分かった。何となく声がかけ辛かったが、別の所から発言があった。

「あの家系だけの伯爵家がそんな大金用意出来るとは思わないね。どうせ汚い手でも使ったんだろう」

「へぇー、ガスパードが他人の悪口を言うなんて珍しいな、知り合いなのか？」

そう言った私の言葉に執務室が一瞬静寂に包まれたが、ガスパードが手で玩んでいた杖を落とした音がその静寂を簡単に打ち破ったんだと思う。どうでも良いが、国王の執務室で休憩する近衛隊員と言うのは珍しいし、王城内で不用意に杖をを抜くだけでも罰せられる場合があるのだが？

「スティン、お前本気なのか？」

ガスパードが呆れた顔でそんな事を言った。報告をしていたキアラは何時もの様に、眉間に指を当てて何かを堪えている感じだ。ゴドー伯爵家に関してはあまり情報が無いから仕方が無いのだ。地理的に言えば、ゴドー伯爵領はトリスティンのほぼ中央に位置しているが、ぱっとした産業も無く、誰に話を聞いても口篭るばかりなの

だ。（グレンさん辺りから情報を仕入れたほうが良かったのだろうか？）

「知り合いでもないんだから仕方が無いだろう？」

「なあ、スティン。ここ数年だけど、カロリーヌの後にくっついている女の子が居るだろ」

「あ～、何と無く印象に残っているよ、それが？」

ガスパードまで、眉間に指を当てたポーズをとってしまった。伯爵と女の子に関係があるのか？

「あれは、モンモランシ家のご令嬢ですよ？」

「あれが、モンモランシーなのか？」

何気なく言ってしまったが、何故か睨まれたぞ。少なくともキアラは事情を知っている筈なんだが。（縦ロールじゃないなんて反則だろうに。カロリーヌに弟子入りでもしたんだろうな、カロリーヌも髪は短いから真似たのだろうか？）

「と言うことは、ゴドー伯爵も母方の親戚なのか？」

「ダメだなこれは・・・」

「ゴドー伯爵家は、元を辿れば王家の血筋だと聞いております。それに、”ドローヌ伯爵”と”フェリー子爵”と”グレトリー子爵”と聞いて何か思い出しませんか？」

「・・・、成る程ね、誰もが口を噤む訳だ。王家に縁の貴族が敵国と通じているとなると、国王には言えない訳だ」

「それだけじゃないぞ、”ブリュノ・ド・ゴドー”と聞いて思い出さないか？」

ブリュノ・ド・ゴドー？　誰だそれはとか言ったら、どうなるだろうか？

「その様子じゃ、本当に忘れているんだな。”ミスタ・ゴドー”と言っても無駄なんだろうね？」

「同級生じゃないよな、さすがにそれは覚えているぞ！」

「あのな！　立派に同級生だよ、なんで自分が追い出した生徒の名前を忘れられるんだよ！」

ああ、あの生徒は”ブリュノ・ド・ゴドー”だったんだな。嫌な”縁”もあったものだ。

「ちなみに、”ブリュノ・ド・ゴドー”は、トリステイン魔法学院を放校された後、ゲルマニアの魔法学院に転校したそうですよ？」

「何、そんな重要な話を黙っていたのか、キアラ？」

「あー、彼女の名誉の為に言っておくとだな、”ブリュノ・ド・ゴドー”は故人だよ」

「死因は？」

「反乱予備罪で死刑と言った所かな？」

「あの時、”裏切り者が居たとして、１人の人間の首を王軍に差し出して来た”と報告しました」

「それが、”ブリュノ・ド・ゴドー”だった訳か、息子の首をね」

息子の首を差し出してきたとなれば、国王と言えども強くは出られないか？　確実に立場は悪くなっただろうがな。いや、今回の返済資金を何処から入手したかを考えれば、伯爵自身がゲルマニアと通じていたと考えるのが自然だな。開き直ったと捉えるべきなのだろうか？

「ゴドー伯爵は何歳だ？」

「はい、かなりの高齢ですね、７０は超えている筈ですが？」

「そうか、次期領主の人柄は？」

「言う必要がありますか？」

「それなら、この問題はこのまま放置する」

「良いのですか？」

「ああ、元々自滅を待つ予定だったんだろ？」

まあ、キアラの事だから、何かやるとは思うが・・・。

「キアラ、穏便にな」

「はい」

キアラに任せる事にしよう、この問題は国王が手を出すべきでは無いと、キアラ自身が答えてくれた様な物だ。今の伯爵は中々の切れ者らしいから、自然死を待って爵位が移動してから料理するんだろうな。

第百四十四話　ラスティン２８歳（国内状況確認中）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

またしても、ちょっとした罠を仕掛けましたよ？

第百四十五話　ラスティン２９歳（変化の兆し）（前書き）

第百四十五話ＵＰします。

第百四十五話　ラスティン２９歳（変化の兆し）

更に一年が過ぎたが、国内外の状況も、私自身の内外の状況もあまり変化は無かった。いや、あの娘のあの一言を聞くまではという注釈を付けるべきかも知れないな。

＝＝＝

☆元国王と元王妃

おっと、ボーっとしていてフレデリック様とマリアンヌ様のその後を書いておくのを忘れそうになったな。例の反乱騒ぎから結局半年程かけてフレデリック様のリハビリが終わったのだが、どう見ても以前より元気になっている気がした。（しかも夫婦揃ってだぞ！）

そして、予告通り王城を去り今は何処かで旅をしているらしい。時々だが、各国の要人と会談する事があり、彼らから話が聞けたから分かった事だ。どうやらフレデリック様は、私が王位を継いだ事が正式な王位継承だったと説明して回っているらしい。各国も応対に苦労しただろうな。元気に外遊を楽しむ元国王なんて、お目にかかったことも無い存在だからな。（その上、簒奪者の擁護するとなれば、”副王”よりも有り得ない存在だろう）

最初はアルビオンで次にガリア、その後は多分ロマリアらしいのだが、そこからは足取りが掴めない。周辺の小国まで念入りに回ってくれたようだが、とある国の大臣に、

「どうしたら、そんなに上手く譲位が可能なのですか？」

なんて真顔で聞かれたら、どう答えたら良いか悩んでしまった。私の感覚的に言えば押し付けられたとか、仕方なくとか、譲り合いに負けたとか、どう考えても間違った回答しか出来ないし、そもそもそう言う質問が来る事自体きな臭さを感じてしまうのだ。

「それは、前国王のお心が広かった為ではないでしょうか？」

などと見え透いた返答しか出来ないのだがな、結局。

まあ、一部の例外を除けば、概ねフレデリック様とマリアンヌ様の外遊は我が国にとってプラスに働いた事は事実だから、感謝すべきなんだろうな。どうも勝者の余裕と言う言葉が頭に浮かぶが、深く考えたらそれこそ負けだろうな。

さすがにゲルマニアとそれに従う国にはフレデリック様達も行かなかった様だが、人質になっても知らない顔しか出来ないのだがな。魔法衛士隊の有志が護衛に付いているが万全とは言い難いのだが、まあ、好きにしてもらうしか無いだろうな。関心を示さない事があの方々の安全を守る手段だと言うキアラの意見も尤もな話し出しな。

アルビオンからは、モード大公が交渉（偵察だろうなあれは）に来たが、これまで通りの関係を続けていく事で意見の一致を見た。ガリアは、まあ、王女がやってくるくらいだから、実情が伝わっており何の問題も無かった。

愚痴王が”父の予想通りになったな”とか言っていたが、反論するのも億劫だった。ロマリアでは、教皇となったマザリーニ様からの使者が来て、国王即位の祝いの言葉を述べてくれた。（使者と言うのは、新しく枢機卿になった人物だったが、私としても扱いに困る人物だったな）

問題はゲルマニアだが、どういう出方をするか見守っていると言う所だろうか？　”ラスティン・ド・トリステイン”なるものの即位を認めないと言う声明を発表しただけで、具体的な行動は起こしていないのが不気味だが、トリステインから逃げ出した貴族達を受け入れたのはゲルマニアだったのだがな。

”簒奪者から国を奪い返す”という名目で攻め込んでくる可能性はあるが（これで戦争を始める理由としては十分なのだ）、まあ、備えはしているから何とかなると思う。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

☆守りたい者、守るべき者

あれは、ライルとイザベラ姫そしてロドルフが魔法学院に入学してから半年程経った頃だったかな？　虚無の曜日は大抵3人揃って王城を訪れる事が多いが、その日も例外では無かった。ここに用があるのは、ライルとロドルフだけだが、何かと理由をつけてイザベラ姫も付いてくるのが恒例の事だった。

「ライル、休みの日にすまないな」

「えっと、僕は父様と母様に会いに来ているんだけど？」

「そうだったな」

ちなみに、ロドルフはワーンベルに居るエルフの技師達と交信中で、イザベラも最近はやっとカグラさんと和解？したらしくこちらも交信を行っている。”声を伝える者”が公的にと私的に同時に使われている訳だな。

「随分とイザベラ姫と仲が良いみたいだな？」

「いけませんか？　それと僕にとっては”アナベラ”ですよ」

「そうだったな。いけないと言う訳じゃないが、ライルの覚悟を聞いておきたくてね」

「僕の覚悟？」

「そう、覚悟だ！　彼女は仮にもガリア王の子供で、王位継承権もオルレアン大公より上になるかも知れない女性だ」

「うん・・・」

「お前は、今、”アナベラ”と居る事が楽しいんだろうな、それは私も良く分かる。ただ、学院の卒業を待たずに、”アナベラ”はガリアに帰ってしまうかも知れないんだぞ？」

「え！？」

「”アナベラ”の魔法の腕は上がっていると聞いているよ？　それにガリアの王位継承者ともなれば婚約者が居てもおかしくない年齢だと言う事は分かっているんだろう？」

「うん・・・」

イザベラ姫の魔法の腕は、トリステインに来た頃はドットクラスだったが、一年も経たずにラインへと昇格を果たしている。きちんとしたデータがある訳では無いが経験的に、マカカ草の助けを借り

ればメイジは殆どがトライアングルメイジにまではなれる事が分かっている。

＝＝＝

少し話が逸れるが（その上面倒だがな）メイジの能力について、解説しておこうか。メイジの能力としては”系統”と掛け合わせる”系統数”で判断されるのが普通だが、もう少し詳しく言えば魔力の総量と放出限界、そして変換効率と言う物が挙げられるらしい。

魔力の総量は説明が不要だろうな、精神力の総量という表現も出来るが、目に見える物ではないが、精神力が減退すれば放出できる魔力量も減るから凡その量は分かる物だ。

魔力の放出限界と言うのは一回の呪文に込められる魔力量と思えば良い。これが、掛け合わせる”系統数”に直結する訳だな。この放出限界を超えるのは難しいが、精神的な高揚等で一時的に増やせるらしいが、同時に制御も難しくなる諸刃の剣と言う訳だな。

変換効率と言うのは、一般的では無いが専門家の間では知られているらしい。１の精神力を１０の魔力に変換出来るメイジも居れば、１の精神力で１の魔力しか得られないメイジも居る訳だな。

そして、魔力の総量と放出限界と変換効率の全てがある程度強化が可能なのだ。魔力（精神力）の総量は限界まで魔力を使うと少しだけ増える事はマカカ草を得た時から想像が付いていた事だった。

ドットからラインに昇格する様に放出限界が増える事は以前から知られていたし、呪文を唱えれば唱えるほど変換効率が上がるのも兵団内部（特に錬金隊では）経験的に知られていた事だ。魔力を限界まで使わずに工業品の生産を続けていた錬金隊のメイジと、警備隊に移籍していたほぼ同じ腕だったメイジが１年後に同じ錬金をした場合に歴然と差が出たそうだ。

マカカ草の効用が分かる以前は、この辺りがはっきりしなかった為に魔力の総量と放出限界だけで”頑張ればトライアングル”とか評価されていた訳だな。総魔力量が少なければ、簡単に魔力切れになってしまい回復に時間がかかるから間違ってはいないのだが、魔力を回復できるとなると話が変わってくる訳だな。

毎日毎日限界まで魔力を使っていれば、総魔力量が少しずつ増すし、総魔力量が増せば呪文を使える回数が増えて、放出限界と変換効率も向上する訳だ。自然と兵団のメイジは腕が上がる訳だな。鍛えられると言っても、個人差があるからラインから昇格出来ない団員も（少数だが）居れば、スクエアになる団員も居る訳だ。

話を戻すと、イザベラ姫は総魔力量はそこそこ、放出限界はまあまあ、変換効率に難ありだった様であまり上等とは言えないドットメイジだったと言う訳だ。ライルから聞いた話では、まだ子供の頃無茶な魔法の練習をして倒れた事から、呪文を多く使うことに軽いトラウマが出来たらしく、腕が一向に上がらなかったのではないかと言う事だった。（父親が父親だから不安だったのだろうが・・・）

そのトラウマをライルと共に打ち破ったイザベラ姫は、メイジとしても、人間としても一回り大きくなったのだろう。年下の従妹に抱いていた劣等感も同時に消え失せたらしいが、シャルロット姫も未だラインメイジらしいのでそこまで酷い劣等感では無かった様だ。

だが、それはイザベラ姫がこの国に留まる必要が無くなった事も意味している、これが私がライルに尋ねた事の本当の意味なのだし、ライル自身もそれに気付いてしまった訳だな。

「ライル、お前は昔、”父様を守る”と言ってくれたよな？」

「覚えていてくれたんだ・・・」

覚えていたからこそ、問題を先送りにしてお祝いで誤魔化したのだがな。

「今でも同じ気持ちかな？」

「はい、勿論！」

「そうか、ありがとう。私と”アナベラ”どちらかしか守れないとしたら、どちらを選ぶ？」

「・・・。トリステインの国民として、息子として父様を守るべきだと思います。だけど、”アナベラ”もこの手で守りたいです！」

「そうか、良い事を教えてやろう。”アナベラ”をお前の嫁としてトリステインに迎えてしまえば良いんだぞ？」

「・・・」

何だか幸せそうな表情だな・・・、あ、落ち込んだ。

「トリステイン国王の息子がそんな表情をするものじゃないぞ？」

どうも私らしくない台詞の様な気がするな？　いや、当然なんだがな・・・。

「父様・・・、はい！」

ああ、もしかしたらあの時の私もこんな表情をしていたのかも知れないな。そんな事を考えていると、ノックも無しにイザベラ姫が

部屋に入ってきて、興奮気味に話し始めた。

「ライル、私まだここに居て良いんだって！」

「本当かい！」

そう言って手をつないで喜び合う、ライルとイザベラ姫だった。
正直微笑ましいと思うが、父親の前で女の子といちゃつくとは・・・、まあ良いか。（ここが王族だけの居間の様な物なんだが、今更それを言ってもな？　まあ、副王時代から使っている部屋だしな）

ワーンベルとの交信を終えて戻って来たロドルフと合流して開通したばかりの魔法学院方面行きの列車に乗って帰って行った。はぁ、何とか上手く事が運んだ様だな。

「これで良かったかい？」

「ええ、やっぱりこう言う事は男親の方が向いているでしょう？」

「まあね」

私がノーラと揉めた時は、母が発破をかけてくれたのが懐かしいな。

「ふぅ」

「まだ、ダメですか？」

「すまないな、私がこんな調子で・・・」

「大丈夫ですよ、切欠さえあれば！」

ネタばらしをしてしまえば、今日のライルへの助言の大部分はノーラが筋書きを書いた物だった。ノーラなりに私を奮い立たせようとしているのだが、人の心（自分の心だからこそか？）思う様に操るのは難しい物だな。

現状は副王時代の貯金で上手く回っている様だが、それが何時まで続くのかと考えると、何かすべきだと思うのだが何をどうするべきなのかが、未だに見えて来ないのだ。

第百四十五話　ラスティン２９歳（変化の兆し）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百四十六話　ラスティン２９歳（タバサ）（前書き）

第百四十六話ＵＰします。

さて、このサブタイトルの意味する所は何でしょう？

第百四十六話　ラスティン２９歳（タバサ）

予定通り、ルイズ、キュルケ、そして妹のジョゼットが同じ歳にトリステイン魔法学院に入学する事になった。時々ノーラの所にやってくるルイズは何処か凛々しさを感じさせる所があるし、キュルケは例の事件以来非常に人見知りする様になってしまった。そして、ジョゼットに至ってはどうしてこんな事になったのだろう？

「スティン兄、こうして会うのは久しぶりだよね？」

「そうだな、時々交信していたから、おかしい事も無いだろ？」

「一応、僕も魔法学院に入学する事になったから、挨拶しに来たんだ」

さっきから口調がおかしな事に気付いていたが、それに加えて”僕”？

「ジョゼット、その制服は？」

「えっ？　似合わないかな？」

「いや、そんな事は無いけど・・・」

ジョゼットが身に着けているのは、文字通り、以前、私も身に着けていた魔法学院の制服だった。念の為に言っておくが、私は男だしジョゼットは華奢な女の子だ。私が女生徒の制服を着ていたのではなく、ジョゼットが男子生徒用のシャツにスラックスとマントを見に着けているのだ。（どう言う事だ？　私の知らない間にジョゼ

ットが男装に目覚めたのか？）

「やっぱり男の子の制服じゃ変かな？」

「いいや、似合っているし、うん、可愛い弟に見えるよ？」

何故か同級生の女生徒に可愛がられて、男子生徒から嫉妬される情景が浮かぶが？

「もう、僕が女の子だって知ってるくせに、スティン兄の意地悪！」

どう反応すれば良いのだろうか？　どう転んでも文句を言われる気がするぞ、どうでも良いけどな。

「ごめん、ごめん、でもどうして男の格好をしているんだい？」

「うーん、こっちの方が慣れてるからかな？　修行の時は何時もこの格好だしね」

ああ、ドレスで剣などの武器の訓練は危ないだろうからな。それだけ本気で、師匠役のレイモンドさん達はジョゼットを鍛えてくれたのだろうな。うーむ、何か間違っている気がするよな？

「自分の事を”僕”って呼ぶのも、修行の成果なのかい？」

「あ、ついつい、こう呼んじゃうんだ。父様とか母様の前なら大丈夫なんだけど、スティン兄の前だと気が抜けちゃうのかな？」

突込み所満載な気もするが、まあ、良いだろう。公式な場できちんと振舞う事が出来れば目を瞑ろう。（国王の前が公式じゃないの

か？なんて野暮な事は言わないぞ）

「”僕”がね”僕”と呼ぶようになったのは、セレナ師匠が最後にそう勧めてくれたからなんだ」

セレナか、何故か彼女の悪意を感じるが、今はどうしているんだろうな？　無事なのは分かっているんだがね、ただ、興味がわかないんだ。

「ノリスは嫌がらなかったのかな？」

「ノリス兄？　うーんと、最初の頃は嫌がってたかな？　でも最近は何も言わないよ。テッサもライルも屋敷の人達も、師匠達も”僕”の方が”私”より似合うって言ってるし！」

何だか知らないが、周りが寄って集って妹を”ボクっ娘”にしてしまったらしい。ノリスが反対しなくなった理由が少しだけ想像出来てしまったが、何をやっているのだろうか？

「そうだ、スティン兄には良い事を教えてあげるね」

「良い事ね～？」

そんな嬉しそうな表情で言っても、嫌な予感しかしないのだが？

「うん、僕ね魔法学院には偽名で通う事にしたんだ」

偽名ね、何だか予感が確信に変わって来たぞ。

「それで、偽名と言うのは？」

「うん、僕はマーニュ男爵家の次女を名乗るんだよ」

はぁ、これはセレナが妙な話を吹き込んだせいなのだろうな？
自業自得とは言え、昔の自分に文句を言いたくなるな。

「テッサも、ガイヤール子爵家の長女として入学するんだから、丁度良いよね？」

「そうだな、マーニュ男爵家もガイヤール子爵家も勝ち組だからな」

「かちぐみ？」

「”勝ち馬に乗る”という意味かな？」

「ふーん」

「それで、名前の方は？」

「うん、”タバサ・ド・マーニュ”だよ、良い名前でしょ？」

「ほう、そう来た・・・！？」

思わず自分の反応に驚いてしまった、気の緩みの為か、まともに表情に出てしまった様だ。

「どうしたのスティン兄？　顔色悪いよ？」

「いいや、国王ともなると色々考えることがあるんだよ」

「でも、そうだ！　義姉さんと、キアラさんに話してきてあげるよ。王様も偶には休まないとね」

部屋から駆け出して行きそうなジョゼットに向けて、１つだけ問いかける事が出来た。

「”タバサ”という偽名は誰かから教わったのかい？」

「ううん、何となく思いついただけだよ。それより！　義姉さんの言う事を聞いてゆっくり休むんだよ～」

「慌しい事だな・・・、しかし、”タバサ”か・・・」

そんな言葉が無意識に口から出たが、私の思考は全く別の事を考え始めていた。

・何故、ジョゼットがタバサを名乗ったのか？
・そして、何故、私はジョゼットがタバサを名乗った事を当然と捉えたか？

切欠としては些細な2点だが、非常に重要な事実を含んでいると私の直感が告げている。そう、私の人生の意味自体をひっくり返しかねない程のな。私は、まだ子供だった頃から、歴史（物語）で起こる様な悲劇を避ける為に行動をしてきた筈だった。その流れはトリステイン・ガリアを中心に確かに息づいているのは間違い無いのだが、本当に効果があったのだろうか？

我ながら自分が何を考えているのか分からなくなってくるが、その恐ろしい、本当に恐ろしい考えを止める事が出来なかった。

・私はまだ少年の頃、ガリアの王位継承権争いに干渉した
・その旅の途中で、ゲルマニア宰相から狙われた
・ガリアは歴史（物語）から外れ、波乱はあるものの平和路線を辿りつつある
・時を同じくして、ゲルマニア宰相が、”狂気”とも取れる行動を取り始めた

これは偶然なのだろうか？　ジョゼフ王の持つ筈だった”狂気”をマテウス・フォン・クルークが引き受けたとしたら・・・？　ふと少年の頃心配していた、物語（歴史）の矯正力という考えがふと頭に浮かんだが、ジェリーノさんはやってのけた筈だ。
いや、ジェリーノさんはこうも言っていた筈だ、

「”私”以外の人間が私の思うとおりに動いていると感じてしまってね」

と。”思うとおり”と言うのが、意識してなら兎も角、無意識に考えた事までだったらどうだろうか？

「貴方、お加減が悪いそうですが？」

「ノーラか、いや、少し考え事をしている所なんだ」

「私でよければ、相談相手くらいにはなりますよ？」

私のささやかな拒絶をノーラは無視する形でそんな事を言い出した。ノーラの様子は普通なのだが、多分私の方が普通では無いのだろうな。何時もならば、邪魔をしない様に部屋を出て行ってくれるのにな。丁度良いノーラにあの事を聞いてみようか、今更あの話をするのは気が進まないがな。

「ノーラ、もしかしたら君は怒るかも知れないけど、もしも私がわざと君との婚約を破棄したと言ったらどう思う？」

「？　何をおっしゃりたいのか分かりませんけど、私は今の自分に満足ですよ？　そんな事を悩んでらっしゃったんですか？　ああっ！」

「どうした？」

「あの、義母様から聞いちゃいましたよ？　あの時、義母様がスティン兄様をそそのかして、私を自分好みの女に改造したって」

「ノーラさん？　ちょっと過激な事を言っているね？」（”好みの女”って、夫婦間なんだけどな、でも語弊があるぞ？　私は当時１３歳かそこらだったはずだったんだ、ノーラに至っては・・・）

「もし、兄様と婚約破棄されたままだったら、私はどんな女になっていたんでしょうね？」

「そうだな・・・」

私が、私の知っている”エレオノール・アルベルティーヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール”の姿を語って聞かせると、ノーラは興味深げに聞き入っていた。私がノーラと一度婚約破棄した事だって、もしかしたら・・・。

「そうですか、兄様に出会わなかったら私はそんな悲しい人生を歩む事になったんですね」

「ノーラ、今のは私の想像・・・」

そう言って誤魔化そうとしたが、ノーラの瞳がそれを許していなかった。

「ごめん、ノーラ、改めて聞いてくれるかな？　僕、いや僕たちが転生者だって話は知っているよね？」

「はい、勿論です」

「その前世には、”ゼロの使い魔”という小説が出版されていてね。それ小説のヒロインは誰だと思う？」

「・・・」

「ルイズなんだ」

・
・
・

「そうですか・・・、それで納得が行きました。ミネットもリッテンもバベットも何故か私に、何回婚約破棄されたか聞いてくるのでおかしいと思っていたんです！」

「ノーラにとっての問題点は・・・、そうだね、ありがとう」

自分の人格が他人に故意に歪められたとしたら、普通は絶対に許せないと思うのだが、ノーラはそれ自体を受け入れた上で”今の自

分に満足”と言ってくれたんだろう。本当に出来た奥さんだな。少しだけだが心が軽くなった気がする。

「貴方は、自分の意志で世界が変わる事を恐れ、変えた積りの世界が変わっていなかった事を恐れていますよね？」

「そうだね、自分でも矛盾しているのは分かるよ」

「私自身は、ごく普通の人間だと思います。貴方に助言出来るほど賢くは無いです、悔しいですけど・・・」

ノーラが賢くないとは誰も言わないと思うがね、ただ、現実的な技術者としての考え方をするのは確かだ。

「いいや、ノーラの言葉が私を支えてくれるよ！」

ノーラは、何故か、少しだけ辛そうにしていたが、思い切った様に思いもしなかった提案をしてきた。

「あの人、そう、あの人に相談してみたらどうでしょうか？」

「ノーラ？」

ノーラが”あの人”と言うのは、１人しか居ないが、ノーラがこんな提案をする、いや、させている私が悪いのだろうな。キアラか、彼女が私の言う事を信じてくれるだろうか？

第百四十六話　ラスティン２９歳（タバサ）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

2007

第百四十七話　ラスティン２９歳（彼女の見解）（前書き）

第百四十七話ＵＰします。

2008

第百四十七話　ラスティン２９歳（彼女の見解）

翌日、早速と言う訳では無いが、偶々時間が空いたのでキアラに相談をしてみることにした。さてどうやって話を始めた物だろうか？

「キアラ、少し相談したい事があるんだが？」

「はい、なんでしょうか？」

キアラの様な、現実の中で鍛えられてきたと言える人間に、こんなファンタジーな話をしても良いのだろうか？　いや、この世界は十分にファンタジーなんだがな。

「この世界が仮に、そうだな、物語の中の世界だとしたらどうする？」

「はぁ？」

キアラが心配そうに、私の事を見詰めている気がするが、まあ、これが普通の反応なんだろうな。正気を疑われるのも情けないが、自分が現在正常じゃないという自覚があるから、間違いとは言い切れないんだよな～。（ここで、私は正気だなんて言ったらそれこそだろうな。確かキアラは心理学も齧っていたと聞いた気がするし、妙に嘘を混ぜない方が良いのだろう）

「まあ、どう思われようと構わないけどな、ただ、暫く私の話に付き合ってくれ」

こうして、私の長い話が始まった訳だが、両親やノーラの様に頭

から私の言う事を受け入れてくれると言う訳でもなく、クリシャルナの様に興味津々で色々聞き出そうとする訳でもなく、基本的に聴きに回っているのだが時々思い出した様に質問を投げかけてくるという会話（気分的には診察かカウンセリングとかだろうか？）が続いた。

「分かりました、私に話してくださって、ありがとうございます」

「いや、単に悩み事を並べただけだったんだがな。君には、私の話が信じられたかい？」

「そうですね、信じられたと言うより納得が行ったと言うべきかも知れませんね」

「納得？」

「いえ、少しだけ時間をいただけるでしょうか？」

「構わないが？」

「少し考えをまとめたいものですから、それに冷静に考える必要もありそうです」

「そうか、分かった」

キアラでも直ぐには信じられないか？　いや、納得と言うからには、私の話を信じた上で話を進めてくれるのだろうな。

＝＝＝

そして更に翌日、朝議を中止してまで時間を作って、キアラの意見を聞く事になった。今のままでは、朝議を開いても実りがあるとは思えないから、キアラも反対はしなかったが。

「そうですね、ここから話を始めましょう。ラスティン様の考え方が、この世の中ではかなり特殊だという事は以前から分かっていました。それに、転生者うんぬんの話も確かな実績がありますから、疑う余地は無いでしょうね」

「この世界が、小説の中の世界だという話はどうだい？」

「それは信じられないと言うより、別の可能性があるのではないでしょうか？」

「別の可能性？」

「この世界が、その”ゼロの使い魔”とか”烈風の騎士姫”を元にしているとしましょうか？　ですが、現状はその小説とは異なる展開をみせています。この世界と同一と判断するのはおかしな話ですよね？」

平行世界とか言った概念だな。良く考え付くものだ。

「転生者の意志が世界を変えていると言う話は説明出来るか？」

「さあ、世界がどうやって成立しているかなんて、”始祖ブリミル”にも分からないんじゃないでしょうか？　仮定ですが、この世界が”ゼロの使い魔”を読んでいる人の想いが集まって形成されているとでも考えれば、より強い”想い”を持っている転生者の方々が世界に影響を及ぼしやすいと考えられますが？」

「正解は分からない話だな、確かに・・・」

キアラの仮定は面白いと思うが、確かめる術は無いだろうな。（魔法が普通にある世界では不可思議な現象が起こっても、おかしくはないんだよな？）

「キアラ、私はどうするべきだと思う？　今の仮定が事実だと仮定した上だが」

「そうですね、この言い方は変かも知れないですが。ラスティン様のしたい様にするのが良いのではないでしょうか？」

「私が副王時代にした様にか？」

私はそれで大失敗をした気がするのだが？

「そうです、こう考えてみてください。ラスティン様が、嫌な事を考えてそれが実現するのと、考えていなかった嫌な事が起こるのではどちらがお好みでしょう？」

「ふっ、そうだな。嫌な予感が次々当たるなんて事は考えたくない物だ」

無意識に考えていることが実現してしまったとしてら、手を打ち様が無いだろう。自分の考えていることが実現すると考えてその為に努力をすれば、逆に心から信じられるのかも知れないな。

「この話を他の転生者にした方が良いだろうな？」

「いけません！」

「どうしてだ？　私と同じ様に悩む可能性があるんだぞ？」

「理事長先生はその様な事を悩まれたでしょうか？　先の教皇は？」

「いや、そういう悩みは聞かなかったな」

「それに、もし転生者の方々が世界に影響を及ぼすと知ったら、どういう行動に出るか想像できますか？」

「いや、彼らは・・・！？」

「私たちが、ゲルマニア対応に困っている状態が、他でも起こる可能性があるのですよ？」

転生者達の意図が拮抗した場合か、確かにナポレオン１世に関する限り、傍から見れば不自然に思えるほど彼に優位に事態が動いている気がしないでもない。そうすると、逆にナポレオン１世から見れば同じ様に感じられるのだろうか？　特にゲルマニア国内ではそれが顕著だ、意思が国中に行き渡ってでもいるのだろうか？

「随分難しい舵取りをしないと行けない様だな？　転生者が２０人近く、いや、知らないだけでもっと居るかも知れないのだからな」

「それも間違いですね、転生者を皆殺しにするというなら別ですが、転生者だけを相手するのでは無く、国民全てを巻き込んでしまった方が話は早いと思いませんか？」

「どういう意味だ？」

「転生者の方々には今まで通り、自分の好きな事に集中していただきましょう。私達は、転生者の方々を含む全ての国民を操ると言う表現はおかしいですね、そう、導いていくと言っても良いでしょうね」

殺すまでは行かなくても、マインドコントロールとか物騒な方法もあるのだが、そんな手は使いたくはないし反動の方が恐ろしい。

「世論をコントロールして、転生者達の無意識まで干渉すると言う事なのか？」

「表現は悪いですが、間違いでは無いですね」

考えてみると、キアラの言っている事は、確かに私が副王時代にやっていた事そのままだな。国が良い方向に向かっていると信じればその通りになるという訳だ。私以外の転生者達が、自分の得意分野の事になると周りが見えなくなる傾向が強いから、有効な方法であることは事実だろう。

「キアラ、何故、私が王になってしまったんだと思う？」

キアラにこれを聞くのはおかしい気もするが、ここだけははっきりさせておきたい所だ。キアラが”私がそう望んだからです”などと答える筈も無いがな。（今更だが、あの時キアラに土下座でも何でもして・・・、いや無意味だろうな）

「仮定の上に仮定を重ねるのは嫌いですが、ラスティン様があのままこの国を去ってしまえば、転生者の方々はしなくても良い苦労したでしょうね？」

「ははははっ、そうだな、確かにその通りだ」

あの傍からみれば喜劇的な反乱の事は、少なくともエルネストとルネは知っていた筈だ。エルネストにとっても新首都建設中のルネにとっても私の退場は望ましくないのは確実だ。私がいくら頑張っても、2対1では勝てなかった訳だ。

結局、色々悩んだがそれ自体も1人相撲だった訳か。仮定の話だと言う事は承知だが、それでも確実に気力が戻って来たことが感じられる。転生者の同胞達が苦労をしないかわりに、私が妙な気苦労をした訳だし、上手くバランスがとれているじゃないか？

「キアラ！」

「はい！」

「ゲルマニアを陥落（おとす）させるぞ！」

この面倒な状態を改善する為に、ナポレオン1世君には退場してもらおう。私達のトリステインの為にな！

「あの・・・、先日ご自分で時期尚早だとおっしゃったのでは？」

「・・・、そうだったな」

締まらないな・・・、確かにそうなんだが・・・、もう少し言い方があるんじゃないかな、なあ？

「それで準備は何処まで進んでいるんだ？」

「そうですね、こちらも訓練中ですし、各国との調整もあります。1年はかかるでしょうね」

訓練ねどんな訓練をしているやら。他国との調整は、これはどうしようも無いだろうな。連合してとは言え他国に攻め込むとなればそれなりの準備が要るのは確かだ。

「どちらの準備が早く整うかの競争だな。それにしても、1年か、その頃にはルイズが”平賀才人”を召喚しているんだろうな？」

「丁度良いですね、その”平賀才人”という少年が召喚されるのか、別の存在が召喚されるかで、この世界への影響度が試せるかも知れませんよ？」

「ああ、ルイズが物語と違った成長をしているし、転生者達にその事を話しているのは確かだからな」

「無意識の部分が強ければ”平賀才人”という少年が召喚される事になります」

キアラなとっては、物語の始まりもただの実験でしかない訳だ、参ったな、全く。しかし、”平賀才人”が召喚されなければ、転生者達の無意識も自ずと違った考え方になるか・・・？

第百四十七話　ラスティン２９歳（彼女の見解）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

2017

外伝二十二話　糧（前書き）

外伝二十二話ＵＰします。

また暫く外伝が続きます。しかも、結構重要な内容ですよ？

2018

外伝二十二話　糧

「はっ！」

最近良く見るようになった夢から、突然覚醒すると少しだけ手が汗ばんでいるのに気付いて、苦笑する事になるのは最近では良くある事だね。悪夢を見たと言うわ訳では無いのだけど、最近になって前世の夢を頻繁に見るようになったのは何かを暗示している様で落ち着かなかったけど、今では悟ってしまった。

死期が近いと感じるのはどんな物かと思っていたけども、私の様な立場の人間が取り乱す訳にはいかない。おかしな話だけれども本当に後悔の無い人生を送ると死に対する怖れを感じないとは思わなかった。信者に対する説教などで”死は救済である”なんて説いておいて、本人が”死”を怖れていては、私のやって来た事が意味を失いかねないから、これも”幸運”なんだろうね。

「猊下、お目覚めでしょうか？」

「ああ、ヴィットーリオか？　構わないぞ、どうせマザリーニだろう？」

「はい、お急ぎの様子でしたので」

「教皇代理としては当然だろうな、宗教庁との行き来は大変だろうが、暫く我慢してもらうしかないだろうな」

それ程長い事ではないだろうしね。マザリーニも優秀なのだが余分な苦労を背負い込む所があるから、苦労が耐えないんだろうね。

彼があのままトリステインに残っていた場合と、ロマリアに戻って来た場合ではどちらが苦労が多いのだろうね？

原作（歴史）通りならば私の下には戻って来ないと思っていたから、その帰還を喜ぶのと同時に自分の”幸運”について少しだけ考えを改める気になったりもするね。

この世に生まれてからもう７０年以上が過ぎようとしているけれども、私ほど恵まれた人間は居ないんじゃないかとさえ思う事が、長い一生の中に何度もあった事が思い出されるよ。私の人生にも何度か波乱があった訳だけれども、最初で最大の物だったのが、”夢”に関するものだったと言うのが”運命”を感じさせるね。

＝＝＝

当時、まだ１０歳そこそこだった私は”神童”と呼ばれて天狗になっている愚かな（そして滑稽な）少年でしかなかったね。元々生まれが悪かったのだろうけど、周囲の大人達も私を利用しようとおべっかばかりだったからそれも無理はなかったんだろうね。

公にはされていないのだけれど、ロマリアというか、宗教庁には教皇家とも言われる血筋を守る”ブリミルの墓守”の始祖フォルサテの直系の家系が３家存在していて、私のタルキーニ家はその中でも当時最も有力だったんだ。ヴィットーリオのセレヴァレ家もその内の１つだけれども、本来なら牽制しあう筈の３家が協力関係を結ぶのは珍しい事で無かったんだろうね。

元々、表向き清廉潔白を標榜する宗教庁だったから、公に出来ない”世襲”と”婚姻”がこう言う事態を招いたと言うのは想像をするのは難しくない。アルファーノとタルキーニが組んで、優秀な子供を次期教皇に推して同時に目障りなセレヴァレを潰してしまおうと企んだのだけれど、その”優秀な子供”が私だった事が彼らには

不幸だったんだろうね。

当時の私は歴史や神学を始め、経済なんていう宗教とは関係も無い学問まで１０歳で修めた優秀だけれど扱い易い普通の子供だったんだ。そうあの晩までは・・・。

「これはもうダメかもしれないな、他の子供を見繕った方が良いかも知れん」

「アルファーノの遠縁に優秀なのがいるらしいじゃないか？」

「だが、アルファーノばかりに権力が集中しては、我が家としても面白くないぞ？」

「そんな事はその子供を丸め込んでしまえばどうにでもなる。全く、この子にかけた金が無駄になるとはな！」

「そうね、こんな事になるなら産むんじゃなかったわ！」

ほとんど意識は無かった筈なのに、特に私に優しくしてくれた両叔父や両親の言葉だけは、今でもはっきりと思い出すことが出来るけども、それに対する”怒り”は時間と共に磨耗していった。彼らも既にブリミルの御許に行ってしまったし、前世の記憶もこの年齢になって夢を再び見る様になるまで薄れていったのだから、時間とは偉大な物なんだね。

暫く続いた私の昏倒状態が完治すると”彼ら”の態度は一変していた。私に対する期待は、私が見たことも無い子供に向けられていたんだ。それ自体は私にとっては幸運だったね、あんな見え透いた世辞は、それこそ世間知らずの子供にしか通用しなかっただろうか

らね。

前世では宗教学を専攻して大学院に進んだ私だったけれど、前世では苦労人だったから人間関係に関しては人一倍敏感だったんだ。両親に死に別れて父親の友人の日本人に引き取られたのだから、自然に身に付いた感性（知識というのが正しいんだろうか？　意識すれば思い出せるけれど、それに伴う前世の私の感情と言う物は感じられなかったのだから）だったけれども、それが当時の私には自分を支える唯一の物だったね。

＝＝＝

普通の子供だったら、両親に見捨てられてしまえばどんな人間になったか分からないけれど私には、明確な目的が出来ていたからそれだけを見詰めていた。いいや、違うね、両親に見捨てられたという現実から目を逸らす為に必要だったのがそれだったんだろう。

前世で一度両親を失っているからこそ、そういう対応がとれたんだと思う。記憶にある両親とそして私を引き取って育ててくれた義理の両親に感謝しなければならないんだろうね。そうでなければ、私はブリミル教の破壊者としてしか名前を残す事が出来なかっただろうから。

私の前世の記憶では、私はキース・ガードナーというイングランド生まれの日本育ちの青年だった。８歳の頃両親を事故で亡くして、身寄りが無かった為に父の友人の日本人の義両親に引き取られたんだけど、それが前世の私だけでは無く今の私にも影響を与えているんだ。

亡くなった父はイングランド国教会の神父で、ローマ・カトリックともプロテスタントとも一定の距離を保ったある意味特殊なキリ

スト教徒だった。そして私が育ったのは宗教的にはごった煮と言っても良い日本と言う国だったのも宗教に対する私の見方を客観的に留めていてくれたんだろうね。

義父の勧めで、前世の私は一貫してミッションスクールに通う事になった。普通の学校に通うよりは外人に対する抵抗が少ないだろうという義父の心遣いだったんだろう。それほど宗教色が強い学校では無かった筈なんだけど、所々にキリスト教的な教育が感じられたという記憶が残っていて、それが私にキリスト教を学ばせる起因になったらしい。

少し前なら、極東地域、それも日本でキリスト教の資料を集める事は難しかったらしいけど、ネット社会のお陰で困る事は無かった。些か偏った意見も多かったけれど、前世の私はそれを冷静に分析できる程度には理性的だった。ただし、中世のキリスト教がやらかした数々の悪行については、概ねどの意見も同意出来たよ。

表現が難しいけど前世の記憶は、ガラス一枚隔てて他人の記憶を眺めている様な感じかな、ただキリスト教の悪行という点に関してはダイレクトに今の私に感情が伝わってくるのが不思議だったね。

そして、その前世で知ったキリスト教の悪行に酷似した出来事が、今、目の前で行われていて、その上自分自身がその片棒を担がされそうになっていたとなると、呆れるを通り越して怒りを感じた程だったな。その怒りの矛先は宗教庁という組織そして、愚かだった自分自身に向けられた物だったんだろう。

前世の記憶を思い出して以来、私は以前に増して学問にのめり込んで行った。自分に対しての戒めの意味もあり、この世界に関しての無知を自覚したからだった。この世界が前世のとある友人から勧められたライトノベルの世界そのものだという事は直ぐに気付いて

いたけれど、それを直ぐに信じるほど素直では無くなっていたからなんだけどね。（一度騙されると人間と言うのは用心深くなるものなんだね）

「ジェリーノ、精が出るな」

「父上、お帰りなさい」

「お前は身体が弱いんだから無理はするなよ」

「はい、ありがとうございます」

とある日の父との何気ない会話だったけど、私には危機感を抱かせるに十分な会話だった。そもそも殆ど家に戻らない父が帰ってくる事自体おかしい話だったし、何気なさを装っている父の視線は私が読んでいる書物に注がれていたのには気付かない筈もない。

この男は、捨てた筈の駒が盤上で動き回るのを不愉快に感じて、偵察に来たと言う所なんだろう。以前の私では気付かなかった事だろうが、気付いてしまえば露骨過ぎる行動だったね。もしかしたら父が私を再び駒として扱いたいと思ったのかなんていう幻想も思いついたけれども、それにしては時間が経ちすぎていたし、駒に戻る積りも無かった。

＝＝＝

身の危険を感じた私は、行動を控えるようになったんだけど、自宅に居る以上は監視が無くならないのも事実だったね。家を出るのが早いのは分かっていたんだけど、当時のまだ若い（幼いとは言いたくは無いけどね）私にはその一歩を踏み出す勇気が無かった。

その一歩を後押ししてくれたのは、意外な事にヴィットーリオの

曾祖母に当たるセレヴァレ当主だったのは、皮肉な物だったね。更に皮肉なのは、セレヴァレ当主ロザーリアとの出会いは私自身が親族（認めたくは無いけれど、両親のどちらかだろうね）からの刺客に命を狙われたのを、セレヴァレの”密偵”に助けられた事が切欠だったと言う事なんだ。

2025

外伝二十二話　糧（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／９／１１
あるかあら－＜あるから
に修正

外伝二十三話　逃走劇（前書き）

外伝二十三話ＵＰします。

2027

外伝二十三話　逃走劇

「チッ！」

それは突然だった、何事も無くいつも通りに自室に戻って、普通に横になっただけだった筈なんだけど、気付くとベッドの直ぐ横で多分2人の人間が格闘を始めていた。どう言う事なんだろう？

「何？」

半分寝ぼけた僕が間の抜けた反応をしている間に格闘の決着がついたみたいだ。どうも頭の中に靄がかかっているみたいだ。頭を振ってみても意識がはっきりしない。

「大丈夫？　薬が効いているみたいだから、安静にと言いたい所だけどそうも言っていられないみたいね！」

女性？　いや僕より年上だけど、女の子かな？　ぼんやりと考えていたんだけど、手を引っ張られてそのまま部屋の窓から外へ飛び出す事になったね。ちなみに僕の部屋は2階だった。当然僕は重力に逆らう事が出来ず殆ど頭から地面に突っ込む事になったんだけど、身体を動かす事は得意じゃないし、薬ってこの少女も言っていたから、仕方が無いよね？

「何してるのこの愚図！　早くしなさい！」

不当な評価だと言いたくなったけど、打ち付けたあごが言う事を利かない。薬の作用なのか痛みは感じないけど後が怖いな。上を見上げると、僕の部屋に明かりが灯って慌しく人が行ったり来たりし

ているのが見えた。これで安心だと思ったんだけど、少女はそのまま、またもや僕の手を掴むと近くの庭木の陰に滑り込んだ。（そしてまたしても僕は顔から妙な格好でヘッドスライディングをする事になった、この娘は僕の顔に恨みでもあるのかな？）

暗闇の中で息を潜めていると屋敷の裏門の方で突然火の手が上がった。一斉に人々が裏門に向かう中、僕達は悠々と正面門から外へ逃げ出すことが出来た。手を引っ張られるままに付いて行っただけなんだけどね。一応混乱が治まるまでは成り行きに任せようと方針を決めたからなんだけど、その選択が正しいかは当然分からなかったよ？

屋敷から少し離れた通りの、更に裏通りに一台の馬車が停まっていて、私は少女に引っ張り上げられる格好でその馬車に乗り込む事になった。そこで一息ついた所で、僕の意識は一時途切れる事になったんだ。後で”彼女”に、”急に意識を失ったから驚いたわよ、もう少し身体を鍛えた方が良いんじゃない？”とか言われたけど、普通に考えれば面倒を避ける為に魔法で眠らされたんだよね？

＝＝＝

「全く、神経が図太い坊やだね？」

枕元で、こんな事を大声で言われれば、普通に目が覚めると言う物だけど、そこは僕の部屋よりも豪華な部屋で、多分客間か何かだと思う。ただし、僕がそんな事を考えていられたのは短い時間だった、僕の目に前には”部屋”などよりよっぽど関心を引く”女性”（個人的には女傑だと感じたね）が椅子に座っていたからだった。

その女性を例えるなら獰猛な肉食獣といった所かも知れないね、

虎を想像させるけど、ここには居ないんだよね。（東方には居るのかも知れないけどね）

「おや、お目覚めかい？」

「イタタ・・・」

「軟弱だね～、治療もさせたんだから痛がるほどじゃないだろうに」

うん、この女性は、”彼女”の母親なんだろうね、何となく想像が出来てしまう。それに、僕はこの母娘とは相性が悪いんじゃないかとさえ思えるけど、どうなんだろうね？

「貴女は？」

苦労して口を動かして、それだけ尋ねる事が出来た。

「おや？　坊やは私の事を知らないのかい？　私の家を滅ぼすために嬲けられた犬だったんだろう？」

こう言われてしまえば、この女性が誰なのか想像がついた。”カルラ・セレヴァレ”夫を失った後でもセレヴァレを支え続けているセレヴァレの現当主だった筈だけど、成る程と思わせる貫禄があるね、今の僕では全く相手にならないと思わせる所がある。あのまま僕が踊らさせていたら、この女性と直接対決する事になっていたんだな。

「・・・」

「その表情だと、分かったらしいねぇ？」

少しだけ自分の辿ったかも知れない未来を想像したけれど、簡単に暗殺とか、不名誉な廃位とかしか想像出来なかったよ。セレヴァレにはそれが出来るし、だからこそ僕の親族達がセレヴァレを潰そうと画策しているんだからね。

「どうしたね、怖くなったかい？」

「僕は今どういう立場に居るんでしょうか？」

僕としては、当然の質問だった筈なんだけど、”カルラ・セレヴァレ”はつまらない事を聞く物だと言った表情を浮かべて、それでも僕が眠っている間の経過を教えてくれた。

「タルキーニの屋敷が何者かに襲撃され、ジェリーノ・タルキーニが行方不明、多分殺されたと推測されるそうだよ。それを実行したのが、セレヴァレの手の者だってんで面倒な事になっているよ。息子が行方不明だと言うのに、捜索もしないくせにねぇ？」

セレヴァレ当主の目には哀れみが見えたのは気のせいじゃなかったんだ。あの人達は最終的な僕の”使い道”を決めたんだな。どうやら僕には帰る家が無くなってしまったらしい。

「なんて顔をしてるんだい、坊やは無事に”家”に帰れるんだから、もっと嬉しそうな顔をしなよ」

「へぇ？」

「鈍いね、そんなんで良く私に逆らおうなんて思ったもんだ。筋書きはこうだ、”セレヴァレ”の手の者を名乗った誘拐犯を汚名返上

の為に”セレヴァレ”自身が捕らえて処刑した。”ジェリーノ・タルキーニ”は運よく生き残っていたので、お返ししますってね？」

「はぁ？」

「全く、こんなお坊ちゃんだとは思わなかったね、あの子の見る目もまだまだだね」

「あの？」

「まだ分からないのかい？　私達は坊やをスパイとしてタルキーニに送り返すんだよ」

「何故、僕が！」

「頭を冷やしな、坊やは身内に殺されかけたんだよ？」

「でも、スパイなんて」

「そうだね、坊やには無理そうだね」

セレヴァレ当主の口調は揶揄を含んでいるけども、全く否定が出来なかった。前世でも、この世界でも僕はぬくぬくと育ってきてしまった事を思い知らされた。それは、敵からも味方からも見捨てられてしまった事が証明しているんだろうな・・・。

色々考え事をしている間に、セレヴァレ当主が若返っていた？
あれ、この娘、屋敷で見た事があったかな？

「折角人が命がけで助けてあげたのに、何を呆けているの？」

「君は確か、レアだったよね？」

何度か、屋敷で見かけたのは間違いない、台所仕事を手伝っている普通の女の子に見えたんだけど、そうでは無かったんだ。つまみ食いを見つかった事から少しだけ話すことがあって、名前まで知る仲にまではなっていたんだけど、この娘がスパイだったなんて信じられない。１５歳の僕より小柄で、振る舞いも優雅だったし、うん、何より可愛かったからね。

「馬鹿ね、偽名に決まってるでしょ！」

「それに随分と念入りに猫を被っていたんだ・・・」

僕の知っているレアは恥ずかしがり屋で、いつも小声でしか話さなかったから、殆ど別人に見える。

「あら？　あれも私よ、リアーナ・セレヴァレとしてはあちらが本性なのかも知れない位ね」

「本当に？」

「命の恩人の言葉を疑うの？　こっちだって命がけだったんだけど」

「そうだね、ごめん、じゃないね、ありがとう」

「うん、それで良いわ」

「でも何故僕なんかを助けてくれたんだい？」

「分からない、本当に？」

彼女にはすまないけど、本気で理解できなかったね。何せ、前世でもこの世界でも聖職者に近いからその、女性の好意というのを良く理解出来ないんだ。

「本当に期待外れだったわね、何で善行を積んで叱られなくちゃいけないのかしら？」

「あれ？」

「何？」

「いや、何でもないよ」

気のせいだったらしい、うーん、やっぱり女の子は苦手だ。まあ、”レア”なら兎も角、”リアーナ”はちょっと遠慮したいと思っていたから丁度良いかもね。

「それで、ジェリーノ様はどうするお積りですか？」

「！？」

「何驚いてるの、私が”レア”だって証明しただけでしょう？　友人の将来を心配するのが変かしら？」

女性の心理と言うのは不可解だね、でも友人と思ってくれていたのは嬉しかった。

「それでどうするの、これから？」

「えっ？」

「あのねぇ、貴方、自分の命がかかっているのが分かってる？」

「勿論だよ」

そう言っても、実感が無いのは事実だった。

「本当に？」

そう言いながら彼女がとった行動は、本当に信じられない物だったけれど、僕には言葉を発する事が出来なかった。何せその時僕は首筋をナイフで切り裂かれて、文字通り絨毯の上でのた打ち回っていたんだから。

外伝二十三話　逃走劇（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

外伝二十四話　（異端審問官、え？）（前書き）

外伝二十四話ＵＰします。

外伝二十四話　（異端審問官、え？）

「分かったかしら？」

再び、目を覚ました僕にかけられたのは、”リアーナ”の冷たい声だったけど、身体の自由がきけばその場から逃げ出したかった。想像を絶する痛み、首筋から流れ出る血の暖かさと匂い、そして徐々に冷たくなっていく身体、”本当”の死を目の前にした僕は、赤子の様に震えるている事しか出来なかった。

「馬鹿ね、命がけで助けた人を本気で殺す訳無いじゃない」

”リアーナ”はそう言って、”レア”の様に微笑んだけれど、僕にはそれがとても恐ろしい物に見えた。”リアーナ”には僕を殺す事位簡単で、僕が期待外れならば本当に簡単に処分出来る事を証明して見せたんだから。

「これを見て、ここ」

そう言って、リアーナがその白い首筋を指した、いつも襟の長い服や、スカーフの様な布を巻いていて知らなかったけれど、そこには大きな切り傷の痕が残っていた。そんな時にも関わらず、ついその細い首筋に見入ってしまったけれど、リアーナにはそんな事はどうでも良かったらしい。

「私も同じ事を母にされたのよ、それも１３歳の誕生日に！」

「なんで？」

「そうね、死と言うものを身近に感じるのに一番早いからじゃないかしら？」

何でも無い様に、リアーナが言うのを見て、恐ろしさが増したのが分かったけれど、同時に僕に欠けている物も分かった。何故自分だけが死なない筈だ、死んでも次があるなんて思って居られたんだろう？　前世の記憶、そんな物が絶対的な死の恐怖を忘れさせてくれる筈が無い。（”キース・ガードナー”の記憶があっても、僕が”ジェリーノ・タルキーニ”である事に変わりはないし、例え他の誰かが再び私の記憶を持ったとしても、それは”ジェリーノ・タルキーニ”でも”キース・ガードナー”でもない別の誰かだ！　小説の世界だから、主人公は死なない？　馬鹿か僕は！）

「ジェリーノ、泣いているの？」

「あ、あり・・がと・う」

「しゃんとしなさい、男の子でしょう！」

「・・・、君は”お母さん”みたいだね」

「・・・、もう一度死ぬ様な目に会いたい？」

本気で殺されそうな目で睨まれたけど、今回は逆に怖くなかった。僕が”お母さん”と言ったのは理想のそう前世では若くして亡くなってしまった”ｍｏｍｍｙ”の意味だったんだけど、リアーナには”あの母”だと思ったんだろうね、確かに怒るはずだね。

「まあいいわ、それで貴方はこれからどうする積り？」

「少しだけ、考える時間が欲しい・・・」

「そう、母様に伝えておくわ。何だったら友人として相談に乗りましょうか？」

優しく笑ってくれたんだろうけど、やっぱり笑顔の方が怖いとは言えなかった。

＝＝＝

それから丸1日かけて自分がどうすべきか考えた。前世とこの世界に生まれてから詰め込まれた知識を総動員する事になったけれども、こういう頭の使い方に慣れていなかったのか、寝る前には知恵熱が出る程だったね。（知恵熱か、乳児の病気だけど、生まれ変わった僕にはある意味合っているかもね）

「丸1日考えた結果が、”異端審問官になる”。ふざけているの？」

「まさか！　生き残る為に必死で考えたんだよ！」

「ふーん、あっ、そう言う事ね。いいわ、でも、母様の力も借りたくないんでしょうね」

リアーナが詰まらなさそうに聞いてきたけど、一晩かけて考えた事を簡単に納得しないで欲しい。

「いいや、口利きだけは頼もうと思うよ」

「そう、いいわよ。私から伝えておく。良い表情になったね、ジェリーノ」

「そうかな？」

彼女にそう言われると悪い気はしないね。

「うん、私が何故貴方を助けようと思ったか、本当の所を教えてあげようか？」

「友人だからじゃないんだ？」

「友人と言うより、同志だと感じたからなの」

一番リアーナらしい、真剣な表情で変な話を始めたよ？

「同志？」

「貴方は宗教庁が嫌いでしょう？」

「そうだね、そんな愚痴も言ったね」

「誤魔化さないで！」

「うん、嫌いだ。今回の事でもっと嫌いになった」

「私も、母様も同じよ」

「どうして、何て聞くまでもないか、お父様の話だろうね」

「別に、今の教皇猊下を恨んではいないわよ？」

公には出来ない話だけど父親が教皇の座を争っている時に”事故死”させられた割には、さばさばと言った表情だけど、それは表面上なんだろう。ただ、お飾りの教皇には興味が無いというのも本当なんだろうね。猊下がしっかりしていれば、教皇3家の争いなんて起こらなかったんだから。

「しかし、異端審問官ね、苦労するわよ絶対！」

「だろうね・・・」

「まあ良いわ、頑張って生き残りなさい。長官にでもなったら協力を頼む事にするから」

「ははははっ、頑張ってみるよ」

全然励ましになっていないよね？　もう少し期待を滲ませてくれれば良いのに。

＝＝＝

異端審問官それは、”ブリミル教を裏から支配する闇の存在、教皇直属の組織でその権限は時には枢機卿をも凌駕する。疚しい所がある教徒は、その影さえも恐れる。彼らが一度異端と断じれば、ブリミル教徒として最悪の死だけが待っている”と言うのは随分昔の話だったりする。

何時からか、異端を研究すると言う名目で当の審問官たちが異端すれすれの書物を書き出したり、妙な研究を始めた事からその存在が本当に隠される事になったんだよね。異端審問の実務は聖堂騎士（パラディン）隊に引き継がれたんだけど、その権力は宙に浮いたままだった。（

何でも、廃止の話が出た時の異端審問官の1人が、強行に主張した枢機卿を道連れにしてこの世を去った事から、怖がって誰も手を出さなくなったらしいけど、狂信者がのさばるよりはマシだよね？）

ちなみに、裏で聖堂騎士隊（パラディン）等の軍事を統括するのが”セレヴァレ”、経済が”アルファーノ”、政治が”タルキーニ”という役目なんだけどね。”セレヴァレ”が目障りな訳だね。

僕が異端審問官を目指したのは、自分の命を守る為に3家の権力の及ばない所と言う点、そして、自分が正しく異端だという事が分かっているからだった。前世の知識を隠し切れれば問題無いと高を括っていたけれど、殺されそうになってから少しだけ慎重になったのかも知れない。それに、今の宗教庁の在り方が気に入らないなんて言えば、普通に異端認定されてもおかしくは無いからね。

「良くこんな所に来る気になったね？」

そう言って僕を向かえてくれたのは、意外に常識人に見えるパオロと言う人物だったけれど、聞けば彼が異端審問官の長官だった。何でも一番暇だったから押し付けられたそうだ、笑って教えてくれたから冗談だと思ったんだけど、内情を知るとそれが本気なんだと分かった。

＝＝＝

何故かって？　僕が審問官になった事で一番暇な人間が、僕になったんだ、分かるよね？

「パオロさん、僕が”長官”なんて本当に大丈夫ですか？」

「何故だい？」

「何故って・・・」

「君がここに来てもう1年だし、大体事情は分かっているんだろ？」

自分の時間が増えるのが嬉しいのか、妙に機嫌よく答えてくれるのが、逆に不気味なんだよね。

「それは、”長官”何て言っても単なる小間使いの様な物だって分かりましたよ」

「こりゃ厳しいな」

「1年も”小間使いの助手”をやらされましたからね！」

「それもそうか！　外部との交渉が多いからね、はったりが必要なんだよ」

異端審問官たちはその点では異常に優秀なんだ、僕も普通に審問官の服装で町を歩くと人々が避けて通るんだよね。あれは気持ち悪いから外出時は出来るだけ普通の僧衣にしてるんだ。普通に奇行に走る審問官も居るから怖れられているんだろうね。廊下の真ん中でいきなり何か書付を始めるなんて珍しくも無いんだけど、邪魔をするとこっぴどく叱られるんだ。

異端審問官の実態を知らない人は普通に怖がるし、知っている人は極力関わらない様にするのが、はったりに現実味をもたせているんだろうね。異端を審問する事に関しての権限は残っているんだから触らぬ神にと言う奴らしいね。

「いえ、それは分かるんですけど、そもそも、何故僕がココに受け入れられたんでしょうね？」

「ああ、気付かなかったんだね？　一応面接をやったよね？」

「はい、形だけでしたね？」

「いいや、意味はあったよ？　あの面接の部屋を覚えているかな？」

「何だかごちゃごちゃした部屋だったのは覚えています」

「あの時、部屋に入った君は、壁の飾りを見て驚いていたね？」

あの時？　緊張していて覚えていないけど？

「えっと。ここにもあった筈なんだけど、あれ？」

そんな事を言いながらごそごそと机の引き出しを漁っていたパオロさんが引き出しから取り出したのは、明らかに軍用拳銃と思われるゴツイ拳銃だった。思わずギョッとしてしまったけれど、あの面接の部屋の壁にはライフルが、それも大きな照準器付きのが飾られていて驚いたのを思い出した。

「これが何だか分かるよね？　君にも」

「はい、でも・・・」

面接の目的は、僕の人柄とかありふれた物じゃなくて、”異端”に対する僕の対応を見る為の物だったんだ。あの場で僕が見た物は

不味い物ばかりだったんだろうね。結構書物の類が多かった気がしたけど、”禁書”の類だったんだろう、そう見る人が見れば驚くような。

「君はこれが何だか分かったし、それを隠そうともしなかった、だからこそ同志として迎えたんだよ」

「そうだったんですね、甘く見ていました」

「君は”セレヴァレ”の紹介でここにやって来た”タルキーニ”の人間だからね、特に念入りに歓迎したよ」

「長官助手と言うのは建前で、監視されていたんですか？」

「そう見えたかな？」

この1年を振り返ってみたけれど、結構自由に動けた気がする。審問官の先輩達の研究を邪魔しなければ注意もされなかった。

「いいえ、どういう事ですか？」

「まあ、面倒だったからね。長官としては格好だけはとっておかないといけないし」

「僕は疑われていたんですか？　信用されていたんですか？」

「そんな事はどうでも良いんじゃないかな？　僕たちは君を受け入れたんだからね」

実に変わった人達だったけれど、僕は先輩達を気に入っているし、

先輩達も受け入れてくれたらしい。小間使いも良いかも知れないね。生き残る為にココに来たんだけど、意外に悪い選択じゃなかったんだと思う。（そうだ、僕が長官になったと知ったら、リアーナはどんな顔をするかな？）

「これで、僕も自分の研究に集中出来ると言う事だよ、編纂途中の資料の山が僕を待っているんだ！」

本当に嬉しそうだね、僕の方は、これから1人で雑用をこなす事になると思うと気が重いんだけどね。

「それで、パオロさんは何を研究されているんですか？」

「ん？　話した事が無かったかな？　歴史さ！」

ああ、確かにパオロさんと宗教庁の歴史について話すことが多かった気がする。でも歴史が異端？、パオロさんは僕が常識だと思っている”歴史”に否定的だったから、その辺りなんだろうね。

外伝二十四話　（異端審問官、え？）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／９／１１
ここにもたった一くここにもあった
に修正

外伝二十五話　（説教）（前書き）

外伝二十五話ＵＰします。

外伝二十五話　（説教）

そんな感じで、数年が経ったんだけど長官の仕事を押し付ける後輩も現れず、僕は長官と言う名の小間使いのままだった。

「パオロさん！」

「うーん」

「パオロさん！！」

「ふーむ」

「2回呼びましたからね！」

そう断りながら思い切って手に持った棒（結構太い）を、パオロさんの頭に振り下ろすと、”ゴン”という鈍い音がしてパオロさんがひっくり返ってしまった。さすがにやり過ぎだったかな？　肩を揺するとか、薄い本で叩くとかではもう効果が無いんだよね。（この驚異的な集中力、僕に対してのスルー能力は何処から来るんだろう？）

「そうだ、宗教庁に無いなら、他の王家から取り寄せれば良いんじゃないか！」

あ、復活した。まだ甘かった・・・じゃない。

「パオロさん、ご飯の時間ですよ」

「もう昼メシか～」

「ちなみに用意したのは夕食ですけど？」

夕食を摂るにも遅い時間なんだけどね、夜食には少し早いかな？

「何時の間に、僕は昼メシを食ったんだ？」

「貴方は痴呆ですか？　昼ご飯に手を付けなかったからもう片付けましたよ！」

「何！　そんな罰当たりな！」

「大丈夫です、付近には恵まれない人々が多いですから」

「そうか、さすがは私の後継者だな」

こんな調子だ、以前はもう少しまともだったのにね。ただ、概ね審問官の先輩達の行動はこんな感じだ、確かに長官の役目は大事だね、命に関わるから。

「なぁ、ジェリーノ？」

「ダメです、嫌です、お断りです、さっさとご飯を食べて寝ちゃって下さい」

「まだ何も言ってないだろ、横暴だぞ！」

この話の流れだと、碌な相談（或いはお願いと言うか要求？）じゃないのは経験上分かっているんだ。この人との付き合いも長いか

らね。

「良いから、聞いてくれ。歴史の長い王家、特に”三国”の城から、古い書物もらえないかな？」

「無理に決まってるでしょう。それに、他国の書物なんて何に使うんですか？」

「本当の歴史を知るには、検閲済みじゃない資料が必要なんだよ」

検閲か、実際焚書とかあったらしいからね。まあ、前世でもこの世界でも、権力を握った聖職者がやることは同じらしい。都合が良い歴史だけが残されて行くんだ。気に入らないね、本当に！

「でも、この国にだって古い書物位あるでしょう？」

「無いぞ？」

「へぇ？」

「無いんだよ、１８００年前以前の資料は基本的に残って居ないんだ。”元気な野菜の育て方”とか残してどうするんだよ！」

その頃の教皇が宗教庁の力を上げる為に、何かやったんだろうね。ちなみに、この世界では普通に千年前の書物の原本がそのまま残っている事がある。（魔法の力は偉大だね）

「そうなんですか？」

「そうなんだよ、全く、貴重な書物を焼き払った奴らこそ異端だと

思わないか？」

「それには同意ですね。でも、他国にだって残っていない可能性が高いんじゃないですか？」

「そうかな？」

でも、確かトリステインの王立図書館には魔力を帯びた古い本とか残っていたんだった。だけど、パオロさんが目を付けたのはそこでは無かった。

「始祖の祈祷書って何が書かれているんだろうな～」

その発想に驚いたけれど、確かに確実に存在する古い本だった。絶対に読めないと思うけどね。

「そんなのもらえる訳ないでしょう、教皇猊下が頭を下げても、借りられるかどうか・・・」

「そうか、分かった。お前教皇になれ！」

気軽にそんな事を言うパオロさんだったけれど、僕は心臓を鷲掴みにされた気分だった。あの前世の夢を見てから、僕は心の中で”教皇”になりたいと思っていたんだから。そう、宗教庁を壊して全く新しい存在にする為に！

でも現実は厳しい物だね、人形としての僕には教皇の道が用意されていたけれど、人形で無くなった僕にはその道が閉ざされていたんだから。それどころか・・・、駄目だ暗くなってしまう。

「なんだ、その気になったのか？」

「僕が、教皇になる為に産まれ、育てられたと言ったら信じますか？」

「別に驚くことじゃないだろ、”タルキーニ”はその為に存在するんだからな」

「そうでしたね、でも僕はその道を閉ざされた人間です」

「お前・・・」

今まで隠していた事を、どうして素直に話すことが出来たのか疑問だったけれど、意外にパオロさんは聞き手として優秀だったと思う。一度もした事がなかったけれどこれが、”懺悔”をしている人間の気分かも知れない。

「そうか・・・」

「ただ生き延びるだけの存在なんですよ、僕は。滑稽でしょう？」

「ジェリーノ・タルキーニ、そなたは生まれてきた事を後悔しているのかね？」

明らかに口調の変わったパオロさんがこう尋ねてきた。

「そうかも知れません」

「それでも、今、そなたは生きているな？」

「はい、死ぬのは怖いです」

「我々にとって死は恐怖であり救いでもある、そう教わらなかったかね？」

「・・・」

そんな言葉を教わったのは随分昔だった、あの頃は心からその妄言を信じる事が出来たんだった。死んでも天国や地獄に行けないのは自分自身が良く分かっている。

「そうか、それで良いんだ」

「えっ！」

「人というのはな、悩み、苦しみ、嘆き、その果てに何かを成し遂げた時にようやく救いがもたらせるのだよ。何も成し遂げていない者が救いを求めないのは当然なのだよ」

「・・・」

「そなたは何を成し遂げたい？」

「それは・・・」

「ならば問おう。何故に、”教皇”と言う言葉にそれ程動揺する？生き延びたいと言いながら、何故にロマリアに留まる？　何故”セレヴァレ”とのつながりを絶とうとしない？」

「それは・・・」

「何故、そなたが教皇を目指してはならないのだ？　もしそなたが負けたとしても、それが何かを成し遂げた事にならないかな？」

「！？」

「このまま一生、何も成し遂げる事無く、生き延びる事を続けるだけの一生を過ごすのか？　それでそなたに救いは与えられると思うか？」

「いいえ・・・」

「それでは、そなたはどうする？」

「目指します、僕がなりたい者を、教皇を！」

「そうか、そなたの前には幾多の苦難が待ち構えて居るだろう。挫けるな、そうれば何時かは始祖の御許への扉は開かれるであろう」

「はい！」

「そなたが教皇になった暁には」

「はい？」

「例の書物の件頼んだぞ？」

「あれ？」

気付くとしてやったりというもう一度殴りたくなるような笑顔の

パオロさんに戻っていた。見事に乗せられた気がするけれど、本当に”説教”が上手いと感じた。知識だけの僕とは格が違う、この人、いや、この先輩達から学ぶ事は本当に多そうだね。

「全く、何時も今みたいにしていてくれれば良いのに！」

「嫌だね、疲れるから」

「でも、説教が上手いですね？」

「そうか～？」

「何で、こんな所に居るんですか？」

「お前だってココに居るんだろうに。別に僕が特に上手い訳じゃない、言い方は変だけど、異端審問官は精鋭揃いだぞ？」

「えーっと、その冗談は受けませんよ？」

「あのな、言いたくないけど、僕だってとある神学校を優秀な成績で卒業して、司祭として熱心に活動していたんだぞ？　何だよその目は！」

「だって」

あまり自分の事を話さない人ばかりだったから知らなかったんだけど、聖人候補に挙がったとか、枢機卿になり損ねたとか、某教区の責任者だったとか僕から見ても凄い経歴の人が多かったんだよね。

（生活力ゼロだけど・・・、違う、生活する気力が無いとか、異端に逃げているんじゃないだろうか？）

「審問官が厄介払いされた人間の集まりなのは事実かも知れないけどね、消すには惜しい、野放しするには危険、そしてブリミル教の矛盾に気付けるほどには聡いからこそ、ここに居るんだぞ？」

「それなら、何で？」

「自分に相応しい地位を求めないか？」

「そうです・・・」

「ジェリーノの言う事は尤もだな、理由を言えば、下手に動けば消されるからだろうね。審問官の権力は表向き強いけれど、宗教庁という後ろ盾があってこそだろう？」

「はい」

「僕だって、一声かければ、千人近い人を集められると思うけどね、それだけだ」

「そうですね・・・」

「それに中心となる人物が居なかった。ぶっちゃけていえば、祭りの山車の飾りになる人間が欲しかったんだ」

何故だろう、嫌な予感がする？　確かあの祭りの山車って、―スコッピオ・デル・カッロ《山車の爆発》の名前通り、爆竹の餌食になるんじゃなかったかな？　ふと閉じたはずの扉を見ると、３人の先輩審問官が人の悪そうな笑顔で僕たちの話を聞いていたんだ。

「居なかった？」

「そう、今は適当な人物が居るな」

うーん、そんなにニヤニヤしても、僕には心当たりが無いですよ？　その笑顔を、いかにも異端審問間らしい不吉な笑顔だったね。

外伝二十五話　（説教）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

外伝二十六話　（盟友）（前書き）

外伝二十六話ＵＰします。

やっと二人が出会います、出会い方はちょっとあれですけどね？

外伝二十六話　（盟友）

無駄な抵抗だった、あの懺悔の夜から事態は急変したと言って良いかも知れない。不思議な程、事が順調に進んで行き気付けば私は３０代の若さで枢機卿の１人となっていた。

普通ならば５０代の経験豊かで、思慮深い人物が任命されるはずだったんだよ。宗教庁にはその条件に合った人材は多かった。私が１１人目の枢機卿に滑り込めたのは、”セレヴァレ”と審問官の先輩達の力が大きかったんだと思うよ。それに、最大のライバルだった老司教の教区で飢饉が発生して、それどころでは無かったと言うのが実際の所だったね。

聖堂騎士隊（パラディン）と異端審問官がタックを組むという青天の霹靂（だったかな？）な事態に、アルファーノとタルキーニも当初はなす術が無かった。聞いた事も無い始祖の言葉を独自解釈して異端審問官が叱責すれば、翌日には聖堂騎士隊（パラディン）がやって来て、宗教的な死者が出来上がるんだから、対抗するのは難しいね。

”御言葉”はきちんと超マイナー経典に書かれている物だし、解釈も極まともな物だったからおかしくは無い、真っ当な解釈に逆らう様な事をしている人々の方が問題なんだろう。

しかし、最近は小康状態だったんだけど、”カルラ・セレヴァレ”の”不自然な”事故死が切欠で私たちが劣勢に立たされる事になってしまったんだ。

今でも時々リアーナとは会うけれども、公的な場所でしか会えなくなってしまった。まあ、事情は察して欲しい、枢機卿（そして教皇）を目指す私にスキャンダルは不味かったからなんだ。ただ、目

指すものは同じだと分かっては居た。ただ、彼女の息子の成長だけは気にかけていたね。

それから数年は我慢の時期だった、枢機卿としての公務、アルファーノとタルキーニに対しての暗闘が日々続いたんけど、聖エイジス３０世が突然倒れた時には肝が冷えたね。あのままだったら私より一足早く枢機卿になっていた彼が首尾よく教皇に納まっていただろう。

私はそれだけは許せなかったけれども、それを阻止するだけの力が私には無かった。単純に聖職者として、枢機卿としての能力では彼に劣る所は無いし、論戦でも一度も負けたことが無い。ただ、政治力や経済力では明らかに劣ってる。派手なバラまきをロマリア各地でやられてしまえば、世論が彼に味方するのは避けられなかったんだ。

経済の”アルファーノ”が本気になるとこうだ、最後に物を言うのは金の力か、近く行われるだろう教皇選までに私自身が方針を決める事になった。母親そっくりになってしまったリアーナは物騒な方法をしきりに勧めてくるけれども、その手段をとったら私が教皇になる意義を失うと何度も説得する事になったんだ。

伝を辿って、何とか有力な協力者を得ようとしていたんだけど、中々上手く事が運ばなかった。ロマリア国内では無理かと思い始めた頃、私はその人物の存在を知った。そう、彼は、異端審問官の網にかかって来たんだ。

＝＝＝

「トリステインの商人ローレンツ？　それが何か？」

「何かじゃないぞ、こいつを取り込もう！」

こんな話を持ってきたのはパオロさんだったけれど、トリステインか今は何時頃なんだろうね？　ガリアではジョゼフという王子が生まれていて、その弟がシャルルだった。ただどちらもありふれた名前だから何とも言えない。ただ、分かった所で何かする予定は無いんだ、そんな事には興味が無いし、何か利用できないかと考える位だね。外国の事だからあまり気にならないのかな？

「どうしてその商人なんですか？」

「こいつは出来るよ、”商人ローレンツが扱わないものは無い”と評判らしい」

「はったりじゃないんですか？」

「確認したけど本当らしい、はったりだけでトリステインの商人名前がロマリアまで届かないだろう？」

「この国まで噂が？」

「ああ、それに大きな声では言えないけどね、エルフとも取引があるらしい」

「ほう、それでパオロさんから話があった訳ですか？」

「お仲間という感じがしないかい？」

「そうですね、確かに。でも、一商人に何が出来るでしょう？」

「君らしくないね、普通の常識に縛られた人間に出来ない事だよ」

「そうですね、確かに、会えますか？」

「抜かりは無いさ、きちんと召還してある」

久しぶりにパオロさんの人の悪い方の笑顔を見た気がするね。事情を知らない人間が異端審問官から呼び出しを受けたらにげだすんじゃないだろうかな？　それを含めて”商人ローレンツ”の実力を試すという事か・・・、ローレンツにとっては災難だね。

＝＝＝

パオロさんが用意してくれた”商人ローレンツ”の経歴をざっと読んでみた。

・生年は不明で３０歳半ばと思われる
・両親は魚売りをやっていた普通の平民だった
・１０代半ばで独立して、トリステイン国内で主に魚を売る行商をしていた
・２０代後半で店を構え、その後順調に店を国内に広げて行った
・３０に入った頃に協力者と共に”ローレンツ商会”を立ち上げる
・現在はアルビアオン・ガリアを除く各国にその支店を広げつつある
・両親と妻は死去、１男１女の父親である

立身出世とか、誰もが憧れる商人像とか言えそうな経歴だったけど、彼が順風満帆の人生を歩んできたかと言うとそうでも無いらしいね。妻と死に別れた経緯が少しだけ書かれていたけれど、それだけでも悲劇だったんだろう。

水メイジ（何代か前は某伯爵家につながる）を妻に娶ってから彼の人生は変わった様だ。妻の魔法で魚を冷凍保存して内陸に運ぶという方法でかなりの儲けを出していたらしいんだけど、その追い風も長くは続かなかったんだ。２０代半ばで盗賊に狙われ積荷と妻の命を失ったらしい。

子供達と多少の財産は残ったらしいけれど、一番大事な信用と妻を失ったんだね。ただし、”商人ローレンツ”の伝説はここから始まったらしい。一発逆転を狙ったのか、彼は危ない（ハイリスク・ハイリターンと言うべきかな?）仕事ばかりに手を出すようになってしまった。

何となくだけど、死にたいのかなとも思った、でも、無茶な仕事ぶりが彼の信頼を取り戻すのに一役買ったのは事実らしい。”商人ローレンツが扱わないものは無い”とか言われ始めたのもこの頃以降らしいね。一番有名なのが、とある薬草を入手した時の逸話だそうだ。

トリステインの某貴族の息子が”竜疫病”という病に罹ったのは夏の始まり頃だったらしい。あまり聞かない病名だったけれど、竜に良く接する人間だけが発病すると言う事と、治療法だけは分かっていたんだ。”散竜草”と呼ばれる薬草が特効薬らしいんだけど、手に入れるのが難しいらしい。

理由は簡単で、”散竜草”を手に入れるにはエルフ達の住む砂漠（サハラ）に行かなければならないからなんだ。これの意味する所は、表向き”竜疫病”は不治の病と言う事になるんだね。何せ宗教庁がエルフとの交流を厳しく禁じているんだから。

それでも時々市場に出回る事があるらしい、密輸なのか、エルフが気まぐれで人間の町にやってきて売って行くのかは分からないけど、非常に高価で数も少ないのは事実なんだね。まあ、異端審問官に捕まる事だけは絶対に無いと殆どの人が知らないんだから仕方が無いよ。

その状況で”商人ローレンツ”は時間や危険と戦いながら”散竜草”を手に入れて見せたらしいね。自分の生命をかけて成し遂げた事が彼に何をもたらしたのかは分からないけれど、彼はエルフとの交易を隠さず堂々と行う様になったんだよ。

それが審問官の情報網に引っかかったと言うのが僕に、彼の情報がもたらされた経緯と言った所かな？　エルフと交易ね、確かにお仲間と言って良いかも知れないけれど、随分と命知らずだね頭の堅い聖職者に目を付けられればどういう事態になるか想像出来ない訳じゃないだろうに。

＝＝＝

1月とかからずに、件の商人を呼び寄せる事に成功したと報告を受けたんだ。運悪くロマリアに商売に来ていたらしい。そして、若き枢機卿の前に”商人ローレンツ”がやってきた訳だけれど。どうも、この人物の事が好きになれそうも無かった、いかにも押しの強い商人らしい顔付きで、それなりの自信を見せては居るんだけど、押しが強すぎるというか、何か焦っている様に見えてこちらも落ち着かなくなるんだ。

「ローレンツと言ったね、まあ、掛けなさい」

「はい、ありがとうございます、枢機卿様」

太太しいと言ってもいい態度だ、これはこちらの事情も分かっているっぽいな。自分には手が出せない筈だと確信しているのだろう。交渉術では、ここは一発ガツンと行く所なんだけれどそれをやると、敵に回る可能性があるんだよね。

まあ、才覚の面では不足は無いけど、最悪消せば言いだけかな？

弱点に関しては調査済みだから、この場でどう料理するかだね。

さてお手並み拝見と行きますか！

「急に呼び出してしまってすみませんね」

「いいえ、枢機卿様に呼び出されるのならば光栄でございます」

「そうですか、少し嫌な話になるかも知れませんが、聞いてもらえると助かります」

「・・・」

「実は、トリステイン　国内で異端の疑いがある貴族が居るそうなのです！」

「はぁ？」

そんな反応じゃ、商人としても拙いだろうにね。

「噂を聞いた事がないかな？　散竜草に手を出したそうなんだが」

「！」

「貴方の商人としての伝で何とか証拠を掴めませんか？」

「その貴族の方が異端と認定されるのですか？」

「分かりません、ただ放置するには危険な問題です」

「ですが、近年異端の疑いで！」

「そうですね、表立って異端を取り締まる事は利点が少ないですからね」

異端審問官自体が異端の研究を行っている事までは知らないらしい。（普通に考えれば有り得ない話だけからね～）

「表立って？」

「すみませんが、これ以上はお教え出来ません。宗教庁内部の機密になりますから」

だって、異端の思想を持つものを集めて仲間にしているなんて、公には出来ないからね？　彼が私の言葉をどう解釈するかは、彼自身の問題だし。

「ち、ちなみにですが、その貴族の方が異端だったとしたら」

「その様な事は、私の口からは・・・。ですが、異端の問題は非常に判断が難しいです」

さて、どう出る？　息子達が貴族の庇護下に居るからといって安心は出来ないぞ？

「話は変わりますが、今私は少し困っている事があるのです」

「・・・、”猊下”の様の方がですか？」

猊下は、一応身分の高い聖職者への敬称なんだけれど、この場合はまあ、言うまでもないだろうね？

「はい、清廉潔白であろうとすれば、自ずと困る事はありますね」

清廉潔白か、自分で言っておいて、笑えるね。

「それで、私に何をしろとおっしゃるのですか？」

ローレンツの方から切り出させる事に成功だね。さて、次だ、僕は1枚の羊皮紙をローレンツの前にそっと差し出した。

「これをご覧なさい」

「これは！」

うーん、反応が早すぎだ、きちんと全部読まないと駄目なのにな。話の流れが拙かったから誤解したんだろうね？

「そんな表情をするものではないよ、良くお読みなさい」

「・・・、こ、これは！」

聖職者に貸した金は返ってこないというのが今までの常識だからね、２５万エキューの借用書など見れば驚くのも無理は無いだろうね。私の所にはローレンツ商会の総資産が４０～４５万エキューと報告されているから、無理をすれば用立てられる金額だというのも

まあ誤解を生むんだろうね。（実は駆け引きに使う予定の数字だったんだけどね）

「私に、２５万エキュー貸して下さると？」

「そうだね、不足かな？」

「いいえ・・・」

ローレンツが必死で頭を働かせているのが見て取れるね、どうしてなんて聞かれたら興醒めだったんだけどね。２５万という金貨は、”セレヴァレ”で直ぐに用意出来た金貨の全てだったんだ。ちなみに、”アルファーノとタルキーニ”はこの１０倍の金額を軽々と動かすよ？

渋々、お金を用意してくれたリアーナは、武力による解決をしたそうだったけれど、それでは駄目なんだ。同じ土俵に立って彼に勝たなくては、僕が彼に勝っている証明にならないし、自分が納得して教皇になれない！

「承知しました。この金は将来の宗教庁の為に、枢機卿様の納得行く形で活用させていただきます」

「そうか、頼んだよ、ローレンツ」

さて、概ね思い通りに事が運んだな、後はローレンツの商人としての手腕に期待しよう。人間としては少し甘い気がするけれど、多分やってくれるという予感がするんだ。

外伝二十六話　（盟友）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

外伝二十七話　（情報交換）（前書き）

外伝二十七話ＵＰします。

外伝二十七話　（情報交換）

その後、ローレンツは大きく2つの手を採った様だった。

1つはロマリア国内の中小の商人を集めて互助会の様な組織を立ち上げたそうだ。何でも不慮の事故等の時に保険が下りるらしい。（これに20万エキューつぎ込んだらしいね）

もう1つは、集めた商人達をロマリアの田舎に積極的に商いに送り出したんだ。但し、彼らはその村や町で本当に必要とされているものを運んでいったそうだ。まあ、それだけなら普通の商売だな、辺境の町や村では感謝されるし儲かるしで言う事なしだ。ただ商人達がもたらしたのは、商品だけではなく情報もだったんだね。

＝＝＝

「あんた達も大変だねぇ～」

「いんや、あんたの様な商人が来てくれる様になっててーへん助かっとるよ？」

「それはお互い様さ」

「だども、町の方ではタダで食料が配られてるんだと、他の商人が言ってただよ？」

「ああ、宗教庁のお偉いさんが慈善事業をやっているらしいね」

「なんで、この村にはその”じぜんじぎょう”ってのがこないんだ

べ？」

「そりゃあ、この村が小さくて、人気取りをしても効果が上がらないからに決まってるよ、おやっさん」

「何言うだべ、この村を馬鹿にするだか？」

「俺がじゃないよ、宗教庁の偉いさんがだよ！」

「まったく偉い人ってのは、これだからいかんべ！」

「そう言うなよ、俺がここに来てるのも宗教庁の偉いさんの助けがあったからなんだからな」

「ほんとうけ？　そんなら何でタダで食いもんを配ってくれないんだべか？」

「気付いていなかったんじゃないだろう、俺の商品が普通よりはかなり安いって事に？」

「うっ！　だども」

「おやっさん、あんた肉が好きみたいだね？」

「あ？　そうだけんど？」

「タダで配られる食料はな、当たり前だけど決まった物しかもらえないんだよ。はしばみ草の効いた干し魚とかは随分不評だって聞いたぜ？」

「あんなもん、ひとさまの食いもんじゃねべ！」

「そうだろう？　タダって言うのも良し悪しなんだよ」

上記の様な会話が色々な所でされた訳だね。聞かれれば商人達は私と彼の名前を出した訳だ。もう少し教養がある人には税金の使い道なんて話までしたらしいよ。別に”タルキーニ”のやり方が間違っている訳じゃないけど、盲点だったんだろうね。

こんな行商をやっている商人達に２０万エキューの支援をしたそうだ。あわせて４０万エキューだけど別に追加支援をしたわけじゃないんだ。ローレンツが自腹を切ったんだけど、効果は絶大だったみたいだね。彼と彼の商会はロマリア国内に確固たると言えるほどの基盤を固める事に成功したらしいね。

＝＝＝

一方私の方も精力的に活動を続けた、腐敗した聖職者の粛清と言えば分かるだろうか？　だが、それも当初は上手く行ったんだけれど直ぐに行き詰ってしまった。教皇自身がタルキーニの圧力に負けて国内の聖職者に対する保護を決めてしまったんだ。

国内に限定してくれたのは幸いだったね、お陰でリアーナが張り切る事、国外にはどちらかと言えば”アルファーノとタルキーニ”の息のかかっていない司祭などが多かったんだけれどリアーナは全く遠慮をしなかったんだな。中には”セレヴァレ”に近い司教なども居たんだけれど、逆に身内だからこそ手を緩めなかった。（彼女らしいといえばらしいけれどね）

聖堂騎士隊（パラディン）と異端審問官の活躍、ローレンツを始めとする商人達

の助力、この2つをもっても私の教皇選での勝利は微妙だったね。いや、はっきり言って敗色濃厚だったと言っても良いかも知れない状況だった。そして終に聖エイジス30世がこの世を去り、教皇選が始まってしまった。（私達にとっては当時は最悪で、後になってみれば最高のタイミングだったね）

＝＝＝

教皇選というのは、全部で11人居る枢機卿が互選で次の教皇を決めるという制度なんだけど、全会一致が原則になっている。そう全会一致だ、全会一致するまで何度も候補者の書かれた札を机の上に積み重ねるという”作業”を繰り返すんだよね、これが！

双方概ね票固めは終わっていたんだけれど、最初はやはり票が分かれたんだよね。やっぱり誰でも教皇にはなって見たいのかな、それとも誰かに押し付けたかったのか。2回目からは”彼”と”私”の一騎打ちになったね、予想通りだったけれど。票に関しては5対6とほぼ互角だった。それからは根競べになったんだけど、馬鹿らしい事にずっと5対6が続いた。双方引く気は無い様だったね。

投票は13回行われて、そのまま翌日にもつれ込んだ。徹夜は慣れているからどうと言う事はなかったけれど、無意味な相談を繰り返して代わり映えの無い投票を行うのは精神的にくるものがある。そんな事がまた丸1日続いたんだよ、全くこの状態をどうしろって言うんだろうね？（それに訳の分からない決まりがあって、これも神経を逆撫でしてくれるんだよね）

さすがに2日目は仮眠の時間がとられたけれども、まあ、普通は熟睡なんて出来ないんだろうね。私も熟睡は無理だったけれどなんとか疲れは取れたと思う。

そして、3日目も同じ様に投票が始まった。最初の4回は今まで通りの展開だったんだけど、5回目で事態は思わぬ方向に進んだ、いや進んでしまった。札を机の上に積む為に立ち上がった拍子に枢機卿の1人が胸を押さえたと思うと、そのまま微かに呻き声をあげてそのまま倒れてしまった。

それが”彼”だったんだ、身体が弱いと思われた私の後釜に座った彼がこの場で倒れてしまうなんて、随分と皮肉なものだなと思った。最年長のまとめ役の枢機卿の提案でこの一回の投票の後、一度教皇選を中止する事になった。彼の容態も心配だったし、暗殺の可能性もあったからね。（かなり難しいだろうし、私は少なくとも命じていないんだけど、視線が痛い、やりそうな人物なら凄く心当たりがあるんだ）

ただ、折角投票したんだから勿体無いというレベルで投票結果の確認が行われたんだけど、そこで更に事態が急変した。投票結果は4対6では無く5対5だった。少しの間だけ私に向けられる視線が更に鋭さを増したけれども、直ぐにその可能性が低いのに呆ける寸前の頭でも気付いた様だった。私は真っ先に投票を終えていたんだからね。

これじゃ分からないかな？　教皇選では互選だけど、基本的に自薦は許されない。つまり自分以外で最も教皇に相応しい人物に投票する形なんだよ。私も不本意ながら、ステッラリオ・アルファーノの名前を延々と選んできた訳だね。（謙譲の”精神”とか考えさせる意図は分かるんだけれど、当事者としては納得し難い物があるよ。ただ、私以外で教皇に相応しい人物が彼しか居ないと言うのも情けないけどね）

そう、彼が投票を終えずに、札を握り締めたまま運び出されたのも分かっているこうなると、本来ならば4対6にならないといけないんだ。彼はそこまで追い詰められていたんだな、私が追い込んだのだけれども・・・。

念の為、私の机の上の札と”彼”の机の上の札が確認されたけれどその事実が確認されただけだった。彼が札を手放さなかったのは正解だったのか不正解だったんだろうか？　どちらにしろ結果は変わらなかったんだろうね。１０人の枢機卿で引き続き投票が行われて、９対１の投票が行われて、形式通り私が他の枢機卿に感謝を述べ最後に１０票全てが私に投票される事で教皇選の決着が付いた。（ここまで後味の悪い教皇選も珍しいのではないだろうか？）

＝＝＝

「おめでとうございます、教皇猊下」

「止して下さい、貴方からそう言われると、責められている気分になります」

「しかし、些か期待外れでした。教皇選の後に何か騒ぎが起きるかと心配していたんですが」

「貴方の場合は、この機会に儲ける為に色々手を回していたんでしょうね？」

「滅相も無い」

そう言いながら、ローレンツは残念そうなのを隠そうとしていなかった。かなり、前回の事で考える事があったのか、教皇に対して

も全く自然体にで接する様になった。彼にとっては良いことなんだろうね。

「しかし、どの様な魔法を使われたのですか？　猊下の敵だった方々が教皇選の結果に異議を唱えないなんて」

「何、宗教庁をあるべき姿にすると説明したら、納得してくれただけですよ？」

「あるべき姿ですか？」

「そうです、宗教庁という組織は大袈裟すぎます。この国の政治・経済・軍事を全て宗教庁が握っているなんておかしいと思いませんか？」

「そうなると、宗教庁から政治・経済・軍事を分離すると？」

「そうです、出来れば街1つに宗教的な権力をまとめてしまって、他をまとめてロマリア王国を復活させたいと思います」

「宗教の町か・・・、まるでバチカンみたいだ」

ローレンツが何気なく呟いたのが聞こえてしまったが、今の話の流れだと”バチカン”と言う地名には特別な意味がある筈だ！　まさか、彼も私と同じだと言うのか？

「今、バチカンと言いましたか？」

「え？　はい、ロマリアにはバチカンという町があった筈ですが？」

「誤魔化さなくてもいいですよ、これは教皇が教徒に話しているんじゃない、ジェリーノ・タルキーニという1人の人間がローレンツという同胞に話しかけているんだ」

「同胞？」

「そう、バチカン市国、ローマ法王、ヨハネ・パウロ2世、いやベネディクト16世なのかな？」

「まさか！、貴方も？」

「大きな声を出さないでくれ、人払いはしてあるけど」

「すみません」

「それを止めないか？」

「え、ああ、分かった。分かったよ、その、ジェリーノ？」

年齢的には私の方が少し上らしいけど、2人だけの時なら問題無いだろう。これからは敬られる事が多くなる、気さくに話しかけられる人間には不自由するだろうからね。

「そう、それで良い、ローレンツ。君は私以外に、その何と言うべきなんだろうな、記憶の転写が行われたとして」

「そうだな、転生なんだろうな、これは、転生者なんてどうだ？」

「良いな、それで？」

「ジェリーノが始めてだ、君は？」

「同じくだ」

「貴方はそれを誰かに話したか？」

「いいや、まあ、異端審問官の仲間には色々な知識を披露したがね」

「私の方も、今は知っている人間は居ないな」

”今は”か、亡くなった先妻は知っていた訳か、そこまで信頼できる人間と言うのは、私には居なかったし、多分これからも居ないんだろうね。教皇を目指した瞬間から、心の中で何故か人々に隔意を持ってしまった。（最も親しい女性リアーナ・セレヴァレでさえだね）

逆に何故、ローレンツの言う事を素直に信じられたのかが、不思議な程だね。ただ、

・宗教庁が存在を否定し続けてきた”平民メイジ”を労働力として使うと言う発想
・歴史が小説通り進めば大混乱に陥るであろう”ガリア”と”アルビオン”への商会の進出を進めていない所
・エルフと積極的に交流を行う向こう見ずさ、あるいは非常識さ

が違和感を覚えさせていたと言うのは今になれば分かるね。危なく始めて出会った同胞を消す所だったけれど、ローレンツは自力で危機を乗り切って大きくなった訳だ。まるで私が、ローレンツの為に”試練”を用意した様なものだね。

「ここが、ハルケギニアなのは間違いないだろうね、ただ何時かという問題があるけどね」

「ああ、それなら”マリアンヌ姫”は生まれているよ、暫くすれば”烈風の騎士姫”が始まるんだろうな」

「どうして王家や公爵家に接触しないんだ、ローレンツ？」

「どうしてだろうな？　ただ、危険を感じるからかもしれない」

「危険？」

「そうだろ、歴史に干渉するんだぞ？」

「ふん、そんな事か！」

「そんな事かって」

「私は好きに宗教庁を変えるぞ？」

「だろうな」

「お前だって、エルフと貿易なんかして大丈夫なのか？」

自分の事を棚に上げて責められても困るし、私にとって宗教庁にある”場違いな工芸品”と言うより単なる兵器は忌むべき物でしか無いしな。既に凡その物は処理を命じた位だ。

「そうだな・・・、確かにやってしまっているんだ」

「気にするな、別におかしな事が起こった訳じゃないだろ。それに歴史が小説通り進むんなら、私達がここに居るのがおかしいだろう？」

「異分子だろうからな、私達は」

「そんな言い方をするものじゃない、私達は私達なりに好きな事をして来たし、これからもして行くだけだろ？」

「そうだな、そうやって生きて来たな」

「奥さんが殺された事を気にしているのか？」

「・・・、そうかも知れない」

「馬鹿な事を、お前の、”商人ローレンツの妻”が自分の死で夫が塞ぎこんでいると知ったらどう感じると思う？」

無茶な商売をしたり、財産を思い切ってつぎ込むのが正しいか微妙だけど、ただ、ある程度力を持った商人のやることじゃないのは確かだと思う。（それに助けられた訳だし、ローレンツの投資は成功したんだけど、何時も通用するとは思えない）

「そうだな、俺とした事が・・・。ふっ、さすがは教皇猊下ですな？」

「説教臭かったか？　今の君には必要だったと思ったけど、私達の間には不要かも知れないな」

「そうだろ、腹を割って話し合うべきだろう？」

「ふむ、ローレンツ、1つ頼まれてくれないか？」

「何かな。多少借りがあるから、かなりの金額を用意出来るぞ？」

「いいや、お金の話じゃないんだ。エルフと接触したいと思う」

「彼らと、和解するのか？」

「まあね、宗教庁の力が弱まればまともに戦う訳にも行かなくなる。そもそもあんな馬鹿げた戦いを懲りずに何度も繰り返すなんて、本当に馬鹿だろう？」

「まあね、ただ、商人にとっては稼ぎ時なんだがね」

「下らないな、エルフとの交易が独占出来なくなる程度で？」

「お見通しか？」

「ああ、だけど、そう簡単には行かないだろうな」

「まあね、エルフには変わり者が多いからな」

まあ、審問官の先輩達ほどじゃないと思うけどね？　しかし、下手に刺激するのは避けた方が良さそうだね。

「そうすると、エルフとの交易を許可制にするべきかな？」

「当面はそうした方が無難かもな。”レイハム”という部族を知っているか？」

「さあ、敵の情報もまともに持っていないんじゃ、何度攻め入っても負けるのが当然だろうな」

「ふっ！　私の商売相手さ、結構エルフの中では有名らしいぞ？」

「勢力は？」

「ああ、里、本当に里だな、は小さいな、エルフの、いや人口は分からん」

「信用されて居ないんじゃないか？」

「警戒されるのは当然だろう？　商売が出来ればそれで良いしな」

「そうだが・・・。族長とかと話は出来ないかな？」

「ああ、適当な人物に心当たりがあるが、あの方は宗教庁嫌いだぞ？」

「そんな人と良く知り合えたな？」

「ああ、宗教庁の悪口を言い合う仲だぞ？」

そんな事を私に向かって胸を張って言われてもな？　いや、私だって、先輩達と今までの宗教庁を散々虚仮下ろしてきたんだけどね。

外伝二十七話　（情報交換）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

外伝二十八話　（最も教皇に相応しくない教皇）（前書き）

外伝二十八話ＵＰします。

外伝二十八話　（最も教皇に相応しくない教皇）

「別に良いが・・・、まあ、何とかその方と会えるようにセッティングしてくれるか？」

「会うだけなら何とか、ただ・・・」

「私は、”教皇”して会うよ？」

「分かった、極秘で接触する事になるな」

「何なら、教皇直筆の”交易許可証”でも作るか？」

「助かるが、良いのか？」

「交渉材料位にはなるだろう、さすがに手紙を書くのはまだ拙いだろうしな」

「教皇としての覚悟を示すか、協力させてもらおう」

その返事を聞いて、私はローレンツに用意してあった”交易許可証”を手渡した。

「何だ、もう準備は終わっているのか？」

「勿論さ、私が教皇で居る間に全てを終わらせる予定なんだからな！」

＝＝＝

ローレンツとエルフ側（レイハムとのというべきなんだろうね）の交渉は難航した様だけど、何とか代表者と接触する事には成功した。私が砂漠（サハラ）に出向けば話は早かったんだろうけど、様々な改革を進めている関係でどうしてもロマリアを離れる訳にはいかなかったんだ。

交渉自体はまあ、何とかまとまったという感じだった、双方の干渉を当面最低限にするとか、限られた者だけが行き来が出来る様にすると言う、些か後退とも取れる物だったけど、交渉が行われた事自体が意味を持ってくるのはもっと先なんだろうね。

「ふむ。これで話は終わりかの？」

「そうですな、教皇としてはですが」

「ほう、それはおぬし自身がワシに用ということかな？」

「はい、マナフティー殿はかなりの年齢なのでしょうな？」

「そうじゃな、齢は2千を超えるの」

「何故、マナフティー殿が人間の教皇などを嫌うか教えていただけませんか？」

「ワシが”ブリミル”と会った事があると言ったら、どうする？」

少なくとも”人間側”の宗教庁の人間は驚かなかった、逆に老人の言葉に護衛のエルフ達が驚いた程だった。（普通、逆の反応をするんだろうね。異端審問官の間では結構有名な話だけど、ほとんど語られる事が無いからね。別に権威付けを否定する積りも無いし）

「ほう、そう言う事か」

「始祖はどんな人間でしたか？」

「昔の、そう、本当に昔のことじゃがね。今でも思い出せる、面白い人間だったよ彼は、気に入らない所もあったがの・・・」

言っている事が嘘か本当か分からないけども、その表情を見れば、本気で懐かしがっているのだけは分かる。

「その始祖の”墓守”たる教皇を嫌う理由は？」

「ふん、”始祖の後継者”では無かったかの？　自分で殺しておいて後継者も無いだろうにのう？」

「なっ！　本当ですか？」

「”ブリミル”が死ぬ様に図ったと言う意味じゃがの、さて、どうする？」

この揺さぶりには動揺を隠せなかったけど、”フォルサテ”が何を思って何をやったかでは無く、これからのブリミル教がどうあるべきか、を考えるべきなんだろう。

「・・・、別にどうもしません。私がすべきなのは、ただ、人々の心の拠り所としてのブリミル教を守っていくだけです！」

「そうか・・・、試すような事をいってすまんかったな、今のは戯言じゃよ」

「いいえ、冗談でも教皇としての方針は変わりません。先程の交渉の内容は遵守させていただきます」

「良いじゃろう、おぬしの志、しかと見届けさせてもらおうかの、まだワシも数百年は生きる予定じゃからの」

冗談には聞こえなかったから、かなりの部分で本当なんだろうな。しかしこのエルフの老人は何年生きる予定なんだろうね、まあ良いさ、私がこれからやる事の生き証人なんだからね。

＝＝＝

歴史的に見れば、大きな変化があった会談だったけれども、それを知る人間は殆ど居なかったんだ。ただ、エルフ側の信頼を得るために少しだけ策を弄する事にしたんだ。まあ、”廃品”を押し付けたんだけどね？

「ジェリーノ、あんな使いは2度とごめんだぞ？」

「仕方が無いだろう、未だにエルフとの交易を表立って許可しているのは、お前だけなんだから」

「しかしな、処分済みの”場違いな工芸品”を運ばされても儲けが出ない！」

ローレンツが愚痴ってくるけど、あれをエルフに見せる事の意味は分かっているんだろうにね。信頼や信用がどれほど大事なものか知らない訳でも無いだろう？　ああ、何か交渉をしたいんだな、不本意な事に未だにロマリアでは教皇の権力は大きいからな。

「分かったよ、そうだな礼をする予定だったろ、望みは何だ？」

「話が早くて助かる」

彼も性格が悪くなったね、結構露骨だったぞ？　約束を反故にする積りは無いけれど、何を”お願い”されるのやら。

「実は私には夢があってね」

「商人として大成することじゃないのか？」

「それも1つだが、過程と考えることも出来るな」

「過程ね、それで？」

「ああ、”学校”を作りたいんだよ」

「神学校なら幾つかあるが、そうじゃないんだな？」

「勿論、俺たちが知っている学校さ、出来れば誰でも学べて、専門的な教育も出来る様にしたい」

「ほう、お前そんな事を考えていたのか、だがどうしてだ？　商人としての修行なら親にされたんだろう？」

「まあ、前世の心残りってやつかな、俺が商社マンだって話しただろう？」

「それが？」

「ああ、結構苦労したんだよ、中卒には辛い職場だった」

中卒で商社マンになれるたかな？　まあ、見栄もあるのかもしれないね。

「ああ、義務教育がもっとしっかりしていればっている訳か？」

「そうだな、ただ、この世界の教育水準がお話にならないのも事実だろう？」

何か意味深な言い方だね、別に宗教を信じるのと教養は無関係なんだけどな？　狂信者なんていう私にとっても厄介な連中がその良い例だろうに。ただ、私にとってローレンツの要望は受け入れられないものだったんだな。

「すまないが、お前の頼みは聞けないな」

「何故だ！」

「私がどういう事を目指しているか知っているだろ？」

「そうだった、そうだったな・・・」

「本当にすまないな、数年か十年程度なら支援出来るが、それ以上はな・・・」

私は教皇が、いや宗教庁が政治に関わるのは避けるべきだと思っているから、行政からも教皇の影響力を減らしつつあるのだから、仕方が無い。実際に権力を持つだろうタルキーニには、ローレンツ

の受けは非常に悪いからな。

「まあ、予想はしていたが、教育の重要性を誰も分かっていないんだ！」

「いいや、神学校には力を入れているぞ？」

「お前はどうでもいいんだ、ジェリーノ。まあ、教育の重要性を分かる人間を気長に探すさ」

「頑張ってくれ」

私にはそうとしか言い様が無かった。教育か、確かに重要な問題なんだけど、ロマリア王国を陰から支配するだろう3家には興味がないだろうね。特にリアーナは体育会系だからな～。

＝＝＝

それから今思えばあっという間だけど、それなりに苦労の十数年が過ぎた。

ロマリア王国建国の準備は整いつつあるが、そのタイミングが中々難しい。宗教庁の宗教的な権威まではロマリア王国に移行しては意味が無いから、切欠が欲しいと思っている所だった。（聖職者としての生命を絶たれた彼が、ロマリア王国の王位に就くとなれば警戒して当然だろう？）

そんな中、ローレンツが気になる情報を手に入れてきたんだ。

「アルミニウム合金が出回っている？」

「ああ、盾としてだがね？」

「それがどうした？　一円玉やアルミホイルとかの材料だろ？」

「ジュラルミン製だそうだよ」

「うん？」

「知らないのか？　うーむ、警官隊が突入する時に持っている盾を思い出してくれ」

ああ、あれか。という事は我々と同じ転生者が居るんだね。どんな人物なんだろう？

「転生者という事か？」

「だろうな、今度会ってみようと思うんだが？」

「そうか、結果を教えてくれよ」

「ああ、ジュラルミンとは実に面白いぞ？　運が良ければ、航空機の機体の材料になる！」

そっち方面は詳しくは無いけど、航空機という言葉は気になった。この世界で航空機といえば”フネ”だけど、我々が航空機といった場合本来の意味になるし、トリステインにはあれがあるはずだ。

「ローレンツ、歴史に干渉するのは嫌じゃなかったのか？」

「何のことだ？」

「誤魔化すなよ、ゼロ戦、竜の羽衣は手に入りそうなのか？」

「いや、単にタルブのワインを仕入れに行った時に偶然出会っただけだぞ？」

「まあ、好きにすれば良いよ」

「なんだ、ゼロ戦を回収して破壊するのかと思ったぞ」

「俺は宗教庁が妙な力を得て、暴走しない様にしたいだけだよ」

「ほう、それで、彼を引き取ったのか？」

「ああ、マザリーニの事か？　優秀な人材は宗教庁としても必要だからな」

「お前な！」

怒るなよ、お互い様だろうにね？　後継者として育てると言ったら、リアーナは喜んで連れて来たけどね。

「あの子供は、王国に置くよりは宗教庁で育てるべきだろう？」

「妙な話だが、そうかも知れないな」

そうだな、何時かは教皇になるかも知れないけど、権力は限られている筈だね。下手にロマリア国王にするよりはあの子にとっても良い事だろう。

「それで、その同胞の名前は？」

「ラスティン・ド・レーネンベルクだそうだ、一応王位継承権を持った公爵家の嫡子だな。まだ１０歳くらいだそうだけどな」

「ほう、それは希望が持てるんじゃないか？」

「ああ、少し試させてもらおうと思っているよ」

試すか、私がやった様な事をその少年にやる訳か？　まあ、その少年にとっての良い試練になってくれれば良いのだけれど。

＝＝＝

それからまた数年が経過したんだけど、ローレンツからはラスティン・ド・レーネンベルクの名前をよく聞く様になったね。少し入れ込みすぎじゃないかと思うくらいだったけれど、その甲斐あってかトリステインに公立（といっても公爵家が作ったという意味らしいけど）の学校が出来たらしい。

ローレンツはしきりに私とその少年が会う事を勧めていたけれども、正直あまり興味が無かった。まあ、色々忙しかったのが主な原因だったね。ただ少し気になったのは、ローレンツが学校建設を提案する前に既にその少年が学校を作っていたという点かな？　まるでローレンツを手助けする為にその少年が現れた様に見えてしまったんだ。

学校を作りたがっていたローレンツの前にラスティンという少年が丁度良く現れると言うのは出来過ぎだろう？　そう考えると私の前にローレンツが現れたのも何かおかしいのではないかとさえ思え

る。まあ、気のせいなんだろうな？　この事が少し気に入らなかったけど、機会があったからラスティン・ド・レーネンベルクに会う事に同意したんだ。

ラスティン・ド・レーネンベルクとの出会いは別にどうという事は無かった、どちらかと言えば、私の方ばかり喋っている感じだったね。時間も無かったから、十分に会話が出来なかったのがあまり印象に残らなかった原因かも知れない。本当ならばじっくり話し合う時間を作る予定だったんだけど、直前になってゲルマニアからの使者がやってきた事で予定が崩れてしまったんだ。

使者自体は別に珍しい物では無いし、手紙の内容も一文を除いては極普通の内容だった。その一文が大いに問題だったがね。”場違いな工芸品を譲り受けたい”というのは、明らかに転生者からの依頼の形をとった要求だった。宰相マテウス・フォン・クルークと言うのが転生者なのだろうか？

殆どの”場違いな工芸品”が処理済でロマリアには残骸さえ無いのだから、そんなものは存在しないと返答したんだけれど、実は最も厄介なものが残っていたんだ。あれが安置されている城の警備を見直す意味で、ラスティン君との会談の場所をヴェローナに変更して、私は警備兵の手配で大わらわだったから会談に集中出来る筈も無かった。

それから、何度かゲルマニアからの使者が来たが、突っぱね続けた。まあ、無いものは無いのだから仕方が無い。ローレンツを通してラスティン君とも手紙をやり取りするようにはなったが錬金を使って領地を栄えさせるというのは面白い話だったね。あの少年ならばもしかしてと考え、思い切って今では片腕とも呼ぶべきマザリーニを枢機卿に任じてトリステインに送る事にしたんだ。（実に妙な

成り行きでマザリーニがフィリップ４世に重用される事になったのは予想外だったね、いや、有り得る話だとは思っていたんだけどね）

＝＝＝

ラスティン君の錬金の腕を確かめる機会がないまま更に時間が過ぎていってしまった。本来なら直ぐにマザリーニを呼び戻すべきだったんだろうけど、中々踏ん切りがつかなかった。そのまま世界が一気にキナ臭くなってしまった。

ゲルマニアがトリステインを急襲するに始まり、トリステイン国王暗殺未遂、その後にガリア＝ゲルマニア紛争の発生と続き大きく世の中が乱れたが、私にとっては良い機会だったね。新しい宗教庁を売り込むべく争いのある場所に積極的に聖職者を送り込んだんだ。（ラスティン君による風石絡みの提案に乗って下落傾向だった宗教庁の権威が盛り返したのも大きかっただろうね）

しきりとロマリア王国として出征したがったリアーナが病に倒れたのはこの頃だったかな。いい加減リアーナを抑えるのが難しくなりつつある時だったから印象深く覚えているね。そう、あの考えを思いついたのもこの頃だったかも知れない。

”この世界が私自身の夢（或いは妄想）が生み出した物なんじゃないか？”

こう考える事は私の様な成功者にとっては自然な事なのかも知れないけど、それを裏付ける様な出来事が私の人生の最後に起こったんだ。宗教庁の汚点の象徴とも言うべき、”原子爆弾”をラスティン君があっという間に片付けてくれたんだ。

何時からこの城に安置されているか前教皇さえも知らなかったし、私では手も足も出ない厄介者が私の望み通りに”無くなった”んだから驚きを通り越して呆れた物だったね。そう、ラスティン君はまるで私を未練無くあの世に送り出す為に用意された人間の様だった。

私自身が抱えていた妙な考えをラスティン君に話して聞かせたのは、彼の（そう彼も紛れも無く成功者だからね）役に立つかもしれないと思ったからだった。しかし、ラスティン君の話も中々面白かった、もしかすると、私が必要としたからこそラスティン君がこの世界に存在するのかも知れないな、そうすると私は誰に必要とされてその世界で生きて来たんだろうか？

もしかすると帰ってこないかも知れないと思っていたマザリーニを取り戻して、次の教皇とするべく方々に手を回したが、マザリーニの実力は皆が認める程だから問題は無かったね。リアーナが存命であれば煩く言われただろけども、経験や人格的にいって、今のヴィットーリオには枢機卿が精々だろうね。

秘宝はロマリア王国が管理する形になっているから、余程の事が無い限りヴィットーリオが虚無に目覚める事は無いだろうし、そうなっても問題が起こらない様に教育を行った来たつもりだ。

＝＝＝

さてそろそろ私の最後の時が迫っている様だね。この世界が今後どんな発展を遂げるのかは興味はあるがただの興味だね。多分満足して死んだ人間には次の世界など用意はされていないだろう。

ただ、この世界ハルケギニアが争いの無い平和な世界になるように願ってこの世を去る事にしよう。自分が最も教皇に相応しくない

人間だと思っていたけど、最後の最後で聖職者らしい考えを持つ事が出来るなんて皮肉な物だな・・・。

外伝二十八話　（最も教皇に相応しくない教皇）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百四十八話　ラスティン２９歳（ど忘れ）（前書き）

第百四十八話ＵＰします。

第百四十八話　ラスティン２９歳（ど忘れ）

あれから、あっという間の１年だった気がする、私はキアラにせっつかれながら書類と愚痴を言いながら格闘したり、ゲリラ的な慰問活動を再開して護衛隊長に愚痴を言われたり、どこぞの愚痴王と愚痴を言い合ったりと充実した日々を送っていた。（やっている事は以前と変わらないし、愚痴ばっかりという気もするが、気のせいだ！）

☆魔法学院関連

２年になったライル達は使い魔召喚の儀式を行った訳だが、”明日は何が召喚されるか楽しみです！”と嬉しそうにライルが報告してくれた時に少しだけ気になってはいたのだ。

休む為にベッドに横になり、少しだけノーラと話をしている時にそれに気付いたのだ。”ロドルフも精霊を召喚する可能性が高い”という事実にだ。（ロドルフにはその可能性を話したかどうか思い出せなかったが、ライルやイザベラ姫と一緒にウキウキした様子だったから、完全に意識の外なのは確かだった）

生憎、私は、朝から抜けられない朝議があり、エルネストやクリシャルナに伝言を頼んだキュベレーからの報告では２人とも直ぐに移動できないと言う結果だった。無茶をして朝議を早く終わらせて、変装もそこそこに魔法学院方面行きの列車に乗り込んだのが昼過ぎだった。

そして現場に到着すると、そこには途方にくれたロドルフと、それを心配そうに眺めている生徒、そして難しい顔をした監督役のバルザック先生が居た。風の精霊っぽい物がロドルフの周りをさかんに回っていたがやはり誰にも見えない様だった。

「マーニュ様？」

「バルザック先生、ご無沙汰しております」

来年に備えて、準備しておいたのが幸いしたのか、陛下と呼ばれなかった。

「知り合いが召喚の儀式をすると聞いて駆けつけましたが、ご迷惑でしたか？」

「あ、ああ、少し問題が発生していますが、構いませんよ？」

「精霊ですよ」

バルザック先生にだけ聞こえる声で告げると、先生は納得行ったという感じで頷いた。私自身は風の精霊とは相性が良くないらしく”声”も聞き取れないが、そこはキュベレーが”お姉さん”らしくフォローに回ってくれた。キュベレー自身が何をすれば良いのか良く分かっている筈なので問題は無い。

「君、名前は？」

「え、あ、ロドルフ・ド・アンジェと言います」

ロドルフはかなりテンパっている様だったが、何とか話を合わせてくれた。どうでも良いが久々にロドルフの縋る様な表情を見たが、危ない感じだな。

「ロドルフ、君は男だろ、そんな顔をするなよ」

「はい、ラ！　えっと、マーニュさん」

「それで良い、君の傍には精霊が居るんだ。君はサモン・サーヴァントに成功しているんだよ」

私とロドルフの会話を聞いて、ライルとイザベラがやっと安堵した様子が視線の隅に見えたが、ここでは他人の振りを続けるとしよう。かなり離れた所では、ルイズやジョゼット達の姿も見えるが、こちらには事情が伝わっていない感じだ。

「良いかい、先ずはその精霊に名前をつけてあげるんだ。風の精霊らしいから、そう言った名前が良いだろうね」

「名前は決めていました、ノトスですけど？」

私達の会話自体は聞こえていたらしく、風の精霊が嬉しさを表現する為かくるくると回っている。キュベレーも頷いてくれたので気に入ったらしいな。後は、エルネストの時と同じだったから特に問題は無かった。私自身は学院のＯＢで普通に出資者と言う事になっているから問題は無いぞ？多分な。

ちなみにライルは、亜人のドワーフを更に小さくした様な小人（一種の妖精なのだろうな）を召喚して、イザベラ姫は小さな火鳥（ファイヤーバード）と契約したらしい。触っても熱くはないらしいが、火鳥は怒らせるととんでもない事になると書物で読んだ事があるな？

しかし危なかった、転生者達にはなるべく気分良く、明るい未来を信じて生きて欲しいと思っていた所だったのだが、速攻で不幸になる所だったぞ。一応、急な来訪の事情を学院長に報告に行ったの

だが、懐かしい人と会うことになった。

「ミスタ・マーニュ？」

ここでそう呼ばれるのは久しぶりで少しだけくすぐったかったが、陛下と呼ばれるよりは随分マシだな。振り返ると、私と同世代の女性が驚いた表情で立っていた。別に悩む事も無く、彼女が誰だか分かったが、まだここで働いているとは思わなかったな。この女性には変装も無駄だった様だ。

「コラリーさん、懐かしいな。お元気でしたか？」

「はい、色々忙しいですが、そうですね充実した毎日ですよ」

「それは良かった」

「あの今日はどんな御用でこちらに？」

「あ、ああ、知り合いが”儀式”をすると言うので、見学にね。それに今年から姪がお世話になっているので、学院長に挨拶しておこうと思ったんですよ」

「そうですか、やはり”あの”ミス・マーニュは姪御さんだったんですね。そう言えば学院に資金援助をしてくださった貴族の方が居ると聞きましたが？」

「ああ、それは兄の事ですよ。僕は兄の手伝いをやらせてもらっているんです」

マーニュ男爵家自体は、錬金による工業品生産に当初から賛同し

て積極的に錬金メイジの育成にも関わって来ていたから、かなり裕福だが。さすがに傾きかけた学院の財政をポンと立て直す程の資金は無いから、まあ、名前だけを借りた形になるのだ。

「そうですか、それでは学院の使用人を代表してお礼を言わせていただきます」

そう言ってコラリーさんが深々と頭を下げた。慌てて話を聞くと、資金不足の影響で使用人の決して少なくない人数が解雇される所だったそうだ。以前であれば、学院に勤めている使用人を引き抜いてでも雇いたがった貴族も居たはずなんだが、そもそもそんな金があれば、学院が資金難になったりしない訳だ。

教師の中には学院の財政危機を知ってさっさと退職した者もいるそうだ、その代表格がギトー教師だったらしい。彼が学院に来たのは私の卒業後らしいんだが、長く勤めていないとは言え薄情なものだ。

私個人としても、国王としても色々思う所があるな、この国の経済は確実に上向いている筈だが、それだけで全ての人が救われる訳では無い事を胸にとめておかなくてはな。

コラリーさん自身は既に結婚して娘も居るらしいが、部下である若い娘達が路頭に迷うのが心配だったらしい。そう言えば、歴史（物語）ではヒロインの1人のシエスタ嬢はタルブ村で普通に暮らしている筈だ。今は亡きローレンツさんによって、タルブ村はワインの一大産地となっていて、かなり裕福な土地なので奉公に出る必要性が無いのだろう。（もしかしたら、ローレンツさんの意志が何らかの影響を与えていたりするんだろうか？　いや、その話を聞いていた私自身の無意識も影響を・・・、考えたら切が無いな）

「そう言えば、マーニュ様も御結婚されてんですよね？」

「この指輪ですか、はい、子供はまだですけどね」

息子のライルがお世話になっているとは言えないしな。さっきも出来るだけライル達と目を合わせないようにした位だしな。

「そう言えば、貴方にそっくりな生徒さんがいらっしゃいますよ。ライル・ド・レーネンベルクとおっしゃる方ですが？」

「私にそっくりですか？」

そんな事を言われた事は無かったが？　身長も当時の私よりライルの方が高いし、髪の色も瞳の色も違う。話した時の印象で言えば、ライルの事を悪く言う人間をみた事が無い程だが、コラリーさんにも気に入られている様だ。（さすがは、私の息子と言うよりレーネンベルクの子供と言うべきなんだろうな）

「”守護者”の活動を再開させてくれたんですよ、噂はお聞きになっていませんか？」

なんだそう言う意味か、”守護者”の活動はノリスが卒業して以降途切れていたらしいのだが、それをライルが復活させたと言う話は私も聞いていた。

「そうですか、そのミスタ・レーネンベルクの将来が楽しみですね」

「はい、あのレーネンベルクの関係者が、あんな出来た方だとは思いませんでした」

関係者か、この女性も事情は知っているらしい・・・？　あれ、ノリスもレーネンベルクを名乗った筈なんだが？

「レーネンベルクの次期公爵様も、学院に居ましたよね？」

「はい、でもその頃私は、妊娠やら子育てで暇をいただいていましたから」

「成る程、何度かレーネンベルクの方に会いましたが、皆さんあんな感じですよ？」

「そうですか、単なる噂だと思っていたんですが、王都に近いこの辺りから態々鄙びたレーネンベルクに引っ越す人が居るのはそういう理由だったんですね？」

おっと、この辺りをあまり突っ込むと怪しまれそうだな？

「はい、マーニュ領も輪をかけて田舎ですけどね、公爵の所のおこぼれで領民が増えていますよ」

「あ、申し訳ありません」

第百四十八話　ラスティン２９歳（ど忘れ）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百四十九話　ラスティン２９歳（ダブル・ハーフ）（前書き）

第百四十九話ＵＰします。

第百四十九話　ラスティン２９歳（ダブル・ハーフ）

「そう言えば、コラリーさんは列車に乗った事はありますか？」

「その、ちょっと怖くって・・・」

「怖い？」

「何でも、速く移動出来る替わりに早死にするって聞きましたよ？」

「ぷっ！」

本当に真面目に心配そうな顔をして、妙な迷信を披露してくれたコラリーさんには失礼な反応をしてしまった。何だか写真を撮ると魂が抜かれると同次元だよな？

「コラリーさん、それは迷信ですよ。機関車、ああ、先頭で引っ張る部分にはメイジが乗っているんですから」

「そうなんですか？」

「ええ、ここまで来るのに列車に乗ってきたんですけど、何処かおかしく見えますか？」

「いいえ、そうですね、今度王都に行く時にでも、思い切って乗ってみます。実は娘が乗りたがっていたんですけど、その・・・」

お母さんの方が、迷信深かったと言う訳だな。若者達や、商人等は進んで客車に乗るのだが、老人などは乗りたがらないとリッテン

が愚痴っていたのを思い出した。時代の流れと共にごく普通の交通手段になるはずなんだが、私自身はそれを黙って見ているだけでは居られないんだったな。

目の前で、困っているコラリーさんを少しだけ待たせる格好で、思考を進める事にした。そう言えば、転生者の中に1人だけ苦労が報われていない人物が居たな。それはヴァレリアンの事だが、この機会に面倒は一気に片付ける事にするか。

私の頭の中では凡その方針が決まったが、悩んでいた頃と比べて思考の速度が格段に上がっているのが感じられるな。

「コラリーさん、ワーンベルにある劇場で、新しい”劇”が上演されるそうなんですが、噂を聞いたことはありますか？」

「いいえ、それが何か？」

今、思いついたアイデアだから当然噂なんて聞いたことが無いだろうな。ヴァレリアンが始めた劇の公演は一部では絶賛されているのだが、今一歩盛り上がりに欠けると言う報告が”委員会”でされていたからな、支援をしようと思い付いたのだ。

「実はですね、各地から色々な人を招待するそうなんですよ！」

「招待と言いますと？」

「ああ、旅費に宿泊費まで用意してくれるそうです」

「まあ、さすがは公爵様ですね！」

「ええ、何でも文化振興の一環らしいです。まだ王都辺りまで噂は広がって居ないですから、今なら申し込めば確実に招待されますよ」

鉄道に乗る人間が増えればリッテンが喜ぶし、国民の旅に対する考え方も変わるだろう。ヴァレリアンの”劇”を見る人が増えればヴァレリアンが喜び、国としての文化振興にもつながる筈だ。

この時代の演劇は、基本的に貴族は宗教劇、庶民は旅芸人の出し物程度だったから、オペラやシェークスピア辺りをこの世界向けに焼き直した演劇が受け入れられるには、少し時間が必要だと思っていたが、そうも言っていられないんだよな。レーネンベルクがいつまでも田舎だと思われているというのは我慢ならないしな。（こちらが本音と言う訳じゃないぞ？）

「本当ですか！」

「ええ、良かったら帰りに王都に行って申し込んでおきましょうか？　３人ですよね？」

「はい、でも、申し訳ないです・・・」

「コラリーさん、僕がどんな人間か覚えていませんか？」

「ふふっ、そうでしたね」

「良かったら、姪の”タバサ”がどんな生活をしているか教えてもらえますか？」

「どうしてもお知りになりたいですか？」

「え！」

話の流れで聞いただけなんだが、コラリーさんの沈痛そうな表情が動揺を誘いそうになるが、いじめとかにあっているならばライルが何とかしない筈はないのだが？

「何でも、とある方と一緒に、”ダブル・ハーフ”などと呼ばれて恐れられているとか・・・」

「ダブル・ハーフですか？」

何故ハーフなのかは想像が出来るな、半人前と言った所なんだろうな。しかし、”恐れられている”というのはどういう事だろうか？　ジョゼットが本気を出せば、恐れられるのは分からないでも無いのだが？　一応、リボルバーは危ない（他の生徒がな）と言う理由で学院への持込は禁止したのだが、こっそり銃器でも持ち込んだのだろうか？　（ふと童顔主婦の顔が頭に浮かんだぞ？　ジョゼットと接点は無かった筈だが、間にマルセルさんでも入ればどうにでもなりそうだな）

「はい、入学早々に、あのミス・ツェルプストーがいじめに遭いそうになった所を、ミス・ヴァリエールと一緒に庇って返り討ちにしたそうですよ。偶然ですがその場に居た者に聞くと１０対２だったのにあっという間に決着がついてしまったんだとか」

コラリーさんの表情は愉快半分、哀れみ半分と言った所だろうか、２人ともあまり手加減はしなったらしいな。ここの生徒とは言え、その人数差で圧倒するとか義妹達はどうなってしまったんだろうか？　ジョゼットだけなら話は分かるんだが、まあ、その為に色々画策した訳だしな。

これはもしかして、義母も・・・。ああ、あの人も娘をジョゼットと同じ様に鍛えた訳か。ルイズが以前ストレスを溜め込んでいると言う話をしていたが。ルイズの”爆発”なら弾数ほぼ無制限のグレネードランチャーを持っている様な物だからな。

「ツェルプストー？　ゲルマニアの方ですか？」

「はい、今の時期に留学生なんて信じられないですが、やっぱり・・・」

そうだろうな、考えられない事態では無かったが、ライルにも話しておいたのだが、学年が違うからさすがに十分では無かった様だ。勿論、学院長にも事情を話して協力を要請したが、こういった事は教師ではあまり役に立たないと言う事は経験から分かっていた。（彼女の場合はゲルマニア人らしい外見だからな、下手に工作させなかったんだが・・・。普通に考えればスパイだしな）

「そうですか・・・」

「あ、ですが、今は大丈夫ですよ。守護者の方も動いているらしいですし、ミスタ・グラモンが”ダブル・ハーフ”とその他の生徒さんの間を仲介して下さったので」

「ミスタ・グラモンと言うと、彼の弟ですか？」

「はい、随分と出来た方の様で、ミスタ・レーネンベルクと女生徒の方々の人気を二分なさっていますよ」

ミスタ・グラモンと言うのは、”ギーシュ・ド・グラモン”だろ

うな。彼に関しては、まあ、兄のデニスと似た性格に育ってしまったんだろうなと漠然と考えていたのだが、仲介とかするタイプじゃ無いと思うんだが、ギーシュの身に何が起こったんだろうか？？？

何故か心当たりがあるな、ノーラの友人という女性の事が思い出されたぞ？　あのデニスの奥さんと言うには出来過ぎた女性と感じたが、彼女がギーシュの教育に”義姉”として乗り出したのなら、納得が行くかもしれない。（奇妙な話だが、私の無意識より、あのクリオと言う女性の明確な意思が勝ったのだろうか？　こうなると確かにキアラの提案の方が無難なのだろうな）

「そのミスタ・レーネンベルクと言うのは先程も出てきましたが、小さい頃に何度か会っただけなんですが、そんなに良い生徒さんなんですか？」

つい欲求に逆らえず、聞いてしまったが、コラリーさんからは絶賛と言っても過言ではないほどの褒め言葉が紡ぎ出された。概ね私が思っているライル像と差が無い所から、ライルは何処に居てもライルなんだなと思えた。（第三者から息子の褒め言葉を聞くのは喜ばしいと共に恥かしくもある）

それと、ライル自体の身の上が意外に知られているのが分かったのも収穫だった。特に隠していたり情報操作もしなかったから当然なのだが、戦災孤児から次期公爵の養子に、魔法学園と公立学校を優秀な成績で卒業、メイジとしての腕も既にスクエアに到達していてこのまま行けば主席か次席かで魔法学院も卒業確実な、将来有望な若者と言う見方が一般的らしい。

コラリーさん自身の評価は、敵が少ないと言う点を非常に驚いているそうだ。私の学生時代ときたら周囲が敵だらけだった気がする

から、確かに驚きだな。私が異常だったと言う気もするが、ライルを妬む人間は多いと思うんだが、その辺りは私よりライルの方が何倍も経験豊富なのだろう、大して問題にならないどころか妬んでいた生徒もいつの間にか仲間になっているそうだ。

「そうですね、あの方の欠点と言ったら、欠点がほとんど無い事でしょうね。ああ、あのミス・ボヌーと仲が良いのも欠点なのかも知れませんね」

「ミス・ボヌー？」

いや、アナベラ・ド・ボヌーと言うのは、イザベラ姫の偽名なのは知っているのだが、意外と評判が悪いのだろうか？

「ご存知ありませんか？　魔法学園という所からの転校生らしいんですが、身元が全く不明というのが怪しいという噂なんですよ」

失敗したなあの頃は私自身もあまり正常では無かったから、十分な身分工作をする気も、おまけに時間も無かったからな。偽名を使って、変装をして（髪の色とかな）いれば、他人の受けも良くないだろうな。（世間知らずと言うのもあるのだろうが、それが不自然さを強調しているのだろう）

「まあ、魔法学園の生徒であれば、普通の平民なのでしょうから、身分は明かしたくないでしょうね」

「いえ、何と言うか、入学したての頃は何処かの高貴な身分の方がお忍びで来られたのかと思いました」

完全にばれてるな、まあ、イザベラ姫に演技とか無理そうだった

からな。答えを濁す積りだったが、コラリーさんの方から話を進めてくれた。

「ミスタ・レーネンベルクを独り占めしているのも嫉妬を集めているんでしょうね」

「そうなんですか？　あまり女性の心理には詳しくないですが・・・」

ライルにも、難題が持ち上がっていた訳か？　しかし、彼らがそれを問題と認識していたかは疑問だな、少なくとも暗い表情をしたイザベラ姫を見た事が無かった気がするからな。

それにライル自身は知らないだろうが、父の所にライルを養子にくれないかという話も時々舞い込んでいるらしい。レーネンベルクや、”王家”（実感は薄いが、私とノーラの事だぞ）と縁を結びたいと言う程度ならば父がどうとでもしてくれるだろうが、時々本気でライルに家督と継がせたいという貴族も居るそうで、対応に困ると父が嘆いていた。

弟のノリスの事も含めて父も頭が痛いことだろうな。ジョゼットが出自を知ったらどういう行動をするか、その時ノリスがどんな行動を取るかとか、私の両親ならかなりの精度で予想出来ているんだろうな。ライルにレーネンベルクを継がせるとか本気で言っていると思えたぞ？

ライルは能力的にも、人柄的にも問題は無いが、血筋的には大問題なんだがな。私自身は王など相応しい者がやるべきだと思うが、この世界の王家の血筋には特別な意味がある筈だからな・・・。公爵家や大公家等は血筋を無視する訳にはいかないのだ。考えてみれ

ば、王家の血筋自体も拡散している可能性があるのか？　これは考えても始まらないな、調べさせる事にしようか。

第百四十九話　ラスティン２９歳（ダブル・ハーフ）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百五十話　ラスティン２９歳（文化振興）（前書き）

第百五十話ＵＰします。

第百五十話　ラスティン２９歳（文化振興）

「それで、そのミス・ボヌーという女性は、今はどうなさっているんですか？」

「はい、去年は、ミスタ・レーネンベルクや、ミスタ・アンジェと一緒にいらっしゃる事が多かったですが、今年に入ってからは姪御さん達と一緒にいるのをお見かけしますね」

「”タバサ”がね～」

「？？？」

転生者にしかこの気持ちは分からないんだろうな？　”タバサ”と仲が良いイザベラ姫なんて、２次創作ネタでしか有り得ないだろうしな。

「そのタバサですけど、何か変わった所はありませんか？」

「そうですね、あの、言い難いですがミス・マーニュは、もしかしたらミス・ヴァリエールに敵対とは言いませんが・・・」

「？？？、競争意識ですか？」

「そう、それです。そんな意識を持っていらっしゃるんじゃないでしょうか？」

コラリーさんが言い難いと言ったのは、学生時代の私とノーラの関係を知っていたからか？　ああ、普通に考えれば今は王妃となっ

たノーラと、昔、親しかった男性と言うのは歓迎出来ないだろうからな。

しかし、コラリーさんが言いたいのは、それだけでは無いかも知れないな、ジョゼットがどうして今年魔法学院に入りたかったかという話も納得が行く気もする。似た境遇の異性と言うのは引き合うものがあるらしいが、それが同性だった場合、ライバル心が芽生えるというのも私自身経験があるからな。私の場合は相手が悪かったのか、今では親友などになっているがね。

「僕にとってのミスタ・オーネシアが、タバサにとってのミス・ヴァリエールになっただけですよ、心配は要りません、きっとね」

「そうですか？　エルネスト様でしたか、次のラ・ヴァリエール公爵になられると噂を聞きましたが？」

「そうらしいですね、今でも時々会いますが、雲上の人になってしまった感じですよ」

「ふふふっ、そうだ、面白い話をお聞かせしましょうか？」

「タバサについてですか？」

「そうです、ミス・マーニュはですね、時々他の生徒さんから告白されているんですよ？」

「へぇ、随分ともてるんですね、あの娘も」

ノリスが聞いたらどう思うだろうか？　何と言うか、あまり男子生徒にもてそうに思えないんだけどな。自分より強い女性に憧れる

生徒が多いんだろうか？

「はい、特に上級生の女生徒の皆さんに大人気で！」

「はぁ？」

何やら雲行きが妖しくないか？

「何でも、弟にしたいと言う方々が多いそうで」

「妹では無いのですか？」

「はい、勿論です！」

力強く断言されたぞ？　テッサの出方の方が要注意だった様だ、ノリスの作戦勝ちなのか？　コラリーさんによると、潔癖症の女生徒には”男”を感じさせる男子生徒より、男を感じさせない”ボクっ娘”の方が人気があるらしい。そう言う女性が何かの拍子であっちに転んだり、腐ってしまうのだろうか？

「あの何時も、タバサと一緒に居る女生徒が居ませんか？」

「えっ、えーっと確かにいらっしいますね、確か・・・あら？」

「テッサ・ド・ガイヤールではないですか？」

「そうです、ミス・ガイヤール！　確かその方でした」

テッサも随分と徹底しているみたいだな、父には”ジョゼットを陰から支える”と言ったそうだが、プロであるメイドのそのまた頭

であるコラリーさんにまで名前を覚えられないなんてな。基本的に学院の使用人に名前を覚えられないようにするのは難しいのだが、全てを自分でこなしてしまえば、覚えられ難くはなるだろう。（もしかして、ジョゼットの身の回りの世話なんかもしているんだろうか？　毛染めとかは少なくとも手伝っているんだろうな）

しかし、テッサのジョゼットへの傾倒ぶりは以前から引くものがあったが、ここに来て、更に磨きがかかったらしい。ジョゼットの為ならば何でもするという気がするぞ？　どうしてここまでと考えないでもないが、両親が私の知らない所で動いていたのは確実なのだろうな。テッサの希望を後押しした形だから文句を言う積りはないがねぇ？

それからしばらく、コラリーさんに今の学院に関して色々聞くことが出来たのは意外に収穫が多かった。やはり国王としてではこういった話は聞けないしな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

学院からとんぼ返りした翌日から、”文化振興”に関連した政策を提言し始めた。美術，文芸，舞台芸術，音楽，建築などの多岐に渡る分野の専門家達を招聘して（時にはこちらから出向いてだな、芸術家と言うのも、変人が多いのが良く分かるな）連日意見を聞いて行った。

彼らは概ね、トリスタニア近郊かパトロンの貴族の領地に居たんだが、多くが支援者を失ってしまい。かなり困った状態なのが確認出来た。以前は教会から宗教画等の製作を請け負っていたが、それが無くなりやっと貴族と言う次の支援者を見つけたのに、その貴族自身が借金苦に陥った事で途方に暮れていたらしい。

芸術家と言う人種に偏見は持っていないと思うが、彼らはあまり自分の作品を商品とする事を好まないらしく、ロワイエさんとヨルゴさんの様な関係を構築するのは難しいらしい。人には見て欲しいが売り物にはしたくないという複雑な心境だそうだ。レーネンベルクで一時的に保護する形にしたがそれが正解だとは思え無い。（何せレーネンベルク家は芸術音痴の巣窟だからな、まあ質実剛健という長所の裏返しなんだから仕方が無いだろうな）

とりあえず、レーネンベルクに多くの芸術家が集まり、それを目当てに鉄道を使って全国から人が集まるという流れは出来たから、リッテンやヴァレリアンの不満は解消されるだろう。

＝＝＝

他の転生者達は概ね問題は無いだろう。リッテンとバベットとロドルフは説明は不要だろうな。

・アミラとフリード

この2人は最も早く結果を出している。翌年は無理だったがレーネンベルクに入ってから2年で劇的に農作物の収穫量が増え始めて今では2倍になっている兵団の活動で単位面積当たりの収穫量は他の領地の追従を許さないレーネンベルクだったんだから2倍と言う数字は本当に有り得ないと言っても良いかも知れないな。

最近は熱心に領外への農業指導に出かけている2人らしいが、兵団の施設隊の組んで活動することでより的確な活動が出来ると喜んでいた。植物の促成栽培などを行えば品種改良が年単位ではなく月単位で行えるとなれば驚くだろうな。他にも肥料なんかは用意して持っていく必要も殆ど無いしな。

きっと１０年もすれば、この国の食料事情は今とは全く別になっているんだろう。国土の小さい我が国にとっては、輸入だけに頼っているのはあまり喜ばしい事では無いからな。

・サンディ

彼に関しては生徒の様な年齢で教師に対して意見をする事に当初は結構違和感があったらしい。今は亡き初代理事長が居なければとても困った状態になっただろう事は疑いないな。ローレンツさんが後の事を考えて公立学校の教師陣とサンディの橋渡しをしてくれていたお陰で、サンディと教師陣の間はほぼ信頼関係が出来上がっていると思える。（教育学に関しては、私やローレンツさんの知識がどれだけ素人だったかと思える程だな。まあ理想の学級などはなかなか理論やドラマ通りに出来るものじゃないがな）

問題は新しく理事長に就任した某男性の方にあると言っても良いだろうな。アンセルム自身もサンディも別に悪い人間とは思わないが、どうも相性としては最悪らしい。どちらかと言うと世間を斜めから見ている感じのアンセルムと、何事にも体当たり！的なサンディだから仕方が無いんだろうな。

現状では、アンセルムは対ゲルマニア戦略と戦術を練っている最中なので表面化はしていないが、問題が生じる可能性がなきにしもあらずだろうか？（アンセルムが排除されるような状態は我が国としても大きな損失だからな）

・ベレニス

ガリアに送り込んだベレニスだったが、伸び悩んでいた養殖方面で早速成果を出してくれたらしい。養殖で使う生簀等には苦労するのではないかと思っていたが、あっさりと解決してしまったらしい。海中には地上以上に結構物騒な海生生物が居るはずなんだが、何ら

かのマジック・アイテムが劇的に効果をあらわしたそうだ。（この方面ではガリアが一歩も二歩も先を行っているのだ）

話は少し外れるが、この世界で海運業が栄えないのはこの海魔の類の為だ。”クラーケン”，”レヴィアタン”なんて前世では架空の生き物だった物が実在しているらしい。特にシーサーペントの性質が悪くある程度以上の船（普通の海上を航行する方だぞ？）には積極的に襲い掛かってくるそうだ。

海魔除けのマジックアイテムがあれば海運業も盛り返すかも知れないな。漁業でも遠洋航海が可能になるかも知れない。今度のガリアの愚痴王との交信で、交渉してみようと思う。陸上で使えれば亜人おっといけないな、鬼の類を避けるのに使えるかも知れない。

・クロエ

彼女は平民メイジなんだが、ロドルフとは違いレーネンベルク魔法兵団や魔法学園そしてトリステイン魔法学院にも興味を示さずにエルネストの下で化学薬品の再現に挑んだり、カロリーヌの所で魔法薬の研究をしたり、母の所で魔法薬の知識を習ったりしている。

私の従妹モンモランシーとも仲が良いらしいのだが、誘われても魔法学院に行かなかったのは、如何にも転生者らしい行動だと思うぞ？

・ルネ

彼に関しては、結構無茶をしている気がする。街を1つデザインしてみろと言われて張り切るのは分かるんだが、不眠不休で建物の設計図や都市計画図を描き続けるのはどうかと思うぞ？　お陰でマネジャーと化したカロンが苦労する訳だ。まあ、2人が噛み合っているからこそ、新トリスタニアが姿を現しつつある訳だがな。

新トリスタニアは完成までにまだ時間がかかると報告を受けてい

る。まあ、事情が事情だから仕方が無いだろうな。トリスタニアの近くにもう1つ街を作れるほどの土地があるのには理由があるのだ。この国全体に言える事だが、海抜が低いというのが問題なのだ。

一応干拓は行われて来たのだが、規模は小さいものばかりだったし、それは国の中枢でも言える事だった。トリスタニアの南西には広大なとは言えないがかなりの広さの湿地があり水利の良さから所々で農場が細々と営まれていた。水稲でもあれば良かったんだろうがこれといった作物が無い為、王都の近くという条件の良さが全く生かされていなかったのだ。

そこにカロンが目を付けて、ルネの知識、魔法兵団施設隊の魔力、そしてレーネンベルクからの土石を使って、地盤の改良に乗り出した訳だ。当初は鉄道が開通していなかったから魔法で湿地に基礎を作っていたんだがどうにも効率が悪い上に、長期間の安定性という面でも問題があったんだが、鉄道が通ってからは使い辛い土や石を運んで来てどんどん地盤を固めていったのだ。

さすがに一気大きな平坦な土地が出来ると言う訳には行かないが、それでも数百年単位で安定して使える土地が毎日の様に広がって行くし、そこにはあっという間に近代的な（私の目から見てだぞ？）建物が次々に建築されていくのだ。ワーンベルを知っている人間なら兎も角、普通の人間には中々感慨深いものがある様だ。

新トリスタニアを端的に説明するなら、東西南北に鉄道が走り中央に大きなトリスタニア駅（ユトレヒト中央駅を参考にしたらしいが、全然知らないのだ）がある。それに加え、放射状に（3時、6時、9時、12時以外の方向だが）動脈とも呼ぶべき幅100メイルの道路が整備され、同心円状に50メイル～10メイルの道路が整備されて行く形だな。実に経済的な効率を優先した作りになっている訳だな。（将来自動車が走り回る事になるのが前提なんだよな）

純粋に戦術的にみれば攻め易そうな町になってしまうが、私（す

まない偉そうな事を言って、私達はが正しい）はこの街をトリステインの経済的な中心にする積りなので、そこは目を瞑る事にした。ただ、新トリスタニアを抑えただけではこの国の経済を完全に停止させるのは難しいだろう。

一方旧トリスタニアは政治的な中枢にする予定だ、本気で国会議事堂（なんて呼ばれるか分からないし、本当に必要になるかさえも不確かだが）の様な会議場も建設を始めた。今まで不確かだった国の各部署を再編成して専用の庁舎を割り当てる事が可能になったのは、住民が少しずつとは言え新トリスタニアに移動し始めたのが原因だろう。（土地と資材さえあれば、建物を作るのは時間がかからないからな、実用本位であればだが）

まあ、ルネとカロンにはもう暫く頑張ってもらう事になるだろうが、期待に答えてくれると信じているし、それは現状を見れば過大な期待だとは思わない。

第百五十話　ラスティン２９歳（文化振興）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百五十一話　ラスティン２９歳（戦争に向けて）（前書き）

第百五十一話ＵＰします。

第百五十一話　ラスティン２９歳（戦争に向けて）

☆戦争に向けて

さて、来るべきゲルマニアとの戦争の為に我が国の中でも色々と準備が進んでいる。実際の所、その時まで大規模な行動は起こさない予定だが物資や人員の移動を効率良く行う為に鉄道の増設や訓練は地味だが順調に進んでいると言うべきかも知れないな。

ゲルマニアが編成しつつある大規模な空軍に対抗する為の準備は少しずつ進んでいる。本来なら大規模にと言いたい所なんだが、どうも諜報戦に突入しているからなんだなこれが。我が国にもゲルマニアにも内通している人間が居るから仕方が無いと言えば仕方が無いのだろう。まあ外交なんてものは騙し合いの側面もあるから仕方が無いが不便な事だな。（と、報告に来たアンセルムの奴が愚痴っていたが、奴もあの人物に愚痴られているらしい）

・空軍

空軍は、ワーンベルを中心にコルベール先生とミネットが中心に行った新発明の結果を兵器として運用する方法を立案するという方針になっているのだが、少々手間取っているらしい。竜騎士達の訓練方法を真似ていたらしいが、ほとんど暗中模索の状態で戦法などを考案しているらしい。

無線機があればもっと上手く運用出来そうなんだが、手持ちでは足りないから、最悪はガリアから”声を伝える者”を借り受けなくてはならないだろうな。（いつも愚痴を聞かされるんだから、それ位は・・・、無理かな？）

・陸軍

陸軍の方は、ごく普通の訓練を行っているのだが、傭兵団を幾つか組み込む事に成功したので錬度もかなり上がっているらしい。しかし、傭兵団を受け入れるなんて某元帥も丸くなった物だな。

ゲルマニア戦では戦略的にはあまり実戦を行わせる積りは無いのだが、これからも軍事力はそれなりに必要なのだ。諸侯軍を集める事も考えたが、運用そして維持が大変だから国王軍を再編成して新兵を募集する形に落ち着いた。

どうでも良いがデニスがやたらと張り切っているという噂を聞いた。特に新兵をいじめじゃないくて鍛えるのに熱心だとか・・・。

（夫婦仲が上手く行っているのかいないのか、私には分からないがノーラはその話をした時に楽しそうだったから問題は無いだろう）

・魔法兵団

レーネンベルク魔法兵団の方も再度戦闘訓練を開始した。警備隊に人員を回せるだけの余裕が出来たのがこれを可能にした訳だな。主に陸軍の補助的に使う予定なのだが、一部空軍にも人を送る形になった。空軍だけでは無く魔法衛士隊にもかなりの人数を送り込む形になった。警備隊の隊員はグリフォン、ヒポグリフ、マンティコアの3種の幻獣以外の使い魔を持った者が多いが衛士隊空学ぶ事が多かった様だ。

・諸外国

諸外国の状況は、着々と、と言った感じだろうか？

ガリアに関しては、随分前から準備は整えているし切欠さえあればガリアだけでも戦いを始めそうな勢いだ。先のゲルマニアとの紛争では犠牲者が多かったから、我が国とは戦争への意気込みが違うと感じるな。それだけ、ジョゼフ王が国を上手く動かしているのだろう、これに関しては宰相の働きも無視は出来ないんだろうな。

ロマリア王国に関しては、基本的にゲルマニア包囲網には直接は参加しないという方針を変えない様だが、ゲルマニアへの物資の供給も行わない事で同意が取れているからゲルマニアにとっては地味に効くボディーブローの様なものだろうな。誰かがゲルマニアに物資を送ろうとしても表向きには送る経路が途切れた形になるからな。（我が国でも密輸等は増えているが、それは厳しく取り締まっている。上手く行けは、ゲルマニアと繋がりのある貴族なんかも炙り出せるからな）

アルビオンは全面的な協力を約束してくれている。まあ、そうしない訳には行かない事情が事情なんだが。（ジェームズ1世はこれからアルビオンをどうする積りなのだろうか、いや、これは余計な心配だな）　アルビオン王立空軍の派遣まで約束してくれたが指揮権までは貸してくれなかったからどう使うかが難しい所だ。

ゲルマニアとアルビオンの空軍同士を正面からぶつけたら被害だけが大きくなりそうだからな。こんなつまらない戦争で被害を大きくしても無意味だし、おとり役が良いんだが露骨にやるとアルビオン側も気を悪くしそうだしな。（この辺りは気を付かなくてはいけないだろう？）

その他の小国は、その時になって見ないと動きが掴めない様だ。ゲルマニアに協力的な国も少ないが、包囲網に積極的に参加する国

も殆ど無い。日和見な事だが、小国の生き残り方としては適切なのだろう。下手に味方になっていたのが突然裏切られるよりはマシだと思う事にしている。（国土だけ見れば、トリステインも十分に小国だが、現在のトリステイン王国を小国と呼べる国は無いだろうな）

後はどのタイミングで、どちらの陣営が仕掛けるかの問題という気がするが、出来ればゲルマニアに攻め込めさせたいというのが我が国の方針だった。勿論そのまま侵略させる積りは無いが、その後の政治的な動きを予想すれば、正義はこちらにあるとしたいしな。

・ゲルマニア

ん？　戦争が始まってもいないのに、取らぬ狸の皮算用じゃないかって？　今の国際情勢やゲルマニアの国内の状況を見れば至極自然な考えだぞ。陸軍の総数でガリアと同等、空軍のフネの数でアルビオンと同等なんて状態を作り出すにはゲルマニア国内でかなりの無理が出ている。

経済的な混乱は勿論、政治的にも混乱の兆しが見えるし、平民メイジだけでは無く普通の平民もゲルマニア周辺国への難民として逃げ出している程だ。この状態でもまだ、国が成り立っていて、軍備も整えられるというのはゲルマニア首脳部の間違った有能さをしめしているのだろうな。

マテウス・フォン・クルークは自分の行動が異常なのを気付いているのだろうか？

そして、ナポレオン1世は自分が”オリヴァー・クロムウェル”の二の舞を踏もうとしている事を理解しているだろうか？

全く本当に下らない戦争だ！　あの親子を暗殺出来れば話は早いんだがな。ガリアは既に試したそうだが、失敗に終わったらしい。優秀な護衛がいるだろうし、普通にナポレオン１世を暗殺するのは多分この世界では難しいだろうな。（転生者の誰かが直接手を下せば可能だろうが、そんな人材はいないしな）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

☆不良メイジ

ゲルマニア国境付近がキナ臭さを増している時期だというのに、トリステイン国内でも少々問題が発生しつつある。一応予想はしていたんだが、国や領主に管理されないメイジが少しずつではあるが増えていて、その”不良メイジ”達が色々問題を起こしているのだ。

我々には、ほぼ１００％の確率でその人が”隠れたメイジ”かどうかを見分ける手段があるのだが、それが無くてもほぼ２０％弱の確率で未だに”隠れたメイジ”が普通の平民として暮らしているのだ。そんな中で少し前まで自分と同じ”非メイジ”だった隣人が、急にメイジになったとしようか？

”自分もメイジになれるかも！”

と思っても責められないが、現実は性質が悪く５人に１人はメイジになれてしまうのだ。

＝＝＝

魔法兵団に入れなかった様な性質の悪い平民メイジの下でこっそり魔法を習う事が秘密裏に行われていたらしく、あらゆる意味で質の悪いメイジ（不良メイジ）が少なからず生まれてしまったのだ。こっそり裏でメイジになろうという人間が善良である筈も無く、それを指導するメイジも性格に難ありだから、生まれるメイジがまともな筈も無い。

幸い腕の方もお粗末で魔法学園の卒業生であれば十分圧倒出来る程度だが、非メイジの人々から見れば十分に脅威なのだ。見つかれば簡単に排除されるのだがこの問題は根本解決が難しいのが頭の痛い所だ。新たに生まれた不良メイジが更に不良メイジを生み出すという悪循環が予想出来てしまう。（なるべく嫌な想像はしないようにしているのだが、これは対策を考えない訳にはいかない問題になるだろうな）

今は、魔法兵団や領主直属（正確には領主代行指揮下）の平民メイジの評判を上げる役に立っているが、それも何時まで続くのやら。選択肢が無かったとは言え、本当に難しい問題である。とりあえず不良メイジには厳しい刑罰を与える様にしているが、それ自体が恨みを買う事になるのだから救われないよな？

機会があれば、エルネストに相談して見よう。メイジを非メイジにするなんて方法があるとは思えないが・・・、いや奴の事だから何かアイデア位は持っているかも知れないぞ。何せ私の義弟はマッドだからな！

＝＝＝

もうすぐ、例の実験結果が出ると言うのに色々問題が山積みで（私に周りが）忙しい。私自身はこの国の将来をどうすべきかも考え

なくてはならず、落ち着かない毎日を過ごしている。

第百五十一話　ラスティン２９歳（戦争に向けて）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百五十二話　ラスティン２９歳（ザ・良い子）（前書き）

第百五十二話ＵＰします。

第百五十二話　ラスティン２９歳（ザ・良い子）

ゲルマニア対策とは別に私が最近頭を悩まされる事は、息子のライルの事だ。とは言っても別にライルがぐれた訳じゃないぞ？　それに、ゲルマニア対策に頭を悩ませているのは私ではないがな。

順調に行けばライルも一年と少しで魔法学園を卒業する事になる。そうなると一人前の大人になる訳だ。ライル個人としては、トリスティインの為に働きながら、何時かはイザベラと結婚して家庭を持ちたいと考えている様だ。父は、ノリスにもしもの事があれば、レーネンベルク公爵家を継がせても良いなどと言っていたが、王家ではそう簡単には行かないだろうな。

「ラスティン様、何を珍しく真剣な顔で悩んでいるのですか？」

「キアラ、知らない人が聞いたら誤解するぞ？」

いや、あまり不用意な思考はしないように心掛けているから、本気で悩む事は多くないんだが。

「失礼しました、それで？」

「ああ、ライルの事だよ」

「ライル君の？」

「アンセルムが態々、ライルの学生時代の成績やらを報告してくれたから、良い機会だと思ってね。ライルを王子として認めたらどうなるだろうな？」

「何か問題でも？」

「何かって、始祖の血って言う下らない話だ」

「ですから、それが何か？」

「？」

「ライル君個人は、十分に優秀だと聞いていますが？」

「ああ」

アンセルムが魔法学園や公立学校の成績と教師や生徒達の評判まで調べて報告してくれたから、第三者的に見ても間違いないだろう。アンセルム理事長がライルを評して、”お前の義理の息子って嫌な奴だな！”と言っていた。発言の内容とか色々問題があるが別に気にするような仲でもないしな。

アンセルムの様な人間に嫌な奴と言われるのはある意味褒め言葉だしな。ちなみにアンセルムから見てキアラなどは”すっごく嫌な奴”だそうだ。この場合は別の意味が含まれているが、それを差し引いてもライルがキアラほどではないにしろ優秀な人材だと言うのは事実だ。

また、ライルの場合は飛び抜けて優秀と言う訳ではなく、妙な所で優秀過ぎないという面白い学生だったらしい。とある教師によれば”ライル君はどんな事でも一番最初に覚えてそつなくこなす子でしたね”

とか

”あの子は不得意な事は無かったんじゃないかな、どんな教科でも上位だった気がするよ”

とか言われているらしい。それに加えて、

”ライル君が居るとクラスの雰囲気と言うのでしょうか、何か特別な力を持っている訳じゃないのに、クラスが明るくなりましたね”

とまで言われたのには少し驚いた。ライルがそこまで人望があるとは思わなかったからな。

ここまでの話を聞くと、優秀すぎると感じるかも知れないが、どの教科でもトップを独走と言う訳じゃなく、上位にいたと言うのがポイントだった。他の生徒も1教科位は得意教科がありそれを努力すれば、ライルを出し抜く事が可能だったらしい。総合成績だけは飛び抜けて優秀な同級生にでも努力すれば勝てるとかなれば、クラスメイトとしても勉強のし甲斐があっただろうな。ライル自身も負ければ悔しがって次の学期には抜き返すとかやっていれば、クラスの雰囲気が良くなるのも分かる。

ちなみにライルのクラスメイトだった子供達は多くが高等学校に進んだらしいが、ライル自身は高等学校には進まなかった。ライル自身は公立学校と魔法学園に同時に通っていたから結局普通の生徒より倍近く時間をかけて卒業した形になるのが理由の1つだし、ライルが専攻したかったのは魔法だったから、高等学校には向かなかったと言うのも理由だろう。（当時の理事長のローレンツさんも結構匙加減が難しかっただろうな）

一方、魔法学園の方は良きライバルのロドルフの存在で実に充実した物だった様だ。総魔力量ではロドルフ、技術ではライルとまで言われたらしい。ロドルフが真面目に魔法の授業を受けていたとは思えないが、それでもライバルはライバルだったんだろうな。魔法学園は兵団員養成が主目的になっているから実技に重みが置かれているが同世代では右に出る者は居ないという2人だったそうだ。（多分2人だった事が無用な妬みとかを受けなかった理由なんだろう）

こうして話を聞くと全く欠点らしきものが見当たらないライルだ。運もライルに味方しているとさえ感じる人が多いだろうが、ライルが本当に運の良い人間だったのなら、義理の息子などにはなっていない事は、多くの大人が心得ている事だった。

ライルの欠点と言う程では無いが、人間らしい、或いは少年らしい話といえば、ライルの様な完璧に見える子供でもやはり嫌いな人間も居れば、苦手な人間も居るし、恋もするし、悩みもすると言う事は身近な人間しか知らないんだろうな。そう言えば、ロドルフが面白い話を教えてくれたな。

＝＝＝

「ライルが取っ組み合いの喧嘩をした？」

「はい、ラスティンさんでもやっぱり信じられませんか？」

「そうだな、何時も微笑んでいる印象があるからね。親の僕だって怒ったところを見た事が無いし」

「そうですよね。僕も友達から話を聞いたときは驚きましたよ」

「それで、喧嘩の原因は何だったんだい？」

「えーっと、確かその喧嘩相手が何気なく、”両親なんて死んじゃえば良いのに”とか言ったらしいですよ」

「そうか・・・」

「ライルらしいでしょう？」

「そうだね、自分が親の死で成り上がったとか言われても怒らないくせにな」

「ええ・・・。でもそいつとも仲良くなったらしいですから、本当に出来過ぎた子供ですよね？」

「そう言えば、ライルに嫌いな人間が居たと言ったら驚くか？」

「あの”ザ・良い子”に？」

「ああ、隠す事でも無いだろうから教えるけど、アンリエッタだよ」

「へぇ？」

「アンリエッタ王女をライルは嫌いだったらしいぞ、理由はまあ、怒ったのと同じ様な物かな？」

「へぇ～、アンリエッタ姫をね」

と言う会話が転生者同志でされた訳だが、ライルは知らないだろ

うな。しかし、ライルが二つの学校に通っている頃は、ジョゼットの魔法障害の治療時期と大体一致するんだよな、良くもまあこの成績を残せたものだな。

＝＝＝

「ラスティン様？」

「ああ、すまないな」

「私がライル君を王子と認めるのを勧める理由は分かりましたか？」

「分からないな、降参だ」

１つ肩を竦めて、キアラは意外とすんなり理由を教えてくれた。

「ライル君と、ガリアのイザベラ王女ととても仲が良いですよね？」

「そうだな、このまま行けば、結婚するんだろうな」

イザベラ王女の方もライルにべったりという感じだしな。学院でも同様らしくライルを独占していると言う事で嫉妬されているそうだ。全く父娘揃って、人間関係が不得意なのだな。カグラさんの人懐こさを見習って欲しいものだ。いや、イザベラ王女がアナベラとして近くに居るからこそ、ライルに妙な貴族の娘のアタックが防がれているとも考えられるな。（私などよりもライルの方が余程転生者らしいかも知れないと思えるほどの星巡りの良さだな。人徳と言った方が良いのだろうか？）

「ライル君が始祖の血を引いていなかったとしても、ライル君の子供はどうでしょう？」

「あ？　そうか、それは盲点だったな」

「年の為言っておきますが、ガリア王家にもトリステインの王女が嫁いだ事がありますよ？」

「そうか、そう言う事なら確かに問題は無いな」

随分と昔の話を知っているんだな？　待てよ、忙しい筈のアンセルムがライルの事を報告に来たのに違和感を感じたのは気のせいでは無かったらしい。キアラも他人の息子の事まで良く気が付くな。

「何でしたら、ライル君も隠れた王家の血筋とかにしておきましょうか？」

「それは話としては出来過ぎじゃないか？」

「マース領でのライル君の評判をご存知ないんですか？」

「いや、マース領までお忍びでは行けないだろう？」

何だか睨まれた、無茶を言っているのはキアラの方じゃないか？　マース領の普通の人達に会う機会なんて最近は無いし、マース領で修行して来た高等学校の卒業生達は、私におべっかとか使わないし、いきなりライルの事を褒める貴族などは明らかに信用出来ないしな。よし、国が落ち着いたら遠出してお忍びを敢行しよう！

「まあ、何て呼ばれているかは興味が無いが、ライルがライデンの

町でどう育ったかは聞いているぞ？　本人が気にしていないから問題ないと思うが」

「もう良いです、ライル君は親を亡くした人々にとって、希望の星なんですよ。劇中でもライル君が養子になる所は見せ場なんですから！」

その劇の台本を書いたのはキアラなんだろうね？　未だにあの情けない逸話が上演されているのか・・・、聞かなかったことにしよう。

「ふぅ、それでライルの身上捜査は始めたのか？」

「はい、ですが、ちょっと手間取っています」

ほう、キアラの事だから、両親の出身地位は調べ終わっていると思ったんだが、読み違えたのか、珍しいな。

「まあ、分からないならそれも良いと思うぞ？」

「ですが、何かあった時に、ライル君の傷になりますよ。調査は続けた方が良いのでは？」

「そうだな・・・、任せたよ。両祖父母の現状が確認出来れば良いからな？」

「はい」

ライルの害になりそうな人物だった場合は、まあ、無難に国外に出てもらおうかな？

第百五十二話　ラスティン２９歳（ザ・良い子）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百五十三話　ラスティン３０歳（巫女さん来る）（前書き）

第百五十三話ＵＰします。

巫女さんなので、あの方の妹ですよ？

第百五十三話　ラスティン３０歳（巫女さん来る）

ハルケギニアは緊張感を増しながらも、一見平穏さを保っていた。私自身も３０歳になったが別に何の感慨も浮かばなかった、それよりもう直ぐルイズやジョゼットが使い魔召喚の儀式を行う時期が近付いていた。事情を知っている極少数の人間にとってはとても重要な出来事だが、普通の人には毎春の儀式に過ぎないのだろう。

さて、どんな存在が召喚されるのだろうか？

＝＝＝

ジョゼットのサモン・サーヴァントの呪文が完成すると懐かしい銀色のゲートが現れた。暫く待っていると、そのゲートから一瞬誰かの手が彷徨うように少しだけ顔を見せたが、次の瞬間驚いた様に直ぐに引っ込んでしまった。

「あ、あれ？」

「ミス・マーニュ、呪文に集中しなさい！」

バルザック先生の注意の声がとんだが、その時には銀色のゲートは閉じてしまっていた。はっきりとは見えなかったが女性の手だと思えたんだが、何か妙だったな。目の前に急にあんな物（銀色のゲート）が現れれば驚いてしまうとは思うが、召喚について知らない普通の人間ならいきなり手を突っ込んだりしないと思うんだが？（棒で突っついたり、何か投げ込んで反応を見るよな？）

「ミスタ・バルザック！　もう一度お願いします！」

「ミス・マーニュ、今のを見たでしょう？　召喚される側に何かの不具合があるのかも知れませんよ」

「ですが、今じゃ無いと駄目なんです」

「どうしてかね？」

「何となくですけど、確信があります！」

「そうは言っても・・・」

バルザック先生が困った様に、私の方へ視線を向けて来たぞ？こんな事をふられても困るんだが、ジョゼットの様子を見ると妙に落ち着かない様子だった。もしかしたら後に控えているルイズへの対抗心かとも思ったがどうやらそうでは無いらしい。召喚されてくるのも女性っぽいからまあ、大事にはなるまい。そう思って軽く頷き返した。

「良いでしょう、儀式を再開します」

バルザック先生の返事を待ちかねたように、ジョゼットのサモン・サーヴァントの呪文を唱え直した。結構早口だったが、コモンマジックはこれが可能だから有用なんだよな。そんな事を思っていると、何を思ったかジョゼットが自分で開いたゲートへ素早く近付いて行った。

この娘は何をやっているんだろう？というのがその場の他の人間の感想だっただろう。ゲートの目の前に陣取って召喚者の方がゲートに手を突っ込みそうな感じだった。もしかして、今度手が出てきたら引っ張り出そうとか考えているんだろうか？　だが次の瞬間に

起きた事態はその場に居た殆どの人間の予想外だった。

「ジョゼット！」

今のはライルか？　その声とほぼ同時に、ゲートの中から鈍く光る刃が突き出された来た。ジョゼットは咄嗟に身体を捻りそのまま刃（小太刀だろうか？）を脇に挟み込むとその刃を持った手を引っ張り出す形で後ろに思いっきり跳躍した。見ていて惚れ惚れとする動きだった、普通のメイジだったら避けきれず酷い怪我を負っていたかも知れないな。

少し遅れてテッサがジョゼットの所に駆けつけたが、ジョゼットの体に特に問題は無さそうだった。召喚された小柄な女性が、苦労して立ち上がった。その前に2人を守る様にテッサの使い魔が立ち塞がったまでは良かったんだが、その女性は風韻竜のに気付いた風もなく両手を前に彷徨わせ、その手が風韻竜の腰下辺りに触れるとそのまま倒れこんでしまった。（何だこの状態は？）

「きゅい？」

途方に暮れたようなわざとらしい風韻竜の泣き声がシーンとしたその場に響き、バルザック先生が私の方を見ていたが、どうしろって言うんだこの状況を！　こちらも力なく首を振ると、流れでバルザック先生がこんな事を言い出した。

「それではミス・マーニュ、コントラクト・サーヴァントを」

「はい」

いや、いきなり切りつけられたのに使い魔契約ってどうなんだ？

その場面を見た事は無いが、危険な使い魔が召喚された場合は一度痛めつけて屈服させてからとか聞いた事もあるんだが。意識の無い人間と強引に契約すると後々面倒な事にならないだろうか？

「「「きゃー！」」」

真面目な事を考えていると、既にジョゼットが”契約のキス”をする所だった。傍から見れば、小柄な男の子が気絶した女の子と抱き起こして、キスをしようとしている様にも見えなくは無いんだが、実際は単なる使い魔契約の一貫でしかないんだが、あの女生徒達には百合フィルターでもかかって見えるんだろうな。（今のは、本気で耳が痛かったぞ？）

「あっ」

私も、ジョゼットの様子を確認する為に近寄って行ったんだが、その時小さな声を出してその女の子が目を覚ました様だったが、何故か目は閉じたままだった。そして何より気になったのは、その女の子の格好だった。いかにも”巫女装束”と言った感じだが、無駄な飾り付け等は無く白衣と緋袴を身に着けていたのだ。更に言えば、その女の子の顔付き、体付きがとある知り合いの事を思い起こさせた。（カグラさんの親族と言った所か？）

「君、目が覚めたかい？」

「あのココは？　龍神様は？」

龍神と言う所で、風韻竜の方に視線が集まったが、こちらの竜の方は黙って蹲ってしまっていた。いきなり気絶されてショックだったのか、テッサに言い含められたのかどちらかだろうな。（結局、

この風韻竜はイルククゥなのだろうか？）

「落ち着いて、ね？」

「はい、貴方様は？　あれ、女性の方でしたか？」

「え、うん。僕の名前は”タバサ”、タバサ・ド・マーニュ、君は？」

「はい、”源・命”と申します」

「ミナモト・ミコト？　変わった名前だね、髪の色も珍しいけど、何処の国の生まれなの？」

「タバサ、ここはこちらから説明した方が良いよ？」

「スティン兄？」

ちょっとジョゼットが人間を召喚するであろう事は予想していたが、ここまでの偶然は想像もしていなかったから、仕方なく助け舟を出す事にした。

「こちらのタバサ様のお兄様ですか？」

「いや、タバサの叔父に当たる”スティン・ド・マーニュ”と言う者だよ。ミコトさんと呼んで良いかな？」

「はい、あの、呼び捨てにしていただいても構いませんよ？」

「じゃあ、ミコト君と呼ばせてもらおうかな。君に信頼してもらう

為にとある女性の名前を言うけど驚かないでくれよ」

「はい？」

「”ミナモト・カグラ”」

「！？」

「後で詳しく話をするから、今は何も言わないでくれ」

小声でこの辺りの話をした後、本来の説明に入った。本当はルイズの使い魔の方にする説明だったんだが、まあ仕方が無いだろうな。

「ここはハルケギニア大陸の北西にある小国トリステイン王国と言っても分からないだろうね？」

「あ、はい、すみません」

「謝るところじゃないさ、姪が強引に君を召喚したんだから説明するのは当然だし、可能な限り君を手助けするよ」

「はい、ありがとうございます」

「もう少し詳しく場所の話をすると、この国の王都トリスタニアから少し離れた所にあるトリステイン魔法学院の土地になるかな」

「はい」

「ミコト君は、タバサの召喚魔法で召喚されたんだけど、これは分かるかな？」

「”しょうかんまほう”ですか？」

「そうだね、魔法の力で他の生物を呼び寄せて、契約をして働いてもらうと言えば分かるかな？」

「魔物を調伏して、使役する様な物ですか？」

「うーん、そう言う場合もあるけど、今、君はどんな気持ちかな？」

「・・・、何故でしょう、何だか胸が暖かいです」

ミコト君はそう言いながら少し頬を赤くして、ジョゼットの方に顔を向けた。近くに女生徒が居ればまた黄色い悲鳴が聞こえそうな場面だが、バルザック先生が気を利かせて生徒を下がらせてくれたので助かった。ジョゼットとミコト君が手を繋いだままだし、まあ良いがね。

「現状は今話した通りだけど？　一度に沢山説明しても分からないだろうから、少しづつタバサに聞くといいよ」

「はい」

「タバサ」

「何？」

「事情を説明してあげるんだよ？」

「うん、僕のパートナーだからね」

「2人とも後で部屋においで、タバサは”カグラさん”の事は知っているだけ教えてあげてくれ」

「うん！」

あまり長引くと迷惑なので、私からの説明はここまでにしておく。予想通りならば、生贄にされたミコト君がカグラさんと同じ様に召喚されたんだろう。何て偶然なんだろうな？　手を繋いだまま、寮の方へ飛んでいく2人を眺めた後、バルザック先生の合図で最後の1人の召喚が行われる事になった。（何だか気持ち的に疲れた、正直明日にして欲しいが、そんなはずも無いが）

第百五十三話　ラスティン３０歳（巫女さん来る）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百五十四話　ラスティン３０歳（剣道青年）（前書き）

第百五十四話ＵＰします。

第百五十四話　ラスティン３０歳（剣道青年）

ルイズの召喚は実にあっさり成功した。ただ召喚された人物は少々微妙だったがね。召喚されたのは剣道の練習中だったと思われる青年だった。

『ここは何処だ？　君は？』

「私の言っている事が分かる？　私が貴方を召喚したんだけど、理解出来るかしら？」

無論２人の会話は成立していないぞ？　ルイズの目から見れば面や籠手なんかを身に着けている人間では無く、妙な生き物に見えるのかも知れない。契約前だとやはりこうなるらしいな。どちらの言葉も分かる私ともう１人にとっては、中々面白い見世物なんだが、そうは言っていられない。こちらは想定された事態だったから、打ち合わせ通りに、ロドルフがその青年に近付いて行った。

「ミスタ・バルザック、少し構いませんか？」

「ミスタ・アンジェ、どうしました？」

「僕は、彼が話している言葉が少し理解出来ます。多分東方の言葉

だと思いますよ」

「ああ、君はエルフの皆さんと付き合いがありましたね？」

「はい、直接ではありませんが、東方の言語についても聞いていますから、ミス・ヴァリエールの手助けが出来るかと思うんですが？」

「そうですか、それは助かります。良いですね、ミス・ヴァリエール？」

「はい、お願いします。ミスタ・アンジェ」

その返事を聞いて、ロドルフが”彼”に話しかけた。

『こんにちは、剣道の練習中だったのかな？』

『良かった、日本語が通じる人が居たんだな。ここは何処か教えてくれますか？』

『まあ、普通に説明しても分からないだろうね。先ずは自己紹介をするよ。僕の名前はロドルフ・ド・アンジェだ、君は？』

『ああ、失礼。僕は”平賀　明人”と言います。〇×大の１年と言っても分からないか』

肝心の事を聞きだしたロドルフがこちらに視線を向けて来たが、予定通り話を進めるべきだろうな。”平賀　明人”か、これは

また判断に苦しむな。（名前からして、原作主人公の平賀才人の親戚かなんかだろうか？　ミコト君の件と言い、虚無の使い手達が召喚する人間には法則があるのだろうか？　転生者のメイジが精霊を呼んでしまうのと似ている気もするな）

私からの反応が無い事を見て、ロドルフは予定通りに話を進め始めた。

『平賀君、君が今さっきまで何をしていたか説明出来るかな？』

『そうだな、大学の剣道場で打ち込み台相手に練習していたのは確かだよ。胴を打って、台の脇を抜けた時に何だか妙な物に突っ込んだ気がしたかな？』

『うん、それで正解だと思うよ。君はこの女性、ミス・ヴァリエールの魔法で召喚されたんだけど、言っている事が理解出来るかな？』

『召喚？　裁判とかには見えないが？』

裁判所と来たか、今時の若者の考え方じゃないな。これは、お固い剣道少年だったんだろうな。

『ははははっ、随分と固いね、君は。小説やゲームはやらないのかな？』

『ああ、そっち系か、はあ？』

『信じられないかな？　さっきまで剣道場に居た君が、こんな広場の真ん中に居るのに？　周りには外国人ばかりだよ？』

『うっ！』

『どうかな？　意識が無くなっていた間に何処かに連れ去られたとか考えたりする？』

『ちょっと信じられないが、信じた事にする。それでここは？　白人が多いから、欧米だよな、ヨーロッパの何処かだろ？』

『残念、異世界なんだよ』

『はぁ？　だって、日本語が通じているじゃないか』

『まあ、それには事情があってね。そうだ、後ろを見てご覧よ』

そう言われて、後ろを向いた明人青年の視界に、まあでっかい竜やら見たこともない生物が見えたんだろうな。ゆっくり首をロドルフの方に向けると。

『マジ？』

と絶望的な声で尋ねたが、ロドルフは楽しそうに、こう答えた。

『勿論マジだよ。何だったら、ほっぺを抓ってあげようか？　魔法を使って見せた方が良いかな？』

ロドルフがそう告げると、明人青年の周りだけに不自然に風が吹き付けた。青年はどうやらそれで観念したらしい。

『はぁ、何でこんな事に・・・』

『悩むのは後にして、とりあえず契約をしてくれないかな?』

『契約?』

『ああ、彼女の使い魔として働くという契約だよ』

『血判でも押せば良いのか?』

『いいや、彼女、”ルイズ・ド・ラ・ヴァリエール”と軽くキスをしてくれれば良いだけだよ』

『あの女の子と? ちょっと犯罪っぽくないか?』

『幼く見えるかも知れないけど、１６歳だよ彼女は、それと女性のプロポーションに関しては、気を使わないと酷い目に遭うよ!』

妙に力が入ったロドルフ君の助言だった、もしかして前世では、いや、ここは気を使うところだよな? 多分身長が１７５サントほどの明人青年と比べて、ルイズは２０サントも低いし女性らしい体付きでも無いからこの反応も仕方が無いだろうな。（この辺りは個人の好みだから、何とも言えないがね。私の好みから言えば・・・）

『そ、そうか？　それで契約をすると何か良い事があるのか？』

『ああ、少なくとも言葉が分かるようになるね。君には特典も付いて来るだろうし』

『特典？』

『まあ、気にしないで、こんな可愛い女の子とキス出来るんだから、男なら喜ぶ所じゃないかな？』

『そんな事を言ったって、相手が居る事だろう？』

『固い、固いな君は。さっきの僕たちの会話は聞き取れたかな？』

『・・・』

『語学が得意そうには見えないけど？　もう元の世界に戻るのも難しいよ？』

『いや、戻る積りは無い・・・、良いさやってやるよ！』

妙な吹っ切れ方をした明人青年だった。戻る気が無いというのは少しだけ気になるがな。

『良いね、それじゃあこっちでも話を進めるよ。まあ、明人君は立ってるだけで良いからね？　男性のプライド的にはちょっとかもだけどね』

『好きにしてくれ』

『そう言う態度は良くないよ、多分彼女にとっても始めてのキスなんだろうからね』

『お前、ロドルフとか言ったよな。随分と女性心理に詳しくないか？』

『まあね、そんな事より、その暑苦しい面をとってくれよ』

『ああ』

そう言って明人青年が面を外したが、何と言うかかなり整った顔立ちだった。どれ位かと言えば、ルイズがぽかんと口を開けたままになってしまう位だな。私的には、ライルの方が女性受けすると思うが、ルイズにとってはそうでは無いらしい。

「ミス・ヴァリエール、見蕩れている所悪いけど、契約の方始めてくれるかな？」

「なっ！　私は、そんな軟弱な男に見蕩れていたりしません！　ただ、本当に人間なんだって思っただけです、ミスタ・アンジェ！」

「そうかい？　それは失礼」

「そうです、私の使い魔ならもっと強くていい筈です！　そう、私を守れる位に！」

「それは無茶な注文じゃないかな、僕だって君には勝てる自身が無いからね？」

「それ位強い使い魔が必要なんです、なのにこんな得体の知らない平民を呼んじゃうなんって！」

「おっと、それは僕に対しての挑戦かな？　それに、君自身が召喚してしまった彼に対しても失礼なんじゃないかな？」

「・・・、すみません、ミスタ」

　ロドルフもなかなかやるようになったな、きちんと交渉を進めながら、２人の仲をを取り持つ気らしい。この辺りは、完全にアドリブなんだが。（ちなみに、ルイズとロドルフが一対一で決闘をしたら確実にルイズの勝ちだが、使い魔を含めれば話は逆転するだろうな。ガンダールヴの力と精霊は非常に相性が悪いだろうからな）

「良いさ、さあ、君の使い魔との関係が今から始まるんだ。険悪な仲にはなりたくないだろう？　やっぱり女の子は笑顔が一番だよ」

「善処します。ミスタ・アンジェ」

「そうしてくれ、準備はいいかな？」

「はい」

『明人君、契約が始まるけど、暫く動かないでくれ』

『やっとか？』

『ああ、少し痛かったり熱かったりするかも知れないけど、我慢してくれ』

『おい、聞いていないぞ？』

『おや、止めるのかい？』

『いや、もういいから、早くしてくれ』

何とか話はまとまったらしい。どうもあまり友好的とは行かなかったが、ルイズも素直にはなれないみたいだな？

第百五十四話　ラスティン３０歳（剣道青年）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百五十五話　ラスティン３０歳（主従衝突）（前書き）

第百五十五話ＵＰします。

第百五十五話　ラスティン３０歳（主従衝突）

「我が名はルイズ・ド・ラ・ヴァリエール！　五つの力を司るペンタゴンよ。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ！」

スタスタと明人青年に近付いていったルイズは早口に呪文を唱えると、そこだけは乙女らしく頬を紅色に染めながらそっと背伸びをしながら明人青年に口付けした。明人青年の方も満更では無かった様だな、明らかにルイズの唇から目が離せなくなっているし。うん、初々しいな。まあ、その後のルーンを刻まれる痛みで帳消しになってしまったようだがね。

「儀式は成功ですかね」

「はい、ミスタ・バルザック。ミス・ヴァリエール、もう彼と会話が出来る筈だよ？　とりあえず自己紹介でもしたらどうかな？」

「は、はい。私はルイズ、ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールよ。貴方の名前を教えてくれるかしら？」

「本当にあれだけで、言葉が分かる様になるんだな。名前だったな、俺は”平賀明人”だ、よろしく頼むよ、お嬢さん？」

「お嬢さん？　まあそれは否定しませんけどね、貴方よりは修羅場をくぐっている自信はあるわ？」

「修羅場って、君みたいな可愛い女の子が？」

「かっ、かわい・・・」

うむ、実に分かり易い反応だな、ルイズは昔からこうだった気もするが、明人青年の方もまあ、誑しだよな？

「で、修羅場っているのは？」

「この国の人じゃないと説明し辛いわね。貴方の国には、亜人とか幻獣とか居るわよね？」

「はぁ？　ああ、ここは魔法がある世界だったな。話の流れからすると、ライオンとか虎なら居るぞ？」

「動物園にね？　そうだな、ライオンと言うのは、飛ばないし毒の尻尾を持っていないマンティコアみたいな物かな？　少し小振りだけどね」

「なーんだ、それなら１０匹居ても、相手出来るわ。別に戦う必要も無いしね」

「本気か？」

「ええ、私はそう言った有害な生き物を狩る為に修行して来たんだから！」

「信じられな」

”ドカン！！”

明人青年の不審は呪文一発で霧散した様だ。今度は明人青年の方がぽかんとしている。意外とお似合いの２人かも知れないぞ？　本

人達は思いっきり否定しそうだけどな。しかし、呪文の完成が早い上に、威力も上がっている気がする、義母はルイズを相当鍛えたらしいな。確かにこれなら、メイジが数人束になってもかすり傷さえ与えられないだろうな。

「分かったかしら、素人さん？」

「何を！　俺だって真面目に剣道をやってきたんだぞ！　高３の時は全国大会で良い所まで行ったし」

「それで？」

「それでって？」

「分からないの？　明人はどれだけの獲物を仕留めた事があるの？」

「獲物？　仕留める？」

ルイズの物騒な表現に、明人青年の顔が引きつってしまった。まあ、ルイズみたいな女の子が言うには確かに物騒だがね。

「そう、何とかって大会に出て勝っても意味が無いでしょう？」

「意味が無い？」

「だってそうでしょう、死ぬか生きるかの場面で、何とかの大会の順位が影響するとでも？」

「・・・」

「ミス・ヴァリエール、言い過ぎだよ。彼の生きてきた国は平和だったんだからね」

ロドルフがフォローに入ったが、あまり庇いすぎるのは拙いぞ？

「ミスタ・アンジェ！　まあ良いですよ、出来れば後で詳しく彼の国について教えていただけますか？　東方なんでしょう？」

「おっと、機会があれば喜んで、ただね、今は明人君の事だろうね？」

「そうだったわね、明人、犬と呼ばれたくなかったら、強くなって！」

「強くか・・・、犬というのは気に入らないが、強くなるのは望むところだ！」

「どうやら意見が合ったみたいだね、良ければここで2人の実力を見せてくれないかな？」

「「ちょっと待って！」くれ！」

「息もぴったりだね。まあ本気で殺し合えと言う訳じゃないよ。お互い相手の力量を知りたいだろう？」

「そうね、どうやって鍛えるか考えないとね！」

「おい、ロドルフ！　別に俺は知りたくもない、俺を殺す気か？」

「特典があるって言っただろう？」

「だが！」

「大丈夫よ、直撃はさせないから。治療が面倒だし、エルネスト兄様にお願いするのも気が引けるからね」

「だってさ？」

「くそっ、やるよ！」

「その言葉を待っていたんだ、明人君、君にあれを渡そう」

そう言ってロドルフは少し離れた場所に置かれていた一振りの”刀”を明人青年に渡した。ここまで都合良く話が進むとは思わなかったが、ロドルフが上手く引っ張ってくれたな。（さすがに華奢と言っていいロドルフには重かったらしく、レビテーションで浮かせて運んで来たらしいぞ？）

「これは日本刀？　だがそれにしては大きいな？」

「そうだね、分類的には大太刀かな？　僕も詳しくないけどね。デルフ、この人が君の使い手だよ」

「なんと！　このお方が？　・・・、確かに”使い手”でござるな！」

「間違いないみたいだね？」

「使い手に再び会えるとは思ってもござらんかった！」

「おい、この刀喋ったぞ？」

「ああ、ＩＳ、インテリジェンスソードだからね。こちらでは珍しくないよ。かれはデルフリンガーという名前なんだ、名剣、じゃなくて名刀だよ」

「そのＩＳというのは、全部こんな時代劇みたいな喋り方をするのか？」

「何かおかしいかな？」

「ソードなのに、日本刀で、時代劇風の喋り方をして、洋風の名前を持ってるってどうなってるんだ？」

「それは、色々あったんだよ！」

＝＝＝

そう、色々あったんだ、まあ、私がもしもの時の為にデルフリンガーの予備の刀身（からだ）を用意したんだが、まあ、多分歴史（もしくは無意識）に引っ張られたんだろうな日本刀にしようと思ったんだが、魔法の吸収力や、刀としての性能（丈夫さと切れ味）を考えると、どうしてもこの大きさになってしまったんだよな。（熟練した使い手ならば、カバーして振るえるのかも知れないが、どうなるか読めなかったからな）

そして、予備の身体を用意してそちらに乗り移る事が出来るのを確認した途端に、ロドルフが実験と称して”やって”しまった訳だ。使い手が居ない状態で、どれだけ魔力を吸い込む事が出来るか？なんてどう考えても狙ってやったとしか思えない。当時はまだトライ

アングルだったロドルフだったが、女性らしい根気と、男性らしい思い切りの良さ（悪く言えば、女性らしい執念深さと男性らしいずぼらさだろうか？）で朝昼晩と魔法を吸収させていって一週間ほどで限界が訪れたと言う訳だ。

「もう少しは吸収できると思ったんだけどな～」

と本人は全く悪びれず報告してくれたが、転生者メイジの総魔力量を考えれば想像出来ない結果では無かった。入れるばかりで出さなければ何時か破綻するのは当然なんだから、注意をしておくべきだったかも知れないが、まあ、無駄だったろうな。

後になって分かったんだが、ロドルフが何をやりたかったと言えば、ＩＳを初期化すると言う状況の確認とＩＳの再教育の実例作りだったんだよな。普通のＩＳでは刀身（研究の成果で今では剣じゃなくても、殆ど支障なくある程度の人格を植えつける事が可能になっているから仮にだが）を壊してしまえば剣を打ち直しても復活しないから、これには彼の試みにはどうしても”デルフリンガー”を使う必要があったのだ。（データ取りとか実験材料になってしまったデルフ君には気の毒としか言い様が無い）

ロドルフ自身は、記憶の混乱に付け入る形で、デルフの再教育を試みた訳だが結果はご覧の通りである。何で時代劇みたいな喋り方になったかは、

「え？　日本刀なんだからこっちの方が良いんじゃないですか？」

とか簡単に流された。いや、日本刀をイメージして新しい”身体”を作ったのは私なんだが、そんな意図は無かったぞ？　多分ロドルフの趣味なんじゃないかと推測するが、今更追求しても”おでれー

た！”は2度と聞けない訳だ。それを少しだけ寂しく思うのは私の感傷なんだろうな？

＝＝＝

「良いかい、明人君。他のメイジなら兎も角、ルイズと戦う時は真っ向勝負はダメだ。避けて避けて避けまくるんだ」

「それって、一方的に攻められているだけじゃないか？」

「そうかい？　それならとりあえず、素手で挑んでみるかな、君も男だろう？」

「くっ！　良いだろうやってやるよ！」

明人青年はまんまとロドルフの口車に乗せられてしまった様だ。剣道を齧っていた程度では、ルイズには太刀打ち出来ないだろうに。（こう言う時のロドルフのって本当に生き生きしてるよな？）

「それじゃあ、僕が合図したら決闘を始めるで、双方良いかな？」

「ええ、良いわ」

「構わないぜ！」

いや、ガンダールヴの能力を使わずにどうやって勝負する積りなんだろう？　一応手には竹刀を構えた（デルフはロドルフが返された形だな）が、左手のルーンは輝いている様には見えない。（籠手の下だから良く見えないんだが、竹刀を武器と認識していないんだろうな？）

「始め！」

「たぁ～」

”どかん！”

「動かないで、本当に当てるわよ？」

「それまで！」

うん、駆け出そうとした明人青年の足元が爆発して、動けなくなりそのまま決闘は終了となった、予想通りだな。いや、全然決闘になっていないし、解説を入れる暇も無い。

「おい、やっぱりこんなの勝てるはずが無いだろう！」

「そうでもないんだけどね？」

「どうやら、犬にも劣るようね？」

「・・・」

「ミス・ヴァリエール！　少し言い過ぎじゃないか？」

「いいえ、言わせていただきます、ミスタ・アンジェ。犬でも自分より強い者にむやみに吠えかかったりしません！　アキトとか言ったかしら、貴方には生き残って強くなって欲しいの！」

「だそうだよ、意外に熱いねルイズは・・・」

私にとても意外だったな、私の記憶の中には小さい頃のルイズが印象強い為か、何がここまで言わせるのか首を捻りたくなる。

「・・・、無理だろうあんなの！」

「そこで、デルフの出番なんだけどね。明人君がその気なら力になってくれるよ。君は、ルイズの期待に応える気は無いかな？　綺麗な・・・、いや可愛い女の子があそこまで言ってくれるなら、例え死んだとしても男として本望じゃないか？」

「それは・・・？　お前どっちの味方だよ？」

「勿論どちらもさ。どうだいやる気になった？」

「どうも信用出来ないんだが？」

明人青年の台詞は尤もだろうな、どうもロドルフは面白がっている感じだ。もう既に予定の行動をかなり逸脱している。

「そうかい？　でも彼女に良い所が見せられれば、彼女も君の事を見直してくれると思うよ？」

「分かったよ、騙されてやるよ。骨だけは拾ってくれよ？」

さて、第二回戦が開始される様だが、どうなる事やら？

第百五十五話　ラスティン３０歳（主従衝突）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百五十六話　ラスティン３０歳（盲目の使い魔）（前書き）

第百五十六話ＵＰします。

第百五十六話　ラスティン３０歳（盲目の使い魔）

ロドルフに乗せられたとも知らずに、明人青年は改めてデルフリンガーを握ると何か呟くようにしながら目を閉じてしまった。

「始め！」

ロドルフの再度の掛け声と共にまたもや明人青年が前に踏み出そうとしたが、当然の様にルイズがその足元に”爆発”を仕掛けた。だが、そこからの展開はさっきとは異なった物だった。

前に踏み出したのはフェイントだったらしく明人青年は直ぐに右にステップを踏みそのままジグザグ駆けながらルイズを目指した。

一方のルイズは矢継ぎ早に呪文を繰り出すが全く明人青年を捉える事が出来ない様だ。ルイズは最初はゆっくりだったが徐々に速度を上げながら明人青年との距離を保とうとしている様だった。結構身体を動かしているにも関わらず、ルイズは息も切らしていないで、余裕が感じられた。

”ドカン”

”ボカン”

”ズン”

といった物騒な爆発音が何度も響いたのだが、決着は意外な形で付く事になった。

ルイズが焦れたのか呪文を早口コモンマジックから、系統魔法の

呪文（風系統っぽいな）に切り替えた。多分意図は点では無く面で明人青年を捉える事だったんだろうが、それが完全に裏目に出た。
爆発の連射が止んだ瞬間に明人青年の動きが変わった。今までの動きも十分速かったがこの動きは明らかに目で追うのがやっとというレベルだった。（今までガンダールヴの力：身体能力強化を抑えていたのだろうか？　やるじゃないか！）

「チェックメイトだ、えっと、ミス・ヴァリエール？」

本当に瞬きをする間にルイズの懐まで入り込んで、その首筋にデルフを当てながら、明人青年の勝利宣言が行われたが、ルイズの動きも良かっただけに、少し恐ろしく感じられるな。剣道をやっていただけあって、ガンダールヴの力を十全に使っている感じだし、彼がデルフで武装していれば、大抵のメイジは相手にならないだろうな。遠距離から広範囲の魔法で攻撃出来れば何とかなるだろうか？

「・・・、ルイズ、ルイズでいいわ！　アキト」

「あ？　ああ、俺の勝ちで良いな？」

「ええ、貴方に失礼な事を言ってしまったわね。ごめんなさい」

「いや、それは良いんだが。ロドルフと組んで俺を挑発したか？」

「ミスタ・アンジェと？　違うわ、でも挑発したのは事実・・・」

「使い魔って言うのに召喚されると、決まってこういう事をされる訳じゃないみたいだな。君の事情を聞いてから、謝罪を受け入れる事にするよ」

「ええ、でも個人的な事だから、ここじゃあ」

「コホン、儀式は無事終了したようですな。ミス・ヴァリエール？」

「「えっ！」」

空気を読めず（いや読まずかな？）バルザック先生が2人に声をかけた。使い魔召喚の儀式も終わった訳だし、こんな原っぱの真ん中で話し込む必要は無いからな。今年の儀式は、いきなり使い魔に命を狙われる生徒や、召喚した使い魔と決闘を始めてしまう生徒が居て、先生も早く儀式の終了を宣言したいんだろうな。（何1つ問題は片付いていない気がするがね？）

「それでは、今年の使い魔召喚の儀式を終わります。各自使い魔達と仲良くするように、それでは解散！」

強引にまとめた感じだったが、生徒達は各々寮の方へ向かって行った。さすがに先程の決闘には興奮したらしく、皆がルイズと明人青年の事を気にしていた様だった。肝心の2人はロドルフに案内されて（こっそり手配してあった）客室に向かう様だ。私も客室に泊まっているから後でこっそり様子を見に行く事にしよう。（明人青年がルイズと同室？　正気か？　幾らなんでも有り得ないだろう？）

私も客室に帰る積りだったが、その前にこちらを気にしているライルに声をかけて、時間があれば客室に来る様に伝えておいた。

＝＝＝

暫く今回の儀式の事を考えると、ドアがノックされてライルとジョゼット、そしてジョゼットに手を引かれたミコト君が入って来た。

ライルが気を使ってジョゼットも呼んできてくれたらしいな。

「わざわざ来てもらって、すまなかったね、みんな？」

「父様、僕に何か聞きたかったんですか？」

「ん、ああ、そっちを先に聞いておこうか。ミコト君が召喚された時に、警告したよな？」

「はい、一瞬手が出た時にはそうでもなかったんですけど、あの時は明確に殺気を感じたので、つい本名を呼んでしまいました」

「殺気？」

「はい、ジョゼットも分かったよね？」

「うん、さすがにいきなり切りつけられるとは思わなくって油断しちゃったけどね」

「タバサ様、それは言わない約束だったでしょう！」

「そうだったね、ごめん？」

3人は、そんな会話を始めたんだが、そんな簡単に殺気なんて感じられるんだろうか？　考えてみれば、殺気に敏感であろう傭兵団を師匠役に付けたのは私だったんだが、どんな修行をしたんだろうな？

「まあ、その件はいいよ。ジョゼットの名前を呼んでしまった事も、”ライルが寝惚けて気になる女の子の名前でも呼んでしまった”っ

て事で言い訳すれば良いしな」

「ちょっ、父様。それはいくらなんでも！」

「別にイザベラ姫には事情を話せば良いんだから、問題ないだろう？」

「でも！」

「じゃあ、自分で何か言い訳でも考えるんだな」

「そうします。くれぐれも妙な噂は流さないでくださいよ？　ジョゼットも！」

「分かった」

「大丈夫だよ、ライル」

そう答えたが、母が私をからかう気分が少しだけ分かった気がするぞ？　まあ、話のネタにでもするとしようか。まだ納得行かない様子のライルを放っておいて、ミコト君の方に話を移す事にしよう。

その前にジョゼットに確認しておかないといけない事があったな？

「ジョゼット、もしかして学院内にリボルバーを持ち込んでいたりしていないよな？」

「え？　うん、スティン兄に言われた通り屋敷に置いて来たけど？」

「それで替わりの銃はどうやって手に入れたんだい？」

「勿論ライルが」

「あっ！」

どうやら、ジョゼットに替わりの銃を手配したのはライルだった様だ。ライルもシルビーさんと面識があった筈だから、こちらもあり得たんだな。必死に目を逸らしているライルは、まあ、この際不問にしよう。

「それでどんな銃なんだい？」

「うん、これだよ」

そう言ってジョゼットが懐から取り出したのは、本当に小型の拳銃だった。デリンジャーと呼ばれるタイプに分類されるかも知れないが、口径もかなり小さめだな。護身用にしかならないだろうが、今のジョゼットには相応しいのかも知れない。

「やっぱり、シルビーさんの作なのかな？」

「はい、いけませんでしたか？」

「いいや、随分ライルも過保護だなと思ったけどね。ジョゼットもあんまり無茶をしないようにな」

「はーい」

「ジョゼットが怪我なんかしたら、ノリスがここへ乗り込んでくるぞ？」

「うわ～、確かに想像出来ちゃうね、うん、気をつけるよ！」

大丈夫だろうか？　まあ、大抵の事は何とか出来ると思うが、相手の命が心配と言うのは年頃の娘に対する心配じゃ無い気がするな。

＝＝＝

話が横道に逸れてしまったが、本題に入るとしよう。

「源命君だね？」

「はい、確か神楽姉さんの名前を最初に口にした方でしたね？」

「そう、私の名前は”ラスティン・ド・トリスティン”と言う」

「トリスティン？　この国の名前と同じなんですね？」

「何だ、まだ私の事は聞いていなかったんだな」

「丁度その説明をしようとしていた所に、ライルが来たんだよ？説明するとややこしいから」

「そうか、一応私がこの国の”王”をやらされている、じゃなくて、やっている」

「はぁ？」

「スティン兄って貫禄無いしね～」

「父さんの言っている事は本当だよ？」

私の話し方に貫禄が無いのは事実だが、ジョゼットに指摘された上にライルに援護までされると微妙に傷付くな？

「まあ、信じなくても構わないけど、カグラさんだって今はガリアと言う国の王妃なんだよ？」

「それです！　神楽姉さんが本当に生きていて、王妃なんてやっているんですか？」

「まあね、直ぐに証拠を見せるのは難しいけど、３日後に王城に来てくれれば話はさせてあげられると思うよ」

「本当に、本当なんだ・・・」

信じたいけど信じ切れないと言った感じのミコト君の反応だったが、話せば分かる事だろうな。

「もしかして、ミコト君も龍神とやらの生贄にされたのかな？」

「本当に詳しいですね、はい、その通りです」

「聞いてよスティン兄！　ミコトの父親はミコトの目を見えなくした上に、生贄にしたんだよ！」

「目を？」

「はい、先の儀式の後に神楽姉さんの死体が見つからなかったので、逃げ出したんじゃないかって噂が立ったんです。それで・・・」

今までの動作等で分かったはいたんだが、やっぱり、ミコト君は盲目だった様だ。逃げられない様に目を潰してしまったのか、先天的な物だと言う可能性も考えて居たが、最悪だな。

「もしかして、龍神に切りつける積りだったのかな？」

「あっ、そうです。あんな悲しい事は私で最後にしたかったんです」

大体話が見えて来たぞ、ミコト君の親は前回の生贄の生死が不明で、念の為にミコト君の目を潰してまで確実に生贄にしたかったんだろう。

ミコト君自身は龍神とやらと相打ちになる覚悟だったのだろう。召喚された事に気付かずに、空気が変わった事を肌で感じてそれを龍神の体温だとでも思ったのかな？　思い切って切り付けたのに、小太刀を奪われた上に目の前に”竜”が居たんだから、絶望して気絶してしまったんだろうな。（カグラさんといい、ミコト君といいこんなに儚げな女の子を生贄なんて許せないな！）

「本当に龍神なんて居るのかな？」

「さあ、根の国の事は良く分からないからね。だけど、生贄になる人間が一人でも救えた事を喜んだ方が良いんじゃないのかな？」

「そうだね・・・」

「ミコト君、ちょっと顔を見せてくれるかな？」

「はい」

ミコト君は顔を私の方に向けたので、確認し易くなったが、やはり彼女の額にはカグラさんそっくりのルーンが刻まれていた。但し、何と言うか全体的に薄い感じがする。カグラさんと言う、立派な？ミョズニトニルンが存在する以上、予備のミョズニトニルンという程度の存在なのかも知れない。

試しに、近くにあった”口述の羽ペン”というマジックアイテムを握らせてみたのだが、言葉にした通りの文字を勝手に書くという機能は理解できた様だが、それだけだった。（ルーンも淡く輝いただけだったし、ミョズニトニルンとしては十分な能力を持っていないと判断するべきなんだろうな）

「あまり役に立たないみたいですね、私・・・」

「そんな事無いよ、僕はミコトが来てくれて、本当に嬉しかったんだから！」

「タバサ様・・・」

何か知らないが、二人が手を握り合って、そんな話をしている。小柄な男女が手を握り合っている様に見えなくも無い。実際はどちらも女の子だったりするのが、何とも言い難いな。私はライルと苦笑いと交わすしか無かった。話は聞けたし、カグラさんとの交信にミコト君を呼ぶ事も問題は無さそうだから、そのまま2人を自室に返す事にした。

「ジョゼット、1つ聞かせて欲しいんだが？」

「何？」

「お前は、ミコト君を召喚する時どんな事を考えた？」

「ん～、そうだね。これはミコトの前じゃ言えないけど、僕は僕の事を頼ってくれる存在を望んだ気がする」

「自分を頼る存在？」

「うん、僕って小さな頃から色々な人のお世話になって来たでしょう？」

「周りが迷惑だったと感じたなんて思っていないよな？」

「うん、でもね、誰かの役に立ちたいと思うのは変かな？」

「そうか・・・」

私は、まだまだ低い所にあるジョゼットの頭を少しだけ撫ぜてやった。ジョゼットは怒る訳でもなく、そのまま撫ぜられていた。ジョゼットは自分を頼ってくれる存在を欲して、ミコト君は多分自分を死の運命から救ってくれる存在を欲したのだろうな。ジョゼフ王がカグラさんを召喚した時も同じだったんだろうか？

第百五十六話　ラスティン３０歳（盲目の使い魔）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百五十七話　ラスティン３０歳（攻略方法）（前書き）

第百五十七話ＵＰします。

何を攻略するんでしょうね？

第百五十七話　ラスティン３０歳（攻略方法）

ジョゼット達が帰って行くと、入れ違いにロドルフと明人青年が私の客室にやって来た。まあ、隣なのだから人の気配で凡その様子は分かるんだろうな。（まさか精霊に探らせているとは思えないが？）

「始めましてかな、平賀　明人君」

「あの、ちょっと信じられないんですが、貴方が本当にこの国の王様なんですか？」

「まあ、そんなに緊張しなくてもいいよ。ロドルフ、説明は？」

「大体終わっていますよ、本人が信じているかは別ですけどね？」

「そりゃあ、簡単には信じられないだろう？　夢の中だって言われた方がまだ現実味がある」

「ははっ、それはそうかも知れないけど、残念ながらこれは君にとっても僕達にとっても現実だよ」

明人青年の言葉には、私達も笑うしかなかった。精神と言うより記憶だけが移動してきた私達転生者と違って、肉体も精神もそのままの形で召喚された明人青年にとっては、目が覚めれば夢だったというオチの方が現実味があるのだろうか？

「ところで、ラスティン様達が生まれる前に日本で生きていたというのは本当ですか？」

「別に私に敬語を使う必要は無いよ。公式な場面じゃなければ、呼び捨てで構わないしね」

「そうですか、じゃあ、ラスティンさんと呼ばせてもらいます」

「そうしてくれ、君は自分の記憶が正しいとこの場で証明出来るのかな、明人君？」

「それは・・・」

「だろ？　ちなみに私達にとって日本での記憶よりも、今生きているこの世界の事の方が大事だし、それは君にも言える事だと思うけど？」

私のその台詞を聞いて、明人青年の顔が少し歪んだのが分かった。

「もしかして俺は日本に帰れないのか？」

「おや、どういう根拠で帰れるなんて思ったのかな？」

「ロドルフ、少し黙っていてくれ」

「やっぱり帰れないんだな・・・」

「明人君、正確な情報を君に伝えるのは難しいんだが、今、現在は君を日本へ帰す方法は無いと思ってくれ」

「今は？」

「そうだね、言い方を変えれば条件が整えば帰す事が出来るかも知れないと言った所かな？」

ヴィットーリオ・セレヴァレが虚無の力に目覚める可能性は限りなく低いのが現状だし、明人青年に妙な期待を持たせるのも、逆に絶望させるのも良策では無いと思えたのでこういう返事になってしまった。（ロマリア王国と宗教庁に始祖の秘宝が分けられてしまったらしいから、仮にヴィットーリオが教皇になったとしても虚無に目覚める可能性は低いとしか言えない）

「そうか・・・、貴方達は日本に帰りたいとは思わなかったのか？」

「さっきも言ったけどね、私達はこの世界に生まれた人間なんだよ。ここが故郷なのに何処に帰るって言うのかな？」

「はぁ、なんか憂鬱な話だな・・・」

「そうかな、私達はココで自分なりの生甲斐を見つけて、概ね有意義に生きているんだが、君にはそれが出来ないのかな？」

「勝手に呼び出しておいて・・・、すまないこれは貴方に言っても仕方が無かったな」

「いいや、それをルイズには言わないでくれ。それに君もこの世界に来て何か思う所があったんじゃないかな？」

「・・・、どうしてそう思うんだ？」

「使い魔っていうのは、そう言うものだからかな？」

特に虚無の担い手の使い魔はその傾向が強いのではないかと思えたのだが、明人青年の様子から間違いでは無いと確信出来た。使い魔召喚を行う時には、呼ぶ方と呼ばれる方の望みが噛み合う必要があるんじゃないかと、何となくだが感じていたのだが、その証明が目の前に居る訳だ。

「俺は、強くなりたかった。幾ら竹刀を振っても、自分が強くなったって実感できなかったからな」

「剣道の大会で良い所まで行ったんだろう？」

「それじゃあ、駄目だったんだ。さっきの決闘で分かったよ。俺は強い奴と本気で戦いたかったんだ」

「ぷっ！」

ロドルフが思わず失笑をこぼしてしまった。私は何とか我慢したが、少しは顔に出たかも知れない。明人青年は少し顔を赤くして言い訳をしだした。

「いや、その自分の限界を知りたいっていう意味だぞ？」

「それも十分に恥かしいと思うけど」

ロドルフが堪らず突っ込みを入れたが、私も同意見だった。

「ルイズもそんな事を言っていたな。あれはどういう意味なんだろ？」

「その話なら、ミス・ヴァリエールから少しだけ聞きだせましたよ」

「そうなのか？　それでルイズは何て言ってたんだ？」

「何でも、自由に恋をする為らしいです」

「？　あの娘は特に家を継ぐ訳でも無いはずだが？」

ラ・ヴァリエールはエルネストが継ぐ事は確実だし、公爵にはもう孫が居る訳だしな。そう言えば、ノーラからはルイズの婚約者探しと言う話題さえ聞いた事が無かったな？　公爵家の娘となれば、相手を選ぶのが普通なのだろうが、いまいち繋がりが見えてこないな。

「ミス・ヴァリエールが言うには、〝お母様に勝たない限りは私に未来は無いわ！〟だそうですよ？」

「お母様ね」

「ルイズの母親って言うんなら、ラスティンさんの義母って事になるんだろ、どんな人なんだ？」

「一言で言うのは難しいな、私も以前決闘をした事があるけど、手も足も出なかったな。ちなみに手加減されてだよ」

「ここでは決闘が良く行われるのか？」

「まあ、当時の私も若かったからね、無茶をする事もあるさ。確か１３歳だったかな、大怪我はしなかったから問題は無かったけどね」

「魔法を使ってだろ、それって虐待じゃないのか？」

「うん？　残念ながらこの国には人権という概念が乏しくてね」

「貴方は国王なんだろう、何とかしようと思わないのか？」

「そうだね、色々考えさせられているよ。ただ、まだその時期では無いと思っているんだ」

「よく分からないんだが？」

「まあ、この国の現状を見れば分かってくるよ。それより今はルイズの母親の事だろう？」

「そうだったな、要はルイズが母親に決闘で勝てば良いんだろう？」

明人青年は気軽に言ってくれたが、あれに勝つのは難しいと思うぞ？　いや、あの人もいい歳だし、ルイズと明人青年が組めば可能性があるか？

「あの人は手強いよ、ルイズにはまだあの人と対抗するのは難しいだろうね。君1人では手も足も出ないだろうね、例えデルフを持っていたとしてもね」

「そんなになのか！」

「ああ、付け込む隙があるとすれば、あの人にとっては刀を持っているとは言え君なんかは路傍の石に過ぎないと言う所かな？」

「傲慢な人物なのか？」

「さあ、身分的にも実力的にもピカイチだからな」

「なんだ、国王でも頭が上がらない人がいるんだな？」

「ははは、私は国王とは言っても、お飾りだからね。他にも頭の上がらない人は多いね」

「ここって封建制度の時代っぽいよな、貴族とか王様とか居るんだから」

「封建制度から中央集権君主制への移行時期かな、社会制度的に言えばだけど」

「国王がお飾りで問題無いのか？」

「部下や、ロドルフみたいな同志が優秀だからな、私が居なくても殆どの事は回っていくよ。王様なんて、サインをするのと、最終的な責任を押し付けられる為に居るような物さ」

私が必要なのは、転生者達を支え、動き易い様に環境を整える場面位かな？　これだけは多分私にしか出来ない事だと思う。

「なんだ、王様って言っても大した事無いんだな」

「そうさ、王様になりたいなんて人間が居れば、変わってあげたい位だ」

そう半ば本気で言ったんだが、ロドルフが何故かニヤニヤしているのが目に入った。これは有る事無い事吹き込まれそうだな。

「まあ、なんと言うか、私に関しては根拠の無い噂が耳に入るかも知れないけど、信じない方が良いよ？」

「何言ってるんですか、ラスティンさんの武勇伝は国中で話題になっているじゃないですか！」

「ロドルフ、あんまりからかわないでくれ。私が英雄やら勇者やらに見える人間の方がおかしいんだよ」

「確かにラスティンさんは、そうは見えないな。育ちが良さそうという感じを受けるけど」

「明人君は人を見る目があるね」

そう言ってみたが、ロドルフの方は不満そうに口をむにゅむにゅさせている。明人青年も私と言う人間と話しているんだから、妙な噂を頭から信じる事は無いだろう。

「まあ、この話はここまでだ。本気のラ・ヴァリエール公爵夫人に勝てたら、是非知らせてくれ」

「頑張ってみるよ、何かもう少しアドバイスは無いのかな、先輩として」

「先輩ね、まあ良いが、そうだね、うーん？」

あれをまともに相手するのは難しいだろうな、今の私なら搦め手で行くだろうが、それであの人がすんなり納得するとは思えない。私もエルネストも何とかあの人に認められた訳だが、それは何もあの人に決闘で勝って認められた訳じゃない。

あの人がルイズにそこまで入れ込んでしまったのは、やはりルイズの”魔法”が特別だという事が原因なんだろうな。ルイズが成長してあの人を自力で打ち負かせれば良いんだが、経験不足は時間でしか補えないからな。魔力でも体術でも隙が無さそうだからな？

第百五十七話　ラスティン３０歳（攻略方法）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百五十八話　ラスティン３０歳（空想の中の日本）（前書き）

第百五十八話ＵＰします。

今回は凄く短くてすみません。

第百五十八話　ラスティン３０歳（空想の中の日本）

「うん、正面からぶち当たってみるんだな」

「はぁ？」

「守りに回ったら負けだと思うから、攻めて攻めて攻めまくるんだな」

「それがアドバイスか？」

「ああ、ただ今の君達じゃ相手にならないだろうね」

「今の？」

「そうだろ、ルイズの母親にはルイズの手の内が丸見えなんだぞ？君が決闘に参加しても別々に当たっていたんじゃ、望み薄だろうな」

「ルイズの母親って言うのは、そんなに凄いのか？」

「ああ、この国でも有数の実力者だろうね。現役、ああ、昔は近衛隊みたいな所に所属していたそうだけど、現役を引退しても腕は鈍っていないし、経験も積んでる様だからね」

「そんな女性と決闘するのか、俺は？」

「何言ってるんだい、君は強い奴と戦いたいんだろう？」

「うっ！」

ロドルフの突っ込みは的を射ていた様で、明人青年も微妙な表情になってしまった。

「まあ、いきなり決闘を挑めとは言わないけどね、私の方で練習相手は手配するよ。君は自分の力を生かすことを、ルイズとのコンビネーションをとれる様に考えてくれ」

「そうか、ああ、やってみるよ！　でも、なんで貴方はそんなに俺の力になってくれるんだ？」

「前世の、日本の人間がこの世界に来たのに無視しろと言う方が難しいだろうね、それに君には手を貸して欲しい事もあるからね」

「嫌な予感がするぞ？」

「まあ、君が嫌がる事をさせる積りは無いが、働かなければ生きて行けないのは、何処の世界でも同じだと思わないか？」

「働く国王様が言うと説得力があるな？」

そう軽く皮肉を言うと、明人青年は部屋を出て行ってしまった。気になって行き先を見ていると、デルフを担いで中庭の方へ向かった様だ。早速自分の力を確かめる積りの様だ。どうやら勤勉な性格の様だな、明人青年は。

＝＝＝

「あれで現実逃避になるんですかね？」

「ああ、その可能性もあったな、ロドルフ。まだ何か用か？」

「はい、少し気になった事があって、ラスティンさんの意見を聞きたいと思ったんです」

「気になった？」

「ええ、平賀明人君と日本の事を話していたんですけどね」

「ほう、何か共通点でもあったかい？」

「ええ、明人君の大学、〇×大でしたけど、そこの教授がどうも私の大学の頃の恩師と同一人物らしいんです」

「それは、面白い偶然だな」

「ええ、でも、あの先生、確かもう教職を退いたって聞いた覚えがあるんですよ」

「何か事情があったんじゃないのかな？」

「そうですよね、明人君が西暦２００１X年から来て、私が学生だったのは２００X年だったから、もう亡くなっているんじゃないかと思ったんですけど、元気で良かった」

「まあ、後進の指導の為に老人が再登場するなんて話は、魔法兵団でもある話だろ？」

「そうですね、はい、変な話をして申し訳ありませんでした！」

そう言ってロドルフも明人青年の様子を見に行った様だ。しかし、気になる話だな・・・。ロドルフにはああ言ったが、多分老齢を理由に引退した老教師が１０年近く経っても教鞭を握っていると言うのは少し信じられない。

もしかすると、そう、もしかすると、ここが本の中の世界にしろ、その平行世界にしろ、そこに出てくる日本が私達の生きていた日本と同じと言うのは普通なんだろうか？　明人青年が来た”日本”も本の中の日本だと考えることも可能かも知れないが、これは考えても埒が明かないんだろうな、気分転換にちょっと外の空気を吸うとしようか？

ああ、ミコト君の目の事がきになるな、エルネストを呼びつけてやろうか？　私の使い魔に伝言を頼むには簡単なんだからな。

＝＝＝

中庭の方は明人青年が居て多分騒がしいだろうから、私は裏庭の方にやって来た。こちらは私が学生の頃もあまり来なかった所だ。使い魔達が普通に生活しているんだが、私の使い魔は世話の必要も無かったしな。

『ラスティン、呼びましたか？』

『いいや、ちょっとキュベレーと始めて会った頃を思い出していたんだ』

『そうですか、あの頃は私も自我に目覚めたばかりで、おかしな事を沢山しました』

今は常識を身に付けたと言いたいんだろうが、私から見てもまだまだ非常識な所が多いんだがな。知識欲はあるし、かなり機転も利く様にはなったと思うんだが、偶に妙な知識を仕入れて来るんだよな？

『なんですか？』

『いや、ノトスの方は大丈夫かい？』

『はい、きちんと精霊として、使い魔として教育しています』

『キュベレーが、テティスやニルヴァーナや兄弟に教わった様にだな』

『はい、今度は私が教える番です、ちょっと風とは相性が良くないですけどね』

『そうかもな、そうだ、ノトスにやってみて欲しい事があるんだが？　ロドルフの方には話を通しておくから、後でワーンベルに向かってくれるか？』

『はい』

『ああ、その前にエルネストの所へ寄ってくれ、”重大な事件が発生した”と伝えて欲しいんだ』

『？』

『こう言わないと、テティスのマスターは動かないだろうからね』

『そうですね、先にテティスに伝言して来ますね』

エルネストには不良メイジの件の話を相談したいし、ちょっと”風石”を始めとする精霊石の生成に関して実験をする事をここに来る前に列車の中で思いついたんだが、ノトスの成長具合を聞いて実行する気になった。まあ、色々手配が必要だろうが、別に研究してくれそうな人材には事欠かないしな。

そんな事を考えていると、裏庭に到着したのだがそこには先客が居た。何やら私の登場に驚いている様子だったが、そうでなければ見落としたかも知れない。（まあ、でっかい竜は見落としようがないだろうが）

第百五十八話　ラスティン３０歳（空想の中の日本）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百五十九話　ラスティン３０歳（独り立ちの時）（前書き）

第百五十九話ＵＰします。

第百五十九話　ラスティン３０歳（独り立ちの時）

「ラスティン様？」

「テッサ、ここでは、スティン・ド・マーニュだよ」

「失礼しました」

「これが君の使い魔か、名前は？」

「はい、シルフィードと言います」

「・・・、そうか」

やっぱりこうなったか、また微妙な状況だな。帰ったらキアラの意見も聞きたい物だ。私は、その”シルフィード”を良く観察して見たが、やはり普通の風竜とは何処か違う事が分かる。

「きゅい？」

「あの何か？」

「テッサ、君がこの”風韻竜”を呼び出した時に、何を考えていたのか教えてくれないか？」

「！！」「きゅい！」

「竜に詳しい訳じゃないが、立場上、移動距離は誰よりも長いんだ。普通より多く竜籠とかには世話になっているからね」

「おねえさま？」

「まさか、スティン様に言い当てられるとは思いませんでした、シルフィード、人目は無い様だから構わないわ」

「は～い」

次の瞬間には、人形のシルフィードがテッサの横に立っていた。どう言う原理か分からないが普通に服を着ていると言うのは少し違和感があるな。別に変身シーンとか期待している訳では無いがな。

「おねえさま、良かったんですの？」

「ええ、この方は私の兄の様な方だし、頼りにもなるから」

「始めまして、シルフィード。テッサがこれから色々お世話になると思うが、宜しく頼むよ」

そう言って、私は手を差し出したが、シルフィードにはその行為が理解できなかった様だ。不安そうに私の手を見ている。

「きゅい・・・」

「握手を知らないか？」

私はテッサと握手を交わして見せ、それを見たシルフィードは恐る恐るといった感じで私とも握手をしてくれた。

「シルフィードというのは、君の本名かな？」

「あの、韻竜に詳しいの？」

「いいや、何となくかな？」

「イルククゥ」

「おねえさま！　秘密にするっていったの」

名前も同じか、間違いは無い様だな。

「私がこの方をどれ位信じているかを貴方に教えたかったの、ごめんなさい」

「きゅい、仕方ないのね」

「じゃあ、私の方はシルフィードとだけ呼ばせてもらうよ、それで良いかな」

「そうしてなの、とうさまにばれると面倒だから」

「？」

「わたし、おねえさまに呼ばれた時に、おとうさまと喧嘩になっちゃったのね」

「無茶をさせちゃったのね、召喚に応じてくれてありがとう、イルククゥ」

「おねえさまに呼ばれて、良い機会だと思ったの」

「良い機会？」

「あんな所に閉じ篭っているのは嫌だったから」

隠れ里とかに閉じ篭っているんだろうか、エルネストや兵団からの報告ではそういった亜人の人達も多いらしいが？

『ラスティン、ちょっと良い？』

『ニルヴァーナか、急にどうしたんだ？』

杖精霊が珍しく話の間に割り込んで来た。あまりこう言うことはしないんだが？

『あの娘？から、アリエの樹の気配を感じるの、貴方、例の葉は持っている？』

『ああ、財布に入っているよ』

そう念話を交わしながら、私は財布から例のアリエの大樹の葉を取り出したが、それに反応したのはシルフィードだった。

「それなの！」

「これ？」

私が取り出したのは、硬貨に揉まれてくしゃくしゃになってしまった葉っぱだったんだが、それでもその力は感じ取れたらしい。何故かシルフィードは懐を探り出して、服の中から1枚の葉っぱを取

り出した。

「なんで貴方がそれを持っているのね？　まさか里に入り込もうと！」

「待て、シルフィード、それは誤解だ」

「本当なのね？」

「もしかして君の家族はアリエの樹の結界の中で暮らしているのか？」

「そうなの・・・ね？」

「この葉は、私が秘密にしているとある場所に入る為に必要なものだ。テッサが持ってる杖の材料を提供してくれた大樹だよ」

「そうよ、この杖はラスティン様が私やジョゼットにくれた物なの、悪用はしていないわ、落ち着いて」

妙な誤解をされそうになったが、韻竜が結界の中で生活しているとは知らなかったから、思わぬ収穫だな。出来れば彼らとも交流を深めたいからな。先住魔法や、純粋に空を飛ぶ事ととかだな。（意外かもしれないが、翼による揚力に依存しない飛び方と言うのは、航空工学の根本を揺るがす為、ミネットも試行錯誤の連続なのだ）

「分かったの」

「シルフィードには出来れば、他の韻竜達との橋渡しをして欲しいな」

「どういう事なの？」

「ラスティン様、この子はそう言った事には向かないですよ？」

「何だか馬鹿にされてる気がするのね、おねえさま酷いの！」

「私は、ジョゼットを助ける為に貴方の力を欲したのだから、仕方ない事なのよ、言ったでしょう？」

「でも・・・」

「そう、じゃあ今から、貴方のお父様の所に行って、ラスティン様の要望を伝えて来てくれる」

「え？」

「出来るわよね？」

「えっ、えっ！」

「テッサ、それ位にしておくんだよ」

どうも、シルフィードが妙に意地を張るのが気に入らないらしいが、使い魔と喧嘩するのは利点が無いからな。（やっぱりイルクゥはどうも幼いというか、知性的にまだまだと言った感じだ、外の世界を知らないのだから仕方が無いのだろうな）

「シルフィード、君の父親は、私たちが使う文字は読めるかな？」

「・・・、分からないの」

「そうか、外界との交流が少なければ当然だろうな、試しに私が手紙を書くから、それを届けてくれるかな？」

「おねえさま？」

「・・・」

「テッサ、君は君の使い魔を道具として上手く使いたいのかな？」

「ラスティン様！」

「私が見る限り、シルフィードはまだ幼いんじゃないかな？」

「この図体でですか？」

「肉体年齢と精神年齢が一致するとは限らないさ、君だってクリシャルナの年齢を聞いているだろう？」

「あっ、そうですね。私何を焦っていたんだろ？」

「そうだよ、使い魔と主人は一緒に成長して行くと思った方が良いかもな？」

「成長して行くですか？」

「ああ、私の使い魔のキュベレーの話は聞いているだろう？」

「精霊だって、ミスタ・アンジェと同じなんですよね」

「そう、今は良くやってくれる様になったけど、召喚した当時は結構苦労したものだよ」

「そうなんですか？」

「ああ、命の危険に晒される程だったからね。シルフィードの韻竜としての力は強力かもしれないけど、彼女の力だけじゃ解決出来る問題は限られるだろう？」

「そうかも知れません」

「まだ、納得行かないかな？　テッサはジョゼットの手助けをしたくて、力を望んだんだろう？」

「例えば、１００人のメイジにジョゼットが取り囲まれた時、テッサとシルフィードだけでジョゼットが守りきれるかな？　ああ、命にかえてもと言うのは無しだよ。君を失ったジョゼットを見たくないしね」

「・・・」

「例えば、１０人と言っていいのかな、１０人の韻竜が君と一緒にテッサを守ったら結果が変わってくると思わないか？」

「はい・・・」

「テッサが何を焦っているか、教えてあげようか？」

「えっ？」

私は、テッサの様子を見てふと思いついた事を口にした。多分テッサ自身は考えないようにしている事だろうな。

「ジョゼットはもう旅立つ時が近いんじゃないかな？」

「！？」

「ジョゼットは別段賢いと言う訳じゃないけど、愚かではないよ。自分の生い立ちが普通じゃない事に気付いていないとは、君も思っていないだろう？」

「・・・」

「多分、この学院を卒業すれば、父は事実をジョゼットに告げるだろうね。そして、ジョゼットはきちんと自分の生い立ちと向き合うだろう。でも、別に悲しむ事じゃない、私達がジョゼットを支え続けたから、ジョゼットは独り立ちする事が出来る様になったんだ。それは悲しいと言うより誇るべき事なんじゃないかな？」

「どうして、そんな風に考えられるんですか？　ノリス様は・・・」

「ああ、仮にでも親になるとね、少しは子供の事が理解出来る様になるのかもね。今日の儀式でテッサにも分かったんじゃないかな、何故、ジョゼットがミコト君を呼んだのか、考えなかったかな？」

「私達はもう不要なんでしょうか？」

私達ね、テッサとノリスを指すんだろうか？

「テッサは、どうしてそう思うんだい」

「だって、ジョゼットはもう私より強くなっちゃったんですよ？どんなメイジだってジョゼットには勝てないかも・・・」

いや、ジョゼットだって分の悪い相手は幾らでも居るはずだがね。大型の鬼の類は多分手に余るだろうし、剣を主体にした戦闘スタイルの経験豊かなメイジには完敗するだろうな。

「はっきり言おうか、私は”メイジ殺し”として見れば、ジョゼットがミコト君を使い魔としたのは間違いだと思うよ。テッサもそう思わないか？」

「それは・・・」

確かにテッサとしては、返答に苦しむ問いだったかな。認めたいが認めたくないと言ったところだろう。

「ルイズは知っているね、彼女は自分が強くなる為の使い魔を召喚したのは君も見ていただろうし、ジョゼットにも知らせただろう？」

「はい」

「ジョゼットは何か言っていたかな？」

「いいえ、ミコトとばかり話していました」

私は、テッサに近付き、ジョゼットより高い所にある頭を出来るだけ優しく撫でてあげた。（何故かシルフィードも一緒になって撫でているが、空気を読めと言いたいな。本当に子供なんだな）

「将来のジョゼットの代わりに、謝らせてもらうよ。”御免ね、テッサ”、多分ジョゼットはこう言うんだろうね」

「そうでしょうか？」

「そうだよ、私ならミコト君よりも明人君の方が使い魔として優秀だと思うからね。それでも、ジョゼットはミコト君を呼んでしまった、どうしてかな？」

「私達が邪魔になったんでしょうか？　もう1人で何でも出来るって？」

「ハズレだよ。答えは簡単、テッサが何時も自分の横に居ると思っているから、甘えているんだよ」

「そんな事は！」

こんな時でも、テッサは咄嗟にジョゼットを庇ってしまうんだな

「少なくともメイジとして強くなることは放棄しているだろ？」

「じゃあ、ラスティン様は、ジョゼットがミコトを召喚したのは失敗だと思うんですか？」

「メイジとして或いはメイジ殺しとしてはね、だけどね、人間としてと考えれば、答えは違ってくるね」

「人間として、ですか？」

「そう、ジョゼットはミコト君の保護者になるんだ。子供のままじゃ居られない、それはテッサが一番分かっているんじゃないかな？」

「そうですね、うん、そうでした」

もう少しテッサには話をしたかったが、話題のジョゼットが裏庭にやって来てしまい、話は中断になってしまった。だが、テッサなら十分に伝わったと思う。

第百五十九話　ラスティン３０歳（独り立ちの時）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百六十話　ラスティン３０歳（エージェント・テッサ）（前書き）

第百六十話ＵＰします。

第百六十話　ラスティン３０歳（エージェント・テッサ）

「テッサ、ここに居たんだ。部屋に帰ってこないから、どうしようかと思ったよ」

「何か用、ジョゼット？」

「うん、スティン兄も居て良かった。あれ、こちらの方は？」

うん、シルフィードが人型のままだったな。しかも”良い話を聞いたの～”と言った感じで目を潤ませている物だから、テッサが慌てて隠そうとしているが、無理だな。まあ良い、ジョゼットの用件は想像が付くしな、テッサにする話をジョゼットにも聞かせる事にしよう。

「ジョゼット、こちらは”イルククゥ”という、トリステインにとっての大事なお客様だよ」

「きゅい？」

「えっ、きゅい？」

慌ててテッサがシルフィードの口を塞ぐが、説明が面倒だから余計な事はしないで欲しいんだが？

「ああ、名前を聞いて分かるだろう、エルフの国の更に東方の国からの使者なんだ」

「へぇ、それで、きゅいって言うのは？」

そこはスルーして欲しかったぞ、まあ、ジョゼットも素直な子だから、簡単に騙せそうだ。

「それはね、あちらの言葉で”こんにちは”と言った意味になるんだ」

「そうなんだ、”きゅい”、始めまして。綺麗な青髪ですね！」

「ぷっ！」

上手く誤魔化せそうだったのに、またもやシルフィードが失笑して、話を振り出しに戻してくれた。私はテッサに目で合図して、本格的に黙るように伝えた。いや、ジョゼットの”きゅい”は女の子らしく可愛かったが、知っている人間にはお馬鹿さんにも見えるぞ？

「発音が難しいらしいよ、少し間違えると、全く別の意味になったりするらしい」

「えっ、今の何か変な意味になっちゃった？」

「それより、何の用だったんだい、大体想像は付くけどね」

「やっぱり？　さっき話すのを忘れたから、拙いなって思ったけど。スティン兄の方からも、エルネストさんに頼んでくれないかな？」

もう、キュベレーはエルネストの所に向かったが、それは伏せて話を進めよう。急患でも居なければ、直ぐに来ると思うがあまり思う通りに動かないだろうからな。

「用があれば伝えるが、私以外も他に頼む人が居るんじゃないかな？」

「うっ！」

「あの娘は、ラ・ヴァリエール公爵家の娘だ。実家に連絡はとり易いだろうね？」

「だから、テッサに、ミス・ヴァリエールの部屋に一緒に行ってもらおうと思ったんだよ」

「ジョゼット、ミコト君は誰の使い魔だったかな？」

「うぅ、だけど」

「ジョゼット！」

「分かった、行って来る」

「ちょっと待ちなさい、私の方から話があるんだよ。テッサに頼みなんだが、ジョゼットも聞きたいだろう？」

「えっ、うん」

「テッサ、さっきの話の続きなんだが、イルククゥさん達との交流を深める為に、テッサに仲介役を頼みたいんだが？」

「はい？」

「テッサ、凄いじゃない！」

「えっ、はい」

「でも、どうしてテッサなのかな？」

「それは、そう、イルククゥさんがテッサを気に入ったからだぞ、見て分からないか？」

「えっと、そう？」

テッサとシルフィードの今の体勢を見ると、微妙だがまあ気にしたら負けだな。

「それに、テッサにはシルフィードと言う優れた”脚”があるからな。学業の支障にならない様には考える積りだよ」

「学業って、学院を卒業してからじゃないの？」

「事は国の将来に関わる事だからな、国王としても先を見越しての決断だよ」

「でも、ボク・・・」

「ジョゼット、別に直ぐと言う訳じゃない、テッサと話し合ってみるんだね」

「いいえ、ラスティン様、出来れば早い方が良いと思います！」

「テッサ！」

ジョゼットが信じられない言葉を聞いた様に、驚きの声をあげた。私も意外な台詞に驚いて、テッサの方に目をやったが、直ぐに逸らす事になった。テッサがシルフィードに馬乗りになる感じで行動と発言を封じていたんだが、ちょっと貴族のお嬢様の行動とは信じられない物だったからな、スカートなんだからもう少し気にして欲しい物だな。

格好と発言がミスマッチなんだが、これも気にしたら負けなんだろうか？（テッサはそう言うキャラじゃないはずなんだが？）

「ジョゼット、暫く1人で頑張ってね。でも、必要な時には絶対に傍に居るから！」

「う、うん・・・」

「ミコトはジョゼットが頼りなんだよ、分かっている？」

「そうだね、ボク、今からルイズの所に行って来るよ！」

ジョゼットが何かを振り切るように、寮の方へ走って行った。ルイズの性格なら、明人青年の事を何処かで見ている気がするんだが、ジョゼットは気付いていない様だな。まあ、自分の”脚”で自分で決めた目的地を目指すのも良い経験になるだろう。

「テッサ、良かったのかい？」

「はい、ラスティン様の話を聞いて、決めた事です」

身なりを整えながら、テッサが自分自身に言い聞かせる様に呟いた。私の問いに対する返事と言うより、テッサ自身の決意を表現しているんだろうな。

「ラスティン様、今度のゲルマニアとの戦争にジョゼットは参加するんですか？」

テッサの真剣な問いに私も返事を誤魔化す訳には行かない様だ。戦略的、戦術的にはメイジ殺しは使い難いのだが、局地戦では強力な”駒”になる。実戦経験の量は兎も角、限られた空間や人数に対してはルイズもジョゼットも圧倒的な優位性を持っているのは事実だ。（多分、再訓練中の警備隊の兵団員と比べても遜色は無いだろうな）

「ジョゼットが戦力として有用だと言う事は分かっているね？」

「はい、この目で見ていますから」

「国王として、家族だからと言って戦場に出さない訳には行かないな。ジョゼットが戦った方が良い場面ならジョゼットを戦わせるよ」

「ラスティン様、いいえ、国王陛下ならそうおっしゃると思っていました」

「そうか、だから早く韻竜達との交渉を早く終わらせたいか・・・」

テッサの考えは分かったが、正直甘いなとも思えた。結界の中に閉じ篭って外界との交流を拒んでいる韻竜達が簡単に交渉のテーブルに付くとは考えにくいが、そこでふとシルフィードに目をやったんだが、これでも２００歳とかだったよな？　エルフのクリシャルナと年齢的にはあまり変わらないが、精神年齢的にはかなり幼く感じる。まあ、クリシャルナも時々幼く思える時もあるんだがね。（そうだな、悪い方に考えるのは止めた筈だ、ここは韻竜達が世間知

らずで、乗せられやすい性格だと考える事にしよう。上手く行かなければ、その時だしな）

「テッサの考えは分かったけど、君に交渉事が出来るのかな？」

「あっ！」

「だろうね。そうだな、暫く王城の方で勉強をしてもらおうかな？」

「はい、でも時間が・・・」

「そうだな、交渉事が得意な人間を付けられれば良いんだけどな・・・」

ああ、適当な人物が居たな、クリシャルナが丁度、トリスタニアに来るって言っていたな。彼女なら交渉事には向いているだろうし、我が国がエルフと交渉を持っていると言う事もアピール出来る。

本当は、多分私自身が早めに腰を上げるべきなんだろうが、現状では何日も王城を開ける訳にはいかないしな。今日だってキアラに仕事を押し付ける形になってしまったんだから。

「テッサと一緒にクリシャルナに言ってもらうとしようか、知り合いの方が心強いだろ？」

「はい！　でもどうしてクリシャルナさん何ですか？」

「分からないかい？　本当にちょっと勉強をした方が良いかもね。キアラとは面識があったね？」

「あ、はい。でも、何だか怖い方ですよね？」

「怖いね、確かに。いいや、そんな事は無いぞ、面倒見は良い方だし、教えるのも上手いな」

テッサとキアラが最初に会ったのは、あの時だな。キアラも緊張していたんだろうし、思わず肯定してしまったが、キアラが厳しいのは権力に相応しくない能力の人物に対してだけだからな。最近はキアラが怒るのは殆ど私に対してだけだしな・・・。

「ラスティン様？」

「ああ、そうだな。ライルもこの春からキアラに色々習っているよ」

「虚無の曜日に何時も外出してるは、そのせいだったんですね？」

「まあ、親子の交流もあるがね」

「そうですか、分かりました！」

「ワーンベルからクリシャルナが来るのも暫く先だと思うから、それまでに交渉術位は物にするんだよ？」

「はい」

「テッサなら大丈夫だ、それにシルフィードの親戚なら、まあ、緊張するだけ無駄だろうね？」

「ふふっ、そうですね」

「今何か、馬鹿にされた気がするのね？」

「いいや、単にテッサと君の家族がきっと直ぐに仲良くなれると思うという話しをしていたんだ」

「そうなの、おねえさま？」

「ええ、貴方のお父様の事を教えてくれる？」

そう言って、２人？は密談に入ってしまったが、私と一緒に王城へ向かう事だけは決める事が出来た。キアラには余計な仕事を頼むことになるだろうが、キアラは忙しすぎる方が私へのお叱りが減るので、その意味では大助かりなのだ！（自分で言っていて情けない気もするか？）

第百六十話　ラスティン３０歳（エージェント・テッサ）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

ちょっとお馬鹿なボクっ娘って好きですか？

第百六十一話　ラスティン３０歳（マッド・ドクター？：前編）（前書き）

第百六十一話ＵＰします。

第百六十一話　ラスティン３０歳（マッド・ドクター？：前編）

キュベレーの緊急の伝言が功を奏したのか、二日後にはエルネストが王城を訪ねてきてくれた。竜篭を飛ばして来たようだが、別に列車でも構わなかったんだがな。まあ、明日にはミコト君を連れてジョゼットが王城に来るし良いタイミングとも言えるだろうな。

キアラの下で働いているテッサをジョゼットがどう見るかも興味はあるが、テッサもライルも概ねキアラから上々の評価を受けているんだか、ジョゼットもうかうかしていられないと感じてくれると良いのだが。

「それで、急用と言うのは何なんだ？」

「開口一番がそれなのか？　久しぶりだなとか他に言う事があるだろうに」

「スティン、義兄上と呼ぼうか？　或いは陛下でも構いませんよ？」

「いや、止めてくれ！　用件は、２つだよ」

「重要な用件なんだろうな？　僕の方は患者を待たせているんだ、分かっているんだろう？」

エルネストの奴、随分とご機嫌斜めだな、本当に重症の患者が居るなら、呼んでも直ぐに王城には来ないだろうにな。ああ、何やら研究に没頭しているんだろうな、ルイズが使い魔召喚をするって言うのに知らん顔だからな。（まあ、他の転生者も同じなんだが、義理の兄としても何とかならない物だろうか？）

「ああ、とある女の子の目を治して欲しいんだ」

「それが急用なのか、本当に？」

「はぁ、勿論だ、その女の子っていうのは誰だと思う？」

「スティンの事だから、何処かの貴族の娘って訳じゃないだろうが、時間の無駄だぞ？」

「分かったよ、全く。ジョゼットが使い魔を召喚したんだ、召喚されたのは女の子なんだが、どうやら視力を奪われたらしい」

「視力を？　どんな方法で？」

「いや、それは本人も知らないかもな。逃げ出せ無い様にそうしたんだから」

エルネストに詳しく事情を話したが、事情を知ると憤懣やるかたなしといった感じになったが、それでも急用で呼びつけたのには納得行かない様だった。確かに命に関わると言う訳じゃないが、結構深刻な問題になり得るんだがな。

「その女の子だけどね、名前を源命って言うんだ」

「転生者じゃないんだろうね、それで？」

「ガリアの王妃の名前は？」

「ああ、成る程、だが！」

「あのな、今度カグラ王妃とミコト君を会わせてあげようと思うんだが、王妃様が久々に会った妹、ああ、ミコト君はカグラさんの妹なんだが、その妹が盲目になっていたとしたらどう思うだろうな？」

「どうって？」

「話の流れ次第だが、トリステインがミコト君に何かしたと思われると、我が国としても非常に困るんだが？」

「分かった、そんな作り話を信じる訳じゃないが、そのミコトっていう患者を診てみるよ、それで良いんだろ？」

「今のは確かに作り話だけどね、大切な王妃様の妹が傷物にされたと聞いて、ガリア王がそれを理由に我が国に妙な要求を付き付けて来る事は考えられるんだぞ？」

更に可能性の話をすれば、ガリアがサハラを越えて根の国へ復讐の手を伸ばす事も有り得なくは無い。まあ、カグラさんがそれを望まないだろうがな。ただし、あの愚痴王の事だから、絶対に交渉の材料にしてくる筈だ、弱みは早急に無くしておくべきだろう？

「あの、”ジョゼフ”が？」

「委員会の報告だけでは信じられないか？　お前は一度、ジョゼフ王に会った方がいいかも知れないな。物語とは別人だぞ」

「まあ、機会があったらな。ミコトって患者の事は了解したが、用件は2件じゃなかったのかな？」

これは、こちらで何とか機会を作らないといけないな、若い転生者達は結構素直に私の報告を信じてくれた様なんだが、エルネストはまだ物語のイメージを引きずっているのかも知れない。

「ああ、メイジをある程度の時間、魔法が使えない様に出来ないかな？」

「それを知ってどうする？」

「そう答えるからには、方法があるんだな？」

「スティン！」

「ああ、刑罰にするんだよ。ここ数年性質の悪いメイジが増えた事位は噂に聞いているだろう？」

「ああ、メイジに襲われて大怪我をしたって患者が増えているな」

「私は”不良メイジ”と呼んでいるんだが、彼らを捕縛するだけなら簡単なんだが、優秀なメイジを何時までも監視につけるのは無駄だろう？」

「ふむ、杖を取り上げるんじゃ十分じゃないか。魔法を封じるマジックアイテムがあると聞いた事があるが？」

「ああ、”封じの首輪”って言うのがあるんだが、コスト的にな、それに外そうと思えば、手間ではあるが物理的な方法で外せるんだからあまり意味は無いだろう？」

「確かに今の状況は、僕にとっても嬉しくないな」

「別に悪用する積りは無いんだ、メイジと非メイジの軋轢が広がる前に対策をしておきたい」

「・・・」

「この通りだ」

私が思いっきり頭を下げると呆れたように、それを見たエルネストは、微かにうれしそうに答えてくれた。

「分かった、方法を教えよう。君が”お前にも責任があるんだぞ！”なんて言わなかったから、この件は妥協する」

エルネストと交渉するんなら、絶対に言ってはいけない台詞だな。付き合いが長いから、そんな言葉は口にはしなかった。

「助かるよ、不良メイジだからって片っ端から殺したくは無かったからね」

「スティンは、暴君になる素質に欠けているな」

「そんな素質は要らないよ、最近は貴族と妥協する方法も考えているんだぞ？」

「王様になって随分と成長したんだな、貴族嫌いの貴族だったのにな」

「そんな事話したか？」

事実ではあるんだが、まあ、態度には出ていたんだろうな。学生の頃も、正義感だけで”守護者”なんて組織しないし、露骨に他の生徒を嫌っていたからな、私は。

しかし、私の”貴族嫌い”の原点は何処なんだろうな？　今考えれば、私が魔法兵団を組織したのは私自身が”貴族”という存在と対決する為の準備だった気がしないでもない。両親はその事を当然気付いていただろうが、それに対して何も言わなかったな。

貴族に生まれて貴族が嫌いと言うのもおかしな話だが、貴族の実態を知る以前から”貴族嫌い”だったと思える。もしかすれば前世に何かあるんだろうか？　思い出す事が出来る記憶には、当然だが貴族なんて物は出てこないんだが・・・。

「それで、心変わりの理由は？」

「あ、ああ、息子のライルに影響されてね」

「はぁ？」

「ライルが魔法学院に通っているのは知ってるだろう？」

「ルイズの先輩だったか？　カトレアから聞いた気がするな」

「そう、ライルに学院で気に入らない生徒がいないか聞き出そうとしたんだ。今の学院の生徒は、かなりの確率で次の領主だからな」

色々ライルから聞き出して、次期領主として認めるかどうか検討の材料にしようと思ったんだが、妙な欲は出すものじゃないな。

「息子がスパイか？」

「まあ、スパイとしては不適格なんだけどね」

「ん、君の義理の息子って言うのは優秀だと聞いた記憶があるが？」

「まあ、向き不向きがあるって事さ、友人を売るには善良過ぎるんだな」

「善良ね、君の息子とは思えないな？」

「そうだな、何故か悪口を言われた人間と仲良くなるんだから理解出来ないんだよ」

「それは確かに理解出来ないな」

「本人が言うには、”仲良くなれば悪口は言われなくなる”そうだ」

ライルの事だから、同級生を庇っているんだろうと思ったが、別の情報源からも本当に友人と呼べる関係になったそうだ。ロドルフとイザベラ姫に聞いたんだから、間違いは無いだろうね。（イザベラ姫は尋ねれば結構何でも教えてくれるんだが、妙に怯えられている気がするのは気のせいだよな？）

ライルは、友人達の情報をきちんと伝えてくれるんだが、どちらかと言えば友人達の優れた点ばかりなのだ。これまた本人に言わせれば、”誰にだって優れた点がありますよ、それを見つければ友人になるのは難しく無いんです”だそうだ。

息子にこう言われては、さすがに貴族達をバンバンと粛清していく訳にも行かないだろう？（いや、粛清では無く生殺しが正解なんだがね）

「ほう、あのミスタ・マーニュが貴族の良い所を探すなんて、時間とは偉大なものだね」

「そう言うエルネストは昔から変わらないな、私にとっては甥のノルベールが成長したらどうなるか楽しみだ」

「・・・、それで、メイジに対する処置方法だが？」

旗色が悪くなって話題を変える様だ、まだ突っ込んでやりたいが、こっちの話の方が大事だろう。ノーラから何となく聞いているが、多分母親になったカトレアに頭が上がらないんだろうな。エルネストが育児に協力的とは思えないし・・・。

「処置方法ね、こちらから聞いておいてなんだが、何でそんな方法を見つけたんだ？　まさか！」

「スティンが僕の事をどう思っているか良く分かる台詞だね、言っておくが、患者の希望があったからだよ」

うむ、真性のマッドドクターだと思っているぞ。エルネストの事を良く知っている人間なら殆ど否定はしないと思うが。（常軌を逸していると表現するなら全員が賛同してくれるだろう）

「患者？」

「ああ、例の”隠れたメイジ”の中には、自分が魔法を使えることを否定したい人も居るんだよ」

「うん？」

「分からないか？　まあ、メイジには理解出来ないのかもな、貴族に酷い目に遭わされた人にとっては貴族と同じになる事は嫌悪を伴うらしいんだ」

「嫌悪か・・・、確かに理解し難いな。自分がメイジになって見返してやるとかの方が、理解し易いんだが？」

「その辺りは人夫々さ、この辺りは魔法でも医学でも、上手く解決出来ないんだろうな」

「そうだな・・・」

「まあ、そんな訳で隠れたメイジを非メイジ化しようと考えたんだ」

「お前の事だから、魔法脳を壊してしまえとか、考えたんだろうな？」

「その言われ方は心外だが、まあ近い事はしたかな」

やっぱり、やると思った。

「だけど、意味が無かったんだな、これが」

「意味が無かった？」

「ああ、視床全体を切除する訳にはいかないからね、少しだけ”切除”してみたんだが、様子を見ている数日の間に魔法脳が再生してしまったんだ」

「まさか、本当なのか？」

「ああ、驚いたね、あれには。そこで、魔法脳へ行っている神経の方を殺す事にしたんだ」

「神経を殺す？」

「ああ、神経自体も再生するんでね、苦肉の策って奴だな」

魔法を使っている状態を診察（イグザミネーション）で確認すれば、神経組織自体の特定は可能か？　難しい処置の様な気もするが、エルネストは遣って退けたんだな。

第百六十一話　ラスティン３０歳（マッド・ドクター？：前編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百六十二話　ラスティン３０歳（マッド・ドクター？：後編）（前書き）

第百六十二話ＵＰします。

第百六十二話　ラスティン３０歳（マッド・ドクター？：後編）

「何だか副作用？が出そうだが、大丈夫なのか？」

「ああ、この処置をメイジに行うと、多少無気力感が起こる程度かな？」

「まあ、それは都合が良いな。そもそも魔法を使わない人は支障が無いんだな」

「多分な、処置例が少ないから絶対とは言えないけどね」

「ところで、神経を殺すってどうやるんだ？」

「企業秘密って奴だよ、まあ、エルフの毒を研究した成果と言った所かな？」

ああ、陛下、いや、フレデリック様やベッケル子爵の時の毒の特性を逆に利用した訳か？　この辺りは、クロエも協力しているんだろうな。

「大体分かったけど、それだと元に戻せるよな？」

「ああ、そうだな」

何気なく尋ねたんだが、エルネストの返事は短い割には意味深に聞こえた。

「何を考えている？」

「僕だって、スティンの言う不良メイジを生み出した責任を感じているんだよ、ただ、君達とは違う対策を考えているだけの事さ」

「その対策を教えてくれないんだろうな？」

「まだ、研究途中だからね。成功の見込みが立てば、知らせるよ」

「私が知る必要がある話なんだな？」

「ああ、多分世界が変わるよ」

エルネストとの雑談はそこまでだったが、最後にエルネストは妙な忠告をしてくれた。

「ああ、スティン。最近なんだが、我らが”義母”殿が良くカトレアの所へ来て、話をして行くんだ」

「内容は？」

「勿論、君達夫婦に関してだよ」

何だ、エルネストらしくも無い言い方だな？

「それで？」

「まあ、今は大丈夫なんだろうけど、ゲルマニアとの戦争に一段落ついたら、２人で診療所を訪ねてくれ」

「おい、もう少し詳しく、言ってくれよ！」

「分からないか？　まあ、エレオノールには暫く帰省しないように言っておくんだね」

「気になるな、もしノーラに何かするなら、潰すぞ？」

今ならラ・ヴァリエール公爵家でも潰せると思うが、いや、例え何をされてもノーラが実家を潰す事に同意はしないだろうな。

「ラ・ヴァリエールをか？」

「ああ、それは拙いな。義母殿を潰す事にしようか？」

「どうやってだ？」

「さあ、ルイズとその使い魔に潰して貰うんだよ」

「？」

エルネストが、先日の儀式に興味を持っていれば丁寧に教えてやるんだが、研究の方が大事だっていうんだから秘密にしておこう。こうなると本気でルイズと明人青年の訓練に肩入れしなくてはならないかもしれないな。ちょっと兵団の方に話を通してみるか？　いや、明人青年に関しては戦士としての修行も必要だろうな、傭兵団の手練も出来れば手配したい。

うーむ、こういう個人的な話に時間を割くと小さな宰相殿が煩いんだよな。いや、理由は別に個人的な物じゃないと主張できるか？

転生者の特性に関して、ルイズが明人青年を召喚した為に、転生者の意識と無意識や物語の束縛といった問題の結論が先送りになっ

てしまったのだが、それに対して積極的に干渉してみようとキアラから提案されていたんだった。
突入部隊に”ルイズとアキト”を推薦してみるか？　ルイズには敢えて虚無を使わせてみるまでは考えていたんだが、もう一歩踏み込むという手もあるか？

「スティン、どうした？」

「すまない、ちょっと考え事だよ」

「国王陛下も大変だな？」

「いや、私なんかは楽をさせてもらっているよ。それより、ミコト君の治療に関して、話をしよう」

そこからは、ミコト君の治療の話に入る事にした、外傷が見えなかった事や痛みは感じていなかった様だと言う話をしたのだが、目を診察するための器具が無いと言う話になってしまった。そこまで考えなかったのは失敗だったが、私にとってエルネストがミコト君の治療をすると決める事が重要なのだ。
エルネストがその気にさえなれば、ミコト君の視力が回復するのは時間だけの問題になると確信している。なにせ、私の親友は頼りになるマッドドクターだからな！

＝＝＝

エルネストが来てから数日後、私はある程度自分の考えをまとめて、キアラに意見を聞くことにした。ノーラはこの問題に関しては、どうも不干渉を貫く積りの様で、話は聞いてくれるのだが意見は一切言わないのだ。（ノーラが全面的に私を信頼してくれている証だ

とは思うのだが、やはり物語の直接の登場人物だと思うところがあるのだろうか？）

「それで、ラスティン様の提案と言うのは、どんな物なのですか？」

「ああ、ルイズに虚無を使わせるのは良いんだが、物語通りに進め過ぎるのは良くないんじゃないかと思わないか？」

「ルイズちゃん、いえ、ルイズさんに物語を模してゲルマニア空軍を虚無魔法で撃破した後に、逆にゲルマニアに侵攻して物語との相違を転生者達に認識させるという案では不足ですか？」

「いや、もう少し意識を誘導しやすくしたいと思うんだ、ルイズが爆発（エクスプロージョン）で艦隊を壊滅させて、その後への繋がりが弱いと思わないか？」

「それは、そうかも知れませんね。演出としては強引過ぎるかも知れません。観戦させる転生者の方々に適宜に説明を入れていく事で違和感を無くす予定でしたが、ちょっと面倒だとは思っていました」

「だろう？　アキト君も加入したんだから、”竜の羽衣”も活用するべきだろう」

「そちらは、空軍で補う積りでしたが、アキトという青年が信頼出来るのであれば、良いかも知れませんね」

「明人青年か、信頼は出来ると思うが、人を殺せるかはどうかな？」

「まあ、随分と軟弱なんですね、日本の男性というのは？」

「言うなよ、私だって最初に人を殺した時には酷い事になったんだ

からな。現代の日本じゃ、人が殺される場面なんてテレビの中でしかお目にかからない物なんだからな」

「テレビ？」

「まあ、情報伝達機器と言うべきかな？　音声だけじゃなく画像も送れるんだ。まあ、それはいいとして、私の考えはどうだ？」

「あ、すみません。えっと、確か”ヒラガサイト”が竜騎士を翻弄している間に、ルイズさんが虚無魔法を唱えるでしたか？」

よし、上手く誤魔化せたぞ、”酷い事になった”辺りに突込みが入ったら説明に困るしな。あの事は両親とマルセルさんそして、ノーラしか知らない筈だしな。（ノーラには結婚後話したと言うより、話させられた。何故か当時の事を大まかに知っていたんだが、絶対母の仕業だと思う）

「まあ、そんな感じだったな。完全に再現するのは無理でも近い状況を作れないかな？」

「近付け過ぎるのは逆効果では？」

「いや、こう言った機会は、２度と無いかも知れないんだし有効に活用したい」

「それは言えますね、それでは・・・」

ここからは秘密だ、まあ、その時になれば分かるから、楽しみにしていてくれ。どうでもいいが、戦略も戦術もほぼ決まっているから、何だか劇場型の戦争になりそうな気配があるな？（観客は転生

者達になるんだろうか？）

「それでは、こう言う方針で各署と調整を行いますが」

「何か問題か？　予算的には十分だと思ったが？」

「いえ、報告の方が残っていました」

「聞こう」

「カリーヌ・デジレ・ド・マイヤールについて探れに関してですが、申し訳ありません」

「やはり、邪魔が入ったか？」

「いえ、感触からすると、巧妙に過去を消されていると言った所でしょうか。しかし、この調査に意味があるんですか？」

うっ、誤魔化せたと思ったんだが、納得はしてくれなかったか。まあ、義母殿の弱みでも握れないかと思って調査させたんだが、公爵家としても嫁が性別を偽って魔法衛士隊で活躍していたとなると醜聞とまでは行かないがあまり褒められた事では無いから、全力で消したんだろうな。

「グレンさんの噂からでも無理だったか？」

「はい、噂だけでは強気に攻める訳にも行きませんし、公爵家が後ろに居るとなれば口も固くなります」

「まあ、仕方ないな。嫁入り後の活動も地味な物だったな？」

「はい、先のゲルマニア侵攻の時の活躍も無い物にされています」

「念の入った事だな、誰かに恨みでも買ったんだろうか？」

「さあ、その辺りも含めて不明です。物語の方では？」

「うーん、弱みになる様な話は無かったな」

「調査を続けますか？」

「いや、もういいが、最近の動きのが無かったが？」

「あ、いえ、目立った動きはありませんでした」

駄目か、カトレアに話している内容と言うのを知りたかったんだ、本当はこちらがメインだったりするんだが？　ん？　キアラの様子が少しおかしい気がする。

「どうした、何か気になる事があるのか？」

「あ、いえ、あの、少し気になる事があるのですが？」

「キアラらしくないな？」

「そうですね、ライル君に関してなんですが」

「何だ、何かやらかしたのか？」

話の流れが見えないんだが、ライルが大失敗でもしたんだろうか

？　いや、そこまで重要な事案は任せていない筈だし、私に報告の必要が生じるとも考え難いんだが。

「いえ、ライル君の身上調査の方です」

「ああ、そっちの話か、調査が上手く進んでいない様なら、ゆっくり進めてくれればいいぞ？」

「調査が難航しているのは事実なんですが、今回の公爵夫人の過去の調査と同じ物を感じると報告を受けているんです」

「はぁ？　何でライルの過去を？」

「誰が何の目的でと言うのも不明ですが、ライル君母子には少し不可思議な所がありまして」

「ふむ、しかし、ライルが、そんな重要人物なのか？」

「可能性としては、モーランド侯爵の庶子とかなのですが・・・」

「無いな」

思わずそう声に出してしまったが、別におかしな話でも無いだろう？　ライルがだぞ？

「そう断言される根拠を聞きたいですが？」

「さあ、特に無いが？」

「はぁ～」

「いや、そこは呆れる所じゃないだろう？　だが、その可能性は消しておきたいな。こちらは妥協出来ないぞ？」

「はい、勿論です。ライル君の名誉に関わりますから」

「打つ手は？」

「大規模に調査を行ってみるというのも手ですが、これは採用出来ませんね」

「だろうな、ライルの生い立ちに問題があると宣伝しているような物だ」

「そうすると、ライル君の唯一の肉親についての情報を集めるのが良いと思うのですが？」

「ベルさんのか、それも変わらないだろう？」

「いいえ、成人間近のライル君がその姿を血縁の方にも見てもらいたいと希望したと宣伝するだけです」

「それは良いアイデアかもな、でも偽の親戚とかが続出しそうだが？」

「さあ、ベルさんの事を覚えている人がどれ位居るでしょうか？」

「覚えている人が少ないのか？」

「ええ、殆ど居ませんね」

「いや、しかし」

「何故か、そのベルと言う女性は常時変装していたそうですよ？」

「変装？　まあ、良い。話を進めてくれ」

随分胡散臭い話になって来たな、嫌な予感がするが、ライルの将来の為にも爆弾は取り除いた方が良いだろう、そう考えてキアラの提案を実行に移す許可を出した。

第百六十二話　ラスティン３０歳（マッド・ドクター？：後編）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百六十三話　ラスティン３０歳（架け橋）（前書き）

第百六十三話ＵＰします。

第百六十三話　ラスティン３０歳（架け橋）

戦争のシナリオ（狭義の意味でだぞ？政治的なものも含めて戦略は決まっているからな）を決めて、それに伴う訓練等を色々行う事になった。

1. テッサの外交修行
2. ミコト君の目の治療
3. 空軍特殊部隊と明人青年の訓練
4. 情報収集と解析
5. 諸外国との連携

主に私が関与したのは上記の5点になるが、政務の合間を縫っての事だからそれ程自由に行動が取れたわけではない。副王時代に自分が如何に勝手に振舞っていたかが、良く分かるが後の祭りだろうな。色々な不満と不自由を抱えながら、フレデリック様はフィリップ4世として最後まで責任を果たしていた事がに尊敬の念を覚えてしまう。

中央集権化を進めてきたのだから、”中央”での仕事が増えるのは当然なのだが、国王の決裁が必要な案件が多すぎるのだ。少しずつ明文化した法律を制定して行く方針なんだが、残念ながらこれに関しては暗中模索の状態が続いている。立憲君主制を目指す方針は以前から決めていたんだが、これが中々難しいのだ。

私自身は前世でも法律に詳しくは無かったし、転生者の中に適当な人物も居ない。ただ、あの世界の法律をそのままこの世界に持ってくるのは難しい事も分かってきた。まあ、魔法があったり、人間以外の色々な種族が居たりするんだから、当然と言えば当然なんだ

が、これでは民主化など何時の事になるか分からないな。

いかんな、また愚痴モードになってしまった。（これではトリステインの愚痴王と呼ばれる事になってしまう！）

先の5点の状況を説明しておこうか。

1．テッサの外交修行

これに関しては、ほとんどキアラに任せたままになっているが、テッサをアルビオンに送れるまでにはなった様だ。キアラの部下の報告によれば、何と言うべきか悩むが、テッサ自身もある方面では十分に世間知らずだった。レーネンベルクに居た頃は結構雑用もやっていた筈なんだが、何故か”値切る”という概念を知らなかったらしい。

いや、屋敷の使用人には私もお使いを頼まれた経験があるからな。これは自分の子供にお使いを頼む感覚だったのだろうが、両親もその事に関して何も言わなかったし、奨励していた気配もあったな？

どうも、テッサには商品を買う時には相手の言い値で買う物といった”常識”があったらしいが、何となくそう思ってしまった理由も想像が出来る。当時の私も、テッサも公爵家の関係者なのだから、マリロットの町で普通に買い物をする限りはほぼ定価で買い物が出来た記憶がある。

お小遣いで買い物をした記憶はそれ程無いが、きちんと店を構えている様な商人が公爵家の人間に吹っかけたりしないだろうと思ったので、確かに言われた通りの金額を払った経験さえある。正直言えば物価に関しては殆ど知識が無かったし、今も自信が無いな。（もう少しお忍びで出かける時間があれば、むっ、また愚痴モードに！）

話が逸れたが、テッサも十分に箱入り娘だった訳だ。義理とは言え貴族の娘なのだから不思議な事では無いが、少し意外だった。まあ、テッサの指導に当たった役人も交渉力とコミュニケーション力を試す為に”課題”を出したのだろうが、呆れただろうな。

ただ、コミュニケーション力に関しては普通以上だったらしく、交渉力を高めるのにそれ程時間はかからなかったそうだ。まあ、他人の気持ちを汲む事にかけてはテッサは人一倍得意だろうから不思議では無いか。そこからは問題無くと言うより非常に効率良くテッサは交渉術を学んでいった。

そして2ヶ月程でキアラからも合格点が出る程の成長ぶりだったから、思い切ってアルビオンに行ってもらう事にした。まあ、ガリア辺りに送る事も出来たんだが、あそこは色々面倒だしな。交渉の目的は”モード大公一家”を我が国に招待する事だ。表向きは、アルビオン空軍の編成について話を詰めたいと言う事になるかな？勿論、裏向きはティファニアをこの目で見てみたいと言う事だ。

別に彼女の胸を見たいとか、ハーフエルフがどういう存在なのかとか興味がある訳じゃないぞ？　前者に限って言えば、私はどちらかと言えば小さい方が好みだしな、って何を言っているんだろう？

後者は、テッサと一緒に使者をやってくれるクリシャルナの興味なんだが、彼女は何を知りたいんだろうか？

「テッサ、良く頑張っているみたいだね」

「いいえ、皆さんが良くしてくれるので、そのおかげです」

「キアラからも色々聞いているが、テッサには意外に向いているのかも知れないね？」

「そうでしょうか？」

「まあ、テッサの将来の可能性が広がる訳だから、悪い事じゃないよ」

「はい！」

「話は聞いているだろうけど、テッサにはアルビオンに行ってもらう。目的は分かっているね？」

「はい、でも、私に出来るでしょうか？」

「ん～、今回は小手調べなんだよ？」

テッサのアルビオン行きは、テッサの交渉力を確かめるという意味が大きいからな、ティファニアを見たいだけならば自分で行くのが手っ取り早い。（いや、簡単に動ける立場じゃないので調整は必要だし、会えたからといって覚えていられるかという問題もある）

「どう言う意味でしょうか？」

「そうだね、”モード大公一家”をトリスティンに招待したいと言っても、簡単には来てくれないだろうね」

「そうなのですか？　では、私の任務は最初から失敗なんじゃ？」

私は少し不安そうになってしまったテッサに軽く笑いかけて、話を続けた。

「はっきり言ってしまえば、”モード大公一家”の情報を得るのは難しいんだよ、正攻法にしろそれ以外にしろね。実際何人も人を送り込んだけど思わしい結果を得られた事は無いしね」

「それでは何故？」

「今回は、テッサとクリシャルナで言ってもらうんだよ？」

「ああ、確か大公妃はエルフでしたね」

「そう、少しは違った反応があるんじゃないかな？」

「そうですね」

「まあ、モード大公だけが来る事になるとは思うけど、トリステインがエルフと交渉を持っているとアルビオンに知らせるには十分だろ？」

「うーん、ちょっと納得が行かないですが、どうして、”モード大公一家”なのですか？　アルビオンの国王一家を御招待した方が良い気がします」

おっとテッサも意外と鋭い所を突いて来るな。まあ、アルビオンの国王一家を招待するにはちょっと時期が悪いんだがな。

「テッサ、国王一家を招待したら多分王子妃も呼ぶことになるよね？」

「あ、そうですね、ちょっと拙い考えでした」

「まあ、招待の理由も無いから仕方が無いよ。ある意味王家同士の交流を復活させる布石でもあると考えてくれるかな？」

「はい」

話が分かり難いかな？　まあ、家出姫（アンリエッタの方だぞ）がアルビオンに向かって、結構早い時期に婚約が発表された為に色々な憶測が飛び交った、夢見る人々にとってはアンリエッタの行為は”恋に生きる乙女のラブロマンス”な訳だが、現実に生きる人々にとっては”恋に溺れた愚かな愚行”でしかなかった。（キュベレーが拾ってくる噂では、若い女性は前者が多く、国の中枢に居る人間ほど後者の感想を持っているらしい）

実際の所、アンリエッタの評判は思いっきり低下していると言っていい。病床の父親を見捨て、国の混乱の原因を作ってしまったんだから、弁護するのは難しいのだが、私自身は色々と反省する事が多い。

急な婚約発表に関しても、アルビオン王家とすればアンリエッタの身柄を正統な手続きで預かっていると主張する意味が強かったと報告を受けている。（正確には、あの反乱もどきの時にアルビオンに送ったユニスとアルビアオン王家で話し合いがもたれた訳だから、一応両国同意の話でさえあるのだがな）

「まあ、フィリップ４世元陛下が仲裁してくださったから、大事にはなっていないが、この辺りで王家同士の手打ちをしなきゃいけないからね」

「色々複雑なんですね？」

「テッサ、他人事じゃないんだぞ？　とは言っても、テッサには目の前の交渉を上手く進める事だけ考えれば良い」

「はい。そう言えばクリシャルナさんが正使なんですよね？」

「ああ、テッサは副使という形かな。だが、トリステインの顔には違いないんだからきちんと対応するんだよ」

「それは、大丈夫だと思います。その為に色々習っていたんですから、あの失礼かもしれませんが、クリシャルナさんの方は大丈夫なんですか？」

「・・・」

少し虚を突かれた質問だったが、何故か妙に不安を覚えてしまった。別に問題を引き起こすという意味では無く、未だに人間の常識から少し離れた所にいるエルフの少女が妙な行動を取らないか不安になっただけなんだが、考えてみればモード大公妃もエルフなんだから問題は無いだろうし、エルフらしい行動をとってくれれば良い緩衝材になってくれるかも知れないな？

「あ、あれ、何で黙っちゃうんですか？」

「いや、心配は無いよ。クリシャルナは彼女の一族の代表として人間の世界に来た位なんだから、交渉事は問題なくまとめてくれるよ。まあ、アルビオンの外交官も当然同席するから相談すればいいしね」

「あ、それは聞いたことがあります。マーニュ男爵様のお兄様でしたね」

「ああ、タバサの伯父さんだな、私の兄にもなるけどね。どうだい少しは安心出来るかな？」

答えは表情を見れば明らかだろうな、やっぱりテッサにはジョゼ

ットの事を振るのが一番だな。何とかテッサを言いくるめてアルビオンにお送り出す事に成功したが、使節（と言っても3人だけだが）が出発する際にクリシャルナが妙に嬉しそうだったのが印象に残っている。

「クリシャルナ、なんでそんなに嬉しそうなんだ？」

「え？　そうかしら？」

「ああ、何時に無く目が輝いているぞ？」

「ん～？」

妙な声を出すと同時にクリシャルナの顔の前に文字通り水鏡が現れた。どうやら精霊魔法らしいが、腰の皮袋の中に水の精霊が居るのが感じられる。精霊魔法は別に呪文を必要としていない筈なんだが。

「ん～ん？　別に普通じゃない！」

「露骨に分かるんだけどね、自分では分からないのか？」

「うーん、そうね、もしかしたらシャジャルさんに会うのが楽しみなのかも」

「知り合いって訳じゃないよな？　そんな話聞いたことが無いし」

「ええ、でも、エルフの女性に会うのは久しぶりだから・・・」

クリシャルナは少し恥かしそうに言ったが、誰とでも友人になり

そうな彼女でも同族の同性としか出来ない話でもあるんだろうか？
ちなみにワーンベルでＩＳ研究をしているエルフは皆男性だったし、一見女性に見える程の細身の男性ばかりなのでどうもしっくり来ない。

「まあ、色々聞いてくるんだね。どんな方なの私にも教えてくれよ」

「ええ、でも話の内容は教えられないわよ？」

「エルフの機密なのか？　いや、別に聞き出そうとは思わないけど」

「うん、宜しい」

本当に印象的な笑顔を残して、クリシャルナ達はアルビオンへ向かっていった。シルフィードにテッサと書記役の役人が乗り、クリシャルナは愛馬アイラールに跨ってだから時間はかからないだろう。
問題は彼女たちが”ティファニア”を覚えているかだな。

第百六十三話　ラスティン３０歳（架け橋）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百六十四話　ラスティン３０歳（値切りは王家の常識？）（前書き）

第百六十四話ＵＰします。

第百六十四話　ラスティン３０歳（値切りは王家の常識？）

次の虚無の曜日にやって来たライル達と一緒に早めの夕食をとりながら、テッサの交渉術修行の話を話題にしてみたんだが、食卓を囲む皆に”値切り”の概念を説明する必要が無かった。

ライルは当然子供の頃に実践したいたし、ロドルフは前世でも現世でも買い物は絶対に値切る派らしい。（関西育ちだったかな？）

意外なのは、ノーラもイザベラ姫も値切った事があるらしい。ノーラの方は、大体想像がつくが？

「え、何時、値切りを知ったかですか？」

「ああ、ノーラは立派なお嬢様育ちだろ？」

「母様が、値切るって想像出来ません」

「もう、ライルまで！　私の値切るのを教えてくれたのは、ミレーユだったわね」

「そのミレーユさんと言うのは？」

「イザベラにも何時か会わせてあげたいわね。そうね、私のお姉さんみたいな女性かしら？」

「どちらかの貴族の方ですか？」

普通の貴族のお嬢様は値切ったりしないんだが、イザベラ姫も何

処かずれている気がする。

「いいえ、家の、実家のメイドなのよ」

「あ、それなら私も、お母さんに、当時は女官をしていたんですけど、こっそり屋敷を抜け出して買い物に連れて行ってもらいました」

「カグラに？」

「ええ、その頃は色々な領地を回っていましたから、色々な町に行きましたよ」

カグラさんも思い切った事をやっていたんだな？　女性同士で仲が良いのはいい事だな。（多分これにはクロディーも絡んでいるんだろうな、何事も無くて本当に良かった）

「ライルはやっぱり、ライデンの町でか？」

「はい、父様。ベル母さんは余り外に出かけたがらなかったので、5歳位からは僕だけで行っていました」

おっと、良いタイミングでこの話題が出たな。今のライルならベルさんの事を聞いても問題は無いだろう？　多分、イザベラにも話していないだろうから、この場で色々聞いてみよう。

「ライル、ベルさんの事を話してくれないか？」

「えっ？」

「嫌か？」

「いいえ、ちょっとミコトにベル母さんの事で言われたので、いえ、何でもありません」

「？」

皆で首をかしげる事になったが、ライルは見かけ上、明るくベルさんの事を話してくれた。

「ベル母さんは、銀髪の長い髪だったな～。結構美人だったんだけど、うん、美人だったからかな？　外出する時は、髪を帽子に入れてスカーフで口元を隠してました」

「何でそんな事を？」

「普通にしてたら言い寄る男が多かったんじゃないかな？　そう言えば、男の人が時々家に来ていた気がするよ」

変装の話は聞いていた通りだな。男性の影ありか、言い寄っていた男なら問題なんだが、どんな会話があったのか子供のライルには理解できなかったらしく詳しい話は無かった。銀髪か、別にめずらしくもないし、ライルの蜂蜜色の髪は父親似なのだろうか？

「へぇ、ライルのお母さんって美人だったんだ」

「うん、ベル母さんも母様と同じ位美人だったよ。そう言えば、ベル母さんって母様に似ていたかも、結構背が高かったし、印象がね」

「なあ、ライル、その頃ってどうやって生活していたんだ？」

ロドルフ、良い質問だ！

「うーん、お金の管理はベル母さんがしてたんだけど、収入があるわけじゃなかったんだけど、蓄えは結構あったんだ」

「ふーん、ライルの死んだ父親って貴族だったのか？」

「それは無いかな？　ベル母さんは貴族が嫌いだったしね、当時のモーランド侯爵の支配じゃ当然なんだけどね。ベル母さんは役人だったそうだから、その時の蓄えだったんじゃないかな？」

役人と言う話は聞いたことがあったかな？　貴族嫌いと言うのは、愛人として扱われて捨てられたのなら分からないでもないが？（蓄えと言うのは手切れ金だったんだろうか？）

「ライルの母親だと、優秀だったんだろうな？」

「どうなんだろうな～、分からないけど、ベル母さんからは色々な事を教わった気がするよ」

「良いお母さんだったんだね」

「そうだね、僕は”親”に恵まれているのかも知れない。うん、今ならそう思えるよ」

ライルの表情は、少し寂しげだったが、今度言葉は無理をしていると感じられなかった。ライルも成長した物だ、”親”の1人として本当に誇らしい。

「ライル、今度イザベラを連れてベルさんのお墓参りに行って来た

ら？」

「ノーラ、今はダメだぞ。今度の戦争が終わったらにするんだな。ライルも分かったね？」

「父様！　僕も戦争に行っちゃ駄目でしょうか？」

「「ライル！」」

ライルの突然の懇願に、ノーラとイザベラが驚いて声をあわせて名前を呼んだ。私としてはライルがこんな事を言い出すと思わないでも無かった。ジョゼットは参加してもらう予定だし、そうなると当然テッサもだが、年下の妹の様な少女達が戦争に参加するんだから、ライルとしても黙っていられないだろう。（それに、ライデンの町辺りも戦場になる可能性があるとなればな）

決断を先延ばしにしていたが、今、決める必要がある様だ。親としては、まあ、実戦は無いだろうが仮にも戦場に子供を送りたくは無いが、王として、支配者として、身内を安全な所に置いておくのも拙いのは分かる。私自身が戦場に赴く決心をしている以上、ライルの思いを頭から否定する訳にも行かない。（私が戦場に行ったと知った父はどんな思いだったんだろう？）

そうだな、父は私が何かをしようと思った時には協力してくれたんだ、私が息子の思いを無下に出来る筈が無いな。（勘違いで副王になった時でさえ、全力で支えてくれたしな・・・）

「ライル、お前、ジョゼットに勝てるか？」

「えっ、いえ、勝てないと思います」

「それじゃあ、お前の使い魔は何かあった時に、脱出の手助けが出来るか？」

「クエスは、いえ、役に立たないです」

ライルの使い魔のクエスは、ノームと呼ばれる妖精の一種らしいが、戦闘力は皆無なのだ。その代わり手先が器用で芸術的な美術品や装飾品を作り出してくれるらしい。ライルがイザベラに送った品々は、大抵クエスの作だ。

「お前は戦場に出た事があるか？」

「いいえ」

「それでどうしてお前は戦場に出たいなんて言えるんだ？　ジョゼットもテッサもああ見えて、きちんとした戦闘訓練をうけているのを知っているな？」

レイモンドさん率いる聖女傭兵団の人々のお陰で、２人ともそこそこの戦闘力を持っていると聞いている。一方、ライルは十分にレイモンドさん達の指導を受けていない。この時期ライルは、後輩（公立学校と魔法学園に同時に通う子供達）の為に奔走していた筈だからな。

「・・・」

「兵団のメイジ達は少なくとも実戦を経験しているぞ？」

「でも・・・」

「ライル、自分の立場が分かっているな？」

「・・・」

「お前は、メイジとしての腕はまずまずだが、ライルと同じ位の腕のメイジなら兵団には沢山居るぞ？」

「うん・・・」

「ライル・ド・レーネンベルク！」

「はい・・・」

「トリステイン国王として命じる！　来るべきゲルマニアとの戦いでは、魔法兵団長の指揮下で行動せよ！」

「えっ？」

「返事は？」

「はい、喜んで！」

「言うまでも無いが、お前は指揮官でも兵団員でさえ無い、これを認識して指揮官の指示に従い、決して他人に迷惑をかけるな。誓えるか？」

「はい、誓います。僕、いえ、私は兵団の指示に従う事を誓います」

「良いだろう、お前の従軍を許可する」

また似合わない事をしてしまった・・・。私にはどうも副王辺りがあっていたんじゃないかと思うな。私ほど偉そうにしているのが似合わない王様も珍しいんじゃないだろうか？

「ライル、本当に戦争に行っちゃうの？」

「ああ、僕の生まれ故郷を守りたいからね」

「あのラスティン様、いえ、陛下」

「絶対駄目だ！」

「貴方、イザベラはまだ何も言っていませんよ」

「イザベラ姫が、怪我でもしたら国際問題だぞ？」

「ですが、イザベラの将来にはプラスになりますよ」

「トリステインとガリアの将来の禍根になるかも知れないんだ」

「でしたら、ご両親に同意を得られたら、如何ですか？」

そう来たか、イザベラがトリステインで生きて行くなら、トリステインの為に戦ったと言うのはアドバンテージになるが、大丈夫だカグラさんが承知するとは思えない。父親の方は、どう出るか読めないが・・・。

「それなら良いだろう。だが、イザベラ姫自身で頼むことが条件だ！」

「それで良い、イザベラ？」

「はい、お母様」

ノーラには私が戦場に出かける事を納得してもらう為に、今度の戦争の戦略について話してある。マース領方面は主戦場どころか睨み合いで終わる予定とは言っても絶対ではないのだが、全く困った物だ。

第百六十四話　ラスティン３０歳（値切りは王家の常識？）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百六十五話　ラスティン３０歳（口喧嘩）（前書き）

第百六十五話ＵＰします。

第百六十五話　ラスティン３０歳（口喧嘩）

しかし、戦争に行きたがる人間と言うのはどうも理解しかねるな。普通は嫌々なんだろうに、イザベラ姫が自分の将来を考えて戦争に出ると言っているとは思えないんだが。転生者達には、同行してもらう予定だが、戦争に参加しろと言ったら、喜んでとは答えてくれないだろうな。

「ふぅ、ロドルフにはすまないけど、私と同行してもらうからな？」

「はい、僕は戦いには向きませんからね」

「まあ、私達は高みの見物だよ」

「でも、僕やエルネストさんなら話は分かるんですけど、何故、転生者を集めるんですか？」

おっと、これだからロドルフは油断が出来ないんだよな。妙に聡いと言うべきかは悩む所だが。勿論ナポレオン１世の意志に対抗する為なんだが、世界に干渉する意志の力などと言う物がどんな風に働くかなんて、分からないから、全員を集めて現場に連れて行く予定なのだ。

ここは口先三寸で丸め込まないといけないんだろうな。

「そうだな、ここが私たちの知っている世界とは違うって認識して欲しいからかな？」

「どういう意味ですか？」

「私達は、自分達が生きている世界がどんな状態かちゃんと認識しないといけないんだよ」

「おっと、これは薮蛇だったかな？」

生まれ変わった異世界で引き篭もった実績があるからな。ご両親も心配性なんだが。

「転生者っていうのは、皆変わり者だからね。現実を見る必要があるんだよ」

「そうかも知れませんね、でも、いえ、やっぱり戦争を見るのは辛いですよ」

「いいや、今回の戦争はそれほど酷くはならないよ、説明しただろう？」

「そうでしたね、敵の被害を減らす様な戦略を考える、ラスティンさんもやっぱり転生者ですね」

「そうかもな」

口ではそう肯定したが、我が国の戦術を考えたのはアンセルムだし、戦略を考案したのはキアラなんだぞ。まあ、私がそう要求を出す前に既に方針が決まっていたんだから、今回は私の意志じゃないぞ、多分な？

＝＝＝

余談になるが、イザベラ姫の従軍はあっさり彼女の両親によって認められてしまった。イザベラ姫が自分で説得した事になっているが、絶対にノーラが入れ知恵したんだ。最近何故か元気が無かったから、いい刺激になると思ってカグラさんとの交信を見逃していたのが仇になった形だ。

これはライルにとっても不本意だったんだろうが、これまたノーラに何か吹き込まれたらしく、イザベラ姫を説得するのを止めてしまった。ライルとイザベラ姫の仲が確かなものになるならと妥協した訳だが、2人の将来を考えれば悪い事ばかりでは無いと信じよう。

何となくだがノーラが、何故イザベラ姫に肩入れしたのか分かってはいるんだ。ノーラはイザベラ姫に当時の自分を見ているんだろう、モーランドの乱当時ノーラが何を思っていたかは知ることが出来ないが、どうしたかったは十分に分かった。私としては、ノーラがレーネンベルクに居なかった事を喜んでいたのだがな。

だが、奴には文句を言っておかなくてはならないだろうな！　次の交信は何時だっただろうか？

＝＝＝

「おい。愚痴王」

「何だ、いきなり好戦的だな？　英雄王殿？」

いきなり悪口から入ったのに、速攻で切り返された。しかも本当に嫌味な切り返しだ。

「くっ！」

「英雄と呼ばれて嫌がるとは珍しい奴だな、ラスティン殿？」

これだから、無用に優秀な奴は扱いに困るのだ。いや、愚痴王なんていきなり言ったのは失敗だったな、もう少し嫌味な場面で言うべきだった。

「好戦的にもなるでしょう、何故娘の従軍を許可したのです？」

「何故？　私が王として、許可したのだぞ、何か問題があるか？」

「それは、何かの間違いでイザベラ姫が負傷しても、ガリアとして何もしないと？」

「そうだ、それほど自国の軍に自信が無いのであれば、こちらから護衛を出すぞ？」

ほら、嫌な所を突いて来るだろ？　我が国が、今度の戦争で独自に事を進めようとしている事に感づいているんだろう。情報統制は完璧なはずなんだがな。イザベラ姫がと言うよりライルが参戦するのはマース領方面だから探られても全く問題が無いが・・・。

「その護衛部隊の指揮権は、こちらに頂けますかな、ジョゼフ殿？」

「いや、あれの護衛に専念させる、その為の護衛だからな」

イザベラ姫が兵の指揮でも出来れば良かったのだが、このまま護衛部隊を受け入れたら、自由に探ってくれと言っている様な物だろうな。

「それでは、こちらの指揮が混乱しますね、護衛の話はお断りさせていただきますよ」

「・・・、お前は、私が無責任な親だと思うか？」

「いいえ、イザベラ姫の将来を考えれば、悪くない考えだとは思いますよ」

「そう言ってくれるのは嬉しいがな、私はあれを止める事が出来んのだ」

「はぁ？」

「分からんか？　”あれ”は、昔から”あれ”にそっくりだったからな」

おい、普通に聞いたら何を言っているか分からないぞ？　だが残念ながら私には分かってしまった、アナベラさんの決断によって助けられたジョゼフ王がイザベラ姫の決断に反対出来る筈が無いと言いたいんだろうな。はぁ、こんなだからカグラさんや宰相の手を借りる事になるんだろうに。

「分かりましたよ、ですがイザベラ姫は内面的にはジョゼフ殿にそっくりですよ、気付いていますか？」

「・・・」

あ、黙ってしまったぞ？　誰かに言われなかったんだろうか？
多分、カグラさん辺りから絶対言われたが認めたくなかったからこの反応なんだろうな。

「でも大丈夫ですよ、イザベラ姫には、ウチのライルが付いていますから。貴方に、アナベラ様やカグラさんが付いているようにね」

「そうだったな、世話をかけるな」

「ジョゼフ殿」

「何だ？」

「似合わないですよ？」

「うるさいわ！」

そう言っていきなり交信が切られてしまった。大人気が無い男だな、何故あれが王として優秀なのか理解出来ない。裏で糸を引くという所は変わらないが、それでもガリアは上手く動いているのだ。才能が豊かなのは認めるが、五星と互角に事を進めるというのはどうも納得出来ない。

私の様に部下に丸投げという王から見ると、無性に気に障るのだ。王なんて責任をとる為にいるだと思うんだが、それだけではいけないのだろうな。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

2. ミコト君の目の治療

話は前後するが、ミコト君の目の治療についても触れておこう。ミコト君の目の状態は、網膜はく離に近い状態だったそうだ。物理

的に眼球を傷つけた訳では無く、何らかの毒を飲まされたというのがエルネストの見解だった。まあ、こちらの医療レベルでは治療不能だったんだが、というか知識が無く治癒魔法を使うと本気で治療が難しくなるらしい。良く分からなかったが、網膜が異常な状態で固定されて元に戻らなくなるらしい。

「それで、治療は終わったのか？」

「ああ、何が眼球内で起こっているか分かれば、こちらのメイジなら簡単に治せるよ」

「そうか、助かったよ」

「まだ、使われた毒の特定も出来ないし、再発の可能性も低いが残っているからな」

「そうなのか？　目は見えるようになるんだろうな？」

「経過が良好ならね、ただ１０年近く目が見えなかったんだから、急には動かせないぞ？」

「そうなのか？　出来れば早めにカグラさんに会わせてやりたいんだが」

「一週間は動かさない方が良いだろうな。それからも暫く激しい運動は控えた方が良い」

「それは、あの娘達も知っているのか？」

「ああ、当然だろう」

どうしたものかな、確かカグラさんも動けないと聞いたんだが、やっぱり2人目なんだろうな。お盛んな事だな、こちらも結構お盛んなのに何故か子供が出来ないんだが？　もしかして、これか？

「どうした？」

「いや、カグラさんを安心させたいんだよ」

「そう言う事なら、2週間後だな。別に身体が弱っている訳じゃないから、付き添いの一人でもいれば十分だろう」

「お前が付き添ってくれるか？」

「何で僕が！」

「ガリアには医療に使えるマジックアイテムがあるかも知れないぞ？」

「ふ、ふん、大体のマジックアイテムは調べてあるさ！」

「動揺しているなエルネスト？　ちなみにカグラさんのミョズニトニルンの力を使えば、マジックアイテムの別の使い方が見つかるかも知れないぞ」

「・・・」

「妹の目の治療をしてくれた恩人の頼みなら、義理堅いカグラさんの事だから」

「分かったよ、行けば良いんだろう」

ちょろいな、エルネストは昔から”利”では動かないが、”医”では容易く動かせるんだよな。

「何故、僕なんだ？　君の妹なら喜んで付いて行くだろうに」

「ジョゼットはまだガリアには行かせられないし、そろそろ真面目に戦闘訓練をしてもらうからな」

「ああ、そんな事をこないだの会合で言っていたな。ルイズと明人だったか？　それに自分の妹まで突入部隊に組み込むとは、王様も大変だな？」

「別に私が大変な訳じゃないがな、単に戦闘力の問題だよ」

「戦闘力ね？　いっそ僕たちの義母殿に出張ってもらえば良いだろうに」

「それを私たちの義父殿が受け入れると思うか？　それに、ラ・ヴァリエール公爵家には独自でゲルマニアに攻め込んでもらうと言っただろう？」

「そうだったな。あんまり怪我人を出して欲しくないがね？」

「大丈夫だ、犠牲者は最小限にする積りだからな」

「そっちは任せるよ」

こうして、エルネストはミコト君を連れてガリアへ旅立って行っ

た。付き添いの女性が1人増えたが、一応鉄道も通っているからそれ程時間はかからないだろう。妙齢の女性と2人旅は出来ないなんてエルネストらしいな。（まあ、ミコト君はジョゼットと同じ位に見えても実は20代らしいからな、話を聞いただけだと、カトレアが誤解しそうだ）

第百六十五話　ラスティン３０歳（口喧嘩）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／９／６
大人が無い－＜大人気が無い
に修正

第百六十六話　ラスティン３０歳（特殊部隊）（前書き）

第百六十六話ＵＰします。

第百六十六話　ラスティン３０歳（特殊部隊）

3．空軍と特殊部隊と明人青年の訓練

こちらは実に順調に行っていると言って良いだろう。

空軍の”フネ”の方は我が国は少数精鋭を旨としている。はっきり言ってしまえば、アルビオンの空軍が数は揃っているから、数と数での勝負に負けは無いし、それならトリスティインとしては量より質と言う訳である。まあ、情報戦略上量より質をとらざるを得なかったと言う面もあるが、戦争などにそれ程生産力を使いたくないという事情もある。（実際の所アルビオンとの交易に使用している”フネ”を回せれば、かなりの艦隊が組織出来るんだが、それをやってしまうと矛盾して聞こえるかもしれないがアルビオンが困る事になる）

空軍には”フネ”以外にも戦力がある。勿論ゼロ戦の事だが、ゼロ戦だけでは無い。コルベール夫妻（無論コルベール先生とミネットだぞ）の作品だが、これはある意味隠し玉なのだ。

行っている飛行訓練の方は、どうしても空を飛ぶ物だから、隠し切れない事が前提になっており所持する機体数を特定されない為に常に1～2機でしか訓練が出来ないのが問題であるが、部隊長は頑張ってくれている様だ。ちなみに明人青年も訓練に参加しているがさすがはガンダールヴという操縦技術を発揮してくれたそうだ。お陰で戦闘機部隊の操縦技術は格段の進歩を見せてくれた。

ゼロ戦に乗ったばかりの明人青年が、部隊内のエース（部隊長と同一人物だが）をドッグファイトで撃墜してしまったのだ。どうし

ても教官役になれと言われた明人青年も困っていたが、明人青年には生身での戦闘訓練も待っているんだから、丁重にお断りしたらしい。

ああ、さっきから出て来ている、戦闘機部隊の部隊長だが、誰だと思う？　もう隠す必要は無いだろうな、騎士殿といえば分かるだろうか？　そう、ゲルマニア人であるヴァルター・フォン・クロンベルクの事である。気付いたとは思うが、彼が亡命者第一号だったのだ。

まあ、騎士殿らしい行いだったが正直私としても扱いに困ったのは前にも話しただろうか？　トリステインの中央において置くのは拙いと考えて、面識のあるというか上手く扱ってくれそうなアンセルムの所に送ったのだがどういう経緯か、戦闘機部隊の部隊長などに抜擢されたと言う訳だ。

・　・　・

やはりばれてしまうか？　私自身が”戦闘機部隊”の存在を知ったのごく最近だったりするのだ。勿論、戦闘機部隊の構想を話したのは私なんだがここ数年は私自身あまり使い物にならなかったからな。（全く自慢にならないが、今だって、それ程役に立っている自覚は無いんだがな）

当然の様に小さな宰相殿の仕業な訳だが、基本的に軍用ではなく、”航続距離を伸ばす”や”最高速度をあげる”，”積載量を増やす”といった要望を見事に実現して見せてくれたコルベール夫妻と、それを軍用に転化してしまうキアラとアンセルムには頭が下がる。（余談だが、キアラを処女宰相と呼ぶ人は少なくなって来た、まあ

年齢が年齢だからな。本人は全く気にする素振りも無いがね）

＝＝＝

空軍の特殊部隊についても触れておこうか？　これも私の与り知らぬ所で設立された部隊だ。私が知っていれば、少なくとも彼らを選ばなかっただろうかならな。

そう、空軍の特殊部隊の母体となっているのは、魔法兵団の警備隊１１班だったのだ。多分一番安全だと思って、大切な友人を送り込んだと言うのに、選りにも選ってあそこがキアラの目に留まるとは思わなかった。違うなあそこが優秀な班で、緊急度の低い任務に当たっていたのだから、キアラの目に留まって当然だったんだろう。

何の予備知識も無く、”特殊部隊”とだけ紹介されて隊長と副官に会ったら、実はどちらとも面識があったというのは私でも驚きで表情が変わってしまう程だった。（別の意味で驚いたという理由もあるんだがね）

「へ、陛下、お久しぶりです」

「マルコさん、いえ、マルコ隊長と呼びましょうか？」

「あ、いえ、その・・・」

「貴方、落ち着いて、スティンと会うのは始めてじゃ無いんでしょう？　スティン、久しぶりね、陛下って呼んだ方が良いかしら？」

「スティンで良いよ、元気そうで何よりだって！　セレナ、君もしかして？」

「ええ、私の旦那様を紹介しましょうか？」

「いや、大体事情が分かった気がするからいいよ。でも、君の男性の趣味がどうも分からなくなったよ」

想像としては、あの頃のセレナは傷心状態だったし、それを慰めたのが班長であるマルコさんだったんだろう、どうやって慰めたかは聞いては野暮なんだろうな？

「あの陛下？」

マルコさんが何か口を挟もうとした様だったが、セレナの方は全く気にしていない様子だった。兵団の班長としては、次期レーネンベルク公爵の元愛人？を妻にしたのは気が引けるのだろうか、妙に緊張しているのはそのせいかな？

「私の男性の趣味なんて昔から変わらないでしょう？　強いメイジに憧れるのは、私の宿命かも知れないわね」

「そうか・・・、まだ、あまり魔法は得意じゃないのかい？」

「まあね、これぱっかりは仕方が無いでしょう。でも、私だって進歩はするわよ！」

「そうみたいだね、君が特殊部隊と言うのは、ある意味納得出来るよ」

「でしょう、メイジの弱点と武器の弱点を私ほど真面目に考えている人間は少ないでしょう？」

そうだろうね、そうじゃなかったら、君をジョゼットの師匠なんかにしなかったさ。そう私は心の中で答えたが、セレナの表情や態度から、口に出しても問題なかったと感じられた。そこで私としては、別の言葉を口にする事にした。

「マルコさん、本当にありがとうございました」

「は、はい？」

「もしかしたら、もうセレナとは会えないんじゃないかと思っていました。こんな明るいセレナが復活するなんて、やっぱり貴方は頼りになる方です」

「私にとっては、ちょっと優しすぎるんだけどね」

「お、おい」

「魔法の腕は確かなのに、外聞に拘るんだから」

「それは、関係あることなのか？」

「腕も度胸もあるのに、結婚式を挙げるのが恥かしいんだって。まあ、私みたいな娘と間違えそうな女を奥さんにするんだから我慢して欲しいんだけど？」

「セレナ、ちょっと黙っていてくれ！」

「はーい」

マルコさんがどう見ても照れ隠しで声をあげたが、セレナにはあまり効いていない。軽口を止めた所をみると、一応夫をたてる気はあるらしい。

「ラスティン様、今度の演習ですが本当に宜しいんですか？」

「ああ、その話でしたね、今日の本題は。勿論構いませんよ、存分に特殊部隊の力を発揮して下さい」

「そこまで言われれば、全力で挑むのみです。警備の方は？」

「そうですね、通常の警備に加えて、魔法衛士隊を特別に2隊、3日間だけ配備する事にした」

「そうですか、それは大変ですな」

「1隊は休憩がとれますから、問題無いそうですよ」

「魔法衛士隊の方々も本気だな、やりがいがあるぜ！」

「貴方、口が！」

「おっと、失礼しました」

やっぱり意外と熱くなる所があるよな、マルコさんは。セレナの様な冷静な女性は意外とお似合いかも知れない。

「それでは、来週の週末3日間、お待ちしていますよ」

「はい、必ずラスティン様の所まで辿り着いてみせましょう」

「もういいかしら？　でもスティンって変わってるわよね、自分の城を攻めさせるなんて」

「いや、あくまで訓練だよ。君達特殊部隊にとっても、魔法衛士隊にとってもね」

「ふうん、その言い方だと。魔法衛士隊には私達が何処から攻めるか話していないのかしら？」

「勿論だよ、言ったら訓練にならない」

「スティンってそんなに性格悪かったかしら？」

「おい、セレナ！」

「その言い方は心外だよ、私は昔からこうだったよ」

「そうね、そうだったかもしれないわ」

それから、簡単な打ち合わせを行って、会談を終わる事にした。

＝＝＝

結論から言えば、フネで上空から進入した特殊部隊に魔法衛士隊が惨敗したという形で演習は終わった。正確には、王城の私の執務室まで特殊部隊のマルコさんとセレナが入ってきた時点で終了となった訳だ。

多分、王城上空に特殊部隊を乗せたフネが現れた時点で勝敗は決

していたんだろう。上空に侵入される前にフネを発見出来れば、機動力で魔法衛士隊が勝っていたんだろうが、哨戒部隊を風上だけに展開したのが失敗だったと、ヒポグリフ隊の隊長のエロワさんが表面上は冷静に分析してくれた。（新型の”フネ”はアルビオン方面しか運行していないから風下から来るとは思わなかったのだろう）

内面は窺い知れなかったが、彼らはこの国のエリートだからな、翌日から隊の訓練が厳しくなったと噂が流れたが、それはそれで良い刺激になったんだと思う。騎獣に乗る事を前提とした”今の”戦闘スタイルが間違っているとは思わないんだが、彼らが腕を上げてくれるならばそれはそれでありがたい事だ。

多分物語通りにワルド辺りが魔法衛士隊に居れば、もう少し頑張れたんだろうが、彼は領主として子爵領の統治に忙しいそうだ。（この辺りは彼の友人のノリスからの情報だが、引退した両親も元気でそろそろ孫の顔がとか言われているらしいぞ？）

この作戦と功績で、マルコさん達は、単なる特殊部隊から空軍特殊部隊（人によっては”幻獣の射手”）と呼ばれる様になった。

何故私が、自分の住む王城を攻めさせる様な馬鹿な（怪我人まで出したんだから本当に馬鹿げた演習だが）事をしたかと言えば、ゲルマニア空軍が明らかにトリステイン攻略を目論んでいると推測されるからだ。無論トリスタニアまで攻め込まれる積りは無いが、防衛力を確かめる意味があったのだ。

そしてそれ以上にゲルマニア中枢への侵攻の予行演習といった面が強いだろう。ゲルマニアの戦術をそのままお返しする訳だな。あちらの首脳部がどんな反応をするか楽しみだ。

第百六十六話　ラスティン３０歳（特殊部隊）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百六十七話　ラスティン３０歳（気の合うふたり）（前書き）

第百六十七話ＵＰします。

第百六十七話　ラスティン３０歳（気の合うふたり）

そういえば、楽しみと言うか面白いと言うか迷うような話がもう1つあったな。これは、特殊部隊が王城攻略（模擬戦的な意味でな）の時に知った話だ。これを教えてくれたのは、

「やっほー」

と言いながらお気楽な様子で、執務室にノックも無しに入って来たのはセレナだった訳だが。（訓練だからなのだろうが、緊張感が無かった、一緒に侵入してきたマルコさんの方は緊張気味だったが）

「お疲れ様、どうやら特殊部隊の勝ちだね？」

「まーね、だってここには何度か来たことがあるんだから、そんなに難しい作戦じゃないでしょう？」

「それもそうか、君にとってはそうかも知れないな」

ゲルマニアのシャルロッテンブルク宮殿（現在の皇帝の居城の名前だ）に関しても、かなり正確な情報が得られているから、セレナに言わせれば散歩みたいな物かも知れないな。

「それにしても暇ね？」

「ちなみに、私の護衛はどうした？」

もう決着はついているんだし、私も特殊部隊の勝利を宣言したいのだが、それを伝達してくれる人間が居ないんだよな？

「そう！　駄目よ、ガスパードなんかを隊長にしたら」

「ガスパードはあれで良いんだよ」

彼が居なければ、私が首尾良く王城から抜け出せる確率が半分以下になるだろうしな。ああ、警備を任せるとなかなか良い働きをしてくれるのだと思う。私が暗殺者や襲撃者に怯えなくて済むのは、ガスパードの的確な指示のお陰だしな。

「そう？　まあ、スティンがそう言うならそれで良いけどね。そうだ、面白い話を聞かせましょうか？」

「君がそう言うなら、本当に面白そうだな」

「ほら、貴方、出番よ。マルコったら！」

おや、夫に花を持たせるという事かな？　残念ながら、マルコさんは未だ警戒中で聞いていない様だが。

「あ、失礼しました！」

「マルコさん、もう警戒の必要はありませんよ。特殊部隊の勝利は私が認めますから」

「はっ！　それで、何の話でしたか？」

「もう！　例の召喚の門の話よ」

「その件でしたか、これは本部に報告していないのですが、私の班

が警備していたあの場所に関する物です」

「本部に報告していない？」

「はい、確証が出来る前に、任務が引き継がれてしまいましたので」

「そうでしたか、緊急度を考えれば仕方ありませんね、それで？」

「これは前回もお話したと思いますが、亜人達がやってくるのは、何かに召喚されているんだと思えます。そこで、これが妙な事を言い出しまして」

マルコさんが少しだけセレナの方を向いて、話を続けた。”これ”なんて呼ばれても、セレナの方は何処か嬉しそうに見えるな。

「妙な事？」

「はい、勝手に開く召喚の門ですが、解析を行うと、やはりサモン・サーヴァントとほぼ同質だという結論に至りました」

「成る程、ここまでは別に妙では無いですね？」

「はい」

「やっぱり言い難いみたいだから、私の方から言うわね？」

中々本題に入らないマルコさんに、業を煮やしたという訳では無いだろうが、話をセレナが引き継ぐ形で話し始めた。

「端的に言うとね、”あの娘”を少しで構わないから、警備隊に貸

して欲しいの」

「ほう、そう言う事か、セレナ？」

「ええ、その通りよ」

ジョゼットの師匠役をやっていたセレナならではの意見だ。召喚されてくるらしい亜人達でも危険な鬼の類が召喚される前にゲートを消してしまうという考えなんだろう。確かにジョゼットなら出来るかも知れないし、多分メイジ殺しとして生きて行くだけよりは随分まともな仕事だ。

「ジョゼットは別に私の指揮下にある訳じゃないのは知っているだろう？」

「ええ、貴方が頼めばあの娘は嫌とは言わない事もね」

内部事情に詳しいと言うのは、こういう時に困る物だ。ジョゼットにとっては喜ばしい事だし、父も反対はしないだろうし、ノリスは大賛成だろうな。

「分かった、戦争の件が落ち着いたら両親に話してみるよ」

「いいわ、よろしく頼んだわよ」

こうして、セレナの新しい話は終わったんだが、結構長い時間話したのに、護衛が来なかったのはガスパード達が気絶させられた上にロープでグルグル巻きにされ、猿轡までされて人気の無い部屋に放置されていた為だった。友人にも一切容赦しないセレナが少し怖かったな。

＝＝＝

明人青年とルイズの訓練も話をしておかなければならないだろう。大体想像が出来たと思うが、明人青年もルイズも単独であればかなりの力を発揮するのに、２人が組むと何故か力が半減してしまう。明らかにコンビネーションが上手く行っていないと言える。

ルイズに関して言えば、あの”義母殿”が鍛えただけあって、”メイジ殺し”としてはかなり優秀だろう。まともに決闘をしたら殆どのメイジは秒殺されるだろうな体術にそれ程重点を置いていない為か、接近を許すと弱いかも知れないが、接近できる”メイジ”は少ないだろうな。

しかし、何故か明人青年と組ませると、かなりの確率で前衛をやっている明人青年に”爆発”を命中させてしまうと言う決定的な問題点があるのだ。本人曰く、

「アキトが私の魔法を撃とうとする方に移動してくるのが悪いのよ！」

だそうだ。

一方の明人青年だが、武器を持たせないで（持参した竹刀とか、訓練用の模造剣を持って）戦うと、訓練された兵士達と互角といった程度の腕前だった。それでも”日本”でトレーニングは欠かさなかったらしく、様々な実戦を通して見違える様に腕を上げている。

風や火といった質量を持たない攻撃魔法は明人青年とデルフの前には役に立たない。デルフリンガー自身も一度身体を失った経験からか、吸収できる以上の魔力を吸収した場合も吸収と同時に明人青年の身体を操る力を強める（言い換えれば明人青年が強力な身体強

化される訳だな）事で、かなりの魔法を凌ぎ切る事が出来るまでになった。

デルフを左手に握った明人青年では、兵団の警備隊の手練でも対抗出来ない時がある。質量系の魔法（こう言う表現は普通しないんだが）だとデルフが上手く吸収出来ないからやり方次第らしい。質量系に分類出来る土系統も水系統もあまり攻撃向きでは無いので、複合魔法系が多く使われるが、当然詠唱時間がかかるために明人青年が有利な展開が多いな。

しかし、前述の通りルイズと組ませると明人青年が一方的に被害を被る訳だ。これまた本人曰く、

「ルイズは絶対俺の行こうと思ってる方向に魔法を発動させてるよな？」

だそうだ。

2人の仲を取り持つ形になったロドルフは、私に2人のコンビネーションに関して苦笑しながら、

「なんのかんのと言いながら、あの2人って気が合いますよね？」

と感想をもらしてくれた。感想には同意だったが、どうも、ロドルフを2人の仲介者に選んだのは失敗だった気がする。若い2人がどうしても素直になれないのは分からないでもないんだが、その状態をロドルフ自身が楽しんでいると感じるのは気のせいじゃないと思う。（ロドルフの悪い癖が出たと言った所なんだろうな）

少し意地の悪いアイデアが頭に浮かんだが、実行に移すべきか悩

むな。いや、私にとってルイズと明人青年は切り札だし、ロドルフだって私が彼の両親から預かっている形だ。やってみるか？

「ロドルフ、君の使い魔を呼び戻せるか？」

「えっ、ノトスをですか？　今すぐには無理ですよ、ワーンベルまでは念話は届かないですから、僕に何かあれば直ぐ来てくれるでしょうけど」

「そうか、その辺りは風の精霊でも変わらないんだな。話は変わるが、あのままであの2人は強くなると思うか？」

「えーっと、どうなんでしょうね？　漫画の話なら、この辺りで強力な敵とかライバルとか出てくるんでしょうけど、そう都合よく行かないでしょう？」

ライバルは兎も角、強力な敵と言うのは、私の期待した通りの回答だった。さてロドルフなら乗ってくると思うが、どうだろうか？

「君がその敵になってみないか？」

「はい？　僕が戦いに向かないって知ってるでしょう？」

「ああ、君自身はそうかも知れないね」

「？　それはどう言う、ああ、成る程、ノトスですね？」

「理解が早くて助かるよ、ルイズ達の訓練の最中にちょっと仕掛けてみないか？」

「でも・・・、何故、僕が・・・」

「それは2人にとっての”ラスボス”が風メイジだからだね。それに”あれ”を相手にするならただの訓練じゃ不足だろう？」

「それはそうですけど・・・」

「本当なら私が手を出したんだが、土の精霊じゃ、あんまり適切な訓練にならないし、そう何度も城を抜け出すと怒られるからね」

「あははっ、キアラさんでしたっけ？」

「まあ、そう言う事だよ。頼めるか？」

「はい、分かりました」

仕方無くと言った口調だったが、表情が如何にもだった。国王の命令という大義を得て、使い魔を操って遠くから一方的に攻撃できるんだからロドルフなら乗らない筈は無いと思ったが、やっぱりな。明人青年はまだまだなんだろうが、ルイズは多分気付くと思うぞ？（十分な訓練を受けていないライルだって殺気に気付く位だからな）

私達が一度死んだ記憶を持っているからと言って、実感できているとは限らないのは、私自身が良く分かっているんだ。私だって、誘拐された上に暴行を受けたり、戦場に立った事や、死んでいないのがおかしいなんていわれた経験が無ければ実感出来なかっただろうし、自分の実感が十分な物なのかなんて分からない。（緩やかな死や、自意識を持ったまま転生でもしなければ実際の所十分じゃないんだろうな）

第百六十七話　ラスティン３０歳（気の合うふたり）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

２０１１／９／６
何度か着たー＜何度か来たに修正

第百六十八話　ラスティン３０歳（男同士が同じベッドで・・・）（前書き）

第百六十八話ＵＰします。

第百六十八話　ラスティン３０歳（男同士が同じベッドで・・・）

王城に戻った私は、ワーンベルに使いを出してキュベレーとノトスを呼び戻す事にした。普通の人間をワーンベルに送ったんだが、あそこにはエルフの技師達が常駐しているから、精霊との意思疎通は困らない。

ちなみに、エルフ達が通常契約している精霊というのは、大抵がキュベレーやノトスの使い魔契約前の状態だと思えば良いらしい。希薄な自我しか持って居ないのが普通らしいが、ある程度時間をかければ自我を持つらしいが、この辺りは個体差?がある。

表現が難しいのだが、地水風火といった精霊は自我を持つにしろ、知識を蓄えるにしろ時間がかかるそうだ。逆に木の精霊とかは１００年程度で自我に目覚める例もあるとか言う事だ。エルネストの使い魔テティスはどれだけ生きているんだろうか？　聞きたい気もするが、とんでもない答えが返ってきそうだ。

本題はそちらでは無かった、精霊の移動速度についてだ。大体想像が出来るだろうが、地水風火の中ならば”風”が一番速いのだが、意外にその次は土、そして水，火と続く。端的な表現をすれば”精霊の道”を想像すると良いかも知れない。一回で移動する距離は余り変わらないが移動先が制限されると移動距離が延ばせないという事らしい。”風”なら屋外の何処にでも吹いているが、移動先になる”火”が移動距離を上手く稼げないと言う理屈らしい。

この辺りは、エルフ達からの受け売りだったり、私自身が人間としては破格に精霊の知り合いが多い事からの経験的に理解している事だ。これは経験と言うより想像だが、転生者と精霊が使い魔契約

を結び易いのは転生者の持つ知識が精霊の自我を育てるのに貢献しているのかも知れないと思う。
キュベレーは私を無償で助けてくれているが、キュベレーは私と居る事で形にならない報酬を受け取っているとか想像したりする。

そんな訳で、使いを出して2日後にはキュベレーは私の所に戻って来たし、ノトスもロドルフの所に帰ったらしい。今日は明人青年はゼロ戦に乗って戦闘訓練の予定だから、ロドルフが手を出す特別訓練は明後日位になるかな？

「キアラ、明後日って」

「ダメです」

「分かった」

うん、無理だな。誰だ、尻に敷かれているなんて思った奴は、キアラとはそう言う関係じゃないし、これは単に頭が上がらないだけだ。最近出掛ける事が多いので、キアラの機嫌が悪いのだ。

キアラは機嫌が悪いし、ノーラは時々沈みがちになるし、王様というのも結構大変なのだよ。何故か、本妻と愛人の間で右往左往している浮気者を想像出来るだろうが、本妻＝王妃，愛人＝宰相に置き換えれば全く事情は異なるのだ。本当だぞ！！

＝＝＝

ロドルフが虚無の曜日を待たずに王城を訪ねてきたのは、それから更に4日後だった。私の方は懲りずに時間を捻り出す為に執務室でロドルフを迎え入れたが、ソファに座るでもなく突っ立ったまま、

じっと私の方を見ているだけだった。気を利かせてキアラもその他の秘書役も席を外してしまったのが、私にとってはありがた迷惑でしかなかった。

「・・・」

「・・・」

どちらも口を開かないまま、私が書類を確認してサインをして、次の書類に移るという事が繰り返されるだけだった。カリカリというペンの音とパラリという書類をめくる音だけしかしない様な錯覚を覚えた。

先に音を上げたのは、私の方だった。我慢強さと言う面では女性の方が強いと聞くが、女性としての記憶を持つロドルフもかなり我慢強い方なんだろうか？

「ロドルフ、男らしく文句があるなら言ったらどうだ？」

「嵌めましたね？」

これはかなり怒っている様だ。今の時期だと授業で忙しい筈なんだが、それも無視出来る程お怒りらしい。見る限り怪我とかは無いはずなんだがな？

「嵌めたとは人聞きが悪いな。別に危ない目には遭わなかったんだろう？」

「ええ、貴方の使い魔が咄嗟に庇ってくれましたからね」

そう言いながら私を見ているロドルフの表情は色々な感情が渦巻

いている様で、何故か泣き笑いの表情に見えた。その表情に自分が軽率な事をしたとも考えたが、その考えをロドルフ自身が打ち消してくれた。

「前にラスティンさんが、僕達はこの世界で生きている事を実感するべきだって言っていましたよね」

「そんな事を言ったな」

私は別の意図で言ったんだが、実際にはそのまんまの意味でも重要だったかも知れない。

「昨日、実感しましたよ。殺されるかと思う事でね」

「それは幾らなんでも大袈裟じゃないか？　戦闘訓練にちょっかいをかけた位で殺されそうになるか？　ルイズも明人君も君だと分かれば攻撃なんてしないだろうに」

「・・・ですよ」

「すまないが聞こえなかった」

「変装してたんですよ！　会合の時に使うマスクとマントで」

そう言われて少し想像してみたが、あの場所は学院の比較的近くにある陸軍演習場で、そこに怪しげなマスクとマントを着用した男がいて、それから攻撃を受けたとなれば本気で殺しに来るだろうな。どう考えても怪しいし、ゲルマニアのスパイと疑われるのが関の山だ。

「直ぐに変装を解けば良かっただろうに」

「いきなり、ミス・ヴァリエールに攻撃を受けるし、明人君はあのスピードで迫ってくるんですよ、そんな暇があるわけないじゃないですか！」

「・・・、よく生きていたな？」

まさか、そこまで悪乗りするとは思っていなかったから、正直に感想を言ったのだが、どうも少し震えている様だ。

「ええ、ノトスが頑張ってくれましたから、でもあの2人が相手じゃ」

「時間稼ぎにしかならなかった、本当にすまない」

私は席を立って、ロドルフの方に近寄って行った。近付くとロドルフの顔色が明らかに悪いし、目も充血しているのが分かった。

「もしかして、眠れないのか？」

「はい、どうしても・・・」

ロドルフの姿は少年の頃の私を思い出させた、あの時は私が始めて人殺しをした時だったな。あの時はどれだけやせ我慢したかな？

あんなやせ我慢をしなければ・・・。

いや、今は悩んでいる同胞の事だな、素直に他人を頼る事が出来るロドルフが少しだけ羨ましかった。ロドルフももう少し元気なら、両親の所へ帰って行ったんだろうな？

「そうか、それじゃあ、今晩は一緒に寝るか？」

「えっ、私はそんな女じゃありません！」

何を言っているんだろうな？　混乱しているのだろうか？

「なあ、ロドルフ。君は幾つまでご両親と一緒に寝ていた？」

「え？　はい、あの夢を見始める頃まででした。久々にあの頃の事を思い出しました、眠れないのに前世の記憶だけが思い出されるんです」

ちなみにライルは結構、最近まで私と一緒に寝たがったが、今は別の人間と一緒に寝たいんだろうな。うん、その辺りは厳しく言わないが、赤ちゃんが出来ましただけは勘弁して欲しいものだ。

「そうか、ロドルフは前世の事はあまり夢に見ないんだな？」

「そうですね、思い出したくないのかも知れないですね、最後は自分が死ぬんですから」

前世の夢はほとんど見ないか、知りたかった事だが、どうもしっくり来ないな。

「・・・、君が死んだ時の事を聞いても良いかな？」

「どうして今になってですか？」

「勿論、教育上の問題だな」

「教育？」

「そうだろ、小さな子供に自分が死んだときの事を思い出させるなんて、良い事じゃないだろう？」

「ラスティンさんもお父さんなんですね？」

「そうだよ。私の場合は、コンビニ帰りに車にはねられたんだ。まあ、即死だったんだろうな。自分の死体を見なかったしお陰で”死”と言う物を知るのに時間がかかったね」

「そうですか、私の場合は多分、家族の誰かに殺されたんだと思います」

「穏やかじゃないな？」

「私は良い娘じゃなかったですからね。我侭で大学まで出してもらったのに、就職に失敗しちゃって、”都落ち”して実家に戻っても仕事もせずにネット三昧でしたからね」

「それで、殺される筈が、いやいい」

あまり話したくは無さそうだし、これを聞くのは私の役目じゃ無さそうだ。しかし、精神的に不安定な為か、前世の記憶がダイレクトにロドルフの精神に影響を与えているな。この辺りは結構個人差がある様だ。

「ラスティンさんの前世の親はどんな人でしたか？」

答えにくい質問が来たな、どう言う訳かこの辺りの記憶は曖昧な

のだ。前後の記憶から推測になるが仕方無いだろう。

「そうだな、人の良い人達だったかな？　そうだな、星回りの悪いライルを想像すると良いかも知れない」

「どういう意味でしょうか？」

「そうだね、前世の私は一度苗字が変わっているんだよ。両親共に結構良い所の出だったらしいんだけどね、まあ、事業に失敗でもしたんだろうね」

「如月でしたっけ、苗字は？」

「ああ、以前は四条家の分家筋だったらしいよ。まあ、知らないだろうね、私も詳しくは分からないしな」

「前世でもおぼっちゃんだったんですか？」

「誰が坊ちゃんだ！」

「えーだって」

自覚はしているが、指摘されると腹立たしい。ただ、少しだけ声に張りが出てきたロドルフに合わせておく事にする。

「いや、少なくとも前世の私は普通の暮らしだったと思うよ。少なくとも覚えている限りは、標準的な日本人として生きて来たからな」

こうして、前世の事や、小さい頃の思い出話をして、夜が更けた頃にやっと眠りにつく事が出来た。そうだな、明日はロドルフを彼

の両親の所に送って行こう。保護者の代役を務めている以上、これは私がやらなければならない事だろう。幸い政務の方は一区切りついたし、朝早く出れば日帰り出来るだろう。

キアラだって事情を話せば・・・、絶対叱られるな。その内キアラがクーデターでも起こして、もっと真面目な国王を立てるんじゃないかと思えてくる。その時はさっさと逃げ出すだけなんだが、こんな話をキアラにしたらもっと怒るんだろうな。”現実を見ろ”とか言われるんだろう。

＝＝＝

ちなみに思いっきり叱られて、1週間の外出禁止を言い渡された。本当は1カ月と言われたのだが、色々理由をつけて値切ったのだ。1／4にしたのだから大勝利だろう何て思っていたら、常時監視付きにされてしまった。人として正しい事が、国王として正しいとは限らないとは分かっているんだが、ちょっと扱いが酷いと思うぞ。

日程の打ち合わせに来たコルネリウスが、天使の様に思えたが、こんな日が来るとは思っていなかったな。天使にしては持ってきた話が、異常に物騒だったがな。

話を明人青年の訓練に戻すと、1週間弱で両親の下から戻って来たロドルフがルイズと明人青年に謝罪して、2人は謝罪を受け入れる替わりにロドルフが訓練への参加を正式に依頼した。

そしてそれをロドルフが喜んで受け入れたと言う結果は、経過を無視すれば私の目論んだ通りの物だった。私としても是非その場に立ち会いたかったのだが、”監禁”されていてはそれも叶わなかった。

「そうか、ロドルフがな」

「はい、あんまり謝る所を見たことが無かったけど、ロドルフがあんなに嬉しそうに謝るとは思わなかったです」

「それは私も見てみたかったな」

「それにしても、父様も意地が悪いですね？」

「そうか？」

「そうですよ！　だって、アキトには兎も角ルイズにはノトスの攻撃なんて通用しないのは分かっていたんでしょう？」

「・・・！？　そういえばそうだったな」

「もしかして、忘れていたんですか？」

「いや、何と言うか、ルイズが成長すれば杖精霊の声は聞こえなくなるんだと思っていただけだよ」

「え？　でも父様もノリス叔父さんも聞こえてますよね？」

「説明が難しいんだが、私やノリスの場合は体質だろうな。ライルは要らないって言ったが、ルイズとジョゼットとテッサの杖は同じ木から貰った物だけど、精霊と話せるのはルイズだけだろ？」

「ふーん、複雑なんだね。精霊と話せるってどんな感じなんだろう？」

「うーん、相手次第だが、話せない方が幸せかも知れないな」

こう言うと。腰に下げたニルヴァーナが少しだけ震えたのが感じられたが、何も語りかけては来なかった。彼女個人としては頼りになるが、私にとって”精霊”という存在は利益をもたらしてくれるが、逆に畏怖の対象でもある事も分かっているのだろう。

「そうは言うけどな、会話が出来る使い魔だって結構貴重な存在なんだぞ？」

「そうなんですか？」

「学院の生徒や兵団員の使い魔で、会話が出来る者が居たか？」

「言われて見ればそうだね、別に会話しなくたって意志は伝わるから気にした事が無かったよ。クエスって意外と凄いのかな？　でも、話せてもあんまり喋らないんだよね」

「そうだな、お前の使い魔は”職人気質”なんだよな」

本来なら、マスター以外と会話出来ると言うのは、使い魔としては大きな利点なのだがライルの使い魔はそれを使おうとしないらしい。ライルによれば結構多弁？だそうなのだが、イザベラ姫でさえ喋った所を殆ど聞いた事が無いと言うのだから筋金入りである。

「そうだね、どっちかというと”芸術家”って感じだけどね」

「芸術家か、そうかも知れないな。確かにライル・ド・レーネンベルクには、お似合いの使い魔だな」

「だよね、クエスが作ったのと同じ細工を作っても、大抵の人がクエスの方を選ぶんだよね」

「まあ、芸術と言うのはレーネンベルクにとっては最も似合わない分野だからな」

レーネンベルクらしいと褒めた積りなのにライルは複雑そうに笑っているだけだった。

「それで、ルイズ達の訓練はどうなんだ？」

「はい、順調ですよ。怖い位に」

「そうか、ライルがそう言ってくれるなら大丈夫だな」

「はい、あの2人なら大丈夫です。相手が”お婆様”というのが複雑ですけどね」

ライルが、またしても複雑そうな表情をしたが、今度は”お婆様”か？

「そうか、ライルもラ・ヴァリエール公爵夫人が苦手か？」

「うーん、苦手なのかな？　毎年お会いしてますけど、会話した事が無いんですよね」

ほう、それは初耳だな。私の息子を無視するとは良い度胸だ、この仇はルイズがきっととってくれるだろう。（半分位冗談だぞ、”義母殿”の考え方も分からないでは無いからな、認める気は更々無いがな）

近い内に、ルイズが母親に決闘を申し込むのは確実か？　その前に是非、その腕前を見てみたいな。翌日の執務中にそんな事を考えていたら、キアラに睨まれた。おかしい表情の制御は完璧な筈なんだが？　また妙な所で知恵を絞らなければならない様だ。

第百六十八話　ラスティン３０歳（男同士が同じベッドで・・・）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百六十九話　ラスティン３０歳（ゴドー家の破滅）（前書き）

第百六十九話ＵＰします。

第百六十九話　ラスティン３０歳（ゴドー家の破滅）

4．情報収集と解析

少し国内外の情報をまとめておく必要があるだろうか？

☆国内経済状況

これは、全く持って順調その物だ。まあ、前世的に言えば、”正のスパイラル”に入っていると言って良いだろう。メイジの絶対数が増えるに従って一時は国内でさえ不足が予想された工業品も輸出を含めて十分な量が生産可能になった。

ワーンベルだけでチマチマと生産したのではこうはならなかっただろうが、協力的な領主達の所でもメイジによる錬金を使った工業品の生産が始まった事で”工業国”としてのトリスティンの名前は大陸中に響き渡る事になった。これを政治的に利用する事は私の一存で禁止したが、それでも恩を売るという面と何時でも供給を停止できる面は将来の我が国にとっては貴重な外交材料になるだろう。

遅まきながら（本気で遅すぎだが）、メイジによる工業品の生産の力を知った領主達も、先を行く追いかけ始めたが、普通にやっていてはどう考えても追いつく事が出来ない。そこで彼らは、他領のメイジを引き抜くという手段に出た。本来なら貴族間で争いが起きてもおかしくないのだが、そこは国王の仲裁で概ね平和裏に解決される事になった。

実を言えば、これは王城と領主代行が裏で糸を引いていた事なので、これほど問題が未然に防がれたのだ。何故こんな事を仕掛けた

かと言えば、別に国王の権威を高めるとか言う訳ではなく、平民メイジの地位向上を目的としていた。引き抜く為にはそれ相応の待遇を約束する必要があるし引き抜かれないようにするには雇っている側も待遇を良くするしか無かったからな。（理由は分かると思うが、領主に領民を自領から出ることを禁止する事は出来ないからな）

役人達には前者の意図を説明したが、中には私の意図を感じ取った者も居ただろう。”領民の移動の自由化”して、”学校制度の普及”させ、”戸籍制度の導入”させた本当の意図に国政に関わるレーネンベルク高等学校の卒業生なら気付いてもおかしくはない。

貴族の力を弱めて王権を強化するという表向き？の意図を、私はフレデリック様や現教皇に説明した。だが、貴族の権力が低下するという事は、領民側も力を付けるチャンスと言う訳だ。これは私が企んだ訳では無いが、平民メイジの台頭は正しく時流に乗った物だった。

正式に魔法兵団を抜ける者は少なかったが、兵団からも多くの平民メイジが出向という形で故郷に戻って生産活動に励んでいるし、新しくメイジになった”隠れたメイジ”達もレーネンベルクの家臣という扱いになっている。まだまだ、彼らにはマカカ草の供給が必要だし、”国の役人”と言うより”レーネンベルク公爵家の家臣”の方が、他の領主にとっての心理的な抵抗が少ないだろうからな。

私が国王としても、まだまだ若いと見られているのは仕方が無い事だろうな。領主達にとっては国に借りばかり増えるのも嬉しくないだろうし。統治者としては父に追いついたと思っているだけに少し癪だが、これは時間が解決してくれるのだと思いたい。

＝＝＝

☆ゴドー家の破滅

さて、時流に乗った人、乗り遅れた人の話はしたが、真っ向から反対した人の話もしておこうか？

一番端的な例が、ゴドー伯爵家だろうか。ゴドー伯爵家はもうこの国には存在しなくなってしまった。まあ、社交界でもゲルマニアと通じているという話が出ていたらしいし（私には縁が無い所だから、ノーラに聞いたんだが）、領内に目立った産業も無い状態だから、領地の経営は難しかっただろうな。

それでも前伯爵の時は民の生活もそれ程苦しくは無かった様だ。こっそり視察に行った事があるのだが、領民はごく普通の生活を送っていたと感じられた。

だが、老齢だった伯爵の死が状況を一変させたのだ。キアラが

「言う必要がありますか？」

と端的に語ってくれた通りの人物だった訳だな。監視されている事は分かっている筈なのに、大っぴらに傭兵を募集したり、領民を軍に徴用したりしてくれた。その理由が”来るべきゲルマニアとの戦いに備えて”というのだから笑えない。

私はと言うよりキアラは表向きこれを黙殺していたんだが、実際には代替わり以前から対策を打っていた。別に軍を派遣したり、領境厳しい検問を行ったりした訳ではない。ゴドー伯爵領との交易を奨励したり、私の例の”文化振興策”を利用してゴドー領の民をレーネンベルクに招待したりまでした。

どう考えても、ゴドー伯爵との和解を目指している様に見えるし、亡くなる前のゴドー伯爵からは表向き礼状などが私宛に送られて来た事さえあった。

その流れを新たなゴドー伯爵が見事に断ち切ってくれた訳だ。何故裕福とは思えないゴドー伯爵領で、大量の傭兵が集められたかおかしく思わなかっただろうか？　勿論、ゲルマニアからの資金提供があったのだが、普通に受け取ればどうなるか誰だって分かるだろう。では他の貴族を経由してというのは禁止しているし、商人を通してならば容易に分かると思っていたのだが、裏をかかれていた。

「キアラ、ゲルマニアからゴドー伯への送金方法が分かったって？」

「はい、やはり商人を使っていました」

「それにしては分かるまでに時間がかかったな？」

「はい、小口に分けて送金している様で、噂にならなかった様ですが、それ以前に”借金の返済”でしたので」

「借金？　ゴドー伯が？」

「はい、資金の出所がゲルマニアなのは間違い無さそうですが、何人かの商人が我が国の商人達からから債権を買い取りそれを、ゴドー伯へ商売を有利に運べる様にという名目で献上した様です」

「金額は？」

「総額は掴めていませんが、かなりの金額と思われます」

「面倒な話だな？」

「いいえ、特に問題はありません。今の方針を続けます」

「いや、その方針を聞いていないんだが？」

「そうでしたか？」

こんな会話があって、キアラの策略を教えてもらう事が出来た。

それほど上手く行くかと半信半疑だったが、本当に上手く行った。

前伯爵の頃はゲルマニアからの資金の殆どが領民の生活に使われていたんだろうが、新しいゴドー伯爵は本来の使い道に回してしまったのだ。多分ゲルマニア宰相辺りからクレームが付いたんだろうな、幾ら金を注ぎ込んでも効果が上がらないんだからな。

その金を私の暗殺にでも使えば最も効果的だったと思うんだが、いや、私が気付かなかっただけで実はこっそり処理されていたんだろうか？　私が死んだら、ノリス辺りが次の王なのだろうか、ノリスならキアラに上手く操られてくれるだろうが、多分私より真面目にやってくれるだろうな。

話を戻すと、ゴドー伯爵はそれまで行われていた領内の税の軽減措置を撤廃して、増税に踏み切った訳だがそれを決めたて布告しただけで、領民の１／５が領外に移住してしまった。１／５が移住というのは信じられない数字だが、元々税の低さで領民を引き止めていたという面が強いからな。

自領の領主が王家に弓を引いたとか、他領では目覚しい経済発展がなされているとか、昔ならば情報が十分に伝わる事が無かったし、情報統制も可能だったのだろうが多くの領民が他の領地の状況を目で見ているし、商人達からも信じるに足る情報が日々もたらされていたのだから、領民がどう考えるかは考えるまでも無いだろう。

ネットどころか、テレビもラジオも電話さえ無い様な世界では、

噂だけが頼りだったのだが”風の噂に聞いた”よりは自分の目で見た事実を話す事が私が考えたより大きな影響力を持っていたのかも知れない。後は、今までゴドー家（昔は立派な公爵家だったこともあったそうだ）が今まで積み重ねてきた実績が領民の大量移住という形で表に現れたのだろうか？

ただ、これだけならばゴドー伯爵領が消滅すると言う事態にはならなかった筈だった。新しいゴドー伯爵は、これ以上の領民の流出を防ぐ為に武力を行使してしまったのだ。これにより領民の領主への感情は完全にマイナス方向に振り切れてしまい、同時にこれに備えていた王軍の介入を招く事になった。（私としては戦争が始まる以前に王軍が介入する理由を作り出してくれた事に感謝したくなった）

結果、ゴドー伯爵位が継がれてから2年足らずで名家といわれた（名前だけという皮肉も含めてだが）ゴドー伯爵家が断絶する事になった。本来ならば、後継者が居なかったとしても親戚筋の者が領地だけでも継いだはずだったのだが、誰も元ゴドー伯爵領を継ごうと名乗り出るものは居なかったが、これはある意味懸命な選択だったのだろう。

名家が断絶するという事で、某貴族が、ラ・ヴァリエール公爵に一時的なゴドー伯爵家の代理を依頼したほどだったが、義父でさえやんわりとだが断った程だった。多分、ルイズの将来の事を考えたんだろうな。

目出度くゴドーは断絶して、その領地は直轄地となった。ゴドー伯爵が中心に、ゲルマニアに対して協力的だった領主達も一斉に反ゲルマニアに鞍替えしたのも当然の結果かも知れない。（明日は我が身という言葉はこちらでも十分に通用するのだ）

しかし、これでまたしても私にとっての邪魔者が消えた訳か？
自滅に近かったとは言え、自分の幸運が恐ろしく感じられるが、何と言うかもう少し違った方面で幸運が働いて欲しかったと思うのは贅沢なんだろうか？

第百六十九話　ラスティン３０歳（ゴドー家の破滅）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百七十話　ラスティン３０歳（人格者？）（前書き）

第百七十話ＵＰします。

第百七十話　ラスティン３０歳（人格者？）

☆国内政治状況

国内の政治状況も少し変わってきたから、ここで話しておこうか？

「スティン、ちょっと良いか？」

「ガスパードか、構わないけど。キアラから怒られたという話なら聞かないぞ？」

「それは聞けよ！」

「それで？」

「全く国王陛下は我侭で困るよな？」

「それで！！」

「ああ、何か知らないんだけど、実家からお礼の品と言うのが届いたんだが、何か知らないか？」

「その流れで何故、私に理由を聞くんだ？」

「いや、カロリーヌがそのお礼の使者と言うのを対応したんだけどね、要領を得なくって」

「何だ、また妙な魔法薬を思いついたのか？」

「犠牲者は誰だろうね、いや、そうじゃなくって、カロリーヌが言うには、”陛下への口添えのお礼”だそうだ」

「口添え？　愚痴とか、文句なら毎日の様に聞かされているが」

「だよな～？」

２人して首を傾げる事になった、ガスパード自身は政治向きの事に口を出さないからな。それ自体は彼の処世術なんだろうが、ああ、あの件か。

「理由が分かったよ、君の実家も借金を抱えているだろう？」

「そうだね、色んな所から、金を工面してくれないかとか言われるけど、そんなに儲けているように見えるかな？」

「さあ、近衛の隊長なんだから、そこそこの収入はあるんだろう？」

「我が家は、何故か支出が多いからな～」

「ふむ、浪費家の奥様を持つと大変ですな？」

「そうなんだ、カロリーヌのやつ、最近は薬の材料費をケチらなくなってな・・・」

ガスパードが何だか遠くを見る様な目になってしまった。夫婦仲が円満でも色々悩み事があるらしいな。

「国に借金をしている貴族達というより、領主達を集めて”借金を帳消しにする替わりに自分の領地をどう経営してゆく積りか腹案を

示せ”と言ったんだよ、聞いているか？」

「ん、ああ、それを聞いて安心したよ。君を殺しても借金は消えないと何度言っても分からない人間が居るからね」

「そっちは任せた、その時に”ある人物の助言で”とか言ったかも知れないな」

「それって、ライルの事だろう？　僕が受け取って良いんだろうか？」

「良いんじゃないか？　金品を受け取ったとしても、便宜を図ったと言う事実が無ければ賄賂には当たらないと言うしな」

「また、怪しげな理屈だな？」

「良いのさ、近衛隊長が借金漬けじゃ、外聞が悪いだろ？」

別に借金に苦しんだとしても、ガスパードが私を裏切るとは思わないが、無用な波風は立てない方が良いだろう。もう少し前なら、この話を利用する事を考えたかも知れないが、今はその必要も無い。ライルの手柄と言えなくも無いが、大々的に発表する類の物でも無いからな。（ライルが王父として認められる必要があれば、この話を活用する事にしよう）

後で振り返ってみれば、この頃にトリステインの将来がある程度定まったのかも知れない。”領主”が”領民”を選ぶのではなく、”領民”が”領主”を選ぶという時代になりつつあったのだ。

＝＝＝

☆外国の状況

国内の話ばかりしている訳にもいかないから、国外の状況も少し説明しておくとしよう。

これに関して言えば、我が国は一切関知していないんだが、日和見を決め込んでいた周辺の小国は先を争う様にして、ゲルマニア包囲網に参加を表明する事になった。

こんな事態になったのは、ガリアの外交的な働きかけが大きな影響を及ぼした事は、誰も否定出来ないだろう。はっきり言ってしまえば、力を取り戻りたガリアが本気になってしまえばそれを止める事が出来る国はほとんど無いという事を実証して見せた結果だった。

具体的に言えば、ガリア王ジョゼフの名前で（良く言えば）中立を保とうとしている各国に”ガリアに付くか、ゲルマニアに付くかはっきりしろ！”と脅迫したのだ。

普通にこれをやると後に禍根を残すだけでは無く、ゲルマニアに付く国も出るかも知れないのだが、その辺りは抜かりが無かった。王ジョゼフがその国の弱点を巧みに突いて交渉のテーブルに付かせ、宰相シャルルが巧みな弁術で最初は険悪なムードだった交渉を和やかなムードに変えて平和裏に（しかもガリアにとって都合の良い）結果で終わらせると言う、兄弟による完璧なコンビネーションを発揮されたのだ。

具体的な例を挙げるなら、”ラヒテンシュタイン公国”の話が良いだろう。私も偶然同席したその交渉だったのだが、キアラに言わせればガリアの力を見せ付ける為に設定された交渉の場だったそうだ。

”ラヒテンシュタイン公国”と言うのは、元々が何代か前のガリア王の妾の娘とゲルマニアの皇子が結婚する際に起した公国だった。一応ゲルマニアの影響下にある国だったのだが、ゲルマニアに”始祖の血”与えたく無いという訳の分からない理由から一応の独立国扱いとなっている。

公国としての成り立ちも影響するのだろうが、公王の人柄もあるのだろう。険悪化したゲルマニアとガリアの間を取り持とうと両国を行ったり来たりして居たらしいが、それが全く効果を挙げなかったのは周知の事実である。

このラヒテンシュタイン公国はゲルマニアとガリアの間に位置し、険悪化した後の両国間物流の唯一の経路だったのだが、ガリアが強硬な態度に出た事で一気に物流が停止して、ガリアからの物資が入らなくなった。一方のゲルマニアは戦争準備の為に”外国”などに構っては居られないと、こちらも物資の流通を停止してしまった。

こうなると近隣諸国が頼りなのだろうが、以前は存在した似たような経緯で出来た小国もゲルマニアに併呑されていたし、ガリアやゲルマニアの親しい領主もどう言う訳かほとんどが連絡が取れない状態となっていた。輸入に頼り切っていた、公国としては堪った物では無かっただろうな、ガリアからの呼びかけに直ぐに応じる形で、交渉の場に選ばれた我が国の”カリエール領”にやって来たのだ。

態々、我が国を交渉の場に選んだのは、ガリア宰相が提案した。

・戦後のゲルマニアと言う国の存続の保証
・ラヒテンシュタイン公国の存続の保証

に関する証人として、私の存在が必要だった事と、勿論、次期ゲル

マニア皇帝になるべき人物を”紹介”する為だった。コルネリウスの存在を見せ付ける事で戦争の正統性を主張しながら影響力も匂わせ、ゲルマニアを存続させる事を約束する事でラヒテンシュタイン公国の立場も考慮すると言う計略らしかった。

交渉が終わった後、どう見てもホクホク顔の公王を眺めながら、どうしてこうなったか悩む事になった。ガリア＝トリステイン＝ラヒテンシュタインの今後の友好を誓う為に何故か我が国からも安価で工業品をラヒテンシュタインに輸出事になっていたのだ。

輸出する価格は、歴史的に同盟国であるアルビオンと同価という辺りに愚痴王の悪意を感じずには居られなかった。総量に関してはこちらが予定していたよりかなり少なめだったが、これはこれで仕方が無いだろうな。

どうして、こちらの同意無く同意文書にこの辺りが記載されているのか問い詰めたくなったが、オルレアン大公殿はどうやらこの辺りは知らされていない様だった。どうやら私とジョゼフ王の間で既に同意がなされていると思っているらしい。（見直しかけたジョゼットの”父”に対する評価が少しだけ下がった瞬間だった）

さすがにここまで事が運んで、今更同意できないとは言えないし、元々ラヒテンシュタインへの手土産として後で提案する予定だった事もあり、得意の表情操作で不愉快さを表に出さずに何とか交渉（というより終わってみれば会談だったな）を終える事が出来た。

「スティン、不機嫌そうだな？」

「どうしてそう思うんだ、コルネリウス？」

「どうしてって、声がそんな感じに聞こえたんだが。さては！」

どうやら勘違いをしているらしいな、王城で秘書官をやっていたんだから、結構政治に関しては学んだ筈なんだが、まだまだなんだろうか？

「不機嫌なのは否定しないけどね、別にラヒテンシュタインへ工業品を安くで売る事に関してじゃないぞ？」

「じゃあ、何なんだよ？」

「自分で考えようとは思わないのかい？」

「それはそうだが・・・」

「コルネリウスはどうしてラヒテンシュタイン公王があんなに嬉しそうだったか分かるか？」

「そりゃあ、分かるさ。ラヒテンシュタインの将来が安泰だと保証された訳だからな」

「そうか？」

「何だよ！」

「ガリアもトリステインもあの同意文書に署名する事で、何か得をすると思うか？」

「・・・」

「質問の意図は理解しているけど、どう答えたら良いか分からないと言った所かな？　こんな言葉を聞いた事が無いか？　〝人は自分

以下の人間の事は理解出来るように出来ている”というのだけど」

「随分と傲慢な言葉だな？」

「そうだな、”人は自分が理解出来る人間の事は理解出来る”と言い換えたらどうだ？」

「何を当たり前の事を・・・、いや、言いたい事は分かった」

コルネリウスが何を考えたか想像が出来ないでも無い、エミルタの実の中毒症状で苦しんだ少女（いや、今は女性と呼ぶべきだろうか？）の事かも知れないし、彼が一時期目指した平民メイジの同僚の事かもしれない、もしかすると望まずに王位を手に入れてしまった自分と似た境遇の友人の事かも知れない。

「考えを進めると良いかも知れないな」

「考えを進めるって？」

「そうだな、トリステインにとってはラヒテンシュタインを援助する事に利点が無いのは分かるな？」

「ふむ、そうだな」

「それでも我が国は”支援”を行う事にした。多分ガリアも同じだろうな」

「”私は”じゃないんだな？」

「嫌な所を突っ込むな？　私は、ラヒテンシュタイン公王に何か手

土産を持たせたいと言ったら、キアラが工業品の提供の話を提案してくれたんだ。おかしいと思ったけどね」

「自分で考えた訳じゃないんじゃないか、いや、おかしい？」

「そうだろう、トリステインからラヒテンシュタイン公国へ直接商品を運べないんだぞ？」

「空輸する訳には行かないだろうな、ガリアを経由してか、それだと関税が」

「それは無いな、トリステインからラヒテンシュタインの荷にガリアが関税をかけたら、我が国としては厳重に抗議するからな」

「そうだろうな、この会見の意味が無くなるかも知れないしな。そうなると、トリステインにもガリアにも隠れた利益があるのか？」

「ラヒテンシュタイン公王やガリアのの宰相、そして私達はどうやってここまで来た？」

「列車に乗ってだが？」

「戦後、ガリアとゲルマニア間の交易はどうなる？」

「そりゃあ、ラヒテンシュタインを通してだろう？　公王もそれを考えたから、嬉しそうだったんだしな。ラヒテンシュタインは何と言っても交通の要衝だしって、まさか、鉄道をラヒテンシュタインを通さないのか！」

「さあ、それはガリアとラヒテンシュタインの間の話だね。コルネ

リウスが次期皇帝としてガリアと交渉をするなら別だけど、ラヒテンシュタイン経由で入って来るガリアからの食料品はなんかはあまり売れそうに無いね」

「トリステインはどうなんだよ？」

「そりゃあ、機関車の技術は今のところウチだけの技術だからな。それに燃料の方もね」

この辺りがキアラの解答だったんだが、簡単に教えてもらえる筈も無く、色々考えさせられたから、自分で導き出したと言っても良い筈だよな？

「くそっ、結局はガリアもトリステインも損をしないんじゃないか！　公王が、両国の国王の人格を褒めたのが馬鹿みたいじゃないか！」

それは確かに馬鹿だな、あの愚痴王を人格者なんて誤解もいい所だ。私だって、かなり人が良いと思うが、それは私に対して敵対しない場合に関してだけだ。一般的に稀に見る人格者だったと言われている前教皇聖エイジス３１世だって、その経過結果は兎も角、原点は”怒り”だった訳だしな。

「どうでも良いが、私やガリア王が人格者じゃないなんてコルネリウスだって知ってる事だろうに」

「そうだな、そうだったな・・・」

もしかして、世界平和とか考えているんだろうか？　コルネリウスは世界中に貸しを作っている状態だからな、そんな幻想も信じた

くなるのかも知れない。明文化された身分制度などがある状態で世界平和と言われれば笑ってしまうがな。（多分、その概念を考えるには、この世界はまだまだ未熟なんだろうな）

第百七十話　ラスティン３０歳（人格者？）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百七十一話　ラスティン３０歳（奪われたモノ）（前書き）

第百七十一話ＵＰします。

第百七十一話　ラスティン３０歳（奪われたモノ）

さて、このラヒテンシュタイン公国との会談の後はまるでオセロでも見ている様に、態度を保留していた諸外国が一気にゲルマニア包囲網に参加を表明する事になった。開戦に最も否定的だったラヒテンシュタイン公国が反ゲルマニアに動いた事が原因だろうが、私などにはガリアの外交攻勢の的確さが気になる所だった。

ガリアも諜報網を急速に復活させつつある事が想像出来るが、その標的が現在はゲルマニアに向けられている事が幸いだな。最重要のワーンベル秘密工場にはかなりの警備をしているし、マカカ草に関しては探ろうとしてもらった方が助かるかも知れない。（例えセキュリティをパスしたとしても怪しい動きは”精霊”には丸見えだからな）

兎に角情勢がここまで動いてしまえば、ゲルマニアに待っているのは完全な敗北だけだろう。ゲルマニアが現時点でも戦意を喪失していないのは負けが無いと確信しているからなんだろうな。確かに”彼ら”と真正面からやりあっては勝てる戦いも引き分けが精々である。

あの愚痴王の事だから、今回取り込んだ戦力をそのまま”彼ら”にぶつける積りなのだろうが、当てに出来ないならば当て馬にしてしまえと言うのは効果的だが少し乱暴な気がする。我が国としては、もう少しスマートな方法を取る事にした。

こちらもどちらかと言えば、外交による物と言っても良いだろうな。但し、武力や経済力と言った物に頼る訳では無く信頼と尊敬を武器にした物だった。

尊敬と言うのは、やはり彼らの持つ技術と意外と言っては失礼だ

ろうが、その独特とも言える倫理性だろう。逆に言えば、我々というか、転生者の同胞達が持つ知識と発想力、そして急速に変わりつつあるこの国の状況が”彼ら”からトリステインに対する敬意を引き出す事に成功していた。

信頼の方と言えば、ジェリーノさんの頃から少しずつ積み重ねてきたエルフとの絆（特にレイハムの里、ひいてはマナフティー様とのだな）が我が国に恩恵をもたらしてくれた訳だな。まあ、クリシャルナも色々頑張ってくれたんだがな。

こう書くと私自身がどんな働きをしたのか甚だ疑問だが、それはそれとしておこう。どうも私自身が何か積極的にやろうとすると、思わぬしっぺ返しが来る事が多いからな、念には念だ。（別に私が無能と言う訳じゃ無いぞ、何と言うか間が悪いだけだ！）

「それで、エルフ達の動きは？」

「はい、一応、成人した全てのエルフに”サハラ”の戻るようにと指示が出ているのは、アルビオンからの情報でも確かな様ですが・・・」

「何だ、キアラはマナフティー様の事が信じられないのか？」

「そうですね、そうかも知れません。情報が不足し過ぎていて、こちらからは動けないのが痛いです」

「まあ、キアラの立場ならそう考えるだろうから、仕方が無いが、私は信じているよ」

「・・・、ラスティン様がそう仰るならば、信じる事にします。はぁ～、あ、失礼しました」

「大丈夫だよ、クリシャルナも頑張ってくれたんだからな」

「・・・、そうですね」

何故か、キアラは一瞬自分の手で胸を軽く触れる様な仕草をした。確かクリシャルナとテッサの報告の時もそうだったな。クリシャルナは会見の失敗を報告しているにも関わらず、異常にテンションが高かったんだよな。意味不明だったが、

「私にも可能性があるの！　大丈夫、大丈夫！」

とかしきりに呟いていたのが記憶に残っている。その時は意味が分からなかったんだが、後でテッサに聞くと、どうやらティファニアを見て何やら誤解してしまったらしい。母親であるシャジャルさんはやっぱりエルフらしい細身で胸も控えめな女性だったそうだから、ハーフエルフの特性として胸が大きくなったと考えるべきなんだろうが、そこまで頭が回らなかったらしい。

それほど衝撃的な胸だったのかも知れないが、クリシャルナがエルフとして女性として成長するにはまだまだ時間がかかるんだと思うんだが・・・？　まさか、キアラも自分の胸の事を？　それこそまさかだな、キアラも、もう２０代後半に突入した筈だが、昔から相変わらずの容姿に背格好だからな。

いや、重要なのはテッサもクリシャルナもティファニアの容姿をきちんと記憶しているという事実だ。元々モード大公家の人々を招待するのは難しいと考えていたし、大公だけでも我が国に呼び出せたことで十分だったのだ。

テッサにも、クリシャルナにもそれは説明したのだが。クリシャルナが交渉の失敗の責任をとるとか言い出して妙に張り切って、韻

竜達との交渉や、エルフ達との橋渡しなんかを頑張ってしまっているのだ。

「ラスティン様、何処を見ていらっしゃるんですか？」

「ん？　キアラを見ているよ？」

「えっ、あ、あの」

「何か勘違いをしている様だが、少し痩せたんじゃないかと思ったんだよ」

我ながら上手い切り返しだな。キアラが時々悩んでいる素振りを見せるのも事実だし、決して事実無根という訳じゃない。

「！？、そうでしょうか？」

「ああ、疲れている様なら、少し休暇を取るか？」

「い、いいえ、今は、そう、今はそんな時ではありませんから！」

「そうだな、この戦争が終わったらゆっくり休養を取ってくれ」

「はい、そうします。ところで、例の園遊会ですが、本当に参加されるんですか？」

「ああ、モード大公直々の指定だから仕方が無いだろうね。非公式の最終的な戦略確認と言う面もあるから無理は承知だ」

「ですが、お体の方は？」

「さあ、もう子供じゃないんだ大丈夫だろう」

それに何かあるのは記憶や精神の方だし、何より今のノーラを1人でプレッシャーのかかる場所に出かけさせる積りは無いしな。どうも最近ノーラの方もかなり体重を落としている気がするのだ。悩んでいるのも気付いているがどうしても理由を話してくれない。

本当ならこの時期の園遊会など中止にしたかったんだが、ノーラが大反対した為にそのまま行う事になった。(数少ない王妃の公務を休む訳にはいかないというのは分かるんだが、ノーラも責任感が強いからな・・・)

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

結論から言えば、私の選択は完全に間違っていた。私の体質は変わっておらずラグドリアン湖に近付くと子供の頃同様、全く覚えていないがまたもや人事不省といった状態になってしまったらしい。

園遊会とその最中に行う予定のゲルマニア侵攻作戦の最終打ち合わせに関しては、私の不調を予期していたキアラが父とアンセルムが夫々代行を務めてくれた。正直言えばどちらも私が出るよりは上手く事が運んだんだろうとさえ思えるのだが、私の愚かな所は倒れた私を見舞う為に、義両親が私の病室を訪れてしまうという事態を招いた所だった。

＝＝＝

「貴方、お加減は如何ですか？」

今回は何故か直ぐに目覚めなかった様だが、それ程時間が経ってはいないんだろう。体の動きに少しぎこちなさを感じるが、空腹感で察しがついた。ただ、私への労わりの声の主の表情を見た時にそんな事はどうでも良くなった。私に付き添ってくれていたのは無論ノーラだったんだが、その表情は今まで私が見た事が無い物だったのだ。

その表情は何と表現したら良いのだろう？　泣きたいのを我慢して無理をして笑おうとして失敗していると言えば良いのだろうか。ノーラがどうしてそんな表情をしたのか私には分からなかった。ただ、その表情を変えたくてノーラの顔に手をそっと伸ばしたのだが、その手がノーラの手で払いのけられてしまった。

「あっ！　御免なさい！」

「ノーラ！」

ノーラは私の声を避ける様にそのまま部屋を出て行ってしまったのだが、さっきの行動の意味は？　避けられたと言うより、私が触れるのを嫌がられたと感じてしまったのは仕方が無いだろう。（ちょっと言い辛いが、”レス”気味なのは否定出来ない。単なる倦怠期とか思っていたんだが、甘かったのだろうか？）

ノーラと入れ替わりで、ガスパードが部屋に入って来たのだが、この旅と言う程ではないが行事で護衛に付いた時に第一子が生まれると言っていたのを思い出すな。何処と無く幸せそうなのが、今の私にはどうにも不愉快に感じられる。

うん？　何か大事な事を忘れている気がするぞ、何だ？

「スティン、調子はどうだい？」

「ちょっと体の動きが鈍い気がする位かな」

「それはきっと運動不足だよ」

「一応、病人なんだから、そんな事言うなよ！」

いや、運動不足なのは否定出来ないんだがね。昔は結構身体を動かしたんだがな、山登りも出来ないし、移動も列車になってどんどん身体を動かす機会が減っている気がする。（馬に乗るだけでも結構体力を使うんだがな）

「まあ良いけどね、それより王妃様は大丈夫なのかい？」

「それは・・・」

「やっぱりあの母親だと、娘も大変なんだろうね？」

「あの母親？」

「ああ、少し前まで君のお見舞いに来ていたよ」

「なっ！　最悪だ！」

「どうしたんだよ？」

「あれ、何が最悪なんだろう？」

さっきも感じた違和感が再度襲って来たが、少し考えただけでは結論は出なかった。

「おい、大丈夫か？」

「ああ、問題は無いよ、多分ね」

「おーい、国王がそんなじゃ困るぞ？」

「大丈夫だよ、本当に。まあ、今は園遊会の事だが」

「もう終わっているよ、そっちは小さな宰相殿が対応してくれたから問題は無いと思うよ。一応大規模な事故が起こったと言う事になっているから口裏を合わせて欲しいそうだ」

「事故ね？」

「ああ、何でも親ゲルマニアの貴族が仕掛けたらしいよ」

「そうか、キアラが何か仕掛けたのかな？」

「知らないよ、ちなみに君が倒れてから2日経っているよ。もう暗くなっているから、移動は明日の早朝にするんだね」

「分かった、ここは？」

「王都近くの、小さな町の宿屋だよ。人目を避ける必要もあってね。途中から列車を降りて、馬車で移動してここまで来たんだ。そのまま王城に入ると目立つだろ？」

ああ、事故現場の視察に行っている事になっているんだったな。私を運ぶ事自体は難しく無いだろうが、目立たない様にするには手

間がかかっただろうな。

「そうか、迷惑かけたな」

「それは君の奥さんに言うべきだろうね、殆ど眠らずに看病していたんだぞ」

「そうか！」

どうも嫌われたと思ったのは勘違いらしい。良かった、本当に良かった。そうだ、ノーラは”義母殿”と会ってしまったんだった。どうして会わせない様にしたかったかが思い出せないが、先程の表情と態度は、”公爵夫人”との会話のせいだとしか思えない。

「そうだ、明後日は、ルイズ達と”公爵夫人”が決闘する日じゃないか！」

「ん～、もう明日と言ってもおかしくない時間だけどね」

「そうか、それなら好都合だな。このまま王都に戻らずに、決闘の会場に向かうとしよう」

このまま王城に戻ったら、暫く外出は禁止されるのは確実だしな。キアラには後で謝って・・・、許してくれるだろうか？

「いいから、スティンは休んでいろよ」

「しかし移動時間が」

「大丈夫だよ、演習場は直ぐそこだよ。そうじゃなければ、公爵夫

人だってゆっくりしていないだろう?」

「”公爵夫人”が泊まるに相応しい宿なんて無いだろうに」

「良く分からないけど、陸軍の宿舎に泊まるらしいよ?」

「そうか・・・」

あの人も昔に戻った気分になりたい時もあるんだろうか? それだけ、ルイズに申し込まれた決闘に真剣に臨んでくれるのなら良いのだがな。ルイズに対しては兎も角、明人青年はまともに相手にされないだろうな。

私は、ルイズ達にする最後のアドバイスを考えて、再びベッドに身体を横たえた。少し前までかなりの時間眠っていた筈なんだが、その晩の眠りは意外に早く訪れた。

第百七十一話　ラスティン３０歳（奪われたモノ）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

さて、”モノ”とは何で、どんな影響が出るのでしょうか？

第百七十二話　ラスティン３０歳（母と娘と）（前書き）

第百七十二話ＵＰします。

第百七十二話　ラスティン３０歳（母と娘と）

”ルイズ＆平賀明人”ＶＳ”カリーヌ・デジレ・ド・マイヤール”の決闘は、決闘と言うよりある種の見世物という様相を呈していた。学院の生徒は勿論、戦闘訓練を一緒にやっている兵団員、空軍の連中までいる気がする。（まあ、決闘の審判役が騎士殿だからな、噂になってしまえば隠すのは難しかっただろう）

一方”カリーヌ・デジレ・ド・マイヤール”を見る為に、魔法衛士隊の隊員の姿も見えるのだが、どう見ても休みの日に来ているとは思えない制服のままという者までいる。ヒポグリフ隊、隊長の知人などは堂々と戦闘技術向上の為とか私に向かって言い切る始末だ。（彼は立派に？休日を利用しての観戦だから文句は言えないし、彼の部下，同僚たちを咎め難くなった、中々の策士だな）

「それでは、決闘を開始する。些か変則的な形であるから、双方に確認を行いが宜しいかな？」

「ラ・ヴァリエール公爵夫人、相手は2人だが宜しいか？」

「ええ、勿論、３人でも４人でも構いませんわよ？　それに今は、”カリーヌ”と呼びなさい、騎士様？」

「了解であります！　・・・、コホン」

公爵夫人は騎士殿でもやっぱり苦手のタイプらしいな。この女性を良い様にあしらえる人間は居るんだろうか？

「ルイズ君は、自分が正々堂々戦えると誓えるかな？」

「勿論です、ヴァルター様！」

「アキト、君は？」

騎士殿に尋ねられても、明人青年は１つ頷いただけで、公爵夫人の事を見詰めていた。まあ、そうだろうな、公爵夫人にとっては茶番でしかないだろうし、剣を構えた平民が１人ルイズに付いただけでは本気にはなれないのだろう。さすがにフォーマルなドレスという訳では無いが、普通にブラウスとスカートという格好でどう見ても決闘に向いているとは思えない。

もしかしたらルイズを挑発する積りなんだろうか？　一応動き易そうで、汚れたり破れたりしても構わない格好に見えるから、あの格好でもルイズは十分あしらえるんだろうな。どうやら私のアドバイスが生きてきそうだ。

「お母様、あの約束覚えていらっしゃいますか？」

「どの約束だったかしら？」

「私の結婚相手は自分で決めるという話です！」

「ああ、そんな話もあったわね、それでこんな茶番を仕組んだの？　陛下まで巻き込んで？」

こっちまで飛び火したぞ、目立たない様に変装して、ひっそり観戦しているのに、お見通しらしいな。

「いいえ、それだけではありません。今度の戦争ですが、私も国民の１人として参加します！」

「ルイズ、貴方は自分が言っている事が分かっているの？　ラ・ヴァリエール公爵家の娘がどうして国同士の戦争なんかに出る必要があるのですか？　そう言うことは父親に任せておけば良いのです」

「お母様、私だってもう子供ではありません。ラ・ヴァリエール公爵領はゲルマニアに隣接しているのですから、領地を守るために領民が戦いに挑むなら、私も戦いに挑みたいと思います」

「そう、それなら何処かに嫁に出なさいな。以前話した、ワルド子爵の息子なら妥協してあげられるわ。何だったら、レーネンベルクでも構わないわよ？」

こっちは大いに困るぞ？　明らかに私に向けて妙な事を言い出した公爵夫人だったが、誰も本気には受け取らなかった様だった。弟のノリスを義妹のルイズとジョゼットが奪い合うとかそんなカオスな状態は勘弁して欲しい。

「それとも、そこの平民が貴方の好みの男なの？」

「な、な、な、こ、こ、こ！」

「ルイズ」

壊れた音楽プレーヤーの様に変な声を上げたルイズに、意外と冷静な明人青年の声がかけられたが、それだけでルイズの動揺は収まってしまった。（ちなみにルイズの顔は真っ赤なままだった、本人はまだ明人青年に対する恋心を認めていない様だな。往生際が悪いというか、複雑な乙女心というのか分からないがな）

「ごめん、アキト」

明人青年の方と言えば、ルイズを諌める為に一度ルイズに視線を送ったっきりで直ぐに視線を公爵夫人に戻してしまった。その視線は敵意と言う訳では無いが、友好的な物でも無いことはここからでも見て取れる。これは想像だが、”強いやつと戦いたい”と言っていたから、その強者が目の前に居る自分を無視している状況に我慢が出来ないのかも知れないな。

「それでは、両者の合意が整ったと認め、決闘を開始する。両者慣わしに従い杖を！」

”カンッ”

と言う軽い杖が当たる音がした後、母と娘は自分に有利な距離を測るように少しずつ間合いを広げていったが、明人青年はその場で立ちっ放しの様に見えた。明人青年の立ち位置を見て一瞬だけ顔をしかめた公爵夫人だったが、多分ルイズとは何度か決闘もどきをやっていたのだろう、母娘にとっては定位置と思われる場所（凡そ４０メイル位だろうか）で２人の動きが止まった。それを見た騎士殿が、

「始め！」

と声をかけた瞬間、幾つかの事が起こった。

１つは、ルイズが杖（フェリクスだったかな）を構えた事だった。但し構えただけで呪文１つ唱えようとはしなかったがね。

もう１つは、ルイズの行動に対応する様に、公爵夫人も杖を構えた事だった。こちらも呪文を唱えていないと思ったが、そうではな

かったのが直ぐに分かった。
　更にもう1つは、明人青年が公爵夫人に対して例の身体強化（ブースト）の強化版で一気に間合いを詰めて切りかかろうとした事だった。

「オバサン、あまり舐めるなよ！」

　そして次の瞬間には、公爵夫人の首にデルフリンガーを突きつけた明人青年の姿があった。全くと言って良いほど、経過が見えなかったが、公爵夫人はこっそり呪文を唱え終わっていたんだろう、明人青年に向けて風の刃（ウインド・カッター）が放たれたのは分かった。それをデルフで吸収し更に身体強化を強め加速した明人青年が公爵夫人の杖を切り落とした上で、喉元にデルフを突きつけた筈だ。

　速すぎて見えなかったのに断定出来るのは、この戦法を考えたのが私だったからだ。その証拠に絡繰りを知らない魔法衛士隊の連中からは信じられないと言った言葉が漏れている。ちなみにオバサンなんて呼べとは助言はしていないぞ。本人は怒るかも知れないが、立派な”お祖母ちゃん”なのは事実だからな。甥や姪達になんて呼ばせているか知らないがね。

＝＝＝

「もう1度だ、ルイズ良いな？」

「ええ、勿論！」

「オバサン、もう少し真面目にやってくれ。娘が母親に挑んでいるんだぞ？　役に立たない人間と一緒にこの場所に立つなんて思わないだろう？」

おや、何だか思惑から外れてしまったんだが？　明人君は突きつけたデルフを下ろして、公爵夫人に話しかけた上に、ルイズの方も同意してしまったぞ？　私としては、ルイズの自由が確保できれば良かっただけだったから、人目のある所で公爵夫人から一本取れれば良いと思っていたんだが。

「そう、そう言うことなのね、ルイズ？」

「ええ、お母様」

「貴方はアキトと言うのね、良いでしょう。こちらの無礼の変わりに返礼をしなければならないようですね？」

「ああ、頼むよ」

何故か再戦という話になるし、いや、杖は切られてしまったんだから、暫く後の事だろうな。この場はルイズ達の勝ちで納まると思ったんだが、何を思ったか公爵夫人は騎士殿に一礼してスタスタと軍の宿舎の方に戻って行ってしまった。

観衆とついでに立会い人の騎士殿が話に付いていけずにポカーンとしていたが、暫くして観衆がざわめきだし騎士殿がオロオロしだした（どうもこういう突発的な出来事には向いていないらしい。中立的な立場の人間として選んだのだが、さっさと勝利宣言をしていれば良かったのにな）

そしてざわめきが、騒音と呼べる大きさになった頃に、宿舎のドアが開き先程とは全く違った姿の公爵夫人、いや、この姿は正しく”烈風カリン”なのだろう、マンティコア隊の制服に似た服装（と言うよりこれが以前のマンティコア隊の制服だったんだろう）を見

につけて、どういう意味があるのか顔の下半分を仮面で覆った状態で姿を現した。

その時それまでは比較的大人しくしていた魔法衛士隊（しかも、結構古株と思われる隊員）が呻き声と悲鳴の間の様な声をあげたのが確認できた。直ぐには気付けなかったが、手には杖剣を握っているのも見て取れた。成る程、こちらが本気という訳か？

＝＝＝

さて、再戦の結果だが、ん？　経過はどうなったかって？　いや、全然付いて行けなかったので説明出来ないぞ？

あんな斬り合いを解説出来る物か、やってる本人達だって考えて剣を振るっているか怪しい物だ。一応分かる人間には、２人の戦いの凄さと言うのが分かるらしいんだが、私にはさっぱりだった。

そう言う訳で、結果だが！　うるさいな、仕方が無い凡その流れだけだぞ？　それ以外は私の反射神経では付いて行けないからな。

基本的には烈風カリンと明人青年の接近戦が主体だった。ルイズは隙を突いて、一撃を決めるべく様子を見ているだけだった。それ程２人の動きが激しかった訳だが、ルイズも多分ただ見ているだけじゃなかったんだな。ただ、烈風カリンの方も只者と言う訳では無く、巧妙に立ち位置を調整して明人青年を盾にしていた。

私がルイズなら身も蓋も無く２人諸共をある程度の範囲ごと吹っ飛ばすのだが、ルイズはそれを選択しなかったと言うよりこちらが”この２人”が考えた戦法だったんだろう。

「ルイズ！」

「良いわ！」

そして次の瞬間には、烈風カリンをルイズの”爆発”が見事に捉えたのだった。ただ、傍から見ていればどう見ても烈風カリンがルイズの爆発に突っ込んで行った様に見えた。当然ここまで来て、そんな間抜けな事を烈風カリンがするとは思えない。

論理的に考えればだが、ルイズが烈風カリンの動きを読んで撃破したとも考えられる。ただ、それでは直前の2人の合図の意味が無くなるし、あの動きにルイズが付いて行けたとも思えない。明人青年も良くやっていたが、烈風カリンを誘い込む余裕があった様にも見えなかった。

そうなると結論とすれば、ルイズと明人青年が烈風カリンを罠に嵌めたと考えるしかないだろうな。烈風カリンの戦法はルイズにとっても予想が出来ただろうからそれを逆手に取った訳だ。2人の絶妙のコンビネーションの勝利と言う事だな、分かるか？

そう、ルイズは烈風カリンの動きを読んででは無く、明人青年が次に動くであろう場所に向かって呪文を放ったのだ。普通ならばその呪文は明人青年を捉える筈だったのだが、明人青年の動きを牽制する為だろう。明人青年が移動する場所に、先に烈風カリンが割り込んだというだけの話だ。（こう考えると、かなり、無茶で間抜けな戦法の様な気もしないでも無いな？）

第百七十二話　ラスティン３０歳（母と娘と）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百七十三話　ラスティン３０歳（疲れる人達）（前書き）

第百七十三話ＵＰします。

第百七十三話　ラスティン３０歳（疲れる人達）

何故か、私が”義母殿”の治療と看病をする事になった。

「陛下、部屋を用意してありますが、休んでいかれますか？」

そんな事をヒポグリフ隊長が言い出したのを怪しむべきだったのだが、”義母殿”が気絶したまま運び込まれた病室に案内された後では、どうしようもなかった。

「それでは陛下、私は水系統は不得意ですのでよろしくお願い致します。義理でも親子なのですから積もる話もあるでしょう？」

そんな事を言って、エロワさんが颯爽と病室を出て行ってしまった。どう言う訳か、私の部下達は私を嵌める事が大好きらしい。どう考えても怒り狂った”公爵夫人”の相手をしてババを引く役を押し付けられたのだろうが、これは他人には任せられない話だな。

仕方無く治療を行ったが、軽い脳震盪だという事は私にも分かったので、体のそこかしこにあるかすり傷を治療するだけでメイジとしての私はお役御免だった。

「んっ」

「お目覚めですか、義母さん」

「ラスティン？、いえ、陛下」

「何処か痛みますか、義母さん」

こんな風に呼びかける意図を察して欲しい物だがね？

「いいえ、大丈夫よ。この間は、貴方を見舞ったばかりなのに、立場が逆ですね？」

その事は、少し考え中だったから、話題を強引に変えよう。

「ルイズはどうでした？」

「ええ、強くなったわね、鍛錬を欠かした事は無かったのにね、私ももう歳かしらね？」

「いえいえ、まだまだお若いですよ。ただ、自分が”お祖母ちゃん”だという事は忘れないで下さい」

「そうね、確かにあのカトレアに子供なのですからね」

妙に染み染みと言った感じで、義母が同意してくれたのは意外だった。カトレアもルイズも母親としては目が離せなかっただろうからな？　ノーラはどうだったのだろう、考えるまでも無く、私の妻になったんだから他の娘の誰よりも目が離せなかっただろうな。

「はい」

「ラスティン、エレオノールだけど何時でも帰してもらって構わないわ」

「はぁ？」

何を言っているんだ、このオバサンは！　私がノーラを手放す筈が無いだろうに、ノーラが万が一、（本当に有り得ない・・・）離婚するとか言い出したら私はどうするんだろうか？

「それとね、私達家督を譲る事にするわ」

「なっ！」

こちらは個人的にではなく、国、いや、国際的に大事だ。ラ・ヴァリエール公爵からも軍がゲルマニアへ侵攻する手筈になっているんだからな。ラ・ヴァリエール公爵も同意（戦略の説明をしたらすっごく嫌な顔をしたがな）している筈なんだが、どう言う積りだ？

「安心なさい、今度の戦争が終わったらよ」

「脅かさないで下さいよ、エルネストに戦争は無理でしょうからね」

「そんなの、貴方の部下達が何とかするでしょう？」

私の部下と言うより、キアラの後輩なんだがね？　あの双子が戦争に向いているとも思えないがな。

「はて、何の事でしょうか？」

「・・・」

「・・・」

何故病室で睨み合いになっているんだろう？　この女性とここまで真剣に話した事は無かったな。

「まあ、良いわ。私が認めた男達がそうしたいと言うならば、野暮な事は言わないでおきましょう。ただし！」

「ただし？」

「ラ・ヴァリエール公爵家が無くなる様な事があれば、話は別だわ」

全く、貴族と言う奴はこれだから困るな。誇りある死とかに意味を見出せる精神は持っていないし、何より誇りではお腹が膨れないんだ。

「それに関しては、国王として確約はしかねますね。ただ、貴方が認めたエルネストを信じてやって下さい」

「ふん、上手く逃げた積りかしら？」

「どうとでも、そうだ、平賀明人は義母さんの眼鏡に適いましたか？」

「・・・、そうね、まだまだ伸びると思うわね」

「彼に領地を与えるとか考えていますか？」

「さあ、それは出来ないと思わないかしら？」

「ええ、ルイズに何処か領地を与えて、その夫にと言う考えもありますけど、それは不要に願います」

「あら、どうしてかしら？」

「そうですね、彼は今度のゲルマニアとの戦争で”英雄”になる予定ですからね」

「昔の貴方みたいに？」

「いいえ、虚像では無く本物のですよ」

予定では、ゲルマニア皇帝か宰相のどちらかを”討ち取る”筈なんだからな。

「面白そうね、是非詳しく教えなさいな」

「残念ながら、これは国家機密になりましてね、公爵夫人？」

「それは失礼したしました、陛下」

はぁ、やっぱりこの女性の相手は疲れるな？　いや、義父の方もあれはあれで疲れるんだがね。

第百七十三話　ラスティン３０歳（疲れる人達）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

物凄く短くてごめんなさい、上手く切れなかったんです。

第百七十四話　ラスティン３０歳（ダークモード解除）（前書き）

第百七十四話ＵＰします。

第百七十四話　ラスティン３０歳（ダークモード解除）

さて、戦争に関してはまあ、どうでもいいというか大勢は動かないだろうからな、それより重大な問題が私の身に降りかかって来た。（実際には自業自得なんだが、どう考えるか悩ましい問題だったりする）

「キアラ、調子はどうだ？」

「はい、大丈夫です。ご迷惑をおかけして申し訳ありません」

「いや、ストレスが原因で、病気になるなんて珍しい話でも無いだろう？　ストレスは万病のもとという言葉もある位だからな」

一般的では無いが、こちらでもストレスと言う言葉は通用する。だが、キアラがストレスが原因でダウンするとは思わなかった。キアラにとってのストレッサー（ストレスの原因）が何か分からないが、最近悩むことが多かったからかなりの負担になっていたんだろうな。

身体の病気を治すのは難しくないんだが、精神の病気を治すのはこちらでも難しいのは以前も話しただろうか？　ただ、睡眠をとるという事に関しては気軽に魔法薬や時には魔法で解決出来るからストレスが原因の病気が重症化しないのが救いだった。（昔の私みたいに意地を張れば結果は異なってくるだろうがね）

ただ、キアラがその重責に参ってしまったと言っても誰も信じ無いだろう。私はキアラの事を能力的にも人格的にも、そして性格的にもほぼ完璧な女性だと知っているから、ストレス性の胃炎で悩むキアラと言うのがどうも納得出来ないし、キアラを良く知る人間な

ら多分同意してくれるだろう。（ちなみにもっとも優れた男性は父だな、次点でライルだろうが、まだまだ経験不足だしな。ちなみに何処かの愚痴王は能力的にはピカイチだがその性格の悪さでトータルとしてマイナスだ）

そんな訳で、キアラに2週間ほどの休暇を強引に取らせたのだが、その2週間は私にとって地獄となった。いや、国政が滞ったりはしなかったのだが、宰相権限でキアラが認可していた案件までが全て私の所に回って来たからだった。常時であれば何とか私もでも処理できたんだと思うんだが、今は準戦時だと言う事をすっかり忘れていた。

この2週間は、私の人生の中で一番働いた気がするぞ。しかし、それ以上に、キアラの有り難味を思い知らされたな、キアラが居なくなってもキチンと国が運営されているのは、キアラ自身がこういった事態を予測して既に各所にどの様に動くか考案させていたからだ。（そこまでされていてもあまりの激務に体重が1割ほど落ちた、運動不足でちょっとだけ気になっていたので丁度良く・・・無いぞ。こんな事は2度と御免だな）

＝＝＝

「どうだった、久々の実家はゆっくり出来たか？」

「はい、ラスティン様は、やつれましたね？」

「ああ、良いダイエットになったよ？」

「そう言う意味不明の言葉は使わない様にして下さい」

「そうだったな」

「折角、レーネンベルクに行ったんですから、足を伸ばしてマース領の様子も確認してきました」

「キアラ、私はゆっくり休んで来いと言ったんだが？」

「はい、ですからゆっくりして来ましたよ？　大体ですね、実家でならゆっくり出来るとか思っていませんか？」

「普通そうだろう？」

「実家で帰って、ゆっくり寛いでいたら、畑を耕せ！とか言われるんですか？」

「・・・」

うむ、自分が一般的な家庭と違う世界で生きて来た事が良く分かるな。ただキアラは給料の殆どを実家に仕送りしていると聞いた事があるから、それなりの扱いを受けるんだと思ったんだが、キアラの実家ではそうでは無いらしい。だが、表情が微妙に明るくなっている気がするし、実家に帰した事は無駄では無かった様だ。

「それで、マースはどうだった？」

「そうですね、概ね準備が整って居るようです。後は時期を見て兵団員を向かわせれば良いかと思います」

「陸軍の方は？」

「はい、若手の優秀な指揮官を派遣したと聞きましたが、能力的に

は問題無いと思われます」

「実戦経験は？」

「大規模なものは無いそうですが、ゴドー伯の乱の時には活躍してくれましたよ。確か、グラモン伯爵家の嫡子だとか、聞きましたが」

「・・・」

「アンセルムも悪くは無いなんて言う位ですから、ラスティン様？」

「いや、何でも無い」

「そうですか？　もう1つ報告しておきたい事があるのですが？」

「何だ？」

「14～15歳の頃ですが、親しい女性はいらっしゃいましたか？」

「ん～、その頃はワーンベルで代官を始めた頃だな。女友達とかは居なかったよ」

質問の意図が不明なので、当たり障りの無い回答をしておいたが、当然キアラには通用しなかった。

「言い換えましょうか？　ラスティン様の”最初の女性”はどなたですか？」

「ナニヲイッテイルノカナ、キアラサン？」

私は何を動揺しているんだろうか？　キアラが何故あの女性の事を？　ここは”君の最初の男性は？”と聞いて黙らせる所なんだろうか？

「もう結構です、結論を言います。心して聞いてください」

「・・・、ハイ」

何が言い渡されるんだろうか？　どう考えても良い話では無さそうだ。

「ライル様は、ラスティン様の息子です」

「ハイ？」

何を訳の分からない事を、ライルは１０年近く前から、私の息子なのにな・・・？　待てよ、キアラの話を繋げて考えれば、”ライルが私の実の息子”という事になるな？

「ちょっと待て、ライルの年齢と合わないだろう！」

「そうですね、ライル様は１５歳にしては立派な体格ですからね」

「本人が間違って覚えていると言うのか？」

「はい、意図的に年齢を上に覚えさせたんでしょうね」

そこまでやったのか、あの女性は？　確かに小さい頃は年齢に比べて成長が遅いと思った事もあったが、栄養状態が悪かっただけだと思っていた。言われて見れば、ライルの髪や瞳の色は確かにあの

女性にそっくりだし、ライルの母親の夫がメイジだと言う事は確かな事だ。（変装と言う話もあったが、髪の色まで、そうなると母も一枚噛んでいる？）

「・・・」

「ちなみにライル様の出産に立ち会った方の裏を取ってありますし、ワーンベルからこっそり生活費が送られているのも確認しています」

「そうか・・・、マルセルさんが仕組んだんだな。当然父も知っているか・・・」

「悪い事は出来ない物ですね・・・」

こう行ったキアラの表情は、哀れみの様の物が見て取れた。悪い事では無いはずなんだが、いや、婚約者が居るのに他の女性と関係を持つのは倫理的に言えば明らかに悪い事だな。

「しかし、そうなると困った事になりますね？」

「何がだ？」

「勿論、ライル様をラスティン様の実の息子として認める事が出来ないからです」

「・・・」

言われてみれば、確かに、今、ライルを実の息子として認める事は出来ない相談だった。ライルの存在がノーラの立場を悪くするのもあるし、ライルにとってイザベラという女性が掛け替えの無い存

在となりつつある現状では次のトリステイン王に関してガリアに口出しをする絶好の機会を与える様な物だ。もう少し、国内が安定した後なら兎も角、今は拙い。

「喜劇だな」

「えっ！」

「そうだろ、義理の息子なら孫を王族にしようを思っていたのに、実の息子となると王族にするのが難しいなんてな」

「どうなさいますか？」

「そうだな、今のまま喜劇を続けるしかないな。今までだって、実の息子を義理の息子として扱ってきたんだ、それを続けていくだけだよ」

「では、ライル様を、いえ、ライル君をマース侯爵にするという予定はそのままで？」

「ああ、状況が動くのを待つとしよう」

頷くキアラを見ながら、ノーラにライルの事を話すべきか悩み始めていた。ノーラの立場を守る為にライルの子供を王族にとか考えていたんだが、この事実が、今のノーラと私の関係にどんな影響を及ぼすかと考えると、どうしても暗い気分になってしまう。むっ、まただ、何か忘れている感じがするのに、思い出せない、何か大切な事なのに！

「あの、ライル君のお母様ってどんな方だったんですか？」

「なんだ、マルセルさんに話を聞いたんじゃ無かったのか？」

「いいえ、ワーンベルの資金の流れを調べただけですので、マルセルさんはどうも引退を考えている様です」

「そうか、口止めの必要は無いか、ああ、あの女性の事だったな」

どうやら、キアラの動きを不審に感じた様だな、いや、マルセルさんももう歳だからな、引退と言う話も突然と言う訳では無いだろう。

「はい」

「そうだな、キアラにとっては先輩みたいな物だしな。あの女性の名前はな・・・」

久々にあの女性の名前を口に出した気がする。今はキアラに対してだが、何時かライルに私が知っているあの女性について話してやれる日が来ると信じよう。

第百七十四話　ラスティン３０歳（ダークモード解除）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

飛び抜けて意味不明なサブタイトルですが、誰がダークモードだったかは分かると思います。何をやっていたのかは、戦争が終われば明らかになる予定です。

ライル君の素性も明らかになりましたが、彼の歩む道はどうなるんでしょうか？　一応随所にヒントはあるので、推理してみると面白いかもですよ。

第百七十五話　ラスティン３０歳（ぷにぷにほっぺ）（前書き）

第百七十五話ＵＰします。

第百七十五話　ラスティン３０歳（ぷにぷにほっぺ）

さて、肝心の対ゲルマニア戦争（一部では、世界大戦とも呼ばれているが、これが第一次と呼ばれなければ良いのだがな）が始まる前に、幾つか整理しておかなければならない話があった。

☆韻竜達との交渉

先ずは、テッサの話から始めるとしようか？　あの交渉の失敗（彼女達の主観では）を期に交渉事に少しだけ自分らしさと言う物を取り入れる事にした様だ。と言っても、交渉を始める前に出来るだけ相手の事を調べておくという当たり前の事なんだが、どうも前回はエルフと言うモノをクリシャルナを基準にして考えて失敗してしまったらしいのだ。（フレンドリーエルフや、態々人間の世界までやって来てくれた技師の人達が普通とは思わないが、シャジャルさんもやっぱり変わった人なのだろう）

そんな訳で、テッサは韻竜に関して情報収集を始めたんだが、いきなり躓いた。韻竜に関しての書物は学院の図書室にも王立図書館にも何冊か存在したのだが、何と言うかあまり役に立たなかったらしい。韻竜の生態とか、能力とかはそれなりに正しい事が書かれていたらしいんだが、これはテッサが求めてる情報では無かった。

テッサとしては、韻竜達の持つ種族的な性質みたいな物を知りたかったのだろう。ただしそんな都合の良い物があるとは限らないのがこの世の中なんだろうな。

誰かが大昔、偶然出会った韻竜と仲良くなり、その話をまとめた書物があるとしようか？　その人間は、韻竜と出会って友人と呼べ

る仲までになったとする。彼は韻竜から色々な事を学んだだろう。

・先住魔法
・飛行速度
・身体的特徴
・性格

とかだな。その情報を、その人間はとある人物に伝えたとしよう。そのとある人物が聞いた話を一冊の書物に纏めた結果が”幻の古代知性生物・韻竜の眷属”などの韻竜に関する書物になった訳である。

書物としては面白い物だし、韻竜に関しても上手く纏められていると言えるらしいんだが、その韻竜なら兎も角、他の韻竜を同様に扱う事が危険なのはテッサ自身が思い知った所だったからな。それに、永い間、下手をしたら何百年も外界との交流を拒んでいたとなれば、どんな事になっているかも想像が難しいだろう？

「そんな訳で、情けないですがラスティン様の知恵をお借りしたいのです」

「したいの！」

「ちょっと、真面目な話だから黙っていて！」

「きゅい～」

「テッサ、ダメだよ？」

「いいえ、これは教育なんです！」

「おにいさま、助けてなの～」

誰が”おにいさま”だ！　妙な知識を拾って来たものだ、年上を妹にする趣味は無いぞ？

「いや、私は君の兄じゃないし、お姉さんの教育方針に口を挟む気はないな」

「ひどいの！」

「いっその事、韻竜の里と言う所に入り込んで探ろうと思うんですけど？」

「ふむ、クリシャルナは何と言っていた？」

「反対されました、協力者も居ない状態で閉鎖された場所へ行くなんて論外だそうです」

「そうだろうな」

クリシャルナ自身も今はエルフサイドとの交渉が山場で、この場には居ない。ただ、彼女の意見は受け入れるべきだと理解出来る。クリシャルナにとっての協力者（ローレンツさん）に経験でも聞ければ良かったんだがな？　時間はそれ程残っていないし、どう助言したら良いんだろうか？

「そうだな、協力者を作り出せば良いんじゃないかな？」

「ですが」

「シルフィードの両親はどんな人物なんだい？」

「ああ、成る程！　それは良いですね」

「きゅい？」

「そうだな、何か手土産でも持っていく事を忘れないようにな？」

「手土産ですか？」

「ああ、テッサは自分がシルフィードを、この場合はイルククゥをかな？　そう、テッサはイルククゥを彼女の両親の元から誘拐してきた事になるんだよ？」

「・・・」

「？？？」

「どうしましょう？」

「今まで気付かなかったのかい？」

私などは、少し事情は違うがキュベレーの”母親”に酷い目に遭わされそうになったからな。

「手土産、手土産、シルフィード、好物って何？」

「もちろん、おにく、痛い痛いの～。何でおにいさままで抓るの？」

それは表情から見て、シルフィードの好物を言っただけと読み取

れたからだがな。

「いや、何となくな？」

「酷いの、使い魔虐待なの！」

うむ、言っていることは分かるんだが、シルフィードはアルビオンへの交渉に行った時に経費で馬鹿食いしてくれたのだ。しかも安価な羊肉では無く、高級な牛肉を頭単位でだぞ！

一応勅使扱いだったからその費用が王城に回ってきて、何故かユニスから私が怒られた。当然、経費削減の為に、安い肉が与えられる事になったんだが、本竜は全然気にしていない様なので、育ち盛りは”質より量”なんだなと思ったな。こんな事があるから、使い魔の召喚にはリスクが伴うのだ。（微妙に違う気もするが？）

しかし、食べ物で釣るというのは良い考えかも知れないな？　現在は内政の方は一段落だから、マリユスの力を借りるとしようか？

「テッサ、良い手土産を思いついたよ、マリユスを連れて行くんだね」

「はい？」

「私達は人間なんか食べないのね！　痛い痛いの！」

どうして、シルフィードの頬っぺたはこうも抓りやすいんだろうな？　カグラさんやミコト君の話で同族？の名誉が気になっているんだろうが、私が生贄などを容認すると本気で思ったんだろうか？

「ああ、マリユス様に料理を作ってもらうんですね？」

「そうだ、決して食べたりしちゃいけないぞ？」

「ふふっ、でもお忙しいんじゃないですか？」

「まあ、マリユスが抜けても何とかなるさ、キアラがフォローに回るだろうしな。そういえば、韻竜の里というのは何処にあるんだい？」

「あっち！　大体一日で行けるの！　痛い痛いの、何でなの！」

豊かな胸を反らして、”ビシッ”と北東の方向を指差したシルフィードに、テッサの制裁が下った。さすがに今の情報では対応出来ないからな。（意外と近い事だけは分かったがな、方向的にはレーネンベルク山脈の方だが？）

「そこに地図があるでしょう、そういう野生的な説明は控えなさいと言っているでしょう！」

「きゅい・・・」

うむ、テッサはきっと教育ママになるぞ、どうでもいいがな。そろそろと壁に掛けてある地図にシルフィードが近付いて行ったが、地図を前にして”ピクリ”ともしなくなってしまった。

もしかしてと思ってテッサの方をみると、苦虫を噛みつぶしたような表情をしている。どうやら本気で地図が読めないらしい、上空を飛ぶんだから、地図なんて普通の人間よりはイメージしやすいと思ったんだが、そう言うものでも無かったらしい。

結局、テッサから聞き出したシルフィード移動速度から凡その韻

竜の里の位置を特定すると、意外な事にレーネンベルク山脈の北側なのが判明した。韻竜側には全く関係無いが、知らないうちに彼らも”トリステインの国民”になっていたらしい。別に尋ねていって、税金を吹っかけると言う様な事をする積りは無いが、韻竜達との交渉を優先的に進める権利はあると思って良いだろう。

意外と目的地が近かった事もあり、テッサも安心して交渉に励めるだろ。１つ心配があるとすれば、マリユスに金に糸目をつけずに韻竜達にご馳走を振舞えと命じてしまった事だ。何十何百という韻竜がシルフィードの様に大量に食事をする様子を思い浮かべると、背筋に寒気が走る。（大丈夫だ、今回はちゃんと”政策”なんだからな！　ユニスが好きなコストパフォーマンス的には、はぁ、小言くらいは覚悟しておくか）

第百七十五話　ラスティン３０歳（ぷにぷにほっぺ）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百七十六話　ラスティン３０歳（戦略の確認）（前書き）

第百七十六話ＵＰします。

第百七十六話　ラスティン３０歳（戦略の確認）

☆戦略の確認（連合）

そろそろ、ゲルマニアに対する戦略に関して話しても大丈夫だろうか？

まあ、この情報は何処かから既にゲルマニアにも漏れているだろうから、構わないだろう。ガリアとしては正々堂々とゲルマニアに打ち勝つ（様に見せかける）事が重要なんだろう。態々、”マテウス・フォン・クルーク”に情報を漏らす”ジョゼフ１世”と、その情報から裏をかこうとする”マテウス・フォン・クルーク”、そしてその更に裏をかこうとする”ジョゼフ１世”、はてさてどうなる事だろう？

皮肉はこれ位にしておいて、実際の戦略の話をしておこう。今回のゲルマニアへの侵略は概ね、

・ラヒテンシュタイン
・ガリア
・アルビオン
・トリステイン

の４方面から行われる事になっている。

ラヒテンシュタインには、アルビオンとトリステインを除く諸国軍（ガリアもかなりの戦力をこちらに割いている）が集結している訳だ、数だけみれば最大の戦力になっているが、まあ、あまり当てにはならないだろうな。

ガリアから直接ゲルマニアに攻め込む軍は、ガリアの精鋭だと言

う事が分かっているが装備や数はそれ程の物では無い。理由は簡単で、こちらはメイジが主体の部隊だからだ。実際装備の方も開戦直前に送り込む手筈になっているらしい。

アルビオン空軍は風向きの関係でトリステインのラ・ロシェール経由で一度海上にでて時計回りでゲルマニア空軍の左翼を襲う方針になっている。

そして、トリステインは2方面から侵攻する事が計画されている。具体的には、直轄地マース領方面と、ラ・ヴァリエール公爵領方面からになるな。

こちら側は大体こんな物だが、ゲルマニア側の話もしておくか？何故こんなにも気軽にゲルマニア側の情報が入るかは言うまでも無いだろう。現皇帝と宰相を見放した領主達、ゲルマニアを逃げ出した平民や平民メイジ達、それどころか積極的に機密を売り込んで来る者達までまでいる。当然偽情報や、情報操作の結果が舞い込んでくる事もあったが、情報の取捨選択に関しては裏が取れたものだけ採用するという方針で十分だった。

もう少し国内がしっかりと纏まっていれば、情報戦では苦戦しただろうが、日頃の行いの大切さが分かるな。元々国として上手く纏まっていなかったゲルマニアの欠点がモロに出てしまった形だな。

ゲルマニアは陸軍をガリアとラヒテンシュタイン方面に向けて、空軍でトリステインを何としても陥落させたい様だ。我が国での工業品の生産を止めてしまえば、連合側も戦略を見直さなくてはならなくなるという考えなのだろう。これは今現在ゲルマニアで起こっている事態そのままだからな、こちらが予想するよりは大きな影響があるのかも知れない。（そう、人間を使い潰さなくてはならない

程にな）

　ゲルマニアとしては、持久戦になるのは絶対に避けたいだろう、それどころか開戦の時期も限られる。はっきり言ってしまえば、今年の秋の収穫が済めば強制的に兵を徴用して全力で短期決戦を挑んで来るだろう。その為に、足が速い空軍をトリステインに向けるのだが、それはトリステインに侵攻する時期をこちらに知らせているのに等しいのだがね。

　この辺りは、気候の話になるんだが、レーネンベルク山脈上空やその周辺の風は、概ねトリステインからゲルマニア方面に吹いている。ただ冬のある時期だけ風向きが逆になる、ゲルマニアがトリステインに攻め込むのはこの時期しかありえないのだ。

　余談だが、この時期のレーネンベルクはものすごく冷え込むのだ、そして私が生まれたのもこの時期だったりするのは、まあ、偶然だな。それにレーネンベルク山脈のゲルマニア側では風の影響か一時的に雪が融けて河川の水量が増えるという”おまけ”まで付くのだ。まるで天がゲルマニアにトリステインを攻めさせる為に用意した自然現象の様だ。

　空軍の運用と、ラセーヌ川の水量が増す事で陸軍の行動も制限出来るとなれば、ゲルマニアがこの時期を狙わない理由は無いだろうな。この辺りが、マース領方面が睨み合いで終わると断言出来る理由だったりする。

　全体的な流れは以上の通りになると思うが、まあ、予定通りに進むとは思っていない。ゲルマニアも必死だろうしな。ただ、結果として連合側の勝利は約束されている事には変わりは無いだろう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

☆戦略の確認（トリステイン）

連合の戦略に則って、我が国も動く訳だが当然何処の国でも自国の軍の被害を最小限にして最大の戦果をあげる事を考えて軍を動かすだろう。１人でも多くのゲルマニア人を殺す事を考える物騒な国もあれば、ゲルマニアから少しでも領土を切り取りたいと言う国もあるだろう。出来れば自国以外の軍に出来るだけ被害を出させたいなどと言う利己的な国も有るかも知れない。

我が国の採るべき戦略は、出来るだけ敵味方に被害を出さないと言う極めて人道的なそして矛盾した物だった。マース領方面に関して言えばこれは難しくは無いだろう。ラ・ヴァリエール公爵領方面もツェルプストー辺境伯と”共同戦線”を張ると言う本来なら有り得ない事が実現する為に進軍してもほぼ被害は最小限で済む事が予想出来る。

ツェルプストーで無ければ、ラ・ヴァリエールは止められないと言うのが一般的な見方だし、それは多分正しい事だろう。辺境伯の立場を強化する為に色々工作もしたらしいからな。（辺境伯のお隣さんにこっそり”風メイジ”を送り込んで、竜巻を起こしてあちらの軍に恐怖心を植えつけておいたのだ）

問題は空軍の方だが、ゲルマニアにはアルビオンの空軍が動いてくると言う情報が漏れている筈だからそちらにかなりのフネを割かなくていけないだろう。考えられるのは少数（といっても１０隻とかではないだろうが）での電撃的な侵略と言った所だろうが、皮肉な事だな。

＝＝＝

ここまで国際情勢と軍略に詳しい大抵の人間には予想できる筈なのだが、我が国とすればゲルマニア空軍の少数（多分精鋭中の精鋭だろうが）さえ抑えてしまえば何もしなくても被害は最小限に抑えられるし、連合側の物量にはゲルマニアも抗仕切れないだろう。但し物量に物を言わせると言う事は、ゲルマニアに大きな被害が出る事も意味している。

戦後の他国の事情など知らないと言い切れれば、それはそれで構わないんだろうが、これを普通に実行してしまうとどうなるかは、前世の第一次世界大戦後のドイツの例を挙げれば予想がつくだろう。皇帝となった”コルネリウス”が追い詰められて再度無謀な戦争を仕掛けるなんて業況を作り出す気は全く無い。（幾分個人的な事情も入っている気がするが？）

そんな状況を避ける為には、トリステインが他国の追従を許さない程の戦果を挙げる必要があるのは分かるだろう？　そこで我が国も連合の一員として以上の動きをしなくてはならない訳だ。

1. シャルロッテンブルク宮殿をトリステイン独力で陥落させる
2. 他国のゲルマニア侵略を出来るだけ遅らせる

その為にはこの2点を満たす必要があるが、幸運にも今のトリステインにはこれが可能なのだ。我が国の空軍ならばゲルマニアのど真ん中のシャルロッテンブルク宮殿まで、”風向きを考慮せずに”直接攻め込む事が可能だし、”ゲルマニアの妨害工作”が起これば、我が国から供給される物資が届かなくなり戦線の維持が難しいと判断されれば開戦の時期や進軍速度等も調整可能だと思う。

実際の所、トリステイン内でゲルマニアに内通したと思われる貴族による破壊工作は起こった事がある。だた、大規模な物だったと

しても近くに兵団員が居ればそっこー（これ位簡単にだ）で直してしまうからあまり意味は無いのだ。（ちなみに人手は十分だし、原始的ではあるがリッテン考案の風石式電池を利用した信号もあり大規模な事故は今の所起きた事が無い）

これがガリア側になると話は面倒になる、ガリアが兵団員を受け入れてくれれば問題は無いのだが、あの愚痴王がそうそうこちらの思い通りには動いてくれない。一応リッテンの指導を仰ぎながら独自に線路を拡張している。（きっと何処かで機関車や石炭の生成も企んでいるんだろうな）

そんな訳で、”ゲルマニアの破壊工作員”を各地に派遣して物資を意図的に遅らせたりしているのが現状だった。ただ、それもそろそろ終わりの様だ。例の季節風が吹き始めるのはもう一週間も無いだろう。既に国境辺りでは緊張感がピークに達していると報告も受けているし、ライルやルイズ達の夫々の持ち場についている。

問題なのは、エルフの横槍と、転生者ナポレオン1世が持つ強運だが、いや、強気に、良い方向に考えるんだ。エルフの動きは封じたし、こちらは転生者が団体で”見物”に押しかけるんだ、負ける要素は無い筈だ！

もう1つ、エルフ達の動向も話しておこう。エルフ達は現在、多分史上最大の大論戦の真っ最中だろう。その論題は”人間とどう付き合って行くか？”という話なのだ。これが30年前であれば、議題にさえなりえなかっただろうが、今ではエルフ達を2分する程、重大かつ難しい議題になっている様だ。

本来であれば評議会で決定が下され、その結果が各部族（或いは、町や村）に伝達されるらしいのだが今回は問題が問題だけに可能な

限り多くのエルフの意見を集めると言う事で例のエルフ帰還命令が発せられた訳だ。この辺りは、マナフティー様が上手く評議会を操ったんだろう。（しかし、まるで国民投票だな、これが出来てしまう辺りがエルフの社会の成熟度が羨ましくなるな）

そんな事情で、最大の味方に見放される事になったゲルマニアだったのだ。１０人居れば戦局をひっくり返せる戦力が手元から消えたのだから、ゲルマニア首脳陣はさぞかし慌てただろうな。それでこの戦争自体を諦めてくれれば良かったんだがな。（ここまで来て、やっぱり止めましたとは言えないんだろうな。私ならノーラを連れてさっさと逃げるだろうな）

人間に反感を持ったままの部族でも、一票でも多く人間との交流に反対する票をかき集める為に、シャイターンの門の封印を行っている者以外をかき集めたのだが、当然部族内でかなり揉めているらしい。

特にゲルマニアに手を貸している部族ではもっと事情は複雑だ。人間との交流を良しとしない者、人間との交流を望む者、そして人間を利用して権力を得ようとする者が入り乱れて収集が付かないらしいのだ。ちなみにそこは、”テフネス”というらしい、”ネフテス”とは縁続きらしが全く別の部族と言う話だ。

これはクリシャルナが絶対秘密だと言って教えてくれた情報だった。人間との交流を望む彼女としては”人間を嫌う部族の名前”などは将来の禍根になる可能性を考えて明かさない方が良い筈だからな。これは以前の私にはクリシャルナは明かしてくれなかった話だろうな。

・

・　・

こんな所だろうか？　私は一度勢いをつけて椅子から立ち上がるとこう呟いてみた。

「さて、名前負けの第一次世界大戦を始めるとするか！」

いや、実際に動くのはキアラを始めとするこの国の人達なんだがね？　時には格好を付けたくもなるのだ、戦争中に私の見せ場なんて全く無いからな！

暇な私は、戦後処理について考えを纏める事にしよう。内容はまだ秘密だがね？

第百七十六話　ラスティン３０歳（戦略の確認）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百七十七話　ラスティン３１歳（フライング・丼）（前書き）

第百七十七話ＵＰします。

第百七十七話　ラスティン３１歳（フライング・丼）

ゲルマニアはどうやら４００隻を超える”フネ”を用意した様だ、その内の３５０をアルビオン空軍に向け、残りの５０隻をトリステイン攻略に差し向ける様だ。

「５０隻か、随分と舐められた物だな？」

「数の上ではその通りです。だたし、３５０が小型のフネばかりで、こちらに向かう５０が新鋭戦艦となれば話は別でしょう？」

「なんだ、キアラ、自分が編成した戦闘機部隊に自信が無いのか？」

「そうですね、訓練不足は否定出来ませんから」

最近のキアラは妙に素直になった感じがするんだが、彼女の”休暇”がどんな影響を与えたのか私にも計りかねる所だ。しかし、多くの部下達には、少しだけ素直になったキアラが思いの他好評だと言うのだから、面白い物だ。（完璧すぎて取っ付き難いというキアラの小さな欠点が無くなって、逆に完璧に近付いた気がするんだが？）

「まあ、彼らはやってくれるよ、その為に長期間訓練を積んで来たんだからな？」

「はい」

「それでは、私は”ロイヤル・ソヴリン”に向かうとするよ」

「お気をつけて！」

な？どうも調子が狂うだろ？　国王が前線に立つ必要が無いとか、護衛を付けろとか言わないんだぞ？　こっそり後を付いてくるとかも無いし、どう言う事だろうか？　（キアラには後方支援の役目を”全面的に”任せてあるので付いて来られても困るんだが）

＝＝＝

さて、件のロイヤル・ソヴリン号（レキシントン号の方が分かり易いだろうか？）には、各国の準首脳級の人物が乗船していた。

・ガリア宰相＝オルレアン大公シャルル
・アルビオン王太子＝ウェールズ・テューダー
・宗教庁枢機卿＝ヴィットーリオ・セレヴァレ

と名前を挙げれば、その豪華さに驚くだろう。縁起でもないが、今このフネにゲルマニアの砲弾が命中したら、（大きくでは無いが）今後の歴史が変わるだろうな。他にも他国の王族やら、公爵家の当主なんかが多数乗り込んでいるぞ。今このフネが浮いているのは、マース領北東辺りになるだろうか。

「それにしても、ロイヤル・ソヴリン、噂に違わぬ素晴らしい”フネ”ですな、ウェールズ王子？」

「これは、オルレアン大公、お褒めの言葉は嬉しく思いますが、既に老朽艦なのですよ」

如才無く話を始めたのは、やはりこの2人だった。

「何と！　これ程のフネがですかな」

うむ、どうやらお世辞では無かった様だ。オルレアン大公はこの中で最年長なんだが、どうも時代の動きについて行けていない気がする。苦笑気味のアルビオン王子と、表面上はにこやかに見える枢機卿、そして少しだけ驚いた風を装っている私、三者三様の反応だった。（私としては、ジョゼットの父親がこうだと困るのだがな）

「はい、最新式のフネは、完全に別物ですよ」

「ほう、それは是非見てみたいですな。今は、ゲルマニア空軍と戦闘中ですかな？」

「いいえ、ですが、そうですね、もう直ぐ私たちの目の前に現れるんじゃないでしょうか？」

そう言ってウェールズ王子が意味有り気に私の方を見たが、ほぼ同時に最年少枢機卿の方も私の方に視線を向けたのが分かった。ウェールズ王子の視線を追ってオルレアン公が私の方を見たが、うーん、今のオルレアン大公にとってはトリステインはそれ程重要では無いらしいな。（ある程度情報を流しているアルビオン王子と同じ反応が出来る宗教庁枢機卿の方は別の意味で問題があるな）

「そうでした、ラスティン陛下、態々これだけの人間をこんな場所に集めた理由を教えていただけますかな？」

いや、あの愚痴王にはちゃんと理由を言ったぞ。宰相を派遣してくれたのは感謝するが、きちんと理由を説明しておいて欲しいものなんだがな。どうせまた悪巧みをしているうだろうな。

「それは、皆さんに証人になって欲しかったからです」

「ほう、証人ですか、ラスティン陛下？」

「ええ、その通りですよ、枢機卿様？」

「様は不要に願います、ラスティン殿」

「それでは、ヴィットーリオ殿と呼ばせていただきましょう」

「結構です」

ラスティン殿ね、愚痴王め、妙な人脈を開発したらしいな。面倒な事にならないように願っておこう。

「証人と言うのはですね、我が国がゲルマニアの、いえ、ゲルマニア皇帝ナポレオン1世の不当な侵略を受けた事に関してですよ」

「ふっ」

その場の誰かが、失笑を堪えたのが聞こえたが、当然と言えば当然だろうな。ゲルマニアにその意図があることは誰でも知っているし、それに対抗するために色々準備を重ねて来たのだから、何を今更と言った所だろう。

「私が王位に就いている間は、我が国は他国に侵略を行いません」

「それは・・・」

「但し、今回の様に我が国に牙をむいた者がどんな末路を辿るか、それについても証人になっていただこうと思います」

「・・・」

声を大きくして語りかけてみたが、反応はイマイチだった。船上が静まってしまったのはゲルマニアが今後辿るであろう凋落の道を想像しているからなんだろうな。

「ラスティン殿は平和を好むと聞いていましたが、意外と好戦的な人物だったのですな？」

「何をおっしゃいますかな、ヴィットーリオ殿。私ほど平和を愛する人間は居ないと思いますよ」

しかし、以前もこんな会話をした記憶があるな、私も”大人”になって人間が丸くなった筈なんだがな～？

「ははははっ」

という呆れ交じりの笑い声とか

「トリステイン王も意外と冗談をおっしゃるんですな」

なんて反応が返って来るのが悲しい。この中に自国からは戦を仕掛けないと公言出来る国なんて無いだろうに。（ロマリア王国の関係者は基本中立と言う事でこの場には居ないからな）

「まあ、皆さんがどう取ろうと構いませんよ、繰り返しになりますが、我が国から戦を仕掛ける積りはありませんから」

「そうですか、例えばトリステインと同盟関係の国が攻め込まれた

時に、トリステインはどの様に動くのですか、ラスティン殿？」

”ザワッ”

枢機卿殿の余計な一言で、船上が一時的に呻き声で溢れかえってしまった。全く愚痴王並みに嫌な人物である。今の発言に驚きをあらわにしなかったのは、アルビアオン，ガリア，宗教庁の3者だけだった。（ちなみに若い方から数えて4人だけが驚かなかった事になるな）

「さて、それは今回の戦争の結末をご覧になれば分かるのでしょうな、枢機卿殿」

「それは楽しみですね、トリステイン国王陛下」

うーん、空気が良くないな。私を見る周りの人々の目が”ギラギラ”しているのが分かるが、何を今更だろう？

「あれは何だ！」

異様な空気を吹き飛ばすような鋭い声が上がった、アルビオン兵の様だが、この反応だと我が国の”フネ”だろうな。気付けば風向きが変わっている。そして、風に逆らいロイヤル・ソヴリン号に接近してくる”巨大な銀色どんぶり”、いや見たままを表現すると”どんぶり”としか言えないのだ。

その奇妙などんぶりは、強くなる逆風を物ともせずロイヤル・ソヴリン号に接近を続ける。何となく船上に皆が嫌な予感を覚えだした頃、事情を知らないアルビオンの指揮官が、

「緊急退避～」

とか叫んだが、船首はモロにどんぶりの方向だし風下方向にしか進めない通常のフネでは避けようが無かった。

「ぶつかるぞ、伏せろ！」

目の前に迫った銀色どんぶりに誰かがそんな指示を出したが、その時にはどんぶりは見かけ以上に器用に方向を変えて、ピタリとロイヤル・ソヴリン号に横付けした。

「帆も無いのにどうやって進んでいるんだ？」

「何か妙な音がするぞ、あそこだ！」

「オストラント号、聞いた事も無いが本当にフネなのか？」

大体察してくれたと思うが、これが”この世界のコルベール先生”が考え出した”オストラント号”なのだ。多分操船しているのもコルベール先生だと思うが、今のデモンストレーションは予想外だったな。（これを戦争に使う事への反対の意志表明なんだろうか？）

全長というより直径は５０メイル、全高２０メイル、３６０度可動のゼロ戦搭載のエンジンのコピーが上部に８台、底部に４台、総ジュラルミン製というのがスペックになるが、本来輸送用なので固定武装は無しだが、物騒過ぎるので機銃を８門取り付けてある。物理法則に逆らって浮いているのは、”風石”による浮力と姿勢制御力の賜物だったりする。

ちなみにオストラント号の接近（来襲と表現したくなるのは何故だろう？）に驚かなかったのは、またもや年少の３人だった。宰相

殿は普通に驚いていたが、枢機卿殿は少しだけしか驚きを見せなかった。王太子殿は周りを見て苦笑する余裕さえある様だ。エンジン搭載の船はラ・ロシェール＝ロサイス間を普通に運行しているから驚かないだろうな。

風向きに影響を受ける旧来のフネは、今では急を要しない物資の輸送にしか使用されていないのだ、浮いているだけで風石は消費されるから飛行時間は少しでも短い方が良いに決まっている。（風石が有限な以上、仕方が無いんだが、まあ、将来的にはどうなるかな？）

「信号を確認！　東北東の方角！」

おっと、本命の到着の様だ。船上の”証人”の皆さんも貸し出された望遠鏡を一斉に覗き始めた。まだ、オストラント号が気になる者も居たがさすがに本来の役目を思い出した様に遅れて望遠鏡を覗き始めた。

暫くして、全員がゲルマニア艦隊の侵攻を確認し終えた頃、代表するようにガリア宰相が話しかけてきた。

「ガリア代表として、貴国へのゲルマニア軍の侵略の事実を認めましょう」

「はい、感謝いたします、シャルル殿」

「しかし、宣戦布告の使者も出さず、いきなり軍艦を繰り込むなどとさすがは野蛮な国ですな？」

「そうですね、ただ、2度も3度も使えば意味は無いでしょうね」

「それもそうでしたな、私などがこんな所で暢気にしていられるの

も、我が陛下の恩寵の賜物でしてな」

「恩寵ですか？」

「そうです、私は自分がお飾りだと言う事は認識していますが、こうして私を立ててくれる兄には感謝しているのですよ」

恩寵ね、あれの恩寵など遠慮したいと思うな。自国の軍が戦争に参加しているのに、他の国に派遣されるというのは、厄介払いという側面も否定は出来ないだろうな。下手に軍に口を出させたくないとか、功績を挙げさせたくないとか、事情は夫々だろうが。

「随分と謙虚な意見ですね、シャルル殿は軍を率いたいとは思わないのですか？」

「私が兵を？　そうだね、その時は〝死兵〟が必要な時かな」

成る程、使う方も使われる方も自分の特性を理解している訳か、上手く噛み合う筈だな。

「それで、シャルル殿はこの後どうなさるんですか？」

「一応、これでも大公領の領主でね。自領の防衛に専念する事になっているよ」

何故だろうか、どうも話し方が砕けて来ている気がするが？

「おっとこれは失礼しました、ラスティン陛下。どうも、貴方が少年だった頃の事が頭を離れないのですよ」

「そうですか、あの頃は”僕”も世間知らずでしたからね？」

成る程、少年の頃の私と、以前のトリステインを相手にしていた訳か、それは侮られる筈だな。

「そうでしたな、そうだ、王妃殿下のご機嫌はいかがですかな？園遊会の時はお会い出来なかったんですが？」

「はい、お陰で元気にしていますよ。見かけによらず、身体は丈夫なんですよ。私の方が身体は弱いかも知れませんね」

何故か、この兄弟は私の弱みを攻めるのが好きなんだろうか？この大公殿下の場合は悪意が無いだけに性質が悪い。

「そうなのですかな？　いや、女性は確かに強い者ですな、子供をこの世に生み出すという大業をするのですから当然でしょうが」

くっ！　何だ頭に一瞬鋭い痛みが走ったぞ、”子供をこの世に生み出す”という何でもない言葉に反応した？

「陛下、お話中申し訳ありませんが、そろそろ？」

「あ、ああ、それではシャルル殿これで」

「そうですな、始祖のご加護を！」

第百七十七話　ラスティン３１歳（フライング・丼）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百七十八話　ラスティン３１歳（エクスプロージョン？）（前書き）

第百七十八話ＵＰします。

第百七十八話　ラスティン３１歳（エクスプロージョン？）

私はガリア宰相に一礼して、オストラント号へ乗り移ろうとしたんだが、その前にウェールズ王子から声がかけられた。いかんな大事な物と事を忘れる所だったぞ。

「ラスティン陛下、これが例の物です」

「確かに、態々申し訳ありませんね」

「いいえ、アンが持ってきてしまったのには驚きましたが、それはトリステインにあるべき物でしょうからね」

「さすがに”家出姫”の嫁入り道具には向いていないでしょうからね。彼女の方は？」

「はい、もうトリスタニア入りしている筈です」

「アルビオンには感謝しなくてはなりませんね」

「いいえ、トリステインには借りが沢山ありますから、少しでも返しておかないといけません。ですがどうしてニアを？」

「ニア？　ああ、ティファニア姫でしたね。彼女の力と言うか、特性を少し借りたいだけの事です」

「・・・」

ウェールズ王子が私の事を半ば睨むような形で見詰めていたが、

こちらも目を逸らす訳にはいかなかった。戦後王位を継ぐと言う話は内々で聞いていたから、”ジェームズ2世”とは付き合いが長くなる、ここで舐められる訳にはいかないのだ。

「ふぅ、叔母の事と言い、ニアの事と言い、僕は何時になったら貴方に追いつけるのでしょうね？」

「王太子殿下は私の事を誤解している様ですね。シャジャル様がサハラに一時的に帰ったのは、エルフ側の都合でしょう？」

「そうでしょうか？　いえ、ですがニアには手強い”姉”がついていますから、無茶は」

「勿論、ティファニア姫には無茶な要求をしませんよ。とある人物の記憶を消して欲しいだけなのです」

「？　ニアの事を調べていたのならご存知でしょうが、ニアの”忘却”はそれ程便利な物ではありませんよ？」

「でしょうね、多分ハーフエルフの防衛本能みたいな物なんでしょう。ただし、きちんと使いこなせば、恐ろしい力になるのはお分かりですね？」

「ええ、ですが！」

ふむ、この反応を見るとティファニアが虚無の担い手だと言う事は気付いていない様だ。

「過保護に育てるのは、その子にとって良い影響ばかりだとは限らないのですよ？」

過保護に育てると王太子妃の様にとんでもない事をする女性に育ってしまうかも知れないしな。（アンリエッタの場合は過保護かつ、自由奔放に育ってしまったと言うべきなんだろうか？）

「そうですね、ニアは小さい頃身体が弱かったので、叔母もかなり神経質だったのです」

「ですが、今は元気に育ったのでしょう？」

「はい、あんなにも大きく育ったんです！」

うん、何か着目点が微妙にずれている気がするが、彼もまだ若いし、野暮な事は言わないでおこう。アンリエッタを裏切るような事があったら思い知ってもらうがね？

「ゴッホン！　それで、このフネは？」

「あ、一度後方に下がって、皆さんを降ろした後、艦隊に合流します。こちらの空軍を回さなくても良かったのですか？」

「ええ、フネも竜騎士も、アルビオンの為に使いなさい。王子も副指令を任されたのでしょう？」

「はい、ありがとうございます。ですが、偵察に出した者からは、ゲルマニア空軍に竜騎士が予想より多いことが報告されています」

「竜騎士がね、まあ、誤差の内だろうね」

「そうですか。それでは御武運を！」

「そちらこそ、あまり無茶をして、アンリエッタを心配させないようにな」

「はい！」

好青年と言った良い返事だった。いや、それ程年ははなれていないんだが、どうもライルと被るんだよな。そんな事を考えながら、（普通に飛んで）オストラント号に乗り移ったんだが、一瞬だけ宗教庁の最年少枢機卿と目が合った。

その目が、

”貴方がこの戦いをどう治めるか、見せていただきましょうか？”

と語っている様に感じた。だが、その挑発とも取れる視線を見て、私自身は安心感を覚えてしまった。何故かって？　聖エイジス３２世にならなかった”ヴィットーリオ・セレヴァレ”に、ジェリーノさんの遺志（そして意志も）を感じたからだ。遺志の方は、宗教庁＝ブリミル教のあり方がこれからも変わらないだろうという事、そして意志の方は”ヴィットーリオ・セレヴァレ”があくまで傍観者としての立場に居る点だった。

転生者の無意識がこの世界に影響を与えているならば、ジェリーノさん亡き後聖エイジス３２世はヴィットーリオのはずだった。だが、実際にはマザリーニ様が教皇位に就いた訳だ。故人の意志が、他の転生者の無意識に打ち勝っているという状況な訳だ。こう考えれば（考え付いたのはキアラだけどな）、この戦争で本来なら確実に故人になりそうな転生者をどう扱うかが非常に問題になってくる。その対策として、”彼女”を呼び寄せた訳だ、故人の意志は変える

事が出来なくても、生きている人間の意志なら変える事が出来るからな。

＝＝＝

「ガスパード、敵の編成は？」

「そうだな、大体フネが５０隻かな？」

「かなって何だよ！」

「そう言われても、僕らは軍人じゃなく、スティン達の護衛だしね。敢えて言えば、ニルスが通信士と言うのをやってる位だしな」

そうだったな、このオストラント号には、軍人は乗っていないんだった。転生者達と、その護衛、後は操船と防御を任された魔法兵団員と突入部隊の精鋭（４人）しか乗っていないからな。（一応必要になるかも知れないと思い、色々な物資を積んで来た）

何？　特殊部隊？　無論居るぞ、但し別のフネにな。オストラント号１隻でゲルマニア空軍５０隻と戦う気は無い、現在オストラント号と同型のフネが４隻このオストラント号の周りを囲むように飛行中だ。（ちなみに便宜上、オストラント？～？と呼んでいる）

いや、輸送船が５隻じゃ話にならないんだがね、勿論本当の戦力は”戦闘機部隊”の方なんだが、今はまだ待機中だ。

「それもそうだったな、ルイズは？」

「小さな”ミス・ヴァリエール”なら、船首だよ。”始祖の祈祷書

”と睨めっこ中だろ」

「やっぱり読めないか？」

「そりゃあれは誰にも読めないだろ？　白紙なんだから」

「そうでも無いらしいんだがね。ちょっと行って来るから、皆の護衛を頼む」

「ニルス、頼む！」

「はい！」

どうやらガスパード自身は、私の警護をするつもりらしい。まあ良いか、ガスパードなら多少は目を瞑ってくれるだろう。船首（と言ってもこのフネに関しては単に進行方向という意味だが）に向かうとルイズがウンウンと唸っていた。やはりコモン・マジックが使える担い手でも”始祖の祈祷書”だけでは役に立たないんだな。

こんな事をしている間にもゲルマニア艦隊が目視出来る距離まで近付いていた。横一文字にフネとフネの間隔をかなり空けている陣形なのが分かった。成る程、爆発対策（エクスプロージョン）という訳か。半分が犠牲になっても次が無ければそのままトリスタニアまで一直線と言ったところか？　そろそろ頃合の様だ。

「ルイズ！」

「あ！　スティン兄様、いえ、陛下」

「これを嵌めて、もう一度読んでみてくれ」

そう言って、ルイズに先程ウェールズ王子から返却されたばかりの、水のルビーをルイズに渡した。

「これって、”水のルビー”ですよね？」

「ああ、家出娘が持って行ったっきりだったのを返してもらったんだ」

「あの姫様は？」

「元気だそうだよ、ウェールズ王子が即位と同時に結婚式だった筈だから、アルビオンに行ってみると良い。それより今は、”始祖の祈祷書”だ。指輪を嵌めてもう一度読んでごらん」

「はい」

ルイズが、サイズの合わない指輪を嵌めて、もう一度”始祖の祈祷書”に目を落とした。

「読める、読めます、スティン兄様！　・・・、これはエクスプロージョン？」

「ルイズ、詠唱を！」

「はい」

ルイズが爆発（エクスプロージョン）を唱えるのを聞きながら、私はタイミングを図った。詠唱には時間がかかった筈だが・・・、まあいいか、ここでは単なる信号だしな。（気持ち良さそうに呪文を唱えているルイズには悪

いが）

「きゃっ！」

集中が切れて思わず漏らしたルイズの可愛い悲鳴の後に、閃光と轟音が響いた。うむ、成功の様だな。少し後で爆風と言うには少し物足りない風がオストラント号を襲ったが、これ位なら問題は無いようだ。

「スティン兄様、何するんですか！」

先程の悲鳴と、この非難の言葉で妙な事を想像しそうだが、決してルイズのお尻にタッチしたとかでは無いぞ。単に詠唱中のルイズの手から”始祖の祈祷書”をヒョイと取り上げただけだ。

爆煙が晴れると、そこには無傷のゲルマニア艦隊の姿が確認出来た。

「エクスプロージョンなら、あのフネ達を落とせたかも知れないのに！」

「スティン、お前何がやりたいんだ！」

おや、ガスパードまでが非難の声を上げて来たぞ？　事情を説明していなければ、そう思うのが当然か。

「もう一度、”始祖の祈祷書”を読んでくれるかい？　書いてあるのは、爆発（エクスプロージョン）だけかな？」

「えっ？　あれ、これはイリュージョン？」

「ルイズに使って欲しいのは、幻影（イリュージョン）の方だったんだよ」

「どういう事ですか？」

「まあ、それは後で、あれを見てごらん」

第百七十八話　ラスティン３１歳（エクスプロージョン？）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百七十九話　ラスティン３１歳（愉快な竜さん）（前書き）

第百七十九話ＵＰします。

第百七十九話　ラスティン３１歳（愉快な竜さん）

私が指差した、ワーンベル方向からは、１機の飛行機がこちらに向かって来るのが見えた。

「あれは、アキトですか？」

「そう、竜の羽衣、いや、ゼロ戦の方が分かるかな？」

「はい、でも、あの飛行機って”ゼロ戦改”じゃ無いですよね？しかも１機なんて！」

まあ、１機でと言うのは不発のエクスプロージョンと同じで演出上の都合なんだが、コピーゼロ戦を明人青年が選んだ理由はきちんとあるのだ。

「”ゼロ戦改”はね、長距離移動を目的にしているんだよ。機体も一回り大きいし、小回りも効かない。艦隊の護衛の竜騎士達を引っ掻き回すには向いていないんだよ。１機だけな理由は、明人君の要望かな？」

「アキトは余計な殺生はしないなんて言ってましたけど？」

ルイズの台詞は”何を甘い事言ってるんだろ？”とも聞こえるが、その表情が発言の意図を全く隠せていなかった。私の彼の甘さに通じる所は持っているし、”日本人”としては間違っていないと思う。（強い奴と戦いたいなんて考える人間の思考とは思わないがね？）

「正直言えば、明人君と同じ位上手くゼロ戦を扱える人間じゃなけ

れば、あの中には飛び込めないだろう？」

「ゲルマニア艦隊が集結してますから、そうかも。でも、竜が多くないですか？」

うむ、良い指摘だねルイズ君！　通常の艦隊なら５０隻のフネには２０～３０騎程度と聞いていたんだが、何故か目視出来る位に近付いたゲルマニア艦隊（別働隊と呼ぶべきか、本命と呼ぶべきかは微妙だが）には１００騎以上の竜騎士隊が護衛についている様だ。

”プリンス・オブ・ウェールズ”の助言はこの事を指していたのだろう。５０騎位は予想していたが、その更に倍はちょっとな。何処からこれ程の風竜を集めて来たのだろう？　質は兎も角、量でなら”アルビオン竜騎士団”をも凌駕出来そうだ。ウェールズ王子の申し出を受けるべきだっただろうか、あるいは”ヴィンダールヴ”の手助けでも居れば・・・。

ダメだなこんな事を考えていては。目の前で、戦艦からの砲撃や魔法攻撃を巧みに避けながら竜騎士達を挑発している明人青年に顔向け出来ないぞ！　多少の犠牲は覚悟の上で、戦闘機隊に指示を出すか？

「スティン兄様？」

「大丈夫だ、明人君の苦労を無駄にしたりはしないよ」

明人青年が竜騎士の半分位を引き連れて北西方向に離脱して行くのが見えた。決断の時の様だ！（彼程の腕でも、それが限界だった様だ。エクスプロージョン対策と言い、竜騎士とフネの密集で空戦力殺ぐ今の戦術と言い、この戦法を考えたのは、ナポレオン１世なのだろう）

「左後方に機影！」

私が戦闘機部隊の攻撃を命令する前に、こんな警告が発せられた。いきなり機銃による迎撃が無かったのは、その機影？と言うのが、ペガサスでそれに1人の女性が跨っていたからだった。このオストラント号の船員にもクリシャルナの知り合いが多いのが幸いした格好だ。（機銃もクリシャルナには効かないかも知れないが、アイラールには効くだろうから危険な真似には違いが無い）

目敏いクリシャルナが、私目掛けて着艦？してきた。

「ラスティン、もしかして困ってるかしら？」

「ああ、少しだけね」

何故か凄く嬉しそうなクリシャルナの表情が、私の不安を少しずつ解かし去ってくれる気がする。私の視線を追って、クリシャルナがゲルマニア艦隊の方に視線を向けた。

「あの竜騎士さん達が邪魔な訳ね？」

「ああ、なるべくなら殺したくは無いからね」

「そうね、機銃で撃ったら面白そうだものね？　でも今はそれが正解よ！　あ！でもこれ以上は私の口からは言えないんだったわ」

まあ、密集しているんだから、機銃で撃てばかなりの被害が出るんだろうな。そうでなくても、圧倒的とも言える機動力で、ゲルマニア艦隊の”上”を取れればもっと簡単なんだがね。

「クリシャルナ、君は何をしに来たんだ？」（私の精神的には大いに助かったんだが）

「勿論、伝言役よ？　折角”つうしんき？”を手に入れたんだから、ちゃんと使って欲しいんだけど？」

「あっ！？」

しまった、ミコト君の治療の報酬として、改良型の”声を伝える者”を受け取ったんだった。通信距離はかなり短くなるが、相手からの通信が入ると（通信相手が魔力を込めると）もう片方が光って知らせるという優れものなんだ。（いや、旧式に慣れていてすっかり忘れていたのは秘密にしておこう）

「すまない、作戦案を考えていて、失念していたよ」（”作戦指揮”と”演出”を両立するのは面倒なんだ、演出の必要が無ければ、アンセルムに丸投げする所なんだが）

「私に謝るより先にすることがあるんじゃない？」

「そうだな」

私は慌てて、”司令室”に駆け込む事になった。ちなみにルイズは、明人青年の飛び去った先を眺めているだけだった。完全では無いにしろ、役目を果たして引き連れたゲルマニア竜騎士をかなり離れた所まで誘導して、後は速度に物を言わせて帰還するだけなのだから、とりあえずは危機は去ったと思うんだが、それでも心配そうなルイズの表情が気にかかった。

＝＝＝

「テッサ、聞こえるかい？」

「はい、陛下！」

テッサが陛下と呼びかけるからには、私の知らない誰かと一緒なんだろうな。態々このタイミングでと言う事は、彼らとの交渉が成功したのだろう。

「もしかして、韻竜の方々と一緒なのかな？」

「はい、韻竜の長の方と交渉が完了しました。成果は、今からお見せしましょう」

「状況は分かっているのかい？」

「残りの竜騎士を排除すれば良いのでは？」

「見ていたんだ？」

「はい、さっきの”ひこうき”はアキトさんですよね？」

見ていたと言う事は、近くに居ると言う事だな。確かに風竜を射殺しなくて正解だった、もし殺ってしまっていたら、テッサの交渉を無にする所だったかも知れない。（韻竜達が普通の竜にどの程度同族意識を持つかが不明だからな）

「そうか、それなら竜騎士達を艦隊から引き離したい、出来るか？」

「任せてもらおうか、人の長よ」

「失礼ですが？」

「おう、これは礼を失したな。この使節の代表を任されている”〇×ククゥ”という者だ」

「とうさま、それじゃ聞き取れないの？」

「おっとそうだったな、人に聞こえる様に言えば、”メルククゥ”だ、宜しく頼むぞ」

「ちなみに、韻竜の言葉で”烈風”だそうですよ」

「・・・」

テッサが妙な事を教えてくれた。誰かさんの二つ名と同じで、人間に聞き取れる発音をすると妙にファンシーなのが笑えそうだ。しかし、私の想像が間違っていなければ、メルククゥさんやテッサは飛行中に交信をしている筈なんだが、どうやって飛んでいるんだろうか？

「どうかしたかな、人の長よ？」

「その”人の長”というのは出来れば止めて欲しいのですが？」

「どうしてだ、昔は族長とか首長とか呼ばれていた立場に、あ～、そちは居るのだろうに？」

「いえ、それはかなり昔の話では？」

どれだけ昔の話か想像が出来ないな、まあ、エルフ達並みの寿命を持っていて、しかも外界とのあらゆる交流を拒んでいれば、こう言う事態も有り得ないとは言い切れないが。

「そうなのか？　何せ祖父の頃から、用が無ければ里を出ない”しきたり”になっていたからな」

「・・・、それでは、私の事はラスティン殿とお呼び下さい、メルククゥ殿」

「ラスティン様！」

「テッサ、彼らに”陛下”と呼ばれても嬉しくは無いし、多分国と言う物が理解出来ないと思う」

「はい・・・」

ああ、テッサも説明はしたんだな、やはり理解はされなかったのだろうが。

「ではラスティン殿、大層な手土産の礼をしなければなるまいな、じゅるり」

「あ～、とうさまが私の背中でよだれこぼしたの！」

「何を言う、お前だって、あの料理の前ではしたなく！」

「そんな事無いの！　食べ過ぎて飛べなくなるほど間抜けじゃないの！」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

うむ、今、聞いてはいけない事を聞いてしまった気がするが、聞かなかった事にするべきなんだろうな？　何故か、娘（イルククゥ）の背中の上で、満腹感でひっくり返ったままの父（メルククゥ）という愉快な映像が目の前に見えた様に感じた。少しだけ、私の後ろに居るフレンドリーエルフの表情を覗ってみたが、視線に気付いたのか、補足してくれた。

「韻竜の人達と言って良いのかしら？　彼らはね、竜の姿の時には身体に見合った量を食べるんだけど、人の姿の時はやっぱり人並みにしか食べないの。でもね、時々人間の姿で居る事を忘れて思いっきり！食べちゃう時があるんだって」

「ふむ、それで食べ過ぎると、竜の姿に戻れないとかなんだろうね？」

「ええ、お腹が”ぽっこり”だったもの！」

クリシャルナが自分のお腹を使って再現してくれたが、どう見てもオーバーアクションだった。（と思うぞ、それだと三つ子を身ごもって居そうに見えるし・・・）　それだけ、マリユスの料理の腕が素晴らしかったと言う事なのだろうが、永年に渡る沈黙を破らせたのは、理に叶った説得と言う訳では無く、一皿の料理だったと言う訳だ。（胃袋と直接交渉するとか、肉体言語ならぬ調理言語等と言う下らない発想が頭を掠めた）

「ま、まあ、良いでは無いか、そうだ、あの風竜達を何とかすれば良いのだな、人、ラスティン殿？」

「はい、出来れば無用な被害は避けていただきたいのですが？」

「それは構わんが、背中に乗っている人間の命までは保証出来んぞ？」

おっと、”愉快な竜さん”の割には、人を試す様な事をするのだな。伊達に使節とやらの代表になった訳では無いらしいぞ。

第百七十九話　ラスティン３１歳（愉快な竜さん）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

第百八十話　ラスティン３１歳（リサイタル）（前書き）

第百八十話ＵＰします。

第百八十話　ラスティン３１歳（リサイタル）

「彼ら、竜騎士と呼ぶんですが、彼らには死ぬより不名誉な事があるらしいのですよ？」

「ほほぅ、竜に食い殺される事かな？」

物騒な事を嬉しそうな声で言ってくれる物だな。但し、これは出鱈目と言う訳ではなく、良い竜を求めて野性の竜を得ようとする竜騎士希望の若者は少なくないのだ。彼らが生きて帰れば大いなる名誉なのだが、失敗して最悪”餌”になってしまったとしても、竜騎士たちは彼らの行為を”崇高な死”と見做すらしい。（自家繁殖している竜だけでは質も量も不足だというのが、この辺りの事情なんだろう）

「いいえ、自分の竜に振り落とされる事らしいですよ」

「それは分かる話だな、飛んでいる竜が乗っている人間を振り落とせば、命に関わるだろうからな」

うーむ、かなり意識に差がある様だな、別に振り落とされても死ぬとは限らないのだがな。パラシュートも着けずに高く飛べるのは彼らの殆どがメイジだからだ。一部の例外があるが、メイジだからこそ、大空を怖れる事が少ないと言えるのだろう。そう考えれば、パラシュートも無しで単身、戦闘機に乗り込む明人青年など傍から見れば正気とは思えないのだろうな。

「何やら、意見の相違がある様だな？」

「そうですね、ですが」

「そうだな、今は、そちらの要望に答えるとしようか」

愉快な竜さん
メルククゥ殿の聞き取れる言葉はそこまでだった。最初はかすかに唸り声の様な物が耳に入ったが、それが次の瞬間には、竜が耳元で唸り声を上げているレベルになった。慌てて周囲を見渡すと、私の様子がおかしいのに気付いて近寄ってくるガスパードと、驚いた表情のクリシャルナだけが目に入った。

少しずつ音量を上げていく唸り声は既に、耳元で吹き荒れる暴風と言ったレベルに達していたが、どういう仕組みなのか私の意識を刈り取る事は無かった。音が”拷問”になるなんて始めて知ったぞ、このままでは・・・！

『あれ？』

急に異様な不快感を伴う唸り声が消え失せたのだが、同時に思わず出てしまった自分の声も何故か奇妙に響いたのが分かった。

『何だ、これは？』

『ラスティンさん、落ち着いて聞いて下さい。今、ラスティンさんの周囲の音を一時的にシャットアウトしています』

『誰だ？』

妙に間延びして聞こえる声は、聞いた事のある誰の声とも一致しなかった。まだ、朦朧としがちな頭では上手く考えが纏まらなかったが。ただ、私の肩に当てられた手の持ち主が、ロドルフだった事が分かったから多分、彼の使い魔ノトスの力が働いているのだろう

という予想をするのは簡単だった。

『すみません、クリシャルナに言われて急に”ノトス”に命じたので、ラスティンさんの声は外に聞こえません。え？はい、もう少しで”竜の合唱”が終わる筈だそうです』

クリシャルナがロドルフに話し掛け、それをロドルフが私に伝えてくれている様だが、何故他の人間にはあの”唸り声”（あれを歌と評する積りはないぞ！）が聞こえなかったのだろう？　ああ、何だか某ガキ大将がサラウンドでリサイタルを開いている真ん中に立たされたいじめられっ子の気分だ。

暫くそうしていると、不意に周囲の色が鮮明になった気がしたのだが、私はどうやら薄いベールの様な物に覆われていた様で、そのベールが”ノトス”の身体だったらしい。さすがは風の精霊と言った所だろうか、こう言う場合は私の使い魔は手が出せないからな。

（空中の上に、人工物の中ではキュベレーには向かない場所だからな）

「スティン、大丈夫か？」

「ああ、まだ耳がというか脳がジンジンしているが、問題は無いよ。それよりクリシャルナ助かったよ」

「いいえ、まさか貴方に聞こえるとは思わなかったから油断したわ」

「それは良いさ。ロドルフも手間を掛けたね。ノトスもありがとう！」

「面白い物が見えましたから、構いませんよ。ノトスも、”どうい

たしまして”だそうです」

面白い物というのが気になったが、ノトスが私の周りをクルクルと舞ってくれた事が幾分私の心を落ち着かせてくれた。

「それで、ゲルマニアの竜騎士は？」

「ああ、それは僕から。特等席で見ていましたけど、エクスプロージョンは不発だし、明人君のゼロ戦は戦線離脱するしで、どうなるかと思ったんですが、艦隊の護衛の竜が尻に火が付いたみたいに逃げ回るんだから、驚きましたよ」

「どうして私の方を見て笑うんだ、ロドルフ？」

それに、尻に火がつくと言うのは別の意味の、いや、この場合は正しい表現なのかも知れないな。竜騎士の竜があの音波攻撃をくらったなら確かに、落下しそうになるだろうな。もしかして、私が気絶しなかったのも意識を失わない様に調整されていたのかも知れない。

＝＝＝

これは後でクリシャルナに聴いたり実験したりして分かったんだが、”竜の合唱”は韻竜が獲物を狩る時に使う先住魔法の”狩の歌”（オスには混乱、メスには魅了の働きがあるらしい）を同時に”歌う”事で広範囲に効果を及ぼす事が出来る魔法だった。

野生の動物や、同族である普通の竜、そしてエルフなどにも効果があるらしいのだが、動物としては退化してしまった人間には効果が殆ど無い。無論精霊にも効果が無いらしい。（公には出来ないが、

転生者にも影響は無い様だった）

何故、私がモロに影響を受けたかと言えば、”声を伝える者”の特性の問題だった。テッサの手元にあった対になる”声を伝える者”が至近距離から拾って、魔法的な接続を通して魔法の効果を直接私に与えてしまったらしい。

私は自分が他人とは少し違った体質だと言う事を認識していたから、その実験結果を聞いて妙に安心してしまった。ラグドリアン湖に近付くと変になったり、精霊と話せたり、転生者だったりするだけで十分だからな。

＝＝＝

「だって、竜と一緒になって、ラスティンさんまでおかしくなるなんて思わなかったですからね。中々、小説みたいに上手くは行かないんですね？」

「そうだな、何事もそう上手くは行かない物だ」

口ではそう言ったが、私は私の思惑（とキアラ）通りに事が運んでいるのに心の中で喜んでいた。多少醜態を晒してしまった気もするが、この程度なら慣れている。（国王としてはどうかと思うが、個人としてはまあ、打たれ強くなったと思いたい）

「いけないな、竜騎士が散ったのなら、作戦を次に進めなくては」

「ラスティン、大丈夫なの？」

「ああ、後で”竜の合唱”について、教えて欲しいな、クリシャル

ナ？」

「分かったけど、無理は駄目よ？　さっきの部屋に行けば良いの？」

私は、シェイクされた脳のせいで、クリシャルナとガスパードに支えられて、医務室から司令室へと移動した。

先程は紹介出来なかったが、そこは司令室と言うより通信室と言うべき小さな部屋だった。元々はオストラント号の外壁に面した小さめの倉庫なのだが、丁度良い棚と窓があったのでここを司令室に定めたのだった。４～５人も入れば息苦しさを覚えそうだが、ここには、幾つかの”声を伝える者”が設置されていて、それぞれに通信先が明記されている。

第百八十話　ラスティン３１歳（リサイタル）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。
感想も大歓迎いたします。

一見意味が無さそうな、音波攻撃の話ですが、意味はあるのですよ？

新登場人物一覧（前書き）

新登場人物一覧です。

ストックが尽きたのでこれで間に合わせです。

新登場人物一覧

★転生者

＊　アミラ
＊　フリード
＊　リッテン
＊　ヴァレリアン
＊　サンディ
＊　ロドルフ・ド・アンジェ
＊　バベット
＊　ベレニス
＊　クロエ
＊　ルネ

新登場の転生者の方々、何故彼らがこの時期に現れたのかは、もう少しすれば説明出来ると思います。主人公の推測が正しいとは限りませんが。

★トリステイン関連

＊　ボネール伯

ゲルマニアとの無意味な国境線の戦いをさせられる事になったトリステイン貴族。ただし、結果的に領地の財政が苦しくなった事で、逸早く主人公の進める改革に乗る事が出来た。

＊　ドローヌ伯爵
＊　フェリー子爵
＊　グレトリー子爵

ゲルマニアと通じた事で処罰されたり、国外逃亡したトリスティン貴族。フェリー子爵に関しては、”必然”だったりもします。

＊　クリオ・ド・コーヌ

デニス・ド・グラモンの奥様で、エレオノールの親友。結構良い性格の女性ですが、とても強い女性です。義弟のギーシュを使って実験を行ったりしていますが、グラモン家を支える立場に就く事になります。夫が夫だけに一生苦労しますが、決して不幸では無いのでしょう。

＊　ドロテー嬢

デニス（ギーシュ）の女性版ともいう存在。ネタとしての設定なので、出番なし！

＊　マリテ女史

陸軍所属の風メイジ。グラモン元帥の筆頭副官でしたが、”とある事”が原因で陸軍を去り空軍入りした女性仕官。

＊　ギーシュ・ド・グラモン

義姉のクリオに”再教育”された事で、皆に好かれる性格となっています。義姉はちょっとやりすぎたと反省している様です。将来はモンモランシ家に婿入りしたりするかもです？

＊　エリーヌ・ド・グラモン

クリオとデニスの娘。試行錯誤の末、何故か母親そっくりな性格になってしまうのですが、多分語る機会は無いでしょね。

＊　ユーグ

ラ・ヴァリエール公爵家のメイド：ミレーユの夫。”隠れたメイジ”だったが、現時点では魔法兵団入りしてメイジとして活躍中。

この夫婦の存在が、とある事象の鍵となっています。

＊　ノルベール・ラ・ヴァリエール
　エルネストとカトレアの息子。主人公にとっては甥で、優秀な水メイジに育ちますが、シスコンにもなってしまいそうです。

＊　レイモンド
　レーネンベルクの元執事だった故人リッチモンドの息子。青年時代からリリア母様激ラブだったが、現在では会話をする事も畏れ多いとさえ思う様になってしまった。結果として、リリア母様の浮気は有り得なかったのです。
　分かっている方も居るでしょうが、彼のペンダントは超重要なアイテムです。

＊　エヴリーヌ
　レイモンドの娘。育ちが育ちの為、一人称は”オレ”な乙女戦士。ジョゼット”ボクっ子”計画の推進者だったりします。発案：セレナ，推進：エヴァ，裏方：リリアといった感じで！

＊　マナフティー
　レイハムの長老でクリシャルナの祖先になるエルフ。ハルケギニアの歴史の生き証人と言っても良いです。この話が完結してからも生き続けて行きます。

＊　フィルマン
＊　ジェルマン
　エルネストを補助する為にラ・ヴァリエール公爵領に派遣された、高等学校の卒業生の双子。別々だと少し優秀というレベルだが2人一緒だと対抗意識からか倍以上の能力を発揮する。そして時々それが行き過ぎて暴走します。（暴走を止める為にキアラが派遣した監

視役の女性が図らずも表舞台に出て2人の手綱を握る形になりました）

★ロマリア関連

＊　カルラ・セレヴァレ

＊　リアーナ・セレヴァレ

　ヴィットーリオの曾祖母と祖母。体育会系の思考と武闘派と呼ぶに相応しい武力を持った一族の当主になった女性達。どちらも結果的に暗闘に破れて暗殺された。

＊　パオロ

　宗教庁の暗部！異端審問官の長官でした。結構宗教家としては優秀なのですが、真面目な状態が長続きしませんので使い所が難しい人間でした。希望が叶って、始祖の祈祷書の閲覧が許されましたが、やっぱり読めませんでした。替わりにトリステイン王立図書館に篭って色々迷惑をかけた様です。

＊　ステッラリオ・アルファーノ

　復活したロマリア王国の初代国王で本来聖エイジス３１世になる筈だった人物。ロマリア王家に始祖の円鏡が、教皇に炎のルビーが引き継がれて行く事になりました。

★使い魔&その他

＊　クエス

　ライルの使い魔。手先が器用な職人気質の小人さんです。レーネンベルクの人間らしく芸術音痴のライル君には相応しい使い魔です

よ？　ちなみにイザベラの使い魔の名前はリータです。

＊　ノトス

転生者の1人ロドルフの使い魔で、風の精霊。この精霊の働きとエルフの協力で、”風石”が生産出来る様になる筈です。

＊　ミナモト・ミコト

ジョゼットの使い魔として召喚された女性でガリア王妃カグラさんの妹に当たります。カグラさんと接触した事で”ミョズニトニルン”の力が強化されたのですが、これは現在秘密事項となっています。（逆にカグラさんの力が弱まり、額のルーンも目立たなくなっていますよ？）

＊　平賀明人

平賀才人の従兄という設定だったりします。将来は警察官を目指して、剣道に打ち込んでいる少年でしたが、剣道と言う物に限界を感じても居ました。”強い奴と戦いたい”と本気で考える様な、ある意味生真面目な青年です、大戦の功績で領主になりますが、与えられるのはあの土地です。（苦労しますよ？）

＊　シルフィード

原作通りの風韻竜の少女です。まだまだ未熟ですが、頑張るかも知れません。頬が何時も赤いとか赤く無いとか。

＊　デルフリンガー

作られた時にメイジの人格を”移植”されたインテリジェンスソード。現在は、大太刀と言うより野太刀と言えるかも知れません。人為的な事故の為、以前の記憶を殆ど失ってしまいました。現在はルイズの使い魔平賀明人の愛刀となっています。（ある意味凄く不幸な剣生？を歩んでいたりします）

新登場人物一覧（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、どんどん指摘してやってください。

第百八十一話　ラスティン３１歳（トリスティン航空隊）（前書き）

第百八十一話ＵＰします。

第百八十一話　ラスティン３１歳（トリスティン航空隊）

”声を伝える者”は、一個一個に特徴が無く他の物と混ぜると全く見分けが付かないし、箱に入れておくのも使い勝手が悪いのでこうなった訳である。私はその”声を伝える者”の１つに近付いて、直ぐに軽く魔力を込めた。その石の下には”騎士殿”と書かれている。

「やっと出番ですかな、我が君？」

「はい、少し問題が発生しましたが、そちらは解決済みです」

”我が君”と言うのは、騎士殿が私を呼ぶ時の名前なんだが、最初は”我が皇帝（マイン・カイザー）”等と呼ばれて、口にふくんだお茶を吹き出した物だったな。騎士殿にとっての主君は皇帝なのだろうが、ここでは”王”に”皇帝”と呼びかけるのは、決して褒められた行為では無いからな。

結局妥協させて、”我が君”に落ち着いた訳だが、若い女性とかならば兎も角、むさいおっさんからそう呼ばれるのはどうも慣れる事が出来ない。（早く、コルネリウスを皇帝位に就けて押し付けたいと思っている）

「それでは、”トリスティン航空隊”発進しますぞ！」

「騎士殿！　１つ注意を」

「何ですかな、我が君？」

「ゲルマニア艦隊ですが、何か隠し玉を持っているかも知れません。

十分な注意をして下さい」

「ふん、あのキツネの事ですからな、ありそうな話ですな。ですが、その罠食い破って見せましょうぞ！」

「ヴァルター・フォン・クロンベルク！　貴方は今1人の騎士ではなく、戦闘機部隊の隊長だと言う事を忘れていないか？」

「我が君？」

「我が”トリステイン航空隊”から1人の戦死者を出す事も許さん！　出来るな？」

「はっ！　ラスティン殿は相変わらず優しいですな。だが、それでこそ我が君！」

しまった、騎士殿を叱った筈なのに、何故か好感度を上げてしまった気がするぞ？

「艦隊の様子を見てから決める予定でしたが、”ひっとあんどあうぇー”で行きますぞ？」

ヒットアンドアウェーは元々ボクシング用語だったと思うが、一撃離脱戦法（Ｄｉｖｅ　ａｎｄ　Ｚｏｏｍ）と呼ぶのが正しい。文字通り敵機に一撃を加えて直ぐに射程から離脱してしまう戦法だが、動きが遅いフネで攻撃が旧来の大砲や魔法である為、敵艦の真上から機銃による攻撃を行ってそのまま下方に離脱して再度高度を上げて攻撃を繰り返すという殲滅に時間がかかるがまず堅実と言って良い戦法だった。

基本的に真上に攻撃するのは難しいし、フネの真下は完全に死角になっているから被害は殆ど出ないと予想されている。邪魔な竜騎士が”体当たり”でも敢行しない限りは問題が無かった筈だったが、その竜騎士も排除済みとなれば、戦闘機部隊にとっては”フネ”は浮いている大きな的以外の何者でも無い。

先ず、帆を使えなくしてしまえば、本当に浮いている的になるし、後は上手く風石浮遊機関を潰せれば浮いている事さえ出来なくなる筈だ。風石浮遊機関には機関を破壊されても浮力を直ぐには失わないという特性があるから墜落しても死者は殆ど出ないだろう。（機銃に撃たれて運悪く死傷するのは目を瞑るしかあるまい？）

船員のメイジが船体に浮遊（レビテーション）をかければ墜落による怪我人さえ出ないかも知れない。実際空軍のメイジはこの訓練を当然の様に行っているが、船体を持ち上げ続けるのは難しいから、軟着陸が精々だろう。

そうなると、疲れた所を地上に配備した陸軍の兵士や兵団の警備隊に捕まってしまう訳だ。ちなみにメイジがフネを見捨てて自分だけで脱出を図ると、見捨てられたフネの船員から射殺される事もあるそうだぞ。

「航空隊の指揮官は騎士殿です、作戦の決定権もね」

「そうでしたな、”トリステイン航空隊”の活躍をお目に掛けましょう」

「ええ、お任せします」

「皆！　聞いたな？」

「「「おう！」」」

どうやら、戦闘機部隊の皆さんが聞いていた様だ。聞かれて拙い話は無かったが、無理な作戦を押し付ける形になってしまった。彼らの腕を信じて任せるしか、私には出来ないのがもどかしい。

＝＝＝

それから暫くして、トリステインの空に”トリステイン航空隊”の編隊が始めて姿を現した。マース領にかなり進入されたが、まだ人里は遠い。まだ”殲滅”を目的にした火計が使える筈なんだが、その積りは無いようだ。ゲルマニア艦隊の進行に合わせて微速後退していたこちらの5隻も動きを止めて、航空隊の働きを見守る事にした。

火計と言うのは、上空から可燃性の高い油を艦隊に向けて噴霧して、魔法などで着火するという、実に効率が良いが、かなり非道な戦法だった。この時期だから、地上での延焼も有り得る為に使うタイミングが難しい。先程、私が悩んだのも、騎士殿に全権を任せる必要があったのもこの辺りが原因である。

ここで、トリステイン航空隊の現在の主戦力、ゼロ戦改について書いておこう。

全幅：１３．５メイル
全長：１０．０メイル
全高：３．８メイル

大きさとしては、オリジナルのゼロ戦より一回り大きい事になる。

これは、風石”推進”機関を両翼に取り付けて、その制御の為に”複座”にする事が必要だった為だ。機体の大型化に伴って、旋回能力はゼロ戦に劣るが、航続力と最高速度に関して言えば、遥かに勝っている。最高速度は倍近く、航続力で言えば3倍以上という報告を受けている。（最高速度を出すには、風メイジの補助が必要だったが、コパイロットと風石”推進”機関の制御を兼任させる事で解決したそうだ）

あ～、機体色だが察して欲しい、トリステインらしいのだが、私としては少し恥かしい配色になっている。もしかすると、明人青年もこの正義の味方っぽい色を嫌って、”ゼロ戦”の方を選んだのかも知れない。

余談になるが、ゼロ戦改は設計製作を指揮したミネットに言わせると、”失敗作”だそうだ。魔法的なジェット機の開発を目指している発明家の彼女にとってはそうかも知れないな。

風石機関（昔からあった物を”浮遊”、発電や蓄電に関するものを”電気”、そして推力を得るものを”推進”と呼び分ける事に専門家の間ではなっているらしい）の相互干渉という問題に直面してしまったミネットが、ノーラの所に相談に来ていたのでこの辺りの事情を知っているのだが、ノーラ自身がこの話に乗り気では無かったから、解決には時間がかかるかも知れない無い。（ノーラがこの手の話を断るとは思っていなかったがな）

そんな訳で、風石”推進”機関の飛行特性を確かめる為に設計された、ゼロ戦改良型が急遽量産される事になった。ただ、このゼロ戦改は”失敗作”でも飛行機としてみれば十分に使い物になることは事実だった。ロマリアまで親書を運んで日帰りで戻って来るというのは称えられるべき成果だと言えるだろう。

実際、政治的な理由で公に出来ないのが残念な位だが、人目に触れないような場所やかなりの上空を飛んでの飛行の上、宗教庁の枢機卿に親書を渡して、返事を受け取ると言う別の意味で疲れる使命を果たし、そして帰ってきた訳だから、パイロット達の方も褒め称えられるべきなんだが、だれが操縦したのかは、私にも知らされていない。（本当かどうか分からないが、とても人見知りする人物らしい）

＝＝＝

「スティン、始まったみたいだぞ」

色々考えているうちに、航空隊がゲルマニア艦隊に仕掛けた様だ。ただ、今のこのフネは”観覧席”をゲルマニア艦隊に向けている為に、”司令室”の窓からは上手く空戦の場面が見えないのだ。今の報告をしてくれたガスパードが窓に張り付くようにしているから見えるのだった。

「おっ、騎士殿が一当てやる様だぞ。あ！」

「どうした？」

「いや、何と言ったら良いかな、そう、花火だ」

「この昼中にか？」

「うわ、まただ。しかし、騎士殿はやるな～。くっ、今のはやばかったぞ！」

「おい、ガスパード、ちゃんと解説してくれよ」

私の微妙に情けない要求に、通信士役のニルスが控えめに同意する様に頷いたのが見えた。棚（と呼ぶと悲しくなるので、コンソールとでも呼んでおこうか）の前に待機を命令したので、律儀に座っているが、やはり空戦が気になるらしい。結局いい歳をした男が３人窓に張り付いて戦況を眺める事になった。（後で考えてみれば、ロドルフのあの言葉を聞けたのだから、司令室を正面にすれば良かったな）

窓からは、騎士殿の機体（ゼロ戦改の機体の横に数字が書かれていて、それで判別が可能だ）が真正面からゲルマニア艦隊に単機で挑んでいるのが見えた。敵の出方を見るという事と、艦隊の目を引き付ける事が目的なのだろうが、明人青年が挑んだ時とは違い混戦では無いから、艦隊から頻繁に攻撃を受けている。

ただし、そのゲルマニア艦隊の攻撃は騎士殿の腕と、ゼロ戦改の速度に全く付いて行く事が出来ていなかった。目で追うのがやっと標的に砲弾を当てる事は不可能だろうし、かなりの範囲を巻き込む魔法を使うのもまず不可能だろう。呪文を唱えている間に離脱していってしまうし、無理に追えば自艦隊を巻き込みかねない。

唯一脅威になりそうなのは、ガスパードが”花火”と称した榴弾だろう。何かの仕掛けがあるらしく空中で赤い炎を撒き散らしながら広範囲に破片をばら撒いている。着弾を待たない所から、魔法的な仕掛けかもしくは時限信管だと思う。炸薬の方も火薬ではなく、”火石”を利用しているのかも知れないな。

これは、もしかすればナポレオン１世の”アイデア”とエルフの”資材”、そして人間の”技術”を組み合わせて作られた物なのだ

ろうか？　1国の主が考えた物にしては、些か使い勝手が悪い気がするが、戦争にしか使えない様な物を作ってどうする積りなのだろう。（おっと、妙な事を考えている場合ではなかったな）

第百八十一話　ラスティン３１歳（トリスティン航空隊）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、メッセージで、どんどん指摘してやってください。

第百八十二話　ラスティン３１歳（空戦）（前書き）

第百八十二話ＵＰします。

第百八十二話　ラスティン３１歳（空戦）

「あれ？　ゼロ戦改が離れて行きますよ？」

「騎士殿も疲れたんじゃないか？　だが、ゲルマニアの手は読めただろうから、ここからが本番だろうな」

そんな他人事の様な、ガスパードとニルスの会話を聞きながら、私自身も同じ様な事を考えていた。ゲルマニアの別働艦隊の指揮官がまともな人間で良かったな。ゼロ戦で竜騎士を誘き出そうとしていた明人青年にあの榴弾が使われていたらと思うとぞっとする。

「作戦通りの様だな、ニルス、ガスパードもゲルマニア艦隊の上を見てみるんだ」

「おお、２０匹近くいるぞ！」

「隊長！　２０機と数えるらしいですよ？」

「そうなのか？　まあ、良いじゃないか」

男が３人くっついた状態で窓に更に顔をくっつけて、敵艦隊の上空を見上げるのだが、それに合わせたかの様に上空で旋回していたトリステイン航空隊のゼロ戦改の一機が急降下を始め、あっという間に地表すれすれまで降下して直ぐに急上昇して行った。

「機銃は命中しなかったみたいだな」

「あの速度じゃ仕方が無いだろうね、あっ、次が行くみたいだぞ」

ガスパードの指摘通り、次々と急降下攻撃を開始した航空隊の戦闘機も徐々に戦果を挙げ始めた。どうやら訓練よりも高速で急降下をした為に、上手く当てられなかったらしいが、そのお陰でゲルマニア艦隊は為す術もなく外周に位置するフネから脱落して行った。

あるフネはマストを砕かれ推力を失い、あるフネは風石浮遊機関に被弾して徐々に高度を下げて行った。混乱したあるフネは無意味に榴弾をばら撒いたが、命中する筈もなかった。

「ラスティン様、地上に火の手が上がっていますよ」

「他国だと思って、好き勝手にしてくれる物だな。ニルス、マティアスに連絡を、頼む！」

「はい」

火石使用の榴弾が地上の枯れ草にでも燃え移ったのだろう、上空からでも火の手が広がり始めているのが確認出来る。直ぐにニルスがコンソールに向かい、魔法兵団長マティアスとの交信を始め、暫くしてマティアスに繋がった様だった。

「陛下、繋がりました！」

「マティアス、予定外だが兵団の水メイジ達に消火活動を始めさせてくれ！」

「ラスティン様、困りますな、勝手に火を放ってもらっては」

「緊急事態だ、まだ戦闘中だから延焼を食い止める方向で指示を飛ばせ、ついでに頭上にも注意するように伝えろ！」

「はっ！」

やっと事情が伝わったのか、まともな返事が返ってきた。”火計”を使った時の為に消火活動を行う水メイジを各所に配置しておいたのが幸運だったな。今頃、電報や伝令が忙しく動き出しているだろう。風向き等も既に考慮済みだから、現場での混乱は最低限だと思うが、火計を使った時には考慮する必要が無い”怪我人”が多く出るのが予想されるが、兵団の水メイジなら何とかなるだろう。

マティアスに対して更に幾つか指示を出して、再び窓に張り付くと、ゲルマニア艦隊は既に5隻まで数を減らしていたがそれも見ている間に数を減らして行き、遂には艦隊自体が空中から強制排除されてしまった。ここから見る限り、トリステイン航空隊には一機の被害も出なかった様で、ほっとさせられた。

騎士殿と明人青年の指導の賜物だったのだろう等と考えていると、オストラント号に軽い振動が走った。どうやら明人青年が無事帰還したらしいが、あまり広いとは言えないこのフネの甲板に難なく着艦出来るのはさすがだと言える。

予定より早くゲルマニア別働艦隊が片付いた（空中だけはだがね）から、アルビオン艦隊の手助けに行ってもらうとしようか？

「騎士殿、聞こえますか？」

「聞こえますぞ、我が君」

「航空隊はまだ戦えますか？」

「勿論ですぞ！」

「それでは、半数をアルビオン艦隊の援護に向かわせて下さい」

「はっ！」

「もう半数は予定通り運用します」

「了解いたしました。１０機をアルビオン艦隊の援護に向かわせ、５機をオストラントの護衛、残りを一度ワーンベルに帰還させて整備と補給を行わせるのですな？」

「はい、アルビオン艦隊の位置は？」

「開戦場所は分かっております、風下にしか動けないのですから、場所は見当がつきますゆえ」

「結構、その辺りは専門家にお任せしますが」

「が？」

「あまり活躍しない様に指示して下さい」

「我が君？」

「政治的な配慮という物です。ゲルマニアに航空隊の全力を隠していたのと同じですよ」

「了解いたしました！」

返事だけは良かったが、多分私の意図は理解していないだろう。

騎士殿は戦術と戦法には滅法強いが、戦略や政治的駆け引きには向

いていないからな。（その辺りが得意ならば、トリステインに亡命などしないだろうがね）

騎士殿の指示が出たのか、航空隊が3隊に分かれて1隊は西に、もう1隊は東に、残りは北に進路をとった。北へ向かったのは無論偵察の為だぞ。些か編隊飛行が決まらないのは、そちらの訓練が不足しているからだろうが、この辺りはご愛嬌だろう。

「陛下、アキトが戻りました！」

「そうか、明人君ご苦労様！」

「いや、大口を叩いた割には役に立たなくてすまなかった」

「ん？」

開口一番、明人青年が口にしたのは謝罪の言葉だった。半分とは言えゲルマニア艦隊から竜騎士を引き離して、（多分）戦闘継続不可能にしたのは十分な戦果だと思うんだが？　一瞬そう考えたのだが、明人青年の後に入ってきたテッサの姿を見て事情を察してしまった。愉快な竜さん達は意外と勤勉らしいな。（同族？が人間などに使役されて、戦いあうのは不愉快なのだろうか？）

「明人君、その件に関しては、私達の方が謝らなければならないんだ、最悪の展開を避けられただけでも良しとしないか？」

「最悪？」

「そう、ゲルマニアの竜達を虐殺していたら、彼ら、ああ、韻竜と呼ばれる竜の上位種とでも思って欲しいんだが、その韻竜達と密かに交渉を進めていたんだが、それが裏目に出た場合が最悪だろうね」

「そうか・・・」

「そうだよ。テッサも助かったよ」

「いいえ、間に合って良かったです」

「それで、例の韻竜達は？」

「何でも、ゲルマニアの竜達の目を覚まさせると言っていました。ただ、詳細は分かりませんでしたけど」

「そうか、あの唱を聞けば目は覚めると思うんだが、そう言うものでは無いんだな」

少し気になってフレンドリーエルフの表情を見てみると、予想通り眉をしかめていた。予想以上の竜騎士もエルフの支援だった様だ。もしかして韻竜とエルフは仲が悪かったのだろうか？　その考えを読んだ様にクリシャルナがこちらに視線を向けて来た。

「クリシャルナ、もしかして韻竜とエルフと言うのは敵対しているのか？」

「ん～、どうかな？　昔は色々あったらしいけど、少なくとも今は敵対関係には無いわよ？」

それもそうか、敵対しているなら、クリシャルナは韻竜達の所へ行く事に同意はしなかっただろうしな。フレンドリーエルフの事だから、気にせずに飛び込んで行って、仲良くなるとか本気でやりそうではあるが。

ゲルマニアを利用しようとしているエルフの一派の出方が気になるが、これ以上何か仕掛けているだろうか？

「ゲルマニアにエルフは居ると思うかい？」

「そうね、大人のエルフは居ないと断言出来るけど、子供は分からないわね」

「「！！」」

エルフの戦闘力を知っている人間はぎょっとした様だが、少しだけ事情に詳しい私は逆に安心する事が出来た。一人前と認められたエルフには選挙権の様な物が与えられ、今もまだ”サハラ”で、今までに無い大論戦を行っている筈だから、サハラに居なくても怪しまれないのは、”子供”のエルフしか考えられないという事になる。

長命なエルフには子供が極端に少ないのは、クリシャルナも認めている事だし、エルフの直接参戦は殆ど考えなくても良いだろう。最悪1人か2人程度なら、打つ手はある。

「そうか、それは朗報だな」

「ええ、レイハムからの知らせでは”子供”が1人行方不明らしいけど、それは任せてもらうからね？」

「ああ、精々子供同士の喧嘩を楽しんでくれ。編成は予定通りで行くから、クリシャルナは宰相の方だ」

「ええ！」

「すまないけど、妹達の面倒を頼むよ」

「え、うん！」

さすがにエルフ同士で戦うのは気が進まなかったらしいが、”妹達”をと言う台詞が効いたのか、少しだけ表情に明るさが戻った気がする。そのわずかな笑顔を更に深くして、クリシャルナがこんな事を聞いてきた。

「おっきな弟の方は面倒見なくて良いの？」

「ん？　ああ、コルネリウスの事か。そうだな、死なない位の怪我をしてくれると良いんだがな」

「へぇ？　怪我をさせて良いの？」

「ああ、ゲルマニアを牛耳っていた悪の宰相と戦ったんだ、怪我位した方が見栄えが良いんじゃないか？」

「ふふっ、演出効果ってやつね？　無傷でも構わないんでしょうに」

「勿論さ」

「どうだかね～、怪我が簡単に治るからって、無茶はしない事にするわ！　テッサ、あの子達と合流して打ち合わせをしましょう」

「はい、クリシャルナさん！」

クリシャルナとテッサは、ジョゼットとコルネリウスと合流する為にオストラント号の下層に降りて行った。

第百八十二話　ラスティン３１歳（空戦）（後書き）

誤字，脱字，変な表現などありましたら、メッセージで、どんどん指摘してやってください。

第百八十三話　ラスティン３１歳（班分け）（前書き）

第百八十三話ＵＰします。

第百八十三話　ラスティン３１歳（班分け）

先程の発言は冗談では無く、立派な成人男子のコルネリウスが突入部隊（クリシャルナ班とでも呼んでおこうか？）の中で最も戦闘に不向きだからだ。戦闘力で言えば、クリシャルナ＞ジョゼット＞＞テッサ＞コルネリウスになるだろうから、コルネリウスが怪我で済めば全員無事が確定すると言っても良いだろうな。

「あの陛下、いや、ラスティンさん？」

「どうした、明人君？」

「いや、本当に俺とルイズだけでゲルマニア皇帝に挑むのか？」

「アキト、何回も言ったでしょう、精霊が一緒に戦ってくれるって！」

「ルイズ、明人君には見えないし感じられないんだから仕方が無いよ。ただね、土水風の精霊の援護を得られるのは、エルフ並みの幸運だと覚え居ると良いよ」

「エルフか・・・、あのクリシャルナ並みのが居るのかな？」

私の与り知らぬ所でクリシャルナｖｓ明人青年の対戦が行われていたらしいが、明人青年の表情を見れば結果は自ずと知れた。ロドルフ辺りに”一番強い奴は誰だ！”とか聞いたのだろうが、無茶な事をするものだ。（敵方のエルフにいきなり戦いを挑むよりはマシだが）

「その様子だと、歯が立たなかったらしいね？」

「あれは反則だろう！　切りかかっても、全然効かないんだぜ？」

「その反則というのを聞くのは2回目だけど、この世界のルールには反していないんだ、分かるな？」

「ああ、そのルールというのが面倒なんだけどな」

それを言うなら、虚無やその使い魔もかなり面倒なんだがね。

「そのルールの隙を突く為に、君とルイズに精霊を付けるんだけどね」

「どういう意味だ？」

「それは秘密だよ、将来的なことを考えて敢えて教えないんだ。ルイズ、君は杖精霊の声が聞こえるね？」

「はい、兄様！」

「エルネストの使い魔は知っているね？　彼女から指示が出るから”フェリクス”に仲介してもらうんだ」

「はい、やってみます！」

ルイズの杖精霊”フェリクス”は、精霊としてかなり不安定な存在らしく、私の杖精霊でもほとんど存在を感じ取れないのだが、ルイズなら意思疎通が可能だし、他の精霊の存在や”言っている事”を聞き取のも出来るらしい。（この辺りは、精霊の個体差なのか、

契約者との関係なのかは判断が難しい）

ルイズ班は、ルイズと明人青年、そして転生者と契約している3人の精霊（キュベレー，テティス，ノトス）になる。まあ、知らない人間が見ればたった2人だがね。

「まあ、やるしかないんだろうな？」

「ああ、その通りだよ、明人君。君の将来の為でもあるしな」

「ゲルマニア皇帝を討ち取った英雄って言うんだろう。向いていないんだがな～」

「他の貴族を黙らせる方便だと思ってくれ、それに、可能な限り”ゲルマニア皇帝ナポレオン1世”は生け捕りにして欲しいんだ」

「何故だ、前はそんなことは言っていなかったよな？」

「それも秘密だよ、本気で説明出来ない内容なんだ」

転生者の世界に及ぼす影響力なんて、説明が難しいし、証明も出来ない。誤魔化すしかないんだが、一応、理由は用意してある。

「・・・」

「納得いかないか？　そうだな、ナポレオン1世も転生者だという話はしたかな？」

「それで？」

「別に同郷の人間だから助けたいと言う訳じゃないが、彼はもしか

したら私が辿ったかも知れない人生を歩んでいるんだ。もう1人の自分を何とか助けたいと思うのは、変だろうか？」

「・・・」

明人青年の目が私の貫く様に細められたが、”もう一人の自分”という表現は実感出来るから、何とか視線を受け続ける事が出来た。

「分かった、もう1人のラスティンさんを助けると言う話なら協力させてもらうよ」

「無茶を言ってすまないな」

「いいよ、ラスティンさんには色々世話になってるし、そうだ、生け捕りにしてどうする積りなんだ？」

「それはな、別の人生を歩んでもらうんだよ」

「本気か？」

「ああ、私の友人のエルネストととある人物の力を借りればだがね」

「はぁ、その辺りは任せるよ。この世界にはついていけないよ」

「それは慣れだよ、じゃあ、配置についてくれ。ガスパード、2人を搬入口まで案内してくれ。ああ、ロドルフの使い魔を借りていくのを忘れるなよ。他の精霊は後で向かわせるからな」

「分かった」

「はい！」

こんな感じで、2人を何とか送り出す事が出来た。オストラント号は既にゲルマニア領に侵入して、一路首府ヴィンドボナに向かっている。航空隊の哨戒が上手く行っているのか、ゲルマニア竜騎士の襲撃は心配しなくて良い様だ。

＝＝＝

先程の”班分け”には色々と意味があるのだが、分かるだろうか？

☆クリシャルナ班
・参加者
クリシャルナ
コルネリウス
テッサ（シルフィード）
ジョゼット
・目的
ゲルマニア宰相マテウス・フォン・クルークの殺害
コルネリウスの仇討ち
ゲルマニアへのエルフの干渉の証拠を掴む
・裏目的
コルネリウス皇帝即位の為の権威付け

☆ルイズ班
・参加者？
明人青年
ルイズ
テティス
キュベレー

ノトス
・目的
ゲルマニア皇帝ナポレオン1世の生け捕り
・裏目的
明人青年に名声を得させる
転生者のゲルマニアへの影響を排除

まとめるとこんな感じの班分けになるのだが、確実にエルフが護衛に付いていると思われる宰相にはクリシャルナを向かわせるのは当然だが、皇帝の方にも精霊の使い魔たちを当てている。これはクリシャルナにも言っていないが、精霊ならばエルフの先住魔法にも対抗出来ると踏んでいる為の班分けな訳だ。

エルフの”カウンター”を打ち破るには、彼らの魔法の源である精霊の力を攻略するのが確実だろう。”カウンター”がどんな魔法なのかをエルフが教えてくれるとも思えないが、地水風火の四精霊の力で”カウンター”が成立しているのだと私は推測している。根拠は薄いんだが、クリシャルナが最初に私の所を訪ねて来た時に、精霊の事を気にしていたからだ。（マナフティー様の様な熟練の精霊使いには無効かも知れないがな）

エルフが複数居た場合は何とか牽制して皇帝、宰相ともに殺害する方向だったのだが極少数と言う事で皇帝の方は生け捕りを目標にした。ナポレオン1世が死ぬ間際に、ゲルマニアによる世界支配とか妙な妄想を抱いた場合に、この世界に良くない影響を残す事を警戒したのだ。（正直、考えすぎだとも思えるが、ヴィットーリオ・セレヴァレが聖エイジス32世にならなかったという実例もある）

「陛下！　トリスタニアから通信です！　陛下？」

「ああ、ニルス、ちょっと考え事をしていたよ。王城から通信だって？」

「はい、交信を始めます」

「ああ」

距離的な問題で改良型の”声を伝える者”を中継して通信を行いたいと連絡が来たのだが、交信自体はオリジナルの”声を伝える者”で行う事になっている。しかし、トリスタニアからこの時に連絡と言うのは嫌な予感がする。

「陛下、繋がりました」

「ラスティン様、聞こえますか？」

「ああ、キアラか、何があった？」

「はい、ゲルマニア艦隊が王都の哨戒網に引っかかりました。これが本命だと思われます」

「そうか、訓練が役に立ったな。それで？」

「はい、敵はフネが3隻ですが、竜に船を曳かせている様です」

竜を酷使して速度を上げたのか、アルビオンと交戦中の本隊から抜け出して来たと見るが、二段構えとはな。

「魔法衛士隊を迎撃に向かわせますが？」

「ああ、そうしてくれ。そうだ、もしかすると新兵器を持っているかも知れないから注意を促してくれ」

「新兵器ですか？」

簡単に火石を使った榴弾について説明したが、キアラはその心配をして居なさそうだった。

「多分、こちらに向かっているフネは徹底的に軽量化しているでしょう。王城を制圧するのが目的ならば、その新兵器は不向きです。代わりに多くのメイジを乗せていると思います」

「成る程、そうすると昔ながらの戦い方になるという訳だな？」

「はい、特にヒポグリフ隊は張り切っていますからね」

隊長のエロワの顔を思い浮かべたが、そうなると汚名返上の絶好の機会という事だな。しかし、王城にキアラを残しておいたのは正解だった様だ。

「分かった、そちらは任せるよ」

「はい、被害は最小限に抑えて見せます」

キアラは直ぐに指示に向かった様だ、まず王城の方は安心して良いだろう。だが、まだまだ油断は禁物の様だな。

第百八十三話　ラスティン３１歳（班分け）（後書き）

本気でやばいです！

全然、執筆時間が取れません、こんな綱渡りが、最後まで続きそうな予感です。

第百八十四話　ラスティン３１歳（成長？）（前書き）

第百八十四話ＵＰします。

第百八十四話　ラスティン３１歳（成長？）

暫く、ゲルマニアが打って来る手を考えてみたが、今更思いつく筈も無かった。元々私より優れた戦術眼を持っているキアラやアンセルムが見逃した問題の解答を私が簡単に思いつける筈も無いだろうな。

「ラスティン様、お茶は如何ですか？」

「ありがとう、ニルス」

「ゲルマニア、結構頑張りますね？」

「ああ、そうだな。あちらも必死なんだろうな」

そう答えて、金属製のカップに口をつけようとした瞬間、カップの中から妙な物が飛び出してきて、危うくカップを落としそうになった。

「わあ」

「やっと出口が見つかりました！」

そう言って、にょろんとカップから顔を出したのは、エルネストの使い魔のテティスだった。水の精霊が移動する時は、液体を出入口にするのは分かっていたが、目の前に出られるとさすがに驚くよな？

「テティス、何もこんな所から、おっと」

『すみません、出口が見つからなくって』

『出口？　ああ、船の水瓶とか燃料とかは揺れる事を考えて蓋がされているんだった。手間をかけたね？』

『いいえ、こちらこそ手間取ってしまって。それで、エルネスト（マスター）からの伝言です。”ラ・ヴァリエール公爵軍とツェルプストー辺境伯軍は合同で首府ヴィンドボナに進撃を開始した”との事です』

『ああ、予定通りだね。やっぱりエルネストは軍と同行したのか？』

『ええ、領主の務めだそうですよ？』

私が知る限りの殆どの転生者が、今このフネに乗っているのだが、例外はエルネストとナポレオン1世位だろう。エルネストは次期ラ・ヴァリエール公爵として、義父と共に行動すると私の誘いを断って来たのだ。

私としては、エルネストの意志を尊重したかったし、次期ラ・ヴァリエール公爵としてゲルマニアに攻め込むという事自体が彼に”物語”からの逸脱を強制的に意識させるだろうと思う事にした。（代理としてテティスを寄越してもらった訳だが、これはあり難かった）

『エルネストも領主として目覚めた訳だな』

『そうかもしれませんね』

テティスの口調（念話）からは、”仕方ないマスターですね～”といったイメージを伝えてくる。この辺りは、私の知る中で最も人

間らしい精霊ならではの反応だった。（精霊契約も使い魔契約もしていない精霊からこう感じるのは本当に珍しいのだは無いだろうか？）

ラ・ヴァリエール公爵が家督を譲る決断をした以上、エルネスト・ド・ラ・ヴァリエールとしては戦場に立つのが当然と考えたのかも知れないが、どう考えても従軍医としてのエルネストしか想像出来ない。実際の所、自分が戦場に立つ事自体が間違えなのは理解しているが、今回は特別なのだろう。（純軍事的に考えて、私が指揮に向いているなどとはとても言えないしな）

『キュベレーからの伝言は聞いているね？』

『はい、ルイズちゃんの応援ですよね』

『ああ、ただ、直接手を出す事は無いよ。エルフが居たら、そいつの精霊に出来るだけ干渉して欲しいんだ』

『そんな事で言いのですか？』

『ああ、”在るがままに在る”精霊が好んで人を害するとは思わないし、エルネストの使い魔が生き物を傷つけたいと思う程、付き合いが浅い訳じゃないからね』

『さすがに良く分かっているみたいね』

『キュベレーも地上で合流するけど、ノトスの方はまだ色々不安だから気に掛けてくれ。まあ、人間同士の戦いには、人間がけりを付けるべきだろうからな』

『そうね、それじゃあルイズちゃんの所に行ってるわね』

『ああ』

テティスが居るのは非常に有り難い、ルイズには治癒魔法が使えないからな。それ以上に人の機微に通じているのは助かるのだ。キュベレーもテティスとまでは言わないが、杖精霊のニルヴァーナ位は人間社会に通じて欲しい物だ。

「あの、ラスティン様？」

「ああ、すまない、問題ないよ、ニルス」

「精霊ですか？」

「そうだよ、まあ、人間の常識と少し離れた所に居る存在だからな」

「あの、先程、アンセルムさんから連絡がありましたが？」

私はちょっとお取り込み中だった訳だが、アンセルムから、妙だな？　マース領方面は文字通り睨み合いだけで済ませる予定なんだが、何故か嫌な感じだ。

「交信出来るか？」

「はい、繋がったままですが、あちら次第になりますよ？」

「そうか、アンセルム！」

一応呼びかけてみたが、慌しく指示が飛ばされる声だけしか返って来なかった。暫くニルスが呼びかけを続けた結果、何とかアンセ

ルムも？まえる事が出来た。

「何があった？」

「ああ、ちょっとバタバタしていたんだ。国王陛下に報告したします」

「いいから、さっさと報告しろ！」

「陸軍の一部がゲルマニアに戦いを仕掛けたんだよ、まったく！」

「まさか、デニスの指示じゃないだろうな？」

「指揮官殿は、オレと一緒に雑談をしていたよ。はっきり言って、ゲルマニアに対する嫌がらせの意味で、前面に出て寛いでみせたんだがね」

「それで何で、こちらから仕掛ける結果になるんだ？」

ゲルマニア軍が誘き出されたなら分かるんだが？　そんなあからさまな罠にひっかかる者も居ないだろうな。

「いや、向こうさんも同じ様に、わざとらしく陣に隙を作ったりしたんだよな～」

「それに引っかかったのか？　我が陸軍が？」

幾らなんでも、そこまでレベルが低いとは思いたくないんだがな。挑発合戦だけで済んでいれば問題は無かったんだが。

「罠だと分かって、それを食い破る積りだったんだろうよ。何せあの”副官殿”が出世して、一軍の指揮を執っている位だからな」

「そうか・・・」

くっ、そこそこ優秀でかつプライドが高い誰かが、功を焦って突出してしまった訳か。グラモン元帥が直接指揮していればこんな事には成らなかったのだろうが、マース領とラ・ヴァリエール公爵領からの同時侵攻という表向きの作戦を取った為に元帥自身は後方で陸軍全体を統括して貰っているのが、裏目に出たか。

「デニスは止めに出たんだろうな？」

「ああ、”ふっ、僕の優秀さがこんな所で裏目に出るなんてね！”とか言っていたが、急いで兵の引き締めに入ったよ」

「そうか、デニスらしいというか、らしくないというか微妙だが」

以前のデニスなら、何も考えずに増援を送っていたんだろうが、成長した物だ。一部の命令違反者の為に、全軍を不用意な戦いをさせる訳にはいかないのだろう。

「どう致しましょうか、陛下？」

「嫌味な奴だな、軍師殿？　私はこう命令するしか無いな、”責任はとるから、最善を尽くせ！”」

「おう！」

「作戦はあるんだろうな？　可能な」

「可能な限り被害を少なくだろう？」

「ああ」

「河を盾にして油断している所を突く」

兵団が出張っているのだから、土ゴーレム対策は当然なのだが、河を渡るのはかなり難しい筈だ。何故か物理的な攻撃をものともしない土ゴーレムは水と相性が悪いのが以前のゲルマニア侵攻で分かったのだが、どうする積りなのだろうか？（強引に渡すと再生能力を持たせてあるのに、何故か溶け出してしまうのだ）

「今回は、大量の岩が近くにあるからそれで足場を作るんだよ」

「足場？」

「ああ、岩ゴーレムを何体か用意して、河の中で立たせておくんだ。その上を土ゴーレムで渡る訳さ」

「ゴーレムってそんなに器用だったか？」

「ん？　知らないのか？　土木関係の工事で結構器用に働いているだろう？」

「ああ、鉄道の高架化とかに一役買っているのを見たな」

リッテンから報告を受けた事もあったんだが、一部の線路を事情があって高架にしたのだ。その方法が中々豪快で、線路の下の地面を成形（フォーム）で固めて、ゴーレムで固めた地面ごとヨイショと持ち上げ、

持ち上げたゴーレムごと橋脚にしてしまうというある意味画期的な土木工事方法だった。（建築用の重機がそのまま建築資材になる訳だ）

これで家畜や野生動物、時には亜人が原因の事故は減ったらしい。線路の両脇に小さな川が出来て、その水を求めて色々な動物が集まって、それが事故に繋がるという予想外の展開だったからな。

「妙な事が、訓練になるんだな？」

「ああ、だが、ゲルマニアの奴らびびるぞ」

うーむ、少し想像してみたが、日本庭園にある飛び石の様な岩ゴーレムの上をピョンピョン（いやドスドスか？）跳んで河を渡ってくる土ゴーレムというのは中々シュールな情景だと思うぞ？

「ま、まあ、その辺りは任せる。油断はするなよ？」

「誰に向かって言ってしまったのは、兵団を動かすという事は、ライルもイザベラ姫も参戦するという事を意味していたからだが、それ以上は言うべきではないだろうな。他の兵士の親達と同じで、息子達の無事を祈るだけにしておこう。

＝＝＝

兵団のゴーレムの侵攻と合わせて、陸軍も侵攻を始めたそうだが、ここからでは手を出し様も無かった。一応騎士殿と連絡をとって、

使わなかった”火計”をゲルマニアのモーランド辺境伯軍の後方に使う事を指示してみたが被害を出さないようにと言う注文を付けた為に、実行は難しいかも知れない。（消火が上手く行くとは限らないし、戦後を考えればモーランド辺境伯を荒らしたくは無い）

ゼロ戦改で上空を飛び回る事の方が効果的かも知れない程だが、我が国の陸軍の兵士も多分驚くだろうから、効果は疑問だった。いっその事、超低空を高速で飛行させて風圧でとも考えたが、これはパイロットの腕次第なんだよな。

結局マース領方面の戦線は、アンセルムとデニスに任せるしか無い様だ。オストラント船団は順調にゲルマニア国内を飛行して、首府ヴィンドボナも視界に入った事もありこちらに意識を集中する事にするしかなかった。

元々、大量輸送を前提とした為、あまり高速とは言えないオストラントがここまで簡単にゲルマニア国内を飛行出来るのは、２つの理由がある。

１つは、ゼロ戦改による制空権の確保が上手く行っている事で、もう船団の隠密性がものをいっているのだろう。制空権に関しては、国内を哨戒している竜騎士などが居れば面倒になるから当然だが、隠密性と言うのも重要だった。何せ、ゲルマニアの政治的な中心シャルロッテンブルク宮殿を奇襲するんだから当然だが、エンジンの駆動音と、空を飛ぶどんぶりは普通では隠せない。

エンジン音に関しては風メイジが音を上空方向にだけ逃がす事で面倒だが対処は出来るのだが、空飛ぶ大きなどんぶりの滑稽な姿はそうは行かない。ただ、ルイズの幻影（イリュージョン）が使える様になったから夜を待たずにゲルマニアに侵入を開始出来たのだった。船団を幻影（イリュージョン）を隠

し、エンジン音を無くした状態で密かにオストラント船団は首府ヴィンドボナへと向かっていた。
雲がかかったり、夕暮れも近くなったがこの辺りはルイズが上手くカバーしてくれている様だ。この辺りは船体を青く塗っただけでは出来ない芸当だろう。

そして、夕日が沈み、夜の帳が降りる頃、船団はシャルロッテンブルク宮殿上空に到達する事が出来た。そして、そこからがトリステイン空軍特殊部隊の本領が発揮させる場面だった。

通常ならば、竜やその他の空飛ぶ幻獣等を駆る部隊が警備を行っているのだろうが、トリステイン侵攻に全力を挙げた上に、ゼロ戦改に対応する為だろう、シャルロッテンブルク宮殿上空は殆ど警戒が無かった。
マルコさんを中心としたトリステイン空軍特殊部隊が魔法を使って音も無くシャルロッテンブルク宮殿に降下して行ったが、その段階でも宮殿内部では異常を察知していなかっただろう。

そして体感的にはあっという間に、宮殿の大部分を制圧完了したと連絡が入った。その頃になってやっと宮殿外部の警備兵に動きが見られたが、トリステインと比べるとお粗末と言った反応だろうな。普通はいきなり自国の中心がいきなり制圧されるとは思わないだろうから、おかしくも無いんだが、ちゃんと訓練をしておけと助言したくなる。

別に宮殿の警備兵を弁護する訳では無いが、ゲルマニアの現状を考えれば、勝たなければ負けるのだから防御に重点を置けないのは仕方が無いのだろう。本来なら真下に見える宮殿にも多くのメイジが警備に当たっているのだろう。まあ、特殊部隊に奇襲された場合を考えれば、メイジだろうが非メイジだろうが大差は無いのだがね。

特殊部隊と同時に突入を開始した突入2部隊からの連絡が無いのが気になるな、キュベレーと連絡をとってみるべきだろうか？

第百八十四話　ラスティン３１歳（成長？）（後書き）

次回から、また外伝が続きます。

書き出したばかりですが、結構苦戦が予想されます。潜入部隊の２人の女性視点ですが、本当に難しいです！

外伝二十九話　（波乱の幕開け）（前書き）

外伝二十九話ＵＰします。

暫くジョゼット視点で過去から未来へと話が続いていきます。

外伝二十九話　（波乱の幕開け）

えっと、何から話せば良いんだろう？　ボクの名前は、”ジョゼット・ド・レーネンベルク”なんだけど、最近は”タバサ・ド・マーニュ”なんて名乗っているんだ。

レーネンベルクと言えば、トリステインでも有名な公爵領なんだけど、ボクはその公爵様の3番目の子供と言う事になっているんだ。家族の様な家の使用人の皆、2人の兄と幼馴染、そして優しい両親、に囲まれて苦労らしい苦労もしないで小さい頃は暮らしていたんだ。

でもそんな日々も、突然終わりを告げてしまった。ある夜の事だったと思うんだけど、おやすみなさいと言ってベッドに入ったまではごく普通の1日だったかな。でもその日はそれで終わりじゃなかったんだ。

「テッサ、起きてる？」

「みゅあ？」

この寝惚けてネコさんみたいな返事をしたのが、ボクの親友で幼馴染のテッサだよ。もっとちっちゃな頃は別々の部屋で寝ていたんだけど、事情があってその頃は同じ部屋で寝ていたんだ。（別にノリス兄が居なくなって寂しかったとかじゃないよ？）

「なーに、また一緒に寝たいの？　いいよ」

「違うの、何か屋敷が変じゃない？」

「むにゅう？」

「起きてったら！　屋敷の皆がこんな時間にバタバタしてるよ、何かあったのかも」

「ホントだ」

それから暫く、ボク達は身体を寄せ合う様にして眠れない夜を過ごしたんだ。部屋の扉を開けて居間に向かう気になったのは、もう1人の兄（スティン兄）の声が聞こえたからだった。当時のスティン兄は魔法学院を卒業してワーンベルという大きな町の代官をやっていたから、夜中にその声を聞くのは絶対におかしいと思ったのを覚えているよ。

「スティン兄」

「ラスティン様」

「ジョゼット、テッサ、起しちゃったみたいだね？」

「お父様が倒れたって聞いたんだけど」

「その話なら、母上が魔法で治しているし、何よりこのおねえちゃんがお薬をくれたから、心配いらないよ！」

居間に着く前に使用人の1人から凡その話は聞いたんだけど、やっぱり家族から直接話を聞くと安心感が違ったんだよね。そうなると、その場に居る見知らぬ女の人の事が気になった。改めて見ると、可愛いと綺麗を併せ持った不思議な女性だったけど、スティン兄が言う様な頼りになる人間には見えなかったかな？

その女性はエルフでクリシャルナさんという名前だったんだけど、テッサなんかはその特徴的な耳がきになるらしくってしきりに手を伸ばしていたね。ボクはそれを嫌がりもせずに微笑みを浮かべているクリシャルナさんの笑顔に安心感を覚えて直ぐに眠くなったのを覚えているんだけど、その後の記憶が定かじゃないんだよね。

とりあえず翌朝になると、何時も通りベッドで横になっていたんだけど、何故かボクのベッドでテッサとクリシャルナさんまで眠っていたのには驚いたんだよね。（ちょっとだけ気になっていた、クリシャルナさんの耳に触れたけど暖かくて少しだけ幸せな気分になれたんだ）

＝＝＝

それから暫くは、ボクの身の回りに大きな変化が何度か訪れたんだよね。時々しか会えなかったんだけど、やっぱり兄の1人だった”スティン兄”が何故か副王様？になったり、屋敷に寝たっきりのお爺さんが療養していたり、同じ年頃の”甥”が出来たりと、本当に今迄の平穏が嘘の様だった。

でも最大の変化は、ボクが”不幸”になった事だったと思うんだ。別にボクの身の回りにボクを不幸にする原因が在った訳じゃないんだ、そうだね、その不幸はボクの”中”に眠って居たんだと思う。

その不幸が姿を現したのは、ボクが5歳の誕生日を迎える前だったけど、切欠は些細な事だった。ノリス兄が、トリステイン魔法学院と言う所に、勉強の為に入学したと聞いた頃から、少しだけ”魔法”という物に興味があったんだけど、父様も母様も”5歳になったらね”としか答えてくれなかったんだ。

でも、甥のライルが魔法を使うのを羨ましく見ているだけでは満足出来なくなったのは、ライルが治癒魔法と言うのを使ったのを見た瞬間だった。

「ししゃく～、ご機嫌いかがですか～？」

「いかがですか～？」

「おお、良く来たね、２人とも。今日もお話を聞かせてくれるかな？」

「「いいよ～」」

当時のボク達は、普通の貴族の子供達と同じ様に読み書きを習ったりする以外は殆ど遊んでばかりだったね。ただ、ボク達にはきちんと”お仕事”が用意されていたんだ。”病気”起き上がることさえ出来無いお爺ちゃん（ベッケル子爵）の話し相手になる事だったんだけど、それが別の意味を持っていたのは今なら分かるんだよね。

スティン兄が代償行為という難しい言葉を教えてくれたけど、身体の動かない子爵が部屋の中を元気に動き回るボク達を見て心を安らげていたんだね。落ち着き無く動き回るボク達を面倒見るの大変だから、子爵に押し付けたという事は無い筈なんだけど、どうなんだろ？

これを教えてくれた母様は、優しげな微笑を浮かべながら、”子爵様も働いて居ないと”落ち着かないでしょうなんて言っていたから、本当に子爵の病室にボク達を押し込めていたのかも知れないね。

その日も何時も通り、子爵の病室（と言う名前の遊び場）でお話したり、遊んだりしていたんだけど、何時もと違ったのは、何時もは”学校”に行っているライルが一緒に遊んでいた事と、珍しく子

爵の発作が起こった事だったんだ。

「きゃははっ！」

「駄目だよ、テッサ！」

「そんな事を言いながら、シーツを引っ張るジョゼットも同罪だと思うよ？」

「何よ、ちょっと難しい言葉を知ってるからって！」

そんな他愛無いやり取りを、さっきまでニコニコとボク達の事を見ていた子爵の呻き声がかき消してしまった。

「くっ、ぐぅ！」

「ししゃく？」

「子爵様？」

ボクとライルが慌てて、子爵に話しかけたんだけど、子爵は左肩辺りを抱えたまま呻き声をあげるだけだったんだ。

「どうしよう？」

「テッサ、お母様を呼んで来て！」

「はい！」

ライルの意外な鋭い声にテッサが慌てて部屋から出て行ったんだ

けど、当時のボクはオロオロとしているしか出来なかった。一方のライルは杖を持って、呪文を唱え始めていたんだ。中々母様はやって来ないし、ライルの魔法も効果が出なくて、泣きそうになりながら、力無く垂れ下がった子爵の右手を握り締めているだけしか、ボクには出来なかった。

＝＝＝

結局、母様が見つけられなくて、執事のラザールと比較的治療が得意な使用人を連れてテッサが戻って来た時には、本当に身体の力が抜けてしまったのを覚えている。（テッサはその時の事が話題になると、”あの時のジョゼットは涙で顔をクシャクシャにしていたよね”とか言うんだけどそんな事は無いよ？　うん！）

そのベッケル子爵の発作は、大した物じゃなかったんだけど、何故かライルは母様から叱られたんだよね。治癒魔法はきちんと症状を見て使わないと逆効果になるというのが理由だったのだけど、叱られてしょんぼりしているライルを見て、ボクは羨ましくなったんだ。

やり方が拙かったとしても自分の出来るだけの事をしたライル、大人を呼びに行ったテッサ、そして何も出来なかったボクでは、自分だけが仲間外れみたいだと、本当に子供じみた考えだったんだよね。

スティン兄に似ていると良く言われるライルは冷静に判断してテッサに指示を出したし、行動力が跳びぬけているテッサもそれに応えたんだけど、当時のボクには何も出来なかったんだ。正直言ってしまえば、今でもその場になったらあまり役に立つ自信は無いけどね。（私の魔法はそう言った事に向かないから・・・）

「父様～♪」

「ジョゼット、どうしたんだ、こんな所に？」

ボクは翌日、父様が仕事を始めたのを見計らって、父様の執務室を訪れた。魔法を習いたいと普通に頼んでも駄目だと分かっていたんだけど、母様は絶対に許してくれないと感じていた。ただ、父様なら何とかなる気がしたから、こんな面倒な事をしたんだけど、ボクが上手く言葉にならないながら、”ライルの様に”魔法を習いたいと懇願すると、

「そうか、ジョゼットもそんな事を考える様になったんだな」

と呟きながら、ボクの頭を撫でてくれた。そして、戸棚をごそごそと漁り出したんだけど、中々目当ての物が見付からないらしかった。

（父様の為に言っておくと、レーネンベルクで行われている事業が大きくなり過ぎて書類の置き場にも困る状態なだけで、整理が出来ないという訳じゃないんだ）

「あれ、ココに置いた筈なんだが？　ジョゼット、テッサを呼んで来てくれるか？」

「うん」

そう言われて、真面目に勉強をしているテッサの所へ行ったんだけど、何故だか誤魔化された気がしたんだよね。うん、誤解だったんだけど。

「父様、呼んで来たよ」

「公爵様、何か御用でしょうか？」

「うん、2人にはこれを」

父様がボク達に差し出したのは、長細い皮製の箱だったんだ。これを見てもボク達は父様は何がしたいのか分からなかった。ただ、その箱を開けると、一本の杖が入っているのが分かっちゃったんだよね！

「とうさま！」

「公爵様！」

「とりあえずは杖契約から始めるんだな」

ボク達は嬉しさ爆発だったんだけど、何故か父様は不満顔だった。

「父様、ありがとう！」

「ああ、杖のお礼は、ラスティンに言うんだぞ」

「スティン兄に？」

「そうだよ、私も色々伝を探したんだが、良いアリエの木が手に入らなくてな」

父様が不満顔だったのは、そのせいだったんだよね。息子と本気で争ってしまう辺りがちょっと子供っぽいと思ったけど、それを言わなかった当時のボクを褒めてあげたいね。（でも、こう言う子供らしさを失わない所は、少しだけ見習いたいと思うんだ）

その晩、本当に珍しいんだけど父様と母様が喧嘩をした。原因は、多分ボクの事だったんだけど、そこまでボクが魔法を習うのを避けたがる理由が分からなかった。（今思えば、ボクが”その事実”を受け止める事が出来るまで成長するのを待っていたんだ）

外伝三十話　（割れた壺）（前書き）

外伝三十話ＵＰします。

外伝三十話　（割れた壺）

ボクは2週間、テッサは3週間程で、杖契約は終わったんだけど、中々魔法を習う事は出来なかったんだよね。父様が当てにしていたコモン・マジックの教師役の方が、急病で倒れてしまったのが原因だったんだけど、魔法が使える様になると思っていたボク達には、全然苦にならなかったね。（ライルが不用意に魔法を使おうとした場合の危険性実体験を交えて教えてくれたので、無茶をしようとは思わなかった）

運が悪い事に、その教師役の女性が病気を悪化させてそのまま亡くなりになってしまい、結局代役の教師が来る事になった。別にその先生の腕が悪かったという訳じゃ無いんだけど、どういう訳かボクには簡単なライトの呪文さえ発動しなかったんだ。

一緒に呪文を習ったテッサはたった一日で杖の先に明かりを灯したのに、ボクの杖の先には何も、そう何も起こらなかったんだ。どんなに練習しても、別の呪文に切り替えてみても、無茶を承知で”系統魔法”に手を出してみても、何も起こらなかった・・・。

最初は、”大丈夫ですよ”とか、”練習していれば何時かは”とか言っていた先生も、何時しか教師役を辞退してしまっていた。魔法が使えると期待していただけに、その失望感は5歳程度の子供には、受け入れることが出来ない事実だったんだよね。

でも、ボクは決して諦めなかった、ううん、諦めるのが怖かったんだと思う。父様もテッサもライルも、えーっと魔法学院の寮に入っていた筈のノリス兄も（以前は月に一度位で帰省していたんだけど、その頃は屋敷に居る事の方が多かったかな？）、屋敷の人達も不出来なボクを支えてくれていた。そして、だからこそボクは逃げる事が出来なかったんだよね。

皆の期待と支えと言う2つの重荷を背負うには当時のボクは幼過ぎたし、繊細過ぎたんだと思う。テッサは気付いていると思うけど、何度かこっそり屋敷から逃げ出そうと考えた位だったんだ。（ノリス兄は絶対に気付いていないと思うし、そんな事を話したらどんな事になるか想像もしたくは無いよ）

ある晩、とうとう限界だと感じて、屋敷を抜け出す決心をしたんだ。認めたくは無いけど、ボクは世間知らずだったから、何から手を付けたら良いのか見当もつかなかった。その頃のボクより更に幼い頃に親元を離れてこの屋敷へと”戻って”来たテッサの事が羨ましくなってしまった。

ボクは間違った選択だと分かっていながら、テッサに屋敷に戻って来た時の事を聞こうと、今では別の部屋になっているテッサの部屋を訪ねる事にしたんだ。

「どうぞ」

「テッサ、ちょっと話を聞きたい事があるんだけどいいかな?」

結構遅い時間だったけど、弱めのノックの音にも直ぐに返事があったから、遠慮がちにドアを開けたんだけど、そこには思ってもみない人が待っていたんだ。

「かあさま、何で?」

「ジョゼット、そこに座りなさいな」

「はい」

そう言われて、仕方無くテッサの横に腰掛けたんだけど、幾らな

んでも母様の前であの話は出来ないよね？　それに母様はボクが魔法を習う事を反対していたんだし・・・。母様が優しく見詰めているのに何故か不安が増して来たのがおかしかった。最近の母様は私の事を何処かさめた目で見ている事に気付いていたからこその不安だったんだと思う。

「ジョゼット、もう良いんじゃない？」

あの、母様はこの後、”皆、貴方が魔法を使っている事は分かっているんだから”って言おうとしていたらしいんだけど、追い詰められていたボクには、”どうせ貴方には魔法は使えないんだから”と続くように思えちゃったんだよね。

だって、私が父様にも母様にも”似ていない”と言う事は、この屋敷では絶対に言ってはいけない事だったし、テッサやライルがレーネンベルク家に血が繋がっていなくても、ちゃんとレーネンベルクの子供として育てられているのを見てしまうと自分が”レーネンベルクの子供”だという事が信じられなくなったんだ。

何よりボクと同じ青い髪の人なんて見た事がなかったからね。ボクは”私はこの髪のせいで捨てられて、何処かで拾われたんだ”なんて本気で思ったんだよね。（今なら、何となくその意味が分かるんだけど）

ボクはほとんど外出する事が無かった、というより外出する機会を摘み取られていたんだと思うし、数少ない外出の時には髪を母様と同じ銀色に染められていたしね。

「母様なんって大嫌い！　どうせ私がこの家の子じゃ」

当時のボクは幼かったから、言ってはいけない事を言おうとしたんだけど、それを止めてくれたのは黙って話を聞いていたテッサだ

った。

”ペチン”

そんな小さな音がしたのはボクの頬で、それは非力な女の子が泣きそうな顔でボクの頬を叩いた音だったんだ。音の通り全然痛くは無かったよ、頬はね。

「なんでそんな事言うのよ！　リリア様がジョゼットの事を聞きに毎晩私の所に来ているのに！」

「えっ？」

話を詳しく聞こうと思ったんだけど、テッサはそのまま泣き出しちゃって、それにつられてボクもなんだか安心と不安がごちゃ混ぜになって泣き出しちゃったんだ。

「え～ん！」

「うわーん！」

「えっと、私はどうしたら良いのかしらね？」

母様はそんな事を言いながら、泣いている2人の子供を優しく抱しめてくれたんだ。ノリス兄とかは母様の事を悪く言う事があるけど、やっぱり母様は優しい女性だと思うよ。

翌朝落ち着いてから、母様に話を聞くと”貴方の魔法の事を第三者的な立場で見ている事に決めていたの”という事だったんだけど、当時のボクにはさっぱり訳が分からなかったんだ。（うん、今でもあまり理解できていないけどね）

「ジョゼットにはまだ難しかったかしら？　そうね、私がお父さんやノリスみたいなにジョゼットに接したら、貴方は嬉しかった？」

「うっ」

父様は、まあ、兎も角、ノリス兄がもう1人と言うのはちょっと遠慮したかったんだよね。

「そうよね、ジョゼットが魔法を覚えたいと言い出した日に、テオドラと決めたのよ。でも気になったから、テッサに色々話を聞いていたのよ」

「そっか、私の為に。あれ？」

賢くは無いけど、昔からこの手の勘は鋭かったんだよね。この時の母様の話は何処かおかしかったんだ。

「ねえ、ジョゼット、貴方ルイズちゃんを知っているかしら？」

「えっ？　勿論知ってるよ？　エレオノール義姉さんの妹だよね？」

嫌な名前を言われたと思っちゃったんだ。ルイズとは勿論毎年の様に顔を会わせるんだけど、苦手と言うかどうも相性が良くないんだよね。

ボクと同じ様に魔法障害を持っていたのに、よりによってそれをスティン兄がそれを治しちゃったんだからね。嫉妬と言う訳じゃ無いんだけど、納得が行かないと言うのは正直な所だったんだ。杖だってボクより先に貰ったって言うし、系統魔法は駄目でもコモンマジックは普通に使えるだけでも当時のボクには羨ましかったんだ。

それに我が家の人間は毎年夏になると、ラ・ヴァリエール公爵家に行く習慣があるんだけど、ボクが母様の次に好きなガリアからのお客様のオデット様にチヤホヤされるのが特に気に入らないんだ。

オデット様はラ・ヴァリエール公爵家に招待されているんだから、ルイズに気を遣うのは分かるんだけどね！（その後は私だけに色々お土産とか持ってきてくれるんだけどね）

「ラスティンがルイズちゃんに魔法が使えるように助けたという話は知っていわね？」

「うん、ノリス兄がリキセツしていたよ」

「何故、あの子がルイズちゃんの治療を行えたか分かるかしら？」

「うーん？」

「親としては言いたくないけれど、あの子は少し変わっているからだと思うの」

「変わっているって、スティン兄が？」

変な身分になったのは知っているけど、変わっている？

「あの子の真似をして、第三者的な立場で貴方の事を見ていようと思ったんだけどね」

「えーっと？」

「でも駄目ね、貴方を他人の様に見る事なんて出来ないみたいね。ラスティンに期待する事にするわ」

「うん！」

こんな感じで母様も一緒になって魔法を使えるように応援してくれる事になったんだけど、色々訳が分からなくてその日の魔法の練習は自分でも身が入っていないのは分かっていたんだ。（後で考えれば、単にプレッシャーが増しただけだったし、何か誤魔化された気もしたよ？）

あんまり集中出来ないまま、魔法の練習をしていたらノリス兄に叱られた。長くてくどいノリス兄の説教は何時も通り、聞き流したんだけど午後からの練習もやっぱり身が入っていなかったんだ。途中からライルも加わって3人で練習を続けていたんだけど、どうしても集中出来なかったんだ。

「あれ？」

「ジョゼット！」

ライルの気のぬけた様な声と、ノリス兄の鋭い叱責の声がほぼ同時に聞こえたんだけど、自分では何が起こったか分かっていなかったんだ。ただ、ライルも魔法それも簡単なレビテーションなんかを失敗する事もあるんだな何て思っていた。

「そうか、そう言う事か！」

「ノリスにい？」

「ライル、テッサでも良いが、少しこの壷を持ち上げていてくれ」

「はい」

テッサが、すかさずレビテーションで壷を持ち上げたんだけど、ボクにはノリス兄が何をやりたいのか分からなかったんだ。ノリス兄の次の指示は、もっと意味が分からなかった。

「ジョゼット、テッサが浮かせている壷に、魔法をかけて見てくれ」

「えっ、でも」

「大丈夫だ、やってごらん」

何時もは頼りないのにこんな時だけ、頼りがいがありそうに見えるのは反則だと思ったかな？　でも、２つの魔法を同じ場所に使うのはメイジにとっての基本の筈なんだ。（何が起こるか分からないというのが理由らしいんだけど、色んな教師役の人達が口を揃えて言うんだから、危険なんだろうね）

「レビテーション」

”パリン”

ボクが壷に魔法をかけると、さっきまで浮いていた壷が浮力を失って床に落ちて割れてしまったんだ。その時のボクは凄く焦っちゃったんだ、だって、その壷は誰かの贈り物で結構高価だって聞いていたからね。ライルやテッサにとっては精神力を鍛える為に態々高い壷を使っていたんだけどね。

「あわわ、割れちゃった！　どうしよう？」

「もう一回だ、今度はライルだ」

そして、２つ目の壺もお亡くなりになりました。ノリス兄はうんうんといった感じで頷いているだけだったんだ。ノリス兄って時々謎なんだよね？

「しかし、これは困ったな・・・。やりたくは無いが兄上の知恵を借りるか？」

そんな事を言いながら、それでも割れてしまった壺を錬金で直してしまう辺りはさすがだけど、何となく形が・・・。（うん、見なかった事にしようと悪い事を考えたのはボクだったね）

外伝三十一話　（師匠！）（前書き）

外伝三十一話ＵＰします。

分量が少ないです、現状ではこれが限界かも。

外伝三十一話　（師匠！）

「テッサ、気付いていた？」

「うん、ライルも？」

「２人とも何の話？」

「ジョゼットは、分からなかった？」

「えっ？　同じ魔法が使われた場合には”打ち消しあう”事があるって本当なんだね」

２つの魔法を同じ場所に使うと、爆発するとか、制御が出来なくなるとか怖い話を聞かされたけど、意外と怖くない物だった。確かに２人分の魔力が無駄になるんだから勿体無いよね？

「うーん、テッサは？」

「どうだろう、打ち消しあうと言うより、かき消された感じかな？」

「そうだね、僕は魔法が食べられたと思う」

「ねえ、２人とも何の話をしてるの！」

「そう言われても、感覚的な物だから、説明し辛いんだ」

「ねえ、ジョゼットはジョゼットが魔法を使う時に、ノリス様がずっとディテクト・マジックを使っていたのを知ってた？」

「え？」

「ジョゼットの事だから、じーっと見られて落ち着かないな、とか思ってたんでしょう？」

「うん、ちょっと気持ち悪いなって思ってた」

「そんな事言ったら、ノリス様」

「泣いちゃうね」

「泣いちゃうよ」

「泣いちゃうだろうね」

うん、ボク達がノリス兄に持っているイメージは一致していたみたいだね。その頃のボクにさえ、強くもないお酒を飲んで父様に管を巻いている状況が想像出来ちゃったんだよね。でも、ボクが魔法の練習をしている最中ずっとディテクト・マジックを使いっぱなしにしているのがどれだけ大変な事か当時のボクには理解出来なかったんだ。

「もしかしたら、ジョゼットが魔法を使うと、他のメイジの魔法を妨害出来るのかも知れないね」

「妨害？」

「うん、だけど・・・」

ライルが言い難そうに言葉を濁したんだけど、ボクにはそれが何を意味しているか分からなかった。他のメイジが魔法を使うのを妨

害出来ても、それが何にもならないとしか感じられなかったんだよね。

結局その日の魔法の練習はそれで終わってしまったんだけど、夕食の時間になってもノリス兄は部屋に篭ったままだったんだ。翌日も、展開は昨日と同じだったんだ、テッサが色々なコモンマジックをかけて、それをボクが壊すという感じだった。

そして、その翌朝、ボクが起きた頃にはノリス兄はスティン兄に会いに行く問いって屋敷を出て行ってしまっていた。執事のラザールが言うにはあの日から一睡もしていなかったらしいよ？

＝＝＝

一週間程で、ノリス兄は屋敷に帰って来たんだけど、その後にボクにとっての始めての”師匠”がやって来た。

「ジョゼットちゃん、久しぶりね？」

「えーっと？」

「あらら、やっぱり覚えていないのね、それなら改めて自己紹介するわ。といっても身分としては、ブランブル男爵家の3女でしかないし、ああ、魔法兵団の警備隊の隊員と思ってくれれば良いわよ？」

「魔法兵団の話は知っています、でも、えっと」

「セレナ、セレナ・ド・ブランブルというのが私の名前なの」

「そのセレナさんがどうして私に武術を教えてくれるんですか？」

「弟さん、いいえ、貴女にとってはお兄様から話は聞いていないのかしら？」

ノリス兄が王都から戻ってきて暫く経つけど、何も話してくれないんだよね。

「いいえ、ノリスお兄様からは、あのもしかしてセレナさんはラスティンお兄様のお知り合いですか？」

「ええ、スティンの魔法学院の同級生だったの。一応この屋敷にも招待された事はあるのよ、ジョゼットちゃんには直接会わなかったと思うけど、ちらっと見かけて事はあったの」

「そうでしたか、スティン兄の」

「それで、副王殿下から直接、貴女を鍛えて欲しいと頼まれた訳なのよ。貴女を、”メイジ殺し”にしたいらしいわよ？」

「メイジ殺し？」

「ミス・ブランブルちょっと待ってくれ！」

そこまで聞いた時に、扉からノリス兄が入ってきて、セレナ師匠を部屋から連れ出していってしまったんだ。そして、何故かボクの隣にはテッサがいつの間にか座っていたんだよね。セレナ師匠とは2人っきりで話をするって言ったはずなんだけどね。

「テッサ、メイジ殺しって何だろう？」

「えっとね、確か、平民の戦士とかが、戦でメイジを殺すとそう名

乗る事があるって聞いた事があるけど・・・」

「そうなんだ・・・、スティン兄は私がそれに向いていると思ったのかな？」

「・・・、多分違うんじゃないかな？　ノリス様もそう思ったから、ジョゼットに話さなかったんだと思うよ」

「うん、そうだね・・・」

そんな感じで、話が暫く途切れたんだけど、出て行ったばかりのノリス兄とセレナ師匠が戻ってきて中庭に連れ出されたんだ。そして始まったのは、”決闘”だった、えーっと結果だけ言えばセレナ師匠の圧勝だったよ？（メイジとしての腕というなら兎も角、近距離での戦闘に関しては技術も経験もセレナ師匠の方が数段上だったんだ）

＝＝＝

「セレナさん、いえ、師匠と呼ばせて下さい！」

「あの、うん、いいわよ」

まさに師匠と呼びたくなる様なセレナ師匠の体術だったんだ、小柄（ノリス兄と比べてだよ？）な女性がスクエアメイジのノリス兄を手玉に取るのを見たんだから、こんな事を言ったのは仕方が無いよね？

「ジョゼットちゃん、いいえ、ジョゼット。私は貴女を強くする為に来たの」

「強くですか？」

「ええ、当面は護身術が中心になるけどね」

「あの、師匠、どうして私は強くならなくちゃいけないんでしょうか？」

ボクがさっきから疑問に思っていた事を尋ねてみたんだけど、セレナ師匠は笑顔のまま固まっちゃったんだ。それから色々考えていたみたいなんだけど、結局こんな話を聞かせてくれたよ。

「ジョゼット、このレーネンベルクが儲かっているのは分かっているわね？」

「はい、お父様は忙しそうにしていますし」

「うーん、忙しいから順調とは限らないんだけどね、まあいいわ。貴族の娘と言うのはね、普通外に出たりしないのは知っている？」

比較対象が無かったその頃は、あの”ルイズ”が母親に連れられて色々な所を旅したと聞いていたので、ちょっと納得出来なかったかな？

「そうなんですか？」

「そうよ、貴族の娘って”売り物”になるからね？　特にジョゼットみたいに可愛い娘はね」

「？」

意味は分からなかったけど、テッサがしきりに頷いていたから事実だと思っておく事にしたんだ。

「分からないなら、それで良いけど、貴女が誘拐されて身代金が要求されたらとんでもない金額になるわよ？」

「？？？」

「全く、完全にお嬢様よね？　いいわ、とりあえず自分自身を守れる様になりなさい」

「はい！　あの、もしかして師匠も”ゆうかい”されちゃったんですか？」

「・・・、ええ、何時か機会があったら、ジョゼットには話してあげるわね」

結局、セレナ師匠からその誘拐の顛末を聞くことは出来なかったけど、セレナ師匠はメイジとしては異常で、魔法を殆ど使わないし、メイジを（そして魔法を）知る為に色々苦労をして来た事は分かった。それは、今のボクの戦い方の基本になっていると思っているんだ。

「話は終わったか？　ミス・ブランブル、ちょっと顔を貸してくれ！」

「良いけど？」

そう言って、今まで一言も口を出さなかったノリス兄に連れられ

てセレナ師匠が屋敷を出て行ってしまった。暫くして、付近で大きな地響きがしたけど、ノリス兄は時々近くの広場で”腕が鈍らない”様に魔法の練習をするから別に珍しい事じゃなかった。

テッサと事情を聞いたライルは大人気無いねとか言っていたよ？

ただ、その後、何故かセレナ師匠がノリス兄に懐いた？のだけは良く分かったんだよね。

外伝三十二話　（メイジ殺しへの道）（前書き）

外伝三十二話ＵＰします。

外伝三十二話　（メイジ殺しへの道）

翌日から始まったセレナ師匠の修行は、ライルに言わせると運動能力測定という内容だったんだ。走ったり、跳んだり、木剣を振ったり、小石を投げたりと、基礎体力を測る事ばかりだった。分かってはいたんだけど、散々な結果だったんだ。瞬発力は兎も角、体力的にも体格的にも非力な子供そのものだったから。（テッサや、最近大きくなってきたライルが羨ましいく思えたね）

それでも、セレナ師匠は不出来な弟子の情けない様子を見ても失望を顕にしたりはしなかったんだ。今思うと、何だか懐かしそうな表情を浮かべて居たかも知れない。

「師匠、あの、ごめんなさい」

「どうしたの、謝られる様な事されたかしら？」

「いいえ、でも、多分これからきっと色々迷惑かけちゃいますよね」

「ああ、そう言う事？　別に迷惑なんて思わないわよ、立派なお屋敷に住んで、美味しい食事をして、少しだけ働いて、給料をもらえるんだから、これ程良い職場は無いと言っても良いんじゃないかしら？」

「そうなんですか？」

「ええ。そうそう、私の事は義姉だと思ってくれても良いわよ？」

「ぶっ！？」

何故か修行を監視していたノリス兄が何故かいきなり咽たけど、未だに意味が分からないんだよね？　（普通にスティン兄の友人なんだから、姉の様に慕って欲しいとしか聞こえなかったよ？）

「うん、師匠、これからもお願いね」

「ええ、大体分かったから明日からは厳しく行くわよ」

そう言ったセレナ師匠の言葉は嘘じゃなかったんだよね。翌日からの修行は本当に厳しかったんだ。ただ、ボクの限界は超えなかったと思う。

最初の頃は、ボクの弱点とも言える持久力の強化の為に屋敷の周りをグルグルと走らされたんだ。（庭師のお爺さんが、”らんにんぐだな、がんばれよ”とか言ってたけど、らんにんぐって何？）

後は、身体を動かす事を目的とした運動を色々したんだ。以前は絶対に許してもらえなかった木登りもこの頃覚えたかな？　障害物だらけの荒地を全力で走らされた事もあったし、縄梯子を使って屋敷の屋根に登ったりもした。泳ぐのを覚えたのもこの頃だったな～。

そう言えば、この頃からノリス兄とセレナ師匠は結構対立する事が多かった気がする。セレナ師匠が何か新しい修行方法を思い付く度に、色々と注文を付けていたんだ。それでも、セレナ師匠は自分の考えを殆ど変えなかったし、ノリス兄は文句を言いながらもボクが怪我をすると直ぐに治療してくれたんだ。

ノリス兄は昔から過保護だったけど、実はテッサもボクに対して過保護だったよ。セレナ師匠がこっそり教えてくれたんだけど、テッサもノリス兄と同じ位の頻度でセレナ師匠の”修行”に文句を言っていたらしい。ただ、テッサの文句はボクと一緒に自分でも実行している物だから、セレナ師匠も受け入れるべきは受け入れたんだ

よ？

この頃の修行は、大変だったけど、遊びの延長という感じだったからそれなりに面白かった。ボクも自分の身体が思う通りに動くのがとても嬉しかったんだよね。

一方の、ボクの魔法の方なんだけど、こちらはあまり進展しなかったんだ。あまり嬉しくは無かったんだけど、ボクの魔力量は普通じゃ無かった。でもただそれだけだったんだ、大きな魔力を持っていてもそれが他のメイジの魔法を打ち消す事にしか使えないんじゃ、役に立つとは言えないよね？

その自慢の魔力量にしたって、ノリス兄の様なスクエアメイジの魔法を完全には相殺出来ないし、ドットスペルでも相殺し続ければ、魔力切れになるのはボクの方が早かったんだ。ノリス兄が言うには、ノリス兄の魔力量が普通よりかなり多いのと、ボクの魔法が効率的に発動していないのがこの結果を招いているんだって。

数年して、”魔法”の方は殆ど進歩しなかったけど、武術の方は何とか身を守れる程度にはなったんだ。基本は木剣だけど、ナイフや短剣、そして飛び道具としてスリングや短弓を何とか扱える様にまでなった。

例によってセレナ師匠の発案でボク達は亜人退治のに参加したのは、確かスティン兄の結婚式の1月前だったかな？　あの時は戦場の雰囲気にのまれて殆ど役に立たなかったんだよね。魔法がまともに使えないから、後方で覚えてばかりの短弓で援護していたんだけど、ドットスペルだったとしても普通に魔法を使った方が明らかに威力があるんだよね。

ボクの矢はコボルドなら刺さって痛がるんだけど、オーク鬼になると刺さるだけで痛がりもしないし、オグル鬼位になると刺さりもしないんだよね。

本当に自分の非力さが嫌になった結果だったんだけど、せめて身体強化の呪文だけでもと思うのは仕方が無いと思う。守られるだけの自分を卒業出来る日は本当に来るのか、まるで暗闇の中を彷徨っている感じだったんだ。

＝＝＝

スティン兄の結婚式には一応参加したけど、出来るだけ目立たない様にする様に言われたのには少し傷付いたけど、ボク達の様な子供の参列者は殆ど居なかったから、”大人しくしていろ”と言われたと思う事にしたんだ。折角の外出の機会だし楽しみたかったしね。新しく義姉になったラ・ヴァリエール公爵家の２人の花嫁姿は、ボクには眩しすぎたんだ。

ボクは自分が多くの人に祝福されて愛する男性と結婚式を挙げるという自分がどうしても想像出来ないんだ。というか、まともに結婚出来るかさえ疑問なんだよね。メイジの出来損ないを喜んで嫁にする貴族の家も無いだろうし、何より、あの”２人”が納得する相手なんて存在するとは思えないんだよね？（テッサは兎も角、ノリス兄はどんな立派な人間を連れて来ても、絶対何か理由をつけて反対すると思うよ）

「綺麗だったね」

「うん・・・」

テッサが珍しくボクの反応を見逃したんだけど、この時きっとテッサは自分の花嫁姿を想像していたんだろうね。テッサの横にどんな男性が立っているかは、大体想像出来るんだけど、ちょっとね？

＝＝＝

久々の王都はそれなりに楽しめたけど、お祭りはやっぱり直ぐに終わってしまう物なんだよね。結局、以前と変わらない修行の日々が再開されたんだ。修行の最中は兎も角、夜1人で眠ろうとするとどうしても、本当にこのままで良いのかなんてどうしようも無い事を考えたりもしちゃった。

そんな中、どういう風の吹き回しなのかスティン兄がひょっこり屋敷に帰ってきたんだ。スティン兄は、何とかと言うマジックアイテムを使って良く父様と話をしているんだけど、直接会う機会はそれ程多くなかったから、先日の結婚式から立て続けというのはちょっとおかしな気がした。

「スティン兄、今回は何をしに来たの？」

「そうだね、勿論仕事だよ。この国の将来の為のね」

「やっぱり、副王様のお仕事って忙しい？」

「うーん、どうかな。忙しいと言えば忙しいけど、何をやっているかと聞かれると困るんだよね」

「ふーん」

「ジョゼットの方こそ修行の調子はどうだい？」

「うーん、自分では良く分からないの、セレナさんに聞いた方が良いかも」

「そうか・・・」

自分の武術の腕がどの程度か全然分からなかったし、魔法の方はね・・・。翌日スティン兄もボクの修行を見ていたけど、渋い表情だったんだ。

外伝三十三話　（覚醒）（前書き）

外伝三十三話ＵＰします。

外伝三十三話　（覚醒）

「今日から、また魔法に重点を置いた修行を再開するわよ！」

「はい、でもどうしてですか？」

「スティンからちょっと注文が入ったから、聞いているでしょう？」

「はい・・・」

「もう一度基礎から始めるわ、系統魔法の事は一度忘れる事！」

「はい！」

ボクが系統魔法を習っていたのは、勿論自分で使う為じゃなくて、呪文を知っていると相殺しやすい事が分かっていたからだったんだ。呪文を相殺する実験は主にノリス兄に対してやったんだけど、呪文を相殺されるというのはメイジにとってあまり気持ちの良いものじゃないらしいんだ。

風系統ならテッサ、土系統ならライルでも練習相手になってくれるんだけど、それ以外はノリス兄を相手にするしかないんだよね。屋敷の使用人の皆も魔法は使えるけど種類や呪文の巧みさではやっぱりノリス兄の方が上手と言った感じだし、彼らにはちゃんと仕事がある。

勿論ノリス兄にも、父様の手伝いという仕事があるんだけど、僕が魔法や武術の修行をしている以外の時間で片付けてしまっていたんだよね。父様に言わせると、”一個人とすればラスティンより、ノリスの方が優秀かもしれないな。ノリスなら堅実にレーネンベル

クを統治するだろうな”という事だった。（副王様って優秀じゃないといけないようなきがするんだけど、これって普通の考え方だよね？）

今更コモンマジックを習い直しても、いきなりコモンマジックが使えるようになったりはしなかったよ。そう、スティン兄があれを持って来てくれるまではね。

＝＝＝

我が家の男性陣の名誉の為に伏せておくけど、スティン兄が持って来た”拳銃”という物はどうもレーネンベルクの男性と相性が悪いみたいだった。逆に拳銃を嫌った母様以外は、意外と拳銃を上手く使えたのが不思議だったんだ。

いいや、そこは重要じゃないよね？　そう、小さな子供でも殺傷力を持った武器が扱えるというのが、その頃のボクには重要だったんだ。ボクにそれが向いているかは兎も角、亜人狩りで戦力になれるというのは大きかったし、これで誰かを守れると考えると、今までの自分から抜け出せる様な気がしたんだよね。

「テッサ、またお願い」

「うん、でも毎回、固定化をかけるのは面倒だね？」

「うん、そうだね・・・」

「ジョゼット、貴方何時まで、テッサやライルに甘えているの？」

「師匠？」

「セリナさん！」

「テッサ、黙っていなさい！　ジョゼット、貴方には今、コモンマジックを使う必要があるのよ、分かっている？」

「はい・・・」

「貴方が拳銃を持って、今日で5日、その間貴方が自分でそれに固定化をかけようとしたのは何回だった？」

「・・・」

「そう、たったの3回ね？　私は貴方達に自分で使う武器は自分でちゃんと扱えるようにしなさいと教えたわよね？」

「はい・・・」

セレナ師匠は、今の言葉通り剣やナイフの使い方は、勿論、その研ぎ方や弓の弦の張り方、緊急用に矢の作り方まで教えてくれていたんだ。それなのに、ボクときたら、新しい玩具に夢中で基本を疎かにしていたんだよね。

「今がその時よ、ジョゼット？」

「はい！」

その時のボクは、その呪文が失敗したら2度と拳銃を持たないと決心して、今までに無い集中力でその呪文を唱えたんだ。今までは何処かで逃げ道を用意していた気がする、”最初だから仕方が無い

”、”今度こそは大丈夫”、”皆の期待が重い”、そんな逃げ道の事を一切考えずに、ボクは唱えなれた呪文を口にしたんだ。

「”永遠にその姿を保て、固定化（フィックス）”！」

そして、ボクはその時になって自分が取り返しがつかない失敗をしている事に気付いちゃったんだ。そう、手応えはあったんだよ、今までに感じたことが無い程にね。でも、固定化の呪文を選んだのは大失敗だったと思う。

だって、固定化はその効果が分かり難いんだ。それに固定化をかけたのが結構丈夫な拳銃なんだよ？テッサもセレナイ師匠も、期待に満ちた目で見ていたんだけど、呪文が成功したって証明する事が出来ないんだ。（普通のメイジなら成功したって感覚的に分かるんだろうけど、ボクにはあれがそうだとは言い切れなかったんだ）

その時、ゆっくり屋敷のドアが開いてノリス兄が姿を現したんだけど、その顔は涙でグショグショになっていたんだ。

「ジョ～ゼ～ット～」

そして、妙に間延びした声をあげながら、僕の方に駆け寄って来ようとしたんだけど、途中でテッサの足払いと、セレナ師匠の拳の連続攻撃で迎撃されちゃったんだ。それを見て思わずほっとしちゃった自分が居たんだけど、はっきり言わないけどその時のノリス兄は凄く怖かったんだもの。

「ジョゼット、おめでとう！」

「えっ？」

「今の固定化の呪文成功したみたいね」

「あれ？」

今ってそういう場面だったかな？　妙なモノが出てきたせいで、今がどんな時か忘れそうになっちゃったんだ。でも、でもだよ、ノリス兄があんな妙な行動をとったのは、ボクの呪文が上手くいったからと考えれば、歓迎は出来ないけど納得はいったんだ。

「それじゃあ！」

「ええ、これからはきちんと魔法の練習が出来るわ」

「良かったね、ジョゼット」

「うん！」

何がどうなったかは分からないけど、その日からコモンマジックだけなんだけど、普通に魔法が使える様になったんだよね。ただ、コモンマジックだけでも魔法が使える様になると、ボクの修行は全く別のなったと言ってもいいんじゃないかな。

＝＝＝

先ずは出来る限りのコモンマジックを”使える”様になるのが最初の目標だった。普通に使うだけなら、それ程苦労は無かったんだと思うけど、セレナ師匠が望むレベルと言うのはもっのすごく高かったんだ。

コモンマジックに限らず、魔法には持続時間が長い物の、一瞬で

効果が終わってしまう物があるのは知っているよね？　効果高さを犠牲にして、呪文の効いている時間を延ばす事は可能なんだけどあまり実用的じゃない場合も多いんだよね。

　具体的に言えば、呪文の効果を呪文を唱えずに持続させると言う物だったんだ。例えば常時身体強化（ブースト）の呪文の効果が効いていれば身体能力は凄く高くなった様に見えるし、何時も盾（シールド）を張っていれば弓矢程度ならどうと言う事は無いよね？

　そして、何時も魔法探知（ディテクト・マジック）が効いていれば、何処かで魔力が動いているのが見て取れるんだ。もう分かっちゃったかな？　この呪文継続の技術は、実はノリス兄のオリジナルなんだよ。魔力の消費と言う面から考えると少し効率が悪いんだけど、”誰か”呪文を唱えているのを聞かれないという利点があるんだ。

　ノリス兄に言わせると、”必要だから考えた、やってみたら出来た。この方法なら・・・”、まあ、その後はどうでも良いよね。普通、実行出来ても実際に使おうとは思わないんだろうけど、ノリス兄やボクの魔力量ならこの方法を使いこなす事が出来たんだ。

　ただ、魔法探知（ディテクト・マジック）を常時展開しているのは、かなり神経に負担があるんだ。度の合っていない眼鏡をずっとつけている様な物かな？　慣れるまでは、しつこい頭痛に悩まされる事になったんだよ。ボクの為にこの状態をずっと続けていたノリス兄を少しだけ尊敬したくなった。

　この魔法探知（ディテクト・マジック）を常時展開の効果はメイジ殺しとしてのボクには計り知れない効果があったんだ。例えば、端的な例だけど風系統の偏在（ユビキタス）を使ったメイジをボクは何時でも見分けられるし、分身も簡単に消し去る事が出来るんだ。

もっと言えば、呪文を”編んでいる”メイジの魔力を一部消し去る事で、呪文を不発にしたり、良く知っている呪文なら”暴発”させる事だって可能なんだ。実際に”不良メイジ”と呼ばれる悪さを働くメイジを退治したり、盗賊団に加担したメイジを征伐したりして、ボクは自分が役に立つ事を証明することが出来たんだ。

外伝三十四話　（ボクっ娘誕生）（前書き）

外伝三十四話ＵＰします。

外伝三十四話　（ボクっ娘誕生）

ボクの周りで、物事が上手く行き始めたと思ったのだけど、意外な所が破綻する事になったんだ。

「ラザール、テッサは見付かった？」

「いいえ、申し訳ありません、ジョゼット様」

「私もテッサを探しに出たいんだけど、駄目かな？」

「それは、私の一存では・・・」

「そうよね、父様が王都に行っているし」

「お母様に。お尋ねになるべきかと？」

「そうね、母様は？」

「先程は居間の方に、いらっしいました」

「ありがとう！」

何が起こったかと言えば、朝からテッサの姿が見えなかったんだ。テッサの部屋は、少し荒らされた形跡らしき物があって、誘拐の可能性が高かったからマリロットの町の警備兵が出て捜索をしているんだけど、昼の時点でも消息が分からなかったんだ。

その日のボクは、朝から落ち着かない時間を過ごしていたんだけど、予定されていた家庭教師の先生も来なかったし、午後からの魔

法の修行もお休みになって居ても立っても居られなくなっちゃったんだよね。

＝＝＝

「お母様、少し宜しいでしょうか？」

「ええ、そろそろ来ると思っていたわ」

「テッサを探しに行きたいの！」

「貴族の娘として相応しくない振る舞いだと思うんだけど？」

「そんな事は、どうでも良いんです！　テッサが危険な目に遭っているかも知れないのに」

「それはどうかしら？　単なる家出なんだから、それ程危険でも無いでしょう？」

「えっ、家出？　誘拐じゃなかったの？」

「よそ様の娘を預かっているんですから、最悪の可能性を考えて、捜索させているだけよ」

確かに母様の態度は落ち着いたものだったし、組織的な誘拐なら町の警備団じゃなくて魔法兵団を動かすべきだったんだ。父様がライルと一緒に王都に行っている以上、母様ならそう命じる事が出来た筈なんだ。

「そう言っても、貴女は納得しないんでしょうね。いいわ、行って

いらっしゃいな。これを兵団の本部に持って行けば警備隊を貸してくれる筈だから」

「この手紙は？」

「ジョゼットの事だから、こんな事を言い出すと思ったのよね」

「はい、行ってきます！」

＝＝＝

髪は先週染めたばかりだから問題は無かったんだ、マリロットの町の兵団本部までラザールに付き添ってもらい、そこから魔法兵団のメイジを借りてマリロットから南の方向に向かったんだ。特に根拠は無かったけど、ボクの勘がそう告げていたんだ。

「ジョゼット様、あちらの女性がそれらしい女性を見たそうです」

「やっぱり、それでテッサは？」

「はい、そのまま街道を南に。時間が時間ですし、若い女性が出歩くのも危険と一泊する事を進めたそうですが・・・」

「そう、この辺りならそれ程危険は無いと思うけど・・・」

「そうですね、治安が良いのが逆に仇になりましたね」

「そうね、おば様、ありがとう！」

情報を提供してくれた母様より少し若い女性にお礼を言うと先を

急いだんだ。一応馬を借りて来たんだけど、さすがはテッサだよね、こんな所まで歩いて来たんだと妙な所で関心したのを覚えているかな。ただ、街道沿いを徒歩で南下して行けば暫く寝泊り出来るような場所が無いと聞かされたので、そっちの方が心配だったんだ。

「ジョゼット様、あそこに明かりが！」

「本当ですね、あっ！」

さすがは、非常勤とはいえ警備隊の団員らしくボクが馬を降りるのに手間取っている内に、農園の道具置き場と思われる小屋に音も無く近付いていって、内部を確認して戻って来た。この辺りは経験の差が出るみたいだ、正面切って戦えばここに居る兵団の人達には負けない自信はあるけど、正面から戦う前に簡単に負けちゃうなと後で思ったんだ。

「テッサ！」

「ジョゼット、どうしてここに？」

「勿論テッサを連れ戻しに来たの、さあ、屋敷に帰りましょう？」

「私、もうレーネンベルクのお屋敷には居られないから・・・」

「何があったか知らないけど、皆心配してるよ？」

「ノリス様も？」

ここでノリス兄の名前が出て嫌な感じがしたんだよね。テッサの好意をノリス兄が利用して何かしたんじゃないかと心配になっちゃ

ったんだ。何かと言うのに全く心当たりが無かったんだけど、ただ、用も無いのに日に何度もボクの所に顔を出すノリス兄が今日は一度も来なかったのが気にかかったのは事実だったんだ。

「もしかして、ノリス兄に何かされちゃったんじゃ」

「そんな事は無いの、ただ、ノリス様と喧嘩しちゃっただけなの！」

「喧嘩？　大丈夫よ、ちゃんと謝れば許してくれるよ！　私も一緒に謝るから、ね？」

「でも・・・」

「母様が言ってたんだけど、このままテッサが何処かへ行っちゃったら、レーネンベルク公爵家に迷惑がかかるでしょう？」

「あっ・・・」

正論が効いたのは意外だったかな？　ちっちゃな頃にもう家出を済ませちゃってるテッサだからね。

「えっと、たいがいてきにはガイヤール子爵からテッサを貴族の娘らしく育てる為に、テッサをレーネンベルク公爵家が預かっているんだよ？」

「そうだったね、対外的って意味分かってる？」

「勿論だよ、こないだ習ったばっかりでしょう！」

意味は理解して居なかったけど、使い方は間違っていなかった筈

だよ？　あれだよ、テッサをリラックスさせたかったんだ。

「うん、お屋敷に帰る、帰ってノリス様に謝る。でもね、ジョゼットは聴いてちゃ駄目だからね？」

「うん、分かった。それじゃあ、帰ろう」

そんなの言われるまでも無いよね？　テッサとノリス兄がどんな関係になっても気にしないけど、テッサがボクの前から居なくなるのはどうしても受け入れられなかったんだ。

何とかテッサを説得して、比較的近くの村で宿を借りて、翌日の昼過ぎ頃に何とかマリロットの町に帰り着くことが出来たんだけど、屋敷に戻るとテッサは母様の所に呼ばれて行っちゃったんだ。そして、ボクには思ってもみなかった別れが待っていたんだ。

「ジョゼット、少し良いかしら？」

「あ！　師匠、体調は宜しいんですか？」

「ええ、1日ゆっくり休んだから大丈夫。貴女に大事な話があるの」

大丈夫と言いながら、セレナ師匠の顔色は悪かったし、目が真っ赤だったんだ。

「何ですか？」

「もう貴女に教えられる事は無いって言ったらどうする？」

「そ、それって！」

「そう、貴女の師匠役を辞めることにしたの。理由は分かっているわよね？」

”貴女に教えられる事は無い”と言うのは、つい昨日、目の辺りにしたんだよね。セレナ師匠はメイジとしては二流だと本人も言っていたし、武術の腕だけで言えば当然その道のプロには劣るんだよね、そして兵団の警備隊としての経験もそれ程積んでいない。でも、セレナ師匠が居なかったら、今のボクは存在しないって言い切れると思うんだ。

「・・・」

「拳銃の腕、貴女の”魔法”の使い方、どちらも貴女自身が磨いて行くしかないの」

「でも、私には師匠が必要なの！」

「甘えないで！」

「！？」

今思えば、あの時のセレナ師匠は何かを堪えていたんだと思うんだ。でも、未熟な、人間として未熟なボクにはそれが何か分からなかった。

「ごめんなさい、こんな事を言う積りじゃなかったの」

「師匠・・・」

「そうね、貴女に最後の助言をしましょう。ジョゼット、女の子で

ある事を捨てなさい、そして強くなるの！」

「はい、ししょ、いえ、セレナさん。ボク強くなるよ！」

「うーん、何か違う気がするけど、まあいっか」

何故だか、私がボクになった事で、セレナ師匠の張り詰めた物が消えた気がしたんだ。そして、セレナ師匠はそのままレーネンベルクを出て行ってしまった。もう昨日のうちに準備は済んでいたんだと思うけど、本当に行動力がある女性だったと思うんだ。

外伝三十五話　（天啓）（前書き）

外伝三十五話ＵＰします。

外伝三十五話　（天啓）

それから暫くは、ボクは自分の”魔法”を磨く事に集中したんだ。1つでも多くの呪文を覚えて、どう干渉すればどんな効果が現れるかを少しずつ実験して行ったんだ。実験台になってくれたのは主にノリス兄とテッサだったんだけど、ライルはその頃忙しくいらしくって、あまり実験に付き合ってはくれなかったかな。

そして、ボクになったと同じ時期に、ノリス兄も本格的に次期公爵としての父様の教育を受け始めたんだ。当然ボクの修行に協力してくれる時間は減っちゃったんだけど、それに関してボクが文句をいう立場に無いんだ。無理して時間を捻り出して文字通り”実験台”になってくれるノリス兄はボクにとって凄くありがたい存在だった。

そして、ノリス兄は実験台としては凄く優秀だったんだよね。一応トリステイン魔法学院を優秀な成績で卒業した訳で、使える呪文の数なら多分屋敷で一番じゃないかな？　それに加えて呪文が”暴発”に備えて防御呪文を張り続ける事も出来るし、”暴発”しても自分でさっさと治してしまうんだよ、ノリス兄以上の実験台は居ないだろうね。

「ノリス兄、痛くないの？」

「ああ、大丈夫だ」

「ごめんね、忙しいのに怪我までさせちゃって。ねえ、ノリス兄？」

「何だい？」

「どうして、ノリス兄はボクの為にここまでしてくれるのかな？」

「どうして、妹の為に、出来るだけの事をするのに理由がいるんだ？」

ノリス兄は何時も通り”ボク”と言う所で嫌な顔をしたけど、その後は至って真面目な表情でこんな事を答えてくれた。ノリス兄だってボクが本当の妹じゃない事は知っているだろうにね。そう言えば、最近ノリス兄はボクに触れない様にしている気がする、さっきだって前なら、”子供はそんな心配をしなくていいよ”と言いながら髪がくしゃくしゃになるまで頭を撫でてくれた気がしたんだ。

＝＝＝

優秀な実験台のお陰で、コツみたいな物が掴めたんだ。言葉で表現するのは難しいんだけど、呪文を詠唱しているメイジが構成する魔力の流れの”頭”の部分に干渉すると呪文の効果が無くなって、”尻尾”の部分に干渉すると呪文の制御が不可能になる、そして”おへそ”辺りだと暴発する事になるんだよ。

コツさえ掴めちゃえば、知らない呪文でも干渉する事は簡単なんだけど、時々とんでもないオリジナルスペルとか唱えるメイジも居るので、呪文に関してはこれからも覚えてじゃなくて、攻略して行きたいと思うんだ。

一方、拳銃の方も練習を怠っていないよ？　セレナ師匠のオリジナル拳銃は勿論、スティン兄のリボルバーも普通に扱える様になったからね。引き金に指さえ届けば、身体強化（ブースト）でなんとか反動を押さえ込めるんだ。如何に速く正確に撃つかと言う点に練習の殆どの時間を使ったんだけど、リボルバーの方はもう少し身体が大きくなら

ないと駄目かな？

そして、武術全般に関して言うとね、何故か沢山の師匠が出来ちゃったんだ。良く事情は分からないんだけど、スティン兄がボクの為に手配してくれたらしいんだ。具体的に言うと、”聖女傭兵団”というちょっと（かなりかも）恥かしい傭兵団の腕利きの傭兵の人達だった。

名前はあれでも、師匠達の腕は本物だったと思う。テッサの家出の時の魔法兵団の人達も凄かったけど、傭兵の師匠達はある意味それ以上だったんだ。それは当然だよね、魔法と言う切り札を持たない師匠達は戦いで生き残る為に真剣だったからね。

ナイフ使いの師匠（ゴメン、ちょっと人数が多過ぎて名前忘れちゃったんだ）なんかは、ナイフの握り方から鍛えなおされたし、大剣使いのエヴリーヌ師匠はボクの身長程の大剣の扱い方やあしらい方なんかを熱心に教えてくれた。

エヴリーヌ師匠といえば、団長のレイモンドさんの娘さんでボクを最も”可愛がって”くれた師匠の1人だったんだ。団長のレイモンド師匠はボクの武術と言うより”戦士”としての修行の全般を監督する様な立場だったかな？　何でもレイモンド師匠は以前この屋敷に勤めていた執事のリッチモンドの息子さんだそうで、父様とノリス兄と一緒に、リッチモンドの事でお酒を飲みながら話し込んでいた方が印象に強かったんだよ。（エヴリーヌ師匠は父親のレイモンド師匠より大柄なので、意外と親子に見えないんだ。亡くなったエヴリーヌ師匠のお母さんというのはどんな人だったんだろうね？）

聖女傭兵団の活動に参加する形で、本格的な実戦も経験した。その中で、意図せず人を殺した事もあったよ。その事自体はあの時は仕方が無かったと思うけど、ボクが敵の盗賊団のメイジに咄嗟に消(イレース)

去を使わなくちゃいけない状況になるというのは、師匠達の手際を考えれば不自然だったと思うんだ。

その盗賊団の悪行は疑うべくも無いし、彼らを退治した事で周辺の住民から感謝された事もおかしくは無いんだけど、ボクの勘が何か違うと訴えていたんだ。もしかしたら傭兵団には新人が始めての戦場で人を殺す時の”作法”もしくは”儀式”みたいな物が決まっているのかも知れない。

そうじゃなければ、自他共に認める箱入り娘（ボクの事だよ！）が人を殺しておいて一週間程度で立ち直れるっておかしいと思うんだ。えっと、ノリス兄やテッサには色々迷惑かけちゃったけどね。

（他の国とかは知らないけれど、基本的に平和なトリステインでは、ボクみたいな子供は多いと思うけど？）

そんな事もあって僕は更に修行を続けたんだ、消去（イレース）の魔法は効率と言う面では凄いんだけど、呪文の”頭”を捉え損なうと、”暴発”か”制御不能”しか選べないから、誰かを犠牲にしない為にもドットにはコモンで、ラインにはドットで、トライアングルにはラインで対抗してきちんと相殺出来る様になる事が重要だと思うんだよね。

自分が甘い人間だと言う事は分かっているよ、でも、敵でも殺さずに無力化出来るなら、その可能性を捨て去る事はしたくないんだ。必要があれば人を殺す事を躊躇う積りは無いけど、絶対に人殺しを好きに慣れそうも無いからね。

＝＝＝

「テッサ、お母さんの話って何だったの？」

「それはね、来年魔法学院に入学するかという確認に来たの。勿論、

来年にするって言っておいたからね」

「今年はライルが入学だよね、テッサも来年入学すれば、頼りになる先輩が居て心強いんじゃないかな？」

「ジョゼットは、私と同級生になるのが嫌なの？」

何故か、あの家出以降、テッサは以前よりボクにべったりという感じになったんだけど、どういう心境の変化なのかボクには理解出来ないんだよね。テッサが言うには、”乙女心”だそうなんだけど、ボクは男の子のライルからも”女の子の気持ちを理解してあげた方がいいよ？”と助言されるくらい、乙女らしくない乙女なんだよね。

ライルが学校の同級生の女の子からプレゼントを貰ってお返しに魔法宝石（マジックジュエル）を送ろうとしていた時だった時にちょっと”忠告”した時だったけどね。でも仕方無いと思うよ、僕は今まで自分の事で精一杯だったんだからね！

「そんな事は無いよ、ただ、テッサの魔法の腕なら十分に魔法学院の授業について行けるんだから勿体無いとおもっただけだよ」

「だ～め、リリア様との約束もあるから、ジョゼットと一緒なの！」

「でも、ボクは落ちこぼれ決定だからね。あれ、母様と約束って？」

「えっ、うん、ちょっとね。そ、そう言えば、あのルイズも来年だってよ」

「ルイズが・・・」

テッサが”母様と約束”の話題を避けたがったのは分かったんだ

けど、それ以上に”ルイズ”という名前はボクにとって需要だったんだ。何となくだけど、あの”ルイズ”を先輩と呼びたく無いと思っただけなんだけどね。

「ボクが来年入学したら駄目かな？」

「うーん、どうなのかな？」

「ライルが帰ってくれれば、どんな感じか聞けるのにな～」

「ノリス様に話を聞いてみれば？」

「そうだね、ノリス兄もあそこの卒業生だったね」

ノリス兄に相談すると、別に問題無いみたいだった、１５歳で入学というのも建前だし義姉さん（スティン兄の奥さんのエレオノールさんの事だよ）も実際普通より早く入学して、しかも優秀な成績で卒業したそうだからと話を進めてくれたんだ。

「ノリス兄、スティン兄って確か偽名を使っていたんだよね？」

「ああ、誰に聞いたかは想像がつくが、まさか？」

「うん、ボクもマーニュだっけ、マーニュを名乗ろうと思うんだけど・・・、ダメ？」

そう言いながら、おねだりの上目遣いをしてみる！　これは男女を問わず結構効くんだけど男らしくない（ボクは女の子だけどね！）からあまり使わないんだよ？　それに、ボクが未だに自由に外出出来ない事を考えても、ボクはレーネンベルクを名乗らない方がレー

ネンベルクにとっては良い事の様な気がするんだよね。

「私としては、ジョゼットにレーネンベルクの娘として誇りを持って魔法学院で学んで欲しい。私自身そうしたし、ライルもそうしているぞ？」

「うん、でもスティン兄はスティン・ド・マーニュだったんでしょう？」

「全く、兄上いや、陛下のせいで！　いや、まあ、うむ」

ノリス兄が、なにやら百面相をしたんだけど、結局父様と相談という形になったんだけど、駄目と言われなかったんだから問題ないと思ったし、案の定だったよ。名乗る家名は決まったけど問題は名前だよね、そのままジョゼットと名乗ってもいい気がするけど、折角だから別の名前にしたいと思ったんだよね。

＝＝＝

「うーん」

「ジョゼット、まだ悩んでいるの？　ジョゼで良いと思うよ？」

「それはテッサが呼び間違え辛い様にでしょ！　あっ、何か降って来た」

「ふぇ？」

「うん、タバサ、タバサにする」

「タバサ？　別に悪い名前じゃないけど、お芝居の登場人物でも無いし、知り合いに似た名前の人も居ないよね？」

「ボクの”オトメのカン”か、ほら、典型？」

「天啓と言いたいの？　ジョゼットって時々謎よね、あの時も何故か見付かっちゃうし」

「テッサ、今からボクの事はタバサって呼ぶ練習だよ！」

「え～」

「ライルが帰って来たら、ライルにも練習して貰わないとね！」

別に関係の無い屋敷の人達にも”タバサ・ド・マーニュ”の名前を紹介して回ったんだけど、意外と不評だったんだ。ノリス兄は、ボクとが自分の事をボクと呼ぶのを我慢する変わりに、絶対にタバサと呼ばないと宣言するし、父様も母様も困った顔だった。

他の人達は、きっとレーネンベルクの子供は妙な事を考えると呆れていたんだろうね。でも、ボクには他人になる事を経験しておく事が”必要”なんだと思うんだ。

あ、そう言えば、ボクが”タバサ・ド・マーニュ”と名乗った時におかしな反応をしたのは、スティン兄もだったね。おかしなと言うのは、タバサと言う名前を聞いて”納得”した様に見えちゃった所かな？　あの時は体調が悪そうだったから、勘違いかも知れないけどね。

外伝三十六話　（ロックオン！）（前書き）

外伝三十六話ＵＰします。

ターゲットはあの方！

外伝三十六話　（ロックオン！）

入学して早々、ボクはとある人物に目を付けた。普通にテッサ以外の友達を作ろうと思ったんだけど、どうも上手く行かないんだ。

最初の頃は同じ女生徒に話しかけていたんだけど、何故か赤い顔をして逃げちゃうんだよね？　次は思い切って男子生徒に話しかけたんだけど、ある程度は仲良くなれるんだけど今一歩踏み込めない感じなんだよ。ボクだって、男装した女の子と仲良くなりたいとは思わないから、彼らの行動は理解出来るんだよ？（色々納得行かないけどね）

比較的良く会話をするのは、母様の姪になるミス・モンモランシ（ボクとは一応従姉になるのかな？）とミスタ・グラモン位かな？　テッサは学院内では殆ど喋れないし、ライルともあまり会わないから少し物足りなかったんだよね。

話は戻るけど、ボクがその女生徒に目をつけたのは、彼女が半ば孤立状態にあるからだったんだ。ボクも日の当たる所では影の様に付き添ってくれるテッサを除けば孤立しているに近かったからね。えーっと、あのルイズ（ミス・ヴァリエールと呼ばれているけどね）も同じ様に浮いている存在なんだけど、あの娘の場合は孤高を気取っている感じがする。

「ミス・ツェルプストー、良かったら昼食をご一緒しませんか？」

「？　ミスタ・マーニュだったかしら？」

「いや、ボクの事はミス・マーニュと呼んで欲しいんだけど？」

「あらら、それは失礼いたしました、ミス・マーニュ」

「それで、お昼一緒にどう？」

「ええ、喜んで、ご一緒しますわ」

授業中の話し方とかで感じていたけど、何だか儚げで守ってあげたいと思えちゃう女性なんだよね、この”キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー”という女性は。ボクはどうも”守る”対象を欲していると感じていたんだけど、ミス・ツェルプストーと会話してみるとそれが確信出来たんだ。

それならどうして直ぐに話しかけなかったかと言えば、このミス・ツェルプストーはミス・ヴァリエールと別の意味でボクの劣等感を刺激するんだよね。意外と細身なんだけど、出るところは出て引っ込む所は引っ込むという言語道断のプロポーション！なんだから。

ゲルマニアの女性って、情熱的とか聞いたけど噂は当てにならないんだね。でも黙って座っているだけで、色気を発散するなんて反則だと思うよ？

あの、コルネリウス小父さん、じゃなくてお兄さんが、キュルケを頼むなんて言いに来たのも頷ける話だよね。もしミス・ツェルプストーがゲルマニア人じゃなかったら他の男子生徒が放っておかなかっただろうね。

「おっと、ミス・マーニュ、ゲルマニア人と一緒に食事をするとは、いけませんね？」

「・・・」

「ミス・マーニュ、今回は遠慮させていただきますね」

「ミス・ツェルプストー！」

うわぁ、ほんとに儚げな人だなって、余計な事を言ってくれた奴の名前を思い出している間に、あっさりと引き返して行ってしまった。

「また、今度誘ってくださいな」

しかも気配りまで完璧！　女性として色々な所で完敗と言う気がする。しかし、目の前でニヤニヤと嫌味な笑いを浮かべているのは誰だったかな？

「タバサ、何かあったの？」

「テッサ、うん、ちょっと、振られちゃっただけだよ」

「誰？　私の！　もむぅ」

「ちょっと、テッサ声が大きいよ」

それに、”私の”ってどう言う意味？　慌てて口を塞いだのは正解だったけど、別の意味で冷や汗が出そうな気がするよ？

「あのね、ミス・ツェルプストーを昼食に誘ったんだけど、邪魔が入ったんだ」

「ああ、フェリー男爵家の跡取りね」

名前がすらすら出てくるのはさすがだけど、肝心のミスタ・フェリーをちょっとだけ見て、後はミス・ツェルプストーを睨んでいる

のはどうして？

「テッサもコルネリウスさんから、”キュルケを頼む”って言われたよね？」

「ええ、覚えているわよ？」

「はぁ～、ミスタ・フェリーってゲルマニアに恨みがあるのかな？」

「ふぅ、レーネンベルクだってゲルマニアに攻め込まれたでしょう？」

「あれ、そうだっけ？　でも、だからってミス・ツェルプストーを嫌う理由にはならないよね」

「そうね、”タバサ”らしい考え方ね。でも、フェリー元子爵家は色々と複雑なのよ。ラスティン様も何を考えているのかしらね？」

「ミス・ツェルプストーって、スティン兄がここに送り込んだの？」

「ええ、ライルがそんな話を聞かせてくれたの」

「きっとスティン兄の事だから、ゲルマニアの人とも仲良くする様に練習させる為じゃないかな？」

「・・・」

いきなりテッサが黙ったと思ったら、ほとんど気配を感じさせない歩き方で、ルイズが近付いて来ていたんだ。

「ミス・レーネンベルク？」

「マーニュだよ！」

始めての授業で自己紹介した時に、タバサ・ド・マーニュと名乗ったんだけど、ルイズは全く無視だったから、気付かなかったのかと思ったけど、そんな筈も無いよね？

「そうだったわね、ミス・マーニュはミス・ツェルプストーと仲が良いの？」

「いいや、でもこれから仲良くなりたいと思っているんだ」

「そうなの、頑張ってね」

それだけ言って、ルイズは僕達の所を離れて行ってしまったんだ。あれじゃ、何が言いたかったのか分からないよね？

夕食後ライルと会って、ミス・ツェルプストーが何故この学院に居るのか聞いたけど、結構衝撃的な話だったんだよ。あのミス・ツェルプストーが何かの薬の中毒で何ヶ月も拘束されたままだったとか、コルネリウスさんが身体を張って治療したとか聞いて妙に納得しちゃったんだよね。

結構小さい頃からコルネリウスさんは知っているけどこの前会った時はかなり印象が違ったし、”キュルケ”が何であんなに女性らしくって、しかも儚げなのかも分かった気がする。そうだね、この学院の中だけでも、”コルネリウスお兄さん”の代わりに”キュルケ”を守る事にしようと思ったんだ。

「そうか、守護者の方でも気をつけてはいるんだけど、女性で学年

も違うと手が回らなくってね」

「任せてライル、”あれ”も持ってきたから！」

「ほんとに持ってきたの？」

「え？　その為に作ったんだから当然じゃない」

「まあ、ジョゼットなら大丈夫だと思うけど、使い時は間違えないでね」

「うん！」

あれと言うのは、護身用の小型拳銃の事だよ。掌の中に収まると言うほど小さくは無いけど、マントで隠すことは出来る優れもので、何時だったかセレナ師匠とした、リボルバーを護身用に持ち歩けないよねという話をライルが覚えて、どんな伝を使ったのかボクにプレゼントしてくれたんだ。

学院内ではこれと、エヴリーヌ師匠がプレゼントしてくれたナイフだけがボクの武器の全てだったんだ。別に自慢にも成らないけど、学院の生徒なら素手でも制圧出来ると思うよ。

「ライル、お話は終わった？」

「ああ、アナベラ、待たせてごめん」

「ミス・ボヌー、すみませんでした」

「・・・」

「あの何か？」

「いいえ、何でもないの」

ミス・ボヌーと言うのは、外国から身分を隠して留学して来ている女性なんだけど、〝乙女心〟が分かるライルが選んだだけあって、非の打ち所が無い女性なんだけど、どうもボクの事が気になる時があるらしいんだよね。

外伝三十七話　（潰す！）（前書き）

外伝三十七話ＵＰします。

外伝三十七話　（潰す！）

そんな訳で、暫くミス・ツェルプストーの周辺を探る事にしたんだ。また、えーっと、何とか男爵の息子とかに邪魔されるのは面倒だから、搦め手で行く事にしただけだよ？

意外でもなかったけど、ミス・ツェルプストーは陰湿なイジメに遭っていたのは直ぐに分かったんだ。ボクとテッサでさりげなくフォローしておいたので、ミス・ツェルプストーの周辺はかなり落ち着いたんだと思う。ただ、ミス・ツェルプストーは何時も1人だと言う状況はなかなか改善しなかったんだけどね。

「ミスタ・フェリーを潰しましょう！」

「テッサってそんなに好戦的だったかな？」

「ライル！　テッサが悪いんじゃなくて、そのミスタ・フェリーが悪いんだよ！」

「2人とも、少し落ち着いて、でも、証拠は無いんだろうね」

陰湿と言うか、女々しい嫌がらせばかりなんだよね、ミス・ツェルプストーの私物を隠したり、妙な噂を流したり（男性と同棲していたとか、ある意味事実だからたちが悪いんだ！）、授業中も平気で嫌がらせをするんだよ！

協力者も居るから、犯人が分かっていても上手く現場が押さえられないんだよね。特にあの授業中の嫌がらせが、気に入らないんだ。別に”彼ら”が、ミス・ツェルプストーに直接何かやる訳じゃないんだよ、ただ、呪文の練習で杖を振る時とかに故意にミス・ツェル

プストーの方に杖を向けるだけなんだ。

ミス・ツェルプストーは、メイジとしてはおかしな事だけど、杖を怖がるんだよね。授業中に、ちょっとした偶然で杖が目の前に差し出された時に悲鳴をあげてしまったことで、同級生は皆それを知っているんだけど、彼らは分かっていて態とミス・ツェルプストーの視界に杖が入るように振舞ったりするんだ。

ちなみにミス・ツェルプストーは殆ど自分の杖にも触らないけど、その魔法の腕はテッサと互角以上だよ。そして、ボクにはミス・ツェルプストーが使う魔法の”効率”の良さに驚いちゃったかな？ボクが”見た”感じだと、同じ位の威力のトライアングルスペルを使える回数を比較したら、テッサの倍以上は使えるんじゃないかな。

「ライルが反対しても、もう我慢する積りは無いの。ミスタ・フェリーの境遇には同情出来るけど、一度潰してしまった方が良いと思うわ」

「そうか、事情を知っているテッサがそこまで言うんだね？　分かった、やってみなよ。後の面倒は”守護者”の方で見るから」

「うん、ありがとう。でも何時にしようか？」

「別に何時でも構わないよ、授業中でもね」

「ライル、それって、ボクの同級生にも”守護者”のメンバーが居るって事だよね？」

「ああ、そうだよ。ただ、彼はそう言う事に向かないから、ミス・ツェルプストーを助ける事は出来なかったんだ」

「ふぅ～ん」

「それが誰かと言う話なら、僕からは言えないよ？　その事はメンバー以外は知らないんだ、アナベラも知らない」

「そう言う事なら、本人に聞いちゃ駄目なんだね？」

「そうしてくれると、嬉かな？　誰なのかは、分かると思うけどね」

うーん、誰なんだろうね、守護者のメンバーって？

＝＝＝

その気になっちゃえば、切欠を作るのは簡単だったんだ。そう、ミスタ・フェリーが、不自然に振る杖にボクの杖を軽く当てるだけなんだからね。授業中には普通にある事なんだけど、メイジ同士が杖を当てると言う行為は、とある意味があるんだから。

「おっと、失礼！」

「ミスタ・フェリーが、ボクと決闘をお望みとは知らなかったよ？」

「何を言っているんだ、ミス・マーニュ？」

「君達授業中だぞ！」

「申し訳ありません、ミスタ。ですが決闘を挑まれて、引き下がっては貴族の誇りが保てませんから！」

ミス・ツェルプストーに対する嫌がらせでニヤニヤしていたミス

タ・フェリーの顔が一瞬強張ったけど、ボクの次の台詞を聞いて、また嫌な感じで歪んだんだ。

「勿論、一対一だよ。どうかな、ミスタ・フェリー？」

「君が、僕の相手だって、本気かい？」

「テッサ、いや、ミス・ガイヤールは手を出さないよ」

「半人前（ハーフ）などが僕の相手になるものか！」

半人前と呼ばれる事自体は覚悟もしていたし、何とも思わないけど、折角騒ぎを大きくしたのに逃げられるのは避けたかった。（どちらかと言えば、ルイズと一組に扱われて”ダブルハーフ”と呼ばれる方が嫌だったかな？）

「何を言うんだ、フェリーも同じ男爵家だろうに！」

「何だと！　良いだろう、受けて立つ！」

何故か特に挑発する積りじゃない言葉に反応して、ミスタ・フェリーが決闘を受けてくれたんだ。何やら事情がありそうだけど、今はその時じゃないね。

ボク達は、そのまま授業を無視して、何とかという広場に移動したんだ。別に名前を覚えるのが面倒だった訳じゃなくて、普通に”決闘広場”で通じるんだ。（学院の憩いの場所の名前としてはどうかと思うけど、最近こう呼ばれるようになったらしいんだ、先輩のライルも理由は知らないらしい）

「本気で決闘をやるのかい？　半人前（ハーフ）じゃ、相手にならないと思う

けどね」

「ミスタ・フェリー！　無駄口は止した方が良いよ、自信が無いのが分かるからね？」

「くっ！」

本気で相手の事を心配している口調じゃないし、それくらい目を見えば分かる。ちなみに1年で習う（ボクにとっては復習かな）コモンマジックだけの成績なら、ボクとルイズがダントツなんだよ。コモンマジックに対する取り組みは他の生徒と比較にならないだろうからね。え？普通の勉強？、そんな事別にいいじゃないか、座学の成績でもルイズは一番だよ？（本当に嫌な娘だよね？）

”ミスタ・フェリーとの決闘”自体は、別に大した事は無かったよ。まあ、何と言うか、至近距離の相手に暢気に”ラインスペル”を唱え始めるメイジが居るとは信じられなかったけどね。ボクは杖も腰に戻して、6分程度のスピードでミスタ・フェリーに近付いて、彼の顎に一発入れただけだったよ。（あれだけ無防備に殴られてくれる相手は始めてかも知れない）

「卑怯だぞ、メイジなら魔法を使えよ！」

「えっ？」

意味不明な文句を言ったのは、ミスタ・フェリーの協力者の生徒だったんだけど、ちゃんと魔法を使っているのにそんな事を言われても困るんだよね。ボクより２０サントは大きい男の子が簡単に殴り倒される方が問題だよね？（最近、ちょっと自分の常識が疑わしい時があるんだ）

ボクが杖をしまった事も彼らには不愉快だったのかも知れないとその後思いついたんだけど、それは、ミスタ・フェリーの魔法の構成が不安定だったのが理由の1つだったんだ。あれに干渉するのはちょっと怖いからね、もしかしたらあの”エア・ハンマー”は失敗したかも知れないと思った位だからね。

ボクが、消去（イレース）を使わなかったもう1つの理由（どちらかといえばこっちが本命かもね）がどう言う訳かボクの味方になった。うん、意味不明だね？　昏倒している、ミスタ・フェリーの敵討ちの積りか、10人程の同級生達がボクを取り囲んだんだ、この辺りは予想通りだけど、ちょっと人数が多いかな？　拳銃の弾丸は装填済みが5発しかないし、ナイフの方が出血は多いからな～。

取り囲まれた状態じゃ、さすがに弾込めをしている余裕も無いし、”彼ら”をどう制圧するか悩んでいる所で、理由の方が出しゃばって来ちゃったんだよね。

「止めなさい、貴族が1人を取り囲んで、何をやる積りなの！」

「おお、勇ましいな、もう1人の半人前（ハーフ）が仲間を守る積りの様だぜ」

「2人合わせても、一人前（ドット）にもならないくせに！」

どうも、頭に血が上っちゃってるらしく、相手がラ・ヴァリエール公爵家の娘で、国王の義妹だという事を忘れているみたいだ。ボクは国王陛下の”実妹”だったりするけど、普通にそんな事は意識しないよ、よく言って”王妃様の旦那さんの妹”かな？（ノリス兄も次期公爵に見えないけど、スティン兄は絶対に王様に見えないしね。こう言ってもスティン兄は泣かないと思うけど）

ルイズがボクの助太刀に名乗りを上げるとは思わなかったんだ、まさかルイズが守護者とも思えないしね。ルイズが守護者なら、ボ

クの魔法をディテクトマジックで”見よう”とは思わないだろうし、何故かな？

「ハーフね、何と言って貰っても構わないけど、私に勝ってからにしなさい！」

「おい、ルイズは拙いって！」

「何だよ、学院内の出来事なら、王家だって口出しは出来ないって！」

「おまっ！　止めとけ、俺は知らないからな！」

えーっと、いきなり1人脱落したよ？　誰だか知らないけど、少しは常識があるみたいだ。どちらかと言えば、学院に影響力を持っているのは、”王家”より”マーニュ男爵家”と言う事になっているんだけどね。この辺りは、認めたくないのかも知れないけど。

「どうする、止めておく？」

「今更、止められるか！」

ボクの折角の提案を、速攻で蹴ってくれたのは、復活したミスタ・フェリーだった。テッサは一応、ミス・ツェルプストーの護衛に回ってもらっているから、結局2対１０は変わらなかったね、弾丸の数と同じ5人仕留めて、ルイズの腕を見せてもらおうかな？

ルイズの身のこなしを見る限り、体術では互角、武器の使い方ではボクの勝ち、魔法の威力では・・・認めたくは無いけど完敗だろうね。ルイズの爆発の本気の威力はどんな感じかな？

外伝三十八話　（各種コンプレックス）（前書き）

外伝三十八話ＵＰします。

外伝三十八話　（各種コンプレックス）

そして、４発の銃声と、５つの爆発と、１本の火柱で、決闘は再び決着がついたんだ。ボクの拳銃からは４発の弾丸しか出なかった、１発は不発だったんだよ。最近は精度が上がって、不発弾は減っていたからちょっとだけ油断しちゃったけど、残りの１人のミスタ・フェリーは、ミス・ツェルプストーの魔法で焼かれる事になったんだ。

ボクの拳銃を太腿辺りに受けた４人は痛みでうずくまって動けないし、ルイズの”爆発”をくらった５人は脚がありえない方向に曲がっているので、同じく動けない。そして、一番被害が酷いのは、左半身に酷い火傷を負ったミスタ・フェリーだったけど、ミス・モンモランシが手早く治療を始めているから多分大丈夫だと思う。（モンモランシーが何処からか魔法薬を取り出してミスタ・フェリーにぶっかけて治療魔法をかけているので問題無いよ？　魔法薬が身体に悪そうな”赤黒い”色だったり、匂いが”痛い”とかだけど、効果は凄かった）

「ミス・ツェルプストー、助ける積りが助けられちゃったね」

「いいえ、ミス・マーニュ。私の為に戦ってくれたんだもの、これ位当然でしょう？」

そう言って、ミス・ツェルプストーはボクに一礼したんだけど、美人って得だね、頭を下げるだけで様になるんだもの。それに正面から見ると、胸の谷間が！　嗚呼、どうしてこんな不公平が世の中にあるんだろう！

「ルイズ、ミス・ヴァリエールもありがとう」

「ふ、ふん、別にツェルプストーを助ける積りは無かったわ、ただ、同じ貴族として許せなかっただけ！」

「それでも、ありがとうと言わせてもらうわ。それに、ごめんなさいも言わなくてはね」

「貴女に謝られる覚えは無いけど？　ご先祖様の悪行を悔いる気になったの？」

「お見舞いに来てくれたのでしょう？」

「なななに、いって、行ってないわよ！」

うーん、良く分からないけど、真っ赤になって逃げる様に玄関の方へ走って行ってしまった。あのルイズにも可愛いところがあるんだね。

「ミス・ツェルプストー、もしかして、あの治療の時の？」

「ご存知なんですか、ミス・ガイヤール？」

「ええ、大まかにですけど、”あの方”とは子供の頃からの知り合いなのですよ」

「まあ、それならば私の事は、キュルケと呼んでください」

「それならば、私はテッサで構いません」

「ボクは、タバサでいいよ！」

「分かりましたわ、テッサ、タバサ」

「改めてよろしくね、キュルケ」

良い感じで終わりそうになったんだけど、世の中はそんなに綺麗には出来ていないらしかった。

「キャッ」

「ゲルマニアの女なんか、この国から居なくなればいいんだ！」

こんな無茶な事を言い出したのは治療を続けていたモンモランシーを突き飛ばしたミスタ・フェリーだった。だけど、彼は立ち上がる事が出来なかった。ゴーレム（青銅製かな？）にがっちりと肩を抑えられていたからなんだよ？

「もう止したまえ！」

「離せ！　これは、君の仕業だな、ミスタ・グラモン？」

「ミス・ツェルプストーを責めるのは筋違いだと自分でも分かっているんだろ？」

「何を！」

「このトリステインを去るべきだったのは、君の叔父上だけで良かったと思わないか？」

「・・・」

「君のお母様だって」

「言うな！」

ミスタ・フェリーは強引にゴーレムの束縛を振り切って、ルイズと同じ様に何処かへ駆け出して行ってしまったんだ。皮がつっぱるのか、まだ、脚を庇いながらだったけどね。

「君達も分かっているんだろう？」

「・・・」

「クラスメイトの女性に酷い事をするなんて、貴族以前に男として相応しくないって事くらい」

残された9人は、黙ったままだったけど、反論する気力は無い様だったね。一応、同級生達が治療をしているんだけど、それにお礼も言えないらしいよ？

「やれやれ、それでは僕が替わりに謝罪する事にしよう。ミス・ツェルプストー、この通りだ、友人達を代表して謝る」

「ミスタ・グラモン！」

グラモン伯爵家と言えば、トリステインでは名門らしいし、父親の伯爵は陸軍の元帥だと言っていたから、その彼がゲルマニア人に頭を下げるのがどう言う事を意味するか考えなかった人間はその場には居なかっただろうね。だけど、本人はそれを無視して深々と頭を下げたんだ。（ちょっと嫌味なくらいかっこいいよね？　モンモ

ランシーなんか、目がとろんとしてるよ）

「ミス・ツェルプストー、これからも僕たちの友人で居てくれるかな？」

「ええ、喜んで、ミスタ・グラモン」

その時、始めてボク達は魔法学院の生徒として1つになれたんだと思うんだ。でもね、何故か美味しい所を全部ルイズとミスタ・グラモンに持って行かれた気がしない？　みょ～～～に納得行かないよ！

余談だけど、キュルケがルイズとのいきさつを教えてくれたんだ。キュルケ自身は覚えていないそうなんだけど、ラ・ヴァリエール領のエルネストさんの診療所の近くで治療を受けていたキュルケの所にルイズが”お見舞い”に行ったらしいんだけど、何か結構酷い事を言ってしまったらしい。

それが、ルイズとキュルケのわだかまりだったんだけど、それも今回の事で解消したんだ。とっても不本意なんだけど、昼食の時はボク、テッサ、キュルケ、ルイズで摂る事が多いね。時々、ライルとアナベラさんとロドルフさんやギーシュとモンモランシーとかも一緒に食事する事もあるよ。結構騒がしいけど、楽しい昼食も悪く無いよね？

＝＝＝

それから数日して、キュルケは例の9人と和解（ミスタ・ロレーヌとかだね）したんだけど、肝心のミスタ・フェリーには”交際を申し込まれた”んだ。どう考えても変な話だよね？

事情は、フェリー男爵家（ちょっと前までは、まずまずの子爵家

だったんだって）の前当主のゲルマニアへの内通から始まって、ミスタ・フェリーの母親が母国ゲルマニアに帰っていったという事なんだけど、分かる？

「ミスタ・フェリーは、きっと僕と同じで”マザコン”なんだよ」

「マザコンって？」

「うーん、父様から聞いたんだけど、お母さんの事が恋しい子供の事なんだって」

「ふーん」

「ちなみに、妹が恋しいのは”シスコン”で、小さい女の子が恋しいのが”ロリコン”、小さい男の子が・・・」

「どういしたの？」

「いいや、ノリス叔父さんも”シスコン”だなって」

「うーん、何故かな、微妙に違う気がするんだけど」

何となく、ライルのマザコンと、ミスタ・フェリーのマザコンは違う気がするよ！　ノリス兄の場合は、病気だよね？

「ゲルマニア人の女性が気になるのは分かる気がするんだけど、気になる女の子に意地悪するのは分からないよ」

「そうだね、でも、僕には少しだけ分かる気がする」

どうやら、ボクには少年の心と言う物も理解出来ないみたいだね？　ボクってもしかして、人間として何か変なのかな？

「ねえ、ライル、ボクってどこか変かな？」

「えーっと、ちょっとね」

ボクの姿を上から下まで眺めた後、視線を逸らしながら、こう答えてくれたんだ。ライルは嘘が付けないと言うのは長所だと思うけど、時には嘘を言って欲しい時もあるんだよ！

ああ、話を戻すけど、当然の様にミスタ・フェリーはキュルケに振られたよ？　キュルケには相応しい男性が居るんだから当然と言えば当然なんだけどね。コルネリウスさんの方もキュルケを気にしているからね、コルネリウスさんももてそうだから、結構良いカップルになるんじゃないかな？　（ちょっと歳が離れているけど、一回り位なら珍しくも無いんじゃないかな？　父様と母様だってそうだしね）

＝＝＝

ちょっと嫌味に聞こえるかも知れないけど、ボクはこれでも結構女性にもてるんだよ。大抵年上の女性なんだけど、”弟”したいって良く言われるし、うん、告白もされちゃったんだ。キュルケでさえ、時々ボクの頭を撫でながら、”タバサみたいな弟が欲しかった”とか言うんだよね。

彼女達から見れば、ボクは守ってあげたくなる存在らしいんだけど、ボクは守られたいんじゃないんだ！　ただ、守りたいと言う気持ちだけは良く理解出来るんだよね、庇護欲とか母性本能とか言われるらしいけどね。

結局、目を付けたキュルケには、ボクも振られちゃった訳だけど何時かはボクが守るのに相応しい人間と何処かで出会えると信じる事にしたんだ。そうだね、女の子としては変な希望かも知れないけど、ずっと守られ続けて来た身としては、うん、誰かを守りたいと思うんだ。（こう見えても、この学院のメイジなら殆どの人間に勝てると思うから、別におかしな話じゃないよね？）

だけど、ボクは”彼女”に会って自分がどれだけ小さな人間か思い知らされる事になったんだ。”彼女”、そうミコトとの出会いは突然だったよ。何　せいきなり斬りつけられたんだからね、多分ボクの同級生が同じ立場だったら怪我じゃ済まなかっただろうね。（ミコトの切先には、明確な殺気が篭っ　ていたし、普通の人間なら呼び出した使い魔に斬りつけられるとは思わないだろうからね）

ボクの使い魔のミコトの外見は、小さくて色白で、うん、凄く儚げに見えるよ、特に召喚した当時は目が全く見えなかったからそう見えたのは仕方が　無かったと思うよ。おかっぱの黒髪に何時も閉じられた目がどう言う訳かボクにとって”守るべき存在”に見えたんだ。

但し、ミコトという女性（小柄なボクより更に小柄なんだけど、もう２０歳なんだよ、女の子なんて呼べないよね？）は、その見掛けに反してとって　も強い女性なのは、数日一緒に暮らして見れば分かる事だったんだ。

あれは、ボクがミコトを召喚して2日後の事だったかな？　ミコトは色々あって、かなり疲れた様子だったのでその日も部屋でゆっくり休むように告　げてボクは授業に出たんだ。そして授業から帰ってみると、部屋はもぬけの殻だったんだ。

外伝三十九話　（躾）（前書き）

外伝三十九話ＵＰします。

外伝三十九話　（躾）

とりあえず、ライルに相談して、守護者の何人かでミコトを捜索してくれる事になったんだけど、ボク自身も当然探し回る事にしたんだ。ライルは自分の部屋で待っている様にって言っていたけど、ミコトは”ボクの使い魔”なんだ、他人任せには出来ないよ。

でも何処を探したら良いかなんて思いつかなかったんだよね。こんな時テッサが居てくれたらと思ったんだけど、こんなんじゃ駄目だよね？　テッサは本当に必要な時はボクの所へ戻ってい来るって言っていたんだから、信じなきゃ。

「すみません、ミコトを見かけませんでしたか？」

「どなたですか？」

とりあえず通りかかったメイドさんに聞いてみたんだけど、直ぐには名前が通じなかったんだ。あまり外へ出ないから当然だと思ったんだけど、ボクの使い魔の女の子（女性とか言ったら上手く伝わらない気がしたんだ）と聞いたら意外と簡単に答えが返って来たんだよ。

「ああ、あの方ですか」

「何処で見かけたんですか？」

「あ、いえ、午前中にお洗濯をご一緒したんですよ」

「洗濯？」

「はい、目が不自由な割には、良く働く方ですね？」

「はぁ？」

「昨日は昼食を届けに行った者が、学院内を案内させられたと言っていましたし」

当然の様にそんな事をメイドさんが言ったんだけど、ボクはどうも釈然としなかったんだ。だって、目の見えない人間が全く知らない場所に連れて来られて、翌日から出歩くなんて思わないよね？それに、ミコトにはまた目が見える様になるかも知れないという話もしたんだ、今無理をする理由なんて無い筈なのに。

ボクは納得が行かないままに、自分の部屋に戻る事にしたんだ。多分ボクの勘が、そう告げていたんだと思うんだけど、思ったとおりミコトは何も無かったかの様に、部屋に戻っていたんだ。

「ミコト！　何処に行ってたの！」

「え？　何処って？」

「えっと、見れば分かるけど、どうしてそんな無茶をするの？」

ミコトは、ベッドに上で洗濯物を畳んでいるんだから、聞くまでも無い話だったけど、聞かずには居られなかったんだ。だけど、ミコトの返事はボクの予想を裏切る物だったんだ。

「タバサ、いいえ、ジョゼット、ちょっとそこに座りなさい！」

「へぇ？」

「違うの、こう言う時は正座する物なの！」

「せいざ？」

正座という座り方が、どう言う物かは直ぐに分かったけど、どうしてボクが普通にベッドに腰を降ろしたのが、ミコトに分かったんだろう？　そんな疑問を口にする暇も無く、ボクはミコトに説教される事になっちゃったんだ。

「ジョゼット、貴女も女の子でしょう」

「勿論そうだよ！」

「だったら、自分の着替えくらいきちんとしなさい！」

「ふぇ？」

うん、言われて見れば、確かに昨夜は服を脱いだまま椅子に掛けたままだったかも知れない。

「昨日は疲れているのかと思って大目に見たけど、今日は言わせてもらいます！」

「あれ？」

その前の晩となると、全然記憶に無いよ。こう言った事は、屋敷なら使用人の誰かが、学院に来てからはテッサがやってくれていたからね。ミコトに、貴族という存在がどう言う物か聞かせたくなったけど、ボクがそれを言うのはおかしいんだよね。

だって、同じ様に育ったテッサやライルだって自分の事は自分でこなすし、ノリス兄だってその気になれば一通りの事は出来るらしいんだ。もっと言えば、国王になっちゃったスティン兄だって結構器用に何でもこなすらしい。そして、ボクはと言えば、色々悩むことが多くって、そう言った面では全然役に立ちません！（特に最近では、常時身体強化しているせいか、洗濯なんかしたらきっと原型を留めないんじゃないかな？）

「ジョゼットの事情も聞いたから、自分を僕って呼んだり、男の子の格好も責めないけど、女性としての慎みまで失っちゃ駄目！」

「あの～」

「分かるわね？」

「はい・・・」

どうしてボクは、使い魔に説教されているんだろう？　知らない人が見れば、僕の方が使われている（躾けられている？）みたいだよね？

「でも、でもね、勝手に居なくなるのは止めて欲しいんだ」

「勝手にって、この学院の中から出る積りはなかったけど？」

「そうじゃなくて！」

「ねえ、ジョゼット？」

「・・・何？」

「もしかして、ここって物凄く平和なの？」

「えっ？」

「自分が何処に居て、どうやって逃げれば良いかを気にしなくて良い位、安全なのかっていう意味よ？」

「ミコト？」

「私、目が見えないでしょう？　だからね、出来るだけ他の人に迷惑をかけたくないの」

　ミコトの言葉はボクにとって二重の意味で衝撃だったんだ。ボクが頼りにならないと言われたとも取れるけどそれは仕方が無いと思う、それ以上に衝撃的だったのはミコトが生きる事に貪欲だと言う事だったんだ。ミコトの目はきっと見えるようになると思うんだ、母様も絶賛するエルネストさんならなんとかしてくれると確信しているよ。

　それなのに、ミコトは今生き残る事に妥協をしていないんだ、そう、一週間後に目が見えるようになるとしても、明日、いいや、今日死んだら何にもならないとミコトは言っているんだと思うんだ。

「ねえ、ミコトはどうしてそんなに強いの？」

「私が強い？」

「ミコト？」

「私は、自分の事を最も弱い人間だと思っているの、ジョゼットな

らこの気持ちが分かるんじゃないかしら？」

「・・・」

「私はね、自分が次の”生贄”に決まって、目を潰された時からその日1日を精一杯生きる事にしたの、それが”逃げ”だと分かっていても、そうするしかなかった」

ミコトが自分の事を自嘲するのを始めて見るけど、どうしてかボクにとってはまるで自分の事の様に感じたんだよね。多分、魔法が”使えなかった”頃の自分を見ている様に感じたからかも知れない。

外伝四十話　（香り）（前書き）

外伝四十話ＵＰします。

外伝四十話　（香り）

「結局、運命からは逃げられなかったんだけどね」

「それが、生贄になるって事？」

「ええ、龍神様が住む洞窟に突き落とされた時の事は、一生忘れないと思う。特にあの土の匂いはね」

「でも、ミコトは”龍神”を倒そうと思ったんだよね？」

「ジョゼットは武器の扱いが得意じゃなかったの？」

「そうだね、あの”小太刀”じゃ、竜相手だと、捨て身でも怪我させるのが精一杯・・・」

「私はね、龍神様に傷を付ける事が出来れば良かったの。それが私が生きていた証になると思ったから、もしかしたら痛みを嫌って生贄なんて要求しなくなるかもなんて思ったけどね」

ミコトは、少しだけ悲しそうな声を出したんだ。ミコトはもう龍神に会うことは出来ないだろうからかな？　そう言えば、テッサは竜が生贄を要求するなんて有り得ないって言ってたよね。使い魔が風竜なんだから弁護したい気持ちは分かるんだけど、龍神と言う位なんだから普通の竜とは違うんだろうね。（あの、シルフィードという竜も何か変だと思ったけどね）

「ミコト、ボクはね、やっぱりミコトって強い女性だと思うよ。ボクがミコトの立場だったら、きっと何も出来なかったと思うから」

「そう？　命の恩人のジョゼットがそう言うのなら、少しだけ自分が強くなったって思うことにする」

「うん、ミコトはきっと生まれ変わったんだよ」

「生まれ変わった？　そうかも知れない、あの土の匂いが染み付いた洞窟から、光溢れるこの世界へね。うん、太陽の匂いがする」

「・・・」

「どうしたの？」

「何でもないよ？」

うん、綺麗に洗って干した洗濯物の香りを楽しんでいるミコトに、”それ、ボクのパンツ”とは言えないんだよ！

「ねえ、私が”目が見えるようになるのが怖い”と言ったら、貴女はどう思う？」

「えっ！　でも昔は目が見えたんだよね？」

「ええ、私はね、目が見えなくなる事で”ある力”を得たの、でも、目が見えるようになれば”その力”が無くなると思うの」

「”力”って？」

「それは、言えないの。でもね、目の治療は受けてみるわ」

「本当？」

「ええ、私のマスターが私の為に尽力してくれたんだもの」

「うん、良かった」

「それにね、男の子みたいな女の子の顔をこの目で見てみたいから」

ミコトはすっごく恥ずかしくなる様な事を、本当に嬉しそうに話してくれたんだ。ミコトは、エルネストさんの治療のお陰で呆気ないと言っても良い位に、簡単に目が見えるようになったんだ。ミコトの予想通り、ミコトの”力”と言うのは無くなってしまったらしいよ。ミコトは、”力”が無くなってやっとその力について話してくれたんだ。

「死んだ人の幽霊と話せる？」

「話せたよ、今はもう”見えない”し、”聞こえない”もの」

「そうなんだ・・・」

「気持ち悪いでしょう？」

「どうだろう？　マジックアイテムの中には死体を操る事が出来る物もあるからね」

「そっちの方が気持ち悪そうね。ジョゼットは誰かの幽霊を話したくなかった？」

「うーん、身近な亡くなった人って言っても、執事のリッチモンド

位かな？　良く覚えていないんだけどね」

さすがに今のボクでも、自分が手に掛けた人間の恨み言を聞く気は無いしね。

「そう、ジョゼットは幸せに育って来たのね」

「それは違うよと言いたいけど、そうだろうね」

「今だから話せるけど、死者の声を聞けると言うのはね。この世への未練を聞く事だったのよね」

「未練ねぇ」

「私達は生きているし、まだ若いからそうでもないけど、この世に多くの未練を残した人間と言うのは、怖い存在なのよ」

「ふーん？」

「まあ、それは死んだ本人しか分からないんだけどね」

全然関心が無いのが、バレバレみたいだよ。そんなに付き合いが長いわけじゃないのに、テッサ並みの鋭さかもね。

「えっと、どうしてミコトは幽霊と話せたの？」

「それは、推測なんだけど、源の血が影響しているんだと思うの」

「ミナモトの血？」

「ええ、付喪神というは分からないわよね？」

「聞いた事が無いかな」

「そうよね、私の国、いいえ、私が暮らしていた国にはね。”長い年月を経て古くなったり、長く生きた道具や生き物には神が宿る”と言われているの」

「神様が？」

「ええ、神様がという表現はここでは拙いみたいね。そう人格が生まれると言ったら良いかしら」

人格って、最近何処かでそんな話を聞いた気がするよ？

「源の人間には、時々、付喪神様と会話が出来る子供が出るの。神楽姉さんなんかは私より”彼ら”の声が良く聞こえたんだ。だからこそ、生贄にされるわけなんだけどね」

「えーっと？」

「ごめんなさい、ちょっと変な話だったわね。私もこちらの習慣とかに戸惑う事があるから良く分かる。簡単にまとめるとね、私の血に潜む力が、私の目が見えなくなる事で歪んでしまって、結果的に、死者の霊と交流出来るという形になってしまったんだと思うの」

「うーん、それで目が見えるようになったから、死者の声も聞こえなくなったの？」

「うん、そんな感じ」

「ちょっとだけ、勿体無いね」

「ジョゼット・・・」

「ごめん！　そういう積りじゃなかったんだ」

ミコトが本当に悲しそうな目をしたので反射的に謝ってしまったけど、ミコトはどんな世界で暮らしていたんだろう？

「そういえば、あの国王様？にガリア、神楽姉さんの所に行って来る様に言われたんだけど、行っても良い？」

「え、何で？」

「政治的な話って言ってたわ、”ガリア王妃の妹が無事である事を証明する”必要があるんだって」

「うーん？」

ミコトが、分かる？って感じで首を傾げたけど、ボクも同じ様に首を傾げる事になっただけだったんだ。ボクは決して政治なんかには通じていないし、そんな事より、スティン兄の提案がボクに対する”悪意”に感じてしまった方が重大だったんだ。

スティン兄からの伝言で、ライルがボクに他のメイジと組んでの戦闘訓練をして欲しいと言って来たのはつい先日だったし、その時にライルはミコトの事は何も言っていなかったんだよね。うん、自分を誤魔化せないや、ボクは”ミコトがガリアに行って帰らない”と考えるのが怖いんだ。

「良いよ、行っておいでよ」

「本当に良いの？」

「別に、ミコトがお姉さんに会うのを反対する理由なんてないよ！」

「ジョゼット？」

「本当なら、ボクも一緒に行きたいけど、色々忙しくなるから」

ボクがガリアに行くか、有り得るのかな？　学院に入って分かった事なんだけど、ボクはガリアについて普通以上に学んで来たみたいなんだ。全然隠せていない”アナベラ・ド・ボヌー”という女性がそれを証明してくれたんだよね。

ガリアの特産品とか気候・風土なんかの話をミス・ボヌーと対等に出来るのはボクとテッサ位な物だったんだよ。でも、ボク達が他の外国に詳しいかと言えばそんな事は無いんだよね。例えばキュルケのゲルマニアについてボクは殆ど知らないんだ。（この点だけなら、ミスタ・フェリーが一番話しが合うんだよね？）

ボクがガリアと言う国に興味を持ったのは、当然”あの女性”の影響なんだけど、あの人はボクを可愛がってくれたけど決してガリアに招待してくれなかった。そして、小さい頃に何度かガリアに行ってみたいとお願いした記憶があるんだけど、ボクに大甘な家族達も何かの理由をつけてガリアに行く事に同意してくれなかったんだよね。（多分、今でも駄目だよね。考えちゃ駄目だ、”家族”を信じてその時を待つんだ）

「・・・」

「あ、ごめん。ボクは大丈夫だから、お姉さんに甘えておいでよ」

「ジョゼット・・・、私がかえ、ううん、タバサはガリアのお土産は何が欲しい？」

「お土産？」

本当は、その前の言葉の続きが聞きたかったけど、ミコトは言葉じゃなくて行動でそれを示してくれるらしい。テッサに続いてミコトまで何処かへ行っちゃうとか心配していた自分が情けなくなってくれる。

「えっとね、欲しい物はあるんだ」

「何、手に入れるのが難しい物？」

「それも分からないんだ、多分石鹸だと思う」

「石鹸？　ガリアでしか手に入らない貴重な物？」

「貴重かは分からないけど、多分ガリアの高貴な女性が使う物だと思う」

「分かったわ、楽しみに待っていてね」

「うん」

外伝四十話　（香り）（後書き）

もう少しで”現在”に追いつきますよ？

外伝四十一話　（新しい道）（前書き）

外伝四十一話ＵＰします。

外伝四十一話　（新しい道）

そして、ミコトは実際にボクへの信頼を態度で示してくれたんだ。何があったかは分からないけど、あの女性の香りがする石鹸と、新しい”力”を手に入れてね。この時だったんだ、ボクがルイズを嫌っていた理由が分かったのは。

認めるのは癪だけど、ボクはルイズが羨ましかったんだと思う。言い方を変えると、ボクにとってはルイズは眩しい存在だったんだ。理由はちょっとあれだけど、ルイズは自分で強くなる事を選択して、そして選択し続けている。一方のボクは、うん、自分では選んでいる積りだったけど、未だに色々な人に支えられているんだった。

メイジ殺しになると言う事だって、スティン兄が示してくれた道でしかないし、心の何処かでそれが自分に向いているとは思っていなかったんだ。そんな中途半端なボクの前に、ミコトが現れたんだ、”弱いのに、何処かとても強い”ボクの使い魔がね。

ミコトは自分の”忌むべき力”をいとも簡単に捨てて見せてくれたんだよね。そして、それを後悔もせず、その上”新しい力”まで手に入れてしまったんだ。ミコトもボクにとっては眩しい存在だけど、その明るさはボクが”道”を探す為に必要な明るさなんだと思う。

ルイズにはあのアキトいう男性が必要だった様に、ボクにはミコトという女性が必要だったんだ。でも、そんなに都合良く”新しい道”なんて見付かる筈も無かった。ボクは道を探しながら、今まで通りに動かされるしかなかったんだよね。

だけど、意外な所から”新しい道”が見付かる事になったんだ。
また、あの女性に助けられる事になちゃったんだけどね。

「ジョゼット、久しぶりね」

こう声をかけた来たのは、セレナ師匠だったんだけど、ボクには最初それが誰か分からなかったんだ。その場所がもう直ぐ始まるゲルマニアとの戦争で重要な役目を果たす”特殊部隊”との顔合わせの場所で、”空軍”の飛行場という施設だったからと言うのも理由なんだけど、もう1つ決定的な違いがあったんだ。

「本当に、師匠なんですか？」

「あら？　そんなに変わったかしら、それともう、貴女の師匠では無いと言った筈よ」

「済みません、でも師匠は師匠です。それと、本当に見違えました」

「そうかしら、自分では分からないんだけどね」

「いいえ、すっごく綺麗になりましたよ」

特に根拠は無いんだけど、あんな別れ方をしたんだから、少しだけ苦労するんじゃないかと思っていたんだけど、こんな予感は外れて良かったよね。

「貴女もお世辞を言う様になったのね、成長したわ・・・ね？」

「なんで、疑問形なんですか？」

そりゃあ、色々女性としても大人としても足りないけど、中身はちゃんと成長してるんだよ！

「言って欲しい？」

「いいです・・・」

「あの人に紹介しようと思ったんだけど、何処に行ったのかしらね」

「あの人ですか？」

「そう、空軍特殊部隊の隊長で、私の唯一の上司で、その、私の愛する旦那様」

「わぁ、セレナ師匠、結婚したんですね、おめでとうございます！」

そうか、それでこんなに綺麗に、おまけに戦闘技術も上がっている様に感じられたんだよね。これは、セレナ師匠の腕が上がった事と、ボクの腕も上がったから実感できたんだろうね。

セレナ師匠の旦那様（マルコ隊長だよ？）は、セレナ師匠よりかなり年上で、一見あまり優秀だとか、強そうとかは見えなかったんだ。ただ、年長者らしい気配りと、長い間実戦を切り抜けてきた自信、そして作戦を成功させようとする意志は、中々の物だったと思う。

でも、１人の犠牲者も出さないとか言っちゃう辺り、苦労が多いんだろうね。この辺りはスティン兄にも通じる所があるのかも知れないね。逆に部隊員からの信頼は絶大と言えるのかも知れないけどね。

遅れてやってきたルイズとアキトも、意外とすんなりとこの特殊部隊に溶け込むことが出来たと思う。どう言う訳か、仲が悪かった2人の間に変化が生まれたみたいだった。何時に無く機嫌の良いルイズは笑顔でいれば、確か可愛かったと思う。ボクはテッサもミコトも居ないから1人で居たんだけど、そこにセレナ師匠がやってきたんだ。

「どうだった、あの人は？」

「えーっと、ちょっと年上過ぎませんか？」

「まあ、そうかもね」

「師匠と、ノリス兄の方がお似合いだと思っていたんですよ」

思ったままを言ったんだけど、その時のセレナ師匠の表情は、何故か絶望しているみたいに見えたんだ。だけどセレナ師匠は頭を一度振るだけで感情をコントロールしちゃったんだ。ああ、ノリス兄は今ボクがここに居る事は勿論知らないよ、知ったらどんな事になるか考えてくないしね。父様もいい歳だから、本気で次期公爵としての教育に忙しいらしいよ。

「ジョゼット、貴女にちょっと頼みたいことがあるんだけど、聞いてくれるかしら？」

「何でしょう、師匠の頼みなら、大抵の事はききますよ？　何だったら、父様にお願いしますし」

「そう言う話なら、スティンに話を通した方が早いと思わない？」

「それじゃあ、ボク個人への頼みなんですか、師匠が？」

「ええ、スティンに話を通したんだけど、あまり良い感触じゃなかったからね」

「そうですか、どんな頼みなんですか？」

「貴女は亜人、じゃなかった、鬼をどう思う？」

随分と抽象的な聞き方だよね？”亜人”という呼び方は差別に当たると言う事であまり使われなくなっているんだよ、逆に”鬼”という呼び方は人間に仇なす危険な存在という感じで使われる事が多いね。セレナ師匠が”鬼”をどう思うかなんて聞いているんだから、勿論、鬼を退治する事をボクがどう感じているのか聞いているんだよね？

「退治されるべき存在だと思います。でも・・・」

「そう、やっぱりね」

「あの？」

メイジ殺しとして修行を続けてきて、人を殺めた事もあるボクがこれを言うのはおかしいと思うんだけど、多分、この答えがセレナ師匠の望んだ物だし、ボクの実感でもあるんだよね。

「”鬼”がどうして絶滅しないか知っている？」

「？」

「聞いていないみたいね、鬼達はね何処からか”召喚”されて来るの」

セレナ師匠の言った事は最初はピンと来なかったんだ、でも考えてみればオグル鬼なんかが兵団に見付からず繁殖を続けているなんて有り得ないんだろうね。この国も昔と違って、狭くなったって聞く事も多くなった位だから。でも、召喚、召喚ね～？

「誰かが、何かの目的でサモン・サーヴァントを？」

「違うわね、現場を”視て”いたけどメイジも居なければ、召喚された鬼も2体だった事もあったもの」

「どういう事ですか？」

「さあ、難しい事を考えるのは得意じゃないしね」

セレナ師匠の意見には同感だね、そういう面倒な事は向いている人に任せるにかぎるんだ。料理とか洗濯とかね！

「ただし、あの現象はサモン・サーヴァントに似ているの、時間をかけて魔力を溜めて召喚のゲートを開くと言った感じかしら？」

「はい？」

「分からない？　あの勝手に開くゲートに干渉出来たらどうなると思う？」

「！！」

「下手に干渉すると、逆に何かを呼び出しちゃうかもしれないのよね？」

「・・・」

あー、ここは突っ込んじゃ駄目みたいだ、もしかしたら・・・？

「分かるわよね？」

「はい、ボクの魔法なら！」

「そう、やってみない？」

「やります、やらせてください！」

「貴女ならそう言ってくれると思ったわ。公爵様には、後でスティンから話をするって言ってたけど？」

「いいえ、この話はボクが進めます、師匠！」

この新しい道は、ボク自身が切り開くんだ。スティン兄なら、戦争が終わった後で話を進めるとか考えているんだろうね。目の前の事に集中させたいんだろうけど、本当にボクの家族達って過保護だね。でも、ここからはボクが決める事だよ！

外伝四十二話　（女心？）（前書き）

外伝四十二話ＵＰします。

外伝四十二話　（女心？）

セレナ師匠の提案はボクにとって魅力的だったけど、目の前に迫ったゲルマニアとの戦争を避ける訳には行かなかったんだよね。ボクには良く分からないんだけど、ゲルマニアとトリステインは結構仲が悪いんだ。

ボクがまだ小さい頃には、レーネンベルクまでゲルマニアの軍隊がやってきた事があったらしいよ。ただ、その軍隊自体はスティン兄が率いるレーネンベルク魔法兵団にあっさりやぶれさっちゃったんだから、ボクが詳しく事情を知っている筈もないんだ。

文字通り生き証人のライルはその時の事を殆ど喋らないし、今のゲルマニアについてよく知っているキュルケも思い出したくない事が多いらしいんだよね。変な劇とかも見る機会があったんだけど、あのスティン兄が”英雄”なんて呼ばれている時点で、眉唾物なんだよ。（学院でもその劇を見たっていう生徒は意外と多いんだけど、本人が目の前に居ても気付かない位脚色されているんだからね！）

そんな訳で、ボクのゲルマニアに対する感想は、迷惑な隣人と言った所なんだけど、ライルのお母さんを殺したり、キュルケを酷い目にあわせた事だけは許せないと思う。ライルやキュルケがゲルマニア皇帝とかに憎しみを抱いているんだったらそれなりの事をする覚悟はあるけど、２人とも優しすぎるんだよね。

「ジョゼット、悩み事があるなら相談に乗るわよ？」

「あ、うん、ボクの周りには”良い人”がって、うぇ！！」

「きゅい！」

「テッサと、イルククゥさんでしたよね？　何時の間にってどうやってココに？」

「勿論、約束を守る為に来たのよ、シルフィードに乗ってね」

一応、ココは軍艦？の中になるのかな、今はゲルマニアの宮殿に向かって飛行中なんだけどね。（オストラント号っていうかっこいい名前なんだけど、遠くから見ると結構可愛い形なんだよ）

「そっか、うん、ありがとう」

「いいえ、どういたしまして」

「イルククゥさんももしかして、手助けしてくれるんですか？」

「もちろんなの～」

うーん、見かけより軽いと言うか子供っぽいのかな？　前は習慣の違いかとも思ったんだけどね？

「イルククゥさんって、もしかして、ガリアの方じゃないんですか？」

「きゅい？」「ぷっ！」

「なんで、テッサが笑うのさ？」

「あのね、秘密にしてたけど、この子が”シルフィード”なの」

「？」

テッサが説明してくれたんだけど、テッサの使い魔シルフィード＝イルククゥさんなんだって、風韻竜という特殊な竜族なんだって、イルククゥと言うのは本名らしいけど、なんで本名を偽名にするんだろうね？（でも、こっそり見ちゃったアナベラさんが本当は青い髪だったから気のせいだったのかな？）

「事情は分かったけど、どうして隠したの？」

「別に私が隠すことにした訳じゃないけど、そうした方が良いと思ったからかしら」

全然意味不明だけど、もしかして、ボクに関係があるのかな？

「じゃあ、どうして隠すのを止めたの？」

「うーん、その必要が無くなったから？　そうね、落ち着いたら”彼ら”を紹介するわね」

うーん、謎が深まるばかりだよね。あっ、あっちでは、コルネリウスさんがクリシャルナに怒られてる！　どう見ても緊張してガチガチだったからな～。この戦争自体がコルネリウスさんをゲルマニア皇帝の座につける為の物と言えなくも無いらいいから、緊張するよね？

＝＝＝

「ジョゼット、準備は良い？」

「はい、し、セ、副隊長！」

「貴女とテッサには、コルネリウスとクリシャルナさんと一緒に、宰相に当たってもらうわ」

「予定通りですね？」

「ええ、エルフが居る確率が高いから貴女でも注意が要るわ」

「はい、皇帝の方は、本当にルイズとアキトだけなんですか？」

「そうね、その辺りは、陛下のにお考えがあるようね。本気で生け捕りにする積りみたい」

生け捕りのところは声を潜めているんだけど、ボクとしてはルイズの方が頼りにされているみたいで、不満なんだよね。さっきの”揺れ”も今こうして悠々と飛んでいられるのもルイズのお陰と言うのが、もっと不満なんだ。

「まあ、露払いは特殊部隊が引き受けるから、貴女はコルネリウスをお願いね」

「はい！　でも、コルネリウスさんって守り甲斐が無いですよね」

「そう？　あれで、結構可愛い所もあるのよ」

「可愛い？」

「ええ、貴女も大人になれば分かるわ。大人の女性にね？」

はっきり言って、ボクが女性として振舞う以外で女性になれるかと言われると、自信が無いよ！　そんなボクの心配を余所にセレナ師匠は、さっさと隊員の皆の所に戻っていってしまった。そう言えば、セレナ師匠はテッサに一言も話しかけなかったよね？

「テッサ、セレナ師匠が結婚したって聞いた？」

「そうなの？」

「うん、特殊部隊の隊長さんとだよ」

「ふーん」

「テッサって、セレナ師匠の事が嫌いだった？」

「ううん、ちょっと邪魔だっただけ・・・」

うーん、女心と言うのが分からないよ！　（これって女性として致命的？）

外伝四十二話　（女心？）（後書き）

本当に短くてごめんなさい！

外伝四十三話　（ピンホールショット）（前書き）

外伝四十三話ＵＰします。

外伝四十三話　（ピンホールショット）

特殊部隊の動きは、本当に迅速だったんだ。念の為に、盾を構えて何とかと言うゲルマニアの宮殿に急降下したんだけど、普通にレビテーションでゆっくり降下しても問題なかったみたいだったよ？

このシャルなんとか宮殿は結構広いんだけど、２００人弱の特殊部隊のメンバーで制圧するのに大した時間がかからなかったと言うのはちょっと信じられない話だよね？　トリスタニアの王城には、何回か行った事があるけど、警備兵だけで２００人以下と言うのは考えられないと思うんだ。

「うーん、ちょっと手際が良すぎないかな？」

「そうね、何かあって人手が足りないのかも」

「クリシャルナさん、どう思います？」

「これ位が普通じゃないかしら？　警備の兵は宮殿の外部からの侵入を警戒するのが仕事だしね。宮殿内を警備兵が頻繁に行ったり来たりじゃ、落ち着かないでしょ」

「でも、こんなに上空から簡単に侵入出来て良いのかな？」

「まあ、トリステインの王城ならそう簡単では無いでしょうけどね？」

「どういうことですか？」

「テッサちゃんも知っていると思うけど、あそこは上空からの侵入には神経質だからね」

「そうでした、この子で近付いたというか、近付こうとしただけで魔法衛士隊に詰問を受けましたね、そういえば」

「ふーん」

「多分ゲルマニアの警戒網に引っかからなくって、この宮殿の見張りさえ潰してしまえば、やりたい放題でしょうね。まあ、特殊部隊の手際が良いのは事実だけどね」

エルフのクリシャルナさんも認めるその宮殿制圧の方法なんだけど、すっごく地味なんだよね。1チーム5人のメイジが侵入した部屋を中心に周囲の部屋を順番に制圧して行くんだけど、使うのはコモンマジックと身体だけなんだよね。

手順としては、対象の部屋の気配を探って、5人以下の人間しか居なければ同時に魔法で眠らせる、5人以上ならば扉を魔法で開かなくしておいて隣のチームと協力して制圧するんだ。基本的に手荒な場面では魔法で防音してしまうから、物音が外に漏れる事が無いし、宮殿内は密やかにそして確実に制圧されていったんだよね。

「なんであんなに簡単に眠らされるんだろう?」

「えっ?」

「油断しているとスリープにはかかり易いし、魔法自体の精度が高いのは分かるんだけど」

「あのね、ジョゼット、普通の人間は壁越しに気配を察したり、何

時もマジックディテクトを唱えていたりしないのよ？」

「そうだったね、ボクには普通だったから気付かなかったよ」

気配の探り方とかは最近覚えたんだけど、マジックディテクトの方はボクにとってこれが普通の状態だからね？

＝＝＝

「さて、そろそろ行きましょうか？」

「はい！」

「おい、クリシャルナ！」

コルネリウスさんが慌てて扉を開けようとしているクリシャルナさんに注意したけど、そんな大きな声を出したら逆に侵入者が居る事を知らせる様な物だとおもうんだけど？（まあ、部屋の中からは明確な”殺気”が感じられるからそんな心配は無意味なんだけけどね）

クリシャルナさんが開けた両開きの大きな扉の向こうに見たのは、銃口、それも４丁！　反射的に飛び出して銃を構えた兵士４人と指揮官らしい人物にリボルバーで銃弾を打ち込んだんだけど、死ぬかと思ったよ！

「ジョゼット、無茶をしては駄目よ？」

「あ、ありがとう、クリシャルナさん」

うん、自分の目が信じられないけど、ボクのリボルバーから放たれた銃弾は、銃を撃とうとしていた４人の兵士の肩を捉え、もう１発は”ボクの額”に命中する直前でクリシャルナさんの左手に弾かれたんだ。（訳が分からないよね？）

「カウンター」

「これが？」

後ろから、コルネリウスさんとテッサの声が聞こえた。そうか、これがエルフの先住魔法なんだ、警告されていたんだけど、実際に目に見てその怖さが分かる。あの指揮官を狙ったボクの銃弾が跳ね返されて、ボクに当たりそうになったのを、クリシャルナさんが庇ってくれたんだ。

クリシャルナさんが弾き返した銃弾は、前の壁に当たったみたいだ、一応身体強化も効いているし、テッサがシールドを張ってくれているのは分かっていたけど、当たり所が悪ければどうなっていたか、考えたくないね・・・。

「お陰で、誰がエルフなのか分かったけどね」

「くっ！」

クリシャルナさんが軽く何かを投げつけると、指揮官の男性の姿が変わっていたんだ。さっきまでは普通のゲルマニア人に見えたのに、今はエルフの男性にしか見えない。ボクが驚いたのは、エルフの男性にしろクリシャルナさんにしろ全く魔力を感じなかった事なんだ。

ボクはメイジの中なら結構強いと思っていたんだけど、どうも勘違いしていたみたいだ。にこやかにエルフの男性に笑いかけるクリ

シャルナさんの何時もの笑顔が少しだけ怖くなっちゃったんだ。

「へぇ、貴方だったの、ゼジル坊や？」

「やっぱり、あんたが来たんだな・・・」

「貴方のお父様も大変ね、私がこの事を、”テフネス”に知らせたらどうなるかしら？」

「・・・」

「コルネリウス、先に行きなさい！」

「しかし！」

「私がこの坊やに負けるとでも？」

クリシャルナさんがこんな風に言った時に、銃声と爆発音がほぼ同時に部屋というか、広間？謁見室？に響いたんだ。ボクに肩を撃たれたゲルマニア兵がこっそりクリシャルナを銃で撃って、多分その弾丸が撃った銃口にそのまま跳ね返されたんだと思うよ？

右肩を撃たれ、左腕を血だらけにしたゲルマニア兵を一瞥して、クリシャルナはもう一度言ったんだ。

「分かったでしょう、貴方達のすべき事をしなさい」

「分かった！」

その言葉にはボクより少しだけ年上にしか見えない（様に見える）

少女の言葉とは思えない威厳みたいな物が感じられたんだ。確かに、エルフとして（精霊使いって言うんだったかな？）の格はゼジルというエルフとは比べ物にならないみたいだ。（それと、ボクよりかなり年上に見えるエルフの男性を”坊や”と呼んでしまうクリシャルナさんも別の意味で怖いよね？）

「コルネリウスさん、行きましょう」

「あ、ああ」

「その右の扉だっけ、テッサ？」

「ええ、そこに”宰相”が居る可能性が高いって」

「開けるよ、コルネリウスさんは少し下がって」

コルネリウスさんが少し下がったのを確認して、ボクはゆっくりと扉を開けたんだ。予想通り、奇襲は無かったけどそれ以外の反応も無かったのは拍子抜けだったかな？　注意しながら部屋の中を覗くと、ランプとライトの魔法の光を頼りに、1人の老人が、何か書類の整理をしているのが見て取れた。

「あれ？」

「どうしたの？」

「ちょっと変な感じなんだ」

ボクの上から、テッサが室内を覗き込んだんだけど、下から見ても奇妙な表情をしたのが分かったよ。テッサとここまで近くで触れ

合うのも久しぶりだなとか考えていたら、感じた違和感の正体が分かっちゃたんだ。

「テッサ、父様の執務室を思い出さない？」

「あ、うん、そうかも」

この部屋の印象は、父様の執務室に似ているんだよね。よく夕食の時間になっても仕事を続けていて、ボクとテッサが2人で呼びに行ったんだ。さすがにウチの執務室よりかなり大きいけど、書類が一杯で、機能性重視というか地味と言うかその辺りも似ているかも？

「もう良いな？」

「あっ！」

そう言って、コルネリウスさんが私達を押し抜けるように、中に入っていってしまったんだ。

外伝四十四話　（ゲルマニア宰相の最期）（前書き）

外伝四十四話ＵＰします。

外伝四十四話　（ゲルマニア宰相の最期）

「マテウス・フォン・クルーク！」

あーあ、奇襲出来そうだったのにね？　この老人がゲルマニア宰相なんだろうけど、すぐそこで銃撃戦があったり、扉がこっそり開けられたのに気付きもせず、書類整理をしている所を見ると、耳が不自由だったりするのかな？

「今日の仕事は先程で終わりと言っていなかったか？」

「何を！」

うーん、聞こえているけど、耳に入っていないのかな？　あ、コルネリウスさんの背中が泣いているよ！

「ふざけるな！」

そう叫んだ声と同時に、突風が老人の机に吹き付けたんだ。あんまり威力が無い魔法だったけど、とりあえず気付いてもらえたみたいだよ？

「ゲルマニア宰相、マテウス・フォン・クルーク！　貴様の命をもらいに来たぞ！」

「ディータでは無いな、誰だ？」

「俺の顔を見忘れたか？　父の仇、母の仇、一族の仇と言っても貴様には分からないだろうな？」

かなり色々な所で恨みをかっているんだって、本当かどうかは知らないんだけど。

「ふむ、コルネリウス・フォン・ブラウンシュワイクか。色々動いていたのは知っていたが、まさかここまで来るとはな・・・」

「分かっているだろうが、この宮殿は制圧させてもらった！」

「ふん、役に立たない奴等だな。しかも裏切り者まで居るらしい、折角居城を移してもこうも筒抜けとはな」

ゲルマニア宰相の顔がしかめられて、顔に深い皺がよったんだ。ただその目はコルネリウスさんを忌々しそうに見ているんだけどね。

「貴様に言わせれば、俺なんかは裏切り者の上に愚か者なのだろうな。だがな、俺は貴様にそう思われる事を誇りに思うよ」

「何だと！」

「貴様には理解出来ないだろうな、こんな陰気臭い場所に篭っていないで偶には外の空気でも吸っていればこんな事には成らなかっただろうな」

ゲルマニア宰相の表情が怪訝そうな物から怒りへと変化したけど、プライド高そうだから仕方が無いかもね。でも、裏切り者と呼ばれる事を誇りに思うって妙な考えだと思うよ、この辺りはやっぱりスティン兄の友人だからなのかな？

「この国に他国の軍隊など招き入れて、どうなるか分からないのは

恥ずべきだと思うがな？」

「そう思う辺りが貴様の限界なのだろうな」

「ガリアなどがこの国の民に何をするか想像出来ない訳でもあるまいに！」

「ガリアが攻め込んできたらか、確かに想像したくないな」

「貴様何を企んでいる！」

「さあ？、企んでいるのは俺じゃないがね」

コルネリウスさん、それは胸を張って言う台詞じゃないと思うんだけど？　時間を稼ぐと言うのは計画通りだけど、逃げ道を塞ぐ為にこっそり移動しているテッサも呆れ気味だよ！

「そうか・・・、お前を皇帝にしておけば良かったな」

「貴様からそう言われるとは思わなかったが、昔の俺が皇帝になっていたら、ナポレオンより性質が悪かっただろうな。時間稼ぎは終わったぞ、逃げなくて良かったのか？」

「・・・」

そう言われて、もう1つの扉の方へ視線を向けた宰相さんだったけど、そこにはもうテッサが居たんだ。そして、コルネリウスさんに視線を戻すと同時に杖を構え、コルネリウスさんも同時に呪文を唱え始めた。2人が選んだのはどう言う偶然か土のラインスペルの大地の鉾（アースグレイブ）だったんだ。

呪文の構成や威力では、コルネリウスさんの方が上っぽいけど、同時に唱え始めれば完成するのもほぼ同時と言うのが、系統魔法の欠点なんだよね。他から妨害が入らなければ、相打ちだったんだろうけど、この時の為にボクはここに来たんだ！

「ぐふっ！」

左下腹部から胸を岩の刃に貫かれて、苦痛のうめきをあげたのは宰相さんだけだったんだ。ボクの役目は、コルネリウスさんを守る事だったからね。一対一の戦いで、土以外の傷があると色々面倒だから、テッサも手を出さなかったんだ。（また、ボクは日陰の存在だと言う事を思い出しちゃったよ、落ち込むね）

「わ、私のナポレオン、私の夢・・・」

宰相さんの最後の言葉はこれだったんだ。テッサの方に顔を向けて手を伸ばしたまま、息を引き取ったみたいだ。今のはどういう意味なんだろう？　テッサの方に顔を向けると、当然だけどフルフルと首を振るだけなんだよね。

「タバサ、手間をかけたな」

「いいえ、私はこの為に来たのですから、でも何でタバサなのですか？」

「あ、いや、キュルケがタバサタバサ言うからそっちの方が分かりやすいんだ、すまんな」

「いえ、どちらもボクですから、それより、あの隠し扉って？」

「ああ、何だろうな？　隠し通路でナポレオンの所につながっているとか無さそうなんだが」

そうなんだよね、隠し扉があって人が密かに出入りしているのは分かっていたんだけど、何の目的の扉かまでは分からなかったんだ。ゲルマニア皇帝の居室や謁見の間は離れた所にちゃんとあるし、なんの扉なんだろう？

「テッサ、この宰相さんを楽にしてあげて？」

「ええ、任せて」

「コルネリウスさん、ボクが先に行きます！」

さっさと扉を開けようとするコルネリウスさんを止めて、ボクが先に隠し扉をくぐる事にしたんだ。そこに兵士が隠れているとかは無さそうだけど、一応ね？　細い通路を抜けるとまた扉があったんだ。中からは人の気配がするけど、殺気とかは無いね。

「開けるよ？」

「ああ」

”キィー”

周りが静かな為か、耳障りな音を出しながら扉は開いたんだけど、扉の向こうは”ピンク”だったんだよね。

外伝四十五話　（ナポレオンちゃん？）（前書き）

外伝四十五話ＵＰします。

外伝四十五話　（ナポレオンちゃん？）

「何これ？」

「うわ、目がチカチカするな」

その部屋を一言で表現すると、少女趣味なのかも知れないね。色んな所にピンクが使われていて、少女！？のボクでもちょっと引く位だよ？　そして、ピンクの部屋のピンクのベッドにピンクのパジャマを着た女の子が眠っているのが見えたんだ。

「誰です！」

「すみませんが、ここはどなたの部屋ですか？」

「勝手に入って来てなんですか！」

「すみません、ボク、私はえっと、タバサ・ド・マーニュと言います」

「ガリアの者ですか？」

「いいえ、あの、トリステインのシガナイ男爵家の娘ですけど・・・」

「男爵家の者程度が、ゲルマニア皇帝ナポレオン様の・・・」

気の強そうな女官の女性は、そこまで喋っていきなりくたっと倒れてしまったんだよね。コルネリウスさんが後ろでスリープを唱え

ているのは気付いていたんだけど、もう少し情報を聞き出したかったかな？

「コルネリウスさん？」

「こう言う人間はな、自分の都合でしか話を進めないからな！」

「ボクも、こう言うタイプの人って苦手です。行儀作法を教えてくれた女性もそうでした」

妙な所で同意出来るものだよね。だけど、この女の子（１１，２歳に見えるけど、暗めのブロンドの髪で、肌は驚く位白いね）がナポレオンなのかな？

「ナポレオン１世って女の子だったんですか？」

「いや、それは無いな。あまり人前には出ないらしいが、俺と同世代の男なのは確かだ・・・」

「どうしよう？」

「うむ？」

ボク達が悩んでいると、いきなりナポレオンちゃん？目を覚ましちゃったんだ。だけど、どうも様子が変なんだよね。それに、ナポレオンちゃんを見てコルネリウスさんが息を飲んだのが分かったんだよ。

「！？」

「コルネリウスさん、どうかしたんですか？」

「お嬢さん、名前を教えてくれるかな？」

「我が名は、ナポレオン、ナポレオン・ボナパルト、本当のゲルマニアの皇帝なり・・・」

「くっ、ここまで・・・」

感情がこもっていない、何と言うか平坦な声で答えた？ナポレオンちゃんだったけど、対するコルネリウスさんの反応は、悲しげだった。

「こんな所で、何やっているのかしら？」

「あ、クリシャルナさん。あっちはもう良いんですか？」

「ええ、逃げてくれたわよ。一応、精霊とシルフィードに追跡させているけど、まあ、問題は無いでしょうね」

知らない間に、クリシャルナさんも追いついてきたらしいけど、ボク達は何をしているんだろうね？

「クリシャルナ、この娘を診てくれ」

「あら、可愛いお嬢さんね、誰の娘さんなの？」

「・・・、精神に作用する毒があるだろう？」

「なっ、そう言う事ね。全く、情報の出所は想像が付くけど、困っ

たものね」

「非常事態だったからな、責めないでくれ」

「妹みたいな女の子の為だっけ、貴方も男なのね？」

「放っておけ、それより！」

「はいはい・・・」

軽い感じでクリシャルナさんが、ナポレオンちゃんの診察を始めたんだけど、その表情が段々厳しくなってきたから、事態は意外と深刻な事が分かったんだ。そうじゃなくても、されるがままになっているナポレオンちゃんはどう見ても普通じゃないんだよね。

「どうなんだ？」

「テフネスも何を考えているんだか・・・」

「治らないのか、この娘は？」

「うーん、正常な状態にする事は、多分可能だと思うわ」

「良かったね？」

「そうだな、何が問題なんだ？」

「この毒薬はね、私達エルフの罪人に使う物なの」

「罪人！」

そんな物をこんな小さい（身長はボクとそれほど変わらないから、か弱い？）子供に使うなんて！

「それで、どんな効果が出るんだ？」

「時を止めると言われているけど、実際には精神に作用して、思考力を低下させるそうよ？」

「そうか・・・」

「どう言う事？」

「”時を止める”と言って分からない？　この毒を飲まされるとね、解毒剤を飲まされるまで、何年も考える事も出来ないの、そう、何十年、何百年もね・・・」

「そんな、人間なら寿命が来ちゃうよ！」

「そうね、でもエルフなら百年位すぐよ？」

「じゃあ、この女の子も？」

「さあ、二百歳位に見えるけど、もっと小さい頃に・・・」

そこはエルフの基準で考えちゃ駄目だと思うよ？　でも、何故そんな事を！

「奴には自分の言う事を聞く人形の様な、”皇帝”が必要だったんだろうよ。息子と反りが合わなかったらしいからな」

「そんな！」

「他人を信用出来ない人間だったんだろうな、これは辺境伯の受け売りだがな」

「まあ、人間の事情は置いておくけど、この子どうするの？」

「何としても治療してくれ！」

「えっと、どうしたの？」

意外に激しい感情が篭った言葉に少しだけビックリしちゃったよ。

「敵側の子供でしょうに、コルネリウスにとっては遠い親戚かも知れないけど。刑罰に使う毒なんだから、解毒薬なんて簡単には手に入らないわよ？」

「いいや、見て分かったよ。この子は姉の小さい頃にそっくりだからな」

「そう・・・、人間も結構面倒なのね」

コルネリウスさんのお姉さんは、他家に嫁いで生きているって聞いたけど、生かされていたのはこれが理由だったのかも知れない。そしてこのナポレオンちゃんも、ボクと同じで陽の当たる場所では生きていけなかったのかな？

クリシャルナさんはとりあえず、スティン兄と連絡を取ることにしたみたいだった。ミコトが調整したマジックアイテムと取り出し

て交信を始めたクリシャルナさんを眺めながら、どうしても暗い気持ちになっちゃうボクだったんだ。

外伝四十六話　（恐怖の大蛸）（前書き）

外伝四十六話ＵＰします。

本当ならライルの旅立ちなんですが、これは番外編になる予定です。

外伝四十六話　（恐怖の大蛸）

戦争自体は、ルイズ達がナポレオン1世を”討ち取った”事で、あっさりと決着が付いたんだけど、ボクは普通の学生生活に戻る事になったんだ。（トリステインという国にとっては色々あったけど、概ね問題は無かったと思うよ？）

色々考える事が多かった冬も終わって、そろそろ春を迎えてボク達も進級する事になったんだけど、それはライル達が卒業する事を意味していたんだよね。ライル達が卒業しても、直ぐに新しい後輩が出来るのは分かっていたんだけど、それでも寂しく感じる事は仕方が無かったんだ。

ライル自身は卒業後、直轄地マース領の領主代行をする事になるのが決まっていたんだけど、本人はちょっとだけ納得して居ない感じだったね。だけど、あんな事になるなんて本当に想像もしていなかったんだ。

＝＝＝

「ライル、本当なの？」

「ジョゼット、聞いちゃったんだね？」

「本当に本当なの？」

「うん、本当だよ」

学年末の休みに入って、先に卒業してマース領に向かった筈のラ

イル達を激励に行く積りで、早めに戻って来たんだけどノリス兄が教えてくれたのは思っても居なかった、この話だったんだよ！

「ゴメン、子供みたいだね。でも、どうして？」

「それは・・・」

「もしかして、イザベラさんの為？」

ライルの行動が納得出来なくって、少し意地悪な質問をしてみたんだけど、ライルの答えは予想外だったんだ。だって、本人の目の前でそうだとは言えないと思ったからね・・・。

「うん、そうだね、イザベラの為でもあるのかな？」

「えっ？」

慌てて、ライルのすぐ横に寄り添って座っているイザベラさん（もう髪を染めるのを止めているし、ガリアの王女という本当の素性も教えてくれたんだ）の反応を覗ったんだけど、ライルの言葉に全く驚いた様子も無かったんだ。ボク以上にお嬢様だったと思ったんだけど、本当に強くなったな、アナベラ先輩は。

「正直に言うとね、今回の事は、僕がイザベラに迷惑をかけているんだけどね」

「どう言う事？」

「ジョゼットなら分かるかな？　僕はこれから、本当の自分と向き合う事に決めたんだよ」

「・・・」

それは、ボクには分かりすぎる話だったけど、それがライルと全く結び付かないんだ。ボクが思い付くのは、精々ライルが実は”あの”モーランドの実子という可能性位だけど、それなら別の道がある筈なのに。

「スティン兄は、ライルのお父さんは何て言ってるの！」

「父様、うん、陛下はまだ知らないよ。これから僕は自分の決意を告げに王都に行くんだ！」

「あっ！」

ライルはそう言って、そのまま居間を出て行っちゃったんだ。この展開が信じられないボクを落ち着かせてくれたのは、イザベラさんだった。

「タバサちゃん、いいえ、ジョゼット。落ち着いたら、ソローニュに来なさい、歓迎するからね？」

「イザベラさん」

優しくボクの髪を撫でてくれたイザベラさんも部屋を出て行ってしまった。ボクは自分が、自分だけが取り残されてしまったと感じて、その場から動けなくなっちゃったんだ。

「酷いよ、そんな事言われたら、ボクはどうすれば良いのか分からなくなっちゃうよ！」

＝＝＝

魔法学院の方は新学期が始まったんだけど、ボクはあまり学院の方には顔を出さなくなったんだ。元々、学院には色々なメイジが使う様々な魔法の構成を覚えると言うのが目的で通っていたんだから、目的は大体達成したと思ったからだよ。それでも、同級生達の顔を見るためだけに月に一度は顔だけは出したんだけどね。

それで、ボクが何をやっていたかと言えば、勿論、セレナ師匠達と一緒に国内を転々としていたんだ。住所不定とかいう意味じゃなく、謎の召喚現象の研究に同行していたんだ。そして、同じく同行者には何故かルイズとルイズの使い魔のアキトも含まれるんだ。（勿論、ボクの使い魔ミコトも一緒だけどね）

どうして、この2人が同行しているかと言えば、2人が”皇帝殺し”として最強のコンビと目されているのと同時に、ルイズもボクと同じ様な力が使えるからなんだ。ルイズ本人は解呪（ディスペル）と呼んでいるけど、魔法の効果を相殺する事が出来る事には変わりが無いね。

ルイズの解呪（ディスペル）はどちらかと言えば力技で、ガサツなルイズにはぴったりだと思うよ。ルイズは学院では猫を被っていたみたいなんだけど、野外での生活に慣れているんだ。野外活動の多い兵団の警備隊の人達と交じっていても違和感が無いくらいにね。（この方面だと、ボクやアキトの方が足手まといだったりするんだ）

召喚現象の方に話を戻すけど、魔法探知の感度と言う面ではボクは飛び抜けたメイジらしいよ、実感は無いけどね。ノリス兄辺りならボクと同じものが見えるかも知れないけど、普通に歩いていて召喚現象を察知出来るのはボクだけかも知れない。

＝＝＝

「副隊長、あの森辺りに、魔力が感じられます」

「そう、こんな町の近くでね～。召喚されているのは小物かしら？」

「いいや、かなり昔の記憶だが、大蛸が現れた事があるらしぞ」

ボクが魔力を探知すると、隊長が調べてあった過去の記録からそれらしい物を探り出すという感じで話が始まるんだ。大蛸と言われて思い付くのは、屋敷で出される蛸のマリネ辺りなんだよね？　独特の歯ごたえがあって、意外といけるんだよ、スティン兄はタコヤキと言うのが好きらしけど、専用の道具が必要なのでボクは食べた事がないよ？

「こんな内陸で蛸ね～」

「ああ、お陰で特に害は無かったらしい、というか、丁度飢饉があって、良い食料になったらしいぞ？」

「あれ？　隊長は蛸が駄目なんですか？」

「俺が小さい頃は蛸なんて食べなかったからな」

「何言ってるんだか、好き嫌いが激しいくせに」

セレナ師匠の言う事は本当で、マルコ隊長は結構好き嫌いが激しいと言うのが隊員の概ねの見解だよ。ボクなんか大抵の物を食べるけどね？

「まあ良いけど、ここのゲートは放置かしら？」

「そうだな、時々食料が湧いて出ると思えば」

「駄目です！」

「どういう事、ルイズ？」

「その大蛸って、クラーケンですよね？」

「ああ、分類的にはそうらいいな」

「クラーケンは大きな個体になると、数百メイルにもなると言われています。確かにこの場所じゃ直ぐに死んでしまうでしょうけど、”近く”に人が居れば惨事になりかねません！」

ルイズは、ガサツなのにこう言った知識は豊富なんだよね、アキトに言わせるとこの辺りのアンバランスさがルイズの魅力なんだってさ！（こう言う時は、”ご馳走様”って言うらしいけど）

そのアキトは、”クラーケンって大王イカじゃ無いんだな、水中で戦うのは論外だとしても、そうだな、感電させるとか良さそうだな”とか、妙な事を言っているけど、アキトも何処か変だと思う。

「そうか・・・、別に食料に困っている訳でもないから、余計なリスクは避けた方が良いな」

「それなら、私が！」

「「ルイズ・・・」」

その場の隊員の声がルイズに非難の声を集中させたんだ。それは仕方が無いと思うよ、1月前に同じ様に始めてみるゲートをルイズが沈静化させようとして、”ちょっと間違って”召喚を制御する”部分”だけど消してしまって”ノッカー”という妖精さん?達を大量に呼び込んでしまった事があったんだよ!

別に害を及ぼすような存在じゃ無かったけど（そうじゃなかったら、隊長はルイズに任せたりはしないよ）、放置出来ないから全員集めるのに苦労したんだよね。そんな訳でルイズがゲートを沈静化するのは、ボクが解析を終えたゲートか、ボクでも対応が難しい様な大物だけに決まっているんだ。（本人が懲りていないのが、一番問題だと思うけどね）

外伝四十六話　（恐怖の大蛸）（後書き）

何処まで続けるか悩みましたが、ジョゼットの将来まで書くことにしました。

まだ続きますが、もう少しお付き合い下さい。

外伝四十六話半　（意外でもない事実）（前書き）

外伝四十六話半ＵＰします。

少しだけ読み直してみたら、見事に一話分抜けていましたので割り込み投稿します。

外伝四十六話半　（意外でもない事実）

こんな感じで、1年かけて国中の召喚ゲートを大体網羅したんだ。この時は多分今までのボクの人生の中で最も充実した時期だったと思うんだ。でも、それもボクが学院を形だけとは言え卒業した事で終わりを迎える事になったんだね。

召喚ゲートの方も一段落ついて、この国の貴族としては一人前と認められた訳だから、そろそろと思っていたらレーネンベルクの翌日の夕食後、父様から書斎に来る様に言われたんだ。テッサの替わりに新しい屋敷の住人になったミコトがボクの緊張を感じたのか、心配そうにボクの事を見ていたよ。

「ジョゼット、まあ、お前なら何の為にここに呼んだかは検討がつくだろうな？」

「はい、私の”本当の素性”の事ですね、お父様？」

「別に改まって言う事でも無いだろうし、ジョゼットには察しも付いているだろう？」

「はい・・・」

「そうだな、これはお前を娘として迎えた私が告げるべき事なのだろうな。ふぅ、この時が来るのを覚悟をしていたが、堪えるな。ジョゼット、お前の本当の名前は、”ジョゼット・トゥール・オルレアン”、ガリアのオルレアン大公の次女だ」

「はい、ありがとうございます」

「何故、貴女がこの国に来たかの事情はご存知かな？」

そっか、この時からボクはこの家の娘じゃなくなったんだ。大体分かっていた自分の素性より、こっちの方がボクには悲しかったんだ。

「いいえ、それなりの事情があったのでしょう。オデット様、いいえ、母は私を極力娘として遇してくれたのは分かっておりました」

「貴女には、シャルロットと言う双子の姉が居る、少し前までかの国には双子を疎んじる風習があってな。それが王位継承権を持つ王子の子供だと、色々差し障りがあった」

「差し障りですか？」

「そうですな、王位を争う王子に双子の子供が生まれたとなれば、その王子には”傷”が付くでしょうな。無論父が娘をとは思いませぬが、彼を推す者達がどう考えるかは・・・」

「そうですか・・・」

そうか、スティン兄はこういう背景があったから、ボクに”メイジ殺し”という目標を示したんだね。こう言った話は家庭教師の先生達も知らなかったのか、教えてくれなかったね。

「少し前までと仰っていましたね、公爵様？」

「うん？ああ、どの国にも急速な変化に付いていけない者が居ると言う事です」

「公爵様に比べれば大抵の者が頭が固いでしょうね」

ボクの知っている限り、レーネンベルク公爵程度の年齢の人間なら、カッチンカッチンな人が多いね、例外も勿論居るけどね。

「貴女にはそう見えましたかな？　私は昔から頭が固い人間でしたよ、それで、前の妻も、父も苦労させましたな」

「そうなのですか？」

そういえば、この人が父や前の奥さんについて話しているのを聞いた事が無かったね？

「ええ、貴女も自分の家で苦労する事でしょうね。ですが、私の知っている貴女なら、自分の生きる道を見つけ出せると思います」

「そうでしょうか？」

「ええ」

この人にそう言ってもらえるのは嬉しいけれど、迷ってばかりのボクが本当の道なんて探し出せるんだろうか？

「私の方からお伝えしたい事は、ああ、もう１つありましたな。貴女の姉上の婚約が発表されましたよ」

「そうなのですか、お相手は？」

「バルドー子爵の末弟と聞いております。子爵は、現ガリア王陛下

の即位に力を貸した人物ですよ？」

公爵がちょっと人の悪そうな笑顔を浮かべたんだ。確かに政治的な話は、全然分からなかったけどね！　しかし、政略結婚か、まだ見たことも無い姉上だけど、どう思っているんだろう？　もしかして、この婚約が決まったからボクの素性を明らかにしてくれたのかな。

「しかし、オルレアン大公も度量が大きいのか、娘には甘いのか、どちらかな？」

「政略結婚ではないのですか？」

自分だって、”娘”には大甘だったのにね？

「さあ、詳しい事情はご本人から聞いた方が良いでしょうな」

「そうですね、実の姉の事ですから・・・」

他人の色恋沙汰と言うのはどうもボクの想像力の外にあるらしくって、時々理解を超えることがあるんだよね。

「私からお伝えする事は、これだけですが？」

「はい、それでは、”ジョゼット・ド・レーネンベルク”としての最後の言葉になります。お父様、お母様、今日までありがとうございました！」

母様が奥の扉の向こう側に居る事位は、分かっていたんだ。

「うむ、娘を嫁にやる親の気分が分かった気がするな。いや、こちらこそ、面白い経験だったよ、ジョゼット」

「はい、父様」

「直ぐに発つのか？」

「その積りです、未練ですから・・・」

「そうか、そうだな、明日は屋敷の者だけで見送る事にする。構わないかな？」

「はい」

こんな事を予想して、学院の荷物や、旅先に持っていった日用品は荷解きしてなかったんだ。公爵もその辺りはお見通しらしいね。

「そうだ、ソローニュ候によろしく伝えてくれ、あれも強情らしいからな」

もしかして、あの話も、この時の為にだったのかな？　難しい話はやっぱり苦手だよ・・・。

外伝四十六話半　（意外でもない事実）（後書き）

結構重要なエピソードを抜かしてしまうとは、さすがに今の状況は無理があるのでしょうか？

外伝四十七話　（自虐自爆？）（前書き）

外伝四十七話ＵＰします。

苦しいですが、自縄自縛とかけていますよ？

外伝四十七話　（自虐自爆？）

でも、話はこれで終わらなかったんだ、しんみりした空気を読まずに、ボクとしては信じられない事を言い出してきた人物が居るんだ。

この事は、多くの人が予想していたんだ。ボクと”その人”の事を良く知っている、テッサとセレナ師匠は”断言”していたし、あまり知らないルイズやモンモランシーもそんな事を言っていた気がする。そして、”その人”の事を殆ど知らない、キュルケやミコトも同じ様な事を言っていたかも知れない。

「ジョゼット、本当にレーネンベルクを出て行くのか？」

「えっ？　はい」

夜中近くになって、荷物を整理している最中にボクの部屋にやってきたのはノリス兄だったんだけど、どう考えても事情を理解していないよね？（理解したくないのかな？）

「あの、ノリス様？」

「どうしたんだ、何時も通りに話して良いんだぞ？」

「ノリス様・・・」

今日のノリス兄は、駄目だね、ノリス様は特にボクの気に障る存在に思える。何故かって考えると、うん、”妹離れ”出来ていない

兄そのものと言った感じだからかな？　テッサもライルもミコトだって、きちんと自分の道を見つけたと言うのにこの人は何をやっているんだろうね？（さっきボク自身もその一歩を歩み始めた積りなのにね）

「そうだ、ジョゼット、お前さえ良かったら私のお嫁さんにならないか？」

この言葉は色々な友人達が予想した通りの物だったよ。多分いきなり言われたら思いっきり混乱したと思う。ノリス様もボクも同じ位大好きなテッサは、多分ボクがノリス様と結ばれる事を考えて自分を納得させているんだと思うし、だからこそレーネンベルクを離れる事を選んだろうね。

客観的に見て、ノリス様は最上級の男性だと思うよ、家柄、容姿、能力、そして情の深さ、どれをとっても文句を付けられる人間は居ないだろうね。もしかすると、ボクと言う間違った愛情の注ぎ先が無かったらセレナ師匠やその他の女性と結婚していてもおかしくはなかったよね？

だけど、ボクには分かるんだ、ノリス様にとってはボクは”庇護すべき妹”でしかないと言う事がね。証明する事は簡単だよ、そう、今からやってみせるんだからね。

「ノリス様、落ち着いて話しませんか？　少し散らかっていますが、そこなら大丈夫ですからお座り下さい」

「あ、ああ？」

普通に眠る為に、ベッドの上だけは何も置いていなかったのは当然なんだけど、女性の部屋に夜訪ねて来て、普通にベッドに2人で腰を下ろす事は多分極めて親しい間柄か、”家族”の間だけ許され

る事だって分かっているんだろうか？

「身体を動かしたせいかもしれませんが、暑いですね？　湯浴みしたばかりなのに、少し汗をかいてしまいました」

あ、しまった、上は着けていなかったんだ。まあいいや、少しは成長したと言っても、悲しいくらい小さいしね。（この人には赤ん坊の頃におしめを替えられた事もあったらしいし）

そう自分に言い聞かせて、思い切ってシャツのボタンを外していったんだ。そして、ちょっとだけ成長したふくらみが顕になる直前で、耐えられなくなったのかノリス様がシーツを剥ぎ取ってボクの肩に掛けてくれたんだ。予想通りだったけど少しだけ悲しかったよ、ほんとに少しだけね？

「お前、何やってるんだ、そんな娘に育てた覚えは無いぞ！」

「ノリス兄、試す様な事をしてごめんなさい。お似合いの女性とお幸せになる事を、妹として祈っています」

「くっ！　ジョゼット！」

自分の失敗を悟ったノリス様だったけど、その姿を見ている事が出来なくって、ボクはそのまま自分の部屋から逃げ出しちゃったんだ。荷物の整理は大体済んだから構わないけど、今晩は何処で眠ろう？　ミコトの客室で慰めて貰おうかな・・・。（うん、悲しくは無いよ、だってボクには分かっていた事だったから）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

最後の最後で色々疲れたけど、翌朝は普通に見送られて屋敷を後

にしたんだ。生まれてから殆どに期間を過ごした場所なのに特に何も感じなかったのは、この日を予想していたからなのか、学院で過ごした日々のせいなのか、この国中を旅した経験がそうさせるのかな？

一応、移動は列車を使うし、国王陛下にも挨拶する必要があったから、王都経由でガリアに向かう事にしたんだ。何故か王城で色々あったんだ、ペンダント一個位は構わないけど、ミコトがマジックアイテムの調整の為に暫くトリステインに残ると言い出したのは意外だったよ。（だって、ガリアにはお姉さんが居るんだし、ボクにとっては始めての国なんだからちょっと心細かったんだ）

運良く、ガリアから帰って来ていた、外交官の人達と一緒にガリア入りする事が出来たんだ。キアラさんは、近衛から人を出すべきだって言っていたけど、クロディーというお姉さん（小母さんと言っちゃいけない年齢だと思うよ？）に丸め込まれたんだ。

ボクが外交官の一団に潜り込めたのは、偶然と言う訳じゃなくて、最近は国同士の交流が盛んになって来たからという話もクロディーさんから聞いたんだけど、この女性って異常に色々な話に詳しいんだよね。ボクが誰かも直ぐに見破ってしまうし、ミコトの話まで知っているんだから。（そして、何故かボクはクロディーさんに気に入られたみたいだったよ？）

ガリアに入れると、列車の乗り換えで降りた駅でイザベラさんが迎えに来ていてくれたんだ。ソローニュ候の差し金らしけど、状況が分からない状態で、シャルロット姉様と同じ顔の人間がふらふら歩き回るのはちょっと無用心過ぎると言われてしまえば、逆らう事も出来なかったよ。（ソローニュを案内して欲しかったんだけど、それもおあずけだった）

大公領のブロワ城では、妙に懐かしく感じるお母様、そして顔と髪の色はそっくりなシャルロット姉様（何故かボクよりちょっとだけ背が高くて、ほんのちょっとだけ女性らしい身体つきだったのは納得が行かないよ、双子なのに！）が出迎えてくれた。

「お帰りなさい、ジョゼット」

「はい、ただいま帰りました、お母様！」

「お帰り、そして始めまして、ジョゼット」

「ただいまです、シャルロット姉様。あの・・・」

「どうしたの、私達双子の姉妹なんだから遠慮はいらないわよ？」

「どうしたら、お姉様みたいに成長出来るんですか？」

「えっ？」

「もう少しで良いから、女性らしくなりたいなって・・・」

「ジョゼット、私程度を目指しちゃ駄目！　目指すならあれ、可能性はあるわ！」

「はい、お姉様！」

「シャルロット、貴女、婚約発表してから変よ、母親の胸を指して何を言い出すの！」

何やら事情は不明だけど、シャルロット姉様も色々苦労しているらしい、ボクと違って髪は長くてドレスの似合うお嬢様に見えるけど、意外に面白い人なのかも知れないね。でも、姉様がこの程度なら、殆どまっ平らな胸で男性を誘惑しようとしたボクは・・・？

そっちを考えちゃ駄目だよね、お母様の体型を目標にしなきゃね！

外伝四十八話　（女性陣男性陣）（前書き）

外伝四十八話ＵＰします。

外伝四十八話　（女性陣男性陣）

こんな感じで、実家？の女性陣とは概ね良好な関係を築く事が出来たと思うんだ。大公家とは言っても、王位継承権争いに敗れたお父様が始祖になる訳で、そんなに歴史がある訳じゃない。

一方、オルレアンと言う土地は、ラグドリアン湖を挟んでトリステインの対岸になるんだ。対岸はモンモランシーの実家のモンモランシ領なんだよ。落ち着いたら、湖を渡って遊びに行きたいな。ちょっと意外なのが、トリステインだとラグドリアン湖は神聖な場所と言う感じなんだけど、ガリアではごく普通の湖という扱いなんだ。（水の精霊が何とかと習った記憶はあるけど、うん、内容はさっぱりだよ？）

話は戻るけど、オルレアンは水利に恵まれたまあまあ豊かな土地なんだ。一時期お父様が領地の整備に力を入れたので、領民からも結構評判が良いらしいんだ。ただし、レーネンベルクとは違って、ちゃんと領主と領民の関係が成り立っているよ、この辺りは、ルイズのラ・ヴァリエールと同じ印象かな？

そう、オルレアン大公家は歴史と伝統を重んじる由緒はこれから育てて行く予定のガリアの大貴族なんだ。ここがボクにとっての最初の誤算だったんだよ！

王女であるイザベラさんが、結構、親しみ易い女性だったし、お母様も2人っきりの時は普通？に振舞っていたから、てっきりガリアやオルレアンもトリステインやレーネンベルクと同じだと思っていたんだけど、全然そんなことは無かったんだ。別に上品に振舞う事が出来ないと言う訳じゃないんだよ？　単に肩がこるというか、落ち着かないだけなんだ。

そして、もう1つの誤算は、お父様、オルレアン大公シャルル様だったんだ。大国ガリアの宰相と言う事で、きっとしっかりした男性なんだろうなと思っていたし、毎年聞いていたお母様の話もそれを裏付けていたんだ。（ただ、あの歳になっても熱々な夫婦の贔屓目という要素を見落としていただけなんだよね）

「君が私の娘のジョゼットなのだな？」

「はい、お父様、いいえ、大公殿下」

「お父様でも、シャルルでも良いぞ、お前にはこれまで色々迷惑をかけた様だし、これからも多少不自由な事になるだろうからな」

「それではお父様、不自由になるとはどう言った意味でしょうか？」

「ああ、お前はトリステインに人質に出されていた事になったからな」

「そう言う話になったのですか？」

こう言った政治的な話は、聞いても良く分からないんだけどね。人質と言うと、あんまり良い印象じゃないのは事実だけど。

「そうだ、ガリアとトリステインの友好の証としてな、すまない」

「いいえ、私はそれでも構いませんが、お世話になった人達が悪く言われるのは」

「それは、情報操作の腕次第だろうな、ガリアは陛下の英断と言う

形で話が進んでいる。あちらには、切れ者が居るからな、別に心配する様な事も無いだろう」

キアラさんの事かな？　まあ、他国の話なんだから気にしても何も出来ないんだろうけどね。

「その絡みもあって、ジョゼットには暫く面倒な事が多いだろうが、我慢してくれ。替わりに大抵の我侭は許すから、何でも言いなさい」

ここまでは、お父様の言葉は大国の宰相らしい立派な物だったんだよ、問題はここからなんだ。

「それでは、時々で構いませんから、城下も見て回ることを許可していただきたいのです」

「駄目だ・・・」

「変装は得意なので、私と気付かないと思います」

「絶対に駄目だ！」

うん、〝大抵の我侭〟ってすっごく難しいと感じたよ！

「それでは、そうですね。王都リュティスを一度見てみたいのですが？」

「それも、駄目だ・・・」

「えっと、ソローニュ侯爵の所へに、挨拶しておきたいのですが？」

「それは、絶対に許さん！」

「あの・・・？」

「ジョゼット、帰ってきたばかりのお前まで、何処かへ行ってしまうのか？」

「あれ？」

「私の大切なシャルを、あいつの息子などに！」

「ジョゼット、ここからは長いから、部屋に戻っていなさい」

「はい、お母様」

それまでお父様の後ろで黙っていたお母様が助け舟を出してくれたんだけど、非常に嫌な予感しかしなかったんだよね。感覚的に言えば、蜘蛛の巣に捕まった蝶々かな？　（この例えなら、蜘蛛（ノリス兄）から逃げ出した蝶々（ボク）が、逃げ出した先で別の蜘蛛（お父様）に捕まったという事だろうか？）

＝＝＝

お母様が話してくれたのは、お父様の中々難しい立場とその心情だったんだ。お父様と現国王陛下は王位を争った仲だけど、現状は仲直りしていて概ね友好な関係なんだよ。

但し、バルドー子爵を始めとするガリアの新興貴族とは、関係改善までは言っていないらしいんだ。お父様はどちらかと言えば旧勢力を取り纏める立場だから仕方が無いらしいけど、バルドー子爵とはやっぱり犬猿の仲らしいんだ。

それなのに、シャルロットお姉様とバルドー子爵の息子さんがどう言う経緯（お母様も知らないらしいし、お姉様はこの話になるとフニャフニャになって要領をえないんだよね？）か恋仲になってしまい。仲が更に悪くなりかけた所で国王陛下の仲裁が入り、”婚約”まで一気に話が進んでしまって、お父様が壊れちゃったという流れらしいんだ。

お母様は、その内気にしなくなるわと言っていたけど、それが何年先になるか多少不安だったりする。恋愛と言う物を知っているけど、分かっていないボクには丁度良い機会だと思い込む事にしたよ？

ボクが帰ってくるタイミングとしてはおかしくは無かった筈だけど、ちょっとだけ間が悪かったみたいだね。如何にも良家のお嬢様と言ったお姉様だけど、こんな事情があったからボクをすんなり受け入れてくれたのかと、邪推したくなるよ。

こんな訳でオルレアンの男性陣とボクはあまり相性が良くないみたいだ。ああ、男性陣には、変態！じゃなくって、クリストフ・バルドーも含まれるんだ。

この変態との出会いは最悪だったよ、日も暮れた頃に、魔法で窓から侵入してきた男に気付いたから、ごく普通の対応をしただけなんだけどね。

「誰だ？」

「あれ、シャルロット、もしかして髪を切ってしまったのかい？あんなに綺麗だったのに」

お姉様の知り合いかなと思ったんだけど、貴族の格好じゃなくて、

普通の平民の格好だったから、警戒を解く訳には行かなかったんだ。

「誰かと聞いているんだ！」

「あれ、もしかして背が縮んだ？」

「なっ！」

そう言ってその失礼な男はボクの頭に手を乗せ様としてきたので、反射的に投げ飛ばしちゃったんだよ。ボクとした事が簡単に接近を許すなんて、気が緩んでる証拠だね！

「ぐぇ」

カエルっぽい呻き声を上げたその男を取り押さえたんだけど、魔法で動けなくした方が良かったかなと思ったよ？　でも別に警戒する様な相手とも思えなかったからね。でもでも、その男が発した言葉は決して許されない言葉だったんだ！

「あ、あれ、シャルロット、君、胸が小さくなった？」

「・・・、死ね！」

この男は、完全にボクをお姉様を勘違いしていたらしい、テッサやライルやノリス兄なら同じ格好をしていても絶対間違えないと思うんだけどね！　勿論、殺しはしなかったけど、軽くおとして、腰紐で縛り上げると人を呼んだんだけど、そこでやっとこの男の素性が分かったんだ。

外伝四十九話　（婚約者は変態）（前書き）

外伝四十九話ＵＰします。

外伝四十九話　（婚約者は変態）

「えっ、これが”クリストフ・バルドー”？」

「はい、姫様、いえ、シャルロット姫様の婚約者のクリストフ・バルドー様に間違いありません」

「これって、一応貴族だよね？」

「あの、”これ”はお止めになった方が？」

「ああ、そうでしたね。ありがとう」

この家の人は使用人も含めて礼儀や言葉遣いに少し五月蝿いんだよ。当然の様に男性の格好なんて禁止だし、自分の事を”ボク”と呼ぶ事だって聞かれたらお父様かお母様辺りにお説教される気がする。（一応、普通の貴族として恥かしくない程度の礼儀作法は大丈夫だけど、四六時中だと肩が凝っちゃうんだよね）

「この方は、どうも”平民暮らし”が長かった様でして・・・」

「それは、平民の方々に失礼ですよ」

「申し訳ありません」

殊勲に深々とお辞儀をする使用人の男性だったけど、ボクの真意は理解していないだろうね、”こんな男と一緒にされたら普通の人は迷惑に感じる”と思ったから言った言葉だったんだけどね！

「この方、どうしましょう？」

「あの、何時も使われている客室がございますので、そちらにお連れしますが？」

「私が運びますから、案内してくれる？」

「・・・、はい」

うーん、ボクが運んじゃいけないみたいだけど、言ってしまったから仕方が無いね。身体強化の魔法は当然効いているから大抵の人間よりは力持ちの筈だから、ボクとしては当然の提案だったんだけどね。気を失った人間って結構重いんだよ？

ボクがまだ入った事の無い客室のベッドに”これ”を横たえると、お姉様が慌てた様子で駆け込んで来たんだ。何故そんなに慌てているんだろうと思ったら、

「クリストフ様が暴漢に襲われたと！」

と言う第一声で大体見当がついてしまった。誰かが気を使って捻じ曲げた情報をお姉様に伝えたんだろうね。”これ”の為か、ボクの為かは微妙だけどここは話を合わせておこう。

「お姉様、落ち着いてください」

「ジョゼット、どうして貴女が此処に？」

「はい、私達が偶然通りかかったので」

「そうですか、良かった」

そう言いながらお姉様が、”これ”の髪を少し躊躇いながら撫でるのを見ていると、本当にお姉様は”これ”が好きなんだなと思えてしまったんだ。本当ならお姉様の目を覚まさせたかったんだけど、どうも無駄に終わる気がするよね？

「お姉様、この方とはどうやってお知り合いになったのですか？」

「あら？　ジョゼットにもそんな事に興味があるのね！」

うん、この質問をしちゃいけないのは分かっていたんだ、でも、妹として姉の恋愛事情に興味があったのは事実だよ。すっごく長くて、普通に後悔する結果になったんだけどね。（この辺り、お姉様はお父様の娘なんだなって納得出来た気がするよ！）

簡単に纏めると、ソローニュ候夫人の招待でソローニュに行ったお姉様が”偶然”ソローニュを訪問した”これ”と出会ってしまったらしいよ。えーっと、何故か出会っていきなり風系統魔法で”これ”を吹っ飛ばしてしまう辺りはボクとお姉様が姉妹だという事の証明だよね？　お姉様に吹っ飛ばされた”これ”が何故いきなりお姉様に求婚したのかは全く理解できないけどねっ！

お姉様が、”これ”の求婚を受けたのも謎だけど、ボクの見る限りこの城の中で大切に育てられた弊害だと思うよ。同じ事をボクにしようなんてお父様も懲りない人みたいだ。妙な貴族と政略結婚させられるのは嫌だけど、このままだとずっと独身決定かも知れない。

この辺りは、まあ、笑い話で済むんだけど復活した”これ”がボクの事を見てとっても怯えたのには納得行かないよ！　どうして、下手をすれば死んでた可能性がある魔法を使われたお姉様に求婚し

て、死なない様に投げ飛ばしたボクには怯えるんだろうね？
　そして、お姉様が胸のサイズを気にしていたのが、”これ”の好みだったからと言う話を聞いて、ボクの中で”クリストフ・バルドー”という人間の評価は、”これ”から”変態”にランクアップ（ダウン？）したんだ。

　お姉様はボクが、”変態”に批判的な事を感じたのかしきりと”変態”の良い所をボクに教えてくれるんだけど、心が広いとか、身分に拘らないとか、意外に優秀とか、ソローニュ候と仲が良いとかは、ボクにはどうしても認められないんだよね。
　魔法で攻撃された事を許してもらった事で心が広いと勘違いしていると思うんだけど、”変態”の場合は攻撃魔法を受ける事で快感を覚えるんだよ、変態だからね！
　身分に拘らないなんて、ボクにとっては当然の事で、平民の皆と一緒に暮らしていたのなら別に極普通の事だと思うんだ。この城に居ると、自分の常識を疑いたくなるのは事実だけどね。
”意外と優秀”とか言っちゃってる時点で、本当に優秀なのか疑いたくなるし、ソローニュ候に関して言えば彼は昔から誰とでも仲良くなったのをボクは良く知っているんだ。

　そんな感じで、ボクにとっては”変態”は”変態”でしか無いんだけど、お姉様の幸せそうな顔を見ていると何も言えなくなっちゃうんだ。国王陛下の意向があってお父様も反対出来ないし、お母様は娘が幸せになるならと賛成している状況じゃ、次女の出る幕なんて無いんだけどね。精々小姑として、義兄様（ヘンタイ）に嫌がらせとする事にしよう、この城に居ると色々ストレスが溜まるから丁度良いよ！
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

こんな感じで、ボクにとっては忍耐の一年が過ぎていったんだ。
相変わらず城からは一歩も出られないし、自分をボクと呼ぶ事も出来ない、貴婦人らしくしていて身体を動かす事も自分の部屋の中だけ、時々イザベラさんがやって来て色々話を聞かせてくれるのが救いと言った状況が続いたんだ。

先日、お姉様の結婚式が行われて、”変態”が城の中に居るけど、”変態”を苛めてもあまり気が晴れないんだよね。お姉様の結婚でボクを取り巻く状況が変わるかと期待していたんだけど、あんまり変化しなかったんだ。未だにミコトはトリスタニアを離れられないみたいだし、ボクは今のボクが本当のボクだと思えない日々が続いていたんだ。

最近は、学院時代の友人達が話していた”白馬の王子様”や、お姉様が好きな”イーヴァルディの勇者”を待ち焦がれる乙女の様な状態だったりするんだよ。こんなのボクに相応しいとは思わないけどね。そろそろ我慢も限界で、テッサを見習って城出でもしようかと思い始めた頃、お父様が妙な話を持って来たんだ。

「武闘大会ですか？」

「ああ、以前から計画はしていたんだが、なんとか開催の目処が立ったからな。武闘とは言っても、メイジ同士の決闘形式での対戦も予定しているぞ」

「そうですか、ですが、どうしてオルレアンで？　確か義兄様には、大公領の兵力は最低限にする様にとはなしていらっしゃいませんでしたか？」

「そうだな、だが、最近この国や周辺諸国ではこう言った武術を競

う催し物が結構盛んなのだ。基本的に他の領主の子弟や部下ばかりだからな、登用すると言う話も出来ないし、まあ、娯楽の一種と言った所だ」

「そんなものが流行っているとは知りませんでした」

「何だ、興味が無いのか？」

「いいえ、多少はございます」

ボクの育ちを知っているお母様はお父様の横でニコニコしているよ、興味はものすっごーくあるけど自分が出場出来ないのが一番の不満かな？　大貴族の令嬢なんてなるものじゃないね、昔のルイズが羨ましいよ！

お父様が持っている出場出来る人間の条件が書かれた文書だけど、参加費や保証金とか後援者の身分とか色々条件があるよ。１つ妙な条件が入っているけどね。

「お父様、この３０歳以上に限ると言うのは、何か理由があるのですか？」

「うん？　それはな、やはり戦いを観戦すると言うなら、それなりの戦いを見たいだろう。やはりある程度経験を積んだ人間の方が向いているだろう？」

「はい、そうかも知れませんね」

いや、ここまで露骨にやっておいて理由を説明できるお父様もある意味大物だよね？　お母様はこっそり苦笑しているから、何と言

うか滑稽に見えなくも無いよ！

１０歳も歳が離れていれば、一目惚れとかの心配も無いって考えているのかな？　この城に若い男性が居ないのは、年頃の娘を持つ父親の心理としては分からないでもない（本当は全く理解できないけどね！）んだけど、今回はやり過ぎと言う気もするよ。今のボクの状況を改善してくれるなら２０歳年上でも我慢出来る気がする。

外伝五十話　（前哨戦）（前書き）

外伝五十話ＵＰします。

外伝五十話　（前哨戦）

お父様の目処が付いたは本当だったらしくって、あの話を聞いてから二月足らずで”オルレアン魔法武闘大会”が開催される事になったんだ。

最初は予選が行われて、予選を勝ち残った者と特別枠の者で本戦を戦う形になるんだ。特別枠と言うのはそれだけの後ろ盾と保証金を用意出来た者だけが予選を免除され仕組みなんだけど、金貨１００枚とかちょっと信じられないよね？

この武闘大会というのはある意味、賭け事だったり、娯楽だったり、自分の持つ駒を自慢する場だったりするんだ。メイジの部では使える魔法はラインまでで、平民の部で使われる武器は刃を潰した物なので死者は殆ど出ないのが救いかも知れないね。

「武闘大会に関しての裏情報はこんな所ですよ」

「そうでしたか、私の無聊を慰める為に人々が戦うと言うのは納得行かなかったですが、そう言う事情なら純粋に楽しもうと思います、ソローニュ候？」

「イザベラからは色々聞いていますよ、私からの意見などは貴女のお父様は聴いてはくださいませんからね」

「もしかして、この武闘大会はソローニュ候の提案ですか？」

「はい、オデット様が、大公妃様が賛成してくれなければ実現しなかったでしょうね」

「ソローニュ候も人を出しているのですか？」

この人はそう言う事は嫌いそうだけど、そうじゃなければここに居るのはちょっとおかしいからね。

「ええ、部下の1人が是非に出たいと言い出しましてね」

「ソローニュ候の部下の方ですか？　若い方が多いと聞いていましたが？」

「”彼”も十分若いですけどね、年齢制限にはぎりぎり引っかかりませんよ、おっと、そろそろ本戦が始まるみたいですね？」

「はい、私も自分の席に戻る事にします」

そう言って、その場を離れようとしたボクにソローニュ候が小声で妙な事を言って来たんだ。

「ジョゼット、テッサとミコトに感謝をするんだよ？」

「えっ？」

「それと、何が起こっても驚かない事」

「それって」

「ああ、妙な意地を張るのも止めるんだね」

「ライ」

ソローニュ候は子供の頃を思い出させるような笑顔を残して、その場を去って行ってしまったんだ。上手く逃げられた感じだよ、追求すれば何を隠しているのか聞きだせるかと思ったけど、彼も色々自分の欠点とかを補おうとしているのかな？

ボクは何だか落ち着かない気分のまま、主催者席に戻る事にしたんだ。そして、本戦の参加者紹介が始まってソローニュ候の謎の言葉の一部がよーっく理解出来たよ！

「ソローニュ侯爵家家臣、ノリス殿～」

呼び出し係の小父さんがそんな大声を張り上げたんだけど、その人の姿を見た時点でボクは混乱状態だったよ？　ノリスと言う名前は珍しくも無いけど、銀髪碧眼で２０代後半から無理すれば３０歳に見える人物となるとあまり見かけないよね？

斜め前に居るお父様の表情は見えないけど、そのノリス殿と言うのが、あの”ノリス兄”だとは気付いていないだろうね。直ぐ横に座っているお姉様は他の大会参加者を見る目と変わらない目を彼に向けている。その隣の”変態”とは一瞬だけど目が合ったよ、これは何か知っているね！　そして、お母様は明らかにボクの方を見て”ニコニコ”しているよ、見なきゃ良かったね？

これにお母様が関わっているのは確実らしいけど、何故だろう？

そういえば、お母様は去年も今年も避暑と称してトリステインに行ったよ、ボクに会うという目的は無い筈なのに。

そんな事より、ノリス兄が変装もしないで実名（レーネンベルクとは名乗っていないけど）でこんな所に顔を出すなんて信じられないよ。大体、トリステインの公爵家の跡取りが、どうしてガリアの侯爵家の家臣になれるんだろう？

ノリス兄が出奔？とか信じられないし、まさか父様いや、レーネンベルク公爵がそれを許すとは思えないよ。トリステイン国王としても、自国の貴族の1人が他国で堂々と騒ぎを起こしたら困った事になるだろうしね。（普通じゃないスティン兄がそれを気にするかは別だけど）

というか、ノリス兄はそもそも何をやりたくって、この場に居るんだろうね。ボクの中では、テッサに告白でもされて婚約とかいう想像まで結構リアルに感じられていたんだけどね。まさか？　ううん、その可能性はボク自身が、でも・・・？

そんな事を有り得ない妄想を考えてしまっている間に、戦いが始まってしまったんだ。ノリス兄がどんな意図でここに来たのかは分からないけど、その戦いを見届けるのはボクの責任だと思う。単に会いに来てくれただけでも十分に嬉しいし、普通に会おうとしたら、絶対お父様が・・・、謎は深まるばかりだよ！

＝＝＝

ソローニュ侯爵家家臣ノリス殿の戦い方は、メイジとしての基本を押えた物に見えたよ、例えるとトリステイン魔法衛士隊辺りの戦い方に近いかも知れないね。ただ、魔法兵団の警備隊や空軍特殊部隊で習う様なテクニックも使っているし、何故かガリアでしか使われない呪文にもきちんと対応出来てるんだよね。

兵団の警備隊辺りなら、ノリス兄はセレナ師匠のボク達への指導を見ていたのだから知っていても不思議じゃないんだ。魔法衛士隊に関しては、次期公爵としての立場を利用すれば何とか教えてもらえるかも知れない。だけど、ガリアでしか使われない攻撃魔法なんて、簡単に対応方法なんて思いつかないよね？（普通の勉強は兎も

角これだけは押させておかないとと思って、何人かの教師役を雇ってもらったから、ボクは大丈夫だけどね）

一応ノリス兄もスクエアメイジなので、苦戦はするものの順調にトーナメントを勝ち上がって行ったんだ。この国の伝統的な一対一の決闘作法に則って戦う参加者達はほとんどノリス兄の相手にならなかったよ。（ちなみにボクが相手するのが一番楽なタイプだね、自爆させるのが楽だと思ったよ）

逆にノリス兄と同じ様な戦い方をする人も居たけど、やっぱりその人にはノリス兄も苦労したね。ノリス兄がスクエアメイジじゃなかったら早々に魔力切れを起して居たかもしれないよ。武器を持ち出す参加者はメイジの部ではさすがに居なかったけど、魔術と体術をきちんと使いこなせる参加者同士の対戦はやっぱり時間がかかったから。（後で知ったんだけど、魔法を中心に戦うのが旧来の貴族派で、魔法と体術を混ぜて戦うのが新興貴族派の特徴らしいよ）

それでも、ノリス兄は順調に勝ち進んで行ってとうとう決勝になったんだけど、どう言う訳かそれまでと戦い方を変えたんだよね。それまでは普通に攻撃に向いてる風魔法中心だったのが、いきなり防御重視の岩石肌（ロックスキン）を使ったんだよ！この呪文は土のトライアングルスペルだけあって鉄壁の防御力を得られるんだけど個人にしか効果が無くってあまり実用的じゃないんだよね。（別に皮膚が岩になったり、動きが阻害されたりしないけど、触ると皮膚の上に岩の層がある感じなんだよね）

ノリス兄は見えない岩の鎧を纏って対戦相手に突撃したんだ、相手はいきなり戦法が変わった事に対応出来ずに、その何でも無い体当たりをもろにくらって弾き飛ばされて、そのまま動かなくなっちゃったんだ。あれは受身が取れなくって脳震とうでも起したのかも

しれないね。勿論ノリス兄も牽制の火魔法を2回ほど受けたんだけど防御力が勝ったと言う感じで無傷だったよ。

　見ていられない様な強引な戦い方だったけど、優勝した事には変わり無く観衆から拍手が送られたんだ。ただ、ボクにはノリス兄の行動がおかしいのが分かったんだ。どう言う訳か戦いは終わったのに、岩石肌（ロックスキン）を解除していないんだよ。

「ノリス兄は何か企んでいる」

「ジョゼット、どうかしたの？」

「いいえ、お姉様、何でもありません」

「貴方、随分とあのノリスという男性の事を気にしているわね？」

「そうでしょうか？」

「ええ、もうはっきり分かるわよ？」

「お姉様、何か騒ぎが起きるかもしれませんが、大事にはならないと思いますので、慌てないで下さい。義兄様も宜しいですか？」

「ん、ああ」

「分かったわ」

　ノリス兄が何か企んでいるのは確かだけど、危ない事じゃないのは間違いないと思うんだ。有り得るとしたら、うん、有り得ないと思うけどボクを攫って逃げるとか・・・？　そして、心の中でずっ

とそれを望んでいた自分が居た事を、もう否定する事は出来なくなって居たんだ。

外伝五十話　（前哨戦）（後書き）

まだ前哨戦なんですよ？

外伝五十一話　（兄妹衝突！）（前書き）

外伝五十一話ＵＰします。

外伝五十一話　（兄妹衝突！）

「ソローニュのノリスと申したか、見事な戦いであった」

「いいえ、大公殿下、自分の不甲斐無さを思い知らされるばかりでございます」

「いやいや、随分と謙虚な事だな。家臣は主に似ると言った所かな」

「恐れ入ります」

「通常ならば、主に報奨金を出す事で話は終わるのだが、大公たる者がそれでは示しがつかぬ故、そなたに褒美を取らすことにしようと思う。無論侯爵を始め、参加者の後援者には話が通してある遠慮無く希望を申すが良い。大抵の望みは叶えてやろう」

出たよ、お父様の”大抵の”が！　でもボクにはそれより、ノリス兄がお父様の言葉を聞いた瞬間ボクの方に視線を向けたのがすっごく気になったよ、それに心臓がドキドキするし！

「それでは、私の希望を申し上げます」

「うむ」

「お嬢様、ジョゼット様に」

に？　”を”とか”と”とかじゃ無いんだ、ジョゼット様にプロポーズする事をお許し下さい？　変な所で言葉を切るから気になって仕方が無いよ！　あっ、お父様から妙な気迫を感じる、呪文も唱

えていないのに魔力が動いているのが見えるんだけど？

「ジョゼット様に決闘を申し込みたいと思いますが、お許しいただけますか？」

「「はぁ？」」

ノリス兄の願いと言うのは、その場に居る大抵の人間の予想を裏切る物だったんだよ！　どう考えても大会の主催者の娘に決闘を申し込むなんて正気とは思えないよね？　ただ、じっと見ていた訳じゃないけどソローニュ候の周りに動揺の気配は無いし、何故か”変態”も驚いた様に見えない。（お姉様は、”まあ！”とか言ったっきり動かなくなっちゃったけどね）

不思議な事にお母様も、ノリス兄の願いに驚きを隠せなかったみたいだよ？　裏で動いているんだと思ったんだけど、ここまでは知られていなかったのかな？　お父様は、固まっていますよ、この”精神的な固定化”が解ける前にボクは動かなきゃ駄目だね！

「良いでしょう、その挑戦お受けいたしますよ、ノリス様！」

まあ、深く考える前に身体が勝手に動いちゃったんだけどね。ボクは少し高くなっている観覧席から苦も無く飛び降りたんだ。（ボクの勘がこう言う事態を何となく予想していたのかも知れないね）

うん、苦も無くは嘘だね、一応公式の場と言う事で実用性ゼロの上等なドレスと着ていた物だから、裾が少し気になったよ。でも着替えて来ますとは言えない状況だよ！　着替えて帰って来たら、きっとノリス兄とは2度と会えなくなっちゃうだろうしね。

「借りるよ！」

「姫様！」

会場を警備していた兵士から強引に剣を奪い取って、そのままノリス兄の下へ駆け寄って行ったんだけど、久々に見るノリス兄は少しだけ逞しく見えたね。

「そんな格好で、決闘をする積りか？」

「うん、どんな時に戦いが始めるか分からないからね」

「そんな事をセレナが言っていたな、拳銃は持っているんだろう？」

「うん、だけどそんな無駄な事はしないよ」

お互いにだけに聞こえる声で、こっそり会話をしたけど、ノリス兄は以前とかなり変わったなって感じたよ？　拳銃程度じゃ防御を固めたノリス兄には効かないだろうし、既に発動している魔法に干渉するのは相殺するしか手が無いんだ。こうなったら、魔力比べかな？　そう考えて、杖に意識を集中して、呟く様に呪文を唱え始めたんだ。（始めの合図の前に呪文を唱えるのはルール違反だけど、ノリス兄の方はもう魔法が発動した状態なんだから見逃して欲しいよ）

「行くぞ！」

「良いよ！」

ノリス兄が、ボクの呪文の完成を待って声を掛けて来たのでそれ

に応えたけど、決闘と言うより練習試合という感じだよね？（さっきまで試合を仕切っていた、審判の小父さんも無視だしね！）

ボクは、左手の剣に這わせたブレードの魔法の効果を確認したんだ。杖剣とかと違って普通の剣だとイマイチ効果が上がらないみたいだ。これで、ノリス兄の防御を破れるかな？　魔力の相殺を一点集中すれば、ってその手はボクと同じ様に”見える”ノリス兄には効かないかも知れないけど。

そんな無駄な思考に時間を使ったのが１つ目の失敗だったんだ、そして、もう１つの失敗は思ったより身体が鈍っていた事なんだ。

「くっ！」

逃げ回ってノリス兄の魔力と体力の消耗を狙うのも駄目みたいだよ！　直ぐそこまで迫ってきたノリス兄に対応するには、ノリス兄の目的を完全に見切って、かわした上で逆襲するしか無いよ！逃げ回る事を諦めて、ノリス兄の目標を見切る事に集中したんだけど、

え～～～っ！

慌てて、剣を振ったけど当然簡単に弾かれちゃったんだ、そして、ボクは、ボクは・・・。

外伝五十一話　（兄妹衝突！）（後書き）

短くてごめんなさい、凄い所で終わっていてごめんなさい！

ここまでしか書けませんでした。

外伝五十二話　（子供達）（前書き）

外伝五十二話ＵＰします。

長かったジョゼットのエピソードもこれで終わりです。

前回の投稿は外伝四十六話半なので、読んでいない方は先にそちらを読んで下さい。

外伝五十二話　（子供達）

「ずっとこうしたかった、最初は奴に奪われてしまったけどな」

そう耳元で囁くノリス兄の声が何だか甘く聞こえた。ボクが今どんな状態かと言うと、強引に抱きしめられて、その、き、キスされているんだ。学院の同級生（具体的にはモが付く女生徒）が、愛する男性に抱きしめられてキスされると、天に昇るような気分だとか言っていたけど、本当の事だったんだ～。

別にノリス兄の事を愛しているとまでは行かないし、始めてのキスなのにこんな気分になるなんて、ボクの心と身体はどうしちゃったんだろう？（抵抗しちゃったから歯が当たる様な強引なキスなのに！）

ボクの中では、恥かしさや嬉しさ、懐かしさや愛おしさがないまぜになって、どう言う訳か涙が溢れてきちゃった。その涙が流れた跡を、強引なキスを中断したノリス兄がその舌で拭い取ってくれたんだけど、それさえ少しだけ気持ち良かった。（本当にボクの身体はどうなっちゃったんだろ？）

「少しふっくらしてきたな？　ああ、それで妙に動きが鈍かったんだな」

「ノリス兄の、むぐっ」

”えっち”と言おうとした所で、また強引にキスされちゃった。今度は優しいキスだったけど、やっぱり身体から力が抜ける感じがするよ～。（言い訳をさせて欲しいよ、ここの料理は手がかかって

いて美味しいけど、お母様もお姉様も残すことを何とも思わないから、つい無理して食べちゃうんだ。以前みたいに身体を動かしていれば良かったんだけど、良家の令嬢としてはそう言う訳にも行かなかったから、色々な所に・・・。嬉しいような悲しいような微妙な気分なんだ！）

「今の私の身分は、ソローニュ候の部下でしか無い。勿論、”ジョゼット・トゥール・オルレアン”とは全く関係の無い人間だ」

「関係が無い人間がどうして、こ、こんな事するの？　それに、レーネンベルクはどうしたの、公爵や陛下は？」

「質問が多いぞ？　父や兄は勝手にしろって言ったからな、勝手にしているんだ。それに、関係無いというのは変だったな、これからお前を奪い取るんだから、無関係と言う訳じゃない」

勝手にしろとか無関係じゃないとか、全然訳が分からないよ！
ただ、その悩みはそんなに長く続かなかったよ？

「ほう、何処かで見た事があると思ったら、貴公が”ノリス・ド・レーネンベルク”だったか、娘が長らく世話になったな」

いきなり？話に割り込んできたのは、お父様だったんだけど、内容は兎も角口調はうーん、生涯の敵を目の前にした時みたいだよ。
（ちょっと夢中で気が付かなかっただけだよ！　ボクはそんな女じゃ無いんだ、本当にね！）

「いいえ、大公殿下、私はレーネンベルクを捨てた人間です。それはガリアの宰相閣下なら良くご存知でしょう？」

「そうか？　それならば何処の人間とも言えない人間に大事な娘はやれんな！」

「それならば、私がレーネンベルクを継げば結婚を許してもらえるのですか？」

「貴族がそんな恥知らずな事をするな！」

「ジョゼットの為なら、私はどんな恥知らずにでもなります！」

「地位や領民を簡単に捨てたり拾ったりする人間に、娘をやれる筈も無いだろうに！」

うーん、分かっていたけど、全然論理的じゃないよね。何処かの国の王様が、間違ってボクに求婚したとしても絶対にお父様は拒否すると思うよ！

「どうやったら、ジョゼットをくださるんですか、義父さん！」

「貴様に”おとうさん”等と呼ばれる謂れは無い！　ジョゼットは私の娘だ、誰にも渡さん！」

「ほう、それならば予定通り、奪って行くだけだ！」

意外に冷静に見えたノリスあ、いえ、ノリスも実は結構混乱していたのかもね？

「良かろう、ジョゼットが欲しければ私を倒して行くのだな！」

何だろうね、この流れは？　学院の同級生の”女の子”達が”私

を巡って2人の男性が争うって状況になってみたいわ～”とか話していたけど、これって何か違うよね!?　（父親と兄だと思っていた人だとか、どういう状況なんだよ!）

ボクがあまりの事に呆然としている間に、お父様とノリスの無駄に”熱い”戦いが始まっちゃったんだよ。観衆の皆もさっきの大会より盛り上がっている気がするし、こんな場合ボクはどうしたら良いんだろうね?

お父様はさすがに実戦から離れて久しいし、ノリスの方もやっぱり魔力切れが近いみたいだからボクはもう少しヒロイン役に浸って居たかったんだけど、

「これが最後だ!」

「良かろう、父親の力を思い知らせてくれる!」

と、何故か息がぴったりで2人とも切り札を出したんだよ!

ノリス、城がある丘に山津波（ランドスライド）をかけるとこの辺り埋まっちゃうよ?　それにお父様、その魔力で大竜巻（トルネード）を使うとこの辺り一面が荒地になっちゃうと思うけど?

さすがに周囲の人達が止めに入りそうになったけど、間に合わないね?　仕方が無いから、ボクが止める事にしたよ。ガリアに帰って来て、始めて使う”メイジ殺し”の力が、こんな機会になるとは思わなかった。（スティン兄やセレナ師匠もこんな事態を想定していなかったと思うよ!）

結果として、お父様が何処かに飛んで行ったよ（途中からの干渉だったから、仕方が無いよね?）、ノリスの方はボクの干渉に気付

いて直ぐに呪文を唱えるのを止めちゃったので無傷だったよ。（ちぇ、少し頭を冷やして欲しかったのにね？）

「ジョゼット、行くぞ！」

「ちょっと待って」

ボクはお母様の方に向かって一礼すると、自分の気持ちを素直に言う事にしたよ。（大きな声でね！）

「お母様、短い間でしたがお世話になりました！」

少し離れていたから、お母様がなんと言ったのか聞き取れなかったけど、少し寂しそうに、それでも笑顔で手を振ってくれたよ。隣のお姉様も何だか嬉しそうだし、義兄（変態）様は何故か異常に怯えていた。（最後まで失礼な人だね！）

「ありがとうございました！」

そうもう一度大声でお礼を言うと、何故か観衆から拍手が沸き起こったんだよ？　えーっと、この人達から見れば、今から大公家の娘が攫われそうになっている筈なのにね？

「行くぞ、邪魔者は”お前”が排除してくれたけど、あれはしつこそうだからな」

「あれ、そう言う事になっているの？」

「ああ」

確かにお父様はきっと諦めないだろうな～。お母様が説得してくれればいいんだけどね。ボクはノリスに手を取られて、馬に乗りそのままソローニュ候領へ向かったんだ。ソローニュ候には迷惑がかかるね、昔からだけど、本人は気にしないんだろうね。

「ノリス、これからどうするの？」

「ああ・・・」

「ガリアには居られないよ？」

「そうだな・・・」

「今更、トリステインにも帰れないよね？」

「・・・」

「もしかしてゲルマニアに行く積りだった？　皇帝陛下には貸しがあるから何とかなるかもよ？」

「それも良いかも知れないな・・・」

おかしいよ、絶対におかしい！　まさか、これからの事を考えて無かったとか？　有り得る、ノリス兄なら有り得るよ！

「ノリスにぃ～？」

「・・・」

こんな人にボクの将来を任せて大丈夫なのかな？　そもそも、領

主としてとか、メイジとしてとかなら兎も角、ノリス兄個人がどうやってガリアまで来て、知り合いとは言ってもソローニュ候の家臣になれたんだろう？

ふと、ソローニュ候の謎の助言が頭に浮かんだんだ、〝テッサとミコトに感謝をするんだよ？〟だったかよね？　そうなると、ノリス兄を手引きしたのはテッサなのかな？　ボクが居なくなったんだから、ノリス兄に求婚でも何でもしちゃえばよかったのに・・・。

（本当に良い幼友達だよね！）

あれ？そうするとミコトは？　というか、ミコトをどうしよう？

このままボク達が何処かへ行ってしまったら、ミコトはどうするんだろう？　出来れば一緒に来て欲しいけど、交信だけで呼び出すのは難しいかな？　ミコト自身に魔力は無いからどうしても他のメイジが同席する形になるしね。

「あ、そうか！」

「どうした、急に？」

「うん、ミコトには分かっていたんだと思ってね！」

「はぁ？」

「〝一度〟、トリステインに〝帰ろう〟」

「だが・・・」

「良いよね！　ボクの為に、〝恥知らず〟になって欲しいんだけど、ダメ？」

ボクも久しぶりに（対ノリス兄用の）切り札を出す事にしたよ、ボク達の将来がかかっているんだから遠慮はしないよ！

「任せてくれ、腰が痛くなる位、頭を下げて見せるぞ！」

「うん、でも程ほどにね？」

うん、経験は無いけど、その、男の人が腰が痛くなる事って、きゃ〜！！！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

結局、トリステイン国王陛下とレーネンベルク公爵夫妻（義父様と義母様、声に出すと昔と変わらない呼び方だね）に丸め込まれる形で、ノリスがレーネンベルク公爵位を継いで、同時に正式にボクとノリスの結婚式が行われる事になったよ。ボク達がトリステインに戻ると同時に義父様が倒れるなんて出来すぎ（というかボクにさえミエミエ）だけど、義父様がもうお歳なのは間違いが無い。

レーネンベルク公爵家に跡取りは必要だし、出来れば義父様にボク達の子供を見て欲しいな。あの長い事子供に恵まれなかったスティン兄にも男の子が生まれたし、もう直ぐ女の子が生まれるらしい。スティン兄の希望では子供達はレーネンベルクで育てたいと言っていたよ。

そうでなくても、子供が一杯のレーネンベルクの屋敷が更に騒がしくなるんだね。ボクの人生は色々あったけど、ココがボクの居場所だって実感出来る様になったのは、ボクとノリスが本当の意味の絆で結ばれたからなんだろうね。

この幸せな日々が続く事を信じて、毎日を大切に生きて行こうと思う。多分、ボクやルイズと同じ様に苦労すると思う”子供”達と一緒にね！

そうそう、子供達を連れてガリアに行く予定があるんだ、その時はきっとボクが生まれた国に恩返しが出来ると思う。それを機会にノリスとお父様が仲直りしてくれると良いんだけどね。

外伝五十二話　（子供達）（後書き）

ここまでのジョゼットの話には、本編には終盤になったのに所々伏線が隠れています。

そして、次の外伝五十三話はあの人に焦点が当たりますが、ちょっと妙な事をやる予定なので次回投稿は未定です。

今の感触だと3～4日で書きあがる予定ですが、どうなるでしょうか？

外伝五十三話　（精霊さん？）（前書き）

外伝五十三話ＵＰします。

外伝五十三話　（精霊さん？）

私達が、ゲルマニア皇帝の居城に侵入したのは、普通の人間ならそろそろ今日と言う日を終えて明日に向けて寝床の準備を始める頃だった。私だけならば、このシャルロッテンブルク宮殿に侵入することは難しくないのだけど、他の精霊と喧嘩をする積りも無いから、遠慮しておいたの。

宮殿は既にこちらの陣営の支配下に入っている様だけど、エルフと精霊を擁する皇帝と宰相が残っているの。私達は、ルイズちゃん達と一緒に皇帝の方に当たる事になったわ。そこには確実に土の精霊が居るそうだからね。

＝＝＝

『キュベレー、気が付いた？』

『はい、あちらの精霊に見つかりましたね』

『ええ、でも予想通り、こちらにはエルフは居ないわね。水の精霊の気配はないし、ノトス貴方の方は？』

『うーん、風の精霊も居ないと思う？』

こちらは、まだ自我を持ってそれほど時間が経っていないせいか、イマイチ頼りにならないのよね。まあ、彼？（元々精霊に性別は無いのだけど、どうもこの子は中性的なのよね）の言っている事は間違っていないだろう。火の精霊の気配も無いし、四大の精霊と契約出来ない程度のエルフならば居ても何とかなるだろう。

『フェリクス、聞いていたわね？　ルイズに今の話を伝えて』

ルイズちゃん（私にとってはまだまだ、小さな子供の頃の印象のままだからね）の杖の精霊に声をかけたけど、あちらからは返答は無かった。どうも特殊というか、相性が悪いのか、この杖精霊とは意思疎通が上手く行かないの。それでも、ルイズにはちゃんと伝わったみたいだった。

「アキト、エルフは居ないか、居ても問題にならない程度みたいよ？」

「それは助かった、あんなのをまともに相手したくないからな」

「でも油断は禁物、相手の親玉は土のスクエアなのよ？」

「ああ、分かっている。でもな・・・」

「そうね・・・」

アキトという青年の持つ剣は、魔法を吸収すると言う能力を持った剣なのだけど、土系統とは相性が良くないみたいなのよね。それに、精霊を切る事も出来ないしね。

「本当に、この謁見の間に皇帝が居るのか？」

「そうよね、殺気どころか、人が居る気配が殆どないものね」

あら？　何か見当違いだったみたいね。壁越しに人の気配を感じるなんて出来ないけど、ちょっと覗いてみようか？

＝＝＝

小さなテーブルの上に置かれた水差しから顔だけを出して、その場所を確認してみた。精霊から見てもかなり広めの広間が見えるのだけど、ここには人の気配が感じられない？

『にげて・・・』

『えっ！』

私が驚いたのは、当然居る筈のゲルマニア皇帝の”使い魔”精霊の存在にでは無く、その力の無い微かな”声”の方にだったの。これじゃ、まるで自我を持ち始めたばかりの精霊か、或いは、力を使い果たして、自我を失う寸前みたい。私はゆっくり”声”の方に意識を向けたのだけど、そこには眠る様に玉座に座る1人の男性と力を使い果たした精霊の成れの果てと呼べそうな存在が居たの。

『ねえ貴方、私の声が聞こえる！』

『にげて・・・』

駄目だ、相性が悪いのか、それとも別の事に意識が向いているのか分からないけれど、まともな反応が返ってこない。それに、彼女の状態を見れば、まともじゃない事が良く分かったの。力を使い果たして、自我を失いそうになって、自分の精神(身体)を削ってまでしないとこうはならないでしょうね。

その精霊はまさしく、その存在を失いかけていたのだ。私の中にある精霊に関する経験の中でも精霊が消滅するというのは聞いたことが無いのに、どうしてここまで彼女はここまで・・・。

そして、救われない事に、彼女の言葉はその男に届いていないのだ。以前、大地の大精霊の事件の時に身体を張ってキュベレーがラスティンを助けようとしたと聞いた時は、正気を疑ったけれど本当に土の精霊と言うのは、”馬鹿”ばかりなのかも知れない。（エルフが居る筈なのに、どうして精霊契約をしていないのだろうか？）

『キュベレー、聞こえるわね？　急いで2人を突入させて、それと力を貸して欲しいの！』

『分かりました！』

直ぐに”バタン”という騒がしい音と共に、ルイズとアキトが謁見の間に突入して来た。彼女が多分反射的にだろうけど、防御の魔法を使ったのが分かった。拙い、彼女をこれ以上消耗させるのは、避けなくっちゃ！

『キュベレー、貴女の姉妹を押さえ込める？　なるべく優しくね』

『えっ？　はい、やってみます』

彼女の防御は、簡単にキュベレーに絡めとられてしまった。土の精霊同士じゃなければここまで上手く行かなかっただろう、それに彼女の力が極限まで弱まっていなければ、逆の結果になったかも知れない。何やら言い合いを始めた人間達を尻目に、私とキュベレーで彼女の応急処置を行う事にしたの。

＝＝＝

「誰だ！」

「あれ？　えーっと、”平賀明人”と言います」

「ちょっと何暢気に！　私は”ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール”、トリステイン国王陛下の命によりゲルマニア皇帝ナポレオン1世、貴方を討ちます！」

「ルイズに”平賀明人”だと？　どうなっているんだこの世界は！」

「なあ、ちょっと様子が変だぞ？」

「そうね、護衛が見当たらないのも変だし、影武者？」

「そうか、奴め、とうとうトリステインと組んでまで俺を排除するつもりか！」

「何が言いたいか知らないけど、トリステインは独力でここまで来たのよ！」

「おかしいじゃないか！　お前達はアルビオンか、ガリアで戦っている筈なのに」

「なーんか、会話が噛み合ってないよな？」

「アキトは黙っていて！　アルビオンとガリアと戦う？　どうしてそんな事になるの？　我が”ラスティン・レーネンベルク・ド・トリステイン”のお力で、我が国は両国共に良好な関係を保っているわ！」

「ラスティン？　そうだ、奴さえ、奴さえ居なければ、こんな事に

は！」

そう言いながら、ゲルマニア皇帝が呪文を唱え始めたの、迷惑だから他所でやって欲しいのだけどね？　精霊に治療を施すなんて私の”経験”の中でも始めてなんだから！

『ノトス、手が離せないから、防御は任せたわ！』

『はい、はーい！』

ノトスはまだ幼さを残している所があるから少し不安だったけど、防御を固める時間はそれ程長くなかったの。

「行くぞ！」

「ええ！」

短く言葉を交わしたルイズとアキトのコンビネーションは素晴らしかった。無秩序に床、壁、そして天井から生えてくる石の槍を恐れもせずにアキトがゲルマニア皇帝に向かって駆け出したの。避けられる物は華麗とも言えるステップで避け、避けられないと思えた石槍はルイズが魔法で砕いて行った。

気付いた時には、アキトの剣がゲルマニア皇帝の首筋に当てられていたの、文字通りあっという間の出来事だったわね。アキトの剣が、”お見事でござる！”とか言っているけど、まあ、聞かなかったことにしましょう。

「動くなよ、一言だけ言っておくぞ。ラスティンさんはあんたを”もう1人の自分”と評していたが、あんたはどうだ？」

「・・・、アキトだったか？　俺をどうする積りだ？」

「さあ、ああ、そうだったな、トリステイン国王陛下からの伝言だ。あんたには生まれ変わってもらうそうだ！」

意味不明な言葉と共に、剣の刃の無い方がゲルマニア皇帝に首筋に打ち下ろされたの、呆気なくゲルマニア皇帝は気を失った様だけど彼らの災難はそこから始まったわ。室内で派手な魔法をつかいまくったのだから当然なんだけど、床は抜けるし、天井も落ちる、壁が無くなっていたのは数少ない幸運だったかも知れないわね。

ゲルマニア皇帝を抱えて逃げていくルイズたちを見送った私の感想は、余計な魔法の影響が無くなって助かったという身も蓋も無いものだったわ。私とキュベレーで何とか彼女の応急処置を終えたのはそれから暫く経った後だった。精霊に人間がするような応急処置が有効だとは思わなかったけれど、迷わず力を注いだのは何時もの癖だったのかもしれない。

”精霊としての消滅”という事態から脱した彼女は、キュベレーに付き添われて、大地の大精霊の元へ帰って行った。彼女は大地の大精霊の下で、傷付いた精神（身体）を癒すのだろう。それには多分長い時間がかかるのだろうけれど、彼女が消えてしまうよりははるかにましな結果だと思う。

どう見ても、精霊としての経験が少ないキュベレーの方が彼女をリードするのは少しだけおかしな話だったけれど、私は全く別の事を考えていた。そう、私自身の復讐についてよ？

外伝五十三話　（精霊さん？）（後書き）

さて、ゲルマニアも何とか片付きました。大体想像がつくと思いますが、この話は
別の話から必要な部分だけを切り出して、少し編集した物です。

キーワードは”Ｎ５０２９Ｙ”ですが、警告はちゃんと読んでください。（不用意に読むと後悔しますよ？）

次回からは本編を進める予定です。残るエピソードは１０ちょっとになりました。もう少しだけ革命@にお付き合い下さい！

第百八十五話　（彼女が欲しい）（前書き）

第百八十五話ＵＰします。

第百八十五話　（彼女が欲しい）

「そうか・・・、コルネリウスの姪が居た訳か？」

「ええ、どうする積り？」

「少し考えさせてくれ」

「分かったわ」

クリシャルナとの通信を終えると同時に、眼下に見える宮殿の屋根の一部が音を立てて陥没した。特殊部隊のやり方じゃないし、ルイズ班の誰か（そんな感じはしないが、キュベレーかもな）が無茶をしたのかもしれないな？

しかし、ナポレオン君の娘か面倒な話だ。クリシャルナの話を聞く限り、皇帝と宰相の間はかなり冷え込んで居たらしい、もしかしなくても刺客を送りあっていたりしたのだろう。宰相が今まで生きられていたのは、皇帝の”娘”という切り札を握っていたからか？

そうでなければ、宰相が普通に生きていたのが説明出来ない。転生者に悪意を抱いて無事でいられる人間を今まで見た事が無いからな。ガリア王の狂気を引き継いだ人間だから生き残れたとかなのだろうか？（何事にも例外がある様だな）

しかし、その娘をどう扱うべきだろうか？　本来なら、コルネリウスの姉（今はフリーデル・ブロイッヒ侯爵夫人だったかな）が引き取るのがベストなのだろうが、こうなってみればナポレオン君が一方的に懸想して強引にか・・・？

そして、それを受け入れられなかったフリーデル嬢が何かをやらかして（自殺とか、娘を殺そうとしたとか、妙な想像をしてしまうが、間違っていないのだろうな。全く、同じ転生者のやった事がこれか？）、扱いに困ってブロイッヒ侯爵に”払い下げられた”のだろう。

元々婚約者で相思相愛だったそうだが、ブロイッヒ侯爵という人物は使える（妻も守りきったという事で信頼できると評価すべきだろうか？）人物なのかも知れないな。コルネリウスにとっては義兄として良い助言者になってくれるだろう。今この時も、進軍を続けているだろうツェルプストー辺境伯とで彼を支える両輪になってくれると良いがな。

「おい、スティン！」

「おい、お前なんでここに居るんだ？」

いきなり声をかけてきたのは、何故かコルネリウスだった。皇帝に即位する為の準備を始めなければならない筈なんだが？

「何でって、無論報告に来たんだ。後、今後の事も相談したかったからな。大体、宮殿自体はまだ警備の部隊に包囲されているんだぞ？」

「だからこそ、玉座に座っている所をって、そうか・・・」

「ああ、今頃瓦礫の下だろうよ。一応皇帝の冠は確保したが、それを被って出て行ってもな？」

「確かにあまり威厳が無いな」

「お前が言うと説得力があるよ」

それを言われても何とも思わないが、公的な場では言って欲しくないな。別に威厳で王様をやっている訳じゃないが、あまり情けないと、国としての面子に関わるらしいから。

「まあ良いが、相談と言うのは姪御さんの事か？」

「ああ、ナポレオンだけなら、身代わりの死体を晒すと言うだけで事は足りるだろうが・・・」

魔法人形（スキルニル）も用意して来たし、最悪適当な死体に魔法をかけて顔だけ変えるというてもあるんだが。

「その娘をトリステインで引き取ってもいいぞ？　元々居なかったと言う事になれば、元の計画のままだろう？　薬の影響もあるそうだし、エルネストの所か、私の実家で育てるが？」

「そうだな、お前の妹達みたいに育つなら、それはあの娘にとっても幸せかも知れないな。だが、奴に近い貴族はあの娘の存在を知っているだろうな・・・」

「そうか・・・」

そうなると、トリステインが真っ先に疑われるか？　するとその他の国か・・・、ナポレオンと同じ手が使えれば良いのだが、次の皇帝にとっては年端のいかない先帝の娘を殺したという事はマイナスになる確率が高いな。（恐怖でゲルマニアを支配する予定ならば話は別だが）

「やはり、あの娘はこの国で育てる。帝室の人間には変わり無いし、やはり母親の下で育つのが一番だろう？」

「どうして娘が生まれたか、想像は付いているんだろう？」

「ああ、義兄になるブロイッヒ侯爵は頼りになる人間みたいだからな。最悪、俺達の養女と言う形にするさ・・・」

「そうか・・・、そうだな、コルネリウスの姉を妻に迎える位だからな！」

俺達の所は突っ込まないぞ？　キュルケがゲルマニア皇妃になる事は既に決定しているしな。（本人は求婚したのかどうかは答えないがね。ただ、この２人ならある意味経験豊富と言うのは確かだろうな）

「何言ってる、姉上は昔ゲルマニアの華と呼ばれるほどの美人だったんだぞ！　母親似でな・・・」

そうか、本意ではなかったにしろコルネリウスは両親の仇を討ってしまったんだな。面倒な話だが、親の仇の孫娘を育てたとなれば、後の情報操作とその娘への対応次第だがある意味美談にはなるか？　そうなると、うーむ、こう言う策略は向いていないんだがな・・・。

「上手く行くか分からないが、その娘に関しては、事実をありのままに明かすのが良いだろうな」

「それはそうだが、ナポレオンの方はどうする？」

「そうだな・・・。キアラにでも相談してみようか？」

「お前な！」

「文句があるなら自分で考えるんだな」

「お前な～」

コルネリウスが実に情けない声を出した。こいつも皇帝になるんだが大丈夫だろうか？　自分より優秀な人間が居るならその意見を聞くのが悪い訳でもあるまいに。まあ、キアラの場合はこちらもそれなりの考えを用意しておかないと、解答を教えてさえくれない事が多いがな。（交信出来る様になるまで、自分なりの考えをまとめておく事にしよう）

＝＝＝

結局、ゲルマニア皇帝ナポレオン1世は、”ガリア＝ゲルマニア紛争”の時に既に死亡していて、それ以降は影武者として魔法人形（スキルニル）が彼の替わりを務めていたという事になった。まあ、ナポレオン1世は押えているし、魔法人形（スキルニル）もあるから普通に思いついた話だが、ガリアの国民感情まではさすがに考え付かなかったな。

最近の皇帝と宰相の軋轢も、魔法人形（スキルニル）の劣化の為という情報操作と、実際にナポレオン1世を公衆の面前で破壊してみるパフォーマンスをする事にもなった。目の前で人間に見えた者が、人形に戻るのを見せる事が何よりもの証拠になるし、トリステインも新皇帝もナポレオン1世を生かしておく事に利点が殆ど無い（普通に考えればだぞ？）のは誰が見ても明らかだから、問題にもなるまい。（ち

なみの私の考えは６０点だったぞ、厳しい採点だと思うが）

「これ以外は、予定通りに進めるが構わないな？」

「ああ・・・。なあ、スティン？」

「なんだ？」

「あの小さな宰相だがな？」

「キアラが何か？」

「彼女をゲルマニアにくれないか？」

第百八十五話　（彼女が欲しい）（後書き）

現在あらゆる感想を遠慮いただいています。

感想を読むより、一文字でも多く書く必要がある為の処置です。

落ち着いたら再度受け付けますが、その時には話が終わっているかもですね。

第百八十六話　ラスティン３１歳　（完徹確定）　（前書き）

第百八十六話ＵＰします。

第百八十六話　ラスティン３１歳　（完徹確定）

「コルネリウス、お前、変な趣味に目覚めたのか？」

「俺は真面目に、ゲルマニア皇帝として、トリステイン国王に依頼しているんだ！」

いや、今までキアラとの会話を聞いて彼女を部下に欲しいという君主が居るとは思わなかった。コルネリウス自身は、私とキアラの関係を良く知っている筈だし、何よりコルネリウスはキアラを苦手にしていた筈だ。程度の差だが、私も良く実感出来る話だしな。キアラが優秀な人間だと言う事は誰もが認める事実だし、これからのゲルマニアに優秀な人間が必要なのも確かだが・・・。

「キアラがそれを承知するなら、反対はしない。トリステイン国王として保証しよう」

「正気か？」

貴国の宰相を譲って欲しいという皇帝に正気を疑われる筋合いは無いのだが？　最近のキアラはどうも、私とノーラの話を聞くと辛そうにするのだ。それ以外は極普通だし、辛そうに見えるのも他の人間が気付かない程度なのだが。（本当ならば、友人として環境を変えることを勧めたかったのだが、国王としてはそれが出来なかったからな、良い機会だと思っただけなのだ）

「そっちが依頼してきた話だろうに、駄目で元々だったのか？」

「まあな」

「一応、お前と気の合う連中は、王城から引き抜いて良いと言った筈だが、欲張りな皇帝陛下だな？」

「ふん、言っていろ！　あれだけの領土を差し出すんだ、文句は言わせないぞ？」

一応、この戦争（戦争と言うだけの規模の戦闘が行われたか疑問だが？）と新皇帝の即位に協力した礼として、ゲルマニアとトリステインの国境に面するかなりの土地を割譲する事になっているのだ。ツェルプストー辺境伯は皇妃父として、首府ヴィンドボナ近郊に領地を得ることになる。（これは、エルネストにとっては”喜ばしい”事だろうな）

そして、もう1人の辺境伯に関しては、語る必要も無いだろうな。私自身は、奴を忌むべき敵と認識しているし、ゲルマニア宰相の”後ろ盾”、皇帝の”意思”のどちらも無くなるのだから、生き残る事が出来るかどうかも微妙だろうな。その他の中小の領主達は殆どが宰相派だった訳で生き残る為なら何でもやるだろうと言うのが、キアラとコルネリウスの共通の見解だった。

コルネリウスの場合は、領民を守って皇帝の命に反するような貴族が居れば是非重用したいとまで言っていたが、あの国の貴族や領主と言うものを考えれば、望み薄なのかも知れないな。コルネリウスが簡単に領地の割譲に同意したのは、宰相派の貴族達が無茶をして領民に不満感情が鬱積しているのを肌で感じたからなのだろう。

理由は分からないが、モーランド辺りだと私の治めるトリステインの方に支配された方がまだマシだそうだ。時代が読めなかった方の辺境伯が余程無茶をしたのだろう。（国民性の違いや、先祖代々

領主をして来た信頼が無い事が奴にはマイナスに働いたのだろう）

正直言ってしまえば、ブルーデス伯が統治していた頃のゲルマニアを暫定統治した経験から、気が進まなかったと言うより確実に頭痛の種になるという気がしたのだが、敢えて火中の栗を拾うような真似をしたのは、大規模な実験を行う事を決めたからだ。

ゲルマニアとトリステインの国境地帯は、トリステイン王国ミデルブルグ自治領となる事に決めている。表向きはトリステインに属しているが、実際の所は両国の緩衝地帯になる訳だ。そして、裏では領民の代表者による統治という政治制度を言葉通り試す。（まあ、もう少し別の事も試すがね）

勿論、当面はトリステイン王家の直轄地になるのだが、この戦いで戦果を挙げたと言えるこの国の貴族はラ・ヴァリエール公爵位だし、次期ラ・ヴァリエール公爵がツェルプストー領を望まないのは分かりきっている。後は国軍と魔法兵団だが、この辺りは特に問題にならない。（こんな面倒な話を任せられるのは、彼しか居ないが丁度良くこちらに来ているからな。暫く趣味に没頭出来た筈だから、今度は仕事に没頭してもらおう）

元々、現在のトリステインの貴族で外征に参加できる者は殆ど居ないんだがね。この論法は、どちらかと言えば、この大戦に参加し損ねた国々に対して使うのが適当だろうな。”一兵も戦わなかった貴国に、何の権利があるのかな？”と言えば、どんな厚顔無恥な者でもさすがに口は出せまい。（いや、本気で分け前を要求する国は居そうな気がしてな。そもそも手出しをさせないように色々したし、手出しが出来ない様に速攻で片付けた訳だからな）

アルビオンに関しては、かなり借りを作る形になったが、その辺

りはモード大公を通じて交渉済みだし、色々貸しがあった訳で帳消しになるという結論だ。そして問題はガリアだ、形としてはトリステインの計略が成功しているのだが、つい先日の交信でも、愚痴王が愚痴を言わなかったからな。（最後になって、”敵国”の妨害が入って思うように軍を進められない状態になって、アレが黙っているのは絶対何か企んでいるのだ！）

＝＝＝

ゲルマニア国内の対して打つ手は、基本的に無いと言って良いだろうな。私自身（遺憾ながらガリアのジョゼフ王もだが）はコルネリウスを支える立場を明言しているからあまり派手な干渉は出来ない立場だ。やり過ぎると、新皇帝の立場が悪くなるからな。

我が国として、戦後（まだ、実際の開戦から一日も経っていないんだがな）のゲルマニアにやれる事は、それ程多くないのだ。

「何だ、また戻ってきたのか、コルネリウス？」

「しつこい！　人形を届けて奴の姿にして待つだけだからな、やる事が無いんだよ！　皇帝の冠も載せてきたしな」

「王冠なんてその程度の物さ。そう言われてみれば、お前の味方が攻め上がって来るのはまだ先だったな？」

「と言うか、使者は出したんだろうな？」

「まあ、航空隊がビラを撒いているから、分かっているんじゃないか？　オストラント？～？が有力者の所には向かっているぞ」

ビラの内容は、”宰相戦死！”とか”皇帝重傷を負う！”とか、その時点では嘘だったが今では殆ど事実になっている。コルネリウスは知らないが、新皇帝に関する過剰な脚色を加えた内容のビラも混ざっているぞ？　無論、後半はコルネリウスに対する嫌がらせだが、効果があるだろう事は私がよーっく！知っているぞ。

「それなら良いが、最も近いのが一番早く動いても明日の夕刻だなこれは。そう言えばオストラント？はどうしたんだ？」

「勿論、終戦を他国に告げに行ったよ。ガリアとラヒテンシュタインだな」

当たり前だが、首府付近は、宰相派と皇帝派で固められているから新皇帝派の到着は少し時間が掛かるだろう。まあ、指示系統の上がごっそり居なくなった訳だから、妨害は入らないだろう。オストラント？～？に積んだ物資を降ろしながらだから多少時間がかかるだろうが。

「一隻だけでは不安じゃないか？」

「何だ、ガリアに攻め込まれたいのか？」

「馬鹿を言うな！」

「じゃあ、文句を言うな。無駄口を叩いていないで寝ろよ」

「眠れるか！」

その気持ちは分かるし、私も全く眠気は感じない。眠っていても何とかなる私と違ってこれから眠る時間が無くなるコルネリウスが

それでは身体が持たないだろうに。

「ゲルマニアに対する支援だが、我が国からは工業品、ガリアからは食料品中心、アルビオンからは衣類だったな？」

「ああ、そうだ、トリステインからの工業品だが、加工前の状態で貰えないか？」

付き合ってやるあたりが、私が善人の証拠だぞ？　これがエルネストだったら確実に眠らされている所だ。

「加工前って、成形（フォーム）前か？」

「そうだ」

「構わないが、それ程安くならないぞ？　当面は無償の援助なんだから、使える状態の方が良いだろう」

「それだよ、有償になった時に自国で生産出来ない様じゃ話にならないだろう？」

「それは、トリステインへの挑戦状か？」

「いいや、鉱石が取れないんじゃ、首根っこを押えられている様な物だろう？　だが、この国の人間は結構器用な人間が多いんだ」

「そうだったな」

ドイツあたりは日本と同じだからな、似たような物なんだろう。ツェルプストーの技師だった人々もそうなんだろうか？　兵団の錬

金メイジだったこともあるコルネリウスが考え付きそうな話だ。多分この国のメイジは激減してしまっただろうから、トリステインと同じ事は出来ないだろう。

「そうだな、エルフと交渉したらどうだ？」

「エルフと？」

「ああ、あちらなら鉱石が採れるかも知れない」

「本当か！」

「可能性の問題だが有り得ないとは言えないだろう、エルフがそれを許すか分からないがね」

実際は、確実に埋まっているのだが、そんな事を断言出来ない。まあ、あれを知らないコルネリウスならキュベレーからの知識と誤解してくれるだろう。エルフとの伝ならある訳だし、エルフ側も最低限の交流まで拒否するという流れにはなら無いだろう。

といっても、これでは強力なライバルを生み出す結果になるな。上手く住み分けが出来れば良いのだが。こんな話、昔も考えたな、そう思うと目の前の壁の微妙にサイズが合っていないボルトとナットが目に入った。（多分微調整した結果なのだろうが、これが出来るのが錬金メイジの強みなんだが）

「そうだな、ゲルマニアがその積りなら、共通規格の部品を作らないか？」

「共通きかく？」

「ああ、お前もボルトとナットを作った事があるだろう？」

「あれは苦行だな、同じ物を延々と作るんだから」

「そうだろうな、あれはメイジには向かないだろう。特にお前みたいなメイジにはな」

「それは否定出来んな」

胸を張って言うなよ！　私も同じ様なデザインの宝石を作って飽きた経験があるがな。

「例えば、半サント、1サント、2サントの同じ大きさのボルトを魔法を使わないで作れたら良いと思わないか？」

「メイジとしては有り難いが、どうやって腕の良い職人だってそんなに作れないぞ？」

それの意味が分かっていないだろうが、興味は持ってくれた様だな。別に私自身に腹案がある訳じゃないが、そう言った話が得意な人物がこのフネに乗っているし、その人の奥さんなら規格化した部品の有り難味は理解してくれるだろう。

「私は詳しくないが、コルベール夫妻に相談してみるんだな。今が丁度良いぞ、きっと暇にしているさ」

「そうか、行って来る！」

コルネリウスが元気に駆け出していった、本当に元気だな。そろ

そろ夜明けが近い筈なんだが、徹夜は疲れる。いや、私もまだ若いはずだ！

第百八十七話　（名誉の負傷）（前書き）

第百八十七話ＵＰします。

第百八十七話　（名誉の負傷）

そして翌朝になったが、状況は左程変わっていなかった。宮殿自体は制圧済みだが、警備部隊（驚いたことに近衛部隊では無いらしい。ガリアで全滅して再編が済んでいないとは思わなかったな）は丸々残っていて宮殿を取り囲んでいる。既に守るべき皇帝も宰相も居ないし、宮殿も敵の手に落ちているのだから警備部隊とは呼べないが律儀に包囲陣を敷いている所を見れば、忠誠心は高いのだろう。

一応宮殿内に居た使用人の何人かに宰相の遺骸と捕えられた皇帝の姿を確認した上で、皇帝の”正体”を他言無用と言って警備部隊に引き取らせたのだが決定的な証言とは受け取られなかった様だ。まあ、どうするかの判断を下せる人間が居ないのだからどうするか決めかねているという面もあるのかも知れない。

何かが起これば、新皇帝陛下殿に一芝居打ってもらう予定だったが、問題は別の所で持ち上がった。

「ニルス、少し休んだらどうだ？」

「いいえ、仮眠は取りましたから、問題ありません。ラスティン様こそ、おやすみになって下さい」

「まだまだ、大丈夫だよ。別に魔法を使っている訳でも身体を動かしている訳でも無いしな」

「そうですね、キアラさんも居ないですし、書類も追いかけては来ないですからね」

「それだと、私がここに居る理由が、かなり情けない物になるが？」

「おっと、通信です」

そこで、会話を止められると、私が逃げて来たのは異論の余地が無い事実の様に聞こえるじゃないか？　これがキアラからの通信だったある意味嫌だがな。

「アンセルムさんからです」

「そうか・・・」

戦況報告を態々してきたのか、アンセルムがそう言う事に熱心だとは思えないのだが？　陸軍側の報告がグラモン元帥の所に行っていると言う理由で報告をサボる方がアンセルムらしいんだがな。（必要じゃない所は、徹底的に手を抜くからな）

「アンセルム、何があった？」

「陛下！　申し訳ありません！」

返って来た応答は、酷く大きな声だったが指揮官殿の声だと分かった。デニス・ド・グラモンが私に謝るなんておかしな話だな。例の軍の一部が突出したのは確かにデニスの指揮官としての失態になるが、それは、上官のグラモン元帥から叱責を受ける程度の話だ。

事態に気付いたのは早かったし初動も悪くなかったと感じたから、デニスが私に直接頭を下げなくてはならない程の損害も考え辛い。陸軍の被害なら、元帥を通して報告が筋だろうし？　魔法兵団の方に被害が出たのならアンセルムが頭を下げる話だろう。何故だ嫌な

予感がするな？

「デニス・ド・グラモン、何があったか説明してくれ」

「陛下、何卒、弟を許してやって下さい。この通りです！」

どうも頭を下げたらしいが、こちらからは見えないし、ついでに話も見えないぞ！　何故ここに、ギーシュが出てくるんだ？

「アンセルム、居るんだろう？　説明しろ！」

「ああ、俺の方からもだ。すまない、思ったより被害が出た」

「まさか兵団にか？」

「いいや、敵さんにだ。幾らなんでもそこまで間抜けじゃない」

「そうか、まあ、戦争だからな。それで犠牲者の数は？」

「確認中なんだが、村１つだ」

「民間人も巻き込んだのか？」

これは拙いな、今後の予定がかなり狂う可能性がある。いけないな、こんな人間を数や障害の様に考えては・・・。

「いいや、予想だが軍の関係者だけしか被害は無いぞ？」

「訳が分からないな、最初から説明してくれ」

話の内容を簡単に纏めると、以下の様になるな。

1．突出した部隊を援護する為、陸軍の本隊と魔法兵団が進軍を開始する。
2．アンセルム考案の渡河作戦を利用して、ゴーレム部隊が先行する形で軍を進める。
（ちなみに、ゴーレムがゴーレムを踏み台にしたのであって、ガ〇〇ムが〇ムを踏み台にした訳では無いぞ？）
3．ゴーレム部隊が戦闘が始まったばかりの戦場を蹴散らした。
（敵も味方もだそうだ、まあ、怪我人程度なら問題無いだろう。ゲルマニア側もゴーレムを用意していた様だが、数・質・大きさ総てで圧倒したらしい）
4．アンセルムとデニスの合意で、そのままモーランド辺境伯の身柄確保に向かった。

「別に問題無いじゃないか？」

「ああ、問題はこの後だ」

「そうか？」

5．進軍を続けている最中に、ゲルマニア軍に追われている”民間人”に遭遇する。
6．”民間人”を助ける為に、魔法兵団所属のメイジが負傷。
7．”負傷したメイジ”を残して、進軍を開始、空軍の助力もありモーランド辺境伯の身柄を確保する。
8．近隣の村に担ぎ込まれた負傷したメイジをゲルマニア兵が襲撃
9．”付き添ったメイジ”によって村が消失

「おい、突っ込み所が満載だぞ！　ああ、民間人と言うのがデニス

の弟だったのだな？」

「ああ、魔法学院の生徒達だよ。無茶な事をするな、まったく！」

今の”ギーシュ・ド・グラモン”ならば、”同級生の女性が戦場に立っているのに我々が何もしない訳にはいかない！”とか言いそうだし、実行力も持っていたのだろう。水精霊騎士隊に入る筈だった生徒達も同行しているんだろうな？　事を大きくしない様に軍や兵団と同行させなかったか・・・。

「多分間違っていないだろうが、ライル・ド・レーネンベルクの怪我は？」

「銃で撃たれただけだ、重傷じゃない。問題の村にも自分で歩いて行ったのだから、軽傷と言っても良い」

「そうか、ライルらしくないな」

「いいや、国王の息子らしい行動だったそうだぞ、イザ、えーっと」

「アナベラ・ド・ボヌーだろ」

そこまで来てやっと、デニスが頭を下げた理由が分かった。兵団に同行させる事を決めた時点で、兵団と陸軍の主だった所に、アナベラ・ド・ボヌーの正体を知らせてあるのだ。もう隠す期間も短いし、多くの者が知っている事にいみがあるのだからな。我が国の為に（正確には全然違うが）従軍してくれたガリアの王女を傷つける様な事態を招けば将軍の首でも危ないと思うだろう。

「ああ、その女性を庇っての負傷なんだから、名誉の負傷だろう？」

こいつは、ライルの正体を知っているんだろうか？　まあ、キアラが知らせたのなら問題は無いと思うが・・・。それより何故、イザベラ姫の所にギーシュが逃げていくんだろうか？

「ライル達は、何処に居た？」

「ああ、補給部隊の護衛に当たっていたさ。彼女に怪我させる訳にはいかんしな。奇襲にも備えていたぞ、何だか分からんが、地中からいきなり出て来たそうだ」

「地中？」

「ああ、使い魔を使って地中を潜って追っかけてきた所を、地中に隠れていたゲルマニアの奇襲部隊の一部と接触したんだろうよ。宝石が何とかと言っていたが、使い魔とか詳しくないからな」

「そうか、大体事情は分かった」

ギーシュは、（同じ個体かは分からないが）ジャイアントモールを使い魔にしていたし、ジャイアントモールは宝石の匂いが分かるんだったな。ライルがイザベラ姫に送った魔法宝石（マジックジュエル）か別の物かを、追ってここまで来たのだろう。

「それで、村が消失というのは？」

「ああ、あの娘がかなり取り乱していてな。同行は無理と考えて、近くの村に宿を取らせたんだ」

「その村も埋伏していたゲルマニア兵と同じで罠だった訳か？」

「どうも、兵士が村人に扮していたらしく、夜中に襲撃されたそうだ。護衛に付いたメイジが妙に愛想が良かったと証言している位だ」

「随分と手が込んでいるな？」

「ああ、どうも潰走して見せたのも半分位は演技だったのかもな」

「地中に潜んで、通り過ぎた所を奇襲か？　その上で負傷者を受け入れる振りをして、人質にでもする積りだったか・・・」

「そんな所だろうよ、奇策に搦め手だな、やっぱり性格が悪いぞ」

潰走ルートはある程度コントロール出来たにしても、地中で文字通り埋伏していたとは良い根性だな。間違ってゴーレムが踏んだら、”プチッ”だよな？　知らないだけで圧死者がかなり出ているのだろうか、探させても結局埋葬するだけなんだろうな。

「で、性格の悪い辺境伯は捕らえたが？」

「王都に護送しろ、なるべく、じゃないな、護送する人間には決死の覚悟で挑ませろよ？」

「へいへい」

どうしても陸路で王都に行くには元モーランド侯爵領を通らなくてはならないんだが、今では直轄地マース領となっている場所にはモーランドを殺したいと思っている人間が多い筈だ。無警戒で護送したらどんな事になるか想像は簡単だが、マースの人々にそんな事はして欲しくないし、マース領の人々以外にも恨みを抱く人間は多

いのだ。

第百八十八話　ラスティン３１歳　（憤炎）　（前書き）

第百八十八話ＵＰします。

第百八十八話　ラスティン３１歳　（憤炎）

「護送は出来ればライルにさせてくれ、何らかの抑止力になるだろうからな」

「ほうほう、随分と念入りだな？」

「お前もだぞ、個人的な恨みで動くなよ」

「分かっているさ、確かに恨んではいるが、それは俺の恨みじゃないな」

アンセルムの恨みは精々不本意な撤退戦をさせられた位の筈だ。捕虜に対して個人的な制裁を加えるというのは、教育者としては正しい姿では無いだろうな。まあ、実際の所、モーランド元侯爵には”死”以外の運命は待っていないんだが、精々有用な情報を引き出せる事を願おう。

「そうだ、村が１つ消失と言っていたな？」

「ん、ああ、あれか。あれは王子様を庇ったお姫様の仕業さ」

「お姫様ね、彼女はそれ程優れたメイジじゃなかったと聞いていたが？」

「何とか言う使い魔が、村中を火の海にしたらしいぜ。制御出来ないんじゃ使い勝手が悪そうだがね」

「あの小鳥がか？　ああ、そんな話もあったな」

確か、火鳥（ファイヤー・バード）を怒らせると酷い目に遭うという話は知識としては知っていたのだが甘かったらしい。

しかし、あの小さな小鳥が村を1つか？　使い魔と主が同調すると言う事は結構あるはずだが”死”と言う物を目の前にしたイザベラ姫が思わぬ力を発揮したと言う所なのだろう。

イザベラ姫が父親を代表するある程度年上の男性に怯えるのは、付き合いが短いとは言え分かっていた。だが、あの小鳥は私に懐いていたからチッチと呼ばれる小鳥が私の肩にとまって耳や髪を突っつくのはイザベラ姫自身の気持ちを代弁しているんだと軽く思っていた。

まあ、小さな鳥でも普通の鳥とは明らかに違うし（羽が所々燃えている様に見えるのだ、熱くもないし普通に触れるのだがね）し、今でも危険だとは思わないが止そう、ここはそう言う世界だ、危険だと言って遠ざけたり排除したりするよりは上手く利用する方法を考えた方が良いはずだ。

そうだな、イザベラ姫が落ち着いた頃に今回の事も含めて、大々的に発表するのもいいかも知れないな。マース侯爵夫人となるには家柄よりも人となりとか実力の方が重要になってくる。領主とその妻が他国で怖れられるほどのメイジなのは領民としてもある意味では安心出来るだろう。

将来のミデルブルグ自治領に隣接するマース領だから、上手く情報を操作しないと隣り合う領地が険悪な関係になってしまう可能性もあるな？

「アンセルム、罠はそこだけだったか？」

「いいや、当然周辺の村や町に人をやってみたが、村が２つ程、空だったぞ？」

「状況が伝わって、逃げ出したか？」

どうも、モーランドはかなり無茶をした様だな、確かにゲルマニアの支配は難しいかもしれないな。

「そう考えるのが自然だろうな、ああ、あれもそうだったのかもな？」

「あれ？」

「ああ、敵さんが迎撃に出したゴーレムだよ。１５メイルはあったからな」

「ああ、土石を大量に使ったんだろうな？　さっき蹴散らしたとか言わなかったか？」

「言ったぞ？」

「そうか、大体分かった」

前回のゴーレムによる侵攻を想定して、同じ位大きさのゴーレムで対抗して時間を稼いで、何か仕掛けようとしたのだろうが、兵団のゴーレムが一回りか二回り大きくなっていて時間を稼ぐどころでは無かったか？

「兵団の運用も考えないと、周囲に悪影響が出そうだな。まあ、それは追々考えるが、とりあえずは周辺の治安の安定を最優先だ。後は情報操作の方も忘れるな？」

「俺にそれをやれってか？」

「治安の安定は、お前の仕事だろうに。それで、キアラはお前に誰かつけなかったのか？」

「いや、マリユスの奴が様子を見に来る予定だったんだがな」

そうだな、彼にはこれから色々苦労をしてもらう筈だったな。もしかして、まだ韻竜達の所から帰ってきていないのか？

「もしかして、まだ韻竜達の所か？」

「ああ、さっき韻竜の一団がやって来て、もう少し貸して欲しいとか言っていた」

「随分と気に入られたのだな、だが、さすがにこれ以上は貸せないな。そうだ、まだ韻竜はいるのか？」

「ああ、若いかどうかは知らんが、何人かは物珍しげに見回っているぞ？」

「それなら、彼らの1人に”マリユスと一緒にギーセンに来る”様に伝言を頼むんだな」

「ここへ呼んでどうするんだ？」

「それは勿論、マリユスにその辺りの統治を任せると同時に韻竜達に料理を振舞ってもらうのさ」

元々の計画では、将来のミデルブルグ自治領では亜人（といっても人を襲う鬼以外だがね）も正式に居住を認める予定なのだ。ゲルマニア国民として生きたいと希望するならばゲルマニアの他の領地へ移住を許す方針だから、労働力が不足するのを見越しての処置と言えるが、将来の”人権問題”を見越しての処置と言うのが正しい。

本当にそんな時代が来るか疑問だが、少なくとも私はそういう方針でトリステインと言う国を統治して行く予定なのだから・・・。

「なるほどね、アイツ倒れるんじゃないか？」

「さあ、マースから人を呼ぶのも簡単だし、ライデンの町の時よりはマシだろうな」

「分かったよ」

「アンセルム、彼女が焼き払った村だが、今はどうなっている？」

「ん？　これから一応人を向かわせる積りだよ。生存者は絶望的だしな」

「そうか、その村は暫くそのままにしておいてくれ」

「何でだ？」

「ちょっとな、若者達に少しでも戦争の悲惨さと言う物を見てもらわないといけないのでな」

「そうか、いっその事あのまま保存しておくか？」

「いいや、その必要は無いが、その辺りはマリユスに一任するさ」

「そうするか、面倒だしな」

それを言ってはいけないだろうに、まあ概ね同意だがな。村を復興したいと希望する元村人がいれば何とかしてやりたいとは思うが、この土地はこれからかなり混乱するはずだから、現実に即した対応が必要になるだろう。

「じゃあ、待ってるぜ」

「ああ、オストラント？が戻ったら向かわせるよ」

「ラスティンは来ないのか？」

「私にはやるべき事があるからな」

「義理とは言え息子が怪我したんだぜ？」

「それでも、国王として、兵団を組織した人間としての責任があるんだ」

「そうか、彼らが居たな・・・」

「ああ・・・」

アンセルムが彼らの事を知っていると言うのは意外だが、兵団の

内情に通じていれば耳に入る話なのは間違いない。

「どうでも良いが、まだ指揮官殿が頭を下げたままなんだが？」

本気で忘れていたな、デニスだから気にはならないがな。別に弟のギーシュが犯罪行為をした訳では無いし、そうだったとしても彼の責任を負うのは父親の方だろう。妙なところが真面目だ人間だからなデニスは・・・。

「デニス・ド・グラモン」

「ハッ、陛下」

「1つ聞かせて欲しい、君の弟を教育したのは誰かな？」

「はぁ？　妻のクリオですが」

「そうか、では君に1つ罰を与えよう」

私が、デニスに直接罰を与える立場には無いのだが、これならば問題ないだろう。デニスの立場が分かっている人間なら苦笑で済むだろうし、分からない人間ならば私の嫌がらせとでも判断するだろう。

「・・・」

「君から奥方に、”やり過ぎるな”と伝えるんだ」

「はぁ？」

「君は君の娘や息子がギーシュの様に無茶をする子供に育ったらどうする？」

「いえ、ですが！」

「君が家族の事を大切に思っているなら、言えるだろう？　奥方に頭が上がらないなら別だが？」

「そんなことは無い！」

「それならば、これは君とクレオ殿に対する罰だ」

「分かりました、クレオに伝えます」

「プッ！」

「貴様だって奥さんに頭が上がらないだろう！」

「いや、家のユニスは賢いからな！」

「何を！」

「何だと！」

何だか惚気話を聞かさせそうな気がしたので、さっさと交信を止める事にした。交信を終えると、ニルスが何か言いたそうだったが、とりあえず今は先にやる事がある。そろそろ、コルネリウスとコルベール夫妻の話は終わっただろうか？

第百八十九話　（ちょっとお出掛け）（前書き）

第百八十九話ＵＰします。

第百八十九話　（ちょっとお出掛け）

オストラント？の帰還と、新皇帝派のゲルマニア貴族の到着はほぼ同時間で、そして予定よりかなり早いものだった。前者は責任者として送り出したガスパードも呆気無いと感じる程の素早さで連合軍が解散されたと言う話だ。（納得は行かないが今はとりあえず有り難い）

そして後者は、騎兵や戦車（チャリオット）の機動力を最大限に発揮した結果だった。チャリオットなんて物は遺物だと思っていたのだが、メイジが乗る事を前提にすれば十分に使い物になるらしい。馬を操りながら呪文を唱えるのは中々難しいし、この面ならば利口な幻獣（グリフォン等だな）が有利だが数が集まらないと言うのが欠点だ。

ゲルマニアの宮殿警備隊も、新皇帝の下に続々と終結してくる軍に抵抗を諦め包囲を解いて武装解除に同意した様だった。前皇帝派や宰相派等は疑心暗鬼状態で元々自領の兵の多くはガリア方面に出払っているのだから、動きたくても動けないと言った所だろう。

仮に兵が戻った所で頭を失っている上に両者が協力するのも難しい。そうなると、予定通り新皇帝陛下の誕生だな。だが、ゲルマニアの成り立ちからして皇帝になりたいと本気で思う人間も居るだろうな。本当ならば刺客に備えて警備の兵を置いていきたいのだが。皇帝としての体面もあり多くの兵を残していくわけには行かないのだ。

「ガスパード、すまないが、コルネリウスの事頼んだぞ？」

「ああ、任せてくれよ。僕としては、スティンの方が心配なんだけどね？」

「今、私を殺して徳をする人間は少ない。それより、コルネリウスの方が絶対に危ないんだ」

「それはそうなんだけどね」

「コルネリウスの周囲が落ち着いたら戻ってきてくれ、カロリーヌに何か言われる前にな」

「分かったよ、コルネリウスに何か伝言しておく事はあるかい？」

「いいや、昨日散々話したしな。おっと、1つあったな、あいつまだ、皇帝になってどう名乗るか決めていなかったんだよ」

「それが？」

「ああ、それでな、あいつには”アルブレヒト3世”と名乗って欲しいと伝えてくれ」

「アルブレヒト3世？　ゲルマニア皇帝アルブレヒト3世閣下か？」

「陛下だ」

「そうだな。それでどんな意味があるんだい？」

「意味ね、簡単なおまじないだ。それに3世となれば子供が4世になりそうだろ？」

正確には私自身に対する暗示なんだがね？　若い嫁を迎える事になる辺りも似ているしな。

「験担ぎか？　らしくないな」

「自分に対しての物じゃないからな」

始祖の恩寵など期待はしていないが、アルブレヒト3世に対して出来る事は少ないからな。

＝＝＝

ガスパードと数人の護衛をアルブレヒト3世の所に送り込み、オストラント号を転生者達を乗せたまま（発明家夫妻を除く）で例の村経由でトリステインに送り返した。オストラント号には捕虜となったナポレオン君も眠らせたまま乗せてあるし、ルイズやジョゼットも同行している。

そして、私自身はオストラント？に乗り換えルブリンという場所に向かっている。勿論私だけでは無く、空軍特殊部隊の面々も一緒な訳だが、彼らは今船倉や船室に篭って休養をとっている。基本的に私と同世代以上のベテラン警備隊員で構成されているから徹夜が堪えたらしい。

私と違って彼らはずっと肉体的にも精神的にも緊張を強いられていたのだから仕方が無いが、隊長と副隊長が、

「俺も歳だな」

「いいえ、まだまだ若いわよ！」

とかやっていたのは少しだけ羨ましかった。いや、正確には妬ましかったのだ、昔は笑って流せた話の筈なのにな。最近のノーラは情緒不安定だから、ライルの事も話せないままだし・・・。

「陛下？　ラスティン様！」

「ああ、ニルスか？」

「やはりお加減が悪いのでは？」

「いいや、少し考え事だよ。もうルブリンは見えたのか？」

「はい、視界に入ったので、お知らせに来ました」

「そうか、そろそろか」

「陛下はここを離れない様に願います！」

ガスパードが居なくなったと思ったら、ニルスがこれを言うか？私がそんな無茶をしたのは若い頃だけだぞ、大体私は自分が戦闘に向いているとは思わないからな。問題の施設が山の上にでも建っているなら話は別だが、それをやったら何をしに来たか分からなくなりそうだが。

そう言えば、あのナポレオン君（そう言えば本名を知らないな？）の戦闘が始まる前から、何故かキュベレーとの念話が通じないのだ。ここにはエルフも精霊も居ない筈だからこっそり手を出す予定だったのだが。

『呼びました？』

『キュベレー、あんまり心配させないでくれよ？』

『ラスティンが私を心配ですか？』

『まあ、確かに変な話だな』

『ありがとうございます、ラスティン（マスター）。ただ、同調中に攻撃を受けると危険だとテティスに言われたので・・・』

『いいや、それは理解している。それより今まで何処に行っていたんだ？』

『あの、あの娘を連れて、お母様の所へ』

『そうか、そう言う事なら、文句は言えないな、ご苦労様、キュベレー』

『はい！』

２度と”アレ”には関わりたくないからな、キュベレーの方も気を使ってくれたのだろう。”アレ”と関わると自分が不幸になる気がするし、それ以上に冗談ではなく世界に悪影響を及ぼしかねない。

『キュベレー、今度は同調を頼むよ。ああ、妙な事は言わないように』

『はーい』

あのネタをまたやる積りだった様だ、お気に入りなのだろうか？

「あのラスティン様？」

「ニルス、少し横になるよ」

「はい、突入が始まったら」

「いや、彼らを信用しているからな。彼らの身柄が確保出来たら起こしてくれ」

「はい、おやすみなさいませ」

いや、別に眠る積りは無いんだがな？　ちょっと脱獄の手伝いをするだけで・・・。

第百九十話　ラスティン３１歳　（宅配人）（前書き）

第百九十話ＵＰします。

第百九十話　ラスティン３１歳　（宅配人）

そう、そこはまるで監獄の様だった。施設そのものは新しくしかも清潔に保たれているし、囚人達に対しては十分な食料や酒まで行き渡っているらしい。ただ、それでも彼らは毎日の様に命の危険に晒されているのだ。

端的な表現をすれば、彼らは背中に銃を突きつけられた状態で、錬金魔法を使う事を強いられている。そして限界が来ればその場で銃殺という運命が待っている。そう、彼らはゲルマニアの平民メイジで、ここで強制労働させられている訳だ。

私が”視た”ところ、そこは鶏舎だった。鉱石という金の卵を生み出す鶏達が管理されて生かされているのだ。そして限界が来れば撃ち殺されて、そのまま埋められるのだろう。（私がキュベレーを通じて見ている短い間だけで、１人の犠牲者が出た）

精神的な待遇は最悪だが、肉体的な待遇は悪くないという微妙な施設だったが、ここがゲルマニアにおける鉱石生産の中心だった。転生者達をあちらに回したのは正解だったかもしれないな、ここでは悲惨さを感じるのが難しいかも知れない。いけないな、特殊部隊が突入する前に内部で混乱を起こしておく予定だったのだ。

当たり前だが、囚人（ああ、囚われたと言う意味だが、彼らが犯罪者な訳ではない）からは錬金を行う時以外は杖を取り上げている様だ。この施設で何人の平民メイジが強制労働させられているか分からないが、規模から言えばワーンベルの工場街を上回る人間が居るだろう。（万単位か、さすがに特殊部隊だけでは手に余るな、”彼ら”だけを救出する計画なのだから問題無いとも言えるが・・・）

そんな事を考えている間に少しずつメイジ達が入れ替わっているから交代勤務を行っている様だな。錬金を行う方法自体もワーンベルで行っていた様な分業&単作業化した効率重視の生産方法だった。どうやら、ワーンベルの方法をそのまま真似た様だが、”彼ら”がここに捕まっているなら当然だろうな。

そう、私が国王として以上に、レーネンベルク魔法兵団を創設した人間としてここに来た理由が、”彼ら”なのだ。ワーンベルから誘拐されて秘密裏にルブリンに移送されてきたらしい。この施設の事はゲルマニア国内でも極秘とされていて生産された鉱石を運搬する人間でさえそれが積荷が何かも知らされていなかったらしい。

私がこの施設の存在を知ったのは実際最近の事だが、鉱石の輸送部隊が運悪く事故に巻き込まれて、ブルーデス子爵家に救援を求めなければ現時点でも知らなかったかもしれない。それ程の情報管理を行って来たし、多分”運”も味方していたのだろう。偶然の事故から、アルマント・フォン・ブルーデス―からコルネリウス・フォン・ブラウンシュワイクを通じて私の所にもこの忌むべき施設の場所が伝わった訳だ。（アルマントか、そう言う手もあるな？）

私の思考を余所にキュベレーが”杖”の保管庫を探り当てていた。随分厳重に保管されているが、何千本という杖が並んでいては管理が大変だろう。囚人と監視役の会話から想像はしていたが囚人達は番号で管理されているらしい。５―２―３５―４とか呼ばれている囚人が犠牲になった訳だが目の前の杖保管庫の番号は３になっていて中には百本位ずつの杖が篭に纏められていて篭にも３―１―１０～３―１―１９というカードが取り付けられている。

『ラスティン、杖にも何か書かれていますよ？　酷いですね！』

『ん？　ああ、番号が掘り込まれているんだな、確かにメイジとしては屈辱だろう。ニルヴァーナには見せられないな』

『それにしても、やっぱり文字と言うのは分かりませんね？』

『そうか、あれは文字と言うより数字だがな』

『すみません、役に立たなくって』

『キュベレーが役に立たないんだったら、どんな使い魔も居ない方がマシだろうな』

『ですが・・・』

『多分精霊という存在が、文字を使う様には出来ていないだけなんだよ。今私が見ていても同調を深めると意味が不確かになるからな』

正確に言えば、文字が文字と認識出来ずに、物の表面の傷とか汚れの様に感じてしまう。以前キュベレーに伝言をさせようとして失敗した経験から大体想像がついていた事だがな。（他の精霊はどうなんだろうか？）

余計な思考は兎も角、話は大体分かった気がする。３－１－１０という篭のＮｏ．は３号棟の１階の１０号室という意味だろう。丁度いいな篭ごと該当の部屋に移せば何とかなると思えるぞ？

虐げられた囚人に魔法という武器を持たせたらどうなるか、想像が出来るか？　それと同時に外部から侵入者があったら？　うむ、自分で考えても大混乱だな、逆にこちらでは制御不能な分拙い事に

なるかもしれない。特殊部隊だけで誘拐された兵団員だけを救出するのは簡単ではないのは私にも理解できる。

『キュベレー、私の乗っているフネが見える所へ』

『はい』

『良し、まだ大丈夫だな』

視界の移動は一瞬だったが、まだ特殊部隊の降下は始まっていない様だ。例の精霊の体感時間の影響だろうが、それ程時間は残っていないだろうな。せめてロドルフに残ってもらっていれば良かったんだが、一度同調を解くか？

『あっ、人が飛び降りましたよ』

『ちっ！　こうなれば勘が頼りだ最初の建物に行ってくれ』

感覚的なものだが、あそこが一番古そうだったし、何処かで１－とか見た気がするのだ。そのまま3号棟で杖の保管庫があった場所と同じ場所を目指した。そこには予想通り大量の杖が保管されていたのだがここからが問題だ。

『キュベレー、上に移動してくれ』

『はーい』

何故か、いや当然か？　壁を伝って最上階の3階に移動した。暫く辺りを探ると、突き当りの一角だけに立哨が付いていた。杖保管庫と同程度の警備がされている、私の勘も捨てた物では無いな。そ

のまま警備を無視して部屋の中に潜り込むとそこには私が探していた人達が居た。３人の女性だったが、確かに工場長からの資料にあった通りの特徴だった。それに１人は微かにだが見覚えがある。

左右の部屋を確認すると、左に同じく女性が３人、右に男性が４人確認出来た。計１０人、多分全員が休憩時間なのだろう、作業中のメイジが居る事が心配だったが、杞憂だった様だ。

『キュベレー、彼らを”精霊の道”で運べるか？』

『人間位の大きさだと、地面に接して居ないと危険かも』

感覚的には、壁の中を通る訳だから分かるような分からないような話だ。壁や床に穴を開けても良いと思ったが、少し覗いてみると真下の部屋は兵士の詰所だった。３階だと飛び降りる訳にも行かないか？　杖を持ってきて、いや逆のにした方が話が早いか？

『キュベレー、ここと両隣の部屋を隔離するぞ』

『あれ、助けるんじゃないんですか？』

『後でゆっくりとな、魔法を使うぞ』

『はい！』

私がキュベレーの力を借りて全力で３部屋に固定化（フィックス）をかけたことで、この部屋は多分スクエアメイジが束になっても突破できない城砦と化した。見かけは全然変わっていないし、まあ、中からも出られないがな。生理現象とかは我慢してもらおう。

『あの～、良いんですか？』

『そうだな、さすがにこれだけだと怪奇現象だな』

私は部屋の壁に”救援来る、扉が開くまで待て　ラスティン”というメッセージを浮かび上がらせる事にした。不思議な事に、部屋全体に固定化をかけるよりも時間がかかった気がする。文字に集中すると同調が切れそうになるし、同調を意識すると文字が思い出せないというジレンマのせいなんだがな。

さて、文字には気付いてくれた様だし、ちょっと暴動を扇動して来ますか！

第百九十一話　ラスティン３１歳　（リセット）（前書き）

第百九十一話ＵＰします。

第百九十一話　ラスティン３１歳　（リセット）

「ラスティン様、救出した兵団員達が面会を求めていますが？」

「構わないぞ、皆さんの方が問題が無いのなら、今すぐでもな」

「分かりました」

そう答えながら、ニルスは部屋を出て行こうとしなかった。まあ、彼らとは暫く同じフネに乗っているのだから直ぐでなくても問題ないか？

「ニルス、何か言いたい事がありそうだな？」

「いえ、あの・・・」

「あのルブリンの暴動の話だろうな、ニルスならどうした？」

「その前に１つ聞かせて下さい。ラスティン様はあの暴動に関与されていますか？」

ガスパードなら断定してくるだろうが、ニルスの性格だとこういう聞き方になるのだな。私が関与した証拠など、ああ、なのメッセージの話を聞いたのか？

「ああ、扇動したと言っても良いな」

「もう少し、方法は分かりませんけど、もう少し穏当な方法は無かったのですか？」

「穏当か、ニルスは看守の連中に同情するのかい？」

「いえ、そうでは無いのですが、どうも他人事と思えなくって・・・」

「そうか・・・」

ニルスだって、私の護衛隊の１人だ。私を守る為に暗殺者と戦った事だってあるだろうし、逆恨みを買う可能性だって無い訳ではない。看守の中にだってどうしようもなく任務を果たしていた人間だって居るだろう。他人事とは思えないと言うのはこの辺りか？

余談になるが、私自身は自分に向けられた暗殺者について知らない様にしている。こうしないと妙な所まで影響が出そうで恐ろしいからな。暗殺者の息子や親族が逆恨みしてとか考え出したら切が無いし、その”恐れ”自体が何らかの影響をこの世界に与える可能性だった無いとは言い切れないのだから。

「例えば、当初の予定通り特殊部隊で誘拐された兵団のメイジだけ救出したとするな？」

「はい」

「そうなると、新皇帝が地盤を固めてあそこに手を出すまでに何人もの平民メイジが犠牲になるだろうな。ニルスはそれでも構わないか？」

「・・・」

「意地悪な質問だったな、私自身最初の計画通り話を進める積りだったさ。だがな、目の前でおかしな動きをしたメイジが撃ち殺されたのを見て、それじゃいけないと思ったんだよ」

「それは、どういう意味ですか？」

「そうだな、現場を見なきゃ納得出来ないかもな。看守達は命じられて、不審な動きをしたメイジを撃ち殺したんだ。そうしなければ自分も回りにも危険が及ぶからな」

「そうですね・・・」

「だがな、それを見ている平民メイジ達はどうだろう？」

「えっ！？」

「メイジが居て、杖を持っているんだぞ。何も出来ないとは言えないよな？」

「はい・・・」

「エミルタの実の中毒なんて明日は自分なのかも知れないし、放置されれば自分が今仲間に殺されるかも知れないんだぞ？」

「・・・」

「何も無くても、銃を突きつけられたまま魔法を使うのはかなりキツイだろうな。仲間を見殺しにして生き残ったとか、知り合いを殺された恨みを抱えながら生きていくとか、幸せだろうか？」

「・・・」

「看守の方だって同じだな、あそこの看守をやっていたと知られればかなり酷い事になるだろう　上手く新皇帝があそこを解体したとしてもしこりは残る」

「はい・・・」

「それならばいっその事、総てをリセットするべきだと思ったんだ」

まあ、実際は殆ど後付けの理由だな、キュベレーと同調していたのが原因なのか、私自身妙に好戦的だった気がする。自分達の手で自由を勝ち取ったゲルマニアの平民メイジと手痛いしっぺ返しを喰らったゲルマニアの軍人達か、後でアルブレヒト3世に説明が要るだろうか？

「それで、全ての人が救われるのでしょうか？」

「そんなはずは無いな、物事はそれ程単純じゃないさ。復讐を考える人間も居るだろうし、心に色々な傷を負ったままの人間も少なくないだろうな。だけどな、多くの人がこれからどうするべきかと考える切欠になるんだと思うよ」

「陛下、私が浅はかでした！」

「ニルス、それは違うぞ」

「はい？」

「私のした事で多くの人が死んだのは確かだ。ただ、それが正しい

かは現時点では分からないんだよ」

私としては、”あの状態”が少しでも早く終わる事だけを望んだ結果ああなってしまったという感覚なのだが、それを言ってはならないのだろうな。これから生きて行く人達の為にも、死んで行った人達の為にもな。

「ですが・・・」

「人生も政治も同じだよ、結果が全てさ」

まあ、国王などという商売は自分が死んだ後まで考えなくてはならないらしいがね？　先のガリアとトリステインの2人の国王の事を少しだけ思い出すことになった。私や愚痴王のこれからの行動で前王達の決断が正しかったのか評価される訳だ。

第百九十二話　ラスティン３１歳　（弊害）　（前書き）

第百九十二話ＵＰします。

第百九十二話　ラスティン３１歳　（弊害）

何だか納得出来ないと言った表情のままのニルスが救出された兵団員達を連れて来た。ニルス自身は先ほどの会話について考えているのは構わないのだ。ニルスは生まれも育ちもレーネンベルクなんだが両親の教育方針があったのか、誰かの部下として動く事に向いている。ニルスと、レーネンベルク高等学校の卒業生を並べてみると良く違いが分かるが、ニルスにも自分で考えて自分の行動を決めてもらいたいと思う。

まあ、難しい表情のニルスは分かるんだが、開放された兵団員達の表情まで暗いのはどう言う事だ？　まさか、（誘拐のしやすさと発覚のし難さからか）独身者が多いので、ゲルマニアに恋人でも出来たか？　とてもそんな環境じゃなかった筈だが。彼らと対面している私は、”ラスティン・ド・レーネンベルク”なのだから何時も通りで行くしかないな。

「皆さん、今まで辛い目に遭わせてしまい申し訳ありませんでした。レーネンベルク魔法兵団はあなた方のお帰りを心から歓迎いたします。お帰りなさい！」

「殿下・・・」

何故だろう、反応が思わしくないぞ。３０過ぎには今のは無理があったか？（盛大に滑った感がヒシヒシと感じられる）

「殿下・・・」

別の兵団員がもう一度同じ言葉を言った。そうか、彼らにとって

は私は”副王殿下”のままだったのだな。懐かしい敬称だったがあまり違和感が無かったな。やっている事に進歩が無いからとかじゃないぞ、多分な！

「皆さん？」

「殿下、「申し訳ありませんでした！」」

謝罪の言葉だけは息がぴったりだったな。何故謝罪されるかは理解出来ないが？　救いを求めてニルスの方を見ると、”あっちゃ～”と言う感じだったぞ。これは私の国王就任を知らせて居なかったのを失態と感じたからだろう。こっちはまあどうでも良いんだが。

さて、謝罪された事って何だったかな？　ああ、あの事か、彼らはその為に誘拐されたんだし、あの技術自体はノウハウ的な物を除けば見ただけで分かってしまう程度の物だし、ノウハウの方はやっている内に思い付く物でそれ程重要な技術じゃないのだ。

どちらかと言えば、マカカ草の種なんかを奪われる方が危険だったのだがあのハーブティーの効能に関しては、厳重に管理しているし、本当の意味での効果が分かるほどゲルマニアの現状は緩く無かったのだろう。それに、兵団の首脳部しか、本当の効果を理解していなかっただろうからな。

「なんだ、あの事か？」

「ラスティン様？」

「ワーンベル風の錬金を他人に教えるのは簡単だったでしょう？」

「はい・・・」

一番年長の女性が躊躇いがちに答えてくれた、当たりの様だな。

「それはそうだろうね、あの錬金方法は、誰にでも簡単に、効率良く錬金が出来る様に考え出した物なのだから。貴方達も最初は戸惑ったのではなかったかな？」

まあ、魔法と言う特別な力を安売りする人間が少なかったと言う背景と、時代錯誤な徒弟制度が幅を利かせている世界だったからな。そうでなければメイジが鍛えた剣が数百エキューもするはずが無いし、お陰で私も色々稼がせてもらったのだがね。

こんな事を考えていると、基礎錬金魔法の開発者ガストンさんに怒られそうだが、あの人はそう言う類で事では怒らないかもな。ああそうか、私達が考え出した方法を使ってさえ、人を使い潰さなければならない状況を見て”私自身”が怒りを感じたのだな。キュベレーの未熟な感情と同調した事で、怒りが抑えられなったという流れだったのだろうか？　あの状態は私としては結構便利な気もしたが、不用意に使うのは拙いのかも知れないな。

「殿下？　ラスティン様？」

「ああ、すまないな。何処まで話したかな？　うむ、貴方達も分かっている通り、ワーンベル風の錬金はタネが分かればどうと言う事は無い技術だ」

「そんなことは・・・」

「そうか？　貴方達がきちんとゲルマニアのメイジ達に分子構造について説明出来たかな？　模型も無ければ、教本も無い状態だった

ろう？」

まあ、彼らが分子構造に関して十分な知識を持っているとは思わないがそれでも知識があるだけで錬金の効率は段違いだし、実際分子に関する知識が無くても青銅だって精製出来る。抽出や結合でさえ使用に堪えるらしい。（どんな原子や分子でもとは行かないが、目の前で見せられて周りのメイジが実際に使っているのを見れば何となく使えてしまうというのが、如何にも魔法らしい話なのだ）

「分かったかな、貴方達が漏らした情報と言うのはその程度の物なのだよ」

「殿下、それならば私は何の為に誘拐されたのでしょう。目の前で同じメイジが何人も死んでいくのを見て・・・、くっ！」

それを私に聞かれても困るのだがな、解答を持っていた人間は既に故人だし、一回り以上年上の兵団員も居るのにな。私の様な若造（若いぞ！）が生きている意味などを説いても説得力に欠けると思うんだが？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6436m/

革命@トリステイン

2011年12月1日21時50分発行